東日本大震災
宮古市の記録

第2巻（下）《記憶伝承編》

岩手県宮古市

東日本大震災
宮古市の記録

第2巻（下）《記憶伝承編》

岩手県宮古市

表紙写真（上から）
2011年4月10日　鍬ヶ崎　十分一沢から蛸の浜町方面を望む　撮影：佐々木正之
2011年9月11日　鍬ヶ崎　同上、ガレキが撤去された鍬ヶ崎　撮影：佐々木正之
2016年6月8日　鍬ヶ崎　同上、港町災害公営住宅、鍬ヶ崎公民館が建設された
撮影：宮古市

東日本大震災　宮古市の記録　第2巻（下）記憶伝承編　目　次

◆巻頭写真……013
序　神田より子……015
はじめに……015
本報告の概要……015
第1部　各地域における東日本大震災……016
A　田老地域……016
B　宮古地域……016
C　重茂地域……017
第2部　各分野での震災後の取り組み……017
(1)　医療、DMATの活動、福祉、保育……017
(2)　災害救助と支援体制、災害廃棄物の処理……017
(3)　ボランティア活動、自治体の交流、観光復興、宗教団体の取り組み、外国人の被災体験……018
(4)　被災した芸能と復活……018
(5)　震災と暮らし……019
(6)　海外メディアが伝えた東日本大震災の報道……019

第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

第1章　「津波太郎」―まちの復興と生活の復興　伊藤　純
はじめに……022
1　防災の町をめざして……022
2　発災直後と避難……024
3　教訓と実際……029
4　摂待地区の状況……032
5　避難所から仮設住宅への入居……033
6　復興へ向けた道筋……034
7　復興を支える田老の漁業……038
8　田老の復興とその課題……041
第2章　避難生活と心のケア―田老での聞き取り調査から―　神田竜浩
はじめに……046
1　地震発生と避難……047
2　避難所での生活……048
3　仮設住宅での生活と心のケア……049
最後に……051

第3章　田老地域における支援体制　神田より子　053
はじめに　053
1　田老総合事務所の被災時とそれ以降の取り組み　053
2　グリーンピアでの3月11日以降　060
3　避難所をグリーンピアに集中　063
第4章　田老地域の仮設での生活　神田より子　068
はじめに　068
1　仮設住宅に移って以降　068
2　田老仮設商店街（通称・たろちゃんハウス）　070
3　田老仮設保育所　075
4　田老郵便局　077
5　仮設での暮らし　079
6　街づくり協議会　084
第5章　地域のために　神田より子　086
はじめに　086
1　仮設の生活と自治会について　086
2　経歴　087
3　家のこと、兄弟のこと　088
第6章　個人墓地と海嘯碑　神田より子　090
はじめに　090
1　常運寺と慰霊の行事　090
2　個人の墓地にある海嘯碑　093
(1)　小林家　093
(2)　田畑家　094
(3)　木村家　096
まとめにかえて―家の継承と津波―　099
第7章　NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老　大棒秀一　100
1　序として　―NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老の成り立ち―　100
2　震災とNPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老のかかわり　100
3　「津波防災都市宣言」と宮古市の現状　101
4　「津波防災の町」宣言をした田老の町に関する津波対策の検証　106
5　復興まちづくり検討委員会の立ち上げ　110
6　NPO田老がまちづくり検討委員会に提出した資料　111
7　失われた津波文化　113
8　終わりに　116
B　宮古地域　118
第1章　崎山地区　米屋陽一　118
はじめに　118
1　崎山地区　118
(1)　松月　118
(2)　女遊戸　121
(3)　宿　127

(4) 崎山……130
(5) 箱石……133
2 崎鍬ヶ崎地区……135
(1) 大付……135
(2) 日出島……139
(3) 大沢……140
第2章 鍬ヶ崎・築地・愛宕地区 山東正昭
はじめに……143
1 鍬ヶ崎地区……143
(1) 鍬ヶ崎地区の概要……143
(2) 鍬ヶ崎地区の被害状況と津波浸水域……145
(3) 震災後の鍬ヶ崎地区……148
(4) 鍬ヶ崎地区の復興工事進捗状況……152
(5) 宮古市歴史・文化シンポジウム……155
(6) 鍬ヶ崎地区での聞き取り……157
2 築地地区……163
(1) 築地地区の概要……163
(2) 築地地区の津波浸水域……164
(3) 築地地区の被災状況……164
(4) 築地地区での聞き取り……164
3 愛宕地区……165
(1) 愛宕地区の概要……165
(2) 愛宕地区の津波浸水域……165
(3) 愛宕地区の被災状況……165
(4) 愛宕地区での聞き取り……166
4 今後の課題と展望……167
(1) 巡見と聞き取り調査から……167
(2) 民間伝承に学ぶ……168
第3章 被災者の証言 米屋陽一
1 日立浜町……170
2 熊野町……175
3 鍬ヶ崎上町……178
4 日の出町仮設団地……180
第4章 宮古市街地 杉本栄子
はじめに……189
1 新川町……190
2 向町……193
3 大通1〜4丁目……210
4 中央通商店街……217
5 大通1丁目商店会……225
6 末広町商店街……229
7 新町……238
8 黒田町……243
9 消防団の活躍—八分団を一例として—……245
10 街の復興……249
11 まちを明るくする女性たち……252
12 町内会と自主防災の取り組み……255
まとめにかえて……257

第5章　藤原・磯鶏地区　谷部真吾
はじめに　―藤原・磯鶏地区の被災概要―……258
1　被災の記憶……258
(1)　避難の様子……258
(2)　特筆すべき避難の語り……260
2　被災後の暮らし……263
(1)　藤原比古神社にて……263
(2)　藤原小学校にて……264
(3)　磯鶏小学校にて……265
(4)　自宅に戻った人々……267
3　「日常」へ向けて……267
まとめにかえて……272

第6章　高浜・金浜地区における震災の経験　宮坂　清
―住民の語りを中心に―
はじめに……273
1　地区、および過去の地震津波の概要……273
(1)　地区の概要……273
(2)　地震津波の歴史……274
2　東日本大震災の概要……277
(1)　地震津波と被害の概要……277
(2)　公的な調査・対応の記録……278
3　地震津波の語り……280
(1)　概要……280
(2)　地震津波の当日……281
(3)　避難に関する考察……291
(4)　被災後の日々……297
(5)　未来に向けて……304
インタビュー……311

第7章　津軽石地区における震災の経験　宮坂　清
―消防団・自主防災会・民生委員・避難所の活動と課題―
はじめに……325
1　地区、および過去の地震津波の概要……325
(1)　地区の概要……325
(2)　地震津波の歴史……326
2　東日本大震災……328
(1)　地震津波と被害の概要……328
(2)　公的な調査・対応の記録……330
3　地震津波の語り……332
(1)　概要……332
(2)　地震津波の発生から避難まで……332
(3)　消防団の活動……338
(4)　自主防災会・民生委員の活動……347
(5)　避難所の運営と避難生活……353
(6)　生活の立て直し、復興への道……360
最後に……363

第8章　赤前地区（津軽石地区赤前）　伊藤好英・金　鉉哲
1　概要……365

2　地震直後の避難状況、避難直後の避難所での生活……365
3　復興状況と3年前の体験（大震災から3年）……371
4　大震災から4年半の時間を振り返って……374
まとめ……380

第9章　宮古地域の水産業　橋村　修
はじめに……383
1　宮古市における水産関係の被害……383
2　水産業界のリーダーとして……385

C　重茂地域……388　岸　昌一
はじめに……388
第1章　重茂地区の概要……389
第2章　重茂地区の災害……391
1　明治29年6月15日　午後8時　三陸地震津波……391
2　昭和8年3月3日　三陸津浪被害……391
第3章　「東日本大震災」平成23年3月11日　午後2時46分……392
1　組合員全員協議会……392
2　平成23年度重茂漁業協同組合通常総会……395
3　平成24年度重茂漁業協同組合通常総会……398
4　復興へのみちのり……409
5　復興事業についての語り……412
第4章　重茂各地域の方々の聞き取り……416
1　北地区……416
2　音部地区……418
3　重茂地区……421
4　南地区……423

D　それぞれの震災……436　久保田滋子
1　スイスで想う「ふるさと宮古」……436
2　鳥もと災害バスターズ……437
3　変わりゆく宮古……437
4　震災直後の食料品スーパー……438

第2部　各分野での震災後の取り組み

第1章　医療の現場から　命を見つめて
―東日本大震災・三陸大津波と医療従事者たちの戦い―
中嶋奈津子

はじめに……442
1　宮古市における被害状況……442
2　岩手県宮古保健所の決断と行動……444
3　保健師の実践……447
4　医師会の選択……455
5　暗闇にともり続けた希望の灯り……457
6　隣接山田町の医療状況と、宮古後藤医院との連携……460
7　支援者支援の立場から……461
8　臨床心理士として……465
9　医療従事者と私人との狭間で……469
終わりに……472

第2章　宮古医療圏におけるDMATの活動報告
岩手医科大学医学部災害医学講座教授　眞瀬智彦

1　岩手県庁DMAT調整本部……475
2　岩手県立宮古病院被災状況……475
3　DMAT宮古医療圏での活動……475

第3章　障がい者・高齢者をめぐる取り組み
池田しのぶ

はじめに……477
1　宮古市における福祉の概況……477
(1)　高齢者および障がい者の概況……477
(2)　被害の概況……477
2　要介護者、障がい者、家族の避難と避難生活……478
(1)　高齢者世帯……478
(2)　家族が同居しているケース……480
(3)　一人暮らし……484
3　福祉施設における震災当日の状況と経過……485
(1)　高齢者の事業所……485
(2)　障がい者の事業所……493
まとめ……499

第4章　子どもを守る取り組み
猿渡土貴

はじめに……500
A　その時、どうやって子どもを守ったか（保育所・幼稚園編）……500
1　千鶏保育所では……500
2　津軽石保育所では……503
3　愛宕保育所では……506
4　小山田保育所では……507
5　赤前保育園では……509
6　宮古保育園では……510
7　そけい幼稚園では……511
8　商業施設「キャトル」内「つどいの広場すくすくランド」では……512
9　田老地区の状況……513
10　避難の必要がなかった施設では……516
B　その時、どうやって子どもを守ったか（小学校編）……518
1　鍬ヶ崎の状況……518

2　高浜・金浜地区の状況……522
3　学校再開に向けた取り組み……526
C　子どもの生活を取り戻すために……531
1　避難所を出て転々とする……531
2　グリーンピアでの避難所生活……531
3　浄土ヶ浜パークホテルで……532
4　スクールバス問題を巡って……534
5　瓦礫の中の自宅で暮らす……535
6　津軽石での避難所生活……536
7　震災が子どもに与えた影響と心のケアについて……537
D　避難体制の確立と防災教育の大切さ……539
1　小さな子に向けて……539
2　小学校における防災教育……542
E　地域とのつながりを防災に役立てる……549
1　地元の人の声掛けが命を救った……549
2　地域と学校とのつながり……550
3　地域の方々との日ごろの交流があってこそ……550
4　「おらほの学童の家」と思ってもらえるように……551
5　消防団の力を借りる……552
おわりに……552

第5章　女性の活躍　神田より子

はじめに……554
1　婦人防火クラブ……554
2　婦人消防協力隊……558
3　女性消防団員……559
4　保健師……561
おわりに……563

第6章　公的な支援体制　神田より子

1　消防団……565
はじめに……565
(1)　消防団員の3・11……565
(2)　各地区での消防団員の活躍……566
(3)　消防団員としての動きのまとめ……573
(4)　消防団員の行動を考えてみる……575
2　消防署……577
はじめに……577
(1)　緊急消防援助隊等活動状況……577
(2)　宮古消防署員の活動……578
(3)　田老分署……580
(4)　川井分署……585
(5)　新里分署……587
おわりに……588
3　警察署……589
はじめに……589
(1)　宮古市の場合……589
(2)　宮古警察署管内警察官の方々の手記……592
4　自衛隊……594
はじめに……594
(1)　東日本大震災への自衛隊の対応……594
(2)　宮古地域での自衛隊の対応……594

(3)　自衛隊員の方々の手記 …… 601
おわりに …… 602
5　海上保安庁 …… 603
　　假屋雄一郎
はじめに …… 603
(1)　宮古湾における海上保安庁の主な対応 …… 603
(2)　宮古海上保安署職員の方々の手記 …… 603

第7章　災害廃棄物の処理
　　阿南　透
はじめに …… 607
一般廃棄物の処理 …… 607
瓦礫の撤去 …… 607
仮置き場の設置 …… 608
災害廃棄物の処理 …… 608
水産廃棄物の処理 …… 611

第8章　ボランティア活動とその課題
　　久保田滋子
はじめに …… 612
1　社会福祉協議会の取り組み …… 612
(1)　ボランティアセンターの立ち上げ …… 612
(2)　宮古市生活復興支援センター …… 614
(3)　ボランティア受け入れの問題点 …… 614
(4)　ボランティアに参加して …… 615
2　カリタスの取り組み …… 622
(1)　カリタスジャパン …… 622
(2)　宮古における札幌カリタスの活動 …… 623
(3)　ボランティアに参加して …… 625

第9章　自治体の相互交流と援助体制
　　―宮古市と品川区の交流から災害時相互援助協定へ―
　　杉本栄子
はじめに …… 635
1　「目黒のさんま祭り」と宮古のさんま …… 635
2　品川区の取り組み …… 637
3　「みゃっこ隊」を組織する …… 639
4　小学校ＰＴＡの支援活動 …… 640
おわりに …… 641

第10章　観光の被災と復興
　　藤野陽平
はじめに　―宮古の観光の被災状況― …… 643
1　宮古観光文化交流協会 …… 645
(1)　イベントの一例として　浄土ヶ浜まつり …… 646
(2)　学ぶ防災 …… 648
(3)　浄土ヶ浜レストハウス …… 650
2　三陸鉄道 …… 653
(1)　被災から全線復旧 …… 653
(2)　復興に向けた取り組み …… 654
(3)　寄せられた支援 …… 656
3　岩手県北バス、岩手県北観光 …… 657
(1)　地震直後 …… 657
(2)　岩手県北観光の復興ツーリズム …… 658

4　三陸復興国立公園と三陸ジオパーク……660
おわりに……661
2011年3月から2014年4月に行われたイベント一覧……663

第11章　被災し／支援し／復興する宗教　藤野陽平

はじめに……667
1　宗教の被災状況と支援活動……667
A　エホバの証人……667
B　創価学会……668
C　長根寺……672
D　天理教……674
E　宮古コミュニティ・チャーチ……676
F　末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）……679
G　立正佼成会宮古支部……680
2　宗教系団体の支援……681
A　YMCA宮古ボランティアセンター……681
B　キリスト教のCCMNからNPO法人「with you global
　あなたとともに」へ……684
C　台湾仏教慈済基金会（慈済会）……686
3　被災から復興へむかう日本基督教団宮古教会　伝統と被災との先に……688
おわりに……693

第12章　外国人の被災経験　藤野陽平

はじめに……696
1　宮古に住む外国人……696
2　外国人の被災経験……697
3　身を寄せ合った外国人たち……698
4　背景としてのオーシャンズ宮古国際交流倶楽部……702
おわりに　「住めば宮古」は誰のものか？……705

第13章　被災した芸能と復活

Ⅰ　法の脇鹿子踊りの被災と復活（津軽石法の脇）　俵木　悟……707
はじめに……707
1　法の脇地区の被災状況……707
2　津軽石稲荷神社の祭礼と法の脇鹿子踊り……707
3　津軽石稲荷神社の祭礼の再開……709
4　法の脇鹿子踊りの被災……710
5　「復活を焦らない」という選択……710
6　津軽石中学校の郷土芸能……711
7　復活への始動……713
8　踊りを「地域のものにする」……714
9　「歴史」をつなげる踊りと神社……715
おわりに……717

Ⅱ　陸中沿岸地方と芸能による地域再生　神田より子……718
はじめに……718
1　黒森神楽衆の被災状況と震災後に加入した若い神楽衆……718
2　黒森神楽の宿の被災と復興……720
3　震災後の神楽の巡行……721

4　被災地代表としての黒森神楽……725
5　日常を取り戻すために……730
6　神楽が期待されたもの……731
まとめにかえて―今後の課題―……731

第14章　震災と暮らしの移りかわり
久保田滋子
はじめに……734
1　染物職人　加賀屋……734
2　船大工　復幸造船所……737
3　船大工　前山造船……740
4　鍛冶職人　佐々禎鉄工所……741
5　下駄職人　関口履物店……743
6　菓子職人　小野寺餅店……745
7　鋸刃職人　満山鋸刃物店……746
8　櫓大工　三浦櫓櫂店……747

第15章　海外メディアの東日本大震災に対する報道
Ⅰ　海外メディアの宮古市への取材
假屋雄一郎……753
Ⅱ　中国メディアの東日本大震災に対する報道……753
―『人民日報』、『四川日報』を中心に―
何　為民
はじめに……753
1　宮古調査のはじまり……753
2　『人民日報』と『四川日報』の報道内容……755
(1)　これまでの報告内容……755
(2)　『人民日報』と『四川日報』を選んだ理由……756
3　2つの新聞紙の報道内容について……757
(1)　地震後の『人民日報』と『四川日報』……757
(2)　東日本大震災の周年について報道しているのか……759
おわりに……760

◆協力者……761
◆執筆者……763
◆宮古市東日本大震災記録編集委員会……764

写真２　赤前　消防隊員による救助
2011/03/12　撮影：長洞利弘

写真１　熊野神社境内に避難した鍬ヶ崎小学校児童
2011/03/11　撮影：川部淳一

写真４　浄土ヶ浜　深くえぐれた海岸、全壊したレストハウス
2011/03/13　撮影：宮古市

写真３　田老　消防団による山林火災の消火活動
2011/03/14　撮影：吉浜憲一

写真６　医療支援チームによる診療
2011/04/02　撮影：宮古市

写真５　宮古消防署に集結した消防支援隊
2011/03/12　提供：宮古地区広域行政組合消防本部

写真８　愛宕小学校避難所　自衛隊音楽隊慰問公演
2011/05/09　撮影：宮古市

写真７　金浜　自衛隊による捜索
2011/03/17　撮影：阿倍主税

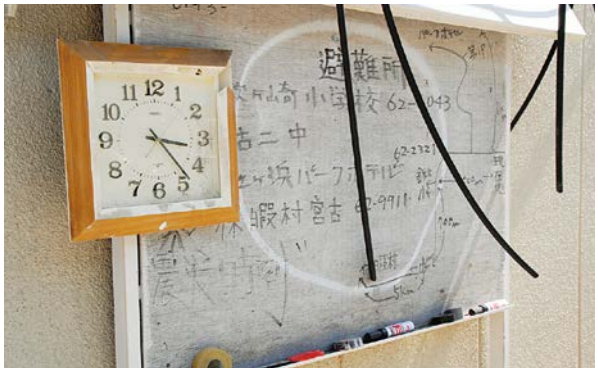


写真 10　鍬ヶ崎　掲示板の避難所情報と津波到達時刻で止まった時計　2011/04/10　撮影：佐々木正之

写真 9　山口小学校避難所　2011/03/12　撮影：宮古市

写真 12　藤原埠頭　被災車両の仮置場　2011/05/11　撮影：宮古市

写真 11　出崎埠頭　被災家屋等廃材仮置場　2011/05/10　撮影：宮古市

写真 14　グリーンピア三陸みやこ　仮設商店街たろちゃんハウス　2015/03/10　撮影：谷部真吾

写真 13　グリーンピア三陸みやこ仮設住宅団地　2011/05/18　撮影：星野圭樹

写真 16　重茂　被災した養殖施設を引き上げる　2012/03/25　提供：重茂漁業協同組合

写真 15　田老　初盆の常運寺　011/08/11　撮影：宮古市

序

神田より子

「5年　あなたと共に　東日本大震災　人のため　父の志継ぐ」

「2016年3月11日に宮古市田老の山本永都（ひさと）さん（22）が岩手県の遺族代表として、東京の国立劇場で行われた追悼式で、追悼の言葉を述べた。山本さんは「なぜ父は防潮堤の水門を閉めに行かなければならなかったのか」と祭壇に向かって語りかけた。消防団員の父幸雄（さちお）さん（当時49）は宮古市田老の巨大防潮堤へ向かったまま行方不明に。山本さんには、住民を守ろうとしたのに理不尽に思えた。「何でおっとうなの」。悲しみと怒りを母ヒデさん（50）にぶつけた。母は父を探す間もなく、看護師として避難所を駆け回った。人に尽くした父と母。山本さんは看護師になろうと思うようになった。だが進学した大学は3年の途中で休学。郷里の期待を重圧に感じた。ある日、田老の仮設診療所で、患者をいたわる母を見て思い直した。「私もこうなりたかったんだ。」昨年4月に復学。看護実習を乗り切った。「人の役に立てることが、亡き父への親孝行だと思えるようになりました。」「ひ・さ・と」は両親と、震災で亡くなった祖父冨弥（とみや）さん（同81）の名前の頭文字。その誇りを胸に生きようと思う。」（以上『朝日新聞』2016年3月12日版1面より引用）

はじめに

東日本大震災から5年がたった2016年3月11日、ここに見るように、若い人が震災をバネに新たに生きる力を見いだし、その先への第一歩を踏み出していた。一方で、5年もたったのに未だに仮設住宅で暮らし、明日の希望を見いだせないでいる方々もおられるのが現状だ。

そうした中で私たちが取り組んできたのは、今回の東日本大震災における宮古市民の方々の記憶を記録にとどめておこうという活動だ。私たちは主に民俗学の方法により、様々な立場の方々から、そのときどう行動したのかといった被災の体験、どう行動すればよかったのか、廻りの方々にどう行動して欲しかったのかという実体験を踏まえた「思い」を聞かせていただいてきた。そして現場での対応の仕方、後方支援のあり方など、お一人お一人から聞き書きをし、皆様方の記憶を記録する作業を行ってきた。

地域の景観ががらりと変わってしまい、海が全く見えなくなってしまって、いつかまた来る大震災にどう備えれば良いのかという不安がある。また住宅地と商店街が離ればなれになってしまい、買い物弱者の足の確保はどうすれば良いのか等々、今後の課題は山積みである。

しかし祖父と父との思い出を、そして患者さんのために懸命に働く母の後ろ姿を見て思い直したという、誇りを胸に生きると誓った山本永都（ひさと）さんの言葉を、今後の宮古の希望としたい。宮古市もまだまだ復興途上ではあるが、この記録が災害を乗り越え、いつかまた来る災害に備えるための、柔らかな思考を育てる一助となることを願ってやまない。

本報告の概要

今回の東日本大震災における宮古市の被害概要（平成24年11月6日現在）は、人的な被害については死亡者517人（認定死亡者110人を含む）、行方不明者94人であった。また住家の家屋倒壊数は全壊5千968、大規模半壊1千335、半壊1千174、一部損壊611となり、合計で9千088に上る（平成24年6月29日現在）。被害推計総額は2千456億6千088万4千円であった（以上は『東日本大震災宮古市の記録　第1巻《津波史編》』宮古市　2014年　133～137頁より）。

こうした状況を踏まえ本報告書は、第1部各地域における東日本大震災、第2部各分野での震災後の取り組みという2部構成とした。その上で第1部では、大きくA田老地域、B宮古地域、C重茂地域と3地域に分けて調査及び考察を行った。続いて第2部では⑴医療、DMATの活動、福祉、保育、⑵災害救助と支援体制、災害廃棄物の処理、

⑶ボランティア活動、自治体の交流、観光復興、宗教団体の取り組み、外国人の被災体験、⑷被災した芸能と復活、震災と暮らしの移り変わり、⑸海外メディアが伝えた東日本大震災の報道という分類で記述した。以下では個々の内容について紹介してゆく。

第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

田老地域は過去にも津波による大きな被害が出ており、明治29年の三陸大津波では総人口3千747人中死亡は2千655人であった。昭和8年の三陸地震津波の際の被害は総人口4千983人に対して、死亡584人、行方不明327人、負傷122人、総戸数835戸に対して流出家屋500戸とある（以上中央気象台『東日本大震災宮古市の記録　第1巻　（津波史編）』（宮古市　2015年）。このうち一家全滅が130戸（明治29年）、66戸（昭和8年）という数になる（『田老町誌　津波編』田老町教育委員会　2005年）。明治29年、昭和8年の大惨事では罹災戸数や死者・不明者の数も甚大なことから、家の継承さえままならない状況だった事が窺える。

そして平成23年3月11日の東日本大震災の規模は、マグニチュード9・0、最大波高8・5㍍、罹災戸数は1千691戸、死者・不明者181人、漁船流失は840隻となる（以上は『田老　あの日、あの時　2011・3・11　東日本大震災』NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老　2012年）。万里の長城とも呼ばれたx軸の防潮堤を津波が襲い、田老の街中の平地部分の住宅や商店街のほとんどが破壊された。この日、田老地区では1千300名以上が避難した（『東日本大震災宮古市の記録　第1巻　（津波史編）』）。

ここでは津波の被害に立ち向かっていった方々の日々の行動と記憶を聞き取り、記録した。主に田老地区における支援体制として田老総合事務所の動き、グリーンピア三陸みやこでの避難所生活、仮設での生活や仮設商店街の様子などを述べた。

一方、田老では「NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老」が田老の今後の復興に寄与することを目的に立ち上がり、「津波防災文化の発信」という活動を展開している。

B　宮古地域

宮古地域として崎山、鍬ヶ崎、宮古市街地、磯鶏、津軽石、赤前までを含めた。

その被災概要は、崎山地区の死者22人、行方不明者は9人、鍬ヶ崎地区の死者57人、行方不明者は8人、市街地の死者68人、行方不明者は5人、磯鶏地区の死者65人、行方不明者は7人、津軽石地区の死者57人、行方不明者は3人であった。

崎山、鍬ヶ崎、築地、愛宕地区は、鍬ヶ崎を中心とした漁港でもあり閉伊川河口でもあるため、大津波が直接襲い甚大な災害を被った。とくに鍬ヶ崎地区は、漁港の全てを破壊した波と、蛸の浜の峠を越えた波が蛸の浜町下でぶつかり、平坦部がほぼ全滅の被害となった。

宮古の市街地は近年堤防ができ、建物が立ち並び、生活の中で近くに海があることを意識しなくなっていた。昭和22年のカザリン台風、23年のアイオン台風で、大きな水害を受け、津波に関しても「地震がきたら津波は来る」と、ほとんどの人は認識している。3月11日は地震の大きさに驚き「きっと津波は来る」とすぐに避難した住民がいる一方で、「ここに津波は来ない。来てもたいしたことはない」と、家の中に留まった人も多かった。そうした方々の中で難を逃れた人と犠牲になられた方の差はほんの一瞬、それもいくつかの偶然が重なったことが多かったようだ。

藤原・磯鶏地区では、藤原地区の場合、津波は中屋造船所前の水門を破り、また藤原埠頭の防潮堤を乗り越えて流れ込み、国道45号線を越えJR山田線の線路にまで達した。磯鶏地区では、埠頭にある工場や施設、国道45号線沿いに大きな被害が出た。津波はJR磯鶏駅を越えて磯鶏西や上村までおよび、平成23年開催のインターハイ、ヨット競技の会場予定だったリアスハーバーも全壊し、貯木場からは木材（丸太）が流失した。

高浜・金浜地区では国道45号線が走る堤防を津波が越えて浸水し、高浜地区センターが全壊、金浜地区の平坦地の住家がほぼ全壊した。

津軽石は津軽石川水門を越えて津波が川を遡り、根井沢川に入った。そのため稲荷橋が水没し、津軽石駅付近で列車が脱線した。法の脇地区ではほぼ全家屋が流出し、この地区での家々の再建は不可能となり、全戸が地区外に移転となった。

赤前地区は、宮古湾がもっとも奥に入り込んだ最南端に位置する地域で、津波は赤前の４つの集落を含む平野のほぼ全域と、堀内の集落のおよそ半分を、一瞬のうちに飲み込み、その被害は甚大なものとなった。

C　重茂地域

平成23年６月23日に行われた「重茂漁協総会資料」によると、重茂地区の被害（２０１２年４月１日現在）は死者・行方不明者50人（内組合員17人）を数え、家屋は全壊が88、倉庫全壊が３５５に上る。

三陸沿岸随一の品質と水揚げ量を誇る漁業の地域であり、全ての漁港に津波が襲来し、防潮堤や護岸を破壊し、水産加工施設、種苗生産施設などが全壊した。水産被害状況は、あわびセンター・加工場・孵化場他約50施設で42億円の被害、漁港施設は県管理２港、市管理８港は全壊、漁船、所属船８１４隻の内７９８隻流出、養殖施設１千３１０台（41万㍍）全壊、水産物等はわかめ、こんぶ、うに、あわび等で約20億円の被害、漁業用資材は漁具、漁網、漁撈設備等で約10億円の被害であった。

震災直後は、橋の崩落・道の決壊により陸の孤島となったが、漁業復興に向けて立ち上がった漁協と組合員がいた。その結果「奇跡の復興」とさえ言われたが、それは海に出て仕事がしたい、若い人を地域から失いたくない、という思いの一途さだったという。

第２部　各分野での震災後の取り組み

(1)　医療、ＤＭＡＴの活動、福祉、保育

３・11以降、医療現場では寒さと疲労、衛生面の問題、感染症、薬剤や物資の不足、治療を必要とする人々、精神面での不安、アルコール依存など課題が山積みだった。多くの患者や住民を守るため、医療従事者たちは、悩み、考え、今も活動を続けている。当時明確な方法論が無い状況下での決断、実行する勇気、住民の命と健康を守るために最善をつくし、力の限り活動した医療従事者たちの姿を伝えた。

岩手医科大学医学部災害医学講座教授 眞瀬智彦氏より、ＤＭＡＴの活動についてのご寄稿があった。県内の活動調整を行う県庁ＤＭＡＴ調整本部を設置し、沿岸の災害拠点病院と連携・調整しながらＤＭＡＴの活動を行った。岩手県庁調整本部と宮古医療圏でのＤＭＡＴ活動について報告をいただいた。

東日本大震災で高齢者や障がい者といった要援護者やその家族、そして福祉サービス事業所の職員たちが、どのように行動したのかについて聞き取った事柄をまとめた。「福祉」をキーワードに、田老地区で被害にあった住民の方々、田老地区の福祉サービス事業所の職員、宮古市の福祉サービス事業所の職員に伺った話を紹介していく。

保育士や幼稚園教諭たちは、園児の命を守るために安全な場所へ導き、最後まで残った子どもを無事保護者へ引き渡すまで最大限のケアをしつづけた。女性の仕事とされてきた保育士や幼稚園教諭という「命を守る仕事とは何か」をあらためて問う事となった。

(2)　災害救助と支援体制、災害廃棄物の処理

災害救助と支援体制に関しては、消防署、警察署、自衛隊の方々から話を伺った。彼らは地域住民を救うために命がけで救助、捜索、消火、避難誘導、そして自衛隊や広域消防隊の道案内などを行ってきた。その活躍には頭が下がる思いであるが、なぜそこまでやるのか、という疑問が頭から離れない。そのことを理解するためにも体験を伺った。

一方、東日本大震災直後から地域の中でリーダーシップを発揮し、住民を動員して、被災者の方々のために力を尽くしてきた婦人防火クラブ、婦人消防協力隊、女性消防団員、保健師の方々にも体験を語っ

てもらった。

今回の災害の現場で、自衛隊の活動は目を見張るものがあった。被災者の皆様の記憶の中に、救い主としての自衛隊の方々の活躍する姿が焼き付いていると実感することができる。ここでは自衛隊の初動体制から、被災地での活躍の軌跡等を時系列に従って記録した。

東日本大震災では、災害廃棄物の量は、宮古市だけで57万4千900トンとされる（『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』岩手県　2011年：11頁）。これは家庭ごみの30年分に相当するという。これだけの廃棄物処理のため、震災後の13日から道路復旧と共に瓦礫撤去作業が始まった。瓦礫の仮置き場は出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園、田老野球場、長内川運動公園などに設けられ、災害廃棄物として処理された。岩手県内で処理しきれないものは広域処理がなされ、1都1府13県の自治体の協力を得た。水産廃棄物は海洋投棄が認められないため、一時保管として私有地に埋めた。

(3) ボランティア活動、自治体の交流、観光復興、宗教団体の取り組み、外国人の被災体験

東日本大震災後、多くのボランティアが被災地に駆け付けたことは記憶に新しい。カリタスは、阪神淡路大震災での経験と、国際カリタスの理念を受けて、東日本大震災時にも直後から各地で活動を開始した。震災後4年が経過した中、カリタスは長期の支援を目指して活動を続けている。支援継続の原動力として、堅固な組織を持つカトリック教会がバックにあるが、加えて修道女などの女性宗教者が積極的にかかわっている点も指摘できる。

宗教団体の取り組みとして、被災直後から支援が寄せられたが、国内外からの宗教団体が陰に陽に関わっていた。宗教を基盤とした利他心に押し出された行動である。震災から5年が過ぎ、心の復興には根気強い長期間のケアが必要となる。宗教関係者の果たすべき役割は小さくない。ここでは宗教の被災経験、支援活動、そして、どのように復興に向かっているのかを取り上げた。

2010年12月31日の時点で、宮古には160人の外国人が暮らしていた。ここでは外国人の被災体験を振り返り、大災害や日常における外国人との関わり方について考える情報を提供する。

宮古の観光は最も打撃の大きかった産業の一つにあげられる。観光地が浄土ヶ浜、三王岩、鮭ヶ崎等と沿岸部に集中しているため、多くの施設が被災し、直接的な被害も大きかった。一方で観光業は復興に向けて取り組むべき産業の柱に位置づけられてもいる。観光の復興は官民あげての事業であると認識され、多くの関係者が注力している。

宮古市と品川区は、品川区目黒駅前商店振興組合が開催するイベント「目黒のさんま祭り」が縁となり、平成14（2002）年に災害時相互援助協定が締結された。さんま祭りや宮古の海産物を通して、また小学生の交流を通して人と人との繋がりがより深くなっている様子を描いた。

(4) 被災した芸能と復活

宮古市津軽石法の脇地区では、宮古湾に押し寄せた津波が水門を越えて津軽石川を上流に遡り、水門の両側は、せき止められ堤防を越えてあふれ出た水が滞留することで甚大な被害にあった。法の脇地区では、津波によって4人の死者が出た。そして家屋は3戸を残してすべて流失した。平成25年3月6日付宮古市告示第31号により、集落全体が災害危険区域に指定され、法の脇地区は実質的に解散を余儀なくされることとなり、法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響を与えた。

黒森神楽が廻って歩く陸中沿岸地方は、今回の東日本大震災の岩手県内の被災地と重なっており、神楽宿を提供してきた地域の方々も、獅子頭を奉じて廻って歩く神楽衆も、共に被災者である。ここでは神楽衆の被災状況、黒森神楽の宿の被災と復興、震災後の神楽の巡行、被災地代表としての黒森神楽、神楽が果たした地域の再生、そして今後の神楽の巡行の行方について述べた。とくに震災後数年間の活動状況は、日本全国各地だけではなく海外からも、震災に負けない復興の

シンボルのように招かれて活動してきたので、そのことにも言及した。

(5) 震災と暮らし

宮古の漁業は船大工、櫓大工、網大工、鍛冶屋、イカ角職人、桶職人、鋸刃職人、染色などさまざまな職種の職人によって支えられてきたが、多くは震災前に姿を消し、まだ現役で仕事をしている職人も高齢で後継者がなく、自分の代で最後という人が多い。

ここでは、職人の生活誌を追い、宮古の移り変わりと、その町で「最後の職人」として生きて来た人々が、どのように震災と向き合ったかを記述した。

(6) 海外メディアが伝えた東日本大震災の報道

中国の大学で教鞭をとる何為民は、日本での留学を終えて帰国間もない２０１１年3月11日、マグニチュード９・０の地震発生を知った。本稿は、『人民日報』と『四川日報』が東日本大震災を如何に報道したのかを調べ、分析した。

【参考文献】

宮古市『東日本大震災宮古市の記録　第1巻《津波史編》』２０１４年
田老町教育委員会『田老町誌　津波編』２００５年
岩手県『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』２０１１年

第1部　各地域における東日本大震災

写真　（航空写真）田老地区　2011/03/28　撮影：宮古市

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域

第1章　「津波太郎」―まちの復興と生活の復興

伊藤　純

はじめに

「津波太郎」という異名で知られる田老の歴史は、しばしば津波との戦いとして描かれる。明治時代以降に限っても、田老は明治29（1896）年6月15日と昭和8（1933）年3月3日に大津波による壊滅的な被害を受けている。こうした惨憺たる経験から、「津波太郎」から「防災太郎」を目指して、様々な市街地整備が進められた。なかでも「万里の長城」として全国的に知られる大防潮堤は防災機能を果たすとともに、町のシンボルとして田老の風景の一部となっていた。こうした町をあげた努力にもかかわらず、2011年3月11日に宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生し、大津波は「万里の長城」を越えて町を飲み込んだ。そして、田老の人びとは長期にわたる避難生活を余儀なくされた。

1　防災の町をめざして

明治三陸地震

明治三陸地震における田老の様子を伝える資料はわずかである。現在のところ体験記のようなものは見つかっていないが、新聞・雑誌の記事や被災に関する調査記録によって、当時の被害状況を知ることができる[注(1)]。臨時増刊「大海嘯被害録」として当時の様子を3巻にわたり特集した『風俗画報』の下巻では田老・乙部について「十五日の海嘯は水高平水より高き事七十尺に及び、五分間を費やさずして全戸数三百三十五戸は微塵となりて海岸に浚ひ出され、男女相合して老幼千八百六十七名は海底の鬼と化し畢んぬ」と報じている。生き残ったのはマグロ漁で沖合に出ていた15艘の乗組員60人と、出稼ぎの漁夫若干名。陸地で難を逃れたのはわずか36人であった。絶家は130戸にも及んだ。続く記事には「下摂待は田老村に接する十戸の小部落なり。其戸数の少なきに似ず二十七頭の牛を飼養せしが、海嘯の為め其全部落と牛の残らずとを持去られ、村民は四十三名の中十七名生存せしに過ぎず、惨又惨」とある。明治三陸地震における田老・乙部・摂待の津波被害が類を見ないほどに大きいものであったことが数字に表れている[注(2)]。また、県の三陸大海嘯被害地授産労法取調方を委嘱された山奈宗真の報告書『岩手県沿岸大海嘯取調書』では、被災後の対策として「田老川ノ南山根ニ防風林ノ松樹数十本在り（四五尺廻リ）　海面ヨリ二十尺モ高キ砂利堤防アリ　今回ノ津波ニ立木モ堤防モ破壊セラレ海面平均ノ地トナリ　将来田老海浜ニ六七間ノ堤防（汐止）ト防風林植付　尤急務ナリ　此田老川ノ床下ケ両側堤防改築モ必要」という報告がある。この記述によれば、明治三陸地震以前にも、数十の防風林と海抜およそ6㍍の砂利の堤防が築かれており、大津波を想定した町づくりがすでになされていたことが読み取れる。

昭和8年の三陸地震

昭和8年の三陸地震における田老の状況は新聞・雑誌記事のほかに、個々の体験記も多く残されている。宮古測候所所蔵資料『験震時報』第7巻には、「明治二十九年の三陸大津波に際し、釜石以北の最激被害地たりし田老村は、今回も亦沿岸に於て其惨状右に出るものなく、一世の視聴を集めたり。即ち戸数五六〇戸中山手にありし小学校役場及び寺院と少数の民家を残し、流出家屋実に五〇〇余を算し人口二七七三中死者五八四、死亡と推定される不明者三二七、負傷者一二二を出す等、其惨鼻の限りを尽せり。小職踏査中（六日）猶続々死体の発掘あり、実に鬼気迫るものありき」と、その惨状が記されている。この記事は震災から3日後の3月6日の様子である。およそ9割の家屋流出と人口の3割の命を奪う大津波が再び田老を襲ったことになる。同年5月21日の村役場の発表によると、死者・行方不明者合わせて911人、66世帯が家族全滅となっており、ここからもその惨事がわかる。この昭和三陸地震の体験記は田老町教育委員会編『田老

町史津波編（田老町津波誌）』（２００５年）にまとめられている。

防潮堤建造へ向けて

昭和三陸地震によって、大きな被害を受けた旧田老村は本格的に防潮堤建造と市街地整備に乗り出している[注(3)]。このときに集団高台移転も検討されたが、およそ５００戸の家屋を移転できる高地が見当たらなかったことや、村民のほとんどが漁業従事者であったことから、防潮堤を建造してその内側に市街地を再建することになった。村有地がなかったために耕地整備法によって、昭和８年12月には地権者の賛同を得て、耕地整理組合を組織して地権の整理を行った。所有地から２割ずつの提供をうけて、道路や防潮堤の敷地を確保し、市街地の整備を進めた。津波犠牲者が多く出た要因の一つには、未整備道路、つまり柵や垣根が妨害になって逃げ遅れてしまったことが挙げられた。そのため、国道45号線から延びる西向きの道路はすべて山に向け、直線的に避難路を整備していった。また、十字路の角を取る「隅切り」を導入し、交差点の見通しが良くなるように工夫している。町の山側を走る三陸鉄道には、登って避難できるように架橋に梯子が付けられた。市街地北部の荒谷を流れる長内川は、切り替え工事と護岸整備を進めた。同様に市街地南部を流れる田老川は、防潮堤の外側に沿って北流させて、長内川と合流させてから田老湾に注がせるように整備した。また、昭和９年には須賀の砂地を利用して、約７ヘクタールに赤松や黒松の防潮林を植栽した。避難所の整備も進められ、第一避難所を各地区に設け、さらに公共施設を集団的な避難を想定した第二避難所とした。

当初の防潮堤建造計画では、下小林より青砂里の出羽神社まで一直線に約１キロメートルを想定していたが、あまりにも大規模な工事計画であったために内務省の不認可となった。それでもなお、規模を縮小して村単独による建造を目指した。結局、防潮堤を小林から長内川橋まで縮小して、宅地造成資金として５万円を預金部から借り入れて、工事に踏み切っている。昭和10年には石黒英彦岩手県知事が復興工事の視察に田老へ立ち寄り、田老の復興に向ける熱意を受けて工事は県が行うことになった。昭和９年から建造をはじめ、昭和15年には９６０メートルまで完成していたが、アジア・太平洋戦争の激化によって工事は中止となった。昭和27（１９５２）年の十勝沖地震を契機に、関係各庁に陳情して昭和29（１９５４）年には工事を再開させ、昭和33（１９５８）年３月に高さ10メートル、長さ１千３５０メートルの巨大防潮堤がついに完成した。

第２防潮堤、第３防潮堤建造へ

防潮堤建造は第２防潮堤、第３防潮堤の増設へと続く。第２防潮堤は昭和37～40年度で中町通用門から青砂里の三王道路方面に向けて５８２メートルを築き、さらに昭和48～53年度で中町通用門から田代川水門までのびる５０１メートルの第３防潮堤を建造した。河川には水門やひ門を設け、田代川水門には遠隔操作制御装置を装備し、旧田老町役場（現・田老総合事務所）で制御できるようになった。昭和56年には防災行政無線が完成する。村役場、消防分署、漁協に無線の基地局を設け、町内の37か所に受信機付きのスピーカーを設置して、これによって全戸的に危機情報を知らせる放送網が整った。平成３（１９９１）年には東京大学地震研究所が潮位観測システムを配備し、翌年には津波観測システムが完成する。こうした津波から町を守るために策を尽くした旧田老町は、平成15年３月３日に「津波防災の町宣言」を宣言している。

次世代に伝える活動

都市整備のほかに、被災体験を次世代に伝える活動もある。先に挙げた『田老町史津波編（田老町津波誌）』といった経験談の編纂のほかに、津波体験をもとに紙芝居「つなみ」を作成して防災教育の啓発を行った田畑ヨシさんは、田老を代表する語り部として県内外に知られる。

こうした防災を目的とした町づくりの成果が目に見える形として表れたとされているのは、昭和35（１９６０）年５月24日のチリ地震である。23日にチリ沿岸で発生した大地震による津波は、22～23時間かけて太平洋沿岸に到達し、深夜に突如襲ったこの津波によって全国で１２２人が死亡した。田老では退潮と最大波高３・５メートルの津波が観測さ

れた。第1防潮堤が建造されたばかりだったが、サッパ船20隻を流失したのみで、人的被害・建物被害はなかった。ＮＨＫが「日本の素顔」という番組で、大船渡と対比しながら田老の防潮堤を紹介し、その存在が全国に知れ渡り、防災行政関係者を中心に防潮堤の視察が増加した。

防潮堤に囲まれた市街地の地区は、大平・小林・堺町・田中・田の沢・上町・中町・下町・川向・上荒谷・中荒谷・下荒谷・乙部といった地区である。これらを取り囲むように樫内や和野・水沢地区といった比較的高地の集落が点在し、自治会をそれぞれ組織している。自治会には、会長、副会長、会計、行政連絡員などの役があり、回覧板による行政連絡、清掃や共同作業、場合によっては共有財産を持つなど地域社会を支える基礎となっていた。例えば、上荒谷自治会では１９９０年代半ばごろまで、８月30日の晦日盆に高末民宿の駐車場で自治会主催の大規模な盆踊りを企画して、踊りやくじ引き・花火・バザー・売店をしたり、研修旅行や小正月のミズキ団子や幣束を自治会で集まって作ったりしていた。こうした社会関係は平時においても、長期的な避難生活の場面においても、共同でサポートできる関係作りの原動力になっていた。また、地域防災の基本的な単位になっており、昭和三陸地震が起こった３月３日にちなんだ避難訓練では自治会ごとに指定避難場所に避難したり、津波浸水シミュレーションを使った講習を行っていた。

注(1)『風俗画報』（臨時増刊「大海嘯被害録」）および『山奈宗真の津波被害踏査』の詳細な記事については、宮古市東日本大震災記録編集委員会編『東日本大震災宮古市の記録』第1巻（津波史編）に再録されており、本報告においてもそれを参照した。

注(2)田老町教育委員会編『田老町史津浪編(田老町津波誌)』(２００５年）によれば、マグニチュード7・5、最大波高15㍍、罹災戸数８３６戸、死者・行方不明者1千８５９人、一家全滅１３０戸、罹災生存者36人、漁船流出５４０隻としている。数字は報告や記事によって若干のズレがある。

注(3)田老尋常高等小学校編『田老村津浪誌』第２編（１９３４年）、田老町教育委員会編『田老町史津波編（田老町津波誌）』（２００５年）

2　発災直後と避難

いつか大津波が町を襲うことを想定して、市街地のハード面での整備を地域全体で取り組んだ田老であったが、東日本大震災では大津波が他と等しく町を襲い、多くの人命と財産を奪った。ここでは、田老で被災した人々の避難時の様子を聞き取り調査をもとにみていきたい。

落合ヨシさん（昭和６年生、女性、青砂里）２０１２年10月14日取材

３月11日の午前中は自宅にいて、午後になって地震の揺れを感じた。戸が閉まらなくなるから急いで戸を開けて、それから火を止めた。いつも病院に行く鞄を枕元に置いていたから、それだけを持って庭に出た。嫁と大学生の孫がちょうど家にいたので、一緒にそのまま青砂里の出羽神社にあがって行った。神社までは地震があってから２～３分で行ったと思う。そこに５、６人は来ていた。しばらくすると、人がたくさんやって来た。波はどっちから来たかわからなかったけれども、そこで波で人が流されているのを見た。そしたら、Ｙさんが、「この山ってどこさいく?」って言うので、半信半疑だったけど「このまんま行けば、越田だかどこかだかさ出っかもしれねぇから、いくべー」と誘い、そのまま歩いて行った。先に誰か何人かで歩いていた気がする。７人ぐらいのまとまりで私とＹさんが先頭になって歩いて行った。

そこで和野の人たちがみんな出ていて、「待っててねー。この人たち送っていったら、また迎えさ来るから」と、車で道の駅まで送ってくれた。だけど、道の駅は「避難所ではないから駄目だ」と言われて、それでグリーンピアに行った。グリーンピアに着いたときは16時過ぎぐらいでまだ明るかったと思う。ご飯も炊くところもあったから、みんなよりも困らなくて済んだ。お寺や北高に避難した人は大変だったと思う。何日か経ったら、知り合いが町の様子を見に行ってくれて、

自分の家が流されたことを知った。だから、グリーンピアから車で送ってもらって町の様子を見てきた。

息子は宮古に仕事に行っていて、道が通れないということで田代を回ってきて北高に避難していた。3月30日にアリーナに集まったときに会えた。それまで連絡はつかなかったけれど、知り合いが息子の様子を教えてくれていた。樫内の仮設住宅に入居したのは5月末ぐらい。息子夫婦と孫の4人で住んでいる。青砂里の近所の人たちの情報はあまりわからない。

金澤純二さん（昭和22年生、男性、乙部）2012年10月15日取材

東京消防庁に5年務めて、その後、宮古地区広域行政組合消防本部で職員をしていた。退職してからは田老診療所の宿直などの仕事をしていた。生まれはもともと岩泉町で、大平の公営住宅に住んでいた。平成元年に乙部に家を建てた。津波が来てもたいしたことないだろうと建てたが、嫁の父親が反対していたのを覚えている。

地震があった日は宿直だったので、午後5時15分から働く予定だった。午前中は家にいて、夕食のお弁当を作って休んでいたら、大きな揺れを感じた。今までに経験したことがない揺れだったと思う。本棚とか食器棚とかがぐちゃぐちゃになっていた。妻が小学校の用務員をやっていて、妻が帰って来る前に片付けようと思った。家はちょっと高いところだったので、津波が来ない地域だと思っていた。津波が来たとしても家はちょっと濡れるぐらいだと思っていたので、20分～30分ぐらいは家の中にいたと思う。とりあえず、情報がほしかった。テレビは当然つかなかったので、ラジオをつけたが、トランジスタラジオは夜しか入らない地域なのでつながらなかった。車で逃げるつもりはなかったが、車をちょっと高台にある友人の家に止めようと思って外に出た。車の鍵とジャンパーを着て、ニットの帽子をかぶって、それと何かに使えると思って首にタオルを巻いておいた。靴は長靴を履こうか迷ったけれども、普通の靴を履いて出た。携帯はポケットに入っていた。それが午後3時15分か20分ごろだと思う。今思うと良くない行動だったと思う。

隣の家のご夫婦が立っていて「すごい揺れだったねえ」なんて会話をしていた。そのうち、面識がない人だったが、越田製作所の人たちが何か叫びながら避難所から降りてきた。そのとき田代川から白いしぶきがあがった。たぶん第3防潮堤に当たったものだと思う。それを見て津波が来たのだとわかった。上の避難所に逃げようと思ったが、自宅までは波は来ないと思っていたから、トコトコと歩いていた。家から避難所まで80㍍もないけど、途中振り向いたら、真黒い波が家をのみ込んでいた。それを見た瞬間に全速力で走って、高台にあがると同時に波が避難所にぶつかった。例えるならば「田老にアフリカの砂漠にいる動物を見た感じ。なんでコレがあるの?」って感じだった。だけど音は全然聞こえなかった。最初の波が来たときに屋根が燃えた2階建ての家が、避難所の脇の家にぶつかった。田老の最初の火事だと思う。3時31分にそれを撮った写真がある。

その後、流れた人を3人見つけた。避難できた人と協力して引き上げて助けた。消防をやっていたので、骨折している人の応急処置をした。流れてきた丸木や鋸、毛布で簡易タンカを作った。救助も来ないし、火事もあって第2波も心配で、その場にいられなくなってしまった。田老診療所は無事かと思い、国道まで出て行ったが、診療所は駄目だったので、掘丁の社会福祉協議会まで2回往復して運んだ。いざそうなったらできるかどうかわからないけど、避難所にもう1波が来たら「怪我人を残して逃げないといけないのかなあ」と頭がいっぱいになった。乙部・野原・青砂里の行方不明者は1回の波で流されてしまったと思う。避難所にいるのが怖くて、その場にいた20～30人ぐらいで越田に行こうと山を越えた。山が枯れ葉の状態だったのは歩くのに都合がよかった。午後5時前に道の駅に着いて、そこから誘導されて、グリーンピアに行った。

下山英子さん（昭和36年生、女性、乙部）2012年10月16日取材

次の日が娘の卒業式だったので、髪を切りに理容室に行っていて、

ちょうど髪を切られていたときに地震がきた。それで車で自宅まで帰ることにした。途中、漁協のあたりで消防車とすれ違った。道は特に混んでいなく、すぐに家には帰れたと思う。自宅は避難所の近くだったけれども、避難所にはそんなに人がいなかったので、家のなかで着込めるだけ着込んで、水や書類をリュックに入れて車に積んでいた。3メートルの津波が来るという放送が急に途切れた。旦那が帰ってきて外で何かしゃべっていたので、自分も何も持たずに外に出てしまった。

避難所のほうから「あれはなんだー」という声が聞こえて、フッと海をみたらすぐそこに魔物のような灰色の波が押し寄せていた。既に堤防は越えていたのだと思う。それで、逃げろということになって避難所の方に逃げた。何を思ったか、車の中からリュックだけを背負っていた。途中、近所のおじいさんとおばあさんの手をとってあがろうとしたけれども、波にのまれてしまった。スーッと水が引いて、必死に流れてきたトタンをつかんで助かった。避難して助かった人たちに安全なところまで上げてもらった。ヘドロものみ込んだし、火も近づいていたのでこのまま死んでしまうと思った。おじいさんの顔色が変わってしまっていた。旦那も1人で子供たちを育てないといけないと決意したみたいだった。

私は動揺して泣きじゃくっていたみたいで、Tさんに「何泣いてんの！泣いたってしょうがないでしょう！」と言われて少し冷静になった。けれども、振り返ると田老の町が見る影もなくなっていたので、何があったのだろう、何が起こったのだろうと茫然としていた。第2波が怖かった。どこかで「助けてけろー」って声が聞こえたけれども、力もないし、怪我をしていて助けられない自分がいた。

和野のほうに抜ける山を登った。初めて登った道だった。和野の人たちはペットボトルに水を入れていた。人もたくさんいたし、山手の人たちは避難者を受け入れる準備をしてくれていた。旦那の叔母の家があるので、そこに3日間お世話になった。娘と息子とは連絡がとれない状態だったので心配だったが、それぞれ小学校と田老総合事務所に避難していたので、翌日に旦那が迎えにいった。それでやっと家族が揃ったが、情報が集まらないので避難所に行った方がよいということになってグリーンピアに行った。

旦那の叔母が着るものとか持たせてくれた。大広間に布団を敷いて寝た。そうしているうちに物資が届いて、着るものをたくさんいただいた。グリーンピアについた時に、近所の人たちと会って、安否の確認をし合った。田老の町には見に行く気にはならなかった。見に行ったのは4月ごろだと思うが、町を見てショックを受けた。家の基礎だけ残っていたのを見て、声が出なかった。旦那の軽トラックが山の上にあったり、津波ってすごいんだなって思った。

山本実さん（昭和23年生、男性、野原）２０１２年10月15日取材

水産加工団地で働いていた友人に会いに行ったとき、地震の揺れを感じた。地震が大きいから津波が来ると思った。すぐ妻に携帯で電話して「待っていろ」と言った。一旦、車で国道を通って、田老漁協のところで曲がって、たろう観光ホテルの前の自宅に戻った。そのとき国道は混んでいなかった。加工場から自宅まで10分もかからなかったと思う。妻を車に乗せて中学校まで孫を迎えに行った。そのとき消防団員が誘導していた。途中ドカーンという大きな音を聞いた。中学校では生徒を帰さないということで、国道を通って掘丁に向かっていった。乙部方面から国道に合流する車を何台かみたが、5台ぐらい後ろの車はついてこなかった。国道が優先だったから、合流できない車は流されてしまったのだと思う。掘丁のところで車から降りて、町を見たら橋に瓦礫が上がっていて、堤防がもうなかった。すごい瓦礫だった。危機一髪だった。それで、道の駅の防災センターに行ったけれども、人がいっぱいで、グリーンピアに誘導されて、16時ごろには着いた。

グリーンピアは12日には人がいっぱいになっていた。宴会場や廊下あたりにも人があふれていた。食べ物は4日ぐらいあったけれど、そのうち1日3食から2食になった。お風呂も1週間は入れなかったが、摂待の親戚が風呂に入れてくれた。水のありがたさを初めて知った。4月ごろアリーナに移動した。腰が悪いので、座っているのも大変で、

ご飯をもらうのも辛かった。たくさんの方に世話してもらってありがたかった。

息子は貨物船で働いていたから、電話は通じなかった。北海道の苫小牧に行っていたが、息子の友人が自分たちの無事を知らせてくれていた。1週間後ぐらいに親戚が孫を連れて来てくれた。腰が悪いから町を見にいけなかったけれど、妻は見に行っていた。車が通れるようになってから、自分も車で見に行った。自宅に行っても何もなかった。

避難場所は出羽神社で、昭和8年の津波のことは親から聞いていて、地震がきたら山へ逃げろと口酸っぱく言われていた。野原で大きな被害が出てしまったのには、二重の堤防があるから。たぶん逃げなかったのだろう。あと、3㍍という津波情報の放送も信じてしまったのだと思う。

仮設住宅にはお盆すぎに入居した。同じ部落の人が入っているからよかった。アワビを採る鉤とかいろいろ作って人にあげている。何かしていたほうがいい。

山本れん子さん（昭和27年生、女性、青砂里）2012年10月14日取材

午前中は理容業をやっているので、髪を切ったお客さんとおしゃべりをしていた。3月9日の地震のときに出していた避難リュックをチラっと見ながら片づけないといけないと思っていた。昼食をとって、休んでいたら地震が起きた。夜勤で家にいた夫が出てきて、ガスの元栓を締めた。水筒に水をつめて、避難リュックをもって、重ね着をして、鍵も締めて逃げた。駄目だとは言われてはいたけれど、早いうちなら良いかと思い、大きな毛布や羽毛布団、バスタオルを積んで車で逃げた。そのときは、今晩は家に帰れないと思っていたぐらいだったが、まさか家ごと無くなるとは思わなかった。大きな津波が来ることは覚悟していた。出羽神社が避難所になっていたけど、車にたくさんの荷物を積み込んだから、堀丁のほうに向かった。家から国道まで見かけた人は3人だけだったと思う。そのとき、消防車とすれ違ったと思う。45号線は両車線とも混んでいたが、北に行く道が特に混んでいた。国道に合流するのに少し待ったが、すぐに合流できた。津波が来るとは思っていたけど、どれくらいか気になったので、堀丁の歩道橋の所に車を止めて町を見ていた。「忘れ物を取りに行こうか」と言った旦那を怒って引き止めた。だから歩道橋のところから津波を見るまで、結構時間があった。そこで津波を見た。初めに三王閣の遊歩道に津波がぶつかって、青砂里の堤防を越えたのを見た。ただただ高い水が来た。本当に早く、あっという間に水が町に流れていった。青い色の屋根からちょろちょろっと炎が見えた。乙部の方は見えなかったけども、町や長内川に瓦礫が流れ込む様子が見えた。歩道橋には何十人もいた。津波を見て、帰るところはないとわかって、道の駅に行こうとしたが、狭くて夜は横にはなれないと思ったので、グリーンピアに行った。到着したころはあまり人は来てなかった。それからグリーンピアでずっと避難していた。

山本ヤスさん（昭和16年生、女性、荒谷）2012年10月14日取材

午前中は家事をして、花を買いに町に行こうと思っていたところに、地震がきた。早く、ママ（嫁）が帰ってくればいいなあって思いながら、裏に出たり入ったり、出たり入ったりとオロオロしていた。表のほうに出たら、向かいの家のかあさんがリュックを背負って駐車場に向かって行く様子だった。何かあれば人の声がするのだけれども、全然人の声がしなかった。しばらくすると、ママが帰ってきた。ママも慌てながら荷物をまとめた。自分も、避難リュックを背負って車に乗ったけれども、車が走らなかった。だから、車から降りて、裏の土間に立ったまま、ボーっとしていた。後から考えたらパニック状態だったのだと思う。堤防で海が見えないので、何もわからなかった。放送も聞こえなかった。近所の人たちの声もなく、周りが気になったところで、知人の声が聞こえてきた。それで歩いて逃げようということになった。靴に履き替えて、家を出た。玄関を出て国道を見たら、家から100㍍もしないところに瓦礫の山が見えた。津波の音は全然しなかった。長内川を津波が遡ってできた瓦礫だった。それで、裏山に走って逃げた。

そこにはだいたい10人ぐらい逃げてきた。そうしたら火のついた家が見えた。火事がでれば裏山まで火が回ると言うので、さらに山を登って、中学校を抜けて、孫がいる小学校で一晩泊った。山を越えるのも、逃げるのも「てんでんこ」と言うので、バラバラに避難するものだと思った。

小学校で一晩過ごして、北高に行く途中にある姪の家に行こうと思って、線路を歩いていたら、「小学校にみんな行くから戻ったほうがいいよ」って言われて、確かに息子が小学校に来ると思って引き返した。そうしたら、息子と娘が迎えに来てくれていた。それからグリーンピアに4~5日間避難した。

田老の町を見に行きたくてしかたなかった。けれども息子に止められていた。5日目に息子の車で町に行った。自衛隊がたくさんいた。国道からただ見ていた。「家のものは何にもないよ」と息子が教えてくれた。そこで小本にいる姉と会って、そのまま自分だけ姉のところへ行った。水道やお風呂があって本当に助かった。小本で50日間過ごした。そのあと、仙台にいる娘のところで2か月いた。いつまでも親戚に頼れないから仮設ができた7月ごろに入居した。2世帯借りて、孫3人と息子夫婦6人で暮らしている。

小林トキさん（昭和11年生、女性、小林）2012年10月17日取材

3月3日の避難訓練はときどき行っていて、2011年は小林の連絡員だったので報告のために参加した。参加者はだいたい決まっていて、12~13人ぐらいだった。3月9日の地震は自宅で揺れを感じてびっくりした。外を見て、放送を聞いていた。津波の心配はないという情報もあるし、家は高い所なので逃げはしなかった。

3月11日の午前中は大平の種屋さんに行ったり、畑の世話をしたりしていた。昼食を食べて、旦那の運転で小田代温泉に行った。着いて間もなく地震にあって、電気が落ちてしまったので、外でブラブラしていた。駐車場には10人ぐらいいた。送迎バスが町に降りて行った。1回目の揺れの時に、津波の高さが3メートルという放送を聞いた。2回目の揺れで大津波警報が流れた。サイレンは1回だけ鳴った。それから、パタッと音沙汰なかった。後で聞いたことだが、総合事務所にある自家発電が倒れて、放送ができなかったらしい。

自宅と裏山が崩れるのが心配だったので、町に降りてきた。田老駅の下の道路を走っていたら、真黒い水が前からきた。田老駅の駐車場のところでUターンして北高のほうに逃げた。後ろからと、左手の神田川にもサーっと波が登ってきていて、競争するように逃げた。町に戻るのが2秒3秒早かったら死んでいた。危機一髪で、まさに夢のようだった。国道の上からは水は来ていなくて、神田川もあふれてなかった。対向車も3台ぐらいあって、町のほうに行くなと手を振ったけれども、気づいてなかったと思う。

それから、ふれあい荘に避難した。そこで20人ぐらいが立っていた。うす暗くなるまで一緒に立っていたけれども、町のほうから火が見えた。誰かが「北高に避難してください」というので、北高で10日間お世話になった。娘は宮古市に務めているので、翌日には家で会えた。衛星電話が繋がったころに、親戚とかと連絡をとった。

翌日からは行けるとこまで車で行って、線路を伝って、家の片づけをした。線路には親戚の家が打ち上げられていた。線路にはたくさんの人がいて、泣きあったりしていた。家の中には水はなかったが部屋によって具合が違った。玄関は無くなっていて、廊下には瓦礫が入っていた。2階は無事だったけれども、水も電気も通らなかったので、4月から5月いっぱいはグリーンピアに世話になった。毎日毎日、片づけをしに通った。沢で洗濯したり、雨水をためたりした。

山崎弘さん（昭和20年生、男性、大平）2012年10月17日取材

3歳ごろにアイオン台風を経験していて、川の氾濫を見たのを覚えていたので、自宅付近の田老川の氾濫が怖かった。津波は堤防もあるし、水門も新しくできたので、津波がきても被害はそこまでは大きくないとは思っていた。避難訓練では、行政的には日枝神社の方に避難することになっていたけれども、自宅から海に向かっていくことになるの

で、国道の高いところに逃げるようにしていた。避難訓練に参加する近所の人は日枝神社に逃げたと思う。3月9日の地震のときは自宅にいた。これまでの経験で津波は来ないとは思ったけれども、避難警報が出たので、樫内の親戚の家まで避難した。

3月11日の午前中は孫を病院に連れて行っていた。自宅に戻ってご飯を食べて、ゆっくりしていたときに地震がきた。妻と嫁、高校生の孫2人の家族5人が家にいた。中学校3年の孫娘は中学校、長男は役場にいた。家が揺れてすぐに電気が消えた。すごい揺れだったけれども、物が落ちるような揺れ方ではなかった。1回目の揺れで外に出て、避難を始めた。宮古病院に勤務していた嫁は病院に行かせた。妻と孫2人は樫内の親戚の家に避難した。持ち物はリュック1つぐらいだったと思う。揺れから5～10分ぐらいで避難を始めた。自分は車1台を高台に運んで、また戻って2台目の車で樫内まで行った。田老川の様子は変化もなく、車も普通に走っていて、大きな音もしなかった。津波の無線もなかったと思うし、津波がきても自宅まで波が来るとは思わなかった。孫たちは親戚の家にいると思ったが、津波が来るということで、樫内の高台から見ていたらしく、探し回った。

結局、田老に戻ろうと思ったが、国道が渋滞していたので、歩いて橋のところまで行った。人は少しいたけれども、シーンとしていた。田老の町が真黒な湖のようになっていた。明るいうちに、樫内に戻って状況を伝えた。個人宅にいても仕方がないので、樫内の集会所を開けてもらい、逃げてきた60人ぐらいで避難した。

翌日に中学生の孫娘を迎えに行ったが、中学校の判断で帰さなかった。その後、親元に帰すということになって孫娘が帰ってきた。3日後から孫たちは嫁の実家にお世話になった。私と妻は3月いっぱいは樫内集会所に、4月からグリーンピアのアリーナに避難した。窃盗団の噂が立って心配だったから、自分は3日後から2階が残った自宅に寝泊まりした。樫内の集会所には1週間ぐらいは支援物資もこなかった。親戚を頼ったりして食糧や燃料、毛布とかを集めたり、役場と連絡を取らないといけなかった。燃料はポリタンクを集めて石油をろ過した。電気が復旧するまでには1週間以上かかった。水は樫内の人たちが使っている沢水を使った。動きが取れなかった自分の代わりに妻が自宅の片づけをした。5月ぐらいには自宅の修理が終わった。地震があれば逃げる生活だが、仮設住宅の人たちには申し訳ないと思った。

3　教訓と実際

14時46分に地震が発生してから津波が到着するまで、およそ40分の時間があったが、そこでの行動はそれぞれが置かれた環境によって多岐にわたる。避難手段をみても、徒歩で一次避難所まで逃げる人もいれば、車を使って移動した人もいる。平坦部の場合、速やかに一次避難所まで逃げられるよう避難路が整備されており、徒歩で高台にある一次避難所まで逃げた人も少なくない。毎年行われる避難訓練においても、自宅と一次避難所を徒歩で移動することが想定されていた。一方で多くの人は、自宅・外出先かを問わず、避難時のいずれかのタイミングで車を使用している。渋滞による逃げ遅れや不慮の事故の可能性がある車での移動・避難は、本来適切な避難方法ではないとされている。しかし、車社会を前提とすれば車を使った避難は、選択肢のひとつとして多くの人びとがとった自然な手段であった[注(4)]。発災時避難の視聴覚情報も様々である。特に音については「ドーン」という波と波が沖合でぶつかる音を聞いた人もいれば、津波を見る直前まで「音はしなかった」という人もいる。田老市街地では津波の高さが3メートルという情報が防災無線によって流れていた。しかし、停電によってその情報が更新されることなく、正確な情報を得ることができなかった。3メートルは防潮堤を超える高さではないため、その情報を信じ込んで、逃げ遅れが発生したのではないかという声もあった。

自主防災組織

平坦部における避難所は田老総合事務所と宮古市立田老第一小学校、岩手県立宮古北高校といった公共施設やグリーンピア三陸みやこ・田老ふれあい荘、曹洞宗常運寺が大規模な受け入れを行った（表1参照）。

表１　避難所一覧

主な避難所	人　数
田老総合事務所	280
田老第一小学校	208
常運寺	245
県立宮古北高校	100
田老ふれあい荘	170
火葬場付近	13
道の駅たろう	34
グリーンピア三陸みやこ	303
計	1353

＊宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』より作成

日枝神社・熊野神社・出羽神社に一次避難所として一晩過ごした人びとがいるが、火事の危険性や情報・救助不足の懸念から、２日目以降には大規模な避難所へと移動している。実際に、乙部地区や熊野神社付近から発生した山火事は大小の発火を繰り返している。完全に鎮火されたのは16日の７時のことだった。この間、避難者を支えたのは自主防災組織である。和野や樫内といった近隣高台集落の集会所も避難所となっており、各避難所では名簿が作られ、多くの人びとは、その名簿を頼って家族や知人を探しに避難所を巡りまわった。避難所の運営は避難者自ら行った。電話は不通のところも多かったが、携帯電話会社のアンテナ付近まで通って連絡をとる人も多かった。18日にはＮＴＴドコモの衛星携帯電話が、グリーンピア三陸みやこと県立宮古北高校にそれぞれ10台、田老ふれあい荘・田老総合事務所に１台ずつ設置され、一般の通信状況は大幅に改善された。電気の復旧は地域によって異なるが、田老第一中学校付近で復旧したのが20日であった。

写真１　簡易生活用水（再現）
2015/05/04　撮影：伊藤 純

こうした状況においても、例えば生活用水には沢水をせき止めて洗濯したり、救助活動を行っていた消防団員へ、薪を使って沸かした風呂を提供するなど、工夫して難をしのいだ（写真１）。

インフラが復旧するまでは、流出を免れた世帯も同様に生活に支障が出ていた。田老第一小学校の近隣に住んでいる女性（昭和20年生、田の沢２０１３年８月22日取材）は、当時の状況を次のように振り返っている。

地震の揺れは感じたが、全く物は落ちなかった。ここは地盤が強いので揺れないし、コップ一つ壊れなかった。津波が来るとは思わなかった。ずっと家にいて、ちょうど外に出たとき、役場のところにすごい水しぶきがかかるのをみた。地区の人が「毛布だしてけろー」と叫んで走ってきた。津波が来てるとは思わなくて「何に使う毛布？」と聞いて、「津波で濡れた人がいるから必要なんだ」と言われて、とりあえず３枚渡した。それでも、また来たので、一輪車を引いて地区の人たちから集めてまわって、避難してくる人びとに配った。そのうち「田老が全滅」ということを知った。

小学校の体育館が避難所になってたくさんの人たちが避難してきた。お年寄りたちがどうしたらよいのか不安にしている様子がよくわかった。風呂が薪風呂だったので、沸かして消防団の人たちも入った。水は汲んできて、薪には瓦礫を使った。瓦礫撤去や遺体の捜索をしている人たちは、風呂もろくに入れなかった状況だったので、それは感謝された。発電機をもっていたので、それで時間を決めて、炊事洗濯した。食料は少しだが、避難者に持って行った。

行政の支援では３月12日の朝には、宮古市市民生活部によって５００個のおにぎりが届けられた[注(5)]。19日からは自衛隊による給食支援が行われたが、食料供給ラインが安定的に確保されるまでは、避難者への食料は近隣地区からの炊き出しが支えている。田老地区の場合は、神田・末前・青倉地区の人びとによる支援が大きい。炊き

出しに参加した神田地区の**堰代秀子さん**（昭和33年生、女性、神田、２０１４年４月21日取材）は、次のように情報が錯綜していた様子を振り返っている。

今回の地震の揺れは家で感じた。１３０年近い家で、耐震ではないので家が壊れるかと思った。物は落ちなかった。大きい揺れというより長い揺れだったと思う。11日は電気が消えたが、神田はふれあい荘があったからだと思うが、次の日には電気が復旧した。一晩だけ電気がない中で過ごした。水は普通に出た。水道もあるけど、沢から水を引いている家も何軒かあるので、何かあっても大丈夫な地区ではある。

経験したことがない揺れだったので、街のほうに津波が来るとは思ったが、これほどまで大きい津波が来るとは思わなかった。自分の家が潰れると思ったので、消防の屯所の無線で何かしら情報があると思って、大体みんな屯所に集まった。神田は17軒あるが、大体50人ぐらいそこにいたと思う。結局、無線の情報はなかったが、数人が街のほうから逃げてきて町の情報を得た。それが、午後３時ぐらいのことだと思う。グリーンピアや総合事務所・北高に逃げる人が多いから、神田まで逃げてきた人は20人いないぐらいだったと思う。津波が川をさかのぼってどの辺まで屋根が流れてきたというようなことを聞いた。

午後４時ぐらいに大平に住んでいる市議会議員に炊き出しの準備をするようにお願いされた。男の人は消防のほうに行ったので、男の人が何をやっていたかはあまり覚えていない。女の人は炊き出しを始めた。仕事とかで地区の外に出かけている人は帰って来られないので、炊くのは10人いないぐらいでやった。

神田は何軒もないが、田んぼが少しあるので、田んぼをやっている人がすぐに米を持ってきてくれた。その日はおにぎりを作った。米は十分にあったけど、電気がなくて、エンジン式の精米機で付きっきりでずっと精米していた。１回に炊ける量も限られてしまったが、集会施設にある一度に10㌔ぐらい炊けるガス釜で炊いた。１日20回ぐらい炊いたと思う。汁物用の大きいお鍋でも炊いた。それは7㌔ぐらい炊けたと思う。相当な量で、人数もいないのでおにぎりだけで精一杯だった。夜通しやるつもりだったけど、消防の指示で夜の12時で炊くのをやめたが、足らなかったのか、連絡が徹底していなかったのか、12時すぎても「次ができたか?」って取りに来る人がいた。今思えば、情報が混乱していたのだと思う。誰の指示が正しいのかがわからなかった。朝４時から炊き出しを再開した。汁物も作ったけど、道路がなかったために運べなかったらしく中止になった。消防団のためにお茶をペットボトルに入れたが、「何も持ってない人を前にして飲めない」というような現場の状況を聞いた。私たちは炊くだけで、おにぎりを取りにくるのは役場の人たちだった。電気もないし、道が悪くて歩けないので、背負いカゴやリュックを集めて運んだ。だから、おにぎりは一つ一つラップで包んだ。11日の夜にはお寺におにぎりが届いたらしく、「そのことは忘れられない」と後で言われた。

大平地区の上のほうは被害があまりなかったので、何人か泊めている人もいた。電気が通ってなくてご飯に困っていたので、おにぎりを譲ったが、個人のところにあげれば良いのか、大きい避難所にあげればいいのか、指示が無くてどう判断すればよいか躊躇はした。

集会施設のガスがなくなったら、個人の家のガスボンベを持ってきて炊いた。ラップとホイル、米は途中で無くなってしまって、地区の人が自分用に買い置きしていた分を出した。地区の人はみんな身を削ったと思う。地区の人たちがいろいろと出してくれたのが本当によかった。自家用に漬けていた梅干しとか昆布とかを出してくれた。

４日間ぐらいで物資が届くと思っていたが、１週間ぐらい米が来ることはなかった。それから新里の給食センターが賄うということになって、消防の人たちの分ぐらいになった。それまでは集会所に詰めていたので、街を見に行ったりもしなかった。

身元の確認

12日の夕方には県立宮古北高校に田老地区の遺体安置所が設置された[注(6)]。運び込まれた遺体を医師だけでなく、田老の人びとも加わり、顔や持ち物・着物から身元確認が行われた。23日現在で95体の遺体が

安置され、そのうち76体の身元が確認されている。20日からは田老の火葬場が稼働したが、燃料の不足から1日に3体の火葬が限度であった。26日から遺体安置所は田老公民館へと移設された。27日現在で117体（そのうち身元不明者が19体）、28日現在で121体という状態であり、生き延びた人びとにとって混乱した状況のなかで、家族や友人の死を迎えることになった。

注(4) 岩手県・宮城県・福島県を対象に行われた平成23年東日本大震災における避難行動等に関する面接調査（住民）単純集計結果（内閣府・消防庁・気象庁）によれば、避難手段について「徒歩で避難した」が39％であったのに対して「車で避難した」が55％と最も多かった。

注(5) 宮古市『東日本大震災の「記録」―岩手県宮古市―』（2003年）

注(6) （5）に同じ

4　摂待地区の状況

摂待地区は摂待川河口にある水門を破壊して、摂待川を遡上した津波が集落と水田を襲った。特に下摂待地区は比較的高台にあった1軒を残して7軒が流失した。漁港とアワビ増殖センターといった水産施設も全壊する大きな被害を出した。下摂待の様子を摂待の花輪長一さんと舘崎隆保さん、中学校の様子を当時田老第三中学校の教員であった金澤祥子さんの言葉を借りて見ていきたい。

花輪長一さん（昭和10年生、男性、摂待）2013年5月2日取材

午後になって小堀内の漁師から電話があった。息子が海に出ていて、潮で船が転覆しそうで、船で見に行ってくれないかと頼まれた。午後1時半、風は南から吹いていたが、たいしたことなかったので沖に行った。摂待漁港の裏から出たら北の風に変わった。50～60年ぐらい漁師をやっていたが、船を走らせているうちにこんなに風が変わるのは不思議だなと思った。だけど、風はたいしたことないのでそのまま船を進めた。小堀内のほうを見たけれど、船は見えなかった。

そしたら、沖から音を立てて風とうねりが来た。今思うとそれが津波の前触れだったと思う。こんなことは不思議だったので、作業を休んで自宅に向かった。陸にあがったらSさんがいた。「なんだSさん」といったら、「沖がうまくねえから早くやめてきた」って言ったので、「ほんだら家さいくびゃー」ってなったが、Sさんは「もう少しいる」ってなって、家に帰った。途中、消防団が水門を閉めに行くのとすれ違って会話した。自宅に着いたら、嫁と息子が薪割りしていた。「みごとな地震がきたけど、茶ダンスとかを押さえたのでコップとか瀬戸物は助かった」と、そんな話を外でしていた。

「津波だー逃げろー逃げろー」とサイレンを鳴らして沖から消防団がやって来た。「津波だー」って言われても「何の話だ」と思った。ともかく、山に自分の畑があるのでそこに避難した。自分のところでなくても、避難の時はどこでも高いところに逃げるのが当然だから、すぐ上がっていった。そこで3人で見ていた。そしたら、建物やサッパを押し壊しながら物凄い音を立てながら津波が来た。それと引き波がみごとに強かった。向かいの山から下摂待まで海のようになっていた。

歩けない母がいたなと思って、母を背負ってこようかと思ったが、息子が「家が流れた」と言っていたのを聞いて、もう母は駄目だと思った。津波が引けてから背負って帰ろうと思っていた。水門を閉めたから下摂待は海のようになっていたので、3日ぐらいは探せる状態ではなかった。3日目の午後に妹が田んぼで母を見つけた。毛糸のほっかむりをしていて、大きな傷もなく寝ていた。既に自衛隊や消防がいたので、消防が連れて行って、宮古のさかき仏具葬儀社に頼んで、火葬の段取りをして火葬をした。小本の寺で葬儀をやって納骨した。

舘崎隆保さん（昭和7年生、男性、摂待）2013年5月4日取材

トマトの支柱に使う竹を切りに防波堤のほうに行っていたときに揺れを感じた。地震が大きく海抜も低いところだったので、その場に鉈や鋸を置いて、急いでバイクで家まで戻った。家に帰ったら、電気が

消えていたので、直ぐに逃げないといけないと思って、山の避難所に逃げた。避難所は父親が作ってくれて一晩は過ごせるものだった。津波が来ることは予想できたが、防波堤は超えないと思っていた。避難所に逃げてからも大きい揺れが2回ほどあった。第1波は20分後ぐらいにあった。南の沖で雷のようにゴロゴロゴロゴロゴロ…というような音が聞こえた。合わせて3波ぐらい来たと思う。一番大きいのは第2波。宮古や田老と違って1か所から津波が来るのではなくて、ところどころから来た。

妻も一旦避難したけれども、ガスの元栓を閉めに家に戻ってしまって津波にとられた。大声で叫んだが、自分の声よりも津波の音の方が大きくて聞こえなかったのだと思う。妻とSさん夫婦の3人が流された。Sさんはどうにか屋根に上って、泥まみれになりながらも助かった。流されたと思っていたので、泥まみれの人間が動いていたからびっくりした。

津波が引き始めて高台から下りてきて、流された妻たちを探した。他の人たちでSさんの泥を洗う作業を行った。Sさんの奥さんはすぐに見つかった。

また津波が来る心配があったので、その日は妻を捜索するにもできなかった。逃げてきた人で相談して、避難所で一夜過ごすことにした。消防団員が、山を越えてきて、改善センターに行くよう促された。結局、山を越えられないような人もいたので避難所に残った。8人ぐらいがその日は残ったと思う。消防団員が往復してくれて、おにぎりと石油ストーブを持ってきてくれた。

金澤洋子さん（昭和27年生、女性、乙部）2012年10月15日取材

結婚してから主婦や介護師を経て、田老第三中学校に用務員として務めていた。小学校、中学校の併設校で合せて20人ぐらいの生徒がいた。田老第一中学校に統合されるので閉校の準備をしていた。PTAに閉校式の案内文書を配るため車の運転をしていたら、車のハンドルがきかなくなった。車を止めてみたら電信柱がゆれていた。文書を配布しなければならなかったので、下摂待に行って「すごい地震だったね」と話していた。職場での非常時の役があるのを思い出して、すぐに学校に戻った。子供たちはすでに避難していた。校舎の中はぐちゃぐちゃだったけど、とりあえずボイラーのチェックと職員室と校長室の鍵を閉めて、校庭に避難した。そのとき、海の方からドドドドって雷様のようなわりと長い音がした。「こういう音がしたら必ず地震がくるんだ」と同僚が言っていたが、やはり大きめの地震がきた。

下摂待の方から煙が見えた。摂待川を見ると水がひたひたひたひたと来ていた。下摂待で鮭の養殖場、昆布・わかめ漁をやっている父兄が学校に避難してきて、自然と下摂待は全滅だという状況がわかって、みんな茫然としていた。

高台から下摂待が一望できるので行ってみたら、湖のようだった。学校は避難所になっているので、避難所の設置を始めた。水道が出るかぎり、バケツに水を貯めて、地区の人たちも蝋燭や毛布を持って来てくれた。暖炉の薪があったので準備していたら、消防の人たちが来て、水門が決壊したので学校は避難所として使えないと言われた。子供を親元に帰したあと、水沢の避難所に避難する校長グループと、グリーンピアに避難する副校長グループに分かれた。田老の自宅が気になったので、許可をとって町の方に行った。田老の町は壊滅的だということは聞いていたので道の駅に行った。そこで旦那がグリーンピアにいることを知人が教えてくれたので、グリーンピアに行ったが、人がいっぱいでその日は会えなかった。

5　避難所から仮設住宅への入居

道路や交通・物流・水道・電力・通信などのライフラインが回復するまでは、グリーンピアのような大規模な避難所では避難者自らその運営にあたっていた。前出の、金澤純二さんは発災直後のグリーンピアの運営には地域の人びとの活躍が大きかったと、次のように振り返る。混乱と悲しみのなかでも、助かった人びとは前へと進まなければならない。そうした切迫した状況のなかで、避難者一人ひとりは複雑

な思いを抱えたまま避難所での生活を迎えることになった。

金澤純二さん（前出、２０１２年10月15日取材　２回目）

まずは余震に対する点検、避難路の確保、懐中電灯の用意などを最初に確認した。名簿を作ったほうがいいということになった。グリーンピアに来てから、私や赤沼正清さんなどが、自主的な運営組織を立ち上げた。千葉さんは名簿作り、自分のような救助経験者や看護師経験者は怪我人や妊婦の対応をして、秋田の消防隊と連絡調整を行った。妻や中学校の先生などは清掃をしてもらった。名簿作りは助かった人が多いと思う。なんとかしなければいけないと思って自然とこうなった。防災婦人部や自治会の防災関係の組織があったと思うけれども、みんなバラバラになってしまったので動きは取れなかった。

４月になってから自主的な運営組織から役場や社会福祉協議会の主導に移った。３月下旬に田老の人たちをアリーナの１か所にするということになって、荷物はまとめておけば自衛隊の人が運んでくれた。これは遠い避難所にいた方にとってはすごくよかったと思う。アリーナでのスペースは１人あたり毛布１枚半。これだと寝ることしかできないので、知人の世帯と協力して広めのスペースを確保して、使いやすいように変えた。スペースに余裕があったから、原則通りではなくて体が不自由な方の話を聞いて、もう少し融通を利かせてくれてもよかったと思う。だが他の避難所をいくつか見たけれども、グリーンピアの避難所は本当に恵まれている方だと思った。

それでも、７００人の共同生活だから不平不満はどうしてもでてしまう。そのころは、生きるのに必死で、みんなひもじい思いをした。朝の炊き出しのときに女性の１人が「なんでこんな思いしなければならない。こんな思いするぐらいだったら、津波に流されて死んでたほうがよかった」って大きな声で言っていた。そうしたら、周りの人が「こらこらおめえさん何しゃべってんだ。そんなことを言うもんでねぇ。（診療所の）黒田先生も言ったように津波で生き残った人が亡くなった人たちの分まで生きていくことが生き残った人の務めだ。おめえさん何言う」って諭していた。言わないだけであって、「津波で流されればよかった」と思った人もいれば、「生きなければ」と思った人もみんな同じ気持ちだった思う。それを聞いたときが一番切なかった。みんながぎりぎりだったんだと思う。だけれども、本当にたくさんの援助をいただいて、その気持ちに支えられた。中学校の先生たちは食事も最後でもいいと、彼女らがお手洗いの掃除を率先してやりだして、こういう状況時にどうすればよいのか、というのを考えさせられた。

宮古に行ったときに、食堂に入れなかった。誰かが見ているわけではないけれども、支援してもらっていて、美味しいものを食べていいのかと思った。その後、初めて食べたのが合同庁舎で食べた安い定食だけど本当に旨かった。

6　復興へ向けた道筋

田老は３月31日から４月１日にかけて、７か所に分散していた避難所をグリーンピアのアリーナに４００人弱、ホテルに３００人統合した。これにより集約的な避難所の運営と支援ができる体制がようやく整った。５月中・下旬から応急仮設住宅への入居が始まり、８月下旬には田老地域の仮設住宅への入居が一段落となる（表２）。グリーンピア敷地内の仮設団地への入居の場合、可能な限り震災以前の地区を割らないように田老の南側から入居していき、地区ごとのまとまりをもった３つのブロックに分かれた。アリーナで

表２　田老地区仮設住宅一覧

		戸数
1	グリーンピア仮設住宅１(グラウンド)	248
2	グリーンピア仮設住宅２(グラウンド)	37
3	グリーンピア仮設住宅３(テニスコート)	122
4	樫内地区市有地	35
5	樫内地区民有地	37
6	宮古市立田老第三小学校グラウンド	7

＊宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』(2013 年)より作成

の共同生活に区切りを迎えたが、なにより仮設住宅での生活がいつまで続くのかが、見通しが立っていなく、依然として不安な状況に変わりはなかった。壁越しで隣人の声や携帯電話のブザー音が聞こえるほどの一時的なものであり、厳しい住環境であった。また、仮設住宅への入居は同時に各世帯における自活の再開を意味していた。

復興に向けて行政と住民との本格的な調整が始まったのは9月22日から3日間開かれた「第1回田老地区復興まちづくり検討会」である。住民間の意見の集約と情報の共有、最終的には市長への提言をめざしている。そこでは市が行った意向調査「復興に向けた計画づくりに関するアンケート調査」（実施：7月8日～7月26日　田老地区の回収率55・8％）の結果が開示された。それによれば、今後の住まいについて「近くの高台」「同じ場所」と答えたのがそれぞれ47・1％、15・9％となっており、あわせて63％の住民が田老への居住を希望していた。一方で、「市内」（26・1％）「市外」（4・1％）とあり、田老からの人口流出が懸念されてもいた。今後の不安については、「住宅の確保」が57・3％、宮古市全体では37・8％で、他地区に比べて住宅に関する不安が際立っている。検討会では市の4例の復興パターンが提示されており、居住制限や嵩上げ・跡地利用をどのように進めていくかが検討されている。また、防災意識・防災教育の意見も交わされ、特に防潮堤について「14・7メートルでは低すぎる」「川に津波のパワーを分散させるように線形を見直すべき」「水門のあり方も見直すべき」「津波を川に流すというのは危険。津波は川をあがっていくのに被害が拡大するだけ」「高い防波堤や嵩上げ、人工地盤など、過剰な防御は住民の避難意識を低下させる」など、防潮堤の是非や利用をめぐって様々な意見が提出されている。

平成24年10月24日に市内の災害危険区域の、区域種別と建築制限を定める「災害危険区域に関する条例」が公布された。田老は平成25年2月8日に告示されたが、同年9月、27年7月と変更を繰り返しており、災害危険区域の区域種別と建築制限の確定が他地区に比較するとやや遅れている。第1防潮堤より海側が第1種区域になっており、住宅の建設は不可となった（図1）。

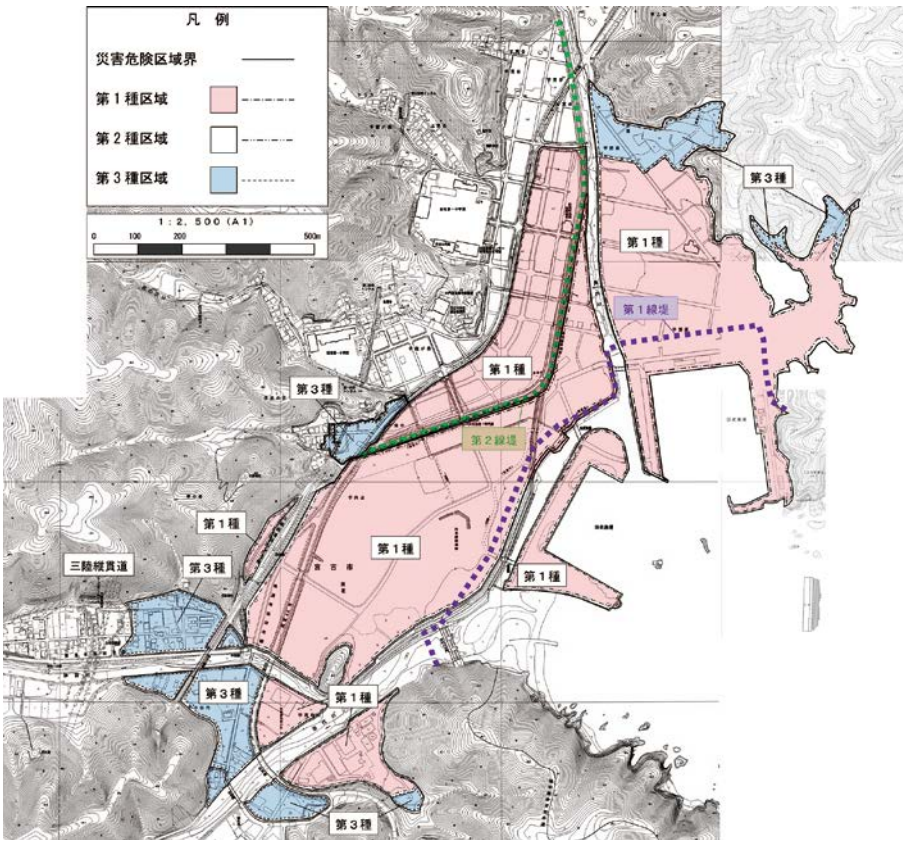


図1　田老災害危険区域

「田老地区復興まちづくり協議会」が平成24年5月26日に住民主体の組織として発足し、高台移転での生活や跡地利用・産業・防災について具体的な検討がなされている。協議会の下には防災検討部会・高台まちづくり検討部会・田老市街地検討部会・田老地区産業・雇用検討部会・漁業・水産業等検討部会などが置かれ、各課題について協議している（写真2）。

写真２　田老地区復興まちづくり協議会
（漁業・水産業検討部会）
2012/10/16　撮影：伊藤 純

協議会のメンバーの1人である**田中和七さん**（昭和29年生、男性、中町）（２０１４年４月22日）は「まちづくり協議会や部会では30代ぐらいの若い人たちがその場に来ないのが心配。これから30年後をある程度見据えた人たちがまちづくりに参加してくれたほうがいい。街に対する思いみたいなものはみんな持っていると思うし、仕事もあるが、そういう場に慣れていないと出れないんだと思う」と述べており、世代を超えた交際の難しさを滲ませている。

被災前には各自治会に会長・行政連絡員が置かれており、回覧板や広報を通して情報の共有がなされていたが、長期化する仮設団地生活の場合は、既存の自治会とはまた別に自治組織をつくることも検討された。例えば、グリーンピア仮設団地３（通称テニスコート仮設）は主に乙部・青砂里の住民ら１２２世帯が平成23年６月15日に入居した。その後３年間で、自立再建可能な30世帯が仮設住宅団地のもとを離れているが、ここでの生活の期間限定の自治会を発足させている。

仮設団地ごとに集会室や談話室が設置され、そこでは復興や福祉などに関する行政サービスの説明会が頻繁に行われている。また、集会室や談話室は住民同士の交流の場となっており、子供達の遊び場や裁縫や小物づくりサークルが立ち上がっている。厳しい避難生活を緩和させようと傾聴ボランティアも継続的に訪れている。

４０７戸。およそ1千人が生活する大規模な仮設団地となったグリーンピアでは、市街地で流出してしまった田老診療所がグリーンピア内に開業し、また仮設住宅の住民の要望に応えて、平成23年5月15日に仮設商店街「たろちゃんハウス」がグリーンピア駐車場の一画で営業を始めた。慰安コンサートや歌謡ショー、芸能人の公演などの復興イベントが開催されたりするなど、グリーンピアは半ば田老の中心地となっていた。

一方、他の仮設団地との情報・支援格差や、親戚の家やアパート等を仮住まいとするいわゆる「みなし仮設」の人びとへのケアも大きな課題として残った。被災後にみなし仮設に入居した**高屋敷吉蔵**（昭和18年生）・**トシ**（昭和23年生）（２０１５年３月10日取材）**夫妻**は当時の情報・支援格差と住民同士の形容し難い感情のズレを次のように述べている。

（吉蔵さん）サン・オーエンにずっと避難していたが、グリーンピアの方たちに会えるかたちがなかった。私は結構顔を出しにいったけど。

（トシさん）田老は小さいから、顔はみんな知っている。樫内仮設に入っている人達も知っている。だから、感情というか、最初はパニックになっているから、人の行動が気になる。グリーンピアに物資や情報が集まるけども、サン・オーエンのほうには全然そういう情報が入ってこなかった。でも、借りられるだけよかったかなと思うけれども、流れのなかで炊き出しとかそういうことがあって行くと、コソコソ言われることもあったと思う。なんでもない人も、家を流されてない人も皆さんが被災者だと思う。電気がつかなかったり、水が出なかったり、人を泊めてあげたり、みんないろんなかたちで震災に関わってきたから、そういう意味では見なくてもいいような人間模様を見たなと思う。すごく小さいことでどこにでもある話の感情だけど。そういうことがあったけど、疎遠になることはなかった。

（吉蔵さん）津波前までは目を合わせても、挨拶しないような人たちでも、みんな懐しそうに挨拶するようになった。そういう声がけは増えたと思う。津波のおかげというのは変だけど、そういうキッカケになったと思う。

当時も自治会長をやっていた。80軒ぐらいあったけど、上荒谷自治会は最終的に解散した。中学校の先のほうの荒谷の沢というところは

残った。会長・副会長・会計・監事・事務局・保険推進員・環境衛生委員・スポーツ・行政連絡員などの役員が集まってどうしようかと相談していた。自治会全員では集まれないなか、平成24年の秋ごろに役員会を開いた。総会ではないので、役員のなかで1人でも反対があれば解散はしないと決めていたが、全員が解散という決断をしたので解散となった。貯蓄していた自治会費は家が残った仲間たちの活動資金として渡したが、今でもそこでの自治会結成までは至ってない。

在宅被災者の女性は「正直つらかった。震災直後は電気も水道も通らなかったし、体育館から丸見えだから気を使った。別に見られてないだろうけれど気が引けた。その後も家を流された人たちと対面するのも気が引けた。診療所に行くのも、たろちゃんハウスに行くのも。流された人と残った人たちの差。町づくりの話もかかわる事ができないし、その案内も来ない。残った人たちと流された人たちでバッと分かれてしまった。言葉ひとつでも気になってしまう。それでも、震災前から夕刊配達をしていたから顔が広くてよかった。今では、何にもなくてもグリーンピアに上がってきなよと言ってもらってありがたい。さみしいから早く建物が建ってほしい。曲がり角もわからなくなる」と率直に語る。

同様に下町に住む在宅被災者の1人である**鳥居建一さん**（昭和16年生、男性、下町）（2013年8月22日）は復興後の田老について次ぎのような不安を抱いている。

食料の配給やイベントがあるとの放送があり、グリーンピアに行ったりすると、被災者と非被災者との間で気まずい思いをするという人もいた。そういう面でのギクシャクというのは、一般論としてどうしても出てしまうのかなと思う。家が残ったとしても、家があるだけで生活できないし、被災した人たちに対する遠慮が生まれた。

下町自治会は50世帯前後あった。それが津波後13世帯になり、2011年5月に解散になった。新しい町や高台移転が落ち着いたら、新たな動きがでるのかなと思う。残った家の人たちで自治会をつくるかもしれないしよくわからない。今まで一緒だった町の人たちが宮古や他の土地に行ってしまって、声を掛け合う人たちがいなくなってさみしいし、不安もある。町づくりの情報もあまり入ってこない。役場や保育所などの移転も話にあがったりしていて、残っている人たちにも重要な話だと思う。高台移転は残った人も入れるのか。そういった話も気になる。残った人たちにとっては、田老総合事務所のそばに町の中心があるような以前のようになってほしいと思う人もいる。13世帯が残されるのではないかと心配している。

被災から2年ほど経過するころ、グリーンピア仮設団地と田老平坦部を指す「上の町」「下の町」という言葉がどこからか生まれている。情報・支援格差、物理的な交流の減少によって誕生したこれらの言葉は、被災2年から4年ほどの膠着した田老の復興状況と震災によって分断されてしまった人びとのつながりをよく表している。仮住まいを余儀なくされた人びとの生活の拠点が、災害公営住宅や高台へと移り安定し交流が再び密にとれる状況が整うまでの道のりは長かった。

一方で、摂待地区の仮設住宅7戸は地区内の田老第一小学校内に仮設住宅があり、下摂待の人びとが入居していた。そのほとんどが上摂待地区への自立再建を決めている。震災後も被災前のコミュニティの延長線上での避難生活となり、塩が入った農地を再び利用できるように、地区主導で農地改良を行った。

摂待で漁師・釣船や農業を営む**畠山俊良さん**（昭和23年生、男性、摂待、2015年2月13日取材）は摂待地区の復興の様子を次のように見ている。

海水が入り込んだ摂待の田んぼは、県の補助事業としてまとめて土地改良を行っている。補助事業に関しては瓦礫を撤去するまでは考えてなかった。撤去が終わってから話がきた。何十年も前から、用水路に関しても改良されてなかったから、それも合わせて工事をお願いし

た。農業用水は河川から引いている。だから、摂待の場合は干魃があっても結構大丈夫。作業面を考慮して2反歩ずつ、堀返して地盤を作って表土を入れて、２０１５年の田植えに間に合うようにやっている。もともと２０１４年の田植えに間に合うように計画されていたが、工事をやっていた会社が倒産してしまい、工期が延びてしまった。田んぼはなぜか1年あけたら出来がよかった。海水はあんまり関係なかったのかな。わかめとか昆布とか取ってきて田んぼに捨てると、1年目はダメだけど、2年目はそこだけすごく出来る。栄養に関しては悪くはないのだと思う。個人単位では田んぼを持っている規模は小さいし、みんな同じ機械を使っているから、あまり経済的ではない。先祖の土地を守っているという感じだ。家計でみれば浜のほうが稼げる。田んぼの赤字を浜でうめているような状況だ。

下摂待は今は松の防潮林を造っている。風除けにもなる。昔もあったが津波でやられてしまった。1つ40㌧の水門が4つあったが、それが一気に津波で鮭の孵化場のところまでもっていかれた。解体するのに5日ぐらいかかったと思うが、その水門がいつ直るかはわからない。鮭の孵化場はすぐに直って、今年で2回目の放流になる。アワビの孵化場も平成25年度予算で作られて、10月ぐらいにはできて、嫁さんが稼ぎにいった。港は現在でも使えないこともないので、前と変わらないような感じで使っている。今年、仮設住宅もすべてなくなった。下摂待は1軒だけ残った。下摂待は共有財産や共有地もあって、それを整理しないと解散にはならない。摂待は他の地区に比べて元通りになるのが、早い方だと思う。世帯数も少ないし、変化もないので、前に向かっている。田んぼが植されば、「あー元に戻ったなあ」と思えるのだと思う。

7　復興を支える田老の漁業

田老漁業の変遷

田老は漁業の町である。三陸海岸のほぼ中央に位置し、外洋に接する地理的環境は三陸特有の好漁場となっている。今回の大震災のように海が命や財産を奪う脅威である一方で、海によって育まれる海洋資源は、漁業の町としての生活と経済を支えていたといっても過言ではなく、復興の支えともなった。

漁業を束ねる現在の田老町漁業共同組合の歴史は、明治35年の田老・乙部・摂待の漁業会の設立にはじまる。昭和８年の津波被害によって、それぞれの漁業会が合併して一村一漁協となり、昭和24年の水産業協同組合法の施行によって新体制となって現在に至っている。漁港は比較的小規模な第一種漁港として樫内・小港・青野滝・小堀内・水沢・摂待、市場を有する第二種漁港として田老漁港がある。平成15年度までは世帯単位組合員制度で、1世帯から1人の組合員であったが、後継者育成を見据えた個人組合員制度に切り替えている。

昭和50年代はじめまでは天然のワカメ・コンブ・アワビ・ウニといった地先資源を利用した沿岸漁業が中心で、繁茂・繁殖状況によるが、年間の漁期はワカメ（3～5月）、ウニ（5～8月）、コンブ（8～10月）、アワビ（11～12月）、まつも・ふのり（12～5月）となっていた。それぞれ漁協によって定められた「口開け日」に、鎌・撚棒・箱眼鏡を使用して採捕される。資源管理のために潜漁を禁止し、採捕日や採捕量にも厳しい規制がかかる。そのため、家計を補完するために、かつては遠洋漁業に繰り出す者も少なくなかった。

田老町漁業協同組合編『田老町漁協50年のあゆみ』によると、昭和33年には漁協の自営船（協栄丸）がマグロ船団に参加し、組合員がその乗組員になっていた。また、宮古の会社に勤めて遠洋漁業に従事することも少なくなかった。マグロ・サケ・マスを狙う北洋漁業や遠洋漁業の場合は季節労働であり、1年の大半を田老から離れて生活するのが普通であった。宮古のマグロ漁船の会社に長く勤めた**戸塚隆さん**（昭和14年生、男性、乙部、２０１２年1月17日取材）は、遠洋漁業の生活を「宮古市のマグロ漁船の会社に勤めて、平成19年に68歳で漁撈長を辞めた。漁撈長は漁場選定をして、細かな指示を出す仕事。ハワイ沖やオーストラリア沖によく行って、一旦漁に出ると1年のうち半年は戻らない。戻ってきたら1か月は休んで、また航海に行って、少

し休んで、また漁に出て、を繰り返していた。田老には1年に2か月もいないぐらいだった」と振り返る。

養殖漁業への転換

田老における遠洋漁業の衰退は、昭和40年代以降の安定的な収入が見込める養殖業の定着だけでなく、こうした長期的な不在による生活環境の厳しさにもあったのだろう。二百海里規制、減船時代のなか、沖合・遠洋漁業就業者は昭和50年代前半をピークに減少している。

昭和40年には小港・樫内で試験的に養殖ワカメが収穫されている。外洋に面する田老の場合は、筏を要するカキ・ホタテの養殖は向かないため、耐波性の高いワカメ・コンブの養殖を主とする経営体が増加している。ワカメ・コンブの養殖施設は延縄方式で、１００～２００メートルほどの幹縄に枝縄に種付けを行って海中で養育させる。海面近くにワカメ、約20メートルの深さにコンブを付ける構造になっている。養殖といっても実際には付着先が縄であるだけで、海中の栄養分で生育するので、天然と変わらないものである。ワカメは原藻のまま漁協に出荷し、コンブは水洗い・カット・乾燥の工程を経て、干コンブの状態で漁協に納入する。ワカメに比べコンブの方が販売額はよいが、生産コストがかからないため、高齢または単身就業の場合はワカメが主になる。

養殖業は田老漁協内に11の養殖組合が地区ごとに組織されており、それぞれ養殖施設を所有し、養殖漁場の調整と決定、着工から販売までを管理している。漁業者側は、漁業組合に所属し、執行権が認められると養殖業を行うことができる。のちに塩蔵ワカメは「真崎わかめ」として田老の主力ブランドに成長していく。地先資源でもっとも収益が高いアワビは、現在でこそ生鮮出荷が主流だが、昭和30年代までは干鮑に加工して出荷していた。昭和55年からはアワビの稚貝を放流し、翌年からは稚貝中間育成施設が完成し、アワビの増殖事業が始まる。アワビは船上から箱眼鏡を用いて海中をのぞき、鈎で採捕する。こうした養殖業の展開や増殖事業と計画的な資源管理・地域ブランド化事業によって収益を確保し、厳しい遠洋漁業からの転換を図っている。

昭和46年からはラサ工業株式会社田老鉱業所の閉山を受けて、サケ稚魚の放流事業が始まり、初年度は30万匹が放流された。昭和48年には孵化場が完成した。サケ漁への設備投資が実を結び、次第に漁協が経営する定置網にサケが入るようになった。昭和51年には6・1万尾の大漁となった。さらに、昭和58年には35・7万尾4億4千万円、平成5年には50・9万尾7億円と、サケ事業は田老の漁業の主要な項目に成長していった。

東日本大震災を経て

東日本大震災では多くの組合員・港湾施設・漁業施設に甚大な被害を出した。組合員のうち48人が死亡し、すべての漁港の岸壁が破壊され、クレーンや倉庫・冷凍・加工施設も流失した。また地盤沈下も起きており、港に波が上がる状態が続いた。漁協が保有する定置網船も6隻のうち4隻が被災した。組合員が保有する漁船８８２隻が流出し、12億の損害が出た。その後の調査で81隻が残ったことが判明している。

震災後の漁業の動きを、漁協が毎月上旬に発行する『ＪＦたろうだより』で確認していきたい（表3）。平成23年4月には、共済事業のなかで漁獲共済としてワカメ・コンブを全損で請求し、5月中に限度額の8割が共済金として振込まれた。また同様に養殖施設についても5月中に共済価格相当額分が振込まれる予定となり、混乱のなかでも迅速に組合員の生活を補っている。6月には自家消費に限定した天然ワカメの採捕が行われていたが、船が不足しているため採取方法を磯刈りによるものと制限した。青年部は樫内に残った船を用いて共同採取し、漁協で加工している。天然ワカメのほかに天然コンブ・アワビ・ウニ・磯・タコなどが随時口開けがされる。しかし、全国的な漁船不足と、国の補助方針が定まらず、事前に着工すると「事前着工」とみなされ補助が下りないなど、船を確保するにも動きにくい状況であり、田老でも深刻な漁船不足になっていた。こうしたなかでも、アワビ漁などは船を乗り合い、採捕者には日当を出して、その売り上げを均等に組合員世帯に配分するなどの工夫がなされている。

表3　「JF たろうだより」掲載復興関連記事

発行年月	震災・復興に関する主な記事
平成23年4月	【漁獲共済】ワカメ・コンブを全損で請求。５月中に限度額の８割が共済金として振込まれる予定。 【養殖施設】全損で請求。５月中に共済価格相当額分が振込まれる予定。
平成23年6月	【天然ワカメ】天然ワカメの採捕が2日～8日。カマによる採取方法は磯刈のみ。 【販売】仮店舗営業再開。給油所の再開。
平成23年7月	【養殖施設】6月23日より樫内養殖組合から漁港内の瓦礫の撤去が始まる。 【寄贈】ヘルメット700個。 【調査】漁船等配備方針と保有漁船等調査
平成23年8月	【養殖施設】7月29日に樫内、31日に栃内・沢尻養殖組合、8月2日に青の滝・小港、3日に摂待・水沢の養殖組合がワカメの種付けを実施。
平成23年9月	【集会】平成23年度総会が2ヶ月遅れで終える。損益計画書、復興経営計画について報告および承認。
平成23年10月	【定置網】水揚金額9月末時点で前年同期比49%の実績。 【寄贈】民間基金「希望の烽火」よりフォークリフト2台、冷凍コンテナ5台が寄贈される。学校法人片桐学園より漁船3隻が寄贈され、共同利用船として使用する予定。
平成23年11月	【集会】第2回地区座談会でアワビ採捕・漁船の配分方法について協議（摂待地区集会所37名、グリーンピア三陸みやこ97名、青野滝集会所13名、樫内集会所19名、和野集会所19名、漁協３階会議室28名参加）。 【アワビ】11月4日、12月1日に口開けを予定。 【タコ】口開け。 【養殖コンブ】11月2日に養殖コンブ種苗の沖出しが行われる。 【定置網】赤島、佐賀部合わせて水揚昨年比8%増。5千443万円の実績。 【養殖施設】樫内2セット60台、栃内3セット73台、沢尻4セット91台の敷設が終了。真崎以南の養殖施設敷設完了となる。小港2セット53台、青野滝4セット87台、水沢1セット20台、摂待3セット55台が投入される予定。 【漁船】漁船（16尺）91隻を抽選により配布。
平成23年12月	【アワビ】1回目の口開けで2.5トンの実績。ただしアワビが極端に痩せている。1号品（活アワビ）15,500円、2号品（ヤセ・キズ）8,610円で入札される。 【サケ】速報　168,195kg（前年度比　−54.4%）、86,410千円（前年度比　−46.6%）。
平成24年1月	【磯もの】磯の口開けが1月24日から4月8日の間で18回を予定。
平成24年2月	【アワビ】共同採捕したアワビ水揚代金を組合員世帯を対象に均等配分。 【寄贈】三重水産協議会「中古漁船輸送プロジェクト」よりポリ玉1000個を寄贈される。
平成24年3月	【港湾】摂待・水沢・小堀内・小港のクレーンが完成。
平成24年4月	【養殖ワカメ】2年ぶりに養殖ワカメの収穫が始まる。 【港湾】樫内・田老のクレーンと照明施設が竣工。これにより組合内すべての漁港にクレーンと照明が配備される。製氷貯氷施設が完成。
平成24年5月	【養殖ワカメ】1,475トン（平成22年度比　−25.4%）、22,800千円（平成22年度比　+13.7%）の実績。 【サケ】2年ぶりの放流会。
平成24年6月	【天然ワカメ】6月2日に2年ぶりとなる天然ワカメの口開け。177名の出漁による51トンの水揚げとなった。 【漁船】定置網の第21赤島丸（19トン）が完成。 【港湾】共同倉庫（採介藻60区画、漁船漁業用60区画）・共同乾燥場（田老24区画、小港3区画）が完成。 【販売】岩手大学の協力でネット販売を検討。 【田老大漁まつり】2年ぶりとなる田老大漁まつりが漁協の事務所前で開催される。
平成24年7月	【集会】平成24年度通常総会をグリーンピア三陸みやこ体育室で開催。決算・剰余金処分案が承認。 【天然ワカメ】6月5日の口開けで今年度の採捕が終了。
平成24年8月	【ウニ】7月27日に2年ぶりとなる口開け。 【漁船】第21赤島丸、2011年教訓七郎丸（3.7トン）の竣工式が行われる。
平成24年9月	【市場】9月1日に田老魚市場の再開。 【天然コンブ】9月1日に震災後初の口開け。
平成24年10月	【天然コンブ】9月中に14回の口開け。
平成24年11月	【天然コンブ】水揚げ40,960kgで岩手県一となる。共同乾燥場の完成が漁期に間に合ったため。
平成25年2月	【港湾】定置番屋と倉庫、船舶給油施設が完成。
平成25年3月	【港湾】青野滝漁港の漁船陸揚げ用ウインチが完成し、全ての漁港で荷揚げ施設が復旧したことになる。
平成25年4月	【サケ・ますふ化場】3月15日に「摂待川さけ・ますふ化場」が完成。1,550万匹のサケ稚魚を生産することが可能となる。
平成25年11月	【育成】専業漁家以外の子弟でも漁業を学び働ける場として銀河養殖漁業協業体の発足。3名が参加。
平成26年3月	【アワビ種苗生産施設】2月26日に摂待漁港地内に復旧・完成。年間120万個のアワビ稚貝を生産することが可能になる。 【ワカメ加工場】2月7日に田老漁港にワカメの一次加工処理施設が完成。
平成26年5月	【育成】休止していた特任制度を再開。
平成26年10月	【港湾】樫内・摂待漁港内の転石発破作業を実施。
平成27年3月	【ワカメ加工場】2月28日に真崎わかめの二次加工施設が完成。

養殖ワカメは平成23年7月下旬から8月上旬にかけて種付けが行われ、翌年4月には2年ぶりの収穫となった。平成26年3月に第一加工場、翌年3月には第二加工場が完成し、主力ブランド「真崎わかめ」の販売が本格化してゆく。定置網も10月時点で前年度比49％、翌年には定置網船第二十一赤島丸が完成して、徐々に震災前の水揚げ量に回復していく。クレーンや荷上場・倉庫などの港湾に付属する水産加工施設の復旧とともに、平成24年9月には市場も再開する（写真3）。

写真３　震災後初の初売り
2013/01/04　撮影：伊藤 純

サケ・マスのふ化事業やアワビ種苗生産施設といった大型の資源管理施設の再建も平成27年には一段落している。こうした設備の整備は生産量を上げるだけでなく、特に加工については女性の雇用の場を創出している。一方で震災以前から続く後継者不足が前景化したことも否めない。漁協参事・総務部長の**藤井充さん**（昭和27年生、男性）は「被災前の組合員はおよそ６７０人から６４０人。被災前の平均年齢は65歳。田老漁協地区外に家を建てる人が出てきて、組合員の資格がどうなるか、現時点では不明だ。現在の組合員は６１４名。組織は数が力になる。真崎わかめは数が減れば見向きもされなくなる」と危機感を抱いている。経営体数も震災前が94であったのに対し、平成26年度には70と減少傾向にある。復興過程における田老の漁業は、新規事業を立ち上げるような方針転換はせずに、豊富な海洋資源を活かした震災以前からの生産体制を目指し進んでいるといえよう。

8　田老の復興とその課題

新たな防潮堤建設

震災後、「防潮堤による油断だ」「防潮堤への過信」などと報じられ、防潮堤の是非について田老内外の人びとが議論を展開している。**田中和七さん**（前出、２０１４年４月22日取材）はこれまでの防潮堤と土地利用について次のように述べている。

昭和８年の津波のときに、防潮堤を青砂里まで直線で作る計画があった。だけど水門を作る技術もなかったから、「へ」の字型になった。だから、青砂里に住んでいる人たちは「田老の人たちは自分たちを見捨てたんだ」って、消防団とかを辞める人もいた。そんな時代があったけど、そういう変な壁は時間や時が解決してくれた。

野原にはもろこし畑・キビ畑とかがあって、水も涌いて雨が降るとすぐに水溜りになって洪水になった。そこは三陸鉄道が通ったときに出た石の捨場になって、わかめとか昆布を干すのにちょうどよい場所になった。そのうちに浜小屋ができて、漁をする人たちがそこに住むようになって、次第に住宅ができるようになった。１軒が２軒、２軒が６軒のように増えていたった。坪単価が３千円だったのが、坪１万円になった。そのうちに整地して住宅用に売り出された。宅地化が進んだのは昭和40年代半ばぐらいで、震災前は坪５万円ぐらいだった。昭和８年の津波が来なかった沢沿いにあった青砂里とか、乙部の山際で井戸水を汲んで生活していたような人たちが、水道も通る野原地区に降りてきた。結果的には３軒ぐらいを残してみんな下がってきてしまった。街の分家の人たちも入ってきた。浜をやっている人たちは重い船を上まで持ってきてというよりは、近くに住むほうが楽だったのもある。浜小屋といっても、仮眠室も応接室もあったりして、普通の家よりも良いところもあった。

このように振り返るのは田中さんのみではないが、野原地区はその名が示すように雑穀畑で道路より低地にある畑地であった（写真４）。それが、トンネル工事の土砂を利用した埋め立てと防潮堤建設によって宅地化が進んだ。表５は住民基本台帳をもとに作成した昭和34年から平成25年までの大平・上町・中町・下町・川向・乙部地区の世帯数

をまとめたものである。第1防潮堤に囲まれた上町・中町・下町・川向は被災前までは横ばいないし減少傾向であった。一方第2・3防潮堤と第1防潮堤に挟まれるように位置する乙部・大平地区は、昭和40年代半ばから急激に世帯数が増加している。これが埋め立てと防潮堤建設によって増加したとは言い切れないが、大きな要因であったのは数字を見る限り明らかであろう。昭和40年代には養殖ワカメ・コンブが始まり、漁業形態も遠洋漁業からワカメ・コンブを中心とした養殖業に移行していく過渡期でもあり、乾燥場として利用するのに適していたという事情もある。

宅地化と世帯数増加により昭和63年には乙部自治会が乙部1・乙部2自治会に分割、平成3年には大平地区も同様に分割しており、社会生活においても大きな変化となった。

写真4　昭和8年航空写真
出典：内務大臣官房都市計画課編『三陸津波に因る被害都町村の復興計画報告書』(1934) より「第三十六圖　岩手縣　田老村　昭和八年六月十二日撮影　縮尺五千分ノー

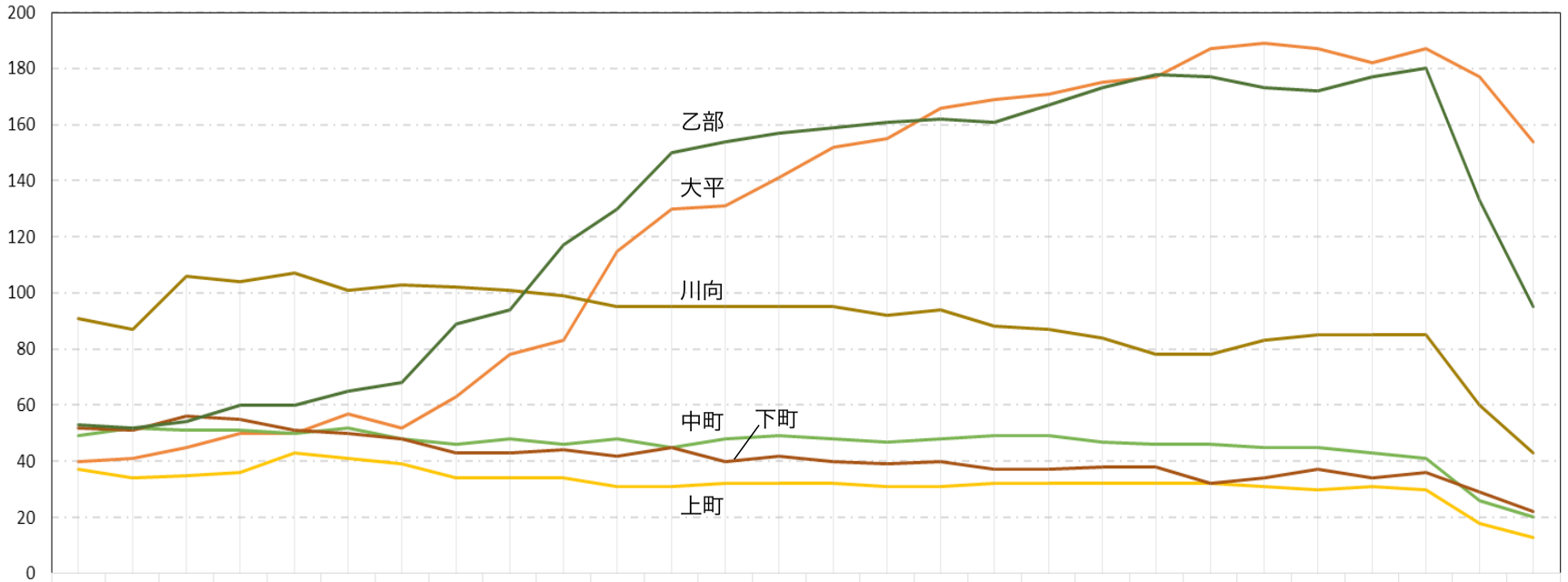
東日本大震災による津波を防ぎ切れなかった防潮堤は、さらに高くなり14・7メートルで施工される。その外側は条例により第1種区域での住宅の建築は不可となっており、漁港や水産加工施設が建設される。これまであったように、またこれからも大津波は再び田老を襲うであろう。防潮堤によって避難時間が確保できる一方で、一度それを超えるほどの波が来た場合、今回と同じように町が壊滅する可能性を常に含んでいる。その中で、人命と財産を守るための方策を臨海の町として考え続けていかなければならない。これまでの避難経験をみて明らかなように、津波から一刻も早く高いところへ逃げるという、シンプルかつ最も多くの人命を救うことになった基本原則を忘れないようにする必要があるだろう。

震災遺構としてのたろう観光ホテル

津波防災に関する意識向上が求められる中で、震災遺構が注目されている。震災遺構とは被災の痕跡を残す構造物・建築物で、次世代や経験を共有していない人びとに対して、震災の大きさを知らしめるものである。田老の場合は、早くからたろう観光ホテルを震災遺構として保存する動きがあった（写真5）。6階建てで、4階まで浸水し、1・2階は骨組みを残し流失した。宮古観光文化交流協会による「学ぶ防災」プロジェクトが開始され、平成24年4月から防潮堤と合わせた被災地ガイドが始まった（写真6）。ホテルでは6階から撮影された津波の映像を上映している。「学ぶ防災」による観光客は、平成25年度で3万人弱が来訪しており、岩手県内ではトップクラスである。ガイドの1人は「田老は他の町と違って、堤防やホテルのように震災の形が見えるので、震災の痕跡をわかりやすく伝えられる」と述べており、震災遺構を活かした観光と防災教育が期待されている。

たろう観光ホテルは平成25年11月には、市が申請を繰り返してきた国費保存が初めて認められ、震災遺構第1号として保存が決定した。国の交付金により初期保存工事が行われ、土地と建物買収費用と維持管理費は市が負担する。維持費は年間1千万円と試算され、入場料で

表５　世帯数の変遷（大平・上町・中町・下町・川向・乙部）住民基本台帳をもとに作成



	1959年	1961年	1963年	1965年	1967年	1969年	1971年	1973年	1975年	1977年	1979年	1981年	1983年	1985年	1987年	1989年	1991年	1993年	1995年	1997年	1999年	2001年	2003年	2005年	2007年	2009年	2011年	2013年
大平	40	41	45	50	50	57	52	63	78	83	115	130	131	141	152	155	166	169	171	175	177	187	189	187	182	187	177	154
上町	37	34	35	36	43	41	39	34	34	34	31	31	32	32	32	31	31	32	32	32	32	32	31	30	31	30	18	13
中町	49	52	51	51	50	52	48	46	48	46	48	45	48	49	48	47	48	49	49	47	46	46	45	45	43	41	26	20
下町	52	51	56	55	51	50	48	43	43	44	42	45	40	42	40	39	40	37	37	38	38	32	34	37	34	36	29	22
川向	91	87	106	104	107	101	103	102	101	99	95	95	95	95	95	92	94	88	87	84	78	78	83	85	85	85	60	43
乙部	53	52	54	60	60	65	68	89	94	117	130	150	154	157	159	161	162	161	167	173	178	177	173	172	177	180	133	95

第一防潮堤完成（58年）
第二防潮堤着工（62年）
第二防潮堤完成（65年）
第三防潮堤着工（73年）
第三防潮堤完成（78年）
東日本大震災（11年）

写真５　たろう観光ホテル

写真６　学ぶ防災

補填できるかが懸念されている（『宮古市議会だより』平成25年11月）。

人口の流出

長期化する仮設住宅での生活は、明らかに住民の不安と重圧を増大させている。仮設住宅の入居者の減少は、一人一人の自立再建を意味する。震災から４年が経過しようとするところで、グリーンピア敷地内の仮設住宅およそ１４０戸に空き家ができており、入居者もおよそ７００人に減少している。自立再建する人びとが増え、震災以前の生活が回復していく一方で、仮設住宅に入居する人びとにとっては、取り残されてしまうという孤独感を感じることにつながる。個人の生活再建と地域社会の再建のスピードの差が露呈しつつある。こうした仮設住宅での生活の長期化は、集団高台移転よりも自立再建を選択する人びとの増加に直結し、結果的に田老からの人口流出の一因となっている。

住民基本台帳（毎年10月１日現在）をもとに比較すると被災前の平成22年では１千５９３世帯から、平成25年には１千３４８世帯、人口は４千４６２から３千４８７と激減している。田老の場合、宮古市街地への通勤や宮古病院の利便性から、崎山の新興住宅地で家を構える人が多い。例えば、前出の**高屋敷吉蔵・トシ夫妻**は病院に通う関係で崎山の地を選んだ１人である。

（吉蔵さん）復興住宅も待っていられないし、病院に通わないといけないので、平成24年の12月30日に崎山に来た。

（トシさん）お父さんはさみしいさみしいっていうけどね。根っからの田老育ちだから。

（吉蔵さん）そこらへんに田老の人たちが集まる田老団地があるけどね。

（トシさん）うちは来たばっかりで、ここは崎鍬ヶ崎という地名だけれども、一緒に活動して、一緒にやっていこうと集会とか自治会に誘ってくれて、ありがたいと思っている。近所の人たちが「あとで紹介するねー」って声をかけてくれて、ありがたい。孫たちもいるけど、田老を離れたくないって「学校は田老に」ということが条件だった。学区を越えることを申請して現在は送り迎えをしている。

崎山のような新興住宅地はこうした自立再建を選択した人びとの受け皿となっている。しかし、それぞれ事情があるなかで田老を離れるためその複雑な心情を抱きながら、震災後の人びとの移動が行われている。

新たな住宅市街地の形成と高台移転

向山・荒谷間を通す国道45号線は嵩上げされて、一区画山側のルートに切り替えられた。市街地も2㍍の嵩上げ工事が行われ、１８０戸分の宅地が整備される。野球場の再建と道の駅たろうの移転が決定し、跡地利用も進んでいる。災害公営住宅への入居は平成27年11月から始まり、同年11月22日には宅地造成や災害公営住宅の完成を記念する「まちびらき」があった。災害公営住宅は鉄筋コンクリート造を市街地に、木造は高台で建築され、合わせて１１１戸が完成する予定である。また乙部の山林を切り崩し、海抜40～60㍍の高台に１６１区画の宅地が整備され、「三王団地」という名称に決定した。宅地整備面積約25㌶となっている。区画は希望する宅地面積に応じたグループに分かれ、希

望する宅地を選ぶことができるが、希望が重複した場合はくじ引きとなり、必ずしも希望する宅地を選択することができるわけではなかった。

今後、田老は三王団地と市街地に生活の中心が移行していくと予想される。今後の課題の一つとして、各神社の運営・管理の問題がある。例えば、もともと日枝神社は大平・小林・堺町・田中・田の沢・上町・中町・下町・川向の人びとが氏子となっていた。震災以後は氏子総代が中心となって辛うじて護っている状況であり、熊野神社や出羽神社も同様である。震災以前のコミュニティが解体され再編が進むなかで、地理的にも離れてしまう高台移転後はどのように運営がなされるのか。また、高台移転は生活の中心地が新たに形成されることになり、人口流出する一方で、町の面積は拡張し、交通弱者にとって生活不安は解消されたとはいえない。田老の生活と町づくりは、まだ始まったばかりといえる。

心の復興

写真7は平成25年1月の熊野神社の元旦祭の様子である。熊野神社の氏子が集まり祭典が開かれ、その後直会となるが、震災以前の賑わいは取り戻せていない。先述のとおり、氏子組織は厳しい状態にあり、今後も不透明なところが多い。氏子総代の1人は「お礼を用意しても、氏子がバラバラのため配るのも大変。聞いて歩くのも売り歩くのも。住所を確認するのも大変だし、移転先の神さまと付き合うのかもしれないから今後は厳しい」と不安を口にする。初詣参拝者の数も減少している。日枝神社・熊野神社・出羽神社の合同祭「田老大漁まつり」の船引行事は、平成27年5月24日に復活したものの、震災以前の活気が取り戻せたとはいえない。

写真7　熊野神社元旦祭
2013/01/03　撮影：伊藤 純

神社の行事に限らず、個人の家の行事も長期化する仮設住宅での生活で中断している家が多い。正月行事をみてみると、震災以前では門口や玄関、釜戸に年縄を結び、歳徳神を迎えていたが、流出を免れた家々のほとんどでは行われていたものの、仮設住宅ではほとんど見られなかった。また、神棚には七福神や鯛や巾着といった縁起物や家業に関わる絵柄のお飾りを貼って1年を祈願していた。狭い仮設住宅では神棚を持たない家も多く、震災以前から行われていた文化伝統を当然のように継承できる環境ではない。

亡くなった人々への慰霊のかたちも多様化している。毎年3月11日には「NPO立ち上がるぞ宮古市田老」によるメモリアルイベントが行われ、多くの報道関係者が訪れている。震災の記憶は人それぞれであり、震災後、基礎だけになった住宅跡地の多くに行方不明者を偲ぶ花が供えられていた。3月11日には慰霊碑に手を合わせる人や、流されてしまった家の跡を訪れ、花を供える家族の姿が見かけられた。行方不明者の家族にとって、故人を偲ぶ場は墓や慰霊碑とは限らず、たとえ家屋がなくなっても一緒に過ごしたかつての家が記憶の場所なのかもしれない。その場も、土地を手放し、復興と跡地利用によって、以前の景観を思い出すこともできないほど様変わりしてく。住宅が建設され、生活が安定していく中で、文化の継承や死者・行方不明者に対する鎮魂のかたちを改めて考える時期が訪れている（写真8）。

写真8　人それぞれの鎮魂のかたち
2013/05/04　撮影：伊藤 純

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域

第2章　避難生活と心のケア―田老での聞き取り調査から―

神田竜浩

はじめに

平成23（２０１１）年3月11日午後2時46分に発生した巨大地震は、地震の被害のみならず、直後に起きた津波により甚大な被害を与えた。この項では、田老地区の住民の方々の震災直後の避難の様子や、避難所での生活、仮設住宅での暮らしについて聞き取り調査をおこなったものをまとめた。なお、聞き取りをした方の氏名の後に括弧書きで生年と震災前の居住地区について記載した。

田老は、津波の常襲地域であり、明治29（１８９６）年や昭和８（１９３３）年の三陸地震でも津波により壊滅的な被害を受けており、過去の津波の伝承や津波の脅威を後世に伝える石碑が至る場所に残っているように、住民の防災意識は非常に高かった。

現在の住人の父母や祖父母は、明治や昭和の津波を実際に体験していたり、津波の恐ろしさを親から聞かされており、現在の方々も当然ながら小さい時から津波の話を聞かされてきた。佐藤チヤさん（昭和20年生、野原）は、避難道具や服などを枕元に置いておき、いつでも逃げられるような準備をしておくように親に言われたという。山本松蔵さん（大正15年生、荒谷）も「高いところに逃げろ」「火事を起こさないように焚き火には鍋をかぶせろ」というように、津波の時の心構えを小さい頃から聞かされていた。信夫安美さん（昭和2年生、下荒谷）は、「地震があったら逃げろ」「地震があったら井戸を見ろ。水が無くなったら津波が来る」「川伝いに逃げるな、橋を渡るな」というように避難の際の教訓を教えてもらった。高屋敷ノブ子さん（昭和6年生、館ヶ森）は、「地震の後は家に絶対に戻ってはいけない」「川の水が引いたら危ない」という話を母親から聞かされた。これらの津波の伝承や教訓はその一例に過ぎないが、多くの方から話を聞くことができた。

また、田老には明治や昭和の際の津波の供養塔や慰霊碑が残されている。田老には昭和三陸地震津波の後の昭和９（１９３４）年に館ヶ森の常運寺に建てられた「三陸大海嘯溺死者慰霊塔」と田の沢の田老第一小学校脇の建てられた「大海嘯記念碑」がある。田老第一小学校脇の碑の表面には「一、大地震の後には津浪が来る／一、地震かあったら此処へ来て一時間我慢せ／一、津波に襲れたら何処ても此の位の高所へ逃けろ／一、遠くへ逃けては津浪に追付かる／一、常に近くの高い所を用意して置け」という教訓が書かれている。この背面には「昭和八年三月三日午前二時三十分上下ニ動揺スル強震アリ続イテ三時十分頃ヨリ大音響ト共ニ大海嘯ノ襲来アリテ午前三時二十分頃被害最モ多シ／本村ノ流失戸数五百五戸　溺死者九百十一名　負傷者百二十二名／損害見積金二百九十二万八千七百五圓／本碑は東京朝日新聞社読者ヨリ寄託セラレタル義捐金ヲ同社ニ於テ罹災各市町村ニ分配セル残金ヲ更ニ本碑建設費トシテ寄贈セラレタル金員ヲ以テ建設シタルモノ也／昭和九年三月　下閉伊郡田老村長　関口松太郎　誌」とある。昭和8年の津波による被害と石碑建立の経緯が記され、後世に津波の教訓を伝えようという思いが伝わってくる。

田老では昭和8年の津波の日である3月3日午前中に、防災訓練を毎年行っている。地区ごとに避難場所まで避難する訓練を行っているが、仕事に従事している男性の参加率は低いものの、女性の参加率は高かった。また、東日本大震災が発生した平成23年3月11日の2日前の9日午前11時45分にも、マグニチュード7・3の地震が起きており、この時も多くの住民が避難場所まで自主的に避難を行っていた。こういった点にも日頃の防災意識の高さを窺うことができる。

また、〝万里の長城〟と呼ばれた世界一の規模の防潮堤を整備し、昭和35年（１９６０）のチリ地震では他地域では津波の被害が発生しても、田老では津波の被害は皆無だった。

しかし、平成23年3月11日14時46分に三陸沖東南東約１３０キロ付近を震源とする、後に東日本大震災と呼ばれるマグニチュード９・０の巨大地震が発生し、約35分後の15時26分頃に高さ８・５メートル以上の津波が田

老の街を襲った。前述のような高い防災意識や巨大防潮堤などの防災拠点があったにも関わらず、その想定を越える巨大津波は田老地区に死者181人、家屋倒壊数2千996棟（全壊722棟、半壊647棟、一部破損118棟、床上浸水1千262棟、床下浸水247棟）という甚大な被害を及ぼした。

次に、田老の住民の避難の様子、避難所の生活、仮設住宅の暮らしなど聞いた話をまとめることにしたい。筆者はグリーンピア三陸みやこの仮設住宅を訪ね、平成24年、25年の2年間に田老の住民30名の聞き取りをおこなった。平成24年の調査では、避難の様子、避難所の暮らしなどの話が多く、25年の調査では仮設住宅での暮らし、そこでの問題などを聞くことが多かった。あくまでここで聞いたごく僅かの話の範囲ではあるが、それらについて震災発生時から時系列ごとにいくつかの項目に分けて見ていくことにする。

1　地震発生と避難

まずは3月11日の巨大地震発生時の様子を数人の話から見ていきたい。

佐藤チヤさん（前述）

外出して家に戻る直前に地震に遭った。地震が一旦収まると近所の住人に声を掛けながら家に戻ると、その日はたまたま仕事が休みだった夫が家におり、夫と共に車で避難することになった。夫はすでに車に毛布を積み、避難の準備をしていた。国道45号線を北上し、乙部から坂を登り始めた時に後ろを振り返ると黒い波が見えた。そして、電線がバンバンと音がして火花が散るのを見た。

佐藤夫婦は重津部の道の駅たろうに避難し、そこで一夜を過ごした。その夜は、道の駅の食堂の冷凍食品を分けてもらい、防災センターの畳の上に避難した人たちが身を寄せ合って寝た。道の駅は食べ物も少なかったため、夫婦は翌日グリーンピアへと移動した。

山本嘉七さん（昭和13年生、荒谷）・**靖子さん**（昭和17年生、荒谷）

震災前は荒谷で嘉兵衛屋商店を営んでおり、地震の時は2人とも店にいた。靖子さんは地震が来たので逃げなくてはならないと考え、ストーブの火を止め、2階に上がった。ハンドバックに懐中電灯を入れて1階に戻ると、店の品物が床の上にたくさん落ちていた。靖子さんは嘉七さんに避難を勧めたが逃げないので、1人で中学校のグランドまで向かった。途中で近所の人たちと一緒になり、ともに中学校のグラウンドに避難した。一方、嘉七さんは店の前に立ち、店の前を走る国道45号線の様子を眺めていた。震災直後は車もほとんど通らず、警報のサイレンだけが響いていた。しばらくすると、漁協の職員が2人走ってきて「津波が来た」と叫びながら中学校へと走って行くので、嘉七さんもその後を追って中学校まで避難した。中学校の手前で一息ついた時、後方で砂煙が見えたので、赤沼山へと逃げた。階段の途中で中学校の方を見ると、グラウンドに瓦礫がなだれ込む様子が見えた。赤沼山で嘉七さんは靖子さんと再会する。靖子さんは中学校のグラウンドが危ないと言われ、そこから中学校の裏山に登り、津波が収まった後、尾根伝いに赤沼山へと移動し、そこで嘉七さんの姿を見つけることができた。2人は日暮れ前には山を下りたいと思い、常運寺から山を下り、小学校の体育館に避難した。

山本文雄さん（昭和27年生、野原）

山本さんは市の職員で、道路を維持する仕事についていた。震災の時は田老北部の工事現場から車で事務所に戻るところだった。山本さんは地震には気づかなかったが、三王閣を過ぎた時、空が黄色いような気がしたという。三王閣の坂道を降りると水門が閉まっているのが目に留まり、事務所のシャッターが大きくゆがんでいるのを見て地震があったことに気づいた。防潮堤に戻って水門が閉まっていることを確認した。防潮堤の上に上がって海を見ると、海はたちまち水位が上がり始め、港の小屋が波によってバキバキと音を立てて壊される様子を見た。急いで防潮堤を降りると、遠くに黒い波が見えたので、車に戻り三王閣へ向かって坂道を登り、三王閣の駐車場まで避難した。

津波警報が発令されると消防団が必ず水門を閉めており、聞き取り調査でも数人の方が水門を閉める消防団の姿を目撃している。

丸山幸子さん（昭和17年生、川向）

丸山さんの家は防潮堤の外側にあり、津波の危険地帯に住んでいるということで、雑誌の取材を受けたこともあった。この場所には丸山家の他にも5軒の家があった。丸山さんの家の前には防潮堤の水門があり、前述のように津波警報発令時には消防団が来て必ず門を閉めた。防潮堤には階段もあり、登ることもできたが、津波警報が発令されると昼夜を問わず、水門が閉ざされる前に防潮堤の内側に避難するようにしていた。地震の時、丸山さんは家の2階におり、今までにない強い揺れを感じて津波が来ると思った。丸山さんは即座に何も持たずに徒歩で避難した。普段から逃げる時は高い所に登ろうと考えていたが、人がいない場所に避難すると孤立してしまうため、総合事務所まで歩き、赤沼山に登った。赤沼山に登る時に堤防に波がぶつかる様子を見た。山上から中学校のグラウンドに家や車が押し流される様子に驚いた。赤沼山に避難した住民を常運寺が受け入れてくれたので、その晩は寺の本堂に泊まった。

以上のように、ここでは田老の数人の方の話だが、実際の避難の様子を取り上げた。聞き取りの対象は女性が多かったということもあるが、日頃の防災意識について指摘したように、女性の方が地震の際は率先して避難した人が多かったようだ。

また、実際に避難した方々の話を聞くと、「地震が来たので逃げなくてはならないとは思ったが、実際に津波が襲うとは思わなかった」「防潮堤があるので大丈夫だと思った」という話が多く聞かれ、この日も防潮堤の威力を信じ、本当に津波が来るのか半信半疑で避難したという人が多かったようだ。

2　避難所での生活

4月1日にグリーンピア三陸みやこが避難所となるまでの間、家族・親戚等の家に身を寄せた人たちのほか、多くの人たちは常運寺、田老第一小学校、宮古北高等学校で避難生活を送った。この項ではまず施設ごとの様子を見ていくことにする。

常運寺

高橋アイ子さん（昭和5年生、川向）は、寺に避難し1週間ほど庫裏で避難生活を送った。地震の晩は毛布も少なく座布団を敷いて寝た。数日後、荒谷で山火事が起こり、寺に避難にしていた半分くらいの人が宮古北高に避難していった。高橋さんは震災の1週間後に、青森にいる次男のもとへ移っている。聞き取りをおこなったうち数人が常運寺に避難したが、山火事の際に北高に移っており、3月下旬の様子を聞くことができなかった。

田老第一小学校

佐々木ハルさん（昭和16年生、上荒谷）は、小学校の体育館に避難した。荒谷の多くの住人はこの小学校に避難していた。体育館は寒かったが、小学校の先生が窓のカーテンを外してくれたので、それにくるまって眠った。その日は神田の農家の方からおにぎりの差し入れがあり、それをみんなで分け合って食べた。数日後、体育館から教室に移り、ここでは毛布も手に入り、ストーブもあって暖かった。飲用水は最初は校庭の側を流れる沢水を飲んでいたが、そのうち飲用禁止とされた。飲用水は自衛隊の支援で水のタンクで賄った。衣類の支援も多くあった。3月下旬には、電話が設置され、遠方にいる子どもたちと連絡もできるようになった。風呂は小田代山荘にバスで連れていってもらい、2回入った。普段は水が不足していたため、水は使えず消毒液を使い、歯を磨くこともできなかった。

加藤安夫さん（昭和17年生、荒谷）の話では、トイレが大変だったが、3月下旬には水道が復旧し、校舎の水洗トイレが使えるようになった。

小学校の近くの総合事務所に診療所や支援の医師がおり、薬も手に入るようになった。小学校の教員が家にも帰らず、避難所の運営に当たっていた。

宮古北高等学校

前述の**山本嘉七さん・靖子さん**夫婦は、小学校に避難していたが、3月12日に山火事が発生した際、小学校が燃える危険があるという噂を聞き、三陸鉄道の線路伝いに避難し、宮古北高等学校に移動した。当時、高校の体育館は遺体安置所となっており、最初は格技場に泊まることになる。山本夫婦はその後同窓会館の2階の和室に移ることになった。この頃になると、部屋ごとに連絡担当者を決め、班長会議が開かれるようになる。この会議では、避難所での要望を出したり、市の職員から現状を聞くことができた。また、高等学校には看護師もいたため、薬の相談もできたという。電話は3月中旬に緊急電話が取り付けられた。物資の支援では、まずは高校の近所の方による支援があり、次第に物資が届くようになる。米軍のヘリによる物資の搬送もあったようだ。さらに、自衛隊による風呂の提供もあったという。

グリーンピア三陸みやこ

4月1日になると、グリーンピアが避難所となり、その他の場所に避難していた人々はすべてグリーンピアに移ることになった。グリーンピアでは、高齢者や病気の人は宿泊棟、その他の人たちはアリーナで生活することになる。

当初、アリーナに入り、途中から宿泊棟に移った**佐々木ハルさん**（前述）の話では、アリーナでは毛布1枚だけですきま風があって寒く、ストーブの火も効かない状態だったという。夜は咳の音や子どもの泣き声が聞こえ、寝づらい夜が続いた。高齢のため、数日で佐々木さんは宿泊棟に移ることになったが、夫婦2組で宿泊棟の和室に入ることになる。風呂は部屋ごとに交替で入り、アリーナの外に設置された洗濯機で洗濯をすることもできた。朝の出勤前の時間は混み合っていたようだ。最初は干す場所に限りがあったが、その後、スケート場に物干し竿が置かれたという。

他の方の話では、和室に入ることができたが他の家族と一緒という状況の中で気疲れを感じたと言った声も聞かれた。また、喫煙者のための喫煙場所も設けられた。ここでは、喫煙仲間ができ、いろいろな情報を耳にすることができたという話もあった。

また、避難時にペットを伴って逃げた方の話を聞くこともできた。**牧野正博さん**（昭和10年生、館ヶ森）は猫とともに車でグリーンピアに避難した。避難所に猫を伴うわけにはいかなかったため、猫を車の中で飼った。そして、仮設住宅に移るまでの間、毎日トイレや餌のために猫のもとに通った。猫は車の中で生活したため、運動不足で太ってしまったという。そこで運動をさせるために車の外で遊ばせたが他の人の目を非常に気を遣ったようだ。避難所では犬と一緒に避難した人もあり、犬はトイレの横に繋がれていたという。その後、グリーンピアではクラブハウスにペットと一緒に寝泊まりできるスペースが設けられるようになった。

一方、今回の震災で家屋が無事だった方の話を聞くことができた。家の食料が尽きてもガソリンが手に入らないため車で買い物にも行けなかった。そこで役場と相談した上で、避難所に食べ物を分けてもらいに出かけた。しかし、「被災していないのに」と言われることがあり、肩身の狭い思いをしたという。そこには被災者とは違う苦労があった。

3　仮設住宅での生活と心のケア

5月にグリーンピア内に仮設住宅が完成し、避難所での生活を終え、6月1日から仮設住宅に移ることになる。平成24年の調査の際には、仮設住宅に入居した方々からは、「体育館やアリーナでの生活を考えれば、ここは天国だ」といった感想が多く聞かれた。女性たちの中には集会所で手芸などのサークルを作って活動したり、時間があれば集会所を訪れて話をする人も多い。一方で、翌年の調査の際には、仮設住宅ではここでの生活になじめなかったり、将来に対する不安などから、

引きこもり、鬱などさまざまな心の問題も起こった。ここでは、さまざまな立場から被災者の悩みに寄り添う活動をおこなった方々の話を紹介する。

民生委員を務める**小林学さん**（昭和22年生、館ヶ森）は、震災の当時、田老の民生委員の副会長をしており、近隣の高齢者の家を周りワゴン車に乗せて往復し、安全な場所まで避難させた。小林さんは津波到達前に6世帯を回ったが、「声を掛けたのに逃げずに亡くなった人の事が悔やまれてならない」とその時の無念さを語っている。しかし、身を捨てるのではなく、自分が助からなくては他の人が助けられない、まずは自分の命は自分で守ることが大切なのだと説いていたのが印象的だった。民生委員は震災以降、それぞれの委員の管轄地区の住民の生存状況を避難所を回って聴取し、確認を行った。その他にも被災証の発行、物資の需給の代行、被害状況調査、アンケート調査、見舞金の配達など多くの仕事があった。その間に会議を開き、報告を聞いたり、各委員との情報交換を行わなければならなかった。生存確認を行うといっても、震災直後は道路も復旧しておらず、大変な苦労があったという。また、被災しなかった人たちが支援物資をもらうと非難を受けて大変だったため、物資の需給を代行したこともあった。民生委員は被災せずに残った家と避難所、のちに仮設住宅というように、受け持ちの地域に加えて、仮設住宅の2か所を回らなければならなくなった。そのため、委員の担当の再分担を行うことになった。小林さんの担当地域では被災しなかった家が約20軒、仮設住宅が約30軒だった。その間に民生委員の会長が亡くなり、小林さんは会長代行となり、その年の秋には会長に就任している。これらの活動は翌年まで続いた。民生委員への相談は、最初のうちは物資が届かないといったものが多かったが、時間を経るにつれて、隣近所に対する苦情へと変わり、物が揃うようになると家を建てたいといった要望へと変わっていったという。また、高齢者は団体生活を苦手とする人が多く、中には欝病を発症したり引きこもりとなる人もあった。また、あまり出歩かないために歩行困難となるなど、さまざまな問題が起こった。グリーンピアの仮設住宅では平成25年までに2人の自殺者があったという。民生委員の活動は、震災直後の避難生活の把握、支援などの活動から、1年経つと被災者の心のケアの問題へと移っていた。

傾聴ボランティアの活動を行う**三浦章さん**（昭和18年生、宮古市在住）は、共感と受容、直してあげるのではなく、話をきいているうちに問題が解決するという、傾聴ボランティアの活動の精神に共感し、宮古市の傾聴ボランティアの団体に参加した。平成23年9月に市内の仮設住宅の談話室や集会所など6か所で傾聴サロンを開いた。当時は、被災者がサロンを訪れても、うつむいたままだったという。三浦さんら傾聴ボランティアのスタッフは、それに寄り添い、自分の口から話が出てくるのを待った。その年の冬になると、女性たちは冬の防寒対策の話題などを話すようになり、生きていくための話を聞くことができるようになったという。傾聴サロンの利用者の多くは女性で、男性は女性に圧倒されて帰ってしまう。三浦さんは女性は強く、男性は弱いという。被災者と顔なじみになると、だんだんと話ができるようになり、話し声もだんだんと大きくなる。それから、サロンにも大勢の人が集まるようになり、次第にひとつのフロアで聴く接し方に難しさを感じるようになった。その頃になると、話題は高台移転や住居の嵩上げの話題が出るようになる。経済力がある人は仮設住宅から出ていくが、行きたくても行けない人は将来が見えず、取り残されているという疎外感を受け、自分を責める人があった。こういった問題は男性が多く抱えており、三浦さんらはグリーンピアに相談し、施設内に「男の談話室」を開設した。そこには、囲碁・将棋・麻雀を用意し、それらを通してゆっくりと顔を合わせ、話を聴いていく。活動当初の利用者は1日4、5人程度で、娯楽にもあまり手をつけなかったという。三浦さんはこの活動の中で、利用者は総体的に見て落ち着きを取り戻してきたように感じる。しかし心の悩みは人それぞれで、まだまだ悩みは多く、ちょっとした言葉に傷ついてしまい、欝病になってしまう人も多いと語る。三浦さんは

仮設住宅がある限り活動は継続していきたいと語っていた。

被災者の中には民間信仰であるイタコの口寄せによって悩みに取り組んだ人もあった。**高嶋キヨさん**（昭和21年生、乙部）は、震災で夫を失った。高嶋さんはどうして夫は避難しなかったのか疑問を持ち続けていた。そのような時にイタコに拝んでもらった友人の勧めもあり、磯鶏のイタコを訪ねた。イタコの口寄せでは、夫は逃げるのが間に合わなかったと言われた。高嶋さんは夫の墓は大好きだった海の見える場所に建て、夫に会いたくなったら、お墓に行くことにしている。だが、切ない時にはイタコの声が聞きたくなり、これまで2度拝んでもらった。イタコの言葉を聴くと気持ちが楽になるのだという。イタコには夫に会いたくなったらいつでも来るように言われているという。

冬の時期に各地域の神楽宿を回ることで知られる黒森神楽も、震災後に活動を再開した。震災後の黒森神楽の活動について、保存会長の**松本文雄さん**（昭和24年生、和野）に話を聞くことができた。黒森神楽は震災後の6月25日にまず権現舞を舞う機会があった。その翌年の冬の北廻り巡行の際には、海に向かって鎮魂の気持ちを込めて神楽念仏を行い、それから神楽宿に入ることにした。かつての津波の際にはどうしていたのかわからないが、自分たちがお世話になった宿の人たちは神楽の音を聞いてきっと喜んでくれるはずだ、と信じている。黒森神楽の巡行の神楽宿は年々減少の傾向にはあるが、あくまで時代の流れであり、津波のためではないと松本さんは考える。黒森神社の神である権現様が泊まる神楽宿は、かつては民家だったが、集会所が当てられることも増えている。震災前は神楽宿に泊めてもらうこともあったが、震災後はなるべく神楽宿に泊まらないようにしている。しかし、それでも神様を家に招きたいという人もあり、山田町山ノ内や宮古市重茂では神楽宿に泊まった。平成25年の南廻りの巡行の時には、大槌や浪板など10か所くらいで、家が津波で流されてしまったために門打ちができなかった。今まで2日かかって回っていた場所も1日で回るようになった。松本さんら黒森神楽の神楽衆はそれでも廻り神楽を続けている。松本さんによれば、震災後、被災した人たちは交流も少ないせいか、神楽を存分に楽しんでくれ、非常に盛り上がるのだという。巡行で訪れている場所は、神社の祭を再開できていない土地も多く、廻り巡行がみんなで集まれる機会となっているのかもしれないと松本さんは考えている。

ここで紹介することができたのはほんの一握りの事例に過ぎないが、被災者に寄り添う活動と言っても、行政の活動である民生委員もあれば、民間活動である傾聴ボランティア、さらには民間信仰であるイタコ、民俗芸能などさまざまなものがあり、それぞれの立場で被災者の心のケアに務めた様子を確認することができた。

最後に

筆者が調査をおこなったのは、平成24年、25年の2年間に過ぎず、その後は徐々にではあるが田老の町の再開発も進み、高台住宅が完成して移転が始まり、嵩上げ住宅ができはじめた。一方、依然として仮設住宅での生活を続ける人たちがおり、ここで取り上げた問題もまだ続いていると思われ、また、新たな問題も生まれているのかもしれない。

そのことから言えば、この項は震災直後から平成25年までの3年間における田老の方々の生活の過程のほんの一部分について描いたに過ぎない。平成24年の聞き取りでは、震災直後の苦労話、不自由な避難所での暮らしについて多くの話が寄せられたが、翌年になると、仮設住宅の生活の悩みやそれに取り組む人々の話など、次第に内容が変化していった。これは、人々の問題が生活の不自由さなど外的問題から、時を経るに連れて将来への不安、疎外感など内的問題へと変化していったものと考えられる。そして、後半ではその問題に対処するさまざまな立場の人々の話を取り上げた。そこには、行政、民間ボランティアだけではなく、この地に根付いた民間信仰、民俗芸能の力を認めることができた。今回の震災では、民間信仰や民俗芸能が共同体再生の力に役立っているという事例が数多く報告されているが、ここでは、被災者の心のケアとして、これらが機能したことを意味している。

最後に、聞き取りにご協力いただいた方々、それから、田老の町に寄り添い、被災者の方への橋渡しになって下さった赤沼正清氏に御礼申し上げます。

【参考文献】

宮古市教育委員会編『宮古市の石碑』、宮古市、２０１０年
宮古市東日本大震災記録編集委員会『東日本大震災宮古市の記録第１巻《津波史編》』宮古市、２０１４年

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域
第3章　田老地域における支援体制

神田より子

はじめに

東日本大震災における田老地区の被害は、平成24年11月6日現在で死亡届出者136人、死亡認定者45人で、合計死者数は181人にのぼり、宮古市全体の死者の合計517人の3分の1という多数の被害が出た。また家屋倒壊数は全壊が1千550戸、大規模半壊が48戸、半壊が77戸、一部破損が16戸で合計が1千691戸となる（『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～2011・3・11～2013・3・10』宮古市　2013年）。万里の長城とも呼ばれたx軸の防潮堤を津波が襲い、田老の街中の平地部分の住宅や商店街のほとんどが破壊された。

そうした中で津波襲来以降、多くの方々が被災に立ち向かい、困難を乗り越えて、今ようやく災害公営住宅に入居し始めた方々も出てきた。

本論はそうした津波の被害に立ち向かっていった方々の日々の行動と記憶を聞き取り、記録したものである。ここでは主に田老地区における支援体制として田老総合事務所の動き、震災後に分散して避難していた方々を1か所に集めて、よりよい支援をするために決まったグリーンピア三陸みやこでの避難所生活と、その支援体制について述べてゆく。

1　田老総合事務所の被災時とそれ以降の取り組み

震災当時は田老総合事務所長だった**上屋敷正明さん**（昭和26年生）から、2012年8月20日と2015年9月3日に話を伺った。上屋敷さんは現地対策本部長もされていて、現在はグリーンピア三陸みやこ専務取締役の職にある。

当時上屋敷さんの部下だった鳥居利夫課長が「平成23年3月11日震災　田老地域振興課鳥居課長対応綴」（以下「鳥居綴」と略して用いる）という詳細な記録を残している。そこで本論では上屋敷さんの許可を得て、必要に応じて3月12日から3月31日に至る「鳥居綴」を引用して詳細を補足することとする。ただし個人名は省略形を用いる。

震災当日とそれ以降の取り組み

3月11日は議会があり、私は市役所にいたが、午後2時46分に大きな地震があった。議会では議長に閉会せねばと、一度皆席について「閉会」の宣言があり、2時50分頃にすぐに車で走った。田老総合事務所に戻るため、国道45号線を佐原まで上がって、樫内まで行けば歩いてでも帰れると思った。加工団地のあたりで津波に遭ったらアウトだったが、車の流れはスムーズだった。3時15分頃には事務所に着いた。すぐに、水門を閉めたか、避難者がどのくらいいるかなどの状況を聞いた。道の駅の国道事務所の防災倉庫の鍵があったので職員に確認させた。

事務所に戻って10分くらいしてから、ラジオの情報で津波の高さを聞いたら、3メートルから5メートルということだったので、漁港はやられると思った。

総合事務所は小高い場所にあるが、玄関から見ると、津波が防潮堤を越えて寺の方に迫ってきたので、高い所まで逃げた。玄関前の駐車場は、下が車庫になっているが、その駐車場の10センチくらいまで水が上がった。

津波が引いた後、課長たちに集まってもらい、避難者はどこに何人避難したか、地域振興課、農業、林業、商業観光課の職員の確認を指

写真1　2011年3月15日　田老庁舎付近

示した。また、飲み水の確保を神田地区の涌田商店や道の駅で行うこと、水道の状況確認などを指示した。

被災を免れた神田地区の堰代茂一さんが、何か手伝うことがないかと聞きに来てくれたので、おにぎりと水を依頼した。来なければこちらから行こうと考えていた。11日はおにぎり1つを2人で分け合って食べた。水はすぐに引けたが、その日に行けることができたのは神田地区だけだった。役場からお寺の山を通り、三鉄の線路を伝って大平地区に出た。公用車が向こうで立ち往生していたので、それで連絡を取ろうと思ったが駄目だった。夜になって、職員2人を宮古まで派遣したがこれも駄目だった。宮古の市役所では情報が届かないため、「田老は全滅した」と言っていたという。

被災当日の避難場所は、総合事務所、常運寺、田老第一小、宮古北高校、熊野神社だった。乙部地区の青砂里で山火事が発生した。その山に逃げていた人たちは、山を越えて和野と真崎入口を経由して道の駅に避難した。

私の自宅は常運寺のすぐ下で、道路より1メートル、更に基礎が50センチ高かったが、床上70センチの浸水だった。家の中は泥だらけだった。下水管からも泥が上がった。しばらくして、床下全面の乾いた泥を取って炭を敷き詰めたが、何度掃除をしても細かい粒の泥が出てきた。基礎が大丈夫かは不明である。

消防団

3月11日、最後に事務所に戻ったのは夜中の11時ころだった。背中に籠を背負って歩いて行き来した。灯油、軽油の確保も大変だった。重機が現場事務所にあったので、国道を開削するように指示した。加藤俊郎さんが来て手回しの給油機を取りに行ってくれた。遺体捜索もあり、田老診療所の黒田先生に検案してもらった。

この日にやったことは、それぞれの担当に話したが、報告のないものは話しっぱなしのままであり、次から次といろいろ進めたので、指示の時系列については記憶がない。

被災当日の夜は、被災を受けた地区に何人が住んでいたか調べさせた。避難所に避難した人数は約千人。被災前の人口は約2千人だったから、宮古で働いている人を含めても約千人足りない。この人数が不明だと大変だと思った。生存者の人数を数えて、不明者の名簿を作る必要があった。道路が通れないので人力でやらなければならなかった。

当日の夜、事務所に消防団が集まり、どこに何がある、水をどうするか等について話し合った。下水処理場に浄化装置がある、神田の水をポリタンクに持って来ようと話していたところに分団長が数人来て、火事が出ていて大変なことになる、今は消火できないとの報告があった。延焼してくるかもしれないと緊張した。山火事はずっと延焼していた。火事での死者は出ていなかったが、二十九、三十分団の分団長が「だめだ」と言って来た。山火事は田老一中の近くまで迫り、煙が流れて来た。消防団は食い止める自信がなかった。荒谷の沢で食い止めなければこちらに回って来るという。

翌3月12日は、岩泉消防団が水50ケースとおにぎりをたくさん持って、消火の応援に来てくれた。

「鳥居綴」には以下のようにある。

「3月12日　田老一小　ヘリ可能　北高避難者　100人
三鉄線路付近、神田橋付近まで自動車可能、そこから線路で総合事務所へ
田老一小、田老一中生徒は全員無事
避難者　田老総合事務所　田老一小　常運寺　1500人分炊き出し水が必要
山林火災　青砂里～和野　乙部　荒谷　熊野神社
田老総合事務所　炊き出し1500人分、飲料水　同、オムツ　20人（各サイズ）
三鉄は田老駅までは運行可能と思われるが、その先には民家の屋根が乗っている
総合事務所の上の駐車場や、田老一中校庭までかん水

熊野神社の山林火災は、田老一中側への延焼の危険あり、田老総合事務所等の避難者を北高に移動させるタイミングを見ている
田老総合事務所、田老一小、常運寺、北高の避難者用ストーブの今夜の石油がない
熊野神社周辺山林火災は、田老一中側に拡大中
田老総合事務所から田老地区の平坦部は一部を除き全壊
総合事務所から人工透析1名　緊急搬送を要する、田老一小がヘリ着可能」

神田地区からの食料の応援

私が最も強く記憶に残っているのは、神田地区に住んでいる堰代茂一さんだ。被災した当日5時ごろ、水がない、食べ物がない、被災者のために何ができるか考えていた時、彼が「何かできることがあったら言ってほしい」と来てくれた。それで、食べ物、飲み物がほしい、できるだけご飯を炊いてほしいと頼んだ。

彼の祖父は、昭和8年の津波の際も神田から来て手伝ったことがあった。そのため、自分も何かやらねばと思って来たという。総合事務所へは、道路がすべて瓦礫で埋まっていたので、三鉄の線路を伝い、常運寺の墓地を抜け、歩いてきたらしい。

どのように食べ物を確保するか、外には知らせることができずに切羽詰まっていた時だったので助かった。神田地区の人達がみんなでポリタンクに水を入れ、おにぎりを背負いかごに入れて持って来てくれたので、それぞれの避難所に配った。堰代さんは末前、青倉、養呂地、小田代地区まで声をかけてくれた。

翌12日の朝6時頃にもおにぎりを届けてくれた。被災者は1千人を超えていて、この食料だけが頼りだった。神田地区では集会所や屯所でもご飯を炊いていたらしい。いよいよ3日目には米が底をついたとやってきたが、他からの救援も始まったので大丈夫と話した。

実のところ、米は宮古方面からは入ってこない。摂待地区にお願いしたが、田んぼを所有する家の多い下摂待地区も被災していた。農協からの救援物資がようやく届いたので、神田方面にも配ることができた。末前からも米がないと言って来た。県の振興局からも届いた。14日朝に宮古市役所に頼んだが田老ばかりではないと言われた。最初に支援してくれた地区に回す米が重要だった。自衛隊が来てから1人当たりの米の量がわかり計算できた。

そのうち道の駅からも苦情が来た。総合事務所では2、3日の避難所と考えていたのだが、そのまま数十人も残っていたのだった。

3月15、16日になって自衛隊が来て、18日あたりから炊き出しが始まった。

避難所での避難者数の把握

被災当日は、避難所の人数を確認し、各課長は職員の確認が終わり、診療所長、保育所長、中学校の教職員もみんな無事だと聞いて安心したが、数日後に子供の遺体が上がったという話があった。この子供を保護者が迎えに来て、連れて帰り助からなかったと後から聞いた。小学校は高台にあったし、ここへ逃げていれば大丈夫と思っていた。

翌日朝8時には避難者数のだいたいの把握はできた。被災当日に約1千400人の把握をした。下摂待の人たちは、水沢の集会所に避難していた。小田代山荘に避難した人たちは把握できないでいた。樫内集会所の人たちの中には、宮古方面から来て田老までたどり着けずに泊まった人たちもいた。

被災者の名簿はその夜午前0時にはできたので、翌朝から台帳を作れた。しかし、被災地域の人口は2千人を超えていたのに、千人近くを把握しきれていなかった。それをどのように把握するかが問題だった。不明者を探すために、3、4日後に各地区の自治会長を集め、自治会ごとに確認をしてくれるように頼んだ。田老にいるのか、出稼ぎに行ってないかなどの情報を3月22日ころまで集めた。

時間がかかったり、何十年も行方不明の人がいたりと、正確には掴めなかったが、おおよその人数を把握できた。そのため行方不明の遺体が出てきたときは、年齢や性別などからある程度は判断することが

できた。「そんな気がする」といった伝聞は不明の者とし、確実な者だけを記載した。寺でも情報を得ていて、それを受けて確認作業ができた。生存者名簿と行方不明者は誰々という情報は、3月13日ころには張り出すことができた。

「鳥居綴」には以下のような記述がある。

「3月12日　宮古北高校　15：30
　体育館（約250名）、格技場（同　80名）収容
水は神田公民館給水できる。炊出し（神田）350食　分団長　野崎茂さん
米1ぴょう、ガソリン　40L、発電機　2台借用、毛布、燃料
大平コミュニテイセンター　ガスボンベを炊き出し用で使用、特に看護を用する者はいない。鉄砲の流出届け　3名
11：30　自衛隊ヘリを消火活動に要求
11：40　北校で切腹（切迫カ）流産の妊婦がいるので救急車を要請
3月12日の避難者数
庁舎　250名、寺　150名、小学校　150名、北校　350名、グリーンピア　400名、ふれあい荘　160名、
北校を避難所　炊き出しの手配、死体処理の問題
車輌手配、北校、ストーブ、ガソリン　現場事務所から2缶、フトン　末前伝承館、
灯油　一中から抜く
3月13日　水沢へ毛布20個配布、経由　役場、ふれあい荘（済）
ガソリン　北校、連絡車、灯油　全ヶ所」

消防、自衛隊、米軍の応援

2日後くらいに盛岡から消防の応援が来てくれた。自衛隊は3月11日には滝沢から宮古市千徳までは来ていたという。田老に入ってきたのは3月12日。13日から国道の開削に入った。その時期に三王閣の解体工事をしていた会社も重機を出して手伝ってくれた。

3月12日の夜から、警察、自衛隊、消防署、総合事務所職員が毎日夕方1時間の打ち合わせをして、作業の状況や緊急事項などを確認した。これは4月まで続けられた。

田老は、ほぼ自衛隊がやってくれた。遺体の捜索まで引き受けてくれ、側溝の中まで探してくれた。

3月12日には、宮古消防本部でガソリンの配給があるというので、畑、有芸、田代経由で取りに行った。灯油の配給も道路が通るまで、三鉄の線路を使ってポリタンクを担いで運んだ。三鉄が田老まで通るのは早かった。町内の道路が開いたので、三鉄を走れるようにしようとなった。県北バスは国道や市道が通ってもまだ動かなかったので、食料の買い出しに行くために三鉄を動かす必要があった。自衛隊が、線路上の瓦礫を撤去し、電気の通電状況のチェックをして3月中には動いた。

消防団、消防署の人たちにも食料を届けた。本部からも食料が来たので、それも回せたが、自力で調達するのは無理だった。県外から応援に来てくれた消防署員には食料を届けなければならなかった。自衛隊は自分たちで完結できるので貰えないと言った。

厚木基地から来た米軍のヘリコプターが小学校の校庭に何度も降りた。2~3日に1回の割で来て食料と衣類を届けてくれたが、衣類は大きくて使えなかった。英語のできる職員が話したが通じない。そこで自衛隊に話してもらった。狭い校庭に大型ヘリコプターが降りるので困ったが、自衛隊が直ぐに対応してくれた。

「鳥居綴」には関係機関の対応状況の記載があるが、ここでは宮古関連のみ引用する。

「3／12　関係機関の対応状況
【消防】◎緊急消防援助隊
秋田県隊―宮古・田老・山田　6：00宮古で活動開始
指揮2、消火4、救助6、救急8、後方支援13、33隊
6：41　増隊（9）―宮古に派遣を決定
◎県内広域応援　17隊

宮古―盛岡（指揮1、救助1、救急1）、
【DMAT】消防学校に第二災害医療拠点を設置（日赤）
参集チーム　県内20、日赤9
＊久慈・宮古・大船渡・高田病院は受け入れ不能
【警察】災害派遣
宮古署―東署18名、紫波署16名、山梨22名
広域緊急援助隊
県警ヘリ　5：30　花巻空港発、陸前高田から宮古まで偵察
検視官の派遣　宮古20名により沿岸各市町村で6時00分より開始
検視予定場所　宮古市（宮町体育館）
【自衛隊】宮古（102名）5：30　救助活動
滝沢（駐屯地）（299名、284名、265名）岩手駐屯地で準備中　6：00　陸自八戸　八戸から宮古まで偵察（ハンディカメラ）
海上自衛隊　護衛艦15隻で海上からの救助活動中
【海上保安庁】海上における救助・救出活動中
【救助等の要請】宮古市　マース避難者（15人）の救助―自衛隊
宮古病院に傷病者を集め、盛岡までのヘリ搬送―調整中
宮古病院へのDMATの派遣（1：15）―調整中
田老町　市街地の火災消火
人工透析患者（1）搬送―宮古消防の地上隊が対応（6：49）
【緊急物資支援】
＊このほか多数―調整中
宮古病院　毛布（100人程患者が濡れている）」

道路の開削

急患はヘリコプターを小学校に降ろして運んだ。三鉄の線路は命の綱だった。夜、電気の無い中、唯一の道となった。この道と神田地区の人たちの助けが無ければ、裏山の清水を飲む以外に何も無かった。三鉄の線路には瓦礫が覆いかぶさっていたが、ここだけは通ることができた。

主な道路を通すため、11日の夜は、現場事務所の人たちと打ち合わせをした。三王閣の解体をしている業者の重機を使い、12日から道路の開削を始めた。小山田電業や田老町漁協の協力も要請した。漁協にタンクローリーがあることがわかり、燃料を補給しながら作業が進められたが、最初、タンクローリーの鍵が見つからず焦ったことがあった。

有芸の前川林業の機械で、宮古北高校から45号線までの道路を開いてもらった。国道45号線の長内橋から川沿いに少し遡ると現場事務所があり、倉庫には大型除雪車があった。近くの出光給油所に行けば灯油も軽油もあるので、それらを燃料に確保した。国道を給油所まで通れるように作業を始めたが、遺体が発見されると、警察への通報と遺体の収容、その周辺にほかの遺体がないか確認するために時間がかかった。

給油所で燃料は確保できたが、停電していたので給油機は使えず、灯油は手回しで、他は足踏み式の機械でくみ上げた。足踏み式は3人して交代でやったが疲れてしまって続かない。車1台を満たすのも大変だった。しかし、燃料があれば何とかなると思い公用車には入れた。自衛隊が到着する前から民間の人たちは先立って協力してくれた。

3月13日は、自衛隊との打ち合わせがあった。自衛隊が南側から入って来たので、北側は現場事務所で開削すると決めたが、小山田電業の協力もあったもののなかなか進まなかった。北側から総合事務所までは瓦礫が多く、鳥居課長からは1週間以上かかると言われた。

もう一度、瓦礫の少ない場所を検討して、小学校側を迂回しながらも1週間以内に道路を確保することができた。15日頃になると、出光スタンドまで開削され、燃料を確保することができた。開削は重機で

瓦礫を押し上げながら、消防団に見守られながら作業した。自衛隊は慣れているのではかどった。

カラスが集まってくると『あそこには遺体があるのでは?』『あそこには遺体が7人いた』などの噂話が出て来た。

震災後の1~2週間の出来事は、頭からすっぽり抜けている。忘れてしまいたいという思いもあった。これまで、何回も話してほしいと言われたが話していない。

瓦礫の搬出場所も問題だった。想像以上の瓦礫の量だった。防潮林は県有地だったので、県振興局の許可を得て使うことができたが、個人の畑まではみ出して積み上げた。長内川の上流の現場事務所と学校給食センターの空き地、河川敷も使った。

「鳥居綴」には以下のような記述がある。

「3月13日　自衛隊①　施設　啓開作業　南から
同　②　消火　30名、啓開捜索　10名、重機　1台
消防団　山火事　捜索につく　大下
イタイ（遺体カ）（箱）（棺桶カ）、米の手配
自衛隊施設部隊が南からはいる
6：00　ケガ人　①Oさん（39才）（骨折?）右肩、右足、左腰、意識OK
②Oさん（野原2）　左下あご出血、右頭部打撲、意識OK
7：45　宮古消防署救急隊が到着
人工透析患者　1名（川向　Yさん）を宮古病院まで搬送
22：00　北校より避難者の報告　北校側の計測と調書の数が合わないが「約260人」とのこと、300でカウント済み
3月14日　自衛隊480人（北海道）
①9特連3大隊　大槻　3／12~3／14
②2戦車連隊（280人）3／15~早ければ3／14から
③387施設中隊　佐藤三佐
④防支援隊（大曲）10：20頃　基地はグリーンピア」

震災対策本部との連絡

宮古市役所本部から、田老総合事務所長はなぜ来ないと言われたが、そんな余裕はなかった。田老の情報が全くないので、知らせるように言って来たが、時間をかけてそこまで行くより、今やるべきことは現場だと考えた。本部から出向いて情報を取りに来てほしかった。1週間くらい経ってから行って話をした。

田老総合事務所の職員は60~70人いるのだが、被災当日はそれぞれの管轄の場所にいて、事務所内には30人くらいしかいなかった。残っていたのは、農業課と林業課で、彼らも本庁に戻り、人数はもっと減った。働ける職員が減り、職員が足りないと本部に話した。

私と鳥居課長は、平成23年度が定年退職の年で、あと1年を共に頑張ろうと言っていたところだったが、この惨事が起きた。周囲からいろいろなことを言われ、どうしてよいかわからなかった。

「鳥居綴」3月12日
「10：00　橋本商店付近で生存者2名救出
10：15　真崎タクシー　3名救出　1名救出
10：20　Kさん母　救出
行方不明者　3月13日　14：00　受付
向山　Yさん、Mさん（宮古に出かけている時間帯だったかもしれない）
（依頼者）小林Yさん（自宅か北校にいます）
小林Sさん、Nさん（逃げているところを見た人がいる）
（依頼者）　Kさん、（自宅は流れたので別宅にいます）
行方不明5人①Yさん（川向）、②Hさん（摂待）、③Tさん（同）
④Hさん（小堀内）、⑤Yさん（同）、⑥Kさん（?）

＋8人
3月13日　14人（累計　19人）」

総合事務所の中

グリーンピア三陸みやこを避難所として運営するイメージはできていた。だが、具体的なことはボランティアの人たちに教えてもらった。毎週月曜日に班長に集まってもらって、情報提供や要望を聞き取った。鳥居課長は、元々土木技師で、整理することは得意だった。また、資料は取っておくのだとも言っていた。田老に関係した新聞の記事は別の臨時職員に指示してすべて取っておくようにした。鳥居課長には、総合事務所から出ないで瓦礫除去のことについてやるように言った。

防災システムの構築

防災システムをどう考えるかのマニュアルはあったが、農業課は食糧の供給のみで、本部は全く機能していなかった。田老総合事務所には自家発電装置があったので、毎日軽油を補給して発電し、ＮＨＫのテレビから情報を得ていた。市町村合併の時に田老の議員が、宮古市の対策本部に自家発電がないのはおかしいと言っていたが、それが本当になった。

被災当日の夜、田老診療所の黒田先生が、透析の必要な患者がいるので医療機関に運ばなければと言った。人工透析の患者は、ヘリコプターを小学校の校庭に降ろして宮古病院まで運んだ。酸素ボンベは自家発電があったので大丈夫だった。

ボランティア

ボランティアの人たちの一部は、自分たちの食料も全部車に積んできて、現地には迷惑をかけない体制で来てくれて有り難かった。だが、多くのボランティアの人たちは、食事から宿泊の提供まで求めてきた。大勢で来た人たちほどそうだった。被災直後の混乱している時に来たボランティアの世話には負担を感じた。時間がたって社協を通じて来た人たちは、こちらの体制が整った後だったので問題はなかった。

マスコミ

3月は津波研究者、市の対策本部、マスコミなど大勢が押しかけて来て、その日誰が来たか、もらった名刺に日付を入れていたが、間に合わなくなった。忙しい中をマスコミが来るので煩わしかった。現場が混乱している時に来られると仕事がストップしてしまう。こういうのは、代表取材をして同じ記事を流すことも必要だと思った。こちらも、同じ話をしていても、メモを見て話しているのではないので、微妙に内容が異なってくる。そのため、どちらが正しいか後で言われる。記者は、来たからには何か記事を持って帰りたいから、こちらの事情を無視して聞いてくる。

マスコミの人から、福島では原発事故で大変だから、こちらは忘れられてゆくと言われたときはショックだった。こちらも大変なのにと思った。

遺体処理

遺体のことは困った。田老常運寺の火葬場は老朽化していて連続して使えないし、宮古には道がふさがって行かれない。国道が通れるようになってからは、岩泉まで行かなければならなかった。遺体は、警察の管轄なので警察に任せたが、場所は市町村で決めろと言われた。

昭和８年の津波のイメージがあって、神社の境内に安置することを考えていたが、宮古北高に安置することを警察が言ったらしく、校長は不服を言って来た。

小堀内の遺体は北高まで運ぶことはできない。遺体の検案をする医師も足りない。個人の家に置いておくわけにもいかず、グリーンピアのホテルも別組織だったのでだめだったが、クラブハウスに置かせてもらった。遺体は小堀内漁港で亡くなった人たちだった。

摂待地区の人たちの分は岩泉の火葬場を使った。遺体は火葬しないと安置場所がなかった。

常運寺での火葬は、住職が葬儀屋と相談して進めていた。3月下旬には、北高の安置所の遺体数も少なくなったので、安置所を公民館の体育室に変更し、さらに数が少なくなって、宮古の千徳体育館に移した。

拾得物の中で重要と思われたものは、総合事務所の金庫に入れた。全体が落ち着くまでは、法律論より、今、どうするかで決めてゆかなくてはいけなかった。

2　グリーンピアでの3月11日以降

一方震災当時、グリーンピアではどのような動きがあったのか。当時㈶グリーンピア田老の専務取締役をしていた**赤沼正清さん**（昭和15年生、乙部、現テニスコート仮設）に2012年8月13日、19日に話を聞いた。また総合事務所と同じように、グリーンピアでも3月17日から7月24日までの『避難所連絡帳』（以降は『連絡帳』と略す）という記録が残っていた。以下ではこの記録も参照しながら見てゆくことにする。

グリーンピアの3月11日

グリーンピアは、昭和60年に「財団法人グリーンピア田老」として開業された。それを平成17年3月31日に国の年金福祉事業団から田老町が取得し、平成17年6月6日に宮古市との合併で所有権が宮古市に移った。平成18年3月31日には㈶グリーンピア田老の直営管理となり、宿泊部門（ホテル）は観光のプロに任せるということで、東京の西洋フーズコンパスグループ㈱に移った。この間、宮城・岩手の大地震があり、風評被害が多かった。それもあって、西洋フーズ㈱との契約は9年だったが、2年くらいで辞めたいと申し出があり、結局この会社は3年6か月で引き上げていった。地元の人を経営に入れないとだめだということで、地元と、「グリーンピア瀬戸内」の社長さんに経営を手伝ってもらうことで、平成21年11月20日に「㈱グリーンピア三陸みやこ」を設立、平成22年4月1日にリニューアルオープンして再出発を果たした。

そして、平成23年3月11日、大震災がおきた。大災害を受けて平成23年7月31日で「㈱グリーンピア三陸みやこ」との委託契約は解除になった。こうしてグリーンピアは運営のすべてを㈶グリーンピア田老が行うこととなり、8月1日から新たにスタートすることとなった。7月末までいたスタッフの多くは「㈱グリーンピア三陸みやこ」の契約解除に伴い、解雇となっていたため、新規にスタッフを募集した。希望があれば再雇用もしたのだが、「職員を解雇した」と新聞に厳しく書かれたりもした。希望者以外は仮設住宅から募集したり、ハローワークを通して被災者を集めた。

避難者への対応

3・11の時は、グリーンピアにいた。宮古市の林業課の人たちと、平成23年の植樹のための樹種を決めるため、現地調査をしていた。グリーンピアに市民の森を造成して3年目だった。現地を見て戻るときに地震がきて、道路も揺れて車も揺れた。この地震だと津波が大きくなると言って、その後の会議を中止して役所の人たちはすぐ帰った。

私の自宅は国道45号線沿いにあるローソンの近くから海岸部に入った乙部地区なのだが、現地で対応するためグリーンピアに残った。当時ここは指定避難所になっていた。ホテル、アリーナ、体育館のどことはっきり決まっていなかったが、寒いのでホテルを避難所にしようと思っていた。ホテルに着いてから津波が3㍍と聞いたが、避難者の受け入れ準備を始めた。徐々に人々が集まりだした。当時ホテルは「㈱グリーンピア三陸みやこ」が営業責任者だったので、宿泊棟以外の1階と2階部分を避難者のために使いたいとお願いして、許可を取った。3月9日にも地震があり、危ないと考えた人は早く避難していた。

未だかつてない揺れなので、私もすぐに判断した。山田町や横浜などからの宿泊客もいた。大きな地震で電気は切れていたが、ホテル棟には自家発電があった。また、重油の暖房も大丈夫だった。寒かったので暖房をつけたが、揺れがあるたびに客を外に出した。水もたくさんは無かったので、トイレは1か所にして、たらいを置いてその水で

各自が処理をしてくださいとお願いした。

避難者はホテルロビーと廊下、大広間に案内した。従業員の宿舎には非常用の寝具があった。三王閣にあったものを引き取って災害用に取っておいたのだ。最初は寒いので2枚敷いていた人もいたが、避難者が増えて1枚ずつになった。11日は４００名くらい、12日からは1千名位の出入りがあった。

食べ物は団体客の宴会が予定されていたので、これらの材料もすべて提供してもらった。食料は11日から13日までは間に合ったが、14日の朝からの分は十分になかった。外部との通信がすべて途絶えていたので、13日の夜中に営業本部長と救援物資の要請をしに田老総合事務所へ向かったのだが、国道が遮断されていて行けなかった。三鉄のトンネルを通って行こうとしたが、11日からの火災によりトンネル内に煙が発生して通れずに戻ってきた。14日早朝、水沢地区の一部はドコモが通じていると聞いたので、そこまで行き、最後の望みをかけて知り合いの役所職員10人くらいに片っ端から電話をかけた。そのうち繋がったのは2人だけだった。結局、14日の朝は食料が足りず、子供と身体の弱い人のみに配り、大人は我慢して欲しいと頼んだ。そんな中で近所の人が食べ物やおにぎりを持ち寄ってくれた。また、岩泉の消防隊がおにぎりを運んできてくれた。

14日の11時頃、宮古の新里給食センターから山の方を回っておにぎりが届いた。よそへ回す予定をこちらに回してくれたらしい。うれしさと安堵で、嗚咽してしまった。これは今でも忘れられない。

寺や小学校の避難所ではここよりも大変で、北高校も大変だったらしい。樫内ではウニまで出してくれた人がいたらしい。摂待地区では自宅が壊れなかった人たちも、水も電気もないのでここに来た人たちもいた。

「紙コップや割り箸は捨てないでください」、「皆でがんばろう」と毎朝放送したりした。この頃は皆まだおびえていた。

病人、けが人への対応

避難してきた人の中には、波をかぶってずぶ濡れの人が4、5人いたので、専務室に入れた。妊婦さん、ケガ人も運ばれて来た。13日にこちらに現地入りしてきた秋田（鹿角・大曲・横手など）の救急隊と、元宮古広域消防の金澤純二さんと相談して、岩泉の済生会病院に運んだ。岩泉の病院の柴野先生が、治療やその先の手配をしてくれて、妊産婦2人と岩泉で治療してもダメな骨折などをした6人はその後、盛岡の医大に入院させたようだ。金澤さんがギプスをして送った人もいる。Oさんはしばらく様子をみたが調子が悪く済生会病院へ送った。Mさんは体調を崩して救急車で運んだ。済生会からは、決められた時間に運んでほしいと言われたので、午前1回午後1回グリーンピアのシャトルバスで岩泉まで運んだ。45分で着ける。岩泉済生会病院の柴野先生とは以前からつながりがあった。柴野先生が田老病院に勤務していた当時、私も一緒に働いていたことがあった。医療的な受け入れ体制は、これで整った。

社協田老センターのデイサービス利用者らもここに避難してきた。カラオケ室や畳の部屋は重症者や病気の方の部屋にした。そして、看護師やヘルパーの資格を持った人や経験者に彼らを看てもらった。救護の部屋には赤十字の看板をかけた。田老診療所の先生は当初田老総合事務所にいたが、数日後から北高校を拠点にあちこちの避難所を巡回診療した。石川県の日赤も「対策本部はここか」と入ってきた。「現地対策本部は田老総合事務所だ」と言った。すでにグリーンピアでは医療的な受け入れ体制ができ始めていたので、「こちらの看護師らの指示で動いてくれ」と言った。彼らは半日くらいで帰ったが、グリーンピアには無線機もなくて大変だと田老総合事務所に話してくれた。

これらはすべて田老総合事務所を通さず、現場対応だった。ただ、最も心配したのはグリーンピア職員の中では災害対応などの経験者が自分一人きりで、他は火災の避難訓練くらいしかやったことのない者ばかりだったことだ。

組織体制

組織体制ができたのは15日頃だった。当時会社のトップで責任者の宍戸氏と、社協の藤島氏と私の3人で組織体制を作り上げた。その3日後に営業部長も東京出張から帰り4人体制となった。㈶グリーンピア田老の牧野さん、山田さんは主に総務班。給食班と輸送班は佐藤健太郎さん（元田老町役場職員）が兼務した。彼は田老給食センターと田老保育所長経験者だった。防災点検と施設班は畠山さん・山本さん（㈶グリーンピア田老）、そして水道技術者の菅原究諾さん（元田老町役場職員）。救急班は元宮古広域消防の金澤純一さん、看護師経験者の吉水さん、柾屋さん、山本さん、朝倉さんらにお願いした。物資班は、ボランティアセンターを含めて、社会福祉協議会のデイサービスメンバーだった看護師、介護士、ケアマネージャー、指導員などにお願いして、ここで物資の受け入れ、配分も担当してもらった。そして、「㈱グリーンピア三陸みやこ」の職員の方たちは、フロントでの対応や食事の準備、掃除などを避難者の人たちと一緒になってやってもらった。このようなメンバーで3月31日まで現地対応した。

外部との対応

震災当初は、田老総合事務所にあった現地対策本部との連絡が全く取れなかった。そんな時、自衛隊は、早く来てくれた。北海道の自衛隊は15日に岩泉方面から入ってきた。第1から第3隊で彼らはアリーナに入ってもらった。自衛隊が来てからは、その通信網を使って連絡を取った。この間、炊き出し、支援物資、不足物に関しては自衛隊が動いてくれた。自衛隊にはガソリン、重油、灯油を依頼した。ガソリンスタンドも皆流れたので、緊急車両のみ入れた。もっとも重宝したのが水と自家発電用の重油だった。

電気は15日の夕方には点いたので水をポンプアップできるようになり、17日から風呂の準備もでき入浴させた。自衛隊にも水を供給できるようになり、自衛隊のタンク車で一般家庭にも配給できた。自衛隊は食事と水の供給をやってくれた。その当時は、アリーナの駐車場が自衛隊の車でいっぱいになった。その後、被災者がアリーナに移ることが決まると、自衛隊は体育館に移り、体育館に支援物資が来るようになるとまた移動していった。最後は、現在の仮設保育所のあたりに野営本部を置いた。自衛隊は邪魔にならない場所に点々と移った。

ご飯の炊き出しと食材の準備は自衛隊が行い、副食はグリーンピアで担当した。それらは総合事務所まで運ばれ、そして各避難所へ自衛隊が運んだ。水も自衛隊が運んでくれた。水は摂待川から取水しているので、管が破裂していないかチェックさせた。施設が大きいので、故障のことを考え、あちこち点検させた。ガスだけは漏れていると大変なので、専門家にチェックしてもらってから使った。私は主にフロントにいた。役所から何が足りないか、避難者は何人いるか、と聞かれるが、昼はいなくて夜だけ来る人もいた。他の避難所で物がなくなってこちらに来る人もいる。紙コップや箸も不足してきて、捨てずにマイコップ、マイ箸にして使ってもらった。歯ブラシ・歯磨き粉の要請をしたが、役所からは、それは二次物資だから後になると言われた。外からは泥靴で入ってくるので、感染症予防のためフロントですべて履き替えさせた。医者と看護師が来てからもこのことを心配していた。そのため現地へ行ったときのヘドロのついた泥靴は玄関でシャットアウトした。トイレも履き替えさせ、風呂も検査した。インフルエンザが心配だったので手洗いを励行させ、その結果マスクの人がいっぱいになった。3月の途中からは、1階と2階が避難所で、3階と4階は仮診療所にした。

4月以降のグリーンピアと田老

4月からは被災者の内陸避難が始まり、その経費は県が払った。グリーンピアは県の制度により利用できた。4月3日から人が減り始めたので、グリーンピアは被災者用住宅として使えた。そこで施設を居住者に貸し、自炊にした。仮設には生協から配給があった。

8月1日から営業許可を取り、スタッフ募集をした。そのため職員を解雇したと新聞に書かれたりもした。こちらでは希望があれば再雇用もした。こうしてグリーンピアは宮古市の管理となった。平成24年

3月31日からはビジネスホテルとしてスタートした。従業員は希望者以外は仮設から募集した。ハローワークを通じて被災者を集めた。パートで働く時間編成などもやった。

今回の東日本大震災では10㍍だった堤防を14・7㍍にする予定があるが、地盤沈下が50㌢ある。今回の津波では堤防があるから大丈夫と考えて、避難行動がゆっくりだったり、「おらはいい、ここさで死ぬから」という人がいた。

田老の乙部地区1だけで28人亡くなった。妻は確定申告にゆき、津波が来たと知り、家から車で45号に出たが、波が見えたので、歩いて近くの山に登って山を分け入って逃げ延びた。車で逃げた人は亡くなった。乙部2（野原）では20人亡くなった。役場の近くの人たちはすぐに山へ逃げて、亡くなった人はいない。

『連絡帳』は3月17日から記載が始まっている。この日は350名の人数が記録されている。翌日には400名とあり、余白には「移動が激しい」、「昼は作業、夜泊まり」とある。10人くらい病人ありと記され、この日は医大のボランティアによる診察があった。19日には供給ルートができて重油による風呂が開設され、自衛隊の炊き出しが始まった。赤沼さんの確認によると、自衛隊は田老地区1200名分の食料をグリーンピアと共同で準備したい意向で、数日中には宮古市から食材を調達できる予定だという。役場、小学校、常運寺、北高などの避難所の食事もまかなうことを検討している。こうして19日から自衛隊による炊き出しが始まった。しかし21日の記録には自衛隊と赤沼さんとの連絡がなされず、今日炊き出しができるか把握できないという。また30日をめどに田老地区の避難者をグリーンピアに統合するという案が出てきた。そのためこの日に総務課と田老診療所のドクターが来て、どの部屋に何人置くかの検討がなされた。

3　避難所をグリーンピアに集中

上屋敷さんの話の続きを聞こう。行方不明者の数は、まだ何百人といた。避難者名簿に載せている人たちもあちこちに動いていて、避難者の人数が増えてしまった。　そんなこともあり、避難所を1か所に集めることに決めた。

3月15日から20日にかけて、避難所に職員を配置するように災害本部から指示されたが、職員が足りない。本部からも田老に出せる人数はないという。それで、グリーンピアの赤沼さんと相談をして、避難所をグリーンピア1か所に集めることにした。避難所では常に人の移動があるので、毎日避難所に行って人数を確認した。

3月20日ごろまでに、他地区に避難していた人たちも田老に戻って来て、各避難所のまとまりも出てきた。

内陸への一時避難者もいた。県による割り当てで、希望者は県内の保養地の安比、八幡平、花巻などに一時避難をした。それらの費用、1泊5千円の金額を県が負担した。

グリーンピアのホテルを使用した被災者は、4月3日から7月31日まで宿泊した。

当時のグリーンピアは、財団経営で専務が赤沼正清さんだった。ホテルは委託していて、別会社が運営していた。そのため、被災当初はホテルを避難所にする話はなかった。そのため、はじめは、ホテルの各部屋を避難者用に使えなかった。そこで赤沼さんは会社と話し合った。グリーンピアに避難した人たちに関しては、赤沼さんに任せる以外に道がなかった。

この間の事情について3月24日、25日付けの「鳥居綴」では以下のような記述がある。

「3／24グリーンピアの扱いについて
災害救助法に基づき国から1泊5千円出す
グリーンピアの宿泊等も同じとする（各体育館に住んでいるため）
グリーンピアの場合はアリーナにする。宿泊等は弱者（乳幼児を抱えている家族など）優先とする。2ヶ月
避難所は期限を切って入居

北高・お寺・ふれあい荘・小学校の順で異動させる。
自炊している人は食材をグリーンピアに取りに行く、イヤであれば避難所へ。」

《グリーンピア三陸みやこへの避難所設置について》

(1) 設置の目的
平成23年3月11日の大津波による被災者を収容している田老地区の避難所等を、グリーンピア三陸みやこに一元化することによって、田老地区の避難所の適正かつ効率的な運営を図る。
＊宮古地区でも、同様に各地区でも設置している避難所の集約化をすすめる。

(2) 田老避難所の状況（3月24日現在）

避難所名	避難者数	適用
田老総合事務所	36	
田老第一小学校	87	
宮古北高校	218	
常運寺	74	
GP三陸みやこ	248	
ふれあい荘	40	
小田代山荘	9	
樫内集会所	65	
摂待集会施設	10	
合計	787	

(3) 避難所の内容
①設置場所　グリーンピア三陸みやこ「パシフイックアリーナ」
＊宮古地区においては、避難所の集約化を進めるとしても、当面学校の体育館や公共施設等を継続使用せざるを得ないため、それとのバランスを取ることに加え、収容人数もかなりの数が見込まれることから、グリーンピア三陸みやこのパシフイックアリーナを使用する。
②設置期間
平成23年4月1日（金）～平成23年5月31日（火）
③収容者の範囲と収容期間
収容者は、原則として田老地区の避難民を対象とし、収容期間は避難民が仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの期間とする。
④収容予定人数　７００人程度
⑤避難生活に必要な物資等の準備
市が設置する避難所であることから、食料、水、寝具、医薬品、テレビなどの避難生活に必要な物資については、市が準備するものとする。

《宿泊施設の活用による被災者の一時収容について》

1　事業の目的
高齢者だけの世帯や障がい者のいる世帯などが、仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの間一時収容する施設を、市内の宿泊施設の協力を得て設置する。

2　設置施設
・浄土ヶ浜パークホテル
・休暇村陸中宮古
・グリーンピア三陸みやこ

3　設置期間
各宿泊施設とも2ヶ月間

4　収容者の範囲と収容期間
収容世帯は、被災者用住宅（市営・雇用促進住宅）の申込基準に準じた世帯とし、収容期間は仮設住宅や自らの手配による住宅等へ入居するまでの期間とする。
（被災者用住宅申込基準）

区分	世帯状況
A	高齢者（65才以上で2名以上）だけの世帯

B－1　乳幼児（3才以下）又は妊婦のいる世帯
B－2　中学生以下の子供が3人以上いる世帯（平成23年4月時点）
B－3　70才以上がいる世帯
5　収容予定人数
各施設との協議により決定する。
6　その他
詳細については、施設等との協議により決定する。」

避難所の引っ越し

3月25日頃には、避難者の不安がピークになった。被災後1週間くらいは、各々が大変なことだらけで余裕がなかったが、2週間くらい経つとさらに不安が増して、また、別の感情が出て来て自殺者も出た。緊張がポンと切れた頃が問題だった。みんなが一緒にいると、自分だけじゃない、誰もが家族を亡くしたり家をなくしたりだから頑張れる力になる。

総合事務所にはいろいろな情報が入って来た。当初は、グリーンピアのアリーナや体育館を避難所にしようという話が出た。アリーナは自衛隊の宿舎だったが、自衛隊に話に行ったら、自衛隊はもともと野営の予定で来ていたので、すぐに撤収できると言ってくれた。

3月25日に田老にいる人たちすべてをアリーナに集めようと決めた。そして、佐藤農業課長と2人で各避難所に説明に歩いた。各避難所では、自治組織ができつつあり、また、動くことに反対の声もあった。だが、みんなが同じ場所にいて共通の情報を得ることができると説得した。長期になると学校も始まるので、皆さんいっしょにやりましょうと承諾をしてもらった。これが一番いい方法だと確信していた。

3月28、29日の2日間で、自衛隊の車を使って移動を終えた。

グリーンピアでの避難生活

グリーンピアのアリーナでの避難は、人が多すぎてだめだとの声があったが、班を8つにして班長も決めて対応した。結果として1か所にしたことはよかった。

手伝ってくれる人も決めた。今はゆいとり工房の代表をしている大棒レオ子さんにいろいろと説明をしたら理解してくれ、皆に指示をしてくれた。食事の配分も、時間や班の順番を決めてうまくいった。

前にグリーンピアのホテルで働いていた船越博之さんには、臨時職員として戻ってもらい、避難者が配膳から食後の食器洗いまでできるように指示をしてもらった。

800人もいると協力的な人もたくさんいてうまく動いてくれる。総合事務所の職員だけではうまくできない。職員は昼4人、夜2人常駐した。

アリーナで分けた班は、被災前の自治会ごとに、さらに、家族の人数によって居住サイズを決め、床に線を引いて割り当てた。一方、ホテルの方は、1部屋4人、ベッドでしか休めない人や70歳以上の高齢者、障がい者とその家族を宿泊させようと決めた。

ホテルに泊まっていた人が、別の場所に移動していった後には、アリーナから高齢者や診療所の黒田先生が薦める人を入れるようにした。

アリーナも余裕が出て、だんだん落ち着いてくると、皆と一緒の方がよいと、ホテルからアリーナに戻ってくる人も出て来た。皆と一緒の方がより安心感が出るのだと思う。気候もだんだん暖かくなって、アリーナも生活がしやすくなってきた。

人々の出入りを把握するために、アリーナとホテルに外出者名簿を作った。入口が1か所なので把握できた。また、夜にいろいろなことが起きることを考え、警察の巡回や9時までは消防団に赤色灯を回してもらい、警備員を対角線上に2人配置した。

9時を消灯にして、避難所では飲酒をしないというルールにしたが、明かりが消えると、あちこちからプシュッという缶を開ける音が聞こえた。集まって酒盛りをされると迷惑をかけるが、1人で飲んで寝てしまうのならよいことにした。特に大事に至ることはなかった。

アリーナの中に、女性のための更衣室や洗濯干場用のテントも用意

した。最初はそんなことは考えつかなかった。

落ち着いてくると、仕事に出かける人も出てきた。早朝に出かける人達は、避難者で申し出てくれた食事のボランティアの人たちが、残りご飯でおにぎりを作ってくれ、それを持って出かけた。

アリーナには、初めは段ボールの仕切りもなかったが、皆から要望が出されて対処した。

洗濯は、クラブハウスに洗濯機をずらりと並べて使ってもらった。細かなことはいろいろあったが、深刻な話はなかった。トイレに手ぶらで入っても出るときは、袋にトイレットペーパーをいっぱい詰めて出てくる人もいた。自分の所有物がほしかったのだと思う。

最もよかったのは、グリーンピアがあったことだ。千人以上の人が入れたこと、同じ田老の人が集まったこと、そこである種の安心感があった。人数が少ないと、自分たちはどうなってしまうか心細くなってしまう。

『連絡帳』には、4月9日のグリーンピアアリーナには377名、ホテルには245名の記載がある。アリーナには田老地区の消防団が夜は5名、朝からは20名の記載があり、警戒態勢に入っていたことがわかる。6月11日には528人だった人数が、15日には激減した。アリーナには150人、ホテルには130人となり、合計280人ということが自衛隊への確認でわかった。20日には37人となり、7月1日には23人、記載最終日となる24日には10名だった。

グリーンピアアリーナの避難所生活

吉川敦子さん（看護師、字小林）から2012年8月18日に話を伺った。今は生活指導員と准看護師を兼務している。当日は田老診療所勤務で、夜勤明けで休みだった。

3月11日

宮古病院からの帰りにガソリンを満タンにして、家に帰り、着替えをしていた所に携帯が鳴った。そのうちにグラグラ揺れたので、ストーブを消して、ラジオを取りに行った。父は家にいなかった。子供を預けていたので児童館に行った。児童館では先生がパジャマを着せてくれていた。「連れて帰りますか」と聞かれ、「はい」と答えて、そのまま山に登り待機した。ここには10人以上の人がいた。ここでは川の様子が見え、海の音が聞こえる。

息子がおばあちゃんと孫4人を連れて盛岡に行っていた。小学生の孫を迎えに行こうか迷ったが、行く気になれなかった。父も行かなくて良いと言って山にいた。

ヘリコプターが2機飛んでいた。聞いたこともないドスンという音がした。大平の山の向こうから土煙が上がって、神田川を瓦礫が遡ってきて、津波とわかった。「昭和8年のときより大きいね、田老が全滅だね」と話していたら、後ろの川から車が流れてきて、家の方からも水が上がってきた。しばらくして薄暗くなり、「大丈夫そうだね」と家に帰った。

父が小学校に孫を迎えに行った。そこに息子たちが帰ってきて、ふれあい荘に避難した。

看護師として

翌日着替えを取りに家に帰ろうとしたら、看護師さんが呼んでいた。「診療所の患者さんが来るから」と言うので「では助けるか」と言って、そのときから2人で看護が始まった。ふれあい荘は自家発電で電気が点いたが、痰の吸引器などが遠いので大変だった。近くの退職した看護師の遠藤さんがふれあい荘に避難していて、一緒に看護をしてくれた。近くの人が診療所から薬を拾ってきてくれて助かったが、皆が薬をほしがって大変だった。「すぐに出せない」と何回言ったがわからない。離れ小島の状況で、街のことはわからなかった。たまに先生や看護師が来てくれて、彼らがパイプ役のような感じだった。カルテもなかったが、先生の頭の中には患者さんのことがインプットされていた。自分の薬をもって逃げた人もいたが、ほとんどの人は先生の記憶が頼りだった。2日目くらいから重傷の人が亡くなった。吸引が必要な人

にも心臓マッサージをしたがだめだった。

総合事務所には山本先生がいて看取ってもらった。家族が迎えに来たときは無事だったのに、次に来たときは息を引き取っていたりした。連絡が取れず大騒ぎをして家族が迎えに来た。看護をしていても何も無かった。床ずれなどどうしようと言っていたら、ガーゼや消毒薬を届けてくれた。栄養液がなくなったらどうしようと言っていた。食事はふれあい荘にある食材を使って出してくれた。ふれあい荘に物資が届いたのは5日目。

診療所がグリーンピアへの移動

3月25日にグリーンピアへ移動になった。それまでは川井診療所などに依頼したり、ふれあい荘に預けた。3月26日からグリーンピアで診療を始めた。黒田先生が事前に見に来た。点滴が必要な入院患者は3階の部屋で行った。派遣の医師が交代で来てくれた。田老出身の山本栄一先生は東京にいたが、自分で運転して最も早く駆けつけてくれた。ローソンのすぐ上の田老診療所の真上が山本先生の実家だ。

国境なき医師団の先生方は1週間交代で来てくれた。この医師団の中には何か月もいてくれた先生もいる。沖縄の先生はスタッフの人たちの心理状況を診てくれた。私は家族が無事だったので、自分の状況は問題なかったが、あの人が死んだとか聞くと、皆自分が関わった患者さんなので、つらかった。ふれあい荘は避難場所ではなかったが、助かった。風呂は自衛隊が来るまでできなかったが、川に行って足は洗えた。

自衛隊が来てから国道45号線は通れたが、個人の車は通れなかった。家があっても店に物がなくて食料に困った。ふれあい荘では入所者以外にも避難した人たちの分も食事を作ってくれたのでありがたかった。

一番大変だったのは不眠、便秘、血圧。「看護師さん薬はないか、まだか」と聞かれ、何度説明したことか。診療所の患者のことは何とかわかるが、他所へ行っていた患者のことはわからない。その間を縫って、医師は死体検案をしたが、一人一人わからないので、赤沼さんが一緒に付き添った。家族の人は死体を見ても「絶対違う」と言い張る人もいた。警察も物のような扱いだったので、反感があった。黒田先生に言われて納得することが多かった。グリーンピアの廊下の狭い所で処理していた。グリーンピアがなかったら寒い中でどうしたか考えると怖い。グリーンピアは合併して赤字だったので、解体費用を作るために貯金をしておけとまで言われていた。

9月の地震が予兆だったと思う。このとき大平の水門を閉めたが、閉まらないことがわかり、このまま3月11日が来たらもっと大被害になった。津波に流されている人を見た人たちは、山から見ていても何もできず、「助けて」という声がずっと残っているという。

【引用文献】
宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～2011・3・11～2013・3・10』宮古市　2013年

【引用資料】
「平成23年3月11日震災　田老地域振興課鳥居課長対応綴」
グリーンピア版『避難所連絡帳』

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域
第4章　田老地域の仮設での生活

神田より子

はじめに

ここでは田老のグリーンピア三陸みやこでの避難生活を経て、グリーンピア敷地内に建設された大規模な仮設住宅での避難生活、田老グリーンピア仮設商店街の成立とその後、田老の子供たちのための仮設保育所の取り組みについて取り上げた。

２０１１年６～７月頃になると仮設住宅の第１期分ができ始め、８月前には避難所にいた最後の人も入居できた。そのため７月いっぱいで避難所は閉鎖された。

田老総合事務所所長だった上屋敷正明さんによると、内陸に避難した人などには情報が届かなかったので苦情もあった。住居がわかっても個々に対応しきれなかった。個人情報についても話し合ったが、今回はそういう話では進められなかった。何か言われても私が引き受ける、何があっても情報を挙げてもらう方が大切だと思ったという。

写真１　グリーンピア　テニスコート仮設

１　仮設住宅に移って以降

田老のグリーンピア施設内の仮設住宅は以下のような構成になっている。駐車場仮設は37世帯、グランド仮設は２４８世帯、テニスコート仮設は１２２世帯ある。

以下は赤沼正清さんから伺った話である。駐車場仮設には主に大平地区自治会、テニスコート（ここは元テニスコートで12面あった）仮設には乙部、青砂里、下荒谷、荒谷（ありや）など12の自治会の人々が入居していた。グラウンド仮設には小林から中荒谷地区の世帯に入居してもらった。

仮設入居に関して、一人暮らしは１部屋、４人世帯までは２ＤＫ、それ以上や家族の状況によって３ＤＫとした。仮設の場所を選ぶ際に、田老では抽選ではなく、コミュニティを対象にした。宮古勤務の人は西ヶ丘や、ドラ方面に行きたいと希望した人もいた。乙部自治会の人もあちこちの仮設に入った。団地ができてくるとそこへ移動する人も出てくる。

グリーンピアの仮設住宅には、社協のコミュニティーセンターや各区域に集会所が開設された。男性の居住者の方々のために休憩所（父ちゃんハウス）もできている。ここは漁協組合の人達が集まる談笑の場になっている。各仮設には仮設掲示板があり、その都度次のような催し物の張り紙が出されている。

「常運寺のお知らせ、８月14、15、16日盂蘭盆会供養
１座８時30分、２座９時30分、３座10持30分、４座11時30分」

また各仮設脇には倉庫が設置され、希望者はこれを利用している。

仮設住宅での活動

色々な地域から田老のグリーンピア仮設に来た人がいるので、他所から来た人が仮設内に閉じこもらないように、会を作ったりしている。例えば、「シルバーテニスの会」では、岩泉町の方に指導してもらいながらクラフトテープで色々作ったりして交流している。

「ゆいとりの会」は裁縫のできる人が集会所に集まって活動をしていたが、さらに広く交流が広まり、たろちゃんハウスの共同組合に出資金を出し、一組合員となり出店している。

駐車場仮設の集会所の生活支援員をしている**林元睦美さん**に

2012年8月11日にお話を伺った。

宮古市社協の臨時職員として生活支援員をしており、ここの仮説に住んでいて、広さは4畳半が2部屋で、両親との3人暮らしをしている。震災で家と小売り店での仕事を失ったため、緊急雇用でこの仕事に応募した。昨年12月から6か月の限定で、今年4月からまた1年やる。履歴書を出して新規に雇われるか決まる。月給は11万9千円で、社会保険等は引かれる。勤務時間は8時15分から5時15分までとなっている。

集会所での仕事は、福祉センターのセンター長や相談員からの指示でやっている。絵画教室、お茶会などに声かけをして集まってもらう。ボランティアと一緒にやる。企画したことは全戸にチラシを配るが、その都度声かけをした方が来てくれる。戸別訪問はできない。相談員はセンターに2人しかいないが、サポートセンターではお茶のみができるし、マッサージや血圧を測りながらゆく人が多い。

仮設に入った人々の生活

以下は再び赤沼正清さんの話である。若い人は宮古に家を建てて出ていったが、年寄りは皆と一緒が良いと、1人で残っている人もいる。田老の中心地の中町にいたKさんは、盛岡の娘の所に行ったが、知り合いがいないので戻ってきて、6月中旬に仮設に入った。籠作りのグループにも入っており、このグループには8地区の人がいる。

災害援助物資は新里に集められ、各地域に分配された。仮設は平成26年6月で3年になるが、ギシギシしてきた。冬は結露ができる。トイレも凍ると全戸で水が出なくなるので、風呂水を溜めて水を流すなどした。仮設の保守管理は対応が遅いので、個別に会社と契約してやっている。仮設はテニスコートとグランドでは業者が違うので、建て方もトイレなども違う。田老では下水処理が終わっていなかったので、仮設ではじめて水洗トイレを使った人もいる。

震災後の緊急雇用で、社協が生活支援員を派遣した。平成26年4月からは市の単独で配置した。3年目から地域のコミュニティ再建のためというのが主な目的だった。田老では相談員も被災者だ。社協では支援員の人たちに介護福祉士、ホームヘルパーなどの研修を行い、助成金がなくなっても、働ける場を確保できるように援助をしている。平成26年4月から生活困窮者の自立支援を手がけている。

テニスコート仮設ではこの間に死んだ人が2人いる。夫婦で見なし仮設に住んでいた人が宮古に戻り、別々の仮設に入ったが、テニスコートに入った人は自殺した。震災関連死とされた。震災後に亡くなった人は直接葬儀場に行き、一晩そこに安置して、そこから火葬場に行き、午後に葬式を出す。仮設の人は1日か2日安置して火葬をするが、個別の住宅では4、5日は安置しておく。香典も被災者から受け取らないという人が増えた。自分が亡くなって香典を受け取ると、子供たちが返さなくてはならないので受け取らないという。亡くなった後、墓の面倒を子供たちに見させられないと、無縁仏として寺に骨を置いてもらう人もいる。先祖代々のつながりも途切れてゆく。

仮設の自治会

自治会は震災後、被災を受けた地区は解散した。残ったのは、田中、田の沢、神田など山手側だけだ。上荒屋、中荒谷、乙部1、乙部2はなくなった。被災者が仮設に別々に入ったので、会有財産も使えなくなり、整理して解散した。震災後、集会施設ができた5月15日以降にはじまり、それから3か月くらいですべて解散した。活動資料もなくなった所は、復活してもらった。納税貯蓄組合や、漁協組合金庫などにあった貯金も引き出した。

グリーンピア仮設の内、大平地区の人たちはほぼ駐車場脇の大平仮設に住んでいる。37世帯あり、2011年の7月に自治会が立ち上がった。その頃はグランド仮設、テニスコート仮設などは自治会を結成していなかった。その当事、宮古市生活課と社会福祉協議会が説明会に来て、大平地区はいち早く立ち上げた。会長は林本卓男さんで、かつては宮古市商工会議所の支店長をやっていた。現在は田老町地域協議会の会長と、任意団体の街作り協議会の事務局長をしている。

大平仮設は37世帯なので早くできた。グラウンド仮設は248世帯あるので、4つの行政区に分けた。テニスコート仮設は122世帯で、2行政区に分けたが、自治会は1つ。グリーンピア仮設全体では12自治会から人が入っている。宮古市からの人もいる。そのため普段見慣れていない人もいるから様子を見ていた。

テニスコート仮設は平成25年11月4日に残された人の自治会が結成された。25戸出たので、101世帯になった。このときは世帯分離した家があり、民生委員、行政連絡員の推薦があり、代表の名前が必要だったので、事務局や副会長を2地区からそれぞれ5人ずつ出てもらい、準備会を2回開いた。市の助成金は定額が3万円で、1世帯300円の助成を受けて、8万5千円の予算で活動を始めた。年会費は100円にしたが、平成25年度は徴収せず、助成金だけでやっている。自治会活動には保険をかけた。

仮設での活動

ふれあいサロンのような地区内交流の費用は、共同募金に申請すれば助成金が出る。平成25年にはこの助成金を使って地元の住民と仮設の人の交流会を開いた。被災しなかった人たちと被災者の間で壁ができたため、社協が仲立ちをして、修復した。

いろいろな地域から田老のグリーンピア仮設に来た人がいるので、他所から来た人がそこで閉じこもらないように、自発的な会を作った。例えば「籠を作る会」では田老から嫁に行った岩泉の人が指導をしている。また「結い取りの会」は裁縫のできる人が集会所に集まっていた。交流が広まり、販売するには集会所ではまずいというので、たろちゃんハウスの協同組合に出資金を出して、一組合員になって出店した。仮設商店街とサポートセンターの基礎はコンクリート製で強度は強いが、それ以外は杭のみで弱い。

老人クラブは乙部1と2が乙部老人クラブとして一緒に活動しており、私はここの会長もやっている。昔は自治会も乙部青砂里地区として一緒で、事務局長と会計もやっていた。私は役場に入るときに「地域のためにがんばるぞ」と思ったのだ。

2　田老仮設商店街（通称：田老たろちゃんハウス）

グリーンピア専務取締役の上屋敷正明さんは共同店舗の立ち上げ、仮設住宅ができるまでの責任者、総合事務の統括者などをつとめた。

田老のたろちゃん協同組合

理事長の**箱石英夫さん**（昭和28年生）に2013年5月2日に話を伺った。

津波前は任意団体の田老スタンプ会の代表をしていた。会員は39名で、このうち津波で店舗を全壊したのは37名にのぼり、犠牲者も出た。津波後に店作りについて考えていたときに、宮古商工会議所から仮設住宅が1か所にまとまってできることになった。被災住民が買い物にも困るから、仮設店舗を出したらどうか、という提案があった。自分たちで何かできないか話し合っていたところだったので、会員だけではなく会員外にも声をかけた。

写真2　たろちゃんハウス

2011年4月7日に第1回の話し合いがあった。商工会議所から、中小機構からの援助で、仮設の店舗建設が可能と言われた。建設に半年かかるので、その間にテント営業も可能だという。そこで10メートル×10メートルのテント2張りを県に建ててもらい、テーブルによる営業を考えた。

仮設住宅の建設も始まり、最初の入居は5月5日と決まったので、その日に合わせて営業を開始することとした。それ以前はアリーナでの避難生活だったが、仮設住宅は自活が前提なので、移ってすぐに買

い物ができるようにした。

建物の申請やトイレの設置、建物の管理、そして制度を利用するために組合にすることなど、毎週木曜日に勉強会を始めた。許認可の問題、保健所、税務署の問題など解決すべき事が山ほどあった。宮古商工会議所から広田司朗専務が、県の決裁ができる振興局長、市や県の関係者を連れて来てくれた。その顔ぶれを見て、いろいろな人がバックサポートしてくれることがわかり勇気がわいた。

その間に県でテントも準備してくれた。商工会議所なども後押ししてくれた。普通に許認可を取る依頼をすると時間がかかるが、当時は非常事態ということで特別に対応してくれたのだと思う。

心配事は、客が来てくれるか、仕入れは可能かなどだった。私は山崎パンのチェーン店をやっているが、パンのトラックが配送に来てくれるか心配だった。仕入れも物がなく不安だった。ビール工場も山崎パンの工場も被災していたので、全国の工場から集めて配達していたようだ。

こうして7月30日に設立総会を開き、全員賛成で決まった。9月25日にはオープニングセレモニーを行い、22店舗が開業した。その間、1週間ほどセールが続き、イベントなどを行った。スタンプ会員以外では6店舗入った。善助屋も会員になった。

テント開店の際は魚、野菜、アルコール類は喜んで買ってくれた。魚は宮古市場が少し動いていたが、刺身は遠くから来た。

中小機構というのは国の組織で、仮設店舗の建設資金を出してくれた。仮設店舗は1年間は無償で貸し出し、1年後に市に譲渡をするという形式で使うシステムだ。1年過ぎたので、今は市から借りている形式をとり、4年間は使えるし、賃料はない。本建設までの延長は可能という。

今は売り上げが伸びるかが心配で、増えないと維持できない。仮設の人口が減ると困る。街作りの遅さにしびれを切らし、地区外に引っ越し、または中古物件を買って出てゆく人もいる。

津波前の田老は平成23年1月1日現在で1千593世帯、人口は4千342人だった。24年1月1日には1千449世帯、3千901人。25年1月1日で1千418世帯、3千669人となった。

これは住民票統計なので、実感とは違う。店舗としては配達、移動販売などを展開している。売り上げは震災前の6、7割で、店舗ごとに違う。被災していない人々のために、個人で旧市街地にプレハブの仮設店舗を出したり、配達をしている業者もいる。

今後街づくりにどうかかわるのか、商売を根本的に見直す必要がある。これまでは店舗兼住宅でやってきたが、これからは高台移転で店舗兼住宅とするのか、または嵩上げした土地で店舗兼住宅とするのか、あるいは高台に住み、店舗は嵩上げ地とするのかなどである。考えは別々でも、一致しているのは個々の店舗ではなく、商店街としてやりたいということだが、廃業を考えている人もいる。

これらは市の都市計画の問題なので、今後は要望をどう出すかが課題となる。国道沿いだから、嵩上げ地での再開の要望が多い。しかし理美容業など業種によっては悩んでいる。

広場があるとイベントができて集客が見込めるので、相乗効果が得られる。ポイントを復活し、寄附などを利用して、機械を買い、復活したい。

今の仮設店舗での現実問題としては、トイレがB棟のみなので、2階や他の棟にも設置したいという要望がある。とくに冬場が問題だ。テント営業の頃はバリアフリーのように入りやすかった。この仮設建設の際もお願いしたが、B棟だけがバリアフリーになった。そのためそれ以外は自前で行った。入り口は各棟に2か所あるので、それぞれに付けることにした。

組合賦課金は1階は高く、2階は安くした。テント営業は17店舗で、こうした方々を優先し、その後店舗に入りたいという希望者には2階に入ってもらった。看板は途中から計画し、市や県に要望した。買い物などをして応援したいのに場所がわからないという声もあったが、看板が設置されたのは今年の3月だった。

昨年10月から緊急援助雇用で職員を置いた。本設は各店舗での聞き

取りが必要で、勉強会はしている。

土地区画についても聞き取りが必要だ。月に1回の割で本設に向けての意見交換はしている。時間がかかりすぎると、本設までに次の仮設が必要という声もある。私は仮設に6人家族で住んでいたが、3世代同居という事もあって家を建てた。仮設は3K、2K、1Kのサイズで、高齢者や子供の問題で引っ越す人が多い。

組合は仮設店舗の維持運営のためのものだったが、街作りにいかに関わってゆくのかを検討することも必要だと思う。4つのパターンの中でどうするのかを考えるべきだ。街作りが早く進むように、昨年冬に意向調査を行ってきた。半数以上が地区外移転を希望していて、ショックだった。それまで店舗を存続できるか頭痛の種になっている。

「ゆいとり」の前の寿屋は崎山に出て、ここで営業を再開している。崎山地区には59戸建設予定だという。宮古病院に近いから決めたという人もいる。田老地区には宅地造成された土地が少ない。海に近いところが良いという。乙部高台も良い場所だが、造成はされていない。

たろちゃんハウスはテレビ、新聞に出ることが何度かあり、人が来てくれる。11月に1店舗空きがあって、そんな折にゆいとりから話があった。「ゆいとり」は仮設の集会所でやっていたが、物作りに場所を使うので、ここなら事業主としてできるということで、理事会でも機関決定をして、入居してもらうことにした。

たろちゃん仮設共同店舗の今後

たろちゃんハウスの事務職員をしている**鳥居茂さん**（昭和29年生）から、2015年2月10日、12月25日にたろちゃんハウスのこれまでと今後について話を伺った。

2012年10月からたろちゃん協同組合の事務として働いた。たろちゃんハウスでは22店舗営業しているが、震災当時に商売をやれる人たちが組合を作って始めたので、入れ替わりはない。これから街が復興していくのに合わせて、グリーンピア三陸宮古敷地内のこの仮設店舗から出て行くことになる。ただ、街に出て行くにも人があまりいないので、そのタイミングが難しい。人口が減っているので、これからは厳しいと思う。街の中心がなくなって、分散するのも商売を難しくする要因だと思う。高台と中学校前と総合事務所前に約30店舗が分かれる。住宅は高台だが、店舗は国道沿いの嵩上げ地が多い。やはり人口が少ないというのは厳しい。

店舗の再建の見通しはまだ立ってない。グループ補助金が使えないかということを考えている。グループ補助金に関してはたろちゃんハウスの店舗のみではなく、たろちゃんハウスに入っていない店舗も対象になるので、商工会議所に指導をお願いしている。

組合の仕事としては仮設店舗の維持管理や共同販促などだ。仮設店舗から少しづつ出て行くことになり、維持していくのが大変だ。建物は中小機構から宮古市に譲渡され、組合が無償で借りている。維持管理経費は変わらないので、人数が少なくなればなるほど残っている店舗の負担が大きくなる。個々のタイミングで出て行くことになるが、来年が勝負だと思う。国道筋は住む人が少ないので、どうなるか不安だ。

扱ってる商品は、地元の人たち向けの食料品、日常品雑貨、理美容が中心で、観光客向けのものは少ない。利益を上げられないところでは商売できないので、苦しいところだ。後継者がいない場合は、自分たちの代で終わりにするということを考えている人も少なくない。震災前に商売していた人が、震災を機にやめた人も多い。田老地区のポイントカードがあって、30店舗ぐらい参加していたが、そのなかで被災しなかったのは2店舗だけだった。

各店舗が再建して、たろちゃんハウスを出て行っても、組合は存続し、組合に参加していない店舗にも呼びかけて、一緒に活動していきたいが、どういう形になるかはわからない。今は自分の店を再建することで精一杯なので、新たな商店街について考える余裕はないと思う。商店が分散し、1か所で買い物ができるということにはならないので厳しい。高台からは車で買いに来ることになるので、車に乗ったら宮古にそのまま行ってしまうのではないかという心配もある。

（2015年12月25日に再度伺った。）

組合事務員の仕事は27年度いっぱいで終わる予定だ。今の店舗数は18で、田老から出て営業している人は1人だ。廃業した人は1人で、体調を崩したために5月末で店を閉めた。それ以外は田老で商店を継続しようと考えている人たちだ。昨年9月に田老地区の30店舗で中小企業庁の「グループ補助金」に申請した。田老地区の商業者は一緒にやろうと話がまとまり、皆で申請した。これが認められたので、それぞれ事業に着手したところだ。現在設計中の人、建設中の人など準備段階は様々だ。補助率は認められた事業費の4分の3だ。残りの4分の1は自己負担となる。被災前の店舗を復旧する費用が対象で、それ以上の額は出ない。店舗兼住宅を希望する者は、店舗分のみが補助の対象となり、住宅分は自前となる。住宅の場合は国、県、市から合わせて500万円の補助がある。

嵩上げ整備されたところは、それぞれ新たな土地が割り当てられ、その土地に店舗を建てることになる。漁協近くに新しくできる道の駅付近には3、4店舗予定され、他は高台、嵩上げ地の割り当てられた土地に建てる予定だ。漁協の前当たりにイベント広場と駐車場ができる計画とのことだ。津波が恐いので住宅は高台、店舗は嵩上げ地にと言う人が多い。高台には消防署、診療所、保育所が建設される予定だ。

ここの仮設は来年度いっぱいくらいで閉鎖したいと考えている。ここでやめる人が出てくるかもしれない。町に移っても客が来てくれるか心配だ。新しくできる三陸道は山側を走る計画なので、交通量が減って商売が成り立つのか、心配の種はつきない。

田中和七さん（昭和29年生　中町→グリーンピア仮設住宅）２０１４年4月22日に組合事務所で話を伺った。

中町に家があった。大正12年に祖父が菓子屋を始めて、私で3代目。昭和8年に被災したが、昭和9年7月に再建した。昭和8年の津波では祖母と叔母を亡くした。祖父は再婚して父の兄弟が4人増えた。家族だけで11人いた。職人も雇っていたので、当時としては大所帯だった。

店舗の再開

２０１２年3月12日に再開した。11日はどうしても無理だった。店だけは元の場所の近くに建てて、住居は乙部の高台のどこかになる。

中町の自治会はみなさんバラバラになったために解散になった。ヤサラに近いことはやった。預り金というか共有財産があったので、それを使ってお別れ会のようなことを2年目の暮れにやった。グラウンド仮設は今まで別地区だった人たちが集まっている大所帯のところなので、自治会は発足していない。大雪が降って、やはりみんながあったほうがいいとは思っているだろうけど、言い出しっぺがやらなくてはいけなくなるので、なかなかできない。どこもそうだと思うけど。だけど、例えばバラバラで雪かきをすることが如何に効率が悪いかということを知っているから、どこからとなく共同でやることもある。高齢者の家の前は近くの若い人がやっていた。

まちづくり協議会は、仮設を出た時のことや、商店の再建に向けての話し合いをしている。土地のことや、金融関係からの借り入れや、グループ補助金、宮古市の支援制度などを使っての再建の話をしている。人口が減少しているから、どれぐらい持続できるかわからない。

まちづくり協議会は、地元の人の意見をまとめて行政やURに伝える役割がある。情報がないし、どうしても専門的な力を借りなければいけないので、誘導されているのではないかという懸念を持っている人もいる。やはり、引いて見ている人もいる。URも企業だし。まちづくり協議会や部会では、30代ぐらいの若い人たちがその場に来ないのが心配だ。これから30年後をある程度見据えた人たちがまちづくりに参加してくれたほうがいい。俺らはあと20年もないからね。消防にも参加してほしいし。街に対する思いみたいなものは、みんな持っていると思うし、仕事もあるし、そういう場に慣れていないと出られないと思う。出ると何か責任を押し付けられると思われんじゃないかとか。

嵩上げも0～3メートルだったのが、0～1メートルになったり、限りなく0になった。だったら早く家を立てるようにできればいいのにと、今は思っている。時間はみんなのやる気を削ぎ落としてしまう。気持ちがみん

な折れている。3年経つと。最初のころの勢いは怒りもあったし、それをエネルギーに変えていた。怒りの捌け口そのものも見失ったり、気力そのものが削がれていると思う。特に今は沈滞期だと思う。これまでの情報は全部出し尽くしている。あとは自分の面積や場所を知りたいのに、それが提示されていないので、その先に進めない。補助金を申請するにしても、面積すら決まらないと計画すら立てられない。自分はお菓子を作っていて、工場と店舗と住居で住所を3つも持っているので、なんか地に足が付いてない。気持ちも落ち着かない。みんなもそうだと思う。商店主の人たちを最後まで見なくてはいけない役にもついているので、仮設にいたほうが便利。

今後、たろちゃんハウスのような共同店舗を考えていきたい。だけど共同店舗の中の店が減ると、その他の店舗でそれを補わないといけないので、現在は自立型店舗で集まって建てる、自立再建集客型というのを考えている。総合事務所と中学校前と高台の3つの案が出ている。もとの田老の街で罹災証明書をとれる人たちは、1つの組織として見ようという計画を立てている。流されなかった人たちから「早く帰ってきてね」と言われると嬉しいが、どっか入れる土地を見つけてほしいとも思う。ただ3年も経つとグリーンピアが中心になってきているから、自分たちは捨てられたような、溝というか壁を感じる。グリーンピアに買いに来ないですもの。いろんなイベントで芸能人とかが来ると、来るけど、それも遠慮がちになる人も結構いる。だから、最初にやらなくてはいけないことは、そういった壁を取り除くことだと思っている。今、グリーンピアで商いをしている人たちが、トラックでもなんでもいいから、下のほうに来て、元の街の人たちに買い物してもらうイベントを計画中。グリーンピアにいてもやはり壁を感じているし、お互い感じていると思う。個々で見ていくと付き合いは深いけど、全体でみるとそういうのがある。歩み寄るというか、共通のお祭りとかあるときは、違和感なく話せるけど、5月のお祭りもないからなかなか難しい。お祭りのときにお魚の天ぷら揚げる習慣があって、今は何個か注文がある。昔なら店に買いに来たんだけど、店はグリーンピアだから配達というのも、おかしくはないけど、そういう時代なのかなと思う。油代にもならないけど、そういう人たちに助けられてきたから、これからも大切にしないといけない。少なくても、あと2年でグリーンピアを出るので、自然発生的に新たな付き合いができるようになっている。安住の地がないと、寛容になれない人が増えている。言葉が気に食わないとか。だから、私は上の町とか下の町とか言わないですよ。元の町って言わないと。上っていうとグリーンピアのことを言っているし、自分達自身も下って言っているのに、「自分達のことを下って言った」とかいう。些細なことだけどそういう声が聞こえてくる。些細なことなんだけど。

昭和8年の津波

昭和8年に、防潮堤を青砂里まで直線で作る計画があった。だけど水門を作る技術がなかったから、への字型になった。だから、青砂里に住んでいる人たちは「田老の人たちは自分たちを見捨てたんだ」って、消防団とかやめた人もいた。そんな時代があったけど、そういう変な壁は時間が解決してくれる。野原はもろこしやキビ畑とかがあって、湧き水もあって大雨が降るとすぐに水溜りで洪水になった。三鉄が通ったときに、そこで出た石捨場になって、わかめとか昆布を干すのにちょうどよい場所になった。そのうちに浜小屋ができて、そこに住むようになって、住宅ができて、1軒が2軒、2軒が6軒のように増えていった。坪単価が3千円から、坪1万円になった。そのうちに整地して住宅用に売ったりしていた。震災前は坪5万円だった。昭和40年代半ばぐらいの話だ。昭和8年のときは津波が来なかった沢沿いにあった青砂里とか、乙部の山際の人たちは、井戸水を汲んで生活していたようだ。そうした人たちが、水道も通る野原地区に降りてきた。結果的には3軒ぐらいを残してみんな下がってきた。下がってきたら今度の津波がきた。街の分家の人たちも入ってきた。浜をやっている人たちは重い船を上まで持ってきてというよりは、浜の近くに住むほうが楽。浜小屋といっても、仮眠室も応接室もあったりして、普通の家よりも良い

ところもあった。

津田写真館　津田重雄さん（昭和15年生）２０１２年８月15日に話を伺った。

昭和８年３月３日と、前の年、１年後の津波のガラス乾板の写真が13枚残っている。元の店は役場の近くで、善助屋の斜め向かいだった。この写真は先代の津田重一郎（今年で25回忌になる。60歳くらいで亡くなった）が撮った。

営業店舗は田老町内を転々とした。津波当時の店は館が森にあった。津波の時は車に乗っており、野球場あたりを走っていたら、ドンときたので、車が壊れたのかと思った。知人が電柱が倒れると教えてくれたが、家まで帰れた。

ラジオで最初は30センチ、次に3メートルと言ったが、電気がパチンと切れたので、「これはだめだ、逃げっぺし」と言い、車で逃げた。犬が老衰で動けないので、それを抱えて、家内と逃げた。道の駅まで行ったので、津波は見ていない。東京の娘たちはテレビを見て、「お父さんは死んだ。お父さんは哀れだ」と泣いたという。道の駅で見たテレビには地元のことはなかなか出てこない。ここには情報センターがあり、いろいろ見られたが、電話がつながらなかった。水沢まで行けば携帯がつながるので、グリーンピアに来てから2～3日後に娘たちと連絡が取れた。グリーンピアでは15日の夕方に電気がつながった。

金庫は見つからないと思ったが、警察に届け、鍵の番号なども言っておいた。自衛隊ががれきを片付けて見つけてくれた。金庫は山盛りになって、警察の仮設においてあった。警察は金庫を壊して、すべての中身を確認する。少し水が入ったようで、湿っていた。

鳥獣保護員と交通指導員をやっている。交通指導員は来年で45年になる。昭和43年に施行されてからずっとやっている。行政からの依頼で、千人に1人の割合で選ばれる。田老の人口は当時鉱山も含めると8千人だった。今は宮古市の隊長で、隊員は28人いる。年に１２０日朝街頭に出る。８月は1日から10日、17日からは金、土と出る。ほぼボランティアで、権限はないので、あくまでお願いをするレベルだ。

3　田老仮設保育所

田老の仮設保育所で所長をされている**満山明美さん**（昭和29年生）から、２０１２年８月20日に話を伺った。

保育所には45人いる。ここの仮設保育所に来てからは40人台が続いている。津波前は73人で、いつも70人以上いた。職員も津波前は14人いたが、今は保育士は5人で、給食係が2名と私の8人でやっている。2日前にも地震があったが、このときは迎えが早かったので、次の避難場所への移動をしたのは半分くらいの子供たちだった。

震災当日

3月11日は年長児を除いて午睡中だった。年長児は卒園間近なので午睡はしていなかったため、手をかけずに済んだ。小さい子を泣かせないように着替えをさせ、3歳児までは手をかけて、防寒具をつけさせた。年長児は防寒着を着せて外に出た。着替えに時間をかけすぎたという思いはある。

いつも練習の時は歩道橋が生きていればそこを渡ってゆくと決めていたので、そこから第3避難場所の公民館へ行った。中へ入っても大丈夫と言われたが、揺れてガラスが割れると困るので、外にいたが、津波が来たので山の方へ走って逃げて、ぎりぎりだった。歩けない子は負ぶい、または誘導車に乗せた。

逃げることに関しては、毎月1日を安全の日として、子供には「津波の練習の日」として、練習をさせていた。その際には少しずつ走らせていた。それの仕上げが3月だったので、「津波」「逃げる」という言葉に子供たちは慣れていた。誘導車には3、4人乗せた。支援児は走れないので、同乗させた。国道を渡る必要があったが、消防分団の人が誘導してくれたので、一気に渡れた。練習では急ぎ足で4、5分だったので、それくらいで行けたと思う。地震のあと、物が落ちないか確認し、着替えさせるまで10分くらいかかったと思う。逃げ口の確保もした。

この揺れでは逃げなくてはと思った。前々所長からの引き継ぎで、ここは津波の地域と言われていたので、毎月1回練習をしていた。職員が必死なのを見て、泣く子もなく皆ついてきた。保護者が来れば確認をして返したが、そのために被災した子が2名いた。早くに帰った子たちがいたので、全員だったら山の斜面を駈けきることはできなかった。自分で走れる子が多かったのはラッキーだった。練習していた第2避難場所の裏山までの距離は200㍍だが、自分で走ろうと言って、大きい子には先頭に立ってもらい、職員1名が先頭について、1人が着けば、次の子に手をかけるというやり方をした。

以前から勉強会をして、課題を出して次々とやっていた。田老に来て5年目、所長になって1年目だった。引き継いできたことは身についていた。その前にいた町中保育所では、津波の練習はやっていなかった。市内から来た人は、「安全の日」を知らないので、総合事務所からのアドバイスや、訓練をして、自分たちで勉強もしてきた。

第2避難所に行ったら、孤立するとずっと思っていたが、地域の人もいるから大丈夫と言われた。練習はここでやるが、年に1回は公民館まで行く練習をした。国道を渡るのは大変という思いはあったが、それも考えて練習をした。

2日前の地震の時に練習だから行こうと、公民館まで行き、休ませてもらえた。また人もいたのが安心材料となった。

避難用リュックの中に何を入れるか決め、それらを入れて誰が持っても良いようにしていた。当日はそれを外に出し、その後子供たちに手をかけた。おむつ、タオル、毛布などを持って逃げたので、これはよかった。練習だけは継続するというのが、ここの保育所の伝えだった。

駆け上った山の上の墓地に待機した。足下に水が渦を巻いていたのは見ていた。子供たちをできるだけ山の上に上げて、斜面の一番上まで上げた。人の邪魔にならないように、空いている場所にビニールシートを敷いた。毛布1枚では足りず、常運寺からタオルケットをもらい暖を取った。誘導車が流れてしまい、常運寺からもらったサラシを負ぶい紐にできた。寺に迎えに来た保護者の靴が濡れていたので、寺でもらった足袋で助かった。翌日近隣の山が火事になり、サラシを裂いて子供たちが煙を吸わないようにさせた。11日の夜は30人いたが、その日は返さず、保護者3世帯も一緒にいた。

翌日は火事のため、避難所となった北高へ移動するよう指示があり、4、5人残った子を連れて1泊した。2泊後に職員が解散した。幸い避難した児童はすべて無事に家族に渡すことができた。被害は7名の家が全壊、1名が半壊、1名が父と姉を亡くした。

保育所の再開

保育所は3月28日に再開した。北高へ行く途中の近隣児童館での再開だった。卒園児を送り出したいという思いがあり、前の1週間はその準備と父兄への連絡をした。卒園児の1人が亡くなったが、母が代理で式に出席した。家が流れた子もいたので、思い出を作るため、同級の子から写真をかき集めてパソコンで作って記念に持たせた。いつものように大福餅を持たせたいと思い、日数のない中手配もできた。私服で良いからと皆を集め、お祝いをして卒園させた。

正職員4名が避難所の手伝いをする。在園児のいる北高では12時間交替で寄り添い、引き継ぎをしながら手伝いをした。

再開にあたり、公民館の電気釜を借り、野菜などを分けてもらい、御飯と味噌汁の給食をここで出すことができた。初日は大勢来たが、次の日は数名だけだった。瓦礫の中を通らないと児童館まで来られないので、子どもがいやだという。そこで検討後、ホテルの240畳ある大広間の半分を区切って使わせてもらい、遊ぶのも食事もすべてここでできた。大広間に来てからは36~7人が戻った。

仮設保育所

9月15~6日に仮設保育所ができて、20日頃から再開した。これ以降は保育の面では問題はない。しかし子供たちには夜泣きなどが見られた。避難所では親と一緒にいたり、地域の人に遊んでもらえて、保育所に来ない子もいた。家族が亡くなり、子どもを離せない親もいたが、

訪問して寄り添った。親の様子は送り迎えの際に声かけをして、表情などを確認することで把握した。

今は保育士が減って大変な状態が続いている。また支援の人たちが多く来るので、それへの対応に時間がかかる。支援を受け入れなければという思いと、子供たちの元気な姿も地域の人たちに見せたいとの思いで、何も無いという日はない。

支援児とゼロ歳児の部分での職員が足りず、今はいっぱいいっぱいで、超過勤務でどうにかやっている。待遇改善をしないと保育士が来ない。園児の数が減ったので、職員の数を減らされることは、ケアが難しい。前は年齢別の保育をしていたが、今はそれができないでいる。でも一緒の保育で、年長の子が年少の子の面倒を見ているので、それも少子化の時代には良いかなと思う。保育士1人がトイレなどに出ても皆で見られる。日によって年齢別にしたり、一緒にしたりして、保育士がそれぞれの子の動きを見ている。支援児は1施設おおむね4人。ゼロ歳児は希望があるが、地域では入れない子もいるので、職員の数が足りないので増やせない。今は無理なくやっているが希望はある。

今は職員不足のため、掃除など大変なので、給食担当者にも手伝ってもらっている。3~5年はここにいることになると思う。仮設の人たちの居場所が決まってから保育所も検討することになると思うが、見通しはまだない。「保育園の歌」は楽譜が流れてしまったが、キチンと次に伝えたい。

4　田老郵便局

山根登さん（田老郵便局局長、平成17年から勤務）に2013年3月28日にお話を伺った。

行動の起点は奥尻の経験にあり、長い地震は津波が来ることが頭にある。妻の実家は田老なので、逃げる場所はここと言うことは思っていた。

3月11日とそれ以降

当日大きな地震は3回あった。1回目の長い揺れで津波が来ると思っていた。社員は3人いた。建物が老朽化していたので外に避難した。揺れが収まったので、中に入って片付けているときに再び揺れた。停電で通信手段がなく、自分の目と耳で確認し、行動した。3人一緒に行動しようとここにいた。避難者が徐々にやって来て、ゆっくりと人が増えていった。最初の地震の時は郵便局の後ろ側に避難したが、2回目には局の正面に出て、逃げてきた人が足早になってきたのを感じた。自動ドアも動かなくなった。お客様が局内で犠牲になってはいけないとギリギリまで待った。高台に避難した人が騒いでいたので、外に出た。騒いでいる声で津波が来るのがわかり、寺へ走って逃げた。女性の契約社員が保育所にいる子供が心配だというので、迷ったが迎えに行かせた。しかし途中で津波が来て保育所まで行けなかった。本人は逃げられたか心配だったが、9時頃無事を確認できた。小学校、寺、ここを行ったり来たりした。

津波が来て、街が壊れるのを見て頭が真っ白になった。通信手段もなく、しばらく呆然としていた。避難した人の悲鳴を聞いて、カメラも使えなかった。何ができるか考えて、一夜を明かす人の手伝いをしようとした。保健センターで入院患者の手伝いをした。ここへ重症患者を運んだ。高齢の患者でいっぱいだった。ベットのまま運ばれてきた。次にセンターから使えるものを運んだ。検尿コップには茶を入れた。ストーブや灯油の運び出しを手伝った。職員が1人休みだったので、安否確認をした。真っ暗で家に帰れず、ここで一夜を明かした。余震がひどくて眠れず、服のまま座布団1枚でここにいた。高齢のおばあさんと娘さんが取り残されているのがわかり、3人で救出に行った。ぶら下がっている電線が怖かった。屋根までたどり着き、声をかけて励まし、川になった道路まで腰まで水につかりながら降り、側溝を手探りで測りながら、おばあさんをおんぶして、道を渡ってきた。ガソリン、ガス、灯油が混じった臭いがした。プロパンが漏れてシューシューという音がして、引火しないか怖かった。娘さんは元気だったので1人で歩かせた。おばあさんを無理矢理引っ張り上げておんぶして逃げた。転ぶとだめだと思い、ゆっくりと渡った。恐かったが、何とか助

けられた。火事でもあったらだめだった。

翌日帰ったが、妻の実家が田老なので探したが見つからなかった。グリーンピアや実家、北高の遺体安置所まで行った。3日過ぎるとだめだと思っていたので、生存の気持ちをあきらめながら安置所に通った。朝から夕方まで探しては帰る日々だった。田老の町にはあちこち遺体があった。道路端にも遺体があった。防潮堤にも遺体があったが、見せてもらえなかった。3か月の節目に義理の母と甥の死亡確認のはんこをついたが、自分の意思で届けを出すのはつらかった。

自衛隊、警察のお世話になった。ものすごく助かり頭が下がった。様々な捜索をしてもらった。寒い日が続き、粉塵がすごかったが、黙々と作業をしてもらい、その姿勢がすごかった。土日は身内捜しをやっていた。

1か月後くらいに実家に行った。田老を優先して家のことは何もできなかった。実家の兄と弟は無事だった。実家でも自分のことを心配してくれていた。

郵便局の再開

郵便局の財産をどうするのか動き回った。郵便局を再開するためにどうしたら良いかばかり考えていた。うれしかったのは、田老地区の人がいつ郵便局が再開するのか聞いてくれたことだった。2011年の10月5日に今の場所で再開できた。半年ぶりだった。行方不明者の情報は3か月と知っていたので、3か月で再開したかったが、無理だった。局員には通勤可能な場所から通ってもらった。

今感じるのは、普段の生活がどれだけありがたいかと言うこと。水、食べ物、石油、暖かい生活を今感じることができる。父は田老に住んでいたが、今は仮設にいる。避難所で父がどうしているのか見ながら仕事をしていた。配給の時、腰の曲がった人たちが並んで食べるものを待つ姿を見るのはつらかった。

今思うのは、この仕事をさせてもらっているのは、地域の人のおかげだと言うこと。震災でこのことに気づかせてもらった。郵便局が民間会社になり、宮古市の配慮で市の施設に入れてもらえたのはありがたかった。仮設では用が足りず、ここまで足を運んでもらえるのもありがたい。こういうことを職員に伝えることで、彼らも良い仕事ができるのだと思う。震災後はお客様の数が半分に減った。お客様はこちらが言ったことを覚えてくれているので気をつける。

郵便局の仕事は半年後に再開するまで日の出郵便局など他の支局でやってもらっていた。工事などが伴うので、1支局のみの問題ではなかったのだと思う。本社へ行くと決裁の印鑑を押す所が1頁の半分くらいある。会社が分かれたことで手間取った。5月下旬には内諾を得たが、再開には至らなかった。田老の人たちにいつ再開するのか、聞かれるたびに肩身が狭かった。所長にも「ここを貸すと言ったのだから早く再開しろ」とせかされた。

震災前は郵便局、信金、漁協と金融機関が一緒だったが、黒字の局で稼げるのでありがたかった。再開で難航したのはATMだった。外に設置するには津波地区としての縛りが多かった。土日にも使えるようにしたかった。10月の再開の際にはATMの設置も間にあった。組織が大きいので小回りはきかないが、職場がない間も解雇されずに働けたのはありがたかった。再開まで毎日あちこちに動いていた。ATMの移動郵便車で山田や大槌まで行っていた。自分のやるべき事務処理は他局でやってくれるので、職員が帰った後、10持頃から2、3時頃までかかってパソコンで処理をした。ここを借りられたのも今までの財産だと思う。

将来の郵便局の場所は未定のままだ。住民は高台に移転の予定になっている。道路は40メートル内側に入って嵩上げされるという。街の中心にいるべきか、集合住宅の一角にするべきか、選択を誤りたくない。6割の人が満足できる場所に決めたい。お金を下ろして使える場所がなく、住民の数も減ってきている。地域や商店街の皆さんと一体でいたいと思う。街が変わる姿を見たかったが、来月に転勤が決まっているので仕方がない。その後の姿を見に来たい。

震災のマニュアルは機能しなかった。ここは回線がつながらず、指

示を仰げないので、自分で判断せざるを得なかった。チリ津波の際は万一の場合を考え、濡れて困るものは机の上に、重要なものは車の中に入れた。きりがないのでどこかで線引きをしなくてはいけない。その際は命を守ることを最優先にする。下手に指示を仰ぐと後手になる。財産よりも命が大切だとつくづく思った。悔いを残さずに生きてゆきたい。

5　仮設での暮らし

山本佳子さん（元は荒谷、支援員）に2012年8月18日に話を伺った。

仮設暮らしをしている。家は診療所の前だった。当日は漁協勤めだったので、加工場にいた。堤防の海側での作業中で、休憩のすぐ前だったと思う。窓がガタガタ揺れて「あ、地震だ」と言って、皆で外に出た。工場長から「堤防の外へ出ろ」という指示があった。5分くらいそこにいてもずっと揺れていたので、自転車を置いて走って家に戻った。大事な物を2階に取りに行き、通帳、印鑑、携帯を持ち、下に降りたが、まだ揺れていたので慌てた。スポーツバックに子供たちのウインドブレーカーなどを入れ、飴、パンなどの食料も入れて、外に出た。

それでもすぐに逃げず、隣の人と話をしていたら、川戸屋さんの方向から白い煙が上がり、「火事じゃないの」と言っていたら、黒い煙が見え、赤いトタン屋根の流れるのが見えた。それから「津波だ」と言って熊野神社に逃げた。隣の家のじいちゃんもそこで話をしていた。診療所の方から「津波が来た」と聞こえ、ローソンの後ろ側の堤防から津波が来た。ばあちゃんは熊野神社の手すりにつかまり、膝が濡れたくらいで助かった。じいちゃんは助からなかった。

神社の階段の途中に車いすの人がいて避難路をふさぎ、Kさんのおじいさんはそこを通れず、遠回りをしていて逃げられなかった。山の方で火事になり、ロープを伝って下に降り、鉄路に出て、寺と小学校の方向にそれぞれ逃げた。とても寒かった。中学生は途中で助かったのがわかった。先生方も寒さ除けにと学校の暗幕などを外してくれた。山の方の人がおにぎりをもってきてくれて、1個を3人で分けた。次の日は小さい子と年よりに先に分けた。夫の弟が迎えに来て、お父さんと会えて、ふれあい荘に逃げた。

おじいさんはどこかで誰かが引っ張ってくれていて助かってほしいと願っていたが、消防署近くで見つかった。おじいさんは私たちが逃げるのを見ながら流されたと思うと、胸が痛い。それ以降はおじいさんを探しに、ふれあい荘から家まで毎日歩いた。

今は仕事も見つかり、忙しくしていて忘れているが、お風呂に入っているときなど、あの時こうしたら良かったのではとついつい思ってしまう。姑とも一緒に住んでいるが、彼女は自分の夫と妹を亡くしているので、大変だと思う。しばらくは外に出なかった。避難所にいれば知り合いがいたが、グリーンピアに移ってからは部屋をもらえたが、部屋から出なかったので、心配した。散歩とか、何かあるときは出ようと誘ったが、出なくなった。

逃げるときは長靴だなと思った。実家の親を探しに行くにも瓦礫で大変だった。実家は田老の大平地区にあった。母は仕事で山田に行っていた。父はタクシーの運転手をしていて、連絡が付かなかった。父は青砂里で人を降ろし、本社に戻ろうと考えたが、三王閣の方向にハンドルを切った。津波が岩にぶつかり、目の前に波しぶきが上がり、前方をふさいだ。もうだめだと思ったという。後ろに消防車を見たがこれはだめだった。三王閣の工事現場で1泊してグリーンピアに行ったという。会えたのは1週間後だった。

自分がこんな津波を体験するとは思ってもいなかった。今回の地震が来たとき船酔いのような感じで、津波が来るのかもしれないと思った。あんなに大きな地震ははじめてだった。おじいさんたちからは家の所までは津波は来ないと聞いていた。おばあちゃんの妹は熊野神社まで逃げたが、トイレに行くと自宅に戻り、流された。一度逃げても忘れ物などを取りに行って命を落とした人が何人もいた。1人になるとついつい思い出してしまう。おばあちゃんたちは外に出ていたが、私がもっと早く家に帰っていれば助かったのではないかなどと思ってしまう。

仕事場の工場長は皆に逃げろと言ってくれたが、自分は助からなかった。まだ見つかっていない。

夫は宮古でタクシー運転手をしている。鍬ヶ崎の本社からタクシーを移動させていた。パークホテルまで行った。途中下るときに津波が目の前まで来て、あわててバックで戻って逃げられた。その後自家用車で樫内まで来たが走れず、車中で夜明けを待ち、防潮堤を歩き、自宅を見に行ったという。その後、小学校の体育館で再会した。お互い心のどこかでだめかもと思いながら涙の再会だった。

山本祐子さん（昭和49年生、元は乙部、支援員）に2012年8月18日に話を伺った。

夫（光広、昭和34年生）は漁協の従業員（潜水士）で、中間育成センターで仕事をしていたが仕事がなく、出稼ぎに出ている。子供は2人で息子の拓実は中3、娘の怜奈は小3になる。

当日は部品組み立て工場で働いていた。働き始めて5か月目くらいだった。昼食に家に戻り、息子の様子も気になったが学校からの連絡はなく、仕事に戻った。かばんに入っていた子供のゲームを家においた。職場には自転車でも通えるが、車で行った。

工場はプレハブなので、地震が来たときはガタガタ揺れた。若い人は机の下に隠れたが、先輩社員から「外に出るように」言われて、開いた非常口から外に出た。ものすごい音がした。家族に高齢者のいる従業員が津波の音だと言った。工場長の指示で車を移動させた。子供のいる従業員が「子供を迎えに行きたい」と言ったが、社長が「だめだ行くな」と言った。

家がトンネルのそばにある従業員と、子供が小学校、中学校に通っている従業員と私の3人で、真っ暗な三陸鉄道のトンネルを携帯を握りしめて歩いた。トンネルを出ると田老は瓦礫と化していた。小学校までたどり着き、子供を探した。ちょうど下校時刻なので娘はだめかもしれないと不安を抱えながら、子供たちが避難しているところへ行った。娘を探せずにいると、娘の方が私を見つけてくれた。娘の手を握り、連れて帰ることを先生に伝え、息子がいる中学校へ線路を歩いた。墓地に登ると息子たちがいたが、中学校では宮古市の指導で返さないと言われた。子供たちは総合事務所の1部屋に集められ、1晩泊まった。小さなおにぎりを2人で分けるように言われ、娘は食べなかった。「もったいなくて食べられなかった」と話した。

翌日「帰れるか自宅を確認をするので、娘をお願いします」と息子の担任にお願いし、線路沿いを自宅のある方に歩いた。車にエンジンをかけ、自宅を探した。どこまで行っても自宅がない。戻ろうとしたとき、近所の人から「俺の婆ちゃん知らないか」と声をかけられたがわからないと答えた。火事のあった山に足が不自由な人と2人がいたので、消防の人に3人が山にいることを伝え車に戻った。そこには夫の姿があった。夫は火事のため田老に降りられず、職場（水沢）と田老を往復していた。私の上司に女性陣は無事と聞き、ここに来たのだという。津波のあった日の夜、夫の同僚に聞いても夫のことは不明だった。ただ2時から潜ると聞いていたと言われ、夫はだめかもしれないと思っていた。息子には「2時から潜っているから、だめかもしれない。覚悟をしておいて」と話した。息子は静かにうなずいた。

夫はなぜかその日に限りいつもより早く現場に行った。作業する人たちも「なーに来たら2時って言ってねーで早くやっぺーし」と言って、1時間早く潜っていたため、夫の他、作業員たちも無事だった。

地震があったのは、職場に戻ってきて少したったときだった。同僚の女性に「津波が来る。早く上がれ」と叫んだが、なかなか来なかった。水沢の知人に私の「実家に行ってみろ」と言われた。実家は無事だった。私の母は、下拵待で畑作業をしていたときに地震があった。近くの山に登ろうと考えたが、ラクーター（電動）に乗り家に向かった。一瞬の判断が遅ければ津波にのまれていた。孫たちは「ばーちゃんは津波に勝った」と言っていた。

知り合いから「お前の家は先につぶれた」と聞いた。どこを探してもうちの物とわかるものはなかった。折れ曲がった娘の自転車と息子の写真が1枚だけ見つかった。娘を証明する物が何もなかった。夫の

母の形見を流してしまったのが心残りだ。なぜそのときだけ家に置いたのか。家に残ったのは車2台だけだった。「何も無くてもいいんだ。子供たちが無事だっただけでも良いと思わないと」と思うことにした。

あの日娘は翌日日直のため、スクールバスで帰る友達に代わり、黒板に名前を書くために残っていた。娘には「地震が来たら、一緒にいる友達と手をつないで高いところに登るんだよ」といつも話していた。他の子は泣いたりしていたが、泣かずに先生の言うとおりに避難したという。どこに逃げるか教えないとだめだと思う。私たちは「高い所に逃げろ」と教えられていた。遠くではなく、近くの高いところ。

娘は高い所へという事は覚えていたが、「階段がないと上れないじゃん」と言っていた。

息子は当日「学校へ行きたくない」と言っていたことは覚えていない。でもいつも一緒の先輩と「今日は最後なのだから、とりあえず学校に行って保健室で休んでいればいい」と言ってあげた。

夫は今宮城県女川にいる。夫から45号線沿いに行けば着くと聞いて、子供たちにせがまれて、6時間かけて瓦礫があるところを走った。この景色を子供たちには見せたくないと夫は言っていた。息子は震災前は調理師になりたいと言っていたが、震災で変わった。行方不明の近所のおばあさんを探したいと、潜水士になる決意をした。種市高校海洋開発科に行くことを希望している。夫は「潜水1本だと挫折すると何もできなくなる」と反対しているが、息子の気持ちを知り応援することにした。

実家が農家なので、「米があったら出してください」と言われ、米を出した。物資がまだ届かない頃、私たちは私の実家に避難し、実家の米でおにぎりを作り、食べ物を避難所にいる知人に届けた。「ガソリンがなくなれば来られない」と言うと、がっかりされた。後で「あのときはありがたかった」とおばあさんに言われた。

他の人に会ったとき「大丈夫」と聞けなかった。行方不明の人がいるかもしれないし、家族に何かあったかもしれないため、相手が話してから話すようにしていた。

加持敏幸さん（昭和38年生）、母の**操さん**（昭和17年生）に2012年8月15日に伺った。

予兆

流される前は田老駅前にいて、3年間続けて元朝詣りの時「大きなのが来る。津波が来る」とカミサマが言っていた。南の方で大津波が来たとき「1つの街が浸水する。田老は10㌢」と言った。カミサマはいつも1年の作柄、海の状況を言うが、昨年は3月までしか言わなかった。

じかに神降ろしをして「おみくじ」をお伝えする。聞くのは母。「田老の沖に白い波が来る。白い波が上に来て、それが帯状になったら逃げろ。」昨年は「早めに高台に逃げろ。10㍍の波が来る。」とか、神上げのとき最後に「30㍍」と言った。それで高台に引っ越したいと思っていたが、客が多く混んでいて新しい家を探す余裕がなかった。新しい客が来たとき、水柱の上に立っている姿を見たので、「揺れが来たらまず逃げろ」と話した。

3月11日とその後の避難生活

前日に行った初七日の仏降ろしを依頼された客には「大きな波が来るから逃げろ」と言ったので彼らは無事だった。当日は11時と3時の予約があった。11時の客は終わってすぐ職場に戻った。3時の客が来る前に食事をしようとしたとき、第1波が来て、鳥を車に積んだ。当日第1の揺れの後、家の2階に上がると、消防車が行き来していた。荷物をまとめているうちに2度目の地震で外に出ると、大太鼓の音のようなものが聞こえ、空が曇っていた。泥水が降ってきた。奥尻の地震を思い出し、2階に上がって物を持ち出そうとしたとき、3度目の地震は縦揺れだった。戸を押して外に出ることはできたが、肝心の資格書などは持ち出せなかった。その後すぐに樫内に逃げた。

逃げる途中で霊視をすると「家の柱を15、6人の人がどこかに移動している姿が見えた。そして家が飛んで、どこかに着水して、泥水が遡上した」様子が見えた。1階は津波でやられ、2階は衝撃波でやら

れたが、荷物はぬれていなかった。水が引いた後、テレビ局が中継をやっていた。霊視した15人は飛んでいった家の下にいた。すぐに助けていれば生きていたはずだ。

家の2階は無事だったので誰かがすぐに教えてほしかった。祭壇などは5千万円もした物だったが、後の祭りだった。すべての物が散乱していて、外に出されていた。目の前で私の荷物を運び出している人がいた。1日5往復して箪笥を3棹ずつ運ぶ軽トラを使う、津波泥棒だった。現金、宝石、家財道具、布団という順に持ち出された。

津波の後、水の道ができるとまた必ずそこから崩れる。どんな丈夫な物でも破砕される。我々人間も自然の一部。これは先人の知恵を無視した人災だ。自然の力を逃がす工夫が必要だった。

樫内に逃げた人は60、70人いた。震災後物がなくて、買いものに宮古に通ったが、1時間2時間待ちだった。店の中には入れず、ほしい物を紙に書いて、その物を店員が探し出してきて、それを現金で支払った。翌日は叔父のために薬王堂に行ったが、3時間待ちだった。西町は停電しておらず、貯金を下ろすことができた。ベルフ近辺は水道も出ていた。山口の田ノ神湯も12、13日にはやっていた。薪を燃料に使っていたので風呂を沸かせたという。そのときまた震度5の揺れがあり、5㍍の津波が来るという予報があった。

これまでの生き様

私は元は北海道礼文島の礼文神社の宮司だった。先に御嶽教の資格を取り、次に東京で神職の資格を取った。御嶽教は函館で資格を出しており、本部は奈良にある。神道の着る物は白衣、狩衣、烏帽子だが、御嶽教では白衣と袴。旭川神社の宮司からもらった手紙をもっている。旭川には離宮跡がある。

この世界に入る前の20歳の頃、家を新築した。家の前にイタコさんのような人がいて、妹を貸してくれと言った。家では歴代次女に霊媒体質の者が出る。3代は出ている。男に出るのは500年ぶりだ。小さい頃から仏事があり、身内が9、10人くらい亡くなっていて、3歳頃から坊さんのまねごとをしていた。

始めは大本教に行き、祓いをして、その人の因縁を取るという方法をやっていた。先生が私らに質問をして、私らが答えると、何年も取れなかった因縁が取れたりした。先生の所はオシラ様を祭っていたが、持ち主には反応しない。月に1回くらい大勢の人（約100人くらい）が集まってオシラ遊ばせをやる。津軽では朱印を押した衣を着て死に装束にする。ここでは100人中5、6人がオシラ様をもってくる。私と妹がオシラ様をもって手踊りをして、お告げをする。オシラ様は「行」をすると位が高くなり、人を救う力がある。その家に不具合があると、オシラ様はその家を飛び出してしまうと言う。そのために月に1回お祭りをする。先生の仕事の邪魔をするつもりはなかったが、八つ当たりをされたりしたので、ここを出た。

護り神

私には御不動さんの護りがかかっている。火の災い、水の災い、刀の災い、ケモノの災い、神の災いなど、子供の頃からすべての災いを経験した。神の災いでは頭にけがをした。母の夫は鉄砲をいくつも持っていたので、ケモノの災いが出た。となりのイタコさんは行をせずポット出た。「特別なことをしなくてはならない人は罪深い人」「生活そのものが行。生きている間の行こそが世界」とカミサマが言う。2歳の頃から見せられた。すぐ下の妹を黒い男の人が抱えてぐるぐる回っていたのが見えた。この妹は1日しか生きられず亡くなった。そこで大人並みの葬式をやったら出なくなった。自分の言ったことがすぐに実現してしまう。15歳の頃はゲーム感覚だった。専門学校で運勢占いをするとすべて当たった。試験後に先生の採点をしている姿が見えた。誰に言っても信じてもらえず、黙っていた。

大本教の教会にいる間、行をしていた。そこで夕食にシジミ汁が出て、そこから石が出てきたので、先生に聞くと、「御不動さん」と言われた。カミサマの行の最中に魂が入っていると独特の香りがする。降りてくるカミサマにより香りが違う。天照大神は伽羅の香りが部屋中に漂い、

部屋中が明るくなる。魂が本当に入っていないと何も無い。

函館の東照宮に勤めていた頃、神社の鐘に正月に着る装束の若い人の姿が出てきたことがあり、これはカミサマだった。お祭りの直前に3日間参籠をして、本祭りの夜中の12時頃、きれいに磨いた床に、奥の院の扉が開くギーという音がして、外から拍手一つパーンと音がした。カミがいるという印だった。

礼文では真冬でも神社の中は30度の暑さになる。12月31日の夜中の12時に風が止んでカミサマが降りてくる。

盛岡、青森、秋田、千葉、東京、ニュージーランド、カナダのケベックから客が来る。行方不明の人を見つける。霊視をすると見える。水死した人も見つけた。なあどの下に沈んでいる人も見つけた。3か月前に霊視したが警察は証拠がないと取り合ってくれなかったが、外れてほしいことばかりが当たる。

不治の病は人の中にある悪相が原因だ。邪気が凝り固まると大病になる。見えて、相手が何を言っているのか、どうしたいのか、どうやって旅立たせてあげれば良いかを伝えてあげられないのは本物ではない。事故の現場ではたいてい地面の神からの解放をしなければ、事故は多発する。

國學院で神道の資格を取ったのは19歳。御嶽教へは21歳の頃に入った。本家は平家の時秀の五番目の子の系統。白川法皇から大納言の位をもらった。能登の時国家が本家の叔母の家に当たる。加持は大洲の国司で名代の名主と言われた。1500年代に加持某が即身仏になっている。石川県能登の福寿寺の曾孫じいさんは宮大工で、北海道大野町の甲谷（かぶとや）という人に神社を建ててほしいと請われ、娘の婿になるように言われ、姓を変えずに結婚をした。北海道の道南の神社の7割は親戚にあたる。私の家の祭壇は神社系のやり方をとっている。

野場多恵子さん（昭和23年生）2012年8月19日に話を伺った。

母のこと

母の野場ミヨからは神子で、「千早はとって置いてほしい」と言われた。母の姉の松本タケさんから母の本がどこかで手に入れられないかと言われた。父は平成12年4月に、母ミヨは平成22年4月9日に亡くなった。糖尿病と腎不全で透析をやっていた。1月まですごく元気だった。始めはとろみの付いたご飯きり食べられなかったが、亡くなる前には普通のご飯も食べられるようになったが、突然に亡くなった。千早、袴、白い着物、オダイジ、数珠、御幣、笏など衣装ケースにしまっておいたが、すべて流された。

3月11日

私はローソンの前で床屋をやっていた。3月11日は店に客がいて、ちょうど終えた所だった。この客は83歳になる元消防士さんだったので、心強かった。次の予約の人もいたので、始めは逃げなかった。地震では上から落ちる物もなかった。道路に車が渋滞していて、交通整理を始めたが、そのうち誰もいなくなった。ラジオをつけると津波は3メートルと言うことだったので、ここまでは来ないと思った。店に位牌が置いてあったので、仏壇を見ると花瓶が倒れていた。犬と猫を飼っていたので、猫をこたつに入れ、犬はサークルの中に入っていたので、鍵をかけてゆっくりと歩いていた。Mさんと熊野神社に上がろうかと話していた。隣のSさんは家に戻っていった。階段を上ってみると、海水が堤防を越えた所だった。それで熊野神社まで上がり、下を見ると津波は来ていなくて、のんびり座っていた。

しばらくすると皆がワーっと言うので家の方向を見ると、霧しか見えなかった。よく見た人は渦が巻いていたという。「自分の家が流れるのが見えた」と言っていた。近くにはWさん、Oさん、Sさんのお母さん、観光ホテルの人たちがいた。しばらくするといとこが上がってきて、叔父（父の兄）が流されたと言った。そのうち上を見ると煙が出ていた。長床にいた人たちに「出てきて」と言って、山の反対側にロープを伝って降りた。身体の不自由な人は消防の人がおぶって逃げた。Sさんは戻らなければ良かった。息子は堤防にいて海を見ていたが、全速力で熊野神社の北側の方向に逃げた。Mさんは亡くなったという。

トンネルを越えて小学校に逃げた。体育館に入ると大勢がいた。何も無かったので、親戚の人が友人の家から布団を持ち込んで来てくれて、こたつのように入った。

避難生活

黒田先生の指示で、病気や重症の人は腕に赤いテープを巻いた。軽症の人は黄色、健康な人は何もつけない。先生は総合事務所にいた。赤と黄色のテープをつけた人は図書館に集められた。そこには看護師が常駐していた。民生委員もいた。食事はおにぎりを半分ずつだったり、1個ずつだったりした。小学校には1週間くらいいた。4日目に叔母の娘が来たので、叔母を連れて行ってもらった。

別の母方のいとこが寺にいたので、そちらに移った。寺での食事は最初は半分ずつだったりしたが、日がたつにつれて少しずつ種類も増えていった。家が心配だったので、自分の家を探しに行った。毎日半日くらいは家の近くを歩いた。店を建ててくれた大工さんが、「これ野場さんの家だよ」と教えてくれたのは、熊野神社の下の消防署の近くだった。通っても気がつかなかったが、物が転々と流れていた。家の屋根だけ残っていた。海からまっすぐ流されたのなら山に当たるはずだが、直角に曲がって消防署まで来た。長内川を遡って逆流したという人もいる。屋根の下には箪笥、鍋、畳があった。自衛隊の人が家の中に入って中の物を出してくれたが、びしょ濡れで、「もう良いです、捨ててください」と言った。母の一周忌が近かったので、準備しておいたものが流れてしまった。屋根を上げてもらっている間に、そこから遺体が出てきて、ブルーシートで覆い「今日はここまで」と言われた。翌日ブルドーザーで上げてもらったら、また奥の方から男の人の遺体が出てきたので、また「今日はここまで」となった。

寺には4月1日までいた。寺ではストーブが2個あり、寒くなかった。皆で手分けをして当番を決めて掃除などをした。「誰かが亡くなりました。見つかりました。火葬です」と聞くと、皆で行って手を合わせていた。遺骨を入れる物がなく、風呂敷とかビニール袋などに入れていた。和尚さんも泣いてしまった。その間病気で亡くなる人もいた。ここは火葬場が残ったが、ここにも避難していた人たちがいた。

4月1日からアリーナに移った。知り合いがいたので移っていった。この間のことはよく覚えていない。

津波が来る夢を見た。夢でおばあさんが出てきて、ズシンと地震が来て、それでおばあさんを背負って三王閣に登ると津波が来た。また東京から友人が遊びに来ていて、高台から家の方向を見ると、真っ暗だった。いとこのMさんの家の方に行くと、松アカシにズラーと火が点いていた。友達がまた訪ねてきて、「お寺に泊まっているから訪ねてきてね」と言われ、寺に行くと「誰も泊まっていません」と言われた。おばあさんを背負って3階の高い所に行き、下を見下ろしていた。

これらの夢は、おばあさんが高台に行きなさいと言っているのだと思い、新しい家は乙部の高台にしたいと、アンケートにも書いた。この夢は津波の半年前くらいから見ていたが、まさか本当に津波が来るとは思わなかった。

仮設には6月15日に移り、そのまま荷物を運んで休んだ。寺では着の身着のままだったので、Kさんからセーターをもらった。寺から出るとき、いろいろな支援物資をもらった。今日は靴下2枚、毛布などと言ってもらった。アリーナに来てからは掛け布団をもらった。自衛隊からは毛布が配られた。

6　街づくり協議会

2012年8月17日に田老の集会所で街づくり協議会が開かれ、傍聴した。これは定期的に開催されており、この日は協議会からは会長の小向源一郎さん、副会長の小林昭栄さん（田老漁協組合長）と前川邦夫さん（㈲田老ガス水道設備工業社長）、高台部会の林本卓夫さん、商業部会の田中和七さん、また浜小屋部会や防災部会から7人が参加していた。また学童指導員、前宮古広域消防次長、グリーンピアで被災当日から救急要請等の責任者だった金沢順二さん（昭和22年生）なども列席していた。

商業部会

田中和七さんの話である。新しい街ができたとき、商店が1か所に集まれる「街の駅」構想を作っている。ばらばらになると力がない。高台移転になった場合、商店も移ってほしいと市から言われた。しかし希望者はそれほど多くない。前の商店街を盛り土してそこに住みたいという人が多い。高台だと商売が成り立たない。国道沿いの不特定多数の客を相手にしたい。そこで店舗数などの数字を出している。盛り土にすると3年くらい寝かせておく必要がある。市では役場前を防災拠点にしたいと考えているようだが、それで認可が下りるか心配している。構想の規模や住人が近くにいないと商売は成り立たないので、復興住宅を近くに作ってほしいと合わせて要望している。

津波を見た人、とくに女性は元の場所に戻りたくないという。近くに住みたい人の数はまだ未定だ。旧来の場所なのか、盛り土をした場所になるのか、検討中である。一番の関心事は地価の価格がどうなるかだ。これが唯一残った財産なので、早く知らせてもらえれば、計画が立てやすい。新しく家を建てる人は大事業なので、目安がほしい。

個別のアンケート調査はこれから。前の調査とこれまでの情報が入った後で、皆がどう考えているかが興味がある。アンケートはこれまでに2回やった。防災拠点は国が作ると思うので、そこが地域の中心になりそうだ。

市が主催した初期の街作り検討会では話題にならなかったが、自分たちはどこに住み、商店街はどこになると言ったソフト面が知りたかったので、協議会を立ち上げた。

２０１１年11月21日に自分たちの構想図を考えた。２０１２年5月26日に第1回協議会を立ち上げた。その際、私は防災を中心に考えていたが、街ができないとそれができない。２０１６年には候補地を選定し、２０１７年設計図作成の予定だった。これでは遅すぎるので街づくり検討会を開始した。

東南海地震の安全計画の作業が現在進行中なので、参考にするために月に1回東京に行っている。

第1部　各地域における東日本大震災

A　田老地域

第5章　地域のために（赤沼正清さんと東日本大震災）

神田より子

はじめに

2012年8月12日以降継続的に話を伺った。前の章で田老地区での支援態勢について赤沼さんの語りを述べてきたが、震災以前も以降も赤沼さんの田老での活躍ぶりには目を見張るものがある。以下では赤沼さんに語っていただいた人生史を通して、田老という地域を描き出してみたい。

赤沼正清さん（昭和15年生）は田老町役場に勤務の後、平成18年4月1日に財団法人グリーンピア田老の専務理事に就任し、3・11当日もその立場から震災に対処してきた。当時は田老漁協監事、社会福祉協議会副会長、道の駅監査役、乙部自治会長（これは被災後、平成23年6月に解散）などもやっていた。また今は、宮古市社会福祉協議会会長の立場にあり、相変わらず忙しい毎日を送っている。

写真1　赤沼正清さん

1　仮設の生活と自治会について

田老の海岸近くは乙部2、観光ホテルから北側は乙部1という区割りで、私は乙部1の自治会長だった。退職前は副会長だったが、平成12年12月31日に役場を退職してから会長になった。乙部1地区は86世帯中22世帯の28人が亡くなったので、信用金庫に預けた自治会の金を、弔慰金として差し上げた。乙部2地区も同数くらいの方々が亡くなっている。1世帯で4人亡くなった家もある。世帯数は乙部1も2も86～87戸あり、仮設に入居したあと、被災自治会は解散した。震災前に乙部に住んでいた86世帯の内、半分は田老を離れた。

私が住んでいる「グリーンピアテニスコート仮設」には乙部、青砂里、荒谷（ありや）など12の自治会の人々が入居している。仮設住宅の場所を選ぶ際に、田老では抽選ではなく、コミュニティを対象にした。宮古勤務の人は西ヶ丘や、ドラ方面に行きたいと希望した人もいた。乙部自治会の人もあちこちの仮設に入った。

テニスコート仮設内での自治会結成については、以前から気になっていたことの一つだった。自治会を立ち上げてほしいとの声は、子供を持った父兄からも出てきた。小学生がバスで通学するのに、バス停まで300㍍の距離の雪かきが大変で、除雪機がほしいと希望が出た。支援団体から除雪機を寄附してもらうためにも、自治会といったような団体を作る必要があったので、立ち上げた。

除雪機をグラウンド仮設の人にも貸してあげるため、話し合いをした。すると社会福祉協議会の会長として、グラウンド仮設の自治会の立ち上げも応援してほしいと言われた。グラウンド仮設は4つの行政区に分かれているが、自治会がまだできていない。

テニスコート仮設へは当初122世帯が入居したが、今は92世帯が残っている。早い人は震災の年に仮設を出たが平成24年、25年に多くが去った。平成25年12月で30世帯減った。仮設の部屋が空いたので、世帯分離をして子供部屋にした家もある。

新しい居住地について（震災公営住宅など）

田老の人は乙部高台と田老総合事務所のどちらの公営住宅も選べる。崎山地区では社協が支援員を派遣して、仲間作りの場所を提供したり、自治会に入るよう指導している。

乙部1からは崎山に移った人が最も多い。被災者だからと、格安で土地が買えたところもあったようだ。宮古に住むつもりで土地を買ったが、乙部高台にも土地をほしいという人もいる。

私は乙部の高台に家を建てる予定にしている。災害危険区域に指定された場所に家があった場合は、その土地は市で買い取ってくれる。倉庫や貸した建物は市では買わないし、農地も買わない。流された私の家の場所は50㌢嵩上げすれば家を建ててもよいこととなった。私の家があった土地は売らずに残しておく予定だ。近所の人たちが田老を出てゆくと言っているので当初我が家も、出ようか、という話が出たが、私は頑として「出ない」と言っているので、今はそういう話はしていない。

仮設に住んでいる人たちは、住宅展示会があると皆見に行く。高台の土地の造成は平成27年9月に完成し、災害公営住宅は平成27年12月から入居できる予定だ。役場の前にも公営住宅が建つ予定で今建設中だ。

青砂里あたりは漁師が多いので、一度宮古に出た人もいるが漁業権を持っているので、また戻ってくる人もいる。

高台の土地の価格説明はあった。ただ、誰がどこに行くのかは、未定のままだ。

2　経歴

私は昭和35年から田老町役場に入り産業土木課をスタートに3年間所属し、その後建設課に7年、産業観光課に7年いた。昭和54年から平成3年までの13年間は国保田老病院にいたが、当時は経営難に加え薬剤師や看護師が足りず苦労をした。平成4年から6年まで社会教育課、平成7年~8年は産業観光課、9年から10年は建設課長、11年から12年は税務財政課長をつとめ、12月に退職した。当時の田老町役場では厳しい財政事情があったので、21世紀は若い人に任せるべきとの想いで、年度末の3月を待たずに退職した。この年は、私より若い人も含めて5人が退職をしたので、若い人たちに道を譲りたいという想いは果たせたかと思う。

役場の災害対策と計画

役場在職時には、第一警戒は課長以上、第二警戒は全職員が出所と災害計画で決まっていた。津波の避難訓練、誘導などは常にやっていた。退職後に勤めたグリーンピアでは火災などの初期消火訓練はやっていたが、被災者を受け入れる訓練はやっていなかった。さらに行政関係者は自分1人だった。

田老町では、毎年3月3日に津波の避難訓練をやっていた。大きな地震があった翌年には参加者が多くなる。明治29年、昭和8年の津波の経験から地震を想定した訓練をやった。係長、課長になると、指揮をする立場で班編成の訓練もする。今回の震災を受けて、訓練は大切だと再認識し、何かあれば高台に行くことを痛感した。田老小学校の頃は、先生に連れられて避難訓練をしたものだ。

昭和35年、役場に入った年にチリ地震津波があり、長時間の待機時間があった。このチリ地震津波を経て、防潮堤が二重になった。職場に入ると明治29年と昭和8年の津波の話は常に聞かされていた。昭和45年の十勝沖地震では、上司の命令で潮位を測るため海岸まで行き、海の水が引いていくのを見た。十勝沖地震の場合、堤防があって助かったというが、そんなに大きな波ではなかった。宮城県沖の地震があると、南東から津波が来るので危ないといわれていた。

田老町のような小さい町村レベルでは、1つの分野を深くきわめることはできないが、広く色々な仕事を経験できるし、1人で何役もやる必要がある。役場に入りたての頃は、三陸フェーン災害も経験した。

『足跡』

平成元年頃から、公民館の事業で『足跡』という思い出文集を作り始め、10数年続いた。この中には津波の伝聞を特集したものもある。生涯学習の一環として『津波伝聞誌』（平成2、3年頃）も作られた。この当時、教育長なども務めた田澤直志さんが中心となり続いた事業だった。田澤さんは、昭和8年の津波経験者であり田老町史編纂にも携わった方だ。

社会福祉協議会

平成13年5月から17年10月まで田老町社会福祉協議会会長をつとめた。17年6月に宮古市と合併し、17年11月1日からは、宮古市社会福祉協議会副会長をつとめることとなった。その傍ら、平成18年4月から24年5月23日まで㈶グリーンピア田老の専務理事もつとめた。

消防団員

役場在職中、消防団の皆さんには地域に対してたくさん協力してもらっていた。そのため、自分が退職したら消防団員として地域の手伝いをしようと思い入団した。今までとは違う業種の方との関わりにも興味があった。三分団に所属して、最下級の立場で集会にはお茶汲みや小昼の手伝いをした。事務的なことを手伝うと言って会計などをしたが、分団長の話し相手もやった。星が1つの下っ端の私に分団長が頭を下げるので、「あの人はだれだべぇ」と言っている人もあった。

3　家のこと、兄弟のこと

実家でのこと

兄弟が6人いるが皆、被災した。私は戸籍上では四男だが、上の2人が幼くして亡くなっており、2番目の男になる。長女は昭和11年生まれで、田老の仮設に住んでいる。昭和10年生まれと13年生まれの2人が幼い時亡くなった。すぐ上の兄は14年生まれだ。下には17年生まれの妹と20年生まれの弟、22年生まれの妹がいる。

実家は、「まつばや」という餅屋で、両親は豚を飼って粉ひきをやっていた。父は身体が弱く、65歳で亡くなった。

十和田での生活

中学3年の時、十和田市（当時は三本木市）の中学校に転校した。家庭が貧しく、高校に行けないため、母の姉が十和田で食糧・酒・味噌などの卸問屋をやっており、そこで丁稚奉公をしながら高校へ通った。中3の1月に十和田に移り、三本木農業高校の商学科に入った。馬橇に乗って配達したりの仕事をして、高校卒業までも含めて4年間そこにいた。

卒業して1年後に、田老で役場の採用試験があると母が聞いてきて、それで戻った。十和田では「信用は無限の資本だ」と教えられた。頭の下げ方が悪いなども教えられた。十和田の叔母には子がなく、正清さんを養子にしたいと迎えにきたが、逃げ出した。

野球は田老第一中学校でピッチャーとサードをやっていた。十和田での高校時代は、昼休みにサッカーをやっていたが、学校が終わると配達があるのでスポーツはできなかった。叔母の家では8人くらいが住み込みで働き、6人が同室で、うち1人は叔母の夫の親戚の子だった。

この当時の十和田の中学校の同期会がある。私は中学3年の1月に転校してきたので1か月きりしか在学していなかったが、今回の震災の時に彼らは義援金をくれた。こうした縁もあって、今でも都合をつけて参加している。

地域とのかかわり

子供たちが小学校、中学校のころは、ＰＴＡ会長や小学校サッカー少年団の指導員をしていた。小学校のサッカー愛好会からクラブに育つ頃のことで、今彼らは50代になり子供たちを指導している。その後、中学校の女子ソフトボールのコーチを頼まれ、指導した。県大会にも出場した彼女たちも今では40代で、町で会っても「正清さん！」と声をかけられる。障がい者の子も公平に扱って、一緒に練習させた。最初の顧問は女の先生だったが、ソフトボールの経験がなかった。2年目からはスキーで国体に出たことのある先生が顧問になり、その先生のやり方をバックアップする形で一緒に指導した。依頼されると、とりあえずやる。断ったことはない。

地域で集まりやお祭りがあると、踊ったり跳ねたりする。皆で踊りを前もって練習して出るので、そのことは忘れられない思い出だ。

自治会

平成3、4年頃、地域の自治会が組織され、乙部地区の事務局をやっていた。乙部は世帯数が増えて、1と2に分離した。平成2、3年頃のこと。防潮堤が前方にできたので、若い世帯が家を建て始め、80世帯位に増えたためだ。

若いころから自治会の仕事をしていたので、知らない人はいなかった。田老町民運動会、福祉演芸大会、祭りには必ず打ち合わせなどにも出ていて、皆、顔を知っていた。

家族のこと

妻は、田老町役場で働いていたので理解はあった。でも、彼女の意思に反して私が勝手に彼女を55歳で退職させてしまったので、その時のことは未だに怒っているようだ。

子供たちは、保育所に預けたり、今でいうベビーシッターのような人にお金を払って預けた。妻の実家も近くにあったので、そこにも預けた。皆に助けられながら成長したのだとよく言う。そのため、こちらでできることは恩返しをしたいという気持ちでいる。自分自身、苦しい時に叔父や叔母がいて高校に行かせてもらったという事が根底にある。

「お父さんが家に居た記憶がない」と子供には言われるが、その通りなので何も言えない。

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域
第6章　個人墓地と海嘯碑

神田より子

はじめに

田老地区は過去にも津波による大きな被害が出ており、『東日本大震災宮古市の記録（第1巻　津波史編）』（宮古市　2015年）に記された明治29年と昭和8年の記録を記した『明治29年地震報告』と『昭和8年3月3日三陸沖強震及び津波報告』ともに中央気象台）によれば、田老村は以下の通りである。

明治29年の「岩手県管内海嘯被害表」によれば田老村の被害は総人口3千747人、死亡2千655人、負傷277人、健在者815人、総戸数666戸、流失家屋130戸、半潰家屋未詳、存在家屋536戸となっている。また昭和8年の「岩手県下被害報告」にある被害は総人口4千983人、死亡584人、行方不明327人、負傷122人、総戸数835戸、流失500戸とある。

『田老町誌　津波編（田老町津波誌）』（田老町教育委員会　2005年）では以下の通りである。

明治29年6月15日の明治三陸大津波の規模はマグニチュード7・5、最大波高15㍍、罹災戸数は365戸、死者・不明者1千859人、一家全滅は130戸、罹災生存者は336人、漁船流失は540隻となる。昭和8年3月3日の昭和三陸大津波の規模は、マグニチュード8・5、最大波高10㍍、罹災戸数は505戸、死者・不明者911人、一家全滅は66戸、罹災生存者は1千828人、漁船流失は990隻となる。

そして今回の平成23年3月11日の東日本大震災の規模は、『田老　あの日、あの時　2011・3・11　東日本大震災』（NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老　2012）によれば、マグニチュード9・0、最大波高8・5㍍、罹災戸数は1千691戸、死者・不明者1181人、漁船流失は840隻となる。（以上アンダーラインは筆者）

中央気象台と『田老町津波誌』（出典の明記はない）の記録では被害の数の違いが目に付くが、明治29年の三陸大津波では総人口3千747人中死亡は2千655人、昭和8年では総人口4千983人、死亡584人、行方不明327人に上り（以上中央気象台）、また一家全滅が130戸（明治29年）、66戸（昭和8年）という数になる（『田老町津波誌』）。罹災戸数や死者・不明者の数も甚大なことから、家の継承さえままならない状況だった事が窺える。

そのため常運寺には個別の墓地内に墓石や墓碑とは別に家の「海嘯碑」が建立されている例が多くみられ、1軒の家から多数の犠牲者が出たことが見て取れる。

こうしたことを踏まえて、この章では常運寺での海嘯物故者の慰霊供養の様子と個人墓地内での「海嘯供養塔」を手がかりに、本報告書に掲載することに同意してくださった方々の話も加えながら、田老における津波への対処の仕方、生き方を述べてゆくことにしたい。

写真1「平成二十三年三月十一日海嘯物故者諸々霊」の碑

1　常運寺と慰霊の行事

多くの方々が犠牲になった田老では、3月11日の震災当日と、8月の盆の期間には、供養のために親族や知人の皆様が集まり、墓参をしたり、法要に参列している。ここでは海嘯物故者の慰霊供養と、墓参の様子を述べてみたい。

2012年8月11日、常運寺の本堂前には「奉為平成大海嘯殉職者諸霊々」と書かれた卒塔婆が立つ。この日の18時に本堂にて住職によ

る読経があり、その後で副住職は「本日参列の善男善女に向かって、平成23年度の海嘯殉職者に向かって、世間を導いて、同じく覚路に登らんことを、乞い願うところは家門繁栄、子孫長久、災障消除、諸縁吉祥ならんことを」と回向文を読み上げ、物故者全員の俗名と戒名を読み上げる。その間に参列者は一人一人立って焼香をする。参加者全員による焼香の後、「おのおの海嘯物故者の菩提を弔い、涅槃の地にいて、あまねく世間を導き、浄土の峰に登らんことを…」等を述べて終了する。

写真2　「夢灯り」のイベント　常運寺

夜になると18時45分から夢明かりイベントがあり、開会式には3分間の黙祷が捧げられた。この後、19時に田老から福島まで12か所で一斉に花火が打ち上げられる。これが「ライトアップ日本」のイベントになっており、この花火大会は19時30分にフィナーレとなるまで続けられた。

常運寺さまから2012年8月13日に話を伺った。

檀家について

田老地区のほとんどの住民と、小堀内の開拓地の人々すべてが常運寺の檀家で、それ以外では宮古の真言宗長根寺が50軒、曹洞宗の善勝寺が30軒、摂待地区のほとんどと小堀内の元地区の一部が小本の宗得寺の檀家になる。約800戸が田老地区内の檀家で、200戸ほどが田老地区以外の県内や県外で、先日は取手や川口に葬式で行ってきた。

津波と葬儀

3月11日の津波が来てから、合同葬での葬式をやろうと思っていた。4月28日には四十九日の法要をここでやって、一人一人の死者の名前を読み上げたが、読んでも読んでも終わらなかった。そしてせっかく来たのだから、本堂で焼香をしてほしいと言ったが、大勢の参列者でなかなか終わらなかった。そこで百日目に当たる6月18日には百か日法要をアリーナでやった。

合同葬は無理かと思っていたが、ここで葬式をやりたいという人が出てきて、1日に2回午前と午後に毎日葬儀を行い、100件以上やった。

四十九日の法要では俗名を読みあげたが、行方不明の人の名前を死者として呼ぶのはおかしいので、その家に行き、遺族の人に確認を取り、名前を呼んで良いか聞いた。家族の人はわからないという。自分で判断できないのだ。合同葬儀の時も背中を押して、どうするか今結論を出せと迫った。他の寺では来るまで待つと言うが、私は行方不明者のいる全員の家に行って確認を取った。ある家では祖父は見つかったが、夫が見つからない。高3の女子、高2の男子、中2の男子の3人の子供がいて、中学生の男子が「お父さんは生きている」と言い張ったので、母親と話し合いをさせた。その結果、彼は「お父さんの葬式をあげてください」と言いに来た。この母は診療所の看護師長をやっている。この人は夫がいなくなっても一生懸命やっていた。娘は看護師にならないと言っていたが、母の仕事を見ていて、看護師になると言いだして看護大学に入った。彼女は父の日に私に「お父さんに」と言ってマグカップをプレゼントしてくれた。そんなこともあって彼女が大学に通う前に「飯でも食うか」と誘った。その時に汚い財布を出したので、コーチの横長の財布を買ってやった。そしたら彼女の母が「おまえには似合わない、私が使う」と言った。彼女の同級生のMは柔道80キロ級で岩手県2位になった。この子は君津の新日鉄に就職が決まったので、彼女にも財布を買ってあげたが、先日「伊勢海老でも食べて元気になって」と送ってくれた。今は地元に戻り、宮古で仕事をしている。

先ほど墓参りに来た娘さんは母と姉を震災で亡くした。母が見つかったとき、足がなかったが、後ほど見つかり、五体満足でお骨になった。

乙部のT・Iさんはずっと行方不明だったが、2週間ほど前に葬式を出してくださいと言ってきた。下着でも買って甕の中に入れなさいと言った。奥さんは何も入っていない甕に手を合わせていた。その1週間後に警察から電話があり、DNA鑑定で99パーセントの確率でTさんだという遺体が見つかった。また1月前に行方不明だったT・Kさんが大船渡で見つかり、DNA鑑定で本人と確認され、納骨した。

震災によって棚経は当分できない。石屋さんは家が流されて、ここの近くにおり、来てほしいと言われるが、彼の家だけ行って私の所には来ないと言われるので行けない。

僧侶は経を読むだけではなく、人と親しくつきあうのが仕事だと思う。坊さんは近寄りがたいと言われたくない。「ご自由にどうぞ来てください」、「オイ、コラ」の仲でいいと思う。僧衣を着るとちゃんと接してくれる。

盆の13日には栗の木と朴の木で施餓鬼棚を作る。昔は外に飾ったので、木陰を作るが、今は家の中に飾るので、本来はいらない。夕方になると「火をもらいに来た」という人がやってくる。

震災後、15、6日たってから、山の上に住んでいた人が灯油を取りに来て、自分の家で風呂を沸かしたのでどうぞといわれ、入りに行った。あまり気持ちがよかったので、これから「さん」付けでと呼ぶといった。本当は寒かったのですぐに湯船に入りたかったが、3回体を洗ってから入った。

復興ガールズという神奈川県の高校生が10数人でしばらく前に来てくれた。18日には20数人で来るという。

国際的な常運寺

ここは国際的で、10年くらい前から年に2回30人くらいのアメリカ人が来る。「禅を聞く会」というサークルをアメリカでやっている京都在住のS・バイメルという人が連れてくる。彼は20歳の頃ヒッチハイクでここに来て、泊まる所がないというので、私の父が泊めてあげた。その後20年ほど前に田老の総合事務所にFAXが届いた。「私はS・バイメルと申します。数十年前にお世話になりました。今はアメリカでツアー会社を立ち上げ、「禅を聞く会」を作り、京都に連れて行きました。ある寺に行くと住職が髪を七三に分けていて、これは禅ではないと思い、考えてここを思いついきました」という内容で、こうして彼らが来るようになった。そのツアー客の中にソーラー発電会社の社長がいて、震災後に何かやりたいと言ってきた。そこでお願いしたところ、5基のソーラーパネルを寄附してくれて、寺に1基、中学校に2基、グリーンピアに1基設置した。それを見た市長がもっとほしいというので、またお願いしたら15基届いたので、漁協に差し上げて、各浜に2基づつ取り付けてほしいとお願いした。

母校の奈良康明先生の家に下宿していた舞鶴市桂林寺の住職をしている能登春夫という同級生がいる。震災後しばらくして訪ねて来て支援をしてくれた。その後あちこちの寺からも支援が届いた。すべて彼が同級生たちに連絡をして手配してくれたものだった。

2012年8月14日朝9時

常運寺の墓地には多くの人々が墓参に訪れている。自分の家の墓地、親戚の家の墓地、三陸大海嘯碑を廻っている。

本堂内では本尊を安置した間の左側に「海嘯物故者諸々霊」「三界萬霊」など5つの霊墓碑が置かれた盆棚が作られ、5人の女性がその前で御詠歌を唱えている。

本堂で9時30分から行われる施餓鬼に参加した。施餓鬼会が始まり、般若心経、観音経などの経が唱えられ、「各家々の先祖累代の諸精霊」が読み上げられ、「盂蘭盆会の追善供養」について語られる。9時50分に施餓鬼終了後、再度御詠歌の詠唱がある。

墓地では多くの人々の墓参が見られた。元教育長の土井昌市氏の話によると、昭和8年の津波の後、元村長の関口松太郎氏が県に堤防を造るよう要請したが、断られた。そこで村民に声をかけて自分たちで立ち上がり、その後やっと県も動いて、堤防ができた。

小林学さん（昭和22年生、仮設住まい）は元社会教育課長で、田老

地区民生委員長、民生委員協議会長をしている。9月10日に大阪で大震災の体験発表を行う予定で、また10月24日には花巻の保護司の会でも発表の予定があるという。

2014年3月11日15時から常運寺にて海嘯物故者供養会が行われた。

住職による読経の後、参加者全員が焼香をしている最中、副住職が「おのおのの海嘯物故者の菩提を弔い、頓に無生を了して、速やかに仏果を證せんことを、……」と回向文を読み上げ、物故者全員の俗名と戒名が読み上げられる。

2　個人の墓地にある海嘯碑

写真３　常運寺墓地の個人墓地にある「海嘯碑」

常運寺の墓地には個人の墓地の敷地内に、明治29年と昭和8年に津波で被災した方々の慰霊のために個人で建立した海嘯碑がある。この海嘯碑と家にまつわる話を伺った。一家全滅あるいは幼子だけが残されるという事態に襲われた後、それでも家の継承を願った、田老の人々が取った行動の一端をここに記してみたい。

(1)　小林家

小林義一さん（昭和9年生、田老小林沢）に2014年8月8日に話を伺った。

小林家には4人の名前が刻まれた「海嘯碑」がある。

「海嘯碑　明治29年5月5日
藤右衛門　56歳（夫）
トシ　12歳（娘）
伊平　20歳（息子）
フミ　86歳（姑）」

明治29年の津波

小林家の屋号は「ハナヤ」で私は10代目になる。9代目がハナヤ藤右衛門だ。8代目小林藤右衛門の嫁セキ（昭和8年2月8日に89歳で没）は、明治29年の津波（当時44歳）で、唯一生き残った。それ以外の家族はすべて流された。そこで唯一生き残ったセキは、自分の末前の生家から小向シマを養女に迎え、シマは石垣半兵衛を婿として迎え、その子が藤右衛門を襲名した。

写真４　小林義一さん「自宅前で息子さんと」

昭和８年の津波

昭和８年３月３日（新暦、旧暦では２月８日）に再び津波に襲われた。籐右衛門は昭和７年に田代からヨシを嫁として迎え、翌８年に籍を入れ、翌昭和９年11月に私義一が生まれた。これは山田線の開通の年に当たる。この津波では、シマ、ヨシ、子供たちは山に逃げて助かり、籐右衛門と半兵衛は大工だったので、末前小学校の建築現場にいて無事だった。このときセキおばあさんが「命はテンデンコだから逃げろ、オレのことは良いから逃げろ」「地震があったら逃げろ、探しに来るな」と皆を逃がして、本人は津波で流された。ヨシさんたちは後ろの山に逃げて、ガーガーと音がしたが何も見えず、ヨシは大姑のセキに言われて逆らえず、ただ逃げた。身内の者を置いても逃げろというのは、血を残すと言うことだとわかった。明治29年の津波ではおじいさん、おばあさんを助けに行って亡くなった人が多かったので、その経験から出た言葉だと思う。

三鉄の前にあった石切場から堤防の石を切り取っていたが、その後地を半兵衛が買って宅地にした。

小林家の場合

自分の命を守るために、身内でも助けに行かずに自分が生き延びなくてはならないという教えがあった。「命はテンデンコだから逃げろ、オレのことは良いから逃げろ」「地震があったら逃げろ、探しに来るな」と皆を逃がして、本人は津波で流されてしまったという小林さんのご先祖のおばあさんの話があった。これはその前の明治29年の津波で、おじいさん、おばあさんを助けに行って亡くなった人が多かったという経験から出た言葉だという。そしてこの言葉は身内の血を残すことだという。それ故、小林家では明治29年の津波で唯一生き残ったセキさんは自分の生家からシマさんを養女に迎え、半兵衛さんを婿にして、その子が籐右衛門を襲名した。しかし昭和８年の津波ではこのセキさんもシマさんも流された。

(2) 田畑家

田畑マンさん、田畑ヨシさん、東キヌさんの話

田畑家の墓地には「海嘯死者之碑　明治29年旧５月５日」があり、この碑にはこの明治29年の津波で亡くなった田畑家の方々の名前が刻まれている。

「田畑家　津波墓碑

海嘯死者之碑　田畑末子松　66
佐惣　42
留之助妻エヘ　33
長男粂之助　12
次男佐四郎　7
長女　タカ　2
妹　ハツ　31

明治29年５月２日

徹芳普照信女　サワ　59歳　」

２０１３年８月８日に田畑マンさん（大正９年生）から伺った話と、２０１５年３月10日に末の妹の東キヌさん（昭和５年生）からの聞き書きを補完として加えた。

明治29年の津波と留之助のこと

マンさんとキヌさんの話によると、作がとれない頃、最後の男として生まれたのが祖父の留之助だった。明治の津波で裏玄関から逃げようとして流されたが、木材の下になったが生き伸びることができた。青野滝の本家ではこのときの津波で皆亡くなった。カカも子も亡くした。留之助はバッチ（末っ子）で分家に出ていたが、跡継ぎがいなくなり、実家に戻って後を継いだ。留之助夫婦には子がいなかった。摂待から嫁にもらったマツは留之助の２人目の妻で、子供ができず、イセを養女にした。留之助おじいさんは私（マンさん）が小さい頃、金貸しをしていた。また馬が好きで飼っていて、80歳くらいで亡くなった。

母のイセは田代の臼杵から養女に来て、樫内から来た与志松と一緒になった。イセの実家とは親戚ではない。留之助は馬が好きで、預けていた田代の中沢家に行ったら汚い女の子がいたので、もらってきて洗ったらきれいな子だったという。その子がイセでこの家の養女にして跡取りとなった。イセの死後に後妻に来たのがサトで、この人は義理の母になる。

長男が佐惣（大正5年生）で留之助の孫に当たる。イセと与志松の長男で、何年もたって生まれた子だったので大切に育てられたが、病弱で若い頃に肋膜になり、入院のため仙台の大学病院に入ったが、20歳で亡くなった。碑にある佐惣は養子で、樫内から来た人の息子だという。おじいさんは津波で流れた話をよくしていた。「津波が来たら赤沼山に松を持って行き火を灯せ」と言っていた。自分のこの手を引いて逃げたという。

長男だった佐惣の嫁候補として伊茂野佐平次の家からソメという女の子を連れてきて働かせていた。この子が実家に戻っていたときに、その家の人たち10人くらいと一緒に津波で流されて亡くなった。そのためソメの妹のヨシを佐惣の嫁として連れてきたが、佐惣が早くに亡くなったため、嫁入り道具をすべて調えて嫁に出した。この家ではおじいさんと息子だけが残った。

昭和８年の津波

昭和８年の津波の際に、父が「沖から音がするぞ」と言ったので、津波とわかった。佐平次屋のおじいさんは井戸の水を見た所、水が引いていないので大丈夫だと言った。この時の地震は大きくなかったが、おじいさんが皆を起こして、赤沼山に逃げてたき火をした。このときは地震の後また家に帰って寝るという人がいたため、被害が大きくなった。昭和８年の津波の８年前には火事に遭った。家を建てて８年で家も流された。学校も焼けて、寺で勉強した。

田代から嫁に来た母は昭和８年の津波で足がぶらぶらになり、親戚が戸板を持って助けてくれたが、３日目に亡くなった。

平成23年の津波の時は役場の近くに家があり、お寺に逃げた。息子はふれあいセンターに勤めていた。孫たち３人は公民館に行くと言っていたが、誰かの車に乗せられて逃げた。今回の地震は初めての大きなものだった。

昭和８年の津波について（田畑ヨシさんの話）

田畑マンさんの妹の田畑ヨシさん（大正14年生）の話が『田老町誌津波編（田老町津波誌）』（田老町教育委員会　２００４）に掲載されている。

「昭和８年の津波の時、家族は８人であった。祖父留之助（76歳）、祖母マツ（63歳）、父由松（38歳）、母イセ（42歳）、兄佐惣（18歳）、姉マン（13歳）、ヨシ（8歳）、妹キヌ（３歳）。家は大八屋の裏の当たりにあった。

第１回の地震が落ち着いたので家に戻ったら、佐平次屋の伊茂野長蔵さんが来ていて、祖父と話をしていた。長蔵さんは「明治29年の津波の時には川の水も井戸の水もひけだったども、川の水もひけないから津波はこねえべー」といっていた。しかし祖母マツは短いたん靴を履いて、家の中を土足で歩きながら大切なものを探して「これは兄が持て、これは誰が持て」と指図していた。玄関にはみんなの分の草履を揃えた。父は非常時に備えて、松の根を割って松明りをこしらえ二丸まるって（結わえて）用意しておいた。私はブルブル震えていると、祖母が「寒がったら、これを着ろ」と大人の袖なしを着せてくれた。２度目の地震が揺った。祖父は「２度揺れすれば津波が来るもんだ」と言っていた。そうしたら間もなく沖の方から「ゴー」と音がした。

「そら津波だ。逃げろ」という声とともに飛び出した私たちは赤沼山へ逃げた。住宅の裏の方から母みたいな「助けてー」という声が聞こえてきた。父が降りてみると、母が崖っぷちにしがみついていた。「お前、そしたら津波にさらわれっぴゃー。早く上がって降りろ」と引っ張ったが歩けない。暗くてわからなかったが、足を挟まれ大けがをして歩けなかった。そこで父は「そんだら俺さ背負わされ」と言って母

を背負い立とうとしたら、腰を痛めて自分も歩けなくなった。「こうしていると津波にさらわれっから、などかして（何とかして）這って歩け」と言って、2人で必死になって這って大赤沼当たりまでたどり着いた。見ると母の足が皮だけでブラブラしていたので、応急手当をした。下の方から「ガーワラワラワラ」と大きな音（津波で家が壊れ、ぶつかり合う音か）が聞こえんの。そうしているうちに、あそこら（荒谷）に火事が起きた。「たすけてーたっっすけてー」という声がかすかに聞こえた。おばあさんが「ここにも波が来るかもしれないから逃げっぴゃ」と言ったので、また山の上へと逃げた。赤沼山からお寺のうしろ山のウスギ山まで逃げた。

母はいったん避難したが、津波で避難すると食べるものがないと思い、また家に引き返し作ってあった餅を籠に詰め背負って逃げた。しかし崖っぷちで上がれず笹にしがみついていたら飛んできたトタン屋根が足に乗っかり、深く切れたらしい。その後に波が来てさらに足に食い込んだらしい。その後宮古の病院に行った母は、手当の甲斐もなく3日後に亡くなった。

津波の後始末は、兄佐惣1人の肩にのしかかった。重労働のためにすっかり身体を壊し、最後は肺結核で昭和12年に亡くなった。

おじいさんの話では、明治29年の津波の時、家で法事があり親戚の人がたくさん集まっていた。そこに津波が来て皆流され、おじいさん1人が助かった。5月5日の端午の節句にご法事はおかしいと調べてみたら、5月2日におじいさんの姉のサワが亡くなっていた。

昔は一番先に生まれた人が家を継いだ。祖父留之助の家は、長女に婿を取り家の跡をとっていたが、明治29年の津波で皆流れ、絶家になった。だから分家していたばっち（末の子）の留之助が実家に戻って後を継いだ。」

田畑家の場合

田畑家では「海嘯死者之碑　明治29年旧5月5日」の碑には津波で亡くなった7名の名前が刻まれている。この後、分家に出ていた留之助さんが田畑家で跡継ぎがいなくなったため、実家に戻って後を継いだ。留之助夫婦には子がいなかったため、親戚ではない田代の中沢家からイセさんを養女に迎え、樫内から来た与志松さんと一緒になった。

その長男の佐惣さんの嫁候補だった伊茂野佐平次家のソメさんは実家に戻っていたときに、その家族10人と一緒に津波で亡くなった。そのため妹のヨシさんを佐惣さんの嫁候補として連れてきたが、佐惣さんが早くに亡くなったため、嫁入り道具を調えて田畑家から嫁に出した。伊茂野家ではおじいさんと息子だけが残ったという。この津波は昭和8年のことと思われるが、亡くなったソメさんの名前はないが、ソメさんの生家の伊茂野佐平次家の墓誌には昭和8年の海嘯で亡くなった6名の名前がある。田畑マンさんの語りの中で、「佐平次屋の伊茂野長蔵さんが来ていて、祖父と話をしていた」という長蔵さんの名前が伊茂野家の墓誌に記された6名の中にあり、彼も助からなかったことがわかる。佐平次屋では明治29年の墓誌にも海嘯で亡くなった5人の名前がある。

(3)　木村家

木村金雄さんの話

2014年8月10日に木村金雄さん（昭和25年生、田老仮設）から話を伺った。

昭和8年の木村家の海嘯碑が常運寺の墓地にある。曾祖父寅次郎、祖父金太郎、祖母のはなと2人の子が亡くなり、残ったのは私の父東一と妹で叔母のチヨのみだったという。

「　　右側面　木村寅次郎　70歳
　　すぎ　65歳
正面　海嘯死者之碑
左側面　金太郎　38歳
　　はな　36歳
　　栄次郎　7歳
　　恭章　4歳」

当時、長男だった金太郎の弟の仁太郎が鍬ヶ崎で教員をしており、そこで下宿をしていた旅館の娘の横坂トクと結婚した。木村家の跡継ぎがいなくなったため、仁太郎は鍬ヶ崎の旅館をやめて、田老に戻って旅館を始めた。横坂旅館と言い、中町の田中カリント店のそばだった。仁太郎は田老に戻ってからも教員をしており、私の父とその妹を育てた。

横坂家はかつて廻船問屋をやっていて、その先祖は東京から来たという。北前船の運営をやっていたが、時化で船が沈没してから経営が傾いて、鍬ヶ崎に移ってきた。横坂トク（コウコとも呼ばれていた）の母がまだ生きていて、この人はウメといい、田老のハツネさんと常運寺の念仏仲間だった。仁太郎は常運寺の先代の住職と仲が良かった。コウコおばあさんは東京ではフランス人形のような服を着て、その兄の亀吉がスーツを着て帽子をかぶった写真があった。たいそう羽振りが良かったという。コウコの妹のチヨは宮古に嫁に行った。その夫は銀行員で、盛岡に転勤になり、今は盛岡にいる。ウメさんはてきぱきしていて、都会人のようなしゃべり方だった。

私は幼稚園か小学校1年の頃、バイオリンを習っていた。中学校の体育館で姉と仁太郎の娘が踊り、私が歌を歌った記憶がある。小さい頃は自分が横坂なのか、木村なのかよくわからなかった。仁太郎の妻だった横坂トクが自分の母のようで、母が2人いた感じで、どちらが母かわからなかった。仁太郎は教師を辞めてから漁協に勤めていたが、私が小学校1年の時にがんで亡くなった。

私には曾祖父に当たる寅治郎の位牌は仁太郎が作らせたものだった。彼の顔は今も思い浮かべることができるが、祖父の金太郎と祖母ハナの写真はないし、顔も思い出せない。38歳と33歳の祖父と祖母というのは想像できない。仁太郎の写真も位牌もなかったが、その息子が水戸に行っており、写真が残っていた。中学校の入学式か卒業式のもので、私の父の東一と仁太郎が一緒に写っていたので、それを抜き出して位牌の代わりとした。コウコさんが私の母のサヨに話していたのをどこかで聞いていた。

仁太郎の子供はシュンイチ（84歳）、晋（故人）、ヒロシ（昭和16年生）、イサオ（昭和20年生）の男4人と、娘のフサコ（昭和24年生）の5人だった。

父の東一は半農半漁で、沖漁にも行った。兵隊に行き、鉄砲に当たってあごに貫通し、中国で白い服を着て入院した写真があった。中国で終戦を迎えたのだと思う。戻ってからは沖漁をやり、その後磯漁をやり、土地があったので百姓もしていた。

その後、父と仁太郎の意見が合わなくなり、分かれた。家は別々に離れていたが、5、6軒先で旅館をやっていた。分かれた後もご飯を食べに行ったりしていた。裏の細い道でつながっていた。そのうちに父も仲直りをして、また一緒になった。母が嫁に来た頃はまだ旅館をやっていて、一緒にやっていた。仲直りをしてから、母の妹のキョウコが横坂の長男に嫁いできた。母の実家は岩泉の中村だが、昭和8年の津波で家族はいなくなった。

私は「横坂さん」とか「木村さん」と呼ばれ、面倒くさいのでいつも「はい」と答えていた。昭和8年の海嘯碑は自分の親と家族のため、仁太郎が建てた。当時は蓮華紋が珍しかった。

横坂家の墓には仁太郎とトクと叔父の亀吉が入っている。横坂家の墓は常運寺に大きいものがいくつもある。

母のサヨ、横坂の母のコウコも震災の数年前に亡くなり、津波で流されずに済んだ。コウコさんは5、6年寝たきりだった。津波では犬も助かった。慰霊碑の右側に犬の位牌塔も作った。震災後ペットの墓も寺で作ったが、私は自分の墓地内に作った。

震災の翌年の平成24年に3か所あった墓を1か所に集めた。この度の津波では被災者は出なかったが、大変なのでまとめた。寺や役所に書類を出して、面倒だった。この津波で皆がバラバラになった。横坂家の娘は夫が亡くなったので、行きやすくなったのか水戸に行き、墓を守る人がいなくなった。横坂の兄弟は都会にいる。そのため、横坂家と木村家の墓は私の家で守ることになると思うが、掃除は私がやっている。家の墓地には墓が20基くらいある。被災前は中町に住んでいて、

私で7代目になる。

私はずっと田老にいる。震災まで田老漁協に勤めていて、41、2年間いた。仁太郎が教師を辞めてから漁協に入り、その次男の晋も漁協にいたので、私も入った。晋さんは宮古の全漁連にいたが、仁太郎さんに引っ張られて田老漁協に来た。私も漁協に入ったが、おじいさんを何と呼んで良いかわからなかった。晋さんを「ススマウンチャンコ」と呼んでいたので、黙っていた方が良いと思った。仁太郎さんを「とーさん」、その奥さんを「かーさん」と呼んでいた。父と母は「トーやん」「カーやん」と分けて呼んでいた。仁太郎は私が小学校1年の頃に亡くなった。

漁協では「二十日講」をやっていて、畠山功さんが大棒をやっていた頃、仁太郎はあんこ餅が大好きで、引っ張られてよく行った。真崎海岸の近くの小港に定置網があり、そばには番屋があり、漁師の節句には偉い人が呼ばれていった。このあたりには私が子供の頃は番屋だけだったが、その後真崎ロッジ、ビーチハウスなどの宿泊施設ができた。鮭も当時は50~60疋捕れると大漁だった。鮭はかつて神様に供えるような貴重な魚だった。節句には大きく切り、竹串に刺していろりで焼いて、神様に供えてから自分たちで食べた。「二十日講」は年に1回で、今も11月か12月頃にやっている。昔は関係者が番屋に呼ばれ、酒を届けて朝まで飲んでいたが、今はそんなにならない。前は当直当番があったので、ずっと飲めた。川留めをしていたので、鮭だけではなく、道具など貴重なものも多く保管してあったので、盗まれると大変だった。

震災の時は漁協の嘱託をしていた。宮古病院に入院中だったので、7階にいて、3本沖から太平洋に白い波が来るのが見えた。宮古湾から出ていった宮古丸が見えた。この船は無事だったが、他の船はだめだったようだ。

父は私が小さい頃は地震があると船で沖に出た。今は保険があるので出ないが、沖に出れば船は助かる。漁師の先輩の佐々木徳松さんが小さい船を持っていた。これでも1千800~2千万円はする。今田老にある船は2千万円以上する。保険は掛け金が高いが、田老漁協では勧めている。

漁協では横坂晋が中間クラスで、山本徳太郎が組合長だった頃、仁太郎は組合長の外部の仕事を代わりにやっていて、いつも宮古に行っていたので、たまに私も付いていった。蒸気機関車にも乗った。娘と私がいつも一緒だった。書類作りは仁太郎がやっていた。私が漁協に入った頃は徳太郎さんがまだ健在だった。20年後の昭和40年頃に鮭が豊漁で、ボーナスが20万円くらいになった。組合員でなくとも各家に鮭が10本くらい配られた。その後は捕りすぎで、鮭が鰯のような値段になった。放流した魚が戻ってくるようになったが、今はまだ不漁だ。水温の関係もある。魚市場にいた頃は、20年前から南の方の魚がたまに入ってくるので、入札のために図鑑で調べて黒板に書いた。トビウオや60㌢くらいの刀魚、色のきれいな魚があった。その代わり鮭が不良になった。鰯は周期があり、5年くらいで捕れたり捕れなかったりする。鮭もそれがあるが、昔に比べると捕れない。川の近くに入らず、沖を廻遊して冷たい海に戻る。定置網に入らない。水温が高いと岡に近づかない。川のそばに寄ってくる魚を定置網で捕る。田野畑、真崎、姉ヶ崎、大船渡ではどこも良いということがなく、どこかが良いとどこかが悪い。水温の関係がある。

木村家の場合

たった2人残った幼子の東一さんとその妹のチヨさんを育て、実家である木村家の跡を護るため、亡くなった長男金太郎さんの弟の横坂仁太郎さんは鍬ヶ崎の旅館をやめ、横坂家の一族を引き連れて、教員を続けながら田老で横坂旅館を始めた。ここでは横坂の名前を残しながら、実家である木村家の子供を育てるという道を選んだ。だから話者である金雄さんは「木村さん」とか「横坂さん」と呼ばれ、どちらにも「はい」と答えていたという。仁太郎さんは自分の親と家族のために昭和の海嘯碑を木村家の墓地内に建立した。

しかしこの度の津波では家族がバラバラになり、結局墓を護る役目は金雄さんが引き受けるようだ。

まとめにかえて―家の継承と津波―

前出の記録によれば、明治29年の三陸大津波では総人口３千７４７人中死亡は2千６５５人、昭和８年では総人口４千９８３人、死亡５８４人、行方不明３２７人に上る（中央気象台）。また一家全滅が１３０戸（明治29年）、66戸（昭和８年）という数である（田老津波誌）。罹災戸数や死者・不明者の数の多さだけではなく、家の継承さえままならない状況だった事が窺える。

常運寺には個人の墓地内に家の「海嘯碑」が建立され、一軒の家から多数の犠牲者が出たことが見て取れる。こうしたことを踏まえて、田老における津波への対処の仕方、生き方を見つめてみると、先ず自分の命は自分で護ることを伝えている。さらに家が途絶えた場合には、その家をつなげてゆくために、ありとあらゆる手段を使って、家の継承を図ってきたということが見えてくる。

しかし、「イエ」とか「家族」の形が大きく変化しているこの時代に、そして今後、東日本大震災がもたらした爪痕に対して、地域の方々はどのように対処してゆくのだろうか。それぞれの時代と共に家族のあり方、先祖を祀るという行為も変化してゆくことだろう。その行方も含めて、しっかりと見守ってゆきたい。

【引用文献】

宮古市教育委員会編『東日本大震災宮古市の記録（第1巻　津波史編）』宮古市　２０１５年

田老町教育委員会編『田老町誌　津波編（田老町津波誌）』田老町町役場　２００５年

ＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老編『田老　あの日、あの時　２０１１・３・11　東日本大震災』ＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老　２０１２年

第1部　各地域における東日本大震災
A　田老地域

第7章　NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老（NPO田老）

大棒秀一

1　序として　―NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老の成り立ち―

2011年3月11日に発災した東日本大震災の平成大津波によって壊滅的な被害を受け、瓦礫の山となった田老市街地を見て愕然とした思いと共に、復興の力となろうとの思いから、地元の同級生等とNPO団体「特定非営利活動法人立ち上がるぞ！宮古市田老」（以下、NPO田老）を立ち上げることとなった。会員数は田老住民を中心として45名であった。

宮古市田老地区のまちの復興と住民の生活再建・自立に関する支援事業を行い、田老の今後の復興に寄与することを目的にスタートした。

当初は、目的どおり、生活再建支援事業及び復興まちづくりを主眼としての活動であった。特に宮古市が招集した地区まちづくり検討会の委員として参画して、田老地区のまちづくり計画に携わることができたことは、復興まちづくりの目的に叶うものであった。また、生活再建支援事業として震災状況の視察への対応も行った。

復興の思いで立ち上がったNPO田老ではあったが、活動を重ねる中で、準備不足と覚悟不足が露呈し、協力活動やチームワークが千々に乱れ、多くの役員が1年を待たずに退会した。まさに法人存続の危機であった。しかも、宮古市との緊急雇用創出事業契約を結んだばかりでもあり、残った会員での体制立て直しが急務となった。

2期目のスタートは、体制の立て直しと目的の見直しから始めた。新しい組織の会員は地元の役員を中心に田老を心から応援する仲間39人であった。そして目的も、田老のこれまでの歴史、文化を踏まえ、世界に貢献できる復興を目指そうとする思いから、田老が世界に誇れる『津波防災文化の発信』を加えた。

現在、設立当初の目的に津波防災文化の発信を加え活動を展開している。

2　震災とNPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老のかかわり

津波太郎（田老）と揶揄されながらも津波と向き合い、復興を成し遂げてきた田老、自然災害と共存するように日本一の防波堤に護られた街、その防波堤に上がって見る海、山、川、街の様々な景色と恵み、そして試練が田老人を育んできた。そこで養われた郷土愛が繰り返される大津波からの復興の力の源である。田老一中の校歌に「防浪堤仰ぎ見よ　試練の津波　幾たびぞ　乗り越えたし　わが郷土　父祖の偉業や　跡つがん」があり、まさに津波太郎（田老）のDNAを伝えている。このDNAがNPO田老を立ち上げたのである。

震災から5年NPO田老の主な取り組み

2011年7月28日にNPO設立総会、田老の復興の力になれることがあれば、そんな郷土愛が集まった総会であった。10月27日岩手県NPO認証。1年目は市が招集した田老地区まちづくり検討委員会に参加の中で、議論の取りまとめ、NPOとしての意見提出、諸アンケート調査報告等の資料提出などを行った。

たろう観光ホテル松本社長より、津波襲来のビデオの提供を受け、視察対応に組み込むも、マンパワーの不足により実現不可となる。

高名な先生の震災支援（ご厚意）を得て、まちづくり講演会を開催した。参加して下さったのは以下の方々である。9月19日伊澤　岬さん（日本大学理工学部教授）。9月25日室崎　益輝さん（関西学院大学災害復興制度研究所長）。11月12日和田　良司さん「奥尻町復興まで」（奥尻町前町長）。演奏会を11月29日に京都フィルハーモニー室内合奏団の参加を得てグリーンピア三陸みやこと田老第一中学校で開催した。東日本大震災1周年追悼企画（写真・ビデオ展、防浪堤での追悼・手つなぎ）実施。

2期目、新役員でスタート。平成24年度宮古市緊急雇用創出事業。市民活動団体（NPO）育成・強化プロジェクト「NPOを磨く15の力」

に参加。三陸復興日独サマースクール歓迎イベントin宮古市田老。「東日本大震災」田老伝承記録誌の発行。「田老」―あの日、あの時―復興経過パンフレットの作成。平成25年3月11日東日本大震災2周年追悼企画（写真・ビデオ展、防浪堤での追悼・手つなぎ）実施。

3期目、三王岩遊歩道早期復旧署名活動（11月19日438名の署名を添えて陳情書提出　東北地方環境事務所長、宮古市長、宮古市議会議長宛）。研修　市民活動団体（NPO）育成・強化プロジェクト実践応援プログラム事業、インターンシップコース参加（山梨県北杜市えがおつなげて）で市の復興事業への参画準備。東日本大震災平成三陸大津波検証。東日本大震災3周年追悼・伝承企画（写真・ビデオ展、防浪堤での追悼・手つなぎ、田畑ヨシさんの紙芝居講演）実施。

4期目、東日本大震災平成三陸大津波検証結果から「提言」作成。検証結果の発信　国連防災世界会議in仙台　ポスター展示発表。「提言書」を宮古市長、宮古市議会議長、宮古市危機管理課へ。要望書をJCN第6回 関係省庁定期協議へ。意見書を独立行政法人防災科学技術研究所地震・火山防災研究ユニット海底地震津波観測網整備推進室に提出。また、災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会委員に意見書を提出。東日本大震災4周年追悼・伝承企画（写真・ビデオ展、防浪堤での追悼・手つなぎ、「関口松太郎村長を語る」梶山亨治郎さん講演）実施。

5期目、日米草の根交流プログラム参加。「田老」パンフレット震災から5年間の記録作成準備。東日本大震災5周年追悼・伝承企画(写真・ビデオ展、講演、防浪堤での追悼・手つなぎ、みんなでつくる平泉主催の毛越寺追悼夢明かり参加等。）準備。

発行冊子等

冊子「東日本大震災」―2011年3月11日平成三陸大津波田老伝承記録―（2014年5月改定）。

パンフレット「田老」―あの日、あの時―（2013年3月）。「田老」改定（2014年5月）。

リーフレット　田老ジオパークポイント（2013年3月）。

協力冊子　あの日を忘れない：東日本大震災の記録・岩手編、NPO法人シニアわーくすRyoma21（2015年5月）。

活動掲載冊子　地方行政（2013年12月）。被災地の復興とNPOの組織力（2014年9月）

3　「津波防災都市宣言」と宮古市の現状

この宣言との関わりで、なぜアンケートを行うことに至ったのか

旧田老町は平成15年3月「津波防災の町」宣言をし、世界各地から視察を受け入れてきた。それ故、東日本大震災平成三陸大津波を検証して、その結果を発信して世界の津波防災、減災につなげていく義務があろう。そんな思いから当法人は「津波防災の町」を宣言し、現在は「津波防災都市」の宮古市田老の総合防災情報システムが、平成三陸大津波でどのように機能したのかを検証した。

検証の結果、「津波防災の町」宣言に至った近代的な設備はほとんど機能せず、津波情報、避難を呼びかける防災行政無線は不具合で3㍍の津波来襲を告げる1回だけの放送だった。（危機管理課の聞き取り調査では宮古市は7回の放送を行ったとのこと。）「津波防災都市宣言」の看板を堂々と掲げる田老総合事務所での惨憺たる結果に、改めて「津波防災都市宣言」の宣言趣旨を宮古市のホームページで調べてみたが、宣言趣旨も要旨も書かれていない。熊坂前市長は講演で東日本大震災を振り返り「平成19年3月の「津波防災都市宣言」以降、宮古市は特に防災意識を高めてきたが、それを徹底できなかったことが悔やまれる。」[※1]と述べている。はたして宮古市議会議員の方々は「津波防災都市宣言」を知って活動しているのだろうか?との疑心暗鬼にかられ平成26年12月1日にアンケートをお願いすることとした。

アンケートで回答者に何を求めたのか、設問に関する説明

市議会議員の皆様に「津波防災都市宣言」認識の有無と宮古市の今後の津波防災・減災の取り組みについてお伺いして、今後のまちづくり、予想される南海トラフ地震・津波、世界の津波減災に役立てたいと考え、

アンケートをお願いした。アンケートは無記名とし、当選回数による理解度、取り組みを把握するため、当選回数をアンケートの項目とした。アンケートの主な内容。

1. 「津波防災都市宣言」の認識と意義・役割。
2. 宮古市が行った「東日本大震災における災害対応行動の検証」報告書の評価。
3. 田老地区での犠牲者、防浪堤の効果の捉え方。
4. 震災遺構として保存が決定した、たろう観光ホテルの利活用について。
5. 宮古市の今後の津波防災・減災についての意見。

アンケートの集計から何が見えてきたのか、その結果の分析とその説明

アンケートの回収率が32％（議員28名中9名の回答）と低く、東日本大震災から3年9か月後に行ったアンケートにも関わらず議員の津波防災に関する意識の低さを痛感して、宮古市のリスクマネージメントと共に宮古市の将来に不安を抱く結果となった。

Ⅰ. 当選回数を教えてください。

当選回数と回答者数（回答率）

1回：7名中1人、1／7（14％）。2回：8名中1人、1／8（12・5％）。3回：3名中0人、0／3（0％）。4回：1名中1人、1／1（100％）。5回以上：9名中6人、6／9（67％）。の回答だった。回答から当選3回までの議員の回答率が11％と低く、4回以上の議員の回答率は70％と当選回数が多い議員が市民の声に真摯に向き合ってくれることがわかった。議会に疑心暗鬼となる結果となった。

Ⅱ. 宮古市は「津波防災都市」宣言を行っていますが、ご存知ですか。

知っている：6名、知らない：2名、その他：1名、無回答：19名で「津波防災都市」宣言を知っている議員は6名（21％）で、議員が市の都市宣言を知らずに活動している不安と失望へつながる結果となった。「津波防災都市宣言」は形骸化していることが明らかとなった。

Ⅲ. 宮古市の「津波防災都市宣言」は役割を果たしたと思いますか。

1. 役割を果たした：3名。
   - 津波防災意識の向上に果たした役割は大きい（津波てんでんこ他）。
   - 津波防災のまちとして毎年、避難訓練等をしてきた。
   - 大きな被害が出たが、役割を果たさなかったとは断言できない。
2. 役割を果たさなかった：2名。
   - 海側防潮堤（第1線堤）に依存したまちづくりへの猛省が必要。
   - 2033年まで99％の確率で宮城県沖地震が発生すると発表されたのが平成17年の市町村合併した年です。当時の熊坂市長はそのため危機管理室を作ったが、この危機管理室に危機感がなかった。
3. わからない：4名。
4. その他：0名。

Ⅳ. 宮古市の「津波防災都市宣言」の特徴はなんだと思われますか。

（無記入者：2名／回答者：9名中）

- 津波防災意識を常に抱き、津波被害の歴史を忘れず、防災力の向上に市民自らが取り組み、2度と同じことを繰り返さないと誓うこと。
- 旧田老町で過去に経験した津波でも防げると自負していた防潮堤が宣言の原点にあったからだと思っている（完全とはいかなくとも、大きな被害を防止できると考えていたと思う）。
- 津波から人命や財産を守り、安心して暮らせるまちを作ること。
- 津波被害の伝承と災禍を繰り返さない住民意識の醸成。
- 田老の防潮堤でしょう。しかし宮城県沖地震が発生したら最悪の場合22・3メートルの津波が襲うと発表されていたのに、全員に危機感がなかった、これは市民一人一人にも責任がある。
- 津波防災に対する市民意識の啓蒙を図ること（教訓を忘れずに）。

・広く市民に認知されていない事。

Ⅴ. 宮古市の「津波防災都市宣言」は必要か。

1. 必要：4名。2. 現状では必要ない：3名。3. その他：2名
3. その他の意見
・津波による直接被害を受ける地区（海側）と受けない地区（山側）との意識の差が大きい。今回の災害時にも大きなギャップを感じた。限りなく共有できるかが課題と思う。
・立派に防潮堤を作っても今後どんな津波が来るかわからない、避難訓練がちゃんとできるようになってから宣言すべきだろう。

Ⅵ. 宮古市が平成24年3月にまとめた検証報告書「東日本大震災における災害対応行動の検証」は津波防災都市宣言の宮古市の検証報告書として十分か。

1. 十分である：1名。
2. 不十分：1名。
3. 第三者委員会での検証が必要：3名。
4. 被災地33地区の検証も必要：1名。
5. その他。無記入：1名。
6. 第三者委員会での検証が必要との回答が3名（38％）と多かった。

Ⅶ. 宮古市津波被災地区33箇所の中で田老地区の犠牲者が一番多かった理由。

1. 防潮堤の依存による安心感から逃げ遅れてしまった：4名
2. 最初の防災無線放送で3㍍の津波が来るとの情報から避難が遅れたため：3名
3. 停電になってテレビからの情報が得られなかったため：0名
4. 防災無線からの避難情報が1回しか無かったため：0名
5. 防潮堤で津波が見えなかった：0名
6. その他：2名
・前々日あたりの警報でも、大した津波が来なかったため、慣れてしまった。
・地震の規模が大きかったから高台に避難してほしかった。
・平成20年に全家庭にハザードマップが配布されている。よく見れば被災することはわかったはずだ、田老地区の責任ある立場の方々の危機感がなかったのではないか。

Ⅷ. 田老の防潮堤は効果（機能）があったと思いますか。

1. ①効果があった：7名　②効果が無かった：2名
③その他：0名
2. 上記1で①効果があったと答え方にお伺いします。
・防潮堤がなく、のっぱらだったら北高あたりまで波がとどいたかも。
・避難時間をいくらかでも稼いだのでは。
・整備されてなければ、もっと大きな被害が生じたと考えるから。
・避難者の時間の確保。
・防潮堤がなければ、総合事務所他、残っている建物すべてがなくなっていただろう。
・未曾有の大津波であったが。一定の防災機能は果たしたのではないか。
・被害を100％防げなかったが、被災を受けない地区（山側）を残したのではないかと思う。人的被害を軽減できた。

Ⅸ. たろう観光ホテルは震災遺構として残すこととなりましたが、運用の方法をお伺いします。

1. ホテルの中を資料館として活用する（エレベーター設置等の整備をして）：0名
2. ホテルの中を資料館として整備して、津波の時は非難ビルとして活用する：3名
3. ホテルの中は使用しないで外側だけからの見学だけとする：0名
4. ホテルは外側からの見学とし、資料館は別に作る（広島平和記念公園参考）：2名
5. その他：4名
・反対だから
・「学ぶ防災」として活用すべきと考えます。

・ホテル6階から写したビデオを同じ場所で見る事が一番の津波伝承だと私は考えます。
・学ぶ防災施設として事業化されており、事業目的は理解している。

X. **最後に今後、宮古市は津波防災・減災に向けてどのような取り組みを行うべきだと思いますか。必要と思われる事をご記入ください。**

・ハード面では防潮堤の整備。ソフト面では、防災、減災に対する指導、教育、伝承。
・今後どの様な大きさの津波が発生するか予測はできない。数年で整備される防潮堤であるが、完全に津波を防げる訳ではない。命を守るには逃げるしかない。3・11での経験が風化することが一番怖い。津波発生時のより正確な波高をより早く住民に伝達するシステムの整備が必要である（情報への信頼感が低い）。
・避難路、避難場所（高台）、避難行動の徹底。自主防災組織の充実。各事業所の避難マップの作成。犠牲者を出さない決意で。
・宮古市は津波だけとは限らない、最近の異常気象は大雨や土砂災害も考えられる。全地区すべてに自主防災組織をつくり、それぞれ訓練を重ねるしか方法はない。すべてを行政に頼るのではなく、自助、共助、の精神でみんなで助け合いましょう。
・いつかまた津波がやってきます。東日本大震災の教訓を後世に伝えることが重要です。ハード面に依存することなく「津波が来たらまず、避難する」ことの重要性をいかに広め伝えていくかが取り組みの課題ではないでしょうか。
・新堤に頼ることなく、住居を浸水しない地域に移すべきだ。真に新しい街づくりに近づくチャンスだったと思う。
・今回津波浸水地域（危険区域）に住んでいても尋常でない揺れに避難の判断をして、行動した住民は助かっている。「逃げるが勝ち」の意識を徹底すべき。30分ルールによる自力避難の困難な住民へのサポート体制の構築（避難訓練）が重要。住宅など被災資産の復旧を可能にする財政支援とともに、高台移転など避難しなくても良い安全・安心のまちづくりを基本にすべきです。
・防潮堤の建築等、ハード面に依存しがちである。むしろ海岸として自然景観として美しいリアス式海岸を守りつついかに自然と共生するかである。常に逃げれる体制等の構築が不可欠である。

以上

アンケートから見えてきた事

回収率の悪さから議員の防災に対する取り組みに不安が感じられた。特に当選回数の少ない議員にその傾向がみられ、津波災害のリスクの多い宮古市ではリスクマネージメントにしっかり取り組んでいただきたい。

宮古市は「都市宣言」をないがしろに扱っている。「津波防災都市宣言」はまさにその典型で、旧田老町が誇った総合防災情報システムは形骸化していて、宮古市の東日本大震災平成三陸大津波被災33地区で1番多い181人の犠牲者を出す結果となった。マスコミは「釜石の奇跡」「田老の備え」として、田老には大きな堤防があったので安心して避難しなかったと反面教師的扱いである。田老総合事務所に掲げている「津波防災都市宣言」は市役所本庁に掲げ市民に周知して、東日本大震災の教訓とすると共に風化を防ぐ取り組みにつなげて頂きたい。

たろう観光ホテルの津波震災遺構の利活用については、まだまだ議論の余地がありそうだが、防災教育施設として活用するのであれば、明治、昭和三陸大津波を含む田老の津波文化を伝える遺構として活用して頂きたい。

今後の宮古市の防災・減災の取り組みについて、提出いただいた意見を尊重しながら「津波防災都市宣言」の周知に取り組み、議員が「津波防災宣言」を確認・理解し防災意識を徹底し、市民の安全と安心を優先に推進して頂くことを望む。

市議会議員アンケートから見えてきたことは、宮古市の「都市宣言」はパフォーマンス市政の表れで、「津波防災都市宣言」は形骸化していた。市議は合併4市町村の先進的取り組みを市民と共有する市政に取り組んでいただくと共に、市民のリスクマネージメントについて先輩

写真１　昭和８(1933)年 三陸大津波前の田老村の街並み（芳賀禧久作）

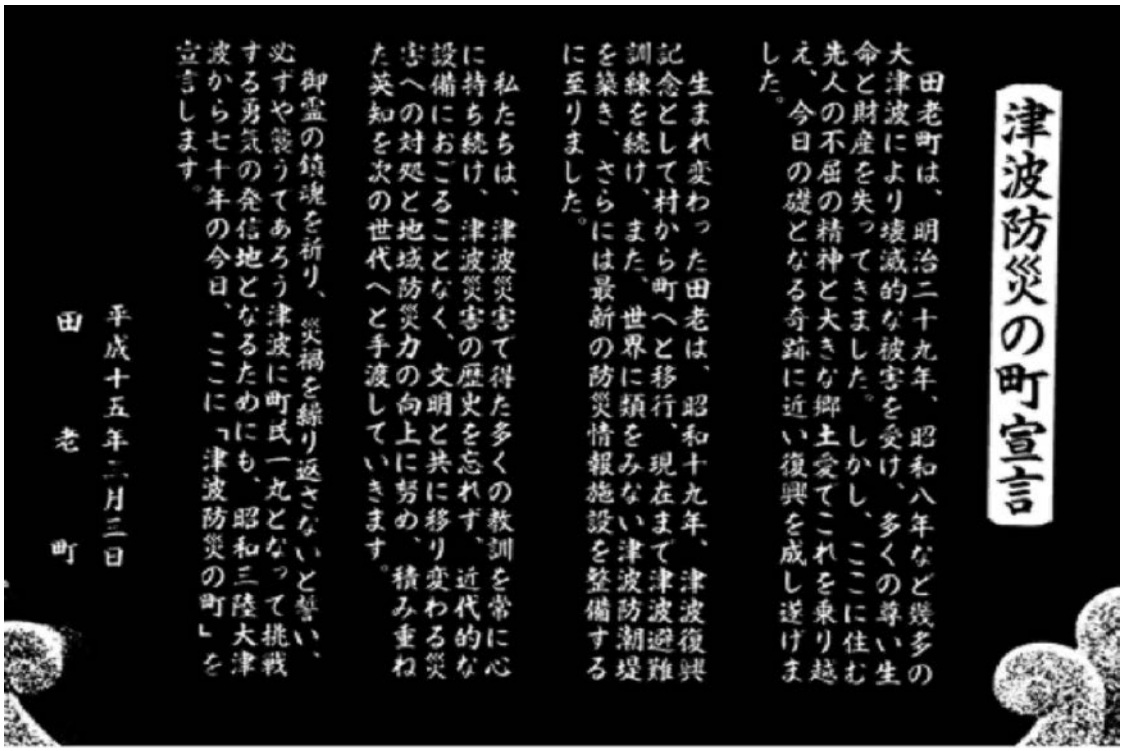


写真２　「津波防災の町」宣言石碑

議員は後輩議員をしっかり教育して頂きたい。そして、ザ！風化は宮古市の議会から始まっていた、と言われないように。

4 「津波防災の町」宣言をした田老の町に関する津波対策の検証

「津波防災の町」宣言をした田老の東日本大震災以前の状況

明治22（１８８９）年に田老、乙部、摂待、末前の４村が合併して新生田老村としてスタートしてから、明治29（１８９６）年、昭和８（１９３３）年と壊滅的な津波被害を受け、その都度復興してきた田老。明治29年の三陸大津波では、り災生存者36人から復興（写真１）、37年後の昭和８年の津波前には人口５千１２０人に。昭和８年の三陸大津波の被害後は、岩手県初といわれる市街地計画をはじめ、防浪堤築造計画、長内川護岸計画、田老川護岸計画、防潮林養成計画、生産施設援助等の１００年の大計を立てて復興し、昭和８年三陸大津波から11年後の昭和19（１９４４）年村から町と町制施行が行われた。町制施行にあたり議会に出された議案内容は「…郷土の再建にまい進した結果、災害後わずか３年を経ないで復興を完成させた。この間に田老鉱山の発展に伴い人口はいまや一万人を超え、市街地戸数は五百数十戸を有するに至った。区画整理の施行により住宅街路は整然とし、上水道の敷設、教育、衛生、警防、文化、その他各種の設備は完成し街としての実態を備え、ますます発展のすう勢にある。…」とある。※2。

田老は津波太郎（田老）と揶揄されながらも津波と共存する道を歩む「新しい防災のまちづくり」で安全なまちを目指し、漁業を生業として町の活性化に取り組んで復興してきた。安全なまち「津波防災の町」は市街地計画《避難しやすい道路・区画整理（碁盤の目の街並み）、交差点の隅切り等》、防浪堤築造計画が完成して礎となり、昭和56（１９８１）年情報連絡施設（防災行政無線）が完成。昭和61年から平成５年度、津波避難路、誘導標識の整備。平成３年度から６年度、田老総合防災情報システム整備。平成12年度、情報連絡施設（防災行政無線）改修。ソフト面では昭和９年から平成11年まで３月３日避難訓練。平成２年11月第１回全国沿岸市町村津波サミット。平成８年６月明治三陸津波１００周年追悼式典をへて平成15（２００３）年３月３日「津波防災の町」宣言に至った。田老は「災禍を繰り返さない」と誓い、「津波防災の町」を宣言し記念の石碑を設置した（写真２）。

その検証に関する分析とその説明、そしてそこから導き出された提言

東日本大震災平成三陸大津波後、世の風潮は「釜石の奇跡」「田老の備え」にみるように、２００４年から釜石市鵜住居地区で始めた防災教育や防災活動が多数の命を救ったとして「釜石の奇跡」と呼ばれ、田老は二重の大きな堤防があったので安心して避難しなかった。その結果、多くの犠牲者を出したとして「田老の備え」と呼ばれ、ハードに頼るのではなく逃げる大切さを教える教訓としている。田老の備えを学者の都合のいい堤防だけを引合いに出して行われている津波防災教育は、田老の明治29（１８９６）年、昭和８（１９３３）年の三陸大津波から平成23（２０１１）年三陸大津波まで、明治から数えて１１５年間の防災の取組みと住民の防災意識の変化、そして平成三陸大津波を歪曲して伝える教えとなっていて、田老で育った者には耐えがたい不信となっている。では多くの犠牲者はどうして出たのか、「津波防災の町」を宣言し津波防災・減災に取り組んできた田老の東日本大震災平成三陸大津波を検証した。

表１　検証１―田老総合事務所（津波防災の町）の津波防災近代設備稼働状況―

	近代設備	場所、システム	発災前	発災（14：46）	発災直後	発災25分後（第１波到達後）	発災40分後（第２波到達）	発災42分後（第３波到達）	備考
①	潮位計	田老漁港	○	○	○	○	×	×	稼働データの公開
②	津波監視カメラ	総合事務所	稼働	稼働	稼働	稼働	稼働	稼働	録画は取れていない
		田老漁港	○	○	○	○	×	×	録画は取れていない
③	河川監視カメラ	荒谷沢川	○	○	○	○	○	×	河川監視システム
①	計測震度計	東大地震計	方向性に難×	×	×	×	×	×	機能していなかった
		文部科学省	○	○	○	○	○	×	稼働していたのか
②	屋外受信装置	気象観測システム	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	OFF	稼働状態スイッチが
③	防災行政無線	固定系	○	○	○	×	×	×	事務所の防災行政無線ダウン２日後自動復帰、原因調査なし
		移動系	△	△	△	△	△	△	
			使用されたかは不明						
④	緊急情報衛星同報受信装置（J-ALERT）	総合事務所 宮古市役所 宮古消防署	× ？ ○	× ？ ○	× × ○	× × ○	× × ○	× × ○	東日本大震災と地域衛星通信ネットワーク利用状況報告書
⑤	田代川水門操作（県の管理）	総合事務所裏	× 遠隔操作不能	×	手動操作	閉	閉	閉	３月９日の地震で遠隔操作不良を確認

全ての機材を無停電装置に接続。
保守管理はされていた。
参照資料：「東日本大震災と地域衛星通信ネットワーク利用状況報告書」
　　財団法人自治体衛星通信機構

表２　検証２―発災からの情報検証―

東日本大震災　宮古市沿岸における発災からの経過時間と情報及び参考ビデオ・テレビ

時間と（）内は地震からの経過時間	警報・状況・気象庁発	防災無線・NHK 放送画面	宮古港に押し寄せる津波（漁協ビル TBS）	宮古光岸地ビデオ 1 ～ 10	宮古海上保安署を襲った津波（約 45 分）
14 時 46 分	地震発生（M9.0 後日）				
14 時 49 分	大津波警報発令－気象				
14 時 50 分	津波予想岩手３㍍－気象				
15 時 11 分	宮古 20㌢到達－NHK　第１波	NHK 放送画面			
15 時 14 分（28 分）	津波警６㍍変更－気象				
	宮古津波 20㌢観測	防災無線津波情報	防災無線放送受信	防災無線放送受信	
15 時 15 分					３㍍：会話の中
15 時 18 分（32 分）				堤防津波で水没	６㍍に変更会話の中
15 時 19 分（33 分）	２㍍ 80㌢観測－ NHK 第２波到達	NHK ３：26 放送			
	３㍍から６㍍に変更既に、出崎地区（なあど）が津波襲来。	防災無線津波情報（津波襲来にも関わらず形式的な放送）	防災無線放送受信	防災無線放送受信	防潮堤超える［海保］
15 時 21 分（35 分）	宮古４㍍以上観測－NHK　第３波到達	NHK ３：26 放送	津波の大波映像確認		
15 時 26 分（40 分）	たろう観光ホテル６階ビデオ撮影開始	松本社長ビデオ撮影開始，この時すでに田老湾は第２波の津波によって水没していた。 松本社長が聞いた防災無線の津波警報は、「高さ３㍍」を告げる１回だけだったという。			
15 時 28 分（42 分）	田老第３波津波到達	田老診療所の時計は 15 時 28 分で止まっていた。第３波の波高は最大 16.6㍍			
15 時 31 分	津波警 10㍍以上－気象				
15 時 35 分					35：03 pm 引き波
15 時 59 分					59：22 pm　津波
16 時 04 分					04：42 pm 引き波

田老港での津波到達時間と参考情報

参考ビデオ YouTube

・宮古海上保安署撮影
・宮古港に押し寄せる津波
・―宮古湾を襲う津波の様子を捉えた映像（宮古漁協から鍬ケ崎地区を撮影）：岩手めんこいテレビ宮古支局記者―
・東日本大震災動画まとめ wiki　岩手県宮古市
　―　光岸地 1 ～ 10　　地震、津波の恐ろしさを忘れないように、そして今後の教訓の為に関連動画をまとめいく wiki です―

検証の結果

田老総合事務所の総合防災情報システムのほとんどは機能してなく（表1）、津波情報、避難を呼びかける防災行政無線は、田老では3㍍の津波来襲を告げる1回だけの放送でした（表2）。危機管理課の聞き取り調査では宮古市は7回の放送を行ったとのこと。停電で使えなくなったのかと、危機管理課に確認したところ、防災行政無線放送は充電も十分であったが、3㍍の津波襲来放送後、田老の防災行政無線放送は、田老総合事務所内の発信設備の不具合で使えなくなりました。そのことで避難の情報が届かなかったのではとのあいまいな答弁だった。防災行政無線放送の不具合は2日後、自動復帰したので点検、修理等は行われていないとのことで、同様の状況が起きる可能性（不具合）のまま防災行政無線は使われている現状であった。

唯一機能していた無停電装置で津波監視カメラは稼働していたが、得られたカメラ情報（田老湾での津波）は防災マニュアルに不備があり、住民の避難情報として伝わっていなかった。（被害の増大）ビデオ記録もセットアップに時間がかかるという理由で記録されていなかった。

検証の結果「津波防災の町」宣言の田老の犠牲者が多かったのは、

1. 気象庁の第一報、大津波警報の襲来津波高3㍍の誤報発表。
感じたことのない大きな地震に大きな津波の襲来を直感し、避難準備していたところに、気象庁から発表された大津波警報は津波の高さ3㍍でした。これまでの経験（オオカミ少年効果）と10㍍の防波堤との比較で避難の警戒心は一気に和らいだ事。
2. 田老総合事務所が管轄する防災行政無線の不具合。
田老総合事務所が管轄する防災行政無線から住民への津波情報、避難を呼びかける放送は、襲来する津波の高さは3㍍との誤情報を1回伝達した後、事務所内発信設備不具合によって途絶えた。その後、防災行政無線からの津波情報、避難呼びかけは一切されなかった。田老住民は気象庁の無責任な3㍍津波襲来情報で行動していた。防災行政無線放送の不具合は2日後、自動復帰したので点検、修理等は行われていない。
3. 宮古市の危機管理体制の不備。
市庁舎のJ-ALERT（全国瞬時警報システム 注(1)）の受信機は停電で使用できなくなっていたが、宮古消防本部に設置された受信機で受信した大津波警報の内容を消防署の防災行政無線の副制御卓にて手動で操作して放送した（リダンダンシー）。の如く、田老総合事務所の防災機器室のずさんな管理体制。マニュアルの不備。緊急時対応訓練の未実施。など日頃の危機管理への認識不足。
4. その他、多数。

普段住民が津波情報を得ているテレビは停電で見れなかった。3㍍の津波情報を信じた犠牲者の多くは防浪堤へ津波を見に行ったり、一旦避難した避難場所から家に戻ったと伝えられている。せめて津波の襲来高が3㍍から6㍍に変更になった情報が伝わっていればと、津波予測の不確実性と情報伝達の不備が悔やまれる。

結論、気象庁の津波予測と「津波防災都市宣言」宮古市の危機管理のずさんで、田老住民は誤報の3㍍津波襲来情報で避難行動していた。気象庁の津波予測と「津波防災都市宣言」宮古市の危機管理のずさんで、東日本大震災の地震と津波は天災と認識しているが、その後の対応は減災できる人災であり、今後の津波防災・減災には東日本大震災の真の検証を基に、しっかり取り組んで頂きたい。特に「津波防災都市宣言」の宮古市には、危機管理体制の充実が必要と思われた。

これらの検証結果から下記の提言を行った。

《提　言》

私たち田老地区住民は、今回の震災で、10メートルの二重の防潮堤がありながら、多くの犠牲者を出したことを教訓に、国や地方行政はもとより、国内外の研究者にも、以下のことを迅速に達成されるようにお願いをするものです。

1. 沖合水圧計及び潮位等に基づく津波警報技術を促進し、津波予測技術の精度を、市民の安全確保ができるまで向上させ、行政による津波警報の信頼を高め、発表される情報が、過小、過大とならないよう正確な情報を迅速に市民に伝えるようにして下さい。

2. 万全と思われる設備を持ってしても災害時には、通信・連絡方法の手段が途絶えることが、今回の震災で顕著になりました。行政は、考えうる全ての事象においてリスクマネージメントを行い、投資した設備・計画におごることなく、全ては無に帰することを念頭に防災マニュアルの整備や防災訓練、それを指揮する民間人及び行政職員の人材育成に絶え間なく取り組んで下さい。

・なお、検証結果、提言は２０１４年８月宮古市長、宮古市議会議長、宮古市危機管理課。12月宮古市議会議員全員に提出。その後、問い合わせ、訂正等の連絡は一切ない。
・検証結果、提言を第３回国連防災世界会議in仙台（２０１５年３月14日～18日）パブリック・フォーラムにてポスター展示発表をおこない世界にＴｓｕｎａｍｉ防災・減災を発信した。
・提言を関係各所に陳情した。（陳情が功を奏したかどうかは定かではないが）２０１５年10月26日付の新聞で「津波沖合で高精度予測」（見出し）、国は津波予測システムを高度化する研究に28年度から取り組むと報道された。

注(1)：津波をはじめとする大規模災害や、武力攻撃事態が発生した際に、国民の保護のために必要な情報を通信衛星を利用して、瞬時に地方公共団体に伝達すると共に、地域衛星通信ネットワークに接続された同報系市町村防災行政無線や有線放送電話を自動起動させ、サイレンや放送によって住民へ緊急情報を伝達するシステムである。（田老の総合防災情報システム、緊急情報衛星同報受信装置が元祖）

5　復興まちづくり検討委員会の立ち上げ

この会のそもそもの成り立ちと成立したいきさつ

宮古市は、平成24年3月に策定する「復興まちづくり計画」に被災地域33地区の住民の意見を反映していくための検討会を、被災地域33地区の状況に応じて「検討会立ち上げ型」と「全体協議型」の２つを立ち上げた。田老地区は「検討会立ち上げ型」で自治連合会、田老地域協議会、田老町漁業協同組合、宮古市復興対策特別委員会、ＰＴＡ、ＮＰＯから選出された住民代表27名を構成メンバーとして結成された。摂待地区、小港地区は「全体協議型」で行われた。

議論のプロセスとその説明

田老地区復興まちづくり検討会の経過。宮古市が地区住民に対して第1回地区復興まちづくりの会を平成23年9月22日から26日に開催した。検討会立ち上げ等についての説明会を行った。それから、10月25日に第1回地区復興まちづくり検討会を開催、平成24年1月30日の「地区復興まちづくり計画（案）」の決定まで、検討会4回、と意見交換会1回、第3回検討会の追加1回の計6回の検討会と地区復興まちづくり計画（素案）内覧会をへて2月18日に第2回地区復興まちづくりの会を開催して、地区復興まちづくり計画の決定について住民に報告した。その上で平成24年2月28日に市長へ提言書を提出した。

その結果を受けて

提言書を受け宮古市は平成24年3月宮古市東日本大震災地区復興まちづくり計画を発表、住民に説明を行った。検討委員会で決めきれず市にゆだねた形になった高台移転地は乙部高台に決まった。防潮堤整備は、一線堤は14・7㍍となった。検討会から要望し宮古市は消極的だった二線堤と一線堤の切り離しは70㍍切り離すこととなった。大平地区（田老駅前）のかさ上げについては、三陸沿岸道路の整備計画を見据えた県道有芸田老線の整備の状況を踏まえて調整していきますとしている。津波遺産等保存事業については、津波遺産等の保存・整備を図り震災の記憶と記録を後世に伝承しますとしたその上で、「防災の町・田老」としての取り組み等を後世に伝えていくため、津波遺産等の保存・整備を進めます。《津波遺産等保存整備事業》と計画では謳っている。震災から4年半たった現在、先人が築き上げた田老の津波文化「碁盤の目の街」を取り壊している。検討会で話題となった商店街、新駅構想など、市側の方針がはっきり示されず五里霧中の状態。これまで説明されていなかったのが市街地の段々畑状整地《都市再生区画整理事業》、震災前までは平坦だった市街地が新しくなった市街地では、段々畑のように国道から山側に、三王団地接続道路と国道の交わるところを境に両側に段々と下がっている。市から示される図面が平面図だけで、震災前と同じく平坦だと思い込んでいた田老住民。段々になる街のコンセプトの説明、また、擁壁工事の経済的負担、防災面のリスク、バリアフリー等についての説明は省かれていた。心配なのは、海岸保全施設等整備事業の遅れによる住民の安全である。示されたスケジュールでは、27年度に事業終了とあった。その後、県の担当者から一線堤の完成が1年遅れるとの説明があった。だが、一線堤ができ上がっていないにもかかわらず市街地（二線堤内）への住宅建築許可が出され、住みだしている。これで大丈夫なのか。住民への説明では、津波シミュレーションで市街地の居住地区として安全と示されているのは、一線堤（14・7㍍）が完備された、二線堤内のかさ上げ地区（国道45号線から山側）である。さらに計画で今後の課題とされていた二線堤内の総合運動公園について、野球場建設が市から示され建設されている。しかし海岸から二線堤内につながる中央ひ門を閉鎖して進められている。一線堤が完成されない中で、中央ひ門は閉じられ、避難できるひ門は南側二線堤水門と500㍍遠くなっている（いずれ、このひ門も乗り越え道路工事で閉鎖される）。海で作業する住民の安全がないがしろにされ、住民の安全より野球場建設が優先されているまちづくりとなっている。漁業を生業とする住民にはたまったものではない。一線堤、堤防乗り越え道路の早期完成を願ってやまない。一線堤が整備されないままでは、二線堤外の2部地区の堀丁も大平地区の兄形も安全な集落とは言えない。

6　NPO田老がまちづくり検討委員会に提出した資料

1．復興まちづくりの課題の提案（第1回検討会2011年10月25日）。

2．仮設住民と在宅被災者に田老地区復興まちづくりアンケート結果の報告（2011年12月18日仮設、2012年1月5日在宅被災者、）。

3．「田老復興まちづくり検討会」議論状況のまとめ（2012年1月5日）

4．田老地区復興まちづくり検討会への意見・要望書提出（第4回2012年1月30日）

アンケートの設問の意味、回答者に何を求めたのか、アンケートの集計結果から見えてきたこと。

震災後、市のまちづくりの検討として行う住民対象アンケートは、仮設住民中心のアンケート結果で検討会が進められていた。在宅被災者の意向も踏まえた検討でないとコミュニティー等の配慮に欠けた、片手落ちなまちづくり検討になると考え、仮設在住者と在宅被災者に同じ設問のアンケートをお願いした。その中からコミュニティーの再生を考慮して、1．現在のお住まい　2．今後、田老に住み続けたいと思いますか？　3．住むならどこに住みたいですか？　の3項目（グラフ1～3）を抽出して比較した。結果、住むならどこに住みたいかの設問で、仮設住民→高台、在宅被災者→元の場所と正反対の結果となった。在宅避難者も高台希望者がいたが、防災集団移転促進事業の対象とならないので、現在住んでいる場所にいるしかないという意見も多くあった。結局は集落が大きく6か所に分散された街となり、一体感が薄れ、地域力の低下が心配される。震災前から過疎化が心配されていたが、震災、新しいまちづくりによって加速されている。分散された集落のコミュニティーをどう繋ぐかが近々の課題と考えられる。

図3

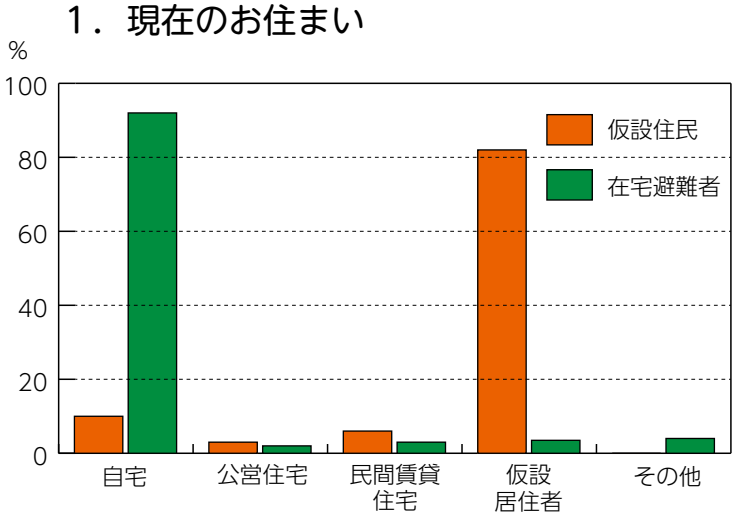


図4

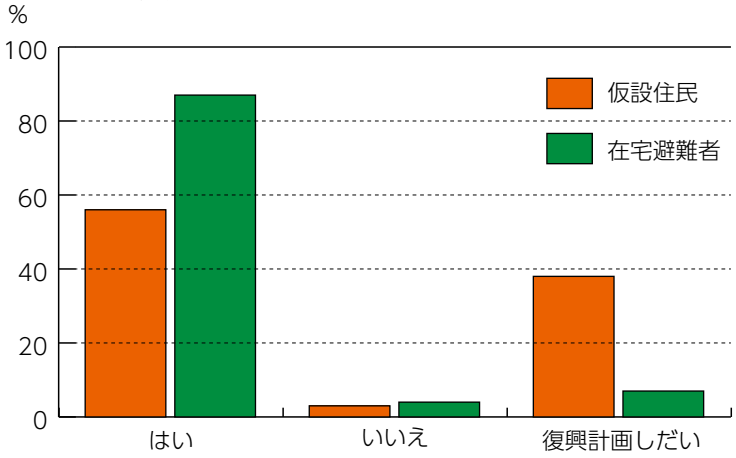
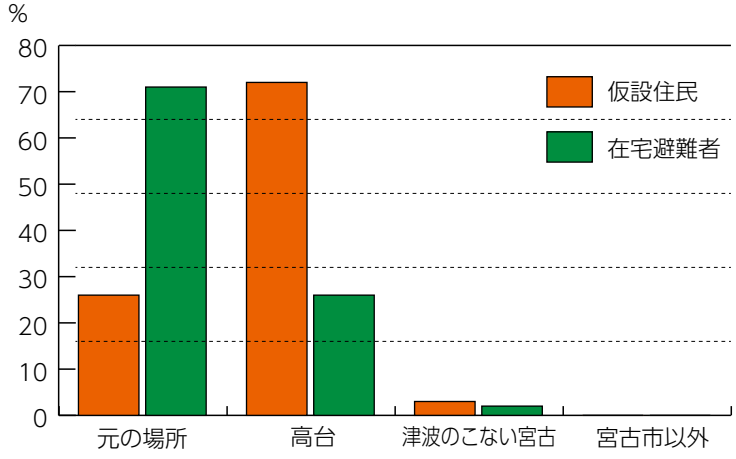


図5



7　失われた津波文化

復興事業によって失われた津波文化がどういうものなのか、その結果として津波防災の町文化の消滅に至った経緯とその説明

田老は１６１１（慶長16）年、１８９６（明治29）年、１９３３（昭和８）年と津波で壊滅的な被害を繰り返しながらも、先人は豊かな海の幸を生業として復興してきた。古くから津波被害が多く、いつの日か津波太郎（田老）の異名で呼ばれるようになっていた。津波を負のイメージとして難解文体で記録に留めるだけの町村の中にあって、田老は繰り返す津波を見据えた取り組みを行ってきている。明治29年三陸大津波後に約２メートルの防潮堤計画を実行（挫折して45センチに終わったが）。役所、小学校、寺社の高台建設、津波慰霊碑の建立、一家全滅１３０戸の被害から「つなみてんでんこ」の教訓、「ばらばらに逃げても必ず生き延びて家系を守れ」との教えが伝承されてきている。

昭和８年三陸大津波後には津波と向き合い共存する防災まちづくりを関口松太郎村長のリーダーシップの下取り組んできた。岩手県初といわれる市街地計画で、真夜中でも避難しやすい避難路に向かって、まっすぐのびた道路と、交差点の四隅を隅切りした碁盤の目の街並み、排水を考慮したすり鉢状の街、火災の延焼を防ぐ道幅の広い道路など、防災を考え抜いたまちづくりとなった。《このまちづくりは１９２３（大正12）年９月１日に発生した関東大震災後に岩手県水沢市（現奥州市）出身、後藤新平の構想した「帝都復興計画」構想がそのまま田老に移され、実現されたといわれる[※4]。》合わせて津波の威力を受け流す船首状設計の巨大防浪堤建設と河川護岸整備、防潮林養成で津波緩衝地帯を設けて街を守り、さらに生産施設援助を行い生業の支援をしている。まさに「命と暮らしを守る」政策で復興まちづくりに取り組んだ。明治と昭和の壊滅的な津波被害を経験して、住民が教訓としたのが「防災」だった。

田老出身で津波防災教育活動家の田畑ヨシさんは、幼少時から、かつて明治三陸地震の大津波を体験した祖父より、津波の恐ろしさを毎晩のように言い聞かされながら育った。身をもって津波の恐ろしさを知っていた祖父は、家族以外、特に他の土地からの転居者にも津波のことを語り続けてきた。そのような環境で育ったヨシさんは、昭和三陸津波体験をもとに紙芝居「つなみ」を自作し、地区内外の児童に講演で津波の恐怖を語り続け、地域の防災教育に貢献してきた[※5]。昭和９年以降、昭和三陸大津波襲来の３月３日に避難訓練を実施、避難場所でたき火を囲みながら長老から伝えられる津波の体験談等、田老尋常高等小学校生徒たちの作文集、田老小学校が刊行した『田老村津浪誌』などは住民に津波の恐ろしさを伝え、その地で生き延びる知恵を教えるものだった。それらの教えが平成２年の第１回全国津波防災サミットを提唱・開催、平成13年総務省の「防災まちづくり大賞」消防長官賞につながり、「災害の町」から「防災の町」として全国に知られるようになった。平成15（２００３）年の「津波防災の町」宣言は、田老が唯一、世界に誇れる先進的な取り組みとなっていた。明治三陸大津波から１０７年、昭和三陸大津波から70年。「津波防災の町」宣言に至った取り組みは、まさに田老の津波の歴史であり津波文化だった。

平成23（２０１１）年３月11日の東日本大震災平成三陸大津波は、堅牢な防浪堤を乗り越え街を飲み込んでしまった。津波で洗われた街の後に、昭和８年の三陸大津波後に村民の命と暮らしを守ろうと、先人が取り組んだ防災まちづくり計画で造られた「防浪堤で護られた碁盤の目の街並み」が姿を現した（写真３）。物心ついた時には既に家は建ち並び、街の全容は図面でしか目にすることはなかった。それ故、実際に目の当たりにした防災市街地、防浪堤で護られた碁盤の目の街並みに、昭和８年の当時のリーダと地域力に繰り返される津波を乗り越えて来た郷土愛を感じとった。まさしく先人の郷土愛で築いた田老が世界に誇る津波文化「津波防災の町」の姿であった。防浪堤の中にあっても碁盤の目の横道はまっすぐ避難路につながっていて（写真５）、真夜中に停電しても避難しやすいように考えられている。田老の防浪堤は住民の避難を助け、命を守り、風化を防ぐ建物としてハード、ソフトの役割を担っている。この防浪堤で護られた碁盤の目の街並みは、津波と闘い続けてきた津波太郎（田老）の教訓として、受け継いでい

写真３　2011 年３月津波後の田老市街地「防浪堤で護られた碁盤の目の街並み」
(Google 画像取得 2011/03/24)

くべきである。

東日本大震災の地震・津波では、田老の中学生は校庭に避難していた。しかしいつもなら見えない海に上がる水柱を見て、田老出身の用務員さんの「山に逃げろー」の掛け声で、中学生は校庭に避難してきていた園児、高齢者を抱きかかえて近くの山に避難した。その結果、中学生１３１名と教職員、避難して来ていた園児、高齢者は全員無事だった。津波は一時避難していた校庭まで押し寄せ、とどまっていたら大惨事となるところだった。田老の防災教育（田老一中の校歌等）で育った用務員さんの機敏な判断で、１人の犠牲者も出さずに避難した行動は、釜石の奇跡に勝るとも劣らない行動であった。また、避難した中学生は進んで物資の運搬等の役割を担った。これも津波太郎（田老）の共助の教えである。さらに津波の翌朝には津波被害のなかった神田地区の住民による炊き出しが行われ、多くの避難住民におむすびを配った。炊き出しによって配られたおむすびを避難住民は子供、お年寄りを優先に配り、行き届かなかった大人に半分分けてくれた子供もいた。空腹と、なにより心のケアー支援となった。これも田老の災害文化で大津波・三陸フェーン大火を語り継ぐ中で醸成してきた共助の行動で、壊滅的な被害を受け、復興して来た田老の最大の要因である。

先人のこれまでの取り組み防災市街地は、東日本大震災の復興計画によって、これまでの歴史の検討、復興グランドデザインの検討のないまま、官民（民間大手企業）復興まちづくり計画によって緩衝地として取り壊され、津波文化「碁盤の目の街並み」は教育委員会の野球場建設計画によって無残にも打ち砕かれ（写真４、６）、田老の津波の防災遺構も、歴史も葬り去られている。

写真４　－碁盤の目の消滅－　2015/06 撮影

消滅した中町の避難路につながる直線道路と隅切り　上下比較

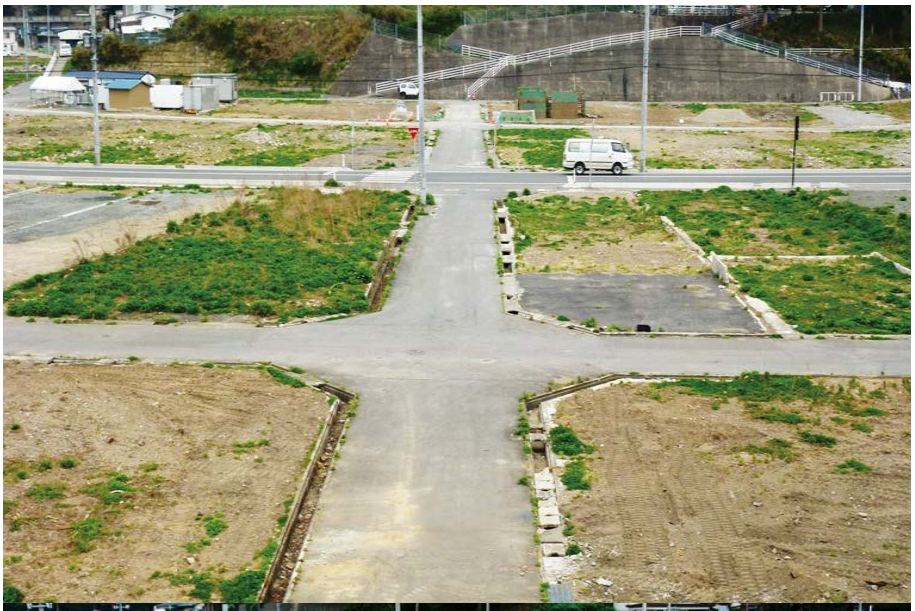


写真５　震災直後の直線道路と隅切り

写真６　復興工事で消滅した道路と隅切り

8　終わりに

課題としての観光そして、ＮＰＯとしての提言

東日本大震災平成三陸大津波の教訓として、「釜石の奇跡」「田老の備え」を報道やインターネットで拝見する。釜石の防災教育（ソフト）と田老の防潮堤（ハード）を、比較として防災教育の大切さを教えているようにみうけられる。しかし、釜石の奇跡を指導した本人は「田老の備え」についての検証を行わないまま「防潮堤があるから逃げ遅れた人も多かった」などと発信している。田老の明治三陸大津波から１１５年の津波防災の取組みと、東日本大震災平成三陸大津波をしっかり検証しての発信ならば受け入れられる。だが都合のいい防潮堤だけを引合いに出して行われており、間違った津波防災教育を受入れることはできない。これが日本の津波防災の現状だと思うと残念だ。

田老は「てんでんこ」、「津波語り部」、「避難準備・訓練」、「避難援助」、「災害共助」の教えの次に、「防災の備え」を充実させ、「災害の町」から「防災の町」に変わったとして、２００３年「津波防災の町」宣言を行った。「津波防災」の先進地区として世界各国からの視察も多かった。「田老を知らずして津波防災を語るべからず」、こんな標語がぴったりの津波防災の町とした名高かった田老町は、２００５年、宮古市と合併して消滅した。この年、当時の熊坂市長は宮城県沖地震に備えて危機管理室を作った。２００７年3月3日宮古市は「津波防災都市宣言」を行い、田老町時代の「津波防災の町」宣言を継承した形となっていた。都市宣言からわずか４年後の２０１１年3月11日の東日本大震災平成三陸大津波では、田老町が「津波防災の町」宣言に至った「総合防災情報システム」のほとんどの備えが機能しなかった。その結果、宮古地域33か所の津波被害地域で一番多くの犠牲者を出すこととなった。津波防災で先進的であった田老地区がどうして多くの犠牲者を出したのか、防災都市宣言をしている宮古市には検証する義務があろう。これまで田老を津波防災の先進地区として視察に来た行政、専門家の皆さんに、東日本大震災平成三陸大津波を経験した結果を伝えるためにも。合わせて、今後の正しい津波防災・減災の取組み、教育のためにも。

震災後、平成24年3月に宮古市は「東日本大震災における災害対応行動の検証」をまとめて、報告書を出している。震災が起こってからの行動も大切な記録であるが、市民の命を守る検証も行って、教訓として今後の世界の津波防災・減災につなげていただきたい。検証も行われないまま、「防潮堤への過信」「防潮堤があるから安心して逃げ遅れた人も多かった」などを容認している。これまでの田老の先人の取組みを顧みることなく、防潮堤だけが田老の備えのように報じられ、揶揄されているようでは、田老に育った者には耐えがたい。

田老は繰り返される大津波の猛威に、ハード面の整備およびソフト面の充実を図ってきた。昭和８年の津波から78年間、避難訓練を実施し、地震のたびに津波注意報・警報が出され、避難が呼びかけられた。また、平成の大津波情報と同様3㍍の津波襲来情報もたびたび出されたが、ほとんど被害はなかった。結局、住民の避難訓練は習慣となり、津波注意報・警報は経験値となり「オオカミ少年効果」となっている。

ＮＰＯ田老は東日本大震災平成の大津波の教訓として、「正確な津波情報で避難行動できる社会の構築」を提言する。そのためにも国や地方行政は、津波警報の精度の向上に真剣に取り組んでいただきたい。合わせて宮古市には災害対応力を向上さていただきたい。

サバイバルな避難行動の勧め「１００回逃げて、１００回津波が来なくても、１０１回目も逃げる」それを良しとする専門家はいらない。

【引用文献】

※1　熊坂義裕　第４回ＰＨＰエコスクエア講演「震災復興と生活再建」２０１１年　㈱ＰＨＰ研究所

※2　田老町『田老―生誕１００周年記念誌―』１９９０年　田老町企画調整課、54頁

※3　ＮＨＫ東日本大震災プロジェクト『証言記録東日本大震災Ⅱ』巨大津波が巨大堤防を越える［証言／松本勇毅］２０１４年

NHK出版、112~115頁

※4　高田文彦　大津波を生きる―巨大防潮堤と田老百年のいとなみ―　2012年　新潮社、124、130、171頁

※5　田畑ヨシ　Wikipedia、『怪』VOL.0033、郡司聡他編　角川書店〈カドカワムック〉2011年　184~185頁

【参考資料】

太田代剛「痛恨の津波予測―教訓を未来に」岩手日報社編集局『風化と闘う記者たち』―忘れない平成三陸大津波―　2012年　早稲田大学出版部

NPO法人立ち上がるぞ！宮古市田老『東日本大震災―2011年3月11日平成三陸大津波田老伝承記録―』2014年

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第1章　崎山地区

米屋陽一

はじめに

宮古市崎山地区は、大字の崎山、崎鍬ヶ崎に分かれ、さらに小字の松月（11世帯・27人）、女遊戸（156世帯・227人）、崎山一（163世帯・411人）、崎山二（219世帯・561人）、箱石（45世帯・106人）、下在家（373世帯・1千044人）、古里（160世帯・426人）、大付（88世帯・236人）、日出島（5世帯・22人）、大沢（23世帯・53人）、早稲栃（81世帯・200人）に分かれている。行政区別の世帯数・人数は、平成28年3月1日現在のものを記した。

崎山地区は、「女遊戸海岸の水門が破壊され、集落の半分以上が浸水、宮古栽培漁業センターが全壊した。中の浜キャンプ場も流失、宿漁港は岸壁が破壊され、日出島地区はほぼ全域が浸水した。」（『東日本大震災　宮古市の記録』「第1巻（津波史編）概要版」（宮古市東日本大震災記録編集委員会・平成26年9月1日発行）と記されている。沿岸部は津波により甚大な被害をこうむった。

宿漁港、宿集落（全戸が高台移転）、中の浜キャンプ場の跡地を整備し、震災の記憶や自然の脅威を後世に伝える公園「震災メモリアルパーク中の浜」が開設された。平成26年5月24日（土）、環境省による開園式が行われた。

1　崎山地区

(1)　松月

□　佐々木喜一さんの話

昭和7（1932）年生。大字崎山・松月。漁業・農業。

平成27（2015）年3月13日、話をうかがった。

あの時はものすごい大きな地震だったもんねえ。あんまり大きな地震で揺れたためにガスの元栓を切って、食器棚が倒れんじゃあねえかなって思って、押さえてたのす。何だか大きな音がするんで、行ってみたら薪積んでるのが崩れるほどであったんです。

ものすごい大きな揺れがすれば、足元からあそこの土が下がってってね、割れて。何回も地震来たったもんねえ。あそこからこんだ、浜の方に眺めて見たのす。浜さ行く途中のカーブから黒い煙（けぶ）が上がったのす。

黒い煙に火事だかと最初は思ったのす。黒い煙に砂にヘドロを巻き上げて上がった、そんなふうだっけねえ。そしたら、大きな音がそのうちにして来たんだもん、沖の方から。沖見れば来たもんですごい速さで、黒いヘドロを巻き上げて、かなりの速さでねえ。勢いが良かったです、ここは。

それから隣の庭さ走って行って、ありったけの声出して、「津波が来たあ、逃げろー」って騒いだの。隣の家のどこさ行ってね。そのうちに、1人暮らしのヒデお婆さん（80歳代）が、あすこの坂（斜面）黒いしょい袋しょって藪の中かけ分けて、駆け上がって来んだっけど。獣でも通れないような藪なんだべ、ここさ四つ足になって上がんだっけえま、ああいう時はねえ、パニックになって、上がって来たんだっけ。

できるだけの声出して騒いだの、下の方の低い所に家がある人がなんども、それだども誰も出ねえんだもの、騒いだ騒いだ騒いだ、声が枯れるだけ騒いだのす。下の方の人がわざわざ下降りて行くには危なくて、とてもおっかないんだもの。真っ黒い波が来たんだものね、長門建設さんの本宅が流される。大きな大きな音がすんのさ、バリバリ、バリバリ、バリバリ、バリバリって、何なんだか、あれ木が折れる音なんだか、竹藪があれする音なんだか、ものすごい音がすんのさ、波といっしょに来んのねえ。

津波が引き波になって、引けてってから降りて行ったのす。だあれもいない。行ってみれば家まで上がった津波の跡があるんだもの、水もまだごうごうって流れてあった。2軒さ…までね、だども家は何にも壊れねえで、なんぼか1メートルぐれえも水が家さかかったんだかねえ。

本屋（母屋）の方は無傷だったどもね。ここはとりあえず、人には事故は無かったどもね。本屋から下にある倉庫だの小屋は、みんな流されて。とにかくすごい音だったねえ。

そいからいちばん下の家の隣にうちの畑があんだども、そこはブロックでこう囲まれたとこでね。長門建設の本宅だの倉庫、みんなそこさ来て固まったの。だから、見れば下の佐々木タダシさんとこの小屋持って行かれてね、トラクターだのコンバインだのみんなひっくり返って固まって盛り上がって。雑品屋で物を盛り上げた時のようになって、5、60メートル流されて来たんだかね。

引くのは案外早かったね。引いた後は来なかった。ずっと下の方までは来たったらしいんだっけね、何回かはね。いちばん大っきいのは、こっちまで来たんだから。

そん時、うちの母ちゃんは宮古の病院さ行って薬でも貰いさ行っただかなあ。気になったのす、宮古さ行けばこりゃ危ねえなと思って。おれはここさ来て、1人してぼやっとすれば、息子が来たったれば、息子は角登商店のガソリンスタンドにいたったから。「母ちゃんが宮古さ行ったんだが、行って見てきてけろ」ってしゃべったんが、何の音沙汰もねえんだもんねえ、電話も何もきかないし。鴨崎（山口小学校付近）に妹がいんの。母ちゃんは鴨崎さ行っていたらしいんだよねえ。息子が行く時、しゃべったの、「鴨崎さ行ってみろ」って。息子はうんまい具合に鴨崎さ行って、それで助かって、その日のうちに、薄暗くなる時だったども、車で連れて来て。

あすこは少し高けえとこだから。あすこのとこね、川に高けえ橋が架かってんだが、それをあたりで見てた人がたが「渡るなー」って、「危ないから、渡るなー」ってやったずも、渡ったふうだもん。渡って橋を通ったんだねえ、走って。「来んな」っつうのを行ったんだと。

車でびっちりで走られなかったんだと。あの道路1本しかなかったんだもんね。津波が来た時に、建設業の人がた何だかね、「田老から逃げてきた」って。ヘルメットかぶった人たちが3人だか4人ここさ来てて、「ここまで来るは来たが、宮古さ行がれなくなった」って。下の方がすっかりやられてっからね、通行止めで。どうしたらいいべ、こうしたらいいべって。

家はどっこも無事だったども。畑はがれきでびっしり埋まってしまって。こんな大木のスギからマツから来てて横になって、電柱もみんな転んだのが。電気の線はあるわ、全然道路は歩かれねえのさ、こう回って行ったども。行政だか防災無線も下にあったったのもみんな倒れてね。

水は来なくなる、電気は来なくなる、電話は通じない、何もかも終わりさ。うちでは、水は山から引っ張ってるパイプがあってね、それから汲んでご飯炊いて食べたったども。飲み水だの使い水に、それ使ってらったの。ただ風呂さ入られなくてねえ、水がないんだから。米は家でとってらったし、野菜でも何でもあったったしね。

田老のいとこが「米何とかしてけろ」って来たったども、そん時持たせてやったが、50キロだか何ぼか。米はいっぺえあったったもんだから。

□ 山崎慶一さんの話

昭和9（1934）年生。大字崎山・松月。元漁業・農業。
平成26（2014）年6月17日、杉本栄子が話をうかがった。
私と家内はお昼休みをして、午後の仕事に、ここ（松月集落の自宅）から100メートルぐらい上の方でシイタケの植菌作業をしていたんですよ。作業中に地震が発生して、電柱の揺れがすごかったんです。多分この分では津波が来るんではないかなあと思って。まあ、津波が来てもこの場所まで来ることはないと思うし、先祖の人たちの言い伝えでも、昭和8年の津波は、ここから浜までの距離が2キロなんぼで、その半分ぐらいのところまで来た。その前の明治29年の時はここの下まで来たったそうなんですよね。だから、明治の津波でも家は大丈夫だった。かなり大きな地震には変わりがないども、家は心配ないだろうなと思って、そのまま仕事を続けるつもりでいたんですが、家内に、「いや、最近にないほど音も高いし、地鳴りもするし、揺れもひどいし、家さ行ってテレビで状況を聞いた方がいいでねえか」と言われて、「それもそう

だな」って、家さ来てテレビをかけた。確かな記憶でないんですが、まあ、「3メートルくらいの津波が来るんじゃあないか」っていうような情報がテレビで流れてまして、そのまま停電になったんですよね。「家だけかな、どうなんだべな」って、近所に聞いたらば、どこの家でも映らなくなったって。でも大きな津波が来るという情報でねえから、「心配ねえでねえか」って、また上で仕事を始めたんですよ。

そしたら、仕事最中に今までにないような、今度は、まあ、稲妻というのか、大音響というのか、空の天気から、音から、地鳴りから、まず考えられねえ、想像も及ばない、まあ、瞬間的でしたが、ドカンというだが、ドスンというだか、今まで聞いたことのない雷が、近くさ落ちたようなものすごい音と地鳴りがしたんですよ。「なにか異変が起きる、とんでもないことが起きるんでねえかな」って話して、眺めていたら、沖の方から来る黒い雲、潮風、それから空気から、音から普段のものと全然違う。先祖の人たちから、「津波が来るときは川の水が先に引いていく」っていうのを聞いていたから、川の水を見るために、仕事場から離れて、川（松月の小川）を見たらば、瓦礫やらごみやらと津波が来た後だったんですよね。潮風や音がしたときと前後して津波が来たんですよね。私はちょっと離れた蔭にいたから津波は見ることはできなかったけど、小川を見た瞬間に、「なんだこれ、津波が来たんだ、とんでもないことが起きた」って気がついて、家内と二人で、「家さ帰るべし」って、車で帰ってきたらば、家さもう瓦礫で来られなくて。それから上さ来て見たら、うちは大丈夫、心配ないようだった。

部落の人たちはみんな避難したり、安全なところで震えながら眺めてました。津波が大きく来たのは1回。ちょうど川に行った時で、上にいた人たちは波を見ていたということだった。その後は引き波で、その間には何回かあったと思うがね。

それにしても波が近くまで来たようだから、どの程度浸水したのか「見て来っから」と、俺だけが恐る恐る家まで下がってきてみたらば、一部床上まで波が上がってましたった。家の回りはもう瓦礫とごみやらなんやらで、まあず、驚いて。そうこうしているうちに、まあ、3時間くらい経ってからですかね、消防の人たちに見回ってもらって、「準備ができているはずだから、崎山小学校に避難したらいいでねえか」って言ってもらって、一時学校さ避難したったわけです。集落10軒のうち、一番松月浜に近い家が1軒根こそぎ流されていた。私の家は浜から2軒目で、下の家とは見た目にそんなに高低差はないと思っていたので、波の力に驚いた。

孫たちは学校にいて心配なかった。息子たちは職場が磯鶏だったんですが、一足違いで市内から抜けたんですよね。もう少し遅れていれば、車で出られなかったと思う。私らは家が大丈夫だったので、その晩、家さ帰ってきました。電気もない、ガスもつかない、ちょっと不便はしましたが、なんとか生活できそうだから、ごみやら汚れだのを片付けたり、掃除したり、そうやっているうちに親戚あたりからも、食料から油から応援してもらって。家は大きな被害はなかったんですが、下に倉庫があって、その倉庫さ農業の機械から、漁業の機械や素材なんかを入れておいたんですよね。それを農業用、漁業用の道具も船もみんな持っていかれてしまったから、その損害は大きかったね。国からの保障はなかった。かなりの犠牲者が出た他所さまから見れば、われわれはいい方だと思う。家族が無事だった。それがなによりの励みになった。

戦中、戦後と農家で育ってきたから、それが定めと思って、そういう気持ちで季節に合わせて農・漁・林業を生業としてやってきました。農業は米、雑穀、野菜、たばこ、最近はシイタケ栽培をしていた。春は海でワカメ、その後は自分の船でウニ、天然コンブ、アワビなどを採り、農閑期の冬場は山で炭焼きをした。息子に最初サラリーマンをやりながら漁業を手伝ってもらったども、息子の仕事も厳しくなり、それもできなくなった。おらの時代は第一次産業の兼業でやってきたが、今の時代は兼業で働いている後継者がいねえということが大きく変わった。

この家はおそらく明治以前からあるが、家まで水がきたのは今回が初めてで、それから考えても明治の時以上の津波だということがわか

るわけですよ。海岸に生まれながらにして住んでれば、「大きな地震が来れば、大小いずれ津波は来るんだ」ということは、小さいうちから教えられていますからね。とっさのことで判断に迷うんですが、今度も犠牲になった人の話を聞くというと、ほとんどの人が徒歩でも車でも、走りやすい通りやすい平坦なところ、距離のあるところを避難するわけですよね。徒歩で100メーターも110メーター避難したって追いつかれる。近くの高いとこさ四つん這いになっても、5㍍でも10㍍でも上がれば、その方が助かる率は高い。そういうこともこれから残しておくのがいいと思うんだよね。

おらが小さい時には長老たちから、「地震がしたり、地震がなくとも川にユダが来んだから、早く避難しないと危ない」「大きな地震でなくても津波が来るときもあっから、川を見ていれば、そのユダが来る前に水が引けていく」と言われたのを覚えている。多分津波だったんではねえかと思うんだけど、昔は小さい津波でも川をさかのぼって来て、長老たちは小さな波をユダ（ヨダ）と呼んでいた。

昭和8年の津波の大きな記念碑が、崎山・鍬ヶ崎地区内（旧国道筋）にあるが、今は忘れられているみたいだ。先祖の教えとして後世に大切に伝えていかなければいけないと思うんです。

今まで経験したことのなえ、マニュアルもなにもなえ、初めてことだったからしょうがなかったこったけど、大きい仮設には援助の手もボランティアも集中的にいくが、小さいところにはボランティアも物資もないという、なんぼもそうした声を聞いてますね。だから、行政にしろ消防にしろ福祉関係にしろ、もっと細やかに、力のねえ声の弱い母子家庭のような人たちに、不公平のないようにやってもらわないと、と思いますね。

(2) 女遊戸

□ 前川和子さんの話

昭和25（1950）年生。大字崎山・女遊戸。主婦（元民宿「正次郎」経営）。平成27（2015）年3月9日、話をうかがった。

当日はお爺ちゃんお婆ちゃんはデイサービスでちょうど出かけてたんですよ。戻る途中で地震があって。一瞬「あれっ、パンクかな」って思って、周りを見たら踊ってるんですよ、木とかがこういう（左右に激しく揺れる）感じで、本当に、そいで地震だと思って止まって。ちょっと収まってから、とにかく家に来て窓をみんな締めて、洗濯物入れて、戸締りして、防寒着とか帽子とか持って。

さて、車どうしようかと、その辺までの避難なんだからと、キーだけはつけて、徒歩で近所の人たちと上の方に避難したんですよね。2日、3日ほど前にも余震があって、その時もリュック背負って避難して。一番上の「治郎兵衛家」さんて民宿の方が避難場所の広場になっているので。その辺まで行ったら、ミリミリミリみたいな音がしてて、「もうそこの橋まで波が来てるから」って、「ここじゃちょっと無理だから、もっと上に行こう」って、バス停の近くまで行ったんですよね。

でも何だかよくわかんないじゃないですか、見てないので。しばらくして雪も降って来るし、とりあえず高台に、崎山小学校のすぐそばに、妹夫婦の家があるんですよ。「小学校に避難しようか」って、そこに避難したんですけども、人がいっぱいいるので、前川さんたちといっしょに、妹の家に避難したんです。

そこで、何人家族、7、8人避難して、お爺ちゃんお婆ちゃんはデイサービスに行ってるから、まず大丈夫みたいな気持ちがあって、お父さんは職場は高校なので何とか避難はしているだろうと。そういうのがあって、心配はしなかったんですけど。でも妹が帰って来なかったんです、その夜。連絡は取れない、「たぶんどっかにいるよね」って。その夜は一睡もできずに、コタツに電気は来ないけど、そこに布団敷いて雑魚寝して。次の日、妹は無事に帰ってきて。

次の日、「グリーンピア」の近くが私の実家で、甥っ子が来て、家の兄と甥っ子の兄が「流された」っていうの。「何で流されるの」って。海からずっと上の方にある部落なので。そうしたら、海で仕事やってる人たちはたいてい地震が来ると浜に下がるじゃないですか。30何㍍の波が来たのを見て、上がっているうちに後ろからガーッと

流されたみたいで、そこで見ていた方たちが9人くらい全部亡くなったんですよね。たまたま家の兄と長男が2人で、次男は先に帰って何ともなかったですよ。

そういう波があったのを知らないじゃないですか私たち。「何でそんなそばに行ったの、本当にね」って言いながらも、自分ちがすごいことになっているので、何かよくわからない、流されたイコール死じゃないですか、そういうのも全然わからない。

でもガソリンもない、車ももうダメ、道路も通れないし、もうとにかくしょうがないということで、とりあえずここの中を片付けて、お爺ちゃんお婆ちゃんを引き取んなきゃならないってことしか頭の中になくて。何日間かせっせせっせとやったんですね。家ここ1メートル50くらい、水1階の全部に入って。

水はきれいな水だったらしくて、泥とか砂は入っていたんですけど、片付けやすいっちゃあれですけど、毎日、泣くこともなく、一生懸命こつこつ、こつこつと。畳が120畳あったんです。それを出すのが大変で、何でこんなに重いって。濡れているじゃないですか、それをね、出しましたね。本当にもう半泣きでべそをかきながら、何でこんなことやんなきゃならないの、みたいな。

畳は全部ダメですね。でも家の方はトイレも爆発して。この辺は水が入ったんですけど。へえ、何でこんなでっかい冷凍庫がこっちにあんのかな、みたいな所にあったりとかして。水の流れがよくわかんないような感じで。

お爺ちゃんお婆ちゃんの隠居部屋と、20人くらい泊まれる離れの部屋が。そこは波で全壊で、その分、母屋が残ったみたい。形はあるんですけども、あっちからもこっちからも、みんなびちゃびちゃ、ごちゃごちゃ、でもそのお陰でここが残ったんだと思うんですよねえ。後ろの方は石垣で高くなっているので波は防げた。外観的にはどこも何ともない、前から見たらガラスは割れてましたけど、「家、大丈夫だよね」って、そんな感じでしたね。

食器棚のコップが2個か、そこらへんも2個ぐらい壊れただけで。地盤によって違うんだと思うんですけれど。電化製品は水かぶって、全部だめですね。家に泊まって働いた大工さんがいたんですよ、盛岡の方で。その方に電話したら、「じゃあ、すぐ行くから」っていう。でも、電気が来ないので。「4月の初めころに」って。電気来たらすぐ来てくれて。とりあえず直して、両親を引き取んなきゃってのしか頭になくて。でも、材料がなかったりして、畳も敷けないとかで。盆のちょっと前ですか、お婆ちゃん引き取ったのが。そこの施設では大丈夫、「家ができるまで、置いてていいから」って言ってくれて。

ただ、お爺ちゃんが3月の末に精神的にちょっとまいってしまって、錯乱状態というか。家が焼けたと思ってたんですね。山田町とか気仙沼で、火の手があがって、ああいうのを見てて、おまえん家が焼けたみたいなこと言われて、思い込んでで。寝ててもおっきい声を出したり、乱暴なことしたり。

病院へ連れてったら、「精神的にちょっと…」って。もともと認知症とかになっていたんですけど。でもそのへん、車椅子で散歩したら落ち着いたので。その日は「大丈夫と思います」って、施設に置いてきたんですけど。その日のうちに「だめだ」って。もう1回クリニックに連れて行ったら、そういう人がどんどん、あっちこっちの病院とかに。家の2階は大丈夫だったけど、歩けない人を預かることできないし。

とにかく、「県外でもいいですからどっか探してもらえますか」って、そこの病院に頼んだら、いろいろ手を尽くしてもらって、遠野（岩手県）に、そういう理由であれば受け入れてくれるっていう病院があって。兄がタクシーの運転手してたので、兄に頼んで遠野に置いてもらったんですよね。

でも、本人は、「何でおれ、ここにいるんだ」みたいな。行くたんびに何か言われた泣かれて。本人は地震でこうなったっていうのはわかんないですよね。落ち着かせるために、1週間に1回ずつ通ったんですよ。それでもやっぱり、「何でおれここにいて、おまえたちだけ帰る」みたいなこと言われて。でも、どんどん悪くなってきて、3か月たつと、その次の所を探すのが大変で、いろいろ県内の資料をいただいて、被

災の枠で入れてあげると、宮守村で入れてもらったったんですよ。でも、そこで落ち着いたので。

翌年の5月には亡くなったんです。それでも、自分が本当にいい気分で最期を迎えられたと思うんです。私たちも家に連れて来れない分、1週間に1回ずつ、「そんなに来なくてもいいんですよ」って言うんですけど通って。お爺ちゃんが亡くなった次の年の7月にお婆ちゃんも亡くなったんですよ。去年一周忌でした。お爺ちゃんは89歳、お婆ちゃんは81歳。

できるだけ家で見ようねって、がんばらない介護で、私は。がんばると大変なので。素直で言うこと聞いたったので、楽だったんですよね、他の方から見ると。「こうしててね」って言うと、「あーあー、はいはい」とか、そういう面では本当に私、楽でしたね。病院で亡くなったんですけど、何か腎臓が悪くなったりとか、ストレスとかもあったと思うんですよね。お婆ちゃんはお爺ちゃんより（症状が）良かったですから。

□　前川壽さんの話

昭和23（1948）年生。崎山・女遊戸。自営業。女遊戸部落長。

平成27（2015）年3月9日、話をうかがった。

（地震のときは）仕事現場が無くて、ここにいたんです。弟が裏で仕事していて、娘も家にいたかな。最初は事務所で、「おお、ひでえの来たな」って。居られなくなったから外に出はって。すぐ娘に「逃げる準備しとけ」って。おれは消防の機能別（非常時に手伝う元分団員）の方をやってるもんだから、水門を閉めに行って。

水門閉めて帰ってきて、娘とずっと上の方に避難して。そん時かな、「通帳忘れた」って、いったん戻ったんです。娘と2人戻って行く途中に、もうゴオーッと音が。そしてるうちに、今度はバリバリバリッて、ヘリコプターが飛んでいるような音、物が壊れていく音がしたったということで。何か大きいトラック出たから、何か持ったらええと思ってすぐ戻ったんだけども。津波は初めてだけども、あんなに山になって来るっつうのは…。

今までにねえ地震だったからねえ、これは津波が来ると思ったからねえ。明治の津波の時に流されて、高台の神社の方に行って、そこにたどり着いたって言うたっけから、そのぐらいまで来ちゃったっていう話は聞いてあったからね。

小っちゃい頃は家がここ（現在地に近い所）にあって、地震が来れば親父はすぐ後ろの山さ、上げさせたもんね。そして、ひと晩布団持ってって、山さ寝たことあるもんね。やっぱり親父にとっては、明治の津波を聞いてらったから。

ここの裏さにある工事や何かで使っている簡易便所がねえ、流れて行かないで残っていたもんで、それを起こして使って助かったったねえ。だから、水があって火があって便所があるから、まず、どこさも水を汲まなくていいからねえ。

震災の時は家には2人さ。かあちゃんは税金の申告に出かけていなくて、娘婿は仕事に行っていなかったし、まだ1歳なんない孫を連れて娘は逃げたんだね。婆ちゃんはちょうどいい塩梅に、デイサービスに行っちゃったんです。正次郎家さんのご夫婦もそうだったの。だから、2軒して「よかったねえ」って。おふくろは、「おれはどこさも行かねえ、ここで死んでもいいからよ、どこさも行かねえ」って言う方だったから。それでもたくさもたくさしたんじゃ、それは大変だったべなあと思って。おれたちと娘たちと6人だねえ。

弟が崎山なもんだから、高台だし安心だからね、みんなそっちに行った。で、かあちゃんは海岸は通れなかったから、山口団地の方から箱石を回って帰って来たんだね、夕方にはね。そして、娘婿は仕事の最中だったけれども、とりあえず帰ってきて。ただ、弟のかあちゃんだけが来なくて、どこに行ったかわかんなくて、次の日にぐるっと探して来たって、小学校の体育館にいたったってね。危ないと思ってたけど、結局助かっていたからね。

ここの部落で死んだ人が無かったのは、タイミングも良かったけども、前の晩に市役所の集まりがあって、漁村センターで第2回目の津波対策の話し合いがあった訳です。とりあえず逃げましょうって、崎

山全体の区長とか人が集まって、そういう話になってた訳です。だから、全部の区長さんも「逃げろ、逃げろ」って逃がしてくれて。ここの市営住宅の年とった人たちなども、一所懸命…「逃げろ、逃げろ」って軽トラックさ乗せたりしてね。だから、誰も亡くなった人がいなくて。

後片付けは部落の人たち、仕事関係の人たち、友だちなどがやってくれて。今日は誰それと誰と誰が来て、何人来てって。だから、1か月、20日ぐらいで100人ぐらいになった、延べ。午前中来て手伝ってける人もあれば、次の所さ行かねばなんねえからって帰って行く人もあれば。建設関係の人がここの家とここの建物の間、人手がいるからね、がれきが入ったからね。それの片付けるのが大変だったもんね。家の中も大変だけども、外のものを片付けるのも大変だったね。まる1か月は、4月いっぱいぐらいはかかってるね。

3月の29だか30日に電気が来たからね、20日間まるっきり電気なし。その間は船の12ボルトのバッテリーで電球つるしてここで、寝っ時はこんな太いロウソクね、みなさんから貰って、まだ使えねえで残ってあるんです。養殖ワカメやってらったから、ワカメ採りさ行く時にはバッテリーで、やってったから、それを利用して。

食糧はね、上の方に親父の生まれた本家の方で朝とか晩には、「作ったからご飯食べに来てよ」って言われてね。冷蔵庫の中には、アワビだのカキだのサケだのって入ってる訳です。だから、避難所で食うようなことでねえんです。おかげでごっそうになったね。電気が来ねえから、腐らせると大変だから。で、それを出して食う。ストッカーなんかは凍ったまま蓋しておけば、1週間以上は持つからね。水と食いものには、おかげさまで困んなかったね。

お風呂は1週間入んなくて。箱石部落の方に友だちがいるもんだから、「おーい電気が来たぞ、お風呂さ入りに来う」って言われて、1週間たってから行って、「やあー、風呂ってこんなにいいもんだべかな」ってかあちゃんと2人して…。ありがたかったねえ、あん時の風呂はね。

電気が来るのが遅かったからね。ラジオは聞かれねえしね、テレビは見てねえし、NHKが携帯用のラジオを持って来て置いてったんだけど。聞こえなくて、駄目だったんです。

避難所（崎山小学校）へは、流された人たちだけ。家に入られない人たちだけが行ったね。おれは行かねえから。逆に物資があっても貰えない訳さ、行ってないからね。連絡が来る訳でもねえし、連絡の手段もねえし。

女遊戸の部落の人たちが手伝ってくれたし、後は側溝のとこ上げてもらったかな、ちょっと片付けた後にね。側溝が詰まってるから、排水を流しても流れていかない状態だから、住宅の側溝を掃除したりとか。そういうのはやってもらったね。

津波の前は、部落でナモミ（小正月の夜の来訪者・その日に近い土曜日に行う）って鬼の面かぶっ出て。いつからやんなかったのかな、やんない時期があったけれども、やった方がいいなってまた復活して、青年会っていうの作って、全部面を揃えたり衣装揃えたり、お祭りの神輿ね。そういうの全部流されてしまったから、何も無かったけどもね。そういうのやったったね。

今年、隣の部落の旦那が、「やっぱりやった方がいい」って。子どもに「ナモミがやって来たぞ」って言えば充分聞くから。それで家でも「ナモミやんなきゃだめだなあ」って言ってたとこさ、隣（前川商店）でやってたから、「こりゃあ、すぐ来てけろ」ってやってもらったのさ。隣の旦那も「やあ、ちょっとあんまり入りすぎてさあ、何だかなあ、わかられたような気がするなあ」って。息子にね、何だかパパみたいな感じがするって。

おれたちが小っちゃい頃は、餅貰って歩ったね。餅とかミカンとか貰って、それを集めてみんなで食ったり。当時は米の餅ってのは少なかったからね。粟餅とかってそういう餅が多くてね、米の餅貰って食うのはすごく面白いんだね。そして、だんだん、こんだ金貰って来るようになったりとか、お金を少し出すようになったりとか。小っちゃい子どもが親の言うことを聞かねえで、「ナモミがくっぞー」って言えばちゃんと聞くようになるから、そういうのも必要なんだよね。

蓑とか藁とか身に着けて笛も特別な笛だから、ちょっと山から伐っ

てきて、笹を付けて鳴らす笛なもんだからね、それさ作ったりとか。笹の葉っぱを真ん中に入れてて、ミズキの木を半分に割いて、それに挟んで、それを口にくわえて、ビービーと鳴らした訳です。ナモミが来たぞって入って来る挨拶みたいなもんです。そしてから戸をじょじょじょじょなんてはたいて、入って行って。子どもらは見た瞬間逃げるからね、ちょっと大っきくなれば、来るのがわかっているから隠れて。おれたちの年代の人たちはほとんど経験はしてっからね。

貴船神社のお祭りは旧の4月8日、お釈迦様の生まれた日程がそうだったけども、今は5月の3日にするようになったね。前は神輿を担いで各家回って。子どもたちに担がせるようにしたんだけども、大っきく作りすぎてねえ、重たくなって、青年会が…。半纏も100ぐらい作って、ひところは宮古の秋祭りさ部落の人たちがみんな行って、山車引っぱり方したんだよね。ああいうのに参加するためには、飲ませ食わせしねばなんねから、金持ってねえばだめなんだね。

□ **前川正幸さんの話**

昭和19（1944）年生。崎山・女遊戸。漁業。（当時）部落会会長。民生委員。平成27（2015）年3月9日、話をうかがった。

□ **前川民子さんの話**

昭和23（1948）年生。正幸さん夫人。主婦。途中の談。

（地震の時）私は家にいましたった。下の方（海岸付近）からここに引っ越してきて、1年もしないで津波が来たんです。元の所に建てるっつう予定もあったんですね。そこは全壊でした。タイミングよくここに来て。ここにいて地震を感じて、まず今までになかった、経験したことのない揺れだったのでねえ。確かねえ、小っちゃい時だなあ、やっぱり夜中にけっこう大きな地震がした記憶があって、夜中に逃げて、確実に津波が来るって思ったからね。

3月10日の晩が2回目の崎山地区全体の津波対策検討会っていうのが宮古市の危機管理室（課）の主催であって。消防とか海を抱えている地区の代表とか、民生委員とか、下の漁業センターで開かれて。津波にはすごく意識があって、ぜったい津波は来るっていう思いで。

古い家に弟が車椅子の状態でいて、揺れが収まるか収まらないうちに軽トラックで出かけて下がったら、下の人たちが庭に出て、様子をうかがってる、「ぜったい津波が来るから」って。「山に逃げるように」って話しして。

そして弟のとこ寄って、車椅子に乗っけてこっちに押して来て、家内（民子）に預けて。その時うちのが、「市営のアパートに足の悪い人たちが2人もいたった」って言うもんだから、「行かねば」って言われて、すぐ戻って軽トラックをとって回って、アパートから2人、1人は杖をついて歩き出したんですよ、1人は乗っけて上さ降ろして、もう1回引き返してまた乗せて、2往復して、それで30分かかったったね。津波が35分で来たから、危機一髪だったねえ。ここにいなければちょっと危なかったかもしれない、犠牲になって亡くなったかもしれない、弟も。もの凄かったもんですから、津波で全部流されて、柱も壊れたりして。

（軽トラックで前川正幸宅に避難した人たちや妻の民子さんは）津波が見えたために、これではだめだと思って。外にいたったんです、（避難した人たちを）置いといて、まさかここまでは来ないと思って。それでお墓の方さ、あすこはここより高いからと思って行こうと思ったら、もう波がこんど引いてらったんです。家に入って車椅子を外に出そうと思ったら、もう波が引いていましたった。（前川民子さん談）

（避難者の移動を）終わってすぐ道路ずっと行って、中の浜に行く途中に高台があって、海を見さ行ったの。しっかり見たの最初の波が来るとこ。ものすごい高さで来たからねえ、想像を絶したねえ、防潮堤があったんですけど、その防潮堤にぶつかった波が盛り上がってこう来ると思ったらねえ、さらに大っきかったために、防潮堤は瞬時に壊れたんですかねえ。波の高さは変わらず、どんとこう来たような感じで。11メートルの防潮堤だから、あれにぶつかった波が跳ね返るというか、

盛り上がってこう来るのかなと思ったら、全然そんなことない、来た波がどんとね、ものすごかったね、一瞬で壊れてんのかもしれないなあ、あの防潮堤ねえ。

気が動転してんだろうね、カメラを向ける、ケイタイ持ってらったから、写真全然撮ろうって気がなかったなあ。ここは沖合だから、きれいな波が青い海が…。たとえば湾内だと黒い波が押し寄せたというけどね、ここは重茂もそうですけども、青い波が来たっていう感じでねえ。

そこに橋がありますね、橋いっぱいに溢れて、川沿いにもっと上にあがったし、波そのものは橋の上10メートルぐらいまでしか行かないから。引き波がここを通って、家にも入ったんですよ。畳が1枚ここさ上がって。かろうじてここは家には入らなかったんですねえ、三和土（たたき）のとこまでかなあ。

あっちの川沿いに波が行ったから、あっちに行った波とこっちに来た波と分かれたから。下のセンターを呑み込むとこも見たのかな。あれがあって波が抑えられたと思いますよ。こんな幅の鉄がぐにゃぐにゃ曲がってね。ひでえもんだねえ。川に相当入りましたがね。

女遊戸ではおかげさまでねえ、犠牲者が出なかったんですよねえ。下の方で流されて全壊で8軒。14、5人、全部すぐ後ろの山に上がってね。うまくそこに行って、そこで待機して。最初は神社に行ったけど、神社でも危ないんじゃないかって、杉山の上の方の沢に回ったって言ってましたっけねえ。津波対策検討会が開かれたことが、私の中には意識としてすごくあって。やっぱり知識より意識だから。意識を持った人がいないと…。

それに、田老で津波に遭った人が「地震が来たら、逃げろ、逃げろ」って、子どもの頃から親に言われてたって言ってんですよ。持ち物を用意していたったって、ふだんから。物を持つのも準備して、寒くては大変だと毛布から持って、上がったんだそうですよ。小さい時からの親からのイワレで、「あっ、この地震ではだめだ」と思って。「はあ、逃げろ、逃げろ」って、いちばん先にそれを持って行って。

（前川民子さん談）

田老から嫁さんに来た人が下の方に1人おってね、その方が誘導して、高い方がいいってね、逃がしてくれたんですよ。

私の弟がいる隣に、90代のお婆さんが1人いて、地震で物が落ちたのを片付けている最中だったの。弟の家さ行く前にそこさ寄って、「そんなことしなくていいから、逃げねばなんねえから」ってね。たまたま隣に田老から来た方がおって、ミネちゃん（前川峯・68歳）って言うんだけど、「お婆さんを連れて、とりあえず逃がしてけろ」と頼んでね。

その前に、おふくろと息子といて、全然逃げようとしてなかったから、この人たちも。お婆さんは庭に出てたったから、「ぜったい津波来っから、逃げねばなんねえ」って。息子も車置いたまま逃げて。実家はすぐそっから車で、こっちに上がればいがったんですけど。車が混むっていうことはないからね。車も流してしまって。

被害には遭ってるんですよねえ。私の家も明治29年の大津波の時は、全部流されて途絶えてしまった訳ですよ、私の家の先祖は。ただ、私の家の「与惣治屋（ヨソジヤ）」っていう屋号があって、ここの地区の大上さんってとこの分家だったらしいんです。途絶えたもんだから、与惣治屋の財産を、本家からお婆さんが来て、お爺さんが田代から来て、明治29年の津波の後、与惣治屋を継いだ訳ですよ。だから、私はまだ3代目なんですよ。3代しかたってないですよ。本来はいちばん古いカマドだったらしいから、何代かはあったはずなんだけど、途絶えたからねえ。

昭和の大津波の時は、被害はここの地区にはなかったんですよ。ずっと下の川沿いに上がっただけでね。チリ津波の時も津波は上がりませんでした、ここの地区はね。石碑を立ち上げる時、明治（大津波）をなぞってみたらば、この地区で23戸あった地区が19戸流失して、63名の犠牲者が出たっつうのが刻まれてるんですよ。それが私たちには全然伝わってないから。口ではつながったんだけど、どっかで途切れて

るんですよねえ。そうとう大っきな被害があったようだね、明治29年の時は。

おそらく上にいる下中村屋さんっていう屋号があんだけど、その方も中村があって下中村があってだから、そこも途絶えてるようなんだね。途絶えた家が何軒か、波で全部流されたから。そん時はね、19分で波が来ているそうだから、夜ね。地震が来て波が来る時間とね、犠牲を大きくするってね。今でこそねえ、何分で津波が到着するってねえ、これだけは最新の技術でそうなってんだども。とりあえず近場の高台に逃げるっていうことがいちばんだいじだねえ。なんぼ山くぐってもいいから、道路なくてもいいから。

(3) 宿

□ **佐々木敏さんの話**

昭和27(1952)年生。崎山・宿。漁業。崎山仮設住宅・自治会会長。平成27(2015)年3月9日、崎山仮設住宅で話をうかがった。

□ **前川要さんの話**

昭和24(1949)年生。日出島。漁業。途中の談。

地震が来たとき、おれ海の上だったの、宿浜っていう所で養殖やってらったからね、あちこちから岩が落って来んので山が崩れて。おさまってから走って行くべえなあと思っていたったども、こんだそれどころじゃねえ、家の方が心配になったもんで、走って来たったんで。家からちょこっと、まだみなさんは岸壁にいたったから、あっちゃ船を繋いで、電気が切れたために船も上げられなくなったんで、沖さみなさんで繋いであったの。そいで上がって来てすぐだったの。

あん時はコンブの間引きってやってらったの、ワカメとコンブの養殖をやってて。あんなの体験したの初めてで、あんなに揺れると思わなかったね、海の上で。山が崩れて、あん時はおれだけだった訳だな、海にいたったの。家の方が心配でねえば、おそらくいたったことだねえ。昔っからの家があったもんで、後ろの石垣が組んであったために、昔の人たちは上手に石組むんだっけ、それが崩れて転ぶなあと思ったりして、そっちの方が心配で来たったの。

海から上がって家さ来て、5分もたたねえかな、妙な音がして、津波だって。パトカーが下りて行ったのは見たったのね、すぐ脇道路が通ってっから。だども降りてってから、どこのお父っちゃんだかわかんねえども、「父ちゃん、津波が来たから逃げろっ」なんて、しゃべるのを聞いてんのね。それから、津波の音が大きくなったために、お婆ちゃんとかかさま来て、いっしょに山さ上がったの、すぐ。あれからなんぼも上がらねえで、すぐ引いたっけから。引くのも何にもねえ、おれが一番奥の方だったから。

帰りの道で、上がってくんときは川も曲がって来んだっけどねえ。帰りにまっすぐに下がったから、いいあんばいに車置いてあったから、車が家と小屋の間さ挟まって。みんなゴミがそこさ引っかかって、流されはしなかったども斜めに倒されて。波が引いてってから、下の方の家の人が騒いでっから、誰かいたったんだなって。婆さんだか、母(か)か)さんだか、何か忘れ物をして入ったままがれきの下になっていたったものね。「また、津波が来る」って騒いでいっとも、「みんな番兵させて、来たら騒げ」って。

がれきを片付けるってなかなか…。電線来ているために、あとのひとりは下の橋のガードレールさ引っ掛かって、がれきの下に流れたって。騒ぐばどっかから音がすんだねえ。呼ばわれて道で、「どこだ、どこだ」って。がれきの中にいたったもんね。その人は死にはしねえ、生きてるもんね、みんなで。材木とか片付けたりして、助けて。

もう1人別な若い女の人がいたったの。車がいたのを見たったからね、先に下りて行ったのはわかっていたから、あと1人の人がその人を呼ぶに、どっかから声がするのねえ。「どこだ、どこだ」って、何回も探してみても、山登っても一所懸命返事はしている訳さ。「下りて行こう」って言ったからね、どっかから声がすんだよね、見えねえのに。「この辺でねえか」ってしゃべってたら、そこにいたったんで。

小っちゃくても津波であれば、みんな海さ下りて見さ行ったんだもね。そんな経験あるために、まさか(津波が)来っとは思わないんだもね。

宿の部落の1人が車でまっすぐ上がってくれば助かったのを、中の浜の方に下りていっただろうね、車でねえ。

中の浜では息子と船引いてて、引っ張ってて、来たんだらしいだっけね。だめだと思ってその息子は、だまって宿さ上がってきて助かったって。親父が中の浜の方に立ってったんだものね。（津波の犠牲者は）宿は1人ね、古里に1人いんのね。わざわざ上がって来てて、浜の道具を下ろして、津波を見にまた下りて来たんだっけよ。中の浜の方さ行って亡くなったんだろうね。

津波は見ねえのね、後ろから来たのは後ろだけ見てて、どのくらいの高さで来たかは見ねえのね、それどこじゃなかったから。狭かったからね、浜の方は山と山の間で。警察が「逃げろ」って言ったのを聞いて、波の大きな音がしたために、逃げるのが先だと思って、後ろ通った水は見てなかった、上がってから引いてったのを見ただけでねえ。どの程度で上がって来たんだかは、全然見てねえんだよね。

婆さんなどは部落の自治会館で宿の人たちは、3日ぐらい泊まったべか。それでも容易ではねえびし、「避難所さ、体育館（崎山小学校）さ行ったらば」と言うので、そこさ来たったんだもね。

ここ（仮設住宅）さ入ったのがねえ、6月の11日か、10日に入った。（避難所では）女遊戸の人たちも中の浜、宿、日出島の人も最初はいたったんだよね、大沢の人たちとか、見たこともねえ人たちがいっぺえいんだもの、なんぼ隣の部落だって話もしたことがねえだんだがねえ。避難所さ行ってから仲良く話ししたり、こっちゃ来てからも、なんぼ隣の部落でも話しもしたこともねえ、1年に1回か2回しか行き会わねえもの。

最初の3日は地獄さ。有り合わせで流れねえ家から米を貰って来て、誰かが炊いて来て、そん時来る訳だ。まあ時間関係なく、お昼でも夕飯でも、ご飯が炊けた時に持って来て配給するというような、最初はね。

（前川要さん談）

被害に遭わなくてもだんだんに米も無くなってくるし、店も無くなったから。時間を決めて、食べる時間も朝は6時とか、お昼はラーメンみたいなのも食べたのかな。夜はご飯、作る人がいてて、みなさん手伝ったり何だりして。夜は「みなさん早う寝ましょう」っつうことで9時ぐらいで、みんな布団の中だったね。

トイレがいちばん困ったんだ。水も来ねえから、学校のトイレはだめだわ。水も出ねえし、ただ盛り上がってくるだけで。小学校も中学校も使えねえ。下のプールからバケツさ水汲んできて置いてねえ、それで流すとか。まさか山さ行ってたれる訳にはいかねえし。

水だの電気だの来るようになってから、おらみてえな飲む人たちは、貰ったのを隠れて飲んだりしたの、みんなにわかられて。夕飯だけじゃあ…。好きなくらい飲む訳じゃなかったからねえ。缶ビール1本ぐらいのは、酒があればワンカップ1つぐらいとか、そのぐらいしか飲まなかったからねえ。

そこらにいた人たちは、テーブルの下さ置いてあったって、あっちの人たちから見えんだもの。「見られたなあ」って言って、堂々とやってしまって。薬程度にね。睡眠薬飲むぐらいなもんで、眠り薬ですね。

□　佐々木信幸さんの話

昭和49（1974）年生。崎山・宿。漁業。

平成27（2015）年4月25日、話をうかがった。

地震が起きた時は、娘を迎えに。宿の集落から車で学校さ迎えに行った訳だ。小学校で待ってて地震に遭って。わらすのことは小学校にいっから大丈夫だなあと思って。1回家さ、1人で行き着いてから、そこでまた地震があったんだからね。そしてこれはうまくねえべえと言うことで、親父は海に行ってたんだね、海に行かねばいいものを。船を助けようと思って。

そしたっけや海がすっかり引けてて、もう岸壁の底が見えてるんす。生まれて初めて見たがね、おらはね。こんなにも引くもんだべなあって。そして1回来たんだがね、こううつらうつらぐれえに、それから引けて、

2、3分もしねえうちに大っきいのが来てるから。それから逃げたんだども、かろうじておらとあと1人いた人が上まで逃げたども。親父は後回しになってしまって、たぶんトンネルから抜けてったんじゃねえかなと思って、中の浜の方にね。トンネルから抜けてったんじゃねえかなあと思って。そした後、沖さ流れてったんじゃあねえかなあと思ったのす。

そしてすぐ引けた後、4、5人で見さ行ったども、跡形も無くて。それでも3人かな、家族が家の中に残ってて、爺さんとおふくろと。あとは下の家の人が、1人こらの途中にささってて、何とかかんとか助かって。3人は助けたのかねえ。引けてから3分もしねえうちに、この大っきいのが来たから、誰もあんなのが来っと思わねえで。

津波が来るって予測しなかったもんね。ただ1回目がなって、こう揺らすぐれえかなと思っちゃったもんね。それぐらえにしか思ってなくて、その日の引き方を見て、これはちょっとなあと思ったったども。思った時にはもう波が来ちゃったからね。

奥さんはわらすのことで小学校の方へ行っちゃったし、お爺さんは足が不自由で、爺さんが逃げねえからって、おふくろはそれさ連れたった、1人で。お婆さんは途中、ここらで歩ってあったんで、それを引っ張って、高けえとこまで連れてったども。子どもたちは帰って来ねえから良かったのよ。

集落の上から3軒目ぐれえまでは残ったのかな。おらが家までぐれえが残ったのかな。あとはみんな下は無えごったね。おらの1軒下まで残ったのかな。その下の家は無えがね、何も。

避難先は小学校と部落のセンターとに分かれたんだがね。センターも何人か行ったんだがね。残りは小学校さに行くかって、2つに分かれたんだっけ。かろうじて道路のカーブのここらまで上がれば助かったような格好で。船の方はみんな持って行かれて、湾内さぐるぐるって回ってて、そして粉々になって終わりで。4、5艘ぐれえ残ったぐれえで、後はみんな粉々になったり、ここらの浜に寄ったり、ごみといっしょに、瓦礫といっしょに、何もかにも混ざって、カントリー（ゴルフ場）の下さ、けっこうな規模だったもんね。それがいつの間にか、次々に無くなっていってって。

その後は親父を探すため、案内した人たちを帰えして、消防団員の人たちと、そこらの若え人たちで5日ぐれえは探したと思ったがね。5日ぐれえはここら、うろからうろからって、こっちゃ抜けたりして、そこらも探したども。遅くなってきて、雪が降ってきて、「やめっか」っつんで、このまんま避難所さ行ったったども。ずーっとそれから避難所だがね、仮設が出来るまで。

お爺さんとおふくろは病院だったがね、津波の水飲んだんで病院さ行って。ばらばらになったような格好だもの。お爺さんはしばらくかかったがね。腰が痛てえ、腰が痛てえと思ったったけれども、毒が回ってうまくねえって、そんな風だったんで、それで盛岡さいいとこが見つかって、何とかやったども。お爺さんの方は寝たきりになったったんで。たぶんその津波の水が悪かったんでねえですか、肺がすっかりねえ、片方がすっかり膿になって、それ取った後も、「もう長くはねえ」ってしゃべられたもの。

家を建てっぺえとしたども不幸続きで。去年はお爺さんが亡くなって、先月はお婆さんが亡くなったんで、なかなか…。たぶん最後まで残る予定でねえかなって言われてたんで。あんまり今年はいい年でねえってしゃべられて。厄年もぶつかってたから、家を建てて何かあった時は…。ぎりぎりまででもって思っちゃうども。

おらの方は、組合は遅かったんだよな、宮古漁協は。他の組合はね、早かったんだども。おらの方は5月か6月末だったかな、手付けたの。そっから手を付けたんだでば、何もかにも。船は何とかねえ、生きてんのが鍬ヶ崎さ2艘大っきいのがいたったんだ。それは力が強くて。2艘古いのが助かって、1艘は三陸町の方まで流れてたんだっけど、それを持って来ちゃったけども。後はエンジンがつかねえ船ば2艘、宮古から持って来たんじゃねえですか。それは扱うのに良かったんで、あんのだけでやったったのね。

（犠牲者は）宿では1人じゃがね、おらが家ぐれえじゃねえですか。

そして、中の浜に1人いたがね。この宿の上の古里部落の人も浜見さ行って。その途中に津波に遭ったっつうような格好だもの。ここら辺は少ねえ方だがね。こうなっちゃ、個人個人のような格好になったったもの、最後は。だから、敏さんとおらがいるだけなんだっけね、浜やってんの。

宿漁港っつうのは、女遊戸、中の浜の人も出んで、古里の人も出っから。上の崎山の部落の人たちも浜に下りてきて、二手に分かれてんだでば、日出島の方とこっちの方で。こっちの部落の人は日出島、こっちの部落の人は宿っつう格好になって。それなんで、5、60ぐれえかね。浜で食ってるとなっと、アワビとウニだけで出てる人もあれば。みんな宮古組合になってて、部落別に分かれてる訳だ。崎山地区でみんな1つになってて。ただ港が2つに分かれてるだけで。港、港で買い人が来て、そこで買い取ってるような格好だもの。

ウニとアワビと、今の時期はソイだのマツモだの、フノリだのヒジキだのって。そしてそれが終われば、今度は天然のワカメを採って、このごろ採んねえどもね、ワカメが安くて。漁をやめるってことは、組合をやめるってことで。何人か、津波後やめた人たちもけっこういんがね。

(4) 崎山

□ 畠山初男さんの話

昭和21（1946）年生。崎山。JA職員。自治会長。崎山地区連合会長。民生委員。平成27（2015）年4月25日、話をうかがった。

小中学校に、3時ごろから来たんだな、みんな避難して。当初避難したこの地区では、120人ぐらいかな、全員来たっけから。流れなかったとこも全部来ましたからね。下の方の浜の人たちも上がって来たんですよ。初めてのことだからね、どうしたらいいんだか、誰もわかんない訳です。訓練も何もなされてなかったから。それからどうしょうってことで、私も自治会のあれやってるために、「じゃあ召集かけて」って。2晩目ぐらいに召集かけたんですよね。

まず、「米はねえ」とか「食べ物がねえ」ってことで、とにかく食べもの確保しようって。私たちが提案して、被災しない地区から貰って歩って。けっこう集まったんですよね、今度は、炊き出ししなきゃなんない、何にも道具がない訳ですねえ。早稲栃の自治会で、「じゃあおれの方でおにぎり作って持って来っから」って、徐々にこう輪が広がってったんですよ。

1週間ぐらいたってから、役所が動き出して。支援物資があっちこっちから来るようになって。1か月ぐらいは物を集めたのかなあ。人が流されて亡くなったり、自分の身内も亡くなったりですねえ。動揺して興奮してんだかみんな、指図すんですけども、なかなか言うこと聞かないんですよねえ。

地元のわれわれの言うことは聞くんですけど、役所が命令的にこうやっと反発すんですよ、「何だおめえら」って。けっきょく地元の下請けのわれわれが「何とか、じゃあやりましょう」っていうことで。「これでいいか、これでいいか」って確認しながら、こうやってったんですよ。それが何とか落ち着かせて、興奮も覚めて。体育館に4か月ぐらいはおったねえ。その間、私も交代でやったんですがねえ。

誰か行ってないと、地元の人が行ってないと、安心っつうかねえ。おれが行かねえと、「何で来なかった」って。頼るっつうよりも、覚えた顔がいれば安心するんだって。仕方ねえというよりも、忙しくても顔は出してやったんですよ。自治会の会長さんなどが、2人、3人交代でこう顔出して。何かあれば相談に来たりして。それで今度は、私たちが市役所の担当に行くように仕向けたんですよ。1か月ぐらいで、役所の担当が親身になってやってましたねえ。

（地震の時は）家にいたんですよ。ここの地区はそんなに揺れないんですよ。何も無かったんですよ、ここ。地盤が堅いとこで、地震があっても3度か4度あたりで動くっつうとか。この間の7度か8度か、確かに揺れたんですけど、物は落ちないしねえ。

今回の場合はドンと来てから長く続いたじゃないですか。地震かなあって感じで。外で木を伐ってらったんですよ。チェンソーで、音が

しなかったのもあるんで。「地震だぞー」って、サイレンが鳴ったりして、それから騒いだんです。私たちが集まって来たり、「これは大っきい地震だこった」って。

地震があった時に、市の放送で流れたんですっけ。「3メートルから5（6）メートルぐらいだから、避難してください」って、そん時に避難指示が出たんですよ。そしたら徐々に集まって来たんですよ。ここ小学校の体育館が避難所になってますんで。意外だったね、みんな来たのが。

この地区で流された方は、津波を見てた人がいたったんですよ。高台から下がって、今まで来たことも無い場所さ上がって、6人だか7人ですね、地元の人などが船を上げて、自分らがだいじだっていうことで、「津波を見に行くから」って、そこで6、7人若い衆がみんな行ったんですよ。

今回は、こんなに津波が来っと思わなくて、みんなそこで待ってたんですねえ。今までずっと津波が来れば、そこで並んで見てったらしいんです。1メートルか2メートルの津波だっつうと、そこまで来ねえ計算だすけ、なんぼしても、いつもの計算だったつう。そこでねえ、7、8人亡くなったんでねえかなあ、浜の人、若い衆などが。

T君は、大沢を見て、消防だったから下がって、自分とこの浜さ行った訳だ。彼は避難しなかった、突っ込んでしまった、けっきょくは。（津波が来たのを）知らないで、2人流されて車の中に入ったのが3人流されて、T君は死んでしまったし、あとの2人は九死に一生なんですね。たまたま軽トラに乗っていて、山の西まで流されて、押し上げられて行って。引き水が引かなかったから良かった、木さ引っ掛かって、波だけ下がって行った訳だ、ちょっとしたことで助かった人、助かんねえ人と、話聞くと紙一重で、命の尊さって言うんだか何だか…。ちょっとしたことで助かってる人も、まさかという人もあったり。

日出島のS君ってねえ、屋号で「オスモ」だね。そこの家でお婆さんも家にいて、お婿さんもやられたんだ。お婿さんは、みんなして津波を見てたんだ、孫と嫁さんと。嫁さんって60近い人だもの。お孫さんは30なんぼかな。

家におったんだども、若いから足が早いので、お婆さんといっしょに行ったんだども、お婆さん引っ張られて手をねえ、離しちまったったっけや、嫁さんが。引っ張ってったんだども波にさらわれて、何ともならなくて。波がすごかったんじゃないですかね。自分らも命からがらだからす。お婆さん助けっか、自分がいくかっつう感じだったんです。お婆さん助けていれば、おそらく（嫁さんは）逝ったんじゃないかな。そのためにやむなく、お婆さんの手を離したんじゃないべか。みんな引きずられてはうまくないもんね。ただ途中で手を離して、それがやっぱりねえ、言ってらったね、しばらくねえ、「手のぬくもりが忘れられない」とかって。このタッチの差でねえ、気の毒だったねえ、話を聞くといろいろ。

今話をしている人の船は、沖に出てっちゃったったらしいんだっけや、旦那は。沖さ行っちゃったのが、戻した時にやられたんで、船も旦那も助かったですね。宮古湾の方から出てったっけから、避難すべえと思って、船を逃がしたんじゃないかな。大っきい船は何があっても助ける、今回は助けなかったのす。急だったから間に合わなかったですね。何艘かは助けてくれたっけどもなす。今回は津波が大っきかったから、完全に流されたもんね、よっぽど沖さ行かないと、みんな上さ上がっちゃうもんねえ。今回は想像以上の津波だからねす。備えが間に合わなかった。避難も間に合わない人がいっぱいだものす。

避難所には日出島地区が全部と宿の6世帯が、女遊戸、大沢も残ってる方も全部来たんですよ。家が残ってても。避難指示が出たのは、全戸です海岸線は。家にいられなくなって5日ぐらい避難所にいて帰ったのかな。合計120人ぐらいになったのかね、地元だけじゃなく、この辺で稼いで、働いてる人なども、みんな家に帰れねえから、道路遮断してしまったから。150~160人越えたのかな、当初は、ひと晩は。寒かったねえ。

ひと晩は何ともならなくて、その日は避難しただけで。次の日に集まって。食い物どうしたか、その日は間に合わなかったんじゃないかな。備えなんかは全然無かったんですもんねえ。

ここで三陸フェーン火災があったんですよね、50年ぐらい前かな、女遊戸とか松月とかに避難指示が出て、備蓄はほとんどないし、「さあ、どうしょう」ということで。それでも当日どっか集落でね、山崎時男さんが炊き出ししたような感じだっけなあ、当日の晩に。

2日目ぐらいすれば米が無くなる訳ですよね。安人君が集落で消防の副分団長やってるから、いっしょに集めて。だから、あそこでおにぎりもしたこった、最初。時男さんらがやったんです。「米が無くなっから、早く何とかせい」って。で、役所から広報車頼んで、協力して回ったら、たいして集まったんだよね、米から何から。

そこでこんだ釜を持って来て炊き出し。当初は山崎さんとこに米を届けたりして、2回ほど炊いてもらったんじゃないかな、かまどかなんだか準備して。小学校の給食の道具を借りたりして。大変苦労しましたっけねえ。ガスはプロパンだから、助かったんですねえ。

避難所は隣近所で喧嘩している人以外はね、たいてい親戚などで集まってみたり、固まっていたんだっけねえ。「何時に行ってもやった」って。「隣の人がうるせえ」とか、「好きでねえ」とかって。嫌ってしまってねす、「編成してけろ」「変えてけろ」とかって。わがままが出て来んですねえ。おれもいた時、「がまんせえ」っちゅうて。いらいらしてると、喧嘩になる訳です、取っ組み合ったりして。だから、役所の担当は大変だった訳です、交代でずうーっと泊まったからねえ。

ここでは自分の家で行方不明になった人を、娘さんが亡くなったということで、遺体安置所へ仕事を休んで毎日通ったんですっけ。電話もないしね、千徳小学校とか山田さ行ったり、釜石の方まで行ったってね、みんなそれをやりましたっけ。自分の身内を早く探したいって。情報が全然入って来ねえから、行方不明だった人は。その身なりとかはみんな警察が、紙に貼り出したり、一覧表にして。それを見て、今度は遺体収容所さ行って、顔は見なかったんでねえかな。見れなかったんでねえかな。1週間も2週間もたったから、腐ったりねえ。で、彼はそれであきらめたっけなあ。1か月ぐらい通ったっけなあ、仕事を休んで。

父さんが亡くなったっつう人なども、あちこち探してたっけっねえ。最初は避難所に探しに来たもんだっけねえ。宮古の方からも、こっちからも避難所に行ったりして、流されているかもしれないっつう。役所から名簿出してから止めたっけども。

埋葬は1年後ぐらいに死亡として認定されんのが、法的に何か月と決まってますけどねえ。それ越えないと何にもできねえ訳だ。「いませんでしたよ」っつう証明書みたいなもの貰ったんだか、確認したんだか。警察で死亡認定っつうか、死亡が決まんのが。それが決まってから、徐々に葬式が始まりましたっけねえ、1年過ぎた後に。しばらく。やりたくてもやれないで、保険の関係もあったようで、いろいろあったんですけどねえ、手続きの関係が。警察でも完全にわかんねえから、金銭的なものが絡んでくる部分あると、証明書みたいなもの貰って、保険請求したりして。遺体安置所は、ほとんど全部警察が管理してたのね。

ケイタイあっても1週間ぐらい情報が全然入って来なかったんですよね。東京の親戚だの、こっから出はった人なんかはびっくりして。ここはあんまり影響は無かったんだけど、下の方の親戚はいっぱいあるからね、鍬ヶ崎とか。

救援物資が集まって。体育館にいっぱいになった。役所から来るようになったら、もう山になって。最初は何でも持って行くんで。在庫が無くなるんです。だんだん、だんだんいっぺえ物があふれている。不都合なのは全然見向きもしねえ。喧嘩してんですっけ、救援物資を分けてると、自分が気に入った物は先に無くなる、いらない物が残って。「かっこいいの持って」「あれ、ずるい」とかって。服とかは女同士で喧嘩したりしてんだっけなあ。最後には、みんな分けたっけどもね。

そこでは、食い物の方も全部分けましたっけねえ。ラーメンなんかも、すごい量が来て、韓国からも来たりして。食ったことのねえようなラーメンが来て。誰も処分できねえから、最後には、山にして分けて。それがあるために、ずっとここにいる人があるんです。ここにいればみんな物貰うのにいいから。家に帰っと避難者じゃなくなると物が行かなくなる訳さ。地域によっては持ってってくれた人もあるんですけど

も、ここにいればみんなと同じに貰える訳さ。そういう計算して、なかなか行かない訳さ。「立派な家なのに、何でおめえ帰えらねえんだ」とかって、やりあってるんですけ。「早く帰れ」とかってね、うちわ喧嘩してるんですって。

下（浜）の方の人は、ほとんどの人が「海さ、行きたくない」って、「見ったくない」って。「家族を思い出したり、家を思い出したりすっから、行かない」って。かたくなに行かない人があっけなあ。「父さん亡くした」とか、「婆さん亡くした」とか、「家が無くなったから行きたくない」って。1か月ぐらい行かねんでねえかなあ、行かない人は。そん中でも2人、3人は行ったけど。ほとんどの人がねえ、「海は見ったくねえ」とかって、下りて行かねえ。だから、あすこに黙ってじーっとしてんのさあ。黙って1日いっぱい。

だんだん慣れてきて、ようやく家を片付けに行ったり、周辺見さ行ったりしてる。しばらくたってからだっけなあ、思い出したのが。私が見てる範囲ではね。しばらくはショックで動かなかったっけ、見ると。心理的にそうなるのかなあと思って。逆に「絶対に海の近くさ家建てない」って言ってらった人も、1年、2年経ってしまった時は、最後に自分のとこさ戻った。迷ったけれどいちばんいいんですよね、実際は。

その他に、ここから町さ下がって行って、亡くなった人けっこうあんですよ、この集落には。買い物に行って車ごと流されて夫婦で亡くなった人があるし、田老のコンビニに勤めたったSさん夫婦がコンビニが流された時、いっしょに夫婦とも流された。今は空き家になってっけ。家建てたばっかりで。仕事で「津波だ」って逃げようとして、宮古さ向かってて。山田で車ごと流されて亡くなった人もいるしね、板金屋さんだっけのう、その人もやっぱり、流されたって。45号線そのまま来たんじゃあないですかね。大丈夫だと思って来たんじゃないかなあ。奥さんと2人、買い物してから帰っぺえって、築地辺りで津波にやられて流されたとかって。けっこうおりますわねえ、浜だけでなく。

女遊戸地区から流されて「ボランティア、手伝ってくんねえか」っつう、地元に対して最初要請があったったんだけども、瓦礫の片付けだの話だったっけ、地元じゃちょっと無理だってことで。

女遊戸の集落は、流されたり流されなかったり、残ったりと、はっきりしてっけどねえ。いろんなのが川に流れたり、それをどうすっかってことで、ボランティアでやろうっつうことにしたっけ、大沢もとても瓦礫はボランティアでは無理だ。それで役所は全部重機を入れて、業者を入れてやったんですけども。

宿なんかは再建しないことにしたから、公園になって終わりでねえかな。役所が募ったらば、あそこに住む人はいなくなったんですよ。あそこは逃げっとこねえもんねえ、ほんとに山だけだもんねえ。だから、集落の人などは、全部高台に上がるっていうことで、残らないことにしたんですけどもね。

きれいにまた流されて、残ってねえもんねえ。今度は浜に住む人がいなくなったから、避難道路必要ねえ訳だ。住民用の災害道路として青写真貼ってった。ところが震災後、全然話が無くなった。

(5) 箱石

□ 佐々木重勝さんの話

昭和23（1948）年生。崎山。箱石自治会長。宮古市議会議員。

平成27（2015）年3月13日、話をうかがった。

身内の不慮の交通事故で、本当は最終議会だったんども、それを休んで身内の事故の処理かたがた、その合間にJAの花輪に税務申告を届けに行ったんですよ。置いてすぐ帰ろうと思って。その時でした。けっこう揺れましたね、あすこすごいんですってね、震度がね、横揺れだったから、水が水路からあふれて。どうしょうもないからそのまま真っすぐ家へ。

交通事故関係の赤ちゃんが、1歳未満の子どもがいたんですよ、家に引き取っておいてあったんですよ。だから、家具が倒れて潰れてはいけないかと思って心配で、花輪橋に戻って来たらあすこは車が詰まって、それから小山田をくぐりぬけ、藤原を通って、市役所前を通って、とりあえず乳飲み子の赤ちゃんの確認をしてからと思って。そして、

帰って来たら津波が来たんですね。私はくぐり抜けて来たのかなあと。「赤ちゃん、赤ちゃん」って思って来たために、助かったのかなあと思ってました。津波は見てないんですよ、私は。あそこくぐり抜けて来て、家に来たらば、すぐラジオでも来たっていうことでした。

ひとまず安心して、悪いけども、それから消防に出かけました。もう国道45号は通られないから、山道を行ったんだけど、動かないし、消防署に行ったらば、やっぱり何人もいなかったね。団長（本団）も来てなかったし、これは大変なことになったなあと思って。夕方でもあり長丁場だなあと思って、やっぱり腹ごしらえしなくてはって。近くの方々だったから、腹ごしらえをしてから、やっぱり急いでも始まんねえからっつうことであった。あれで良かったんだか悪かったんだか、ちょっと今までも迷ってんだけども。でも常備の方々もいずれ緊急のことだったから。すぐまた集まって、そして無事に団長が見えたり、みなさんが見えて、ということでした。

各分団の情報収集して。初期対応は、私もいろんな立場がありましたが、私自身としては消防団を優先して、ある程度区切りがついて、後は被災地区を毎日毎日、こう巡回したような感じでした。身内もけっこうばらばらになって、所在がつかめない状態だったけども、消防団を解散してから、夜中に田老に行くとかしたけど、行けなかったですね、やっぱりトンネルまでで。

ただ、自治会の対応としては、私は消防に行かなきゃなんないから、嫁さんにはしょい籠しょって、避難所に対してね、食べられるものとか毛布とか、寄付していただければということで届けたり。その時、副隊長がね、崎山全体の避難所に張り付いていただいた格好だったね。あちらも自治会副会長であって、消防団の本部の分団長。市役所、一分団から東部が一方面隊っていうことで、こっちに集まっていただきました。自治会連合会としても、数日たってから立ち上げたのは副会長の信雄さんと山崎時男さんが、避難所をすぐに開設して。「悪いけども、私は本部さ行かなきゃなんないから、お願いします」というようなことでした。避難所はその時から、お米の集め方とか始めたようです。

それと同時に消防団十六分団、地元の分団が主になってやりましたねえ。団長指揮のもとに、私自身は田老とかね、津軽石とか、いろいろ捜索隊を分けて送り出してから、団長と全体を回って、各分団の必要な物は何か初期の段階は聞きながら。「手袋が欲しいの、肌着が欲しいの」って、いろんなことがありました。

最初団長は、市の対策本部に、「消防団に何とかしてくれないか」と掛け合ったようですけども、消防団だけに優先的にっていう訳にはいかないということで、友好の盛岡市消防団にお願いして。そしたら次の日は、いろんな物資が来る。それをこんどまた、さらに各分団にお届けすると、そんなこともやりました。

田老の方面隊からは、まったく情報が得られなかった。「田老はどうなってんだ」っつうことで。次の日私が行って、「どうなってるの」って。Mさんが隊長だったんですけども。「いるー」って聞くと、「いるんじゃないですか」って分団員さんが…。実は亡くなっていたっていうことで。通信手段も遮断されてたもんですから、連絡もやれなかった。唯一、総合事務所の前に消防車両を置いて、そこからかすかに連絡がとれていました。私が借りて田老の情状を送ったりしました。

避難所はそのうちに自治会の方々も入って当番制とか、いろんな部分で問題点が見えてきました。それを調整しなきゃなんないということで、各自治会が入ってくれて、学校の校長さんも入っての避難所運営となりました。

被災直後の田老地区はすごかったです。信じられなかったです。私は消防団活動の合間に、団長の許可をいただいて、捜索活動をしている仲間には悪いと思ったが、田老地区（たろう観光ホテル付近）に身内が住んでいたので気になり、行きました。トンネルを抜けて見えた田老地区の光景はすごかったです。

地区全体が瓦礫の山となっていました。唯一歩ける防潮堤に沿って歩いたが、その防潮堤も途中で破壊されていました。どうしても確認をしたいから、四つん這いになり目的地に進んだが、そこには建物の基礎だけが残されていました。私はぼう然として立ちすくんでいまし

た。

…そのようなときに、人の話し声が聞こえました。近くを見ると、小高いところに神社がありました。私は急いでその神社に駆け上がりました。5名ほど避難していました。中には怪我をし、治療を必要とする人がいました。「何とか連絡を頼む」と言うことで、また、防潮堤沿いに帰るしかありませんでした。

途中、怪我人の連絡は総合事務所にと思い、防潮堤よりまっすぐ総合事務所に向かって瓦礫の山を歩いたが歩けるものではありませんでした。断念して線路沿いに歩きました。幸いにして自衛隊本部があり、そこにお願いをして帰りました。

市の対策本部は消防署3階に設置しておりました。市長以下、市当局、自衛隊、援助隊を含めた消防署員、消防団等の代表により構成されました。被災状況、救助および捜索活動状況が話され、翌日の被災地への捜索隊が決定されました。

被災当初は停電していることから、暗い家に帰り、翌日も暗い中を出発するという状態でした。捜索に尽力された緊急援助隊（消防）・自衛隊・警察のみなさんには、誠にありがたく今でも感謝しております。

捜索当初は、生存者確認が優先され、その後に行方不明者の捜索活動だったと思います。当初、消防団については発見の段階で、「手をつけず、警察に連絡をしてください」ということでしたが、捜索が進むにつれて搬送まで依頼されました。消防団員の方々の負担も大きかったものと思っています。

2　崎鍬ヶ崎地区

(1)　大付

□　山内正光さんの話

昭和15（1940）年生。崎鍬ヶ崎・大付。漁業。

平成27（2015）年3月12日、話をうかがった。

何年かは冬の間だけ、東京の築地にも荷卸しのために、マグロ船に乗ってたもんですから。三崎（神奈川県三浦半島三崎港）の方がずっと長かったもんですから。15年ぐらいですかね、三崎にいて。

家のすぐそばの所に作業場があるんですが、そこで仕事するとか、お茶飲みするとか、5、6人でいたんです。そしたら、ぐらぐらってきて。「なんだこりゃあ、大変だ、こんな大っきな地震初めてだなあ」っつって、そこ飛び出して、しばらく揺れるもんだから、そこにいて地震が収まるのを待って。

そのうちに、「そら地震だ」って言うんで、ここの道路を軽トラックに乗った人たちが6人ぐらいここを通って。船がそのままになってたもんですからね、それを引き上げようって、浜に下りたんですよねえ。この辺で磯漁に使う16尺って言う型の船なんです。だいたい2人で乗って行って、ウニ採ったりアワビ採ったり。アワビが終わると、3月、4月の次の漁期まで、上げて来る人もあるんですけど、浜にそのまま置く人もある訳ですよ。それで、「船をもっと高い所に上げよう」って、浜に下がったんですよね。

養殖の船は、それの3倍ぐらいある大っきな船で。手で引っ張るのは無理だから、軽トラの後ろで縛って引き上げるんですけども。そういう船もまだ十何隻ぐらいあって。その人たちも浜に下がって行ったようなんです。今までも私の知っている限りでは、ちょっと大っきな「地震だ」って言うと、「みんなで下がって船上げろ」ってことを繰り返していたんですよね、この辺の人たちは。

この辺で9人ですね。浜に下がって行って、船を引き上げる途中で流されたんだと思います。ふだんの時だったら私も「そら大変だ」って…。その時には下りるって気はなかったですよね。ここで5人も6人も下がるのを見てたんです。

山から帰ってきて、木を倒しに行ってたらしいんですよね、薪にする。それで浜まで行って、そのまま波に流されたみたいです。その家の人と、その後ろの家の人とすぐ前の家の人と、すぐ後ろの人と、この辺だけで4人。すぐそこの若い衆が足元さらわれて、かろうじて助かって。

浜に下がったのは8人ですね。5人が波にさらわれて、それで3人助かりました。上の方では遺体が上がった人はいないですね。おそら

く自分の船だけではなくて、よその船もいるやつを上げようっつって、いじったんじゃないかなと思ってるんです。

津波で助かった人も、ここで2人も亡くなっていますもんね。1人は、波にさらわれてぶち上げられて助かった人なんですよね。泥水を吸って肺までいって、しばらく入院して治って退院したんですけども。浜にもウニ採りにアワビ採りに、出てたんです。2年ぐらい前ですか、亡くなりました。そんで、足元さらわれた2人のうちの1人が、去年亡くなりました。2年ぐらいは普通に稼いでいたんです。調子が悪いって入院して、幾日も持たなかったですね。1年も持たずに亡くなったですね。

1人泥水吸った人が、1年以上存命だったと思います。もう1人、いっしょに流されて助かって、今でも元気で稼いでいます。ここでは流された人が1人だけ助かったんですね。危機一髪で助かった人が2人。そのうちの1人が去年亡くなっています。

ここの上に上がって、上の家のとこに上がると日出島の島の南側で見てたんですよ。「船の作業してるとこが見えないなあ」って言うんで、ここの下降りて、お墓のカーブのとこから見ているうちに、いちばん大っきなのが来たんですねえ。下に行ってからそんな大っきいのは来なかったですから。

日出島の南側のアオマツ（通称）、どんなしけでも波かぶったこともないような、いっつも見えてるとこまでが見えなくなりましたからね。ふだん見えない岩で、こう少し盛り上がったとこまで見えなくなりましたからね。だから、15メートルとか20メートルとかあったと思います。後で日出島の人に聞いたんですけども、ひと波で行っちゃったていう、もの凄えのが1回来て…。1波だか2波だかわかりませんけども。

ここ降りて行ったとこに砂浜が2つに分かれてて、そこがちょうど峠になってて、明治の津波の時にここのとこを行ったり来たりしたっていうことは聞いてはいたんです。あっちに越えたり、こっちに越えたりっていう。北側の浜と、南側は昔は砂浜だったんですよ、そこにコンブ乾したりワカメ乾したり、乾燥場になっていたんですよ、弁天さまの南側の、ちょうど高いとこで、こっち側行けばもっと低くなるし、こっち側もそのまま低くなってる、その高いとこ越えたって。「ここ越えたんだず」ってねえ。

明治の津波の話をしてくれたのは、伊勢松（祖父）っつう家の祖父です。明治24年（28年だか）生まれだと思います。子どもの頃から聞いてはいました。ここは地震ぐらいでは、避難ということは考えない訳ですよね。明治の頃はずっと下のほんとに海辺のとこでした。それを完全に越えてますからね。高さにすると3メートル、4メートルぐらいじゃあないかな、はっきりわかんないですけども、私の背の倍はあるぐらいですから。2メートル50は完全に津波は越えてますねえ。

津波に流されたっていうのはわからなかったですねえ。私もここで見てて。そっちの方に行った時に、消防の十六分団の見周りに来た人が、流されて助かって亡くなった人を乗っけて来たんですよ。見周りの消防車で来てましたから。そいで、「流されて助かって来た人を、この人を途中でここまで連れて来たけども、家も分からないし、誰か連れて行ってくれる人がいねえか」って言うんで、「いいから、おれがトラック取りに行くから」って言ったら、「持って来てたよ」っつうのがいて、その人に「それじゃあ頼むか」って、その人に家まで連れて来てもらったんです。

それからすぐに病院に行ったらしいんですよ。その時に意識はありましたよ。1人で自分の体を自分で何とか、支えれば動ける状態でしたから。

Tも1回ね、ここ（高台）に上がったのす。そいで声掛けっぺかなと思ったども、まさかあれが下がっては行かねえべなあって思って、声も掛けねえでやったの。ここ静かに上がって行ったさ。「下がんな」ってしゃべってるもんだっけば、まさか下がんないべなあって思ったっけ、ここを上がってってから、今度は下がったらしいんだでば。Tは浄土ヶ浜さ行ってたらしいんだよね、ハンモウド（浜を守る人）で。ホタテ焼いてお客さんに、観光船の乗り場の切符売り場あるんですが、あすこの下を借りててねえ。

そこさたまたま行ったらったらしいだっけでば。おれが思うに、あれを上がってってす、そして今度は亡くなった、消防だったから。たまたま家のとこで行き会ったんじゃねえかなと思うんだけどもねえ。その若いもんどっから来たんだかわかんないけども、たぶん屯所さ行くべと思って、車で出だしたんじゃないかなと思うんだけどもね、軽トラ乗ったったからね。そいで、たまたまTんちでいっしょになったんじゃないかな。そして2人連れだって浜さ行ったんだねえ、それからそうでなあば、2人行く訳がねえんだもんね。1人はあっちで行き会ったんだから、家から行ってあっちゃ行くんだから、屯所さ行くべと思って行ったと思うんだね。

家の上の方に行って見たども、ここからは港の方が見えない訳ですよ。それなんで「港の方が見えるどこに行ってみよう」って言うんで。お墓のとこから全部見えますから、そこに行って眺めていました。そん時には、堤防の内側はかなり潮が引いたり、また上がって来たりすんのが見えてましたんで。船が流されて行くのが見えたり、養殖のロープが団子になるのが見えたり、そういうのを見ていた時に助かった人が、消防に連れられてそこを通って行ったんです。

津波の色はあんまり変わらなかったですね、ちょっと濁り水、雨がそんなに降った時じゃなくって、そんなうんとどろどろっていうんじゃなかったですね。意外とここもちょっと行くっていうと水深けっこうありますんで。常に外洋だからきれいな水ばっかりで、内湾と違って。ちょっと濁ったぐらいですかね。そんな程度の水だったですね。

助かった人がどうしたかわからなかったですけども、その後の記憶があんまり無いんですよね。夕方になって日も暮れて来るし、雪もポツポツ来たような感じで、その辺の人たちと話して、もうこれで電気も止まってしまったし、家にいてもお風呂もないから、避難所（崎山小学校）に行きました。そこで1晩泊まって来ましたけれども。

Tは妹の旦那なんですけども、連絡が付かないっていうことで心配したけども、「どっかで何とかしてるんじゃないか」って、まだそん時には信じられなかったですよね。誰がどうしたっていう情報も全然わからなかったですねえ。この辺の人たちも流されたっていうのも。その辺の人たちが帰って来ないっていうのは、わかってはいましたけども。家の方でその時点で帰って来ない人が4人ですか、1人は帰ってきましたからね。5人ぐらいがまだ帰って来ないっていう。津波に持っていかれたんじゃないかって。Tはまだわかんなかったから。

炊き出しはおにぎり貰って食べましたから、炊き出しの人たちが、たぶん、早稲栃の人たちが後で聞いたら、一所懸命になって握ったっていう話は聞いてました。避難所はあんまりぎちぎちいっぱいっていうほどでもなかってけども、100人ぐらいはいましたですかねえ。灯りは発電機で。雪の降る中、外でドラム缶で火焚いて、遅くまで十六分団の人がやってましたから。トイレもたまたま外だったし、外に設置されてましたから。十六分団の人たちがやってくれたんじゃないかなと思ってますけども。寝具は何枚かは用意されてたような気がしますけどねえ。最低でも毛布の1枚か枕になるような座布団とか、ぐらいは持って行ったと思います。

そん時、家の爺さま（父親）、あの頃はまだ達者だったから、サンホーム（老人介護施設）に行ってて、地震で泊まられないからって言うんで、向かいのサンホームに勤めている姉ちゃんが、そこに連れて来てもらって、そこで爺さまも女房と3人で1晩泊まって、朝んなって、朝ご飯もおにぎりか何かいただいてきたような気がしますけども。9時か9時半ぐらいにはこっちに帰りましたね。

Tが1人だけ不明だったんで、誰も見た人がいないっていう、消防のポンプ車で連れてこられた人が、上で見てたらTは南の方のいつも仕事をしてっとこの方に行って、でっかいのがばんと来てて、それでひと波でさらわれたんじゃねえかなって。さらわれたのはそのひと波だけみたいなんで。

おかしなことに、そのさらわれた人たちが上の方に上がってんのね、流されて助かった人が2人とも、トラックも上の方に。そうで波は南の方から越えてきたっていう訳さ。南から来たのがさらって、そのままみんな何もかにもひと波で持って行ったっていうのに、流されて助

かった人たちが浜さ下がって行って、ちっちゃな川が、あすこの左手の方の杉のあすこらで2人とも。越えたとこの方の反対に行って助かって。だから、どうなってんだかちょっとわかんないですね。

佐々木佐重喜っていう人が全部見てたったけ、自分の家から見れば見える訳だ。あすこから越えてきた波がだーっと来てひと波で持ってったって。とってつもない大っきなのが1つ来てるから、みんな持っていかれて。日出島の場合はそんな感じですよ。

昔の崎山村の時代の人たちは、ほとんどが同年代ですから、北は松月から、中の浜、女遊戸、宿、日出島、南の大沢まで、浜が6つあるんですけど、そこの人たちみんな顔見知りですから、小学校ひとつ中学校ひとつだけですから。2つ3つ上の人たちとか、あと地区の中とか、いっしょに遊んだり何かした人たち、親戚のある家には小さい時からお祭りだって言えば行ったりして、そこで遊んだりすればみんなほとんど顔見知りなりますし。

私は18の時から20年間ぐらい、漁船乗って家留守にしてましたが、小さい時からの知り合いっていうのはほとんどで…、名前が知らなくてもだいたい顔見れば、あの人は確か箱石の人だったなあとか、崎山の人だったなあとかって言うことは…。

亡くなったのは宿の浜の人で2人かな、そのうち1人は知っている人ですし1人は知らないし、大沢の方ではここの家の親戚の家の人が亡くなったっていう、お婆ちゃんと娘さんとその友だちと3人亡くなったっていうのが2日後か…。そのあたりになれば、みなさんその話題ばっかりですから。こういうとこですから、情報はどっからもけっこう入りますよね。

「あすこではこういう人がこうで、こうらしいよ」って言うと、「そうだっつうよ」っていう話は、2日か3日ぐらいにはもう全部…、どの程度の（津波が）どこまで来たとかっていうことじゃなくて、人の痛みっていうのは、3日目ぐらいには全部…、旧崎山地区の被害っていうのはわかりましたね。

私んとこは、ふだんは3人なもんですから、冷凍庫やら何やらありますんで、米なんかも10キロ買ってくればね、10日でも15日でも持ちますから。食べ物のことは何も心配なかったですね。ただ水道が止まりましたんで、水が大変だったですけれども。

ここの上に、昔から飲み水にも何でも全部使ってた井戸があって、蓋をしてちゃんとしてきれいなんですよね。水質検査なんかやったことないですけども、大丈夫だろうって言うもんで。その水を井戸から汲んで3日か4日ぐらい使って。水だけは絶対に必要ですからね、井戸のお陰で、この辺の人たちは全部助かりましたよ。所有者はこの上の家の人の土地だから、その人のもんだろうとは思うんですけども。昔からみんなでここ使ってたから、みんなのもんだっていう意識があって。

昔からお盆のちょっと前だったかな、「ナノカビ」（7月7日）っていうのがあって、「井戸替え（けえ）」って。井戸の掃除を子どもの頃から大人の人たちが昔はバケツみんな持って、水を汲んで全部捨てて、中をきれいに洗って、汲み上げた水を何かに入れて取っておいて、そいで最後にその水できれいに流して、ずーっと毎年そうやって今まで…。今では何も使いませんけども、

こんな高台で川がある訳ではないのに、水があっちからもこっちからも湧き出てんです。ここの角の横にも水湧いてサワガニがいます。今でも。少し掘ると下が堅い赤土の岩盤なんですよ、赤いごじょごじょ出てるっとこ風化して、ぼそぼそ崩れるやつ、石なんですけども堅い石なんですよ、この辺もほとんど。だから、腐葉土とその岩盤の間をこう流れて。この辺、自家用の井戸を持ってる人がけっこうあるんです、上の方から数えても、5軒か6軒ぐらい。この辺じくじくしてるから、掘れば水が出んじゃないかって、やったんじゃないかと思うんです。不思議って言えば不思議なとこですよね。

水道が出来てっからも、何かあればここは絶対に使わねばなんねえからって。蓋もしてなかったんです、汚れたまんまになって木の葉が入ったり。それども1年に1回は汲み上げて、掃除をしてきましたけども、これはだめだなあって蓋作って。「おれが造ってやっから」って、

ちゃんと丸いやつを10日ぐらいかかって造って蓋して。子どもたちが入ってもだめだから重い方がいいと、重石乗せて子どもたちが開けられないようにしてますけども。

私は震災を機に漁師をやめましたですね。

(2) 日出島

□ 前川要さんの話

昭和24（1949）年生。崎山・日出島（現在、大付在住）。船員。平成27（2015）年3月9日、崎山仮設住宅で話をうかがった。

その日はね、ちょっと寒かったからね、コタツの中に入っていたのよ。ケータイが鳴ったから、これが鳴るっつぅと地震がくっけどって、女房にしゃべってて。そしたら、下からどんどん突き上げるような、今まで経験のないような、揺れというか突き上げるような感じだったもんね、どがどが、どがどがって。あいやー、これは長いなーって思って、一応玄関の戸を開けさせたんだけども、開けてもまだ揺れてたったから、家瓦だったから、瓦落ってくんでねえかと思って、出なかったのね、地震が収まるまで。

ああ、これは必ず絶対、家までは届かないだろうけども、船はいっぱい引いてあんのが見えますから。船は完全に無くなるなと思ったから、「女房に、おい車出せ」って車を出させて、すぐに上がったんですよ、お墓の高い所に。そしたらね、ちょうど流れて行った何名だかが、船がこう流れて来っかなと思ったんだか、船をつかまえるために下りたんだね、乗っていた車3台、4台ぐらいとあったね。で、まあ、上の方で、最初は家の方を見てたんだけども、お墓の所で。まだ余震がありましたから。あっこれはもしかして倒れてきたら危ないなあと思って、もうちょっと高い所に上がったのね。

そして、沖の方を眺めていたら、真白くなってきたったから、これはおらほの方にも上がったんでねえかなと見に行ったのね。そしたらもう、何もなくて本当にきれい、海水流して水洗いした時みたいに、何も無かったもんね。家も無かったし。あの時考えるったって、考えようがないから、どの辺まで上がるんだべなあって思って、しばらく気が無くなるまで眺めてたったのね。眺めてたってどうもなんないんだけど。

そん時、家が無くなった。今夜どうすっぺ寝っとこがねえでって。崎山小学校の体育館が避難所になってますから。いちおう行ってみようっつうことで、車で逃げたから車は助かったわけだ。行ったらもう100人以上集まってました。

それからが大変でしたねえ。電気はないでしょ。で、食うのがないでしょ。で、最初どっからか炊き出しのおにぎりが来たんだけども、最初の内は海苔が付いて、ラップを巻いたおにぎりを渡して。次の日は、ただ白おにぎりに、そのおにぎりも小さかったり大きかったり、ラップも何もないから、お菓子の食った袋だの何だの持ってって、こう配給を貰って食べました。

そん時はね、最初子どもが先、おにぎりの数が限られているから。歳を取った人が、20代の若い人が最後でねえ。20代の人は、当たったり当たんなかったり。これからもそういう災害とかがあるべえから。便所は自衛隊が持って来てくれました。テントでね、鍵もかけてないし、紐でしばったような。今は水洗ですから、水が出ない、みんな使ったら流れていかないと、流れないからもう学校の便所はストップ。

物資なんかは、水とか衣類なんかは、割と早く入ってきました。何か後世のためにも、何か災害があった時、ぼっとん便所みたいな汲み取り式でもいいから、そういう時のために確保しておかなくては1番困ったっけね。

ここ下りて行って（日出島の）上の方は残ったから、完全に流れたのは3軒、水を1階までかぶったのは1軒ですね。現在、4軒残ってるのかな、ちょっと高めの所にある家がね。3軒は何もなかったですよ、うちは昔の古い家だから、基礎が敷石の上に浮いたけどね、そのまま流された。新しく建った1軒は、押さえてあったから、基礎だけはいくらか残ってたった感じね。

何日か前に地震があった時もおれは逃げました、お墓の高い所まで

逃げました、誰も来なかった。海で作業してた人もいましたよ。「3か4ぐらいの地震が来ると、親戚が上の方にいるから、そこさ行け」って言われるのね。おれは年寄りだから家で番してたとかって、逃げないんだもの。日出島の犠牲者は、死んだ人が4名、大付部落ってね、少し上のあすこの漁師が5名か、両方で9名、あと車ごと流されて水いっぱい飲んで入院したりなんだりしたけども。おれの同級生1人亡くなりました。これも関係しているかもしれないね。

船をもうちょっと高い所に上げようと思って行ったと思うんだよね。漁師は船、岸辺に置いてんから、これをちょっと引き上げれば、流れないべっつうような感じだったんじゃないですか。引っ張って来ても間に合わなかったべね。早かったもんね、割とね。高い所上がって何分もしないよ、15分か20分ぐらいかなあ、上にいたったの。

よく漫画でなく、絵でこうすげえ高く描くが、ああいう感じなんだよね。ただ盛り上がってくんのね、水が。こんなに白くなって上がんじゃなく、どんどん、どんどん、どんどんとねえ、それがそのままこう押されてきたですねえ。ちょうど岸壁、防波堤が見えたったから。最初いくらか上がって、防波堤上がってきたぞって。すぐ下がったもんね、底の方までこう水が。それの返りなんだろうね、こっち来たやつ。

山の方に逃げて、お婆さん連中も逃げたんだけども、1人1回上がって、黙っていればいいのに、「何、もう大丈夫だべ」って降りてきたんだって、下に。津波の来る方向が、2方向から来たみたいなんで。島の鳥居の間からも入って来たみたいだもの。誰もあっちから来ると思わねえから、あっちは見てねえ訳だ。こっちの防波堤のある方だけ見てて、「何、大丈夫だ」って、降りたみたいだもの。そしたら、こっちから上がったやつで、返しで足取られたから。

Tさんは消防の関係で海の方、南側の方に回ってったみたいね。誰かいたか、ほれ避難させようと思って、確認に回って行ったんだね。あっちに行ったらもう終わりですよね。

（崎山小学校に避難してから）、電気も来てないし、全然情報も何も入ってこないし、どうなってんだべなあって、その市役所の人とか消防団が、朝出て来んだっけね。その人たちが行って見てきたのを聞くだけ。どうなってたっけ、あそこはこうなってたっけってね。

2日目、3日目かな、自衛隊がようやく道路を造って。妹が磯鶏に嫁に行ったったから、そこは運よく流れなかったっつうから、そこへ行って、体育館に居るのも大変だから、もし部屋が空いてたら借りて住まおうと思って、頼みに行ったの。最初行った時はすごかったね。爆弾でもおったみたいね、もう道路のわきもがれきが、ただがれきねえ、（ブルドーザで）真ん中押してったんだべ。

おれ2晩したら、金がからんでくる訳だ。それで、こんだどっか空いている家がないかなと思って、宮古中回りましたよ、毎日。アパートはないでしょ、とんでもない山田町豊間根の奥の方にあったりね。運よくここ降りて行ったとこに、使ってねえ空き家があって、そこに仮設が出来る6月まで借りてて、生活していました。

(3) 大沢

□ **山下啓一さんの話**

昭和27（1952）年生。崎鍬ヶ崎・大沢。建築業。消防団十六分団分団長。平成27（2015）年4月25日、消防団十六分団屯所で2名の方から話をうかがった。

□ **山崎安人さんの話**（途中の談）

昭和37（1962）年生。崎山・早稲栃。農業。農業委員。

私は大工なんですよ。その日はたまたま休みだったから良かったけど。大っきな地震だなあと思いながら、水門閉めに行って。遠くで働いてれば、水門閉めに来るには15分から20分ぐらいかかんですけども、家が近いもんですから、けっこう早く水門閉めたなあと思いながら。そしてまた地震で揺れるんですよ、ガタガタ、ガタガタって、音がしてんだよ。おかしいなあ。けっこう大っきいやつだなあって。

そうしてるうちに、沖の方が雷みたいな感じの音がすんですよ、ゴロゴロっていうような感じが。「沖の方で雷のような音がすれば津波が来る」、そんな話する人もおりましたっけ。確かに雷みたいな音がしま

すっけ。本当に津波は音無しで来るもんねえ。

自宅は防潮堤より何メーターか高いとこにあるんですよ。この防潮堤を7メーターぐらい上を波は越えてったかなあ。まず私は水門閉めて防潮堤の上に上がってたんですよ。そしたら、副分団長（山崎安人）がポンプ車で来て、「高台に上がれって、無線で言ってた」、それで上の方に上がったんですよ。こっちに、家に行く道路があんですよ。この高台に上がったら、波はすぐに来ましたったからねえ。だから、危機一髪だったとこあるよ。30秒も遅れたら、流されちゃったんでねえかなあと思う。

安人君（副分団長）はすぐ帰ったから良かったけど。小林君はわかんねんだよなあ、おれが上がったのを見てこう来たんでねえかな。そいでここで流されて、こっちまで流された訳。車に乗ったまま水にもまれて、川伝いにこう上げられたったの。ここでたまたま車が引っ掛かったから、助かったんだよねえ。

ただ大沢地区で被害に遭ったのは、ここの低い家が全壊になったのかな、下の柱が半分無い、建物半分無くなって。2階は落ちなかったけどねえ。よく持てたなあと思って。そいでここのお婆ちゃんがいっしょに流されて亡くなって、ここで1人。とにかく防潮堤を波が越えたんで、家はどうなったかなあと思って、こっちに回ったら家が無かったから…。

ここに娘さんと娘さんの友だちと、そして啓一さんのおふくろさんと3人が家ごと…。

（山崎安人さん談）

防潮堤より波は7、8メーター上を越えて来ました。こっちに当てた波がこっちへ立って来たっけからねえ、だから家の方に上がった。こっちの家は全然何ともないだもんね。床下にも来ねんだも全然ねえ。ここが1か所全壊。防潮堤はそれでも壊れなかったからねえ。ただ裏がちょっとえぐれてね。

家を見に行って、あっ流されたと思って、またこっちの水門の方に防潮堤の方に…を見つけて歩こうとしたら、家の方からたぶん娘の声だと思うんだが、「津波だ」っつう声が聞こえたったね。おかしいなあと思いながら、そいで防潮堤の方に来て海を眺めて、そしたら家の屋根がこの辺に見えてあったのかな。こっち見てないんだよなあ。防潮堤の中がプールになったっつう頭もねえのす。

そしてまあ、波が落ち着いて、そしてまた元家があった方に行って。家の上の保養所の管理人の人から、「津波が来る10分ぐらい前に、娘さんみたいな人が来たっけよう」っつうから、うーんと思って…。その時ね、海の方に車があったんですよ。うちの娘の車だと思わなかったの、全然。どっから来た車だべなあと思って、不思議に思いながら。その話を聞いたら、ああ、あれがうちの娘の車だったのか、家に娘がいたったのかっつうことになって。

そん時はもう頭が真白くなったったね。悔しくて、悔しくて…。だども分団長っつう頭があったから、心を鬼にして…。心を鬼にして、指示を出さねえばねえなす、そういう気持ちだったからねえ。ただ指示出したくても、どこにも行けない訳ですよ。こっちはもう歩けない、無線は効かないしねえ、電波も何も通じないから、おろおろしちゃったね。ここに家の車見えたから、おれはこっちにいたったから、家の母さん元気で助かったふうだと思って。

ここで亡くなったお婆ちゃんも、その人の息子さんが来てて一所懸命探してっから、おふくろが見えなくなったつうって、一所懸命探したんだけども見付けられなくて。そしたら夕方、「見つかった」って。そうしたら、いっつも歩いてる道路だよ、そこら探してんだけど、ちょこっとした窪みだったんだねえ、全然わかんねんだっければ…。

毎日屯所には詰めて、そっから指示を出して、そうしてそっから動いたけどねえ。

屯所が無事だったから、まず屯所にみんなが集まって、「どうすっか」って相談しながらも、そこで中心になって指揮したっていうことです。そして十六分団の場合は、宿、中の浜、女遊戸、大沢、そして

日出島と松月、6つの海岸があんです。そいで何かあれば、今回の地震のような津波注意報、または大津波警報の時は、まずは屯所に集まって、個々に分かれて行って避難誘導なんです。分団員は31か2ですね。海岸の中に堤防があるのは、大沢と女遊戸の2か所なんだけども。機能別分団員ということで、元分団員（退団した人）の3名が動いて、十六分団の積載車も動かしてもらって、避難誘導もしてもらって、女遊戸は人の被害は無かったんです。

（山崎安人さん談）

避難所が崎山小学校ですから、部落全員が避難した訳ですよ。うちも被災者だから小学校に避難して、屯所もありましたけども、毎日屯所には詰めて、そっから指示を出して、そしてそっから動いたけどね。

おらたちも、啓一さん（分団長）から命令してもらわねばなかったんでねえ。なるたけは啓一さんに負担をかけないようにってことでは、話はしてたんだども。あん時はねえ、5名ぐらいだったと思いますね、その夜に帰って来なかった人が。7人ぐらいが仕事先から来られなかった、夜、避難所、屯所の方へ。「わあー、7人もか」って、悪い方に考えてしまいましたよね、そん時はねえ。

でも、次の日、または2、3日して、釜石だったり遠くの方で、なかなかすぐには帰れなかったっていうこと。電話で連絡もつかなかったから、どうしょうもなかったって言うことで。最終的には、3人が日出島で犠牲になったっていうことが、最終的には「本当か」っていうような、本当に疑うような感じでしたものねえ。信じられなかったですねえ。

当日は大沢に最初に行って、この水樋門を閉鎖、それから、各海岸を回っていくって風な…。ここは啓一さんがいたったので、それじゃあ任せて。うちらはもう1人と乗って、まずは屯所に戻って、それからまた日出島に向かった時に、もう浜が泥だらけになって引いてた時だったんです。波は全然見てないんです。

（山崎安人さん談）

家族亡くしても、部落のことはしねえばなんねえって、頭は第一にありますからね。息子には無線連絡して、「悪かったな」って、言ったけども。息子には「消防、全うしたからいい」って言われたったもの。家族に悪かったなあってそう思う。

思うように捜索できねえんだもの。だから、保安庁から潜りが来て探しに来れるって時に、あと1日探してくれるった時に、うちの娘も流されてんだから、うちの方も見てもらいたいたかったんだけども、日出島部落の人が多いから、そっちの部落の人から聞いて、明日は見てくれてやるから、そっちの方見てもらえますかって。保安庁もおれのことを気の毒がってやったども。そこらは我慢して、日出島優先に見てもらったったけども。

1年過ぎてあきらめはついてんだけど、受け入れてんですけども、もしかして外国に流されて行って、記憶喪失になって連絡も取れなくているのかなあっつう期待もね、無きにしも非ず、どっかで生きていてくれればいいなっつう気持ちはあります。命日は命日でちゃんと供養してますけども。それはまあ、ありえないと思うけども、もしかしてなあっつう気持ちもあります。

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第2章　鍬ヶ崎・築地・愛宕地区

山東正昭

はじめに

今回の調査対象は、宮古漁港を取り巻く地域である。特に、鍬ヶ崎地区を中心とし、隣接する周辺地区にも聴き取り調査に入った。この地域は、漁港でもあり閉伊川河口でもあるため、大津波が直接襲い甚大な被害を被った。その被災概要は、平成27年宮古港開港４００周年記念事業「宮古港歴史展・復興展」には、次のように報告されている。調査対象地区のみを転載する。

「第一部　東日本大震災における宮古港の被災から復興まで
Ⅰ　宮古港における被災状況
3　宮古港の港湾施設及び港湾海岸保全施設の被害概要
○鍬ヶ崎地区
平坦部がほぼ全滅の被害となった。漁港の岸壁沿いにある魚市場や水産加工関連施設を破壊した波と蛸の浜の峠を越えた波が蛸の浜町下でぶつかり、港町のドッグで整備中の浄土ヶ浜遊覧船が港町奥まで流された。
○愛宕・築地・光岸地地区
築地地区、出崎地区では、住家が流出。岩手銀行、ＮＴＴ、東北電力などのビルは残ったもののほぼ1階が浸水した。国道45号線がガレキで不通になり、愛宕地区も国道沿いの住家が全壊し、地区の半分が浸水した。」

その他、同冊子では、「Ⅱ港湾の復旧復興に向けた対応」として、1発生直後の初動応急対応　2港湾機能の一部再開と港湾ネットワークの活用　3港湾施設の復旧状況　の項目を立て、写真や図で説明報告をしている。これら港湾関係の記述内容は、鍬ヶ崎地区の報告の中で引用していく。

また、同冊子では、「Ⅲ今後の課題」として、⑴防災・減災目標の明確化と避難対策の充実の必要性　⑵防波堤による津波からの減災効果の発現　⑶地域経済を支える物流基盤の耐震性・耐津波性確保の必要性　⑷初動から復興に至る時間軸に沿った対応の必要性　⑸災害に強い物流ネットワーク構築の必要性　の５項目を立て、同じように写真や図を活用して説明をしている。

そこで、ここではこれらの資料を引用すると共に、鍬ヶ崎地区及び愛宕・築地地区における私自身の巡見をもとに、聴き取り調査でわかったことなどをまとめた。

1　鍬ヶ崎地区

鍬ヶ崎地区は、港湾としての歴史が古く、宮古の玄関口としての役割を担い、行政との繋がりもあった。その鍬ヶ崎地区のうち、鍬ヶ崎上町・仲町・下町の各高台部分と日影町、熊野町、蛸の浜町、山根町、日立浜町を聴き取り調査の対象とし、それ以外の地域は津波で全壊したため、仮設住宅あるいは別の場所で聴き取りを行った。

鍬ヶ崎地区とはどんな町だったのか、その概要（位置・歴史）を文献・資料等でまとめた。

⑴　ア　鍬ヶ崎地区の概要

位置

宮古市史民俗編《上巻》によると、

「鍬ヶ崎は、旧宮古町の東北に位置する港町である。東側の大部分は宮古湾に面しており、南と西の一部は旧宮古町と、北と西の一部は崎山と接している。山が海岸近くまでせまっているため、町並みは南北に長い。大正5～6年、大正14年～昭和2年、昭和4～12年、と4度にわたる埋め立てや港湾修築で港を広げていったが、これ以上の埋め立ては難しいため、沢に入り山腹を伸びるようにして家が増え、最近では山を切り開いて大規模な団地も作られている。（中略）

鍬ケ崎の最大の特徴は、宮古湾口に位置する港町であることだ。宮古湾は、海は深く、重茂半島で東風が遮られるため波も静かで、三陸海岸でも有数の船の避難場所であった。このため鍬ケ崎は、江戸と北海道を結ぶ海上交通の要衝として、古くから知られていた。江戸時代には、盛岡の外港と位置づけられて、南部藩がここに「十分の一役所」を設け、税の取り立てを行った。（中略）

鍬ヶ崎は、津波による被害もたびたび被っている。慶長16年（1611）の大津波では、蛸の浜の丘を越えて津波が押し寄せ、数十戸の全戸が流出したという（沢内勇三『鍬浦史話』による）。明治29年には277戸を流出している。昭和8年の津波では、港湾整備の影響もあり、人家の被害は出なかった。（後略）」

このように港として栄えた町のため、どうしても津波による被害は度々被った。今回の津波で、三陸沿岸には10・4㍍の防波堤を造る計画があり、すでに工事を始めている個所もある。宮古港沿岸は、平成27年7月21日、工事着工安全祈願祭（主催・岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター河川港湾課）が執り行われ、いよいよ着工である。

イ　鍬ヶ崎地区の歴史

江戸時代の享保21（1736）年、「鍬ヶ崎浦は海辺の要地につき、少々の埋め立ても禁ずる。又海辺の山林は漁業のために必要であり、その心掛け肝要のこと仰せられる」（藩法集）として、鍬ヶ崎浦の環境を守っていた。その鍬ヶ崎地区は、宮古港を中心に昔から漁業の他、遊郭や銭湯・商店などで賑わっていた歴史ある町である。そして、鍬ヶ崎地区に隣接した愛宕・築地地区は、現市役所の他かつては郵便局・警察署・消防署・裁判所などがあった市の中心地であった。つまり、宮古港は、市の中心地に隣接した宮古にとってはなくてはならない重要な漁港であったことになる。

鍬ヶ崎地区については、『月刊みやこわが町』（タウン情報社）2005年3月号「特集鍬ヶ崎大正物語ＶＯＬ3」の「港が生んだ鍬ヶ崎遊郭文化」において、交通事情を踏まえた遊郭文化が形成されるまでの記述がある。

「　江戸から明治初期まで盛岡＝宮古間の閉伊街道は城下へ海産物を運んだ五十集でさえ2泊3日を要する難所続きの陸路だった。明治中期になり街道は少しずつ整備され、乗合馬車による定期交通手段や、大正初期には、先代・菊池長右衛門ら有志によって設立された盛宮自動車が、乗合自動車（小型のバス）による交通機関で盛岡―宮古を1日で結んだが、北上山地を縫うように流れる閉伊川に沿った閉伊街道は自然災害に弱く道幅も狭い危険な道であった。後、昭和9年、山田線が開通し閉伊街道は陸路から鉄路となり、陸路は戦後国道106号線として整備されてゆくことになるが、鉄路が開通する昭和9年まで、宮古に入る交通手段は三陸定期汽船、通称三陸定期船による海路がほとんどを占めた。

（中略）

宮古からは北の田老町、田野畑村、南の山田町へ向かうローカル航路があった。船は経済物流と人、そして文化を運び、多くの旅人や商人が鍬ヶ崎に降り立った。

そうしたなかで江戸末期から発生した鍬ヶ崎の花街も活気づいてくる。古くから上町に軒を並べていた遊郭を中心とした花街では、この頃に目明かしや旧箱番が管理運営する旧体制から、遊郭、料理や、料亭を一括して管理する鍬ヶ崎遊興組合という組織へと変わる。こうして幾人もの遊女を囲った純粋な廓と、芸者を呼んで宴会をする料理屋、置屋などを併設する鍬ヶ崎特有の遊郭文化が形成されてゆく。（後略）」

こうしたことから、鍬ヶ崎地区は、漁港にとってなくてはならない花街として発達した重要な地域だったことがわかる。そして、宮古港は、宮古の玄関口としての航路や漁港の拠点として栄えたので、現代になっても水産関係加工工場やホテル、各種商店、銭湯などが軒を並べていた。この町並みが一瞬にして大津波で壊滅してしまったが、現在、復興工

事に伴う道路・区画整備等の工事が進められている。
　また、宮古港の歴史を振り返ると、鍬ヶ崎浦から現在の宮古港になるまでに何度かの港湾整備のための埋立てが行われた。宮古港開港４００周年記念事業「宮古港歴史展・復興展」『近現代の港湾整備』２０１５年(岩手県宮古市・宮古港開港４００周年記念事業実行委員会)には次のように記されている。

「明治の宮古湾埋立て
　明治維新後も三陸沿岸随一と言われた宮古港は、船舶の大型化や物資の増加に対応するため、閉伊川左岸の埋立てが計画されます。明治13年（１９８０）５月、篠民三ほか地元有志が宮古湾の埋立て工事に着手し、同15年7月に完成し築地地区が誕生しました。工事費５万６千円、１万７千６２０坪の大工事でした。宮古橋下から現在の漁港ビル（当時は宮古測候所）までを埋立て、新川町に運河を通し、築地に船着場を設けるものでした。（後略）

大正時代の鍬ヶ崎埋立て
　明治45年（１９１２）には新川町運河を埋立て市街地化し、大正２年（１９１３）には鍬ヶ崎埋立同盟会が設立されました。２千７百坪の鍬ヶ崎前埋立て工事は、大正６年（１９１７）10月に完成し、現在の鍬ヶ崎市街地が形成されました。

昭和の宮古港修築
　大正10年（１９２１）政府から青森―塩釜間に第二種重要港湾を設ける決定が下ると、宮古港修築運動が展開されました。宮古・鍬ヶ崎の有志による宮古商工会が設立され、大正13年（１９２４）に両町の合併が実現します。昭和２年（１９２７）、宮古港は政府から第二種重要港湾の指定を受け、昭和５年（１９３０）に出崎埠頭の築港工事に着手しました。昭和８年（１９３３）３月３日昭和三陸地震津波により、宮古町（鍬ヶ崎・新川町・藤原）、磯鶏村など海岸一帯が床上浸水し、重茂村・田老村もあわせて死者・行方不明者は１千１２０人余りの甚大な被害でした。埋立工事個所も被害がありましたが、昭和12年（１９３７）５月に完成に至りました。これにより、現在の出崎埠頭に３千ﾄﾝ級の船舶２隻が接岸できる岸壁と竜神港から２５５ﾒｰﾄﾙの防波堤などが建設され、約８万２千平方ﾒｰﾄﾙの埋立地が造成されました。

戦後の宮古港修築
　昭和26年（１９５１）の第２期築港計画以来、出入国港・木材輸出入港・開港場・大豆輸出入港・検疫港に指定されるにつれて、宮古港は国際的にも重要な港に成長しました。昭和39年（１９６４）には魚市場に面して１万ﾄﾝ級の船舶が接岸可能となり、昭和44年（１９６９）には藤原埠頭には４万ﾄﾝ級岸壁が完成し、北東北でも有数の物流拠点となっています。
　漁港としても宮古は、サンマ棒受網と北洋鮭・マス漁業の根拠地として全国的に知られるようになりました。昭和30年ごろのサンマの出漁解禁には、３００隻以上のサンマ船が宮古港に集結する盛況ぶりでした。（後略）」

　このようにして、現在の閉伊川河口にある工場群や出崎埠頭（現魚市場・シートピアなあどがある埠頭）ができ漁港として栄えているが、何度も埋立てを繰り返しながら、国内はもとより海外にも認められる港湾整備が行われてきた。しかし、鍬ヶ崎地区の住民たちは、明治津波・昭和津波・チリ地震津波、そして、今回の東日本大震災を体験してきたが、これほどの甚大な被害は初めてである。

(2) 鍬ヶ崎地区の被災状況と津波浸水域

　宮古港に面した鍬ヶ崎地区のうち、日影町の他、鍬ヶ崎上町・仲町・下町のうち測候所がある山側の高い所の住居は難を逃れたが、これら３町の平地部分の他、蛸の浜町や熊野町の平地部分、臨港通り、港町、日立浜町、山根町などは壊滅的な被災を余儀なくされた。（図1津波浸水域）
　では、どの位の被災だったのか。宮古市災害対策本部は、「避難所への情報提供」として3月18日（金）12時00分現在の被災状況を次のよ

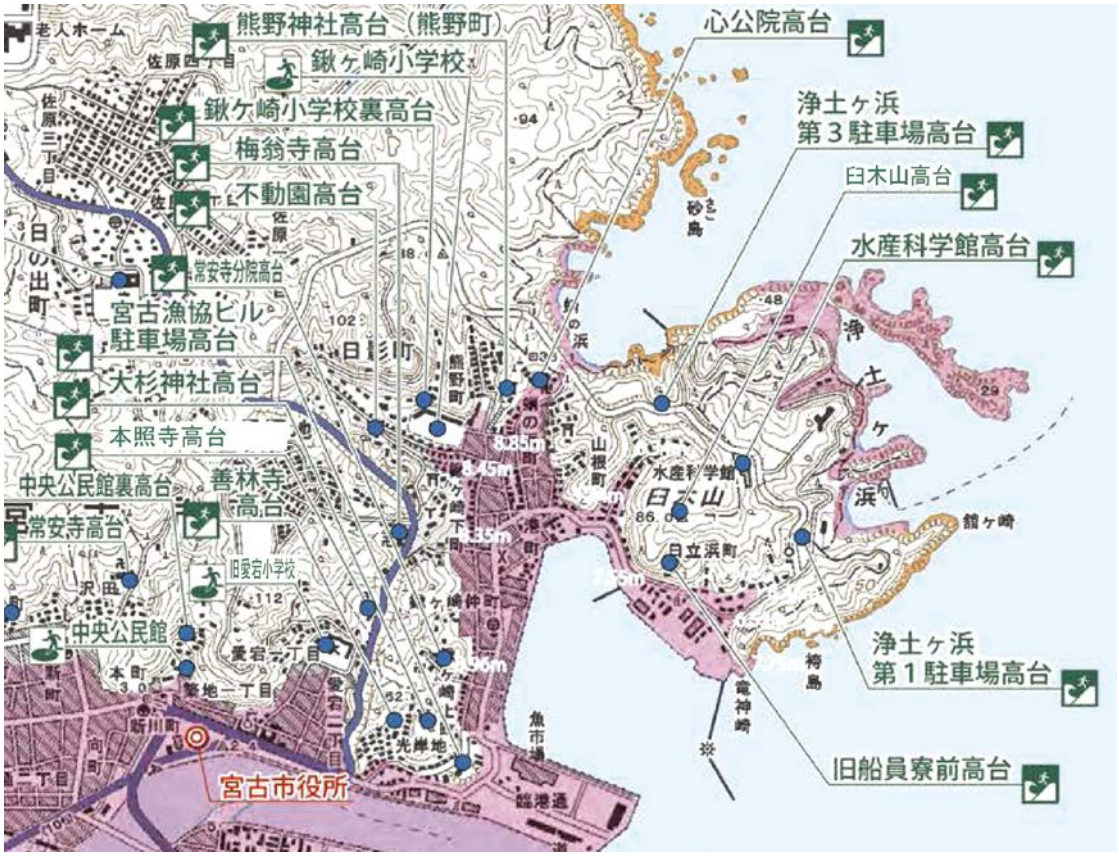


図１　津波浸水域（赤色部分）

うに発表している。

「鍬ヶ崎地区　全壊６４６戸、半壊１３６戸、床上浸水33戸、計８１５戸」

また、同本部は、避難所数・避難者数については次のように発表している。

「３月14日（月）８時30分現在　避難所数６か所、避難者数９７０名
３月15日（火）16時00分現在　同　６か所、同　５６９名
同日　避難所別避難者数　パークホテル　１５２名
宮古第二中学校　２４６名
鍬ヶ崎小学校　１２５名
中里団地　７名
中里団地集会所　８名
熊野神社　31名」

この時点での死者、負傷者、行方不明者等の数値は宮古市全体としているため、鍬ヶ崎地区の詳細は不明であるが、宮古市総合窓口課作成による東日本大震災被災前後の鍬ヶ崎地区における行政区別世帯数・人口の変化を次に記しておく。

「震災前（平成23年３月１日現在）

	世帯数	男	女	計
鍬ヶ崎上町	１３１世帯	１３５名	１６４名	２９９名
鍬ヶ崎仲町	54世帯	55名	64名	１１９名
鍬ヶ崎下町	１６０世帯	１６８名	１８７名	３５５名
日影町	１２４世帯	１４９名	１５７名	３０６名
熊野町	１３７世帯	１７０名	１７６名	３４６名
蛸の浜町	１４２世帯	１５７名	１８４名	３４１名
山根町	79世帯	１００名	１００名	２００名
港町	66世帯	78名	88名	１６６名
日立浜町	１３４世帯	１４２名	１７８名	３２０名

震災後（平成24年3月1日現在）

	世帯数	男	女	計
鍬ヶ崎上町	95世帯	83名	110名	193名
鍬ヶ崎仲町	42世帯	41名	48名	89名
鍬ヶ崎下町	83世帯	86名	96名	182名
日影町	121世帯	147名	154名	301名
熊野町	134世帯	165名	174名	339名
蛸の浜町	90世帯	104名	115名	219名
山根町	59世帯	81名	76名	157名
港町	35世帯	40名	44名	84名
日立浜町	108世帯	117名	133名	250名 」

右の表から、東日本大震災の前後を比べると明らかに人口減であり、かなり被災していることが分かる。これは、津波浸水域（図1）の地図と重ね合わせれば明確である。平成25年以降も微減している。

直近の平成27年3月1日現在は、次の通りである。

「

	世帯数	男	女	計
鍬ヶ崎上町	81世帯	69名	81名	150名
鍬ヶ崎仲町	34世帯	30名	36名	66名
鍬ヶ崎下町	66世帯	61名	77名	138名
日影町	124世帯	142名	147名	289名
熊野町	121世帯	135名	156名	291名
蛸の浜町	62世帯	67名	74名	141名
山根町	51世帯	67名	62名	129名
港町	23世帯	22名	29名	51名
日立浜町	100世帯	100名	116名	216名 」

また、鍬ヶ崎小学校避難所では、避難所における作業スケジュール110528（日付）として「鍬ヶ崎小学校避難所主な業務日程」を作成している。ここでは、時間と業務内容のみとし、勤務者名（ボランティアを含む）や管理内容については割愛する。

「6時00分　必要に応じて仮設風呂浴槽清掃
7時00分　朝食受け取り
8時00分　避難所内清掃（玄関、通路、トイレ、更衣室）、朝食、避難所以外の被災者への朝食対応
8時30分　引き継ぎ（夜勤者と昼勤者）、仮設風呂点火
9時00分　仮設風呂清掃
9時30分　仮設トイレ・渡り廊下・流し台清掃、体育館周辺環境整備、
11時30分　昼食弁当受けとり、仮設風呂清掃
12時00分　昼食、避難所以外の被災者への昼食対応
14時00分　仮設トイレ清掃
14時30分　仮設風呂清掃
15時00分　ラジオ体操
15時30分　仮設風呂清掃
16時30分　夕食弁当受けとり
18時00分　夕食、避難所以外の被災者への夕食対応
20時45分　仮設風呂終了、ボイラー消火、風呂内電灯消灯
21時00分　避難所内消灯
22時00分　避難所入口施錠、夜勤者仮眠

※留意事項
・館内清掃について、職員が対応する場所は、受付スペース、学習スペース、職員仮眠スペース、ギャラリー、台拭きタオルの洗濯。
・仮設風呂について、毎週水曜日はタイルをはがしての一斉清掃。
・避難所内ドアノブ等の消毒（ノロウィルス等殺菌対応）
・横須賀市保健部が定期的に来所、入所者の健康管理をしている。
・済生会熊本医療チームが3日に1回来所、5月で終了予定。」

以上の通り、鍬ヶ崎小学校避難所における、校舎教室利用についての細かな業務を時系列で示した。市の職員の他、ボランティアや体育

館避難者も業務の仕事を担っている。

なお、震災直後の3～4月の頃は、学校に設置した避難所対応が確立されておらず、市教育委員会と学校職員が応急の対応をしていたので、前記「時系列の避難所業務日程」は作成されていない。ただし、当時の対応については、聴き取り調査に応じた学校職員の証言（161頁）を関連内容として記載したので、参照していただきたい。

また、大きな余震に備え、市災害対策本部は、110604（日付）、鍬ヶ崎小学校避難所避難経路を策定し、次のように記している。

「【避難経路】

正門を抜け、日影坂を登り第二中学校まで、または、大沢商店から測候所方面に上がり第二中学校へ。（避難状況に応じてどちらの経路になるか決めます。）」

これらの業務内容から、如何に避難者の健康や余震に備えた配慮をしているかがよくわかる。

次に、ライフラインである電力、上下水道、通信の他、道路状況、防災無線、炊き出し、ごみ、消毒作業、病院医療等の情報は、被災直後から市災害対策本部が「避難所への情報提供」として防災無線等で発している。鍬ヶ崎地区への情報提供は、次の通りである。

「・電力　3月16日（水）の時点で未復旧
・上水道　3月15日（火）の時点で未復旧
　同　給水車稼働（第二中学校）
　3月16日（水）自衛隊23トン給水車着予定
・通信　3月16日（水）固定電話不通、携帯au可
・道路状況　3月14日（月）国道45号線は通行可
　3月15日（火）光岸地～なあど間開通
　3月16日（水）漁港岸壁～鍬ヶ崎小学校間開通
・防災無線　3月14日（月）運用中
・炊き出し　3月14日（月）複数の地区ボランティア実施中
・ごみ　3月16日（水）当分の間、収集なし
・消毒作業　3月15日（火）実施、今後自衛隊と連携
・病院医療　3月15日（火）市内3病院、各科18医院紹介」

(3) 震災後の鍬ヶ崎地区

平成25（2013）年2月17日に初めて鍬ヶ崎地区を訪れた。

まず、光岸地地区の高台にある宮古漁協ビル前の駐車場に行き、漁港を見渡した（写真1）。ホテルや工場などのビルは外形をとどめていたが、その他の民家や商店などの家屋の姿はなく、建物の基礎土台だけが野草に隠れるように残っていた。大津波の恐ろしさを目の当たりにした。

次に、上町・仲町・下町の順にバス通りを歩いた。測候所や中里団地に上がる坂道に建ち並ぶ家屋は津波の難を逃れ、人が住んでいた。さらに進むと、菱屋酒造があった。斉藤鉄郎専務の話によると、「酒造所1階のタンクが流されたが、従業員全員で復旧に取り組み平成23年10月に仕込みを開始し、翌年1月に酒造を再開した。裏山の金勢社の上にある私有の稲荷様に湧水があるので、震災直後は家屋が無事

写真1　漁協ビルより漁港を望む

写真2　熊野神社より漁港を望む

だった人にも水を分けた」とのことである。この辺りは、いたる所に湧水がある。

その後、鍬ヶ崎小学校や熊野神社を廻った。熊野神社の階段上から漁港を見ると（写真2）、漁協ビル前から見た光景とは違う廃墟が目に飛び込んできた。復興どころか復旧にも相当の時間がかかると実感した。この熊野神社には、周辺住民や鍬ヶ崎小学校の児童・職員が避難してきたという。また、鍬ヶ崎小学校が地域の避難場所に指定されていたため、多くの住民が津波到達前に体育館や校舎に避難してきたが、体育館の床まで浸水したため、熊野神社や校舎に再避難をしたという。

最後に訪れたのが蛸の浜である。地元で峠と呼んでいる高い所に立つと、入江になった透き通ったきれいな海と白い砂浜が見えてきた。しかし、脇の方に目をやると、浄土ヶ浜につながる道が無残な姿になっていた。周りの崖の木々も津波でえぐられたような跡が生々しく残っていた。そして、何よりも津波が峠を越えて坂道を下り蛸の浜町や港町の方へ流れ込んでいったことだ。この峠を越えたのは、明治29年の大津波以来で、その時も鍬ヶ崎地区は甚大な被害を受けたという。

平成25（2013）年3月11日

鍬ヶ崎地区唯一の鍬ヶ崎小学校は、震災2年目のこの日をどのように迎えたかを訪ねてみた。古玉忠昭校長からは、「子どもたちの心のケアを考慮し、質問や顔の撮影等はしないでほしい」とのことだった。その理解に立って、9時30分、体育館での全校集会「6年生による五つの提言」の発表（写真3）を見学した。これは、兵庫県震災記念21世紀研究機構主催の1・17防災未来賞「ぼうさい甲子園」で防災教育に取り組む子どもたちや学校が参加するものであり、見事にグランプリを受賞した。この「五つの提言」とは、住民への聴き取り調査の結果を、

「提言1「地震が来たら迷わず高台へ逃げるべし」
提言2「命を優先し何があってももどらぬべし」
提言3「助け合い人とのつながりを大切にするべし」
提言4「万一に備え防災グッズを準備しておくべし」
提言5「未来に向けて一歩一歩進むべし」」

の5つに整理し、この「五つの提言」を6年生が発表すると、一つずつ全校児童が声をそろえて大きな声ではっきりと反復していた。「五つの提言」は、平成23年度第5学年の児童が、『歩みだそう未来への一歩～命を守った知恵をもとに～』（平成24年3月発行）の冊子にまとめ発表したものである。内容は、

「第一部　津波体験者に学ぶ「命を守った知恵」、第二部　子どもたちの五つの提言、第三部　歩みだそう未来への一歩「夢・希望」、第四部　資料」

の四部構成である。第一部は、実際に津波被災の体験をした地域の方々23名に、「命を守った知恵」とは何かの聴き取りをまとめたものである。例として、「人よりも自分が逃げる」「すぐに高台に逃げる」「家に戻らない」「歩いて逃げる」などが挙げられている。第二部の五つの提言では、その提言に至った聴き取りから学んだことを述べ、第三部では、児童一人一人が聴き取りを通して学んだことや考えたことなどを綴っている。そして、第四部の資料には、鍬ヶ崎地区内を8地域に分け、各地域の住民に聴きながら一緒に歩いて調べた「津波防災避難マップ」（平成22年度卒業生作成）や、震災によって何もなくなった鍬ヶ崎地区で、たくましく立ち上がろうとする人々から、地域を愛する強い思いを感じたことを、群読劇の台本『輝こう鍬ヶ崎』（平成23年度第6学年）にまとめた。台本に込められている言葉や表現は、まさに生き抜いていこうとする人間の強さが表れている。

写真3　全校集会「五つの提言」の発表

このことは、受賞校掲載新聞記事（平成25年1月29日、毎日新聞朝刊）

にも次のように掲載されている。

「グランプリに輝いた岩手県宮古市立鍬ヶ崎小は、6年生の岩田佳樹君（12）と吉田陽貴君（11）が「歩みだそう未来への一歩」と題して発表した。東日本大震災では校庭まで津波が押し寄せたが、全児童が高台の神社に避難して無事だった。発表では、この時の体験を映像を交えて紹介。（中略）さらに、復興に向けて歩み出した魚市場やすし店など地元の人々、震災前の美しさを取り戻した「浄土ヶ浜」「青の洞窟」といった観光名所も紹介した。

最後に、2人は「復興まで何年かかるかわからないが、希望を持つことや、向き合う勇気は強くなっている」と話し、「地域の人々と支え合い、活気のある生活が送れるよう頑張る」と結んだ。」

また、発表者の話を次のように紹介している。

「地域の人たちへの取材で知らなかった津波の様子が更にわかり、地震の時、命を守るために何をするべきか心に刻んだ。将来は、救急救命士になって、多くの人の命を救いたい。」

このように言葉が児童自身のものとなり、児童の行動力に結びつくものと私は確信した。

全校集会終了後は避難訓練。各教室で待機、校内放送の合図で机の下にもぐり、そのあと校庭に集合し人数確認後、避難経路を歩く。震災当時は熊野神社に避難したが、震災後は避難先を第二中学校に変更した。これは、海が見えない学校の裏道を通り、山道（写真4）を登って高台に出る経路で、第二中学校を第二次避難場所としている。

今回は、第二中学校に行かず旧道を通って学校へ戻った。途中、地域の人のための避難近道の造成現場を確認していたが、杭で階段を造ったもので、かなり急勾配のように見えた。高齢者は大丈夫だろうか。実際の避難経路を歩く実体験は、児童たちに実感として理解できたようだ。

写真4　山道を通る避難路

平成25（2013）年3月12日

鍬ヶ崎地区は、前回の巡見での菱屋酒造の湧水でわかったように、高台にある中里団地や測候所の崖下を囲むように湧水が豊富にある。そこで、蛸の浜町の松田勝己さん（町内会長、自主防災会長）の案内で、この地区の水系を調査した。

まず、金勢社のすぐ上にある湧水（写真5）は、重い鉄板を開けると下の方に音を立てて流れているのがわかる。この先すぐ上に菱屋酒造のお稲荷様の湧水がある。

次に、鍬ヶ崎小学校の正門前を流れ、宮古港に流れ込んでいる清水川に沿って、小学校前の緩やかな坂をしばらく上っていくと、左側に震災直前に営業をやめた銭湯の不動園がある。ここは、旧測候所がある高台の崖の下にあり、湧水が豊富である。震災時には、自衛隊が不動園前に仮設風呂を設営したという。

更に、中学校の方へ上がっていくと、畑の前に箱のような所から湧水が勢いよく流れ出しており（写真6）、水はそのまま川へ流れ込んでいるが、この水は、今でも活用しているという。ここより国道45号線を横断して、第二中学校方面に行った斜面の所に清水川の源流がある。

このように、いたるところに湧水があるので、今回の震災でも水には困らなかったという。

写真5　稲荷様の湧水

写真６　畑の前の湧水

平成25（２０１３）年６月８日

流失した鍬ヶ崎地区一帯の宅地跡は、一面草が生えていた。その中で、鍬ヶ崎下町や蛸の浜町を歩いていると、女子学生たちが宅地の跡地に花の苗を植えていた。男性の指導者の話によると、

「活動の主体はＹＭＣＡであり、岩手県や東京都の学生ボランティアが土曜日に活動している。植える場所は地主の了解を取り、ヒマワリを植えている」

とのこと。学生に聴いてみると、

「廃墟になったので、町を通る人たちの心が少しでも和らぎ、癒しとなり明るくなりますように、ヒマワリを植えています」

という。ボランティアの気持ちはわかるが、後の管理はどうなるか。また、復興のための区画整理や土地造成が行われれば、このような活動は一時的なものとなるが、学生が言う被災者や通行人の癒しになればボランティア活動も報われるだろう。

平成26（２０１４）年７月16日

震災後３年が経つが、６月から８月はウニの最盛期というので、朝５時、鍬ヶ崎下町から蛸の浜町を通り、浄土ヶ浜大橋の下の峠を越え蛸の浜の浜辺に下りて個人漁師の漁を見て回った。漁師３人が籠いっぱいに入っているウニをその場で捌いていた。話を聴いてみると、

「浜から40～50メートルの辺りの水深５～６メートルでウニ漁をしているが、震災後、身が小さくなった」

と言う。帰り道の蛸の浜町や日影町辺りを通ると、所々の家の庭先や小屋の中でウニを捌いている光景を見かけた。

平成26（２０１４）年７月19日・20日

熊野神社は、地域住民の心の拠り所である。震災前は境内にも露店が立ち並び、鍬ヶ崎上町・仲町・下町の商店街はお祭りに参加し賑やかだったという。そして、震災後も宵宮や例大祭は行われているが、廃墟となった今は、鳥居の階段下一角に所狭しと10軒ほどの露店が２列に並んでおり子どもたちが多かった。第１日目、夕刻５時ごろ、熊野神社本殿での太鼓の合図で宵宮祭が始まった。宵宮祭は、奉納、唄、舞、唄と続き、御神酒を供え、本殿と神殿の間に祝い幕が設置され、神殿が外から見えなくなり、６時に終了した。

第２日目、例大祭９時開始前にシマザキ電気に挨拶に行ったが、神輿休憩所の準備で多忙であった。当日の時程（熊野神社作成書）は次の通りである。

「９時00分　例大祭式
９時30分　神輿納庫より出て本殿で祈祷
10時00分　神社出発（御下がり）、鳥居前石段で宮司挨拶、餅まき、神輿出発、蛸の浜町～日立浜町～角力浜（番屋）～港町～臨港通り～市場
12時20分　海上渡御、先船（太鼓所役（ママ））、神楽船（写真７）（神楽・総代）、御召船（神職・杜人（ママ））
13時10分　帰船、市場～鍬ヶ崎上町～仲町～下町～鍬ヶ崎小学校（神楽は雨天のため中止）～熊野神社着、山根宮司挨拶、餅まき
14時10分　御登り、神輿は神殿に戻り装飾品を外し納庫に格納
14時30分　還幸祭
14時50分　直会、全日程終了」

写真７　宮古港の渡御船出

平成27（2015）年3月11日

平成26年度の津波避難訓練における鍬ヶ崎地区第六分団の活動が、午前6時より行われた。私は、昨年も第六分団の消防活動を取材したので、合わせて分団の一連の活動を報告する。

主だった分団員は、5時には屯所に来て準備をし、5時50分、団長の訓示・指示。6時、市の大津波警報のサイレンと防災無線の大津波警報と共に、分団員は2班に分かれた。一つは、消防車が閉伊川の水門閉めと漁港から国道45号線への光岸地地区道路の水門を閉めに出動。訓練通り水門閉鎖活動は5分という素早い行動だった。もう一つは、担当地域における津波避難誘導の広報活動として地区内を巡回する。昨年と今年の鍬ヶ崎地区の自主防災高台避難訓練は、主に蛸の浜町・日影町・熊野町の住民が、熊野神社と鍬ヶ崎小学校体育館に避難した。前者は32名の参加者がいたが、後者は数人だった。初めに町会ごとに名簿で点呼確認し、大津波警報が解除される防災無線の放送があるまで高台避難を続けた。蛸の浜町自主防災会長の松田勝己さんによると、「昨年の反省で、自町会員が一目でわかるように赤色のジャケット（背中に町会名表示）を作製し、全世帯に配布し今回着用した」（写真8）とのこと。訓練に参加した10名位は、蛸の浜町からの上り坂（避難路）の手すりから宮古港の方をじっと見つめていた。うち1名は、「実際に備えて通帳等貴重品をリュックに入れて参加した」と言う。

写真8　お揃いの赤ジャケット

宮古市では、東日本大震災以降、3月11日を総合防災訓練・津波避難訓練の日としているが、4年前の震災時は、それまでの昭和8年に津波があった3月3日を避難訓練日としていた。そのため三陸沿岸地域の多くの犠牲者は、それまでの必ずしも高台でない指定避難場所に避難したことが、他地域でも明らかである。私が調査に入ってから、市の総合防災避難訓練主会場は、24年度旧愛宕小学校体育館、25年度山口小学校体育館、26年度河南中学校体育館と続いた。今回の大津波は、旧愛宕小学校の場合、校庭は一段高くなっているが校庭の10㍍手前まで津波襲来。山口小学校は、山口川が氾濫したすぐ脇にある。鍬ヶ崎小学校では、体育館は床上浸水をしたために、避難者は校舎への避難を余儀なくされた。また、日立浜町、山根町辺りも避難所は鍬ヶ崎小学校になっているが、津波襲来のため歩いて行けず、裏山のパークホテルに避難した。こうしたことからも、学校の体育館が避難所として確実に安全とは言い難い。市の津波避難訓練の呼びかけ文「地震・津波発生時には高台へ避難しましょう！」を徹底する必要があると考える。

(4)　鍬ヶ崎地区の復興工事進捗状況

ア　鍬ヶ崎・光岸地地区「土地区画整理事業等に関する説明会」（平成27年5月20日（水）午後6時30分～　宮古市役所6階大ホール、宮古市都市計画課資料）において、次の通り大きく2つの内容が説明提示された。

「○土地区画整理事業の進捗状況と今後の予定について

【土地区画整理事業の流れ】

・第1段階　まちづくり案検討（終了）
・第2段階　都市計画決定（終了）
・第3段階　施工規程・事業計画の認可（終了）
・第4段階　区画整理審議会の設置（終了）
・第5段階　換地設計案の作成（終了）
・第6段階　仮換地指定（現在進行中）

換地される土地の位置、範囲を指定
↓換地については、9割を超える同意を得た。
↓仮換地については、5割を超える指定を実施した。

図２　鍬ヶ崎・光岸地地区公共施設周辺鳥瞰イメージ図

・第７段階　建物移転補償・工事（現在進行中）
仮換地指定を受け建物移転を実施し、道路や宅地の工事を行っている。
・第８段階　換地処分（今後の予定）
・第９段階　土地・建物の登記（今後の予定）
・第10段階　清算金の徴収・交付（今後の予定）

【宅地が整備されるまでの流れ】
・仮換地案の了解→・倉庫や建物の移転→・上下水道等の切り替え工事→・道路、宅地の造成工事→・宅地の使用開始

【スケジュール変更への対応】
・暫定誠意による早期建築着手の実施
→可能な範囲で宅地完成前であっても建築物の工事着手が可能となるよう出来る限り配慮する。

・個別説明会の開催
→宅地の使用に関する個別説明会を開催する。
会場　宮古市役所都市計画課
日時　平成27年5月21日（木）～5月31日（日）
平日　9時00分～12時00分
13時00分～19時00分
土日　9時00分～12時00分
13時00分～17時00分
※待ち時間を少なくするため、事前に日時を登録する。」

○公共公益施設等の整備状況
『鍬ヶ崎・光岸地地区公共施設周辺鳥瞰イメージ図』（図２）を参照してほしい。
これら公共公益施設等の完成予定・進捗状況は、
・港町災害公営住宅（平成27年12月完成）」（写真９）
この港町災害公営住宅については平成28年３月10日に訪れ

確認した。平成28年1月以降に入居が始まり、全世帯の入居が確定している。鍬ヶ崎小学校仮設住宅や、愛宕公園仮設住宅など、仮設住宅からの入居者が多くを占めている。

しかし、今回は入居者の都合もあり、聴き取りができなかった。住宅については左記の通りである。

（宮古市都市整備部建築住宅課・ホームページ更新日2016年1月22日）

「

（位置）宮古市港町3番10

（構造）鉄筋コンクリート造り5階建て

（部屋のタイプ及び戸数・面積・人数）

タイプ	戸数	面積	人数
2K	10戸	49・33平方メートル	1～2人
2DK	20戸	54・53平方メートル	1～3人
3DK	10戸	64・03平方メートル	2人以上

（主な住居設備）エレベーター付き、3点給湯（風呂・洗面・台所）、お風呂追い炊機能付き、水洗洋式トイレ（暖房便座付き）、室内洗濯機置き場、外部専用物置、外部駐輪場

（入居者が用意するもの）ガステーブル、居室の照明器具、冷暖房器具、カーテンほか

」

・消防屯所（平成28年3月完成予定、3月10日現在建物無）

・公民館（平成28年3月、建物完成、4月運営開始）

※完成時期は現時点での予定であり、変更となる場合がある。

※場所は、港町と蛸の浜町辺りにあるロータリー近くである。

写真9　港町災害公営住宅

「

イ　鍬ヶ崎・光岸地地区工事請負業者発行広報紙『工事かわらばん』（創刊号～第15号　三井住友建設・本間組建設工事共同企業体　宮古復興工事事務所）より

平成25年10月の創刊号から平成27年5月号の第15号まで、ほぼ毎月のように地区住民に向けて発信してきた。その工事進捗状況及び今後の工事予定を写真・図・地図を交えて具体的に解り易く報告している。なお、工事事務所は、平成25年10月から12月は鍬ヶ崎仲町にあったが、平成26年1月より現在の日立浜町に移設した。以下、記事を引用して工事請負業者の取り組みを紹介する。

○創刊号（平成25年10月号）

・宮古復興工事事務所津田賢二所長の挨拶

はじめまして、宮古復興工事事務所の所長を務めます津田賢二です。宮古市鍬ヶ崎・光岸地地区の復興に携わるにあたり、皆様が一日でも早く安心して生活ができるように、早期完成と安全第一をもっとうに工事に取り組んでまいる所存です。

・安全祈願祭が執り行われました。

9月4日に鍬ヶ崎地内において山本正徳市長他関係者の参列のもとで、工事の安全と無事を祈る安全祈願祭が行われ、鍬ヶ崎・光岸地地区の土地区画整備事業が始まりました。（後略）

・10月中旬から工事に着手します。

10月中旬から工事対象区域内の工事看板の設置や草刈を行い、引き続き住宅基礎の撤去や宅地内の古い下水管等を撤去します。

○第5号（平成26年2月号）

・現在の進捗状況と今後の予定

現在工事の方は順調に進んでおります。現段階で取り掛かる住宅基礎取壊工はほぼ終了し、2月下旬より清水川・梅翁寺川の河川改修工事を始めます。（後略）

○第8号（平成26年6月号）

・ボックスカルバート工事
（写真10）
幅　4メートル
高さ　2・1メートル

清水川の改修工事はいよいよボックスカルバート工に取り掛かりました。これまで鋼矢板圧入工と地盤改良工によって強化した地盤にボックスカルバート（コンクリート製の箱状工作物）を設置していきます。ボックスカルバートを埋めることで地中部に水路を作り新清水川の水を流します。

写真10　ボックスカルバート工事
（提供：宮古復興工事事務所『工事かわらばん』）

○第12号（平成26年12月号）
・宅地の整備工事について

現在、宅地の整備工事を進めており、２０１５年は順次その範囲を広げていく予定です。

○第15号（平成27年５月号）
・道路切替えについてのお知らせ

今後も清水川・梅翁寺川の河川工事、下水道工事、道路工事、宅盤整備工事がより本格化するため、工事車両の増、道路切替えや片側交互通行によりご不便をおかけするかと思いますが、何卒ご理解ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。地域の皆様には事前に工事看板等でご案内いたします。

1．県道での上下水道および道路工事のため、通行止めを行います。（6月上旬を予定）通行止めに伴い、迂回路を設けますので迂回路の通行をお願いします。なお通行止めに併せてバス停の移動も行います。

2．臨港通りの新設道路完成に伴い、仮設道路を廃止します。（6月上旬を予定）

・宅地の完成・引き渡しについて

３月25日に鍬ヶ崎３丁目付近（２回目）、26日に臨港通り４丁目付近、４月23日に前須賀バス停南側（２回目）の宅地完成に伴い、権利者様への宅地引き渡しが行われました。今後も順次宅地完成～引き渡しに向け工事に取り組んで参ります。」

※第16号以降は、調査終了のため掲載なし。

ウ　宮古港防潮堤建設の進捗状況

平成27年（２０１５）７月から防潮堤建設のための支柱となる鉄管の杭打ちを始めた。平成28年３月10日に巡見すると、（写真11）のように部分的にできた姿（右側が海）があった。あの支柱となる鉄管にコンクリートブロックをはめ込んで積み重ねた構造となっていた。駐車している車と比べると高さ10・14メートルの防潮堤の高さに圧倒される人がいるかもしれない。しかし、身の安全や家屋等資産を防ぐことも課題となる。

写真11　宮古港防潮堤工事

(5) **宮古市歴史・文化シンポジウム**（平成27年３月８日、会場・シートピアなあど）

主催　宮古市・地域の文化遺産を活用した復興まちづくり検討委員会　共催　宮古市

『宮古の歴史と文化を活かした復興まちづくりへの提案―鍬ヶ崎・津軽石・中心市街地を中心に―』より

「検討委員会メンバーリスト（２０１３年）

委員長　倉原宗孝（岩手県立大学総合政策部教授
委員　三宅　諭（岩手大学農学部准教授）
委員　姥浦道生（東北大学大学院工学研究科准教授）
委員　渡辺敏男（㈲〈盛岡〉設計同人所長）
委員　小出和郎（㈱都市環境研究所代表取締役）」

この委員会は、次の目的で発足し、メッセージを発している。

「私たちは、２０１１年の震災発生後、大きな被害を受けた沿岸部の生活再建にあたり、歴史文化資源を生かした取り組みが進められないか、という文化庁の提案に賛同した東北３県、７団体の取り組みとしてスタートしたものです。委員会の提案は、宮古市にも伝え、すでに復興計画の一部に反映されているものもあります。

【宮古の復興まちづくりへのメッセージ】

●宮古湾沿岸には地域固有の歴史・文化遺産があります。これらの中には、津波により消失してしまったものもありますが、記録に残っているものもありました。これらを守り、受け継ぎ、活用したまちづくりを進めていくことは、地域の歴史・文化を次の時代へとつなげていくことにもなります。

●海の恵みとともに栄えた宮古湾沿岸の復興まちづくりにおいて、地域の歴史・文化を生かしていくことは、ふるさとの再生でもあり、復興の担い手となる地域の人々の喪失感を和らげ、活力を生み出すことになると考えられます。

●３地区の事例を参考に沿岸全域で歴史・文化遺産を活用した復興まちづくりが推進されることに期待します。」

そこで、同委員会は、平成27年（２０１５）３月８日（日）13時00分～16時00分、宮古・シートピアなあど2階体験学習室で、シンポジューム「歴史・文化を継承する復興まちづくり」を開催した。今回、委員会の発表だけでなく、地元被災者で私が聴き取りをしている古館昌三氏と袰岩政子氏が地域住民としてパネルディスカッションで発言をするというので参加した。

ここでは、委員の報告や講演はテーマのみを紹介し、パネルディスカッションでの古館昌三氏と袰岩政子氏の発言を取り上げたい。

１委員会報告（渡辺敏男氏・有限会社〈盛岡〉設計同人所長）

委員会の経過説明及び『公共施設整備から「民」による復興まちづくり』と題して、鍬ヶ崎について説明し課題を提示した。

２基調講演（市古太郎氏・首都大学東京都市環境科学研究科准教授）

『歴史的な防災文化を継承する復興まちづくり』と題して、集落の空間や多重防災、集落で共有できる目に見えるものについて他市町村の事例で説明した。

３パネルディスカッション

『歴史・文化を継承する復興まちづくりを考える』と題して、コーディネーター、コメンテーターとパネリストで進めた。パネリストの古館昌三氏と袰岩政子氏の発言は次の通りである。

○古館昌三氏（鍬ヶ崎下町、鯛屋経営、鍬ヶ崎地区復興会議議長）

自宅は津波で流され全壊。３か月間店員の家に世話になり、その後は仮設住宅住まい。震災の年６月に鍬ヶ崎地区各町会長に集まってもらい、「鍬ヶ崎復興会議」を設立し会長になった。この会議は、新しい街づくりを目指して、区画整理における自分の土地についての意見交換をした。いま大きな工事は、清水川の暗渠からオープン化であり、道路整備と区画整備である。

今後の課題として、(ア）公民館の間取りや外観をどうするか。（イ）消防第六分団屯所は公民館の隣りにする。（ウ）交番は日出町に移転する、などを検討していく。

○袰岩政子氏（鍬ヶ崎仲町、震災前七滝湯経営）

銭湯を待っている地元の人や船員は早く再開してほしいと願っている。銭湯は、地区センターとは異なる良さがあり、談笑が絶えない。そして、仲間ができる場である。

古館昌三氏は、鍬ヶ崎地区復興会議議長として各町会の声をまとめている。また、袰岩政子氏は、七滝湯の銭湯再建に向けて関係者

に働きかけている。

(6) 鍬ヶ崎地区での聞き取り（震災当時とその後）

○金子誠二さん、昭和12年生、日影町　漁師

現在、無事だった自宅に在住。

【平成25（２０１３）年2月18日、鍬ヶ崎集会所にて1回目】

大地震当時は、妻と自宅にいた。部屋のものは落ちなかったが、すごい揺れだった。蛸の浜に置いてあったサッパ船が心配になり、妻を家に残して心公院脇の峠を越えて急いで浜に行った。浜に下りて仲間3人とサッパ船を置き場に引き上げようとしたが、家を出てから30分位経った頃、１００㍍以上先にある島の高さまで津波が来ていた。急いで仲間と峠まで戻ろうとしたが、すぐ下にある小屋がバリバリと音がした後、津波がオートバイや軽トラ・船などを峠にある心公院脇の墓石まで押し上げてきた。仲間の1人はそこで倒れた。すぐに浄土ヶ浜大橋で見ていた人が降りてきて、その人が助けて車で病院に連れて行った。もう1人は行方不明。

私は、峠の所まで来た津波に呑み込まれ、体が上になり下になり、坂道を下の蛸の浜町の平な所まで流されてようやく止まった。私を流してきた水はきれいだったが、漁港の方から先に来ていた津波がごみを押し流してきていて汚れた水だった。急いで、足を引きずりながらも脇の道から熊野神社に上り境内を通ったが、そこには一般住民や鍬ヶ崎小学校の子どもたちなど避難者がだいぶいた。そして、津波で冠水していた鍬ヶ崎小学校の校庭を横切って、日影町の自宅まで戻った。幸いにも家までは津波が来なかったが、峠の坂を流されたためか、足腰が立たず自宅裏口の階段で倒れてしまった。ちょうど妻が高台避難から帰ってきたので、部屋まで上げてもらった。早速着替えようとしたが、びしょ濡れなので鋏で切り裂いて脱いでみたら胸や足腰などが真っ黒だった。これは擦傷の出血が凝血したものだった。家に着いた安堵からしばらく横になった。近所の人が心配して家に来てくれた。夜になって甥姪が車で来てくれたので、病院に行くことにした。病院に着くと被災者が溢れ、診察の順番待ちで一夜を過ごした。診察の時、医者から、「家がだいじょうぶなら薬をやるから家で塗ってくれ」と言われ、湿布薬を貰って帰った。電気、ガス、水道が止まっている。５日目に電気がついた。

生活面においては、自宅がある人には支援金は配給されなかった。タコ漁のサッパ船が流されたので、国だと思うが組合員への船の配給があった。その船代全額の配給ではなかったので、差額を年2万円ずつ5年間支払うことになった。6年後に初めて自分の名義になるらしい。また、自衛隊が震災直後から精力的に良くやってくれて、仮設トイレや風呂を設置してくれたので感謝している。地域の商店も殆んど流されたが、大久保商店が間もなく開店してくれたので、何とか日常の買い物ができた。被災直後は近くのリンゴ屋がりんごを持ってきてくれたが、後は山の水（湧水）でしのいだ。

今は、漁で捕ったタコ（1～3月）、ウニ（6～8月）、アワビ（11～12月）などは、それぞれの最盛期に漁港市場の休み時間（11時30分頃）に持って行って卸している。

【平成26（２０１４）年2月4日、自宅にて2回目】

現在は、怪我も治り不自由なく普通の生活をしている。今回の津波を目の当たりにしてわかったが、台風とは明らかに違う波の襲来であり、6～9㍍の高さのまま来ることがわかった。また、病院は負傷者で溢れたので、第二中学校や崎山小学校の体育館を利用して分院として治療をしたそうだ。

今は、タコ漁の最盛期で、蛸の浜から30～50㍍沖合の深さ10㍍位のところでいさり（糸）で釣る。タコの頭は30㌢㍍位だ。タコは生では食べず炊いて食べる。

【平成26（２０１４）年7月16日、自宅にて3回目】

現在、サッパ船は補償により新しい船になったので、ウニ漁をしている。

【平成26（２０１４）年10月４日、自宅にて４回目】

《奥様の話》私は、当日お父さんが浜に行った後、「日立浜が津波で全滅だ」という叫び声がしたので、慌てて家の前の測候所への階段を上り高台へ避難した。第２波の後、家に戻ったらお父さんが帰ってきて倒れたので、すぐ着替えさせた。

○袈岩政子さん、昭和14年生、鍬ヶ崎仲町　銭湯「七滝湯」経営者

現在、愛宕公園仮設住宅在住。自宅・店舗は被災。

【平成25（２０１３）年５月22日、愛宕公園仮設住宅にて１回目】

明治27年、先々代の祖母が下駄職人だったが、桐の木端で湯を沸かし銭湯をしていた。鍬ヶ崎地区唯一の銭湯だった。自宅は七滝湯すぐ裏の２階建て住宅だが、今回の地震では、七滝湯入口の壁などは倒れなかった。

七滝湯の営業は午後３時からだが、いつも早く開けていた。大地震発生時には、男性１人が湯船で、女性は脱衣所にいたが、すぐ着替えて帰った。外を見たらドラム缶が２列になっていくつも流れてきた。私は裏の自宅に戻り、寒いのでジャンパーを持って犬と一緒に裏の高台へ行った。そこから海の方を見ると、津波が来ているのに救急車が通り津波に呑み込まれてしまった。津波の水位は静かにどんどん上がって来たが、引潮は木の葉のように家をさらって行った。次の津波が遊覧船２隻を流し、さらにタンカーが七滝湯の方に流れてきたが、手前で止まった。被災した日から梅翁寺に避難した。

船人や旅人が銭湯を待っているので、七滝湯を再建したい。しかし、数千万円かかるので、今のままでは再建できない。今後のことだが、市の方から平成28年過ぎたら家を建ててもいいとのことなので、再建してみんなをほっとさせたい思いでいっぱいです。

【平成26（２０１４）年２月４日、なあどにて２回目】

七滝湯の再建復活を考えているが、２月19日に市の説明会があるので、聞いてから具体化していきたい。ただ、市の土地利用がはっきりしていないし、道路拡幅のための建物制限があるようだ。

【平成26（２０１４）年７月19日、なあどにて３回目】

先日、市の説明会に行ってきたが、銭湯が町民のための集会所的役割を果たせることの認識はあるようだ。

【平成27（２０１５）年３月９日、なあどにて４回目】

平成になる前まで、宮古市全体には銭湯が15軒あった。また、市場の脇に造ったシャワー室は、外来船の船員だけが使い地元の人や漁民は使っていない。銭湯の再建は必要だと考えているが、どうなるか心配している。

【平成27（２０１５）年９月８日、電話で５回目】

元の土地に再建できることになったが、後は、資金である。

【平成27（２０１５）年11月15日、電話で６回目】

市へは７名のグループ申請をし、その後受理された。補助金は出るが、資金を何とかしたい。

【平成28（２０１６）年３月10日、なあどにて７回目】

七滝湯を再建しようと今まで仮設住宅の住まいで頑張ってきた。明日で５年が経つが、住宅地域の道路が一向に決まらず、整備されていない。これでは家が建てられない。私も年を取り七滝湯を復活するには、あと１年は長い。そこで、先日、七滝湯再建を断念し市の方に補助金の辞退を申し出た。震災前の七滝湯は、集会所のような憩いの場だったので、自宅家屋が再建できたらみんなの憩いの場であるお茶呑み場にしたいと思う。

○鈴木睦子さん、昭和11年生、日立浜町

現在、元自宅近くに本人が建てたアパート在住。自宅は被災。

【平成26（２０１４）年５月19日、自宅跡にて１回目】

被災した自宅は、息子夫婦が現在経営する日立浜町の仮設店舗「浜の茶や」（平成24年8月開業）の場所にあった。日立浜は大変歴史のあるところで、私の曾爺はここでアワビの加工や干物などを手がけていた。私は、鈴木家15代目に当たり、曾爺から、「この日立浜は、朝日が昇る東を向いているから、ここから離れるな」と言い聞かされていた。

昭和8年の大津波は胸まであったと聞いているが、チリ地震の津波は、自宅の所で膝位だった。でも、今回の津波は尋常ではなく、ここで2㍍はあった。宮古港のサッパ船がたくさん陸に上がったし、脇には大型船もあった。その船が自宅の方へ流れてきてぶつかり、バリバリってすごい音とともに1階に水が入り、家を押し流していった。波がまるで雲のようにもくもくと飛沫を上げていた。3人が流されて行方不明になっている。鍬ヶ崎の方はもっとひどくて、津波の高さは6～8㍍位あったと聞いている。震災直前の3月3日（昭和8年大津波の日）の避難訓練は、指定避難所が鍬ヶ崎小学校だったので、震災当時も日立浜町住民の避難場所は鍬ヶ崎小学校になっていた。しかし、今回の津波は小学校への道を襲ったので、私たちは小学校へは行けず、裏山を登って浄土ヶ浜第三駐車場へ行った。日立浜町の住民130名は、避難場所ではない浄土ヶ浜パークホテルに1か月近く世話になり、その後、宮古体育館に移動し7月まで避難生活をした。この辺りでは、40棟余りが流失した。

今後のことだが、家の前のバス道路は60㌢の嵩上げをするというが、自宅再建の場合の嵩上げは自己負担という。今、日立浜町と港町合わせても、漁師は50軒以上、300隻ほどの船がある。また、10・4㍍の防波堤を造ることに対し、漁師の何人かは「海が見えない」と反対しているが、私は防波堤の反対の意志も薄れた。宮古港開港400周年に向かい宮古の復興に期待し、皆様の温かい支援に感謝している。

【平成27（2015）年7月9日、自宅跡にて2回目】

避難後は、自宅近くにアパート（サンブラージュ壱番館・弐番館・参番館）を3棟建て、2棟には復興庁職員が4世帯ずつ入居し、1棟は一般人1世帯と私が入居している。とりあえず住む家があるので、今は自分の仕事をしながら過ごしている。

以下の方々は自らも被災しながら住民の避難誘導、安否確認、生活物資の補給・配給・販売等の活動を行った人々である。

○島崎トシ子さん、昭和24年生、鍬ヶ崎下町　電器店

被災した自宅1階の部屋が津波で汚れ、電気設備や備品などが壊れたため、これらを修繕後、現在住んでいる。家業の店舗は近くに建てた仮設で営業しているが、平成27年9月以降は、区画整理された商業地域に店舗を建て移転する。

【平成25（2013）年5月23日、仮設店舗にて1回目】

震災当日は、七滝湯のすぐ近くの店舗で、夫婦と従業員4名で営業していたが、従業員1名は配達中のため不在だった。地震直後に、店の大型金庫に客の物や、台帳、小銭などを次々と入れた。夫が車を自宅脇の敷地に置いた。自宅前の鍬ヶ崎小学校にも津波の水が来て、避難してきた人たちの車が浮き出した。自宅にも3㍍くらいの津波が押し寄せ、1階に水が入り込んだ。その後、ゴーという音とともに水が引き始めた。次の津波第2波が来る前に店舗跡に店の携帯番号を張り出し、町の人からの連絡が取れるようにした。そして、夫と私はすぐ裏山の測候所に避難した。息子は配達中でいなかった。津波が治まり、夜8時ごろになってやっと息子に会えた。

翌日、裏山の下にある菱屋酒造のお稲荷さんの湧水と金勢社の湧水を分けてもらった。客からコンセントや懐中電灯が欲しいと携帯電話に注文が入ったので、店の大型金庫から台帳を取り出したが、店にあった車とバイクを合わせて6台は、流されてしまった。

3日目からは、パナソニック社長から乾電池（単3を除く）

やカセットコンロなどが届いた。自宅1階の部屋のヘドロを取り出し清掃して仮店舗とし、疲れている客にはコーヒーを入れながら、5月の連休に今の仮設店舗に移った。12月にはプレハブ店舗2戸と倉庫を作り、店と倉庫を分けた。

今年4月26日に今の場所に店を移した。

【平成27（2015）年3月10日、仮設店舗にて2回目】

震災当時、孫より貰ったノートに着信で電話帳を作り、連絡を取り合った。道路の関係で荷物が店まで届かなかったので、お客さんが必要とする電器製品を友だちの電器店に置いてもらい取りに行くようにした。

皆さんが店舗や事務所を開きたくても建物が皆流され思うようにならない。2年ぐらいしたら復興するだろうと軽い気持ちで倉庫の一部を貸したが、まだまだ復興する様子がなく、工事はどんどん遅れっぱなしになっている。

区画整理された商業地に店舗を建てて、隣りの一部を店舗・事務所として貸すことにした。

また、私の実家がある山根町の敷地は津波で流された。区画整理で道路を建設するが、そのための国土調査も入らないので、昔からの坪数が不明確で補償もない。

○鈴木秀隆さん、昭和20年生、鍬ヶ崎仲町　自治会長

現在、被災を免れた自宅に在住。

【平成26（2014）年2月5日、自宅にて1回目】

震災当時は、宮古駅前大通町で経営している電器店にいた。大きな揺れで歩道に散乱したガラスを軽トラに積み終えた時、近所の人が「津波だ！」と叫んだ。振り向くと60～70メートル先に真っ黒い水が私の方に押し寄せてくるのが見えた。急いでシャッターを閉め、車で駅前から横町を通って、山を回って自宅まで約15分位かかったと思う。すぐに避難場所の梅翁寺に行き、避難してきた人たちの住所・氏名を聞き書きしたが、地域の消防団が来ていて諸活動をしていた。妻たちが何人かで炊き出しを始めると、住職が太蝋燭を何本も灯してくれた。避難者は、その日の夜中にバスで国民休暇村に移動となり、まずは一安心した。しかし、私の店は、流れてきた車がシャッターを破り、店の中は全ての物が壊れヘドロで書類等も全部だめになった。そこで、店を閉めることを決意した。20日間位電気・水道が止まり電話も通じない。その後、4月になって仮設住宅が完成し、避難者は仮設住宅やアパート・親戚などへ移った。仲町には54世帯あったが、現在22世帯になってしまった。避難者の居場所を調べようとしたが、市に対し自治会長として避難者を教えてほしいと頼んだが個人情報云々で教えてくれなかった。

その後、沢山の方からの情報を得て時間をかけて訪ね回り、やっと地区の皆さんと連絡をとることができた。

○穴澤良三さん、昭和18年生、鍬ヶ崎上町　前第六分団長・行政連絡員　現在、被災を免れた自宅に在住。

【平成26（2014）年2月5日、仮設屯所にて1回目】

3月11日14時46分、地震発生時は妻と客と3人で自宅にいた。火の元を確認して鍬ヶ崎上町にある第六分団消防屯所に行った。5分後に分団員3名が来た。4人で閉伊川の水門他3基を閉め、ポンプ車で水上警察―カメイ商店―海岸通りの広報回りをした。

15時05分、沖アミ船2隻や底引き船が戻ってきた。巡回中、防災無線で「大津波警報」の知らせがあったので、車を通行止めにして海岸で「逃げろ」と複数回呼びかけた。我々も切通しから漁協ビルや常安寺分院の下の食堂に行った。第1波は水量が少しだったが、その直後大波が来て水門を越えて車を光岸地方面に流していた。家々は熊野神社の方へ流されていた。

15時40分、造船所にあった浄土ヶ浜の観光船が港町の方に流され上町の家々も流された。高台にある漁協ビル前駐車場には

避難してきた人が集まって津波の物凄さを見ていた。
16時00分、上町の筆塚がある山道を通って自宅に戻った。津波は自宅の前まで来ていて車3台が流れ着いていた。
16時30分、測候所隣りの梅翁寺に70～80人が避難した。分団員も13～14人集まった。そこは電気が使えないがストーブがあったので、中里団地の商店などから石油・米・鍋などは借り、食べ物を運んだ。分団にあった防災組織の毛布100枚は梅翁寺と常安寺分院に運んだ。
22時30分、五月町にある消防署に増援車で行き、応援を依頼した。避難所のパークホテルが満室になり、休暇村は70～80人なら受け入れるとの返事があったので、希望者に記名をしてもらい大型バス2台で運んだ。また、分団員と町民20人は梅翁寺と常安寺分院に泊ったが、母親たちが炊き出しをし、港町の丸幸魚屋が加工品を持ってきてくれた。その夜、宮古駅に向かう大通りで火事があったが、ポンプ車は出せなかった。
3月13日には、田老で山火事があったので、分団員の半数（7人程）が出動し、残り半数（7人程）は鍬ヶ崎地区の被災者捜索に当たった。分団員は、中里団地の集会所で1か月間程宿泊した。
2週間ほどは津波被災で道路寸断のため、警察パトカーが動けなかった。そのため、分団では空き巣狙い防止対策で、分団屯所隣りの信金支店は車のライトをつけて防犯の見張りをした。そして、12日目に、田老に住む私の妹の生存がわかった。
4月12日、上町に電気が点いた。被災した分団員のために私が家の近くの空き家の2部屋を借りた。ここで7月末まで、分団員10人が、行方不明・遺体捜しで12～13人を探した。入浴は、朝日湯に入った。また、新聞は3月末まで配達されず、4月から時々配布されていた。
震災の爪痕としては、150年前の大火事の後に蔵を建てた家が多く、その石垣が山側に多く落ちていた。
今後のことだが、今年（平成26年）11月後半より各家の基礎部分の撤去を始めるようだ。鍬ヶ崎地区では1千世帯が流失したが、戻りたい人もいる。この町には第六分団と第七分団があった。分団屯所は区画整理のためロータリー近くの公民館や災害公営住宅と一緒に平成28年までに建てることになっている。分団としては、地区の訓練では必ず「まず山に逃げろ」を徹底したいと考えている。そして、避難所として学校にも毛布を置いてもらうことにしている。

【平成27（2015）年3月9日、屯所にて2回目】
現在、団員は16名で、会長が中里団地に転居したので、私が代行している。今年も3・11の消防訓練を行う。水門閉めなどの訓練が終了後は、今までは漁協ビルの高台だったが、測候所の方が動けるので、今回はポンプ車で測候所に避難する。鍬ヶ崎地区の避難所の1つである熊野神社には、夜間でも灯りが必要なので、ソーラーの外灯を付けた。

○**松田勝己さん**、昭和16年生、蛸の浜町　町内会長・自主防災会長　現在、被災を免れた自宅に在住。
松田さんには、震災当時の聴き取りではなく、鍬ヶ崎地区の多くの人が湧水で助かったことを受け、鍬ヶ崎地区や愛宕地区の水系調査の案内をお願いした。

【平成25（2013）年5月24日、水系巡見にて1回目】
今回は、鍬ヶ崎小学校の前と裏を流れる清水川と愛宕地区の旧愛宕小学校裏の中里団地への坂道にある湧水を見て回った。
清水川は、日出町を源流とし、鍬ヶ崎小学校の前を通る川と、命の水である金勢社の沢と、熊野町を源流とする涸沢から学校の裏を流れてくる川が合流する川である。これらの源流の湧水が豊富にある。現在、学校より下流の清水川は区画整理のため、水路を大きく変え暗渠化が進められている。
旧愛宕小学校の裏から中里団地に登って行く坂の途中にある

湧水は崖の下の道路端にあり、常に豊富な水量である。この道路沿いに住んでいる人の話では、沢水はずっと出ているが自然水ではないので、この水は飲んでいないという。

○笹川正さん、昭和30年生、熊野町　当時鍬ヶ崎小学校校長

現在、被災した磯鶏の自宅を修復し在住、宮古小学校勤務。

【平成25（２０１３）年5月23日、勤務先にて1回目】

宮古市では、昭和8年3月3日の三陸大津波の日を「防災の日」として毎年避難訓練をしている。鍬ヶ崎小学校も同日には大津波を想定した避難訓練をしてきた。今回の東日本地震直前の3月3日も第一次避難（校庭）で人数確認をし、従来通りの5年―4年―3年―2年―1年―6年の順の隊列で第二次避難（熊野神社）を訓練した。

宮古市は、過去にも何度となく津波被災にあっているので、平成17（２００５）年に市教委は、各学校に「津波注意報発令時の対応マニュアル」を作成、子ども１１０番の津波版として「津波シェルター」の設置を指示するとともに、防災教育のため、岩手大学工学部の堺教授のご指導の下ＤＶＤ及び指導書を作成した。また、昔、宮古測候所職員が創った言葉をもとに「防災のかるた」も作成した。

鍬ヶ崎小学校では、平成22（２０１０）年当時の6年生が8月に海上保安庁の船に乗り、鍬ヶ崎にだけ堤防が無く、津波が来た時には逃げるしかないことを体感した。それをもとに8町会ごとの避難ルートマップを作成した。3月11日には完成した原版を印刷所に持って行く日であったが、東日本大震災はその矢先に起きた。

5年生も、キャリア教育の一環として鍬ヶ崎で仕事をしている人たちを取材していた。しかし、その店がすべて被災してしまった。「また店を再開するぞ」という声を聞いたので、6年生になってから再度、すべての方々に取材し、「輝こう鍬ヶ崎」という劇に仕上げ、秋に上演した。

4年生は、ホタテの養殖体験をしていた。被災し、すべてを失った漁業師さんから「2~3年待ってろ、またやらせっから」という言葉をいただいていた。そのため地域のみなさんは生きるため、どのように逃げたのかを地区の方々に聞いた。その上で「命を守った知恵」そして「五つの提言」としてまとめた。

震災当日、8割の児童は保護者の迎えがあり、熊野神社から帰宅したが、30人の児童への迎えはなく、職員と一緒に学校に戻った。朝までに大半の児童は帰宅したが、1人の児童の母親が亡くなったという知らせが入った。その児童は祖母の家に送り届けた。その後、私は3月末まで学校で寝泊まりし、避難所対応を行った。

職員は、当初2交代で避難所対応をしたが、残務整理も体を休めることもできないことから、3交代に変えた。1日目は避難所対応、2日目は自宅待機、3日目は学校の残務整理とするサイクルとした。職員は工夫し、避難所運営を支援した。

上下水道、電気等のライフラインが不通であったので、トイレの使い方を紙に書き、各トイレに貼った。大便は、紙を敷き、済んだら便はレジ袋に入れ、それからゴミ箱に入れるようにした。図書室等に避難している方々にも、各部屋の掃除、食事当番等をお願いした。校庭では早朝から晩までドラム缶で焚き火をし、お茶を飲みながら情報交換をしていた。そんな中でも、子どもたちが全員無事であったことから、3月16日に卒業式を行った。

【平成27（２０１５）年3月10日、勤務先にて2回目】

平成23年度の始業式・入学式は市内一斉に4月25日に挙行した。その準備として、4月18日までに体育館の床を修理し、マット等を敷いた。校庭は、ブルドーザーで土を削り、衛生面での環境整備を行った。こうして学校では授業が始まったが、体育の授業は廊下にマットを敷いて行う有様だった。

6月12日から校庭に仮設住宅の建設が始まることが決まった。そのため、前日の6月11日、震災から3か月目に、小雨ではあったが、校庭で運動会を行った。食べ物も十分に用意できない児童もいるだろうということで、昼食は「おにぎり」だけとした。また、辛くても頑張ろうという気持ちを共有したくて、地域の方々も参加できるチャンスレースをたくさん用意した。楽しい一時を過ごし、閉会式の時間が、ちょうど2時46分だった。全員で、黙祷を捧げた。

○**古館昌三さん**、昭和10年生、鍬ヶ崎下町　鍬ヶ崎地区復興会議

現在、熊野児童公園仮設住宅在住、元自宅で食料品店営業。

【平成26（２０１４）年5月20日、店舗にて1回目】

現在、仮設住宅は家族3人で1戸借りているが、狭くても住めるところがあるだけでも有難い。自宅は、折角建て替えたばかりの家が被災した。私の自宅兼店舗は１０２坪あったが、その土地の真ん中を清水川の流れを変えるために新しい川を堀っている。また、この店舗の前の道は9～13メートル、金勢社に入る道は4メートルに拡幅し、公共施設を集約する場所近くに直径18メートルのロータリーを造り、平成28年完成予定のようだ。

この店舗がある道は沈下した分の50センチメートルの嵩上げ（鍬ヶ崎小学校校庭の高さ）をするというが、予算化は無理だろう。また、災害公営住宅の申し込みは5月末だが、5階建て40戸とのこと。そして、区画整理のための意見集約は5月末という。

鍬ヶ崎地区復興会議は、市のまちづくりとは異なり鍬ヶ崎地区町会長で組織している。立命館大学が七滝湯を核としたまちづくりを考えているが、ボイラーに1千万円かかるという。復興会議がこれらをまとめるのは大変だが、市や立命館大学の考え方を参考にして町民に提案している。

【平成26（２０１４）年7月16日、店舗にて2回目】

清水川水路変更や公園設置、ロータリーなどの工事については、最近は休日返上で行っている。鍬ヶ崎地区復興会議としては、「景観より命と財産が大事」との立場で防波堤工事には賛成の立場である。

【平成27（２０１５）年3月9日、店舗にて3回目】

店舗は、盛岡まで仕入れに行って8月11日に再開した。それまでは瓦礫の片付けに追われた。店の濡れたものは洗濯して仮設に持って行き、食品は学校に避難している人に持って行った。

復興会議としての今までの活動は、一応終えたが、町内会長、宮司、消防団、市議、有識者などに協力を要請している。しかし、区画整理、公民館、清水川の流れなどまちづくりが今後の課題となっている。

2　築地地区

(1)　築地地区の概要

築地地区は、宮古港から宮古地区に入る光岸地地区隣りの閉伊川沿いにある。「月刊みやこわが町」（タウン情報社）２０１２年12月号の『特集街角備忘録Ｐａｒｔ3』「愛宕・光岸地・鍬ヶ崎編」には、小見出し「築地は新しく築いた埋立地」として、次のように記されている。

「維新後宮古代官所がそのまま宮古町役場となり、先駆者によって閉伊川河口東左岸埋立が始まった。大正時代、合併を間近にした宮古・鍬ヶ崎両町にとって利便性のよい場所として、旧舘には明治・大正・昭和初期にかけて裁判所、税務署、警察、郵便局、銀行、電気会社などの庁舎が軒を並べた。当時、旧舘は宮古の中枢であり活気に満ちたモダンな町だったのである。戦後、住居表示は愛宕と変わったが旧舘の呼び名は今でも語り継がれている。」

このように、宮古港と密接に繋がりのある庁舎等が、港と隣接したこの築地の地域に必要であった。そして、同誌「1万トン岸壁と臨港線」には、

「昭和2年、宮古港は第二種重要港湾に指定され、小山田の大

河原でラサ工業宮古精錬所が創業開始した。大工場と港湾は宮古駅を経由して臨港線で結ばれた。田老鉱山からは索道で鉱石が運ばれ、臨港通りには多くの企業が張り付いた。そんな時代も光岸地は宮古と鍬ヶ崎を結ぶ町として古き良き時代の面影を残していた。」

とある。貨物鉄道として小山田の精錬所と宮古港を結ぶ臨港線を敷いていたが、産業の活性化のため、現在は貨物トラックの流通によって廃線となっている。

(2) 築地地区の津波浸水域（図1参照）

閉伊川の堤防を乗り越えた津波は怒涛のごとく築地地区に流れ込んできた。国道45号沿いにある店舗兼住宅では、2階の部屋の畳の上まで入ってきたとの証言があった。

(3) 築地地区の被災状況

築地は、国道45号と閉伊川沿いにあり、光岸地地区と愛宕地区に隣接する商業地区である。閉伊川沿いには防波堤があり、防波堤と国道45号の間がほとんど空地になっている。ここは昔、貨物専用の臨港線の線路が敷いてあった場所で、震災時には津波が閉伊川を遡り、越水して国道45号側に流れ込んできた。そのため国道45号は車両が通行不能となり交通が遮断され、緊急車両も通行できなくなった。この辺りは2階の部屋まで津波が流れ込んできたという。

(4) 築地地区での聞き取り

○小笠原謙逸さん、昭和24年生、築地　水産加工業者・第五分団員

【平成26（2014）年5月20日、自宅兼店舗にて1回目】

自宅は築83年で国道45号沿いにある。地震発生20~30分後、近所の92歳のお婆さんを旧愛宕小学校（平成22年閉校）へ歩いて避難させた。そのあと閉伊川を見たら堤防の高さを船が飛ぶように川上の方へ行くのが見えた。信号が消えたので、水門を閉め、防災無線で「津波5メートル」の放送があるまで国道45号の交通整理をした。

15時00分頃津波が堤防を越えたので、従業員15人のうち2~3人残ったが、旧愛宕小学校に避難した。自宅には津波が2階まで3メートルも来たが、階下には軽トラが流されて突っ込んできた。3~4日後には、自衛隊から旧愛宕小学校に2人に1個のおにぎりの配給があった。おにぎりが冷たかったので、校庭で火を熾しおにぎりを焼いて温めた。そして、私の工場からするめなどを持ってきて一緒に焼いた。また、自宅裏の加工場は、津波被災により汚れ機械などが水に浸かり壊れた。しかし、従業員やボランティアの精力的な活動で、加工場内を清掃し、機械などを直し5月末には再開できた。嬉しかったのは、今までの顧客に商品を作ってくれと言われ、その励みで商いをやる気が起きた。

築地地区では、区画整理や嵩上げなどの規制はないので、被災した所では新築が増えている。

【平成27（2015）年3月11日、分団屯所にて2回目】

震災の年の連休後、店を再開し、従業員も営業再開後は12人全員が復帰した。加工場を先に復帰させた。直後は6割の売り上げだったが、現在は8割に回復した。顧客やボランティアが来てくれたり高知の人が2割増の購入をしてくれた。自宅も9月末には修復できた。

国・県・市の補助金は4分の1ほどあったが、他にクロネコ寄付があった。また、自衛隊の行方不明者の捜索に誰だかを判断するために同行した。

○鶴田幸雄さん、昭和13年生、築地　民生委員・自主防災隊長

【平成27（2015）年3月11日、第五分団屯所にて】

震災当時は宮古駅前にいたが、大きな揺れに「これは津波

が来るぞ」と思い、急いで自宅に戻った。自宅は防波堤（高さ5・26㍍）から国道45号を挟んで１００㍍ほど離れた位置にある。閉伊川の方を見たら空中を飛ぶように流れていく船が見えた。そのうち防波堤の上から海水が滝のように落ちてきたので、すぐに旧愛宕小学校の避難所へ駆けつけると、２００名位いた。そこで、自主防災組織の隊長として防災用毛布を出し、他地区からは反射式ストーブを集めて暖をとった。私の自宅は、幸い床下浸水で済んだ。

翌日、避難者のうち高齢者や病人を優先に50名を休暇村に車で移動させた。残り１５０名は、小学校の校長に話し４教室に40名ずつ位入室してもらった。そして、校長と私で避難所の組織づくりや物資の供給、心身のケアなどを行い、校長も泊り込みで面倒を見てくれた。また、始めの1週間は新里給食センターからおにぎりやカップラーメン、うどんを配給してもらった。その後自衛隊の炊き出しが始まったが、脂っこく魚不足から魚菜市場からの差し入れや自分たちで刺身など魚類の献立など和食を加えたところ、「宮古人は魚が一番だ」と喜んだ。

４月になって、市教育委員会から支援職員が避難所に着任し、避難者と共に泊まり込んだ。新学期が始まるため、避難者は体育館に移動し大きく４つにダンボールで仕切った。また、在宅高齢者に対しても民生委員８名が食料品を運んだが、食料の他衣服が欲しいとの声が出た。この頃、札幌医大医療チームがボランティアで週２回来てくれたので、医療面は充実された。そして、５月20日に仮設住宅ができたので、６月12日に避難所を閉鎖した。

3　愛宕地区

(1)　愛宕地区の概要

「月刊みやこわが町」（タウン情報社）２０１２年12月号の『特集街角備忘録Ｐａｒｔ３』「愛宕・光岸地・鍬ヶ崎編」の「愛宕という地名の由来について」に次のように記されている。

「　愛宕という地名は昭和40年の住居表示改正で付けられた愛宕の鎮守様・愛宕神社を由来にしたものだ。愛宕と呼ばれる前は旧舘であり、メイン通りから鍬ヶ崎側を東旧舘、宮古側を西旧舘と呼んでいた。藩政時代は宮古村の枝村で澤田（現在の沢田地区）の延長とされていた。（後略）」

この地区は、かつては行政の中心と言われ、市役所の他、警察署・消防署・電話電報局・裁判所などが集まっていたという。現在は、住宅地となっている。

(2)　愛宕地区の津波浸水域（図1参照）

津波は閉伊川の堤防を越えて国道45号に流れ込み、築地地区を巻き込んで愛宕地区の奥にある旧愛宕小学校の校庭の下まで押し寄せた。かなりの民家が被災している。

(3)　愛宕地区の被災状況

【平成25（２０１３）年3月11日】

平成24年度の宮古市主催津波避難訓練が、旧愛宕小学校体育館を総合訓練会場として午前6時から開始された。市の総合訓練としては、①災害対策本部設置運営訓練としての市職員・関係機関による通信情報訓練・職員参集訓練　②避難所開設運営訓練としての自主防災組織・市職員・市民による避難者受入れ・運営訓練　③津波防御訓練としての消防団・関係機関による水樋門閉鎖訓練・避難誘導訓練・通信訓練等　④関係機関による道路通行規制訓練を行った。

６時前に国道45号の築地の辺りで、消防団による閉伊川の水門閉鎖訓練を見たが、声を出し合った手際のよい活動だった。国道45号から愛宕に入る道では、パトカーが道路通行規制訓練を行った。

国道から避難所である旧愛宕小学校の方へ歩くと、地域のお年

寄りが緩やかな坂を上って避難会場の旧愛宕小学校体育館に向かっていた。声をかけると、「年寄りにはこんな坂でもきつい」とゆっくり歩いていた。

旧愛宕小学校の校庭は、地域の家並みより1㍍ほど高くなっている。震災当時、津波による浸水域は校庭より10㍍手前で止まった。避難所指定になっている体育館は無事だった。裏に山があり、中里団地に登る道路端には湧水がある。裏の住民は、この湧水で助かったそうだ。

(4) 愛宕地区での聞き取り

○3・11旧愛宕小学校体育館防災訓練参加者（氏名不詳）

【平成25（2013）年3月11日、旧愛宕小学校体育館にて】

私は年をとっているので、家からここの避難所まで歩いて来るのが大変。でも、こういう訓練に参加しないと、どう避難したらよいか分からないから。

震災当日は家にいたけど、大津波警報が出たので、近所の人とここへ避難した。自宅は1階が津波にやられたので、しばらくここにいた。とにかく配給のものだけで過ごした。

○大越信行さん、昭和24年生、愛宕2丁目　第五分団長

【平成27（2015）年3月11日、第五分団屯所にて】

午後2時46分の地震発生直後、3㍍の津波警報発令と同時に閉伊川の水門を閉鎖し、その後、停電で信号機が作動せず、警察も来られないので、我々が国道45号の光岸地交差点で交通整理をした。そしたら、「逃げろ」という大声が聞こえたので、振り向くと閉伊川の5㍍の堤防から川の水が溢れてきた。急いで学校の方へ逃げた。携帯テレビを見たら釜石にすごい津波が来たとのこと。私の家は旧愛宕小学校のすぐ前だけど、津波が家の手前まで来た。すぐ小学校体育館へ避難したが、食べ物がない。各家から薪やストーブを体育館に運んでもらった。町内の天理教から米数日分の提供をいただいた。我々の活動範囲は、光岸地の漁協ビルから国道45号の岩手銀行・ＮＴＴであるが、町内で21名が亡くなった。

今朝の避難訓練での第五分団の活動は、次の通りである。午前5時30分集合　6時02分大津波警報発令　6時08分閉伊川水門閉鎖し消防署へ報告後、住民の避難誘導。津波襲来10分前に宮古市より「団員避難」の放送あり。直ちに旧愛宕小学校へ行き、住民の避難人数を本署に報告した。第五分団の団員は、21名で本日の活動参加団員は10名、20歳代の団員は2名。

○細越雅佐浩さん、昭和17年生、愛宕2丁目、愛宕2丁目自治会長・自主防災副会長・第五分団班長

【平成27（2015）年3月12日、第五分団屯所にて】

震災当時自治会長だった。自宅にいたが、この大地震に大津波を直感し、次の余震が来る前に半纏を着て水門を閉めに行った。途中から合流したポンプ車に飛び乗り、信号機停電への対応や住民への広報活動をして回り屯所に戻った時、閉伊川の堤防の上を船が下流から上流へと流されているのが見えた。避難の途中自宅に寄り、妻に「逃げろ」と伝え学校に避難した。避難者は旧愛宕小学校体育館に避難したが、自主防災会長の鶴田氏に避難者対応をお願いし、私は各戸に残っている人を腰まで水に浸かりながら体育館に避難誘導した。その後、団員として35日間、行方不明者の捜索や瓦礫運搬トラックの誘導や道路上にある建物の解体の立会等に従事した。その後、自治会長として町内会の仕事をした。

7月になって町内会の総会開催は難しいので、役員会として書面で了解を取った。避難所にいた人たちの多くは、その後、各自宅床下の泥を撤去し自宅に戻った。当地区は85戸の内23戸が被災したが、幸い死者・行方不明者はいなかった。

今後のまちづくり検討会の会長になったが、現在、仮設住宅への入居は2～3人が未定。各地に災害公営住宅ができるが、所得の関係で入居できない人が出る。

愛宕地区の今後の課題としては、○お店がなくなり高齢者の買い物に不便（ＣＯＯＰ車の販売はある）○人通りの賑わいのあるまちづくり　○旧愛宕小学校の校舎・校庭の仮設住宅の跡地活用問題　○町内における働き盛り40～50歳代の減少及び高齢化の深刻化　○現在の４町内会間における連携の在り方　などに対し自主再建の道を探りたい。

以上、鍬ヶ崎地区・築地地区・愛宕地区の概要や被災状況などの文献・資料調査の上に立って、巡見や聴き取り調査の結果を述べた。

4　今後の課題と展望

(1)　巡見と聞き取り調査から

平成25（２０１３）年2月17日から、鍬ヶ崎地区に入った。この頃は、流失した家々の基礎部分のコンクリートが残り草木が生い茂っていた。この光景を目の当たりにした時、まだまだ復興など程遠いように思え、工事も一向に進んでいないように感じた。それが、平成26（２０１４）年になって家の基礎撤去や区画整理のための道路工事が始まり、平成27（２０１５）年春には、高さ10・4㍍の防波堤の基礎部分の埋め込み工事が始まった。市の都市計画課が住民への説明会で示した予定では、工場地区・商業地区・住宅地区に分けた区画整理の内、工場地区と商業地区のいくつかはすでに引渡済みである。残り殆んどが平成28年3月までに引渡・使用開始予定だが、遅くても次年度中の引渡・使用開始予定としている。平成27年夏現在、鍬ヶ崎地区の中心となる公民館や消防屯所などの公共施設がロータリー交差点の近くに平成28年3月を目指して建設が始まり、その近くに災害公営住宅が平成27年12月完成を目標に急ピッチで建造されていた。

鍬ヶ崎地区は、宮古港と共に発展してきた町であり、漁港として魚市場と共に飲食店や銭湯などは船員との繋がりが深く、船帰りの船員はすぐさま銭湯に向かい女湯まで使用したという。七滝湯の葺岩さんは、震災前からやってきた「ゆっくり寛いでいただく団欒の場」との思いから接客の気持ちを大事にしてきた。船員は、下船後の行き場があったのである。今、銭湯の復活を願っている葺岩さんは、区画整理された住居地区に土地を得たが、今後、「七滝湯」の復活を願う船員や地域住民の期待に応えたいと思う日々だと話していた。しかし、鍬ヶ崎地区の復興、特に道路や宅地造成が工業地域・商業地域の順に整備され、住宅地域は５年経っても完成していない。七滝湯は住宅地域のため、まだ道路や宅地造成が完成していないため、銭湯の建設ができない状態である。平成28年になって自分自身の年齢を考え七滝湯の再建を断念したと言う。漁港である鍬ヶ崎地区から地域住民や船員が集う場としての銭湯が姿を消すことになった。

また、住民対応支援者として行動した方々には、自分や家族の避難と共に、職種によるそれぞれの立場における行動をとることには並大抵なことではない苦労があった。町内会長、民生委員、消防団などは、地区内の住民の安否確認や避難所など、日々避難者との繋がりを大事にしながらその対応に当たったことがわかった。ライフラインである電力、上下水道、通信などの復旧には大分時間がかかるため、電器店や水産加工場などが、避難者への取り寄せや配給などの処置をいち早くとったことは、同じ地区に住む住民を考えた末の行動だったことがよくわかった。

このように、職種や立場により大災害の時の行動が違ってくるのは必然であり、震災当日、自分がいた場所や状況を認識し、次の行動を起こすには瞬時の判断が要求されたはずである。この実行力が被災者を少しでも早く、無事に避難させることに繋がったことになる。そして、事後の対応も、避難所や仮設住宅や自宅の区別なく声掛けをしながら避難者との繋がりを保ち続けることが大切であるとつくづく実感させられた。

(2)　民間伝承に学ぶ

聴き取り調査は、私自身が肌で感じ眼に焼き付け、被災者に直接聴き取りができたことで大変有意義なものとなった。被災地の復旧および被災者の生活の回復、安心・安全な避難所設置など、今後の課題は山積みである。

今回の3・11大津波では過去最大級の甚大な人命が失われた。この被災については、昔からの民間伝承に学ぶことが多々あると考える。

三陸沿岸の村々の人々は、今までの大津波で多くの人命が失われたことを受けて「津波てんでんこ」という言葉を創り出した。この「津波てんでんこ」については、『平成27年宮古港開港400周年記念事業「宮古港歴史展・復興展」』における「津波に関する民間伝承」の項で、次のように記している。

「『てんでんこ』は、「各自」「めいめい」を意味する「てんでん」に、東北の方言で見られる縮小辞「こ」が付いた言葉だ。「津波てんでんこ」「命てんでんこ」を防災教訓として解釈すると、それぞれ「津波が来たら、取るものも取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ」「自分の命は自分で守れ」という教えである。

このような民間伝承により救われた命も多かったことから、これからの地域の生活の中でも、このような知恵を風化させることなく伝承していくことも重要な課題だ。（後略）」

この「津波てんでんこ」で思い出すのが、釜石市鵜住居地区の海辺にある小・中学校の児童生徒が「津波てんでんこ」を実践し、全員無事高台に避難したことである。いわゆる学校の避難訓練の方法ではなく、児童生徒自ら率先して「てんでんこ」を行動に移したのである。この小・中学校は、いずれも大津波に呑み込まれ、現在は廃校になり解体されている。

そして、この「津波てんでんこ」については、もう一つの考え方がある。それは、「村や家系の存続のため家族の1人でも生き延びろ」との教えが基になっている。

また、民間伝承と言えば、もう一つ上げておきたい話がある。「稲むらの火」である。これは、江戸時代に起きた安政の南海地震（1854年11月5日）の時の紀州紀伊国（現和歌山県広川町）に伝わる実話に基づいて語り継がれたものである。この話は、大地震が起きた日の夕方高台に住んでいた村の庄屋が地震の揺れの違いに気づき、その後、海の引潮を見て大津波襲来を予測したものである。そこで、海辺の村人に知らせようとしたが時間がないことから、自分の田に置いてあった稲むらに次々と火をつけ、村人が火消しに来るように仕向けた知恵に気づかせる話である。

日本では、この「稲むらの火」の話をもとに毎年11月5日を「津波防災の日」と定めている。そこで、日本は、甚大な津波被災を経験しているチリやインド洋沿岸諸国、フィリピンなどと共に津波防災を世界の共通課題として呼び掛け、平成27年国際連合に対し約140か国が「世界津波の日」を共同提案した。そして、平成27年12月22日、国際連合総会本会議（193か国）において、平成28（2016）年より毎年11月5日を「世界津波の日」とすることが全会一致で決議された。なお、国際連合は、10月13日を「国際防災の日」に制定しているが、津波に特化した国際デーとしての「世界津波の日」制定は初めてである。

私が聴き取りをした人の中にも、自分の親や祖父母など先祖の話を覚えている人がいた。例えば、九死に一生を得た漁師は、祖父が言った「津波がこの蛸の浜の峠を越えた時は、鍬ヶ崎は全滅だ」の言葉を覚えていたので、蛸の浜からこの峠を越えて鍬ヶ崎側に流された時に、すぐさま高い所（熊野神社）に逃げた。この話は、先祖から子孫へと伝承され、命が助かった一例である。私は、この人の話を一人称語りとして全国で語り始めている。

このように、昔の人間の知恵が詰まっている民間伝承から学ぶ点があることは確かである。そして、この受け継がれてきた地区の歴史と文化を復興のどこかに位置づけ活用していくことが、そこに生きる人々にとって心の拠り所となる大切なものになってい

くと考える。

【参考文献・資料】
「東日本大震災宮古市の記録」第1巻《津波史編》、２０１４年（宮古市東日本大震災記録編集委員会）
「宮古市史」民俗編・年表、１９９１年（宮古市教育委員会）
「年代別地区別人口推移」（宮古市総合窓口課）
宮古港開港４００周年記念事業「宮古港歴史展・復興展」『近現代の港湾整備』２０１５年（岩手県宮古市・宮古港開港４００周年記念事業実行委員会）
「宮古市東日本大震災津波浸水図」（宮古市危機管理課）
「月刊みやこわが町」（タウン情報社）、２００５年３月号『特集鍬ヶ崎大正物語ＶＯＬ３』「港が生んだ鍬ヶ崎遊郭文化」
「月刊みやこわが町」（タウン情報社）２０１２年12月号『特集街角備忘録Ｐａｒｔ３』「愛宕・光岸地・鍬ヶ崎編」「築地は新しく築いた埋立地」
「月刊みやこわが町」（タウン情報社）２０１２年12月号『特集街角備忘録Ｐａｒｔ３』「愛宕・光岸地・鍬ヶ崎編」「愛宕という地名の由来について」
鍬ヶ崎・光岸地地区工事請負業者発行広報紙「工事かわらばん」（創刊号～第15号　三井住友建設・本間組建設工事共同企業体　宮古復興工事事務所）
「歩みだそう未来への一歩～命を守った知恵をもとに～」（宮古市立鍬ヶ崎小学校平成23年度第5学年・２０１２年3月）
２０１２年度兵庫県震災記念21世紀研究機構主催１・17防災未来賞「ぼうさい甲子園」受賞校掲載新聞記事（２０１３年1月29日、毎日新聞朝刊）
鍬ヶ崎・光岸地地区「土地区画整理事業等に関する説明会」（平成27年5月20日（水）午後6時30分～　宮古市役所6階大ホール、宮古市都市計画課資料）
「宮古の歴史と文化を活かした復興まちづくりへの提案―鍬ヶ崎・津軽石・中心市街地を中心に―」（宮古市・地域の文化遺産を活用した復興まちづくり検討委員会）
「宮古市災害公営住宅整備進捗状況について」（宮古市都市整備部建築住宅課・インターネット更新日２０１６年1月22日）

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第3章　被災者の証言

米屋陽一

1　日立浜町

3月12日、日立浜仮設住宅で6名の方から話をうかがった。

□　芳賀房子さんの話

昭和13（1938）年生。日立浜町。主婦。平成27（2015）年

私は地震の時は実家（港町）にいました。最初はスーパーさ行ったたの。戻って来て、実家によってコーヒーを1杯ごっそうになろうと思って。そしたら、飲まないうちに揺れて、立ってもいられなくて座りました。

そして弟の車でターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）まで上がってきて。車もそんなに渋滞していなかったもんで、スムーズに上がって来れました。しばらく車の中におりました。そして揺れが収まって落ち着いたから、二中の柔道場に避難しました。そこに5か月いました。

避難所でこのぐらいな（小さな）おむすびをいただいて。水も無かったんです。そして寒くて…。柔道の子どもたちの柔道着を借りて…。

8月、日立浜仮設住宅に移動しました。鍬ヶ崎小学校の仮設住宅でなくて、下にありますがねえ、ここ上がって来る時に。十何軒あります。そこに私はいます。

□　山根蝶子さんの話

昭和10（1935）年生。日立浜町。養殖業。

私たちは養殖漁業でしたんで朝が早くて。朝2時半にはもう主人は沖に出るし、私は作業場の方で準備して。それで2人だけで働いてる時だったもんで。朝飯なんかも食べないで仕事をそのままやるんですよね。

あの日はちょうど仕事が終わって家に帰って、朝飯と昼といっしょに食べて、その直後でした。ちょうどクミアイ（漁業協同組合鍬ヶ崎支所）という家があったもんで、「後片付けは後にして、先にクミアイに行って来るね、3時前にね」って、出はろうとした時に揺れたったんですけど。

「これは津波だから、とりあえず逃げなきゃね」って。その2、3日前にも、そういう大きな地震があったんですよね。その時から、いろいろ毛布から食べ物から車に積んだったんです。解除が出た時は、長くって家に帰る時間がずーっと遅れたったんです。そういう気持ちがあったんで、「とりあえず、逃げろ」っていうので、お位牌と私が持病を持ってるんで薬だけで。毛布も持たないで車でそのまま科学館（岩手県立水産科学館）まで行きました。

父さんは、「家を見て来っから、おまえはここを動くな」って。近所の若いお母さんと娘さんが、具合悪くしながら上がって来たもんで、科学館のライトバンをお借りして、そこで休ませて。私はまぶってらった(見守っていた)んですよ、その子どもと。だから、津波は全然見なかったんです。

そこに夫が帰って来て、「もうだめだ、家も無くなった」って言うんで。家がこう浮かんで流れんのを見たんだそうです。そしてから、科学館には電気も水も無くって。「パーク（ホテル）さんに行けば、電気もあるし水もいくらかあるから、ホテルの方へ行ってください」って言うもんで、パークさんのお世話になりました。だから私たちは、学校に行った人たちよりは、寒い思いをしませんでしたけど。

みんな同じ気持ちだからね。大っきいおにぎりは小っさくなってたり、冷たくなったりね。朝、男の人たちが仕事に行く前は、水汲んでくれるんだけど、日中になればやっぱしお婆さんたちも行って、それ汲み上げてね。立派なとこで、お世話になりました。

「お年寄りと子どもさんは、下の広間にお布団敷きますから」って言うもんで布団を借りて…。そこで1か月、お世話になりまして。その後、警察の方たちが入るからって、宮古の体育館に移動しました。そこで2か月、仮設ができて上がってきました。

（夫は）昭和8年の大津波の時、4歳でお婆さんにおぶさって、逃げた記憶があって。だからってね、みんなが逃げないうちでしたもんね。

みんなが道路に立って、海の方眺めてて、「どこに行く、どこに行く」って。「逃げるとこあんせー」って騒いで、そして逃げて来たんですけども。

（夫は）すごくがっかりして。今まで毎日毎日働いた体だから、もうあっちが痛いこっちが痛いで、歩くのもやっとでした。肩をぶる下げて、足を引きずってねえ、哀れなような格好で…。

それでも2階が流されてて、よその家の方にまた戻って来て、斜めになって息子夫婦の部屋が濡れてもね、瀬戸物とか鍋釜、そういうのを拾って、雪解け水で洗ったりしてねえ、それを爺さんと嫁さんとで、そういうのやってました。私たぶん腰抜かしたんでねえべか、ホテルから出られなかったから。

□　佐臼節子さんの話

昭和17（1942）年生。日立浜町。主婦。

私は下の方に仕事に行ってました、ワカメの芯抜きに。地震が来てから、「こんなに揺れっから、津波が来っから、仕事やめて上がったほうがいい」って、近所の人たちから言われて、自転車で帰ったんです。十分もかからないね。

家はお父さんがちょっと体が不自由なので、仕事から帰って来てから。玄関に車椅子を置いていたんですよ。そして、定置網のすぐ前なもんで、まさか津波がつくと思わないで、「逃げべ」っつっても、本人が「いい」って、逃げないんだもの。「いいから」ったって、置いて逃げる訳でもないし、一応薬だ、そんなのもリュックサックに入れて、逃げる前に作ったんだども。車椅子に入ってね。それで、着替えさせたりなんかして、ご飯があったのでおにぎりを作って。

そうしてる間に、津波が来てねす、濡れましたよ。玄関だけ開けといて廊下は開けなかったから、大丈夫でした。玄関から入って来たんですよ。下は全部だめでしたよ。昔の建物だったんでねす、通り抜けが良かったために、良かったんですよ。

町内の人が来てくれて、「ここにいっつうと、津波だから」って言われてねす。びっくりしてターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）まで車椅子で行って、そこからパークホテルに連れてってもらいました。あったかいところにいて、布団もあったかいのにって。部屋さにもお嫁さんも呼んで来させて、そこで1か月いました。

朝ご飯食べてから、下りて行ってね、片付けたり何かしてね。薪ストーブがあったためにねす、油もあったからね、助けられました。昔からやっぱり薪ストーブ使って、今も使ってますけども。今は壊れたとこ直して、そこに住んでます。

昔から山水を使ってましたのでね、そっからやっぱりみんな汲みに来たりね、洗濯したりねす、あの山水に助けられました。水道は止まってしまって。昔は飲んだり何だりしたんです。ガッチャンポンプで汲んで、お茶っこ沸かして飲めばおいしくてねす。

□　太古エイ子さんの話

昭和16（1941）年生。日立浜町。主婦。

私も山根さん、佐臼さんと同じで、パークホテルに避難したんです。避難の生活はいっしょなんです。あったかくて寒い思いをしないで。避難した当時は、24時間テレビつけて。ホテルは発電機があって電気が切れなかったんです。だから、大変なことが起きたんだなあと思って、テレビを見てました。

私は自宅におりました。夫が趣味の会に通ってて、「3時ちょっと前に帰って来るから。今日はおそばが食べたいから、おれが帰って来る時間に食べられるように、おそば茹でておいてくれ」って言われて、その時間に鍋沸かして、おそばが茹で上がって、水につけてザルに上げた途端にグラグラ来たんですよ。

それで、とてもじゃないが家にいられないで外へ出て、つかまってしゃがんでました。家はガタガタ、ガタガタものすごい音で揺れるから、とっても怖くて、私は家で1人だったんです。

そしたら、今度はみんなが、「これだけの地震が来たから、津波が来

るぞ、来るぞ」「逃げろ、逃げろ」って、があがあ騒ぎ出した訳です。そいで、浜にサッパ船が出入りしている、魚を採る漁師の方がその辺にいたんです。その方たちもみんな、「これだけの津波が来るから、大変だから逃げろ、逃げろ」って。そしていっそくさに逃げたんです。

私は夫が来るのを待ってて。バイクで磯鶏に行っていたんです。そっから戻って来て、避難するために、その辺にあるすぐ食べられるパンとかお菓子とか水とかって、リュックに詰めて車に積んで、ターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）の駐車場に上がって来たんです。そうしたら車がいっぱいいましたった。

そこからみんなで津波見てたんだけども、第1波っていうのがゆるく来て、「ああ、津波ってこんなもんか」って言ってたんですよ、私ら見たのはね。それぞれ場所が違うと、また津波の来かたも違うと思うんですけど。「こんなもんか」って見てたんです。今度、次の第2波っつうんですか、どんどん海の水が引いてって、海の底が見えたんですよ。

そうして来た津波が白い波でした。サッパは流される。ビジターセンターの中には水が入って来る。壊されたもんが、どんどん流れて行くの大っきいたって。油タンクのこんな大っきいのが、こんな高いやつが、流れてきました。私ら上からそれ見てたんです。

私は避難したから自分の家が津波に遭うとこは見てないんですよ。津波が引いてから家へ下りて行って見たらば、2階まで足の踏み場がないようにサッパは入ってる、壊されないけど家の中はめちゃめちゃで、建物は壊されないんです。だけど中の物はひどかったです。家に入ることもできないで、あそこら辺の物が入って来て、そんな状態でした。後は毎日パークさんに泊めてもらって、後片付けに下りて来たんです。

ところが、置く場所が無いんです、みんな濡れてるから、取っときたくても。片付けておく場所が無かったんです。家は2階まで津波が上がったから、畳も布団もタンスも冷蔵庫も洗濯機も、全部捨てました。家の骨組みが残っただけでした。何一つその位置にあった物は無かったです、みんなひっくり返って。うちなんか、トイレも流しも全部壊れました。全壊って言われました。

そいで、私もパークさんに1か月避難して、山根さんといっしょに、宮古町の体育館に2か月避難したんです。その間に、お家を直していただいて、大工さんもいない人もいなくて、すぐには直してもれえなかった。電気は無い、水道は出ないでしょ、だから家ん中で生活することはできなかったんですよ。

八戸（青森県）に兄弟がいるんです。朝5時に出て来て、（手伝ってくれて）泊まる場所がないから、夕方帰って行くんです。その後、何日も八戸から来て、手伝ってくれました。人を頼むっても人もいないから。（実家の兄弟は）海から遠いとこに住んでたから、自分たちは被害が無かったんです。実家から兄弟が来て、手伝ってくれました。

全部で3か月避難して、水も出るようになって、電気もつくようになって、何とかかんとか家の中を直していただいて、生活できるような状態になって、6月に避難所から出て、今は自分の家に住んでます。

私ら町内でも、1年に1回、避難訓練してます。津波の避難道路ってのがあって、この高いターミナルに上がって来るようになってます。パークホテルには、町内として2年ぐらい前に、もし災害が起きたらば、避難所としてお願いできませんかって、前もってお願いに行っておいたんですよ。そしたら、その時に快い返事をいただいたんです。観光客もいたんじゃないかな。

私らロビーとか会議室とか大広間とか、そんなとこに避難さしてもらったんです。食べ物も冷たいものでなくて、あったかいおにぎり、あったかい味噌汁でした。こっちの人がご飯炊いてくれて、そいで私らがおにぎりを作ってって感じで。食器洗うのも自分たちで。部屋の掃除とかね。そういうのは。「自分たちでできることは、自分たちでやってください」ってことで。みなさんから言ったんじゃないですか、お世話になるからって。だから、「できる方はお手伝いしてください」って。パークの時は、スムースにいったんじゃないかな。

そして今度別なとこ避難した時も弁当の配達になって、そんな大変な思いはしないで、2か月間、体育館の中に畳を敷いていただいて、

毛布とか寝具いただいて。私らはいい方でした、よその方から話を聞くとね。

うちの方の町内は犠牲者は1人でした。サッパ船見に行ったんだそうです、地震の後に、Hさん。自分は船をやってるもんだから、船が心配だからって船見に行ったんだそうです。そうして津波に襲われて、そのまんま帰らぬ人となってます。そういう方もいます。町内が2つに分かれてるから、こちらの方は話はまた別です。日立浜全体だと3人です。

□ **鈴木誠子さんの話**

昭和25（1950）年生。日立浜町。主婦。

私は自宅で美容院やってたんですよ。それでお客さんを町まで送って、帰って家に戻ったら地震があって、大っきいんで。私、津波っていえば見に行くタイプだったんです。それで、北海道の娘が、「大っきい津波が来るから逃げろ」って言うので。うちは津波に備えた家だったのね。下が水が流れるようになってて。北海道で大っきい津波がありましたよね。その時に、間を空ければ水が流れるっていうそういう家で、3階建てだったんですよ。

絶対うちには来ないと思っている訳。家の前がコンクリートの庭だったんで、波が来ても大丈夫っつう思いがしたんで。津波っていうのは、見に行くもんだと思ったけど。北海道で逃げろって言うから、とりあえずいつもだとここ来るんだけど、下を回って車で来たんです。私は実家が日の出なんで、日の出にいったん車を置いて、来る途中に空き地で津波が来たのを見たんです。来たと思ったら観光船が入って来て、わーっと言ったら土埃、そいでわーっという間に、さーっと引きましたもんね。

第三駐車場まで来て、まだ家があるから、下に行ってみる気だったのね。そしたら隣の人が、「行くな」って言われて。それで行かなかったんだけど、それでも家は残ってました。ただ空き地がいっぱいあったんで、水がこう回ったんですね。それで家がぶつかって壊れたけど。まあこの際、全部壊したけど。全壊にしてもらいましたけど。3階だから、上の方は水があんまり掛かんなかったけど。それでも家ん中は、みなさんが言う通りめちゃくちゃでしたし。今までにないくらいですね。

私は日の出の実家の方にいました。避難所にいる方が幸せだったと思います。実家に行って食べるのはあっても、お店に行っても何もない訳。そして、お水も1時間くらい並んで貰って来て、それもバケツに2杯。そいでトイレは水洗だから、学校（第二中学校）のそばなんでプールから水を汲んで。近所にリンゴ園があるんですよ。そっから水を貰いに行って、それで3か月くらい…。

1日に2回かな、市役所の人がポンプ持って来て、水を貰いに行くんだけど、1時間くらい待ってバケツでふたつ。それ飲むだけ。後はちょうど雪が降ってたんで、それを溶かして鍋洗ったりとかしたけど。だから、避難してる人の方が、同じながら良かったと思う。すっごい食べる物が無いのがいちばん…。

美容院がちょうど軌道に乗りかかった頃に、津波が来たんでもうゼロです。お客さんがけっこう亡くなってるんで、（再建は）とても考えに入れません。いいお客さん、何回も足運んでくれたお客さんが亡くなってるから。自分の身内は親戚の人が1人亡くなってっけど、それでも、それ以上にお客さんが亡くなった方が辛いですねえ。

たぶんこの沙織があるために、同じ被災者だけが集まってるから、遠慮が無くやってんだと思います。それで違う所に行くと、やっぱり被害に遭ってない人とは温度差があります。ここだと被災に遭ったねえって言うにいいけど、よそに行っては言えない。何か違いますよねえ。だから、被災者同士でなきゃわかんないとこがあるんじゃないかなと思う。今になってから苦しいですね。

津波の時はただ笑ってたね、みんな、ただ笑うしかなくって。今は苦しいですね。3年ぐらいから、みなさんがいろいろ仮設を出て自立するし、先が見えないから、自立できる人はいいかもしんねえけど。そいで、津波っていうのは、田老だけじゃないんですね、宮古は。鍬ヶ

崎も全滅なんで、それを言いたいんです。ほんとそれを言いたいんです。

□　**早野かづ子さんの話**

昭和24（１９４９）年生。日立浜町。主婦。

その日は家にいました。うち（夫）は移動販売してるもんで…。カレイの干物を作ろうと思って、午前中は仕事をしたんで、遅くなってお昼を食べて、少しテレビを見てゆっくりしてたんです。それでガタガタっと来て。あまりにひどかったのでコタツにつかまっていたんだけど、あまりにも長いんでお勝手から外に出たけども、外は外で家と家との間なんで怖くなって。

そしたら漁師の方が1人みえて、いっしょに海眺めてたんですけども。その時も早く逃げれば良かったんだけども、「はあ、来たね、こうで、ああで」って、ちょっと高台になってるもんで、漁師さんと2人で海を眺めてたんですよ。その方が最初はいっしょになって見てたんだけど、「なんか大っきいのが来るから、逃げた方がいい」って言われて、それから逃げたんです。

逃げたけども何を考えたんだか、履物を交換して長靴を履いて。家の裏はすぐ避難所っていうか、山手に向かって70何段の階段があるんですよ。そこに登らないで、すぐ後ろにあった擁壁に登って、そのフェンスにつかまって、それで助かりました。

階段に行けば、ずっと上まで上がってって、水に浸かんなかったんですけども。逃げたのが1歩遅かったんで、それでフェンスにつかまって背伸びをして、鼻のとこまで（水が来て）ぎりぎり、助かりました。その水はそんなに強い水じゃなかったんです。どーっとこう上がって来るような感じで。それで引っ張って行かれるっていう感じの水ではなかったんです。

眺めてたっていうのは、昭和8年の時も家のとこには津波が来なかった。「何かあったら、そちらに逃げればいいね」って、隣のお婆さんなんかも言ってたんで、だから大丈夫っていう気持ちがあったし、お爺さんお婆さんにも、「ここには来なかった」って言われてたんで、安心してたんです。それで逃げなかったんですけども、あまり強かったんで、それでその漁師さんの方と逃げて、どうにか命拾いしました。

そして、引いて行ってからも動かれなかったんで、そいから今度階段に登って、海眺めたんですけども。自宅は残ったんです。自宅の脇の2階建ての倉庫は流れて行って。そこの隣にあったアパートの2階の部分が、倉庫に上がって。そこにいたアパートのお婆ちゃんは助かりました。

家の倉庫、そいから車は流れて行って。それを上から眺めてましたもん。あの屋根の色はそうだから家だな、窓がそうだから家だな、と思って眺めてました。でも、波が来てどうのこうのっていうのは、海に向かって背を向けて、こうして立ってたんで、海の荒れてるのは全然見ないんですよ。

私んとこの真向かいの魚市場の屋根まで水が来てっていうの、そういうの全然見てないんですよ、テレビで見ただけなんですよ。その時は、水は冷たいとは感じなかったんですよ。流れてきた水は、そんなに黒いとかそういうのじゃなかったですよ。油も感じませんでした。臭いもきつくは感じませんでした。避難所はこのパークホテルでした。

移動販売で家の人は車で岩泉方面に行ってたんで。そっちの方が心配になって、連絡取りたくても電話は通じないし、そういうのが2日続きましたね。連絡しようがなかったんですけども。山道通って戻って来ましたったけどもねえ。

そん時は寒かったんで、2階まで水が入ったんだけども、いっくらか濡れない洋服があったんで、みんな脱いで取り替えて、風邪もひかないで。私の場合は、押し入れの高いとこに置いたのがいくらか濡れないであるんで、それを着て助かりました。

その後、家は全壊で壊しました。柱は何ともなくて家も良かったんですが。2階の方は水は上がったけども、障子もそのまんま閉めたまんまの格好で、何ともなかったんですけどもね。やっぱり水が上がったとこなんで、上まで来たしっていうんで、全壊して…。今、被災した前の所に準備してます。

2　熊野町

□　松下信子さんの話

昭和11（1936）年生。熊野町。お飾り屋。
平成26（2014）年8月11日、話をうかがった。

□　野田和子さんの話（途中の談）

昭和38（1963）年生。八木沢。主婦。信子さんの娘。

私ここさ嫁いでから54年になります。その前からうちの人とここのお爺さんっていうか父親とお飾り屋をやってたんで。それよりももっと古くからやっていたのかなあ。とにかく私で54年、子育てしながらね。まわりからは「お飾り屋さん」っていわれています。1年に1回の市場の出店というか市さ出て。やっとお得意さんのお客さんに町で会っても「お飾り屋さんだねえ、元気だねえ」なんていわれたりしますよ。お客さんは1年に1回だから、なかなか会うこともないからね。魚菜市場さ朝買い物に行けば、「お飾り屋さん、うちのも買ってって」とか、いわれるようになりました、お飾り屋の顔で。

次の代にね…、おっきい娘（野田和子さん）だども、一所懸命手伝ってもらっています。だから、私は託したいと思っています。絵は描いてました。家でやってっから子ども見ながらでも、まずできるからずっとやってました。うちの人だって、船さ乗ってたったから、船さ乗って漁がないときとか、切り上げしてから仕事するような感じ、結局内職ですよね。これを夫婦で継いで商売にっては、ちょっと生活が…。

描くのは春先から描いて、今月はもうお盆だり、休むどもねず、やっぱり手数だもの、手仕事だからうちの原画で。昔は全部手で描いたんだって。今は間に合わないため、原画もって印刷屋さんに印刷してもらって、あとはのり付けして、色付けして、順番にでかしていくんです。原画は黒の部分です。あとの色付けは全部やってます。時間はすごくかかりますよ。

一応縁起物だから、汚さないように気を付けて描かなきゃなんないため神経も使います。吟味して描かなきゃいけない。買うお客さんだって、神棚に供えるというためだから、きれいなのがいいもの。「お飾り屋さん、ここしみが付いてるよ」とかって、いわれることありますよ。大きな色絵は、1時間はかかるね。1色塗って乾かしてから次の色入れないと、和紙のため染みだりしてうまくいかないために、必ず赤さ塗ったら次乾かして、この黄色の色塗るとか順番に塗っていきます。

この絵は「お飾り」って呼んでいます。ちっちゃな鯛とか巾着とかね、そんなの描いたの貼ってる方もあります。年末、30日か31日あたりに大掃除してから貼るような感じですね。日のいい日とか大安とか、そんな日をみてね、たいていは、大晦日に入る前かな。ちゃんと掃除して、神さまのお札貼ったりとか、そしてお飾りを貼って、年取りを迎えるって感じですね。

お飾りは1年中貼っておきます。そして、新しい年を迎えるときに取り替えます。古くなったお飾りは神社さ持って行って焼いてもらうとか、自分の家で倉庫の方でお客さんが持って来たのを焼きます。

お客さんの好みもあって…。お飾りの形も、色もほとんど替っていません。この顔料っていうのは、粉になったのが顆粒になったような…、絵具とはまた違います。

これは1番大きいもの、1メートル80、「いっけん間」というやつで、絵柄はちょっと違うけれど同じお大黒、恵比寿さんで。その家の好みもそうだし、その家にかわりごとが無ければ、毎年同じのを貼るつう習慣があるんですよ。今はちょっと若い方の関係でくずれてるかもしれないけど、そいでもやっぱりそんな習慣があります。色違いも代々伝えられてきたものです。

その年に不幸があった家は、お飾りをしません。1年外して次の年にやります。あとはまず、四十九日、百か日が過ぎて、貼る方もあるけど。「家はちょっと不幸があってだめだったから、じゃあこっちにするかな」っていうお客さんあるんですよ。そのまま「前のと同じでもいいですよ」っていわれるお客さんもあるし。

このごろは気分転換で、「黒いの貼ったから、こんどは赤いのにするかな」っていうふうな、そういう流れにもなってはきているけども。

前は「これはこれ」とか決まった絵を買うし、「ここの絵がいいから買う」とか決まってらったけど、ちょっとずつ変わってきているようです。

（野田和子さん談）

何年か前に花輪という部落さ行ったとき、そこの家で「10年何にもなかった」って。「それだどもお飾り屋さん、なんか何にもねえのも、また同じのを貼りたいけどどうしたらいいか、落ちそうだ」っていうのね。「だからのりの効果がなくなったんだし、10枚分、何枚も貼ってれば重みで取れてくっことあるから、それは取ってお庭で焼いてね、また同じのを今年から貼ってはどうか」って。そんなことを聞かれるお客さんもあってね。

横浜の笠原商店という問屋さんが来たったんですよ。そして見てて、「ああ、いい顔してるなあ、かわいい顔してるなあ、怒こってねえな」っては、ほめられたことがあるんですね。それから、新聞記者の方が市場をこうざあーっと見て歩いて、「ここの顔が一番いいな」っていわれたこともあんですよ。なかなかそういってもらえないから、うれしいですよ。何十年も前ですけどね。

「震災に遭って流れたから、神棚は無くなったから、仮設（住宅）には神棚は無いからお飾りはやらない」と。そいでもやっぱり落ち着いて、2年ぐらいなったらいずれの仮設の住宅でも、「いっときは自分の家だから、せめてちっちゃいのでも貼りたいから」っつうお客さんもありましたった。でもやっぱり、なかなかうちらも、それはちょっと響いてます。

あの日、私はマッサージで接骨院から帰って来たんですよ、2時半ぐらいかな。お茶飲みしてたんだった、1人でねえ。それでねえ地震になって、たまげてとりあえずガス（栓）ひねったり、それから2階さ上がって。ここから少し海が見えるんですよね、家で。そしたら、いやあ、どうして風も吹かないのになんだか黒い砂煙が、こう押し寄せて来るんだもね。それが波だったふうだもんのう。そいでたまげて、下ささがって、熊野神社さ上がったんですよ。そしたら、みなさんもいっぱい上がってました。

私はああって見てました。そしたら、観光船だったのに気が付かなくて、私は県北バスだと思ったんですよ、観光船とバスと見違えて、何でこんなとこにバスが来てるのかなと思ったんですよ。そして、よくよく見たら観光船で、こう流れてきて、鍬ヶ崎の町さ上がったんだ、そんな感じでした。私いつもこっから見てれば、きれいな水色の海見てんのに、その日は黒くて砂煙のようなもんだったの、それが津波だったんだ。それはたまげました。

何だか揺れてたまげて、どうしたらいんだか、うろうろするのも変だけど、行ったり来たり行ったり来たり、1人だからどうしたってねえ。逃げようと思って、1回神社さ上がってって。それから戻ってきて、ちょっと寒かったから、上さジャンバーはおって、また神社に行ってみたらば、「仏さんの位牌がガタガタって、直してきたども」って、同級生がねえ。「そんだどもいつまでもやってられなくて、やっと神社の前まで来た」って。「波に追いかけられた」って。

津波は仮設の辺まで、あとは神社の鳥居が壊れてなくなって。もう、そうしているうちに、下の娘から電話がきたときは、そのときは電話も通じなくて、「どうした」ぐらいだけでねえ、だめだった。なんとか高台さあがったり、ここまで波が来なかったんで、まず安心しました。

私の実家が、ここから歩いて10分ぐらいんどこにあるんですよ。妹が比較的海岸の近くにいるんです、そいで車をこっち学校さ持ってきてて、そしてから避難しようと思っていたんで、したら「はあ、だめだ、波が来たっけに、行がねえけに」って、妹もここにいたったんですよ。引いた後見だら、もう小学校の校庭まで波がきて、そして車も水浸しになって、「まあ、どこさも行かれねえから」って、うちさ泊まって次の朝になってから、「うち見さ行こう」っつうことで、この辺から上がって国道さ出て、そしてまず何とか実家たどり着いたの。

屋根が見えたから、「ああ、大丈夫だが…」って下がったけど、行ってみたらもう、そんなに広い道路でもなかったけど、波に押されて乗用車が1台上がってたけど、うちの実家ももうすっかり波が入って、

おひなさまも片づけないまんま、「おひなさまみんな無くなったあ」って。全部はあ、お勝手もめちゃめちゃ。2階はそれでも波が上がってなかったども。冷蔵庫は倒れていて。

とりあえず2階さ上がって、着替えをいくらか持って、冷蔵庫にあるのを2人で大丈夫なのを分けてしょって、そして、こう山回ってまた来ました。だって、食べるのもないし、水もないし、電気もないんだもの。

それで、あの地震が来たから、水が必要だから、とりあえず使いの水でもいいけに、私は風呂さも水溜めて、そして今はバケツたってそんなにあるわけでもないしで、ボールにも水汲んで。ここはプールがあったんで、トイレの水はあそこから汲んで来て使いました。風呂の水も別に自分たちの風呂だから、食べ物には使わないけど、なにか洗ったりするのには、それでも使えてよかった。

水道も電気も1週間くらいかかりました。車で持ってくるけれども、なかなか貰いに行くのも大変だから。食糧はなんとか持ってたもんを、自分でまずやって食べて。その辺は困らなかったどもね、お米あったからご飯たいて、食べたけれども。それだからって、小学校の避難所さ行って、水だのおにぎりだって、それはだめだって、ねえ。

水道が止まったので、避難所の鍬ヶ崎小学校に水を貰いに行ったらば、「そこは避難している人たちの水だから、汲んでいっちゃだめ」っていわれて。ペットボトル持ってったんですけど、後ろからがあっていわれて。「えっーだめだ」って、私たちだって水が出ない。

確かに家流された人はもっとひどいけど、うちがあっても水も出ない、それは一緒だって思いながらも、何かだめなんだっていわれて、そんで1本途中だったのを持ってきて、「すいません」とかいって。今思えば、それはみんな同じだったんだけど、と思ったけども何にも言えないまま、だめだって言われれば…。「だめですよ、ここは避難所の水ですから」って。えーって思って。

（野田和子さん談）

私たちもあるっていうもんで、行ったの、お水貰えっからと思って、そしたらだめって、何ともならない。うち流された人は大変だったけど…。そんなこともあったしねえ。

でも、「こっちの家の方さ、早く水も電気も来たので、私1人でいるより来た方がいいよ」っていうから、娘の家に避難しました。

私は八木沢っていって、磯鶏から山手に入った方なので、津波も見ることもなく、こんなことが起きてるってことも知らないで。地震はたしかに揺れとか怖い思いしたけど、後で鍬ヶ崎の写真を見せられて、ひどいことになってんだけど、それがなんなのかがよくわかんなくて、写真見てもこれ何みたいな感じで。「津波でこうなったんだよ」っていわれて、「ああ、ああ」って。

（野田和子さん談）

立ってあったのが、電信柱が倒れていくのが見えて…。そしたら神社さ上がってったら、その家さ流された旦那さんが、「どれがうちの屋根なんだか」、「どれがうちの家だべなあ」って、屋根がくっついてっから、「うちの屋根はどんなだったか」、結局記憶してねえ。「ずっと押さってくっついて流れていくから、わかんねえ」、そんな旦那さんもおりました。

震災後は、自分たちは家があってこんなお飾りもあって、正月迎えんだものなあと、お飾りを飾ることができっからねえ、それがあるんじゃないですか。買う人は黙って買って。縁起物でお祝いごとでしょ、だからやっぱり自分たちだけ祝ってね、楽しい気分ってことでもないけど、やっぱりその辺が、震災に遭った人、流された人と流されない人とは、ちょっと気持ちが違ったがね。今は落ち着いて仮設にいる人でも、「神棚造ってみっぺ」っていう気持ちになったけど、初めのあたりはその気には全然なれなかったんですよ。

知っている接骨院の先生の家も流されたんで、「なあーんに、盆も正月もねえ」ってゆったって。だから、お客さん何にもいわないで買ってったもんね。少しまず、何となくそんなときでも、「うちでも貼りたいが、

どんなのがいいか」とか、「じゃあ、これ買っていくからやってくれ」って、そんなお客さんもいました。なかなかこれも、だからテレビ屋さんに、「どんな気持ちで描いてっか」っていわれても、「喜んで描いてます」ともいえないし…。「なくなって大変ですよ」ともいわれないし…。喜んではいられないし、そうかって、いつまでも沈んだ気持ちでもいられないし、早くいい年が迎えられるようにすればいいなとか。

馬も牛も豚もあるし、稲荷さんもおかめさんもあるし、ただお財布とか、お供え、山の神さまとか、スルメ、イカ釣りの船…。牛を飼ってる方は牛舎に貼るんです。玄関に貼ってる家もあります、牛の絵は。馬は今、昔飼ってらったからって買ってる方もあります。お稲荷さんは自分ちで神社祀ってる方。おかめさんはお勝手が賑やかでいつも笑ってるようにって、お勝手さ貼ってますって。みんなひっくるめてお飾りっていいます。

「お飾り市」っていいます。「お飾り買いに魚菜市場に行くすか」って。お父さんが亡くなったとき、私がお飾り屋さんの当番に当たったんですよ。本当に本当に、私もうちの人が生きてやってらったから、全然こうなんだよっていわれても、はいはいってだけなのに、それがこんだ自分の番になって、本当に弱りました。

山田の方では、「蓬莱（ほうれい）屋さん」っていわれんです。私も初めはわからなかったけど、これは宝が来るって描いてあったなあって思って。宮古、この辺はお飾り、お飾り屋さん。

震災を境にして数はちょっと減りました、私も。田老の方から、山田の方から来るお客さんもあったり、魚菜市場でチラシ出したりとか口コミで広まったりで。山田の人だね、うちまで訪ねてきてくれたお客さんもいました。この前、東京の方だって、「山の神さま欲しい」って、そんで2人いるのと1人のとあるって私いったの。そしたら「どっちだかな」って。「そんじゃあ2枚送りますか」って送ってやったんだ。

3　鍬ヶ崎上町
□　阿部勝久さんの話

昭和41（１９６６）年生。鍬ヶ崎上町。包装資材店経営。

平成26（２０１４）年8月11日、話をうかがった。

3月11日の津波の被害で、本店の建物は残ったんですけども、2階まで浸水しまして、会社の前に漁協さんの冷蔵庫があったんで、直撃というよりはまわってきた津波で浸水しましたが、中は全部ぐちゃぐちゃで、置いている在庫も全部だめになりました。

グループ補助金のグループの中に入れていただいて、ここを直させていただきました。もともと父が経営している会社でした。父が２０１１年2月の初めの震災の約1か月前に倒れまして、それで関係各位と相談した上で、急きょ父の会社から、私の会社に直して、3月から開業する準備をいろいろやってました。

当日も駅前の岩手銀行に手続き等で回ってまして。銀行の中で地震に遭いまして揺れがなかなか収まんないで、急きょ揺れてる最中に車で移動して、本店に戻ってきました。

変な話ですが、津波が来ないだろうではないんですけど、大なり小なり皆さんどっかにそういう気持ちが少しあったと思うんですよね。私もまさかと思いましたが、ただいちおう揺れが大きいので、ちよっとまずいんじゃないかと思って急いで会社に帰りました。

２時46分、その時は本店のメンバーは、たまたま全員3時の休憩に合わせて帰って来ました。私が来る前にみんな戻って来てて。男性陣は浄土ヶ浜の高台に車の移動をしてくれて、女性陣は中の重要書類を取りまとめして、私の車が来てそれに全部積み込んで、ちょっと揺れが大きいから、念のために避難しようかって話をしてたら、車を置いてきた社員から、宮古湾の水が引き始めていると。やばいぞということで、急きょみんなで避難しました。いちおう念のために戸締りだけはして行ったんですけどね。

私は街中のホテル沢田屋さんの並びの上に、新町店兼実家に避難して、あとのみんなは浄土ヶ浜高台に逃げたんですがね。1名の社員だけこちらの方に避難して来たので、山手づたいに気を付けて帰るように指示して帰しました。

後はだれも来ないのでみんながちゃんと逃げたかの確認と、県立宮古病院に、父が入院していて母が看護でいたので、従業員の安否の確認と様子を見に行こうと思って、ＮＴＴの前の道路を戻って来た時に、宮古漁協のマリンバンクのあたりか、塩屋さんあたりの間を、車で走っていたら、川沿いの防潮堤の向こうに、いつもだったら泊まっている船のアンテナしか見えないんですが、船がだんだんと上がってきてですね、ひっくり返って赤い船底を見せたまま、上流に流れてゆくのが見えたんですよね。

やばいと思って、無我夢中でアクセル踏んで、田老方面に上がって、高台の測候所の少し手前あたりで車を止めて、振り返りましたら、川沿いを水しぶきをたてて津波があがっていくのが見えた。津波っていうより水が上流に逆流するのが見えて。私が車で走っている時は津波は溢れなかったんですが、その後、すぐに溢れ出したりで、私も間一髪でした。反対側の道路の測候所の方から、鍬ヶ崎方面が見えるんですけど。宮冷さん（宮古製氷冷凍工場㈱）は高い建物なので見えたんですけど、私の見間違えでなければ、須藤水産さんが見えなくなったんですよ。

せっかく代替わりしたのに…、ああもう、これでもううちも終わったなって思いましたね。そこでしょぼくれてもしょうがないので、まずは安全確認だということで、国道45号から浄土ヶ浜に入って行く橋の方まで走って、蛸の浜の上に行きましたら、避難したけっこうな人数の人が橋の上に立って、海を見てんですよね。

私は地震があったんで、橋の継ぎ目とかもずれる可能性までも気を付けて運転して行ったんですよ。みなさんが止まってるんで何だべと思って降りたら、蛸の浜の水がすっかり引いてて。たぶん水深5、6㍍よりもっと深いと思うんですけど、そこがすっかり底が見えて、やばいなと思って、そっからケイタイでパシャパシャと撮って、すぐに移動して従業員を探したんですけど、見つけられなくて、そっから駐車場内ぐるっと見たんですが見つかんないために戻ってきて。蛸の浜の橋も高いから、大丈夫だと思ったけど、もし足元すくわれたら怖いなと思って。ただみなさんが一所懸命写真撮って、大変だ大変だって騒いでいました。

私はもう1回病院に戻って、親父が大丈夫だというのを確認して、後はおふくろにとりあえず、「ここにいなさい」って指示をして。そっから、次は食べ物がないなと向かいのローソンに行ったんです。

そしたらすごい行列になっていて、地震で停電になっていて、レジじゃなくて電卓でやってて、当面の飲み物と何かおなかの足しになるものと思って。カゴ2つも買いましたけど。でも、みなさんも同じような感じで、行ったらごはん類パン類は一切なくて、簡単な洋菓子だったりとか、お煎餅だとか、飲み物がまだありましたから、私が行ったときには。それを買うのに1時間以上かかりまして。

それを持ちながら、今度もう1回浄土ヶ浜の第三駐車場に行ったら、車に乗り合わせていた従業員に会ったんで、今後の指示をして食料と飲み物を半分分けして、半分は持って帰ってきて、その日の夜は私もそのまま病院に…。

私がはっきり見た津波は、測候所から鍬ヶ崎に来た津波で、どす黒いわけではなかったんですけどね、きれいなグリーンじゃなかったことは覚えています。とにかく見たこともない光景でした。

ただ、目の前で建物が見えなくなって、それこそふつう見る波じゃないんで、映画のような大きな波じゃないんですけど、とにかく大量の水ががーんと押し寄せて来るような感じで、建物が一気に呑み込まれたんだなあと思ってですね。

最初に経験したのは川を遡っていく津波、それからすぐ道路の反対側から測候所の下見たら、ざばーんと来て、たぶん同じ津波じゃないですかね。それから移動してから、蛸の浜のところがすっかり海の水が引いているんで、たぶんそれでもう1回ががーっと引いて、また来たんですね。

ここの本店も親父が建ててから19年ぐらいになるんですけど、太い鉄骨で建てましたんで。建物は残ったんですよ、壁は抜けて中は全部ぐじゃぐじゃでしたけれども。若い頃、写真の仕事をしたことがある

んでねえ、知っている方には「写真を撮れば良かったのに」って言われたんですけれどもねえ、その時はとてもそういう気持ちにはなれませんでした。

4　日の出町仮設団地

□　小林一二三さんの話

昭和19（1944）年生。鍬ヶ崎下町。元会社員。仮設住宅自治会長。

平成27（2015）年3月8日、日の出町仮設住宅で話をうかがった。

3月11日は、私は崎鍬ヶ崎で盆栽とか山野草をやってましてね。地震、あんまり揺れなかったんですよ。家内に電話しても全然通じないし、45号下ってきたら渋滞で行けなくて、旧道回って鍬ヶ崎小学校まで来たら、水が校庭まで上がってて、そこの大倉辰夫さんのクルマが流れて、1階まで浸水して。

「うちの家内も終わりだな」と。愕然として、そうしたら島崎電器の奥さんが「やあ大丈夫だから、奥さんはどこか避難してたんだから」って言われて。茫然自失で帰ったんです。

山（崎鍬ヶ崎）に行ったら家内が来てて、「よく来たな」って。そしたら部落の自治会の奥さんが、チャルメラ（即席ラーメン）5つ袋持ってきて、「ああ、なんとかこれで生きられるな」と。それから、臼木山（通称・サクラ山）に行って高台から鍬ヶ崎見たらね、「これ夢なんじゃないかな」って。何もないし、用事もないし、茫然自失。涙も出ないんですね。「本当なんだろうか」ってね。陸中丸がどんと陸上に上がってね。すごい惨状な訳ですけどねえ。有料道路の橋から何人かが飛び降り自殺してねえ、もう前途悲観してだったらしいんです。私は見てないですけどねえ。

もし仮に、私がすぐね、自宅に戻れば、私欲たかりだから、権利書だなんだってやってね、母ちゃん逃げて、私の方が亡くなったんじゃあないかなあ。私がゆっくり構えてね、30分、40分で、もっと早く行けば、もうずっと下ってね。逆に先輩から、「おまえが亡くなったのかなあ」って。そういう意味では、家内の親戚が、「奥さんが無事でよかったなあ」と。

4年経つんですがまだ夢かなって、まだ消えないんですね。ただ、そういう惨状は見てるけど、現実として受け止められないというか、認めたくないっつんだか。自分にとっては自慢の家だったんですけども、借金して建てた。今70なんですけど。37歳で（建てた）。あとちょっとリフォームすればいいな、って時だったんですけども。

自分自身は津波の体験はしなかったんですけど、次の日に自分の町の惨状を見た時に、これ本当に夢かなって思って、そんな感じがして。それで、とりあえず山に避難したんです。

ところが、3晩目から物資が来なくて、何もないですね、支援というのが何もないし、避難している訳じゃないですから。そうしたら、避難している人は何でも貰えるんだっていう話ね。自分が山の小屋に住んで、下の自宅が流されて山の小屋に住んでいる、そういう人が何も貰えないっていうのは、おかしいんじゃないかって。

市役所に掛け合ったり、県に掛け合ったり、そいでもだめだって。県では赤十字に話しますけどって程度でね。「じゃあ、仮設に入っぺ」と。で、電話したら「7月11日で締め切ってます」と。「それどこで分かったんだ」って話。「広報で報告しています」っていう話でね。「広報なんて見てませんよ」っていう感じで。そうしたら「空いてました」ってありましたんで、「どこにお住まいになりたいんですか」っつうから、「崎山から鍬ヶ崎のあいだ」と。「上の方と相談してみます」っつう訳で。そいで「入居が決まりました」って。「申請書か何か出すのかな」って言ったら、「住宅課に来てください」って。

お陰で仮設に入って、4年になるんですけどね。なんとはなしに、自治会長なんつうものをさせられてですね。ここは一番新しい最後の仮設じゃないですか。私が8月の4日かな、ここに入ったのは。こういう仮設住宅に入った人たちが優遇されてね。住宅の下だけ流されて、電化製品全部流されて上に住んだりね、自分で仮設造ったり、そういう人が全然優遇されないって、すごく憤りを感じてね。市に行って交渉すんですけど、担当者は下向いて上向かなんですよ。どうしょうも

無いんですよね、あの人たちもね。

姉が来て貰えるって話なんですよね。で、市長にも話したんです。「不合理じゃないか」って。同じ災害なのに、たまたま（住宅の）下が流れて、たまたま上が空いてたんで住んでいる人、こういう人は何にも貰えない訳ですよね。だから、私は物資とかそういうのがあったんですけど、鍬ヶ崎小学校とか被災した人たち、そういう人たちは正常な神経じゃないから、「おめえたちは関係ない」とか「おめえら来っとこじゃない」って。

こんどは90人いたのが、弁当が２００くらいになったんです。こんどは関係ない人、被災しない人、そういう人も恩恵に被っていたった訳ですよ。行政は何も言わなかったんです。でも周囲からいろいろあってから、罹災証明書を提示しなければ…。実際被害に遭ってる人が恩恵を被ることができなくて。仮設に入ったら何でもある、テレビ・ラジオから冷蔵庫からね、目覚まし（時計）から爪切りから歯ブラシから屑物入れ、全部一式ですもの。米が10キロね。今回の災害を通じて、行政も大変なんだろうけれども、何回も話をして。

鍬ヶ崎小学校は避難所なんですけど、生徒はみんな熊野神社に避難したんです、あの高台に。校庭はもう浸水してますから。私が行った時には屋上にも人がいましたね。３・11以前に、３月に避難訓練をやるんですよね。そいで私も会長やってたもんですから、避難訓練やって。

津波が３メートル来るって話で、ある方がたいそう憤慨したったんです。３メートルだって、嘘ついたって、気象庁はすべったの転んだのって。その人が自転車で海さ行ったらしいんですよ、３・11の時、津波さ見に。そいで、ようやく屋根伝わって助かったんですけど。もし死んでたら物笑いですものね。すごく怒ってやったんです。いわゆるてんでんこってやつですけど、ただ逃げると。常に夫婦でも子どもらでも話して、どこさ逃げてどこさ連絡取れるとこさ、逃げろとね、これが鉄則じゃないかなあと。

むかし、子どもの頃は私、海のそばだったんで見さ行ったですものねえ、津波って言えば。ざーっと水が引いてってね、また逃げたりして、それだけ大きい津波は来なかったんですけど。小さい頃、宮古港に死体がこう重なって、なに津波だったかの記憶にはないんですけども、そういう記憶はあるんです。

避難訓練のときはサイレンが鳴って、鍬ヶ崎小学校に行って、まず町内何人参加したって、うちの方の町内は町内で、それを自治体、行政の担当者が来て、それでうちの方は何名、何名って。その時に、いの一番に避難してきた人が、犠牲になったんですよね、３・11でご夫婦が。

鍬ヶ崎小学校のそばですからね。私の盆栽仲間の先輩も顔を出すけどねえ、「防潮堤越えて津波が来ない」って夫婦で見てたったらしいんです。「何でみんな逃げんだべなあ」ってね。清水川を上がって来たと思うんですよね、鍬ヶ崎小学校まで津波が来るって、私も想定しませんものね。

昔っからというか、先人っつうかね、蛸の浜を越える津波が来れば、鍬ヶ崎は終わりだって、言ってるもんでしたもんね。あれは越えないもんだっていう認識ですものね。それが越えたから、（宮古湾と蛸の浜の）両方ね。私の親戚も安心してたから。裸足で逃げたって、今、助かってここにいっけどね。天災っていうのは想像がつかない、そういうもんかねえ。

□　田中登世子さんの話

昭和18（１９４３）年生。鍬ヶ崎。主婦。平成27（２０１５）年３月13日、鍬ヶ崎小学校（グラウンド）仮設住宅で5名の方から話をうかがった。

私はその日の午前中は、漁協の地区別研修があって、藤原でみなさんと会って、勉強会をして。思うより早く終わったんですよ。そのまま車で自宅まで来て。家の近くで、また明日のことを相談しながら、家さ帰って行ったのが2時なんですよ。

少し疲れたから寝て、その時に地震が来たんですよ。大っきな地震が来て、たまげて1回は出たんですけど、昔のことであっても地震が

きたらば、戸を開けてガスを止めるっていうのも頭にあったから、それをして、いったん家さ入って。お父さんが台所見たっけ、もう台所もはっちゃかめっちゃかなってたからって。

それよりまた大っきなのが揺れたんですよね。お父さんが「これはとんでもないから、大っきいのが来ると思う、だから逃げろ、逃げろ」って。お父さんが小屋に行って準備してきて、私も寒いからって、2階さ上がってって着替えをして。3日ぐらい前に避難訓練がありましたよね、持ってく物は準備してあったから、リュックサックを背負って。みんな出はって来て。近所の人たちを「津波が来っから、早く出はって、出はって」って呼びながら。みんな出はって来たんですよ。

隣近所はいなかったけど、向かいにいたったので「出はれ」ってゆったがその人は、出たり入ったりばっかりして。「何してんの」っつったの。「ホトケさま持ってかねばなんない」、昔の人たちはホトケさま持って出はるだってね。私はさっと入れたから。初めて入れたの、そのホトケさまを。

大っきな地震で怖かったけど、広いとこさみんなを呼んで、年寄りとかいったんここで落ち着いて、「地震さ収まったら、また行くべし」って、学校のプールの前まで来たんですよ。

今考えれば、津波というのをあんまり知らなかったから、だから、ここにいては海が見えない、津波ってどういう風に来んだか、そういう気持ちで上さ上がったんですよね、オクマンサマ（熊野神社）にね。上がって5分もしないうちに、向こう見たら、向こうからもう波が。波っていうより、冷凍庫の氷作る所、あそこの所がだんだん水が増してくるんですよ。そして、こっちから、船が4艘か5艘、それもいっしょに流れて来たの。

そうしてるうちに、竜神さまの出崎の所から波が越えて来て、大っきい波だったけど、きれーな波でした。きれいな水色、それが越えて来て、そしてどんどん来て、そしてるうちに、「家が流されるー」って見て。見てるうちに、今度はこっちでゴーゴー、ゴーゴーすごい音がするんですよ、こっち側でね。黒い煙が上がったりして。そして見てたったけども、私は怖くて見られなくて、しゃがんでしまったたけど。

今思えば、70になんだけど、何年も津波っつうのは聞いてますよね。避難というのもいつも聞いてるんです。でも、大したことないと思って。今までは準備はしても逃げたことない。そんな気持ちだったから。今回も来ないんじゃないかなっつう気持ちだったから。あれが間違いです。今は地震が来て、津波が来るったら、さっと逃げる…。

私たちが熊野神社に上がった時は、鍬ヶ崎小学校の子どもたちも上に上がっていて、誰も泣かないで静かに黙ってしゃがんでました。うちの孫がちょうどそん時は5年生（女子）だったから、孫がいたかと思って先に見て。大丈夫で。「ここに婆ちゃんと見たから」ということで、最後孫たちも婆ちゃんと爺ちゃんしかいなかったから、連れて帰って来たけど。

その後は、家ごとになって、「学校で毛布とか用意してるから」って言うから、うちの近所の人たちがそこにいたから、「じゃ、いっしょの行動しよう」って、いっしょに連れて来たんですよ。学校の2階に入って。私は9時頃かな。息子が消防に行ってるためで。息子はその日はいなかったから、夜探しに来てくれて。

それから息子たちは、日の出にいるから、車そこまで持って来たから、「行くべし」っていうことで、私ら3人乗せられて、息子たちの家さ行って。「消防出て行かねばなんねえから」って。私ら3人で丸くなって。地震も来るし、孫は「怖い、怖い」って泣きもしないけどね、我慢して我慢して。

今、4年生の子どもはしゃべっても大して感じないんですよ。大っきいのは、今、受験だ何だってやるものいっぺえだから、後でゆっくり聞かなきゃなんないなあって。

「あの晩げはなあ、ほんとに星がきれいで、すごかったよなあ」って、空見たらすんごく星がきれいで、「見て見て」って。「こんな震災が来るという時は、こういうきれいな星が出るんだってよう」って教えて。孫は怖いから寝ないけどね。

朝になった時に、「家を見に行こう」って、測候所の方まで連れて来

て、「怖くて、行かない、行かない」って言ったけど。「これはね、2度と来るもんでもないし、2度と見るもんでもないから、目に焼き付けなきゃだめなんだから」って、無理やり連れて来て、「あそこが婆ちゃんの家だよ」って、みんな見せて教えて、そして帰って来たんですよ。

お母さん（お嫁さん）だの小ちゃい子どもたちは、実家は茂市だから、仕事場が向うだから、向こうさ行って。次の日は、やっと来たって。日の出に来たんですよね、子どもがいるから。そうしたら、その孫が今まで泣かなかったのがお母さん見たら、とっさにわっーと泣き出したんです。それまで全然泣かなかったのね。初めて泣いて。

だから、忘れられないんですけども。それでも、命を落とさなかったけど、津波に対して考えがちょっと甘かったなあと、今思えば。息子家族と4か月ぐらい仮設ができるまで、いっしょにいました。

□　大澤ヨシさんの話

…年生（公表せず）。蛸の浜町。主婦。

あの日は、私はね、パーマ屋さんに行ったんですよ。そして、11時半ぐらいかな、帰って来たのが。その時にパーマ屋さんでね、津波の話してたったの。「津波が来る、来るって言ってっけど、いつ来るのかねえ」ってねえ。「とにかく、来るんだったら、逃げれるんだったらいいけどねえ、どうなんのかねえ」ってね、そんな話して。「やあ、こればっかりは、分からないからねえ」「今日来んだか、明日来んだか、やったがねえ」っつう話しちゃったの。

帰って来て、3時間ぐらいしたらね、今までにねえ揺れ方だったから、父さんがちょうどいたったから、「こりゃあ、早く逃げねばだめだぞー」って。とにかく、父さんがいなかったらば、どうなったかちょっとわかんないけどね。「早く、出ろ、出ろ」って言われたって、何かを持ってかねばっていう気持ちになってっから。

9日の日も大っきい地震があったったからね。その前からだけど、準備はしてたったから。もし万が一の場合は、これを持って逃げるっていうのをね。それを出すにねえ、もどかしいって言うんだかね、一所懸命やってんだども、はかどんなくてね。父さんは外から騒ぐ、「早く、来い」って。ようやくそれ出したんです。お勝手とかそっちのね、茶の間の方は全然どうなってっか、音はすごかったから。見る暇なく外に出たんです。

それから、「早く、車に乗れ」って言われて、車で小学校まで来た訳だ。その時は、あんまり人も出てなかったしね。ここに来ればもう安心だなあっていう気持ちでね、小学校の体育館の入り口んとこにいたらば、いいなと思ったら、「だめだ」って。「こんなとこにいたらだめだ、早く高いとこへ」って、消防の人たちに騒がれてね。

高台に行ったけど、普段あんまり運動しねえからね、どっから呼吸してっかわかんねえ訳、こっちの胸が。後は足と腿もね、動かなくて。それでも、がんばってがんばって。とにかく自分のだけでなくね、近所の人がお婆さん連れて荷物持ってたったからね、その人のもね、持って上がったはいいが、自分が動けなくて、それでもがんばってがんばって、ようよう上がったんです。

そしたら、そのお婆さん連れてた人が来ねえ訳。下の方にいたって言うんだけども、水かぶったんだっけどもね。あの時は生きた心地がしなかったねえ。これから先どうなんだかって、全然頭にねえ訳だ、ぼーっとしてね。何日かそうやってね、どっかが抜けたような感じだったからね。

下を見れば、すぐそこまで水が来てっぺしね。そうしてるうちに今度は、すぐそこの父さんだどもね、すっかり濡れて上がって来た人がいたんです。そうしたら、流されて来たんだって。蛸の浜から流されて、ようやく上がって来たって。熊野神社さ上がって来たったもんね。その人（カネコさん）は今、元気でいますけども。

団地さ上がってたら、どっこの家も暗いから、とにかく行ってトントンったらば、玄関に物がある訳。「何だ、どこさ行くどこか」ったら、「逃げっとこだ」っつう訳だ、中里団地でね。「何、ここまでは津波来ねえんだから」って。その晩はそこの家で泊めてもらって。電気も無えば、ストーブも無えば。だから、食べんのもねえ。ガスはあったから、ガ

スでインスタントラーメンごっそうになって。
それから、4日か5日ぐらいいたんだね。そうして小学校に来て、3階だったかね、あすこに1か月ぐらいいて。そして、体育館の床を取り替えて、市役所の人たちがいい塩梅にやってくれて。そこさ今度引っ越しだって。それから3か月ぐらいいたのかな。ここ（仮設）ができるまでね。
ここに来たらば、こうしてみんなと話ししてっ時は、忘れるって言うか。家にいると、何となく思い出すこともあっからね。
同じ境遇にあった人たちと話ししてっ時はいいけど。家が流されなかったっていう人たちは、ちょっとやっぱり違うもんね。なんぼ「ああ、そうだよねえ」「ほんとに、かわいそうだったがねえ」「大変んだったがねえ」っても、やっぱり違う。長い間にねえ。そういうのはほんとに感じますよ。
家は押されてって、熊野神社のちょっと下まで行ってらったね。傾いて、家建てて18年目だったから。下は全然抜けてって、他の車とか何かが何台も入って、バイクとか入って。2階は斜めになってるしね、自衛隊が来て、何かやるようになってから出て来たのが、留袖、喪服とか、みんな泥んこになってね。全然持って来るような状態でなかったしね。自分が欲しかったなあと思うのも無かった訳。ああいうのは誰も持ってかねえことだども。その後にね、洗濯屋さんが来た時に、私の気に入ってたったブラウスがあったの。そうしたら、そのブラウスが洗濯屋さんに掛かってんの。孫が来た時ね、「あらっ、これっ、おれのブラウスだ」って言ったの。そしたら、洗濯屋さんも誰が頼んだんだって言わなかったもんね。
拾って歩った人たちなんだよね。けっこうそういうのがあったからね。行くっていうと、これは持って来てえなあと思っても、置くとこが無かったから。でも、次の日行けば無くなってんの、みんな。漬物の重石、こんな石、あんなのも無くなんだもの。泥棒が流行ったんだね。こっちの不幸に付け込んだ泥棒、許せねえなあと思ってね。ああいうのは、もうたくさんですね。

□　佐々木光子さんの話

昭和24（1949）年生。鍬ヶ崎・港町。主婦。
私は港町の自宅で、お茶っこ飲みしてました。大っきな揺れでたまげて、いちおう外に出て。また地震が来たから、たぶん今度は津波が来んでねえかなあって思って、いちおう着替えして、そして荷物を持って、車でターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）に行きました。ちょうどいかったの、そん時はお父さんいたから。津波を見んのがおっかなくて車の中にいました。だから、私は津波は全然見ません。私はお父さんとその弟と、姉、姉の子ども、きょうだい、甥っ子の5人で、二中に避難して、2週間いました。そして娘は、北海道の札幌にいたもんで、連絡があって、そして「こっちさ来て」って言うから行って、3か月お世話になって来ました。そして夫と2人で、向こうで3食食べて、…生活やって来ました。私は妹の所（藤原）に、今度は1か月ぐらいお世話になって。そして、ここ（仮設）が決まって、それからずっといます。みなさんと同じ時期が過ぎました。

□　加倉しづ子さん

昭和24（1952）年生。鍬ヶ崎（現在、佐原在住）。主婦。
あん時は、私はちょうどお勝手にいたったんですよ。地震が起きるほんのちょっと前に、お客さんが来たんですよ。「今この辺やってて、終わったから、ほんじゃあ、先に入って休んでて」って言って、座ろうか、座らないかっつうあたりに揺れたんですよ。「おうっ地震だ」って。普通の揺れじゃなかったから、おばちゃんがちゃっと立って、外に出ようとしたんですよ。
家はオクマンサマ（熊野神社）の鳥居のとこなんですよ。だから、「ここは昔、海で岩盤ががっちりしてるから、ここまで来るったら大変だし、どんな揺れが来てもここは物が落ったり何だりすっことないから、大丈夫だあ」って、のんきに構えて「座ってろ、座ってろ」って言ったんですよ。「うん、そうか」って、おばちゃんも座りかけたんですけども。もう尋常な揺れじゃなくて、揺れて揺れて、これでもかあ、これでも

かあっつうぐらい、すごい揺れなんですよ。

けっこう学校がすぐ近くだから、人の声がするから、「おばちゃん、津波はここまで来ないから、1回出てみるか」って言ったけど、おばちゃんは「1回、家に帰る」って言ったんですよ。「ほんじゃ、おばちゃん、(路地、路地と歩かなければならないから)帰るってもかえって危ないから、表の方へ行ってね」って、おばちゃん帰して、私はそのまま、着の身着のままで上にも羽織んないで、ちょこってその辺さ出はってみっか、ほんじゃって気持ちで出たんですよ。

プールの横にいて、花壇みたいになってるとこ、寄り掛かるようにしたんだけど。「まだ余震が続いているよ」「土がここ揺れてるよ」ってるうちに、大津波警報が出はったんですよ。「3メートルぐらい」って言ったんで。「なーに、3メートルなら、ここまで来ねえべしかな」ってのんきに構えてて。それでも、次から次へと避難用のリュック背負ったりとか、だいじな物を持ったりした人が来て。

近所の人も「なーに、ここまで来るったら容易なもんでないよ」ってるうちに、「第1波が来た」って言って、そん時は少なかったんですよ。「ほらな、ここまで来るったら、大変なことだから」って言ってるうちに、学校の生徒を引率した先生などが来て、「そちらさんたちは、ほんとにここでいいんですか、大津波警報出ましたよ、私たちは生徒全員引率して、高台に上がりますよ、ほんとにいいんですか」って、念を押してったんですよ。

だども、「なーに、あれだな」ってるうちに、寒くもなってきたから、そんじゃあ、いったん家に帰って、トイレさ寄って、そしてから羽織って。何かを持ち出すっつうのは、頭になかったんですよ。

高台に上がって、あらっ何かあの辺の台船だか何だかが、揺れてるような気がすんだねえ。白い泡みたいなのがこう帯状になったんですよ。あれっあんなのは何なんだべねえって感じ。それでもまだ津波が来るっつう頭は無いんですよ。そしてるうちに、その台船がどっかに行ったり何だりしてるうちに、そして、辺りをきょろきょろしてたらば、観光船が目の前にどんとあったんですよ。観光船が流れて来て、学校の門の辺りまで道路沿いに上がって来たんですって、上から見てる人たちの話を聞くと。そういうの見てないから、引き波でそこさどんと落ち着いたのしか見てないから、何で観光船があんなとこにあんのうっつう…。それでも他人事。わあっ、テレビで見るような感じだがねっつう、高みの見物、まさかこういうことになるとは思わないから。

そうしてるうちに、「あやっ、何かおかしいねえ」、こちらの家ともう1軒の間に、ちょっと隙間が見えるんですよ、そしたらそこの間をマークツーみたいな乗用車が、バックで吸い込まれて行くんですよ。子どもたちがタライに船を浮かべてぷかぷかって感じで。「あれっ、あそこ水温上がってんのかなあ、何か車ばっかが吸い込まれて行くよう」「あやっ、ほんじゃあ、乗ってるあれなんだべかねえ」って。それでもまだ、思わないんですよ、そういう頭がないから。

「おかしいなあ」って言ってるうちに、今度はそこにお酒造る菱屋ってありますよね。あそこの煙突だと思うんですけども、あれがこけたんですよ。「あれっ、煙突がこけた」、そしたらあの辺まで来たの。そしたら、家の車だめかなあっつう感じなんですよ。それでも頭は狂ってる感じなんですよ。

間もなくドミノ倒し、ベキベキ、バリバリ、バリバリっつう感じで、ものすごい真っ黒な砂煙。オクマンサマを上がったとこからは、波っつうのはいっさい見えない訳、家の目線で。遠くの波の陰で光って。そんだから、「えっ、そしたらそこまで来てんのう、えっそんじゃ、家まで来んじゃないの、そこで止まってちょうだい」ってるに、さあーっと流れて、そして私の目の前に、1軒すごく立派な家があったんですよ、そこの2階がきれいに、学校のあっちの降り口に、すとーんとはまったんですよ。

波がさあーと行って、家は無くなって、ああ終わったっつう感じだったんですよ。そして、お父さんと2人で上がってらったから、子どもたちは仕事だから、そして大っきい息子から電話がお父さんに入って、それっきり通じなくなってんですよ。2番目は、盛岡に仕事場を持ってらったんですよ。私は盛岡だから小ちゃい息子は大丈夫だなって、

息子から電話が入るってことは、電話が通じたから大丈夫だなっつうことで。

お父さんと私は、「寒っぶいなあ」って、雪がちらついてきちゃったから。オクマンサマの境内でドラム缶に火焚いてらったから、「ほんじゃ、ここで夜を過ごすしかないねえ」、それでも「小学校さ行って見るすか」って。毛布も、何にもなくって。「しょうがねえ、どうせ行ったって、横になれねえし、ここにいっぺし」って。そしたら、佐原にいる弟がこの橋を通って来て、お墓の方通って来て、迎えに来てくれたったんですよ。

それで、お蔭さんで私たちは弟のとこへ、その夜から、電気も消えてらったけど、嫁さんはテーブルのガスコンロで、「うまく炊けないこったけど、おかゆでもいんだっけ、まあ食べてべし」って、あったかいご飯を用意してくれて。そして、弟はイカ釣りの時期だったから、バッテリーを充電してあったんですよ。そのお陰で、電気もつけて、暗い思いもしないで、ストーブは反射板もあるから、あったかいとこであったかいご飯を食べて。その日から22日間、弟んとこに世話になって。

そしてるうちね、小っちゃい息子が帰って来たんですよ。まさかそんなになってると思わないから、事故か何かで渋滞してんのかなあと思って。何とかかんとか来て、そして裁判所辺りまで来ましたって。そしたらば、「どこさ行く」ったっけば、「鍬ヶ崎さ行く」ったっけ。「全面的に交通ストップで、行く手段も無いからだめだ」って言われたと。んだども、「おれには親がいっから、何どしても行かねばなんねえ」って、警察とやり合って無理くり、自分は山口川の方に行って。常安寺に水があったけど、無理くり上がって来ちゃって。そして、常安寺を越えて、こっちゃあと思って1回見たけどだめだなあと思って、弟のとこに来ちゃったんですよ。「ああ、いかった、いかった、父やんも母やんもいた、おれもこうして来た」って、帰って来ちゃったんですよ。

そして次の日、大っきいの（息子）藤原方面から歩いて来たんですって。歩いて行けば何とかなっからと思って。そして、市役所の前まで来てびっくりしたんですって。わあーっと思って。市役所からこっちは全面的に瓦礫とかで、道路っつう道路が無いから。これは大変だ、どこをどう行けばいんだべえと思って。でも、ここまで来たんだもの、諦めたらだめだって。

上ったり、下がったり、滑ったり、転んだりしながら、「なあど」を目掛けて来たんですって。そっから今度はとってもじゃない、何とかかんとか、そうしてるうちに、オクマンサマに着いたんですよ。私たちのいる所に。歩いてけっこうかかったって。そういう状態だったんです。

そして、22日間、弟のとこにお世話になって。息子が会社の関連のアパートが、1部屋空いたっつうことで、おっかねえから生まれた里に帰る人があって。寒かったけど、1部屋だけども借りられて。ここに来るまでそこにいたんですよ。

ベニヤ工場もすぐ稼ぐに良かったんですよ、そういう状態だったから、直して。大っきいのは1か月ちょとぐらいで、仕事に復帰できたし、今ここに小ちゃいのはいっしょにいるんですけども、それは鉄筋屋だから、忙しくなる時期だから。仕事が入ったんですよ。そして、お父さんと2人、その小ちゃい子とここにいたんですけども、お父さんも息苦しいから、自転車があったから、自転車をこいで自分は毎日、鍬ヶ崎に来るんですよ。

そしたら、そこの部屋に1人だけ残されて、周りを見たら瓦礫だらけで、ちょっとおかしくなったんですよ、私の方が。ごはんは食べさせなきゃなんないし。一時期お金があっても物を買えない時だったから。それでも、子どもたちの友だちらが野菜でも果物でもみんな持って来てくれたったから、実際何にも困んなかったんですよ。炬燵から何から全部、子どもたちの友だちが持って来てくれて、何一つ買わないで普通の生活ができる状態だったんですけども、そういう風に物が無い、そして出はった人たちはみんな帰ってくれば、ご飯ができてるもんだと思って。米なんかはいっぱい貰って、溢れるぐらいだったから。そいでもおかずになる物が無い。

ぱくっとガスコンロが一つ、短大生向きだから。そんなの考えたら

ね、おかしくなって。これじゃあだめだと思っているうちに、愚痴を言ってしまったんですよ。そしたら、息子に「ほんだら、お母さんも車出して、好きなとこ行けばいい」って言われたったんですよ。そん時、はっと思って。あっこれは、私まずいこと言ったんだなあと思って。みんなが一所懸命稼いでる中とかで。

それから、その辺を歩くことにしたんですよ。ホーマックとか、河南中学校の方に行ったりとか。そうするしかなかったんですよ。そうすっと、年寄り見つけて「私、津波難民でこうして、あれしてるんだけども」とかって自分から話し掛けて、「いやいや、それは難儀だったねえ、そんじゃあ、おらは何にもできねえけども、おらあここ下りて行ったところのすぐそばだから、お茶っこぐらい入れっことができっから、休んでがんせ」って、そうしゃべられるだけで、心が和んで、ねえ。そうして、わあーと思って。

そしたっけ、息子が今度は「ほんじゃ、お母さん、これでもやってって」ってね。自分もなかなか仕事だ何だりで買いにさ行けなくって。たまたま事務の人が宮古に行くったらば、頼んで買って来てもらってくれたりとかって。そしてからも、今もずーっとね、パズルは買って来てくれてるんですよ。そういう状態で落ち着いて、ここに来ました。

□　田中ユリさんの話

…年生（公表せず）。鍬ヶ崎・港町。主婦。

田老生まれです。昭和の大津波は、4歳の時に体験しました。こんだの地震の時には、家にいたったんです。息子と2人で住んでんだから。息子はちょっと浜の方さ行っちゃって。それで地震が来たために、戸を開けて、ガスの元栓止めて、裸足で外に出はったの、地震が来たからっていうことで。そして震えってたの、外で。そうしたら息子が来て、「母ちゃん、寒いけど津波が来るけど、いいとこある」って言って。普段リュックサックさだいじな物入れて枕元さ置いてんの。仏さまを風呂敷に包んで、手提げさ入れて、学校さ来るつもりで来たの。

そうしたら学校の入り口んとこで、年寄りの男の人が、「学校はだめだから、オクマンサマさ逃げろ」って言ってね。オクマンサマへ、そいからこんだ、来る途中、おれの息子は隣近所に、「津波来っから、逃げろー」って声掛けて。そいだから遅くなった訳だねえ。

鍵を開けてストーブさ火を入れて、そうして避難する人たちの座布団入れて、オクマンサマの窓開けて見たのね。そうしたら、市場の方がみごとに引けて行くのが見えた訳だ。引いてったがなと思ったら、今度は大っきいなのが来る訳。そうしたら、市場のヨコダ（魚を入れるカゴ）だとか、そういうのが流れて行くのねす。

そうしてるうちに、こんだ家の屋根が流れて来るの、こっちの方向へ。「おらが家の屋根でないべえか」ってしゃべっことして。それを見てたの。そうしたら今度は、蛸の浜の日和山の方から、こう波が来る訳だべし。あすこでこんだ、渦巻きになってね。波がこっちから来んのと、蛸の浜から来んのと、渦巻きになって。

そうして、そこさ避難した人たちも来て。そしたら、ここではおっかない状態でもう少し上がってって。今度は神さまのとこさ上がって。そのうちに、小学校の生徒が上がって来た訳だね。そして少し落ち着いてきたので、こんだ蛸の浜の親戚がいたの、津波に遭わない人たちがね。そうしたら、その人がねす、灯油を持って来たったの、神さまのとこさ。そうして2回も3回も来てたったの。蛸の浜の親戚の家行ったら、別な人と孫2人とお婆さんと、私の5人、お世話になったの、その家で。電気も来ない時期でしたべ。湯たんぽさ、お湯沸かして2つ3つ炬燵さ入れて、そこに足を入れてあったためて、ロウソクを立てて。

そしたら、心公院（寺院）からもロウソクがまわってねす、貰ったんだねす。こんだリュックサックさ、ペットボトルを入れて、心公院の裏山を2つ3つ越えて、山のヒラマツっつう沢から、水を汲んできた。水が全然無かったからねす。そして雪が降った時には、トヨさバケツを置いて、それに水がだらだらなったら、こんだ風呂場さ入れて。トイレさも入れて。そこの家に5か月お世話になりましたから。

そいで、おらの息子はオクマンサマさ泊まってらったもんね。「母さん、まだ忙しいなあ、まだ見られねえなあ」って言ったったども。自

分で屋敷のとこ、ちょっとわかんなかったっつったもん。どこがどうだかわかんなかったみたいで。そしたら、屋敷の角んとこさねす、ハマユリっつう、花咲いたったの。ターミナルかどっかから飛んできたんだか、その根があったたの。それを目当てに、自分の家だっつうのわかったった訳だのす。

そこさ行ったら、その時に涙が出たっだあねす。その前は全然涙は出なかったったども。その時にそこさ行った時に、涙が出て何ともやれないような感じだったね。そして、行くにも来るにも、自分の屋敷さ行くには、道路もわかんなかったもの。

その時に私を退屈させないように、ほどきものをさせたり、畑の草取りをさせられたり。お蔭さんでね、長居しちゃったの。今でもそこでお世話になっております。

鍬ヶ崎では菱屋さんの水を汲んだみたいですね。後はそこの日影(町)のね、坂上って左のとこね。カズヤの屋敷の下のとこんにね、後はそこの日影（町）のね、坂上って左のとこね。カズヤの屋敷の下のとこんにね。あそこにあったみたいだっけ。けっこうみんなは沢水でね、助かったんだよねえ。

鍬ヶ崎界隈では、「菱屋の水」は「命の水」であったと伝えられています。

（田中登世子さん談）

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第4章　宮古市街地

杉本栄子

はじめに

平成23（２０１１）年３月11日、宮古市街地は津波の浸水面積が48・4ヘクタールにわたり、浸水高はT.P.３・３～５・２メートル、最大浸水深は３・９メートル、浸水区域内の建物1千２７０棟の14％が流失するという被害に見舞われた。宮古市役所からJR山田線、三陸鉄道の宮古駅にかけて新川町、向町大通１～４丁目、中央通商店街（本町、新町、大通１丁目）大通１丁目商店会、末広町商店街、新町　黒田町の浸水深は２メートルから30センチであった。中でも閉伊川に接する新川町、向町の被害は人的、物的ともに大きかった。

これらの地域は宮古市の生業を支える港に近く、市役所が位置する中心地である。近年堤防ができ、建物が立ち並び、人々は生活の中で近くに海があることを意識することが少なくなった。

この地域は昭和22（１９４７）年のカザリン台風、23（１９４８）年のアイオン台風で、大きな浸水被害を受け、親世代から水害伝承が浸透している。津波に関しても「地震がきたら津波は来る」とほとんどの人は認識している。３月11日は地震の大きさに驚き、誰もが「こんな大きな地震だからきっと津波は来る」と思ったという。すぐに車や徒歩で避難した住民がいる一方、「津波は来るが、ここには来ない。来てもたいしたことはない」と、家の中に留まっていた人も多かった。防災無線のアナウンスを耳にしても、マニュアル化した言葉にいつものことと聞き流していた。

道路に黒い水を見た人たちも、それが津波によるものだと気づいたのは後になってからのこと、瓦礫や車が流されてきたのを見て、あるいは、「津波だ！　逃げろ！」という声を聞いて、初めて危険が迫っていることを知ったという。それからは無我夢中、全速力で駅方面に駆け抜けた人、あわてて近くの外階段のあるアパートや高い建物に上がった人など、まさに水との競争だった。

家の中にいた人は、外の物音で水に気が付き、慌てて自宅の２階に駆け上がって危機一髪。しかし、ほっとする間もなく、水の勢いの凄まじさに、ベランダから屋根へ、さらに２階の屋根へ、またより安全な隣の家の屋根へと移った人もいる。幸い２階に避難して一命は取り留めたものの、迫りくる水、押し寄せてくる瓦礫の山を目の当たりにして、その恐怖はいかばかりだったことだろう。「もうこれまで」と覚悟を決めた人も少なくない。

不幸にして、自宅の１階で逃げ遅れて、水門を見に行って流されて、あるいは避難途中で寒いからと上着を取りに帰ったために、命を落とされたといった方も多い。

宮古市街地で働く人の中には、田老、鍬ヶ崎、高浜などに住む人も多く、職場と自宅の両方に大きな被害を受けた。また、他所から仕事や買い物に来ていて、被害に遭った人もいる。

山田線を境に南側は津波の被害を受けていない。同じ生活圏内にありながら、その差は大きく、天国と地獄ほどの違いがあったという。南町に住む60代女性は地震の後、宮古小学校に孫を迎えに行った。そこに津波が来たために、家に帰ることができなくなった。翌日の昼ごろに船や車でふさがれた道路を遠回りして、線路を乗り越えてようやくの思いで家に帰ったが、そこは津波の被害を全く受けていなかったという。

難を逃れた人と犠牲になられた方の差はほんの一瞬、それもいくつかの偶然が重なったことが多いようだ。また津波の被害を乗り越えた後に、亡くなられた方も少なくないと聞く。災害で受けた心労が計り知れないものであったことと推察する。また、自宅の浸水は免れたが、停電、断水で避難所に一時避難された方も多く、日常の生活を脅かされて、不安な日々を送った人々は数知れない。そんな混乱の中で消防団の活躍はどれだけ人々を励まし、助けたことだろう。

5年が過ぎ、主要道路は着々と整備され、新しい道路が作られ、災害公営住宅も建ち、個人の家の再建も進んでいる。しかし、いまだに仮設で不自由な暮らしを余儀なくされている方々がいる。復興への道はまだまだ遠い。しかし、まちの人たちはお互いを思いやり、助け合い、復興に向かって着実に歩んできた。10～12商店街、女性のグループなどが街の活性化に、町内会・自治会は防災の強化など、日常の生活の中で復興に力を尽くしている。

＊各町内の世帯数、人口は行政別人口資料を基に、死者数は『東日本大震災宮古市の記録』第1巻に従った。証言の中で数字と一致していない場合もある。

1　新川町

新川町は明治12（1872）年から15（1882）年にかけて閉伊川の河川を埋め立てた地で、ゼロメートル地帯といわれている。南は閉伊川と接し、南端には古くから藤原と結ぶ宮古橋が架かっている。

また、主要幹線道路である国道106号の基点や、45号の一部である「宮古大橋」を有している。

昭和47（1972）年に今の市庁舎が落成し、行政の中心地となった。中央公民館、郵便局、宮古地区労働福祉会館、第一分団屯所（管轄区域＝本町、新川町、築地1丁目）などがあり、漁業家が多く、水産加工が盛んであった。現在でも水産加工を営む人が在住している。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は42、人口は81名（男44、女37）であった。この地域の特徴として、仕事は新川町にあるが、住まいを他所に移している世帯もある。

「3・11」の津波は新川町の堤防を越え、市役所の2階まで浸水（3・5メートル）した。第一分団屯所の浸水高は1・8メートル、町内の家屋は1階が壊滅状態となった。市役所前の歩道橋を襲う津波の映像は、繰り返し全国に流された。死亡届者は7名である。

震災後、平成23（2011）年8月の世帯数は一気に28、人口51名（男31、女20）に、平成27（2015）年3月1日現在は19世帯、人口39名（男21、女18）に減少した。他所に避難、または仮設住宅に住んでいるため、実際に生活している人はさらに少ない。町内会の活動も一時休止状態であったが、徐々に動き出そうとしている。

(1)　花坂 康太郎さんの話　昭和27（1952）年生

新川町1　花坂印刷工業㈱代表取締役、宮古商工会議所会頭

平成26（2014）年11月21日、社内で伺う。

印刷会社の2階だけが残って

ちょうどこの新川町の会社にいたんですよ。すごい揺れで、長く続いたために、過去の経験から津波は必ず来るだろうと思った。積んであった紙類が全部倒れてね。どうしようもないから、「とりあえず逃げろ」と従業員はみな帰して、私は3時にお客さんが来るので、それを待っていたんですよ。津波が来る10分くらい前かな、自分が最後に逃げたんですけど。車で、山に向かって行くと混むから、駅の方に真っ直ぐ進めばなにもなかったから。田の神（旧山口地区）に工場があるので、そこに取りあえず行った。多分ひどいことになっているだろうと思いながら行ったら、案の定印刷物が全部だめだった。それを少し整理して様子を見ていた。

夕方山口川上流にもどんどん瓦礫がくるわけだよね。あ、これはすごい状況になっているなと思って。魚菜市場のあたりまで行くと水がきていて、全部通行止めになってね、その時点で、ハー、おらほのところはもうだめだべなと思った。自宅は山の上の方、西ヶ丘なので無事だった。

12日に細い山道を車で来られるところまで来て、山の上から見たらなにもない。また少し下りて、ぎりぎりのところまで来たら、会社の1階部分が全部流されて、2階だけがポンとあった。会社はもうだめだと思ったら、ショックを通り過ぎて、笑うしかなかった。2階に金庫があったから、金庫は大丈夫なのかなあって…。

次の日はどうにか会社のところまで下りてきて、下はなにもないか

ら2階の金庫だけを見てね。濡れていたんだけどね、その中に印鑑とか貴重な物が入っていたから、これだけあれば取りあえずはいいかってことで。あとはどうしようもない。

結局、津波でぐるぐる回って、1階は印刷工場で重い機械があるから、ガリガリとミキサーみたくやられてしまったんじゃないかな。だから下は工場も事務所も全然何もない。機械から何からなにまで全部だめ。2階の金庫だけ、それだけが残った。

年度替わりで印刷用紙も大量に仕入れてあった時期で、それがすべて駄目になったのは痛かった。

2週間後に田の神工場、1年後に仮設工場で再開

ただよかったのは、仕事のデータとか、最新のコンピューターからなにから全部、田の神工場にあったから、仕事をするには全然支障がなかった。それで震災から2週間目ぐらいに、取りあえず田の神工場で作業を始めた。3月いっぱいは仕事になんなかった。3月中に納めねばならない物もずいぶん納期が伸びてしまった。

パソコンと小さな機械はあったけど、6月にオンデマンドを設備して、それ1台である程度まではできるようになった。1年くらいしてから、市が旧千徳中学校に仮設工場を造ったので、印刷機とかある程度の機械設備をした。そこで、震災後に一度解雇した社員を再雇用したが、世代交代でほとんどを新規採用に切り替えた。仮設工場は大きいだけで、天井が高い鉄工場のような感じで、夏は暑いし冬は寒いしね、印刷屋向きではなかった。そこには1年半ぐらいいた。

2年半後に社屋を再建

昨年（2013年）の10月にようやくここ（新川町）ができた。商工会議所会頭の立場上、一番最後にということで、事業所のほとんどが復旧した後となった。被災事業所800のうち700ぐらいが再開して、多分680番目ぐらいだったと思う。ここは1メートル嵩上げしたけど、地盤が下がっているので、実質的には前より50センチくらいしか高くなっていない。津波にはいいんだけど、台風や低気圧で川の水が氾濫したときにどうなるのかね。

時代がどんどん変わっていく、印刷機も新しくなる。モノづくり補助金で北日本第一号となるオンデマンド印刷機を導入したが、世代交代と震災が全部絡んでしまったという感じですね。仕事は1年くらい前から、どうにか震災前の状況に戻った。

宮古の事業

商工会議所は被災事業所を再開させなければならないから、すぐ次の日から始めた。宮古の再開率は今の段階で86％くらい。ただし、10％ぐらいは廃業しているからね、現実的には90％以上で、残っている田老と鍬ヶ崎の事業者が再開すればほぼ100％になる。廃業はもともと後継者がいないから、これを機会にやめる時期が早まったのかもしれませんね。

宮古を全体的に見ると、再開してもなかなか震災前の状況に戻っていない。震災前以上にいい物を出さないと復興に繋がらない。雇用の面でも製造の面でも水産加工業は大きいから、そこの再開をやっているが、震災前の状況にまだ6割くらいしか戻っていないんじゃないかと思う。水産加工業は一所懸命販路の開拓をしている。一度供給できなくなると販路が途絶えるので、なかなか厳しいものがある。状況がいいのは建設関係、サービス業も若干いいのかな。しかし、全体的にはあまりよくはなっていない、そこが一番の悩みですね。

震災前、水産物は宮古の名前が付いていれば、物がいいからなんでも売れるっていうのがあったのね。商品に対する見方が震災後には全部変わった。安全安心、顔が見える物でなければならない。品質基準、消費者、衛生、安全などすべての条件がガンガン厳しくなっている。それに対応しなければならないっていうのが、今一番の課題でね。復興支援をいただいている東都生協の品質基準が一番厳しいから、そこをクリアすれば全国どこの生協にも対応できると思う。そこにどう参画していくかってことですね。

水産、工業、観光の3つをとりあえず太くして再開させれば、あとは自然についてくるという考えでやらないとね。全部いっぺんにやろうとしても無理だ。平成25（２０１３）年4月に3年計画を立てて水産物の販路拡大、商品開発などに取り組んでいる。来年は3年目になるが、まだまだ続けていかなければならない。工業は合板メーカーと金型・コネクターの2大工業が順調だし、観光は大事ですから、厳しいけどいろいろな可能性をどんどん作っていかなければと思っている。

震災で変わったのは、若い人たちがやる気を出してやっているところ、後継者がきちんとしているところはぐんぐん伸びている。震災前にいくらよくても後継者がしっかりしていないと伸びていかないが、Uターンで実家の家業を継ぐ若者が結構いるので安心している。水産加工も、後継者がしっかり成長しているから安心、将来は明るい。業界のリーダーを地域全体のリーダーに育てていかなければならないと思っています。

(2) 堀田 尚志さんの話　昭和18（１９４３）年生

新川町4　㈲レストランほりた、新川町自治会会長

平成27（２０１５）年4月23日、店内で伺う。

階段を駆け上がる

2階建と4階建の棟続きの店舗を所有しています。現在は主に、宴会や会合、会場貸しなどを営み、また、高齢者向けにお弁当をお届けしています。

震災当日は、夕方お届け分のお弁当の準備を始めていました。そこに、大地震が来ました。結構長く、今までに経験した事のない大きな揺れでした。こういう時は、お弁当をお届けしているお年寄りの方は不安になるだろうと考え、一刻も早くお弁当を届けようとそのまま準備を進めていました。

ただ、何かいつもと違う…、そう感じて、コンピューターなどの貴重品を念のため上の階へ避難させました。2、3回往復したときでしょうか、ふと外を見ると、私の目に飛び込んできたのは、目の前の宮古大橋から滝のように乗り越え迫ってくる水でした。私は急いで、1階の厨房で仕込みをしていた家内に知らせ、手を引き、階段を駆け上がりました。かかとが濡れる寸前のところまで、水が迫ってきました。危機一髪のところでしたね。当店の立地上、市庁舎と国道の大橋が第2、第3の防潮堤となってくれたため、この程度で済んだのだと思います。屋上に上がって辺りを見回すと、もう別世界になっていました。

当日は花巻に出張していた息子や、揺れの直後に帰した従業員たちは、幸い皆無事でした。

地震発生から40分程経っての津波でしたが、「津波は来ないだろう」という油断もあったのでしょう、私たちが駆け上がった4階からは、大橋でまだうろうろしている人々も見えました。

また、歩道橋の上にいて、ぎりぎりの高さのところで助かった方や、電柱に登って助かった方、宮古大橋の上にいて車ごと助かった方もいました。さかもと眼科クリニック（向町4）の駐車場の車が宮古信用金庫（向町2）の方向へと、固まりになって流れて行くのも見えました。突破できると思ったのか、宮古大橋から水の中へ突入して行き、そのまま流されてゆく車や、「ビーーー」という断末魔のようなクラクションを鳴らしながら、水没してゆく車を何台も見ました。

事務所で2晩過ごして

浸水は2階まであと20㌢というところで止まりました。不幸中の幸いでした。その日より2晩は、3階の部屋で寝泊まりし、そこにあった石油ストーブで暖を取りました。13日の午後には、崎山にある家内の実家を頼って、歩いていきました。2時間以上はかかったと思います。他にも多くの人たちが、難民の様に列をなしていました。14日にバイクを借りて店の様子を見に行きまして、愛宕小学校に避難所が開設されたのを確認しました。数日後、合流した息子共々、愛宕小学校の避難所へ移りました。ですが、いざ行ってみると、家を失くされた方など、大勢の方がいらしていたので、2、3日お世話になった後、防犯の意味も兼ねて、寝泊まりは店の2階とし、食料や支援物資などを頂きに避

難所へ通うことにしました。
　店舗の裏手にある土蔵と昭和11（１９３６）年頃に建てた木造の自宅への被害は、水というより瓦礫によるものでした。魚市場の機械や、周辺で壊れた建物の一部が一緒に流れてきたので、壁も天井も壊れてしまいました。門の周辺は、どこの家の物か判らないタンスや机などが山になっていました。泥出しだけでも半月以上かかったと思います。全国からのボランティアの皆さまに感謝しています。

時代に合わせた事業を

　１階にある厨房、機械類は、全部だめになったので処分しました。店舗部分は全面的に天井がやられてしまったので、補助金を頂いて修理をするため、工事の段取りをしています。
　震災後、１か月過ぎた頃だったと思います。世界中からくる支援物資を受け入れるために、宮古ロータリークラブさんが例会を開くことになり、その際のお弁当を頼まれました。２階にあった小さな厨房には被害がなかったので、それを機に、営業を一部再開しました。
　高齢者向けのお弁当は、震災の年の５月末には再開し、現在もお昼と夕方にお届けしております。個人、社会福祉協議会、介護施設などからも問い合わせがあります。主に地元でとれた食材を使って、昔からの宮古の味をお届けしています。被災された方には仮設にもお届けしています。レストランは夏前には工事に入れるよう、打ち合わせを進めています。これからは、世の中の動きや高齢化に合わせて、高齢者が集う事のできるような仕組みや、フードコーディネーター的な営業にシフトしようと考えています。

町内の様子

　この町内でも、避難しなかった方、津波の様子を見に行った方など、５名の方が亡くなっています。
　新川町は水産加工や漁業が多かった地域で、もともと50世帯位と少ない世帯数でしたが、震災後は他所に避難された方や、仮設に入った方などもいるため、９世帯（19人）に減少しました。人は減ってしまいましたが、その分見ず知らずの方ともお互いに挨拶するようになりました。
　自治会の運営については、私は会長をしているのですが、運営費の徴収を昨年の10月以降下半期分から再開しています。

震災と祭礼

　私が総代を務めている横山八幡宮では、震災の年の９月の例大祭をどうするか？　という議論がありました。「亡くなった方がこんなに出ているのに失礼だ」という方、「こういう時だからこそやろう」という方、様々いましたが、結局実施して良かったです。行程20キロ以上に亘り行列も練り歩きましたが、被災したにもかかわらず、いや、被災したからこその奉賛もこれまでになく多く、関係者一同喜んでいます。

2　向町

　向町は東に新川町、南は土手を挟んで閉伊川に接している。慶長16（１６１１）年の津波後に区画された本町に続く古い町である。町内は１番から３番を下向町、４番から９番を上向町として、それぞれ町内会、または自治会がある。９番地と宮町との間に藤原に繋がるＪＲ山田線が通っている。宮古橋と並行して鉄橋（第43閉伊川橋）が架かっている。第二分団の屯所（管轄区域＝向町、大通１丁目、２丁目）があり、震災までは市保健センター休日急患診療所があった。
　震災前、平成23（２０１１）年３月１日現在の世帯数は１４３、人口は３１５名（男１３７、女１７８）であった。
　「３・11」の津波による浸水は第二分団屯所が３・２メートル、町内のほとんどの家屋は１階が壊滅状態となり、人的・物的両面に市街地でもっとも大きな被害が出た。ＪＲ山田線の鉄橋の橋げたが流失し、橋が崩壊した。
　家の中での被害者が多い。自宅に留まって仕事をしていた人、家族を２階に上げたが自分自身は上がりきれなかった人、１階の部屋に寝

ていた老夫婦、地震後老夫婦を心配して様子を見に来たヘルパーさん、自宅の3階に上がったが下に物を取りに戻った人などである。

家の外では水門に様子を見に行った人、一度は避難したが上着を取りに家に戻った人、家から逃げる途中の人、電柱につかまっていたが力尽きた人、シーツを投げてもらったがつかまりきれなかった人など、死亡届者は合わせて24名（認定者1名）にも及んでいる。

震災後、平成23（２０１１）年８月の世帯数は１０４、人口は２２１名（男99、女１２２）に、平成27（２０１５）年３月１日現在は85世帯、人口１９９名（男90、女１０９）に減少した。

町内会・自治会の活動は徐々に動き出している。

(1) 吉田 精一さん　昭和10（１９３５）年生　と　吉田 栄子さん　昭和17（１９４２）年生　の話

向町１　平成27（２０１５）年４月26日、ご自宅で伺う。

井戸の水が引いた

精一さん　三陸の津波のことはわからなかったの。まだ生まれていなかったからね。それでもね、亡くなったおじいさん、おばあさんから「大きな地震があったら、必ず井戸の水を見ろ、引けていれば津波が来る」と、そういうことを教えられておるんですよ。水っていうのは、人間の生活に大切なもんなんです。扱いだとかいろんなことがわからなければ、結局人間が災害に襲われてしまうんですよ。それで今回の地震のときも井戸に行って見たわけ。水はスーッと引けて、湧いてこなかったわけだ。

栄子さん　今はポンプで汲み上げているので、コンクリートの蓋をかぶせて、余分な水を下水に排水している。それが流れていなかったの。

精一さん　私はね、以前、町内会長もやっていたんですよ。町内に、「津波が来るから、逃げろ！」って騒いでね。まず20分ぐらいね。「命が大切だ、逃げねばなんねえ。津波てんでんこでだ」ってね。私たちはすぐに常安寺に避難した。

栄子さん　一番トップに常安寺さんに着きました。

精一さん　ところがねえ、町内の方々でわかっている人は何人もいないんですよ。井戸もほとんどないから。それでね、私は一番先に避難したような形だけど、残った方々は、「たいしたことない」って逃げなかった。昭和36（１９６１）年のチリ地震っていうのはね、閉伊川の底が見えて津波も来たけどもね、波は岸壁を越えなかったわけだ。「だいじょうぶだ」って逃げなかった人も、「なあに、チリのときもこなかったべ」って、そういう安心感もあったのかわからないけどね。

私が騒いで回って、手ぶらで東屋（本町２）さ行ったときには、後ろに波が見えた。第1波は強くないんですよ。第2波、3波と強くなってくる。東屋の駐車場で第1波が足元まできたんですよ。

昔から言われたことは、大切なことなんですよ。ここが宮古市で一番低い土地なんです。昔の町名は中洲（なかせ）と言って、閉伊川の河川敷で埋め立てられたところ。この地域で、新川町も含めて37名亡くなったよ。3日目に帰ってきて井戸を見たら湧いていた。どんどん、どんどん湧いていた。近所の井戸もポンプを付けているけど、震災後自然に1メートルは湧いていた。大切な井戸なんですよ。だから、息子に「絶対、この屋敷を放してはなんねぇ」と言っているんですよ。井戸は使えば自然にどんどん湧くんですよ。

避難生活

栄子さん　ここは水が2階まで上がった。2階の床上10センチくらい上がったんじゃあない。

精一さん　津波はだいたい2メートル50センチくらい上がった。

栄子さん　このテーブルは津波に耐えて助かったの。足が1本取れましたっけ。重いマッサージ機の座椅子は流れていって、この一枚板のテーブルは居間の中を少し動いただけで残った。

常安寺さんには1か月と10日ぐらい、いたなぁ。なんでそこまでいたかと言うと、お父さんにお薬が出ているんだけど、盛岡に行けば病院を変えなきゃあなんないの。当時はごちゃごちゃしていて主治医の先生になかなかお会いできなくて、長引いたんです。1か月後によう

やく紹介状が出たんです。で、常安寺には一番先に行って、ほとんど最後までいて、その間常安寺さんは同じメニューは出さなかったの。和尚さんもおにぎりを握ったりして、すごかったですよ。最後は5人位しかいなかった。

その後は盛岡（滝沢市）の娘のところに4か月ぐらい、娘に飽きられてしまうほどいたんですよ。ここは土台と柱が残った。2世帯で上に住んでいる息子夫婦が一生懸命片付けくれて、大工さんも入れてくれた。私たちは盛岡から1か月に2回くらい通っていたんです。

伝承が大切

精一さん　水の大切さ、有難味が伝承されなければいけない。火だって同じで自分の命にかかわることだ。震災の年の9月の選挙が終わった後、市が市民を集めて津波の体験を聞く機会があった。大勢の人が参加してみんな言いたいことがあって、次々と意見が出た。私はじっと我慢していたんだ。9時を過ぎて半になった。私だけ盛岡に帰っていかなければならない。そこで、「金をかけないいい方法があるんだ。小学校の黒板の脇に「津波てんでんこ」という標語を掛け軸に書いて貼っておきなさい。学校に入れば子どもたちは必ず見るし、金もかからない一番いい方法だ」って言ったんですよ。

それから、町名は自然の条件を考えて付けられているから変えてはいけない。そういうことを考えてまちづくり、家づくりをしなければいけないんですよ。

(2)　**釜場 清人さんの話**　昭和44（1969）年生
向町1　釜場電気商会代表
平成27（2015）年3月9日、事務所で伺う。

7階まで一気に駆け上がる

近所の家でちょうど朝から仕事をしていました。そこは路駐ができなかったので荷物を全部下して、車は自分の家に置きに来て、歩いて仕事に行きました。

地震ですごく揺れたもんでまず表に出た。ぐらぐらときて、1回揺れが治まって津波警報が出たけど、まさかここに来るとは思わなかったので、もう1回仕事に戻ったんです。そしたらもう1回大きく揺れたので外に出て、「これはまずいんじゃあないか」って話になった。この辺りのみなさんは歩いて避難を始めていた。一緒に仕事をしていた人がワンセグを見ていて、「津波が来ているようだ」って見せられたけど、画面が光ってよく見えなかったので、そんなもんかなあと眺めていた。そこの家の人も車で避難して行ったので、私も自分の家に、津波に向かうような形になるけど、なにを持って逃げようか、バイクにしようか、車にしようか、なんて考えながら歩いていった。

家の前に近所の人が2、3人いて、話しかけられた。そこで「避難所は宮古小学校じゃあないの」なんて立ち話をしていると、後ろになんか気配を感じた。振り向いた瞬間、さかもと眼科クリニックの前を駅方向に黒い波がバワァーと、後から映像で見る市役所のところに来たのと同じ波だと思うけど、それが走っていくのが見えた。「ワアー、やばい！」って、家の方を振り向くともう水が来ていて、私の車がプカプカと浮いていた。これはもうあお空さん（介護施設、向町2）の方に行くしかないと思って、すぐに走った。2階か3階にいた施設の人たちが、「こっち来い！こっち来い！」と呼んでくれた。階段を一気に駆け上がって逃げたんです。ここで立ち話をしていた人たちはみんなちりぢりですよ。

正面玄関から入ると、1階には誰もいなかった。2階、3階に利用者さんたちがいたようだったけど一気に、上へ上へと一番上の7階まで行きました。お住まいをノックして開けてもらって、ベランダから屋上に出た。下を見ると、大きい水がサァーと浸透していくように来て、水嵩もかなり増えてすごいことになっていた。

家の前で立ち話をしていた5人は全員、あお空さんで落ち合った。その人たちは多分外階段から上ってきたんだと思います。向いの楽菜さん夫婦（向町3）は玄関から上がってきて、中で会いました。

自宅の2階がプカプカ流れる

屋上に出た瞬間、携帯電話が鳴った。大阪の人からで「どう?」と言われたちょうどそのとき、私の家の河口側にある家が流されてきて、家も押されるように流れていくのが見えた。2階部分がプカプカ浮いて100メートルくらい先に止まった。「ああ、ああ、家が、家が流されている!」と言って携帯を切ったので、私が家の屋根の上にいて流されているという情報になった(写真1)。家族はみな盛岡にいて私ひとりだったので人的被害はなにもなかった。もし、すぐ自分の家に入っていたら、私も巻き込まれていただろうから、家の前で立ち話していたのがよかったのかもしれない。

私の携帯がauだったせいか、高いところにいたせいかわからないけど、しばらく何本か繋がったんです。内陸(盛岡)に姉がいるので電話して、「すごいことになっているから、誰か早く助けに来てくれるように連絡してくれ」と言ったら、すぐに盛岡の消防署に駆け込んでくれたみたいで、消防署から私の携帯に、「沿岸がすごいことになっているみたいで、私たちも急いでそっちに向かっているから頑張ってくれ」という電話がきた。私は宮古だけの出来事かと思っていたが、ああ、ここだけじゃあないんだ。全国的にすごいことになっているんだと思った。

写真1　プカプカ浮いて流された自宅の2階
2011/03/21　撮影:釜場清人

夜中に1回、津波が引けた後に、あお空さんに避難していた近所の男性に頼まれて、一緒にその方の家族を探しに、外に出たんですよ。そこで、分団の人に「手伝ってくれ」と言われて、瓦礫の中の人に声をかけたりしましたけど、その人は助からなかったようです。探していた方の奥さんと小さいお子さんは近くのアパートに逃げていて、無事が確認された。その後、内陸で働いている近所の男性2人が、心配して戻ってきたところに出会って、一緒にあお空さんに行った。その晩、あお空さんに避難した近所の方は9人くらいだったと思います。

翌日は盛岡へ

次の朝、陽が上るとすぐ流された我が家に荷物を拾いに行った。2階はプカプカ浮いている状態だったので、中の物は大丈夫だった。私が家にいたら、2階に上がって多分助かったと思うけど、きっと心が折れてしまったと思う。あお空さんに挨拶をして宮古小学校に行った。場所を取ったんですが、携帯が繋がった友人から盛岡の家族に連絡がついて、義父に千徳まで迎えに来てもらって、その日のうちに盛岡に行った。津波の翌日だったのでみんなに、「テレビに出て話せ」と言われたが、2、3日経てばどんどん情報が入ってきた。その次の日(13日)テレビに「あお空さんに外から7、8人が避難して、施設の人が20~30人くらいいる」というテロップが出たんですよ。姉と消防署に話した情報が少し上がったんだと思うんですけど、それが1週間くらい流れていたので、宮古ではまだそんな状況が続いているのかと心配になった。

盛岡に1週間くらいいて、その間に宮古に借家を手配して、被災した同業者と一緒に仕事を再開した。店舗のことがあるので早い段階で準備を始めて、平成26(2013)年3月ごろに店舗と住まいが出来上がりました。

(3)　大久保 博さんの話　昭和27(1952)年生
向町2　㈲介護施設「あお空」代表取締役

平成26(2014)年8月8日、施設内で伺う。

町内の一時避難所に

地震があったとき、私は7階にいたんですけど、長い地震だったので下に降りて、まず1階のデイサービスの利用者20名を2階に上げました。帰した方はいなかったですね。そして津波が来て、そこでも危ないというので、また上の階に上げてという作業をしていたんです。そこに近所の方10人か11人ぐらいが、7階の私の住まいに、ご自分の判断で非常階段を上って来ました。私は施設の利用者の方、高齢者の方のお世話で手一杯だったので、直接誘導したりすることはなかった。

そうこうしているうちに、男性が流されてきて、とよ（とい）につかまったんですね。それをシーツでロープを作って、みんなで2階の窓から引き上げて助けた。それがここの建物の一番の救助でしたね。男性は低体温症で大変な状態だったんですが、ここには看護師さんもいましたから、6階で布団を敷いて介抱して、次の日には回復しました。私から見て50歳くらいの方だったかな。

上に避難したご近所の方には7階を開放して1晩泊まっていただいた。水は1晩でかなり引いたので、次の日にここから避難所の宮古小学校に行かれた方が多かったと思います。

介護施設は一時閉鎖

当日は入居者が20名、デイサービスの方が20名くらいで、職員は24～25名いましたが、デイサービスの方を上の階に避難させて、その方々の入る部屋の調整や入居者のケアもあり大変でした。デイサービスの利用者を帰すことは考えませんでした。送っていく職員がここに戻るということも考えなければいけないし、津波が来る前にみんな上にあがったので、結果的によかったと思っています。デイサービスの方は、翌日ここを出て避難所などに行かれた。

次の日はみんなで食糧探しですね。停電、断水でトイレが使えない、それが大変でした。入居者の方々のご家族の状況などはお聞きしていませんが、13日頃から自宅にお帰しするか、または分散して近所の施設に移っていただきました。入居者はここでは怪我をしなかった、とりあえず命が助かったということで、この施設は一旦閉鎖して、職員は休みにして家で待機してもらった。

停電、断水が1か月か2か月くらい続いたけど、私たち家族はなんとでも我慢できます。暗くても食事はあるし、元気だったので、ここに住んで、トイレは遠いところに行きました。

再開と復興

再開してから入居者は戻った方も戻らなかった方もいます。窓から津波がくるのを見ていたのですから、一度そういう目にあえば怖いんじゃあないんですか。デイサービスも2、3か月の間は閉めてましたから、ゼロからの出発ですね。その間に他の施設に行った方は、そちらに慣れたでしょうしね。職員は戻ってきた人もいるし、トラウマで戻れなかった人もいる。そちらも新たな出発で、それからの方が痛かったですね。私の友人にも頭の中に何回も津波がきて、ストレスが消えないという。そういう方はいっぱいいるんではないかな。いいことはなにもない。もうたくさんですよね。

部屋は27室ありますが、現在の入居者は14～15名、デイサービスは震災前の8～9割に戻っています。

今考えれば、津波のときはこういう高い建物を利用するというアピールを、もっとしておけばよかったと思っています。非常階段を上がった人たちは、自分の判断でこの建物の上にあがってくれてよかった。逃げる途中で亡くなった方もいらっしゃるから、ここを使ってもらったことで、少しでもお役に立ててよかったです。あのまま逃げていれば、距離がありますから、何人かは巻き込まれていたかもしれない。悔いがあるとしたら、普段からもっと町内会に「なにかあったら使ってください」って知らせておくべきだったと思っています。震災後に町内会にこの建物を使ってくれるように申し入れをして、市役所からも避難所指定を受けました（写真2）。

ここは開設して9年経ちましたが、最初は費用の安い木造建築でやろうと思っていた。しかし、津波のことも頭の中にあって、ちゃんとしたものにしようと、鉄筋の建物にしたんです。

写真２　津波から逃げて、駆け上がった介護施設の非常階段

第六感が働いた

自分自身の中でほっとしていることがあるんです。

津波の半年くらい前、釜石市に申請して事業者指定を受けて介護施設を造ることが決まっていた。その事業所の予定地は、大勢の住民が避難して犠牲になった鵜住居地区防災センターのすぐ近くだったんです。ところが、あるときここは津波があったら危ないと私の第六感が働いた。そこで市役所に「ここは津波で危ないから場所を変えてくれ」と言って、強引に山の方に建てることにしたんです。それで、手前どもだけ助かったんです。役所というのはこの場所に介護施設を建てると決めたら、あんまり変更はしないもので、あれは私の人生の中でただただ運がいい。後で考えたらそこは誰が考えたって、悪くない場所でしたよ。周りに病院があるし、堤防もある。でも本当にここは危ないと感じた。あのときだけは虫の知らせがあったんです。

今は日常に戻るのに精いっぱいで、正直忘れたい、前に進みたい。いいことはそのときの行動で命を助けることができた、その体験をしたことです。

(4)　伊藤囚一（しんいち）さんの話　昭和21（１９４６）年生

向町２　蕎麦屋「藤七屋」

平成27（２０１５）年3月10日、店内で伺う。

ひさしから隣の屋根に上る

この蕎麦屋はお祖母さんの代の明治からだから、もう百年以上になるね。お袋から見よう見まねでやってきた。

地震のときは近所のお客さんが1人いたんですよ。おばあさんを避難させると言ってすぐに帰って行った。この辺はたいがい地震のときは津波があるから、お手伝いのA子さんに、「津波が来っかもしれないから逃げろ。今日はもう店を終わりにする」って言ったの。A子さんは逃げないで後片付けをしていた。

俺は外に出て様子を見ていたら、まだ逃げない人もいるから、大丈夫って思っていたら、向こうから走ってくる人がいるんですよ。えっ！と思って、三浦米屋さん（向町４）の交差点の方を見たら、水がワーと来た。もう間に合わないから、家の中に走ってきて、A子さんと２階に上がった。どんどん水が上がって来て、ここは建物が低いので水は2階まで上がって来た。これはうまくない。「屋根にあがれ」って、窓を開けて、ちょうど屋根のひさしが隣りの家に続いているんで、屋根を伝って隣の家の屋根に上がった。ねずみも1匹一緒に上がってきた。可笑しかった。雪がちらちらと降って寒かった。

辺りに変な匂いがするなと思ったら、プロパンのガスボンベが噴き出しているんですよ。水は道路から家と家との間に入ってきて、どんどん上がって来るんですよね。裏からもウワーと来てすごかったからね。古い家の梁がぶつかってドアが壊されて、この辺はすごかったですよ。家が流されてきて、この辺に溜まって、車もそこここに引っかかって、どうにもなんないね、ありゃ。

水はこの家のひさしまで来た。隣の家は新しいから基礎が高くて、水は1階の屋根のぎりぎりまでしか来なかった。

隣の家は避難して誰もいなかった。ちょっと大きな地震が来るというと、いつも息子さんが迎えに来るんですよ。寒かったので2階の部屋に入って、押し入れに布団があったから、使わせてもらった。夜の間も水はなかなか引けなかった。だいぶ時間がかかったんじゃないかな。俺は耳が遠いので聞こえなかったけど、A子さんは女の人の声が聞こえたと言っていた。

朝になって下に降りてきたら、家の中はメチャクチャで、歩く場所

もない、外に出るのも容易じゃあない。ここの2階は畳の上まで水がきていた。でも、家が壊れなくてよかった。船もその辺に引っかかっていたからね。俺はいいほうかな。

道路にはまだ水があった。A子さんが家に帰るので、長靴を探したら穴が空いたのがあった。その長靴を履いて水のないところまで送って行った。A子さんが家に帰ると、近所（西町）の人がワッーと抱きついてきたって。おそらくA子さんは流されたしまったと、思っていたらしい。

真っ暗な2階で避難生活

道路は瓦礫ですごかった。みんな家にあった物を道路に出したから、瓦礫で埋まって、人が通れるくらいしか空いてなかった。2階にも水が入ったけど、マットレスと布団を2枚敷いて、その上で暮らしていた。電気なし、水道もなし。食べ物は向いに住んでいた人がいろいろな物を持ってきてくれた。みんな避難所に行って、いろんな物をもらったりしていたらしいけど、俺はずっとここにいた。

津波の後なんか真っ暗でしょ。雲がすごいんですよ。低く流れていく。そんな雲見たことがない。ここら辺は人がいるような場所じゃあないからね、俺だけだから、ひとりで気楽だったな。

A子さんが毎日来て、泥運びからメチャクチャになっている家の中の片付けなどを手伝ってくれた。電気が戻ってくるまでだいぶかかったんじゃないかな、この辺はメチャクチャだったから。向こうのちょっと高い方は、電気が早くにきたようだけどね、こっちの方は真っ暗ですよ。

車は東屋の駐車場においていたので助かったんですよ。あそこの手前まで水が来た。ジャンパーに免許証とか鍵とか入れてるんですよ。部屋にかけておいたジャンパーが見えねえんですよ、どこ探しても。畳も、もう、全部引っぺがして探した。水圧で天井が開いているところがあった。一番最後にそこを見たらジャンパーがあった。よかったですよ。免許証も鍵も入っていたから、それですぐに車が使えるようになった。

近所の人たちが戻ってきたのは1か月か、もっとあとだった。住めるような状態じゃなかったからね。隣の家の人と会ったのは、だいぶ後になってからじゃないかな。「よく生きていたなあ」と言われた。今もなんというのか、これが現実かという感じがして、ちょっとピンとこないね。

店の再開

商売を始めたのは1年後の3月頃。通りかかったお客さんが「いつから店を始めるのか」って聞くんですよ。「さあ、いつになるのか分からない」と答えていた。人がいなくなったけど、昔からのお客さんが結構いるからね。そういうお客さんが来てくれるんじゃあないかなって。商売初めてもそこそこはやっていけるんじゃあないかという計算をして、できるだけ早く商売しようと思った。この商売は道具とちょっとした店さえあれば、俺が器械だからって。だからなんとかできるんじゃあないかなと思った。

道路に面した店は取り壊して、後ろの自宅の1階を修理改装して店にした。工務店に頼んでも順番があるからね。でも早くやってよかったです。今は大工さんがいないし、材料が高くなっているし。俺のときには「予算がこれしかない」って、信用金庫の人に頼んで、補助金のことなど教えてもらった。金庫の人も被災しているんですよ。申請してもらえるやつは全部もらって、支援金では足りなくて信用金庫に借りに行った。年齢を見たら、普通は貸してくれないですよね。だけど津波の被災者なので特別貸してもらえた。その代り75くらいまで払っていかなきゃあならない。それまでもてるかどうかね。仮設でボケっとしているより仕事している方がいい。

防災無線

今、避難のときは防災無線で知らせるけど、あれはよくないね。子どもの時から地震があると、間もなく船が沖に出て行くエンジンの音

がしたもんだ。この辺は漁師や船関係の人が多かったんで、地震、津波というと、すぐに海とか川を見に行く。水が引けていて、様子がおかしいというと、避難する習慣があるんですよ。堤防ができたら水門を閉められて、見えないでしょう、見えないから全然わかんない。津波のあとビデオを見せてもらったけど、市役所の通りは堤防のところまで水が来ているのに、車が走っていた。堤防も善し悪しだね。

堤防ができてから頼りになるのは防災無線。だけど、マニュアル通りに言っているような感じで、全然緊迫感がない。見えてないんですよ。本当はね、海の見えるところで実況中継してもらわないとね。機械ばかりに頼っているというのは駄目だよ。あれで遅れた人もあると思う。しっかりしてもらわないとね。防災無線が頼りだからね。

それから、大事なのは警察。信号機も防災無線で、「赤でも無視して走ってもいい」と言ってくれればいいんですよ。ずっと先の安全なところで赤信号で車が止まって、こちらから避難する車が詰まって進まない。車に乗ったまま流された人もいるって聞いている。

(5) 藤田 正憲さんの話　昭和21（1946）年生

向町2　元第二分団員

平成26（2014）年10月22日、東屋事務所で伺う。

大声で叫びながら走る

地震があって、それが治まって、うちのやつはすぐに近所の奥さんたちと3人で、お寺だか宮古小学校だかに避難した。私は第二分団の屯所（向町2）に行った。

信号が止まって、交差点にあっちからもこっちからも車が来て、動かないんだ。屯所にある半纏とヘルメット着てきた。すると車が動き出したんですよ。やっぱり半纏というのは違うんだなあと思った。あ、12月に分団はやめていたんだって思い、屯所にヘルメットと半纏を戻した。

それから、家の裏の戸を閉めに行き、道路に出ようとしたら、屯所のところにいた分団員が、「来た！」って大きな声で叫んだ。ひょっと見たら、堤防を真っ黒な水がゴンゴン、ゴンゴンと越えていましたものね。それから分団員と2人で、「津波だ！」って、大きな声を出して八幡通りを駅に向かって走ったんですよ。

私ら2人とも前だけを見て真っ直ぐ駅の方に向かって走ったんで、後ろから水がどのくらい来ているのかわからなかった。途中で太田肉屋（太田屋肉店・大通2丁目）さんの3階のベランダから、「上がれ！上がれ！」って声がかかったので、2人で横の階段から3階に上がったら、通りにはもう水が来て、車が流されていた。車に乗っている人の手が見えたりして…。

私らの声を聞いて家から出てきた人や自宅の2階に上がった人もいた。楽菜さん（向町3）も私らの声を聞いて「あお空さんに逃げた」と言っていた。

家は道路に押し出されるような形で崩壊したので、現在はアパート暮らしをして、もとの土地に新しい家を建てている。

＊藤田さんは2015年11月に逝去されました。合掌。ご冥福をお祈りします。

(6) 中居 達郎さんの話　昭和46（1971）年生

向町3　中源米穀店

平成26（2014）年11月23日、店舗前の道路で伺う。

黒い泥水がきた

地震があって両親はすぐに親戚（の家）に避難した。私は大津波警報が出た時、店の前の道路に出ていた。いつも津波注意報だ、なんだって言っても、来ないですもんね。だから3メートルというのを聞いて、防波堤を越えるのかなって思っていたら、今度は6メートルって言った。あれぇ、6メートルだったら、もしかして来るかなって思った。保険センター（新川町6・震災後は閉鎖）で働いていた人たちが、みんなズラッーと歩って避難して行った。家の前に家具の荒川（向町2・旧うちむら家具・震災後に解体）があって、5階建で非常階段があったから、もし津波

が来ても、すぐにそこに上ればいいやと思っていたんです。

そこに、「ウヮー」というような声が聞こえて、真っ黒い、泥のような水がジャワーとすごい勢いで流れてきて、男の人が道路に倒れていた。多分水が堤防を越えたのを見て、逃げてきたんじゃないですか。転んでそこに水が来た。あまり若い人じゃなかったようでした。最初その黒いものが津波なのかどうかわからなかった。なにか黒いのがきているなあって思った。家具屋さんの人たちも、軽トラ止めて、まだ働いていましたもの。その人たちに「津波が来たみたい」と言って、非常階段を上ったんですね。

非常階段を上がって河口の方を見たら、家がバキバキ、バキバキって音を立てながら、こっちに流れてきた。道路に立っていた時は、そういう展開になっているとは、全く思わなかった。ようやく津波が来たんだってことがわかったんです。

消防隊員が車の中の人を救助

屋上に上ってすぐに上を見たら、自衛隊の飛行機が飛んでいて、ああ、自衛隊の人たちはこの状況がわかっているんだなと一応安心しました。自衛隊も政府も気がついていなかったら怖いなと思った。屋上には家具屋さんの人たちが4、5人いました。

河口から来る水は確かに津波という感じがしたけど、ここら辺はどちらかというと洪水みたいで、ジワリジワリと上がってくるんですね。そのときはまだ畳を代えるのは面倒だな、ここらで収まってくれればいいなという程度にしか思っていなかった。ところが、そのうちに水はジワリジワリと1階と2階の境目くらいまで上がってきたんです。

閉伊街道（宮古街道）を見ていると、流されてきた車が交差点の信号にぶつかって止った。その中に人が2人いて、年配の夫婦でしたね。消防隊員がシュルシュルと電線を伝って行き、車のフロントガラスを何かでガンガンと割って、「必ず助けるから落ち着け」って、2人を引きずり上げたんですね。もう1人歩行者用の信号に引っかかっている人がいたんですが、その人はすでに亡くなっていたみたいでした。

道路にいた人が僕の方を見て、街路樹の上にいる女の子を助けるように言ったんです。「助けて、助けて」と言う声が聞こえて、家具屋さんの人が屋根を伝って助けに行ったんですが、ボートもなくてどうすることもできなかった。波が引いてから「消防隊員に助けたられた」と聞きました。

店は水につかって、2階にも水が入ったので、私も両親が避難していた親戚の家に世話になった。3週間後に両親はアパートに、私は電気もなかったけど、犬がいるので自宅の2階で暮らした。食事はインスタントやレトルト食品でしのいでいました。

精米機もだめになり車も流された。片付けに時間がかかり、米穀店は震災3か月後の7月に再開しました。

(7) 笹原 美津秀さんの話　昭和31（1956）年生
向町3　楽菜（無国籍ダイニング・洋菓子）代表
平成27（2015）年3月12日、店内で伺う。

7階建てに駆け込む

お客さまをみんな送り出して片付けをして、買い出しに行こうかという時間帯のときに、地震がガッーと来た。あまりにも大きかったんで、子どもが小さかったから、―小学校4年生、保育園児2人―「うちは逃げるぞ」って、店の前に車を持ってきて、荷物をまとめて必要な物を積み込んでいた。下の子が風邪を引いていて、妻はその薬を取りに行った。

その時、多分藤田さんだと思うんですけど、「津波がきた！」と叫びながら、縦の通り（八幡通り）を駅に向かって駆け抜けて行った、その後から波がスーッと追いかけて行った。それを見てびっくりして、「下りて来い！」と2階にいた妻に叫んで、向いのあお空さんの玄関から入って、階段を4階まで駆け上った。本当は、店の前にいたときにもう津波は来ていたんですね。防波堤があって、僕らには見えないし、防災無線で言っている人も海を見ていないから、情報がちゃんと伝わらないんですよ。これはすごくよくないことですよ。

あお空さんの7階から、家の正面に瓦礫が突っ込んできて、自宅が流されていくのが見えました。前に建物がないので、水がワッーと来たんです。水が引けても瓦礫がひどくて中に入れなかったので、物も取れなかった。1階は全滅、2階の一部だけが残った。家の外側は残ったけど、建て直すしかなかった。

レストランの再開

復興はきつかった。山田や田老は仮設で営業できるが、ここは仮設で営業しても、お客さんは誰も来ないから、立ち上がりようがないんです。この辺りは流されていない、ちゃんとしたビルの中に冷暖房完備の立派なお店がありますからね。「お店再開してください」と言われても、まず建物を建て直さなければ営業できないし、お客さんも来ません。街中で被災した人たちの復興がすぐできないのはそこですよ。すぐに営業できてお客さんがいる仮設が羨ましかった。

家を建てて店を再開するのに2年7か月かかりました。

(8) **笹原 めぐみさんの話**　昭和46（1971）年生

向町3　楽菜

平成27（2015）年3月12日、店内で伺う。

避難生活

翌朝8時に水が引けてから、ヘドロの中を瓦礫をかきわけて、はじめに宮古小学校に行って、小学生の長男と会いました。それから、小山田保育園にいる2人の子どもを迎えに行ったんです。震災前から知らされていた保育園の避難計画どおりに、子どもたちは先生と小山田神社から公民館に避難していた。保育園から昼寝の布団や紙おむつ、ティッシュなどをもらいました。

宮古小学校での避難生活は家族5人で3か月半。その間に図書館、集会室、体育館と場所を移動して、7月19日に西公園の仮設に入りました。その頃避難者は宮古小学校にもう10人もいなかったんじゃないでしょうか。

家族5人で4・5畳が2間と6畳の部屋に入ることができて、その時は嬉しかったですね。ところが、結露がひどくて、毎晩段ボールを敷いてその上に布団を敷いて、朝起きると段ボールと布団を陽に干して、また夕方になると段ボールを敷いて…、毎日その繰り返し。押し入れには湿気が強くてなにも入れることができない。2階で助かって持って行った道具も私の実家に預かってもらいました。

家の再建

家は平成24（2012）年に申請手続きをして、2年7か月で完成しました。その間に建築資材の価格が上がり、防犯のためすべての窓にシャッターを付けなければいけないなど建築基準も変った。そのために、資材の調達に手間取り、完成まで時間がかかったんです。平成25（2013）年11月17日にここに戻ってきて、12月1日にレストランを再開しました。レストラン再開までの間に、私は障がい者施設に就職したので、以前は家のレストランでパティシエとして一緒にやっていたのですが、今デザートは施設から仕入れています。

写真3　子どもの作成したアルバム

子供とアルバム作り

街中に遺体があったので子どもを連れて歩けなかった。1週間経った3月18日に初めて一緒に街に出て、変わってしまった街の風景を見せて、携帯で写真を撮ったんです。遺体のあるところは自衛隊が旗を立てて歩いていましたので、そこは写真をとれませんでしたけど。子どもたちはなにがなんだかわからない状況で、笑いもしなかったんですよ。で、逆に写真を撮って

歩いて、それをまとめることで、自分たちの気持ちの整理ができるのではないかと思ったんです。その後3人がそれぞれ、その写真にコメントを付けて自分のアルバムを作りました（写真3）。

(9) 天杉 国夫さんの話　昭和18（1943）年生

向町3　下向町町内会会長

平成27（2015）年3月12日、ご自宅で伺う。

2階のベランダから2階の屋根へ

当日ね、税金の集団申告の集会をやっていたんですよ。陸中ビル（宮町1）の3階で、150人ぐらいだったかな、その集会の途中だったんです。地震がありましてね、3階だから立っていられないくらいものすごい揺れでしたからね、もう、壁さ、つかまろうにもつかまれないしね、150名いた人がパニックになったですよ。ほんとにとんでもない。こんなのあるだべやと思ってね。それから集会は中止。集団で申告するのは止めとなりまして、申告書はみな事務所に預けまして、自宅まで自転車で一番近い道を帰ってきた。駅前からここまで来るのは一方通行だからすごい渋滞ですよ。車がいっぱいで全然動かなかったんですよ。渋滞は3時頃から始まったんでしょう。

家に帰ると、家内が倒れたお雛さまを片付けていたんですよ。「あの揺れ見ればそんな余裕はないでしょ。」って話してね。その後、欲たかりなもんだから、通帳だの財布だの大切な物を、互いにリュックに詰め込んで、いざ逃げようと表のシャッターを開けたとたんに、もう通りの両方、三浦米穀店さん（向町4）とアニュー宮古さん（向町3）の両側に、真っ黒い水がワァーと盛り上がるように来てるんですよ。「あぁ、こりゃあ駄目だ」って、すぐにバックして家に戻って、靴を脱いで2階へ上がったんです。家の高さぐらいの水が目の前に来てましたもの。本当のところ、私も家内も津波は来ないだろうって思っていました。来るのが早かった。時計が3時20分で止まっています。

町内会長をしていたもんですから、目の前の7階建のあお空さんに、「もし津波がきたら、上がらせて下さい」とお話して、OK取ってたんです。でも、目の前なのに全然行かれなくて…。それぐらい恐ろしい真っ黒い水が目の前に迫ってきたということなんですよ。

家の中にも水がたちまち上がってくるんですよ。警報のサイレンは鳴るし、余震はくるし、生きた心地がしなかったですよ。どうしようもない、妻と2人で流されれば終りだと、覚悟しましたよ。

それから、屋根に上がろうとベランダに出たのですが、そこから自分の家の2階の屋根には簡単に上がれない。隣の蔵の屋根に移ってから、自分の家の2階の屋根に上がるんだけど、私は簡単に渡っていけても、家内は簡単にはいかなかったんです。足が上がんないんですよ。それにトタン屋根ですから滑るんですよ。ベランダに置いてあった台に乗って、隣の屋根に渡した物干し竿につかまって、なんとか隣の屋根に移って、そこから家の屋根さ上がったんです。下はね、はあ、もうね、水が来ているので落ちれば終りですからね、家内は相当の覚悟があったんではないですか。

屋根の上からの救助

いつの時点だったかよく覚えていないんですが、裏（大通1丁目方向）の角に水に浸かっている男性がいたんです。見ているだけで助けることができない、どうしようもない。でも、なんとかできないかと思って、1㍍くらいのブロック塀があるので、「そこに上がって塀を横伝いに来なさい。私の家のところにもう一段高くなっているブロック塀があっからそこに上がりなさい」としゃべると、男性はなんとかそこまで来た。「そこから斜め裏の家のベランダに上がれば誰かいるはずだから」と言った。なんでそう言ったかというと、その男性は2㍍ぐらいの太いロープを持ってたんですよ。「それを丸めて投げて上がりなさい」と言うと、男性はそれを投げて、うまくベランダに上がったんです。でも、その家は留守だった。さあて困った。いやいや、これはどうしようもないなと思って。そこで私が屋根伝いに隣の屋根に移って、男性にロープを投げてもらって、それで男性を引き上げようとした。家内は、「落ちてしまう。止めて！」と言ったが、そんなことを言っていられない

と思ったものですから、「やらなきゃあだめだ」と言って、屋根の雪止めに足をかけまして、なんとか引っ張り上げようとした。結構古くて錆びているような雪止めなんですよ。これ、壊れれば終わりかなと思いながら、踏ん張ってね、なんとか、なんとか引き上げましたよ。重かった。屋根の雪止めがなんとかもったからできたと思っているけど、よくわかりません。必死だった。

3人で家の中に戻ったが、家内はまたベランダに戻るまでが大変だったと思います。水は階段を上から3段残しただけのところまで来ていました。

私たちは3時半頃から2階に行き、屋根に上がったので、男性は1時間以上水につかっていたことになる。私と背丈が同じなもんですから、着る物を上から下まで全部貸して布団に寝かせました。65歳で向町には仕事で来ていたということでした。

夜の11時半頃水が引いたもんですから、3人で避難所ではないけど、避難場所の常安寺に行きました。最初近所に住む孫が宮古小学校にいるかと思って行ったんですが、いなかったので常安寺を見に行き、孫はそこにもいなかったんですが、そのまま家内と2人で4月1日までお世話になりました。昼間はお寺さんからおにぎりをいただいて、ここに来て片付けをしました。

その後はキャンプ用のランプで暮らして、そのうちに2階の増築した部分の電気がついたんですよ。これはいいなって思って、それで2階で過ごすことにしたんです。炊事場もあるものですから、不自由ながらもそこで暮らした。電気はたくさん使うと落ちるので、加減しながら使った。食糧はお寺さんからもらったり、退職後自分で畑を作っていたので、なんとかやってきた。1年後に支援金が出ることになったし、全労連の火災共済に入っていて、本当は火災のためのものだから、津波で壊れたところには出さないんですが、例外中の例外の例外でお見舞金が出たので家を改装した。国はなかなか個人には出さないから、再建できませんよ。復興道路はバンバンやっているけどね、個人の家の再建は進んでいませんよ。

⑽ 天杉 美智子さんの話　昭和18（1943）年生　向町3　平成27（2015）年10月12日、ご自宅で伺う。

覚悟して隣の屋根に

ここには津波は来ないと思っていたので、揺れが治まってから、お雛さまを片付けていた。

表の片っ方のシャッターだけは空けてあったから、そこから外に出ようとしたら、水が丸くなって入ってきた。ああ、もうだめだって思って、靴のまま2階に上がった。びっくりしちゃって、パニックになって、寝袋も一応持ったのね。ぼーっとしちゃったんだね。あとから考えたら何をやっていたんだろうってね。2階に行ってから靴をはいたままだったことに気がついて、びっくりして靴を脱いだ。

2階で大丈夫じゃあないかな、水はこれ以上あがって来ないと思っても、やっぱり怖いものね。主人が、「ここも危ない」と言って、隣の蔵の屋根から家の2階の屋根に上がることになった。どこからどうやって行けばいいのか、どうしようかと…。ベランダに昔のステレオのスピーカーの箱が置いてあったので、トタン屋根で滑るので靴下を脱いで、まずその箱の上に乗って、物干し竿を2本隣の蔵の屋根に渡して、主人に端を押さえてもらって、竿につかまりながら隣の屋根に足を渡した。主人に、「飛べ、飛べ」って言われた。その言葉は覚えているの。下は水が流れていたし、泳げないし、覚悟がいりましたよ。それから、隣の蔵の屋根から家の2階の屋根に行くのは簡単なの。

屋根に上がってみると閉伊川が見えるわけよ。ダッー、ダッーと流れてる。水に浸かっている男の人に気がついたのは、5時のチャイムが鳴っていたときだったと思う。雪が降ってきて寒かった。主人が男性を引き上げて、2階に戻り着替えさせて、布団に寝かせてマッサージをした。とにかくヘドロの臭いがもう大変だった。水が引いて行ったのは5時過ぎ頃かな。

お雛さまに助けられた

ここまで水は来ないと思って、1階の押し入れの中段に入れたお雛

さまを見たら、そのまま濡れていなかった。段ボールの中に入れてあったけど、水をかぶったようでも、かぶらなかったようでも…。不思議ですね。お雛さまに助けられたようなもんじゃないかと、私は思っている。震災後も毎年飾っています。

避難訓練の日は宮古小学校に行くことになっていますが、私は亡くなった方の供養もかねて常安寺に行くようにしています。震災のとき常安寺は避難所ではなかったので、途中でお巡りさんに、「ここは避難所ではないですよ」と言われた。今は高台避難地ということで行っています。お彼岸やお盆に拝みに行きますが、避難訓練の日もお寺さんに行くことに決めています。

(11) 藤島 英世さん　昭和22（1947）年生　と
藤島 正子さん　昭和25（1950）年生　の話

向町3　平成26（2014）年8月8日、ご自宅で伺う。

ここに津波は来ない

英世さん　地震のあったときは、市内からちょっと離れた宮古短大の近くの建物の中にいた。防災無線で津波警報が出て、停電になったので、はあー、こりゃあだめだって思った。それから、車出して小山田トンネルから家に来ようと思ったが、渋滞で小山田の橋は通行止めになっていた。津波が来たと聞いて、小山田のラサ工場の煙突のところに行き、車の中でテレビを見てたら、津波が堤防を越えていた。6時ごろ妻と携帯がつながって、「板屋の娘のところに避難した」って言うので、娘の家に行った。

正子さん　私は最初逃げなかったんです。スーパーで買い物をしていたときに地震があった。末広町を歩いてくると、酒屋さんの瓶が壊れてお酒臭くなって、停電していたんですよ。家に帰ってきたら、たまたまIHの工事に来ていた娘の旦那さんが、「すごい地震だから、津波が来るんじゃないの」と言って。でもうちの人が、「津波が来てもうちは大丈夫、ここまでは来ないから逃げなくていい」って、ずうっと、結婚してから言い続けていました。私も逃げる気もないし、来てもその辺だろうと思っていた。

そのうちに、婿さんがワンセグで出崎埠頭の船や車が流されている様子を見て、「ちょっと義母さん、逃げた方がいいよ」と言ったけど、犬もいるし「大丈夫よ。英世さんもそう言ってたから」って、それでも外にいたんですよ。周りの人たちが「すごいみたいだから、正ちゃん、逃げたら」と言うんで、「うーん」って言いながら、ずっと外にいました。仕事に来ていた電気屋さんが近くの人なので、「取りあえずあなたはお家に帰って、戸締りとかいろいろして、戻ってきたら」と言って、ちょっとしてから婿さんが、「義母さん、お願いだから車に乗って」と言うので、仕方がなく車に乗りました。

少し走っていくと、「津波が来た」みたいな声が聞こえたんですよ。で、宮古小学校まで行ったら、寒くて雪降ってきましたよね。婿さんが「山の上を通って板屋の家に行った方がいいんじゃない」って言うし、宮古小学校も、「ここにも水が来ますので、もうちょっと高台に避難してください」と言うので、山の上の方に行って様子を見たんです。消防署の上の方は結構人がいっぱいいた。4時半か5時頃だったかな、雪もすごくなり、頭痛もしてきたので、近道をして板屋の娘の家に行きました。

その日、宮古で仕事をしていた息子と連絡が取れなくて、逃げているとは思うけど、夜になって落ち着いてから、市内の避難所をあちこち見て回った。そうこうしているうちに、息子から携帯がつながって、宮古小学校に避難していることがわかった。

英世さん　息子に「じゃあ、家、見に行くか」って。夜の10時ごろかな、一緒に途中まで来たけど、まだ完全に水が引いていなかったので、家までは行けなかった。長靴を履いていても、あお空さんのところまでだった。

正子さん　真っ暗だしね。靴がビチョビチョになってたね。あお空さんの前に何人かの人がいて、ちっちゃい懐中電灯で「ここに人がいるから、人がいるから」って合図していたんですよ。たまたま歩いてきた消防の人に会って、「あそこに何人か人がいるみたいだから。連絡

とって欲しいみたいですよ」と言いながら、私たちは板屋にもどったの。道路も車や船がいっぱいいね、お店や商店街に刺さったりしてたね。

2日目から自宅で避難生活

英世さん　板屋に1泊して、次の日は車を駅の駐車場に止めて向町に歩いてきたけど、もうすごかった。家に津波が来てもせいぜい床上50㌢くらいの浸水かと思っていた。ところが、1階の天井まで水がきて、ガラスも破られて、押し入れも抜けて、玄関のサッシも破けて、壁も破けて、下駄箱が天井にぶら下がっていた。うちは2階が大丈夫だったので、窃盗団だのあるから、2日目から2階にいました。電気も水道もこなかったし、プロパンも駄目だった。でも、反射型のストーブを買っておいたので、それがあってよかった。ちょうど灯油も値上がりするので、タンク以外にポリタンクに4つか5つ入れておいた。外に家の灯油ポリタンクが流れてあったので…、

正子さん　これは家のだって、持ってきて使った。

英世さん　寒い時期だったので冷蔵庫の中の物を出しては、ストーブの上で雑炊作ったりして食べていた。家にあるものを少しずつ食べて、避難所には行かなかった。

正子さん　津波の被害にあっていない友人からボンベのガスコンロとカートリッジをもらったり、兄夫婦がおにぎりや水を運んできてくれたり、盛岡からもお兄さんが真空パックのご飯を段ボールで買ってきてくれましたから。大人だけだからね、1食抜いても小さい子がいるわけではないし、どうにか暮らしました。

英世さん　大通の家で電気を通したらすぐにショートして火事になったので、「ちゃんと調べねばなんねぇ」と言うことで電気の回復が遅れた。

正子さん　どんどん遅れて、電気がきたのは40～50日あとくらい。向町は最後だったんですね。近所の仏具屋さん（本町1）が「お使いください」って、ろうそくを出してくれたのでもらいに行きました。テレビも見れなかったんで、電話が通じるようになって、みんなが、「すごかった」って言うんですが、こんなひどいことになっているとは思ってもいなくて、あとでびっくりしましたね。

英世さん　食べる物や寒さは、自宅にいたので他のとこよりよかったですね。

　プロパンもお風呂もだめだった。水は1週間後くらいからタラタラと出たので、バケツに貯めて2階のトイレを流すのに使った。新川町に井戸の水が湧いているところがあったので、そこにバケツを持って汲みに行った。

正子さん　角の三浦米屋さんの交差点に大きな漁船が止まっていて、1か月以上そのままで車が入れなかった。息子の車も借りていた駐車場から流れて他の車と重なっていた。

英世さん　家の前の道路は船にふさがれたうえに、家の中で水に浸かった物もみなさん外に出したので、車が通ることができなかった。向いのあお空さんの側は、早くに片付いて車が通れるようになった。

　家の1階を片付けるのには1か月くらいかかったかな。修理にどのくらいかかるかわかんないから、自分で壁を洗って、もういいなと思っても、水を含んでいるので乾くとまた膨らんでくる。3、4回は繰り返し洗いました。

正子さん　2日間ボランティアの人に手伝ってもらった。

英世さん　大通りのＹＭＣＡ（大通1）のボランティアの人が来て、「なにか手伝いますよ」と言われたので、床下の掃除をしてもらいましたっけ。助かりました。この町内の側溝の泥さらいは、自分一人のところだけやっても効果がないから。町内会長から申し込んで、やってもらった。3日間くらい14～15人が交代で来てくれた。岩大の学生も来ました。

正子さん　１００㍑満タンの灯油タンクの配管が壊れて灯油が流れ出していた。津波の泥水や魚、灯油の臭いがひどくて、1階の物はすべて捨てた。1年後に部屋が暖まると、窓枠になにか白いものがあったが、それは塩だった。銭湯はちょっと離れたところに車で行ったり、毎日洗濯物はリュックを背負ってコインランドリーに通ったりして、そういうのが大変だった。

英世さん　ガソリンがないから、なるべく歩いて行くようにした。

正子さん　電気がもどり、お風呂が直るまで、しばらくの間通いましたね。

英世さん　たまたま灯油も買い置きのポリタンクがあったからよかった。2階に台所があったから、冷蔵庫も残ったし、寝具も2階で使えたし…。

逃げ遅れたり、1回は逃げたけども、寒かったので服を取りに戻ってきたりして、向町上下合わせて30人くらい亡くなっていますね。

正子さん　トイレも2階だったしね。次の日から自宅に住むことができた。私たちはいい方ですよ。

⑿　三浦 利勝さんの話　昭和20（1945）年生

向町4　三浦設計事務所所長、三浦米穀店、上向町自治会会長

平成26（2014）年8月11日、事務所で伺う。

3階から覚悟の写真撮影

3階の事務所にいて、強い揺れを感じました。当時83歳の母親が心配になって下に降りて行ったら、柱につかまっていた。2回目の揺れが来て、「これはただ事ではない、今までとは違う、津波が来るから逃げなきゃだめだ」と家内と話して、地震が治まるのを待ちまして、2人を逃がしたんです。母親はいろいろ薬を飲んだりしているので、「あれがない、これがない」と2度も3度も行ったり来たりして、「あとで持っていくから逃げろ！」って急がせた。皆さんより若干遅れぎみでここを出ていきました。家内は市の避難訓練に毎年参加していたんですが、顔色を変えて、「津波が来る！　津波が来る！」って、私より危機感を持っていましたね。

私は外に出ていた番頭さんを待つことにして、さかもと眼科クリニックの看護士さんたちが逃げるのを見ながら、一度3階の事務所に行き、また下に降りた。歩いている人はほとんどいなかった。宮古橋から駅の方に向かって車が渋滞していて、黒っぽい服を着た人が2人で交通整理をしていました。町内会長もしているので、しばらく家の前で町内の様子を見ていたが、通りに誰もいないのを確認して、家の中に入ったんです。

最初は「20㌢の津波を観測」という放送で、そんなものなのかなあと思っていたら、その後に「6㍍」とか「9㍍」とかいう放送が1回あったような気がします。それで、これから逃げても間に合いそうもないし、自分の設計した家を放り出す気にもなれないし、また設計者としての興味もあったので、逃げる気にならなかったんです。番頭さんが帰ってきて、昔は米を担いで上にあがったんですが、もうそんなこともできないので、レジスターを上にあげた。そのとき、誰かの「来たぞー」という声を聞いて、番頭さんと2人で上にあがった。2、3万しか入っていないレジスターを上にあげたんですが、あとから考えると、十数万する米券や印紙はすっかり忘れていました。

3階の窓から外を見ていると、ご老人がゆっくりと歩いてきて、そこに第1波というか、20～30㌢の黒い水が来た。おじいさんは後ろを振り向いて、びっくりして前に進もうとしたら、信号の柱に頭をぶつけて倒れたように見えた。でも、後から考えると、水嵩が増してきて水没したんですね、あっという間の出来事だった。

その後呆然としていたら、突然大きな音がして、車がガラガラとまるで巨大なブルドーザーに押されているかのようにして来た。それは黒い波のようで、上から盛り上がってくるように感じた。車の警笛が鳴り響き、それと同時に鳴り響いた異

写真4　突っ込んだ船（みやこわが町掲載）

撮影：三浦利勝

様な音は車が流される音なのか、人の声なのか…。また、重油の匂いがして、それは鼻をつくような濃い匂いでした。

波は荒くなったり静かになったりを何度か繰り返して、いろいろな物が流されてきた。そのうちに船が流されて来て、舳（へさき）は前の屯所（向町2）に、後ろは我が家にぶつかって止まった。波の流れが変わったのか、船は再び動き出して、今度は斜め角の美容院の前の電柱（向町3）に舳が挟まった形で止まった（写真4）。

水が引ける頃

私が2、3歳の頃、この辺りは昭和23（1948）年のアイオン台風で3～4メートル浸水しているんです。親父から水が引いていくときに屋根に上って、竿で流れてくる物が家に当たらないように避けたという話を聞いていたので、この津波も波が引くときに船やら何やらが戻ってきて、完全に家も駄目になるかもしれないと思い、覚悟を決めたんです。それから、やることもないので、カメラを持ちだして写真を撮りだしたんです。

波が静かになったときには、それまでの騒音が嘘みたいになにも聞こえなくなり、匂いだけがして、時折ガスボンベがねずみ花火みたいにシュウシュウと音を立ててグルグル回っていた。雪が降ってだんだん暗くなって、時々船がギィギィと音を立て、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。さらに不安になった。だが、その後は堤防があるせいか急激な引き波もなく、命拾いをしたなと思った。

母は歩くのが得手ではないので、あの足では間に合わなかったかもしれない。もしかしたら途中であお空さんの建物に逃げたかもしれないと思って、ここからオーナーの姿が屋上に見えたので、何度か携帯をかけたが通じなかった。心配でした。

電気が消えたので、昔のストーブを出しきて、余震の度につけたり消したりを繰り返しながら使った。トイレの水はしばらく使えたんですが、節水の放送があったときから使わなかったんですが、その後は出なくなった。

10時頃にはだいぶ水が引けていた。見回りにきた第二分団の人が声をかけてくれて、「避難所に逃げた方がいいですよ」と言われたので、ここを出ることにした。駅寄りのもう1つ先の信号のところはほぼ乾いていて、そこにはすでに何人か集まっていた。分団員が自宅にいた方々に声をかけて、ホロをかぶせた軽トラに一緒に乗って、宮古小学校に行きました。

まず、母親と家内を探した。放送をしてもらったが返事がなかった。常安寺かなと思って、次に常安寺に行って、女性の部屋に声をかけたけど、そこにもいなかった。駄目だったのかなと思いながら、また宮古小学校戻ってくると、近所の人が2人を小学校で見たことを教えてくれた。そこでいくつかの教室を捜して回り、見つけたときにはほっとしました。覚悟を決めて3階で写真を撮るまでと、離れた母親や家内と再会したときの気持ちは、今まで経験したことがない初めてのものでした。それが印象に残っています。

宮古小学校で避難生活

次の日（12日）から、家内は自分の母親の介護が必要になって、宮町の実家で生活をした。母親は私と一緒に1週間ぐらい宮古小学校にいて、その後は近くの親戚の家に預かってもらった。私はちょうど1か月避難所を拠点にして、そこから自宅に通っていました。

最初の2、3日は電気、水道が止まったので、被災されていない方々も、たくさん避難所に来られていた。3月下旬までは学校の先生方がいろいろとお世話をしてくれたので、避難している人がやることはそんなになかったんです。副校長先生が具体的にてきぱきと指示してくれて感謝しています。新学期が始まる頃には避難所の人々で自主運営をするようにという方向性もあって、掃除や食事の準備を自分たちでやるようになった。そのうちに自衛隊員が校庭で炊き出しをして、校舎の入口まで持ってきてくれる。それを運んで配るなど、当番を決めてやりましたね。

水がなかったので、トイレに使う水は若い方々がプールに汲みに行っ

てくれた。トイレットペーパーなど生活用品は、避難者たちが自宅から持ってきたりしたので不足はなかった。そのうち水道は復旧したが、時々排水に不都合があり、使ったペーパーは流さないでビニール袋に入れておくことにした。また電気が回復するまで、夜使うロウソクも長持ちさせるために、時間を決めてつけたり消したり、灯油の使用時間の制限もあり、今まで経験したことがないことばかりでした。お風呂にも困まった。私は親戚でお世話になったが、週に2回湯ったり館(茂市、リバーパークにいさとにある入浴施設)が避難所に迎えに来ていました。私が出るころには畳が配られて、毛布も1人2枚くらいあった。ちょうど1か月後の4月11日まで避難所でお世話になって、それからは家内の実家に寝泊まりして毎日仕事場に通いました。

復旧

自宅は水が2階の床下まで来たので、畳も替えました。米屋は仕事仲間や親戚の若い人が手伝いにきてくれて、その後、ボランティアも3、4人お願いして、1か月くらいかけて片付けた。

店の米があちこちに流れて、ビニール袋の米はパンパンになって、使い物にならなくなっていました。精米所に玄米は1袋もなくなっていたが、精米した後の米ぬかだけが残っていた。

消防車が2台待機して、しばらくそのまま置かれていた船の解体が始まった。重油を抜くのに、1日では終わらなくて2日間かかった。流れてくる重油のために砂を用意したが、それが足りなくなって、たまたま家にあった使い物にならなくなったお米を利用していただいた。重油が流れるのをせき止めるのに役立ってよかったです。

3階の事務所は水の被害がなくてすぐに使える状態だったが、通信ができなければ仕事にならない。それがなかなか開通しなくて困った。直ぐ近くの同業者の事務所は通信ができたので、そこに机を借りて仕事を再開した。

8月のお盆のころに自宅で暮らせるようになり、東京の妹のところにいた母親と、義母を兄のところに預けた家内が戻ってきました。

仮設でお暮しの方はお気の毒ですが、自宅で避難生活をしている人たちのことは忘れられがちでした。自分でも気が付くのが遅かったんですが、支援物資も来なかったし、町内に残っている人たちの支援に対しては申請する仕組みもない。市にお願いして物資を回してもらうようにはしましたけど、今後のこととして、行政にそのあたりをもっときめ細やかにしていただければと思います。

(13) 石井 繁さんの話　昭和7（1932）年生

向町5　平成27（2015）年3月10日、ご自宅で伺う。

船が目の前に！

我が家は家内と2人暮らしですが、当日家内は病院通いのため不在で、家には私だけでした。過去の経験から津波は来ないと思って、避難しませんでした。今考えると油断があったと反省しています。

3時過ぎに2階から見ていたら、真っ黒い海水が宮古大橋に吹き上がって、まるで橋を呑み込むようでした。津波だと思った瞬間、今まで見たことのないような勢いで高波がどんどん押し寄せてきました。それがだんだんこっちに来るんですね、我が家もあっという間に海水をかぶり危険な状況でした。30㌧くらいの漁船が我が家に向って流れてきたんです。どんどん、どんどんとこっちに向かってくるんですよ。私は、「もうだめだ」ってあきらめたんです。ところが、漁船は庭先数㍍のところで潮の流れが変わり、隣の空地に流れていきました。万に一つの命が助かりました。

家の中にも真っ黒い水が入ってくるんですよ。どんどん、どんどんと盛り上がるようにね。どこまで来るのかなと思い、これもあきらめました。それが階段の上から3段残して止まりました。運がよかった、命が助かりました。

我が家の浸水は4㍍にも達し、1階の天井裏まで来ました。水は玄関を突き破って家の中を通り抜けていったんです。午後10時頃までに徐々に引いていきました。12時に危険がないか確認して、押し入れから布団を出して休みました。

山口小学校で避難生活

地震の時、病院にいた家内は津波警報で合同庁舎に避難して無事でした。12日の朝歩いて家に帰ってきました。

消防の方やお巡りさんが地区を回って、避難するようにと指示がありました。お昼頃、泥んこの下駄箱から靴を引っ張り出して一番近い宮古高校に歩いていきましたが、避難所ではなかったので、そこから避難所の山口小学校に行きました。体育館には１００名を超える避難者がいて混乱していました。１週間を過ぎると自宅に住める方は帰っていき、２か月後には50～60名くらいになりました。

消防署が１週間後に災害用の衛星電話を設置したので、仙台や東京にいる子どもたちとようやく連絡が取れました。食事は自衛隊の方たちが三度三度運んできてくれたので助かりましたね。避難所の生活は厳しく、寒さ対策、騒音、寝不足などで大変でしたが、みんなで協調して解決できたと思っています。

自宅の復旧

自宅の被害は想像を絶する有様で１階は全滅状態でした。山口小学校から自転車か歩きで通って片付けをしました。５月３日に避難所を出て、自宅の２階で生活を始めました。５月４日に電気、水道が通じてようやく安堵しました。電話がまだ通じなかったので、携帯電話を初めて買って使いました。５月から１階の工事にかかり、７月に１階の部屋の畳が入り、自宅が復旧しました。

自衛隊の救援や炊き出し、警察署派遣のパトロールや交通整理、避難所の山口小学校の先生方、健康管理してくださった看護士さん、消防、市役所、福祉協議会、ボランティア、自宅の工事関係者など、たくさんの方々のお世話になりました。皆さま方の崇高な意志に心を打たれました。皆さまに感謝申し上げます。

災害に対して常に心構えをしておくこと、食料品の備蓄や携帯ラジオなどを用意しておくことが必要だと思いました。そして、警報があれば逃げるということ、日常的な交流、横の連絡が一番大切だと感じています。

今後はこの経験を教訓として災害防止に取り組みたいです。

3　大通１～４丁目

向町から宮古駅に向かう大通の両側の町並みで１丁目から４丁目までである。町内会・自治会は、１丁目に２つ、２～４丁目までの各１を合わせて５つの組織になっている。商店、旅館や医院が多く、中心の通りはかつて八幡通りと呼ばれ、県北バスのバス通りになっている。３丁目には第八分団（管轄区＝末広町、大通３丁目、４丁目、南町）の屯所が置かれている。

震災前、平成23（２０１１）年３月１日現在の世帯数は３３０、人口は６７１名（男３００、女３７１）であった。４つの町内の世帯数はそれぞれ80前後である。

「３・11」の津波による浸水は１丁目、２丁目の被害が大きく、多くの家屋、店舗は１階が壊滅状態となったが、３丁目の駅付近一部は床下浸水までというところもある。死亡届者は２名である。

向町附近から駅方向にこの通りを車や走って避難した人がたくさんいた。大通１丁目の通りに面したアパートにおばあちゃん、赤ちゃんを連れた若いお母さんと女性の４名が外階段を上がり、アパートの部屋に入り助かったという。

12日夜中には漏電による火災も発生している。

震災後、平成23（２０１１）年８月の世帯数は３０６、人口は６２９名（男２８９、女３４０）に、平成27（２０１５）年３月１日現在は３１３世帯、人口６１７名（男３０２、女３１５）である。人口数は減少しているが、１丁目ではアパートの建設により世帯数が増えている。

(1)　斎藤（しちこ）志知子さんの話　昭和29（１９５４）年生

大通１丁目　平成26（２０１４）年８月12日、ご自宅で伺う。

すぐに宮古小学校に避難

当日は自宅にいました。主人の母と3人暮らしですけど、おばあちゃんは病院に行ってて、家に主人と2人だけだった。

揺れました。放送がありました。主人は、「俺は分団長だから船場（閉伊川の下流部左岸にある管内の水門）に行かねばなんね」って、私1人残された。近所の人たちが、「宮古小学校に逃げましょう、逃げましょう」って言ったんだけど、おばあちゃんが心配で行かれない。近所の人が「おばあちゃんのところ、車で送って行くから」と言ってくれた。車で佐藤クリニック（保久田4）まで送ってくれる途中で運よくおばあちゃんに会ったんです。そこで車を降りておばあちゃんと2人宮古小学校に避難したんです。だいぶ早い時間帯で避難しましたので、波も見ていませんし、なんにも怖い思いをしていませんね。おかげさまで。

近所の人の話だと、すぐここの路地に軽トラックが止まっていて、ラジオが津波警報ではなくて、「大津波警報が発令されました」というニュースを流していたというんです。津波警報ならばこの辺までくることはないだろうけど、「大津波警報って言うから宮古小学校に避難しましょう」って、逃げたんですね。もし家に帰ってきて大事なものを見つけたりしていたら、危なかったかもしれませんけど、ほんとにバックひとつ。自分の財布とか通帳とかハンコぐらいを入れましたけど、自分の分はね。

でも、大津波警報と聞きながらも、この辺までは来ないだろう、いったん逃げるけれども、警報が解除になって、また戻ってきて普通の生活ができるというつもりでいますんで、なんにも持って逃げないんですよね。戸締りはしたんですけど、ブレーカーを下げるという意識がなくて、何日かしてここに入れるようになってから下しましたね。ちょっとそこが甘かったですね。

宮古小学校には避難者が千人位いて、とりあえず体育館に入った。くっつくほどという状態ではありませんでしたが、毛布は2人で1枚だった。その夜は子どもとお年寄り優先に、レタスの入ったスープが出ました。中村屋さんのせんべいをいただいて、嬉しかった。

次の日から30人ぐらいずつ教室に入って、私たちの教室はたまたま大人だけだった。中にはペットを連れた人もいて、廊下を散歩させていた。学校は小学生たちを家に帰さないで、各教室に避難させていましたね。

ここの家の通りに入れるようになってから、毎日のように宮古小学校から通って片付け方をして、また宮古小学校に戻ってご飯をいただいて寝て、また次の朝ご飯を食べて、ラジオ体操やらお掃除やらいろいろやって、またここにきて片付け方をして、また夕方には宮小に…という生活をしていた。水道が復旧して、電気がついたので帰ってきた。4月12日、ちょうど1か月ですね。

家の1階は全滅ですね。神棚は大丈夫でした。寝室は2階でしたので、布団や衣類は大丈夫でしたけど、1階の電化製品は全部駄目ですものね。洗濯機、冷蔵庫、テレビから、車もだめでしたね。

この辺りは1・9メートル浸水して、通りの電柱にしばらく水の跡がありました。

(2) 斎藤 仁司さんの話　昭和27（1952）年生

大通1　第二分団長、大通1丁目第一町内会会長（2015～）

平成26（2014）年8月12日、ご自宅で伺う。

管内の第二分団屯所は被災・第三分団で活動

地震があってすぐに向町にある第二分団の屯所に行き、分団員5人とポンプ車で鉄橋の横の水門（閉伊川の下流部左岸）に行って、水門を閉めたんです。2人は家が心配で帰ったので、最終的には3人で警戒していた。そこで事件が起こるんですね。副分団長が流されたんです。彼はビデオで撮影していたので鉄橋方面だけを見ていたんですよ。ところが、だんだん水嵩が増してきて、津波が押し寄せてきたので、ポンプ車を移動させなきゃあだめだと思って、私の弟、斎藤部長にポンプ車の移動を命令した。まず弟が、そして私が水門の上から降りたんです。そのときに、副分団長（安倍主税さん）が「アッ！」という声を出した。「なんだ！」って見たら、もうすぐそこに黒い波が来ていて、ザッーと水をかぶった。慌てて水をザブザブとかきわけて、ぐるりと

回って、線路の上にあがって私と弟2人は助かった。

副分団長はビデオを撮っていて、遅くなったために流されてしまった。姿が見えなくなり、附近を捜索したところ、瓦礫の下に埋まっているのが見えた。助けに行こうにも、瓦礫に阻まれてそばに行くこともできない。「待ってろ!」と声をかけるだけでどうしようもなかった。

その時、近くの家の2階から、「助けて!」と叫ぶ女性の声がして、警察官が我々2人の近くに来た。そこで、その警察官に無線で消防署に連絡してもらった。消防署がゴムボートを持ってきて、副分団長は瓦礫の中から助けられた。もし、警察官が来なかったら時間がかかって、低体温になっていた。水が引けてあとから見たら、そこはそんなに深くない、低いところだった。

私は線路を歩いて市街地に戻り、宮古小学校に行った。家族の無事を確認して、そのまま宮古小学校の隣にある第三分団（横町3）に行った。

第二分団の屯所は、船が建物を破壊しながらぶつかって来て、壊滅状態だったので、私はその後、第三分団にお世話になった。赤沼分団長に「いらせてくれ。第三分団屯所にいれば情報が早いから、俺たちの第二分団員もなにかあったら来てくれると思う」としゃべって、1か月くらい第三分団に詰めていました。2階のコミュニティーは避難のお年寄りが泊まっていたので、分団員は座布団を集めて1階の屯所で寝ました。

第三分団長さんが「斎藤君、遺体捜索に行くべ」って、次の日から何回か、向町の家の中の遺体捜索をやったんですよ。やっぱり入って行けばあるんですよ、ご遺体が。見つかると、泥をとって顔を洗って確認して、管内でわかる人は名前と状況や損傷などを書類に書いた。流されてきた人もいた。電話をすると市役所のリサイクル車が引き取りに来てくれるので、ご遺体を毛布にくるんで両端を縛って車に乗せた。昔、火事現場で怪我人やご遺体を運んだことがあったが、普段は怖がりなのに、分団の半纏を着ているとなぜか冷静になれた。

震災後はこの町内でも家を解体してアパートにするなど、だいぶ様子が変わり、震災前よりも世帯数が増えた。不満があっても、お互いの助け合いで、絆が深まりいろんな意味で親しくなったように感じています。

(3) 太田 昭彦さんの話　昭和42（1967）年生

大通2丁目　㈲太田屋肉店代表取締役

平成26（2014）年11月12日、本店事務所で伺う。

3つの店舗を見回って、本店3階に避難

太田屋肉店は、大通2丁目の本店と魚菜市場店で肉店を、そして焼肉レストラン「焼肉モリモリ」（大通3）の3か所で営業しています。

3月11日は千徳の自宅から魚菜市場店に向う途中で地震にあいました。すごい揺れだった。魚菜市場店は揚げ物をやっていますから、これはやばいなと思って、急いで魚菜市場店に行きました。案の定、店では油がすごくこぼれていた。まず従業員に怪我がなかったかどうか確認しました。電気が消えて、水道も止まっていたんですが、「できる範囲で掃除をしましょう」とみんなに言って、車で本店に行きました。

本店も電気が消えて、従業員たちは外に出ていました。次に近くにある焼肉モリモリに行くと、皿などが落ちて壊れていた。店長に、「電気が復旧したら、予約のお客さんがくるだろうから、片付けて準備しておきましょう」と言って、本店に戻り店を閉めました。それからまた魚菜市場店に行ったのですが。その時はもう渋滞していたので、車では時間がかかると思い、自転車で行きました。そして、市場店を閉めて、本店に戻ってきました。

その時、大通1丁目の丸福さん（魚店）辺りに波というか瓦礫を運んできた水がガァーと押し寄せてきました。本店の前に車を置いてありましたから、車で逃げようとしたら、3階のベランダから、「早く上に逃げて来い!」という声がかかり、本店の3階に逃げたんです。3階には従業員や近所の人たちが避難していました。下の道路に人はいなかったけど、車に乗っている人が流されてゆくのが見えました。みんなで、「がんばれ、がんばれ」と大声で叫んで声をかけました。

水が引けたのは9時くらいだったと思います。千徳の家族も心配だったので、家まで歩いて帰りました。家族は全員無事でした。停電はしていましたけど、水はチョロチョロですが、出ていたので、ペットボトルやいろんな物にいっぱい入れて、本店に持ってきました。

後日、焼肉モリモリの店長も逃げて無事だったことがわかり、従業員は本店も魚菜市場店も全員無事でした。浸水は本店が1メートル80センチ、モリモリは1メートル60センチ、冷蔵庫のある倉庫は2メートルでした。

店の復興

次の日は魚菜市場に行って、魚菜市場のメンバーと炊き出しをしました。魚菜市場店はすぐに電気が通ったので、1週間くらいで営業を再開できたと思う。本店の中は泥だらけになっていて、従業員たちで2日目、3日目あたりから、店の泥出しをしました。冷蔵庫など全部壊れましたので、会社の縮小を考えるしかないなと思いましたね。

水が出ないことには掃除もできないんですが、とりあえず泥や物を全部出して片付けてから、各メーカーさんに連絡しました。うちの場合は車も流されたので、仕入れ業者さんに商品を運んできてもらいました。いろいろなところに協力してもらって、1か月後から動き始めて、3か月以内で本格的に再開できたという感じですね。モリモリは10月1日にオープンしました。

本店は会社の資金で直すしかなかった。できる範囲でやりましたので、店舗までは修復できませんでした。補助金は遅かった。グループ補助金は1年後、第3次か第4次の時に、かかった金額の大きなものだけ申請できました。食肉の組合が協力的で、震災直後1年ぐらいの間、2トン冷凍車を無料で借りることができたのが、とても有難かった。支援は今だに継続しています。沿岸被災地域の牛肉販売促進のために年2回合計100万円の補助金が出るので、それで牛肉の売り出しをかけたりしています。不足器材に対しての寄付もいただいています。

1、2年は復興で逆に震災前以上の売り上げがありましたが、今は落ち着いて通常に戻った感じです。

ライブハウスを建てる

震災後、札幌のライブハウスの社長や東京からの支援者が支援物資を持ってきてくれました。バンドの人たちから、「他所で被災地の話をしても温度差があって、わかってもらえない」「ライブをする場所があれば、ライブに来た人たちが被災地を見に来るきっかけにもなる」と言われて、とりあえず私の家の土地（大通2丁目）にライブハウスを建てた。震災前、その場所にはテナントが入っていた建物があったんですが、津波で全壊したので解体して、その跡地に、私が借金して建てたんです。器材などは全部支援でもらった物で完成させることができました。友達、先輩、後輩などの関係者が集まってきて、月に7本ぐらい公演しています。最初の1、2年目は取材もたくさん来ました。

「東北ライブハウス大作戦」というプロジェクトの宮古の代表をしています。それは東北三陸沖海岸にライブハウスを建設して、バンドやミュージシャンが被災地を訪れることで復興への気持ちを広げていくことを目的にしたプロジェクトです。

(4) **宮ヶ崎 英治さん**　昭和34（1959）年生　と
松崎 和夫さん　昭和26（1951）年生　の話
大通2丁目　太田屋肉店従業員
平成26（2014）年11月19日、本店内で伺う。

田老で津波を見て市街地へ

宮ヶ崎さん　久慈に仕入れに行ってたんですよ。その帰り道の田老で地震にあって、2トン車に荷物を積んでいたからそんなに揺れた感じはなかったけど、ちょっと尋常じゃあないと思った。第1波が築地の下り坂で白い波を立てて上がったところが見えた。対向車を避けながら急いで本店まで来た。

松崎さん　地震のとき、本店にお客さんはいなかった。かなり揺れたのですぐ外に出た。

宮ヶ崎さん　5分か10分くらい経っていたかな、店の前で荷物を降ろそうとしたら、最初水が下の方に流れてきて、それから津波というか

渦を巻いてきたんです。これは「ヤバイぞ」と言って、そこら中に、「水が来た、来た！逃げろ！」って騒いで、みんなに声をかけて3階に上がって様子を見た。

松崎さん　2トン車から荷物を降ろしていたら絶対危なかった。紙一重だった。

宮ヶ崎さん　仕入れた物を冷蔵庫の中に入れていたら、津波にあっていたと思う。俺が外にいて、「上さ、あがれ」って言わなかったらみんな、ずぶ濡れになっていた。まさかね、ここに水が来ても足が隠れるくらいかなと思っていた。水はすごい勢いだった。渦を巻いていて、ごみが回るような感じだった。

松崎さん　通りの向こうから、分団の人が「堤防越えた！」って声を出して逃げてきた。

宮ヶ崎さん　ベランダから下を歩いていた何人かに「上さ、あがれ！」って声をかけた。車に乗って流されて行く人も見えた。3階に上がったのは会社の会長、社長、同僚の他に藤田さんと分団員がもう1人、あと夫婦が2組だったな。全部で10人か12人くらいいたかな。

松崎さん　会社の3階があってよかったな。店のトラックが流されて、ここの浸水は1.5メートル。津波が引けたのは8時か9時だった。

宮ヶ崎さん　水が引けて、近所の人はみな帰った。社長が千徳の自宅から車を持ってきて、従業員たちを送って行った。俺の家は高浜、松崎さんは赤前でちょっと遠いし、夜瓦礫の中を歩くのは危ないから3階の休憩室に泊まることにした。

松崎さん　その夜は反射式のストーブが1台あるだけで、それも半分しか使えなかった、つけたり消したりしてね。炬燵もあったけど停電で使えなかった。毛布をかぶって寝た。食べる物がなくてお腹が空いた。店のシャッターは半分しか開けていなかったのに、あとで見たら津波で壊されて全部開いていた。

朝早くに自宅に帰る

松崎さん　次の日、夜が明けっか明けないうちに、赤前の家が心配だから、歩いて帰ろうと思った。

宮ヶ崎さん　家も心配だし、腹も減ったしな、水も飲みたかった。

松崎さん　ジャンパーも長靴もみんな車の中でしっちゃかめっちゃかになって、ヘドロの中だった。まだ津波の予兆があって、見ていると津波が来ているのがわかった。

宮ヶ崎さん　いつも車で行く浜通りではなく、歩いて小山田トンネルに行った。そこで、高浜小学校にも水が来て、被害がひどいと聞いて、ああ、うちもだめかなと思った。トンネルを通って山道を金浜地区に向かった。

松崎さん　トンネルを抜けて磯鶏の河南中学校に行った。学校の前のコンビニは開いていて、客が並んでらった。品物もなんぼかあった。

宮ヶ崎さん　途中河南中学校に寄ると息子がいた。先生から、娘はお母さんと一緒に帰ったと言うのを聞いて、2人は終りだな、でも息子だけでも助かったからよかったと思った。

松崎さん　分団の軽トラが止まっていたので、その荷台に乗せてもらった。救急のためあちこち回りながら6、7人が乗った。雪が降って寒かったので、歩きでは相当ひどい目にあったと思う。すげえ助かった。

宮ヶ崎さん　途中で松崎さんと別れて高浜に帰ると、周りは流されていた。家はチリ地震のときに高台に移転していたので、水は玄関前ぎりぎりのところで止まっていた。家の中から娘がちょこっと顔を出したのを見て、「あ、いた」って、ほっとした。中学3年生の娘は卒業式の練習で河南中学校にいたところに、妻が迎えさ行って、家に着いた時に津波が来たということだった。息子は在校生だったんで、中学校に1晩泊まった。母屋は助かったが、車や乾燥小屋が流されたので、やっぱり大変な被害だった。その後は電気も水道もなくて大変だった。高浜小学校の側の社会福祉協会（金浜老人福祉センター）まで30分くらいかけて歩いて、自衛隊の炊き出しを取りに行った。親戚や近所の家にも手伝いに行った。

　会社に来るにも足がない。普段は店のトラックで通勤していたけど、店の車は全滅だったし、ここで稼いでいる従業員の車も流された。と

りあえず車をどっかで手に入れるまでの1か月半くらいは、息子の自転車を借りたり、歩いたりして通勤した。

松崎さん　赤前に帰ると、家は2㍍近く水が入り、1階が浸水していた。家の前にはどこからか他所の家が流されて来ていた。次の日に自衛隊が捜索すると、その中から3人のご遺体が見つかった。

妻は崎山保育所の保育士なので家に帰れなかった。保育所が避難所になって、ずっと泊まりっぱなしだった。俺は3か所くらい、友人の家を回って寝泊まりしていた。自分で瓦礫の片付けをしていたが、あとで自衛隊が手伝ってくれたので助かった。会社でも毎日瓦礫の片付けをした。

(5)　張間 重子さんの話　昭和10（1935）年生

大通3丁目　魚元代表、昭和通りのおかみさんもてなしたい会員

平成26（2014）年11月21日、事務所で伺う。

店の2階で夜を明かす

地震が起きたときは店の休憩時間に入っていてね、びっくりして外に出たんですよ。すぐに孫のことを思って、宮古保育園（保久田1）に迎えに走ったの。帰って来る途中、近所の人が「ちょっと、おかみさん、津波が来る」って言うから、「ここまで来るわけないでしょ」なんて悠長に歩いてきたんです。

孫と2階で駅の電車を見ていたら、なんか水が来たのが見えたんです。津波とは全然思わなかった。なんだろう、おかしいなと思っているうちに、うちの板長が騒いで、「おかみさん津波が来たよ」って言うの。大通に面した個室に行ってみたらね、船や車が流されて来てるわけ。津波って遭ったことないし、この年になってもね。ピンとこなかったの。そしたらね、この前の通りも水が溢れて車も流れてきて外にも出れない。川の方からも溢れてきたんですよね。ここの店にも水が入ったけど、家は高くなっているので、床下浸水で済んだ。店の従業員はお昼が終って帰って、夜の人はまだ出てきていなかったから、よかったの。

ママ（孫の母親）が職場から保育園に子どもを迎えに行ったら、「おばあちゃんと行きましたよ」って言われて、水の中を濡れてここに帰ってきた。息子も勿論仕事で来れないわけよ。住まいは西町ですが、その夜は孫とママと3人でこの店の2階の休憩室で石油ストーブを焚いて1晩明かしたんですよ。なんの情報もない、ラジオも入らないしね。ただ夜が明けるのを待っているだけでした。

夜が明けて、水は引けたんだけど、家の前は黒いヘドロで大変でしたよ。事務所に水はチョロとしか入らなかったけど、機械類は下にあったので水をかぶって駄目になった。プロパンガスは、板長が地震のときすぐに十何本あるボンベの栓を止めたので、問題なく使えた。火を大切にする板長に感心しました。

炊き出し

停電になって、冷凍庫の中の物は全部駄目になると思った。中にあったご飯を蒸して、イクラとかウニなどを乗せて、いつも来てくれるお客さんや近くの人に持っていこうと、弁当をつくったの。ところがね、道路には瓦礫があって行けない。板長と従業員が歩いて届けてくれて、みなさんに喜ばれました。

それから宮古駅の三鉄さんに30何人分を持って行った。そしたら今度は、三鉄さんから炊き出しを頼まれてね。お米30㌔を持ってきて、炊く場所がないからやってくれということで、12日からすぐに仕出しをやりました。板長が昼の時間に合わせて朝から支度をして、毎日何十人分って数を作って、三鉄さんに取りに来てもらいました。最初の2、3日は食材があったけど、あとは何も入ってこない。おにぎりを作ったりして、目に見えない大変さがあったようです。板長が1人で1か月やってくれました。

お店は6月ごろまで再開できないと思っていたら、3月の末から4月に業者さんから「集まる場所がないから開けてくれ」って電話があった。電気が戻って、畳も汚れていませんでしたが、「材料がないし、まだ商売する状態じゃあない」と言うと、「食べ物はいらない、話をする場所があればいい」と言われて、4月7日に開けましたよ。店として

再開したのは5月に入ってからです。無我夢中でしたよ。

お祓いのおかげ

地震、津波がきても、家の中の物が何一つ動いていないの。あの揺れでも何一つ落ちなかった。不思議でした。以前から九州にいちご弁当のファンのお客さまで、祈祷をしてくださる方がいて、「宮古まで行ってあげますよ」と言われて、3月11日に来る予定だったんですが、あちらの都合で3月4日になった。4日に隅から隅まで、なにからなにまで、全部お祓いしていったの。そのお祓いの仕方が違う、迫力があるのね。そのお蔭か地震でなにも壊れない、津波で床下浸水ですんだのではないかと思っています。

震災後はいざとなったときの人間の強さを感じましたね。1年経ってみてから思いましたね。やっぱり人間って素晴らしい、強いわ。みなさんの強さが見えたもの、負けていられない、やらなきゃあならない、やるしかないということ感じましたね。

(6) 本田 英子さんの話　昭和33（1958）年生

鍬ヶ崎下町　ビューティサロンヒデ（震災後、大通4丁目で営業）

平成27（2015）年4月26日、大通店内で伺う。

鍬ヶ崎で被災

3月11日震災の日まで鍬ヶ崎の下町（しもまち）で母親と祖母の代からの美容院をやっていましたが、被災して店舗も家もなくなり、大通4丁目に店舗を見つけて2011年5月に再開したんです。

その日は3時に近所のお母さんの予約が入っていた。ちょうど母と2人でコーヒーを飲んでいる時に、もうすごく揺れて、「これは何のことだろう」って外に出たら、外も異常な雰囲気だったわけ。どこかの土蔵が崩れたみたいで土煙が上がっているし、これは大事だと思っていたら、大津波警報の放送が流れた。じゃあ、「逃げる準備をしよう」って、店を閉めたり、ガスを止めたり、私はトイレに行ったりなんかしたので、出るのが遅くなった。外に出た母が、「英子、なにやっているの、早くしないとはしば（OA機器販売・鍬ヶ崎仲町）のところに波打っている」って呼ばれて、びっくりして出て行ったら、水道が破裂して噴水みたいになっていました。

同じころ、近所のおばあちゃんと娘さんが、真っ直ぐに鍬ヶ崎小学校（熊野町）の避難道路の方に向かって行った。私はその時点で、波は清水橋川を上るということを聞いてたから、そっちは無理だなと思った。近所の床屋さんのところから、左側に曲がると、鍬ヶ崎小学校に近い道路があるんですよ。そっちに行こうと、床屋さんのところを曲がった途端に、菱屋さんの方から川を上った波がドッーと来た。母が、「波が足まで来た！」って。びっくりして、母を引っ張って逃げて、金勢さまに上がったんですよ。それで私たちは助かったんです。

測候所から休暇村へ移動

45号線の宮古測候所（鍬ヶ崎下町2）のところから鍬ヶ崎を見たら、すごかった。どんどん、どんどん波が入ってきて、家同士がギコギコって音がするの。雪は降る、ちょこちょこ地震は来るはで、寒くなってきたから、梅翁寺さん（中里団地）に避難したんです。

中でおにぎりを食べていると、8時頃だったかな、国民休暇村（休暇村陸中宮古・崎山姉ヶ崎）のバスが迎えに来て、休暇村に移動したんですよ。

私たち親子が避難所にいなかったので、みんなは私たちが津波にやられたと思っていたんですね。鍬ヶ崎小学校の避難所にお昼のお弁当をもらいに行ったら、生きていることがわかって、「おめえたち、だめだがよう、自衛隊の人たちに、ここは同級生の家だから、2人を探してくれって言ったんだ」と言われました。

友だちと一緒に家を見に行ったんですが、45号線の山の手から家は見えたけど、しぶきがあがっているような感じで、すぐに津波警報が出るし、とても家の方に下りていくことはできなかった。

休暇村は部屋と布団に余裕があったけど、避難所ではないから、だんだん食べ物がなくなってきて、売店の物もすぐに売り切れてしまっ

た。休暇村には4日くらいいて、それから田の神の従業員さん、親戚や友人の家にお世話になった。その後は宮町にアパートを借りて、8月のお盆のころには鍬ヶ崎小学校の仮設に入ることができました。毎日鍬ヶ崎の仮設からここにバスで通っています。

無事だった近所の人たち

3時に予約していた近所のお母さんは、出かける準備をしているところに地震。お嫁さんが、あ、おばあちゃんと思って、迎えに行ったら、お母さんは、「ヒデさんに予約があるから、一緒に行かれない」って。お嫁さんが「おばあちゃん、なに言っているの」って、無理くり車に乗っけて、避難したそうです。

私たちと同じころに鍬ヶ崎小学校に向かった親子は、波が来たところを、たまたま車で来た若い男性に助けられた。男性は自分の車を捨てて、2人を高いところに連れて行って、引き波の時に学校の避難所に助けを求めに行った、それで2人は救助されたそうです。

大通で店舗を見つけて再開

ここ大通で、震災後に廃業した美容室が見つかり、5月31日に仕事を再開しました。ここも水が入ったので、中の壁紙を張り替えたんですが、私が被災した場所じゃないので、工事費などの援助は認められなかったんです。場所を移動しての再開に補助金は出ない。一般の義援金だけでした。壁を張り替えたり店の中の修理はすべて美容師仲間が手伝ってくれた。美容の道具も仲間の支援で揃えた。岩手県の美容師組合から沿岸地域に物資の支援がきたので助かりましたが、こまごました物をそろえるのは大変でした。

鍬ヶ崎の元の家での復興はまだ先ですし、その間の働く場所はどうしたらいいんでしょうね。仕事をしてこそ復興に繋がるのに、店舗がなければ仕事にならない。補助金の制度がよくわかりませんね。

お馴染みさんが鍬ヶ崎から来てくれるし、この町内の方も来てくださるので、早くに店を再開してよかったと思っています。落ち着いたら鍬ヶ崎の元の場所で美容院を再開するつもりで、グループ補助金に取り組んでいるけど、どうなるんでしょう。

毎日ここの店にも出勤していた母が。昨年（２０１４年）３月６日に亡くなりました。骨粗鬆症で点滴をしに、そして胸椎圧迫骨折になってギプスをして病院通いをしていましたが、だんだんだんだん弱くなって、宮古病院に入院して1週間で亡くなりました。あっという間でした。原発不明の癌という診断でしたが、きっとストレスがあったんでしょうね。鍬ヶ崎に帰る日を楽しみにしてたんですがね、残念でしかたない。仮設暮らしもまた延びて5年になる。オリンピックより復興を優先して欲しいですね。

4　中央通商店街

中央通商店街は末広通りに続き、黒田町の通りに折れる角から市役所前までの間にある。その通りの下には山口川が流れている。昭和29年９月に蓋かけ工事が始まり、昭和34（１９５９）年にアスファルト舗装がなされ、歩道のゆったりとした通りが造られた。商店街は振興組合を組織し、コミュニティ施設「おでんせプラザ」を設置している。住所は新川町（本章１）本町、新町（本章７）、向町（本章２）、大通１丁目（本章３）にあり、それぞれに町内会・自治会がある。住まいを他所にしている場合もある。

本町の交差点にある市役所前歩道橋は、テレビで何回も映像が写しだされたが、2・3㍍の浸水被害を受けた。

中央通りは堤防を越え市役所方面から来る波、その波が本町の山にぶつかって戻る波、閉伊川・向町から来る波、さらに下に流れる山口川から溢れる水で複数の方向からの水が押し寄せた。多くの家屋、店舗の1階が壊滅状態となった。そのため震災後に閉店した店、移転した店もある。

本町は慶長16（１６１１）年の津波後の南部藩主・南部利直の町割で最初にできた町で新町とともに最も早く栄えた。宮古の商業の中心、交通の拠点であったが、昭和９（１９３４）年に山田線開通をきっか

けに街の中心地が末広町に移った。一部に蔵造りの古い商店や銀行などが残されている。町内会は本町1、2番の一部と新町1、3番の一部から成っている。

本町の震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は58、人口は132名（男63、女69）であった。

震災後、平成23（2011）年8月は55世帯、人口は127名（男61、女66）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は52、人口は110名（男51、女59）である。商店は大きな被害を受けているが、数字から見る限り世帯数・人口の増減は少ないようである。

＊平成27（2015）年に災害公営住宅の入居により世帯数、人口ともに増加している。

本町

(1) 小山 由美子さんの話 昭和47（1972）年生

本町1 ローソン宮古本町店店長

平成27（2015）年7月26日、本町店事務所で伺う。

地震から30分以内に避難

ここはもともと地盤が強いせいか、揺れが弱いところなんですね。大きい地震だったのですが、店内の物が落ちたりすることは一切なくて。ただ停電してしまったし、尋常の揺れではなかったので、店を閉めようということになった。オーナーともローソンの本部とも連絡が取れなかったのですが、独自の判断で動いたんです。

5分間くらいは、戻ってきたらすぐに開けられるようにと、商品の片付けをやっていたんです。最初、防災無線で津波は3㍍と言っていたのが、6㍍になり、10㍍となったので、津波は絶対に来ると思いましたね。小さい頃から聞いていた話で、「地震から30分後に津波がくるよ」っていうのがあったので、すごく時計は見てたんですよ。店を出たのが3時ちょっと過ぎだったのを覚えています。鍵をかけて張り紙して、戻ってくる気だったんです。

ちょうど私たちが出たときに、店の前は渋滞してましたし、多分みなさん、中央公民館かどこかに避難されていたのだと思いますけど、歩いていく方もいました。私たちは、従業員の車もあったんですが、渋滞で時間がかかると思ったので歩いて逃げることにした。商店街の方たちはシャッターを閉めようかどうしようか、立ち話をしている状態でした。百年堂（本町1、古本屋、ゲームソフトなどのリサイクルショップ）に見慣れた子どもたちがいたんで、「津波が来ちゃうよ、早く逃げな」と言いながら、最初は常安寺の方に行ったんです。まだ余震ががすごかったので、「墓石が倒れるんじゃあないの」と言って、宮古小学校へ行きました。その間にうちの担当のスパーバイザーの車に偶然出会って、「逃げるんだよ」と言われて、「逃げる、逃げる」と言って、逃げたんですね。

宮古小学校に着いた辺りで、「水が来た、水が来た」と言うのが聞こえてきたんで、それでもっと高いところに逃げたんですよ。小沢の上の方に集会場みたいな所があって、そこにみなさん結構いたんですよ。その日は小沢の山の上の普通の家庭のお家に泊めていただいた。従業員2人と常安寺の保育園から連れてきたお子さんと4人でした。次の日は山を下りまして、一緒にいた従業員が、旦那さんの実家がすぐ近くだから行こうということになり、そこ（西町）に連れて行ってもらい、そこから車で津軽石の実家まで送ってもらいました。

店を再開

藤原のアパートにもどり、17日か、18日あたりにここの片付けに来ると、水は1階の天井まで来ていて、中は洗濯機で回したようにぐしゃぐしゃになっていました。思ったより早く工事が進んで、販売する物も限られていましたけど、4月24日に24時間体制で再開しました。ボランティアの方が結構来てくださったのですが、大学生に、「なにもないじゃん」って言われて、悲しい思いもしました。お盆にはお花を売ることもできて、気がついたら「あれよあれよ」という感じですね。4年経ってだいぶ復興工事の方たちが減ったんですけど、それでも売り上げと客数は震災前とそれ程変わらず、一安心しています。

夜勤だったため自宅にいた従業員が1人、赤前で被害にあっています。

災害に備える

震災後、ローソン本部の政策なんですけど、津波が浸水した店舗には緊急地震速報を知らせるラジオが設置されました。緊急地震速報が発令されると、すぐに鳴るので、それで「逃げろ」ということになる。防災の日や節目、節目にＮＴＴの災害伝言ダイヤル（電話１７１）の訓練をやるようになりました。ストアコンピューターに、「訓練です。今大きい地震発生しました。伝言ダイヤルを入れてください」と、緊急情報が流れてくるので、店では、「全員無事です。今避難します」というようなことを答えるんです。誰でもできるようにしています。会社が懐中電灯などが入っている避難グッズのリュックを用意してくれました。

(2) 高岩 千幹（ちから）さんの話　昭和15（１９４０）年生

本町１　コーヒーとお食事の店たかしち（震災後向町２に移転・営業）

平成26（２０１４）年11月19日、店内で伺う。

２階のベランダから隣、そしてまた隣の屋根に

震災までは本町１丁目の明治安田生命宮古の隣に店があった。宮古初（１９６７年開業）の喫茶店として『純喫茶保存協会１１０軒』に紹介されています。

後藤医院（大通１丁目）の帰り道、多分あお空さんの辺りで、ああ、地震かなと思った。歩いているときには、そんなに揺れは感じなかった。店に帰って来てちょっとしたら、２回目の大きな地震があって、店にいたお客さんを帰した。女房の姉さんの娘が「大きな地震だったから、みんなが津波が来るって騒いでる。避難しよう」と、女房とお義姉さんを車で長沢の義姉の家に連れて行った。私はまさか波が堤防を越えて来ると思わなかったし、息子の嫁さんも残ると言って、「治まるまで待ってっか」って、２人で店にいたんです。

お客さんも帰したので、安心して調理場にいたんですけど、表の方が騒がしくなってね、ガターンと音がした。店の前のドアだけ開けてあって、ちらっと見たらね、車が横向きになったり後ろ向きになったりして流されていた。すぐ店にも水がバッーと入ってきて、「こりゃあ、大変だー」って２階に上がった。２階の床まで水がバァーと来て、窓から物干しに出た。それまでは全然、まさかこうなるとは思ってもいなかった。

家は90年以上経っているから、崩れるのではないかと心配になり、物干しから隣のぶんぐの小成さん（本町１）の屋根に上って、またその隣のリビングアップ高岩さんの屋根に上ったんです。家と家の間はあまり幅がなく、高さも同じくらいなので、移れる距離だった。寒さなんて感じなかった。びっくりして、よくわかんなかったんです。水は３メートルくらい来ていたと思う。屋根の上には高岩さんの店長さん、奥さん、店員さんなんかも上ってきて、６名位いたかな。

古い家が波で崩れて流されるのが見えた。高岩さんの店長さんが、流されてきた若い人を引き上げて助けた。30歳位の男性で、もうすっかりびしょ濡れで「寒い、寒い」って言ってね、私のウェアを貸してあげた。街路樹につかまっている人もいました。

水が引けた夕方５時ころかな、水につかって歩いている人がいた。ちょうど引き波があるころで、「危ないから行かないほうがいい」と言ったんだけど、「お母が待っているから、行かねば…」と、衣類だかなんかを頭に乗せて歩いて行った。車が流されて、駐車場などに押し寄せてぐしゃぐしゃになっていた。

２時間くらい屋根の上にいて、水が引いてから自宅の２階に戻った。電気がつかないから、下に行こうにも行かれない。押し入れは水が上がってなかったから、布団を出して、暗い２階で１晩過ごした。次の朝、後ろの明治生命の駐車場を伝って家の前に出て、周りがどうなっているのか見ることができたんです。

新たな出発

次の日から、長沢のお義姉さんの家で1か月くらい過ごした。その後、私の実家のある崎山に倉庫を借りて1か月くらい、それから、貸してあった崎山の家の人に出てもらって、そこで暮らした。車は東屋駐車場にあって無事だった。車で片付けに通っていたけど、そのうちにガソリンがなくなってね、自転車を買って、ここの店を再開するために一生懸命通いました。

6月ころ、地主さんと話をしているうちに、「向いが流されて空地になっているからここでやったら」と言われて、今営業している向町に新しく建てて再開することにした。本当はね、お店をやめようと思っていたんだけど、「街に出てきても休むところがないから早く店を再開してくれ」っていうお馴染みさんが結構いたので、やらなきゃあいけないのかなあと思った。それからは無我夢中、借金して頑張りましたよ。震災後すぐだったから、まだそんなに建築材料が不足ということもなかった。新しく建てるために、コンクリートを入れて地盤を改良したので余分な金も使った。その年の12月初めに再開する予定だったのが、延びて翌年1月になってからオープンした。

前の店は古風な造りだった。壁に旅の絵描きさんが描いてくれた絵が掛っている。店は何回か改装したけど、絵にある建物は30年位前のものと思う。同じような感じの店にしたかったけど、時間がなくて設計屋さんに任せきりで、スペースも以前の店の半分になりました。

たくさんの方のご支援、ご声援のお蔭で店を再開することができました。お馴染みさんも喜んでくれて、やってよかったと思っている。息子も一緒にやってくれることになり、息子夫婦と私たち夫婦で頑張っています。ただ、これから市役所の移転もあるし、この街並みがどういう風に変わるのか、今のところそれが心配です。

(3) 高岩 久美子さんの話　昭和51（1976）年生

コーヒーとお食事の店たかしち

平成27（2015）年7月25日、店内で伺う。

震えながら屋根に

もう怖くて腰がぬけたようになった。お義父さんが後ろから私の服をつかんで支えてくれて、屋根から屋根に移る時には、私のペースに合わせてくれた。2つ目の高岩さんの屋根に移る時には、高岩さんが手を差し出してくれた。気持ちは行こうと思っていても、体がついていかなくて怖かったです。

信用金庫の人たちが屋上にいるのが見えた。木にしがみついている人が、男性のようだったけど、「助けて、助けて」と叫ぶ声が聞こえたり、前の金魚屋さん（向町2・現在の店）が、ガタガタガタって崩れたりしたけど、屋根の上のことはあまり記憶に残っていないんです。家の2階に戻っても、すごく寒くて怖くて、ほんの2、3歩のところにあるトイレにも行けなかった。それは覚えています。

(4) 高橋 文中さんの話　昭和31（1956）年生

本町1　㈱高京代表取締役社長（震災後栄町1に移転・営業）

平成26（2014）年11月19日、駅前店内で伺う。

流されて来た女性を救助

震災まで本店は本町1丁目にありまして、家内はその2階事務所で、前日の売り上げ計算をしていました。私は（当時取締役専務）別棟の蔵を利用した倉庫で仕入れた商品の値札付け作業をしようとしていた。正にその時グラグラときたんです。あまりも揺れが大きかったので、一緒にいた従業員2人と裏庭に出た。地震がおさまってから店内を見回って、店の前の道路に出たら、店頭の壁が崩れていました。お客様の安全を確認した後、シャッターを閉めてすぐに従業員を帰しました。

津波警報が鳴って、予想される津波の高さは3メートルからすぐ6メートルとなったが、「まさかここまで来ないよな」と兄（当時の社長）と話していたら、中央通の商店街の皆さんが、店の前を避難して行くわけですよ。間もなく大津波警報が出て、河口そばの愛宕地区の知り合いの奥さんが、「津波が来てるよ！」って叫びながら車で逃げて来たんです。ここまでは来ないと思っていたら、中央通の下を流れている川から黒い水がブクブクと湧いて溢れ出してきたんです。これはまずいと思って、私は85

歳（当時）の母と家内がいる2階に上がったんです。それから水がグッーと上がってきて、店の表の道路側と裏側の両方から入ってきた。敷地の裏が山になっているので、水がそこにあたって家に入ってきたんだと思います。2階にいたのは私、母親、妻、従業員の女性、お手伝いさんの5名でした。

しばらくすると、従業員が泥水でいっぱいになった店から、「助けて」というかすかな声を聞きつけて、「下に誰かいるみたいです」って言うので、階段中ほどから下を見たら、確かにプールのようになった真っ暗な店の中に誰かがいるんですよ。店舗の造りは3段階になっていて、30センチずつ高くなっているので、浸水は90センチ、1メートル20センチ、1メートル50センチという感じで、ちょうど90センチくらいのところだった。私はジャンパーに靴のままドボンと水の中に入り、瓦礫をかき分けながら中央のところまで行き、水の中から40代の女性を引き上げました。

その女性は田老に帰る途中、市役所の辺りで津波が来て、ここまで流されて来たということだった。店のシャッターが津波で壊れたので、その間からうまく入ったみたいです。1時間以上水につかっていたので、かなり憔悴していましたが、お元気になられて1か月後にお礼に来てくれました。

津波が引いた後はプロパンが心配だったので、店内を見て回った。店の前には車が2台も重なっていてありえない光景でした。

夜になって落ち着いてから、このままでは寒いし、母や兄たちにも着替えがないと困ると思って、家内と交通規制の中なんとか板屋の自宅に行きました。私の車はたまたま上の方の駐車場にあり無事だったんです。歩いて避難している人たちがいて、まるで映像でみる戦時中のような感じでした。着替えや食べ物、ろうそくなどを持って再び店に戻ってきて、また夜の9時過ぎに家に帰りました。

店の復興

翌朝5時に出てくると、店内はぐしゃぐしゃになっていました。とりあえずできることをやろうと思って、2階が無事だったので、あまり被害のなかった品物を2階に上げましたが、商品の8~9割は駄目になっていました。入学の時期で中学、高校の制服、小学校のウェアなど一番在庫が入っていた時でした。4、5日したら従業員も集まって来てくれて、まずは掃除をしてなんとか場所を作りました。

先代や先々代からアイオン台風の浸水は聞いていたので、そのイメージがあって、各売り場の従業員に、「商品は台の上に上げなさい」と言ったのですが、台ごと流されていました。

一番ラッキーだったのは売掛の台帳が無事だったんです。店舗の一番奥にあった帳場のテーブルが津波でバーンと壁にくっつけられて、その中に汚れてはいたんですが、全部ありました。津波にあったお客さまが入金してくださったり、ご家族が被災された方も、お支払いに来てくださったりで、それは本当に助けられましたね。

予約で仕入れた制服も流されたので、同業者と中学、高校に行きまして納品を5月スタートにしてもらい、それまでになんとか新しい商品を取り寄せました。失った商品にはなんの保障もないので、すべて自費で再仕入れをしました。借金して仕入れなければいけないのできつかったです。補助金は店舗の再建にかかる費用の4分の3は出ますが、商品や店内の什器には出ないんです。10分の9の補助金が出る第一次産業の漁業、農業の方々は恵まれていますね。

うちはたまたま支店が2か所残りまして、縮小もしましたので、なんとかなりました。3月31日に本店、支店の全従業員を集めて、了解してもらって、半数以上を解雇しました。店は5月初旬に制服が届いてから本格的に再開しました。新たに栄町に店を借りて、6月14日の父の命日に本店として開店し、再雇用の従業員と共に新たな出発でした。

明治19年建造の蔵を解体

大震災から1か月位して、本町の本店を見てもらったら、津波で柱が折れて壊すしかないと言われました。取りあえず3、4、5月は後始末しなければならなかったので、後日解体の決断をしました。店内の

一番古い蔵は、明治19（１８８６）年に建てられた物だから、１２０年ぐらい経っています。

7月か8月に更地になったところを県から「売ってくれないか」という話がありました。本当は売らずに貸したかったんですけれども、災害公営住宅を建てるということで、仮設に暮らす方たちのお役に立てればと思い、兄と相談して手ばなすことにしました。何度も県との交渉があったんですが、県もなかなかの強気で…。もう創業地に戻ることはないと思う。生まれ育ったところですが、住まいが別にあったから気持ちに余裕があって、決心できたのだと思います。再来年の春ぐらいに40所帯くらいの災害公営住宅になります（２０１５年11月）。

難しい判断

川と海岸がこんなに近いということは、震災後に実感しました。ましてや道路の下に川が流れていることは忘れていますからね。

私は母も家内もいる2階に上がって助かったんですが、兄は坂の上にある東屋さんに逃げたんです。店の前の通りは結構な坂になっていて、車で逃げないで歩いて東屋さんまでくればセーフでした。今考えると2階で助かったのは結果論で、陸前高田のように3階までなぎ倒されるようなところもあるから、逃げた兄の方が正しかったと思います。でも、その判断は瞬時には無理でした。

従業員も早くに帰したので全員無事でしたが、愛宕地区、南町地区、向町地区に帰る人は途中で津波に呑まれる危険もあり、微妙なところでした。時間的に津波の来る前だったので助かったが、これも結果論で、返さないで店から高台に逃げるのが正解だったかもしれない。ただ、商品を2階に上げる作業をさせていたらアウトだったから、物を優先させなくてよかったと思っています。

ラクビーで地域のボランティア

宮古ラクビースクールで小学生の指導員をやっていました。当時の監督さんは分団の半纏を着て、愛宕から鍬ヶ崎に警備に行ったんですけど、津波に呑まれて行方不明のまま、まだ見つかっていないんです。5月、6月までは仕事がいっぱい、いっぱいで、気持ちに余裕がありませんでした。

震災後、スクールが立ち消えになっていたんですけど、暖かくなってきて、子供たちが待っているんじゃあないかなと思った。7月に指導員たちに集まってもらって、「私が代表を引き受けるから、みなさん協力してください」と言って、8月から再開しました。平成24（２０１２）年2月には静岡から、平成25（２０１３）年には埼玉から招待試合やいろいろなところからボールの支援など、有難いお話が次から次にきました。

私も子どもたちと一緒にラグビースクールをやってきたので、なんとか苦しみや悲しみを乗り越えられました。母親が津波で行方不明になってしまった兄弟の部員も元気にラクビーをやっています。弟はお母さんを亡くした年からラクビーを始めて、今年はキャプテンになって、本当に立派です。仕事だけだったらストレスが溜まって参っていただろう。今あるのも前監督のお蔭だと思っています。

新町

(5) 熊谷 毅さんの話　昭和44（１９６９）年生

新町2　宮古セントラルホテル熊安　㈲熊安旅館専務取締役

平成27（２０１５）年7月25日、ホテル内で伺う。

ホテルの5階から通りを見て

この近くにある事務所（倉庫）にいまして、揺れが大きかったので、すぐにホテルに戻りました。すでに停電になって、すべてが止まっていました。うちの従業員と出入り業者さんだけで、幸いお客様はいらっしゃらなかった。

大津波警報が出て避難をすることになり、全員フロントの後ろの事務所に集まってから上にあがった。うちの建物は9階までありますので、私は5階のバルコニーから外を見ていたんです。上の階にいた従業員が、津波の来るところを見たようで、「大変だ、本当にくるぞ」と

言いまして、まもなく本当に津波がきました。津波がダッーと来まして、ホテルの前が2メートルぐらい浸水して、この辺り一帯がプール状態になりました。しばらくは上にいましたが、だいたい2時間ぐらいは浸水状態が続いていました。ここの浸水は1・5メートルぐらいで、ロビーにシールが貼ってあります。

ホテルの西側に40～50代の女性が流されてきまして、「助けて」と言う声を聞きつけた従業員が、3人くらいかけつけて、ひさしの低くなっているところから引き上げて助けました。元気になるまでホテルの部屋で1週間くらい休んでもらいました。

水が引き始めたのは、だいたい日没で暗くなったあたり、6時ぐらいでした。だんだん、だんだん、ゆっくり、ゆっくりと引いて行って、引いた時は、もう真っ暗でした。下に様子を見に行って、だめだと思いました。停電していて真っ暗な状態でなにもできないので、取りあえず今晩は空いている客室に泊まろうということになり、従業員のほとんどが泊まりました。

被害と復興

ホテルは2か月間休業しました。客室の建物は鉄筋コンクリートなので修理もそれほどかからなかったんですが、食堂のある建物は鉄骨造りで、壁の中の空洞に水が入ったので、全部開けて掃除、修理し、壁と天井などの内装工事をしました。一部窓ガラスが割れたので、そこから書類などが流されましたが、中の物はだいたい残っていました。食堂の椅子などは修理しました。ただ、1階にあったコンピューターや電話交換機などの機械関係はほとんど駄目になりまして、全部処分しました。厨房の冷蔵庫は修理できるものは修理して、新品も入れて補いました。エアコンと給湯器は屋上にあったので無事でした。市役所で一部補助が認められて建物などの修復修繕に補助金をいただきました。

事務所（倉庫）は2メートル20センチぐらい浸水して、1階にあった物は全部駄目になりました。泥出しが大変だったので、ボランティアさんにお願いしました。

中央通の歩道に船が流れてきていましたね。ホテルの隣にあった古い建物は50年くらい経たっていまして、柱などが壊れたので全部解体しました。当日そこのお店の方々は避難されたようですが、女性従業員さんが1人水に浸かって亡くなったと聞いています。

1週間後に保久田のアパートに帰ってみたら、足元から30センチくらいのところに水の跡が残っていました。

2か月後の5月下旬に、電気、ガス、エレベーター、水道関係が復旧してやっと仮営業という形で、取りあえず朝食なしの素泊まりで再開しました。9月あたりから通常に戻り、朝食を提供できるようになりました。

震災後は復旧工事や港湾関係のお客様が逆に増えて、震災前よりちょっと混んできているんですよ。今困っているのは人手不足ですね。震災後は社員が少なくなって、求人を出しているんですが、なかなか決まらない。人口は減少傾向であるようですけど、働く人が大幅に減っているとも思えない。おそらく求人件数が復興関係で増えているので、その関係で人が不足しているんじゃないですか。建設関係が一番足りないらしいですけれども、オリンピックでまた不足するんじゃないかと思っています。これからも人手が確保できればいいと思っています。

中央通は移転された方もいて更地になったところもあります。近くの小中学校の生徒さんが、地震や津波が来たときに一時的に避難できるという避難ビルの指定をいただきまして、玄関の前に〈津波シェルター〉のプレートを貼ってあります。

大通1丁目

(6) 坂本 智子さんの話 昭和33（1958）年生

大通1丁目　シューズコレクションさとう

（震災後向町3　宮古市中央通商店街振興組合事務局に勤務）

平成26（2014）年11月20日、組合事務所内で伺う。

中央通商店街を往復して高台に避難

中央通商店街にある実家のシューズコレクションさとう（大通1丁目）で、店番をしていました。母はキャトルの臨時店舗の店番に、父と弟は店の2階にいました。今まで経験したことのないようなひどい揺れで、電源が落ちましたので、シャッターを閉めることにしました。津波が来るだろうと思ったけど、正直言って、ここに来ると思っていないんです。「ちょっと大きいよね」と言うことで、駅の西の方に住んでいる店員さんを帰して、身内だけになりました。取りあえず横町の弟の家に行くことにして、父、弟、弟の嫁さんが車に乗ったところに、母がキャトルから走って帰って来ました。母もすぐに車に乗って、4人で横町の家に行ったんですけど、余震もあり心配なので、父と母はさらに山の上の方に上げました。

私は戸締りをしておこうと思って、取りあえず市役所のすぐそばの新川町の自宅に戻ったんです。途中で今まで一度も聞いたことがない「大津波警報」というのが聞こえてきたので、自分と旦那の下着など2日分をちっちゃいバックに入れて、戸締りをして20分くらいで家を出たんです。主人は市役所の職員だから、こういうときは帰ってこないものだと思っていますから、家族のところへ戻りました。

ローソンさん（本町1）が一番先にお店を閉めたんです。ローソンさんが閉めるということはよほどのことだなと感じて、逃げなくてはいけないという意識になりました。津波が来るちょっと前だと思うんですけど、道路が黒くなってきて、それが水という感覚もなかったんですが、「水が来ました、水が来ました！」と叫びながら走ったんです。まだみなさん街の様子を見ていましたが、「みんな、ここに上がれ、上がれ！」と言って、この辺にいた人たちは、ちょっと高くなっている東屋さんのところに上がったんです。私は弟の家に行き、そこからさらに両親と共に高台へ避難しました。

4時半頃高台から少し下りて、中央通の様子を見に行くと、シューズショップの正面に取り付けた赤い店舗テントの所まで水が来ていました。たまたま宮古に来ていた盛岡のリハビリセンターの車が高台に避難していて、「年配の方々は車の中で暖をとってください」と言われて、両親は車の中で暖をとらせてもらいました。そこでアイパットで市役所の映像を見て、初めて自分たちがどういう状況にいるかということがわかったんです。

その夜は弟の家で、下は怖いから2階のひとつの所に布団を敷いて、反射式のストーブとローソクをつけて、皆寄り添うような形で過ごしました。余震が来るたびにローソクとストーブを押さえていました。

ご近所や外にいる方々、特に女性はおトイレが大変だったので、たまたま風呂の浴槽に水があったので、下の入口は開けておいて、トイレを使っていただきました。

離れている子どもたちは

長男と長女は東京で暮らし、次男は大学受験のために10日に東京に行き、11日は受験地へ移動していました。

私たちが避難所ではなく自宅待機でいることを伝えたかったんです。それで、避難者名簿に記帳しようと思い、宮古小学校に行ったんですが、避難所はパニック状態で「自宅で待機できる方は戻られてください」ということで、記帳もしないで帰ってきました。都会でテレビを見ている人は避難所の名簿で無事を確認するらしいんですよ。いつまでたっても私たちの名前がないので、「もう、だめだ」と思ったらしいんですね。電話も携帯も駄目だったので、しばらくは連絡がとれない状態でした。

最初は電話を借りようと宮古病院に行きましたが、とても電話を借りる状態ではありませんでした。それから、佐原団地の知り合いのところに行き、その方のａｕが娘の携帯に繋がったので、「父さんも母さんも生きているからね。そっちは3人でいてちょうだい」と一言だけ言いました。16日に消防署に衛星電話がついて、ひとり5分間だけ話すことができたので、同級生の1人に連絡を取って、そこからみんなに無事を伝えてもらったんです。

次男坊はそのまま東京に留まり、その後東京の大学に行くことになりましたが、銀行がストップして、入学金を送金できなくて困まりました。大学に連絡しても思うように繋がらないし、状況も理解しても

らえない。親戚に頼んでなんとか無事に手続きができましたが、送金ができないために1年を棒に振るのかと思ったら、可哀そうで不安でした。

軍手にマスクの生活

水と電気が復旧したのは4日後で、その間は常安寺の沢水を汲みに行きましたが、そのうちに給水車が来るようになりました。父親の薬の水を駅の向こうまで買いに行っても、ありませんでした。

1階の商品は全滅でした。しかも1年の中で一番仕入れ量も多くて、新入学に向けて、倉庫にあった物を全部店に下したばっかりのところで、大変だったんです。長靴はかさばるので倉庫に上げてありました。取りあえず作業するにも長靴が必要ということで、横町のガレージまで運んで、必要な人に安く分けました。

私は自宅に戻るという感覚はなくて、店のことをやっていました。たまたま通りかかった同級生が、「おめんち、ひでぇぞ」と言われても、見ないうちはわからなかったんですよ。

2日目あたりに旦那が横町に来て、お互いの無事を確認して、旦那に「家に行って見たか。実印なんかどうしたんだ」と言われて、それから3日目に行って見たんです。1階はめちゃめちゃになっていましたが、スチールの塀と大きな木が植えてあったので、大きな物は入らず、家が壊れるまでにはなっていませんでした。土台を80㌢ほど高くしてあったので、水は2階まで上がらなかったんですが、後で天井裏をはがしてみたら、葉っぱが刺さっていたのでぎりぎりのところだったんですね。

40日くらい弟の家で世話になり、その後両親と店の2階に移りました。私は毎日店から自宅の片付けに通いました。ごみを出して、泥かきをして、水をかけて洗って、2か月くらいはかかりましたね。その後修繕して、自宅に戻ったのは9月でした。

駅を境目にして、海側と山側では生活が全く違っていました。どんどん春に向っていくので、被害のない方は春の装いになるんですよ。こちら（海）側の人たちは毎日カッパを着て、長靴を履いて、軍手にマスク、リュックを背負って、ペットボトルを下げて、5時、6時になるとそれぞれの避難所に戻るという感じでした。

実家の店は中央通を閉めてキャトルの店舗だけで再開することになり、私は振興組合の事務局を引き受けることにしました。当時は生きている人も必死で、悲しんでいる間も余裕もなくて、自分たちがこれからどうするのかということが先でした。今はきれいになった空地を見るとむなしく感じます。

5　大通1丁目商店会

中央通商店街に続き、末広町商店街との間に位置している。商店は震災後増減1で震災前と同数の9店舗である。住所は大通1丁目（本章3）、町内会は大通1丁目2組に属している。

「3・11」の津波の浸水はほぼ2㍍。中央通商店街と同様に家屋、店舗の1階が壊滅状態となり、大きな被害が出ている。

震災後に商店会を再結成し、両隣の商店街との連携事業「宮古あきんど復興市」に参加している。

(1)　中村 進さんの話　昭和29（1954）年生

大通1丁目　中村生花店大通店、大通1丁目商店会会長

平成27（2015）年4月27日、大通店内で伺う。

家族と合同庁舎に避難

ここ大通と末広町に店舗があります。当日は大通店の2階でお花の教室をやっていて、ほとんど終わりかけた時にぐらっときた。取りあえず下に降りて、駐車場に行った。生徒さんの1人は、「出て行こう、出て行こう」と言っても、怖がって、「ここにいる」とテーブルの下に隠れていたんです。

最初の津波情報は1㍍とか2㍍、あまり規模は大きくない感じだった。地震は大きかったけれども、過去にここに津波が来たことないから、のんびりしていたんです。だんだんに騒がしくなってきて、3㍍から

6メートルとか聞こえてきて、周りの人が逃げ始めた。そこで、「俺たちも逃げよう」って言って、店先の花を7割か8割くらい店の中に入れたときに、「大きい津波が来るぞ！　逃げろ！　逃げろ！」という声が聞こえてきた。えー、本当かなと思って、残りの花をパッパッパと中に入れて、末広町の本店に行った。妻と息子と合流して宮古小学校へ行き、そこから山の方に逃げた。

その晩は家族で合同庁舎に泊まった。発電機があったので、テレビを見ることができてよかった。その日はお花の教室で昼を食べていないままだったが、夜11頃になってから食料の配給があった。結構な人数の人が避難していて、最初の晩は仕事場で職員の人たちの椅子で仮眠を取った。次の日にはちゃんとした大きなホールに移った。

次の日、ようやく歩いて状況を見に来たら街はすごかった。びっくりした。大通の店も末広町の店も水が入り、1階はもうめちゃくちゃで、商品は全滅だった。1、2日は水が出なかったので、仕事もなにもできない。水が出るようになったのは3日か4日後で、それまでは動けないんだから困った。電気はもっと遅かった。

合同庁舎に3日、4日泊まって、その後は末広町の本店2階や娘のアパートで生活し、店の片付けをした。

仕事の再開

魚菜市場は被災してなかったので、在庫のある1週間くらいは営業して、その後1か月間ぐらいで閉めた。大通と末広町の店は片付けをしながら、取りあえず切り花だけ置いたけど、みんな花どころではなかった。2週間後、卸しの関係やお得意さんを回ってみたが、ほとんどが浜どこだから、被災していた。うちの店も、もうだめかなって思った。葬儀屋さんも被災していて、花どころか葬儀そのものができる状況ではなかった。5月の連休あたりからなんぼか動けるようになった。

車は全部やられた。最初は軽自動車が見つかって、次に見つかったのも小さい車で、大きい車が見つかるまでは時間がかかった。車がないと仕事になんないからね。まず軽自動車が見つかって、今度はガソリンが不足で、毎朝2時3時にガソリンスタンドに並んで、配給だったから、1回に確か10リッター入れてもらった。満タンにはしてくれない。全部のスタンドが開いているわけじゃあなかったから、ズラッーと並んですごい人だった。前の日の夜から車を止めて、場所取りする人もいた。順番待ちの札が出て、「ここまで、あとはもうありません」という日もあった。ああいう苦労も忘れてしまったな。

復興

店のお客さんが前のとおりに戻ったのは1年ぐらい、ちゃんと仕事を戻すのには1年以上かかった。

店を建て直すには時間がかかるんです。末広町の店舗ですが、被災した土地の空いているところに建てて、それから建物を壊すという時間を与えてもらえなかった。「壊したい方は申請してください」と言うだけで、補助金の話もまだなかった。「いつ壊しにくるのかわかりません」「壊したい方は申請して、壊す体制にしておいてください」と言われたために、結局動けなかったんです。建物を撤去するまでに時間があって、もっと早くに補助金の話があれば、店の再建も変わっていたと思う。行政からアンケートもきましたが、それに対して何も言ってきませんね。

4年経って今は落ち着いているけど、この先は不安。仕事が回るという計画のもとで借金もしている。ただ、復興のために土を盛り上げているから、流れが変わるでしょ。例えば、建物が変わってどっかの商店街がガラッーとなくなれば、そこのお得意さんがいなくなるでしょ。だから、全部成ってみないと、わかんないですよね。ある程度横ばいか、下るかって感じだけど、流れがはっきり決まらないとわからないですね。

(2)　川崎 礼子さんの話　昭和41（1965）年生

大通1丁目　中村生花店 大通店従業員

平成27（2015）年4月27日、大通店内で伺う。

13日から真っ暗な自宅で

私は店を出たあと自分の車が置いてある駐車場を確認してから、末広町の店で社長たちと合流して、宮古小学校に行ったんです。校庭にも水が来たので、「上へあがれ」と言われて、山の方に行った。結構な人がいたけど、なにも状況がわからなかった。それから、合同庁舎に避難して11時頃に食料の配給があった。

次の夜はすごい爆発音が聞こえた。すごかった。農林課の3階の窓から「どこ?」って見ていたんですよ。そしてら、「大通だってよ。火事でなにかが爆発したんだ」っていうことだった。後藤医院のかなりの数の患者さんたちが、ぞろぞろと宮古小学校に避難して行ったと聞きました。

2晩して、避難所にいても疲れるから、電気がついていないけど、自宅に帰った。真っ暗で暖房もない。私のところは水とプロパンガスが出たので、やかんでお湯を沸かしてペットボトルに入れて、足を温めたり、洗面所に頭を突っ込んで髪を洗った。電気がきていなかったので真っ暗で、まるで幽霊屋敷ですよ。周りも全然わからない。何軒かはいたような気もしたけど、暗くて確認することもできなかった。

次の日からお店の片付けに通いましたが、社長が食べ物をたくさん用意してくれていたので助かりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

私の車は、下ばかり見て探していたら、家と家の間に4台くらい重なっていて、そのてっぺんに乗っかっていました。生活の一部ですからとても悲しく思いました。

(3) 大森 進さんの話 昭和33（1958）年生
大通1丁目 三陸さをりプロジェクト
平成27（2015）年4月23日、店内で伺う。

宮古小学校から宮町に避難

当日は、陸中ビルで集団申告の集会に出ていたんですよ。とてつもない揺れとサイレンで、そのまんまバイクで家に飛んで帰ってきた。親父が足首を骨折して車椅子だったもんで、それで飛んできたんです。すると、消防車が「津波が来る、逃げろ!」と言うのが聞こえた。女房はちょうど帰省して家にいた三男坊に、中学生の末娘を迎えに行かせた。私は親父の車椅子を押して、その途中で次男坊と一緒になって、宮古小学校に逃げたんです。女房はちょっと遅れてきたのでぎりぎりだった。

「6メートルの津波が来る」というのを、なんかで聞いたんですよ。それじゃあ18メートルは来る。じゃあ、ここも危ないと、なぜかそう思って避難したんです。避難はちょっと遅かったんですよ。陸中ビルでバイクを止めていた場所が離れてたんで、そこまで歩って行ったから。あと5分遅かったら、宮古小学校に行けなくて、私たちも2階に避難したと思います。

避難して、大した時間ではなかったんですけど、浸水が始まって、グラウンド半分くらいまで水が来て、先生方の車のクラクションが一斉に鳴り出したときには、もうパニックですね。学校長か誰かが、「津波が来るから小学生は3階に上がれ! お年寄りの方も高い所に上がってください」と言われて、若い人たちと一緒になって、うちの親父や車椅子の方やおばあちゃんたちを体育館の2階に上げました。その後、分団から布団やマットレスがきたんですけど、そのときにわっと一斉に人が集まって、軽いパニックになりました。

「水もねえし、どうしようもねえな」と、近くの宮古商工会に水をもらいに行きました。親父を避難させるとき、寒いから普段着に丹前毛布1枚だけを着せてきたけど、人もだんだん増えてきて、このままだと親父が病気になってしまうと思った。それで、宮町の建物（メガネの弐萬圓堂）が無事かどうか確認しようと、魚菜市場の近くを遠回りして、山口小学校の近くから川沿いに下って宮町まで行った。

宮町のばあちゃんのところには心配していた三男坊と娘、そして長男がいた。三男坊と娘は大通の家に帰ろうと八幡踏切のところまで来たら、「津波だ!」と騒ぐ声が聞こえたので、すぐに宮町のばあちゃんの家に避難した。そこに宮町でバイトをしていた長男も来たということだった。宮町の家と子どもたちの無事が確認できたので、また小学

校に戻って、親父の車椅子を押して、女房と次男坊と一緒に雪が降る中、暗い道を宮町に行った。大通の家を直すまで宮町で暮らした。

土蔵で糸車を発見

大通の店と住居は、水が1メートル80センチ入って、1階は全滅。電気、ガス、水道が駄目だから住めない。猫が2匹いて、弐萬圓堂で暴れまわって大変だったので、長男坊が自宅の2階で猫と一緒に守備隊要員として生活していました。

大工さんをすぐ頼んだんですけど、大工さんもてんてこ舞で、それに「ちゃんと消毒して、風通をやんないとカビがひどくて大変だよ」って言われたので、その分もちょっと遅くなったんです。市役所でＥＭ菌（有効微生物菌）の原液をもらってきて、薄めて散布して、あとは高圧洗浄機で泥を流して風を通した。ボランティアの人たちに頼んで、床下の泥をかき出し、床板をはいで風通しをよくしたんです。子どもたちが剣道をやっていたので、宮古高校剣道部、ＹＭＣＡさんやいろんな人に手伝ってもらってやりました。

この土蔵は70年以上経っている。2メートルくらい海水が入ったので解体するしかなかった。そのときに初めて見る糸車と糸巻きが出てきました。下手すると壊れそうです。

宮町から片付けに通ってここが完全に戻るまで1年かかりました。私は3月末から午前中だけ家の片付けをして、自分も被災者ですが、午後は支援物資の配達のボランティアで飛び回っていました。

「さをり織」との出会い

つなみクラフトの方から、「織での支援に協力してもらえませんか」と言われて、面白そうだし、土蔵に糸車があったこともなにかの縁だろうと思って、「さをり織」を始めたんです。もともと日本の僧侶がインド沖地震のときに、心のケアにとタイの被災地に持って行った織物で、日本に逆輸入の逆支援ですね。そのお坊さんが岩手の雫石出身だったので、めぐり巡って宮古に流れてきたようです。

本来私の仕事は機械関係の営業職ですが、今はこちらの方が主になっています。それは震災の時点で自分の心も半分おかしくなったような気がして、それを切り替えたい、何とかしたいという思いで始めたんです。「さをり織」は何をやってもいい。失敗しても「それはデザインですよ」という言葉に励まされて、はまっています。

グリーンピア田老、田老駅近くの個人宅、山田、大槌、釜石などで、主に技術指導をやっています。また、宮古ＮＰＯ法人若者自立サポートセンターの若者たちに指導をして、今度はその若者たちが先生になって、10か所以上の仮設集会所やグリーンピアの復興商店街などを一緒に回っています。

仮設で「さをり織」始めたのは、話のタネで集まってもらって、コミュニティーを作るのが目的だった。その副産物として、織ったものでマフラーなどを作ろうということです。

大きな仮設だと最初30人位参加するんですが、だんだんに少なくなり、最終的に多くて4人、少なくて2人、ゼロになるときもあります。震災後初めての方がほとんどですが、基本的には「さき織」と同じなのでなじみやすい。交代で少しずつ、何センチか織ってもらって、でき上がった布はその場で切って渡しています。自宅が流されて落ち込んでいた方が夢中になっているし、ライトバンに乗っていて流された方はだんだん色使いが明るくなってきた。心のケアになっているのだと思う。少しでも仮設のご高齢の方たちの励みになり、そして収入の道も開ければいいなと思っています。

※震災から千日目の平成25（２０１３）年12月4日に宮古市で、全国を回って「さをり織」を完成させるプロジェクトが企画された。阪神大震災から20年目の平成27（２０１５）年1月17日がゴールで、311メートルもの長さになり、２０１５年12月3～5日に宮古市で展示された。平成26（２０１４）年6月の復興市で開催された「さをり織のファッションショー」には全国各地から参加があった。

6　末広町商店街

駅前から東にのびる約370メートルの両側に末広町商店街がある。昭和9（1934）年に山田線が開通したのをきっかけに発展した新興商店街である。本町・新町から移ってくる商店もあり、現在一番の繁華街、町の中心となった。振興組合を組織し、コミュニティ施設「りあす亭」を設置している。町内には自治会がある。震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は85、人口は209名（男95、女114）であった。

「3・11」の津波による浸水は、2メートル～30センチ。1階が壊滅状態になった店舗、家屋も多く、大きな被害が出ている。

商店街という特徴から他所から買い物に来た人が、末広町あるいは帰り道に被害に遭ったケースも少なくない。末広町の女性店員は、送り出したお客さんが、家族の迎えを待って田老へ帰る途中で津波に呑まれたと聞いた。被害にあったお得意さんの数が多く、顧客名簿を見る度に心が痛み、しばらくは入眠剤なしには眠れない日が続いたという。

震災後、平成23（2011）年8月は84世帯、人口は196名（男91、女105）。平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は83、人口は169名（男83、女86）である。町内会の調べによると平成27（2015）年11月現在の世帯数が117となっている。震災後は町内会と商店街振興組合が協力して住人の交流に力を入れている。商店街の特徴として住まいが他所にあるため、行政の発表とズレが生じていると思われる。

(1)　志賀 政信さんの話　昭和54（1979）年生

末広町1　福島湯　㈲福島屋 専務取締役、第八分団員

平成26（2014）年8月11日、事務所で伺う。

田野畑村から山越えで末広町に

田野畑野球場でフェンスの工事中だった。もうちょっとで3時の休憩で、職人たちにジュースでも用意しようかなと思っていたところに、急に携帯電話がブ、ブ、ブと鳴った。そのころ地震や津波警報が頻繁に出ていたので慣れていて、作業員に「大きな地震が来るかもよ」と言っていたら、張っていたフェンスがビンビンビンビンと鳴り出して、バアッーと揺れ出したと思ったら、山がゴ、ゴ、ゴ、ゴッと鳴って、立っていられなかった。これって大きいなあ、また津波警報が出るなあと思ったんで、宮古に戻ろうと思った。職人たちに、「気をつけて、頑張ってね」と軽い感じで言って、宮古方面に走り出したんですけど。海沿いの国道45号線は通行止めになっていた。まだ津波が来てなかったんで、普通に警察が来て道路を止めていたんです。

岩泉町の小本に出て、山の中に1回入って、内陸をまわって106号で茂市を通り抜けてきた。途中大きな落石があった。結構大きかったんだなと思って、ラジオを聞きながら来たんですが、「釜石では住宅街で車が流されている」って。そのときは、釜石はすげぇことになっているなあくらいにしか思わなかったですね。山の中で2、3台の車とすれ違った。海に向かって走って市内が見えるところまで来て、どうも様子がおかしいなと思ったら、建物の1階部分が水没しているのが見えた。車に乗っているのに腰が抜けたようにカクンとなった。勿論、末広町に入れないので、消防署まで行った。そこに車をおいて、膝まで水に入らないように、ぐるっと回って駅前の交差点のところに来たら、第八分団のポンプ車が止まっていた。分団員に、「大丈夫か」って聞かれたけど、大丈夫もなにもその日は市内にいなかったので、事情がよく飲み込めていなかった。

末広町の家族が心配だった。嫁さんも妊娠していて、老人ばかりなので「家を見に行く」と言ったら、みんなに「津波がいつ来るかわからないから、絶対に行くな」と止められた。それでも、消火活動のジェラルミンの長靴をはいて、胸元150センチくらいまで水に浸かりながら、ザクザクと歩いて家に向った。完全に平静を失っていたようで、途中ですごく寒くなってきて、体が動かなくなって、やばいと思った。それでもなんとか家まで来たら、2階から声が聞こえてきた。家族は2階に避難していた。

家族の無事が確認できたので再び水の中に入り、ジャブ、ジャブと第八分団のポンプ車のところへ戻った。途中で、「おーい、だれか」という声が聞こえたけど、どこから聞こえてくるのかわからない、どうしようもなかった。

家には１６０㌢くらいまで水が入った。海の方から流されてきた車が事務所を突き破って、そこにザーッと入ってきた水がすべての物を押し流しながら、家の中を突き抜けて、反対側の勝手口から出ていった。家の周りには、見たことがあるような物、銭湯の洗面器だとかいろいろな物がいっぱいプカプカ浮いていた。父親はアイオン台風の経験で２階に上がれば大丈夫と思っていたようだが、すごい勢いで水が上がってきたので、死ぬ思いをしたと言っている。

水に苦労した消火活動

次の日の夜中に火事があった。すぐそこの角のところ（大通４）の建物が漏電で全焼したんです。夜、寝てたら木が割れるような音が聞こえて、ボキボキボキ、ボキッと。うるせぇなと思って２階のカーテンを開けたら、火柱が立っているんですよ。木が燃えて割れる音だったんですね。電話が通じないから消防署に通報できない。普通「何分団出動してください」ってサイレンが鳴るんですけど、それもなくて、いきなり火柱だったんです。すぐに第八分団（大通３）まで行って、ホースを持って火の前に行ったんですけど、水が出ない。水道が止まっているから、当たり前なんですよ。みんなテンパっていたんでしょうね。消火栓のところに行ったはいいんですけど、水が出ない。そこで防火水槽に回って消火したんです。水が足らないくらい燃えちゃって、最後は宮古小学校のプールから、何台も、何台も、ポンプ車を中継して消火した。遠くの分団からも応援に来てくれましたが、消火に朝までかかりました。

町内に銭湯を開放

銭湯はとりあえず泥出しして、そのままにしておいたんです。町内の人たちが「お風呂に入れてください」と来ましたが、多分管の中にも泥が入っているから、「無理です」と言っても、「復旧作業で汗だくになるし、塩水、汚泥にまみれている。水も出ない。何とかして欲しい」と言われた。そこで、地震から１週間するかしないうちに、浴槽はとりあえず大丈夫だろうというところまできれいにして、屋上のタンクの水を全部入れて、上の方に積んであった海水につかっていない薪で釜を暖めた。脱衣所もドロドロになっていたので、ビニールシートを敷いて、何かあると怖いので「お金はいらない、自己責任で入ってください」ってしばらくの間開放しました。みなさん喜んでくれて、営業しているときより混んでいました。

自宅２階で避難生活

震災後、すぐに東北電力が電気を通してくれたんですが、漏電で火事になったために、１軒、１軒チェックしたので、復旧に２週間位かかりました。水は多分その間に戻ったのかな。

今は使っていない古い井戸の水が湧いたんです。コボコボ、コボコボって。昔の人の迷信で井戸をふさぐとよくないと言われているので、小さい穴を残して上に洗濯機を置いてあったんです。飲むのは危ないから、トイレを流したり、食器を洗ったり、海水にまみれた風呂釜を洗うのに使った。水道が回復してから、井戸のところで家族みんなして、「ありがとうございました」とお礼を言って、洗濯機を戻しました。今でもたまにチョロと出ているみたいです。

食事は２階で卓上コンロを使って調理していました。駅の向こう側は天国ですよ。その被災しなかった友人、親戚たちが、「まずは食べ物だろう」と持ってきてくれたので、食べる物に不自由はしなかったけど、精神的なダメージが大きかったです。嫁さんはしばらく崎山の実家に行っていました。職人も無事で、車両の被害もなかったんですが、家の近くにある倉庫の中には何も残っていなかった。その損害は大きいですね。

震災後、工事会社はものすごい忙しさです。資材は高くなるし、人

出不足です。特にオリンピックが決まってからはさらに人手不足になりました。

今思うこと

消防団員の立場で言うと、とにかく身の安全を確保することが大切。避難訓練をやっていたが、ほとんどの人は参加しない。宮古小学校に行く途中にある山口川も津波がくればあふれる。海から波が来るよりも先にドブ川があふれる。避難所に行く前に被害に遭うこともある。水をよけて安全に避難所に行くことができる道を知っている人は少ないと思う。今回、ほとんどの人が、津波がここまでくるとは思っていなかった。水を見てから自宅の2階に避難して、水が引いてから避難所に行った人が多かったのではないかと思います。

3年が過ぎて、すごく昔のことのような気がします。数字として3年は千日ちょっとですが、10年分生きたような感じではないかと思う。千年に一度といわれる災害のときに、太平洋沿岸に住んで津波を経験して、生き残ってそれをしゃべっている。すごい体験をしたと思っている。ボランティア、警察、自衛隊の人たちに感謝しています。

(2) 佐々木 慶子さんの話　昭和20（1945）年生

末広町6　㈱大越電気代表取締役

昭和通りのおかみさんもてなしたい代表

平成26（2014）年10月23日、店内で伺う。

「早く逃げろ！」の絶叫で避難

店にいまして、初めての大きな揺れを感じました。ファンヒーターを消して戸を開けて外に出たら、止まっている車が動いているんですよ。電柱を見たら電線がたるんで、ああ、すごいなと思いました。

高校生のとき、チリ地震を体験しているもんですから、ここまでは、津波は来ないという安易な考えがあって、それが今回被害を大きくしたのかもしれない。チリ地震は金浜がひどかった。当時の高校生たちが、日作開発興業（1973―2004年まで小山田にあったラサ工業の子会社）のトラック2台に乗って、今でいうボランティアですね、金浜に手伝いに行って、瓦礫なんかを片付けた記憶があるんです。

初め、水位が上がって6㍍と聞こえたような記憶がある。幸いテレビなどは落ちていなかった。電気が消えたので、ラジオをつけたりしているうちに、消防団員の「なにやってるんだ、早く逃げろ！」という声のすごさに、なにかとんでもないことが起こったんだと感じた。「津波がもうそこまで来ている！」って言うので、私たちは初めて津波が市役所を越えてこっちまで来たことを知って、それは大変だってことになった。シャッターを下して鍵をかけて、社員はみんな配達などに出ていたので、「宮古小学校に行っています」と張り紙をして、女性4人で宮古小学校に行きました。

そのとき、後ろの山口川がガッーと上がってきたわけ。それから、道路に出て海の方からザァーと水が来たのがわかったんです。それは水というか泥のようなものが浮いているような感じでした。

宮古小学校も校庭まで水が来るというので、知人宅が小沢のちょっと高台にあるので、そこまではどう考えても来ないだろうと思ったので、避難させてもらって1晩過ごしました。電気はなかったけど、薄明るい時に避難したのでまあなんとかなった。水が出なくてトイレが使えないし、携帯も通じなかった。auが8時くらいになったら通じて、社員もみな無事でした。

店の復興

次の朝6時頃に千徳の自宅に帰ったんですが、主人の母がひとりでいて、テレビがついてないので津波のことは知らないんです。東京にいる娘たちの方がニュースで津波の映像などを見て、こちらよりよほど状況がわかっていた。

店に行こうと思ったら、たまたま社員がトラックで来て、「末広町はすごい泥で入れない」と言うので、その日は店に行くのをあきらめました。次の日の夕方に千徳には電気がついて、3日目か4日目にスーパーも開いた。

3日ぐらい経って末広町に来ましたが、とても店に入れる状態でなくて、しばらく行ったり来たりしながら様子を見ていた。泥がすごくて、なんていうか、プールの中を歩いているような感じでした。1週間くらいしたら、なんとなく様子が見えてきましたが、まだ片付けるもなにもない。ここの入口にも他所から箪笥が流れてきたり、畳みたいなものがあったり、車も3段に重なっていて、初めて見る凄まじい光景だったんです。店の浸水は床上1㍍くらい。レジや商品が駄目になって、2台の車が流された。沿岸の方は見てないけど、ここでこのくらいだから、もっとすごいということは憶測できました。

そうこうしているうちに、みなさんが、「乾電池はないか」、「ラジオはないか」、「懐中電灯はないか」、「たばこはないか」って来られた。そこで、陽があるうちに泥の中で乾電池を探したり、上段の泥をかぶっていない物や下段にあった物はふいたりして、店先に出した。隣の店も洗濯機を持ってきて、衣類を洗っていたし、衣類関係のお店はシャッターを開けて、店を片付けるよりも、まず大丈夫な物、衣類や布団などあるものを店先に出していた。3、4日はみんな呆然としてなにもできなかったけど、1週間くらい経つと「あれがない」「これがない」と言われると、「はい！」ってなって、お客さんがない物をこっちが探して提供しようという気持ちが強くなった。そのうちにメーカーの人がホッカイロとかティッシュとか支援物資を持ってきてくれました。

一番困ったのがガソリンですね。2時間並んで千円しか買えなかった。車がないと身動きが取れないですからね。25日の給料日には、なんとか給料を出すことができた。4月になって、店の方も泥を出さないと匂いが残るから片付けを始めました。水道がきて、電気がきて、電話が最後に回復した。幸いその間に携帯が使えるようになっていた。お客さんも歩いて買いにきてくれて、仮設もまだできていない頃から、冷蔵庫、洗濯機、炊飯器がよく売れました。

1か月過ぎてガソリンも大丈夫になったし、盛岡―宮古間の支援物資の車以外の規制も取れて、みんなで力を合わせて動き出した。リサイクル法の電気製品も市役所が持って行ってくれて、町の形が戻ってきた。そのうちにグループ補助金が国から出ましたね。床を張り替えたり、レジを買ったりというものが認められて、末広町の振興組合がまとめてやってくれました。ただ、売る物がない。商品を仕入れなければならないのに、商品は補助金の対象になっていない。運転資金は借りないとね。メーカーも支援してくれました。今はみんな現金払いなので、震災後はどこのメーカーも厳しくなっている。電気店もだんだん減りましたが、震災を機に辞めた人もいますね。

復興支援で家を新築する人に環境省からエコ商品に30万くらいの補助金（商品券）が出たんですけど、店が指定されていて、しかもそれが大型店。これでは地方店が衰退していくでしょう。一方では産業省が地域の商店街にとお金を出すのもありますが、政策が一本化してないですよね。

震災後一番感じるのは命の重さです。突然死ぬことほど悲しいことはない、胸が詰まります。ご年配の方が気丈なのには感心している。いろいろなことを経験してきた人生は違うんだなと思います。「昭和通りおかみさんもてなしたい」のメンバーが集まって、ウェルカムフラワーをしたときには、本当に「もてなしたい」を実感して、「おかみさんの強さを出して行こうね」って話し合っています。

今はラジオ、懐中電灯を用意しています。

(3) 末広町商店街のみなさんの話

臼木 禮子さん　昭和10（1935）年生
末広町7　ふとんのささき、末広町自治会副会長、昭和通りのおかみさんもてなしたい会員

太田 憲一郎さん　昭和21（1946）年生
末広町2　募集代理店、㈱太田代表取締役、第八分団長

小成 勝郎さん　昭和24（1949）年生
末広町6　㈲菊丹小成商店、末広町自治会会長

平成26（2014）年10月23日、リアス亭で伺う。

「水が来た、逃げろ！」

太田さん　新里からの帰り道車を止めて、かんの書店（宮町1、陸中ビル）で本を買って、外に出たら、携帯がヒュー、ヒュー、ヒューと鳴りだして、前を歩いていたおじさんの携帯もヒュー、ヒュー、ヒューと鳴った。すぐに車を出して末広町の保険代理店に戻った。あとで考えたら車を置いてくればよかったのに…。社員に「事務所を閉めて帰ってください」と言って、半纏に着換えて、すぐにチャリンコで管内の水門（南町1）まで行ったんです。地震とともに踏切の遮断機が下りるんですね、それで、もうずうっと渋滞していた。

臼木さん　家（店）にいたの。「津波が来ます。逃げてください」と、どっからか放送が聞こえてきたけど、まさか、津波がここまで来るわけがない！　そう思って逃げなかったの。

小成さん　私は末広町から離れたところで、趣味で車をいじっていたんです。ジャッキスタンドを4つかけて、ジャッキをあげたままで下にもぐっていた。そのときにガガガッと揺れが来て、ジャッキスタンドが外れた。あ、危ないと思った。幸い1か所だけジャッキが残って、それで車の下から逃げることができた。すごい経験をしました。で、松山地区からオートバイで、かあちゃんに携帯して、「切るなよ、切ると繋がらなくなるから」って話しながら走った。途中小山田橋のところで、指を指しながら話をしている人たちがいて、川の底が見えるかなという感じで水が引いていた。なんだろうと思いつつ通り過ぎて、ようやく末広町にたどり着いたら、商店街の人たちが通りに出ていた。「宮古というところは、ここまで津波がくるものじゃあない、大丈夫」って親父に教えられていた。そこで、かあちゃんに、「店の崩れた陳列物を直してもう1回並び変えろ」と言っていたら、「ただ今、大津波警報が…」なんて防災無線が言っている。多分消防車も1回通ったと思うんです、何時だかわからないけど。きれいなマニュアル通りの言葉で「ただ今、大津波警報が発令になりました」なんてね。

臼木さん　多分その車だと思うけど、その後、「水が来た！　逃げろ！」って叫びながら通りに入ってきた。ものすごい声だった。みんなで外にいたからその言葉で、「すぐ逃げろ！」ってなって、逃げたの。

小成さん　絶叫型だったもんね。宮古駅の向こうから「来た！　逃げろ！」って、2人ぐらいしか乗っていない消防自動車がグワッーと通って。「おーい、逃げろ！　今見てきたぞ！」って。「今見てきたぞ！」って言ったもんね。それからすぐにまたその車が戻ってきて、みんなオ、オッとなった。それで、なんだ、なんだということになって、初めて本気になった。

太田さん　そのポンプ車は、我々が土手の上で波をかぶって、下に降りたときに、エンジンがかかっていたので、すぐにバシャバシャと波をかぶりながら、駅の方に行ったんですよ。それで、そのポンプ車に乗っていた分団員に聞いたら、通りのどこまで行ったか覚えていない。興奮していてよくわからないんですね、前から白い車だか漁船が見えて、ほら、中央通に乗り上げた船、あれが向かってくるのが見えたって。で、「ワッー、やばい！」ってなって。でもUターンしている暇がないから、そのまま車をバックしてきて、多分花の木通りで向きを変えて駅の方へ行ったんです。

小成さん　「逃げろ！来た！」って声が聞こえて、それで見たら、ベニヤさん（末広町3）のあたりが濡れていた。最初道路に水を撒いたのかと思ったんですよ。

太田さん　後で誰かが映したビデオを見たら、水は家の駐車場（末広町2）にもジワッーと来ている。

小成さん　それで初めて逃げた。それでも店のシャッターだけは下げて逃げた。避難所が宮古小学校というのはわかっていましたから、夫婦別々に逃げた。俺は子どものときから通っていた大越電気の脇の路地を真っ直ぐ行き、かあちゃんはまるしんスーパー（黒田町7、2007年に解体）のあった正規の道を行った。

太田さん　うちの女房と従業員もやっぱり絶叫型のアナウンスを聞いて、山口川がゴボゴボしているのを見ながら宮古小学校に逃げた。

臼木さん　そう、それで宮古小学校の方に向かって行ったわけ。地震がきても、津波はまさかここまでは来ないと思っていたから、水が来るってなんの水だべと思った。後で津波だとわかった。ちょっとした

川があって、排水溝からも水があふれていた。

小成さん　そう、ボコボコしていた。みんな同じくらいの時に、その「逃げろ！」っていう声で逃げたんじゃあないかな。だから、ああいう警報はローカル弁じゃあなきゃあね、宮古は宮古弁。誰もがいつも聞いている言葉がいい。テレビが流している言葉は、「またかぁ」っていう感じで聞き流してしまう。ちょっとマンネリ化しているんじゃあないですか。

臼木さん　「逃げてください」ではだめだね。頼まれては逃げない。「逃げろ！」と言われないとね。すぐに帰ってくると思って、何も持たなかった。コートもそれほど厚い物を着ていかなかった。私たちは宮古小学校の体育館の2階に避難したので、津波が来るのが見えた。いろんなものが一緒に流れてきて、校庭前の鍵商さんのとこなんかは、たちまちいっぱいになったけね。

小成さん　宮古小学校に着いたとき、臼木さんの言ったように、鍵商さんのあたりは水嵩が増して、そばにある堰（どぶ川）から水があふれていた。車で逃げる人たちがここを通って行ったけど、渋滞していて車が動かない。動かないわけよ、渋滞イコール前の車の運転手が車からを降りて逃げていたから、走るわけがない。「だめだ、下りろ、下りろ、前の車に運転手がいない！」って言った。それでみんな車から出てきた。中にドイツのＢＭＷ山形のナンバーがいてね、水嵩が増してきて、国産車はスーと沈んでクラクションが鳴り響くんですが、ＢＭＷは動かなくなっても浮いていた。そのうちにだんだん斜めになってから沈んだ。校庭に止めてあった先生の車も水につかりましたね。

太田さん　末広町は水が1メートル以上来ています。

津波が来た後は線路を伝って帰ってきたけど、南町はほとんど被害がなくて、こっち側は瓦礫が水に埋まっていて、「助けてくれ！」って声が聞こえてきた。どうしようもない。悲惨だった。渋滞していた車がピーと鳴りっぱなしで、プカプカプカプカ浮いていた。踏切まで来た人たちが車を捨てて逃げたんでしょうね。その人たちはうまく線路を逃げきったと思いますが…。

こっち側に働きに来ている人たちが、南町もやられたと思って帰らなかったという話も聞いた。でも、山田線のこっち（大通）は地獄、むこう（南町）は天国くらいの違いがあった。

臼木さん　いろいろな物がなくなってから、あら、ここはこんな海に近かかったんだって思った。それまで海は遠いところにあると思っていましたから。水害はあっても津波は来るわけないと思っていたのに。あふれてくる水の勢い、あれが津波だったのかなと、今でも思うの。

太田さん　閉伊川が引いて、逆流して来る。その波頭が川面に白く線を引いたように来るんですよ。それがこのドブ川でもあったんでしょう。ただ瓦礫とかいろんな物が一緒に来たので見えなかった。2日前のときも同じような状況でしたが、その時は「3・11」が来るなんて全然、全然、思わなかったですね。

臼木さん　その晩は宮古小学校に泊まりました。そこでは涙が出る思いをしたの。お菓子を分け合って食べました。夜中に炊き出しがあって、「子どもとお年寄りに先にやって欲しい」と放送があったんです。本当にみなさんお利口さん、みんながそうしたんです。分け合って食べるってうまいね、すごいなと思いましたね。星がきれいでね、なんでこんなにきれいなんだろうと思うぐらい。ただ朝方は雪が降って、寒くて寒くてね。

知人のまるこうさん（横町3、呉服店）が流されなかったから、毛布を借りに行こうとしたら、「解除になっていないから、外に出ては駄目だよ」と言われた。でも、「毛布を借りに行きます」と言ったら、通してくれた。小学校で幕や暗幕などありったけの物を出してくれて、みんなでかぶった。ストーブは2つくらいしかなかった。

次の朝は体育館も危ないから校舎の3階に移るように言われけど、うちの家族は黒森の姉のところに行くことにした。「末広町に行っては駄目」と言われたけど、黒森に行く前に見に行ったの。もう歩けなかったですね。

太田さん　第八分団の屯所（大通3）は下に水が入ったが、2階は大丈夫だった。電気も暖房もなかったけど、夜になると必ず2、3人知ら

ない人が泊まって、朝になるといなくなっていた。全部で6~7人くらいいましたね。当時自主防災の資機材を八分団で預かっていて、その中に毛布が100枚あったので、それを引っ張り出して使った。震災後、資機材は町内会と分けて保管している。大通2丁目、3丁目、南町までが八分団の管内ですが、寝たきりのお年寄りが1人ご自宅の1階で亡くなっています。

火災が2件

太田さん　次の日の夜中に火災があった。夕方、とても体がだるくて、これではもたないと思い、自宅の2階で6時くらいから寝ていたんです。起きたときは真っ暗で、ウーウーとポンプ車が通った。窓を開けて見たら、ガンガン燃えていた。こりゃあ大変だと現場（大通4）に行ったら、もうすでにうちのポンプ車も放水していた。角のガラス屋さんは古い家だったので、津波で簡単にビシャッとなった。そこに通電して出火したらしい。屯所に残っていた若い連中が、夜警でここを回った11時半ごろには、まだ火が出ていなかったそうです。このとき防災無線は津波警報だけで、火災については放送していないんです。

普通の火事は出動して放水して30分もあれば消える。ところが夜の12時から朝の7時まで放水した。この辺りはもろに風を受けたために火が広がったんですね。7時間の放水は第八分団だけじゃあない、第三分団、第九分団も来てくれた。

最初に近くの貯水槽からガッーと放水したら、貯水槽の水は10分くらいでなくなってしまった。そこで、山口川から水を引っ張ったけど、川も瓦礫で埋まっていて、水がチョロチョロしか流れてこない。なんとか堰を作ってやった。消防署が大型水槽車を持っていますから、普通は4、5本のホースで放水して、最後のブスブスとなっているのをそばに行ってガッーと止めの水をかける。ところが、あの日は余震が来ると、隊長が「地震、待機」、地震がおさまると「かかれ」の繰り返し、そんな感じでしたね。普段は野次馬がいるけど、真っ暗闇で誰もいないのが不気味でした。

それから2日後の黒田町の火事も朝方までかかりましたから、寒くて、寒くてね。お年寄りが1人亡くなりました。第八分団は志むら寿司（大通1）の横の山口川から、第三分団は宮古小学校のプールから水を引っ張りましたね。鉄筋のアパートでなかなか消えなかった。消防士たちはマスクをしてボンベを背負っていますから、この人たちが早く突入すれば終わるのに…。もう水がないですから手ぶらの分団は「待機せよ」ということに。待機中は黙って立っているわけですから、これはつらいですよ。

第八分団はなぜか田老の山火事にも「出動せよ」ときて、山火事だから下からの放水はできない、ヘリコプターで消すんですよ。午後から行って夕方までかかりましたが、その時に初めて田老の惨状を見ました。田老の入り口までポンプで入ることができた。警察官に頼まれておばあちゃんとお孫さんのご遺体を瓦礫の中から出すのを手伝って、戸板に乗せて通りまで運んだ。その時にご遺体を初めて見ました。道路はすでに自衛隊が入って整備されていた。

それから、地震で交通をストップしましたが、末広町は一方通行ですから、なにかのときにはこれを考えないと危ないですよ。

1か月前後で店の再開

太田さん　女房は従業員の実家のある山口に1晩、それから長根の姉さんの家に行きました。私の仕事は保険事業なので早くオープンしなければいけないから、とりあえず電話と机だけで、1か月かからないうちに再開した。書類がヘドロでドロドロになったけど捨てられないし、個人情報だから他の人に触らせるわけにはいかない。データがあったので、とりあえずお客さんの話を聞いて対応した。聞き役ですね。聞いてもらいたい人がたくさんいました。

末広町はいい方です。田老、鍬ヶ崎、重茂半島はもっと悲惨なんですから。その人たちが末広町に買い物に来て、わかっている人に話を聞いてもらいたい。身内を亡くした方はいっぱいいる。

家の前の駐車場に、自転車、蛍光管のダンボールなどのごみを車で

捨てにくる。それが毎日増えて山積みになった。それを見ると情けなかったですね。

臼木さん　毎日黒森から家族で片付けに来た。4月3日の誕生日までに帰りたかったんですが、1か月かかりましたね。手伝いに来る人もみな被災しているから、大工さんを頼んで泥出しもしてもらって、1か月してようやく畳が入って電気が戻った。そこで末広町に帰ってきて、商売も再開した。店はなにも残らなかったので「もうやめた！」って大きな声で宣言したら、お客さんが布団を買いに来た。もしかしたら布団が売れる時代がくるかもしれないと思ってね、悪いけど。宮町の倉庫にある在庫を出してきたらどんどん売れた。乾いていたものはなんでも売れました。

太田さん　分団長で一生に一度のこと、今まで経験したことがないことを経験させてもらった。1週間くらい経ってちょっと余裕ができたので、慰問がてら鍬ヶ崎の被災した第六分団、第七分団を訪ねたんです。変わり果てた鍬ヶ崎の街を見渡すと、警察官と赤半纏が4、5人で瓦礫の中の遺体探しをしていた。その人たちは自分の家が流されているにもかかわらず分団の活動をしている。赤半纏はすごいな、辛かったけど分団員になってよかったなと思いました。

震災後、長靴とリュックサックに水を用意しています。

臼木さん　2リットルの大きなペットボトルを5個用意している。1か月は大丈夫だから毎月11日に新しい水に入れ替えるの。水がないのが一番大変でしたから。

小成さん　防災会として段ボール入りの5年保存の水とＬＥＤの電気を用意しています。

(4)　元田 利克さんの話　昭和32（１９５７）年生

鍬ヶ崎日立浜　漁師、居酒屋ぶ～や（末広町３）

平成27（２０１５）年7月24日、ぶ～や店内で伺う。

日立浜から脱出

鍬ヶ崎日立浜で、昼間は夫婦で磯漁を、夜は末広町で居酒屋をやっている。震災まで住まいも日立浜だった。

当日は、車で日立浜の家を出ると同時に地震がきた。家に戻って中を確認して浜に行った。2日前に結構大きい地震がありましたよね。あのときねえ、津波が20センチ来たんです。それで、大きい地震だったから、来ても1～2メートルかなって感じだった。それで、船を海の方に繋いであって、道具もみんな積んであったから、一応上げておくかなって、その作業をしていたんですよ。なんでかね、引き上げるロープが何回も切れて、すったもんだしているうちに、だんだん海が引いて行った。オー、何だ、来っところだなって思ってね、そいで、間に合わないから途中であきらめて、また船を繋ぎ直した。道具だけは持って、すぐそばの倉庫に入れてる最中に水が足元に来たったから、こりゃあ本気だなって思った。

家のところはすぐね、浄土ヶ浜第3駐車場に上がってく道路があるんで、そこを上がればいいやと思った。道路わきにちょっとした川が通っているんですよ。水が足元まで来て、うわあ、車も簡単に浮くっけなあと思って、一端車を出して、そこの沢すぐだから、上がろうとしたら、目の前にこう見上げるようなのが来て、道路じゃあない、川のとこにすげえ水が盛り上がってて、びっくりした。後ろ側は浄土ヶ浜に行くところでいくらか高くなっているから、そっちにUターンした。車は途中でも浮きかけたけど、かろうじてビジターセンターの方を回って、第3駐車場にたどり着いた。それで着いたとたん、車のエンジンがガアッーとなって、参ったな。ぐるっと回って来たから冷蔵庫やら大きい建物があったんで、それで押さえられたんではねぇかな、途中なにもないところで止まれば終りだって感じだったからね。タイヤが埋まれば浮き上がるからもうだめだっていうからね。

上にあがってきて、大きな木や葉っぱの間から海の方を見たら、最初に見えたのはカメイ（石油・ガソリン販売業）の油を備蓄しておく大きなタンク、あれが、はー、すごい勢いで流れて行った。

流された自宅付近で女性を救助

妻は税務署の申告で、陸中ビルにいた。携帯が通じなかったから、誰にも連絡が取れないし、暗くなってくるわ、雪は降ってくるわで、いの一番に、音はうるさくなったけども走るだけならと、車で探しに行った。中里の集会所みたいなところに行ってもいない。一緒に行った人が中里の人だから、そこにも行ったけどいなかった。妻の実家が熊野神社の上の方（桜町）で、そっちの家も心配だったから、山から下って行った。そこさ、息子が帰ってきた。

「おい、家、見に行くか」って言って。山側に細い道路があるんですよ。そこも歩く状態ではねえの、物だらけでね。ある程度行ったらば、「おい、家がねえ」って。そして浜どこの家まで下がって行った。うちの作業する倉庫がなくなっていて、その基礎の部分に下から流されてきたアパートの2階部分が引っかかって乗っていた。そこに足の不自由な70代の女性がひとりいた。向うの方から「おーい、そこに人がいるぞ！」と言う声がして、向い側にいた人たちも来て、そっから、救助が始まった。まだそれほど暗くなっていなかった。

「ドアを担架代わりにするからぶち破れ」って、取りあえずドアを外して、ドアに乗せてもつるつるすっから、足場もないような感じだからね。そこらここらの下には、うちの船の道具やロープ類があった。それを拾い集めて、「我慢してよ」って、その女性をドアに結わえた。4人で担架を持って、1人は先に行って、道路のごみを、通れるように避けて上まで行った。余震もしょっちゅう来るし、寒いし、大変だった。昔からの知り合いの家に連れて行き、「濡れているから入れてけろ」って、有無を言わせず置いてきた。

妻の実家に避難

それから、また妻を探しに行った。暗くなっても見つからなかったが、偶然携帯が繋がって第3駐車場で合流できた。息子は職場に行き、妻と桜町に戻った。義父が、赤ちゃんを連れていた家族を見かねて、家に入れていたので、家の中はいっぱいだった。そこで、その晩、俺は車の中に泊まった。

今度はうちの爺さん、父親がね、自転車で後藤医院に行った時間だから、おそらく帰る途中じゃないかなと見に行ったけど、わかんなくて、3日くらい探し歩いて、後藤医院にいることがわかった。それから日立浜の避難所になっていたパークホテルに連れて行った。「うちらも入れてけろ」って言ったら、「いっぱいです」って断られて、しょうがない、実家に戻った。

たまたま携帯が繋がって、妻の妹の旦那がテレビを見て、「大変なことになっている。大丈夫か」って言われて、「大丈夫もなにもない。家もなんにもない。流されたった。アハハっ」。「え、なんで笑っている」だって、笑うほかねえべ。仮設に入るまで桜町にいて、湧き水を汲みに行くのが日課だった。急な坂を重いタンクを持って歩くのに苦労した。

船が盗まれて

船の一隻が見つかった。日立浜の家の向かい側の瓦礫に埋もれていた。そのままにしておくと自衛隊にみなほかされっから、縄で吊って出してもらった。修理するとこがあったけど、ちょこっと修理すれば大丈夫だった。もう一隻はあとから聞いたんだけど、白浜に壊れてあった。船もいつ来っか見通しが立たないつうんで、修理した方が早いかなって思って、次に浜行ったらもうなかった。船外機から船からみんな、勝手に持って行って修理して売った人があんの、捕まったけどね。ちゃんとナンバーは付いているし、ああいうのは駄目なんです。

他にも、新しく船外機って、ほれエンジン、買って付けた人は、何日もしねえで、盗まれた。地元の人らでなくね、そういうのが入ったみたい。トラックに乗って来てバアッーとやってくるんですよ。うちらの仮設も入居する前に冷蔵庫やらを設置してあんの、それ持って行かれちゃった。

家も流され、船も流され、ここさ（ぶーや）来ている場合じゃあ、なかったもんね。浜の方が早く口開けにするという話だったので、急いで漁に出る準備をしたったが、結局のびのびになって。こっちは、はー、やめようかと思ったったの。だども、浜もいつ再開になんか、それよ

りこっちの方か早いかなと思って、みなさまに手伝ってもらって、こっちを先に、5月ごろに再開した。

(5) 元田 千花子さんの話 昭和32（1957）年生
居酒屋ぶ～や
平成27（2015）年10月11日、店内で伺う。

市街地から鍬ヶ崎に

地震のあと陸中ビルから歩いて宮古測候所（鍬ヶ崎下町）まで来て、「日立浜に帰る」って言ったら、「え、日立浜、ない、ない！」って言われた。そのときは津波のこともよくわかっていなかったので、なにを言われているのか不思議な感じだった。

日影の沢から鍬ヶ崎小学校に下りてくると、電線にブルーシートとか、布団みたいな物が引っかかっていた。なんなんだろうと思っていると、知り合いの息子さんに、「すごかったですよ、今水引きましたけど、校庭まで津波が来たんですよ」と言われて見たら、箪笥なんかが散乱していた。「実家に行こうと思うんだけど」と言ったら、「いや、無理だと思いますよ。プールサイドの方へ行ってみたらどうかな」って言われた。校庭に入ってプールサイドに行こうとしたら、近所の家が団子状態になって熊野神社の階段まで来ていた。測候所で、「日立浜なんて、ないない」と言われたのは、これなんだって、はじめてわかった。

足をガクガクさせながら体育館の横、プールサイドにある細い道を桜町に上がって行ったんです。あとから見たら鳥居がなくなっていたけど、その時は重なりあった家にびっくりして気がつかなかった。実家に帰ったら、「今、利克さんと俊吉が来て、探しに行ったよ」と言われた。そこで私も実家の裏山から蛸の浜の大橋に上って、第3駐車場から日立浜に下りたら、近所の人たちがいた。ちょうど見に行こうとしていた近所の男の子の力を借りて見に行きましょ。すごかったですね。6時前かな、雪がチラチラ降っていて、どうすっかなと思ってたら、旦那から携帯がきたんです。第3駐車場で会って、息子を職場に送ってから桜町に戻ったんです。

7 新町

新町は本町に隣接し、ともに早くから栄えた商業の中心地であった。山田線の開通をきっかけに商業の中心が末広町に移ったが、本町同様に古い蔵造りの商店が一部残っている。西側には黒田町がある。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は85、人口は197名（男88、女109）であった。

「3・11」の津波の浸水は1、2丁目は最大2メートル。1階が壊滅状態となった家屋、店舗も多く、大きな被害が出ている。3、4丁目は山側からの傾斜があるため0～1・6メートル。

震災後、平成23（2011）年8月現在は85世帯、人口は198名（男87、女111）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は88、人口は196名（男86、女110）である。

人口の増減の変化は少なく、世帯数は増えている。この数字から見ると震災の影響による世帯数・人口の増減は少ないと思われる。

(1) 澤田 三夫さんの話 昭和16（1941）年生
新町4 宮古ホテル沢田屋会長、新町通り町内会自治会長
平成27（2015）年4月25日、ホテルロビーで伺う。

100名の宴会がキャンセル

地震のときは、硬式テニスをやるもんですから、藤原のテニスコートに行く途中だったんです。港近くの海岸にあるコートは、街の方から見て防波堤の外側なんですよ。停電で信号機が切れたので、大きい地震だと思って、車を止めて脇に寄ったら、ぐらぐらっときた途端に岩（石崎鼻）が突然崩れたんです。揺れが治まってから、これはよっぽど大きいなと引き返して、宮古大橋を渡ったんです。そのときは車が1台も通ってなくて、へたするとこの大橋も途中で壊れるじゃあないかなと思いながら帰ってきたんですよ。「津波がくるんじゃあないかな」と家の者と話をしていましたが、それでも、街にはまだ人も結構歩いていて、普通の状態でした。今まで津波情報が出ても、30センチとか40センチ、最高でも50センチくらいだった。今回は地震が大きかったので、50

センチ程度ではないと思いましたけど、こんなに大きくなるとは思いませんでした。ただ、すぐそこの東北銀行（新町２）の重油タンクの蓋が飛んで、灯油が散らばっていましたので、やはり大きな地震だったんだと思いました。

当日、泊まりのお客様はほとんどなくて、３月11日が市議会の最後の日で、市会議員さんたちがうちでご苦労会をするんですね。約10テーブル、１００名ぐらいの予約が入っていた。宮古市の職員さんが「すみません、緊急事態なのでキャンセルにしてください」と言いに来た。それが３時頃、津波の来る前だったから、うちは料理を作って、テーブルも準備してあったんです。職員さんがお帰りになって、それからですね、津波が来たのは。

ホテルは新町通りから50センチくらい高くなっています。水は新町通りから上がってきて、一番高いときはうちのロビーに５センチくらいまで来て、それからスーッと引くようになくなっていったんです。この辺りは防波堤を少しずつあふれてきたような状態ですね。水の引けるのも早い方だったようです。

低体温の女性が担ぎ込まれた

「沢田屋さん、ロビーを貸してくれませんか」って混沌としている女性が担ぎ込まれた。服は波でみんな取られていた。松井内科（新町４）の先生が診て、少しでも早く大きな病院に連れて行かなければいけないと、聴診器を持って、「緊急だ！　緊急だ！」と言ってね、町内の小成商店の車を借りて県立宮古病院に連れて行ったらしいんですけど、翌日聞いたら駄目だったそうです。

亡くなられた方は大通の店（新町２）に勤めている方で、たまたまテニス仲間でお顔は存じ上げている方だった。シャッターを下しているところに水が来て被害にあったと聞いています。津波の水は見ているとゆっくりだけど、腰のあたりまでくると動けなくなるらしいんですね。

交差点の電柱のところに車が８台くらい積み重なっていましたし、その夜は東北銀行のセコムかなんか、危機を知らせるブザーがうるさかった。銀行員が鍵を閉めて帰った後に、津波が来て作動したせいでしょう。夜遅くまで電池が切れるまでずっと鳴っていました。

避難場所が宮古小学校なので、宴会に用意した料理は避難所に提供しました。停電していましたが、料理用のガスボンベのコンロがありましたから、暖かい料理を持っていくことができました。

工事関係者の宿泊所に

３月12日、13日の火事があったため、東北電力の作業員たちが配線工事に来たんですが、「作業員たちが車の中では眠れない。夜遅く来ても、ひとりずつライトをつけているから暗い中でも出入りができる。泊まるだけでいいから」と頼まれた。ここもお風呂がない、電気もない、水もない。１階はまだ泥をかぶった状態でしたが、屋上には８トンのタンクがあって、商売はしていませんから、それがなくなるまで水洗トイレが使えたんですよ。寝るだけという了解を取って、14日から泊まっていただいた。

３月20日に電気、25日に水道、29日には電気が復旧した。ホテルは４月９日から食事が提供できるようになり、その日から全国各地の日本自治団体労働組合の方々が宿泊され、ここが本部となりました。この方々は各地区の避難所の受付や夜警の仕事をしている様子でした。

その間、地下にあった暖房やお風呂の重油を、地上に上げないと消防署の許可が下りないので、全部地上に出した。

写真５　震災後ホテルなど高い建物に設置された津波シェルターのプレート　宮古ホテル沢田屋

床下に入れてあった厨房の電源が浸水して駄目になったので、ガスや電気機器を入れ替えて、フロントの絨毯の張り替えをして、5月の連休前に営業を再開しました。

ホテルの前にある自宅は床上50㌢浸水したので、私と妻もホテルで寝泊まりした。町内の自治会長を務めているので、自治会を通してボランティアの方々に片付けにきていただいた。全国からこんなに応援隊が来てくれたことには、涙がでるほど有難かった。

震災後小学校からの依頼で、津波の一時的な避難場所として「津波シェルター」のプレートが置いてあります（写真5）。

昔はこの辺りが中心地で蔵がたくさんありましたが、震災後にほとんど解体してしまった。道路上に津波の置き土産、ヘドロの跡がへばりついて残っています。

(2) 松井 忠宣さんの話　昭和24（1949）年生

新町4　松井内科医院医師

平成27（2015）年11月12日、医院内で伺う。

水に呑まれた女性

向町は閉伊川に近く浸水がひどかった。夕方4時頃、向町で水の中に浮いていた人を、消防隊員が腰のあたりまで水に浸かりながら引き上げて、中央通りの十字路のところまで10㍍くらいの距離を運んできた。さらにインテリアコナリ（本町1）のところから坂を上ってきて、「手伝ってください」、「この人を救急隊か医者に連れて行ってくれ」と、周りにいた人たちに女性をバトンタッチすると、急いで次の救助に向かった。

男性が4、5人で女性を担いでホテル沢田屋まで運んだ。私もちょうどそこに居合わせたので、「先生、確認をお願いします」と言われて、沢田屋さんに入った。ずいぶん水を含んでいたという印象を受けていた。

毛布をもってきてもらい、ロビーのソファーの上に毛布ごと置いて、聴診器で診るともうすっかり低体温で呼吸音もなし、肺音もないという状態だった。私が持っているのは聴診器しかないもんですから、「ライトないですか」と言って、沢田屋さんが貸してくれたのか、私自身がペンライトを持っていたのか覚えていないが、ライトで診たら散瞳しているんですよね。もうその時点で意識がなかった。その場合は救急医療機器があれば、気管切開をやるんでしょうが、なにもないし、なにかができる段階でもなかった。あとは宮古病院に連れて行くしかなかったが、電話も携帯もなにも通じない状態だった。その場にいたインテリアコナリの従業員さんが、四角い大きいライトバンを用意してくれて、県立宮古病院に運んだ。

ミニパトカーに先導されて宮古病院へ

コナリの従業員さんが運転して、私は聴診器をぶら下げて助手席に乗った。常安寺の裏道を行くと、前に車がいたので、運転者にプップッと鳴らしてもらい、私は窓を開けて、「おーい」って、聴診器を振って追い抜こうとするんだけど、それがなかなか通じない。ちょうど2台先にミニパトカーが見えたので、「鳴らせ」と言って、ビー、ビービー、ビービーと警笛をしつこく鳴らしてもらった。するとそれが騒音になるので、ミニパトカーがピタッと止まった。女性警官に聴診器を見せて、「新町で開業している内科医だが、溺死の状態になっている人がいるから先導してくれ」ってしゃべった。そしたら女性警官が、「先導します」って、ウーウーウーってサイレンを鳴らしてくれたので、ノンストップで病院に行った。

病院の門前のところまで行ったら、すでにね、バンだの、軽トラックが止っていて、後ろに乗せてきた水を含んだ状態の人たちを下しているんです。私は3番目だった。「ちょっと待ってください。順番に診ます」と病院の先生に言われた。順番がきて、「心肺停止で、散瞳を確認した」と状態を説明すると、「どこの誰ですか」と聞かれた。「消防隊員からバトンタッチされたので、女性の名前もなにも知らない」と事情を話すと、その状況や私の氏名住所、そして病院に到着した時刻などを全部黒板に書かれました。私はそこまでで、あとは病院に預け

て帰宅したんです。

後日その女性の写真を見せられたが、わからなかった。引き上げられた時には、水を飲んでいたため写真とはすっかり変わっていた。津波は海水と閉伊川の淡水80％が一緒になった水なので、水膨れがひどかった。海水だけだったら、浸透圧の関係で1、2日は変わらないそうです。

(3) 田中 竜さんの話　昭和31（1956）年生

新町1　㈲小成周蔵商店（インテリアコナリ）従業員

平成28（2016）年3月14日、事務所で伺う。

ライトバンを運転して県立宮古病院に

地震のあと仕事を再開していたが、外でなにか声がするので表に出たら、地面がキラキラキラキラ光っていた。水だった。津波だ！と思った。それから、ちょうど店のシャッターを閉めたときに、市役所の方から車が流れてきた。同時に向町の方からも波が来た。目の前の通りは両方から水が来るので、上に行くしかない。瞬時の判断で坂道を上がって逃げた。店には2メートル10センチ水が入った。

水が引いてから上に逃げていた人たちが、だんだん集まってきた。東北銀行のあたりで足が濡れる状態でした。ちょうどホテル沢田屋さんの辺りからコナリの店の方を見ていると、水につかった女性が運ばれてきて、その辺りにいた人たちも手伝って、ホテル沢田屋さんに運び込んだ。

「病院に連れて行った方がいい」と言っているところに我々もいて、コナリのライトバンを用意して、同僚の佐藤元が運転して、松井先生、私と金沢仁ともう1人そこに居合わせた男性と5人で宮古病院に行ったんです。

(4) 中村 克美さんの話　昭和44（1969）年生

新町4　中村屋せんべい店、第三分団員

平成26（2014）年6月19日、第三分団屯所で伺う。

すぐに救助活動

地震の発生時は、向町の鉄筋のコンクリートの建物の中にいたんですけど、すごい揺れでした。1週間くらい前の地震とは揺れも長さも違っていた。これは津波がくるなと思いましたね。通常第三分団屯所までは信号があるので、4、5分かかるんですけど、信号が止まったので、1分ちょっとで来た。大津波警報が出たので、「逃げてください」って放送かけて、ポンプ車で赤沼分団長と管内を回りました。

そこから津波が来るまで30分もなかったんです。この前の地震のときは、注意報が出たけど津波が来なかったので、ご年配の方たちは逃げないでいた。でも、あまりにも大きな地震だから、「取りあえず宮古小学校まで行こう」って、この通りのおじいちゃん、おばあちゃんを全部連れて行ったんです。

津波は3時20何分かに入ってきたんです。ひまわり荘（黒田町4）の裏の駐車場でおじいちゃんの手を引っ張って歩いているとき、分団長の「津波だ！」って声で、水に気がついたんです。魚を入れるヨコダ（ケース）がサッーと走って、黒い水がグッーと流れてきた。160センチくらいの塀があったので、逃げれなくなっていたら、分団長に、「塀乗り越えて行くべし」って言われて、塀を乗り越えた瞬間、水はもう膝の上まで来ていた。急いで屯所まで逃げてきた。おじいちゃんは息子さんと一緒にアパートの2階に上がってもらったので無事だった。

逃げた時には、宮古の町は道路の下に川が流れていて、側溝ともつながっているので川が逆流して、町の方からも水が回ってきた。水は第三分団の屯所の前にある信号のところには10センチくらい、一番遠くは魚菜市場の前まで来た。

三日三晩屯所に詰める

逃げ遅れた人の確認をして、夜になって水が引き始めてから救助に行ったんです。うちの分団は水門がないので、ボートを持っていない。それで、お年寄りをおんぶしたり、水の中を一緒に手を引いて歩ってきたりして助けた。それから夜は危ないから一時待機ということになっ

た。

次の日の朝から、逃げ遅れた方とか、行方不明者の捜索をしてくれと言われて、3、4日はその作業が続きました。第二分団が被災しているので、消防署から「向町の行方不明者の捜索に行ってくれ」という指示があって、何個かの分団で探しに行きました。

屯所の上のコミュニティーも避難所だったので、具合の悪い人が出ると、救急車が足りなかったので、ポンプ車の後ろを空けて何回も病院との間を行ったり来たりした。それは結構きつかった。火事も2回あり、三日三晩寝られない状況だった。分団員はみんな食えない、飲めない。水を飲むこともトイレに行くことも忘れていたくらいだった。汚い話ですが、久しぶりに、「トイレに行くべぇ」って、するとコーヒーみたいなおしっこが出た。今は笑話というか思い出話になっていますけど。それもみんな先輩から、「こういうときはこうなるよ」と飲み会で教わっていた。

地震のとき分団員はほぼみんな来ていましたが、土木関係の仕事が多いので、だんだん瓦礫撤去に駆り出されていき、10日過ぎた頃には、ほぼこの近辺のやつらだけで活動してましたね。

2か所で火事

大通4丁目で1か所と黒田町で1か所火事があった。水が足りなくて消火に6、7時間もかかった。多分漏電というか、建物が水を含んでいたので通電して出火したんでしょうね。電気屋さんも、「電気通します」って言わないで通すんですよ。無線とか放送がない状況の中で工事をやっていたので、それも不可抗力で仕方がなかったと思う。黒田町の現場には早くに着いたんですが、ただ、当時冬だったので灯油がいっぱい流れてきて、建物自体が微妙に水を吸っているので揮発し始めて、行ったときにはもうひでぇ火だった。道路挟んで、4、5メートルの反対側の建物が焦げたくらいひどくて、道路標識も焦げて溶けている。

大通の火事は400~500メートル近くある宮古小学校のプールからホースを引っ張ってもらって消した。7棟か8棟燃えました。消火の間も余震で揺れていた。次の日に蒸気が上がっているから、「もう1回消しに行け」ってホース伸ばして行ったんですけど、大きな余震が来たのでホースをそのまま置いて、みんなで逃げてきた。「おっかなかったあ」。

今でもですが、訓練のサイレンで、「テェテェテェテ、テレレン、地震きます」とか、津波の「アーアー」とか長いサイレンが流れると、消防団員はみんなぐっとなる。一生に1回で済めばいいですけど。今はもう喉元過ぎているので、みんな忘れたいのが半分、忘れちゃいけないのが半分。みんなで飲むと「おっかねえな」って言っています。

店の被害と復興

住まいは南町なんですが、新町の実家で家業のせんべい屋をやっています。そこはおじいさんが昭和8（1933）年10月に建てた家で、3月に基礎を造っていたときに津波がきて2階に逃げた。そこで「土間を上げろ」ということになり、普通の家より一尺（33センチ）高くしてある。そのために上がりも高くなっていて、その高さで工場も作ってあるんで、入口には水が160センチ来たけど、家の中の浸水は120センチで済みましたね。器械は1台駄目になったけど、ほとんどは残った。じいちゃんの機転のおかげですね。

2、3年前、宮古市で、「20メートルクラスの津波はここまで来る」っていうシミュレーションがあったんですが、今回はそれ以上で、水の高さは想定より1・20~1・40メートルくらい高かった。うちも20センチ~30センチくらいと言われてたんですが、ここも160センチまで入った。やっぱり想定以上、想定外の津波だった。

家の玄関は西向きだから、水が渦を巻いて入ってきたので、泥がひどかった。11日の夜に避難所でせんべいを配って、工場の中はすかすかだったので片付けは早かった。ただ、やっと10日目から片付け始めたので、泥が固まってしまっていた。スコップですくって、瓦礫や資材も入っていたが、一斗缶に何十個も出した。水につかった資材は細かい泥にまみれて全部アウト、全部廃棄した。

3日3晩はまるまる屯所にいて、それ以降は1か月くらい毎日、店と屯所を行ったり来たりしていた。仕事は全然していませんでしたが、ちょうど分団長もお菓子屋さんだったので、「時間見て動け」って言ってくれた。

せんべいの型を洗浄して焼いて、また洗浄して焼いてという作業を1か月くらい繰り返した。海水を被った型は塩水で錆びが出てしまうので、何回も繰り返してようやく使えるようになった。子どもたちや親戚も手伝ってくれたので、ゴールデンウィーク前になんとかある程度焼けて販売もできた。完璧になったのは夏以降だった。お菓子屋さんは釜や設備の回復に時間がかかって、補助金もずいぶん遅かったので大変だったんですが、うちは手焼きなので、他のお菓子屋さんより早く再開できたと思う。町の人たちも卸し先も待っていてくれた。せんべいの材料だけでなく、箱やシールの材料屋さんもあちこちから都合つけて運んでくれて、みんなが助けてくれた。

仕事ができるってことはいいことです。つらかったことも忘れる。「補助金が出るのでこれを機に包装する器械を買うか」なんて言って、気を紛らわしていました。

今回、倉庫の中からおじいさんの時代の型が見つかった。昔の鋳物で雑なんですけど、花札の藤やあやめ、小さい桜、亀甲、船漕いでいる型などがあった。いつかその型を起こして焼いてみようと思っています。

今思うこと

救助に行っても逃げない方もいた。アパート住まいの方は外から来る方もいるので、仲よくなるのも難しい。とにかく生きていて逃げるしかない。警報が出たらすぐに避難をしてくれれば、ある程度の距離があっても、いま以上に助かったと思う。「まあ大丈夫かな、そろそろ行くか」っていう人たちは、みんな流されている。逃げる途中で亡くなった方もいる。それと2階に上がっていてくれれば、声かけに行って助けることもできる。このご時世なので2、3日待っていれば、食べ物は回ってくるので、とりあえず命だけ持っていればなんとかなる。

喉元過ぎた頃がおっかない。1年目、2年目くらいは意識しているけど、5年も経つと忘れていく。「備蓄だけはしておきなさい」と言っても、地区によっては備蓄した物さえも流されてしまう。宮古小学校も水が入ったし、確実に安全なところはない。道路を整備して、1段階、2段階、3段階というように避難することも考えなければいけないと思う。でもこれは経験したから言えることで、私も今までは津波はここまでは来ないと思っていました。

8　黒田町

新町や本町とともに古くから栄えていた。町内は町内会・自治会の2つの組織がある。隣接する北側の横町には避難所となった宮古小学校や第三分団の屯所（管轄区域＝新町、黒田町、沢田、横町、保久田、小沢1、2丁目、緑ヶ丘、五月町）がある。

震災前、平成23（2011）年3月1日現在の世帯数は136、人口は276名（男120、女156）であった。

「3・11」の津波の浸水は1メートル以上。1階が壊滅状態となった家屋、店舗も多く、大きな被害が出ている。13日には火災も発生した。

震災時の死亡者はゼロであったが、その後関連死は数人ある。

震災後、平成23（2011）年8月は133世帯、人口は269名（男120、女149）、平成27（2015）年3月1日現在の世帯数は123、人口は238名（男104、女134）である。

(1)　赤沼 利彦さんの話　昭和22（1947）年生
黒田町7　つちや本舗代表
宮古市町内自治会連合会副会長、前第三分団分団長

平成27（2015）年3月9日、店内で伺う。

管内の屯所に33日間詰める

父親が22か23歳の時に田老村で昭和8（1933）年の津波にあって、家族5人を亡くしているので、津波のことは両親からよく聞いていま

す。3月11日は人生の中で初めての大きな地震で、家がつぶれるんじゃないかと思うぐらいだった。間違いなく津波がくるなと思った。地震が治まってすぐに自宅の前から奥を見渡して、「異常なし」と確認した。向町に女房のお母さんと兄さんがいるもんですから、「すぐに連れてこい」と女房を迎えに行かせ、私は店のシャッターを下ろして、すぐ屯所（横町4）に飛んでいった。分団員の中村君がシャッターを開けていた。津波が来るということを前提に、2人でサイレンを鳴らして管内を回った。そのときは防災無線が聞こえていませんので、「すぐ宮古小学校に逃げてください」とマイクで言いながら管内を2回ほど回った。

みなさんが宮古小学校に避難をして来るので、屯所の3階においてある宮古市の自主防災の毛布を全部出させたが、これでは足りない。まだ水が来ていないぎりぎりのときだったので、3人の分団員に、「防災会館までポンプ車で行って、毛布をみんな持ってこい」と取りに行かせた。私はその間に職員の人たちの所に行って、気合を入れて、「お湯を沸かして、水を出して、みなさん協力してください」と言ったんです。宮古小学校の先生たちが一番よく仕事をしてくれたと思うんです。

分団員3人で一人暮らしのお年寄りを助けに行ったとき、たまたま義理の息子さんがお出でになっていた。助けようと思って側まで行ったんですが、そのとき黒い水がブァーと入ってきましたので、これはまずいと思って、1・70メートルくらいある駐車場のブロック塀を乗り越えて、屯所まで戻ってきた。その時にはもう屯所のとこまで水が上がっていました。2人に「あとで迎えに来るから」と言って、2階に避難してもらったが、それどころではなくなった。さぞ寒い思いをされただろうと思っている。

宮古小学校で避難してくる人たちを体育館に入れたり、毛布を配ったりしているうちに暗くなったので、逃げてくる人のために、分団の発電機で校門を照らした。

町の見回り

次の日の朝、避難している人たちの朝食に1世帯におにぎり1個、コップに温かいソーメンを出した。それから川井と、新里地区の人たちが米を出し合って、おにぎりを差し入れてくれた。

分団は春と秋の全国火災予防週間に管内の火まわりの点検で独居老人、老人2人世帯の確認をしているので、各家の状況を把握している。そこで、管内の独り暮らしの方103人くらいの無事を確認して回った。異常がなかったので、向町、新川町の見回りに行った。

大通から向町に行く途中は車が何台も重なっていて、その車の中には誰かいるだろうと感じたんですが、とても入れなかった。町の角にはご遺体が何体もあった。瓦礫が3メートル以上も積み重なっていて、入っていけないところもあった。それから一番被害の大きい向町に行くと、家が流されて土台ごと動いているので、どこの町を歩いているのか、わからない状態でした。

家の中に入るとまず仏壇のところに行って、位牌があるかどうかを見る。もし位牌がなければそれを持って逃げている。そういうことを仮定しながら探したんです。だいたいはうつ伏せで亡くなっている。つらかった。遺体を見つけて消防署に無線で連絡すると、リサイクルのごみ収集車が来るので、最初はそれに乗せた。それから2日くらい後に警察が動き出したので、警察の遺体収集車が来るようになり、その後に自衛隊も来ました。

地震当日は道路が交通止めになり、次の日からも津波警報が出る度に封鎖になり、常安寺に行く道しか通れなかったのでパニックになっていた。そこで、分団が自分の地域をなんとかしなければと思い、消防署や警察を応援した。交通整理で声がすっかり枯れてしまった。分団員の心意気ですね。

大きな火事が2回、大通4丁目と黒田町であった。地震で停電して、それに伴って断水もしていたため、消火栓からの放水ができなかった。そこで宮古小学校のプールから引っ張って消火したが、半分ぐらい使ったところで、「トイレを流す水なので、被災者のためにそれ以上使わな

いでください」と言われた。そこで、旧山口川（庵屋川）からの放水に切り替えた。水が不足して消火に時間がかかった。

消防署から全分団に向けて出動をかけてもらった。無線を聞いていた津軽石、鍬ヶ崎、高浜地区など被災した分団も来てくれた。大通の火事は漏電によるものだった。その後電気の復旧に時間がかかり、そのために全体的な復旧も大きく遅れた。

震災後すぐに、災害FM（現宮古エフエム放送）が繋がって、局から要望を聞かれたので、「津波で濡れて電気の差込口が錆びているので、電気が直接来ると火災が起きる。一旦家に帰ってブレーカーだけは下してください」とFM放送で伝えてもらうように頼んだ。

家族と仕事

次の日の朝早くに家を見に来たら、店の浸水は1・20（トルメー）くらい、ちょうど菓子ケースのところまで水が来て、中の物はすべて動いていた。灯油臭い匂いがしていた。土台を高く建てた家だけど、畳にも台所にも倉庫にも工場にも水が入っていた。8日か9日に届いて倉庫に置いた商品用の箱5千箱以上がすべてドーッと倒れていて、ああ、こりゃあ、駄目だと思った。その時ブレーカーを下した。

家族は宮古小学校に避難した。女房は4日後に自宅の2階に帰ってきて、息子夫婦は子どもが学校に上がるときだったので、電気が回復するまで宮古小学校にいたが、その後は倉庫の2階で暮らした。私は33日間分団で寝泊まりした。最終的に屯所に残ったのは3人くらいだった。2日目から魚菜市場で炊き出しをしてくれたので、食べる物はそこからもらった。

電話も不通、菓子製造の機械も駄目になった。仕事は6月下旬ごろに再開した。私は分団の活動をしていたので、家族には苦労かけた。ボランティアの人たちには町内の下水を掃除していただいて感謝しています。震災後、菓子の栞に感謝の気持ちを込めて次のようなお礼の言葉を入れている。

「お買い上げいただきまして「ありがとう」ございます。

3月11日の東日本大震災より、自衛隊・警察・消防・ボランティア等々の皆様方をはじめ、日本国中の方々より御厚情を賜りながら一歩一歩前進して復興する事ができました。誠にありがとうございます。つちや本舗」

9　消防団の活躍―第八分団を一例として―

震災時各分団の活躍は目覚ましい。多くの住民を救出し支えた。分団員の献身的な活躍は常日頃の活動に裏付けされたものであり、住民との信頼関係に基づいたものである。（分団員の活動…本章、3-(2)、6-(1)、(3)、7-(4)、8-(1)）

第八分団の管轄区域は末広町、大通3丁目、大通4丁目、南町である。日常的な主な活動は他の分団同様に管内を見回る、管内及び火災の要請に出動し消火に当たる。12月から3月は毎晩交代で屯所に詰め、夜警をするなどである。

3月11日地震発生時から翌日明け方まで、いつもの消火活動にはない長い1日だった。当時の分団員は14名、年齢は28～67歳であった。

□　第八分団のみなさんの話

太田 憲一郎 さん　分団長

和山 悟さん　昭和46（1971）年生　**分団班長**

大通3丁目　東海自動車工業㈱代表取締役

黒渕 祐司さん　昭和55（1980）年生　**分団員**

大通3丁目　ホテルビックウェーブ　東海電業㈱

平成26（2014）年11月20日、第八分団屯所で伺う。

長い1日

太田さん　地震の後、第八分団は8人で水門を監視していた。

水が最初はシャシャシャときて、次がウワッーと、3番目に真っ黒いのがバッーと来たんです。そこで、私の号令で土手の上にいた分団員たちが下に避難した。2、3人が土手下の道路に止めたポンプ車に乗り、私は他の分団員と線路の方に逃げた。数分後、線路に上がってみ

たら、鉄橋がなくなっていた。

黒渕さん　水門に行く前に、悟さんが運転して2人で1回管内を回っているんですよ。「津波警報が出ているので避難してください」って。マイクでしゃべりながら回って、ちょうど水門のところに着いて、俺だけ降りたよね、悟さんは乗っていたよね。

和山さん　なぜか、乗りっぱなしだったよね。

黒渕さん　津波が来たのは見ていないんですよ。ポンプ車から降りた瞬間、分団長の「逃げろ！」って声でポンプ車に乗って、悟さんに「行くべえ」って言ったら、もう1人走ってきて、後に乗ったのが見えたんですよ。

太田さん　吉濱部長だ。光雄さんは上にいたんだよ、確かに。

黒渕さん　1人後ろに乗るのを待って、普段であれば乗ったかどうか確かめるんですけど、そのときは確かめてない。で、多分乗ったということで、土手沿いを走っている間に、サッパ船が土手に上がった。その頭がピロっと見えたのを横に見ながら、バシャバシャと波をかぶりながら走ったんです。

和山さん　土手沿いに行って最初の角を曲がった。そこまでの間が本当に生きるか死ぬかという異常な緊張で、すごく長く感じだけど、角を抜けてからへんに冷静になった。南町まで波が来たということは大通全部に波が来ていると思った。そこで祐司君が「右行きますか？左行きますか？」と聞いたんだべ。俺はその時「右は駄目！」って言ったんだ。大通はもう水没しているって判断したんです。そこからは冷静になった。そのままずっと行って、オートバックスの前から表通りに出て、出逢い橋を越えて駅前に戻ってきた。末広町に確実に戻るための迂回路だったんです。運転していて、一番長く感じたのは、土手沿いに津波を被りながら走っていた数10㍍です。

　今だから言うけどね、あきらめてアクセル抜きかけたんだよ。アクセル抜きかけたとき、でもな、祐司君と後ろに光男さんも乗っているしなって。ここで3人とも死んだら、俺は2人の家族に何と言われるかわからない。そう思ったら、アクセル踏みっぱなしになった。

黒渕さん　橋も渋滞で通れなかったですもんね。ルート的にもここしかなかったから、避けて、避けて、警察管がいたので「南町の堤防も水が上がっているから避難させてくれ」ってマイクでしゃべって、末広町に下ったのは覚えている。末広町には確実に入ったんですよ。

和山さん　そのとき末広町にはまだ水が来ていなかった。

黒渕さん　まだ人がいましたね。店の人たち、多分店の心配もあるから、何人か外にいましたよね。

和山さん　波を被っていたから必死で、「堤防を越えた、逃げろ！」ってマイクで言った。

黒渕さん　なんて言ったか覚えていないですね。

和山さん　はっきり覚えているのはね、「堤防越えた、逃げろ！」ってしゃべったんだよ。

太田さん　絶叫型でね。俺っちのカカアも聞いているぞ。「逃げろ！逃げろ！」というのを。臼木さんも聞いている。

黒渕さん　警察にストップされていたので、通りに車は1台も走っていなかった。

太田さん　車が1台もなくて、スピーカーで騒げば、俺っちまで聞こえることは聞こえるけど。

和山さん　みんな「えっ！」っていう顔してこっちを見て「なにをいっているんだ、お前たちは」みたいな。こっちも必死だった。その人たちが避難したかどうかは覚えていないですね。

　すごい勢いで避難して行ったのをはっきり覚えているのは、むしろ南町を走っていた間です。オートバックスに突き当たる辺りで、そこの整備士さんたちが全速力でダッシュしているから、そこら辺にいた人たちがみんなつられて八幡さま（横山八幡宮）に向かって走っていった。後日宮司さんに聞いたら結構な人数が八幡さまに避難して来たそうです。

　津波が到達する前に管内の南町から末広町を通っている間は、あくまで通り一遍のアナウンスなわけですよ。まさに文章を読むだけ。正直言って、誰一人動かなかったね。ところが、「堤防越えた、逃げろ！」っ

て言ったら、みんな本気で逃げだした。

太田さん　我々が土手で見た波と、末広町に入ってきた波はタイムラグがある。一気に来たわけではないんですよ。

黒渕さん　ただ末広町でどこまで入っていったかを覚えていないんです。船が見えて、波が見えて、…。

和山さん　なんだかわからないけど、前からありえないモノがありえない勢いで迫ってくるっていうのだけはわかった。「だめだ、下がろう」と言ってバックした。やばいのが来た、これは駄目だっていうのだけは覚えています。

黒渕さん　俺がバックの誘導をして、方向を変えたのは覚えている。多分花の木通だったと思いますが。それで駅前のロータリーに戻ったんですよ。

和山さん　駅前のロータリーのカリヤビルとみかみ酒屋（栄町２）の前に、腰を抜かして立てなくなっているお年寄りが何人かいたんです。その人たちをポンプ車に乗せたんですが、みんなびっくりして、ほんとに腰が抜けて一歩も動けない状態だった。俺も興奮していて、何人乗せたかは、全く覚えていない、記憶にないんです。

黒渕さん　その辺が俺もあやふやです。

和山さん　とにかく夢中で、その場にいた人を乗せられるだけポンプ車に乗せてから消防署まで行った。ところが、消防署が状況をまったく把握していなくて…。

黒渕さん　多分津波が来たときに、もう無線が切れたと思うんですよ。

和山さん　我々のポンプ車を見た瞬間、消防署員がふっ飛んできて、「状況がわからないので申し訳ないけど、２階に来て教えてくれ」と言われた。第八分団が来たということは、なにかが起こって、見てきたっていうのがあったんでしょう。

　まずはポンプに乗せた人たちを避難所に連れて行かなければと思って、宮古小学校に行ったんです。「ここまでくれば大丈夫、避難所ですから」って降ろそうとしたんですが、そこに津波が来た。

黒渕さん　俺らが宮古小学校に行ったときは、もう校庭まで水が入っていた。

和山さん　校庭まで水が上がってきているのに、「ここまで来れば安心だ、よかったね」と、のろのろ歩いている人がいっぱいいてさ、祐司君が「だめだ、走れ！」って、マイクでしゃべったんだ。

太田さん　家内が社員と２人で宮古小学校に逃げる途中、山口川がもうゴボゴボ、ゴボゴボとなっていたので、やっぱり来ているんだという感覚で小学校に入ったら、水が来たと言っていた。

和山さん　そのタイミングでわれわれが宮古小学校に行った。そこに末広町の人たちがいたんだ。

太田さん　末広町の人たちは、まさかここまで水は来ないと、みんな思っていたんです。

和山さん　宮古小学校でポンプ車から、何人かは降りたんですが、まだ中で動けない人がいて、結局もう一度消防署前に戻ったんです。ここなら水は絶対に来ないからって。それから向かい側の合同庁舎に行き、「申し訳ないけど、腰の抜けて立てないお年寄りがいるから中に収容してくれないか、宮古小学校にも津波が来ているから」って言って、合庁さんに会議室を開放してもらった。そこで岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれたんです。我々は人を降ろしてから宮古第一病院（旧加藤病院・保久田）の角に行った。

黒渕さん　それから波が来たからって、魚菜市場（五月町）の方に逃げたんだよね。

和山さん　第一病院前、ここがおそらく波の来た最終到達地点だね。

黒渕さん　魚菜市場も側溝まで来たけど、道路にきたのは第一病院前でしょうね。

和山さん　魚菜市場駐車場の角で完全に道をふさぐようにポンプを止めて、アナウンスを続けた。

黒渕さん　そこは宮古病院の方に抜ける道路なので、多分みんなそこを行きたくて来たんだと思うんですが、水が来ていてこの先は行けないからと、車を止めていたんです。

和山さん　「ここから先は波が来ているから」と返すようにした。ただ

それだと、迷いに迷って何回も行ったり来たりしている車がいたので、30分くらい経ったところで、バイパスに直結している道路にポンプ車を移動した。

駅前通りに戻ってきたのはちゃんと理由があった。以前市役所の防災計画を聞いた時に、市内で駅前通りが一番高い土地だと記憶していた。ここなら大丈夫だろう、もしここが水にかぶったら市内は全滅だろうという判断だった。だから、駅前通りから声が聞こえてくれば、ここに寄ってくるだろうという頭がありました。それで、「この通りを通って避難しろ」という案内を続けた。

水が引き始めてから

黒渕さん　車の流れがとりあえず安定したのと、水が引き始めるのを見て、再び駅前に戻った。

和山さん　ポンプ車は駅に止めて、そのあとは第八分団の屯所（大通3）まで歩いていった。

太田さん　真っ暗になってから、その辺りで我々と合流したんですね。私は水門から逃げて線路を伝って、ビックウェーブのところの柵を越えて来た。分団員4人で、「すげえなあ、ひでぇことになったなあ」と言いながら、腰までジャブジャブと水に入り、末広町まで来た。末広館（末広町7）の前まで水が来ていましたね。家には誰もいなかったので、ああ、逃げたなと思った。屯所に戻ろうとしたら、ベニヤ（末広町3）の3階から「あそこさ、人がいる！」っていう声が聞こえた。軽ボックスの上でずぶぬれになっている男性がいた。一緒にいた分団員が助けに行って、その晩は屯所の2階に泊めました。

和山さん　夜、水が引くまでの間ですけど、結構な人数が自宅に帰ろうとしていたんです。田老、向町、藤原の人たちが。みんないつもの習慣で市役所の前を行こうとしていた。あまりにも人数が多いので、花の木通り、末広館のあたりに分団員が交代で1人立って、「ここから先は瓦礫で詰まっていて行かれない。絶対遭難するから1晩避難所で過ごして、明日の朝になってから行ってくれ」という説得を繰り返した。結構な数の人が血相変えて、「田老まで行けますか」、「藤原まで行きたいんです」、「金浜が全滅って聞いたんですけど」って聞いてくるんです。市内でなくて遠くに自宅のある人が、ここから帰ろうとしていたんです。

太田さん　106号線で帰ってきた人たちが、この辺で足止めになったんですね。

和山さん　その時点ではどこが詰まってどこが空いているのか、当然わからないし、すでに夜ですから、「頼むから避難所で1晩耐えてくれ」としか言いようがなかったですね。

黒渕さん　水が引くのに合わせてだいぶ遅くなってから、動けるやつが歩いて見て回ったんです。

和山さん　水が引いてからポンプ車も出したけど、セントラルホテル熊安の前に、白い大きな漁船が止まっていたので、その先は車が入れない、そこまでが限界だった。その漁船がポンプ車で末広町に入った時に見た船だったんです。あとは徒歩で行きました。

太田さん　アパートに住んでいるお年寄が、ベッドに寝ていてワッーと水をかぶって、水が引くのを待っていた。若い人に助けられて、衣類が濡れたので裸でおぶさって出てきた。もう1人階段から下した人と2人をポンプ車で宮古病院まで運んだ。

黒渕さん　無線機で消防署に連絡したけど、救急車が手配できなくて、ポンプ車で運べるなら運んでくれと言われて、その2人を常安寺経由で宮古病院まで運びました。

多分1時か2時で、だいぶ遅かった。その前におかめ（末広町1）のところを通った時は11時で、まだそこに水があった。2階にいた人に「水が引けてから、宮古小学校に逃げてください」って言ったのを覚えていますから。

和山さん　ポンプ車を送り出した後、行けるところまで行こうと、最終的に介護施設あお空の前まで行った。

太田さん　そうそう、そのあたりで後藤医院だけが、不夜城のごとく電気がついていた。ものすごく印象的でしたね。

和山さん　あお空さんのところに流されてきた人が腰を骨折していた。「重症でどうにもならないから病院に運んでくれ」と頼まれたんですが、「ポンプ車は宮古病院に行ったし、救急車もないっていうし、もう足がないよなあ」と言っていたら、そこに、どこをどうして来たのか、軽のワゴン車が1台入ってきた。その車の人に「常安寺の道が通れるから、病人を宮古病院まで乗せて行ってくれ」ってお願いしたら、快く引き受けてくれました。名前も聞かなかった。それが我々の「3・11」当日最後の救援でした。

助かったから言えるけど、津波に南町、末広町、宮古小学校、宮古第一病院と4か所で追いつかれている。

黒渕さん　ポンプ車が生きていたお蔭で、その後の火事にも役に立ててよかった。

太田さん　第8管内ではおじいちゃんがお1人亡くなられましたが、管内を守ることができてほっとしています。

自宅の被害

太田さん　事務所（末広町2）は1メートル50の浸水で全滅。2日後私たちが田老の山火事に出動していたときに、家の前の瓦礫の中に町外の方のご遺体があったそうです。軽トラの上で助かった男性の両親が流されたと聞いていたから、もしかしたら一緒に買い物に来ていた親御さんだったかもしれません。

和山さん　会社（大通3丁目）は1メートル20位の浸水で、据え付けの工具が全滅、事務所のコンピューターもやられました。工具類も津波の水は塩分が濃いから、多少洗って油をさしても駄目です。時間を置いたら錆でやられてしまうんです。預かり車は、その場に残って駄目になったものもあれば、流されたものもある。一番遠くは大通駐車場の手前の角まで流されていた。向町の日専連の従業員さんの車が、大通3丁目の東海自動車まで流れてきていましたから。

自宅の2階が無事だったので従業員も誘って、片付けをしながら暮らした。電気はなかったけど、生活用品、ある程度の食料があったので避難所には行かなかった。当日は甥っ子、姪っ子が学校に行っている時間帯ですから、家族は宮古小学校にいたことがわかるまで、子どもたちの無事を確かめるのに相当苦労したようです。

黒渕さん　後藤医院で仕事をしていたので、第八分団の前に会社の車を止めて、そのままポンプ車に乗った。その車は完全に駄目になりましたね。家（大通3丁目）は基礎を高くしてあるので、ぎりぎり床下浸水で済みました。家族は家にいなかったので宮古小学校に避難したと思った。その夜は見つけられなくて、2日後に会えました。宮古小学校は保護者が迎えにきた子どもは返しても、その他の生徒は先生と一緒にそのまま学校に避難していた。ホテルは3時のチェックイン前だったのでお客さんはいませんでした。支配人と従業員は一応鍵をかけて宮古小学校に避難したそうです。

電気もなかったので、家族は2週間ぐらい親戚（の家）に行き、ホテルはコンピューター類がだめになったので、1か月以上閉めていました。

10　街の復興

宮古一番の商業地は駅から末広町、大通、中央通、そして市役所へと続く約800メートルとその周辺の事業所・商店からなっている。昭和9（1934）年に山田線が開通し、末広町の西側に鉄道の駅ができ、宮古の玄関口となった。それを機に本町、新町から末広町に移る店も増えて、現在末広町がもっとも繁華な街となっている。

商店街の津波による浸水は2メートルから30センチであった。宮古商工会議所のアンケート調査（平成26（2014）年9月5日作成・回答率100％）によると、会員1千299件のうち自宅を含めて61％が被災を受けている。7月には65％が、1年後の平成24（2012）年7月には85・1％の事業者が営業再開を果たしている。卸売業・小売業・飲食店に携わるものは564件とあり、まちの事業所・商店街の多くはこの部分に該当する。

震災3か月後の6月と10月に中央通商店街と末広町商店街の合同で

「宮古あきんど復興市」が開催された。平成27（２０１５）年秋には10回目を迎える。末広町商店街振興組合理事長の佐香英一さんは、３月末に「震災後第１段階は自助努力で各店の再開、次に商店街として復興のスタートラインを設定して、３か月後にはみんなで頑張りましょう」と再スタートの目標を立てたという。

中央通商店街振興組合事務局の坂本智子さんは「まだ泥かきをしている状態でとんでもないという声もあったが、前を向くこと、人が集うことが大切。ちりぢりになっていた人たちの安否確認ができてよかった」と、忙しかった当時を振り返る。

その後２つの商店街の中間にある大通１丁目商店会も復興市に加わり、３商店街の合同で開催されるようになった。大通１丁目商店会会長の中村進さんは「震災前から歳末大売り出しなどは共同でやっていたが、震災後はグループ補助金の関係もあり、連携してやることが増えました。時代の流れでどこも単独でやるのは難しくなっている。意見を出し合いながら協力関係を築いていけたらいいですね」と連携事業に取り組んでいる。

商店街の調査によると末広町商店及び事業所は、震災以前の78店から平成26年８月には77店、大通商店会は増減１で９店、中央通商店街振興組合は53店から37店で、現在８００メートルの通りには１２０余店舗が開業している。

３月はどこの事業所、店舗も、新学期、新入生、新入社員に供えて一番仕入れの多い時期であった。商品を店頭に並べ、さあこれからというかき入れ時に浸水で商品のほとんどが水につかった。仕入れた商品がほぼ全滅したのである。その痛手の大きさは計り知れない。瓦礫を片付けて店の中を整備して、さらに商品を新たに仕入れるのは並大抵のことではない。しかし、佐香英一さんは「お客さんのニーズに応えようと立ち上がりは早かった」と言う。商店が開けば人が集う、商店街は買い物だけではない、町の人たちの情報交換にも大きな役割を果たした。

(1) 事業所の復興

佐々木 秀史さんの話　昭和37（１９６２）年生
宮古商工会議所事業推進課課長
平成26（２０１４）年10月21日、平成27（２０１５）年11月21日、商工会議所で伺う。

事業所の復旧

地震のあと商工会議所の職員は、地震があまりにも大きかったのですぐに車で合同庁舎へ避難しました。その後津波が来て、商工会議所の建物は70～80センチメートルの浸水を受け、電気、通信関係が一切使えなくなりました。

被災した経営者が真っ先に考えるのは、人命は勿論ですが、雇用や資金繰りなんですね。その相談の指導やサポートをすることが商工会議所の業務です。翌日から浸水を免れた２階、３階で会員からの相談に応じました。相談件数は強烈に多かったです。震災前の相談は月に数える程度でしたが、震災後は毎日のように相談があり、平成23年度の相談件数は５０１件にも上っています。

盛岡の政府系金融機関が手厚いサポートで、宿もないという状況の中、毎日来てくれましたし、また、全国の商工会議所のネットワークで応援、指導を組織してもらって、我々の手が足りない所を埋めてもらいました。郵便局や浸水区域外の金融機関の支店は営業していましたが、駅前の岩手銀行や市役所寄りの信用金庫は、一時ストップしていましたから、事業者の方は従業員に支払う給与や相手先に支払う手形の資金調達に苦労されたことと思います。

一方、政府系の金融機関は手続きから着金まで通常より早い処理で、非常にスムースに融資をしていただきました。震災直後は町の経済自体がどうなっていくのかわからない状態で、事業者の年齢的な問題など大変な部分もありましたが、我々としては事業者が少しでも早く仕事を再開できるように全力を挙げて勤めました。

飲食店、中でも飲み屋さんの再開は早かった。集まって話をする場所が求められていたのだと思います。半年くらいは大盛況でしたね。

今は落ち着いたところ、伸び悩むところが出てきているようです。次に動き出したのは、水産関係で4月11日に市場が再開されました。商店街は、全国的な流れと同様に震災前に廃業した店舗もたくさんありましたが、震災で空き店舗が壊れたのを機会に解体したため空地＝駐車場が増えています。

元気になる政策を

平成27（２０１５）年に市から委託を受けてプレミアム商品券の発行事業をやっています。今まで宮古市でも何回か実施していますが、全国の多くの自治体が参加する中では今年が初めの取り組みです。販売期間は6、7、8、9月の4期に分けて、使用期間は6か月以内。最終的に3月末までに使い切るようにして、お金の流動期間が長期に渡る作戦を取っているんです。6月、7月の2期は好評で売り切り、加盟店は３００を超えています。発売後に取扱いを申し出る商店もあり、どんどん追加している状況です。

夏祭りなどの行事は商店街、企業、市役所などで協賛組織を作り、会議所がその事務局を担うため、全体の会長には当所の会頭、実行委員長には青年部の会長が引き受けることになる。12月のクリスマスイルミネーションはいくつかの組織が関わっていますが、宮古市の政策の1つとして、毎年申請、審査、効果の確認をしながら地域を活性化するための事業費を利用して行っています。

これから若い世代が元気になっていくためには政策が重要で、私の個人的な見解ですが、人口減少に歯止めをかけるだけではなく、外からの移住などの受け入れも合わせて考える必要もあると思っています。

(2)　末広町商店街の取り組み

佐香 英一さんの話　昭和27（１９５２）年生

末広町商店街振興組合理事長、㈱カメラショップG&B

平成26（２０１４）年10月24日、リアス亭で伺う。

お客さんのニーズに応えて

3月11日、私は商店街の仕事で仙台に行ってまして、12日に１０６号線を通り2時頃に宮古に戻ったのです。すでに水は引いていて、末広町の商店はシャッターを開けて、店の中を片付け始めていました。まず最初に、お互いの安否と商店街全体の被災状況を確認しました。

海岸から約2キロメートルにある末広町は、2メートルから30センチの浸水を受け、設備や商品が泥まみれになっていました。この商店街が他と違う特徴は、店舗兼住宅が多いので、翌日から片付けなどの活動が始まったことです。早い店では2日目から、被災を免れた商品を販売し始めて、1週間後に8店、1月後には約半数の36店が自助努力で営業再開を果たしました。最初の1週間くらいは、私のところに半数近くのお店が、「もう無理です。営業をやめます」と言ってきたのですが、1店、2店が再開すると隣の店にも被災された人たちが商品を求めてくるので、「私共もがんばりましょう」となり、多くの店が早い再開を果たしたと思っています。

郊外の大型店やコンビニは、津波の被害を受けていなくても、電気が通じないので営業できない。こちらは被災を受けているけど、お客さんが頼ってくれれば無料で配る、多少泥をかぶった物も洗って干して分けるなど、お客さんの希望に応えた。「この商店街に来れば、必要な物を分けてくれる」と口コミで広まって、かなりのお客さんが街にあふれていました。店も外にワゴンを出して、片付けをしながら販売していました。お店の判断で値上げもしませんでした。

地域コミュニティーの拠点

震災後、お客さんが心配して駆けつけてくれました。被災された方や地元の高校生たちも店の片付けを手伝ってくれた。震災前から商店街が地域のコミュニティーの拠点として、交流連携を大きな柱として活動してきたことが、活かされたのではないかと思っています。商店街に地域の交流拠点としての「リアス亭」を設置して、今年（２０１４年）で6年目になる。休憩所、介護所、会合、展示会、イベント会場など誰でも自由に利用できます。震災後も素早くリアス亭の環境を整

えて役員に集まってもらい、ここからいろいろの情報を発信した。商店街だけではなく、市や商工会議所の会合にも解放し、公的支援の説明会などにも利用してもらいました。

商店街と街の復興

3月末に「3か月後にはみんなでがんばりましょう」と商店街として再スタートの目標を立てました。そして、6月11、12日に連携事業の「宮古あきんど復興市」を開催した。商店の再開だけではなく、「街全体に元気を与えましょう」と地域の団体さんなどにお声をかけました。1回目だけでも1万3、4千人の人出がありました。街は買い物するだけではない、「お客さん同士が再会し無事を確認し合う、連絡を取り合う場所」になり、みなさんに喜んでいただいた。それまでの地域の繋がりが活かされ、また、商店街の機能を改めて認識していただいたと思っています。

震災前から毎年春、秋には売り出しや地域の芸能団体のイベントをやっていた。連携事業の商店街と、歳末大売り出しなど合同でやっていた信頼関係もありますが、復興市の共催でより協力体制が強化されたと思います。復興市は県、市、商工会議所が参加してくれたおかげで、だんだんに規模が大きくなった。震災から5年になるのに復興市という名前でいいのだろうか。ここで一応区切りをつけて、名前や実施時期なども考えようと思っています。

連携事業2つ目は新成人を応援する「商店街レッドカーペット」です。商店街路上に敷かれた150メートルのレッドカーペットの上を、新成人、前年に結婚、誕生、還暦を迎えた人、活躍した人、地域に貢献した人が歩いて、沿道の人々から祝福または感謝を受ける、地域を元気にするイベントです。毎年1月の成人式に合わせて行っている。平成24（2012）年1月に開始し、平成27（2015）年までの参加者は200名を数えています。

連携事業3つ目として平成24（2012）年10月に商店街振興組合を中心とする宮古市の事業所が、「いわて宮古街なか商人（あきんど）グループ」を立ち上げて、地域通貨「リアス」を発行しました。支援物資は有難いんですが、被災されていない方にも回ってしまい、商店街が売れなくなった。それでは地域の経済がストップしてしまう。そこで、被災者自身の選択により、必要な時に必要な物を被災地の店から購入するという仕組みを作った。10％が復興支援になっている循環型の支援です。被害を受けた約300商店が参加し、観光協会やJRのツアー、商店街として歳末売り出しの景品、市の生活支援金給付金などに活用していただいています。

その他、街が元気になるイベントを、折に触れていろいろ発信しています。例えば福祉の関係では作業所の製品の販売を任せたり、音楽イベント、郷土芸能、小中のブラスバンド、合唱団などにリアス亭を提供して、商店街は交通規制などで協力しています。

振興組合としての取り組みは震災前と基本的には変わっていませんが、リアス亭があり、振興組合の地域の活動があったから、震災の半年、1年で街に活気が出たのではないかと思っています。

商業だけではない地域内の交流、連携促進、自前の計画、自腹を切る事業、身の丈に合った事業を目指していきたい。商店街は大きなコミュニティ施設、お客さん参加型の商店街にしていきたいと思っています（写真6）。

写真6　復興市

11　まちを明るくする女性たち

宮古の市街地には、ふたつの女性グループ、中央通商店街振興組合並びに「みずき会」と、末広町を中心とした「昭和通りのおかみさん

もてなしたい」が、まちに花を飾るなど女性ならではの視点と行動力でまちの活性化に尽くしている。

中央通商店街振興組合では、昭和56（１９８１）年より商店街の生き残りをかけて、商店街近代化事業計画を実施してきた。カラー舗道、街灯、花みずきの街路樹、花壇を整備し、平成６（１９９４）年には各店舗前にフラワーポットを設置するなど、「買い物客にやさしいまちづくり」を目指した。しかし、３・11の津波で街路樹も花壇もすべて流されてしまった。震災後、休会状態だった「みずき会」を再構築して、女性パワーで「花かおる散策路」の復活や近隣の交流を目的とした活動を再開している。

「昭和通りのおかみさんもてなしたい」は、駅前通商店、末広町商店街、大通商店会のおかみさんが中心となり、おもてなしの心で、宮古に来た人に楽しんでもらうことを目的として、平成15（２００３）年に結成された。設立当初より県や市の助成枠に応募して支援を受け、ＪＲ宮古駅、三陸鉄道、岩手県北バスとも共同で４月と６月のフラワーバスケットや年３回の「昭和思い出探し」などのイベントを開催している。平成27（２０１５）年現在51名の会員（会長佐々木慶子さん）が活動している。

(1)　中央通で活動する「振興組合」と「みずき会」

坂本 智子さんの話

中央通商店街振興組合事務局

平成27（２０１５）年7月26日、組合事務局で伺う。

花壇のある商店街

歩道が広くて花壇が整備できる商店街はここだけなんですよ。それがみんな津波で流されてしまいました。瓦礫は取り除かれたけど、生活、商売、住宅問題で手いっぱいで、花を植えるどころではなかった。ようやく震災1年後に全国からの支援を受けて、ツツジが植えられて、3年経ってなんとか昔のようになってきました。

まちの人々からも「また花壇ができて元気になるわ」と言っていただいた。そこで「もとのように花壇を整理していこう」「じゃあ、誰がやりますか」っていうことになると…。商店街には余力がない。男性は疲れてヘタッとなっている。そこで「元気な女性パワーにお願いね」っていうことになったんです。

新たに近隣の女性たちに声をかけて、休会状態だった「みずき会」を町内会とも、商店街振興組合とも別組織として再構築し、植栽の管理をお願いすることにしたのです。お花が届くとみなさんに声をかけて花壇に植えてもらい、月に何回か草取りをお願いしています。それから、ラベンダーを使って香りのろうそくを作り、11日に灯してもらう活動をやっています。震災後毎月やっていましたが、今は3月11日と8月11日の年に2回です。

本来「みずき会」は隣近所の女性たちが知り合い、仲間意識を持つことにあると聞いています。災害公営住宅がもうすぐ出来上がるので、みずき会と中央通の共同課題として「入居者にも花壇に参加してもらいましょう」という話をしているんですよ。

7月の七夕は振興組合で笹飾りをするのですが、近隣の保育園児に呼びかけをして書いてもらった短冊を飾っています。6月の復興市のお客さんにも書いてもらっています。振興組合でも商店街に来るお客さんや住民との交流を工夫しています。

佐藤 せつ子さんの話　昭和12（１９３７）年生

みずき会会長

平成27（２０１５）年10月5日電話で伺う。

みずき会

みずき会の設立は昭和54（１９７９）年と古いんです。以前はお母さんたちの持ち寄りでフリーマーケットを開いて、ユニセフや神戸の震災のときにも寄付活動をしたんですよ。お母さんたちも知識を得るために、防災訓練もしましたね。

今は折り紙など趣味の会もやっています。現在の会員は20名、60代が多いですね。みなさんお店で忙しいから「無理をしないで出られる

ときにやりましょう」っていう会です。草取りやお花を植える時には1軒ずつ廻ってお知らせしています。

(2) 観光客をもてなす「昭和通りのおかみさんもてなしたい」

松原 安子さんの話 昭和23（1948）年生

昭和通りのおかみさんもてなしたい事務局、三社タクシー㈱代表取締役、平成26（2014）年8月8日、事務所で伺う。

女性が楽しめるまちに

平成9（1997）年に訪れたバングーバーのまちは花で飾られ、イルミネーションが暖かい光を放っていた。「これこそ宮古のまちでもやりたい」と思い、平成10（1998）年に身近なところから花を飾り始めました。平成15（2003）年に岩手県振興局の「花と水の回廊」事業を知り即行動を開始。花のための助成金をいただき、友人とふたりで見様見真似でフラワーバスケットを作って駅前や末広町通りに飾りました。花を美しく保つには水やりの協力が必要ですが、組織もなにもない。それには苦労しましたね。

よく主人に「女性が楽しめない町は魅力がない」と言われていましたので、商店街を歩いて、おかみさん1人ずつに声をかけました。なんとか20人位が集まってくれまして、平成15（2003）年に「昭和通りのおかみさんもてなしたい」を立ち上げることができました。ほとんどのメンバーが昭和生まれであること、この町はハイカラではないことから「昭和」と名付けたのですが、たまたま盛岡の啄木・賢治青春記念館で開催していた「ぼくらの時代展」など昭和ブームとも重なりました。

「昭和思い出探し」として年3回イベントを行っています。3月のひなまつりは末広町のリアス亭に市民有志から提供されたお雛さまを、それぞれのお店や自宅には手作り雛を飾ります。

―毎年古布の手作り雛の講習会を開いている会員の赤坂真喜子さん（昭和42（1967）年生・「糸ぐるま」主宰）によると「昔海側の町では子どもにお雛さまを買う習慣がなかったため伝統的なお雛さまが少なく、10年かけて古いお雛さまを集めた」という。（末広町6・浸水約1㍍の被害、市内に住むメンバー8名の内約半数が被災する）―

7月の七夕は店先に短冊をつけた笹竹や吹き流しを飾っています。11月のクリスマスのイルミネーションは、駅から市役所まで商店街などいくつもの組織が関わるようになりました。イベントではおもてなしの心で参加者にお汁粉やココアを振る舞っています。

震災後の活動

毎年4月と6月にフラワーバスケットをまちに飾っていたのですが、震災後も花は癒しに繋がると思い、すでに決まっていた助成金で、予定通り実施することにしました。そこに長嶋茂雄さんが名誉理事を務める「花と緑の農芸財団」から1万鉢と、釧路市の「造園会社」から千鉢の花が届き、市の援助3千鉢を合わせて1万4千鉢にもなりました。4月16日にボランティア150人の手で宮古駅と商店街などに飾られ、さらに何台もトラックを出して重茂半島や田老地区に配りました。長嶋茂雄さんの色紙「がんばれ宮古」のコピーはあちこちに配り、オリジナルは宮古市市長室に飾ってあります。

自衛隊、警察、ボランティアの方々が町をきれいにしてくれましたし、花を飾ってから雑然としていた駅の周りにも自然に人が集まるようになり、「お花の威力はすごい」と改めて実感しました。でも、まだ列車も走っていない、バスもたまに来るくらいで町には音がない。平成23（2011）年5月に三社タクシーで視察された早稲田大学のボランティアセンターの方から「なにか必要なものはありませんか」って声をかけていただいた。そこで、「音のない世界で生きているので音楽が欲しい」とお願いしたら、クラブやサークルにボランティアの学生さんを募ってくれました。真っ先に手を挙げたのが（早稲田大学）ニューオルリンズジャズクラブの皆さんで、7月の七夕と11月のクリスマスイルミネーションに合わせてまちや三陸鉄道や浄土ヶ浜の遊覧船の中でコンサートをしてくれました。それも交通機関三社の共催で可能になったものです。震災前にやっていたイベントに新たに音が加

わり、まちが華やかになりました。

宮古では平成元年から5年ほど「ジャズin浄土ヶ浜」というジャズコンサートが開催されていましたが、こちらは「ジャズイン宮古」と名前が付きました。それから3月には早稲田大学の混声合唱団による「ひなまつりコンサート」が行われようになり、こちらも「早稲田大学混声合唱団みやこ」とグループ名が付きました。早稲田大学応援歌「都の西北」と私たちの町「宮古」とふたつの「みやこ」の意味が込められています。震災後の平成23（２０１１）年の7月から毎年七夕とクリスマス、その他秋祭りなどでもコンサートで支援をしてくれています。

おかみさんたちはみなさん忙しいので、全員参加の活動は難しいのですが、会員がそれぞれの店に花、お雛さま、七夕、イルミネーションを飾ることで一体感が生まれてくる。誰でも気軽に集うことができる明るいまちになるよう、おかみさんたちが少しでもその支えになることができればと思っています。

12　町内会と自主防災の取り組み

宮古市は各町・地域ごとに町内会または自治会が組織されている。

各地域で共通した町内会の活動としては会費を集め、主に消防分団協力費、連合会会費、防犯協会会費、衛生組合会費、八幡さまの寄付、老人クラブ、子供会などへの援助に充てている。その他赤い羽根、歳末助け合いなど町内会を通して社会福祉協議会に納められている。

行政連絡員、保険推進連絡員、民生委員なども町内会からの推薦申請で人選が行われ、地域住民が市行政の一端を担っている。

町の清掃、ごみの処理、カラス避けのネットなどの要望にも応えている。その他様々な案内チラシを掲示版に貼る、子どもの登校時の交通整理などなど、町内会の仕事は多岐に渡っている。今回の震災時にも瓦礫の処理や側溝の泥さらいなどボランティアの要請は、町内会を通して行われている。

震災後、活動が停止状態になっているところも少なくない。そんな中でほとんどの町内で災害時に町内の住民が協力し合ったこと、震災後は近所の人同士が以前より挨拶を交わすようになったこと、今後も連絡を密に取り合う必要性などを強く感じている。少子化と高齢化で、子ども会や老人会が組織できなくなったという悩みも抱えているが、町内での活動も徐々に動き出している。

震災後は自主防災組織の整備や防災士養成の働きかけも行われ、町内会の役割はさらに増えている。

宮古市役所危機管理課によると、「自主防災は日本の政策の中に古くからあったが、平成7（１９９５）年の阪神淡路大震災後に町内会を単位とした自主防災の組織化と3年間の補助金制度が作られた。そこで旧宮古市では屯所、分団単位に防災資機材を揃え、屯所の附近にある町内会を自主防災組織にした。自主防災組織は消防署に属していたが、平成7年に市役所内に危機管理室を設置して、その2年後に防災業務が危機管理課に移った。

３・11震災後、改めて自主防災を強化するために、自治体が次の2点に4年間（２０１５年まで）補助する制度を作った。

①必要な資機材をそろえる補助金を支給する。

②人材育成＝防災士の養成

防災士養成は町内会、分団、今ある防火組織に呼びかけて、2日間の講習会を行い、その後の試験に合格した応募者に防災士認定証を発行している。費用は復興資金を活用し、全額宮古市が負担している。3年間で237名が取得した。」ということである。

当初の組織化については、連合会会長の赤沼利彦さんによると、「平成7（１９９５）年阪神淡路大震災後、当時の消防所長に「自治会・町内会で防災についての組織ができないか」と質問したところ、第三分団管内で説明会の開催を要望された。そこで、11町内の会長、副会長など役員約40名が参加して、宮古市初の自主防災作りの説明会が行われた。「自主防災組織」という名称はその説明会の2日前に消防署長より知らされた。平成9（１９９７）年に黒田町の第2自治会で自主防災組織を作った。当時見本になる書類がなかったので、チリ地震で

大被害を被った釜石市松原地区の書類を取り寄せて、参考にした」ということである。

末広町町内会の取り組みを一例として紹介する。

末広町の取り組み

(1) 小成 勝郎さんの話

末広町自治会会長

平成27（２０１５）年４月23日、店内で伺う。

町内会の活性化

末広町の通りは４００㍍弱で、店舗数は約70、町内会に登録している世帯数は平成27（２０１６）年11月現在１１７ある（居住していない場合も含むので行政の資料とは一致していない）。町内の形態は店舗と住居、店舗だけ、住居だけという3通りのケースがあり、地域の活動拠点として商店街振興組合と自治会がある。道路を挟んで北側に10班、南側に5班あり、1班には5～13世帯が所属し、各班に班長を置いている。

震災前よりも震災後の方が活発ですね。町内会費は一律で1世帯５００円、年間6千円です。主に総会費、分団の夜警費、八幡さまの奉納金などに使っています。その他赤い羽根（共同）募金、社会福祉協議会費、歳末助け合い募金など協力費があり、民生委員が窓口となっています。民生委員と保険推進委員は自治会の推薦で選出され、任期は2年。班長は、地域をよく知るために1年で交代します。役員は約10名、任期は2年です。長年こんな感じでやってきたので、私も2年代理をやり、会長になって4年が経ちます。

震災の時、連絡が取れなかったり、停電したりと不安材料がありましたんで、自主防災の気運が高まり、組織を強化しました。町内に住む消防署や分団のＯＢの方、経験を踏んでいる方々に相談したら、気持ちよくメンバーに入っていただけて、あとは役員の中から選んで組織を立ち上げました。宮古で2番目か3番目で、早かったみたいです。

商店以外の住民の方々から「末広町は商店街のもの」という声もあった。震災後は商店と商店以外の住宅が一緒になって助け合おうと、徐々に交流を深めています。プライバシーの問題もありますが、アパートや一人住まいの方も把握しつつ、自治会と振興組合と一体となり、町の活性化と安全性の強化に努力をしています。

具体的な取り組み

行政からの防災資機材は第八分団屯所（大通3）の2階にありましたが、震災後は振興組合の協力を得て、コミュニティ施設リアス亭2階にも置き場を確保しています。１００人分の毛布は分団とリアス亭で50枚ずつに分けて管理し、保存食、水、発電機、担架、移動トイレ、照明資機材、スコップ、ロープ、ヘルメット、消火器などを準備しています。町内には「リアス亭にあります」というお触れを出しています。

自主防災講座で、「火事だ！」と言われたら、「消火器を持って現場に駆けつけろ」と教えられました。リアス亭に消火器を取りに行っていたのでは間に合わない。何本かはリアス亭に置いてあるが、さらにすぐに対応できるように各役員にも配りました。

ＡＥＤも調査したら、2か所の銀行に設置してあった。営業時間内の事故ならば問題ないんですが、夜は使えない。保育園にもあるが夜は閉まっている。常に使えるような場所、例えばリアス亭ならば、末広町に住んでいる自治会長と振興組合の理事長が緊急用の鍵を持っているので、夜中でも対応できる。新たな設置を検討することが現在の課題です。

活動の一環として予算でグリーンのベストを作りました。あるところで、火災のときに消防士や警察官が電源などを見つけるのに苦労しているのを見て、地域の人が手伝おうとしたら、「邪魔だから、どけ」と言われたそうです。その話を聞いて、「他の人にもわかるようにしなきゃあ」という話合いをして、このベストを作りました。幸か不幸か、まだ使っていませんけど、関係者だとわかるし、他の人も声をかけやすいと思っています。

防災士養成講座を受けて

市からの防災士養成講座受講の要請があり、若い人に講習に出てくれるように勧めても、忙しくて時間が取れない。そこで私が代表として、平成26（２０１４）年に講習を受けて資格を取りました。宮古市の各地から50～60名の受講者があり、朝の8時から5時まで2日間びっしり講習を受けて、最後に試験がありました。

主な内容は、平時の自主防災の取り組み、地域との連帯など、災害発生時には公的支援が来るまでの初期消火、救出救護、避難誘導などです。救急救命実技講習もあり、ＡＥＤの使い方、怪我人の手当、止血の方法、人工呼吸など一通りのことを学びました。

資格を取った後、地域外で事故に遭遇したんです。息絶え絶えの人に人工呼吸をやっていた女性看護士さんは、見るからに限界にきているようだったので、「資格持っていますけど、代わりますか」って声をかけて協力しました。思わぬところで、講習会の経験を役立てることができました。

自治会では自主防災のためにいろいろな班を作り、それぞれが役割分担をしている。幸いなことにまだ災害がなく目立った活動はありませんが、心の準備をしておくことが大切と組織を強化しています。

(2)　臼木 禮子さんの話

末広町自治会副会長

平成27（２０１５）年4月22日、店内で話を聞かせて頂いた。

炊き出し

炊き出しの訓練があってね、わたしは炊き出しの班長さんなの。

防災用の炊き出しご飯をもらっても、普段にやってみなければいざというときにわからないから、みんなで熱湯を入れて食べてみました。五目ごはんだから、少しぐらいボソボソしていても、まあ食べられましたね。ガスも電気もなくてお湯が沸かせないときもあるから、水を入れて1時間くらいでごはんになるものもあるんですよ。

水害に備えるために近所の川がどのように流れているのか見学もしました。以前から付き合いはあったけど、震災後は「助け合わなきゃあ」と、ご近所が一層団結しました。

まとめにかえて

平成23（２０１３）年3月から平成26（２０１６）年3月にかけて、50余名の方々から貴重な話を聞かせていただいた。話者の皆さまのご理解とご協力に心から感謝する。

忘れたいこと、思い出したくないこともたくさんあったことと思う。仕事の手を止め、忙しい中時間を割いて丁寧にお話しくださった。大変な思いをされたにもかかわらず、どなたも明るく前向きに進んでおられる。震災を機に新たな希望を見出された方もいる。震災の経験からほとんどの方が災害への備えと周りの人々との交流の重要性を口にされたのが印象的であった。体験談の中には今後の復興や防災に対する貴重なヒントがたくさん含まれている。また、身の回りの出来事や復旧の経過などを記録する、写真を保管するなど、ご自分の中で整理されている方が複数おられた。命を守る大切さを初めとして多くのことを学ばせていただいた。この記録が今後の防災の一助になることを願っている。

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第5章　藤原・磯鶏地区

谷部真吾

はじめに　――藤原・磯鶏地区の被災概要――

平成23（２０１１）年3月11日14時46分に発生した東日本大震災と、その後の津波によって藤原・磯鶏地区がこうむった被害について、『東日本大震災　宮古市の記録』第1巻（津波史編）によると、津波は中屋造船所前の水門を破り、また藤原埠頭の防潮堤を乗り越えて藤原地区に流れ込み、国道45号線を越えＪＲ山田線の線路にまで達したという（２０１４年：67頁）。被害は45号線周辺から海側の地域で大きかったが、それだけにとどまらず、藤原小学校の校庭も浸水した。一方、磯鶏地区では、埠頭にある工場や施設はもちろん、国道45号線沿いに大きな被害が出た。津波は、ＪＲ磯鶏駅を越えて磯鶏西や上村までおよび、八木沢川沿いの工場、岩手県立宮古水産高校も浸水した。さらに、当年（平成23年）開催予定であったインターハイで、ヨット競技の会場となるはずであったリアスハーバーも全壊し、加えて近くの貯木場から木材（丸太）が流失した。このような地震・津波によって、藤原地区で6名、磯鶏地区（神林地区を含む）で12名の尊い命が失われた（同：１３３頁）。

1　被災の記憶

(1)　避難の様子

海に面した藤原・磯鶏地区では、上述のような被害をこうむったため、多くの人が避難を経験している。今回の調査で話を聞くことのできた23人の避難行動を振り返ってみると、大きく2つに分けることができる。一つは、地震直後に津波を連想し、すぐに避難したケースであり、もう一つは、地震発生後、しばらくしてから避難を開始したケースである。後者の中には、海の状況を確認してから、もしくは津波を目撃してから避難したという人も含まれる。このうち、すぐに避難を開始した人は全体の26％であり、半数以上の人々がしばらくしてからの避難（52％）、とりわけ海の状態を確認してから避難した人も全体の30％いた（残り22％は不明もしくは避難せず）。ここでは、藤原・磯鶏地区の人々が避難するまでの様子を、彼らの語りを通して見てみたい。

古舘善一さん（昭和6年生）・**篤子さん**（昭和11年生）夫婦の場合

藤原で海産物加工業、古須賀商店を経営する古舘さん夫婦は、3月11日の午後、自宅兼加工場にて従業員とともに明日出荷する商品の準備に追われていた。地震が襲ったのは、そのときである。電柱が倒れるかと思うくらいの揺れだった。その場にいた全員が立っていられず、地べたに座りこんだ。古舘善一さんは、すぐに津波がくると思い、従業員に避難を命じ、自分たちも身支度を整え避難することにした。このとき、古舘さんの脳裏に、奥尻島での津波（平成5年に発生した北海道南西沖地震にともなう津波）の際に車が波にのまれたシーンが思い浮かんだため、従業員に車をおいて逃げるよう指示をした。古舘さんたちが目指した避難所は宮古市立藤原小学校であった。加工場から学校までは、そう遠くないため、地震発生から10分程度で避難所附近に到着したのではないかと語る。だが、すぐには小学校に入らず、しばらくはＪＲ山田線と藤原小学校の間にあるラサ工業所有の広場にいた。一緒に逃げてきた従業員のことが気になり、彼ら全員の帰宅を見届けたいと思ったからである。夫婦が小学校の体育館に入ったのは17時前であった（平成27年4月25日聞き取り）。

中居信夫さん（昭和12年生）の場合

藤原で漁師をしている中居さんは、3月11日の昼過ぎ、自宅にいて地震に見舞われた。その後、防災無線から「3㍍の津波がくる」という放送を聞いた。しばらくすると今度は「6㍍の津波がくる」といい始めた。この放送と同時に家の中の電気が消えた。今回の地震で家は大きく揺れたが、つぶれることはなかった。だが、その後も余震が続き、

茶わんなどが落ちてくるため、「これではダメだ」と思い避難することにした。ガス栓を閉め、電気のブレーカーを落とし、準備していたナップサックを背負った。これは、3月11日以前に小さな地震がいくつか起きていたため、いつか大きな地震がくるのではないかと思い、すぐに逃げられるよう用意していたものである。中には印鑑などを入れておいた。中居さんは一旦家の外に出るも、妻の位牌を取りに戻り、再度家を出た。そのとき、家のそばの防潮堤の上に5～6人の人影が見えた。彼らが突然あわてはじめたので、「何があったの?」と声をかけたところ、「大きなのがきたから逃げなさい!」といわれた。中居さんは、避難する際、隣の老夫婦にも「逃げなさい」と声をかけた。また、避難の最中、近所の人から「大きな地震だったね」と話しかけられたので、「その格好では逃げられないよ」と返したところ、「津波がくるのか」と質問されたという。今回の地震の後に、津波がくることを想定した人ばかりでなかったことを、こうした話からもうかがい知ることができる。

中居さんが目指した避難先は、現在、藤原の仮設住宅が建っている高台であった。途中、山田線の線路のあたりで後ろを振り返ると、森林管理署の宿舎のそばにある大きな水門の上を、波が越えていくのが見えた。さらに山田線の線路を越え、かつてラサ工業への引き込み線があったところ（現在の藤原仮設住宅が建つあたり）まで上り、再度海の方を見ると、津波が観音堂の墓を次々となぎ倒していた。しばらくそこで津波の様子を眺めていると、足元にある山田線のトンネルから妙な音が聞こえてきた。音はだんだん大きくなり、やがて黒い水が流れてきた。磯鶏方面を襲った津波が、トンネル伝いに藤原に流れ込んできたのであった（写真1）。中居さんに限らず、磯鶏方面を襲った津波が、その後、藤原にも流れ込んできたという話は他の複数の話者からも聞いた。津波は山田線のトンネルのみならず、国道45号線を流れてきたともいう。藤原は、確かに磯鶏より低いところに集落が広がっているため、水が流れてきたのであろう。

写真1　山田線トンネル

避難場所で水が引くのを待っていたとき、中居さんはある人に「比古神社に行った方がいい」といわれた。しかし、比古神社の建つ場所はかつての石切り場であり、神社自体は岩盤の上に立っているが社務所は盛り土された土地の上に建てられているため、大勢で行くと崩れる危険性があると思い、比古神社に行かなかった。やがて、水が引いてから自宅を見に行くと、家は流されてしまって何もなかった。そのため、河南に住む兄の下で避難生活を送ることにした（平成27年9月12日聞き取り）。

近江勇さん（昭和33年生）の場合

近江さんは、「ホテル近江屋」の代表取締役社長である。3月11日の午後、ホテルで国会中継を見ながら、客と宴会の打ち合わせをしていた。そのときテレビで地震警報が流れた。「地震ですね」と客と話した直後に、大きな揺れを感じた。ただごとではなかったため客と逃げようとしたが、ホテルの出入り口も大きく揺れ、歩くのも大変だった。この地震により、ほとんどの客が帰った。唯一の滞在予定客にも避難を勧め、一緒に外に出た。従業員は、このとき当日の宴会の準備をしていたが、外に避難させた。従業員の避難には予想以上に時間がかかり、全員が避難するまでに20～30分近くかかってしまった。

その間、防災無線では津波警報を報じていた。津波の高さは最初3メートルといっていたが、徐々に高くなり、6メートル、10メートルとなった。津波の高さが10メートルと聞いたとき、にわかには信じられなかった。そこで、ホテルの外階段を上って海を見てみると、沖防波堤のあたりの水の量が明らかに増えていたのが確認できた。「これはまずい」と思い、避難する

ことにした。従業員は自分の車もしくはホテルのワゴン車に乗って避難し、近江さんも自分の車に乗り、宮古市立磯鶏小学校に避難した。小学校手前の陸橋に車を止めて、海を見ようと振り返ると、波が足元近くまできていた。避難している最中、波に追われた覚えはないが、間一髪であった。ホテル近江屋の、今回の地震・津波による人的被害は、従業員・客ともにゼロであった（平成27年3月13日聞き取り）。

以上、3人の避難の様子について見てきた。津波がくることを想定し、すぐに避難を開始した古舘さん夫妻と、津波を想定したかどうかは定かでないが、比較的早くに避難した中居さんは、余裕をもって逃げることができた。それに対して、近江さんは海の状態を確認してからの避難であったために、危なかったといえる。『東日本大震災　宮古市の記録』第1巻（津波史編）によると、宮古市を襲った津波の第1波は15時1分に到達し、15時26分には8・5メートル以上の波の高さを記録している（但し、検潮所が流失したため不正確な記録の可能性がある）（2014年：59頁）。このようなデータからしても、近江さんの避難は、まさしく「間一髪」であった。

(2) 特筆すべき避難の語り

そうした点を敷衍すれば、避難とは生死を分ける行動であるといえる。そのため、この種の話を記録にとどめることは、後日のためになるであろう。ここでは、さらに5人の避難にまつわるエピソードを記しておく。

佐々木トシさん（昭和12年生）の場合

地震発生時、佐々木さんは、石崎の自宅にてミシンを使った仕事をしていた。大きな揺れであったため「これはダメだ」と思い、仕事の関係で広げていた布などを押し入れにしまっていたところ、2回目の地震（余震）がきた。佐々木さんは、ますます「これはダメだ」という思いを強くし、避難に向けて食糧をリュックに詰めようと冷蔵庫を開けた。すると冷蔵庫の電気がつかなかった。この時点で、すでに停電していたようである。佐々木さんは、冷蔵庫の中にあったものをリュックに詰めて、そのまま避難した。途中、ある家の奥さんが「どうなるんでしょうかね?」といいながら家から出てきたので、佐々木さんは「逃げれんすべす!」と走りながら答えた。そうこうしているうちに、すぐそこまで波が迫ってきた。波に追いかけられるように逃げたという。

JR山田線にかかる陸橋のところで、ここまでくれば大丈夫だろうと思い、一休みした。その場所で、津波が多くの車や材木を飲み込みながら線路を越えていくのを見ていた。30分くらい休んでいただろうか。そのとき、先程声をかけてきた奥さんが波にのまれてしまい、ガードレールと海から流れてきたタイヤとの間にはさまれて止まった。近くで、その光景を見ていた数人の男性が駆け寄って、奥さんを助け出した。男性たちは、どこからもってきたのか、板状のものの上に奥さんを寝かせ、トンネルそばの家に運び込んだ。幸いなことに、たまたま運び込んだその家に看護師が3～4人いたため、手当てしてもらえた。

その後、佐々木さんは磯鶏小学校を目指して、避難を再開した。しかし、山本商店のあたりは、水がたまっていて通れなかった。そのため、山すそを歩いて磯鶏小学校まで向かった。当然、そこに道などなく、民家と山との間を歩いて行った。ここを歩いた人は佐々木さんの他にも数人いた。小学校にたどり着いたのは、日も暮れた17時ごろだった。

今回の東日本大震災の被害状況を知るにおよんで、災害発生時にどこに避難すべきか、改めて考えた人もいることであろう。その際、避難経路として、避難所までの最短ルートを想定している場合が多いのではないだろうか。しかし、そこが通れなくなってしまうこともあることを、佐々木さんの語りは示している。自らの体力・状況なども勘案して、避難経路は何本か考えておく必要があるといえる（平成27年9月11日聞き取り）。

澤口功さん（昭和25年生）の場合

ビデオショップ澤口を経営し、ＩＡＴ（岩手朝日テレビ）の宮古支局員でもある澤口さんは、地震の際、末広町にあった店舗にいた。地震直後、ＩＡＴから電話があり、報道用の映像を撮影することになった。澤口さんは急いで市役所に向かった。15時ごろ、市役所の階段から宮古大橋方面を見ると、海に変化はなく国道も渋滞していなかった。但し、信号機はついていなかった。その後、澤口さんは車で自宅に向かった。自宅近くまでくると、水門から波が入ってきているのが見えたので、その様子を撮影した。自宅には寝たきりの母親と看病の姉がいたため、避難を促そうと家の方に体を向けたところ、自宅の後ろに30㍍ほどの高さの真っ黒な波が上がった。波は、次の瞬間、澤口さんの自宅の屋根の上に落ちた。その直後、自身も波にのまれた。強い衝撃を受け、体が反り返った。津波は、そのまま澤口さんの体を押し流したが、国道45号線の手前にある電柱にぶつかり、波からはじき出された。これによって、一命を取り留めたのではないかと澤口さんはいう。但し、このとき腰に強烈な痛みを感じた。後日わかったことであるが、脊髄の神経が切れかかっていた。腰の痛みに耐えながら、澤口さんは上村にある妻の実家に向かい、妻と再開した。妻の実家は、幸いにも津波の被害を免れたため、しばらくそこで暮らすことにした。一方、自宅で津波の直撃を受けた母親と姉は、後日、遺体で発見された。

上述したように、公式記録によると、宮古市を襲った津波は15時26分に8・5㍍以上の波の高さを記録していた（宮古市東日本大震災記録編集委員会（編）２０１４年：59頁）。但し、局所的には、これ以上の高さの波が押し寄せていたことが澤口さんの語りからわかる。また、自然災害は、個々の家庭の事情を考慮することはない。当たり前のことであるが、この厳しい現実を十分理解しておく必要があるように思われる（平成27年４月27日聞き取り）。

小野寺俊雄さん（昭和20年生）の場合

藤原で化粧品店を経営する小野寺さんは、消防団第四分団の団員でもある。地震があったとき、小野寺さんは自宅兼店舗にいた。この地震は異常であり、特別に大きいと思った。これまで経験した地震とはまったく違っていたので、すぐさま文献で読んで知っていた貞観地震（８６９年）のことが頭に浮かんだ。このため、従業員に店を閉めて家に帰るよう指示し、また家族にも避難するようにいった。その後、小野寺さんは、断水を警戒してやかん２つに水を入れ、消防団の屯所の２階にあげてから、水門を閉めにいった。地震が発生してから、すべての水門を閉め終わるまでに要した時間は、12～13分くらいだった。

水門を閉め終えて屯所近くに戻ってくるも、津波のくる気配はまったくなかった。ラジオをもっていなかったこともあり、ポンプ車のそばにいればカーラジオを通じて現在の状況を知ることができたが、そこを離れてしまうとまったくわからなくなる。防災無線は、津波がくることを繰り返し伝えていたが、いつくるのか、現状がどうなっているのかを知ることはできなかった。そこで携帯ラジオを取りに一旦自宅に戻った。新しい電池に入れ替えて、再び屯所に向かって歩き出したところで津波に襲われた。あわてて屯所の２階に駆け上がり、そこから消防ホースを乾かすための乾燥塔の上まで登った（写真２）。ふと、目の前の歩道橋に目をやると、３人くらいの高校生がいた。彼らも、国道を歩いているときに津波に襲われ、あわてて歩道橋に上ったのであろう。水が引くまで、彼らもそこで耐えざるを得なかった。もちろん小野寺さんも、水が引くまで乾燥塔の上にいた。津波で流されてきた車が当たると大きく揺れたが、不思議と怖さは感じなかった。

写真２　第四分団屯所

小野寺さんは、尋常ではない揺れであったために貞観地震を想起し、従業員と家族を避難させたものの、自身はあやうく津波に襲われかけた。そのとき、小

野寺さんが急いで向かった先も、乾燥塔という少々心許ない避難先であった。いつかくる、そのときのために備えをしておき、いざというときにはすぐに避難する。この原則に忠実な行動こそ、もっとも重要なことであり、まだ大丈夫かもしれないという思いは避難すべきタイミングを逃すことになる。そのことを、小野寺さんの話は示唆しているように思われる（平成27年3月14日聞き取り）。

澤口則夫さん（昭和46年生）の場合

消防団第十分団員でもある澤口さんは、磯鶏で遊漁船業を営んでいる。平成23年3月11日は、めずらしく客のいない日であった。そのため、所有していた4艘の船のうち2艘を陸にあげてから、遅い昼食をとりに近所のラーメン屋に入った。大きな揺れを感じたのはそのときだった。澤口さんはすぐさま水門を閉めに向かった。2つの水門を閉めたが、まだ分団員がそろわなかったため、もう1つ閉めに向かった。そうしているうちに、4人の分団員が集まってきた。そのうちの1人から、「ラジオで釜石に9メートルの津波が到達したといっていた」と聞いた。9メートルの津波だと防潮堤を越える恐れがある。そう判断した澤口さんは、「逃げろ！」と叫びながら防潮堤のそばを走り回った。地震後に海を見にやってくる人がいたからである。

その後、澤口さんは、自身の所有する「第一ゆたか丸」に乗って海上に避難した（写真3）。この船は、エンジンを船外に取り付けるタイプであったため、水深50センチメートルでもスクリューを回すことができた。澤口さんが船に乗り込んだときの水深は60～70センチメートル程度であったという。ちなみに、筆者が平成27（2015）年4月28日の午後に、澤口さんが避難のために船に乗った港の水深を確認したところ、目算で2メートルくらいであった。当時、いかに潮が引いていたのか、理解できよう。港から船を出してすぐのところで、1つ目の津波に遭遇した。波が高く盛り上がっており、その波に全速力で上って行った。船の出力がないと、津波を乗り越えるのも容易ではないという。実際、津波を乗り越えることができず、前に進むのに苦労していた船があったようである。藤原埠頭のあたりで、2つ目の津波に遭遇した。宮古湾の水深は、重茂半島側が深く、宮古側で浅くなっている。そうしたこともあり、津波の速度も重茂半島側で速く、宮古側で遅かった。3つ目の津波を乗り越えたとき、津軽石方面を振り返ると、いつもと違う眺めであった。やはり、波の高さはかなりのものであったのであろう。いくつかの津波を乗り越えながら宮古湾を航行している際に、津波が重茂半島の海岸沿いに建てられた家を押しつぶすのを見た。また、蛸の浜を津波が乗り越えていくのも目の当たりにした。宮古湾を出ると、ある程度、沖へ向かった。海上は暗く、雪が降っていた。雪が止んでから田老方面を見ると、妙に明るかった。山火事である。夜になると（20時ごろか？）がれきが流れてきたので、さらに沖へ向かった。海は重油のにおいがひどく、また丸々一軒の家が流されてきた。その夜、家族とはメールで連絡がとれた。

12日の朝、宮古湾に入れるか見に行ってみたが、がれきで入れなかった。大量のがれきが広がる光景を見て、復興は難しいのではないかと思ったという。この日も海が動いていて、津波のような状態であった。正午ごろ、自衛隊の護衛艦が宮古沖にやってきた。漁業無線で食事がもらえると聞いたので護衛艦に向かい、おにぎり2個と缶詰をもらった。13日の朝になって、ようやく藤原埠頭に船を入れることができた。船を下りて、磯鶏の自宅まで歩いた。家の近くまでくると、屋根が見えたので家は無事だと思ったが、1階部分に大きな穴が開いていた。丸太が30本くらい刺さっていた。

澤口さんによると、漁師は津波がきたら船に乗って沖に避難するのが当たり前であるという。しか

写真3　第一ゆたか丸

し、そうした行動は、一般の人々にはほとんど知られていないのではないだろうか。その意味で、澤口さんの語りは、きわめて貴重であるといえる（平成27年4月28日聞き取り）。

長崎からやってきた高校生の場合

先に、自然災害は個々の家庭の事情を考慮することはないと指摘したが、それは個人に関しても同じである。ホテル近江屋社長の近江勇さんから、次のような話を聞いた。

平成23年3月11日14時30分過ぎ、ホテル近江屋前のバス停で、1人の男子高校生がバスから降りた。彼は、翌日に迫った国立宮古海上技術短期大学校の受験に備えて、長崎からやってきたのである。その日の夜は、ホテル近江屋に宿泊することになっていた。彼がバスを降りてホテルに入ろうとしたとき、地震が発生した。ホテル近江屋の避難状況についてはすでに記したが、彼もホテルのワゴン車に乗せられて、磯鶏小学校に避難した。今回の津波によって、JR山田線をはじめとする公共交通がストップしたため、長崎の実家に帰る手段を失った男子高校生は、そのまま避難生活を余儀なくされ、1週間ほど近江さんとともに車の中で寝起きした。やがて、近江さんは、磯鶏小学校に取材にきていた新聞記者の中に本来は佐賀支局の人がおり、その人が明日佐賀に帰るという情報を聞きつけた。そこで、その記者に事情を話し、高校生を一緒に九州まで連れて行ってくれないかと頼んでみたところ、了解を得ることができた。これによって、彼はようやく帰宅することができた。しばらくして、彼からカップラーメンが2箱ほど送られてきた。

この話は2つのことを示唆している。1つは、私たちも旅行先で被災する可能性があること、もう1つは、観光地の諸機関においては、旅行者の避難をどうするのか、十分検討する必要があることである。特に、後者に関して、例えば万一に備えてガイドブックに避難先や避難経路を掲載しておくというのは、やり過ぎであろうか（平成27年3月13日聞き取り）。

2　被災後の暮らし

以上、地震発生から避難までの様子を、人々の語りを中心に見てきた。藤原・磯鶏地区は海に面した集落なので、津波から逃れるため自宅を離れて避難する人も多かった。彼らの中には、水が引いた後、自宅に戻ったり親類や知人の家に向かったりする人もいた。他方、避難所でその夜を明かす人も多くいた。そこで次に、避難してからの人々の生活、とりわけ比古神社、藤原小学校、磯鶏小学校での避難生活について、同じく住民の語りを通して見てみたい。

(1)　藤原比古神社にて

飛澤寿男さん（昭和22年生）は、地震発生時、母親と娘、娘の2人の子どもたちと一緒に自宅にいた。大きな地震であったため津波がくるだろうと思い、すぐに避難することにした。10分くらいで身支度を整え、家の外に出たところで、妻が仕事から帰ってきた。そこで、妻も含めて比古神社に避難した。比古神社では社務所が開けられていた。しかし、避難者全員を収容することはできず、社務所に入れなかった人たちは境内でたき火をして暖をとった（写真4）。この日は雪が降っていたため、とても寒かった。社務所の中も隙間風が入り込み寒かった。しかも余震が続いており、眠れるような状態ではなかった。社務所では、多くの人が座ったまま夜を明かした。この日、比古神社で夜を明かした人は、境内を含めると200人くらいいたのではないかと飛澤さんはいう。とにかく人でいっぱいであった。比古神社で過ごした3月11日の夜、食べ物を分けあって食べた記憶がある。誰かがもってきたのか、差し入れがあったのかもしれない。あるいは、比古神社のことは消防団の人がいろいろとやっていたので、その人が手配したのかもしれない。水は、比古神社の境内に沢水があるので、それを使った。こうして比古神社で1晩過ごし、翌日から藤原小学校へ移っていった。飛澤さんは藤原2丁目の自治会長をしていたこともあり、避難所の世話をしなければならないと考えていた。上述の通り、比古神社に関しては消防団の人が世話をしていたので、ここは彼に任せ、自身は藤原小学

校へと向かった（平成27年4月29日聞き取り）。

比古神社の世話をしていたのは、第四分団の副団長で、藤原2丁目で精肉店を営んでいた**松崎義男さん**（昭和20年生）である。松崎さんの自宅は、国道45号線に面していたこともあり、水に浸かった。しかし、2階は無事であったため、そこで寝起きすることもできた。それでも松崎さんは、これまで消防団員として活動してきたことから、地域の惨状を放っておけず、2～3日は比古神社に泊まり、その後は自宅から通いながら避難者の世話をした。

松崎さんも、津波発生時、比古神社に避難していた。その後、この日の夜の食事を何とかしなければと思い、自宅にあった商品―肉類だけでなく、ラーメンやペットボトルなどもあった―を提供した。この他、足りないものは家からもっていき、ローソクや灯油なども手配した。また、夜になると冷え込んできたため、若い人たちに神社の裏山から木を拾ってきてもらい、それを燃やして暖をとった。こうして、何とか2～3日しのいだ。3日目ごろから、支援物資が届き始めた。最初にきたのは赤十字からの毛布であった。このような支援物資の管理も松崎さんが行った。その際、松崎さんが心掛けたことは、支援を必要としている人にできる限り平等に物資を配分することであった。それは物資を、比古神社に避難している人だけでなく、自宅で暮らしている人にも必要であれば分配することを意味している。「自宅で暮らす人も、被災者である」というのが、松崎さんの基本的な考えであった。このため、支援物資が届くと、町内の人たちにもアナウンスをして回った。また、このころになると、避難者の安否確認や医療チームからの支援の申し入れなどもあり、そうしたことも松崎さんが窓口となって対応した。松崎さんは3日目以降、自宅で寝泊まりするようになり、朝になると神社に向かった。神社に着くとコーヒーを沸かした。このコーヒーを避難している人や神社にやってきた人と一緒に飲みながら、情報交換をした（平成27年3月14日聞き取り）。

写真4　比古神社社務所

その後、比古神社の避難所は、平成23（2011）年3月いっぱいで閉められ、4月1日からは藤原小学校に統合された。

(2) 藤原小学校にて

古舘善一さん・篤子さん夫婦（前出）は、地震発生直後に藤原小学校に避難し、17時前ごろ体育館の中に入った。床には何も敷かれておらず、直に座らざるを得なかった。この日は食べ物も水もなかった。夜遅くになって、第四分団が毛布をもってきてくれた。毛布は2人で1枚の割合で配られた。ストーブは1台しかなかったようで、とにかく寒かった。電気はつかなかったが、藤原上町の人々がローソクをもってきてくれた。この夜は、余震のたびに体育館が大きく揺れ、怖かった。「バスケットのゴールが落ちなければいいが」という思いで見つめていた。古舘さん夫婦は藤原小学校に1晩泊まっただけで、翌日からは和見にある息子夫婦の家で避難生活を送るようになった（平成27年4月25日聞き取り）。

古舘さんと入れ替わるようにして藤原小学校にやってきたのが、**飛澤寿男さん**（前出）である。飛澤さんが3月12日に藤原小学校に入ったときには、床に体育で使うマットが敷いてあったが、それでも寒かった。また、藤原上町の自治会長が炊き出しをしてくれたりしていた。体育館で2～3日過ごしたが、あまりにも寒いので、誰かがいい出して視聴覚室に移らせてもらった。この部屋は絨毯が敷いてあっただけでなく、適度な広さであったため、ストーブをたくとすぐに暖まった。

3月の段階では、藤原小学校の避難所の世話をする人がいなかったため、当時、自治会長を務めていた飛澤さんがその役を買って出た。飛澤さんによると、避難所生活でとにかく困ったのは風呂であった。そこで、「湯ったり館」に交渉して入浴させてもらった。飛澤さんが、藤原小学校の避難所で世話役を担っていたのは、4月上旬ごろまでであった。4月1日以降は、市役所から職員がきて、各避難所の管理を担当するようになった。4月以降、飛澤さんも避難所の世話係を市の職員に任せ、自身はこれまで手をつけることができなかった自宅の片付けに専念することにした（平成27年4月29日聞き取り）。

なお、参考までに、こうした藤原小学校での1日のタイムスケジュールを書きとどめておく。

6時00分　起床
6時30分　朝食
12時00分　昼食
18時00分　夕食
21時00分　消灯・就寝

以上のようにして運営されていた藤原小学校の避難所も、平成23年7月31日の17時をもって閉鎖された。

(3)　磯鶏小学校にて

地震発生直後、石崎から避難してきた**佐々木トシさん**（前出）は、17時ごろに磯鶏小学校に着き、すぐに体育館に入った。床には茣蓙が敷かれており、ストーブが3台くらい置かれていた。体育館に入ると、毛布が1人1枚与えられた。この毛布の枚数は、時間帯によって異なっていたようである。石崎に住む**藤澤キヨさん**（昭和23年生）は、磯鶏を散歩中に地震にあった。そこで一旦自宅に戻り、薬だけもって磯鶏小学校に避難した。すぐに帰れるものと思い体育館に入らずにいたが、やがて日も暮れてきたので中に入った。体育館に入った時間は、佐々木さんよりも遅かったようである。館内はすでに人でいっぱいであった。何とか空いているところを見つけ、夫と2人で座った。このとき配られた毛布は、2人で1枚であった。翌朝、避難所を出ていく人から1枚もらい、1人1枚使えるようになった。佐々木さんと藤澤さんによると、3月11日の夜は人であふれており、横になれず座ったまま過ごした。この日、磯鶏小学校に避難した人の中には、校庭に止めた車の中で過ごした人もいた。そうした人たちのために、磯鶏小学校の先生が教室を解放した。この人たちを含めると、初日の避難者は500名くらいではないかと、佐々木さんと藤澤さんはいう。2人は避難所で最初に座ったところから動くことはなく、退所するまでそこで過ごした。

地震のあった日の晩は、食パンが1枚出された。翌日の朝はパンの耳であった。次の日は、八木沢の婦人会からおにぎりの差し入れがあった。そのうち、新里からも差し入れが届いたりしたが、何もないこともあり、そのときは残ったご飯を集めてお粥にして一口ずつもらったこともあった。農家の人がもち寄った食材を給食室で調理し、それをもらったこともあった。支援物資が届き始めたのは、いつのことかわからないが、**前川秀子さん**（昭和25年生）が磯鶏小学校に避難してきた3日目には、食べるものには困らない状態であった。飲み水は学校の給水タンクにたまっていたものを使用した。トイレの水は、学校の裏に沢水をためる池があり、その池からバケツリレーでくみ出して使った。このため、磯鶏小学校では水にも困らなかった。さらに、他の避難所では、トイレが詰まって大変だったという話をしばしば耳にしたが、ここでも確かに何度か詰まったもののすぐに解消され、たいして問題にならなかった。風呂には、何日目かに連れて行ってもらった。「湯ったり館」や箱石の方に行ったこともある。また、磯鶏小学校では古い風呂をプールのそばに設置して、入れるようになっていた。この風呂は、磯鶏小学校の校長先生が、八木沢の建設業者に声をかけて作ってもらったものである。「磯鶏の湯」と呼ばれ、毎週月曜日と木曜日は男性の入浴日、火曜日と金曜日は女性の入浴日とされた。入浴時間は

17時から21時で、原則2人で入浴することとなっていた。入浴の際には予約が必要であった。風呂掃除は、体育館の掃除当番が担当した。磯鶏の湯は、避難所生活を送る人々に好評だったようである。

磯鶏小学校の避難所における1日のタイムスケジュールは、以下のようになっていた。

6時00分前　朝の掃除、ストーブ給油
7時30分　朝食
12時00分　昼食
17時30分ごろ　夕食
21時00分　就寝

このうち、毎朝行われていた掃除は近くに座った人たちで班を作り、順番で行った。また、ストーブへの給油は男性の仕事であった（平成27年9月11日聞き取り）。

磯鶏小学校の避難所は、当初からしっかりと運営されていたといわれている。その運営に中心的な役割を果たした人物は3人いた。それは、当時の磯鶏小学校の校長先生と市役所に勤務していた男性、そして磯鶏小学校で避難生活を送る人たちの手伝いをしようと駆けつけた**北村嘉勝さん**（昭和22年生）であった。北村さんは、宮古市教育委員会で相談支援員をしている。ここでは、彼の語りを通して、磯鶏小学校避難所の様子を明らかにしたい。

北村さんの自宅は上村にある。地震の被害はそれほどでもなかったが、津波は玄関先まできていた。このため、家にいた父親の手をひいて、家よりも高いところにある上村公園に避難した。このとき長靴を履いて水の中を歩いて行った。上村公園に着くと、町内会長がテントを張り薪を燃やして暖をとるというので手伝った。50人、あるいはもう少し多くの人が避難していたようである。その日は薪でご飯を炊いた。夜になると、父親が寒がるので自宅へ帰ることにした。余震も続いていたが、あれほど大きな揺れはもうないだろうと判断してのことであった。翌日は家の前のがれきの片付けをし、翌々日は妻の実家が鍬ヶ崎であったため、避難所を回って義理の母を探した。

北村さんが磯鶏小学校で被災者の支援を開始するのは、3月14日からであった。磯鶏小学校に行くと、避難所の切り盛りは校長先生がしていた。また、市役所勤務の男性もおり、この人が学校側と被災者とのパイプ役となっていた。北村さんは、これ以降、この男性とともに活動することになる。磯鶏小学校に避難した人々は、8つくらいの班に分けられていた。班ごとに長が決められ、校長先生が班長会議を招集した。そこでは学校側の要望などが話し合われた。当時、磯鶏小学校は避難してきた人々の生活の場となっていたが、学校としての役割をやめたわけではなかった。そのため、どこまでを避難所として使い、どこからは通常の学校として児童・職員が使うのかといったことが話し合われた。また、班長会議では、調理や掃除を当番制にすることも決められた。こうした制度や、上述した1日のタイムスケジュール、トイレ用の水のバケツリレーなども、震災から1週間もたたないうちに決まっていった。さらに、磯鶏小学校では、病院・金融機関などに関する情報や、各種申請手続きの仕方などが書かれた紙が張り出された。これは、市職員の男性が作ったものであった。

磯鶏小学校に避難してきた人は、最初に名前と居住地を書いてもらうことになっていた。その情報は、体育館の舞台の上に張り出された。この名簿を、後に北村さんが表計算ソフトに打ち込んだ。その際、転出する人の情報を備考欄に打ち込むようにした。こうすることで、外部から問い合わせがあった際に、すぐわかるようにしておいた。打ち込んだ人の数は581名におよんだ。北村さんはまた、届いた支援物資の整理・管理も担当した。よく使うものは前に置き、すぐに必要でないものは保管庫に入れ、要望があれば出した。支援物資の分け方については、前の晩からアナウンスをしておき、一斉に広げるようにした。このとき、「我先に」と取り合いにならないように注意した。なお、支援物資を分ける際には、避難所で暮らす人だけでなく自宅で暮らす人にもアナウンスをし、避難所に取りにきた人には渡すようにした。また、

支援にやってくる医療チームに関して、ときには注文をつけることもあった。彼らの来所は波状的であり、中には20時ごろに避難所を訪れるところもあった。こうしたチームには、避難している人を中心に考えてほしいと申し入れた。なお、各医療チームは、相互に情報の連携をはかっていなかったようである。そのため、避難者1人1人のカルテを作り、診察後に記入してもらうことにした。以上のような手伝いをする中で、北村さんは、避難している人との間で苦労したことはあまりなかったと話す。暮らしている人々の相性は見ていればわかるので、配慮したという。

北村さんはこうした活動を、磯鶏小学校に市の職員が配置され、複数いる担当職員が同校での業務を1回は経験するまでの間（具体的には4月11日まで）、ほぼ毎日続けたという。その間、自宅から通い続け、朝7時30分ごろに体育館にやってきて、消灯時間となる21時ごろ帰宅した。北村さんによると、避難所生活を円滑にするために重要なことは、「そこにいる人たちを中心に考えること」であるという。また、人々の善意の申し出を拒否せず、サービスとニーズを結びつけるようにすることも大切であると述べていた。それが、人々の自発的な活動を引き出すことにつながるからであろう。このようなコーディネートは、地域の人がやった方がいいかもしれないとも話していた。きわめて示唆に富む指摘である。こうしたことは、地域の実情を知っているからこそできる支援なのかもしれない（平成27年9月13日聞き取り）。

(4) 自宅に戻った人々

3月11日の震災後、水が引いてから比較的早い時期に、ほとんどの人が一度自宅の状況を確認しに行っている。藤原・磯鶏地区の場合、1階は水に浸かったものの、2階以上は無事であった家屋が多くある。その場合、ライフラインが復活していない不便な状態であるにもかかわらず、避難所での生活を早々に切り上げ、自宅で暮らすことを選択した人々もいた。

伊藤鐵男さん（昭和18年生）の家も、2階は辛くも被害を免れた。そのため、震災5日目に、避難先であった岩手県立宮古商業高校から自宅に戻った。このとき電気・ガス・水道はすべて止まっていた。それでも自宅に戻ったのは、避難所生活の気疲れと、商業高校のトイレが使えなかったことにあった。伊藤さんの自宅はがれきと泥で汚れていたが、トイレと風呂はあまり汚れていなかった。しかも、風呂には水が張ってあったため、この水を使ってトイレを流せば問題なく使用できる状態であった。しかし、自宅で生活するとなると、水と食料を確保する必要がある。水は、現在、宮古市立高浜小学校の近くの高台移転用地となっているあたりで沢水をくんだ。食料は親戚がもってきてくれた。伊藤さんは、親戚が多いことはありがたいと強調していた。調理には、知人からもらった薪ストーブを利用した。薪にはがれきを使った。伊藤さんは、このような生活を続けながら、家の片付けを始めた。がれきや泥を取り除き、必要なところは自分で修理をした。自分の住まいなので、自分たちさえ我慢できればそれでいいと思い、掃除から修繕まですべて自分でやった。そうした技術ならびに覚悟があったからこそ、早期帰宅が実現したのであろう（平成27年3月12日聞き取り）。

3 「日常」へ向けて

藤原・磯鶏地区に大きな被害をもたらした今回の東日本大震災。ここで紹介した人々も、それぞれ大変な思いをしていたことが見て取れよう。しかし、いつまでも被災者のままでいるわけにもいかない。しばらくすると、住民たちは「以前の暮らし」を少しでも取り戻そうと立ち上がり始めた。ここではそうした7名の話を書きとめておく。

石川浩さん（昭和20年生）の場合

石崎で飲食店を営む石川さんは、店舗が防潮堤のすぐそばにあり、店の1階部分に大きな被害を受けた。その状況を目の当たりにして、一時、商売をやめようと思ったこともあったという。それでも石川さんは、震災から1か月半ほどたった4月の終わりごろから弁当作りを

始めた。店の外階段の下にある水道だけ、奇跡的に水が出た。この水道にホースをつないで厨房に引き込み、調理をした。このときはまだ電気がきていなかったため、冷蔵庫が使えなかった。食材の保存ができず、仕入れはその日のうちに使いきれる分だけであった。作った弁当は、最初、グリーンピア田老の仮設住宅の建設現場に10個ほどもっていった。ここにはもともと別の業者が弁当を納めていたが、その弁当はおそらく前日に作ったものであった。一方、石川さんの弁当は、冷蔵庫が使えなかった関係で、その日に作ったものである。それがよかったのか、そのうちいろいろな人から声がかかり、４００~５００個の注文が入るようになった。やがて、どこから聞きつけたのか、おそらく郡山の会社だと思われるが、仮設住宅を建てる企業の関係者から電話があり、弁当を納入するようになった。それによって、このあたりのほとんどの仮設住宅の建設現場に弁当を運ぶこととなり、さらには釜石にまで運ぶようになった。また、パークホテルに避難していた人たちが仮設住宅に移った後、そこに全国から応援に駆けつけた警察官が入った。この人たちにも弁当を配ってくれといわれ、朝・昼・晩とパークホテルに、さらには彼らの勤務先となった宮古警察署、釜石警察署にも配達に行った。こうして頻繁に釜石まで行くようになったことで、同地で仮設住宅を建設していた大手の建設会社からも注文が入った。しかも、この会社からは、弁当に飲み物をつけてほしいといわれた。そうなると店の車に詰め切れないので、レンタカーを借りて納入した。結局、弁当の配達先は、釜石をはじめ大槌、山田、鵜住居などにもおよんだ。

こうした弁当作りを本格的に行うようになったのは、６月の初めごろだった。電気がきて、冷蔵庫が使えるようになってからのことである。それから仮設住宅の建設が終了するまでの約１年間は、弁当作りをしていた。また、平成23年５月の初めごろにホテル近江屋社長の近江勇さんがきて、補助金が出るので一緒に申請しないかと誘われ、申請することにした。この補助金とは、いわゆる「グループ補助金」、正式名称「中小企業等グループによる施設・設備復旧整備補助事業」である。申請は第３次の募集で通り、補助金を得て店を再開することができた。この制度では、中小企業の場合、国からの補助が２分の１、県から４分の１出ることになっていた。したがって、自己負担は４分の１ですむため、申請者からするとメリットの大きな事業であった。だからこそ近江さんや石川さんも応募したのだが、ここに落とし穴があった。先に述べたように、彼らの申請が通ったのは第３次の募集であった。しかし、彼らは第１次の募集から応募を続けていた。そうしたこともあって、第３次募集の際の申請書類は、工事の見積書を含め、第１次のときに作成したものを援用していた。だが、第１次から第３次までのわずかな期間でも、建築資材の値段は上がっていた。また、補助金を得てから実際の工事がすべて終了するまでの間にも、資材の値段は上がり続けた。このため、実際の工事費用は見積額を大きく上回ってしまい、かなりの額をもち出さざるを得なくなった。このような話を、石川さんは笑いながらしてくれた。現在、石崎にある石川さんの店は、「お食事処　五右衛門」として営業を続けている。震災後、この店は以上のような経緯で開店し、私たちに食事を提供してくれている（平成27年４月26日聞き取り）。

近江勇さん（前出）の場合

次に、石川さんらを誘い、グループ補助金の申請・獲得に尽力した近江勇さんが代表取締役社長を務める、ホテル近江屋の再オープンまでの軌跡を紹介したい。３月11日の津波によって、ホテル近江屋は一部分２階まで水に浸かった。しかも、１階には貯木場にあった材木が流れ込み、壁さえない状態であった。このため、まずは２階から手をつけ、浸水した部屋を直した。それによって、平成23年６月１日より「仮営業」というかたちで、２階以上での営業を再開した。このころになると食材も手に入ったので、２階にあった和風レストランの厨房を使って宿泊客に食事を提供した。しかし、厨房にあった機械類はすべて流されてしまったため、手の込んだものはできなかった。また、食器類も残ったものを使わざるを得なかった。

仮営業開始当初は、仮設住宅の建設を担った人々が泊まった。かなりの人数であったため部屋数が足りず、宴会場で寝泊まりした人もいた。また、ホテル近江屋の大浴場は1階にあったため、このころはまだ1階が使用できず、客室のバスを使ってもらった。その際、水の心配があったことから、シャワーのみにしてほしいとお願いした。こうして事業を再開したホテル近江屋であったが、当時は資金がなく、被害の大きかった1階の修繕は難しかった。そうした状況を好転させてくれたのが、グループ補助金である。これによって、ようやく1階部分に手をつけることができ、平成25（２０１３）年４月に本格的に営業を再開することができた。

このように見てくると、グループ補助金の意義は、きわめて大きいといえる。しかし、ホテル近江屋の場合も石川さん同様、建築資材の高騰から見積額と実際の工事費用との差額が大きくなってしまい、本来であれば自己負担は４分の１ですむはずであったが、ふたを開けてみると、半分くらいは自分たちで負担しなければならなくなってしまったという（平成27年3月13日聞き取り）。

菅田正義さん（昭和33年生）の場合

そうした問題点を内包するグループ補助金であるが、それでもやはり事業主からすれば魅力的なのであろう。石川さんや近江さんの他にも、この補助金を用いて事業を軌道に乗せようと努力を続ける人がいる。「元祖すがたのいかせんべい」で有名な有限会社すがたの代表取締役、菅田正義さんもその1人である。菅田さんは、地震発生当時、藤原にあった自宅兼工場にいた。地震直後、2階にいた娘があまりにも怖がるので、そのとき自宅にいた妻と三男もつれて、全員で黒田町にある住宅兼店舗に車で向かった。黒田町の店舗にはもともと菅田さんの両親が住んでいたが、地震直後に避難していた。家族を黒田町で降ろし、菅田さんは再度藤原に戻ろうと車を走らせた。市役所のあたりまできたとき、真っ黒な津波が押し寄せてきた。あわてて黒田町の店舗に引き返し、家族を車に乗せ、少しでも高いところへ行った方がよいと思い、山口3丁目のコミュニティに避難した。黒田町の店舗も津波の被害を受けたため、菅田さん一家は、それからしばらく避難所で生活するようになる。

震災後は何もする気が起きなったため、黒田町の店舗の片付けも藤原の工場の片付けも手をつけられなかった。藤原の工場を見に行ったのは、地震から2~3週間ほどたってからである。このときの工場の様子はすさまじかった。一面泥だらけであり、また貯木場から流れ出した材木が刺さっていた。片付けは、あまりのひどさにどこから手をつけたらよいかわからず、まったくはかどらなかった。そうした中、たまたま盛岡の知人が見舞いにきてくれた。彼は、「こういうときは難しく考えず、まずはできることから始めればいい」とアドバイスをしてくれ、一緒に片付けを手伝ってくれた。また、高圧洗浄機や発電機、食料、ガソリンなどといった必要なものも送ってくれた。こうしてようやく片付けにも身が入り、事業再開への糸口となった。工場にあった機械も自分たちで分解し、磨き直し、整備した。

事業再開のきっかけは、他にもいくつかある。例えば、避難生活を送る中で、娘がいつももち歩いていた重そうなリュックの中身を見たのも、その1つである。大学受験を迎える娘のリュックの中には、参考書類が詰まっていた。これを見たとき、「娘は生きようとしている、何とかしなければ」と思ったという。また、がれきの片付けをしていた最中に、先祖が使っていたいかせんべいの型が出てきたのも大きかった。創業者が使っていた大正時代の型や（写真5）、戦時中に使っていた型である。これを発見したとき、先祖から「事業を続けろ」といわれているように思い、「それならばやってみよう」という気になった。いかせんべいは、この型と材料さえあれば、あとは家庭にあるもので作ることができる。材料は、仕入れ先が津波の被害を受けていないところにあったので、問題なく手に入った。これを家庭用の鍋で煮て型に流し込むと、いかせんべいとなる。調理用の火は、小さめのガスバーナーを磨き直して、プロパンガスとつなぐことで確保した。厄介であったのは、材料の配合表が津波で流されてしまったことであった。その

ため、記憶にあった配合率をもとにせんべいを試作し、それを食べて微調整をするというプロセスを繰り返して、店の味に近づけていった。こうしてせんべいを焼いているうちに、工場の機械の整備も終わり、平成23（２０１１）年５月13日に、本格的に事業を再開するに至ったのである。

その後、菅田さんはグループ補助金を得て、工場を花輪に移す。花輪の工場は平成25年２月に完成し、３月から稼働した。震災から４年が過ぎた平成27年４月の時点で、事業はようやく震災前の９割ほどまで回復してきた。しかし、まだまだ落ち着きが戻っていない。特に最近では人手不足に悩まされている。震災後、２年目くらいまでは、従業員を募集すると多数の応募があったが、このころは設備が整っておらず雇うことができなかった。近年、ようやく設備が整い始めたが、今度は逆に人が集まらない。思い通りにいかないものだと、笑っていた（平成27年４月30日聞き取り）。

写真５　大正時代のいかせんべいの型

以上、有限会社すがたが、事業を再開するまでの様子を見てきた。菅田さんの話からすると、事業再開の契機となったものは２つある。一つは、盛岡の知人の援助や娘の未来を生きようとする姿であり、もう一つは会社の原点ともいうべきモノ、すなわちいかせんべいの型が出てきたことであった。菅田さん同様、人もしくはモノが事業再開の契機となったと語る人は他にもいる。化粧品店を経営する小野寺俊雄さんや、遊漁船業を営む澤口則夫さんも、人がきっかけとなって事業を再開している。そこで、次に２人の話を紹介したい。

小野寺俊雄さん（前出）の場合

藤原にある小野寺さんの自宅兼店舗は、１・５メートルほど水に浸かった。ショーケースもすべてひっくり返され、泥もひどかった。家族は、地震発生直後に崎山の親戚のところに避難させたため、家には消防団員として残った小野寺さんしかいなかった。このため、自宅と店舗の片付けは、基本的に小野寺さん１人で行わざるを得なかった。片付けはまるではかどらず、むなしくなった。立ち直れないのではないかと思ったという。そうしたところに、東京から化粧品メーカーの人がきてくれて、一緒に泥をかきだしてくれた。また、崎山にいた弟や大阪の弟もやってきて、朝から晩まで片付けを手伝ってくれた。特に、大阪の弟は「腰を痛めているのではないか」という気遣いから、コルセットを持参してくれた。こうした思いがとても嬉しかった。このように、様々な人たちが手を貸してくれたので、ここでやめるわけにはいかないと思い直した。そこで、とにかく店を開けてしまえば「頑張るしかない」と思うようになるだろうと考え、平成23年６月から商売を再開したのであった（平成27年３月14日聞き取り）。

澤口則夫さん（前出）の場合

澤口さんの自宅は磯鶏にある。上述の通り、自宅の１階部分には貯木場の丸太が30本くらい流れ込み、家に穴が開いた状態であった。また、自宅のそばに貸家をもっていたが、そこにも津波によって流されてきたバスがぶつかり、建物ごと押し流されてしまっていた。澤口さんは震災前、４艘の船を所有していた。このうちの１艘は、沖に逃げる際に乗っていったため無事であった。もう１艘は、浜に打ち上げられてひっくり返っていたが、エンジンを取り換えれば使える状態であった。残り２艘のうちの１艘は完全に沈没してしまい、最後の１艘は赤前方面に流され、陸に乗り上げてしまい使用できなくなっていた。このように、今回の津波によって澤口さんがこうむった被害は、かなり大き

かった。

澤口さんが、震災後、初めて釣り船を出したのは平成23年4月16日であった。知り合いの客が、顔を見がてら釣りに出ようといってくれたのがきっかけであった。このとき、澤口さんは、港も整備されていないので行きたくないと思っていた。しかし、客が行こうというので船を出した。すると見事に魚が釣れた。そのときの様子をウェブサイトに掲載したところ、徐々に客が戻ってきた。ゴールデンウィークには、例年のように釣り船を出すことができた。その後、澤口さんは、補助金を受けずに自己資金だけで中古の船を購入した。また、自宅と貸家の建て直しも行った。ここからは、震災による大きな損害を嘆くのではなく、未来を切り開こうとする澤口さんの強い意志を感じ取ることができるように思われる（平成27年4月28日聞き取り）。

中居信夫さん（前出）の場合

このように、小野寺さんと澤口則夫さんの場合、人との交流が事業再開を後押しした。他方、モノが事業再開の契機になったケースとして、中居信夫さんの例をあげることができる。漁師の中居さんは、震災によって家を流されただけでなく、所有していた2艘の漁船も、また魚探などの機材も失った。そのため、震災直後は再起できないだろうという気持ちが強かった。そうした中、知り合いの建設業者が水門のそばのがれきの中から小さい方の船（16尺の船）を引き出してくれた。一見、問題なさそうであったが、よく見ると船体にひびが入っていた。そこで「ホーマック（磯鶏にあるホームセンター）」で発電機を買い、自分で修理した。修理代は、発電機代を別にした材料費だけで、5万円くらいであった。その後、エンジンも買った。船を修理しているうちに、だんだん気持ちも前向きになってきて、「もう一度やってみるか」と思えるようになってきた。中居さんは、津波によって家を失ったため、震災後は兄の下で暮らしていた。船の修理は、兄の家から通いながら進め、すべての修理が終わったのは藤原の仮設住宅に入った7月末以降のことであった。その間に少しずつ漁具などもそろえ、平成24（2012）年1月ごろから漁に出るようになった。今ではアワビ漁もするし、イカ釣りもしている。

また、復興船も入手した。平成24年の8～9月くらいに、18尺の船（中古船）がきた。復興船として国が支援してくれるのは船体とエンジンだけで、その他の機材・漁具は自分で買いそろえなければならない。アワビ漁用の漁具をそろえると15～20万円ほどかかる。平成24年11月に、震災後初めてアワビ漁をした。竿は購入したが、水メガネは自分で作った。このときのアワビの量は少なめだった。

以上のように、中居さんは、自分の手で船の修理を進めていく中で気持ちが変わっていったと述べている。モノとのかかわりが再起を促したといえよう（平成27年9月12日聞き取り）。

伊藤鐵男さん（前出）の場合

事業再開に関する話の最後に、中居さんと同じように漁師をしている伊藤鐵男さんのことを記しておきたい。伊藤さんは、カキ、昆布、わかめなどを獲っていたが、震災ですべてを失った。当然、カキも全滅した。伊藤さんは、カキの養殖に並々ならぬ思いをもっている。宮古のカキの養殖は伊藤さんの父親が昭和6（1931）年に初めて行ったからである。そのため、震災後しばらくして、カキの養殖を再開した。カキは育つのに約2年かかる。震災後につけたカキは、収穫可能となった時期に台風がきてしまい、その影響で8～9割が落ちてしまった。このため残念ながら、その年は収穫することができなかった。その後、再度カキを植えつけ、ようやく平成26（2014）年12月に震災後初めて収穫できた。

カキの養殖に関連して、伊藤さんは興味深いことを語ってくれた。震災後、カキの貝の成長が早くなったという。地震や津波の影響で漁師をやめた人もいたため、同業者が少なくなったことが関係しているのだろうかと首をかしげた。ただ、貝の成長は早くなったものの、カキの身の入りが遅くなったとも指摘していた。山からの水が少ないために、海の栄養が足りないのかもしれないという。近頃は、海の水が

しょっぱいどころか、にがく感じるともいっていた。長らく海とともに生きてきた伊藤さんだからこその言葉である（平成27年3月12日聞き取り）。

まとめにかえて

以上、藤原・磯鶏地区の人々の被災体験について報告してきた。見てきたように、住民たちの経験はそれぞれ異なっていた。こうした経験は、教訓として今後に生かされるべきであると考える。似たような規模の、もしかしたらそれ以上の災害が、近い将来、別の地域で起きる可能性が高いからである。その意味で、藤原・磯鶏地区の人々の語りは、永遠に記録と記憶にとどめる必要があるはずである。

付　記

調査にご協力いただきました澤口功さんは平成28年2月にお亡くなりになりました。心からご冥福をお祈りいたします。

【参考文献】

宮古市東日本大震災記録編集委員会（編）２０１４『東日本大震災宮古市の記録』第1巻（津波史編）宮古市

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第6章　高浜・金浜地区における震災の経験
―住民の語りを中心に―

宮坂　清

はじめに

東日本大震災は宮古市高浜・金浜の住民にとっていかに経験されたのか。本稿では主に住民の語りを紹介しながらこの問いについて考えていく。未曾有の規模で押し寄せ、甚大な被害を出した地震津波から5年が経過し、人々の生活は少なくとも表面的には落ち着きを取り戻しつつあるように見える。しかしあの日から始まった辛い日々の記憶は、いまも人々の心に深い影を落としている。本稿は、その記憶を記録に留め、将来世代に引き継いでもらうことを意図している。

そのため、まず背景となる情報を確認し、次いで両地域に暮らす人々による震災についての語りや、すでに活字にされている体験談の紹介を行い、必要に応じて若干の考察を加えるという形で稿を進める。また人びとの語りや体験談の紹介を行う際、読者が参照しやすくなるよう内容に沿って整理を行い、また考察を加えるが、多くの語りや体験談がもつリアリティをできるだけそのままに留めるよう心がける。

ここでは高浜と金浜を比較しつつまとめて取り上げる。両地区が隣接していること、組織や地域住民の関係が密接であること、そして震災に関する記録や人々の語りに互いを関連づけたものが多いことなどから、そのようにまとめて扱うことが妥当と判断した。ただし、各々の異なる点が重要である場合には個別に扱う。

筆者が震災後初めて宮古市を訪れたのは平成25年3月、震災の2年後である。車で見て回った高浜・金浜は、すでにがれきがおおむね撤去されて更地になった状態にあり、防潮堤の決壊箇所も補修されていた。当初どのような惨状だったかを知らない私の目には、震災の痕跡が減り、平穏な日常が戻ってきているように見えた。しかしその後、平成26年8月に機会を得て両地区の方々にお話をうかがっていくうちに、まだ震災は終わっていない、むしろ震災は人々の心のある部分を占め続けており、心を構成し続ける重要なリアリティとして生き続けていることを思い知らされた。本稿が、経験した人と経験していない人の間に、そのリアリティを伝える媒体となることができれば幸いである。

1　地区、および過去の地震津波の概要

(1)　地区の概要

高浜・金浜はかつてそれぞれが独立した村であったが、ともにまず磯鶏村に、次いで宮古市に統合合併された歴史をもつ。すなわち、明治22（1889）年に東閉伊郡で町村制が施行された際、旧制度の磯鶏村・高浜村・金浜村・小山田村・八木沢村が合併し、新制の磯鶏村が成立した。次いで昭和16（1941）年に、磯鶏村は、宮古町・山口村・千徳村と合併した上で市制を施行し、宮古市が誕生している。

高浜は外洋から南西に向けて細長く切り込んでいる宮古湾の最奥部近くの北岸に位置する。磯鶏から南西へほぼ直線に海岸線が続き、その海岸沿いに国道45号線が通り、集落は海岸沿いの平坦地を中心に広がる。戸数は明治期に60~70軒ほど、昭和20年前後には100軒ほどであったといい、昭和35（1955）年のチリ地震津波を契機としてアパートなどが増えたという。高浜の岩間一族は江戸時代以前に近江から落ちのびてきたといわれ、同じく佐々木一族も初代は落人であったといわれる。生業はもともと漁業に関係する家が多かったが、数度の津波を契機に減っていった。集落の内部は大きく3つに分かれ、自治会の組織も3つに分かれている。氏神は高浜稲荷神社で、檀那寺は金浜の江山寺である【宮古市史 民俗編 上巻】。東日本大震災前の平成22（2010）年の国勢調査によれば、人口841人（男397人、女444人）、世帯数311であった。

金浜は高浜の南西に位置し、南は津軽石と隣接している。高浜から南西に向かう海岸線は金浜の前で湾曲し、津軽石川河口へと続いてい

る。江戸時代以前、金浜は船越村（現山田町）の知行地で、江戸時代も船越氏の給地だったが、寛政期に百姓一揆があって全村が蔵入地となり、明治22年に合併して磯鶏村の一部となった。もともと半農半漁であり、鮭漁を行っていたが、元禄年間に津軽石村との間に紛争があり、その後、鮭漁をやめている。最近は会社勤めの人も多い。戸数はもともと40～50軒ほどであったが、昭和50年代から新しい住民が増え、平成3年に193軒になったが、半分以上は新住民である。氏神は金浜稲荷神社で、檀那寺は江山寺である【宮古市史 民俗編 上巻】。東日本大震災前の平成22（2010）年の国勢調査によれば、人口666人（男316人、女350人）、世帯数221であった。

(2) 地震津波の歴史

高浜・金浜は宮古湾に面していることから、地震津波の被害を頻繁に受けてきた歴史をもつ。以下では、東日本大震災とその被害をより立体的に把握するための背景知識として、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に掲載された資料を参照し、関連する部分の概要を示す。

ア 近世までの地震津波

高浜・金浜における地震津波の最も古い記録は、延宝5年3月12日（1677年4月13日）の地震津波のもので、東北地方で20時頃から明け方まで20回余りの地震があり、波にとられた家の数は金浜12～13軒、高浜1～2軒だった【雑書】。また、安政3年7月23日（1856年8月23日）13時頃に地震があり、赤前・金浜で人家が大きな損害を受け【浮世考がい記】、金浜村11軒、高浜村20軒余が流失または損壊した【金沢家文書】。

イ 明治三陸地震津波

明治29（1896）年6月15日午後7時32分頃、三陸沖を震源とする明治三陸地震が発生した。震度2程度と緩やかな揺れだったため人々はあまり気にとめなかったが、約30分後に大音響とともに大津波が来襲し、最大となった第2波が満潮時と重なったこともあり、大きな被害をだした。

「東海岸ヲ騒ガシタ不吉ナ数々ノ前兆」（宮古測候所所蔵資料）によれば、来襲した津波は、金浜13呎、高浜10呎であった。宮古湾の入口に近い宮古15呎、鍬ケ崎30呎、磯鶏20呎と比べるとやや低い。高浜でその年の春から帆立貝や烏貝などが繁殖し、また地震の20日ほど前には鰻が海岸に群集するという前兆があり、これは安政3年の津波の前兆に酷似していたという。

「明治二十九年地震報告」（中央気象台）によれば、磯鶏村全体の被害は、総人口1千996人のうち死者90人、負傷者54人であり、総戸数365のうち流失したり半潰した家屋が109あるなど甚大な被害をだした。

より詳細な調査に基づく「岩手県沿岸大海嘯取調書」（山奈宗真）によれば、磯鶏村では金浜・高浜を含む7か所で被害があり、死者100人、負傷者55人、流亡戸数74戸、潰戸数68戸、流亡納屋52棟、潰納屋32棟であった。北方の宮古湾口から激浪が走りこみ海浜を破壊したという。「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」（山奈宗真）にはより詳細な被害が記されている。高浜では打上浪11尺、浪走り100～120間で、死者負傷者はいなかったが、全戸数83戸のうち流亡戸数42戸、潰戸数16戸であった。なお、安政3年の地震の際は打上浪が15尺あり、今回より4尺高かったとしている。金浜では打上浪15尺、浪走り70～150間で、死者16人、全戸48戸のうち流亡戸数22戸であった。

この地震津波の後で金浜の江山寺境内に津波碑が建てられた。「明治二十九年六月十五日／三陸海嘯横死者精霊／旧五月五日夕／施主 金浜若者中」と記されている。なお、この津波碑は東日本大震災で浸水している。

ウ 昭和三陸地震津波

昭和8（1933）年3月3日午前2時31分、三陸沖を震源とする

マグニチュード8・1の昭和三陸地震がおきた。揺れは明治三陸地震のときより強く感じられ、家屋の一部に壁の亀裂や石垣の破損など軽い被害がでた。地震の約30～40分後に津波に襲われ、大きな被害をだした。

「岩手県下踏査報告」（気象台技師、験震時報 第七巻）によれば、高浜で低地の民家が流失・損壊し死者4名がでた。海岸の山腹に2・4～2・9㍍の辺まで浸水し、草が変色している所があった。この辺りでは津波は4回ほど来襲し、湾の最奥部の津軽石方面から反射してきたものもあったという。

「三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告」（盛岡測候所、験震時報 第七巻）によれば、高浜では津波の高さ9㍍、金浜では4㍍であった。「宮古湾に於ける襲来の観測並びに被害地踏査報告・重茂村災害地踏査復命書」によれば、高浜には磯鶏須賀の突端より分岐した津波が漸次突入し、部落の前方に当たり、広大な砂丘（突出した半島に造船場、鰯粕製造納屋などの建物があった）にいた男女4人が部落に避難する際に、津波に浚われ3人が溺死した。この砂丘の陸地に接している部分が約50間にわたり津波により切り抜かれた。高浜部落に侵入した波は7尺ほどの高さで、家屋2戸が流失し、半壊24戸、浸水24戸、負傷者3人、伝馬船20隻が流失し発動機船5隻が破損した。金浜では5～6尺の津波が来襲し、非住家1棟が流失、半潰家屋4戸、浸水4戸、伝馬船10隻が流失したが、人畜には被害がなかった。

また「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」（中央気象台、験震時報 第七巻）によれば、高浜は人口698人のうち死者4人、負傷者3人であり、戸数97戸のうち、流失2戸、全壊4戸、半壊20戸、床上浸水12戸、床下浸水12戸であった。同じく金浜は、人口367人で人的被害はなく、戸数51戸のうち、流失1戸、半壊4戸、床上浸水1戸、床下浸水3戸であった。なお、『田老村津浪誌』（田老尋常高等小学校編、1934年）によれば、より被害の大きかった田老村で、磯鶏村金浜自警団28名が1日間、救護の応援活動を行った。

より詳細な調査に基づく「三陸地方津浪災害予防調査報告書」（農林水産局）は以下のように報告している。宮古湾口から南南東に向かった津波は、まず津軽石村の赤前に押し寄せ、それが引いてきて高浜の側面に襲来し、その後は東北東に向かって進んだ。津波の高さは5㍍であった。高浜では海浜より半島状に突出する砂州が防波堤の役割を果たしており、水深は浅いものの船溜として使用していた。この砂州は湾内の潮流などにより自然に堆積したものであったが、この津波によりその中間部分が衝き破られ、潮流が急になった結果、船溜に使用できなくなった。引き波による被害を防ぐため、県の農業土木工事事業により、新たに高さ4・2㍍、上部の幅0・6㍍、長さ250㍍の護岸（栗石入混凝土造）を建設し、その前面を浚渫し漁船の接岸ができるようにするという計画が出された。金浜については、赤前に突き当たった余波が押し寄せたのみで被害は少なかった。津波の高さは5㍍であった。沿岸には工場や倉庫などが7棟あったが全て流され、漁船も全て流された。地震の後、沿岸部に津軽石川木材荷揚設備としても用いられる混凝土造の護岸と埋め立て工事を行っており、竣工すれば津波予防に有効であると認められた。

エ　チリ地震津波

昭和35（1960）年5月24日早朝、地震もないのに大津波が日本の太平洋沿岸を襲った。この津波の原因となったのは、日本時間5月23日4時11分に南米チリ沖で発生したマグニチュード9・5の巨大地震であり、発生からほぼ1日後に津波が日本の沿岸部に到達した。

「岩手県災害関係行政資料Ⅰ」（災害関係行政資料等整備調査委員会）によれば、津波の被害は日本の太平洋沿岸全域に及んだが、波高が高く大きな被害がでたのは比較的大きな湾であり、波高が湾口では低くても奥にいくにしたがって高くなるという特徴があった。宮古湾でも湾口2・0㍍、中央部3・0～5・0㍍、湾奥部で6㍍と次第に高くなっている。津波の波高は全体に明治三陸地震、昭和三陸地震のほうが高いが、これらの地震では湾の入口で高く、奥に行くにしたがって低くなっていた点が大きく異なる。波がじわじわと水位が上がるかたちでやってきたため、高浜・金浜で人的被害はなかったが、防護処置の脆

弱な湾の奥部に大きな津波が押し寄せたため、養殖施設などの経済的な損失が大きくなった。なお、宮古市では当日に望楼勤務していた消防士が閉伊川の異変にいち早く気づいて報告し、3時45分という早い段階で緊急避難信号（サイレン吹鳴）を発した。また磯漁作業のため4時前後に海岸にいた沿岸漁民（消防団に在籍している者が多い）が異常な引潮を発見し、通報してサイレン警鐘を行ったことも早い対応につながった。津波警報の発令が遅れた大船渡市は多くの死者をだした。

「チリ地震津波調査報告書」（仙台管区気象台）によれば、高浜では、県道東側の民家その他の建物が全て流失、西側の建物もほとんど山際に押しつけられて潰された。民家が道路をさえぎり、また船が道にあがり通行が困難となった。波は道路の上160センチほど、海面より5・3メートルの高さであった。旧高浜小学校の校庭は水に浸かり、門柱の御影石の片方は横倒しになり、もう片方は見当たらなくなっていた。近くの川にかかった県道の橋は流失した。金浜では、国鉄山田線線路の東側は建物が全て流失または全壊した。山田線の線路は高さ7メートルぐらいの土堤の上を通っているが、その土堤のさらに2メートルぐらい上に津波の跡があった。線路の西側にも土堤の切れ目から波が流れ込んだため、建物の軒下まで達していたところもある。金浜から法の脇に至る線路は激しく破壊され、あめのように曲がって山際に寄せられていた。

地震の後、金浜・古館に建てられた津波碑には、以下のように記されている。「（正面）昭和三十五年五月二十四日／チリ地震津波／午前二時五十分大津波襲来／（正面下）大地震の後には津波が来る／外国地震でも津波は来る／潮がめだってひいたら高い所へ／（背面）昭和三十五年五月二十四日未明突如チリ地震襲来すなんの前ぶれなく正に『寝耳に水』である過去の経験に『地震は津波を伴うもの』これまでの常識は一瞬にして覆るそれだけに瞬時のうちに住宅財貨を失い生産手段をもぎとられ被災地特に高浜金浜津軽石の一部及び赤前各地域の惨状言語に絶する／被害総額九億五千万円／昭和三十六年五月二十四日／宮古市」その他背面に、「被害区分・世帯数・人員」がそれぞれ記されている。流失・三六・二〇一、全壊・七六・四〇七、半壊・七〇・四〇七、床上・二一三・一〇八三、床下・四五八・二三〇四、計・八五三・四四〇一。最後に「宮古市建之　石工鈴木祐一」とある。なお、この津波碑は東日本大震災で流失したが、復旧している。

チリ地震津波を機に、高浜で延長1千025メートル、金浜で1千230メートル、それぞれ高さ8・5メートルの防潮堤が建設され、また津軽石川の河口に水門が設けられた。東日本大震災の後、同10・4メートルまで嵩上げされた。

チリ地震津波から約30年後の平成3（1991）年、高浜自治会が中心となって回想文集『チリ地震津波より三十年 あの惨状を振り返って』が制作された。高浜におけるチリ地震津波の経験を知るのに有用な資料である。発行当時の宮古消防署長、宮古消防団第十一分団長、元高浜小学校校長、元高浜青年会会長が回想文を寄せているほか、高浜住民へのインタビュー2本、回想文9本を掲載している。

地震がないのに津波が来たこと、宮古湾の奥部浅瀬に到達してから波が大きくなったこと、集落の大半の家屋が流されたり浸水したりしたこと、高浜部落の前に突き出ていた「出崎浜」と呼ばれる砂浜が破られたこと、その浜から流された男女3人が亡くなったことなど、チリ地震津波の際立った特徴や出来事が記されている。高浜の人びとにとりチリ地震の経験がそれ以前の地震津波、特に昭和三陸地震津波の経験と大きく異なるものであったこと、そしてその経験が30年を経ても大きなものとして記憶され続けていることが読み取れる。

オ　十勝沖地震津波

昭和43（1968）年5月16日午前9時49分に襟裳岬沖でマグニチュード7・8の地震が起き、宮古市では震度4が観測された。地震発生から31分後の10時20分、宮古市で津波第1波が観測された。

「広報みやこNO. 147」（昭和43年6月1日号）によれば、宮古湾では最大2・16メートルを観測し、海苔・カキ・ワカメの養殖施設などが被害を受け、被害額は3億6千万円に達した。赤前の津波堤防は4・98メートルの最大波高を記録した。ただし、干潮時と重なったため内陸の被害は

それほど大きくならなかった。

カ　まとめ

高浜と金浜は、宮古市の他の沿岸地域と同様に、古くから地震津波の被害を繰り返し受けてきた。詳細な記録が残っている明治期以降だけでも、明治三陸地震津波・昭和三陸地震津波・チリ地震津波と、大きく3回、大きな被害を出す津波に襲われている。その3回の地震津波はむろん同じではなくそれぞれに特徴がある。

明治三陸地震は、揺れが小さく人々が油断していたところへ大津波が来襲したこと、満潮時と重なりより津波が大きくなったことが特徴としてあげられる。波の高さは11～15尺（3・3～4・5メートル）で、死者は高浜にはでなかったが、金浜では16人おり、流出ないし損壊した家屋は、高浜で全戸数の半数強、金浜で半数弱にのぼった。

昭和三陸地震は、真夜中に発生したこと、揺れが明治三陸地震のときより強く感じられたこと、高浜で被害が大きかったことが特徴である。津波の高さの記録は約1・5メートル（5尺、津波浸水高か）～9メートル（津波遡上高か）と幅があり、高浜で死者4人・負傷者3人、金浜では人的被害がなく、建物の被害は高浜で流失・損壊26戸、金浜5戸であり、高浜の被害がより大きいのがわかる。赤前に寄せた押し波が引き波となって高浜に押し寄せたとみられる。

チリ地震津波は、地震が全く感じられないまま津波がやってきたこと、宮古湾の奥部に行くにしたがって波が高くなったこと、人的被害はなかったが建物や養殖施設などの被害が大きかったことが特徴である。浸水高は高浜で5・3メートルであった。早朝に来襲したにも関わらず人的被害がなかったのは、サイレン警報が迅速に出されたこと、押し寄せるというよりじわじわと水位が上がるかたちの津波であったことによると考えられる。

地震津波の被害や教訓を記した記録について、金浜に石碑が2基（昭和三陸津波、チリ地震津波）あり、また高浜ではチリ地震津波の30年後に回想文集を発行するなど、高浜・金浜の人々が地震津波の教訓を後世に伝えようとしてきたことがうかがえる。

2　東日本大震災の概要

(1)　地震津波と被害の概要

平成23（2011）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の地震が起き、東北地方の太平洋沿岸を中心に強い揺れが観測され、宮古市でも震度5強から5弱の揺れが記録された。主な破壊時間は約160秒に及び、余震も頻発した。気象庁は地震発生から3分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを3メートルとしたが、15時14分には6メートル、15時30分には10メートル以上と、高さの予想が引き上げられた。やがて津波が到来し、宮古市では日立浜の気象庁検潮所が15時26分に8・5メートル以上の津波浸水高を観測したほか、宮古市重茂で観測された津波遡上高40・5メートルは国内最高記録を更新した。

「宮古市東日本大震災浸水図」を参照しつつ、浸水範囲を以下に記述する。宮古方面から津軽石に至るまで宮古湾沿岸を国道45号線が通っているが、その国道は、磯鶏を通過して宮古商業高校を超えると、そこから先は津軽石に至るまで、高浜小学校近くの一部分を除き、すべて浸水している。やや海に突き出た箇所にあたるホテルルートイン宮古の近くで津波遡上高18・60メートル、その先の左手にみえる喫茶店「異人館」付近で同10・60メートル、その先の高浜集落に至るまで同10メートル以上ある。高浜集落に至ると、集落の東北端付近から内陸に入り簡易郵便局を過ぎて国道に戻る道路があるが、その道路より海側地域は全て浸水し、同道路の山側地域も平坦地は広範に水に浸かっている。集落入口付近で津波浸水高5・09メートル、高浜簡易郵便局付近同4・62メートル、避難場所となっているコープケミカル高浜住宅高台の下で同4・52メートル、集落の南西端付近で同5・43メートルを観測している。津波は高浜小学校へ向かう坂道をも遡上し、小学校前で17・85メートルの遡上高を記録している。さらに進んで金浜の集落に入ると、避難場所となっている金浜稲荷神社の下付近で津波遡上高13・47メートル、江山寺付近で同13・09メートル、宮古湾温泉マース付近で津波

浸水高11・04㍍を記録している。

高浜集落における津波浸水高が4・52～5・43㍍であることと高浜海岸に当時8・5㍍の防潮堤があったことを併せて考えると、高浜集落には一時防潮堤を越えて水が入ったものの、湾内の水位と同じになるほどには入らないうちに、湾内の水位が下がったと考えられる。また集落の南西端で津波浸水高が最も高くなっていることから（5・43㍍）、南西方面からの引き波が侵入したと考えられる。これに対して、金浜は津波浸水高でみると高浜の倍以上あって11㍍を超えており、より多くの水が流れ込んだことがわかる。津軽石を含む宮古湾奥部全体をみても金浜の津波浸水高が最も高いが、これは「宮古湾温泉マース」前の防潮堤が約30㍍にわたり決壊し、多量の水が流れこんだことも影響していると考えられる。津波浸水高11・38㍍、津波遡上高17・8㍍という数字は、明治以降にこの地域に来襲した他の津波と比較しても際立って高い。

表1　家屋倒壊数（平成24年6月29日現在、住家・非住家合計）

地区	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	合計
高浜	165	75	58	20	318
金浜	288	10	3	6	307

次に、宮古市および高浜・金浜の被害の概況は以下のとおりである。宮古市全体の死者数は517人、行方不明者（死亡認定者）は94人である。高浜は死者5人（死亡届出者4人、死亡認定者1人）、同じく金浜は死者28人（死亡届出者27人、死亡認定者1人）である。人口比でみると、高浜の死者行方不明者は人口の約0・6％、同じく金浜は約4・1％であり、金浜の人的被害の大きさがわかる。

家屋の被害は、市全体で住家4千449棟、非住家が4千639棟で、合計9千088棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが2千677棟で60・2％を占める。高浜では家屋倒壊が計318棟、金浜では307棟である。表1をみると、金浜では倒壊数のうち全壊が288棟と9割以上を占めているが、これは平坦地の津波浸水高が高かったことが影響していると考えられる。

以上、地震津波とその被害の概況をみると、記録に残る地震津波と比較して、津波・被害ともに際立って大きいことがわかる。これまでも繰り返し津波に洗われてきた地域ではあるが、これほどまでに巨大な津波被害があったことをうかがわせる記録は存在せず、人々にとってまさに想像を絶する津波であったのだ。それでも高浜では8・5㍍の防潮堤があったことにより津波浸水高が低くなり、また防潮堤が決壊した金浜でも、決壊に至るまでのあいだ、人々に避難する猶予を与え、それらにより被害は少なくなったと考えられる。

(2) 公的な調査・対応の記録

ア　公的な調査や対応の記録

地震津波の発生に際し、宮古市をはじめとして公的な機関は諸々の対応をとった。以下では、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に収められた資料「東日本大震災の記録～岩手県宮古市」に含まれる、公的な調査や対応の記録のうち、関連部分の概要を示す。地震発生から市内の避難所の閉鎖が決まった8月8日まで、高浜・金浜でどのような動きがあったか、その概略をまとめておく。

■3月12日（土）9時30分：□金浜老人福祉センターへ170人が避難、水はあるが長くはもたない。

■3月12日（土）12時20分 調査報告：□金浜地区、高浜地区の国道45号は瓦礫のため通行不可能、水没、倒壊家屋多数、車両が進入不可能で孤立状態。□高浜小学校の校庭まで津波浸水。□高浜地区で2人流されたとの目撃情報、行方不明者2人との情報あり。□金浜老人福祉センターへ70人（夜は100人ぐらい）が避難、毛布、食料、カセットコンロ、ろうそく、仮設トイレの要請あり。□稲荷神社高台へ50人が避難、毛布、食料が不足。□コープケミカル高台へ50人が避難、地域で炊き出しをしながら高台にある物置や社宅の空き部

屋、倉庫で寝泊まりしている。

■3月12日（土）12時30分：花輪伝承館へ70人が避難（うち40人は高浜地区の住民）、負傷者2人。

■3月13日（日）7時00分：□花輪伝承館へ80人が避難、第十七分団倉庫及び日本赤十字社の物資を配布済み。

■3月13日（日）□国道45号は、金浜地区まで1車線を確保（都市整備部）。

■3月13日(日)□国道45号南ルートは津軽石地区の駒形橋まで開通(都市整備部)。

■3月14日（月）□磯鶏―津軽石間、重茂地区の捜索活動、北海道から470人増員、広域で2千人体制（自衛隊）。

■3月14日（月）□高浜地区通電。

■3月15日（火）□藤の川―金浜間は片側1車線通行が可能、高浜小学校―三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ間は通行止めし、撤去作業中（都市整備部）。

■3月15日（火）□三陸国道事務所による道路状況は、国道45号高浜小学校―金浜間は作業終了、三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ内に空洞箇所あり、片側通行で工事中（都市整備部）。

■3月19日（土）□自動車の撤去台数は、1千台を超えた。（松山地区、藤原埠頭、宮古温泉マース北側）（都市整備部）。

■3月21日（月）□築地地区、高浜地区の歩道の瓦礫撤去を行う。（三陸国道事務所）。

■3月22日（火）□高浜地区、金浜地区は電源車での対応（東北電力）。

■3月22日（火）□金浜地区、高浜地区で一部通電の予定（東北電力）。□水道復旧状況は、金浜地区、高浜地区で送水試験（上下水道部）。

■3月24日（木）□藤の川地区から高浜地区にかけての調査は、国道の瓦礫撤去が必要（上下水道部）。

■3月25日（金）□水道復旧状況は、高浜地区で一部通水（上下水道部）。

■3月27日（日）□国道45号築地地区、高浜―金浜間の瓦礫を撤去（三陸国道事務所）。□水道復旧状況は、高浜地区から金浜老人福祉センターまでの復旧作業を行う（上下水道部）。

■3月27日（日）□水道復旧状況は、金浜地区の復旧作業を進める（上下水道部）。

■3月28日（月）□水道復旧状況は、金浜地区…の通水試験、遺体捜索作業により中断（上下水道部）。

■3月29日（火）□金浜地区の瓦礫の撤去作業は明日30日の午前中で終了(三陸国道事務所)。□金浜地区の防潮堤の盛土作業は1週間(宮古地域振興センター)。□金浜地区の高台は給水車での対応（上下水道部）。

■3月30日(水)□水道復旧状況は、金浜―八木沢方面の高台に通水（上下水道部）。

■3月31日（木）□金浜地区の防潮堤、大型水門を調整（宮古地域振興センター）。

■4月2日（土）□津軽石地区、金浜地区、鍬ヶ崎地区で自衛隊とともに遺体捜索（宮古市消防団）。□金浜地区は明日3日まで自衛隊の給水車で対応、月曜日から通水が可能（上下水道部）。

■4月3日（日）□金浜地区の防波堤の応急復旧は今週に完了予定（宮古土木センター）。

■4月7日（木）□磯鶏地区、高浜地区、津軽石地区の国道45号の歩道の瓦礫、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□高浜地区は2～3日で終了の見込み（三陸国道事務所）。□戸別送電は、藤原地区、高浜地区、津軽石地区で50件（東北電力）。

■4月12日（火）□国道45号の藤の川地区、高浜地区、金浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。

■4月13日（水）□国道45号の藤の川地区、高浜地区、金浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□三陸縦貫自動車道宮古道路宮古南ＩＣ付近の道路復旧は本日終了（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。□明日14日か明後日、高浜地区、神林地区で測量船による測量を実

施（海上保安庁）。

■4月14日（木）□国道45号の藤の川地区、高浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去、金浜地区は本日終了（三陸国道事務所）。□高浜地区の側溝蓋、転落防止柵の補修（三陸国道事務所）。□金浜地区の企業から苦情あり。三陸国道に瓦礫撤去を依頼、瓦礫撤去が完了次第着手（東北電力）。□金浜地区の江山寺付近を残すのみ、復旧率は99％（上下水道部）。

■4月15日（金）□国道45号の藤の川地区、高浜地区の歩道部分の瓦礫撤去、土砂の撤去、本日をもってほぼ完了、来週から道路の本復旧に着手（三陸国道事務所）。

■4月18日(金)□住民要望があった箇所の金浜地区で通電(東北電力)。

■8月8日（月）□決定事項・避難所は、8月10日をもって全て閉鎖することとする。

イ　避難所などに関する記録

地震津波の後、自宅に住めなくなった高浜・金浜の人々が避難生活を送り、また地域への救援物資の補給や情報の拠点となったのは、主に金浜老人福祉センター、花輪農村文化伝承館、高浜村上商店である。震災前に「避難所」に指定されていたのは高浜小学校であったが、津波が同校の校庭まで押し寄せたため、急遽、近くの金浜老人福祉センターが避難所とされた。また、津波の直後、金浜の三陸縦貫自動車道にいた人々は偶々そこに居合わせた配送車により花輪へ移送され、花輪農村文化伝承館で避難生活を送ることになった。金浜老人福祉センターが手狭だったこともあり、半壊家屋が多かった高浜では避難せず自宅に留まる住民が一部おり、集落の中心にある村上商店が救援物資や情報の拠点となった。

「東日本大震災避難所等提供資料」に含まれる、避難所の状況をうかがい知ることのできる資料を一部紹介する。「大震災 宮古市避難所状況一覧 平成23年3月20日」をみると、金浜老人福祉センターには避難者が185人おり、乳幼児が1人含まれている。電気・ガスは確保できており、水は給水車で対応し、飲食物の配給状況は適度で、炊き出しが行われている。必要品（依頼品）としてあげられているのは、ガムテープ、味噌、紙コップ、手指消毒薬である。高浜村上商店では、ガスはあるものの電気と水道は通じていないが、飲食物は適度にあり、必要品（依頼品）として、ミルク、オムツ（子供・大人）、ロウソク、小分け用ビニール袋、電池（単2・4）があげられており、備考欄に「道路の片付けを早急に願う」とある。また、資料「避難所調査書　H23・3・23」をみると、花輪農村文化伝承館には60人が避難していた。炊き出しは当番制で台所を使用してやっており、炊き出しのための用具は「一応足りている」という。スタッフや住民らが置かれていた状況をうかがい知ることができる。

3　地震津波の語り

(1)　概要

以下では、高浜・金浜の人々が東日本大震災をいかに経験したかについて考える。震災の局面をおよそ3つ（地震津波の当日、翌日以降、将来）に分け、それぞれの局面において個別のテーマを設定し、人々の具体的な語りを紹介しながら検討を加えていく。

管見では高浜・金浜の住民による震災に関する回想が掲載された文書として、体験談集『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』（宮古市公民館、平成25年3月）と、船越恭治氏による『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』（平成27年10月1日）、そして住民インタビューが掲載された『広報みやこ』NO. 151がすでに刊行されている。これらに加えて、筆者は、2014年8月に高浜・金浜の住民から5回にわたり話を聞き、それを記録した（注 体験談の詳細は第6章の最後に番号と頁数で示した）。

以下では、住民による震災についての語りを取り上げるが、それらを高浜・金浜における震災の経験という視点で整理し、震災の局面をおよそ3つにわけ、それぞれの局面で個別のテーマを設定し、具体的な語りを紹介しながら検討を加えていく。具体的には、まず1つめは

時系列により3局面（①地震津波の当日、②翌日以降、③将来）に分け、2つめで個別のテーマについて記述していく。①地震津波の発生当日における経験は特異であり、まずはその衝撃や混乱の様子を当事者の語りから記述する。語りや回想文を原型に近いかたちで記述し、それらに考察を加え、さらに個別に扱うべきと考えられるテーマを述べてゆく。②地震津波の翌日から語りや回想文が記録された時点までは、地震津波の直接的な衝撃や苦痛がまだ大きい段階から、次第に落ち着きを取り戻していく比較的長い期間であり、語りの全体的な傾向として、当初は時系列に沿って語られるが、次第に捜索、避難所の生活、家族、仕事など多様な個別テーマについて語られるようになっていく。そのため、まず時系列に沿い、続いて各テーマに沿った記述を行い、最後に考察を加える。③将来については、地域社会、人間関係、地震津波への備えなどといった個別テーマとして語られているので、そうしたテーマに沿って記述し、考察を加える。

(2) 地震津波の当日

震災当日についての人々の語りのほとんどが、地震が発生した当時にいた場所から避難している。ここでは、（ア）自宅やその周辺から、すぐに避難した例、（イ）自宅やその周辺から、混乱しながらも避難した例、（ウ）自宅やその周辺で、逃げ遅れてしまった例、（エ）金浜で働いていたり、たまたまいた人の例、（オ）地震発生時に他所にいて、避難・帰宅した例の順で語りや回想文を引用し、それぞれ検討を加える。

ア 自宅やその周辺から、すぐに避難した例

地震が発生したのは平日の午後、仕事をしている人もいればお年寄りは自宅にいることも多いと思われる時間である。まずは、地震後すぐに避難を開始し、比較的スムーズに避難を終えたケースをみていく。

■仕事をやめ、すぐに高台に避難した

宮古漁協高浜水産研究センターで仕事をしているときに地震がきた。私のほかに2人若い人がいるが、長くてふつうの地震ではなかったため、もうやめろと、もう仕事はやめろと言い、私の車でいま高浜仮設住宅が建っている近くの高台に逃げた。そのうちに潮が引いていき、おそらく地震の40分後位に喫茶店「異人館」近くまで潮が引いていった。80歳過ぎの男性が、自分はチリ地震の津波も見ているがここまでひどくはなかった、こんなのは初めてだ、だからすげえのが来るって言っていた。それで案の定、すげえのが来て、その高台から自宅のある金浜が見えるが、堤防から水が越えるのがわかった。金浜の自宅に父親がいるので、逃げることができただろうかと思った。…高浜の他の住民たちもみんな高台に行っていた。避難場所ではなかったが、すぐに車で上がれるため、高浜小学校ではなくて高台に行ったのではないか。高台には20~30人くらいおり、お年寄りが多かった。漁協のみんなも逃げ遅れた人はいなかった。その晩、漁協の誰かの知り合いの家に5人ぐらいで泊めてもらった。石油ストーブで暖をとり、ロウソクで灯りをとった。余震が激しくてあまり眠れなかった。真っ暗で波の音だけが聞こえた。（聞き取り3、金浜在住高浜勤務）

■すぐに自宅から近くの空き地まで避難した

姪と自宅で話していると地震。私は足が不自由なので、姪に戸を開けてもらい一緒に庭に出た。そこは車庫の上のコンクリートなので割れるかもしれないと思い、近くの空き地まで這って行った。家が崩れたらここに居ても下敷きになると思い、とても不安だった。…／寒かったので、揺れが収まってから姪にシートやダウンを持って来てもらった。ストーブも消すように頼んだが、既に停電で消えていたようだ。今回皆がえらいと思ったのは、「この地震では津波が来る」と判断した方が多いと聞いたこと。／地区の指定避難場所は自宅より下の公園なので、私は訓練に1回も出たことはない。あの日は下から来た20人位が避難しており、車も30台程並んで通れないくらいだった。／海を見ると工事用の台船が引き波でサーッと流れていくのを見た。あんな重いものが笹舟のようだった。「来た来た！越えた、堤防越えた！」とい

う声や避難している人達の悲鳴のような何とも言えない声がした。忘れられない声だった。（体験談1、高浜）

■避難場所へ息子に車で運ばれた

息子が消防団で、車で乗せられて、あれ持っていかねばこれ持っていかねばと思っていたが、高台に上ってから家にものをとりにいった人は見なかった。よかったのは明るい時だったってこと。海の状況もそこから見えたから、あれを見ていたら戻らないね。（聞き取り5、高浜）

■すぐに高浜小学校に避難した

自宅で昼食後、一休みしていたら地震。心配で家から出たり入ったりしていたが、揺れがとても長かったので津波が来るような予感がした。／一緒に居た孫から「逃げよう！」と言われたので2人で逃げた。／…バッグ1つとラジオ、コートを持ち、いつも避難する高浜小学校に歩いて向かった。小学校には歩いて5分もあれば着く。／校庭にも沢山人が居た。児童は、裏山に登ったという。津波は国道45号線まで上がり、消防団から「もう少し上がれー！」と言われたので更に上まで上がった。分団の方から「老人福祉センターに入ってください」と指示があり、行ってみると人がいっぱいだった。（体験談3、金浜）

■何も持たずに高浜小学校に孫を迎えに行き助かった

自宅で地震。外に出たりしていたが、2人の孫を迎えに夫と高浜小学校に向かった。地震直後、何か物を取りに家に入ろうとしたら夫に「命と孫が大事だ！」と言われたので何も持たずに車に乗ると、夫はいつの間にか家に入ってたばこを持って来ていた。やはり地震が大きいので大きな津波が来るかもしれないとは思っていた。／小学校に着くと学校から「今日は児童を帰しません」と言われた。どうしようかと思ったが、「老人福祉センターに上がりなさい」と聞いたので上に避難した。／孫を迎えに行ったのが良かったと思う。家を出る時は、孫を自宅に連れ帰らなければという気持ちだけで行った。今でも夫と、「孫らに助けられたな」と話している。（体験談8、金浜）

高浜には漁協の施設があり、「聞き取り3」は金浜在住だが地震発生当時は高浜の漁協施設で勤務していた事例である。地震が起きてすぐ、作業をやめるよう指示し、車で最寄りの高台に避難している。全員無事に避難しており、その過程に迷いや混乱はみられない。足が不自由であるという「体験談1」も、地震の後、迷うことなく屋外に出て、安全な場所に避難している。「今回皆がえらいと思ったのは、『この地震では津波が来る』と判断した方が多い」という表現も決して誇張ではない。後にみるように、高浜の住民は震災以前から熱心に避難訓練を行うなど、全体に防災意識が高かったことから、迅速に避難できた人が目立つ。また、これも後にみるが、津波の前に消防団がポンプ車で高浜を巡回し避難を呼びかけたことも影響していると考えられる。さらには、津波そのものも金浜と比較して小さく、これら諸々の要因が重なり被害が小さくなったと考えられる。

他方で金浜の「体験談3」をみると、結果として避難しているものの、地震直後は避難するかどうか逡巡している。「いつも避難する高浜小学校に歩いて向かった」とあり、避難訓練に参加していたが、いざ地震が起きてみるとなかなか決断ができなかったことがわかる。「体験談8」も同様に、すぐ避難に踏み出せず、家から出たり入ったりしている。「孫を迎えにいく」という名分がなければ、ひょっとすると避難しなかったかもしれない。他にも、金浜では当初避難をためらったケースが多くみられ、それによっても被害が拡大したと考えられる。

イ　自宅やその周辺から、混乱しながらも避難した例

地震の発生時に自宅やその周辺にいた人のなかには、避難したにも関わらずそこに津波が到達し、あるいはさまざまな事情により避難に時間がかかり、混乱の末に間一髪で難を逃れたと語る人も多い。とりわけ金浜において、避難できるかできないか紙一重であったケースが数多くみられる。ここではそのような、なんとか助かったケースをと

りあげる。

■江山寺の裏手に避難したものの流されかけた

金浜の自宅に1人で居て地震。表に出ると、2回目の揺れで戸が勝手に開きだしたので、こんなに力があるのだなと驚いた。余震が続いていたが、家の中に入り戸のカギを掛け、腕輪、時計などを取り出した。高い所に置いていた鉢植えが落ち、絨毯が土だらけになったのを見て、帰ってきて掃除するのが嫌だなと思い、隣の部屋の鏡台を割れないように下に伏せた。／3月3日の避難訓練には毎年参加していた。大きな避難リュックには、袋を3つ、はおれるもの、懐中電灯、サンダルを入れていた。その他、野宿なら寒さが大変だと思い、綿入れとコートを持って外に出た。家を出た時、放送で「3メートルの津波が来る」と聞いたので、「金浜の堤防は5、6メートルだから戻れる」と思った。一緒に避難しに来た知り合いは薄着だったので、「もっと厚い服を持って来て」と一旦帰した後、一緒にいつもの避難所である金浜の江山寺の後ろに行った。そこには5、6人ぐらいは来ていた。／疲れたのでその場に腰を下ろしていると、真っ黒い津波が見えた。津軽石と赤前の堤防を何倍もの高さで越えて、テレビや記録映画でも見ているような感じだった。そうしているうちにバリバリと板が倒れる時のような音がして、見下ろすと自宅に2、30センチ水が入ったなと思ったらすぐに倒れた。津波は勢いがある。「ここに居ても危ないからもっと上に逃げよう！」という声がしたので一緒に逃げた。上の線路や道路に行くには、お寺を降りて少し下に下がらなければならず、私達が宮古道路に移動した後、通った道に屋根が流れて来ていたので危機一髪だった。（体験談12、金浜）

■津波など来ないと高をくくり、夫に怒鳴られて避難した

夫、次女と3人で自宅にいると地震。夫に「地震だ、逃げろ！」と言われたが「大丈夫、津波は来ないから行かなくてもいいよ」と家の中に居た。すると夫に「小馬鹿もの、何してんだ！逃げろ！」と怒られたので、準備をしに2階に上がるとテレビが落ちていた。仕事が休みだった娘に「大きな津波が来るかも知れないし、どうなるかわからないから着替えして」と言い、逃げる前に台所のドアを開けた。夫もガスを止めて一緒に近くの江山寺に上がった。貴重品は全部持って逃げたが、こんなに大きな津波が来るとは思っていなかった。／お寺の人が「水が引いた！引いた！」と言うので、見に行こうとお墓に上がった。間もなく、「あー堤防を波が越えた！」という声がして、ゴーゴー、バリバリという音とともに一瞬のうちに何も無くなった。泣きながら「家が！家が！」と騒いで半狂乱になった私をどうしたらいいか困ったと後で娘に言われた。…自宅が流される前、長女が市内の会社から車で自宅に駆け付けた。…次女が「大丈夫、来ないよ」とのんびり歩いていたので、「何やってる！早く歩け！」と怒ったようだ。（体験談9、金浜）

■ものを取りに高台から下り、逃げ遅れかけた

山と麓に2軒自宅があり、山にある明治に建てた古い家に居る時に地震。電信柱が動き、周りの木も倒れそうなすごい揺れだった。ガラスの木戸はなかなか開かず、ようやく外に出た。揺れが落ち着いた頃、食料や水などを持ち先祖代々の物を取りに麓の家に下った。その時は、倒れた物で道路が塞がっては大変だとばかり考えて、津波のことは全く頭になかった。／途中で高台に避難する知人に会い、少し話をしてそのまま下ったので、すれちがった方は、後で私を心配したらしい。江山寺の入口で「はてどっちを廻ろうか、国道に出ようか？」と迷っているうちに波が堤防を越えるのを見た。船が乗った黒い波がガッパリ口を開けて、知り合いの家々を飲み込んだ。見ているとお寺の鐘つき堂が倒れて、これはだめだと思い、歩いたのか這ったのか、お寺の観音様の後に上がって見たら下が海になっていた。すごかった。／本堂には車が突っ込み、驚いて腰が抜けて骨堂に座り込んでしまった。お寺の位牌堂の2段目ぐらいまで波が来たようだ。近くにいた男性は「何が起きたか」と男泣きに泣いていた。骨堂裏から道路に上がり、麓の家に居るはずの夫を待っていたがとうとう登ってこなかった。（体験

談5、金浜）

■避難するか迷っているうちに逃げ遅れかけた

昼寝をしていた。下からの揺れを感じて地震だなと思った。私の家はあまり揺れなくて冷蔵庫の上の紙袋が1枚落ちただけだった。／余震があるのでテレビを押さえながら、妹と娘と3人で炬燵に入っていた。その時、誰かに声を掛けられたような気がしたので外に出たが誰もいなかった。すると前の家の奥さんだったようで、「これ、逃げねえすか」と声掛けに来た。それでこれは津波が来るから逃げようと思ったが、妹は「ここまで来ないよ」と言って逃げようとしなかった。／呼びに来た奥さんが「津波を見た事が無いからそこに上がって見よう」と言うので、一緒に線路に上がり海を見ていると藤の川の方に黒い波が見えた。誰かに「津波が来た！降りろ！」と言われ、妹を1人残していたのが気にかかり家に向かった。／途中で転んだりしたが何とか家に着き、「津波が来たから逃げよう！」と言うと妹は「それなら逃げようかぁ」という調子だった。バタめかず、腰が抜けたのかもしれない。そうして2人で走ったが、途中でまた転んでしまった。そうこうしているうちに後を見たら、波が線路を越えていた。私は急いで走ったが、首まで水に浸かりようやく何かに掴まった。でも、妹は帰らぬ人になってしまった。体格もよかったので逃げ遅れたのだろう。／やがて波が引いたので、「あー自分は助かるなー」と思った。おそらく足が土についていたのだと思う。そうでなければひき波で流されただろう。／上で見ていた人達は、2人とも流されたと思ったそうだ。水に浸かりながら後を見ると自宅が動き出していたので、「妹は流されたし、家も終わりだな」と落ち込んだ。／…今回私は、あまり揺れを感じなかったので、近所から声を掛けられなければ家に居たと思う。津波が線路を越えるとは思わず、波を見ようと井戸端会議をした事も時間ロスだった。そのまま上に逃げれば良かったが、妹を1人残すわけにもいかないと思い自宅に戻ってしまった。（体験談7、金浜）

■逃げるか迷い、話しているうちに逃げ遅れかけた

大きな地震が来て、「これは大変だなぁ、でもなぁ」と思っているうちに揺れが収まった。近所の方3人で「地震が大きいから、ガスの元栓だけは閉めよう」と閉めた。／しばらくしてまた余震が来た。2回目の揺れで電気が消えたと思う。…あれ電話かなあと受話器を取ると、中国にいた次男から「お母さん！中国で日本の東北に3㍍の大きな津波が来ると言っているから早く逃げろ！」と言われた。…「中国では大きな津波だと騒いでいるよ！」と言われたが、「3㍍といっても堤防もあるし」と思っていた。／息子に逃げろと言われたので、救急リュックを取りに2階に上がろうとしたが、揺れでなかなか上がれなかった。この揺れでは、本当に津波が来るかもしれないと思い、通帳や印鑑などを入れたバッグを持ち、孫に会った時のためにと仏壇の前で先祖代々の物は持たずにおやつだけリュックに入れた。なるべく厚着をして、そばにあった綿入れを持って近所に声を掛けたらもう誰も居なかった。これでは大変と慌てていたら、外では長男が会社から戻ってのんきに車を洗っていた。私が逃げる時に洗い上げていたので「津波が来るというから逃げよう」と言うと、「寒いから着替えをするので、待って」と家の中に入ってしまった。私は、待っても居られないと思い、逃げたのが良かった。息子は、体力があるので、波が来ると柵を越えて真っ直ぐ三陸縦貫道に上がっていた。危なく波に追いつかれる所だったそうだ。／私が逃げる途中で、上に避難している人達が騒いでいた。何を騒いでいるのだろうと思いながら、ゆっくり歩いていると「来たよ！来たよ！早く逃げなさい！」と言うので後も見ないでそのまま上がった。後を見たら家が無かった。息子も津波に流されただろうと思った。／柵を越えた息子は、材木と一緒に手を上げて流れて来た男性の腕をつかまえて助けたそうだ。とても大変で、離そうかとも思ったらしいが、助けてやれば良かったと後で後悔すると思い、何とか引き上げたそうだ。…内蔵破裂だったが、盛岡の病院で助かったそうだ。／長男は、私に「待って」と言った事がとても心配になったらしい。流されただろうと思っていたので、道路の上で再会してお互いを喜んだ。／

近所の夫婦も2階に上がったまま家と一緒に流れてきた。そして1回目の波が引けた後、窓から顔が出たので、「だめ、だめ、後1回大きな波が来るから早く上がれ！」と息子が声を掛けた。ずぶ濡れだったが、2人とも引き上げて助かった。（体験談11、金浜）

■高台の畑に避難したものの流されかけた

自宅に1人で居て地震。階段の辺りにいて、余震の度に外に出たり中に入ったりしていた。その間に時計やラジオ、薬などを持ち出し、ご先祖様も背負って外に出た。それから自宅近くの昔避難所としていた高台の畑に向かい、親戚らと5人でいた。／上から見る波は黒かった。2回目の波が堤防を越えたのでこの畑まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。（体験談4、金浜）

■近所に声掛けしているうちに、逃げ遅れかけた

帰宅後に地震。家の中の物を押さえながら揺れが落ち着いた時に外に出て道を下った。近所の奥さんには「何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが」と言われた。／私の周りの家は、日中1人で過ごす人が4、5人居る。普段から交流があったので、さっきの地震で皆が腰を抜かしているだろうなと思い全員に声を掛けた。自宅に戻る途中で知り合いのおばあさんに声を掛けると「おめさんに声掛けられて良かったが」と出て来て、別のおばあさんと世間話が始まった。私は「寒いから家に戻るね」と言い、上着を取って家の前の道路に上がったら、津波がダダダーッ！と来て「あれ、何？」と言う感じだった。だから堤防を越えてくる津波を見ていない。その前に近所の方が家の前を車で逃げて来たので「何で逃げて来たのかな？」と思っていたら、その後波がワーッと来た。／いつも「自宅に津波が来たら全滅だ」と言われていたし、自宅はわりと高台にあったので逃げるつもりはなかった。下に留まっていれば私も流されたと思う。おばあさん2人は亡くなった。5人ぐらいに声を掛けたが1人だけ助かり、後は皆だめだった。（体験談13、金浜）

■夫とともに死のうと決意し、すんでのところで助けられた

自宅で地震。一緒にいた夫は2度脳血栓を患ったため、右半身に後遺症が残り不自由であった。／私は先ず戸を開け、…家から出たり入ったりしていた。横になっていた夫は起き上がろうとせず、「お父さん、皆が逃げたようだから逃げよう!!」と言っても返事をしない。3、4回言っても何も言わない。／夫は普段から「俺はこんな病気になって生きていても何も良いことが無い」と言い、私はその度に「そんなことはない、今はこんな病気が多いのだから自分だけじゃないんだよ。」と励ましていた。そのことを思い出し、夫は多分家と一緒に逝く気だなと感じた。／何も言わず横になっているので私は考えた。その時、70までも生きたし、1人寝ている夫をここに置いて自分だけ命があっても生き地獄だろうと思った。目に焼き付いてきっと命があるよりも辛いだろうと思った。短い時間に決断しなければならなかった。「よし、夫と一緒に逝こう」と決めた。死のうと思ったから、荷物を持つ必要もなく、何にも手をかけずに炬燵に入っていた。／周りはどんどん車で逃げる様子で、私達夫婦だけがポツンと残ったような感じだった。「どんな形で波が来るのかな、波に家が浮かんで段々水が入って来て沈んでいくのか、それもいいか」と思っていた。／…すると、宮古橋付近で仕事をしていた孫が吹っ飛んできた。「何やってるんだ！多分こうだと思った。逃げていないだろうと思ったら本当に居た！」。／私が気づいたら、夫は既に助手席に乗せられていた。急な展開で私の気持ちは元に戻れず真っ白で、何だろう何であそこに座っているのかという気持ちだった。「何やってる、もう津波がそこまで来てるんだから早く乗れ！」と言われたがそれでも理解できなかった。切り替えがきかないものだ。それからああ逃げるのかと思ったが、孫があれこれ持って来いと言っても手に着かなかった。ただ、…毛布を2つ車に投げ込んだ。／孫に乗せられて老人福祉センターに行く途中で何故か降ろされた。高浜小学校とセンターのどちらに行くか迷っている車や人で道路がごった返しだったため、孫は「交通整理をしてくる！」と行ってしまった。それで夫とセンターに歩いて向かうと「更に上の山に上がって下

さい」と言われた。急階段で大変だったが若い人の助けもあって何とか上がった。（体験談6、金浜）

■岬で津波を見ていて逃げ遅れかけた

津波当日は埠頭のところで仕事をしていて、地震が来ていちど家まで行き、湾に突き出た岬で波が引くのを見ていた。津波が来る前には高浜のほうまで海底が見えた。来たのは黒い波だった。湾の入口の方向に見える近くの堤防のところで大きな船がひっくり返ったのを見て、近くの高浜小学校へ車で上がった。老人福祉センターの手前に車が2台逃げていたが、前の方の車に乗っていた女の人が波を見て車を置いて逃げてしまった。ぶつけるわけにもいかずどうしようかと思っていたら水がどんどん入ってきた。降りることができず車の中にいて、そのまま少し流されて、浮いているトラックなんかとドーンってぶつかってきた。車で高浜小学校に避難した人はグラウンドに入って停めて、小学校の校舎の裏の山に登った。（聞き取り4、金浜）

■高齢の義姉と高浜小学校の校庭で流されかけた

地震の時は自宅に居た。かなりの揺れでテーブルに掴まったまま動けなかった。天気が良くて昼寝の後に干していた洗濯ものをたたもうとしていたら地震だった。落ち着いてから、また洗濯ものをたたみ直した。…／「大きい津波が来るから高い所に早く逃げなさい」と放送があったので娘と義姉と3人で車に乗った。その後の放送はぷっつり消えた。／夫は、家の前で作業をしていたので放送を聞くとすぐに自宅後ろの高台の畑に上がっていた。私が外に出て避難する時に上に居る夫に「高浜小学校行くべす！」と騒いだが聞こえなかったようだ。高台にいるので大丈夫だと思って置いて逃げたがそのまま亡くなってしまった。まさかあの高さまで波が来るとは思わなかった。／車で高浜小学校の校庭に上がり、沖を見ているとあさり掘りをする時のように海に水が無くなっていた。私は、まさかこんな津波が来るとも思わず、「あさり掘りが出来るなあ」と言った。そうしているうちにいつもの波が来た。あら、きれいな水だと思っていると、次に来たのが真っ黒い泥水と何処を通ってきた水なのか、がれきが混ざっている波が来た。家が流れて皆パラパラに壊れていた。「あー流れた、流れた」と言っているうちにやはり校庭にまで波が来た。／娘は先に山に上がっていて、私は直ぐに逃げる事ができず、どうしようもなかった。波がひざまで来る中、91歳になる義姉を連れて逃げた。辺りの人から「走れー！走れー！」と言われたが、高齢の姉を連れて逃げるのは大変だった。本当に心細かった。ようやく引っ張って歩いていたら途中で転んでしまった。起こそうとしたら波が来て倒され、老人福祉センターの山にぶつかった波の勢いでまた反対側に倒れて、すっかり頭からびしょ濡れになった。姉とはずっと手を繋いで、波で転んだ時も水を飲まないように口や鼻を押さえていた。／学校の校庭には、沢山の車が来ていたのに辺りを見たらそれまであった車や人が誰もいなくなっていた。騒いでも何も聞こえなかった。児童も校庭の端に丸くなっていたが、先生の一声で山に上がったようだ。2人だけ残って「あー終わりだな」と思ったら力が抜けて全然動けなかった。…／しばらくして、上の方から若い人達が2人水を漕いで走ってきた。姉を引きずって山に逃げてもらった。自分もそのまま山に上がり、また波が来るかと思い、暗くなるまで山にいた。下着や布団を借りて姉を寝かせたが、私も体中濡れて寒かったので、一晩寝ないで過ごした。（体験談10、金浜）

■防潮堤下の作業小屋に下り、逃げ遅れかけた

地元の床屋で散髪を済ませ家に向かおうとしたとき電柱が大きく揺れた。「いつもとは違う」。津波を覚悟し、急いで防潮堤のすぐ下にある作業小屋に向かい、網などの漁の道具が入ったかごを持ち出す準備をしていた。湾内の海水は底が見えるほど引いていった。間もなく対岸の白浜地区で白い波しぶきが空高く上がり、次に高浜を襲うのを目にした。金浜は白浜からの跳ね返りの波と沖から直進する波が合わさって盛り上がる場所。高台へ急ぎ、間一髪助かった。（体験談16、金浜）

以上、11の語りを引用したが、どれも緊迫した内容であり、一部には逃げ遅れてしまった人の話も含まれている。最初の3つが江山寺付近に避難した例、次の4つが線路・三陸道やその付近の畑などに避難した例、さらに次の3つが高浜小学校付近に避難した例、最後の1つが不明の例、と分けることができる。

まず、江山寺付近に避難した人たちの例を検討する。南北に細長い金浜のちょうど中心に位置するのが、小高い丘の中腹にある江山寺である。「体験談12」は、毎年避難訓練に参加し「避難リュック」を用意しており、落ち着いて避難行動をとることができている。江山寺の後ろに上がり、すでにいた5、6人とともに腰をおろしたことで安全は確保できたはずであった。しかし実際にはそこまでも津波が到達しそうになり、三陸道に移動することに決めたが、それには一旦少し下に降りなければならず、危機一髪で間に合った。避難したにも関わらず、予想を超える津波が来襲し、危うく飲みこまれそうになったのである。金浜は津波の浸水高が高く、このように、避難したにも関わらず津波に巻き込まれかけるという状況が生じた。次に「体験談9」は、当初津波など来ないと高をくくり、夫に怒鳴られてようやく避難を始めている。やはり江山寺に避難し、お墓から津波を見ていた。呑気に構えていた次女も長女に叱られて避難しており、家族同士で声をかけあうことが、安全に避難するうえで重要であることがわかる。「体験談5」は、高台にいたにも関わらず、ものを取りにいくために下り、江山寺の入口で津波が堤防を越えるのを見て、慌てて観音堂の上に上がり、難を逃れた。その近くには別の男性もいたとあり、江山寺付近には相当数の人が避難していた。江山寺付近は周辺に住む人たちの避難場所となっており、実際そこに避難した人は相当数いた。しかし、本堂、鐘つき堂、位牌堂など江山寺の施設の一部が津波に襲われており、その場所は安全ではなかった。そのまま江山寺付近に留まった人もいれば、危険を察知してそこから少し下り三陸道に上がった人もいたが、いずれにせよ、間一髪で助かっている。想定を越える津波が押し寄せ、訓練通りに避難した人でさえ、危険にあうのだということがわかる。

次の4つは線路・三陸道やその付近の畑などに避難したケースである。「体験談7」は、混乱の末なんとか助かったものの、妹が逃げ遅れてしまった。当初はさほど切迫しておらず、近所の人の声かけにより腰を上げたものの、避難というより津波の様子を線路の上に見に行ったのであり、津波が見えてから、逃げようとしない妹を迎えに再び自宅に戻り、結果として2人とも津波に浸かり、妹は亡くなってしまった。「体験談11」も、当初は避難するか逡巡しており、近所の人との話し合いと次男からの電話でようやく避難を始め、引き止める長男をおいて三陸道へ上がり、すんでのところで助かっている。本人も呑気だが、長男は地震の後も洗車しているなどさらに切迫感が欠如しており、結果としてぎりぎりのところで助かっている。「体験談4」は「体験談12」と同様、津波が来る前に避難を終えていたにも関わらず、そこまでも津波が押し寄せ、逃げ遅れかけた例である。実際、そこにいた5人のうち3人が逃げ遅れて亡くなっている。「体験談13」は、近所のお年寄りに避難を呼びかけているうちに逃げ遅れかけた例である。声かけをしたものの、その相手は逃げなくてよいなどと言って、他の人と世間話を始めるなど切迫感がなく、結果として声かけした5人のうち4人が亡くなってしまった。本人はたまたま家の上の道路に上がって難を逃れたが、タイミングがずれていたら、同じように津波に巻き込まれていたと思われる。

さらに次の3つは、高浜小学校付近に避難した人たちである。「体験談6」では、身体の不自由な連れ合いが避難しようとしなかったため、自分も一緒に死のうと決意したものの、孫が駆けつけ高浜小学校へ連れていかれた。この場合、津波が来るという危険を理解しながらも、短時間のうちに「避難しないで夫と死ぬ」という決断をしたことが注目される。身に危険が迫ったとき、それを避けようとするのではなく、あえて死を決断する可能性もありうるのだということがわかる。「聞き取り4」は、岬で湾口から津波が押し寄せるのを見てから避難を始めている。車で高浜小学校へ避難したが、渋滞しており、押し寄せた津波に車ごと流されかけた。高浜小学校は高さが10メートルほどあり、避難場

所に指定されていたが、校庭に1・5メートルほど津波が入っている。「体験談10」も、高浜小学校に車で避難した例である。校庭から見ていた津波がやがて押し寄せたが、高齢の義姉と一緒だったため思うように動けず、水に浸かり、ようやく助けられた。後述するように高浜小学校付近では避難誘導が比較的スムーズに運んだが、これらのケースをみると、多くの人と車でごったがえし、さらに予想を超えて校庭にまで水が押し寄せたことで、車のまま流されかけた人もいるなど、混乱が大きかったことがわかる。

このように、金浜では、避難したにも関わらず津波に襲われたり、避難に手間取り逃げ遅れかけた例が数多くみられ、混乱が大きかったことがわかる。高浜と比較して、押し寄せた津波が大きかったこと、避難訓練や防災意識など日頃の備えが必ずしも行き届いていなかったことから、被害が拡大したといえる。

ウ　自宅やその周辺で、逃げ遅れてしまった例

すでにあげた語りの中にも、逃げ遅れた人たちについての例がいくつも含まれている。まずは、金浜で逃げ遅れ亡くなった28人のうち一部についてのものと思われる、網羅的な語りを見てみる。

■逃げ遅れた人たち

若い人のなかには避難して戻って亡くなった人もいる。財布を忘れて戻って亡くなった人がいた。ある女性は車を親戚の家に避難させて、ものを取りに歩いて戻って、2階にいたところ流され、山側に流されて見つかり助けたが寒さなどで亡くなった。寝たきりの高齢者で亡くなった方もいる。奥さんが亡くなって、旦那さんが2階から屋根に上がって助かったという方もいた。平屋のなかで首まで浸かって助かって宮古道路に上がってきた人もいる。2階にいて避難せずに流されて亡くなった人もいる。立ち話していて流されて亡くなった男性もいる。（聞き取り4、金浜）

以下、一部すでに触れた例と重複するが、逃げ遅れてしまった個別の場合である。

■江山寺の本堂に避難したが、水が入った

今回の地震で私のおばが（江山寺の）本堂の中で亡くなっていた。膝が悪いから神社まで歩けなかったのではないか。そこで見たという人は、だめだそこは津波が越えると言ってから、その裏のほうへ上がっていったという。1週間位捜したが見つからず、息子が千葉から来て一緒に探して、結局自衛隊の人が見つけてくれた。本堂の中の後ろの柱のところで寄りかかるようにして亡くなっていたという。おそらく逃げることはできたものの、寒さで亡くなったのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

■宮古道路に上がるのが間に合わなかった

2回目の波が堤防を越えたのでこの畑（注：避難していた高台の畑）まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。そのうちの1人だと思うが、「おーい、おーい、おーい」と3回呼ぶ声が聞こえた。波が線路まで来ると思い、逃げるのに手いっぱいで、後を見ることができず上の山に走り登った。そして宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない。（体験談4、金浜）

■近所に声かけしたが、世間話が始まり逃げ遅れた

近所の奥さんには「何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが」と言われた。私の周りの家は、日中1人で過ごす人が4、5人居る。普段から交流があったので、さっきの地震で皆が腰を抜かしているだろうなと思い全員に声を掛けた。自宅に戻る途中で知り合いのおばあさんに声を掛けると「おめさんに声掛けられて良かったが」と出て来て、別のおばあさんと世間話が始まった。…下に留まっていれば私も流されたと思う。おばあさん2人は亡くなった。5人ぐらいに声を掛けたが1人だけ助かり、後は皆だめだった。（体験談13、金浜）

とりわけ金浜では、助かるか逃げ遅れるかが紙一重であったような例が数多くみられる。「聞き取り3」のように、避難したにも関わらず、足が悪かったため、予想を越えて大きかった津波に対応できずに逃げ遅れてしまったり、「体験談4」のように、やはり避難していたにも関わらず、階段の場所を知らなかったために押し寄せる津波から逃げきれなかった例もある。また、「体験談13」のように、津波が来るという切迫感がなかったために逃げ遅れた例もある。

なお、2011年5月22日、金浜の死者のうち19名の合同葬儀が磯鶏修道場でとり行われている（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）。

エ　金浜で働いていたり、たまたまいた人の例

金浜には三陸自動車道と国道45号線を結ぶインターチェンジがあり、その周辺を中心に、4階建ての「宮古温泉マース」のほか、自動車販売店3軒、コンビニエンスストアなど、商業施設がいくつもあった。地震・津波が起こったとき、それらの施設やその周辺、そして道路を走る車両には相当の人がいた。

■逃げられず亡くなったコンビニの従業員

金浜のコンビニ従業員だった30代のお母さん2人は、客がいて逃げられずどちらも亡くなった。そのうち1人は地元の人で、どこでもある話だが気の毒だった。消防団員が筏をつくって綱をつけて助けたという話もある。金浜は車屋が3軒あったから、津波の後、何百台もの車が流されてあふれていた。（聞き取り1、金浜）

■コンビニからマースに流れついた女子高生

ローソンに買物に来ていた親子が流されて、お母さんは亡くなったが、高校生の子どもは助かった。屋根にしがみついたまま、1回目の波で流されて、引き波で1回海まで行った。それで次の波でまた押されて戻り、たまたまマースにぶつかって、その拍子で転がって3階の床に着いて、非常灯めがけて進んで4階に行って、自力で助かった。（聞き取り4、金浜）

■看板にまで上がり助かったマースの従業員

マースに逃げた人はおらず、地震当時にいた客はみな帰して、残っていた従業員十何人かは、4階まで上がって最後は看板まで上がった。流されてきた女子高生も一緒だった。翌日、自分たちで老人福祉センターまで来た。（聞き取り4、金浜）

■三陸道に車が停まっていて避難してきた車が上がれなかった

宮古のほうから三陸道を来ると、金浜のカーブのところで海が見えるため、車を停めてそこで見ていた人がいた。それで下から来た車が、先が詰まっていて上がれず、それでやられた人もけっこういた。マースでタンクローリーがボイラー用の灯油をおろしてその帰りにローソンで休憩していて流された。（聞き取り4、金浜）

■三陸道をずぶ濡れの人が歩いてきた

道路（注：三陸道）に立っていると、ずぶ濡れのスーツを来た男の人が半泣きで線路を歩いて来た。その方は、自動車で津波に遭い、車ごと線路の法面に上がったので、「今だ！」と車から降りたそうだ。言葉の感じから、この辺の方ではないようで、次の駅まで歩く途中だった。私達は、宮古の鉄橋が壊れていることも知らず、線路沿いに行けば大丈夫だろうとそのまま分かれてしまったので今も気がかりだ。（体験談12、金浜）

大地震が起き防災無線で津波警報が発令されたにも関わらず、コンビニエンスストアの店員は営業をやめることができないという状況があった。推測するほかないが、本当に津波が来るかわからないから、あるいは客がいるから、という理由でそのまま店を開け続け、結果として店員も客も津波にのまれてしまったのだろう。他方、温泉施設マースの場合は、非常時のマニュアルが機能している。素早く客を帰し、従業員は4階に避難して難を逃れた。ただし、帰された客は果たしてみな助かったのか、という疑問は残る。

また、金浜で亡くなった方々のうち、金浜の住民以外のほうが、金浜の住民よりも多いという点は強調しておかなければならない。「金浜の住民で亡くなった人は28人だが、金浜で亡くなった人は70人ほどいると聞いている。買物していたり車で走っていたりした人が亡くなったのだろう。」（聞き取り4）。つまり金浜では、住民28人が亡くなった他に、実は42人もの、住民以外の方々が亡くなっている。その方々については、わずかな情報を除けば、ほとんど知ることができない。「聞き取り4」「体験談12」にあるような、たまたま通りかかって三陸道へ車で避難を試みて叶わなかった人がどれほどいたのか、そしてそれはどのような状況だったのか、詳しく知ることができない。本調査のように、特定の地域を対象としその（元）住民に話を聞くというやり方をとると、たまたまそのときそこに居合わせた人々については、断片的にしか知ることができないという点は、この調査方法の限界を示している。

オ　地震発生時に他所にいて、避難・帰宅した例

地震が発生したのは平日の午後、多くの人が仕事に出ている時間帯である。実際、高浜や金浜で得られる地震津波の経験についての語りの多くがお年寄りであり、高浜や金浜の住民のうち、働き盛りの年齢の人の多くが、勤務先で地震・津波に遭ったと推測できる。

■地震直後、藤原から高浜へ車で戻った

藤原にある勤務先の水産加工会社事務所で仕事をしていた時に地震があり、とても揺れたためすぐに車で帰途についた。地震後すぐに停電したため信号もついてなかったが、国道45号線はまだ通行できた。（聞き取り1、高浜）

■田老の職場から金浜に歩いて戻った

田老の水産加工関連施設の事務所で地震。…／車を流されたのでしばらく待っていると宮古に向かうという町内の方の車に4人乗せられた。16時30分近くだったと思う。途中、早稲栃の辺りで車が並んで動かなくなったので脇に寄せて皆で歩き始めた。常安寺の方に降りて横町の道路を歩くと高京前まで車が全部流れて来ていて通られない状態だった。間の道路も全部車で塞がっていた。サンダル履きなので歩くのも大変だった。宮古小学校が避難所になっていたが入ることは頭になく、知人の所で連絡が取れるか、自転車でも借りられるかなどと考えていた。

宮古小学校の角で他の人と別れ、知人の所に行くと停電のため真っ暗で誰も居なかったのでそのまま山口川沿いを歩き始めた。小山田橋を渡り、交通整理をしていた婦警さんに「金浜に行きたいが行けるか？」と聞くと「行けるかもしれないが、行かないほうが良いです」と言われた。…とにかく家に帰らなければというのが頭にあったので進んだ。途中で会った知人から「金浜の下の方は全滅だぞ」と聞き、まさか自分の家も？と思った。私は普段から「自宅まで津波が来るぐらいなら宮古自体が全滅だろうし、ありえない」と話していた。とにかく帰ろうと八木沢街道を歩いていたら、自宅に辿りつけずに職場に戻ろうとしていた近所の息子さんに出会った。私は裏道を知っていたので一緒に連れて歩いた。／宮古道路の下の細い道路を歩いて家に着くと、真っ暗だが家の格好は残っていた。着いたのは20時30分頃。3時間はかけて歩いたと思う。（体験談14、金浜）

■宮古の中心街から金浜に向かった

地震が発生した時は商工会議所で仕事をしていた。その瞬間、津波が来ると判断し、家族、中でも家にいる母親が心配になった。すぐに家に向かい、出会い橋、八木沢周りで金浜に近づくが、海水とがれきで近づくことができない。何とかして家を見たい、母親はどうなっているのかという思いで、線路に近い山際を通り家に近づくと、家は崩れ、海水の中で屋根だけがみえていた。真っ黒な渦の中に人や崩壊した家、泥まみれの家財道具、海から流されてきた漁船、カキ、ワカメの養殖棚、自動車などが浮き、まったく地獄絵図そのものに見えた。屋根の上で右往左往している近所の人を見つけ、周囲の人たちと協力して運よく

救助することができた。着替えをさせ、焚き火をして体を暖めた。母親は、地震後に友だちと外に出て立ち話をし、近所の人に「早く逃げて」と声掛けしたらしい。それ以降の母の情報は途絶えた。山田町でケアマネージャーの仕事をしていた妻が心配になり、夕方に山田町に行ったが、がれきで通れずあきらめ、金浜に戻り、軽トラックの中で一夜を過ごした。（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）

■山田町にいて、町内の避難所に避難した

地震が発生した時は、ケアマネージャーとして担当していた山田町の方の家で会議を終えたところだった。その家の家族に避難を促し、その他に2件安否確認をした後、自分も車で避難した。途中で津波に遭遇し、車を降りて慌てて小高い所まで走り後ろを振り向くと、大きな波が今まで乗っていた自分の車や他の車や木々や家まで全てを呑み込んでいた。何事が起きたのか理解できず、数分その場に立ち尽くしていた。山田北小学校へ誘導され、その晩は体育館で過ごした。とにかく寒く心が折れそうになる。金浜の家は大丈夫だろうか、不安が頭をよぎるが考えないようにした。（船越典子「二、家族の証言　（一）船越典子」）

他所で地震に遭った人々は、自身の身の安全のためにとりあえず避難するものの、その後は一様に家族を心配し、自宅に戻ろうと試みている。「聞き取り1」の例では、藤原の職場から自宅のある高浜まで比較的近かったことから、津波が来る前に車で戻ることができている。ところが「体験談14」の例では、職場のあった田老と自宅のあった金浜がかなり離れており、また宮古市街の手前で浸水のため車から降りて歩かねばならず、結果として3時間もの時間がかかっている。宮古市街にいた船越恭治氏の例でも、すぐに金浜に戻ろうとしたが、着いたころにはすでに津波が押し寄せた後であった。さらに、山田町で勤務していた船越典子氏は、車を流され、山田町の小学校体育館で不安な夜を過ごしている。地震津波の発生時にどこにいたのかにより、自分、そして家族や親しい人の安全を確保できるかどうかについて、大きな違いが生じたことがわかる。

(3) 避難に関する考察

ア 初動のあり方

■避難場所と避難所の概要

体験談や聞き取りをまとめると、高浜および金浜における、地震後の避難先を以下のようにまとめることができる。高浜の住民は、地震後、主として3か所に避難した。まず高浜地区の中心の山側に位置するコープケミカル住宅裏の高台空き地、次に地区の北東端に位置し後に仮設住宅が建設される高台の空き地である。地区の南西端、金浜との境界に位置する高浜小学校に避難した人もいたが、宅地からやや離れているため、少なかった。

金浜では、人々は大きく4か所に避難した。「金浜は南北に分かれていて、行き来するには（間にある）山を越えなければならない。おそらく南側の人たちは三陸国道のある山のほうに、北側の人たちは神社か、八木沢のほうへ上がっていくしかないため、そちらへ逃げたのではないか」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。これを含む複数の語りを総合すると、避難先は、まず地区の中心に近い江山寺付近、次に三陸縦貫自動車道やJR山田線の線路、金浜地区の北端に位置する金浜稲荷神社・高浜小学校・金浜老人福祉センター付近の高台、そして地区の西方面、八木沢方面へ抜ける道の先にある高台であったと考えられる。なかでも三陸縦貫自動車道付近と高浜小学校付近の高台に、多くの人たちが集まっていた。

■津波の来襲

高浜と金浜に押し寄せた津波とそれによる被害を、避難した人々はどのようなものと見たのだろうか。

まず高浜では、津波は湾口方面から入り、次いで引き波が高浜小学校方面から押し寄せた。「高浜では、津波は堤防の切れ間、信号がある

ところ（注：国道45号と旧道の交差点、高浜集落の北端）からガーっと入ってきた。ただし確かに堤防を超えたがそれほどではなかった。しかし高浜小学校の前あたりにぶつかった後の引き波が高浜に入ってきた。水門が壊れたところから水がたくさん入ってきたらしく、消防団の屯所があるあたりが一番ひどかった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。「高浜の北側は防潮堤がないものの倒れた建物はなかったが、南側は建物がけっこう倒れて何も残っていないところもあり、近くの水門もひしゃげていた。消防団の屯所もそうだが多くは返し波でやられていた。水の逃げ道をつくってやらなければならない」（聞き取り1）。「（高浜の）いま仮設住宅がある場所に避難し、そこから金浜の堤防が破けたのを見たし、我が家の前に水門があるが、それが壊れたのも見えた。宮古の方からというより、引き波が運動公園のほうからわあっと来た感じがする」（聞き取り5、高浜）。最初に湾口方面から集落に入った津波はそれほどではなかったが、高浜小学校方向からの引き波はかなり大きく、被害も集落の南東部がより大きい、ということがわかる。

他方、金浜に押し寄せた津波はさらに激烈なものであった。「金浜では高浜小学校の近くですごい水柱が立ったと聞いている。津波と返す波がぶつかったのではないか」（聞き取り1）。金浜の津波がとりわけ激烈なものになったのは、2つの方向から波がぶつかったためであると考えられる。「早めに避難して老人福祉センターから見ていた人がいうには、センターから見える金浜の北側の集落の中で津波が渦巻いていた。宮古湾の入口の方から流れ込んできた津波と、津軽石のほうから戻ってきた引波が金浜でぶつかってとぐろを巻いたようだ。山側にあった家が海のほうに流されたり、海側にあった家が山側に流されていたり。水に浸かった家のほとんどが流されて動いていて、直して今も住んでいる家はわずかしかない。津軽石の水門を閉めたために、はね返ってこの辺で波がとても高くなった。法の脇や金浜はその水門のおかげで被害が大きくなった」（聞き取り4、金浜）。

また、2方向からぶつかった津波のうち、とりわけ強かったのは引き波だったようである。「高浜小学校のグラウンドへ入った波は津軽石の方向から流れてきた引き波で、その波は国道沿いに高浜の方まで流れていって、高浜の屯所のあたりもそれでやられた」（聞き取り4、高浜）。

地形、津軽石川の河口に設置された水門、そしてマース付近での防潮堤の決壊、それらが複合的に作用して逆流してきた引き波は、ちょうど金浜でぶつかりあい、津波浸水高が高浜の倍以上にあたる、11・38㍍にも達したのである。

■生死を分けた境界

避難が終わる前に押し寄せた津波は、一瞬にして多くの人の命を奪った。人々の語りの中でとりわけ目を引くのは、自分は避難できたものの、すぐそば、あるいはごく身近に逃げ遅れた人がいるという記述がいくつもあり、とりわけ金浜に多いことだ。逃げた人と逃げ遅れた人がほんの紙一重の違いのような状況が、そこかしこに、数多く存在したという事実に驚かされる。その、生死を分けた境界はどのようなものだったのだろうか。

まず、地域に共通した条件を確認しておきたい。地震の発生から津波の来襲までは約30～40分の時間があった。高浜や金浜は沿岸に集落があるが、最寄りの高台までの距離は、遠いところでも直線距離で200㍍程度である。30分で200㍍であれば、身体が不自由といった場合を除けば、十分に避難が可能であるように思える。防災無線は、途中で途絶えたが、少なくとも当初は全域に避難を呼びかけたはずである。しかし実際には、多くの人が逃げ遅れたり、逃げ遅れかけたりしている。

逃げ遅れずに済むか否かは、各々が地震発生時に置かれていた外面的な条件の違いによるものと考えることもできる。地震津波が起きたのは平日の午後であり、子どもは学校に、有職者は地域内外の勤務先に、高齢者は自宅にいることが多い時間帯である。当時高浜と金浜にいたのは、自宅やその周辺にいた人（多くは高齢者）、高浜小学校にいた小学生や教職員、また商業施設や作業場などで働いていた人、用事

でたまたま訪れたり通りかかったりした人などである。地震の発生時に、どこで誰と何をしていたのかは、当然ながら避難のあり方に影響する。

これまでみたケースに描かれた生死の境界には、これら外面的な条件だけでは説明がつかないものも多い。どこで誰と何をしていようと、この地域で大地震が起これば、人々は当然津波が来るものと考え、いかなるルートをとるにせよ、避難へと意識が集中するはずではないか。しかし実際のところ、以下の語りをみると、大地震が起きても、人々の意識は津波、そして避難へと直結するわけではないことがわかる。

「(注：地震の後、山にある家から麓にある別宅へ下りていく時)倒れた物で道路が塞がっては大変だとばかり考えて、津波のことは全く頭に無かった」(体験談5、金浜)。「これでは大変と慌てていたら、外では長男が会社から戻ってのんきに車を洗っていた」(体験談11、金浜)。「高い所に置いていた鉢植えが落ち、絨毯が土だらけになったのを見て、帰ってきて掃除するのが嫌だなと思い、隣の部屋の鏡台を割れないように下に伏せた。」(体験談12、金浜)。

これらの例をみると、大きな地震があれば津波が来て危ないということを頭ではわかっていても、まだ津波が来ていないときにそれを想像し、かつ避難行動に移すことは、現実には難しい場合がありうることがわかる。

さらに、周囲の人とのやりとりも、避難のあり方を大きく左右する。「体験談7」の女性は、「あまり揺れを感じなかったので、近所から声を掛けられなければ家に居たと思う」と回想しているように、地震の後しばらくは、たいしたことはないと考えていた。それが、隣人に声をかけられ「これは津波が来るから逃げようと思った」と思い直しており、第三者が後押しすることで、ようやく避難しようという気持ちになった。しかし彼女にとってより身近な妹が避難に同意しなかったことにより、引き戻されてしまう。後押しをした隣人とともに一旦高台に上るものの、その隣人もまたさほど切迫した様子ではなく、むしろ津波を見たいという興味のほうが勝っている。真に危険を感じたのはその後、自分たちに向かってくる黒い波を目の当たりにし、誰かに「津波が来た！降りろ！」と言われたときである。急激に気持ちが切迫し、途中で転びながらも家に戻り妹を急き立てるが、妹はまださほど焦っている様子ではない。なんとか妹を連れて走るが、津波に追いつかれてしまう。

以上をまとめると、地震発生時におかれていた外面的な状況に加え、地震津波についての当人の判断および対応や、同じく周囲にいた人の判断と対応が、避難のあり方に影響したといえる。地震の後、すぐに避難に移った人もいれば、大丈夫だと高をくくった人もいた。同じ家族のなかでも考えが一致しない場合もあった。揺れの大きさと継続時間、自宅など自分がいる場所の海岸からの距離、海面からの高さなど、地震津波の大きさをどのように見極めるかという問題に加え、過去に経験した地震津波の記憶、避難訓練に参加しているか否か、年齢や病気などからくる身体の（不）自由さ、寒さなどからくる動きたくないという気持ち、近所からの声かけ、一緒にいる家族に対する思いなど、さまざまな複合的な要因を、当人がどのように判断し、周囲の人と協調して避難できるかが重要である。それがうまくいけば、避難できる可能性は高まるだろう。

■防災無線が途絶えた

地震発生時、宮古市の観測所は、約160秒間、震度5強～5弱の揺れを観測した。気象庁は地震発生から3分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを3㍍としたが、15時14分には6㍍、15時30分には10㍍以上と、高さの予想が引き上げられた。当初、この津波警報は宮古市でも防災無線を通じて人々に伝えられたが、停電により途絶えてしまい、人々は津波の高さが当初の3㍍から大きく引き上げられていったことを知ることができなかった。

以下の証言をみると、このことが人々の避難を遅らせたり、人々に安心を与えて津波を見物に行かせたりしてしまった可能性があること

がわかる。「防災無線で3メートルと言っていたのを聞いた後、停電で防災無線が切れて情報がなくなった。10メートルの堤防があれば大丈夫だということになり、堤防に津波を見に行った。そこから津波が来て小学校に駆け上がった人もいる」（聞き取り4、金浜）。「防災無線から『宮古地方に20センチメートルの津波が来ました』と聞こえたが、それ以上の波が来るだろうと思った。…逃げている最中はその後の無線放送を聞いていない」（体験談3、金浜）。「『大きい津波が来るから高い所に早く逃げなさい』と放送があったので娘と義姉と3人で車に乗った。その後の放送はぷっつり消えた」（体験談10、金浜）。「近所の奥さんには『何、この間も波が来ないから逃げなくても良いが』と言われた。…『3メートルの津波』という放送は聞こえたが、3メートルは絶対越えないと思っていた。だから『何これ？』と言う感じで状況が飲み込めなかった。堤防が4メートルなので絶対堤防を越えないと思った。私は田老出身なので本当は逃げなければならないと知っていたが、その放送を聞いてしまったがゆえに絶対越えないだろうと思ってしまった」（体験談13、金浜）。

また、防災無線に対する慣れ、防潮堤があることからくる油断が、初動を遅らせた可能性もある。「それに何日か前の地震で10センチメートルの津波があったのでおばあさん達も油断して逃げなかったと思う」（体験談13、金浜）。東日本大震災の2日前、3月9日11時34分に起きた三陸沖地震・津波や（宮古市で震度4、岩手県で津波注意報が発令され、宮古市で津波の高さ10センチメートルを観測）、前年2月27日のチリ地震津波など、宮古市で地震や津波はさほど珍しいことではなく、むしろそのたびに聞くサイレンや放送に慣れてしまったことから、どうせ今回も大丈夫だろうという気持ちを起こさせた可能性がある。

さらに、サイレンや放送に緊張感がなかったという証言もある。「聞いた放送は『大津波が来ます、大津波が来ます』とゆっくりした放送で緊迫感がなく、はっきりは聞こえたが1、2回しかサイレンが鳴らなかったような気がする。放送の印象としては、波がピチャッと来るぐらいにしか感じなかった。／昨年のチリ津波の時の放送は、今回とは違って怖かった。サイレンがガンガン鳴って『津波が来ます！津波が来ます！』と聞こえ、これは座っていられない、逃げなくてはと感じた」（体験談1、高浜）。実際にサイレンや放送の声が変更されていたかは不明だが、ともかく緊張感のある放送であるか否かが、避難に影響を与えるということはいえるだろう。

イ　避難場所・避難所に関わる問題

■高浜の避難場所

高浜にいた人々は、地震の後、3か所に避難した。後に高浜仮設住宅が建てられることになる高台の空地、避難場所に指定されていたコープケミカル社宅の裏にある高台の空地、そして避難所に指定されていた高浜小学校である。このうち、コープケミカル社宅裏の空地における状況については、消防団第十一分団の分団長であった佐々木好栄氏による証言がある。

私は高浜のコープケミカル社宅の上にある高台の避難場所に避難した。避難所の高浜小学校へ行く道が通行できなかったため、結局そこに11～13日まで3日間いることになった。当初、67～68人がそこに避難しており、自主防災の倉庫や集会所もあったが、鍵を持っている人がそこに来ていなかった。仕方ないので社宅の集会所の1部屋を借りる了解を得て、窓ガラスを割り鍵を壊して、お年寄り19人に入ってもらった。最初の晩はそのほか倉庫に6人、資材置場に17人入ってもらったが足りず、屋外に26人があふれた。寒かったので、木材を集めて2、3か所で焚き火をした。社宅に住んでいる人の部屋から飲食物を持ってきてもらい、また私の家にも水が入ったが避難場所から近かったので、米30キロや調理器具を持ってきて、焚き火でごはんを炊いてみんなで食べた。お母さん方など女性が多く、知り合い同士も多かったが、たまたま通りかかって避難してきた人もいた。津波の水を被って低体温症になった子どもがいたが、その場に看護婦さんがいてこのままでは危ないということになり、母親と団員が3人で河南中学校まで山を越えて運び、救急車を呼んで助かった。中学校まで行って帰ってくるのに5時間かかった。他には避難所の高台に水をかぶった人はおらず、

車で流された人もなかった。地元の人たちの避難誘導は比較的うまくいったのではないかと思う。日が経つごとに人は減り、道路が通行できるようになったため、残った人も14日に金浜老人福祉センターに移動した。（聞き取り1、高浜）

この避難場所には自主防災の倉庫や集会所があり、地域の避難訓練でも避難先とされていたのであろう、避難所の高浜小学校へ移動できない、鍵をもった人が来ない、人が多く収容しきれない、子どもが低体温症になったなどの問題はあったが、それでも大きな混乱は感じられない。以下のような語りもある。「高浜の高台でも炊き出しをして、大きい鍋と、米もたくさんあって、野菜もある人たちがもってきて、すごいごちそうだった。団長さんの家でも米があるからって持ってきてくれて。他の消防団の方ももってきてくれた。薪はそのへんから持ってきた」（聞き取り5、高浜）。死者４人、全壊家屋１６５棟など、大きな被害が出ているにも関わらず、避難場所の統率がとれ、かなり適切に状況に対処できていた。

後に高浜仮設住宅が建てられる空地にも、大きな混乱はなかった。「高浜の他の住民たちもみんな高台に行っていた。避難場所ではなかったが、すぐに車で上がれるため、高浜小学校ではなくて高台に行ったのではないか。高台には20~30人くらいいた。お年寄りが多かった。漁協のみんなも逃げ遅れた人はいなかった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。次の語りには「公園」とあるが、これがどこなのかは不明である。「地区の指定避難場所は自宅より下の公園なので、私は訓練に1回も出たことはない。あの日は下から来た20人位が避難しており、車も30台程並んで通れないくらいだった」（体験談1、高浜）。総じて、高浜の人々が避難した先は、金浜と比較すれば、混乱が少なかったといえる。

■金浜における避難場所の所在地に関わる問題

高浜と比較すると、金浜の避難場所や避難所は混乱が大きかった。金浜の中でも、高浜小学校、金浜老人福祉センター、金浜稲荷神社など、北部にある高台に避難した人たちが難を逃れたのに対し、金浜を南北に隔てている江山寺やその背後にある高台、さらにその背後にある三陸自動車道（三陸縦貫道）に避難した人たちの間では混乱がより大きく、この周辺で犠牲になった人が多かったと考えられる。

人びとの語りをみると、金浜における混乱の一因となったのが、避難場所の位置である。避難場所が高浜小学校とされていたが、金浜南部の住民は必ずしも十分に理解・納得していたわけではなかった。「以前、自治会から避難場所は高浜小学校だと言われて、高齢者は間に合わないからお寺じゃないかと意見したことがある。今思うと浜どころにいるので、もう少し避難場所について確認しておくべきだったと思う」（体験談9、金浜）。南北に長い金浜の沿岸地域のうち南部に住んでいる人たちからみると高浜小学校はやや離れている。実際に、江山寺裏手の高台のほうが近かったため、あるいはそこが避難場所であると認識していたため、そこに避難した人もいる（体験談9、体験談12）。金浜の南部に居住していた人々は、近距離で安全な避難場所が確保しにくい状況にあったのである。

また、避難先と考えられていなかった三陸自動車道に、多くの人が避難したことも混乱の一因となった。とりわけ、三陸自動車道沿いに設置されていたフェンス・金網が、法面から自動車道へ上ろうとした人びとの行く手を妨げ、そこで亡くなった人がいたことは強調しなければならない。「高速道路だから最初の入口のところからしか入れない。フェンスをよじのぼって助かった人もいるし、上れなくて亡くなった人もいる」（聞き取り4、金浜）。「三陸国道はフェンスがあってお年寄りはなかなか道路にでれなかったようだ」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。「当時、宮古道路には金網が貼られ、入れないようになっていた。それで皆上がれなかったようで、避難道路としての機能は不足していたように思う。後からお寺の近くの金網を誰かが切って入れるようにしたようだ。そこから道路に避難した方もある」（体験談4、金浜）。「いつも津波警報では、夫が逃げた自宅裏の高台に上がっていたが、そこで夫と近所のおばあさん3人が亡くなった。普段からおばあさんも

杖をついてそこに避難していた。線路に上がれば助かるが、宮古道路に柵が出来たので、行くことができなかった。1か所しか入口が無かった。夫はそこの入口で亡くなっていた」（体験談10、金浜）。「宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない」（体験談4、金浜）。他方で、若者の中には自力で金網を越えた者もいた。「息子は、体力があるので、波が来ると柵を越えて真っ直ぐ三陸縦貫道に上がっていた」（体験談11、金浜）。建設されたばかりの三陸自動車道は避難先として想定されていなかったが、現実には、あの状況下で、金浜南部の人々が避難するのに最も適していた場所だった。事前にそのことが認識され、法面から路面に出ることができるような措置がとられていれば、この場所での犠牲者は少なくて済んだと考えられる。

写真１　避難所は震災後に金浜老人福祉センターなどへ変更された

2014/08/13　撮影：宮坂 清

■避難所・高浜小学校の浸水と裏山への避難

江山寺・三陸道の周辺に比べると、高浜小学校の周辺は、混乱はしたものの、その程度は軽かったと思われる。震災時に高浜小学校の校長であった大洞晴洋氏によれば、小学校の様子は以下の通りであった。地震が発生した時、高浜小学校はまだ下校前で全学年児童が在校しており、地震の合間を縫って全員が校庭に避難した。小学校の校庭は宮古湾に面し、国道45号をはさんで10メートル以上の高台にあり、地域の避難所に指定されていた。いつしか校庭脇の駐車場には十数台の乗用車が入っていた。その多くは保護者の車であり、数名の保護者から「連れて帰ってもいいですか」ときかれたが、メガホンを持って、「警報が出ているので、もう少し様子をみましょう」と伝えた。これがその後の状況からとても大きな判断になった。そのうちに津波がやってきて、校庭周囲のフェンスから湾内を見ていた消防団員が「だめだあ。みんな、逃げろ！こっちだ。早く、早く」と叫び、児童を含む全員が校舎裏の高台を目指して走りだした。高台から見下ろすと、校庭には約1メートル半ほど津波が入っており、車が十数台浮かんでいた。その後も裏山のさらに高い所まで避難し、17時頃に山を降りて、金浜老人福祉センターに避難した。校舎は浸水しなかったが、ぎりぎりの高さまで津波が上がったので、体育館は避難所としては使用されず、福祉センターが避難所になった（大洞晴洋、平成24年：175頁）。

校庭に津波が押し寄せたにも関わらずここでは犠牲者が出ていないことから、保護者に児童を連れ帰らせずその場に留めるという大洞氏の初期判断は大きく貢献したといえるだろう。

裏山への避難は消防団員の一声がきっかけだった。消防団第十一分団の分団長であった佐々木好栄氏によれば、以下のような経緯であった。「当該分団の副分団長らは、高浜にある屯所から、ポンプ車で一旦、高浜の高台に避難したものの、海岸の近くに障害があるかなにかで動けない人が1人いるという情報があって救助に向かい、副分団長の判断でその人を乗せて高浜小学校へ避難した。高浜小学校の校庭に着くと、避難している人が50～60人位おり、やがて校庭まで水があがった。子どもや父兄はすぐ高台に避難して無事だった。校庭には子どもを迎えに来た車などが置いてあったが、流されて1か所に集まっていた。サッカーのゴールか何かに掴まって助かった人が1人いたという。小学校を避難所とすることができないということで、金浜老人福祉センターが急遽避難所になり、そちらにポンプ車も消防団員も向かった。消防団員が動けなかった人を助けたところ、助けてもらったと感謝し、後にその息子が消防団に入った」（聞き取り1、高浜）。

この判断やその後の避難の過程には、他の地域住民も貢献している。

学校支援隊として活動していた高浜のある男性は、児童の下校つきそいのため高浜小学校に行き、校長と話をしていたときに地震にあった。「普段、妻から津波のことを聞いていたので、地震直後に『津波が来る！』とひらめいた。それで『児童を外に出せ！校庭の真ん中に出せ！』と叫んだ。校庭まで波は来ないと思ったが、更に上の老人福祉センターに避難するように指示した。ただ、2通り道があるので『絶対下に降りるな、一番無難なのは、学校の裏山に逃げるのがいいと思う』と伝え、急いで帰宅した。あの時、自分が児童を引き連れて歩いていたら津波で全滅だったと思う。あと5分も違えば危なかったかもしれない。児童は裏山で助かったそうだ。校庭で津波にあった高齢者もあったという」（体験談2、高浜）。

このときに校長らに導かれ高浜小学校やその周辺に避難した（体験談3、6、10）、あるいは子どもを迎えに行ってそのまま避難して助かった（体験談8）という証言も多い。その際に「高浜小学校とセンターのどちらに行くか迷っている車や人で道路がごった返しだった」（体験談6）ともあり、当時多くの人や車が避難のために集まり混乱していた状況がうかがえる。人々は「センターに歩いて向かうと『更に上の山に上がって下さい』と言われ」（体験談6）、消防団員や校長らに導かれて避難した。ただし、「校庭で津波にあった高齢者もあったという」（体験談3）という証言もあるように、危うく逃げ遅れかけた人もいた。ある80代の女性は91歳になる義姉と校庭にいたが逃げ遅れて取り残され、波にのまれて転倒し頭からびしょ濡れになりながらなんとか難を逃れている（体験談10）。ただし、混乱は大きかったものの、多くの人や車が集まるなか、1・5メートルもの津波が校庭に押し寄せたにもかかわらず、逃げ遅れた人が出なかった。校長や消防団員、学校支援隊ほか、その場にいた人たちの臨機応変な対応が、多くの命を救ったといえる。

(4) 被災後の日々

ア 消防や自衛隊による捜索活動・支援活動

地震津波の翌日、街はまだ水に沈み、インフラは断絶し、情報は錯綜し、人々は疲労と悲嘆の極みにあった。そのような中、高浜と金浜を管轄する宮古市消防団第十一分団を中心に、本格的な捜索活動・支援活動が開始された。以下は第十一分団分団長である佐々木好栄氏の証言である。

3月12日朝、高浜の街はまだ水浸しだったため、朝5時半ころ、コープケミカル社宅の上の避難場所にいた消防団員4、5人で、水門を少しずつ、30～40センチずつ開けた。道路が通れるようになる前も防潮堤の上ならば歩くことはできた。高速道路が通っていたから金浜へは物資は比較的スムーズに運ばれたが、当初の高浜は完全に孤立していた。堤防の上もガレキで一杯だった。高浜では震災前に下水道の工事をしていたので、ちょうど重機が置かれていた。団員のなかに運転できる者がおり、道路を広げていいかと訊かれた。たくさん行方不明者がいれば傷つける可能性があるからできないが、高浜は行方不明者が少なかったので、やるかということになった。当初は国道には出ず、国道より内側だけを、見張りを含めて3人でやった。そのうちに国道へ出て藤の川方面に異人館のあたりまでやったら、向こうからもやってきた。案外開通するのは早かった。あのとき使った重機は鍵が挿しっぱなしだった。後で本を読んで知ったが、何かあったときのために鍵はつけておくのだそうだ。13日9時に国道45号線が開通した。14日からは自衛隊、北海道の旭川第2師団が来てくれて、朝、高浜小学校の校庭で対面式を行った。寒い中、よくやってくれた。最初は高浜と金浜どちらも入って捜索したが、高浜は3日ほどで捜索を終了し、金浜の捜索をその後も継続した。地元の町内会長、自治会長

写真2　宮古市消防団第十一分団屯所（高浜）
2014/08/13　撮影：宮坂 清

が来なかったので、分団長の私のところに、あれをやってくれこれをやってくれ、家主を探して許可をもらってくれというような依頼がきた。捜索が長引くだろうということで団員は4班にわけて順番に出ることにしたが、分団長の私は毎日出なければならなかった。消防団の袢天をみると安心するという人もおり、がんばった。捜索のときには屋根の上を歩かなければならないが、雪があるなどしてとても滑った。家を動かしているうちに見つかった遺体もかなりあった。遺体を見つけると自分たちで運んだが、いったいどうやって運んだのかよく覚えていない。江山寺も入口まで車が入りこんでいて、女性がリュックサック背負って本堂の中の柱に寄りかかった姿で見つかった。歴史の中でお寺のあそこまで津波が入ったことはなかった。お寺にいると陰になって、水が来たかどうか見えなかったのかもしれない。金浜の建物は激しく壊れており、押し波と引き波がぶつかったのではないかと思う。捜索などのために家屋を壊さなければならない場合があり、避難所に行って家の持ち主に了解をもらったが、家を壊すことに抵抗がある人もおり辛かった。遺体が見つかると連絡や確認をしたり車に載せられるところまで運んだりしたが、そのうちに自衛隊がやってくれるようになった。4月4日をもって金浜の捜索は打ち切ったが、自衛隊はその後も要請に応じて来てくれた。（聞き取り1、高浜）

地震津波の翌日12日から自衛隊がやってくる14日まで、高浜と金浜において、避難場所の人々のケアを統括し、溜まった水を抜き、道路を通れるようにガレキを取り除き、遺体を捜索したのは、主に佐々木氏を中心とした消防団員だった。とりわけ高浜の人々が避難した場所は当初、周辺から完全に孤立しており、消防団の活動がなかったとしたら、その状態はかなり長引いたはずである。自衛隊が到着した後も、自衛隊と地域を結ぶ橋渡し役として、なくてはならない活動を行っている。佐々木氏に請われて消防団の活動を手伝った松原氏は次のように語っている。

私は分団に入っているわけではないが、第十一分団長の佐々木好栄さんに、おれは金浜はわからないから頼むといわれ、私も若いころに分団に入れと言われ断った経緯もあり、役に立てるかわからないが、分団員と一緒に、ほとんど留守番だったが、活動に加わった。2週間から3週間くらい、毎日、自衛隊や金浜の分団員といっしょに活動した。自衛隊はありがたく、みんな感謝していた。捜索して遺体が見つかっても自衛隊員は誰だかわからないから分団員が呼ばれる。そのときのことを思い出すといまも辛い。自衛隊が撤退するときに分団の捜索隊も解散した。金庫を見つけて連絡すると、警察が取りにきて回収し、管理していた。水道は止まっていたが、井戸のある家があり、当初はそこから水をもらって運んだ。1トンタンクがあり、分団員がトラックを借りて、水を入れて運んだ。2日後位だっただろうか。給水車が来たのはもっと後だった。油も最初のころはなかった。2日後に国道45号が通ったため物は入ってきたが、ガソリンが足りなかった。2週間後位にボランティアとして宮古の労働組合、連合の人たちが来て瓦礫の撤去をしてくれた。当初は他にボランティアは見なかったが、しばらく経ってからは見た。（聞き取り3、高浜）

この語りをみると、警察が金庫を回収しに来たこと、分団員が井戸の水をタンクに入れて運んだこと、2日後には物が入ってくるようになったがガソリンは足りなかったこと、次第にボランティアが手伝うようになったことなどがわかる。麻痺した地域の秩序やインフラを回復するため、力や知恵を絞り、必死に活動していた様子が伝わってくる。

イ　避難生活

地震津波の当日、高浜集落の東北端にある高台、そしてコープケミカル社宅裏の高台に避難した人たちは、13日まで約2日間そこにいた後、主に金浜老人福祉センターの避難所に移動し、そこで避難生活を送ることになった。他方、金浜の人たちの多くも、避難場所・避難所だった高浜小学校の校庭が冠水したことから、急遽、避難所に指定された金浜老人福祉センターに移動し、そのままそこで避難生活を送ること

になった。ただし、三陸自動車道に避難した人たちの一部は、たまたまそこに居合わせた宅配便業者の車両で花輪へと移送され、花輪農村文化伝承館で避難生活を送ることになった。以下では、それぞれの避難所における生活について検討する。

■金浜老人福祉センター

高浜と金浜の避難所に指定されていたのは、高浜小学校であったが、先述のように、校庭に津波が流れこんだため、金浜老人福祉センターに変更された。そもそもが避難所ではなかったこともあり、多くの人でごったがえしていた。「3か月センターにいたが、最初の夜は大変だった。小学生も先生が責任を持って一晩預かりますということで全員避難していた。満員でトイレに行くにも人の頭を踏まないように、明かりがまぶしくないようにと気を使った。沢山ストーブを焚いていただいたので寒くはなかった」（体験談6、金浜）。

また、老人福祉センターに入りきれなかった人たちは、周辺の施設で過ごさざるをえなかった。「私は金浜に戻った当初、金浜老人福祉センターが一杯で入れず、隣にある宮古市身体障害者福祉センターの廊下で寝泊まりしていた。神社で寝泊まりしていた人たちは老人福祉センターに食事しにきていた。避難所になった金浜老人福祉センターには100人くらいおり、柳澤さんという方が中心となって切り盛りしていた。人が多くて狭く、みんなごっちゃだし、辛かった。私は他の分団員と一緒に舞台の上で寝泊まりした。食料は、最初は近隣にもらいに歩いていたが、高浜小学校の給食室を2回くらい借りて若いPTAのお母さんたちが炊き出しをして、避難所に持っていったこともあった。石油ストーブは3つ位あったが油がなく寒かった。私たちは屋外で分団員とドラム缶で火を焚いた」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。柳澤氏は、当時の老人福祉センター長であり、急遽、現場の切り盛りをすることになった。「避難所では、12日のお昼頃にご飯が出た。水は近所にきれいな沢水が出るところがあったので順番に汲んだ。古い家の水もあり、お陰で助かった」（体験談3、金浜）。時間が経つにつれ、次第に避難者が主体となって身の回りの世話や食事の支度などを行っていくようになったことがわかる。

老人福祉センターに避難したのは住民だけではなかった。「地震の翌日、宮古温泉マースの従業員とマースに流れ着いた女子高生が、老人福祉センターまで来た。マースの4階に仮眠用の毛布やシーツが置いてあり、センターへ運んで使った。寒いと言ったら、マースの支配人が、マースの4階に毛布があるから持ってきて使えと、食べ物もあるからと言ってくれて、消防団なんかが持ってきて使った。センターには150人位いたが、1人1枚位ずつあって助かった。センターの研修室にある舞台には誰も泊めてなかったから、マースの従業員はそこに2晩ほど泊まった。後日、花輪のマース関係の人が大きい車で迎えに来て従業員を乗せていった。毛布を全部もらったからとても助かった。老人福祉センターはふだん宿泊する人はいないから、毛布などは置いていなかった」（聞き取り4、金浜）。マースは津波により3階まで冠水したが、従業員やそこに流れ着いた女子高生は4階で一夜を過ごした後、自力でセンターまでやってきた。そしてマースから運ばれた毛布や食料が、センターの人々にとって被災当初の命綱になったことがわかる。

その後、次第に状況は落ち着いていき、自衛隊やボランティアがやってくるようになった。「老人福祉センターでは大人と子どもの居場所を分けていた。別の部屋は年寄りが集まっていた。最初のころ、インフルエンザにかかった人が隔離されたことがあった。鳥取からバスで22時間かけてきたボランティアのお医者さんが来たり、青森から来た人もいた。自衛隊にも感謝している。食事は毎日、ごはんと味噌汁と、肉がでた。最初は高浜小学校の給食室でつくって運んでいたが、自衛隊が運んできてくれるようになった」（聞き取り5、高浜）。ここにもあるように、避難所でなくなった高浜小学校はその後使われなかったわけではなく、食事をつくるのに給食室が使われるなど、むしろ積極的に活用され、また次の語りにあるように、教員らも支援にあたった。「学校は避難所にはならなかったが、自衛隊の中継所・駐車場となっていた。その方々や地域住民へのトイレ掃除等に忙しい毎日だったし、

自分自身も被災し、帰る場所も無くなり家族もばらばらになって大変だった。子供達にも地域に対しても、もっと何か行動をおこすことができたのかも知れないが、何もできなかった。電気・水道とも復旧まで1～2週間位かかり、学校の仕事はマヒ状態であったが、子供へのおたよりを作るとか何かはできたと思う。内陸へ帰った人達が1週間戻れなかったことも痛手であった」（高浜小学校、『東日本大震災の記録 調査報告書』）。

■花輪農村文化伝承館

地震後に三陸自動車道に避難した人たちの一部は、たまたま居合わせた宅配便車両の運転手により、花輪に運ばれた。「お墓を通って三陸縦貫道に向かうと、そこに運良く宅急便の車がいて、松山の中三機械まで乗せられた後、分団の車で花輪の伝承館に案内された。三陸縦貫道があったお陰ですぐに花輪方面に逃げる事ができたのは良かった」（体験談9、金浜）。自宅を流されるなどして途方に暮れていた人たちは、津波の心配のない内陸方面に向かうことができて、気持ちがいくらかでも楽になっただろう。「道路に運良くいた宅急便のトラックに乗せられ、本当にあの時は涙が出るくらいうれしかった。15、6人を乗せたトラックは、花輪の中三機械で降ろしてくれた。皆さんとても震えていたので、停電でも発電機でヒーターを点けてくれた。トイレも水が出るようにしてくれ、本当にありがたかった。2時間ぐらい世話になり、消防の自動車で伝承館に移動した。畳の部屋でストーブもあり、自治会や婦人会の方々が、暖かいうどんとおむすびを出してくれた。今までで一番のごちそうだと思った。野菜、お米、梅干しなどの差し入れや見ず知らずの私達にお風呂を貸してくれる方もあって、本当に感謝している」（体験談12、金浜）。これらの語りには、悲嘆に暮れ、寒さに凍えていた人たちが、暖かい施設のなかで温かい食事を口にできた、そのうれしさがよく表れている。

その後も、花輪の人たちにより心のこもった対応がなされ続けた。「地域の方が、発電機で灯りを点け、ストーブも3か所焚いてくれた。夜ご飯も出してくれ、野菜や米、手作りのみそ、梅干しなど、たくさん持ち寄って3日間炊き出ししてくれた。そのうち、当番を決めて自分達で自炊するようになったが、伝承館の管理人さんは、様子を見に毎日来てくれた。炊飯器も洗濯機も提供してくれた。水も地下水を運び、トイレにも使うことができた。本当にありがたかった。花輪の方々に本当にお世話になった。今年（注：平成24年か）の5月には伝承館で交流会をしてお礼をすることができた。本当に感謝している」（体験談11、金浜）。

やがて状況が落ち着いてくると、伝承館に避難していた人たちは仮設住宅や金浜老人福祉センターへ徐々に移っていった。「その後、徐々に仮設住宅への移動が始まり、最後まで残った7、8人のグループは、金浜老人福祉センターに移ることになった。花輪には80日間、金浜老人福祉センターには20日間ぐらいお世話になった。センターに移ると当番で川井から来ていたらしい職員の方は、精神的にも辛かった私達を気遣い、色々と話を聞いてくれて、本当に助けていただいた」（体験談12、金浜）。以上のように、伝承館に避難した人たちの語りには感謝の言葉がとても多い。避難している身ではあったものの、温かいもてなしにより、気持ちが楽になっていたことがうかがわれる。

しかしながら、先述のように、他方の金浜老人福祉センターでは大変な状況が続いていた。同じ金浜の避難者でありながら、その後の生活の質にかなりの落差が生じ、結果として人々のあいだに亀裂が生じることとなった。「金浜の人は金浜老人福祉センターと花輪農村文化伝承館と2か所に分かれて避難した。そこで同じ避難をした人でも違いが出てきてしまった。金浜老人福祉センターでは支援が届くまで、おにぎり1個とかパン1個とか、そんな生活をしていた。伝承館に行った人たちは、農村地帯だから津波も地震も関係なく、地元の人たちが炊き出しをしてくれた。花輪地区は婦人会がやってくれたが、老人福祉センターは自分たちでやらなければならなかった」（聞き取り4、金浜）。どこで避難生活を送ったかによって生活の質が大きく異なり、同じ地域の人々のあいだに溝ができることになってしまった。

ウ　自宅、その他の居所の生活

地震津波の後、幸い自宅に留まることができた人たちも、その後の生活は、やはり困難なものになった。建物はあったとしても、電気・水道はなく、道路が通れず食料や物資の入手も難しい。さらに、避難所にいれば情報は比較的入りやすいが、自宅にいると入手しづらい。

■自宅に留まる

自宅に留まる場合、当然だが、身の回りのことは基本的に自分たちで何とかしなければならない。しかしインフラや情報が断たれた状態において、それはかなり困難である。「（注：震災当日）しばらくして、夫が近所の方を避難させて来た。停電なので反射式ストーブを使い、食料は買物に行く前でほとんど何もないので、近所の方が持ってきたカンパンと小さいおにぎり2個、自宅にあった2リットルのペットボトル飲料1本を4人で分け合った。水には限りがあるので、薬を飲むにも苦労した。ろうそくを灯し、これまで一面識もない方達と一晩過ごした。何が起こるかわからないので寝るわけにはいかないなと思い、カギもかけなかった。怖いし、寒いしとても寝られなかった。翌朝は、家中からかき集めたバナナとりんごを分けあい食べた。／…（注：翌日）親戚も避難してきたのでお互いに服や下着を分けあい、米はあっても水が出ないので困ったが、この辺りには使える沢水や井戸があったので十分確保できた」（体験談1、高浜）。

次にみるのは、自宅はかろうじて残ったものの、津波で柱が失われ、余震が続くなかで屋内にいることができなかったケースである。「（注：震災当日）その後は田老に行っていた夫が戻って来ると思い、自宅近くで火を燃やして暖を取り待っていた。自宅は階段を支える柱がない状態で、今思えば危険だが暗くてわからないので2階から布団を持ち出して車の中で待っていた。やがて20時30分頃に夫が歩いて戻り安堵した。寒かったので火が一番ありがたかった」（体験談13、金浜）。

次も同一のケースであり、結局、自宅に居住できないため親戚の家に移動して生活を送ることにしている。「運が良かったのは車が残った事と冷蔵庫と冷凍庫が浮かんで、中に水が入っていなかったこと。水や食料を出して飲んだりした。…焚き火で暖を取り、冷凍してあった食料を出して何日間か過ごした。水は金ヶ沢から汲んで沸かして使った。自宅は住める状態ではないので、たまたまカギを預かっていた留守中の親戚宅を使わせていただいた。そこの家は流されなかったが、庭にあるがれきを乗り越えないとトイレに行けない状態だった。トイレにも海水は入っていた。運良く反射式ストーブがあり、被害の少ない部屋も使うことができたので助かった。そこには4月末ぐらいまで居たが、電気水道が3月末に復旧するまで、ろうそくを使い水汲みに通った。／避難所に居なかったので、物資はしばらく頂けなかった。ラジオも無く、情報が無いのも大変だった。最後の方に老人福祉センターで食料を頂いたが、冷凍庫の物は溶ける前に皆さんに分け、隣近所の方や友人も色々と持ち寄ってくださり助けてくれた。片付けが落ち着いた頃、久慈の息子の所に世話になり6月から仮設住宅に入居している」（体験談14、金浜）。

インフラの不備や飲食物の欠如をどのように乗り越えるか、知恵を絞って対処していたことがわかる。

■部屋を借りて家族を探す

次は、留守にしている時に自宅がほぼ全壊したが、翌日すぐに、宮古市の市街に部屋を借りて住み始めた例である。金浜に居住していた船越恭治・船越典子夫妻は、地震津波が発生したとき、それぞれ宮古市と山田町で勤務中であり、自宅に残していた母親ほか、家族と離れ離れになってしまった。

「3月12日、朝起きて勤務先に行き、貸家を紹介してもらった。金浜に戻り、自宅2階から炬燵などを取り出すことができた。荷物を借家に置いて、山田町に行き妻を探すが見つからず、山田町に在住している次男家族の住居に行くと、次男の嫁や孫たちがいた。3月13日、妻を捜すかたわら、長男、三男、四男と連絡をとろうと電話するが通じず、岩泉の三男夫婦の家に行くも、不在のためメモを残す。ガソリンがなくなり、3時間ならんでガソリン20リットルを購入した。

3月14日、近所の知り合いから、妻が帰ってきて金浜老人福祉センターにいると聞き、がれきのある場所を避けて八木沢、磯鶏、高浜を経由して向かった。センターで妻と再会した時は、感動して言葉も出なかった。湯ったり館で風呂に入って借家に戻った。

…3月26日、息子たちから「家に来て住まないか」という提案があったが、有難いが厄介になるだけだから、できたら自分たちの足で今までの生活をしながら一生を生きたいと思った」（船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」）。母親と自宅を失い、家族とも連絡がとれなくなってしまったが、地震津波の翌日すぐに部屋を借り、無事だった車で駆けまわって家族を探すなど、精力的に動いている。

エ　高浜小学校の再開

高浜小学校は校舎や体育館が避難所にならず、トイレや炊き出しのために家庭科教室が使われただけだったため、新学期の準備を行うことができた。当時校長だった大洞晴洋氏によれば、以下のような経緯であった。

3月25日に修了式と卒業式を実施し、新学期開始までの約4週間、学級担任による家庭訪問と地域や家庭状況の把握といった作業が行われた。その際、通学路の安全をいかに確保するか、心のケア、給食をどうするか、といった懸念事項があった。まず、通学路はがれきなど津波被害による危険があるため、1学期終了までの間、登下校を集団にし、毎日職員が交代で一緒について歩いた。避難所から仮設住宅に移ってからは遠距離通学も問題となったが、2学期から教育委員会の配慮によりタクシーで登下校した。

次に、児童に対する心のケアについては震災直後の家庭訪問から始めて個別対応を続けた。避難所や仮設住宅に入った児童は、より強いストレス症状を示すこともあり、長期にわたる支援が必要という。最後に給食については、新学期開始にあわせての実施が危ぶまれたが、なんとか実施できた。（大洞晴洋、平成24年）

オ　辛い思いと、ささやかなよろこびと

■辛い思い

震災についての人々の語りには、いたるところに言い表しようのない辛い思いが溢れている。なかでも他者の死に直面した経験は、後々まで大きな傷として残る。「2回目の波が堤防を越えたのでこの畑（注：避難していた高台の畑）まで来ると思い、皆で走り上がったが3人遅れて亡くなった。そのうちの1人だと思うが、『おーい、おーい、おーい』と3回呼ぶ声が聞こえた。波が線路まで来ると思い、逃げるのに手いっぱいで、後を見ることができず上の山に走り登った。そして宮古道路に出て、階段を登り線路に上がった。私は道路にある階段の場所を知っていたが、親戚は知らなかったと思う。道路の階段がもう少し下にあれば皆が助かったかも知れない。…逃げる時に聞こえた親戚の声が何か月も耳を離れなかった。食欲も無く、すっかり痩せてしまい、2か月経った頃にお茶などを持ち拝んできた」（体験談4、金浜）。

金浜の、江山寺や三陸道の周辺では、多くの人がわずかな差で助かったり、逃げ遅れたりしている。助かった人の背後にいた人が助からなかった、振り向いたらいなかった、ということが、あちこちで起きていた。そのような経験を忘れることはおそらくできず、ずっと抱えていかなければならないだろう。それでも、2か月後に、拝みに行くことができたということは、ひとつの区切りになる。少しずつ、そのようにして、歩いていくほかない。

自宅を失くすという経験がやはり深い傷を残すだろうことも、想像に難くない。「いま振り返ると、ふつうの生活に戻ったが、もういい、もうたくさんだという思いが強い。家が流されたのが大きく、当初は明日からどうなるのだろうという感じだった。分団長にちょっとつきあえと言われ花輪に行ったことがあったが、ポンプ車で三陸国道を越えていったらふつうの生活をしていて、その違いに驚いた」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。自宅が跡形もなく流されたという現実を受け入れようともがいているときに、その近くで、何事もなかったかのようにふつうの生活が営まれているのを目にしてしまう。そこにどうし

ようもなく存在してしまっている落差を受け入れるには、さらにどれくらいもがけばいいのか。

避難の際に何を持ち出すかについてのとっさの判断も、後悔の種となりうる。「印鑑も持ち出したが、後で再会した娘に『お父さんの位牌よりもお母さんには印鑑が大事なの』と言われて今でもそれがせつない。月日が経つと冗談に変わったがその時はとても胸が痛かった。戻れると思っての行動だったので、いくら親子でもドキッとした」（体験談12、金浜）。

あるいは、避難の途中で出会った人のことを、後々まで心配するということもある。「道路に立っていると、ずぶ濡れのスーツを来た男の人が半泣きで線路を歩いて来た。その方は、自動車で津波に遭い、車ごと線路の法面に上がったので、『今だ！』と車から降りたそうだ。言葉の感じから、この辺の方ではないようで、次の駅まで歩く途中だった。私達は、宮古の鉄橋が壊れていることも知らず、線路沿いに行けば大丈夫だろうとそのまま分かれてしまったので今も気がかりだ」（体験談12、金浜）。

地震津波の被害に追い打ちをかける、火事場泥棒の行為が横行したことも人々に辛い思いをさせた。「泥棒もひどかった。地震の次の日から、道路の上に物が散らばっていてみんな持っていかれた。現金はもちろんない。冷蔵庫も扉が閉まっていたのに中身がない。朝早くきて持っていったのではないか。バタンバタンと音がして、箪笥の引き出しが出されたりした。金浜の人なら顔がわかるが、知らない人がいるので、どこをお探しですかって聞くと、んーって行ってしまう。ある時、わーすごいこのゴミの山、と言われて、プッツンって切れて、失礼なこと言わないで、何言ってるの、みんな財産なのよ、どういう気持ちで言っているの、って言ってやった。私たちにしてみれば財産ですよ。それをゴミの山って言われて、ふざけるなと。今でも顔を覚えている。

まず昼間にきて目星をつけて、朝方またきて持っていく。金浜の住民でない人がいっぱい入ってきた。八木沢のほうから車で来て車を駐めてあるのを見つけて、警察を呼んだらその車自体が盗難車で、その人は捕まった」（聞き取り5、金浜）。

混乱に乗じておそらく相当数の泥棒が出没したが、被災者たちにはそれに対応するだけの余力が残っていなかった。結果として、自然の力によって破壊された生活が、人の悪意によってさらに破壊されることになった。

地震津波は人の命や自宅などの物のみを奪うわけではなく、人々は喪失によってのみ苦しむわけではない。避難生活は人々を消耗させ、親しい人たちとの関係をも蝕んでいく。「避難所などから食料を調達したが、あんな時は人を変える。皆、人を疑う。近所の盲目の方や体の不自由な方に配るために食事を運んでいたが、それを見た人に多く食料を持っていくと言われたりもした。親戚に物を運ぶために何度も山道を歩いて通っていたが、心ない噂に一時は怖い思いをした」（体験談2、高浜）。

地域の人たちのために必死に働いていた消防団員でさえ、その必死さゆえの、対人的なトラブルに見舞われる。「津波の後、郵便局のバイクが2台、金浜に置いてあったが、そのバイクを団員が勝手に使ったということで、宮古の消防署長、消防団長の2人が犯人探しにやってきた。道路が寸断されているがバイクであれば通ることができ、団員のなかに車屋がいたので直結してエンジンをかけて乗った。避難所に200人以上おり、足りないものがたくさんあったので、バイクで買いに行った。そのうちにバイクを盗んで遊んでいる奴がいると郵便局から消防署長へ電話があり、訴えると言われ、それで署長らが探しに来たのだった。バイクを使った団員が来て、午後に分団長といっしょに消防署に来いと言われた、と言うので一緒に行った。そこにいた人から、人のものを勝手に使ったら泥棒だろ、と言われた。頭に来て、なんだその言い方はと、喧嘩になった。いまだに忘れない。郵便局に謝りにいくが喧嘩になるから来なくていいと言われた。郵便物を入れる籠がなくなっていたからそれも合わせて弁償したんだ、あれがけっこう高かったんだと後で消防団長から聞いた。訴えて欲しかった、やってみろと。あの非常事態に。バイクを使ったのは高浜小学校で何十人

もの命を助けた団員なのに、そのことには一言も触れず、バイクのことだけ問い詰められた。いまだにそのことについて謝ってきていない。自分たちのことしか考えていないようにみえる」（聞き取り1、高浜）。非常事態を打開すべく必死に活動するなかで誤解が生じ、それが大きな諍い（いさか）にまで発展し、時間が経過してもそのしこりが残り続ける。

以上のように、震災は目に見える被害だけでなく、目に見えない、それゆえに他者に認知されづらい被害をももたらす。そうした被害は人の心にわだかまり続け、少しずつ少しずつ薄まっていくのを待つほかない。

■ささやかなよろこび

震災についての辛い語りの合間に、ホッとさせられる、ささやかなよろこびが漏れることもある。辛いときだからこそ、とりわけ人の心の温かみは格別なものとして経験される。「家は8か所ぐらいに分散していた。屋根の上を歩くと足が滑り、自衛隊の方がパッと来て後と前についてくれた。素手で雪に手を着いたら手袋までくれて、ありがたかった。縦になっていた自動車の上に見覚えのある宝石箱が載っていた。何とかよじ登り、下に落とすと水で木が膨張して開かなかったが、こじ開けると中から自分の物が出て来た。もう、うれしくて。高価な物ではないが、今見ても自分の物があっただけで可愛い。…自衛隊から頂いた手袋も今でも大事に持っている。家族は、皆元気なので良かったと思うことにしている。…今回のことで、人の好意のありがたさを感じた」（体験談12、金浜）。

途方に暮れて歩いているときに、自分を気遣い、手を差し伸べてくれる人がいるのだと気づくことは、その人に大きな勇気を与える。被災後の自衛隊の活動に対して多くの人が感謝の言葉を述べるが、それは自衛隊の隊員が、救援や捜索の作業を、心をこめて行っていた証である。それをプロ意識の強さゆえであるとみなすか、単なる仕事の域を越えた人間のまごころの発露であるとみなすかは、あまり重要ではない。多くの被災者が彼らから、実際に勇気づけられ、生きていく希望を受け取ったことが重要である。

同様に謝意が表されることの多いのが、ボランティアである。先述した、花輪の農村文化伝承館における、花輪の人々による献身的な支援に対しては、多くの被災者が繰り返しそのありがたみについて述べている。その他、被害を聞きつけて支援のための物資を送った人たちとの交流や、他所から駆けつけたボランティアとのあいだに結ばれた心のきずなも、被災者たちに希望を与えた。「青森からジュースが届き、『1人じゃない、私たちもいます』というメッセージが入っていてうれしかった。嬉野市からお茶をもらったので、お礼のはがきを出した。初めて急須でお茶飲んでうれしかったと書いたら、市長からまたお茶が届いた。被災した年にバスから見たひまわり畑がみえていいなあと言ったら、ボランティアさんが次の年に奈良から種を取り寄せてひまわりを植えてくれた。その種は名古屋の緑化組合をとおして、全国にいって咲いている。あれはうれしかった。やってくれたのは沖縄から来た子だった。ひまわりの種を植えて、草取りから土をならすのからゴミをとるのからぜんぶやってくれた。意気投合して、私のところにご飯を食べに来たり、今でもお電話もらったりしている。その子がいろんな人を引きつけて、他にもいろんなボランティアの方が来てくれた」（聞き取り5、高浜）。

避難所や仮設住宅でストレスの多い不安な日々を過ごす人々にとり、「ボランティアさん」とは、単なる物理的な労力であるのではなく、あたたかみと希望をもたらす存在であった。震災から数年経った後も交流が続いているというのは、被災者たちが「ボランティアさん」に、文字通り未来への希望を託していることを示している。

(5) 未来に向けて

ア 地震津波への備え

■避難訓練

東日本大震災は高浜・金浜、そして他のたくさんの地域で多くの人々の命を奪い、歴史や人々の記憶の詰まったさまざまな物を流し去っ

た。東北地方の沿岸に暮らす人々はこれまでにも繰り返し津波の被害に遭ってきている。津波への備えはされてきたはずだが、今回の津波は、記録に残るどの津波よりも際立って大きく、それゆえ被害が大きくなった。しかしながら、だからといって、被害のすべてが、自然の猛威によるやむをえない結果だったかといえば、決してそうではない。これまでみてきた様々な事例をみれば、もう少し早く行動を起こしていれば、あるいはもう少し心構えをしておけば、と思われるものがいくつもあることに気づく。以下では、震災前の、ふだんからの心構えや、地域で行っていた避難訓練について、考えてみたい。

高浜・金浜では毎年3月3日（昭和三陸津波の日）に避難訓練を行っており、震災直前の平成23（２０１１）年3月3日にも行っていた。とりわけ高浜では、地域住民の防災意識が高く、避難訓練への参加率も高かったという。「高浜では、3月初めに避難訓練をやっている。震災前にも3日か4日にちょうどやったところだった。自治会で、会長が変わってもずっとやってきた避難訓練は、やはりとても大事だった。震災のとき、内陸にいる息子も娘も、お母さんは大丈夫だと思ったらしい。そして実際に大丈夫だった。ここの自治会はとてもいいことをやっていると思った。とりあえず近くの高台に集まるので、1か所あたり5、6人が集まる。それが活きたと思う。迷わずに、みんな参加していた。高浜の被害が少なかったのは訓練のおかげではないか。寝たきりの人でさえ運んでもらって高台に避難できた」（聞き取り5、高浜）。

このように、高浜では防災意識が高く、避難訓練の参加率も高かったのは、昭和35（１９６０）年のチリ地震津波の際に大きな被害を受けてからのことであった。「普段から家族で、時々津波の話をしている方がいいと思う。妻はチリ地震で津波に遭い、寝巻だけで山に上がったら家が波に飲まれた」（体験談2、高浜）。高浜で防災意識が高いことは、チリ地震津波から約30年後の平成3（１９９１）年、高浜自治会が中心となって回想文集『チリ地震津波より三十年 あの惨状を振り返って』が制作されていることからもわかる。今回の震災で比較的死傷者が少なく、避難場所の混乱も少なくて済んだのは、普段からの備えがあったことも一因であると考えられる。

しかし、全く問題がないわけではない。「高浜自治会は平成9年、市内でも早い段階で自主防災組織を立ち上げた。しかし高齢化が進むなど実質的には活動に参加する人は少なく、十分に機能できる体制ではなかった。高浜地区の住宅地には高台に避難場所はあるが、避難所がない。さらに、がれきや浸水により避難場所に行きたくても行けない状況だった。救援物資が届くまでの間、数日は自分たちの地区は自分たちで守らなければならないことが浮き彫りになった。そのためにも避難訓練、そして何より地域の結びつきを大切にしたい」（体験談15、高浜）。

高齢化が進んだことにより、避難訓練などに参加する人は減ってきており、必ずしも十分に機能できる状態ではなかったという。また、避難場所にたどり着けない、避難所が遠い、などの問題もなかったわけではないことがわかる。

金浜でも震災前、避難訓練は行われていたが、高浜に比べると参加率は低かったようである。「避難訓練は、年に1回くらいしていたが、参加者は1人とか2人とか、少なかった。お寺で亡くなったおばさんは毎回参加していたのだが。震災前に防災意識が薄かったのは確かだ。（金浜の人は）堤防があるから大丈夫だという意識をもっていたのではないか。チリ地震の後、防潮堤ができてから、国道沿いに家を建てたり、高台から下りてきた人がたくさんいた。そのまま元の場所にいればいいのにと言うが、山の上はやはり不便だ。それで下の方に下りてきたのではないか。多くがチリ地震の後で一旦上へ上がったが、徐々に下に戻ってきた。金浜で震災後も残っているのは、よそから来た人の家が多い。昔からある１００軒位のうち8割～9割は津波にやられたのではないか。」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。

チリ地震津波の際、金浜は高浜よりも被害が少なくて済んでおり、それゆえか、住民の防災意識は相対的に低かったとみられる。むろんそれでも、なかには意識の高い人もいた。「3月3日の避難訓練には毎年参加していた。大きな避難リュックには、袋を3つ、はおれるもの、

懐中電灯、サンダルを入れていた」（体験談12、金浜）。このように万全の準備をしていた人であっても、金浜の場合は押し寄せた津波の規模が大きく、危うく逃げ遅れかけている。先の「聞き取り3」でも、毎回避難訓練に参加していたにも関わらず逃げ遅れてしまった例があることがわかる。全体に防災意識が低めであったことに加え、津波の規模がとりわけ大きかったために、被害が拡大したといえるだろう。

■人々の防災意識と備え

住民それぞれの具体的な防災意識はどのようなものであっただろうか。「私は漁協で18歳のときから働いていて、異動になってまた戻ってきたが、当時の上司が、おい津波のときは逃げろよと、命あってのことだからなと言っていて、ずっとそれが頭にあったから、今回地震があったときに仕事やめて逃げろってみんなに言った」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。このような意識があったからだろう、この方は地震の直後、迷わず部下を連れて避難している。日頃からのこのような意識が、とっさのときの素早い行動につながるとすれば、意識を喚起するために、繰り返し周囲の人たちと確かめあうことが何より有効であろう。

どこへ避難するかも、日頃から考えておく必要がある。高浜では、住民はとりあえず近くの高台に避難し、その後いくつかの避難場所に移動するという手順が示されていた。しかし金浜では避難の手順が必ずしも周知されておらず、混乱が大きくなった。「どこへ避難するかというのは自分で決めておくしかない。備蓄するものなどがあるから避難場所は必要だが、遠い避難場所に避難しても、途中で流される可能性がある。チリ地震のとき小学生だったが、近くの高いところに避難して他の人も避難していた。最初から避難所に避難するというのはこのような地形では難しいのではないか。裏は山だからとりあえず高いところへ」（聞き取り4、金浜）。

金浜では、特に南部に居住する人たちにとり、避難場所が遠いという問題があり、実際のところ、南部の人の多くが避難したのは、江山寺付近や三陸道であった。現実的な避難先を想定し、日頃からそこへ避難するのだという意識を持つことが、いざというときのために必要であろう。

いざというときに備え、日頃から避難用のリュックを用意しておいたり、所持品に名前を書いておくといったことをしていた人もいた。「救急リュックを取りに2階に上がろうとしたが、揺れでなかなか上がれなかった」（体験談11、金浜）。すぐに取り出して避難できるよう、救急リュックはすぐ手の届く、家の出口に近い場所に置くべきだろう。「私は、昔津波にあった方から物に名前を書いておけば良いと聞いていたので、鍋釜や指輪など家の物ほとんどに名前を書いていた。それで見つけた方が持って来てくれた」（体験談4、金浜）。流されても名前が書いてあれば戻ってくることがあるという、津波に洗われ続けた地域ならではの知恵である。

■裏道や水場を知っておく

避難場所や避難所がどこであるか知っていたが、地震津波の後にたどり着けなかったという例がいくつもある。高浜や金浜の集落の背後は山であり、山道を通っていけばたいていの場所にはたどり着けるはずであるが、それを知っている人はわずかである。「私は定年後に退屈なので、裏山を歩いて道を覚えていた。避難所を決めても、そこに行く道を教えておかなければならない。高浜から山を越えて八木沢の短期大学に抜ける道がある」（体験談2、高浜）。

このように、街が浸水した場合を想定し、山を通って避難場所へ行く道を覚え、実際に歩いておくと、いざというときに大いに役立つ。山道の知識が役立つ例は他にもある。「とにかく帰ろうと八木沢街道を歩いていたら、自宅に辿りつけずに職場に戻ろうとしていた近所の息子さんに出会った。私は裏道を知っていたので一緒に連れて歩いた」（体験談14、金浜）。

また、「裏道や水場の存在を知っているのも大事だと思う」（体験談13、金浜）、とあるように、水場を知っておくことも大いに役立つ。「米

はあっても水が出ないので困ったが、この辺りには使える沢水や井戸があったので十分確保できた」（体験談1、高浜）。「水は近所にきれいな沢水が出るところがあったので順番に汲んだ。古い家の水もあり、お陰で助かった」（体験談3、金浜）。このように、高浜や金浜にはいくつもの水場があり、それがいざというときには命綱となりうる。

「水道は止まっていたが、井戸のある家があり、当初はそこから水をもらって運んだ。1トンタンクがあり、分団員がトラックを借りて、水を入れて運んだ。2日後位だっただろうか、給水車が来たのはもっと後だった」（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）。避難所でも、給水車が来るまでの2日間、地元の水を使えたことは大きかった。

以上のように、ふだんから備えていたことが震災の際に大いに役立ったという例は多いが、しかし起こっていない地震津波に備えることは一般に難しいだろう。いかにリアリティをもっていざというときに備えられるかが鍵であるといえる。

イ　これからの高浜・金浜

■描きづらい未来像

2014年8月の時点で、高浜・金浜の住民のうち自宅を失った人の多くは、高浜東北端の高台につくられた高浜仮設住宅か、磯鶏地区にある河南仮設住宅に入居していた。集落は高台への集団移転が決まっており、高浜小学校の裏の高台、金浜から八木沢に抜ける高台に、それぞれ宅地が造成されつつあった。金浜で自宅を流された松原薫氏は、自分の家族、そして金浜の現状と将来について、以下のように語った。

造成が終わるのは来年の秋ということだから、家を建てるのはまだまだ先になる。松原家もいまは父と妻と3人で磯鶏の河南仮設住宅にいるが、高台に家を建てることを希望している。金浜の人は50世帯くらい河南の仮設住宅にいるが、そこには磯鶏と藤原の住民もおり、ぜんぶで16棟、およそ100世帯あり、ほとんどの人は元の地区に戻るつもりでいる。私と妻だけならどこでもいいのだが、親父が金浜に戻りたいと言う。だが来年までは長い。

震災後は仮設住宅に入ったり市内に散らばったりしているから、集まる機会がない。私がいる仮設住宅でもコミュニケーションをとるために、焼肉やビアガーデンをやるが、参加するのはほとんどが金浜の人で、（同じ仮設住宅にいる）磯鶏や藤原の人は来ない。津波の後は神社の祭りもやっていない。みんな戻ったら再開するのかもしれないが。金浜では10月10日あたりに神社の祭りをやっていた。しかしいま何月何日にお祭りだと言っても誰も行かないのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

住み慣れた自宅も、近隣の家々もすべて流されてしまい、後には更地しか残っていない。それでも、金浜の住民は同じ仮設住宅に集まって暮らし、イベントを開くなどしてコミュニケーションを図り、いずれは金浜に戻りたいと考えている。大筋では、元に近い場所で元に近い生活を送る方向で未来を描いているが、そこかしこに、疲労、迷い、不安が顔をのぞかせている。「小学校の裏の高台は高浜地区だが、金浜の住民でそちらに入る人もおり、金浜地区としての一体性が失われるかもしれない」（聞き取り4、金浜）、という声もある。元の生活に戻ることが、物理的にも、精神的にも不可能であるなかで、それでもできるだけそこに近づきたいという思いが、辛うじて未来を開いていく。

高浜にあって全壊してしまった勤務先の漁協施設は、新しく建てなおされ、仕事を再開したものの、心機一転やり直すという意気込みよりは、こちらもやはり将来への不安が際立つ。

写真３　金浜の高台に造成中の宅地
2014/08/13　撮影：宮坂 清

ここ（宮古漁協高浜水産研究センター）は鉄骨だったから津波でぜんぶ中が抜けてしまい全壊したが、昨年9月に新しい建物が完成し、今年から本格的に仕事を再開した。この施設はワカメ、コンブ、ホヤを採魚してそれを組合に提供する。ワカメがいま入って2週間。ワカメが終わればコンブ、12月。その後はホヤの採魚。ここが再開できるまでは漁協のビルで、補助事業の共同事業をやっており、２７０槽くらい。ワカメの養殖施設は復帰したが、今度は年をとり金もかかるからやめるという人がでてきた。震災の前と後では活気がぜんぜん違い、養殖している組合も減った。後継者がおらず、いま60代で頑張っている人がやめればどうなるかわからない。若い人は津波の被害はなくても外へ出てしまう人が多く、東京など県外に出ている人が多いのではないか。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

施設が復旧しても、そこで働く人の活気は戻っていない。ただでさえ進行していた高齢化と後継者不足が、数年の断絶を経て、一層深刻になってしまっていることがわかる。生活の場においても、職場においても、地域の未来がどのようなものなのか、明確に描くことが難しい状況にある。

■防潮堤の嵩上げは必要なのか

２０１４年8月現在、高浜や金浜では既設の防潮堤に嵩上げする工事が始まりつつあった。地域の人々のなかには、津波の被害を食い止めるために防潮堤の嵩上げは必要と考える立場と、必要ないと考える立場がある。まず、必要とする立場である。

堤防の嵩上げについての市役所の説明は、津波が来ないようにするのではなくて、被害を少なくするためのものであるとのことだった。20㍍の防潮堤をつくるわけにいかないし、越えるという前提だという。同じ規模でまた津波がくれば、うちはまた浸水する。浸水しても被害を少なくするためには嵩上げするしかない。（聞き取り4、金浜）

積極的にというわけではないが、少しでも被害を減らすため、このように嵩上げが必要と考えるか、次の2人のように、嵩上げすることの弊害を強調し、必要ないと考えるか、判断は分かれている。

防潮堤を高くすると言っているが、海が見えなくなったらますます逃げる人が減るのではないか。それより避難道を整備したほうがいいのではないかと思うが、そういう方向には動いていない。そもそも（湾の）奥のほうで津波が高くなるわけだから、堤防を高くして水門で止めるより、津軽石川沿いに上流に向かって堤防をつくり、津波を逃がすほうがいいのではないか。津軽石川の水門を造ると決まったのは私が小学校か中学校のときだったが、あそこで止めるとはね返って波がみんな金浜にくるからと、金浜の人たちはみんな反対した。ますますひどくなったとみんな言っていた。（聞き取り3、高浜勤務金浜在住）

津波のときには防潮堤があって波がみえなかった。震災後、防潮堤を2㍍嵩上げして10・4㍍にするといっているが、さらに海と陸をバラバラにしてしまう。あれはおかしいのではないか、他にやることがあるのではないかと思う。防潮堤を高くすれば水の行き場が狭くなるだけで、結局どこか弱い所へ集中することになるのではないか。人工的なもので守ろうとするのは無理ではないか。津波の教訓としては、逃げるのが第一。それなのになぜ防潮堤を2㍍も高くしなければならないのか。普段の生活も大変になるし、景観も悪くなるし、作ったからといって逃げなくていいわけではない。あることによって逃げなくなるのなら、むしろ作らないほうがいいのではないか。生活している人間がいることを忘れている。なぜ普段の生活を犠牲にしなければならないのか。コンクリートの寿命は50年、長く見積もっても１００年であり、１０００年に一度の津波だったら10回作りなおさないといけない。自然を壊すことにもなる。水産と観光の街だと言いながら、来てみたらコンクリートの塊しか見えないということになる。しかしこの地域でも賛成の人もおり、安全のためだと言われると次の言葉が出

せない。それですべてが許されるという雰囲気があって言いづらい。だが子どもたちの未来を考えると、自然を減らしてしまえば海の浄化作用もなくなり、生態系に大きな影響がでる。防潮堤については、今あるものは残していいが、嵩上げはしなくていいと思う。（聞き取り1、高浜）

ウ　果たして、防災とはなにか

今回の地震で押し寄せたような巨大な津波を完全に防ぎきるための手立てを、おそらく私たちは持ちあわせていない。だとすれば少しでも被害を少なくする方法を考えなくてはならないが、堤防の嵩上げをすべきなのか、それとも避難道を整備し、人々を啓発することで対応すべきなのか、結論が出ないまま嵩上げの工事は始まってしまった。

人々のあいだでは、目の前の生活や将来に対する不安が先立っており、防災についての話し合いはほとんどなされていないという。津波が流れこむことが予想される場所に、住むのをやめて高台に移転し、防潮堤の嵩上げをすれば、もしかしたら人々は避難訓練すら必要と感じなくなるのかもしれない。もしそうなったとしたら、本稿にその一端を収録したような、膨大な量の、辛く苦しい経験の記憶は、行き場を失ってしまう。

しかし実際はそうでなく、具体的にどのような津波対策がとられるにせよ、将来いずれ必ず津波はやってくる。震災経験の記憶をこのように残していくことは、将来の津波に対する、本源的な対策として機能するはずである。

写真４　金浜で開かれた「夢灯かり」
2014/08/16　撮影：宮坂 清

【注】

『平成24年度宮古市中央公民館事業　3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』に含まれる語り。煩雑さを避けるため、「体験談1」～「体験談14」まで番号を振り、続く本文中にはその番号で示す。なお、年齢は、平成24年当時のものと思われる。

体験談1：「印象は波がぴちゃっと来るぐらい」（高浜 70代 女性）、34～35頁。

体験談2：「裏山を歩いて道を覚えていた」（高浜 80代 男性）、36頁。

体験談3：「長い揺れで津波が来る予感」（金浜 70代 女性）、37頁。

体験談4：「物に名前を書いていた」（金浜 70代 女性）、38頁。

体験談5：「津波のことは全く頭に無い」（金浜 70代 女性）、39頁。

体験談6：「避難しないと決めた」（金浜 70代 女性）、40～41頁。

体験談7：「津波を見た事がないから見よう」（金浜 60代 女性）、42～43頁。

体験談8：「孫らに助けられた」（金浜 70代 女性）43頁。

体験談9：「津波が引いた後に黄土色のもや」（金浜 60代 女性）、44～45頁。

体験談10：「入り口が1ヶ所だった」（金浜 80代 女性）、46～47頁。

体験談11：「中国で日本の東北に3mの大津波」（金浜 70代 女性）、48～49頁。

体験談12：「泥の中から見つけた自分の物」（金浜 70代 女性）、50～52頁。

体験談13：「絶対堤防を越えないと思った」（金浜 50代 女性）、53～54頁。

体験談14：「冷蔵庫は浮かんで水が入らなかった」（金浜 60代 男性）、54～56頁。

『広報みやこ』NO. 151に掲載されたインタビュー。

体験談15：城内義男さん（高浜 男性）

体験談16：山本正輝さん（金浜 男性）

船越恭治『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』に含まれる、船越恭治氏と船越典子氏の回想文。
船越恭治「一、私の二十日　船越恭治」、1～13頁。
船越典子「二、家族の証言　（一）船越典子」、14～17頁。

【参考（引用）文献】

大洞晴洋「あの日からの揺るぎない前進」、国立教育政策研究所監修『震災からの教育復興―岩手県宮古市の記録』２０１２年10月、悠光堂。
宮古市教育委員会『宮古市史 民俗編 上巻』１９９４年、宮古市。
宮古市教育委員会・宮古市教育研究所『東日本大震災の記録―調査報告書』（平成23年度研究紀要第79号別冊）２０１２年３月。
宮古市東日本大震災記録編集委員会『東日本大震災 宮古市の記録 第１巻（津波史編）』２０１４年３月20日、宮古市。
宮古中央公民館『２０１２年度宮古市中央公民館事業 ３・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第２期】』２０１３年３月。
船越恭治『東日本大震災発生からの20日間（生命を求めて）』２０１５年10月１日。

【資料】

■聞き取り

下記の５回、地域の方々からお話をうかがった。「聞き取り１」から「聞き取り５」まで番号を振り、本文中にはその番号で示した。

聞き取り１：平成26年８月12日、佐々木好栄さん（１９５４年生）、宮古市消防団第十一分団屯所にて
聞き取り２：平成26年８月12日、安倍圭税さん（１９５５年生）、「異人館」にて
聞き取り３：平成26年８月13日、松原薫さん（１９６３年生）、宮古漁協高浜水産研究センターにて
聞き取り４：平成26年８月13日、荒川清孝さん（１９５１年生）・佐々木春雄さん（１９４４年生）、河南仮設住宅集会所にて
聞き取り５：平成26年８月17日、岩間弘子さん（１９５７年生）・岩間リサ子さん（１９３６年生）・工藤ヒデ子さん（１９３８年生）・関川のり子さん（１９４０年生）・細越章子さん（１９５７年生）、高浜仮設住宅集会所にて

■資料・記事

「宮古市東日本大震災津波浸水図」２０１２年９月、宮古市。
「避難所調査書　H23・3・23」（「東日本大震災避難所等提供資料」）
「金浜老人福祉センター 避難所利用実績（平成23年３月）」
「金浜地区の復興はこれから」『Better Core ２０１３ 秋』２０１３年10月、芳林社。
「３・11教訓１ 二つの機転が命救う 高浜小［宮古市］」岩手日報、２０１２年１月９日。
「広報みやこ」NO．１５１、２０１１年12月１日。
「避難所への情報提供 1～28」宮古市（http://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/hinanjo_joho.html）

インタビュー　安倍主税さん（全文、ただし一部改変）
実施日：２０１４年８月12日　場所：高浜「異人館」（喫茶店）

■閉伊川の防潮堤の上から津波をみる

地震があったときは宮古の街にいて、すぐに閉伊川の水門に行ったんです。行った時は水門はすでに他の団員が閉めていたんですがね。まだその時は大きな津波が来るっていう感じじゃなかったですよ。最初は３メートルっていう話でしたもん。２日前も地震があってその時は50センチで、結局それが前震だったんです、いま思えば。それでちょうど15時に第１波が到来したんです。川は普段と変わらないんですが、白い波が閉伊川の上流の方へサーッと流れていったんです。まだあまり津波だって意識はないんですよ。あまり見た人はいないんではないでしょうか。20センチくらいでしたがね。私（副分団長）と分団長が防潮堤からみていて無線で報告しました。それから閉伊川の水が引いていって、川底がみえました。でも川だからそれほど深くはなくてすぐ底が見えるんです。中学校のときに経験した十勝沖地震くらいの感じで、来るな、という感じがしました。

■ここまで来ると思わなかった津波に、突然襲われる

それから黒い波が来たんです。閉伊川につないであった船や、埠頭に駐めてあった車が流れてきて鉄橋の橋桁にぶつかって、木造の船は砕け、鉄の船はドーンという感じで上流へ流れていくわけですよ。それをずっと見ていたんですがね。どんどんどんどん波がくるんですがね、だんだん私たちもこれはちょっと違うなと思い始めたんです。なんとなくこう川下の方、市役所や宮古大橋があるほうを見たんですよ、カメラを回しながら、その時にあのよく知られた宮古市役所の前の防潮堤からザーっと流れ込む写真の、あの波が来たんですがね。市役所の辺りは防潮堤がまっすぐなんですが、私たちがいた山田線の鉄橋のあたりはカーブしていて、波がグワーンと盛り上がったんです。港のところにつないであった白い観光船が、防潮堤のところで空にブワーんと飛び上がるような感じで見えたんですよ。そこまでは見たんです。あー来た、危ねえ、逃げろ、という感じで。そんなもんですよ。分団長を先に防潮堤から下ろし、私もカメラをバッグにしまって、ファスナー閉めて降りて、途中で飛び降りたんです。

■水をかぶり、流される

そしたら水が頭からザーっと降ってきて、かぶってしまったんです。それで近くの民家の玄関の高いところにいたんですが、水がどんどん来る。どんどん水量が上がってきて、民家の窓が割れて水がザーッといく。そこは地下室があるといわれている家だったんですよ。なのでそこへ入って行っては危ないなあと思って、こっちの方へいくしかないなあと思っていたところへ発泡スチロールの箱が流れてきたので、それにつかまって流れていったんですよ。泳げるような状態ではないんですよ。ただただ流れていくんです。それでその箱が壊れてきたんですが、運良く漁師さんが漁船に載せている浮き輪が、こうたまたま流れてきたんです。そういうことがあるんですよ。あーっと思って腕を通して、つかまって安心したんですよ。分団長をはじめ私たちの仲間が線路のところにいたんですがね。ああ大丈夫だあっていう感じで、あとは流されていったんですよ、３００メートルくらい。沈むことはないから、そのうちどこかへたどり着いて助かるなあと思ったんですよ、その時は。だけど次は、その辺りは駐車場が多いために水がドーッと流れていって、家があるところに来たわけですよ、そうすると流れてきたがれきが家に押しつけられてみんな溜まっているわけですよ、家が動くまでじゃなかったから。

■死ぬのかなあと思う

そうすると、ビーバーの巣のような状態になってるところに私が流れていくんです。水は下を流れていくし、上はがれきが浮かんでるし、体は下へサーッと入っていくんです。それで上が塞がって息ができなくなってしまったんです。手で開けようと思うんですけど、なかなか

開かない、やっぱりいろんなものがグチャグチャになっているから。そこでもがいて、3回か4回くらいは水を飲みましたよ。それでも苦しくはなかったですよ、不思議と。プールとか海で溺れてような感じではなかったです。困ったことになったなあ、うーんそんな感じ。でももしかしてここで死ぬことになるなあと思ったですよ。で、最後に顔が出た。その時に見ていた消防団員の仲間は、後から聞いた話なんですが、がれきの中に入っていく私をみて、ああ入っていったと、そのまま出てこなかったわけですよ手も顔も。もがいているし、けっこう時間も経ったと思います、ああもうだめだってあきらめたらしいですよ。後から聞いた話ですよ。それで、顔が出て手が出たでしょ。ああ生きてたーっていうわけです。

■なんとか這い上がるも、今度は凍死しそうになる

それからがれきの上に這い上がって、小屋の屋根のところに横になったんです、安全なところで。後はヘリコプターかなにか来るんですけども、でも様子を見にきただけだから、ただパラパラって山田の方へこう行くわけです。で、寒いわけです。雪も降ってくるし、暗くなってくるし。ガタガタって震えて、でも立ってる体力はないんです。「立ってみろ」と言われるんですが、立ってはみるんだけどヘナヘナっとなってしまうような状態。このまま凍死みたいなことになるのかなっていう感じですがね。助けてくれって言っても、助けに来れないんですもん。ずっとその黒い水が溜まっていて、線路の方はずっと100㍍位はありますかね。水に入っていたのは20~30分位でしょうかね。水に浸かっている時は寒くないんですよ、命がかかってるから、冷たいも何も関係ないんです。上がってから、濡れているために冷えてくるんですもん。水のなかはおそらくそれほどではないんです。

■運良く救助され、姉夫婦の家で一晩過ごす

で、たまたまなんですよね、お巡りさんがいて、その人が無線で連絡してくれて、それでアルミのボートが来たんです。携帯電話も通じる状態ではなかったじゃないですか。その人がいなかったら私は助からなかったかもしれません。それでがんばれーって言ってる私の仲間も、今度は鉄橋が流されていったんですよ、その時にはドーンとかバリバリとかいう音がするわけです。下手をしてこちらへ来たら逃げねばならねえという感じですよ。私には悪いけど置いて逃げるしかねえという感じですよ。そんな状態でしたがね。それで5時半頃に消防署のボートが来て助けられたんです。助けられたのはいいんだけど、それで病院に行ったのって後でみんなに言われたんですよ、でも毛布もなかったんですよ。同僚が持ってきた毛布をかぶって、軽トラに乗って、山口小学校が避難所だっていうんでそちらに行ったんですよ。その時はもう暗くなっていて、みんな懐中電灯とかを持って歩いて小学校の体育館に行ってる姿は見るんですっけ。で、体育館も暗いじゃないですか。それで、濡れた状態でここに行ってもだめだなあと思ったんです。それで、近くに姉夫婦の家があったんでそこに行ったんですよ。で、お風呂ってわけにもいかないから、水をかぶってヘドロを落として体を洗って、後はその晩はその家でウイスキーを飲んだですよ。それで落ち着いたんです。

■「異人館」へ寄り、捜索活動に加わる

次の日はここ（注：異人館）を見に来ましたがね。その時は宮古の街を歩いてきて、大船渡のほうで5㍍の津波が来たっていう放送があったんですよ。それで自衛隊の人から、こう逃げろおって言われて、私たちも分庁舎の上のほうに上がって様子みたんだけど、結局デマだったんです。そういうのはけっこうあったんです、また来たって話が。困ったなあ、ここへ来るにはどこを通って来たらいいんだろうか、磯鶏を通ったほうがいいのか小山田を通ったほうがいいのかなとかって考えて、人に聞いて、あっちは歩けますっけって聞いたら歩けるっていうから、こうこう歩いてここまで来ました。ここに来たらば、建物は残っているが、下がもう何もない状態で、うん、それで1回帰りましたがね。

次にその後、金浜高浜の十一分団のところで行方不明者の捜索活動

をしました。話はみんな聞こえていたんですっけ。二分団の副分団長が流されたっていう話をね。無線とかなにかで話は流れていたんですっけね。それでもう次の日には袢天着て歩いてるじゃないですか。だからみんなから、あれっていう感じで。いや、結局、夢中だったんでしょうね、と思いますよ。だってみなさんヘドロの水とか飲めばみんな肺炎になったりしたんですもんね。水出して病院行ってっていう感じで、盛岡の病院なんかに行ったんですもん。で、何もなかったのって言われて、いや別に大丈夫だったって、水も出ないしなにもって。どっか怪我はって、すり傷くらいですもん。だから後はずっと金浜のほうでお手伝いしました。

■頭が混乱してくる

ちょうどそのとき、2日前に父親が宮古市内の病院に入院していたんです。母親もそれに付き添いしていたんです。その病院は非常発電の電気もあったんですよ、だからあそこは大丈夫だって、私も安心したんですがね。で、私が流されたとかってのは言わなかったですよ、親にはね。でもやっぱりわかるんですよ、看護婦さんたちもいつもの私の顔とちょっと違うなってのが。やっぱり少し魂が抜けたような感じだったとは思います。捜索活動をして、今度戻ってまた知人のところへ泊まっていたんですけど、その繰り返しでしょ、やっぱりこう精神的に変になるっつうかね。あのがれきだらけのところで遺体を収容したり何だりして、今度は何も変わりのない当たり前のところを通っていくじゃないですか、その繰り返しに、何だか頭がこう混乱してくるような感じの。うん、そうですっけよ。

■辛い遺体収容

だって遺体収容っていうか、まあ最初は余計に滅茶な捜索だったんだけれど、結局、生きて見つかった人はいなかったですけどね。でもこう、この地区で何人何人って、あとは結局、車で通りかかった人なんかもいるじゃないですか。だからそれ以上っつうことですもんね。で、どこその人はまだ見つからないっていえば、手だけがパッとこういうとこから出てれば、ああいたーってことになるんだけれども、まともな顔の人も駆けつけて、誰だべってことになるわけですよ。で、近所の人だけじゃないですもんね。やっぱりがれきに揉まれてるでしょ。そうすれば顔もこう骨折するじゃないですか。鼻も曲がれば何も。顎とかひしゃげてるじゃないですか。ああ、誰それさんに似とるけどなあっつう感じ。そうですっけ。ほんで、あの最初のころは警察に連絡して、警察が来て、結局、そこの現場を見てっつうようなこと、いつもの通りのことをやるつもりだったわけでしょ。どっちに顔を向けてたとか。私たちには訳がわかんないですよ。早く運んであげてね、そんなどっち顔向けてたって何かってことまで（訊かなくてもいいんではないか）。事件か何かで、普通の日常で死んでる人がいるっていうんだったらわかる。そんな波で揉まれてきた人が、どっちに向いてたとか、足が上だったとか下だったとか、関係ないんだろうと思うんですよ。おかしいんでねえかそんなことっていうことになってね、それがだんだんなくなってきて、すぐあの自衛隊の人が収容袋か何かに入れて運ぶようになりましたがね。規約どおりにするんだっけね。

■想定しているようでしていない

だからやっぱりそう非常時の態勢ができてないというか、わからないでしょ、想定してないんでしょ。想定してないとは言っても想定はしてるんですよ、みんな来る来るって言われてたんだから。20メートル以上の津波が来ますよって。そしたらどこさ逃げたらいいんだんべって田老の人なんかは言ってるわけです。そりゃあ言ったんですもん、宮城県沖地震で必ず津波来ますからって。いつ来てもおかしくないって。だから誰も想定してなかったってことはないわけでしょ。みんなわかってるんですもん。ハザードマップで浸水域も何もぜんぶ作ってあるんですもん宮古市は。それでもこれなんですもん、そうですもん。だって津波来るなんて言っても、はっきりいえば誰も参加しないんですが。あの、そういう小学生か何かの一生懸命やってるところはやるんです

よ。

■独居老人や身体の悪い人が逃げ遅れる

だけどそうでないところは、私の管轄でも独居老人なんかが多いんですよ。古いあのアパートじゃなくて、古いほんとに風呂なんかないようなところに、独居老人が点々点々といるわけですよ。そういうとこの人たちは、なあに津波なんか来るわけねえべがすかっていうことになってるんですよ結局。あの防潮堤があるから、越えてくるわけがねえべやって。でも来たでしょ。来て、ほらみんな道路にこれくらいの黒い水がザーッと来たから、ほれきたほれきたーって言って、はじめて、道路出てきて足取られて流されたんですもん、みんな。そして川べりのところ、膝まであるようなところで足取られて、でみんな見てる前で、若い人でも電柱つかまってたのを手を離して流されていったとか、2階からそれ見たって人、なんぼでもあったんですもん。中にはやっぱりその、身体が悪くてデイサービスに行ってるご夫婦がいて、地震の後、そこにやっぱり社会福祉協議会の職員の人が行ったらしいんですけどね、大丈夫かなって感じで。次の日、津波の後に捜しに行ったら、その人もやっぱりご夫婦と一緒に3人そこで死んでました。そうですもん。あそこで二十何人って亡くなってますもん、老人とかなにかね。

■元に戻って忘れてしまう

ううん、誰も参加しないんですよ。そして次の年にはさすがにみんな参加しましたよ、津波の避難訓練には。あの、働きに来てる人たちも、建設屋さんで中にいる人たちも、10人くらいぞろぞろって、あなたたちは参加者ですかって聞いたら、そうですって言ったから。それまではそんなに参加する人はいなかったんですよ。それもまあ次の年で3年目ですか、こないだはだんだん少なくなってきましたよ、うん。だから、やっぱり元に戻るんですがね。忘れるんですよ。忘れてるからこうやって流された経験を一生懸命しゃべれるんですよ。

■お客さんに話すとシーンと聞く

お客さん、来るでしょ。結局、お盆で、あの早めにお墓参りに来る人とかいるわけです東京の方からとか。そういう人たちに話すると、ああやっぱりテレビの中で見ただけではわからないことがあるんですねって言いますもん。シーンって聞きますもん。いままであまでもねえこうでもねえって言ってた10人位の人たちがね。待ってえそれからどうしたんですかって言うから、順番にしゃべるから待っとがんせって言って、そしたらみんな、はあって、こうなってくるんですっけ。うーん、そうやってねえ、遺体とか捜索して、ああ生きて見つかった。この位の小さいワンコが生きて見つかったですよ、それだけでした。舌をベロベロんって出して衰弱したような感じで、だけど飼い主が見つけていきました。ああよかったなあってのはそれくらいでなかったか。

■3食たべなくても大丈夫なのに、食べないとだめだと思う

それで後は結局、自衛隊の人たちが一生懸命、炊き出しで運んでくれたじゃないですか、ご飯とかお汁とかおかずですがね。でもね、みんな3食たべるのに慣れきってるから、3食くわねばだめだと思うわけですよ。食べない人もいるのにね、と思うんですよ。1週間、水だけあれば大丈夫なんです。みんな焦って、食べねばならないけどもどうすっぺが。食べなくてもいいのにね、水だけ飲んでれば大丈夫だって。山で遭難したとか海で遭難したとかと思えばいいんですよね、はっきり言えば。あの、海だとライフボートの中にはちゃんと非常食が入ってるけど、がんばれ、間違いなく助けが来るって紙に書いてあって、1週間食べなくても大丈夫だって紙が入ってるんですよ。で、飴とかなんとか入ってるんですよ。そうなんだけど、なんて言うのかな、人間ってこう、そういうような気持になってくるんですね。

■情報がないと噂を簡単に信じてしまう

そして、デマでしょ。噂が流れてくるとすぐ信じるんですがね、情報がないから。テレビもなにもなかったでしょ、だからねえ、あの山

田町っていうかね、町の名前出して悪いけど、あちらでは自動販売機はもうみんな壊してみんなとったとか、そりゃああちらは火事でも焼けて何人も亡くなったんだから。宮古市はまだ奥のほうのスーパーも何もあるじゃないですか、だからまだ、被災してないところもあっけど、あっちはぜんぶ焼け野原で、全滅だ、壊滅状態。壊滅状態ってどんなことなんだべっと思うわけですよ、私たちは。未曾有の大災害だって、ううーん。でも物を持ってる人とか車で食物を持ってる人がいれば、車から引きずり下ろされたんだってって言えば、信用するし。いや、女の人が強姦されたって言われれば、それも信用します、うん。そういうデマをすぐ信じるんですって。何にも情報がなくって、だんだんにラジオだテレビだって言ってるけど、テレビは政府広告機構だかのやつばっかりで、たまにニュースが出るくらいだったじゃないですか。大変なことになったなあって思ったですよ。でも宮城県沖地震とは違うんだっていうことになって、ほう、そしたらどういうことになるんだっぺって。宮城県沖地震だと思ったんですよ、私たちは。でも違うっていうことになったわけで、震源地がね、宮城県沖地震はね、まだそのままだっていうから、ほお、じゃあ今回の津波の震源はある程度予測されたところじゃなかったんだあっと思ったですよ。それでまあ福島の原発までは頭が回らなかったですけど、大間（青森県）の原発は知ってたから、大間はどうなったのかなあって思ったら、大丈夫だっていう話だから、うんじゃあまだいいんだなあって思ったですよ。

■新潟のブルボンが直にお菓子を届けてくれる

それでも、しばらく結局、スーパーにもパンとか納豆とか豆腐とか、毎日来るようなものは流通がダメになったんで途絶えたじゃないですか、そして物が入るようになっても、結局、1人1個ずつですもんね。パンを普通に食べてるのに、ああパンは久しぶりに食べるなあって感じ。そうですもんね。新潟にあるブルボンってお菓子屋さんがやっぱり中越地震のときにみなさんにお世話になったからって、ガソリンがないのに、自分たちの会社のワゴンで直に持ってきましたって、お菓子から何から、避難所にね。高浜地区避難所に配って、ハンコもらってって感じ。よく来たですがね、ガソリンがないのに。やああの中越地震のときは私たちが世話になったからって、直に持ってきたいと思って持ってきましたって。いろんなのがそうやって来るようになりましたからね。まあ私は車も流されたから、ガソリンスタンドに並ぶってこともなかったですけど。自転車であるくしかなかったですけど、まあガソリンがなくてね。あの頃10リッターいくらだとか、後はあの、放置してある車からガソリン抜こうとしたりした人もいたんですよ。そんなこともあったですがね。

■異人館、津波に流されかける

そしてそれから、私は結局ね、ここ水も電気も何も通ってない状態だったし、ここ店もちょっとダメな感じだったでしょ、で、おふくろたちは病院に入院してたから。私の自宅はこの2階なんですよ。その時は私の女房は、津波の後にね、結局、内陸の実家のほうに帰ったんですよ。怖かったんでしょ、波がうわーんと来るのが。あっちのほうの高台から見てたんですっけから。この建物よりもずっと高いところまで飛沫（しぶき）が上がったんですっけ。で、ここまで水没するでしょ、天井まで壊れたんですもんここ。だから流されないであったのが不思議なくらいで。隣近所もみんなあったんですもん。

■生と死のわずかな分かれ目

あのお年寄り、おばあちゃんと1人きりの弟さんがいて、おばあちゃん足が悪くて、それ助けようと思っているうちに、家ごと流されていったんです。で、おばあちゃんは遺体で見つかったし、弟さんは行方不明。うん。そういう人たちもいるし、たまたまそこの家に車でお母さんと小さい子供が走ってきたら津波が来て、ざーんと玄関のところに突っ込んだんでしょうね。それで、この家に入って、お母さんと子供が家の中に入ったんです。で、流される前に窓から山さ逃げろって言って、その親子は助かったんです。そういうこともあるんですわ、いろいろ。

ほんとに、危機一髪っていうか、わずかなところで流されるんですがね。助かる人は助かるし。あの金浜の捜索してるときもね。なあに、こう杖ついておじいさんが歩いているわけですよ。ああおじいちゃん助かったんだあ大丈夫だったんだあって言ったら、うんにゃあ前の戦争でも助かって、その前の津波でも、昭和8年ですか、それも助かって、今回も助かってって、大したもんです。杖ついても20分か25分あったじゃないですか、地震があってから津波が来るまでが。だからそれでも、そういう足の人でも、高いところに上がれば助かるんですがね。でも、上がんない人がダメなんですね。で、時間が変に20分30分あるから、戻る人が出てくるじゃないですか、1回高いところに上がっても。様子見てて、ああ水が引いてった、まだ来ねえって誰か言えば、おれもじゃあ金庫からあれ持ってくるとか、玄関に鍵かけるの忘れたとかです、そんなことで行くんですもんね。で、ダメになった人もいますがね。だから何も持たなくてもいいのに、ハンコも通帳も何もいらなくて、郵便局に行けば10万だかは下ろせたんだけどね、通帳も何もなくても。当時、当座の金は。まあ結局、機能しているスーパーに行ってこれ買うってことでしょうけど。だから通帳も何もいらないわけですよ、実印も何も。でも、結局ね、戻る人がいるんですよ。戻れば、やっぱり10分行って、中で10分やって、帰ってくれば30分ですもんね、間違いなくやられますもん。それでも当日は電気が止まったんで、やっぱりその辺のパン屋さんで働いてる女の人は、赤前のほうにお母さんがいるっていうので、車でばあっと行ったんだそうです。それでお母さーんって車乗せて、そしてずっと向こうの藤畑って津波来なかったほうまで行って、助かったんです。それも信号が止まってるからね。都会だとほら渋滞するじゃないですか、信号が点かないと。この辺は割りとその、渋滞ってことにはならなかったんですよ。まあそもそも交通量はそんなに多くなかったですからね。だからそうやって助かった人もあれば、逆に、海のほうを通ってダメになった人もいるし、いろいろですがね。なんであっち行ったんだかねあの人は、あっち行けばよかったのにって。あとは、みんな三陸縦貫自動車道、金浜までは通ってたんですけど、そこみんな歩いたり自転車で行ったり、みんなそうやって行きましたがね。

■もういいよみんな投げろ、という感じになってしまう

まあとにかく、テレビではわからないのは、黒い泥ってもんじゃなくて、ヘドロと、灯油のタンクがあるわけですよこっちには。100リッターとか、200リッターの灯油のタンクが各家庭にあるわけですよ。それがぜんぶ流れるわけですよ。あれ流れれば、スポンと抜ければ、ホースから灯油がダーッて出るんですよ。だから街のなかはぜんぶその灯油の臭いとヘドロの臭いが混じったので、泥がますます油が入ってっからネチャネチャになるんですわ。で、洗っても、油が入ってるから、洗ってもダメなわけですよ。水道もろくに出ないし、当然洗剤もないじゃないですか、で、まあ長靴じゃないと歩けないでしょ周りもなにも。で、何やったらいいべえって何からやったらいいべなあっていう感じ、みなさんがね。そしてやっぱり近所の人が、汚れたの道に出せば、市役所でみんなゴミで持ってくよっていってたよって言うから、みんな出したわけですよ、家の中からものを。で、濡れた畳も表に出してどうにかするべえってやったわけでしょ、でも投げ（捨て）なくてもいいものも出したわけですよ。洗ってとっておくって気にはならねえんですよ。もういいよもうみんな投げろっていう感じ。お皿でもなんでも後で洗えば大丈夫なんだけど、その時はもういいから出せって感じ。後になってから、ああ投げねばよかったっていう。何もね、臭いもんでもなくシミになるもんでもなかったらば、別にいいわけですから。みんなの集団心理ですもんね、道路にはみんなそういうがれきっつうかゴミでもねえがれきがぜんぶこう、人はその間を縫うようにして歩いて行ったんですいつも。それで、後でボランティアの人が来たんだけれども、初めから来ることがわかってればそんなことしなくてもよかったんです。いろんな人が来たんですよね、ボランティアで。だから私たちが、年取った人がそんなことやんなくてもいいんだけど、だまってられないんでしょ、ボーっとしてると不安になるんじゃないで

すか、心理的に。そういうことですっけね。私もまあだから捜索してたってのは同じだと思うんですよ、何かにかやってなければダメだという感じで。

■ありがたかった自衛隊

印象的だったのが、自衛隊のお兄ちゃんたちが来るわけですよ、若い人たちなんですけど、来てまずは現場をみて、初めて見るでしょ、そういうこう、がれきの状態の街をね。そうすると、どっからどうやっていいんだかわからない、だから消防団の人や地元の人なんかにどっからどういうことが必要ですかって聞いてね。それから、あの家の屋根の下にはきっとまだ人がいる、だからその人を探してくださいって言えば、道具もないから屋根はがして板も剥がして、チェーンソーで切って、人がいねえか探す。確認したのは印しをつけて、車の中も見て印しをつけて、全部やりましたですもんね。だからもう頼もしく思ったんじゃないですかね。子供さんが大人になったら自衛隊になるって言ったって言いましたもん、やっぱり子供は正直だと思います。いやほんとに自衛隊がいなければとても無理だったって言いますもん。すぐ来てくれましたからね。まあ屈強な、訓練してるんですもんそのために、あの人たちはね。だからね、また痩せてればあれだけど太ったおばあさんを背負ってね、こう坂を高いとこさ避難させていく、一生懸命やるんですってよ。ああほんとに偉いもんだなあって、自衛隊ってのはいねばとてもダメなんだと。

自分たちはこんな缶詰のやつ食べてるんですよ、４種類か5種類ぐらいのやつ。それでも、温かいのを食べれるからまだいいですよって言いましたっけ。結局、冷たいもんでもなんでも食べていかねばならんでしょ、火が使えないとかね。だからそういう自衛隊の人たちとも話すわけですよ、大変だねって。ご飯だ、肉がいっぱい入った肉ジャガだとか持ってくるけど、何を食べてるのって聞くと、野菜がちょっと食べたいですねって言いましたもん。

■ソフトバンクの仮設アンテナをａｕの作業員が建てる

いろんな人がおったし。ソフトバンクのジャンパーを着た人たちが、一生懸命仮設のアンテナを建ててるんですっけ、金浜の避難所のところに。私、声かけたんですよ。「ソフトバンクさん、一番つながんなかったっすっけね、ａｕが一番で次がドコモでソフトバンクさんはその次ですね」って。

「あのですね、実は私たちはａｕなんですけど、ソフトバンクさんに頼まれて仕事してるんですよ」って。そういう事情もあるんだって初めてわかるでしょ。声かけないとわからないでしょ。電柱たてるの早かったですよ。やってる人たちもみんな他からですもんね。みんな秋田のほうから来てるとかです。どこに泊まってたんだかね、あのころあの作業員さんなんかはね。他のところから応援部隊で来てるから、みんな場所の名前なんか言ってもわからないんですっけ。だからそういうような人がいっぱいいましたっけ。

■写真も額もみんな投げてくれ

それから次は、私は土木作業員もやりました。結局その、人手が足りないわけですよ。だからがれきになった家の解体だとか、あといろんな土木作業ですがね、じゃあ今週はあっち行けとかいわれて、いろんなことをやりましたがね。そしてから次には、がれきの分別作業をやったんですよ。あの、東京都が宮古市のがれきを受け入れるということになって、その最初の時があったんですがね。その年の11月ころ、私はその会社に行って、がれきの分別をやったんですよ。でそのときの民主党の環境大臣ですか、あの男ぶりのいい人、なんだっけかなあの人、報道陣も東京のほうからやっぱりやってきて、１００人くらいだったですか、宮古市から東京都へ第1号のがれきが行きますってそういうのを撮るのにね。そうすると、がれきにもいろいろあるんですよ。思い出があるような品もあるんだけど、なかなかね、みなさんそうやって投げたんですよ、そうやって泥がついた状態だから。だから写真なんかもあるんだけど、写真もなあ、欲しがる人もいるし、あと

はいらないって人もいるしね。解体する家でも、子供さんの賞状とか貼ってあるじゃないですか、額とかね。それも、これはどうするんですか、これは持ってったほうがいいんじゃねえのって言っても、いやあいいからいいからって、全部ぶっ壊してくれって。なんかひとつくらいこう思い出にするものがあってもいいんじゃねえのって言ってもね。ああいいって、解体してくださいって、解体したんですがね、みなさんがね。

■建物の解体、運がよかった人と悪かった人

もう、タダだっていうから、解体するのがね。それで助かった人もいるんですよね。年寄り1人だけで住んでれば、解体するったってけっこう費用もかかるじゃないですか。解体したくっていて、津波がきてタダで解体してもらったってとこもあるんですもんやっぱり。こういう話してもいいんですかね、いやあるんですっけ。うまくやった人もいるんですよ、そういうふうに。だって通りのところで店子があってみんな貸してやってるとするじゃないですか。そしてその土地はみんな私のものだとするじゃないですか。そこの店を津波でみんなやられたわけですよ。立退きやって解体するとすればお金いるじゃないですか、それがなしでいいんですもんね。この壊れた店はみんなタダで壊してくれるんですが、タダで。そうすればこの人は一番いいじゃないですか。でも、もう商売やめてって思ってて鉄筋コンクリートの建物があるんだけれどもってのも、みんなタダで壊したんですもん。何千万だべね、やればっていうのを、タダだったですもん。だから得した人は得しましたもん。持ってる人はタダで壊してもらって、アパート建てていま貸してる人、どこでもあるんですもん。だからね、うまくいったひとはうまくいってるんですよ。一番悪いのは、店舗の借り手やってた人は何にもお金降りなかったですもん。借りてる人はダメなんですよ、補助金も何も下りないんですもん。自分の建物が壊れたのであればいいんだけど、電気屋さんで電器がいっぱいあったって言っても、これ借りてる建物ではダメです。中のものもダメ。みなさんこれね、地上デジタルで買い時だったんですちょうど、大きなテレビにしたんですよ。でもそれもみんな流されちゃったでしょ。がれきの分別に行くとテレビの液晶なんてペラペラってなってるって、これがそうなのかってものですもんね。みんなだからローン組んだりして、もうないテレビにお金払ってんだって人も、なんぼでもありますもん。だから運が悪いってそういう人もおるし、運がいいっていうか、よかったなあうまくいったなあって人もあるんですよ。だってあそこのホテルが、景気悪かったから解体したものもあったけど、あれ、津波が来てからだったらタダで解体してもらえたのになあってこともあるわけですよ結局。魚市場のほうだって、そりゃよくなったって、みんなタダで壊してもらってますもん。こないだ火事になったけどね、そういうこともあるし。わかんねえですよ世の中は。

■人の目を気にせずものを食べられるうれしさ

仮設ができた時はみなさん喜んだんですよ、6月に仮設ができて入れるって。私たちが白浜って地区で土木作業してたときに、やっぱり働いてる人たちも避難所にいるわけですよ。で、避難所にいる人たちを非常時ということで使っているわけでしょ。で、漁師さんだけど、もう舟もないからどうなるんだかなあって言ってたんですよ。で、仮設ができて中に入ってみると、まあ立派になるわけですよ、流しも何も、やあこんなになってんだあ、風呂があっていいなあって、じゃあ今日から布団で眠れますって。それまで布団じゃないですもんね、マットレスだとか敷いて。何が一番かって言えばやっぱり、家族水入らずで、人の目を気にしないで、ものを食えるってのが一番でしょ。なんでもいいっけ刺し身でも買って食べっぺしって感じで、ゆっくり奥さんと旦那とこう酒呑んでスルメの刺し身かなんか食べるっつうのがね、人の目気にしないでね、一番よかったんですよ。

■避難所暮らしで人の気持ちが荒んでいく

だって避難所ではなんぼダンボールで目隠ししたって、みんな見て

るんですもん。子どもなんかが、あースルメの刺し身食べたっけえって言うじゃないですか。そしたら、あー食べろって。食べた気がしないんですよ、ほんとに。そのストレスなんですよ一番がね。だから目隠しで囲ってるんだけど、それでも見えてるわけですよ、うーん。24時間、一緒なんですもんね、暮らしてるのが。あそこの奥さんはなに、いつもいい話ばっかりしてるけど、実際はトイレの掃除だとかなげてもさっぱりやんねえっけとかです。ぜんぶ見られるんです。だから今回の避難生活ではね、もうわかられてしまうんですみんな。それで、人の気持ちはね、だんだん荒んでくるんですがね。もう支援物資だってくれば何でももらうんです。支援物資が来るでしょ、避難所の中にね。はいはい1人1つって、もう1回来てもらってく人もあれば。同じ地区でも、あんたの家は2階が大丈夫であそこに泊まってるんでしょ、これは私たちに来た支援物資だからあなたにあげる支援物資はないですって言われた人もいるんですもん、同じ町内でもね。それに対して、そんなことはないとは言えないですよ、そういう人が少なくて、こっちが多いんだもの。揉めたくないじゃないですか。

■避難所の情報交換

避難所にいると夕飯で人が集まるわけじゃないですか、そうすると日中いろんな人と話していろんな話を仕入れてくるわけですよ。山田から帰ってきた人の話だってよってのが、みんな集まったときに出るわけですよ、自分の行動範囲は狭いですから。5人くらいで、あっちから来た人の話だとこうだったとか、こっちから来た人の話はこうだったとか、来るじゃないですか。で、その人たちはまた他に行ってしゃべるんですよ。田老は壊滅状態で、役場と何軒かしか残ってないってのは、想像はつかないんだけど、みんなこう山越えてなんなりして歩いて来たんですもんね。

■保育所の子どもを避難させる

宮古の保母さんで田老の保育所に行ってた女の人もいるんですよ。私も後から聞いたんだけど、その子もあまり話したくなかったんだけど、私もほらそういう目にあってるでしょ。話がフッと出たんですね。だっけば、お家は市役所の近くのところだから、当然家もダメだべなあと思うじゃないですか。でも自分はちょうどお昼寝が終わったころで、小さい保育所だから、1歳から何か月から何からみんな預ってるわけでしょ。その子たちみんな避難させて山の方に避難するのに、バアっと後ろみたっけが、津波が、空から来る感じ。結局、防潮堤を越えて来るでしょ。こう見れば、上から来る感じがするんでしょ。そしてやっと神社のほうに逃げたんだけど、飲む水もないから、たまたま持ってた人がペットボトルの水を子供たちにキャップ1杯ずつ飲ませたってば。そういう話聞くとね、自分の親も心配だったんだけども、そういう子供たちいっぱいいるし、そういう話聞くとねえ、グッときますけどね。いままで話してなくても、やっぱり何かね、こう話したくなるときがありますよ。そうしないと、心に溜まっていく、どんどんどんグウっとなって、ダメですもん。

■2年3年たつといろんなことを考えだしてしまう

親戚が、奥さん何だか具合が悪そうだって、何かしたんですかって聞いたらば、その人の親戚や親が9人亡くなった。一気に9人もね、山田町でね。やっぱりもう布団かぶってね、もう何も考えられないくらいになって、はあああって、そうだったって。ノイローゼになって精神安定剤かなんか飲んで。そうですっけもん。で、3年経って、いま、1年目はなんてのかなあ、何かしてねばなあって感じで動いてるじゃないですか。先のことも考えたって仕方がないんだし、でも2年3年ってなってくっていうと、今度はやっぱりいろんなことが、思い出してきたり、考えさせられるんですがね。いつまでも片づけてばかりもいられねんだっけし。今度は仮設出て家建てろったってそんなに簡単に建てられるわけねえべしなあって。年もどんどん経ってくれば、年金暮らしの歳いった人たちはこの先どうしたらいいんだべってなるじゃないですか。

■お金はもっているが不安で使えない

でも持ってるものは持ってるんですよ、お金は。田老町もそうですけど、無くなれば、見舞金もそうですけど、保険金もあるじゃないですか。大なり小なりかけてるでしょうから。だから、もらうのはもらったんですよ、みなさん。それで、通帳に預ける人はあっても、借りる人はなかったんですもん。いま家を建てたりなんだりするので借りる人も出てきているでしょうけど。それまではお金はあるんだけど、ほらでも先がわからないから、不安なんでしょ。災害公営住宅もできてるじゃないですか、何箇所か。でも、私もできたら入りますって言っても、手あげてても、入ったのは半分にも満たないわけですよ。それはやっぱり、入れば家賃がかかるじゃないですか。仮設にいる分にはタダですよ。そうだと思いますよ。だって入ればお金かかるんだもの。たいてい2万円から上は6万円くらいですか。大きさと所得に応じて。それでも、一生懸命相談すれば、2万円より少なくなることもあるとは思うんです、年金暮らしだということになれば。それでもほれ、お金がかかるんだから、タダでいれるうちはタダのとこさいるべってなるわけですよ。でも今週で終わりですから次は引っ越してくださいって言われたときに、みんなそこに殺到したらば入れないでしょうね、たぶん。だから、そういうことになるんですがね。

■もらって助けられてばかりではだめ

私も支援物資が体育館にこうあるんで、もらいに来てくださいってのがあったんで、行ったことがあったですよ。避難所ってとこはいいんですよ、そういう情報が密に来るから。必ず支援物資がドーンと来たりするのがあるけど、建物が壊れてるけど2階のほうに住んでるとか、アパート借りてそっちにいるって人たちには、その情報は来ないんですよ。例えば内陸の盛岡か何かだって行かなきゃいけないじゃないですか、情報が。盛岡のほうにもあったんですよ、そういうこう、支援物資があるところがね。でも盛岡は大きいけどちょっと離れてるから、そこまではなかなか行かないじゃないですか。だからこのテーブルの中から、日用品がこの中にありますから、なかから1点選んでください。こっちのテーブルの中からはまたそれも1点って、こういうふうに決まってるんですっけね。そうするとね、1点って言っても、これも1点です、例えば洗剤のセットなんかのちょっと大きいものも1点なんです。そうすると、どっちが得なのかって思うじゃないですか。そうするとね、おれこっちだなあとか、歯ブラシ1本でも1点ですよ、歯みがき粉がついてても1点なんだもん。そうすれば、そういう心理になってくるんですっけ人は、荒んでくるんですがね。だからあの、いらっしゃいっていうからね、どうもって持ってくとね、あそれは100円ですって言えば、お金とるのって言って戻す、そういう気持になってしまうんです、なりたくなくても。やっぱりもらい続けてはだめだ、もらって助けられてばっかりではだめですもん。他の人たちも、誰かの役に立つんじゃないかってことで何か一生懸命つくって、それを売って、アフリカの子供とかにあげてるところもありますけ、やっぱりそういう気持が、ほんとは必要なんだけどもね。ただただもらってるだけってのは、気持が荒んでダメですよね。言われるんですよ、あのあそこのなんとかさんとこは、みんな避難所に行って物資をもらって、朝昼晩とご飯のでる時に夫婦で行って、ああ今日はこれをもらって帰る、夫婦で行ったら2つでしょ、小屋ができたんでねえかっていう噂されるんですもん、そういうこともあるんですが。だからね、それもみんな、気持がみんなりたくなくても荒んでくるんですもんね。前はそんなことではなかったんだけどね。

■仮設住宅もピンからキリまである

いままだ仮設でしょ。いや仮設はひどいところでって話ばっかり出るけど、前の家よりずっと暖かいですって人もいるんですやっぱり。だってもともと木造のこう、なんぼストーブ焚いても暖かくならない部屋にいたんですもん、例えば漁師さんとかなんかはね。私の街のほうにあった家もそうだったけど、断熱材も入ってないところもあったんですよ、みんな。それから比べればいいや、大したもんだ、暑くな

ればエアコンってやつを入れればって、いいって人もあれば、それに仮設って言ってもほんと薄仕上げだったようなやつは一番最低じゃないですか。でもハウスメーカーなんかが建てた仮設はいいんですっけ、公園かなにかに建てた小じんまりしたようなとこは。だから仮設はピンからキリまであるんですもん。一番ひどいのは田老の４００所帯が入ってるところなんかは、ひどかったでしょ、グリーンピアのところの。建ててるのを見たけれども、ただ杭打って、バタバタって組み立てて。で、もともとあそこ寒いところだから。だからね、わからねえ人もいるんです、エアコン使ったことねえからね。ああおばあさん、エアコンが暖房になってますとかね、そういう問題もあったですよ。

■道路を一生懸命つくっているが、人も車も減っていく

いま3年経ってどうなんですかね。まだ、何やっていいんだかって、役所でもなんだかよくわからねえけど、計画はなんかやってっけど、道路だけはやってますよね一生懸命、トラックがね。あそこは何ができるんですかって、あそこただ道路から出た土おいてって、また持っていってるようだっていうんだけれどみんな。計画だけずっとあるんだっけ。予算もつかないからできるはずないっていうような道路が、いまできますもんね。ここ5、6年でぜんぶできるでしょ。ずっと重茂の方へもぜんぶトンネルで行くんですもんこんど。そんな夢みたいな話はみんなこれ津波のおかげ、ですもんね。津波で亡くなった人のおかげですが。その、いのちを助けるっていう名目の道路ですもん三陸縦貫道も。前であればこんな交通量のないところにつくる必要はないっていうことだったじゃないですか。だって税金の無駄遣いだって。だからそれも、復興のいのちの道路ってことでお金もとれるっていうし、まあでもできてしまえば今度は車が少ないでしょ。少なくなるんです。人口も減ってくれば、おお久しぶりに車走ってったっけっていうようなことになんでねえかってみんな言いますよ。今でこそ建設のトラックがみんなバンバン来てるじゃないですか。他からもレンタカーのようなのが他県からも来てるけど、そんな走ってる町じゃなかったんですもん。人口流出はしてるし、そうすれば、みんな復興の事業が終われば、人は少なくなって、車だって走らなくなるんだから。だからいまの復興需要で一生懸命稼いでる人は稼いでますよね、でも変わりない人は変わりないし。

■お客さんにゆっくりしてもらえる店にしたい

私は、いろんなことがあったけれど、やっぱりあのとき、いのち落としたかもしれねえなあって気持もあるじゃないですか。でもまあ店が残ってて再開できたでしょ。生き返ったようなものじゃないですか、店もね。私も生き返ったし、また第2の人生だなって感じもするんですが。やっぱり今までと違って、お客さんなんかともしゃべっていけるような、ゆっくりしてもらえるような店にしていきたいと思ってるんです。1回死ぬ思いしたんだから、自分には怖いものはないんだから、と自分に思い聞かせて。あとはお客さん、のんびり、だって食堂ができたんですけど、結局ゆっくりする場所がない。あの、話するとこが。まさか仮設でたとこで、そこでお茶っていうこともないじゃないですか。ほうすれば、あそこの店始まったっていえば、行ってみしって来るわけですよ、とかね。いつも2人で来てたっすが、もう1人の人はどうしたのって言えば、あの人はねえ、まだ見つかんねえんだって言う人もあるんです。ある親子で、あの娘さんと来てたっけねえおばあちゃんがね、って言えばね、あの娘はね、震災では大丈夫だったんだけど1年くらいでねえ、癌だったのかなあ、バタバタっと亡くなってねえって。いつも娘さんに連れられて来て、お昼食べてったじゃないですかって。でもやっぱりううんあの席でいつも私たちは食べてたって言うんです。やっぱりその人たちの想いがあるんだと思うんですよ、あそこの店に行って、あそこの席だったって。行けば、その人の供養にもなるのかなって思うらしいんだっけ、その人たちは。けっこういますもん震災後に1年かなんぼで亡くなったって人が。いろんな心労が重なったりとか、病気とかなんとか、そういう人があるんですよ。やっぱりそうするとね、こうこうこうでそうかそうだって気持になるんで

す。

■みんなの気持ちがうれしい

そうなんです、思い出の場所なんですっけ。二十数年前に来たとか言うんです。ここ26年位になるんです、最初にオープンしてから。だから、3年は休んだわけでしょ、店がね。ずーっと続いてればなにもこういうことはなかったと思うんだけれども。そこで1回、3年休んで、壊れて、再開した。みんなが待ってた、それで来たでしょ。みんな思い出の場所だってことになるんだっけ。この味は私の青春の味ですって。そうかこのおばさん二十数年経ってるから、そうか当時は20代だったべねって思うわけです。私はじめてここに来たとき彼と初めてデートして、いまは結婚して内陸にいるんですけど、子どもはこんなに大きくなって、それで来ましたっていう人もいるんです。じーんってくるんです、はあそうだったのかあって。いつも通るたびに気になってたけれど、もう再開しないのかなあって思ってたらば、再開したっていうんで入ってきました、よかったですって書く人いるんです、みんな気にしてるんです。津波でやられるでしょ、はい、気にしているだけじゃだめなんだから、勇気をもって入らなきゃだめなんだから店にはって言ったんだけど。そんな気持ちが、みんな自分のことのようにうれしいんですっけ。店が再開されたのが。思い出の場所なんですよ結局。やっぱり思い出を失くしたくないんでしょ、その本人のお客さんが。（注：床を指差しながら）だからこれ前の床と同じなんです。津波の前からの床で、傷がついてるのは津波の傷なんですがね。あの奥のほうの部屋のシャンデリアも、あれは前の部屋にあったシャンデリアで、津波の後ちゃんとあそこにぶら下がってたんですよ、わりと壊れないで。それを磨いて同じものを結局つけることにしたんです。それで来たお客さん、ああこりゃ前と同じだねえって言うんです。ここは全部変えたわけでなくて、これは前とおんなじだがねって言えば、やっぱりうれしいでねえですか、と思うんです。

■うれしいお客さん

（注：２０１４年）４月の20日に再開したんですけど、その3日間は無料にしたんですよ。3日間はなに食べても無料だって、ただだからって。小学生にみえたんだけれど、男の子がふたり入ってきてます、あっちの席に座って、チョコパフェくださいって言うんですっけ。手には１００円を６枚握っているんですよ。お兄ちゃん今日はいいから、ただでいいからって言うと、いやそんなことはせっかく持ってきたんだっけから、子どもが１００円玉を手に痕がつくくらい握りしめて。あのお父さんお母さんどうしたのって、いやぼくたちふたりだけで来ましたって、やっぱり行って食べてみたいって。食べて、どうだって言うと、やっぱり違うなあって話をしてました、大人ぶって。親に前に連れてこられたんでしょう、で親に始まったから行ってみろって言われて来たんでしょ。そういう人が来ましたね。ほんとにねえ、涙が出るような感じで。お盆に遠くからご先祖を拝みに来るでしょ、ああ今年もまだ閉まってたって。次の年も閉まってたってなるでしょ。で、今年はやってるって喜んで来た人もいますもん。そういうこともあるんですよ。それでけっこう新聞だとかテレビだとかにも紹介していただいたんで、ＢＳ朝日さんに映ると、全国放送だから東京のほうからもテレビで見ましたよって来るんですっけ。私もやっぱり、ここが始まったっていうのは明るいニュースなのかなって思いましたよ、他の人たちにとってもね。

■子どもたちが津波の話をできるようになったときが復興したとき

そうでしょうね、心の復興だと思うんです。仮設なり復興住宅なりができてくる。まあそういうのは時間がたてば出てくるんだけれども、心の復興っていうのはなかなかね、すんなりとよくはならないっていうか、途中また下がってみたり上がってみたりっていう感じで、人それぞれ違うしね。外側からは見えないですしね。宮古市だけだって被害受けた人はそんなには多くないわけですよ。だって津波に関係ない人は、ぜんぜん関係ないですからね。津波の次の日から犬の散歩ですよ、

ふつうと変わりがないんですもん、日常が。それだけ違うんですもん。片方は家も何も流された人たちです。片方はふつうに犬の散歩なんですよ、それだけ気持ちが違うんですもん。水道が出るところは、泥の道走ってきたからって水道でじゃあじゃあって車を洗いますよ。こっちは、給水車だとか、どこかに水をもらいに行くんですよ、同じ宮古市民でもね。どっちも悪気も何もないんですけどね、それだけ違いますもん、気持ちもね。何にもなかった人は何もなかったんです。被害にあった人は、思い出の品も何も捨てるしかなかったんです。避難所に持ってったって置くとこもないんだから捨てなさいっていうかっこう。それだけ子どもの気持ちは大人より可哀想だと思う。だからその子どもたちが、おれたちが小学校のときこんな津波が来たって話ができるときが、復興したときなんじゃないですか、そう思いますよ。

■昔の人のほうがバイタリティがあった

小本ってとこがこの北のほうにあるんです。明治29年の津波は砂浜の方にいったけど、そこにあった集落はぜんぶ流されたからいまの場所につくって、それがまた今度の津波で流されて、次また他の場所に行くっていうパターンですがね、三陸海岸ってとこは。だってここぜんぶ防潮堤もなにもなかったんです、砂浜だったんです昔は。田老にしても防潮堤ってのはなかったんですから。ぜんぶざーっとくればざーっと流されて行っただけ。家財道具は当時は布団だけでしょ、畳か布団だけですもん、電化製品も何もないんですもん。いまの現代は大した家財道具なんですもんね。電化製品から何から、車もあるし。だから昔の人は掘っ立て小屋建てたって、別に変わりなく、またそこで住んだと思いますよ、バイタリティあると思うんですよ。いまの人たちはねえ、建てるのになんぼかかるかって考えれば、ちょっと無理な感じしますもん。昔から津波でやられてるとこでしょここは、それでもそこに住んでるんですもん。やっぱりそこはちょっと違うんですよね、昔の人の考えといまの人は。現代の、モノを持ってる時代の人は。

■伝えていかなければならないこと

だから高台に移転してもまた少しすると下に降りるのは、仕事するのに不便だとか、でも先祖代々ここから下は危ないから上の方だっていって、助かってる集落っていうのはありますよ。姉吉もそうだし、松月ってあたりもそうですもん。下の方はぜんぶ、田んぼやなんかはやられてるけれど、集落は10戸くらいあるけどそこは大丈夫とかね。やっぱり守ってるとこは守ってて、大丈夫なんですがね。それがやっぱり、下の方へだんだん行くと、やられるんですが。だからやっぱりこれは代々伝えていかなければだめなことなんですよね。そうじゃないと、また海岸のところへ行くんだから。まあ37～8メートルですけれどもね、遡上高がね。ビルの10階なんですよって。ビルの10階でここまでは来ないってところで消防団員が7人亡くなってるんです。ああいうところこそ、慰霊碑かなにか建ててやったほうがいいと思いますがね。そういうところは、海ははるか下ですもん、ここまで波が来たのか、へえって、はるかかなた下ですもん、とても考えられないですもんね。山から下りてきて初めて港が見える最初のところだったからそこにいたんでしょ。消防自動車も何もゴロゴロゴロってクシャってなって、7人はそこで亡くなったんです、すごいんですがね。ただただ水が来たっていう津波のとこもあれば、そういうガーってきたとこもあるんですが。

■慰霊碑を建て、それを忘れたころにまた津波が来る

私も写真は趣味でけっこう撮るんですけど。持ってたカメラは水かぶったから駄目だったけど、別のカメラ持ってたけど。あんまり撮る心境にならなかったですもん。たとえばその捜索現場なんかも写したとこもあるんですがね、時計かなんか針が止まっているとこなんか撮ったりはするけど。やっぱりその拝んでるとことかね、そういうとこっていうのは撮れなかったです。気持ち的に、駄目でしたがね。津波の慰霊碑ってあるじゃないですか。昭和8年とかね、あちこちにあるんですよ、誰も見向きもしなかったですもんね。結局ね、それくらい経

たないと、津波のことは忘れないんですよ。経てば忘れるけど、忘れたころにまたやってくるっていうパターン。いまもまだ建ってるじゃないですか、お寺とかいろんなところ、今回の慰霊碑が。あれにきっと手を合わせる人がいなくなったころに、忘れたころに、また次が来るのかなって気がしますけどね。その繰り返ししてるんでしょ、きっと。だからお参りする気持ちがまだ残ってるんでしょうね、残された人たちがね。だから昔の慰霊碑も供え物も何もする人もいないですもん。いなかったんですもん、ただあるだけです。当時の人たちは、これは記録としてここに建てるべしって建てたわけですよ、そのときは。けっこう各地にあるじゃないですか、南のほうでも大きな岩のところにありますが、峠かなにかのところにもありますっけね。昔とすればけっこうな金額だったんだと思いますけど、慰霊碑建てるのはね。でも建てねばだめなんだなと思って、建てたんでしょ。でもそれが古くなって終わり、変なものですよね。慰霊碑があって、また別のところに慰霊碑があって、それが繰り返していくのかなって思いますけど。

■話をして、伝えていく

お話を先生方にしておかないと、それが残らないじゃないですか。そうじゃないと私だけで終わりになってしまいますもん。私が何かって言わなくなったらそれで終わりじゃないですか。だからテレビの人だとか他のお客さんにもね、話するんですよ。やっぱり避難所ってのはそういうこともあるんだよって話もするし。わかんないんですもん。いつ自分が避難所に行く立場になるかもしれないんですよ、南海トラフだとか言ってるんですもん。こっちは20分あったけどあっちは10分ないんだってよっていえば、とにかく高いとこさ、3階だって危ないからねって言うんだけど。ふつう3階まで上がれば大丈夫だと思いますよね。それでも水が来て、水が引いたときにサーッと流されていくんですもん。そのときはほんと自分がカーテンレール掴まって助かったけど、おそらくキャーとかって声を出しながら流されていったと思うんですよ。それ見たり、あーって思って目を逸らしたりするのは、一生残ってると思う私は。同じ場所にいて助かった人もいるじゃないですか。流されたりした人もいるじゃないですか。あれ、わずかのとこですもんね。何かをつかまってるか何かで助かってるんですよ。おそらく声だしてね、あーっとかなんとか言いながらいくんですよ。みんな高台とか避難所とか上がってみてるときは、ふつうにさっきの地震すごかったがねえとか、あんなのは初めてだあとかっていう話してるんですよ、みんな。それから津波が来るじゃないですか。そうすれば防潮堤があるから、まあ自分たちのところには来ないと思うんだけど、防潮堤を越えて来るでしょ。それでもまだ、越えたがねえっつう話はしてるんですよ。まだ冷静ですっけ、そのときは。それがどんどんどんどん防潮堤を越えて、ザーッと滝になって流れてきてそれが家にいって、家が動き始めたっていうと、あああーっとなって悲鳴に変わりますもん。それからですっけ。水はそこからどんどんどんどん増えていって1階がぜんぶかぶるわけですよ、そうすると動き始めるわけですよ。あー何々さんの家がーって。みんな、あああーあああって、あとはそれしかなくなっちゃう。それまでは気持ち的には大丈夫だと思ってるんですよ。いやあ津波が来るんだってねえっていう気持ちですっけ。それが、実際に目の当たりにして、自分の家が流されていくの見るわけじゃないですか。テレビと違う、そりゃやっぱりショックだったわけですよ。

安倍 主税（あべ ちから）：高浜「異人館」マスター、当時宮古市消防団第二分団副分団長、昭和30年6月10日生まれ。

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域

第7章　津軽石地区における震災の経験
―消防団・自主防災会・民生委員・避難所の活動と課題―

宮坂　清

はじめに

東日本大震災は宮古市津軽石の住民にとっていかに経験されたのか。ここでは、地域社会において専門的な役職に就き、震災を受けて、救援や取りまとめなど特定の役割を果たした方々の語りを取りあげながら、この問いを考えていく。地震後に巨大な津波が押し寄せた津軽石において、自ら被災しながらも、自分のことは後回しにして、他の人々のために身を粉にして働いた方々がいた。そこで、主に彼らの活動を記録に留め、そこで明らかになった課題を示してみたい。

まずその背景となる、津軽石地区の概要、過去の主な地震津波についての記録、東日本大震災の被害状況や行政の対応などを確認し、次いで津軽石の人々への聞き取りやすでに活字にされている体験談を参照しつつ、主として消防団・自主防災会・民生委員・避難所の活動とその課題について考察を行う。

筆者が震災後初めて宮古市を訪れたのは平成25年3月、震災の2年後である。宮古湾沿いに国道45号線を南下し、津軽石川水門を左手に見ながら津軽石の中心部に入ると、使われなくなって久しいと思われる踏切や津軽石駅の駅舎がもの寂しげにたたずみ、その周囲のおそらくかつて住宅が立ち並んでいた場所には空き地が目立ったものの、北に隣接する金浜に比べれば街は残っている印象を受けた。しかし、最初に通ったときに気づかなかった国道沿いの草地が実は法の脇という地区であったこと、また津軽石川を右岸に渡った先に広がる広大な平坦地にもかつては多くの住宅が立ち並んでいたことを聞き、被害の甚大さを思い知った。そして、紹介されるがまま、津軽石の消防団、自主防災会、民生委員、避難所の運営に携わった方などからお話をうかがい、被災後の極限的な状況と、それをなんとかしようとする人々のたくさんの奮闘があったことを知った。

津軽石に生きてきた人々は、今も街を歩けばかつてそこにいた人、あったものを想起し、またそれらがどのように失われたか、そしてそこからどのように再び立ち上がったかを思い出すであろう。しかし私に話をしてくださったような指導的な立場にある方々ですら、心の底に抱え続けるその記憶を言葉にする機会は、時間が経つにつれほとんどなくなってきているという。本稿が、そうした記憶を、世代を超えて伝えていく媒体になることができれば幸いである。

1　地区、および過去の地震津波の概要

(1)　地区の概要

津軽石は、外洋から南西に向けて細長く切り込んでいる宮古湾の最奥部、湾に注ぐ津軽石川河口近くの左岸を中心とする地域である。津軽石川に沿って集落や商業施設があり、南に位置する山田町まで続いている。道路でいえば、国道45号線を宮古市街から宮古湾の北西岸沿いに進むと、宮古湾の最奥部にある津軽石川河口にあたり、そのまま津軽石川の左岸にほぼ沿って南下し、山田町に至る。2011年3月11日の東日本大震災までは、宮古方面から来るJR山田線が津軽石駅を経由してやはり山田町へと通じていた。

津軽石川の下流域は中世には渋留村と呼ばれていたが、文明年間（1469―87）年に一戸系千徳氏に攻められた。やがて一戸氏は大永2（1522）年に払川に新城・払川館（津軽石館）を築くが、天正11（1583）年、千徳氏との間に争いが起こり、落城する。津軽石には、江戸初期にすでに市が開かれており、特に大判川と呼ばれる辺りに立った五日市は、近隣の農山村からも多くの人が集まり賑わっていたという。しかし、この大判川も元和3（1617）年から寛永2（1625）年にかけての暴風雨で流され、集落は新町に移っていった。渋留村と呼ばれていた地域は、総福沢、さらに津軽石と名を変えていった。明治22（1889）年に東閉伊郡で町村制が敷かれた際、

津軽石村と、その北に隣接する赤前村は合併して津軽石村となり、その後、昭和30（１９５５）年に宮古市へ合併して今日に至る。現在は大字津軽石と大字赤前に分かれているが、このような経緯があり、また同じ津軽石川河口に隣接する地域ということもあり、例えば消防団が相互に協力しあうなど、津軽石と赤前はさまざまな側面で関係が深い。

近年の津軽石は宅地化が進み宮古市や山田町に勤めに出ている人が多くなっているが、かつての生業はおおむね半農半漁であった。津軽石は古くから津軽石川の鮭漁が盛んであり、地域の人々はしばしば「鮭川」と呼ぶ。この川に遡上してくる鮭は「南部の鼻曲がり鮭」として知られ、岩手県のなかでも漁獲量が多い。鮭をめぐる祭りとして冬期の「宮古鮭まつり」、11月の「又兵衛祭」などがある。明治35（１９０２）年に津軽石村漁業組合が設立され、同41（１９０８）年に鮭の人工孵化が始まった。以降、改組や改称を経て昭和43（１９６８）年に宮古漁業組合と合併して宮古漁業組合津軽石支所が発足する一方、旧津軽石漁協組合員により鮭の採捕に特化した津軽石鮭繁殖保護組合が発足し、現在に至る。

津軽石の行政区には、法の脇・烏沢（第1地割）、中島（第2地割）、馬越（第3地割）、大森（第4地割）、裏角地（第5地割）、沼里（第6地割）、平川原（第7地割）、久保田（第8地割）、吉原（第9地割）、塚場（第10地割）、千ノ沢（第11地割）、藤畑（第12地割）、大判川（第13地割）、払川（第14地割）、荷竹日影（第15地割）、荷竹日向・米山（第16地割）、根井沢日影（第17地割）、根井沢日向（第18地割）、穴田（第19地割）の計19地割がある。

行政区はさらにいくつかの組や班に分かれており、それぞれに班長、組長、当番、月当番などと呼ばれる役職が置かれている。また地域の組織として、部落会、自治会、町内会があり、これらの組織の範囲は行政区と大体重なっている。津軽石の代表的な神社には下町の稲荷神社、荷竹の米山神社、藤畑の駒形神社があり、このうち下町の稲荷神社は、法の脇、下町、本町、新町、根井沢それぞれの集落に総代がいる。また、津軽石のほぼ全戸が払川の龍谷山瑞雲寺の檀家である（『宮古市史 民俗編 上巻』）。東日本大震災前の平成22（２０１０）年の国勢調査によれば、人口3千４９２人（男1千６３１人、女1千８６１人）、世帯数1千１８３戸であった。

(2) 地震津波の歴史

津軽石は宮古湾の最奥部に位置しており、地震津波の被害を頻繁に受けてきた歴史をもつ。以下では、東日本大震災とその被害をより立体的に把握するための背景知識として、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に掲載された資料を参照し、関連する部分の概要を示す。

ア 近世までの地震津波

津軽石における地震の最も古い記録は、慶長16年10月28日（１６１１年12月2日）のものである。この日、三陸地方で大地震があり、昼八ツ時（14時頃）に大津波が押し寄せ、17時頃大方水が引いた「宮古由来記」。地震が3度あり、津軽石は市日だったため１５０人が死亡したという「盛合家文書」。

元禄12年11月8日（１７００年1月27日）には、地震がないのに津波で海辺の家などがとられ、津軽石へは久保田渡りまで、法の脇は稲荷（神社）の下まで津波が到達した「盛合家文書」。なお、この津波は米国北西海岸シアトル近海で発生した地震によるものであることが明らかになっている「第1巻１５９頁」。

イ 明治三陸地震津波

明治29（１８９６）年6月15日午後7時32分頃、三陸沖を震源とする明治三陸地震がおきた。震度2程度と緩やかな揺れだったため人びとはあまり気にとめなかった。約30分後に大音響とともに大津波が来襲し、最大となった第2波が満潮時と重なったこともあり、大きな被害をだした。

「明治二十九年地震報告」（中央気象台）によれば、津軽石村の被害は、総人口２千６１８人のうち死者３人、負傷１人であり、総戸数４３４戸のうち流失家屋８戸となっている。総人口３千４５９人のうち死者１００人をだした鍬ヶ崎町、１千９９６人のうち死者90人をだした磯鶏村など宮古湾の入口地域と比べると、被害はやや少なめである。

より詳細な調査に基づく「岩手県沿岸大海嘯取調書」（山奈宗真）によれば、津軽石村では、法の脇を含む7か所で被害があり、死者16人、負傷者1人、流亡戸数９戸、潰戸数４戸、流亡納屋６棟、潰納屋２棟であった。津波は北方の宮古湾口より直線に来て三方の海浜を破壊したという。なお、山奈によれば、赤前須賀にあった松原は安政３年の津波で流されて1本を残して枯れてしまったが、その後村民が手入れをして再び松樹林となり、それがあったために赤前の損害が減じた。この津波でまた枯損がたくさんでたが、「将来必要の防風林」であるという。同じく山奈宗真の「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」には各字ごとのより詳細な被害が記されている。法の脇は打上浪12尺、浪走り40間であったが、死者や負傷者、流亡家屋は記録されていない。なお、津軽石村の被害は、人的被害、物的被害ともに赤前に集中している。

ウ　昭和三陸地震津波

昭和８（１９３３）年3月3日午前2時31分、三陸沖を震源とするマグニチュード8・1の昭和三陸地震がおきた。揺れは明治三陸地震のときより強く感じられ、家屋の一部に壁の亀裂や石垣の破損など軽い被害がでた。

「三陸沖強震に伴ふ津浪調査報告」（盛岡測候所、験震時報 第七巻）によれば、隣接する赤前で津波の高さ7㍍、同じく金浜では４㍍であった。「宮古湾に於ける襲来の観測並びに被害地踏査報告・重茂村災害地踏査復命書」によれば、法の脇には5尺ほどの津波が来襲し、床上に浸水した家屋４戸、床下浸水が5戸あった。

「昭和八年三月三日 三陸沖強震及津浪報告」（中央気象台、験震時報第七巻）によれば、津軽石村津軽石は人口２千２１９人のうち死者２人、戸数１５９戸のうち半壊３戸、床上浸水２戸であった。なお、「田老村津浪誌」（田老尋常高等小学校編）によれば、より被害の大きかった田老村で、津軽石村青年団15名、津軽石村軍人分会20名がそれぞれ１日間、救護の応援活動を行った。

より詳細な調査に基づく「三陸地方津浪災害予防調査報告書」（農林水産局）は以下のように報告している。津波は津軽石の北方より来襲し、赤前部落の前を真っ直ぐに砂浜や松原を越え、その返し波はむしろ金浜や高浜の部落を襲った。津波の高さは5・6㍍であった。津軽石（法の脇）は宮古湾の最奥部に位置するため津波の余波を蒙る程度であった。宮古湾最奥部の沿岸には防潮林が植えられており、波の侵入の勢いは比較的弱くなったが、防潮林前の砂浜にあった製造場や倉庫などは破壊され、その残骸は漁船とともに防潮林により喰い止められた。法の脇部落には防潮林はないが、浸水した程度であった。赤前部落の宅地は海面よりさほど高くないため、その前面に新たに栗石入混凝土造りの防波堤２７０㍍を建設し、緩衝地帯である津軽石平野に津波を誘導する、とされている。

エ　チリ地震津波

昭和35（１９６０）年5月24日早朝、地震もないのに大津波が日本の太平洋沿岸を襲った。この津波の原因となったのは、日本時間5月23日4時11分に南米チリ沖で発生したマグニチュード9・5の巨大地震であり、発生のほぼ1日後に津波が日本の沿岸部に到達した。

「岩手県災害関係行政資料Ⅰ」（災害関係行政資料等整備調査委員会）によれば、津波の被害は日本の太平洋沿岸全域に及んだが、波高が高く大きな被害が出たのが比較的大きな湾であり、波高が湾口では低くても奥にいくにしたがって高くなるという特徴があった。宮古湾でも湾口２・０㍍、中央部３・０～５・０㍍、湾奥部で６㍍と次第に高くなっている。津波の波高は全体に明治三陸地震、昭和三陸地震の方が高いが、これらの地震では湾の入口で高く、奥に行くにしたがって低くなっていた点が大きく異なる。波はじわじわと水位が上がる形でやってき

たため、津軽石で人的被害は出なかったが、防護処置の脆弱な湾奥部に大きな津波が押し寄せたため、養殖施設などの経済的な損失が大きくなった。また、津軽石の津軽石川側では林が厚く二重になっているが、山側に行くにしたがって薄くなり一重となっていた。そこは背後に沼があり弱い部分であり、かつ波が正面から押し寄せたために、切れてしまった。防潮林は弱点をもたぬよう一様に生長させ幅をもたせる必要がある、と指摘されている。

「チリ地震津波調査報告書」（仙台管区気象台）によれば、宮古湾最奥部に位置する法の脇は波が奥まで到達し、被害が大きくなった。津軽石川の河口に位置し低地であり、また湾奥で海が浅いため、波が奥地まで到達したと考えられる。

オ　十勝沖地震津波

昭和43（1968）年5月16日午前9時49分に襟裳岬沖でマグニチュード7・8の地震が起き、宮古市では震度4が観測された。地震発生から31分後の10時20分、宮古市で津波第1波が観測された。

「広報みやこ NO. 147」（昭和43年6月1日号）によれば、宮古湾では最大2・16メートルを観測し、海苔・カキ・ワカメの養殖施設などが被害を受け、被害額は3億6千万円に達した。赤前の津波堤防は4・98メートルの最大波高を記録した。ただし、干潮時だったため内陸の被害はそれほど大きくならなかった。

カ　まとめ

宮古湾最奥部に位置する津軽石は、宮古市の他の沿岸地域と同様に、古くから地震津波の被害を受けてきた。詳細な記録が残っている明治期以降だけでも、明治三陸地震津波・昭和三陸地震津波・チリ地震津波の3回、大きな被害を出す津波に襲われている。外洋から深く内陸に切り込んでいる宮古湾の最奥部であることから、津軽石の津波被害には、他地域とはやや異なる特徴がみられる。

明治三陸地震の際、宮古の他地域では揺れが小さく人々が油断していたところへ大津波が来襲し、満潮時と重なりより被害が大きくなったが、宮古湾奥部は比較的、被害が少なかった。それは湾口から距離があり波高が低くなったこと、また防潮林があったことによる。昭和三陸地震は真夜中に発生し、揺れは明治三陸地震のときより強く感じられた。湾口地域で被害が大きかったのに対し、津軽石は法の脇が波を被った程度で、やはり相対的には被害は大きくない。

他方、チリ地震では、明治・昭和の三陸地震津波とは異なり、津軽石の被害は湾口地域よりもむしろ大きくなった。それは主に、湾口で低かった波高が湾奥に向かうにしたがって高くなっていったことによる。

宮古湾は内陸に約10キロメートルも入り込んでおり、その最奥部に位置する津軽石に津波が押し寄せる際、その津波のもつ特性により、他地域より被害が小さくなったり逆に大きくなったりすることがあることがわかる。なお、津軽石には、宮古市の他地域にしばしば見られるような津波記念碑はない。

2　東日本大震災

(1)　地震津波と被害の概要

平成23（2011）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の地震が起き、東北地方の太平洋沿岸を中心に強い揺れが観測され、宮古市でも震度5強～5弱の揺れが記録された。主な破壊時間は約160秒に及び、余震も頻発した。気象庁は地震発生から3分後の14時49分、岩手県・宮城県・福島県に津波警報（大津波）を発令し、予想される津波の高さを3メートルとしたが、15時14分には6メートル、15時30分には10

写真1　閉鎖されたままの津軽石駅
2013/03/17　撮影：宮坂 清

メートル以上と、高さの予想が引き上げられた。やがて津波が到来し、宮古市では日立浜の気象庁検潮所が15時26分に8・5メートル以上の津波浸水高を観測したほか、宮古市重茂で観測された津波遡上高40・5メートルは国内最高記録を更新した。

「宮古市東日本大震災浸水図」を参照しつつ、浸水範囲を以下に記述する。先述のように、宮古湾は太平洋から南西方面に向けて、湾口から奥部に向けて次第に狭まりながら、深く切り込むような形状をしている。押し寄せた津波は、海岸線の北西面に沿ってみると、まず湾口付近で浄土ヶ浜や、閉伊川の河口にあたる宮古市の市街地や磯鶏の沿岸を洗いながら、さらに湾のより内部にあたる高浜や金浜の沿岸に流れ込み、これらの地域に大きな被害をもたらした。また、湾内海岸線の南東面は直線状かつ沿岸部が切り立った地形をしており、白浜、太田浜、堀内など、北西面に比べると規模の小さい集落が点在するが、それらに被害をもたらしながら湾の奥部へ進んだ。

宮古湾の最奥部に到達した津波は、まず赤前の宮古運動公園前の防潮堤にぶつかり、さらに津軽石川河口を遡上して上流200メートルの位置に設けられた水門に正面からぶつかり、それらを遥かに越えて赤前そして津軽石へとなだれ込んだ。津軽石川水門付近の左岸には法の脇地区が、さらにその上流に続く平坦地には津軽石の街が広がり、他方右岸の広い平坦地には田畑のなかに住宅や工場・施設などが点在していたが、これらの地域のほとんどが津波にのみ込まれた。津軽石川の左岸に沿ってみると、海に最も近い法の脇からその先の稲荷橋を本町や舘ヶ下へ流れ込み、JR山田線の津軽石駅を洗い、避難所に指定されていた津軽石小学校の校庭にまで到達した。他方、より広い平坦地が広がる右岸をみると、宮古運動公園、その南東にある赤前の集落の麓から宮古工業高校まで到達し、津軽石川沿いに栄通り、宮古漁業協同組合津軽石孵化場、さらにその奥、駒形通の津軽石中学校の手前まで到達するなど、広大な面積を水没させ、津軽石川の河川敷をさらに上流へ遡上した。

津波浸水高は、宮古運動公園付近で6・76メートル、宮古工業高校の背後で8・34メートル、駒形通の河川敷そばで6・83メートルを記録している。津軽石の北に位置する金浜では津波浸水高が11メートルを越えており、それよりは若干低い。水没した面積を比較してみると、宮古市内で他に広大な面積が水没した田老や閉伊川河口周辺とほぼ同じであり、市内でも有数の面積が水没したことがわかる。宮古湾に押し寄せた津波はその多くが最終的に、最奥部に位置する津軽石の多くを水没させたのである。

地盤沈下も記録されている。津軽石第11地割（駒形通）マイナス42センチ、津軽石第9地割（新町）マイナス33センチであった。地盤沈下の影響で、干満の潮位差が大きくなる大潮の際に沿岸部で浸水や冠水が発生したため、震災後、港湾の嵩上げ工事が行われた。

次に、宮古市および津軽石の被害の概況は以下のとおりである。宮古市全体の死者数は517人、行方不明者（死亡認定者）は94人である。津軽石は死者57人（死亡届出者53人、死亡認定者4人）、行方不明者（死亡認定者）3人である。

家屋の被害は、市全体で住家4千449棟、非住家が4千639棟で、合計9千088棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが2千677棟で60・2％を占める。このうち津軽石（赤前を含む）は住家683棟、非住家770棟で、合計1千453棟が被災している。被災した住家のうち全壊したのが414棟で60・6％を占める。

以上、地震津波とその被害の概況をみると、記録に残る地震津波と比較して被害が際立って大きいことがわかる。大局的にみて、そのようになった原因は大きく2つあるといえる。まず何よりも津波の規模が際立って大きかったことがあげられ、次に津波が押し寄せた地域に宅地が広がっていたことである。チリ地震津波の後、津軽石には高さ8・5メートルに及ぶ防潮堤が築かれており、それまでの防潮林よりも遥かに防潮機能が高まっていたはずであったが、今回その防潮堤をも遥かに越える津波が押し寄せた。さらに、かつて左岸にまとまっていた市街地・宅地が、近年次第に右岸へと広がってきており、その右岸が今回の津波で大規模に水没したため、人的・物的な被害が大きくなったとみることができる。

(2) 公的な調査・対応の記録

ア 公的な調査や対応の記録

地震津波の発生に際し、宮古市を始めとして公的な機関は慌ただしくさまざまな対応をとった。以下では、『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻《津波史編》』に記された公的な調査や対応のうち、関連部分の概要を示す。地震発生から市内の避難所の閉鎖が決まった8月8日まで、津軽石でどのような動きがあったか、その概略をまとめておく。

■3月11日（金）□津軽石小学校へ200～300人が避難している。（市民生活部）□津軽石小学校は、床上浸水との情報あり（教育部）。

■3月12日（土）□津軽石地区は、駒形橋まで津波が来たようだが、現時点では通行が可能。

■3月12日（土）□津軽石地区の法の脇付近で線路が国道に乗っている模様。

■3月12日（土）11時30分 調査班報告：□津軽石地区の法の脇は全壊、国道45号に男性の遺体1体あり。□津軽石出張所は全壊。□津軽石小学校、津軽石中学校の校庭まで津波が浸水。□津軽石小学校へ200人（児童7人、教職員17人含む）が避難。

■3月12日（土）12時30分：□津軽石地区の稲荷橋踏切付近は通行不可能、ヒロセ電機付近に流出家屋が押し寄せている。

■3月12日（土）13時30分：□津軽石地区の稲荷橋、駒形橋の一帯は家屋が流出、付近に3遺体～4遺体あり。

■3月12日（土）14時30分：□津軽石保育所は園児3人が津軽石小学校へ避難、同保育所は軒下まで津波浸水。

■3月13日（日）□津軽石地区の送水管破損の可能性あり。清寿荘までは通水しており、現在も復旧作業中（上下水道部）。

■3月13日（日）□国道45号南ルートは津軽石地区の駒形橋まで開通（都市整備部）。

■3月14日（月）□築地―津軽石間、2車線確保の作業（信号、電柱撤去）。□磯鶏―津軽石間、重茂地区の捜索活動、北海道から470人増員、広域で2千人体制（自衛隊）。

■3月14日（月）□津軽石地区通電（東北電力）。□津軽石地区の藤畑―十二神山間が圧雪状況（都市整備部）。□本日の給水予定は、津軽石小学校を自衛隊の給水車で（上下水道部）。

■3月16日（水）12時00分：□津軽石小学校へ高圧電力供給、上水道は津軽石の払川周辺が復旧。

■3月16日（水）□津軽石地区、赤前地区の電力復旧の作業中（東北電力）。

■3月17日（木）12時00分：□上水道は津軽石の払川・荷竹周辺が復旧。

■3月18日（金）10時30分：□岩手県災害対策本部が宮古市にNTTドコモ衛星携帯電話を設置。配置先は津軽石小学校10台。

■3月19日（土）□津軽石地区の避難所で陸上自衛隊が給食支援（市民生活部）。□津軽石小学校で入浴支援（市民生活部）。□ミヤコ石油（津軽石地区）で2千円を上限に給油可能（産業振興部）。

■3月20日（土）□津軽石小学校で給食支援（陸上自衛隊）。□津軽石小学校で男女各1セットの入浴支援（陸上自衛隊）。

■3月22日（火）□津軽石地区の復旧の目途立たず（NTT）。

■3月31日（木）□津軽石地区で1体の遺体を発見（陸上自衛隊）。

■4月2日（土）□津軽石地区で自衛隊とともに遺体捜索（宮古市消防団）。

■4月3日（日）□金浜地区の防波堤の応急復旧は今週に完了予定（宮古土木センター）。

■4月5日（火）□戸別送電は津軽石地区で50件（東北電力）。

■4月7日（木）□津軽石地区の国道45号の歩道の瓦礫、土砂の撤去（三陸国道事務所）。□今後は津軽石川などの河川の瓦礫などの撤去を進める（宮古土木センター）。□津軽石地区などの事業所、一般住宅の通信ケーブルの復旧作業を500人体制で実施（NTT）。

■4月8日（金）□津軽石地区は復電後に給水開始（上下水道部）。

■4月12日（火）□津軽石地区で通信ケーブルの復旧作業（NTT）。

■4月14日（木）□津軽石小学校の救護所（静岡県の医療支援チーム）

スペースに保育所が入所予定（宮古保健所）。□津軽石川水門まで建柱15本（東北電力）。

■4月15日（金）□津軽石川の瓦礫撤去は1か月の時間を要する。大型水門の機能回復作業（宮古土木センター）。

■4月18日（月）□住民要望があった津軽石地区の法の脇で通電（東北電力）。□残っているのは津軽石（NTT）。

■4月19日（火）□津軽石地区で建柱、メタルケーブルの架設（NTT）。

■4月20日（水）□河川の瓦礫撤去、津軽石川水門のゲート復旧（宮古土木センター）。津軽石小学校に設置の救護所は、25日に赤前小学校の救護所と統合する（宮古保健所）。□津軽石地区は、4月中旬の復旧予定が4月下旬に復旧の見込み（NTT）。

■4月22日（金）□津軽石地区での建柱、メタルケーブルの架設（NTT）。

■5月6日（金）□津軽石地区の河川付近の側溝整備（陸上自衛隊）。□津軽石小学校、津軽石保育所付近で使用スペースのクレームあり（陸上自衛隊）。

■8月8日（月）□決定事項・避難所は、8月10日をもって全て閉鎖することとする。

表1　各避難所への避難者数（3月12～17日）

	12日 17：00	14日 8：30	14日 17：00	14日 夕方	15日 16：00	15日 最終	16日 最終	17日 最終
津軽石小学校	425	425	425	425	209	425	420	425
津軽石中学校	60	116	116	90	88	70	70	53
瑞雲寺	50	85	85	85	59	21	4	2
駒形公民館	45	60	60	60	48	52	51	30
藤畑公民館	60	60	60	60	11	9	10	廃止
新町公民館				30		30	21	35
荷竹自治会館				なし		なし	5	0
清寿荘				不明		63	58	45

＊「避難所への情報提供 1～28」より作成。

イ　避難所などに関する記録

地震津波の後、自宅に住めなくなった津軽石の人々が避難生活を送り、また地域への救援物資や情報の拠点となったのは、津軽石小学校、津軽石中学校の2つの「避難所」の他、瑞雲寺、駒形公民館、藤畑公民館、新町公民館、荷竹自治会館、清寿荘である（表1）。とりわけ津軽石小学校で多くの人々が避難生活を送ったことがわかる。大まかに津軽石川左岸の人々は津軽石小学校を中心に新町公民館や瑞雲寺、荷竹自治会館へ避難し、右岸の人々は津軽石中学校や駒形公民館、藤畑公民館に避難した。避難所以外の施設に避難者が収容されたのは、左岸の場合、主に、避難所の津軽石小学校の校庭にまで津波が入ったために辿り着けなかった人がいたこと、そして津軽石小学校に避難者が多数集まり手狭であったことによると考えられる。右岸の場合は、後述するように、主に震災当日、藤沼久人氏が判断したことによる。津軽石中学校の体育館は暖房など滞在環境が必ずしも十分ではなく、とっさの判断でより過ごしやすい公民館などに避難させ、宮古市の担当者に事後的に避難所として認めても

表2　各避難所の避難者数・運営主体・閉鎖日

	避難者数	運営主体	閉鎖日
津軽石中学校体育館	約120名	宮古市建設課	7月10日閉鎖
駒形通公民館	約70名	21防災会・駒形町内会	3月31日閉鎖
藤畑公民館	約60名	21防災会・藤畑町内会	3月17日閉鎖
津軽石小学校体育館	約425名	本町協力会	
新町公民館	約30名	21防災会・新町町内会	3月31日閉鎖

＊藤沼久人氏の提供資料より作成

表３　各避難所への緊急物資配送数（３月 14 ～ 29 日）

	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日
津軽石小学校	425	425	420	425	440	260	352	450	250	365	365	365	365	366	366	366
津軽石中学校	90	70	70	53	50	52	57	58	58	54	54	54	59	59	59	59
駒形公民館	60	52	51	30	30	30	30	30	25	21	21	21	20	20	16	
新町公民館	30	30	21	35	22	21	30	30	30	30	30	30	25	25	23	
瑞雲寺	85	21	4	2	1	解散										
荷竹自治会館	なし	なし	5	0	0	0										
藤畑公民館	60	9	10	廃止	0	閉鎖										
清寿荘	なし	63	58	45	51	51	51	60	50	50	50	50	56	56	55	56

＊「避難所への情報提供 1 ～ 28」より作成。

らったのだという。これらの「避難所」のうち、瑞雲寺や藤畑公民館などは数日のうちに避難者がいなくなっているが、大半の避難者はその後も長期間にわたり避難生活を強いられることになった（表２、表３）。

３　地震津波の語り

(1)　概要

ここでは、東日本大震災についての津軽石の住民の語りをとりあげ、震災がいかに人々により経験されてきたかについて、とりわけ専門的な活動を行った人々に注目しながら考えていく。管見では津軽石の住民による震災に関する回想が掲載されたものとして、体験談集『平成23年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集』（宮古市公民館、平成24年5月、以下『エピソード集1』と表記）、そして『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』（宮古市公民館、平成25年3月、以下『エピソード集2』と表記）がすでに刊行されている。また、筆者は、２０１３年４月～２０１４年８月まで、津軽石の方々からお話をうかがい、それを記録した。これらの語りや回想文の詳細は以下のとおりである。

その他、宮古市が保管している各種の資料、藤沼久人氏から提供を受けた資料を参照する場合は、個別に記すこととする。

以下では、これら震災についての語りを順次、テーマに分けて整理し、個別に記述する。

(2)　地震津波の発生から避難まで

３月11日に起きた地震では大きな揺れが長時間感じられたことから、多くの人が津波の襲来を予想し、また防災放送も津波警報を伝えた。その時点で多くの人々が避難を開始した。ここでは、（ア）自宅などから避難した例、（イ）地震発生時に他所にいて避難・帰宅した例、（ウ）避難に関する教訓、の順で記述する。

ア　自宅などから避難した例

最初の3つは、津軽石川の左岸から車で高台に避難し、その晩、車中泊をした事例である。

■自宅から車で高台に避難し、車中泊した

お昼休みで家族4人津軽石駅前の自宅にいた。1回目の地震でこれは大変だとすぐカギをかけ、貴重品を持ち車に2人ずつ乗って近くの高い山に逃げた。そこは指定避難所ではなく、山には道が無いため、物資を運ぶ消防団にも難儀をかけ後悔した。それにいくら近くの山と言っても、海に向かう道を通ったので危険だった。その晩は車にいたが、長靴に厚手の靴下で良かった。沢水もあったし、次の日に部落の人がジャガイモを炊いてくれた。（体験談1）

■馬越で2晩車中泊し、2階だけが残る自宅へ戻った

3月11日、地震が起きたときは、妻、母、三男と自宅にいた。母に地震だ逃げろと言われたが、片付けたりなんなりで出るまでに10分くらいかかる。車がたまたま車庫から出してあったからそのまま乗って逃げたが、あと10分遅れていたら私も流されていた。車2台で逃げて、避難場所になっていた馬越の高台に行ってUターンしてみると、檜の柱のあるような立派な家がまるごとそのまま流れてきた。自宅のほうはよく見えなかった。

そのとき馬越の高台へは車が20台くらい上がっていた。それでかなりの人が助かったが、下をみたら津波に乗って家が流れてきて道路を塞いでしまい、どこへも行けなくなってしまった。家族4人で1晩、車のなかで過ごしたが、前日盛岡まで行ってきたばかりでガソリンがわずかしか残っておらず、夜とても寒かった。エンジンをかけて暖房をつけたり、また消したりを繰り返した。食料は何も持っていなかった。結局、車で2晩過ごしたが、周りにも20台くらい車があった。2晩目は消防団の方がおにぎりを持ってきてくれた。妻が母を、山田町の豊間根に住む母の妹の家の近くまで送っていき、少しのあいだ頼んだ。避難所でいろいろ面倒をみてくれていたので、私たちも避難所へ行って食事をごちそうになった。

小学校から離れたところに妹が所有している空き家があり、布団なども置いてあったので、次の日はそこに泊まった。食事は民生委員の方、自衛隊の方にお世話になった。被災しなかった方や消防団の方がおにぎりをつくり、みなに配ってくれた。2日目には水が引きはじめたが、見に行くと余震があり、消防団員に戻れといわれて戻った。自宅に行ったのは3日後だった。自宅の1階は柱を残して全壊だったが、2階は残っていた。

法の脇の家屋はほとんど下町のあたりに流れてきたのではないか。すごい状態だった。水門を越えた水と河口の堤防が決壊した水が、勢いよく国道と山田線の間の低いところに押し寄せてきたのだろう。水位は3メートルほどあったが、自宅の前に大きな建物があって、水や流されてきたものがそれで遮られたために、自宅は残ったのだろうと思う。

法の脇は部落がふたつに分かれていて、6軒か7軒あった。母親の実家があり、寝たきりの祖母がいたが、家ごと流されて破片すらなかった。位牌がだいぶ離れたところでみつかり、祖母は2週間後くらいに運動公園のほうで見つかった。（佐々木優氏、聞き取り6）

■馬越の高台で1晩車中泊、その後友人宅に泊めてもらう

3月11日は午後に事務所へ来て、打合せしていたところに大地震が来た。すごい揺れで、緊急地震速報を聞いて外に出た。私は、チリ地震津波の時にも自宅が流されている。子供の頃から避難指導をうけてきたので、直感的に逃げようと思った。車で国道45号線に出たら信号が止まって渋滞していたが、対向車がないので反対車線を走り、法の脇の自宅にいる98歳の母を迎えに行った。

自宅に着くと母が玄関先に出ていたのですぐ車に乗せ、薬、通帳、印鑑、手袋を車に積んだ。母には常日頃から地震が来たら外に出ろと言っていた。近所から戻った妻も一緒に、3人で自宅を出て、国道ではなく裏の避難道を通り馬越の高台の避難場所で待機した。大きな声で叫ぶ人がいたので見ると、津波が水門を越え、道路を越えたのが見

えたので、車をさらに高台へ移動させた。裏山に上った人が、何もなくなったと言いながら戻ってきたので驚いた。家の屋根が孵化場の方へ整列したまま流れていったという。金浜にあった温泉施設マース近くの防波堤が決壊して、そこから入ってきた波がローラー式に法の脇の家々をさらっていったようだ。JR線も川のようになった。

高台にいた人たちは明るいうちに避難所へ移動しようと言い、津軽石小学校が避難所なので山道を通って移動していった。避難所への道路はがれきで通れなかった。母は山道を歩けないので1晩車にいようと決めた。赤前から流れていく屋根を見ては、何とも言えないような気持ちになった。

妻が避難した際に持ってきた仏様のお供えがその夜1晩の救急食になった。近所の人にも分けた。夜遅く消防の人がおにぎりを持ってきてくれた。私は、たまたま午前中にガソリンを満タンにしていたので助かったが、1晩で半分ぐらい減っていた。山に避難した人たちもいたが暗くて消防も行けず、彼らは近くのゴミに火をつけて暖をとったという。

母が歩けないので、避難所へ行くのは無理だと思った。12日の朝、薬を飲む水をもらいに馬越の友人宅に行き、そこに1晩泊まった。翌日、別の友人宅にお願いして2晩くらい世話になった。副組合長が、自分の家を空けるからしばらくいていいとも言ってくれた。その後、北上の娘が迎えに来て、娘の家に半月いた。

私の職場もだめだった。事務所の柱は残っていたが、サッシや壁が皆壊れていた。金庫も流され、何百㍍も先で見つかった。組合の重要書類が入っていたので、見つけたときは一安心した。（山野目輝雄氏、体験談2・聞き取り1）

津軽石駅などがある津軽石の中心部から北西へ向かうと馬越と呼ばれる高台があり、それを越えて下ると法の脇や金浜の方面に出る。地震の後、20台もの車がそこに避難し、どちら側にも下りられなくなって閉じ込められ、徒歩で移動できない年配者などがそこで車中泊した。避難は徒歩でするのが原則とされていたが、身体が不自由な年配者の場合は、実質的には車で避難するほかない。車がなければ避難できず、また気温の低い屋外で1晩過ごすこともできなかっただろう。

次は、近所から自宅に戻り、津波をみて舘山へ避難し、その後津軽石小学校に避難した例である。

■近所から自宅に戻り、舘山に避難した後、小学校に行く

震災の日、たまたま下の娘が家にいたので、上の娘と待ち合わせて3人で宮古で昼食を食べようということになり、食事と買い物をして戻ってきて、下の娘は友だちと盛岡へ行く約束だと言って14時ころに家を出て、駅の裏の方の八幡様の近くで待合わせしていた。私は風邪気味だったため、帰宅すると買い物してきたものをそのままテーブルに置いて、木沢医院に診てもらいに行き、薬をもらうのを待っている間に地震がきた。とても立っていられないくらいの地震だったため自宅が心配になり、会計は後でするからと断って帰宅した。自宅では物はそれほど落ちていなかったが、立て続けに揺れるため家が崩れないか心配だった。津波は気にしていなかった。そこへ近くで仕事していた夫が帰ってきた。

家がぺしゃんこになったら困るなどと話しながら家の前に出ていたら、近所の男性がおばあちゃんを連れて、こんなことしている場合ではない、津波が近所の木沢医院のところまで来ていると言うので、慌てて長靴に履き替えて避難した。財布の入ったカバンは肩がけにしていた。ベンチコートと、娘が帰宅したときのためにジャンバーをもち、田んぼのあぜ道を通って裏側に回り舘ヶ下のほうへ移動した。田んぼを渡り終えて反対側の道路に出たときには、津波がもう来ていた。津軽石小学校へ行こうか、それとも舘山に行こうかと話していると、女性が6、7人、津軽石小学校の方から来て、小学校の校庭はもう水が来ていると言われたので、そのまま舘山に上がった。

舘山へ上る階段は整備されておらず、木の根がむき出しになっていて崩れそうだった。上から見ると海がみえるので、津波が来るたびに、

みなでまた来たまた来たと言っていた。そこにいる間も頻繁に揺れたが、お堂の脇にある石灯籠が固定されておらず、地震があるたびにカタカタ揺れて危ないので、そこを離れた。そのうちに雪もチラチラ降ってきて、大変だどうしようかなどと言っているうちに水かさが増えてきた。舘山から水に浸かってしまった自宅が見え、電化製品は全てだめだねと話した。隣家の横の広場に停まっていた車が流され、線路を挟んだ向かい側の田の方に移動していた。大変なことになったと思った。舘山には近所の人たちが15人位いたが、舘ヶ下の方にも沼里の方にも下りられるので、浸水していない沼里の方の人たちは上ったり下りたりしていた。

次第に暗くなり始め、このままここにいると暗くなって山を下りるときに足元が危ないから、明るいうちに下りようということになった。沼里の方面に下りると小学校に通じる道があるので、そちらに下りた。最初は女性だけで下りてきたが、10分か15分後に結局男性たちも下りてきた。小学校に着くと校庭に津波が入っており、裏山の方へ避難していた人たちがちょうど下りてきたところだった。（盛合純子氏、聞き取り10）

津軽石小学校の南西に位置する小高い舘山は、避難場所に指定されており、15人ほどが避難していた。車道は通じておらず、人々は階段を登って避難している。

イ　地震発生時に他所にいて避難・帰宅した例

次の3つは、地震の際に勤務先など自宅外におり、そこから戻った例である。

■勤務先からバイクで避難し、山にある小屋に泊まる

震災当日は、勤務先のジュピターで働いていた。地震が起こると、部長が、車に油がある人は避難するように、ない人はそのまま会社にとどまるようにと指示を出した。会社には水は入らなかったが、その後10日ほど休みになった。バイクで新町へ向かったところ、車が流れてきたのが見えたが、それでも入っていった。本町にある二十分団の屯所の前に着くと、水が逆流してきたので、迂回して舘ヶ下を回った。山に農機具を置く小屋をいくつか持っていたため、そこに行き、中に入れてあったものを出して、近所の人たちと入った。

その晩は、避難所でもらったおにぎりを半分にして食べたり、ビスケットを分けて食べたりした。小屋には近所の人が9人泊まったが、寒いこともありみな眠れず、火を焚いてあたっていた。やったことがないことを頭を使ってやり、明日は明日の風が吹くというつもりでいた。助け助けられた。

自宅には水が2メートル30センチ入ったものの、建物は残った。当日の夜9時位までは水が引かなかった。水位がゆっくり上がったため、浮かび上がった畳の上に置いてあったコタツは濡れなかった。庭にあった杉と竹は塩水に弱く、すぐに枯れてしまった。家にあった油と毛布が盗まれてしまった。（猪又忠氏、聞き取り5）

■磯鶏の勤務先から避難し、その後自宅に戻る

地震が起きたときは磯鶏の勤務先ホクヨープライウッドで作業をしていた。地面が前後左右に裂けるような揺れで、これはやばいなと思った。3人で合板をドライヤーで乾かしていたが、生蒸気を出してから電源を切って、まず食堂へ避難した。集まったのは10人ほどだったが、管理職の方たちも右往左往しており、人数確認にもたついてしまった。その後、地震の際に避難することになっていたホーマックへ向かった。到着すると店員たちが避難してきた人たちにカイロや毛布を配っていた。

到着してから20~30分で津波がきた。第1波は防波堤を越えてなだれ込み、2、3軒の家が流されていったのを見た。波は立ってくるというより、押し寄せてくるように見えた。第2波はどさん娘（ラーメン店）のあたりに見えた。ふつうの波とは全く違い、高く盛り上がって雪崩みたいに崩れ、渦を巻いて暴れていた。見るだけでゾッとした。その後、17時か18時に解散になった。車で会社の人たちを家まで送り届けながら、八木沢を経由して津軽石に行くと、まるで湖のようだった。それ

が海水だとは思いもせずに走ったため、車が錆びてしまった。（長澤光彦氏、聞き取り２）

■盛岡から車で戻り、津軽石小学校の避難所に泊まる

３月11日は会議で盛岡に行っていた。地震があって、会議を中止して国道１０６号線を戻ってきたが、道路に石がいくつも落ちてきた。花輪のあたりから先は車が通れなかったため、車を置いて根井沢から舘山の城跡を越え、40分ほど歩いて18時ころ津軽石小学校の避難所についた。民生委員をやっていたので避難所に泊まり、その晩は一睡もしなかった。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

これらを読むと、同じ津軽石でも、場所により津波の流れ込み方や被害がだいぶ異なることがわかる。とりわけ、津軽石川水門の脇にあった法の脇の集落は、集落ごとほぼ流失してしまうほどの甚大な被害を受けた。他方で、津軽石の集落の中心は津軽石川の河口から１キロメートル近く上流に位置し、しかも集落の入口手前には小高い丘があり、津波は津軽石川の堤防を越えて流れ込んだものの、勢いはだいぶ弱まっていた。そのためその付近では、家屋が水に浸かっても流されずに済んだ例が多い。

人々は馬越の高台ないし舘山の高台のほか、集落の周囲の山に避難した。馬越の高台へ避難した車は閉じ込められ、そこでの車中泊は過酷なものになったが、舘山へ徒歩で上がった人たちは反対側へ下りて津軽石小学校の避難所へ行くことができた。

最後に、他所で逃げ遅れてしまった、津軽石の住民の例である。

■おじが２人、津波に流された

赤前の球場の管理人をしていたおじは、私を先に帰して、その後、鍵をかけて出たんだろうけれども、球場のそばで遺体で見つかった。

もう１人のおじは宮古商業高校の坂でバスに乗ろうとして乗り遅れ、他の津軽石の人４人と一緒に、次のバスまであと何分だなどと話しながら、高浜まで歩いていた。高浜はそのとき下水道工事のためバス停が防波堤の国道沿いに移動していて、３つあるうちの真ん中のバス停で待っていたところへ津波が来た。４人のうちの１人はバス停の前にあった家のバルコニーに掴まってこらえたが、周りをみたらもう誰もいなかったらしい。

おじの遺体は高浜の金浜寄りのがれきの下で見つかった。保険証などがポケットに入っていてわかった。おじたちには子どもがなかったが、何親等以内でないと引き取れないと決まっていて、私には引き取りができなかった。そのため東京にいたおばに連絡をとり飛行機で来てもらって、軽米町にいる私の妹に三沢空港まで迎えに行ってもらい、ここまで連れてきてもらった。勤労青少年センターの遺体安置所で遺体を確認し、常安寺で火葬してもらった。そのとき申し訳ないなと思ったのは、遺体がほんとにきれいになっていたことだった。私たちが捜索して発見した遺体はそんなものではなく、泥はかぶってるしあちこち切れていたりするのに、おじの遺体はいくらか赤くなっていたりしただけで、とてもきれいだった。（舘下光利氏、聞き取り９）

ウ　避難に関する教訓

津軽石の人々は、震災を経て、津波からの避難の仕方や手段について、あるいは避難する場所、防潮水門のあり方について、さまざまな教訓を得ている。

■大きな地震がきたらとにかく逃げる

あの揺れで経験上、津波が来るなと感じた。逃げるが勝ちと考えた。もっと大切な物が家にあったが、それを戻って取りに行くことは考えなかった。今回はチリ地震津波より大きい。ＪＲ線がグニャグニャになったが、波そのものが今度の方が大きい。大きな地震が来たら何も持たなくても逃げる。欲張ってはだめ。私の避難は早い方だった。良い経験ではないが、「地震が来たら津波だと思え」だ。見物するような事はしない。（山野目輝雄氏、体験談２）

■防潮堤や水門があっても避難はしなければならない

私はチリ地震の津波を経験しているが、母は昭和8年とチリと今回、津波を3回経験している。チリ地震のときは堤防がなく、ゼロメートル地帯だったから津軽石の踏切の向こうには海がみえて、家へも津波がきた。しかしその後、堤防と水門ができたから大丈夫、今回は大丈夫だろうと思った。それで何も持たずに鍵だけかけて出てきた。だから今思えば母の言葉はありがたかった。母が逃げろと言わなければ私は逃げなかった。堤防があるから、7メートル8メートルの堤防があるから越えないだろうと、越えても大したことはないだろうと思った。でも逃げねばだめだといわれて逃げて助かった。（佐々木優氏、聞き取り6）

■津波を見物に行ってはいけない

放送は、「3メートルの津波」から始まった。次は「6メートル」で「大津波」になった。最初3メートルと言った時には、水門付近に見物客がいた。大津波警報になったので危機一髪で助かった人達がいる。以前から、消防も警察も川を見に行って避難しろと言っていたが、当人たちは大丈夫なのかと思っていた。このような大きな災害があって活動に制限をつけたようだが、油断があったと思う。（山野目輝雄氏、体験談2）

■避難の仕方を家族で話し合っておく

母親は88歳で、1人で避難すると流される。自分ひとりだったら近所の家に行けと言ってある。近所の人にお願いしてある。誰かに車に乗せてもらえと。でないと津波に追いつかれる。家族で逃げ方を決めてある。この辺の人でも津波に追いつかれた人もいる。（佐々木優氏、聞き取り6）

■避難する場所がどこなのか確認しておく

自分の地区の避難場所や避難所がどこであるかをはっきり知っていたわけではなく、何かあったら舘山か津軽石小学校という頭しかなかった。地区ごとに避難所が決まっているとすれば、もしかしたら自分たちは中学校に行かなければならなかったのだろうか、よくわからない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■避難場所はきちんと整備しておく

舘山の避難場所は整備がされていなかった。山に上がればすぐなのだが、山へ上がるところが崩れていてなかなか上がれない。舘山へ裏から上る道路もあり、途中までも行けば高くなっている。舘山公園といって市の管轄になっているにも関わらず、何も整備していない。市の職員に、何が公園だ、何が避難場所だ、あれでは上がれないではないかと何回も言ったがそのままだった。今回の震災の後、ようやく整備された。

恵比寿様の高台（根井沢川と山田線の間）については、自分たちもいつか上るかもしれないと思い、現場で側溝の蓋が余れば持っていって階段にしたり、誰かが鉄筋を挿してトラロープを張ったりするなど、地元の人たちで少しずつ整備してきた。部落の人が話しあえば手摺りくらいはできる。（舘下光利氏、聞き取り10）

■車でなければ避難できない人のことも考える

津波の時は歩いて避難しろと言うが、今の高齢社会ではナンセンスだと思う。どうしても、年寄りを車に乗せて避難せざるを得なくなる。そうなるとおのずと道路の整備が必要になってくる。津軽石の橋も狭くて、自衛隊も苦労したようだ。今は車社会なので最低でも2車線あるように整備しなければだめだ。まして、夜だったらもっと動きが悪くて犠牲者がより多く出たと思う。おそらく逃げようと考えないのではないか。家の中で様子を見るくらいだろう。そうなれば、かなり犠牲者が出ると思う。（山野目輝雄氏、体験談2）

■水門が周辺地域に及ぼす影響を考えるべき

法の脇の自宅は、全く何も残っていなかった。金浜から来た波の威力が凄かったのだろう。水門を作る時に説明があって、地元では津波

を遮断すると盛り上がってあふれるので、国道沿いの望楼堤を高くしてくれと言っていた。水門から水を少しは逃がすという話もあったが、どうだったのか。（山野目輝雄氏、体験談2）

■タオルや新聞紙がありがたい

タオル・新聞がありがたかった。タオルを1本みつけ、ふたつ折にして、わずかなお湯で顔を洗った。裏でお父さん、ひっくり返してお母さん、また裏返して孫など繰り返し使った。それが4、5日続いた。新聞紙は座布団にもなる。寒いと前にもかける。何かを包み、風呂敷にもなる。新聞とタオルのありがたさ。ろうそくも常にしまっておくと良い。電池も詰め替える事が大事。ガソリンも以前は無くなってから入れていたが、日にちを決め、あるうちに入れればこういう時に良い。おにぎり1個のありがたさもわかった。物は大切にしなければならないし、準備をしておくべき。（体験談1）

(3) 消防団の活動

地震などの災害の際、被災現場でとりわけ際立った役割を担う集団のひとつが消防団である。3月11日に地震が起きた後、津軽石の消防団員たちは、自分の身の安全はさておき、地域の人々への避難の呼びかけや誘導、救援、水門の閉鎖など、必死の活動を行った。以下では、津軽石を管轄する3つの分団ごとに、その活動をみていく。

ア 消防団第二十分団

■活動の概要

津軽石には、津軽石川の河口から上流に向かい消防団第二十分団（本町）、二十一分団（新町）、二十三分団（払川）の管轄地域が並んでいる。津波の被害は宮古湾に面した二十分団の管轄地域が最も大きく、二十三分団の地域は最も小さかった。二十分団は大きな被害に対応しなければならなかっただけでなく、津軽石川に設置された防潮水門の閉鎖作業という重要な務めを任されていた。津波が上流地域へ流れ込むのを防ぐためには、地震が起きた後、津波が押し寄せる前に、ふだん開いている水門を閉鎖する必要がある。地震の後、この作業を行ったのは団長の中野規男氏と長洞正人氏であった。その作業は最新鋭の遠隔操作装置により迅速に行うことができるはずであったが、実際のところ困難を極め、間一髪のところで成功している。そして、それが終わった後も、今度は溜まった水を排水するための開門作業、そして取り残された人々の救助、そして捜索というように、困難な作業が延々と続いた。

以下、筆者が行った中野規男氏への聞き取り（聞き取り8）に、「広報みやこ」NO．151、長洞利弘（「月刊みやこわが町」通巻392号）、中野規男「活動報告⑤ 宮古市消防団第20分団出動記録」、の内容を加えて当時の状況を考察する。

■津軽石川水門の概要

津軽石川河口の津波対策水門（防潮水門）は、岩手県が18年の歳月と約125億円をかけて建設し、平成19（2007）年3月に完成した、県で2番目に大きい水門である。全長189メートル、外壁の頂部は海抜8・5メートルあり、電動で上下する高さ4～6メートルのゲートが7基ある。水門は最新鋭の遠隔装置を備え、遠隔制御で降下できる。水門は津軽石川の河口より約200メートル上流に位置するが、遠隔装置を備えた制御室はそこからさらに1キロメートル上流にある。また、明治三陸大津波級の津波を食い止めるため、水門の建設にあわせて、河口部の左右両岸計1千060メートルに及ぶ防潮堤を、海抜6メートルから8・5メートルに2・

写真2　金浜の防潮堤からみた津軽石川河口
2013/03/17　撮影：宮坂 清

5メートル嵩上げした。水門完成後の維持管理は宮古市が受託し、市は宮古市消防署に依頼し、宮古市消防団第二十分団が実際の管理作業を引き受けていた。

■水門をなんとか閉鎖する

地震発生時、家にいた私は、すぐに車で分団の屯所へ向かった。ポンプ車に乗り、すでに待機していた分団員2人と、津軽石川水門を閉鎖するため遠隔制御所へ向かった。14時55分ころ、遠隔制御所に入り、他の団員を3か所ある他の水門の閉鎖に向かわせた。

ところが水門の遠隔装置が動かなかった。その装置は、水門閉鎖放送スイッチを押すと遠隔操作室の屋上と水門の建屋屋上にあるスピーカーから放送が始まり、放送が終わると一斉降下操作スイッチが押せるようになるものだった。水門閉鎖放送ボタンを押してから水門がすべて閉まるまでに7分かかるため、何かあったときはまずこのボタンを押すことになっている。ところがこれが作動せず、赤い警報ランプが点灯した。やむをえず一斉降下を断念し、7機ある水門を個別に降ろすスイッチを押してみたものの、それも動かない。普段の訓練の時は確かに動いていた遠隔装置が、このときは全く機能しなかった。原因は停電である（岩手日報 2013年7月18日）。

15時15分頃、水門の建屋へ行って操作するしかないと思っていたところ、他の分団員が「どうなった?」と制御所に入ってきたため、状況を説明してその分団員に再度やってみるように指示した。ポンプ車が他の水門閉鎖を終えて戻ってきたため、それに乗って水門へ向かった。私は分団員もう1人と水門で降り、ポンプ車は避難を呼びかけるためそのまま津軽石の集落へ向かった。水門の建屋機械室で操作盤を手間取りながらも見つけた。操作の方法を知らなかったため、水門の降下が途中で止まったりしたが、15時25分頃ようやく1~7号まですべて閉めることができた。（中野規男氏、聞き取り8）

■水門を越えて津波が押し寄せる

閉め終えてから建屋の外に出て、キャットウォーク（点検用の細い通路）から宮古湾口の方向を見ると、閉伊崎付近の様子が何かおかしいと感じ、そのうちに高浜の付近で水飛沫が上がるのを見た。津波の速度を考えると高台への避難は間に合わないと判断し、もう1人の分団員とともに建屋に避難した。あそこで津波が迫って来るのを見ていなかったら、水門から避難して津波にやられていたかもしれない。

津軽石川の河口へ流れ込んだ津波は水門を越えて上流へ向かい、また防潮堤を越えた波は赤前や津軽石へ流れ込んだ。水門の高さは8・5メートルだが、さらにその上2・5メートル位まで水が入った。水門を越えて流れこむ津波を見て危険を感じ、建屋の屋上に上がったが、膝が震えて立っていられなかった。（中野規男氏、聞き取り8）

■溜まった水を排出させるため、開門する

津波が防潮堤や水門を越えて流れこんだ時間はおよそ10~15分くらいで、15時50分ころに収まったため、水門を開放して溜まってしまった水を排出させようと試みた。ガソリンエンジンによる巻き上げ機が7門それぞれにあったので、それを使って上げようと試みたが、3門をやってもひとつも作動しなかった。1号建屋に戻り動力用の発電機があるのを見つけ、それを始動させたところ各水門に電気が通り、巻上機を動かすことができた。1門から3門までは30センチずつ、川の中央部分で底が深くなっているあたりの4門と5門は50センチ、6門と7門は30センチ開放し、排水した。我々消防団にはこの発電機が動力用であるということも、巻上機があることも聞かされておらず、当然だが始動させたことはそれまで1回もなかった。そのまま16時半ころまで河川監視をしていた。

もう1人いた分団員に対し、津軽石地区や学校避難所に行き、状況確認や安全確認をしてから、分団員2、3人と迎えに来るように指示を出した。その間にもう一度津波が来たら、自分だけで閉鎖作業をするつもりだった。ところがなかなか戻ってこず、暗くなり寒くて仕方なくなった。懐中電灯を持って金浜方面から歩いてきた人がいたので、

やむをえず一緒に45号線を遠隔操作室までいくと、中に分団員がいた。

津軽石川の堤防の高さは海面から約6㍍あり、水門を開けて河川敷に溜まった水は排水されても、集落などに溜まった水は排水されなかった。そこで夜9時過ぎに、稲荷橋の近くにある、津軽石川へ左岸から注ぐ川の水門を開けて排水した。何かが引っかかっており手動で20㌢ほどしか開かなかったが、一晩あれば水が抜けるだろうと考えた。その後、避難所に行った。（中野規男氏、聞き取り8）

中野氏への聞き取りから、地震後の津軽石川水門の閉鎖作業には、大きな困難があったことがわかる。とりわけ、最新鋭の制御装置が機能しなかったことは、大きな問題として指摘されるべきであろう。立派な水門をつくっても、それが閉門できないのでは意味がない。そもそも地震は大きく揺れるものであり、その後に停電が起こる可能性が高いのも当然であり、揺れても、停電が起きても、機能する装置でなければならない。また、現場で実際に操作をする消防団員が、装置やその操作方法について十分に知らされていなかったことも、問題であろう。最新鋭の制御装置も、人間がスイッチを入れなければ動かない。こうした装置を設置する際には、設置するだけでなく、それを実際に操作する役割を担う人的資源に対し、継続的に十分な情報を周知し、訓練の機会を提供していく必要があろう。

続いて、翌日以降の消防団第二十分団の活動について、やはり中野氏の聞き書きなどからみていく。

■翌日以降の活動

翌12日の早朝から、生存者救助のための活動をした。国道45号線に、ある住宅の2階部分だけが打ち上げられており、また津軽石駅前にすれ違いのため停車していたディーゼルカーは押し流されて、くの字になっていた。津軽石には、盛岡西消防署レスキューがボートを持って来てくれて、宮古市消防団第二十、二十一、二十三分団が合同で救助活動を行った。まだ水位が下がっていなかったため、ボートで移動して水門を開放するなどして排水した。

津軽石川右岸の土谷川の水門は、赤前の二十二分団が津波の前に閉めたが、津波の後は分団が機能せず、翌日になってから我々二十分団が開けた。昼過ぎにはかなり水が引いて、家屋やその周辺の捜索を行った。遺体があちこちにあった。しかし、捜索は津波警報が発令されるたびに中断せざるをえなかった。

翌13日には陸上自衛隊が到着し、一緒に捜索を行った。地震当日の晩に小樽港を出港し、秋田港から上陸し盛岡経由で来たという。

水門があったために、8・5㍍の高さまでの津波を防ぐことができ、それにより津軽石川の左岸は被害が軽くなったのではないか。防潮堤を越えて水が入った赤前や栄通りのほうが、被害が大きかった。栄通りで18人くらい亡くなっているが、外部から来た、津波を知らない人が多かったことも大きいのではないか。

津軽石は線路の東側の被害が大きかった。道路の上に家屋があったが、じゃまだからといって簡単にどかしたり、壊すわけにはいかない。全壊ならば諦めがつくが、2階だけ残っているような場合が困る。2階から荷物を出しても、倉庫などを先に手配しておかなければ、置く場所がない。しかし勝手に壊したりすれば、後で補償問題になる可能性がある。

第二十分団の屯所も1階は半分まで水が入ったが、屯所の周辺では水の勢いはなくなっていて、がれきも流れて来なかったため、建物は壊れなかった。当時の団員23名のうち、死者・負傷者・行方不明者はなく、家屋について自宅流出が5軒、全壊9軒、半壊7軒、被害なし2軒だった。（中野規男氏、聞き取り8）

■避難所から捜索に向かい、避難所に帰る

避難所は寒く、そのために換気がなかなかできず空気が悪かった。ストーブはずっと点けておくため、夜中も見回りしてストーブに給油していた。学校に大きなストーブが2つあり、後から支援物資で大きなストーブが届いた。当初は電気がなかったから反射式の小さなスト

ブしか使えず、寒いためにみなストーブの前から動かなかった。消防団員が捜索から帰ってくると、びしょびしょに濡れていて、服を脱いでも干すところがないから、どいてもらって靴下なんかを干した。当初、小学校にあったのはゴザと毛布だけで、布団はなかったが、そのうちにフワフワの毛布がきた。寒かったが、ああいうときは気が張ってるから病気にならないのかもしれない。消防団員は避難所と自衛隊をつなぐ連絡係の役割も果たした。（中野規男氏、聞き取り8）

■切り傷を放っておいたら、足が腫れ上がる

3月末位に静岡から医師団が来て、学校の医務室と教室をひとつ開けて入ってもらった。泥で傷がついたら、破傷風になるからすぐ来なさいと言われた。足に切り傷ができたが、薬がないためそのままにしておいたら、だんだん腫れてきて、医者にみせたところ、危なく指を落とすところだったと言われた。医者は救急用の薬をもっており、肺炎を治してくれたり、風邪でも我慢せずにすぐみせにくるように言われた。そばにいてくれて安心できた。（中野規男氏、聞き取り8）

翌日以降の作業に関する記述から、以下の課題が指摘できる。地震津波の翌日になっても、流れ込んだ水が引いていなかったのは津軽石川に流れ込む小河川の水門の多くが閉鎖されたままだったためである。消防団員がボートで移動して水門を開放し、また管轄外だった津軽石川右岸河口近くに注ぐ土谷川の水門も開放し、ようやく排水された。水の侵入を防ぐ水門は、一旦越えてしまえば、今度は溜まった水の排出を妨げてしまう。津軽石川に注ぐ小河川の水門はどれも水門まで行って開閉する仕様であり、そこに行くことが困難な状況において、どのように開閉作業を行うかについて、考えていく必要があるだろう。

イ　消防団第二十一分団

■活動の概要

消防団第二十一分団は、津軽石川の河口よりやや上流に位置する両岸地域を担当している。震災後の救助や捜索は右岸地域を担当した。分団長の佐々木睦雄氏をはじめ、分団員の多くが救助や捜索に携わった。佐々木氏によれば、その概要は以下のとおりである。

消防団第二十一分団は、震度3以上の地震が起きた場合、2か所の水門を閉鎖することになっている。それらはブレーキを解除すれば落ちていく落差式で、閉めるのは5分以内で終わるが、上げるときはエンジンをかけて上げるため15分位かかる。根井沢川が津軽石川に注ぐ地点にある水門は、津軽石川の河口から1キロメートルくらい上流にあるので閉めてもあまり意味がないのではないかと思っていたが、今回の震災では閉じた水門の高さ1メートルくらいのところまで水が上がり、根井沢川への津波の侵入を防ぐことができた。私のいる新町の上は20センチくらい水がきたが、それは旧市道を通ってきた水で、もし水門がなかったら50センチ位にはなったかもしれない。

水門を閉めたら、次は「避難して下さい」と広報活動をしてまわる。今回の地震津波では上流まで水が来なかったので、避難の誘導が主になったが、救助をした団員もいる。けが人を花輪を経由して宮古病院に連れて行ったり、私の自家用車で花輪に1人連れて行ったりもした。栄通りでは、地震津波の当日から翌日まで自宅に閉じ込められていた人が多数おり、たまたまあったゴムボートで13人を救助した。

翌日は、まだ2メートルくらい水があったため、建物の2階から救助した。ただ、ボートが2人乗りだったので、分団員1人が乗って向かい1人ずつ救助することしかできなかった。最近になって市の危機管理課から、第2方面隊（津軽石・赤前・高浜にある5個分団）に6人乗りのボートや照明器具などが支給された。（佐々木睦雄氏、聞き取り3）

■自宅で地震にあい、舘山公園へ避難誘導する

同じく消防団第二十一分団の団員である館下光利氏は、地震発生の直後から避難誘導、救助、捜索など一連の活動に携わった。

地震が起きたときは自宅にいた。赤前で14時に集金をした後、食べそこねていた昼食を津軽石の自宅で食べていたところ、携帯電話から

緊急地震速報が聞こえた。ひどい揺れだったので、ガスを止めて戸締まりをして外へ出た。粋天を着て分団屯所へ行き、踏切から舘山公園高台の避難場所へ避難誘導をした。地域の人たちが避難してきて、一輪車に乗ってきたおばあちゃんを降ろしたりした。ここまでは来ねえべやなどと世間話をしていた。そのうちに舘山に上がっていた人たちが、水門を越えたと言いながら降りてきた。ここまで来るかもしれないと思っているうちに、津波でディーゼル車が流されたために感知したのか、遮断機が降りてしまい、避難してくる車が通れなくなった。車に乗っている人に遮断機を壊せ壊せと叫んだが壊さないため、走って行って2本ある遮断機を1つずつ開けたり閉めたりして車を通したが、1人でやっていたのでは埒があかない。遮断機を折ろうとしたがうまく折れず、後ろにトラックがいたから遮断機を壊してくれと言ったが壊してくれず、石をはさんでみたりもしたが、そういうときに限って近くにある石が小さくてうまくいかない。そうやっているうちに黒い波が来るのが見えたため、車は国道のほうへ誘導して、自分は線路を走って逃げた。波と平行に走っているうちに後ろで津波が根井沢川に落ちるザバーンという音が聞こえた。自宅そばの高台になっている恵比寿様のところに近所の人たちが避難しており、このへんの家に日中に誰がいるかわかっていたから、声をかけて安否を確認した。国道へ出てどちらへ走って逃げればいいか迷っているうちに津波が止まったため屯所に行くと、今度は救助だということになった。（館下光利氏、聞き取り9）

■ボートを借りて右岸で救助活動を行う

二十分団が津軽石川の左岸、二十一分団が右岸を担当することになり、駒形橋を渡って行ってみると、車で流されてきて窓から出たくても出ることができずにいる人がたくさんおり、助けろ助けろと叫んでいた。新町公民館の隣にある舘京自動車にあった2㌧弱のプラスチック製ボートを分団員が借りて持っていった。だがボートの周囲にロープを結ぶ穴がなかった。使っていないボートだったため艫もなかった。仕方がないので、分団員が身体をロープで結えてボートに乗り、その辺に流れてきた木材を艫の代わりにして漕いで行って救出し、ボートに乗せ、分団員の身体に結えてあるロープを他の分団員が引っ張って引き寄せた。ブロック塀の上に立っている人、トラックの上にいる人、保冷車の上にいる人など、暗くなるまでのあいだ、声が聞こえる人は助けた。2人くらいずつ軽トラに乗せて、ガタガタ震えていたから分団の屯所や新町公民館に連れて来て、分団にあった発電機やポット式ストーブをつけた。新町公民館は避難所のようになっていたから、そこに連れて行ったり、中学校へ連れて行ったこともあった。

そのうちの1人は北上市から遊びに来ていた女性で、津波で車ごと流されて、助けた時にはガタガタ震えていた。やむをえずバスタオルと私のジャージを渡して着替えさせた。他にも濡れて震えている女の人がいて、そこにちょうど帰ってきた姉に言って服を貸して着替えさせたが、その人は公民館に来たがらなかったので、仕方なく姉が山田町の豊間根にある母の実家に連れて行った。そこは水も山の沢水を使っているし、薪ストーブを使っていて、米も野菜もあるし、ここよりは食べ物に苦労しないから、すでに息子たちにも、ばあちゃんち行けといって行かせてあった。北上から誰か探しに来るかもしれないからということで、その人に名前を書いてもらって掲示しておいたら、2、3日経ってからやはり探しにきて、連絡をとりあって来てもらって帰した。（館下光利氏、聞き取り9）

■当日の夜中、車両火災のため出動する

当日の晩みんなで屯所に雑魚寝しているとき、宮古の本部から出動要請が来た。「出動できる分団ありませんか、出動できる分団ありませんか」と一生懸命言っていたが、当初みんな怖くて返答しなかった。大通りで車が燃える火事が発生しているとのことだった。水道が止まっていたから防火水槽を使うしかないが、近くにいくつもあるわけではないから遠くの防火水槽からも引っ張って来なければならず、そのためにポンプ車を何台も繋ぐ必要があった。どこかからか引っ張ってこ

なければならない。すると二十分団が「どこに行けばいいですか」と返答し、「これこれこういう訳でとりあえず大通りに行って本部の指示に従ってください」と言っているのが聞こえた。それで、二十分団が行くのなら自分たちも行かないわけにいかないということになり、「二十一分団も出動します」と返事した。消防車のサイレンが聞こえて二十分団や赤前の分団が出動したのがわかった。家に戻っていた分団長も屯所に戻ってきて、10人くらいで根井沢から花輪を回って行った。その日は何も食べていなかったから辛かった。防火水槽があるところに行ったが、そこにはもう別の分団がいた。そこへ本部の車が来て、閉伊川から水を汲むからと言うので宮古橋の近くに行ったが、やはり無理だということで待機になった。何もできずにポンプ車で待機していた。（館下光利氏、聞き取り9）

■翌朝から出動、交通整理をする

鎮火した後、夜中の3時か4時に帰ってきたら、本部より5時から捜索を始めると無線が入った。出動前の点検をしていたら、二十分団の分団長の声で本部へ無線が入るのが聞こえた。前日に床上浸水したが、残っていた家からテレビが盗まれ、分団が盗んだのではないかと言われたと。日本人は規律正しいと言われるが、現実にはかなり盗難が発生した。ちょうど大きくて高額なテレビを新しく買った家が多く、それがかなり盗まれた。やはりそういうことはある。自分の分団の管轄地区であれば誰の家かということは大体わかるが、少し離れるとわからない。見回っているときに誰かに声をかけてあれは自分の家だと言われても、本当にそうなのかわからない。そうやって昼間のうちに目ぼしいものを見つけて夜中に持っていったのかもしれない。

朝早く交通整理をしていたとき、歩いてくる男性を見つけ、聞けば大沢から歩いてきたという。息子が宮古工業高校に通っていて、地震のときは友だちのところに遊びに来ていたが、その後の安否がわからないという。駒形橋を渡って遠回りだが藤畑をまわって誰かに聞いてみろと言って、自転車を貸した。その後、息子と戻ってきて、送っていこうかとも思ったが、歩いて帰ると言って自転車を置いて行ってしまった。

交通整理をしていたとき大変だったのは、サイレンが鳴って通行止めにすると、喧嘩になることだった。危ないとこちらが言っても、相手は行きたい通りたいと言い張る。権限がないから、どうしても行きたいという場合は行かせるしかなかった。うるさい行かせろと言われたら仕方がない。国道は地元の建設会社が作業して地震の翌日には開通した。

■取り残された人たちを救助する

翌朝にはだいぶ水は引いていたが、家屋の2階に取り残された人がけっこういた。声かけしながら確認して、中学校の方に向かってがれきの間をいくと、おじいさんの声がした。階段まで泥が来ていたが家はそのままあり、中学校の避難所に行くかと聞くと、おばあさんもいるから置いていくわけにいかないと言う。そこで一緒に連れて行こうということになり、泥だらけだが上がっていいかと聞いて、上がっていくとおばあさんが震えていた。がれきがあっておばあさんを背負って出て行くことができなかったため、無線で連絡して他の団員を呼んだ。おばあさんを私がおぶり、見たくないだろうから目をつぶってなさいと言って、おじいさんは他の団員2人が支えながら歩き、堤防へ上げて軽トラックに乗せて中学校にいった。

長靴を履いてヘドロとがれきの上を歩き、一軒一軒まずは生きている人がいるかどうか鳶口を使って見て回り、その後も何回も改めて見て歩いた。一度見ただけではどうしても見落としがある。中学校の裏か孵化場の近くに大きなプロパンガスのタンクが流されてきて、ガスがシューシューと漏れて気持ち悪い臭いがしたが、行くことができなかった。

サイレンが鳴ってまた津波が来るといわれて、慌てて近くにあった栗の木に登り、そこから川に波がザザザザーっと来るのを見たりもした。大きいのはもう来なかったが、小さいのは何回か来た。津波の様

子を見ながら、とりあえずOKだな、などと無線で連絡を取り合いながら歩いた。水たまりがあちこちにあった。中学校の裏の水たまりに小魚がたくさんいてキラキラ光っており、よく見たら孵化したばかりの鮭の稚魚だった。カラスやカモメ、トンビが腹いっぱい食べていた。

捜索の際にとても困ったのが、漁網や浮き輪や浮玉がからんで引っかかっていたことで、水門にも絡んでいた。ロープが硬くて、チェーンソーで切るしかない。ヨットハーバーから流れてきたラワン材も少しあった。（館下光利氏、聞き取り9）

■辛い遺体捜索、今も思い出す

捜索は2週間くらい続けた。やはり見落としがあるため、時間が経ってからきちんと探した。二十分団はここ、二十一分団はここというように手分けして探した。

遺体捜索については、怖くなるので思い出したくない。何日か経って泥が乾燥してくると、埋まっていた足や手が見えてくる。見つけると、あった、と。無線を入れて、どちらを向いてるか、北か南か、仰向けかうつ伏せかを報告し、泥を払い毛布で包んで車が通れるところまで運んでおき、市の職員や自衛隊員が来たら、詳しい状況を伝えて引き渡す。

今でもよく思い出す光景がある。まず手が見えた、右手が。ああ、いた、と。背中が膨らんでいたのでリュックだと思ったが、よくみると赤ちゃんだった。近くにもう1人子どもがいるはずだということになって、その近くを一生懸命探したが見つけられず、結局二十分団が見つけた。後から聞いたところでは、その人は家に戻らなければ助かったはずだった。おばあちゃんと、赤ちゃんを背負い2、3歳の子を連れたお嫁さんの4人で栄通りを歩いて避難していたところ、後ろからきた車が乗りなさいと言っておばあちゃんを乗せ、お嫁さんにお前さんも乗って行きなさいと言ったが、嫁さんは何か忘れたと言って子どもたちと戻ってしまったのだという。それが一番頭に残っている。

遺体は傷だらけだったり泥だらけだったりする。見つけてしまうと、うわあっという感じで、辛い。今でもフラッシュバックして、眠れなかったり、涙が流れてきてしまうことがある。こうやって話しているときはいいのだが、何かの拍子に思い出して、走馬灯のようにその光景が頭に浮かび、眠れなくなる。忘れようとすると忘れられないから、そういう時は深夜番組を見て、見ているうちにウトウトして眠れるときもある。本を読んで気を紛らわせることもある。逆に眠ろう眠ろうとすればするほど次から次へと思い出して眠れないこともある。宮古小学校の避難所に精神科の先生が来ていて、精神安定剤をくれるから行ってみればと勧められたことがあり、そんな暇はないと断ったが、あの時もらっておけば眠れたのになと思うこともある。フェイスブックでやりとりをしていて、同じ経験をした人がいることがわかった。自分よりもっとひどい人もたくさんいるだろうと思う。（館下光利氏、聞き取り9）

■屯所で寝泊まりするも、うまく眠れない

私の自宅は被災しなかったが、他の団員が着の身着のままなのに自分だけ家に帰って水風呂を浴びるというわけにもいかなかった。座布団も2つくらいしかなかったのでヘルメットを枕にして眠ったが、痛かった。休むのも大変で、足を伸ばして休みたいが伸ばせず、眠るのも早いもの勝ちで、いびきがすごくて眠れず、ストーブにあたって夜を明かしたりした。靴下が臭いなあと思っても、自分のも臭いから言えない。

地震から4、5日後、電気か水道が通じたとき、1度家に帰っていいぞということになり、そのとき初めて帰宅して水風呂に入り着替えた。その後、鉄板入りの長靴やライフジャケットが全員分、支給された。発電機用のガソリンが少なくなったが緊急車両だということで売ってもらえた。灯油はもらえなかったから、昼間はなるべく使わないなど節約した。トイレットペーパーはその辺りにあるのを見つけてきて使った。（館下光利氏、聞き取り9）

第二十一分団が救助捜索を担当したのは、主に津軽石川の右岸であった。左岸に比べ右岸には津波が勢いよく流れ込み、多くの人が亡くなり、また建物の被害も大きかった。そこでの捜索活動は、肉体的にもそうだが、とりわけ精神的に過酷なものであった。館下氏の聞き取りからは、その記憶は時間が経っても容易に薄まらず、苦しみをもたらし続けていたということがわかる。

ウ　消防団第二十三分団

■地震発生と避難、

消防団第二十三分団は、二十、二十一分団よりも津軽石川の上流にあたる払川地域を担当している。直接の被害は少なかった地域であり、地震津波の後は、捜索活動と後方支援活動を行った。副分団長の長澤光彦氏によれば以下のような状況であった。

第二十三分団の分団員たちは、地震の後、担当している河川の水門を閉めてから避難したようだ。私は19時ころに屯所に到着したが、どこも真っ暗だったため翌朝6時から活動を始めることにした。備蓄してあった毛布を届けに津軽石小学校へ向かったが、泥とがれきに阻まれて辿りつけず、途中で引き渡した。近くに電気屋がいたので発電機を借りてきて電気を点けてもらい、カップラーメンとおにぎりを食べて12時過ぎに仮眠した。着物が少なくて寒かった。（長澤光彦氏、聞き取り2）

■翌朝から屯所でおにぎりをつくり避難所に届ける

翌朝6時に起床し、自分の妻や分団長の奥さんを屯所に連れて来ておにぎりをつくってもらい、分団員に食べさせてから、中学校と小学校に避難している人たちに届けた。当初は瑞雲寺にも避難者がいたので、やはりおにぎりを持って行った。宮古工業高校は周りに水があって届けることができなかった。そのうちに払川地区の人たちが手伝いに来てくれるようになった。4月末まで毎日おにぎりを１００個以上つくったのではないか。

津軽石には4分団があるが、そのうち二十二分団（赤前）と二十分団（本町）は被害がなかった二十三分団だけだった。米をもらいに近所を回ると、農家が多いから、次からは「もってけー」と言われて雪崩のように持ってきてくれて助かった。津波の後すぐに発電機を入手しておいたため、もらった籾付き米を精米することができた。小学校、中学校、瑞雲寺、後はスタンドに取り残された人たちに、朝昼晩と届けた。

屯所は分団長が指揮をしていた。分団長が頼んだわけではないが、段々に地域の女性が集まりおにぎりなどを一緒につくるようになった。初日は2人だったのが、払川公民館の人たちが何人か来てやってくれるようになった。瑞雲寺のほうに湧き水があるということで汲みに行ってもらった。払川の人たちの車でおにぎりを配りに行った。（長澤光彦氏、聞き取り2・聞き取り7）

■赤前で捜索や道路確保の作業をする

翌日以降、分団長は屯所にいて指示を出し、副分団長の私は外回りという役割分担だった。拠点は分団屯所で、区長も来て分団長と相談した。あらかじめそういう相談をしていたわけではないので、様子を見ながらケースバイケースでやるしかなかった。私は5～6人の分団員と捜索に行った。自分たちは赤前地区に捜索や道路確保の作業にいった。がれきの山でふさがっていて、通れる道路は1本だけだった。最初は爆撃でも受けたように見えた。ゾッとして、それから1年くらい後まで夢にみた。他の人もやはりそうだったようだ。駒形橋を渡り、駒形から山を回り、宮古工業高校付近から捜索を開始し、道路の上に残っているものをどかしながら、赤前の方向に北上していった。赤前の分団は機能していなかったか、別行動だった。

一軒の家をバラしながら捜索するのに1日かかるが、それをとりあえず半日くらいでやった。まずは人を探し、一段落してから家屋をバラしていった。何度も何度も捜索した。ざっと見て、いないなあと言って移動して、結局そこから見つかったことがあった。車が何台も重なっ

ているところもあった。地震の翌日に、鮭の孵化場の近く、津軽石中学校のそば、宮古工業高校の近くなどで遺体を見つけた。見つけると、無線で連絡してからポンプ車に乗せて運んだ。

分団員は23人だが、動けたのは15人で、遺体捜索は10人くらいで行った。お昼になると屯所に戻って昼食を食べ、またでかけた。長靴は釘やトタンで切れてしまうので、自分は3、4足くらい履きつぶしたし、他の団員も2、3足はつぶしたのではないか。2、3日目、捜索中に大津波警報が出たときは、払川まで一気に戻った。近くの人に逃げろと言ったが、年寄りはそれでも逃げようとしない。

自衛隊の旭川第2師団が地震の2日後か3日後に到着し、4月26日までいた。消防団と自衛隊は一緒に行動したが、警察は別行動だった。同じようなことをやっているのだが、別行動だったから二度手間になったところもあった。警察は重機をもっていなかったが、自衛隊は重機があったから効率がよかった。重機は林業業者のものも借りた。

電話が通じたのは1か月後くらいで、捜索しているあいだは携帯電話が使えなかった。ただし根井沢から花輪へ抜けて行くことができ、花輪へ行けば携帯電話が通じた。消防のアナログ無線は使えたが、デジタルは使えなかったので、ポンプ車や県北バスの無線を使った。簡単なものは丈夫だが、複雑なものは砂埃や雨が入るとすぐに壊れてしまう。

生活インフラについては、約1週間後に電気がきて、それで水道も復旧した。ガスはこのへんはプロパンガスだから大丈夫だった。私は最初の2、3日は屯所に泊まり、その次の日くらいから屯所は空にして帰宅して寝て、朝起きてすぐでかけた。1週間後くらいに水道が来たので水風呂を浴びた。（長澤光彦氏、聞き取り2・聞き取り7）

■泥棒が出没していたが、夜警ができなかった

残念だったのは夜の警戒ができなかったこと。夜中に懐中電灯を持って歩いている人たちがいた。金庫を開けたり、川で金を洗ったりしている人たちがいたという。電線を切って持っていった人がいたという話も聞いた。箪笥を見ると引き出しが空っぽだったりした。捜索の際、お金やバッグなどを見つけたとき、後で回収すればいいと考えそのままにしたが、夜中にいろんなところで明かりがついていたらしく、次の日に行ったら金庫がこじ開けられたりしていた。後からあの時回収しておけばよかったと思った。捜索だとかいろいろな理由でいろんな人が来ていたが、そこに泥棒もかなり混じっていた。（長澤光彦氏、聞き取り2）

以上、消防団の諸活動について3つの分団ごとに記述した。地震津波の後、被災した壮絶な現場に入っていき、救助や捜索の活動を行ったのは消防団員たちであった。交通や情報が寸断された状況下で、自分たちのことは自分たちでする他ない。東日本大震災の際、地域社会の先頭にたち重要な活動を行ったのが、消防団であったことがわかる。その活動により、津波が侵入しないように水門が閉じられ、また溜まってしまった水を排出するために開かれ、車や家屋などに取り残された人たちが救助され、亡くなった人たちが見つかり、道路などの安全が確保され、また避難所への食料支援がなされた。泥棒に対応できないなど、むろん完全ではなかったにせよ、その貢献は最大限、強調されるべきであろう。

他方、その貢献を成し遂げた人々の語りからは、大きな課題が浮かび上がる。つまり、その過酷な活動内容による負担の大きさである。食事も休養も十分にとらない状態で、長期間にわたり危険を伴う活動をしなければならない状況だった。それはどうしようもない非常事態下における責務であるにせよ、極限的であり、一歩間違えば団員自身の命にかかわる。また、捜索活動に伴う精神的な苦痛も大きい。長期間にわたり、その時の光景がフラッシュバックし続けることの苦痛は他者にはわかりづらいが、それゆえに継続的なケアが必要ではないか。

消防団の活動は、震災のような非常事態において欠くことのできない重要なものであるが、それは基本的に団員らの奉仕精神により支えられている。地域社会が消防団の活動のあり方や団員の待遇について

十分な理解と配慮をしていくことが、再びこのような非常事態が起きたときに、消防団が十分に機能するために必要であろう。

(4) 自主防災会・民生委員の活動

津軽石には、災害に対応するための組織として、自主防災会があり、また住民の援助やケアを担う民生委員がいる。地域により活動の濃淡はあるが、一般に災害時に大きな役割を果たす。

ア 自主防災会の活動

■21自主防災会の概要

津軽石の自主防災会は、1995年の阪神淡路大震災を機に、消防団の管轄地域にあわせて設立された（後述）。その多くは形骸化し、東日本大震災の際にはあまり機能しなかったが、21自主防災会は会長の藤沼久人氏のリーダーシップにより大きな役割を果たした。

藤沼氏は、（旧）国鉄（JR東日本）の職員として津軽石駅や宮古駅に勤務する中で、地域社会との関係を深め、町内会長、納税組合長を歴任し、平成10年3月の創設時から21防災会会長を務めている。

以下では、藤沼氏への聞き取りのほか、藤沼氏が保存している各種の資料に基づき、その活動をみていく。

■地震発生、避難誘導

14時45分頃、携帯電話、テレビに緊急地震速報が鳴動し間もなく大きな地震が発生した。地震発生時は自宅におり、地震が落ち着いてから家の中をまわり外に出た。外でしばらく様子を見ていると市の放送で津波が発生するので高台に避難してくださいと放送があり、第1波20センチの津波が来た。まもなく3メートル、6メートルの津波が来ますので避難してくださいとの放送を聞いたため、各地区の役員に連絡をとり地域の方々や中学生を高台に避難させるように指示し、14時55分に駒形通公民館、21防災会の資材倉庫の鍵をあけ、14時58分に津軽石中学校で生徒の避難を確認し、町内に住んでいる方々に避難するよう声をかけながら、避難場所である高台の駒形神社に行き避難者を確認した。中学生、地区民の一部が避難していた。15時10分頃に校長と打合せをした後、まだ避難していない地区の方々に高台に避難するよう声をかけ誘導しながら、藤畑から赤前経由で稲荷橋へ行った。15時20分、津波が津軽石川水門を越えて津軽石川をのぼってくるのを見たため、駒形へ戻った。町内を誘導していた時、中学校裏の高齢者（92歳）が家から道路に出ようとしていたため、私の軽トラックに乗せて危機一髪で公民館へ収容した。歩いていれば津波にのまれていたと思う。

15時40分頃、中嶋製材所前の道路が通行不能となり、中嶋商店前、そして津軽石中学校グラウンドに津波が来た。15時45分から16時30分まで駒形橋東側の堤防と道路の交差点で交通整理を行った（駒形橋より南側堤防を通り藤畑へ通行できた）。16時20分頃、駒形橋の近くで、高齢者とホームヘルパーが家から出られず助けを求めていたため、製材所から丸太を借り、分団員と2人で堤防から家の窓に橋を渡し、救出した。ヘルパーは逃げよう逃げようと言っていたが、本人がまだだ、まだだと言っているうちに水が床下から上がって畳を持ち上げてきた。戸が動かなくなって出られなくなった。ヘルパーの車は流された。他にも雪が降り寒くなってきたため、高台に避難している方々に防災会の毛布を届け使用させた。17時頃、津波が落ち着き、海水が引けたので駒形神社の高台にいた中学生は津軽石中学校体育館へ（15分くらい）、一般の人は駒形公民館と藤畑公民館へ振り分けて避難させた（津軽石中学校120人、駒形公民館70人、藤畑公民館60人、計250人）。また避難所が寒かったため、各避難所に毛布を配布した（津軽石中学校30枚、駒形公民館40枚、藤畑公民館30枚）。電気も消えたので発電機配置の手配をして各避難所に備えつけた。中学校、藤畑公民館には町内工務店より借用し、駒形公民館には防災会の発電機を手配し、暖房と明かりをつけた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■寒かったため公民館に住民を入れるも、市の職員に怒られる

津軽石中学校と津軽石小学校が避難所だったが、私が地域の人たち

を公民館に入れたということで市の職員に怒られた。公民館に入れると余計に経費がかかるのはわかるが、寒いときだということもあり、とっさに公民館に入れるという判断をした。大まかに、駒形の人は駒形公民館、藤畑の住民は藤畑公民館、中学校の生徒と中学校の近隣の人は中学校体育館に避難させた。

公民館は居心地がよかったが、中学校体育館は広いうえに発電機も暖房器具もなく、やむをえず近くの工務店から借りてきて使った。生徒が机にロウソクをたてて灯りをとった。その後発電機のガソリンやストーブの灯油がないと騒ぎになり、夜中1時か2時にガソリンスタンドの店長にお願いして3か所の避難所に給油してもらい、翌日より各スタンドを回って油の確保に努め、なんとか油を切らさず使用することができた。（藤沼久人氏、聞き取り3）

■炊き出し、市からおにぎり配布、自衛隊の食事配布

当日の晩、被災しなかった藤畑地区の住民に炊き出しをお願いし、11日夜から12日夜まで4食分つくってもらい、各避難所に配布した。たまたま藤畑にガス釜を使っている家庭があったのでそれを借りた。14日より市の給食センターからおにぎりが支給された。22日に中学校の校庭に自衛隊が来てからは、ごはんとみそ汁、おかず1品が配布された。

公民館のほうが暖かく、地域の方が冷蔵庫の中身を持ってきてくれたため食事もよかった。中学校の中では小さいガスコンロしか使えず不便だった。津軽石小学校など他の学校は給食室を貸してくれたが、津軽石中学校からは給食室を使わせてもらえず、校舎へも入れてもらえなかった。そのため市の給食センターからくるおにぎりや、自衛隊がくれる食事を食べるしかなかった。お湯は小さいコンロで沸かすしかなかったが、自衛隊が来たあとはみそ汁が飲めた。公民館はガスでお湯を沸かすことができて、みそ汁なども飲めた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・聞き取り3）

■公民館を避難所として認めてもらう

公民館を避難所として使用することについて、自主防災会会長と町内会長が決断したのだからいいだろうということで、最終的に許可をもらった。許可がおりないと物資をもらえなかった。市の職員は避難所が3か所もあると管理するのが大変だから、1か所に集めたかったのではないか。

藤畑はほとんど被害がなく、電気や水道が止まったために公民館に一時的に避難したものの、17日にはみな帰宅した。駒形公民館の避難所は31日に閉鎖し、その後は津軽石中学校に移動することになったが、移動したのは1人だけだった。その後は我々も中学校に行き、食事の世話などを7月10日に閉鎖されるまで続けた。（藤沼久人氏、聞き取り3）

■自主防災会の役員らが交代で避難所の運営を行う

自主防災会の役員には各避難所に張り付きをお願いし、避難所を閉鎖するまで避難者の面倒をみてもらい、無事に終了することができた。私の自宅も床上浸水30㌢だったので、3月31日まで避難して地域の人たちの世話していた。津軽石中学校は、中学校の先生と市役所職員が交代で対応し、4月1日より防災会の役員が交代で手伝った。救援物資の配布等も避難者と被災者に分けて配布を行った（被災者は100～120名）。被災して避難所に避難している家庭を見まわり、防犯にも努めた。

藤畑公民館は3月25日、駒形公民館は3月31日に閉鎖し、4月1日より津軽石中学校に統合した。7月10日までボランティアとして、給食や、支援物資配布等の手伝いを行ったり、地元のノンプロ歌手の歌謡コンサートを開催したりして、避難者を励まし元気づけた。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・聞き取り3）

■「津軽石中学校における支援物資の配布1」

期日：4月10日（日）、午前は津軽石中学校避難者に配布（体育館）、

午後は駒形地区、栄通り地区、藤畑地区の住民に配布（体育館外の屋根のある所）

⑴整理券の配布案内及び配布（2名：地域の方が良い）、⑵物資を受け取りに来た人の誘導、案内（4名）、⑶物資の配布方法の説明、⑷整理券の確認と受け取り、⑸物資の管理、⑹受け取った物資の点数確認。

・1人5点まで（物資によっては1世帯1点）。

・地域住民・防災会が主となって行う。地域住民3～5名、ボランティア4名（先生2名、その他2名）。

・事情により当日来られない人には後で配布する。他の避難所で物資を受け取った人は遠慮してもらう。

・整理券を配布し、番号順に並んでもらう。5人位ずつ欲しい物資を選んでもらう。選ぶ時間は15分。

物資配布の考え方：

食品：日持ちがいいものは避難所本部に置く（水、缶詰類、カップラーメン、おかし、米袋の一部）

衣料品：津軽石中学校避難者を優先して配布

日用品：ティッシュは本部分を確保してから配布、軍手は避難者へ2組ずつ配布

物によっては数量を鑑み点数を制限する。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「避難者への支援物資の配布」

4月30日に食料品を袋詰（50袋）で配布する。

①飲料5点（水2点、お茶1点、りんごジュース1点、フルーチェ1点）

②カップラーメン4点（ハンファ、どん兵衛、太麺堂々、ラーの道）

③おかし13点（ピーナッツ、ゼリー、アルフォート、せんべい等おかし、じゃがりこ、ポテトチップ、ブラックサンダー、レーズン、ミニおすがた焼き）

④その他8点（カイロ、耳栓、タオル、ブザー、アイマスク、バスタオル）

（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「津軽石中学校における支援物資の配布2」

5月8日（日）

整理券配布9時～9時40分、物資配布9時30分～

配布場所：津軽石中学校体育館前

物資の内容：衣類（大人、子ども）、日用品、食料品等

震災の被害にあった人を優先する（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■「避難者を励ます舘下良一コンサート」

避難者を励ますために、地元出身の歌手を呼び、コンサートを行った。

期日：5月15日18時45分から、場所：津軽石中学校体育館、司会：佐々木弘治、挨拶：藤沼久人、全8曲、避難者からの飛び入りあり、参加者：避難者36名・一般30名。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料）

■津軽石の他の自主防災会は機能しなかった

本町にも宮古20自主防災会があって私が会長をやっていたが、民生委員の役員の家がほとんど流出や全壊だったので、頼めなかった。日中は自分の家に行ってヘドロを片付たり、家が流れた人は位牌や金庫を探しにいっていた。別の地区の防災会から来てくれた方はいたが、本町の20自主防災会は司令塔の命令がなく、機能しなかった。そのため自分たちはその後、下町自主防災会をつくった。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

今回、消防団もそうだが、人手が足りず、人のつながりが必要だとつくづく感じた。訓練を受けた分団があるとよいのだが、今はみな会社員だから、すぐに駆けつけることができない。自主防災の組織はあるが、名前だけで、機能していないところが多い。防潮堤などのインフラよりも、とにかく逃げること、人々を率いる訓練されたグループが必要だと思う。（長澤光彦氏、聞き取り2）

21防災会は、人々の避難、避難所の運営など、大きな役割を果たした。おそらくその多くの部分を藤沼氏のリーダーシップに負っており、

藤沼氏の聞き取りや記録から判断すると、むろん問題がなかったわけではないだろうが、比較的統率がとれていた様子がうかがわれる。後半に記した20防災会がほとんど機能せず、避難所の運営に大きな混乱があったのと対照的である。

そもそも自主防災会は、今回のような震災の際に真価を発揮すべき地域組織であり、21防災会の積極的な活動は大いに評価されるべきであろう。それでは、いかにしてその活動は可能になったのか、その背景をみていく。

イ　宮古21防災会の活動と展望

■概要

宮古21防災会は、阪神淡路大震災を機に宮古市消防団第二十一分団の管轄区域内の7町内会の役員及び元消防団合わせて10名で、平成10年3月に設立し、県と市から15種類の防災資機材を受けた（約３００万円相当）。内訳は、毛布１００枚、発電機1台、投光機1台、小型動力ポンプ1台、ハンドマイク1本などである。

津軽石地区に全4自治防災会が設立されたが、活動しているのは21防災会のみである。会長1名、副会長2名、会計1名、班長7名（主に町内会長）。役割分担は、情報連絡班、生活班、避難誘導班、消火班、救出救護班、安全点検班に各班の人員を割当て、互いに協力し合い活動している。

平成25年現在、会長は藤沼氏で、副会長2名は消防団の出身である。会長は1年任期で、総会で選ぶことになっているが、実際には役員会で決めている。阪神淡路大震災の後、消防団単位で組織を作るように通達があり、最初は名前を貸してくれと言われ貸しただけだったが、後から組織をつくれと言われて、つくって以来、結局ずっと会長をやっている。（藤沼久人氏、宮古ＦＭ収録原稿・聞き取り４）

■運営費用と資機材

平成11年4月より会員を募集し、申込した人から年１００円を徴収し、運営費に充てている。会員数は４２０名である。今回の震災でかかった費用については、最終的に危機管理課に請求してお金を受け取ることができた。震災まで、自主防災会は、資機材は支給されるが、それを維持し稼働させる費用は自分たちで負担しなければならなかった。平成24年度から助成金が出ることになった。

資機材をもらったが、その量が多いため、当初は各公民館に分散し保管していた。多くの地域では分団の屯所に入れてもらっているが、二十一分団のような小さい分団には置くスペースがなかった。災害発生時や市の機材点検等の時、1か所に集めて点検を受けなければならないため、不便を感じ、会員の協力を得てプレハブを購入し（1会員５００円）、駒形公民館脇に設置し、発電機、毛布、簡易トイレ、ベッド、小型ポンプ、消火器、投光機など、15種類の資機材を入れている。何かあると倉庫の鍵をもっている会長か会計が倉庫を開け、役員が指示を出すことになっている。

平成24（２０１２）年9月頃、宮古市の危機管理課が資機材や食料の入った防災倉庫を、避難所になっている津軽石小学校や津軽石中学校の校庭などに設置した。管理するのは危機管理課だが、学校長、自主防災会長、分団長は鍵の開け方を教えてもらってある。また、平成25（２０１３）年4月以降に日本赤十字社から自主防災に資機材が届くことになっている。自主防災の組織の大きさにより、資機材の量がおよそ決まっている。21防災会にはプレハブの倉庫があるが、ないところは助かったのではないか。ただし倉庫を置く場所が必要で、個人の土地ではなく公共

写真３　津軽石中学校校庭に設置された防災倉庫
2013/03/31　撮影：宮坂 清

の土地でなくてはならない。
震災後、宮古市のなかで最も活動がよかったと推薦されて、全労済から助成金を50万円もらった。岩手県で4件が推薦されたという。そのお金で平成24（２０１２）年の暮れに発電機を買って各公民館に置いた。震災後にいろいろと補助がもらえて装備が整いつつある。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・宮古ＦＭ収録原稿・聞き取り４）

■避難訓練
各地区の役員や消防団二十一分団の協力を得て津波避難訓練の実施、防災資機材の点検、取扱い訓練を年2回から3回実施して、いつでも機材が使用できるようにしている。訓練時期は春・秋の火災予防運動週間、宮古市主催の津波訓練、消防団の消防演習等の時に行っている。
町内会、防災会の役員は常に参加するが一般の方や生徒たちは、土日以外は参加者が少ない。1訓練会の参加者は40～50名位である。藤畑、根井沢など、地域によっては防災に関心がない所もあった。
２０１２年3月11日に避難訓練をやった。中学校に30人、駒形神社に40人集まった。中学校に来た人は駒形神社まで15分ほど歩かせた。避難場所は駒形神社であるのに、市の担当者3人が中学校にいたので地域住民も中学校に来てしまった。避難場所に避難するように放送しているのだからそちらに少なくとも1人は行くべきではないかと言った。（藤沼久人氏、藤沼氏提供資料・宮古ＦＭ収録原稿・聞き取り４）

■震災後の取り組み
震災を機に21防災会のジャンパーを80着つくり各役員に配布し、今後、災害時はこのジャンパーとヘルメットをつけて活動することとした。また5～6万円かけて21防災会の夏用ベストもつくった。今後、津波の避難場所、避難所を見直してマップを作成し、各家庭に配布する。避難場所の整備、避難所（津軽石中学校、津軽石小学校）への機材の配布申請などを行う。（藤沼久人氏、宮古ＦＭ収録原稿・聞き取り４）

■防災のために
自分の身は自分で守るがモットーだが、地域住民が主体となり安全で住みよい、災害に強いまちづくりを目指す活動をすることにより、被害を最小限に留めることができる。地域内や家庭内の安全点検のほか、防災訓練を通して災害に備える活動を行ってほしい。津波の情報があった時は、すばやく高台へ避難する。避難場所を決めて道順を確認しておくことが必要。自分たちのまちは自分たちで守るという強い連帯意識を持って行動してほしい。（藤沼久人氏、宮古ＦＭ収録原稿）

このようにみてくると、震災時における21防災会の活躍が、それ以前からの、日常的な努力の積み重ねによるものであることがわかる。例えば、４２０人の会員から毎年１００円の会費を徴収するということは、集まる金額以上に、そこで生じるコミュニケーションから、防災意識を高めてもらうことができるという点が重要かもしれない。その活動は、他のモデルになりうるだろう。

ウ　民生委員の活動

震災当時、津軽石の民生委員の取りまとめ役をしていたのは、下町の野崎昭敏氏であった。盛岡に出かけていた野崎氏は、いち早く津軽石に戻り、民生委員としても活動を行っている。

■盛岡から車で戻り、津軽石小学校の避難所へ行く
民生委員をやっていたので避難所に泊まり、その晩は一睡もしなかった。多くの人がびしょ濡れだった。停電していたが、ちょうどそのとき砂防ダムを建設しており、その業者が発電機を持っていたため、一昼夜は暖房を1基つけることができた。みんな着の身着のままできているから、誰がどこにいるかわからない。しーんとしていて、聞こえるのはペットの鳴き声だけ。おじいちゃんやおばあちゃんも目をつぶっているだけ。おにぎりなどの食料もなかった。地震津波のときに津軽石にいなかった人たちは無事なのだろかと聞かれたが、何もわからない。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■徒歩で高齢者の安否確認をし、薬をもらいに磯鶏まで歩く

翌朝、民生委員として活動しようと思ったが、車が通れないので歩くほかなく、高齢者の安否確認をするのが精一杯だった。被災していなくても高齢者、特に一人暮らしの高齢者は、水道も食料も電気もない状態では生きていけない。食料品を買うことができる津軽石唯一の店が被災していたから買い物もできない。

避難所にいればなんとか食べることはできた。被害を受けていない瑞雲寺や山手のほうの地区の人たちがおにぎりを作ってくれたりしたが、350人くらい避難していたため、当初は2人で1つほどしか渡せなかった。川井から来た消防団も手伝ってくれた。毛布は自主防災会に60~70枚ほどあったが、体育館だから寒かった。やむをえず、たまたま卒業式のために準備してあった紅白の幕で身体を包んだりした。

困ったのは、避難してきた人がいつも飲んでいる薬がなかったこと。ある人にここで死ぬのは嫌だと言われ、国道が通れないため徒歩で線路伝いに磯鶏の金沢医院まで行った。そこの医院も被害を受けていたが、なんとか1週間分の薬をもらってきた。先生も被害を受けていたが、調剤薬局が患者のカルテをみて薬をくれて、そこからまた線路伝いに津軽石まで帰った。1日がかりだった。今も元気でいて、その姿をみると、大変だったが行ってよかったと思う。私も疲れていたが、助かった命をなんとかつないでいかなければという気持ちだったからできたのだと思う。それにそうするのが民生委員の役割だった。私は法の脇の担当をしており日頃から安否確認をしていたため、みんな顔がわかっている。

私の自宅は、目の前まで水がきて土蔵が全壊したが、自宅の建物は大丈夫で、高齢者が6人、自宅に避難していた。私は1週間、避難所を離れられなかった。盛岡に背広で行ってそのままだったから寒かった。自宅周辺の道路は通行不能だったため、地震の翌日、山を越えて妻が着替えを持ってきた。(野崎昭敏氏、聞き取り6)

■要介護者が避難所で生活するのは難しい

臨時のものも含め、津軽石だけで7か所か8か所、避難所があった。要支援者、介護を必要とする人などはあらかじめ決められた避難所まで行くことができず、近くへ行くことになる。指定された避難所以外に避難した人が、飲食が来ないなどと言って、小学校にやってきたこともあった。瑞雲寺は被害を受けておらず、高齢者などが避難していた。施設が寝たきりの人などを受け入れてくれないのが困った。避難所は暖房施設がなく、デイサービスを利用している人や寝たきりの人がたくさんいたが、市の職員にお願いしても、どこも空いていないと言われた。開いている地区の公民館を借りましょうということになったが、そこにも暖房がなく、またトイレが使えず困った。(野崎昭敏氏、聞き取り6)

■遠くまで見回りにいき、互いに情報交換する

民生委員は赤前の白浜地区まで担当している。白浜は湾の向こうの北側でここから5キロくらいある。3日毎に塩分のある土のなかを車で見て回ったが、ガソリンが不足していて困った。助けた人を誰かに繋がなければならないということだけを考えていた。

他にも担当の民生委員がいて、お互いに情報交換する。8名の民生委員が1か月間、毎日16時半から、津軽石小学校の一角を借りて打合せした。日中は安否確認に歩いたり、避難所の手伝いをしたりした。私は、高齢者で炊事ができない8軒の家に、ペットボトルや私の家の井戸の水で粥を炊いて配達した。この近所の人たちもその井戸をけっこう使った。水道が通る前は近所の人たちが使っていた。(野崎昭敏氏、聞き取り6)

■小学校の先生たちが子どもを守った

学校に子どもの状況を把握しに行った。先生の迅速な行動のおかげで事故などはなかった。当時の校長先生は、挨拶の中で我慢せいと言ったそうだ。異国の軍歌かなにかだと思うが、いいメロディで、がまんしろ、いつか朝がくる、というような歌詞だった。校長先生は祖父か

ら聞いたと言っていた。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■遺体があがると、火葬に顔をだす

民生委員の人には、遺体があがると、自分の地区の人の火葬のときは行ったほうがいいと言った。私も法の脇で亡くなった６名くらいの方の火葬に顔を出した。バッグなんかに免許証が入ってる。子どもも２人、学校へ入るとこだった。１回避難したが戻って、そのまま流された人が、栄通りに多かった。民生委員をやっていた人の中にも、お年寄りを見に戻って流された方がいた。法の脇は寝たきりの人が多く、線路があるために車が入れないところがあった。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■できる限り状況を把握する

私は避難所にいる人について、高齢者は誰なのかわかるが、いつ来たのか誰なのか、わからない人もいる。人それぞれだから。後からこうすればよかったああすればよかったと思うが、当時は頭が真っ白で、あそこには高齢者がいるとか、それくらいしかわからない。避難所にいなければ、どうだったのかなと思うしかない。１か月くらいのあいだ、津軽石地区の民生委員をやってる人に、あちこちの家に泊まってる人も把握してくださいと言った。何が足りないとか、どこそこのおばあちゃんの調子が悪いとか。簡単なようで難しい。家を無くした方は３か月ぐらい、仮設住宅ができるまで避難所にいた人も多かった。家を流された人は行くところがない。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

■あらかじめ組織をつくり、準備しておく

機能するしないはともかく組織をつくっておくことが必要だ。津波ばかりでなくゲリラ豪雨で川が決壊するということもありうる。駒形の藤沼さんのところは被害が少なかった。私も小学校の避難所に行って物資を配布した。

今回の地震は誰も予想しないくらい大きかったが、それでもやはりふだんの準備が大切だ。防災組織の物品が５月に来るから、それを馬越の避難場所の防災倉庫に置くことになっている。訓練が大事だ。防災組織には、女性も入れたほうがいい。トイレや着替えの場所のことなど、女性でないとできない仕事もある。薪ストーブのある家もあり、いざという時に役立つ。電波が悪くてラジオが入らず困った。何かあったときのためにラジオのアンテナを用意しておく必要がある。（野崎昭敏氏、聞き取り６）

(5) 避難所の運営と避難生活

津軽石で地震津波から避難した人たちが、その後の避難生活を送った避難所のうち、最も人数が多かったのが、津軽石小学校の体育館であった。先述した津軽石中学校の避難所の場合、周辺の公民館へ避難した人も多く、中学校で避難生活を送ったのは１００人以下であったが、津軽石小学校へは４００人以上が避難し、体育館には当初から人が溢れていた。そのこともあって、津軽石小学校の避難所を運営するにあたっては多くの困難が生じた。

以下ではそれぞれの様子についてみていく。

ア 津軽石小学校の避難所

■避難所の概要

津軽石の集落西の山際にある津軽石小学校は、地域の避難所に指定されていた。地震の発生後、車や徒歩ですぐに小学校の体育館に避難した人たちがおり、また当初馬越や舘山などいくつかの避難場所に避難した人々も、津波の危険が少なくなり、周囲が暗くなり始めると、津軽石小学校へ移動した。

しかし、校舎や体育館には及んでいなかったものの、小学校の校庭には水やがれきが流れ込んでおり、また避難所に避難してきた人は４２５人に及び、体育館は人で溢れかえった。また後述するように、指揮系統に混乱があり、市の職員なしで運営しなければならないなど、困難な状況におかれた。指揮をとった「本町協力会」は懸命に運営にあたったが、その運営は困難なものとなった。

■津軽石小学校体育館の避難所へ入る

体育館に入り、地区ごとに座るように言われたため、新町の下の人たちと合流して一緒に座っていた。発電機や石油ストーブを出してきてつけていたが、ストーブを同時に何台も点けると発電量が足りないのか、すぐ消えてしまった。さらに、地震があるたびにストーブを消して入口ドアを全開にしなくてはならず、とにかく寒かった。体育館から溢れ出てしまうくらい多くの人がいた。

津軽石小学校の避難所は、その周りの本町や下町の人たちが主になって運営していた。給食室は無事だったため、被害のなかった家から米を分けてもらい、若い男性が山の奥にある沢水を汲みに行き、ガス釜でご飯を炊いておにぎりをつくった。1回で全員に行き渡る数は作れなかったため、子どもとお年寄りに先に渡した。私も、何回目かにできた塩おにぎりを、その日の夜のうちに食べることができた。

余震が頻繁に起こりサイレンも鳴るので、いつでも逃げられるように、最初の晩は横にもなれなかった。避難するのは小学校の裏山だった。最初のころはみんな避難していたが、何回目かからは途中で腰を下ろしている人もけっこういた。親が迎えに来ない子どもは校舎の中で先生が面倒をみていた。ただ、避難した一般の人は教室には入らないように言われたため、体育館にいるほかなく、トイレも体育館の中にあるトイレを使うしかなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■当日の夜、発電機を借りストーブをつけることができた

停電になったが、その日に小学校の裏山でダム工事をやっていた人が避難してきていて、現場から発電機を2機もってきてくれた。分団員に電気屋がいたので、発電機を配電盤につなぎ、ある程度、当日の晩から電気を使うことができた。ストーブも電気なしには点かないから助かった。ただし、電圧が低いため機器が壊れてしまう可能性もあった。（若狭斌氏、聞き取り8）

■体育館に入れず寒かったが、火を焚くなといわれる

地震津波の当日は小雪が降っていてとても寒かった。体育館は避難者であふれていたため消防隊員は屋外にいるほかなく、ドラム缶を半分にして薪を燃やし、暖をとっていた。地震の翌日、遺体捜索を終えて避難所に戻ったところ、教員がツカツカとやって来て、学校に近くて危ないから燃やさないでくれという。だが校庭には車がたくさんあり他に適当な場所がなく、また鉄筋製の校舎は火事になるような建物ではない。もう少しでトラブルになりそうだったが、私が間に入って止め、火を焚くのを諦めた。別の日にも、捜索から戻ってくると、ここには車を停めるな、などといろいろ言われた。日中もトラブルがあった。（中野規男氏、聞き取り8）

■津軽石を通過する電車に乗っていた人たちも避難してきた

地震のときに津軽石駅に停車していた電車に乗っていた人たちが20人、避難所に避難してきた。東京や盛岡から旅行で来ていた人、山田から乗ってきていた子どもたちもいた。津軽石まで乗せてきたJRに対応してほしかったが、車掌らが当初は避難所におらず、ようやく来たので、責任感がないのかと怒鳴った。バスが通ることになったからなんとか宮古へ送れと言った。

車で流されてびしょ濡れになった人がいて、近所の人たちが衣類を貸した。その人は盛岡から2人で来ていたが、もう1人は行方不明になっていた。盛岡から安否確認に来た人がいたので、その人に車で送ってもらうことにした。分団長に住所ともう1人の行方不明の人のことを知らせてから行くように言ったのに、そのままいなくなってしまった。そうかと思えば東京から手紙をくれた人もいた。（若狭斌氏、聞き取り8）

■避難所の運営は、私がやらなければ誰もやらない

津軽石小学校への避難者の中に他の地区の町内会長はおらず、本町町内会長の私が動かなければ何も進まないとわかったので取りまとめ役をやった。いい勉強になった。戸惑いが大きく、気が回らない部分もあったが、しばらくやってだんだん様子がわかってきた。

ストーブに使う灯油については、ガソリンスタンドに避難所を優先してくれとお願いして、毎朝トラックで配達してもらった。他の避難所では灯油が足りなくなったところもあったらしい。ガス屋さんもあったため、プロパンガスを供給してもらい、機器を直してもらった。そういう面では恵まれていた。

病気を出してしまうことがとても心配だったが、医療関係者がいてくれたので心強かった。交通手段がないから病院に行けない。民生委員は避難所の運営組織に入れず、外を回ってもらった。（若狭斌氏、聞き取り８）

■体育館はとにかく寒かった

体育館は完全に密閉されておらず、ガラス窓が多いため熱が逃げてしまい、寒かった。２、３日経つと、毛布が入っていたアルミの袋で窓を覆ったり、入口近くに衝立を置いて風が直接入らないようにした。毛布が十分になかったため、子どもと高齢者に優先的に配布し、２人で１枚を一緒に使ったり、それもない人は毛布の入っていたアルミの袋を履いたりした。毛布は備蓄用に体育館か校舎に少し置いてあったのではないか。私はジャンバーを着てその上にベンチコートを着ていたため、床の冷たさがいくらか和らいだ。

避難所では、朝５時起床で６時には朝食だった。もう少し朝ゆっくり眠っていたかった人もいたのではないか。一部の照明が一晩中ついているためによく眠れず、やっと寝ついたころに起こされるという人もいた。最初に中学校にいて、小学校に移ってきたが、寒いからとまた戻って行った人がいた。小学校のほうが寒かったのかもしれない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■市の対応も良心的ではなかった

宮古市の職員は津軽石小学校の避難所へなかなか来てくれず、来たと思ったら、今日はある課から何人、明日は別の課の人というように、毎日違っていた。同じことを何度も説明しなければならず、しかも責任をもつことのできない人たちばかりで、指示を仰ごうにも、携帯電話が通じないから連絡もできない。市には職員を常駐させてほしいとずっと要望していたが、叶わなかった。１日交代ならいらないと言って帰したところ課長たちが来たため、１日交代では何もできない、私の家も被害にあってるんだから帰りたいと訴えた。しかし、それなら２日交代ならばどうだと言い、常駐という言葉はついに出てこなかったため、結局いらないということになった。（若狭斌氏、聞き取り８）

■仕事を分担する体制をつくり、協力を仰ぐ

そこから私の戦いが始まった。私は本町の町内会長で、避難所の運営に携わっていたが、職員はいらないと言った手前、問題が起きないようにしなければならない。私が指示を出して、必要な係をつくって仕事を分担する体制をつくり、避難している人たちにもそれを説明し、指示にしたがってくださいとお願いした。避難者は当初４２０人ほどいて、足の踏み場もなかった。地区別に名簿づくりをした。自宅で眠ることはできるが食事が作れない人の名簿もつくらなければならなかった。そのような通いの避難者が50世帯くらいいた。朝は起きると、今日は掃除するとか、これこれを守ってくれとか、まず指示を出した。一番心配したのは病気、特に感染症だったが、結局でなくてよかった。手の消毒など、衛生面には気を使った。毎日夜７時から、避難所の代表と消防でミーティングを行い、その日の報告と翌日の予定を話し合い、市から届いた情報を報告した。（若狭斌氏、聞き取り８）

■おにぎり配布、炊き出し、自衛隊による食事の配布

当初、食事は根井沢や払川の人たちがつくってくれたおにぎりだった。とても助かった。避難所でもやろうと思ったが、小さい鍋がいくつかあっただけで全く足りなかった。小学校に使っていなかった二重釜があったので使わせてくれとお願いし、なかなか使わせてもらえなかったが、なんとか使わせてもらえることになった。赤前小学校では給食室を開放して炊いたらしい。二重釜でつくるようになってから食

事が全員に行き渡るようになった。やがて中学校の校庭で自衛隊が食事をつくってくれるようになり、おにぎりでなくてご飯を食べることができた。りんごなどいろいろなものをくれ、みそ汁の具もいろいろ変わった。

■避難所の炊き出しは自衛隊の元調理班長が指導した

航空自衛隊を退職したばかり、元調理班長だった盛合さんという人が来て、ずっと一緒に泊まってくれた。津波の際にたまたまこちらに来ていて、お前やれということになった。あのようなときに何をすればいいか、例えばこの品物が来たらこう調理すればいいということがよくわかっていた。

自衛隊ではご飯は1人何グラムと決まっているらしい。人数を伝えて注文すると実際には足りなくなるから、多めに注文するのだそうだ。そんなことは初めて聞いた。なぜ避難所にいる人数とご飯の人数が違うかと、後になって聞いたことを覚えている。ソウメンが来たことがあったが、茹でて時間が経っていてもう固まっていた。彼が固まらないソウメンの茹で方を自衛隊や我々に教えてくれた。彼のおかげで食事については恵まれていた。自衛隊のメニューの他にもいろいろつくって食べさせてくれて、うれしかった。（若狭斌氏、聞き取り8）

■1週間後に水道が通り、自衛隊が校庭に風呂を設置した

避難所にいたときは水を汲むのが大変だった。小学校の裏にあるお墓の脇に水が湧いており、みんなバケツをもって汲みに行った。1週間後に電気がくるまで、ずっと水を汲みに行った。自衛隊が風呂を設置したときは、すでに電気がきて水道が通っていたから、水道を使った。（若狭斌氏、聞き取り8）

風呂は津軽石小学校の校庭に設置するのがいいだろうと自衛隊と話して決めた。曜日ごとに入る地区を決めた。高浜や金浜、白浜からも来た。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■新潟、次いで静岡から医師が来てくれる

私はもう少しで破傷風になるところだった。長靴に塩水が入っていて、靴擦れしたところからばい菌が入ったのではないか。医者が新潟からまず来て、後で静岡の医者が来た。見せたら、毎日消毒しなければいけない。治らなければ足を切断しなければならないと言われた。その医者がもぞもぞリュックサックを探して、靴下を出してこれを履きなさいと言ってくれた。ありがとうございますといってありがたくもらった。風呂に入ってから見せたら、治ってきましたねと言われた。

津軽石にも医院があったが被災してしまった。先生薬くださいと言ったが、それどころではない、片付けないととても診療できないと言われた。そのため自衛隊に泥を出してもらい、ボランティアを入れて片付けた。中でも人工透析が大変だった。数日ごとに車で病院をなんとかまわった。（中野規男氏、聞き取り8）

■ボランティアに助けられた

保健婦の人たちが来て、体操を教えたりした。ボランティアはまだ来ていなかった。ボランティアは社会福祉協議会を経由して少しずつ来た。町内会として、2次災害が起きないようにまず側溝をきれいにしてもらった。下町公民館もやってもらった。ボランティアさんには助けられた。「阪神淡路大震災のとき私も助けられたので今回来た」と言っている方もいた。下町公民館も1か月くらい置きっぱなしにしていた畳を片付けてもらった。冷蔵庫などは道路に出しておけばもっていってくれた。ありがたかった。ボランティアの人がトイレに困っていたので、公民館のトイレや漁協のトイレを使ってもらった。（野崎昭敏氏、聞き取り6）

■自宅と飼い犬のこと

私の自宅は小学校の目の前だが、避難所に6か月おり、手がつかなかった。朝起きて自宅に行き少し片付けて避難所に戻り、朝食をみんなにあげてからまた自宅に行き、10時になるといろんな物資がくるか

らまた避難所に戻り、それが終わると昼食、という具合ではほとんど作業にならない。自分では何もできなかったが、知人が手伝ってくれて助かった。

シェパードを飼っていたが、ちょうど散歩に行こうとしていたときに地震がきて、これはまずいと思い、犬小屋へおいてから、学校へ行った。当日の夜中、泥でうまく歩けなかったが、なんとか自宅まで行った。途中まで行ったら犬が鳴いて、生きてたと思った。連れていこうと思っても歩けないから仕方ない。自宅に着いて玄関を開けたら、うわっという感じだった。居間に入ったらソファが濡れていなかったので、そこに新聞紙を置いて犬にここにいろと言っておいた。（若狭斌氏、聞き取り8）

イ　津軽石小学校避難所の困難な運営

■避難している人以外についてもっと考えるべきだった

津軽石小学校の避難所は、多くの人が狭い場所で長期間、避難生活を送ったこと、避難していた人たちを統括するような役職者がいなかったことなどから、その運営は相当に困難なものになった。先述のように、他に誰もやる人がいなかったために、本町町内会長の若狭氏が取りまとめ役を担ったが、大きな苦労があった。そして、一部の人たちに配慮が必ずしも行き届かなかったことから、不満が生じることになった。若狭氏自身、次のように回想している。

後で気がついたが、避難している人以外の人のことも考えるべきだった。どこの店に行っても棚が空っぽだったと後で聞いたが、当時は気が回らなかった。避難していないが食べ物を入手できない人たちが、遠慮して避難所に来れなかった。今後は、そういう人のことを考えるようにしていかなければならないと思った。支援物資については、持ってきたので受け取ってくださいと言われ、最初は受け取っていたが、中越地震のとき最後に物資が余って困ったことを聞いていたため、だんだん断るようになった。（若狭斌氏、聞き取り8）

以下は、さまざまな理由から配慮が必ずしも行き届かなかった人たちの声である。

■家を失った人が避難所の手伝いをし、不公平感が募る

トラブルはいろいろあった。避難所には家が残っている人と残っていない人が混在していた。家が残っている人は朝になれば片付けをするために出て行くが、家がなくなってしまった人は避難所にいるほかなく、そうすると炊事などいろいろな手伝いをさせられる。それが積もり積もって、私たちは家がなくなってしまって大変な思いをしているのにあなた方は家があるだけまだましでしょう、それなのになぜ私たちがこんな思いをしなければならないの、という気持ちになってくる。

そのため、私の夫は夜が明ければすぐ片付けに出て行くが、私は炊事の手伝いをして洗い物が終わった後に出かけるようにした。夫の分のご飯は申し訳ないけれどもらっていきます、と言ってもらっていた。家がなくなって気持ちが落ち込んでいると、誰かの言葉を、その意図とは違ったかたちで解釈してしまうことがある。それがもとで取っ組み合いの喧嘩になりかけたこともある。（盛合純子氏、聞き取り10）

■避難所から出て行くよう促されるが出て行けず、辛かった

地震津波から1週間後くらいに、避難所が狭いため自宅が残っている人は出てほしいと言われた。しかし、自宅は2階までは水がきていなかったものの、電気がないことには照明もラジオもテレビもなく、暗くなったら足元も見えない。古い家だから畳を外すと床が抜けそうになり、懐中電灯では心もとない。1階に反射式ストーブがあったが水に浸かったために使うことができず、電気がないためにファンヒーターは使えず、2階に暖をとるものがなかった。だから出て行ってくださいと言われても出ていけなかった。さらに2週間目くらいには、津軽石中学校の避難所が津軽石小学校の避難所に統合されることになり、中学校の人たちが来て狭くなるから、やはり出て行ってくれと言われた。

さらに、新町の人は小学校ではなくて中学校に避難するのではない

かと言われて驚いたこともあった。最初に舘山に避難すればそこから行ける避難所は津軽石小学校しかない。自分たちはここにいてはいけないのかと思った。いろいろ言われながらも、仕方なく3週間、避難所にいた。（盛合純子氏、聞き取り10）

■食事を代わりに受け取ることができない

かつて自衛隊で衛生部隊にいたという人と本町の人たちが、主に現場で指示を出していた。最初のうち朝食をもらって夫に届けていたが、いない人にはあげられないと言われた。夫は日が暮れるまで片付けをしていて6時の夕食の時間にいないことがあったが、やはりいない人にはあげられないと言われた。代わりにあげるわけにはいかない、夕食の6時までに戻って来ないとだめだと言われた。

しかし食事はむしろ余っているようにみえた。食事をもらいに行くと、子どものごはん茶碗に一杯くらいしかもらえず、片付けに出る若い男性などはとてもそれでは足りないのではないかと思うくらいだったが、次の日に給食室に行くと、前日に余って処分されるご飯が山盛りになっていたことがあった。自衛隊が来てくれてからも同じで、毎食十分な量を持ってきてくれるのに、あげられるのはこれだけと制限された。仕方なく自宅から火を通さなくても食べられる食材や菓子を持ってきたりしていた。救援物資の中にお菓子があったがそれもあまりもらえなかった。ステージ上の幕が引かれていて、その後ろには支援物資が山のようにあったが、ジュースは食事のときに1本のみだとか制限された。仕方なく安否確認に来た親戚などが持って来てくれたものを食べた。（盛合純子氏、聞き取り10）

■日中、片付けに出ていると支援物資がもらえない

私たちは朝に出て行けば夕方まで戻らなかったから情報が入らなかった。新町上の人たちが昼食に持って来てくれたおにぎりや、自分たちで用意したカップラーメンを食べた。避難所にいる人たちには、何時から支援物資が配られるという連絡がくるが、いない人には全く届かない。夕方に戻ってきてから、自衛隊が持ってきてくれた支援物資が校庭にあると聞いて、行ってみるとほとんど残っていないということがあった。避難所にいる人といない人の情報の量が違った。夕方、避難所に戻るとダンボールをいくつも持っている人たちがおり、避難所に昼間いた人たちで支援物資を分けたと聞かされたこともあった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■本町以外の人は情報が入りづらい

自分たちの地区からも運営に参加している人がいれば情報がもっと入ったのかもしれないが、本町の人たちが中心になって運営していたために、自分たちには情報が入りづらかった。本町だけで仮設住宅への入居希望をとったという話も聞いたので、どうしたらそういう情報をもらえるのかと問い合わせしたが、新町の人は関係ないと言われた。では行政連絡員に聞けばいいのかと思って聞いてみると、そんな話は知りませんと言われた。こうした情報を聞いても、それが本当かどうかもよくわからなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

当初は助けるということが重要で、その人がどこの人かということは関係ないが、時間が経ち情報や噂が交錯すると、だんだんそうなってしまうのだろう。全部の人に平等に情報を流すべきだったがそうはならなかった。放送で流すということもなかった。緊急用の放送だからそういうことには使えなかったのかもしれないが。（舘下光利氏、聞き取り10）

■好きなだけ支援物資を持っていく人がいる

小学校より高いところにあり水が入っていない家の人が、3人4人で来て、袋いっぱいに支援物資を詰めて帰った。避難所に電気が来るようになると携帯電話の充電をしにきたり、お風呂に入って行ったりした。運営していた人たちは、その人たちが被災していないことをわかっていたはずなのに、何も言わなかった。それなのに家に水が入って片付けしている私たちに、地震の1週間後くらいに出て行ってくれ

と言った。

自分たちの家には赤ちゃんはいないが、遠くに孫がいるからと粉ミルクやオムツをもらっていく人がいた。地元につながっていない人のところへ流れた支援物資が相当あったのではないか。家族みんなで来てカップラーメンを1人1箱ずつ持っていく人もいた。支援物資の意味を間違えているのではないかと思った。最後の方になってようやく、支援物資を受け取るときに名前を書かせるようになった。

お風呂のときも、何時から何時まではこの地区だと言われてその時間を待っていると、誰でも入っていいみたいだよ、私入ってきたよと言っている人がいた。入れるだけありがたいが、時間が守られない。（盛合純子氏、聞き取り10）

私は、自分はなんとかなるから本当にどうにもならない人がもらうものだと思っているが、逆にそういうときだからもらわねば損だと考える人もいる。被害の大小はあっても同じ被災者だからもらうというふうに言う人もいる。（舘下光利氏、聞き取り10）

■避難所から自宅に戻ると食事がもらえない

3週間目に出て行くときに、食事はどうしますかと聞かれて、まだガスコンロが使えないので自分たちで作れるようになるまでもらいに来てもいいですかと聞いたら、もう店も開いてますから自分たちの食事は自分たちで工面してくださいと言われた。私も意地っ張りなので、ああそうですかわかりました、それならいいですと言った。仕方なく隣の家からカセットコンロを譲ってもらいしばらくそれで煮炊きした。家に戻って2、3週間した頃、盛岡にいる姉がガス台を持って来てくれて、それでガスを使えるようになった。避難所にはそれ以降、行こうと思わなかった。行くと嫌な顔をされるから行く気にならなかった。

避難所に行くことはもうないだろうと思っていた。自衛隊が支援物資をもってきてくれても、自分たちはそこへは行けないと思っていた。とにかく自分たちでなんとかしなければと思っていたが、近所の人が、今度の何曜日にはお米を配給してくれるから行こうというので、いや私たちはもらえないのではないかと言うと、いやいや被災していない人までもらっているからいいんだと言われた。それで初めて行ってみた。行く人は毎日のように行っていた。途中からは野菜も支援物資として配っていた。私は自分たちの分だけと思うからきゅうりであれば2、3本持っていくが、なかには1箱持っていく人がいた。なぜこれだけ感覚が違うのだろうと思った。なま物だし、早く支援物資がなくなれば自衛隊は早く引き上げることができる、だからたくさんとるんだと言われた。山のように抱えていく人たちもいた。（盛合純子氏、聞き取り10）

避難所に入っていない人は避難所の人よりもらえる食料が少なく、差別がはなはだしかった。避難所に行くとそこのリーダーから変な目で見られる。排除するような目で見られる。朝夕の食事を貰いに行くと、いつ自炊するのだと言われる。家内もあそこへ行くのは嫌だと言う。避難所外の人は食料をとりに行くのも恐る恐るで、これはよくない。多くの人が嫌な経験をしている。今後は行政がきちんとしないといけない。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

このように、津軽石小学校避難所の運営について、一部の人たちは不満を抱いていた。運営に携わっていた若狭氏自身も、必ずしも配慮が行き届かなかったと回想している。そのようになってしまった原因はどこにあるのだろうか。先にみた津軽石中学校やその周辺の「避難所」と比較してみると、大きく2つの原因が考えられる。まず、多くの避難者が狭い避難所に集中したこと、そしてこの地域における災害への備えが十分でなかったことである。

津軽石小学校の体育館へは当初から４００人以上が避難し、極めて手狭であり、また隙間風が入って寒いなど、環境が劣悪であった。避難した人たちは辛い思いをしながらも、そこにいることしかできず、身体的・精神的なストレスの大きな状態が長期間続いた。ふだんであればやり過ごせる程度のことであっても、そのような状況下においては、敏感に反応してしまう可能性がある。

次に、この地域の20自主防災会は日頃の活動をほとんどしてこなかっ

たために機能できないなど、災害への備えが不十分であった。そのため、津軽石小学校体育館に集まった避難者を統括できる人は当初だれもいなかった。それを見かねた本町町内会長の若狭氏がやむをえずその役割を買って出た。20自主防災会が管轄するエリアの町内会長は、若狭氏以外、だれも避難していないなど、他にそれをできる人がいなかったためである。しかし、若狭氏は本町の町内会長であり、本町以外の町内会、とりわけ新町の事情はよくわからない。また、災害時にどのように対応するかについての話し合いや、具体的な備えは事前に誰ともしていない。つまり、混乱の中、やむを得ず引き受けたのであり、その役割を遂行するのに必要な知識、経験、人脈を十分にもっていたわけではない。さらに、さまざまな事情から、小学校の教員や市の職員の協力を取り付けることができず、避難所運営の方法に関する幅広い知見を利用できなかった。そのため、若狭氏ら少数の運営者がその場その場の判断に基づいて対応する他なく、結果として配慮が行き届かない範囲ができてしまった。

以上の2点が重なり、避難所の運営は必然的に困難なものになった。多くの人が身体的・精神的に追い詰められる中で、一部の人たちに配慮が行き届かなくなり、それが積み重なり不満につながった。多くの人がやむをえない状況下において共同生活する。その中で円滑に物事を進めるためには、できる限り配慮の行き届かない範囲を減らし、対応に差が出ないようにする必要があることがわかる。

しかしそれは、言うは易く行うは難しであろう。同じ避難所にいる人であっても、置かれている状況はそれぞれ異なる。住んでいた地区がどこか、自宅が残っているかいないか、家族のうち誰と誰が一緒にいるか、心身の調子がいいか悪いか、などさまざまな条件により、その人がそこでできること、あるいは必要とするものやサービスは異なる。だとすれば、少数の人が一手に責任を引き受けるような形ではなく、そこにいる人がみな、できる限り互いの置かれている状況を理解しあい、力を合わせることができるような体制を構築していくことが必要であろう。

以上から、避難所の運営に関して指摘されるさまざまな問題は、運営者個人の資質に還元して理解するよりは、避難者ひとりひとりから構成される避難者共同体の、構造の問題として理解すべきであると考えられる。津軽石中学校などの避難所の取りまとめ役を担った21自主防災会は、震災以前から毎年、会員ひとりひとりから会費を集めつつ、自主防災会の活動を周知し防災の意識を喚起することを、地道に続けていた。その小さな努力の積み重ねが、震災の際の比較的スムーズな人的資源の活用につながったのである。他方、20自主防災会が機能しなかった反省から、震災後、下町では独自に自主防災会を立ち上げて防災倉庫を設置するなどの活動を始めている。震災を機に始まったそうした活動を継続し、地域の人々の防災意識を維持し、人的なつながりを保持することが肝要であろう。

(6) 生活の立て直し、復興への道

震災から時間が経つにつれ、日常の生活をいかに立て直すかという点が大きな関心事になってくる。しかし家屋が失われたり、大きな被害を受けたりしている場合、生活を立て直すことは容易ではない。被害を受けた農地や漁業施設についても、それを元通りに復旧させるのか、断念するのかという選択を迫られる。未来を描くことはしばしば困難であり、描いたとしてもその道のりは往々にして険しいものになる。以下では、(ア) 水に浸かった家屋の修繕、(イ) 農業・漁業の復興、についてみていく。

ア 水に浸かった家屋の修繕

一旦津波に浸かった家屋は、外観上はさほど変わらないように見えても、そのままそこに住むことはできない。津軽石小学校の避難所に身を寄せていた人々の家屋には、そのような状況にあるものが少なくなかった。津軽石川左岸では津波の勢いはさほど強くなく、水位がじわじわと上がっていったところが多かった。そのため多くの家屋は流されはしなかったものの、多量の海水や泥が入り、その修繕に苦労し

ている。

■自宅の風呂を修理して入るも、傷から菌が入り腫れ上がる

私が最初に風呂に入ったのは震災の2週間後だった。小学校の校庭に自衛隊が風呂を設置してくれた。だが夫は大勢が入る風呂に入りたくないと言って、自宅の風呂をなんとか直し、3週間目に初めて入った。

夫は糖尿病があるため、気をつけて手足を洗っていたが、足から菌が入ったのか、足がパンパンに腫れてしまった。本人は大丈夫だと言っていたが、私や他の人が、足が腐るかもよと説得し、津軽石小学校に来ていた医師団にみせたら、これは大変ですと言われ、切開して患部を切除し、その後も1週間、毎日通った。

水は近所の井戸を使わせてもらったが、いろんなものが混ざっていたと思うが、カセットコンロがもったいないから完全に煮沸しないで洗うのに使っていたから、それもよくなかったかもしれない。（盛合純子氏、聞き取り10）

■泥だらけの自宅を苦労して片付ける

自宅は背丈ほどの水が入ったため何もかも泥だらけで、1回洗っても乾くとまだ泥がついていて、何回も洗わなければならなかった。食器棚も水洗いした。冷蔵庫は大丈夫かもしれないと話していたが、行ってみると横倒しになっていて、使って万が一そこから火が出るのは嫌だったから処分した。水を含んだ畳は大人の男が2人でも持ちあげられない。自宅は、台所以外はみな畳が敷いてあったので、運び出すのが大変だった。家の裏に倉庫代わりにしている建物があるが、そこにも畳があったために運びださなければならなかった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■電気を使えるようにするのに一苦労する

地域に電気が通ったのは3週間後だったが、電気屋に頼んでいたらとても時間がかかるので、夫がホーマックやケーズデンキに行って、数量限定のコンセントを少しずつ買ってきて、自分で直して、最後に電気屋さんに漏電していないかチェックしてもらった。これを電気屋に頼んだら3か月かかるといわれた。

私たちと似た状況にはなかった人たちはそういう大変な事情を知らない。家があるといっても囲われているだけで、電気を通すだけでも大変だった。（盛合純子氏、聞き取り10）

■自ら自宅を修繕すると補助金が出ず、頼むと3か月かかる

夫はもともと大工だったため自分で家を直すつもりだったが、自分で直すと補助金が下りないということで、他の人にお願いすることにしたが、待っている人がたくさんいて順番待ちになった。畳がようやく入ったのは、お盆の前だった。それまで1階はスリッパで歩き、台所に入る時に脱いでいた。畳が入ったときはありがたくてみな喜んだ。

娘はでかけていたので娘の車は大丈夫だったが、夫の車は車庫に入れたままだったためダメだった。買い物に行くことができず、娘が手伝いに来た時にあちこち買い物に行った。私はしばらく自宅の周辺にしか行かなかったが、新町公民館に支援物資をもらいに来たついでに娘に連れられて国道のほうへ行き、初めて自宅周辺以外の被災の状況をみて、涙が出た。（盛合純子氏、聞き取り10）

■他所に避難していたが、戻って自宅を新築した

鮭川（津軽石川）の事も気になっていたので半月後に帰った。電話が通じず困った。家を貸してもらって2か月くらいいた。近所に空いている家を探した。被災後に改造した家があり、1年半そこに住んだ。98の母をこのまま送り出せないと決断して、昨夏、津軽石小学校の近くに土地を取得し家を新築して、今はそこに住んでいる。母はデイサービスを利用できている。

母は昭和8年の三陸地震津波、チリ、そして今回で3回経験している。私はチリ地震の時は盛岡にいて、家はチリの際も流されたので、高台に移転して家を建てた。5~6年後、津波は来ないんじゃないか、敷地も狭いし場所もよくないというので元の法の脇に戻って新築して、

今回被災した。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

イ　農業・漁業の復興

津軽石の人々の暮らしを支えてきた、農業や漁業関連の施設も震災により大きな被害を受けた。周辺の農家が集まり復興のためにつくった「津軽石・赤前・白浜復興組合」と「津軽石鮭繁殖保護組合」の事例を見ていく。

■津軽石・赤前・白浜復興組合

「津軽石・赤前・白浜復興組合」は、震災後に農家の組合を改変して作った。このような組織を作らないと、資金を受け取ることができない。震災でみな耕作をやめてしまっているが、道路をどうするか決まっていないために前に進まない。住民が結束して、計画を立てて、ようやく交渉ができる。今のところ3年間だけ面倒をみるといわれている。

田んぼも水路も井戸もポンプもみななくなった。機械はもらってあるが、耕作をやりたくてもできない。地権者に対しての説明が未だになく、向こうの出方を待っている状態である。しかし、農家はみな年をとっており、後継者もいないから、田んぼが元に戻っても以前のように耕作はできないかもしれない。

話が進まない代わり、20人ほどの雇用があり、7月と11月に1週間、時給１４００円で草刈りをした。1日5枚、写真を撮って報告するように言われた。その他、田んぼ1枚に3万5千円出る。いくらかでも現金を得るためにやっているが、草刈り以外は何もできない。浜の人たちは時給１５００円でがれきの処理をしている。（猪又忠氏、聞き取り5）

■津軽石鮭繁殖保護組合

津軽石鮭繁殖保護組合は特殊である。漁業権は宮古組合がもっているが、運営は地域の組合員が宮古漁協から委託されてやっており、利益は１００％もらえる。孵化場の卵は漁協のものだが、残った卵や採卵後の魚は組合が販売する。

津軽石鮭繁殖保護組合は任意団体であるため、震災から復旧するのに国の補助が出なかった。震災後の4月に自前で復旧しようと、自分たちで事務所を建てて倉庫を作り、採卵場もすべて作った。9月までに体制が整った。組合員も被害を受けていたので、７００人の会員に、1組合員当たり20万円の援助をした。昭和44～45年に、宮古漁協と合併したとき、川と孵化場は津軽石に残してほしいという条件を出した。採卵後の魚は自由に売り、地元のためにしてよいということになり、その利益をこれまで貯蓄してきた。この金はこういう時に支援すべきだと決めた。

私は漁協を退職した後、震災の前年にこの組合の組合長になった。運営がうまくいっていなかったため、頼まれて引き受けた。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

■震災後、鮭の遡上が少なくなった

震災後の平成24年は鮭が獲れなかった。平成23年も悪かったが、それよりさらに8千匹ほど少なく、卵の販売ができなかった。90％以上が孵化場へいってしまい、身入りが少ない。原因はよくわからない。太平洋岸は北海道も少なかったが、オホーツク海の方が量はあったという。放流数は同じだが、回帰数が少ない。津波の影響はわからない。津波のときはまだ放流を終えていなかった。5割ほど放流した段階で、放流した稚魚もまだ湾内にいた。津波の後、上流で稚魚がバタバタしていた。鮭の回遊が少ないと県の漁業は大きな痛手になる。（山野目輝雄氏、聞き取り1）

組合で上がってくる鮭を捕えて、イクラハラコを取り出して販売し、漁協が孵化場で孵化させて、3～4月にかけて放流する。各小中学校に教育用にあげて、川に放流したりする。10月に閉伊川、11月から1月に津軽石川で捕るが、震災後、鮭がほとんど来なくなった。震災のときも放流する時期だったが、稚魚がみんな流されて放流できなかった。去年も少ししか放流できなかった。この4、5年は上がりが悪いのではないか。

販売するときも、経費節減のため、理事、幹事がぜんぶ出て、自分

たちで販売した。整理券をだして、1、3、5本などと制限した。ここしばらくはそういう状況が続くと考えられる。水産庁によれば、津波のために海に餌がなくて、鮭がとても小さく、数も少ない。障害物もある。網を掛けてる漁協の船も、やはり捕れないという。各漁協が網をかけていて、そこをすり抜けたのだけが川に来る。（藤沼久人氏、聞き取り4）

津軽石川の右岸を中心に、津軽石には震災前、広大な田畑が広がっていた。しかし、その大半が海水や泥につかり、また水路などの施設も破壊されてしまった。地域の復興計画で区画を一新して道路を通す案が示されるなど、元の場所で以前のように農業を行うことは難しくなり、かつ計画が進まないまま時間が過ぎ、農家は将来を見通せない状況が続いていた。

漁業についても、漁場や施設が破壊されただけでなく、津波がちょうど稚魚の放流の時期と重なったことから、将来に渡って鮭の遡上の減少が見込まれ、実際にほとんど遡上がみられなくなってしまっているという。

最後に

津軽石で筆者が話を聞いた方々の多くは、震災当時、人々の救助や生活の支援など、地域でなんらかの役割を果たしてきた。自らも地震津波により大きな衝撃を受け、また物理的な被害を受けている中で、むしろ他人のために働き続ける。その姿を直接目にしたわけではないが、その切迫したお話を聞いているだけで頭が下がる思いがした。

他方で、彼らはそのように人々に尽くしたにも関わらず、あるいはそれゆえにか、苦悩しているように見えることがあるのが気がかりだった。辛い作業をした記憶が消えずに残り続ける。あるいは自分が下した判断が必ずしも正しくなかったかもしれないという後悔の念に苛まれるなど、具体的な内容はさまざまだが、震災の傷痕がいまも見えない形で残っていることを実感した。

巨大な自然の力に圧倒され翻弄されているさなかにも、少しでも被害を軽くしたり、人々をケアしようとする彼らの努力は続いている。その努力がより多くの結果を生み出すために、必要な条件とはなんだろうか。まず、避難訓練に参加することや持ち出し袋を用意することなど、一人ひとりの災害への備えが必要であろう。また行政や関連団体などが防災・減災のための計画をより洗練させ、施設や装備を充実させきちんと稼働するように管理することも重要であろう。しかし何より重要なのは、一人ひとりがその周囲の人たちと互いに気や心を配りあうような人間関係を日頃から培っておくこと、それを可能にする仕組みを地域社会がつくりだすことではないだろうか。

【参考文献】

宮古市教育委員会『宮古市史 民俗編 上巻』1994年。宮古市
「月刊みやこわが町」通巻392号「2011・3・11東日本大震災 読者投稿PHOTO 津軽石 長洞利弘」2011年8月。
宮古市「広報みやこ」NO. 151、2011年12月1日。
宮古市『宮古市東日本大震災津波浸水図』2012年9月。
宮古市『東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～』2013年3月。
宮古市教育委員会・宮古市教育研究所『東日本大震災の記録―調査報告書』（平成23年度研究紀要第79号別冊）2012年3月。
宮古中央公民館『平成23年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集』2012年5月。
宮古中央公民館『平成24年度宮古市中央公民館事業 3・11大津波体験語り継ぎエピソード集【第2期】』2013年3月。
宮古市東日本大震災記録編集委員会『東日本大震災 宮古市の記録 第1巻（津波史編）』2014年3月20日。
中野規男「活動報告⑤ 宮古市消防団第20分団出動記録」（日本消防協会『東日本大震災全国消防団報告研修会報告書』財団法人日本消防協会、http://www.nissho-jyouhou.jp/nisshohp_img/

higashinihon-daishinsai/pdf/houkokusho05_miyakoshi.pdf)

体験談1：「タオル1本、新聞紙のありがたさ」（80代 女性）、『エピソード集1』1頁。
体験談2：「地震が来たら津波と思え」（70代 男性）、『エピソード集2』59～60頁。

【参考資料】

■聞き取り

筆者は下記の10回、地域の方々からお話をうかがった。「聞き取り1」から「聞き取り10」まで番号を振り、本文中にはその番号で示した。このうち「聞き取り1」は神田より子による。

聞き取り1：平成25年3月18日、山野目輝雄さん（1936年生）、津軽石鮭養殖組合事務所にて
聞き取り2：平 成25年3月25日、長澤光彦さん、宮古市消防団第二十三分団屯所にて
聞き取り3：平成25年3月26日、藤沼久人さん（1941年生）、佐々木睦雄さん、藤沼さん宅にて
聞き取り4：平成25年3月27日、藤沼久人さん、藤沼さん宅にて
聞き取り5：平成25年3月28日、猪又忠さん、大手一男さん、大手さん宅にて
聞き取り6：平成25年3月28日、野崎昭敏さん（1940年生）、佐々木優さん（1948年生）、津軽石下町公民館にて
聞き取り7：平成25年9月13日、長澤光彦さん、宮古市市史編さん室にて
聞き取り8：平成25年9月14日、中野規男さん、若狭斌さん、宮古市消防団第二十分団屯所にて
聞き取り9：平成26年8月16日、舘下光利さん、津軽石新町公民館にて
聞き取り10：平成26年8月17日、盛合純子さん（1965年生）、舘下光利さん、津軽石新町公民館にて

■藤沼久人氏提供資料

藤沼久人「今回の震災の防災会の活動について」（宮古FM収録用原稿、平成23年8月22日放送）
藤沼久人「宮古21防災会」（宮古FM収録用原稿、平成23年8月22日放送）
「避難者を励ます舘下良一コンサート」（平成23年5月15日、津軽石中学校）
「津軽石中学校における支援物資の配布1」（平成23年4月10日、津軽石中学校）
「避難者への支援物資の配布」（平成23年4月30日、津軽石中学校）
「津軽石中学校における支援物資の配布2」（平成23年5月8日、津軽石中学校）

■その他

「大震災 宮古市避難所状況一覧」（「東日本大震災避難所等提供資料」）
「緊急物資配送状況 3／18」「緊急物資配送状況 3／19」「緊急物資配送状況 3／30」（「東日本大震災避難所等提供資料」）
「避難所調査書 H23・3・23」（「東日本大震災避難所等提供資料」）
「東日本大震災による流失した施設復旧までの経過」（津軽石鮭養殖組合）
「避難所への情報提供 1～28」宮古市（http://www.city.miyako.iwate.jp/kikaku/hinanjo_joho.html）

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第8章　赤前地区（津軽石地区赤前）

伊藤好英・金　鉉哲

1　概要

津軽石地区の赤前は、赤前上・赤前中甲・赤前中乙・赤前下・堀内の5つの行政区に分かれている。この5つの地域のすべてが、今回津波の大きな被害を受けた。

この地域は、宮古湾がもっとも奥に入り込んだ最南端の、南側と一部東側に位置する地域である。湾の南側に広がる平坦部は、北は宮古湾に接し、西には津軽石川が南北に流れ、南側と東側には山が迫っているという地形で、かつての津波でも、波はこの平野を飲み込んで山の麓まで達している。

今回の大震災前の集落の状況を述べると、まず、この平野の北側を東西に走る防潮堤が、平野の東端から鍵状に曲がり、湾に沿って北に走って堀内の集落前に到っており、堀内の集落は、その防潮堤の東側に位置する。そして、平野の北側の防潮堤寄りには宮古運動公園が作られ、その南の平野部の道路と、山沿いを走る主要道路に沿う形で、赤前上・中（甲乙）・下の集落が形成されていた。

今回の津波は、4つの集落を含むこの平野のほぼ全域と、堀内の集落のおよそ半分とを、一瞬のうちに飲み込むものとなった。

宮古湾を南進してきた津波は、平野の北側の防潮堤にぶつかって、10メートルを越える高さとなり、それを乗り越えて運動公園を破壊し、勢いを落とすことなく真っ直ぐに南に進んで平坦部の家屋を押し流して山の際まで到達した。一方、湾の西南の水門と防潮堤にぶつかって進路を塞がれた波は、そのまま湾内を東北に走って、北から来た波とぶつかる形で堀内の集落の前の防潮堤を破壊して集落内に流れ込んだ。このような状況の中で、今回の津波による赤前・堀内の地域の被害は甚大なものとなった。

今回の大震災による死者の人数は、津軽石地区全体で57人であるが、そのうち字赤前の死者は、1人の死亡認定者を含めて26人であった。

2　地震直後の避難状況、避難直後の避難所での生活

大震災から2年近くが経過した平成25年2月に、地震直後の避難状況、避難直後の避難所での生活等について、赤前に住む方々からお話を伺った。地域の防災会の会長の村松岩蔵さんと村松さんの奥様、赤前の町づくり検討会の会長で、仮設住宅にお住まいの宇都宮拓治さんと、佐々木平一郎さんの4人である。伺ったお話を以下に記す。

【村松岩蔵さん（昭和10年生）**と奥様の話**
〈平成25年2月18日午後、村松岩蔵さん宅にて〉**】**

〔村松さん〕

私は、赤前で保育園の理事を何年も任されていた。

赤前では、保育園改築のために、漁村地域センターを臨時に借りていた。保育園を新しく改築して、そこで保育園の卒園式をすることになり、卒業する15人が新保育園で卒園式の練習をしていた。

残りの園児は漁村地域センターにいて、私もそこにいた。その時地震が来た。子供達を建物の外に出している時、地震がやんだ。これほどの地震だと津波が来ると考え、園児達を、赤前小学校に避難させた。電話も全く繋がらず、ほとんど連絡が取れない状況だった。60人余りの園児を、漁村バスセンターのバス1台と職員達の自動車2、3台で避難させた。

卒園園児の15人は新築の保育園にいて、職員達の多くもそちらにいた。こちらは、職員2人ぐらいしかおらず、大勢の子供達をどの様に避難させるかわからなくて、混乱状態だった。一時的に裏山に子供達を避難させたりもした。とりあえず小学校の体育館に避難した。

体育館はいろいろなところから来た人達で一杯だった。その時、「津波だ」という大声が聞こえた。津波が防波堤を越えたという大声。津波が防波堤にぶつかって物凄い水柱が立ったのが印象的だった。湾の

近くに新しい野球場が作られて間もない時期だった。建築からわずか1年目だった。2011年春から本格的に使用する事が決まっていたが、まともに使わないうちに津波が全部持って行ってしまった。

避難所の体育館には、津波で流されたが助かった人々も来ていた。とりあえずその人たちに、プールにあった水を湯に沸かして配った。寒い日に海水に浸かり寒さに震える人々を皆で助けた。

漁村地域センターは、もと小学校があった場所だった。ここもかなりの被害を受けた。とうてい再使用できないほどの被害だった。何年か前の地震の時に梁が落ちて、そのままになっていた。津波のあとすぐに建物を取り壊して、今はさら地になっている。

卒園式の練習をやっていた新築の保育園は、地震に対して全く問題がなかった。近くにある工業高校よりも高いところにある。工業高校は海抜ゼロメートルだ。津波のときは授業中だった。最初、2階に逃げたが、そこもあぶなくて3階に避難した。先生も生徒たちも全員が無事だった。

赤前は、工業高校も小中学校も保育園も、生徒・児童・園児たちは、全員無事だった。このことは非常によかったと思っている。

津波という大きな出来事がある時は、いちいち対応することがかえって問題を複雑にさせる傾向がある。漁村地域センターには、地震の直後、園児を迎えに来た保護者もいたが、万一途中で津波がくると危ないと思い、園児は帰さなかった。小学校に避難してからも迎えに来られる人がいたがやはり帰さなかった。一方、生徒や子供たちが学校から帰ってくるのを待っていたために避難ができず、津波にさらわれた両親もいた。また家で孫達を待っていて被害をこうむった祖父母たちもいた。

放送の最初の津波予報の問題点。最初は3メートルの津波だと放送があった。堤防が8メートルなので全く安全だと考えた。しかし実際は30メートルの津波が来た。堤防がかえって津波を高める役割をしたのではないかという疑問がある。

予想以上に津波が高く上がって、津波を見ていて流された人達がいた。ただ逃げるだけの避難訓練は限界がある。また、今まで津波を、何十センチ程度という感覚で捉えていたことも問題であった。この程度なら問題ないと安易に考えていた。

最初の放送で3メートルという速報を聞いたが、後で6メートルに修正された。しかしこの2回目の速報は全く聞くことができなかった。通信手段がほとんど麻痺していたので、修正された2回目の放送を聞くことができなかった。これも大きな問題点だ。

津波に対する警報も、あまり落ち着いた放送では問題だ。もっと差し迫った声で警報を知らせるのも重要だ。

海岸の村はほとんど全部孤立した。特に道路が流失して多くの問題が生じた。電信柱が道路に倒れ、津波で流れてきた物があちこちにたまっていた。緊急状況にもかかわらず、消防車が全く被害地域まで来ることができない状況だった。

避難道の確保も重要だ。自衛隊のトラックが、海岸道路からは村まで入って来られないという問題が生じた。食べ物の供給が3日間ほとんど無かった。

小学校の給食センターに大きな釜が残っていて、避難所ではそれを使って食事をすることができた。白米は小学校に給食用のセットが1式あったが、それ以外、学校にはほとんど米が残っていなかった。

主な農家はみな流された。倉庫も全部津波に流された状況だった。海水につかった米は食べられなかった。実際、津波に汚染された水を飲んで、下痢をして苦労した人々もいた。津波の水というものは全てのゴミが入り混じった汚染された水なのだ。

幸いこの地区に、津波に流されなかった発電機が1台あった。これからは非常用発電機を準備しておくことが何より重要だと考える。特に避難所には必ず必要である。

津波に流されて死んだ人達は、あまりにも酷く傷んで泥まみれなので見わけがつかない状況だった。水できれいに洗って、はじめて人と認識できた。

17日目にやっと家の周囲のゴミを片づけることとなった。その時、何か重たいものに触った。よく見ると人の指が見え、その指には指輪

が見えた。若い女性と思われる死体を発見した。その場所には自動車2台が津波で流れてきていたが、自動車の中には人がいないので良かったと思っていた。しかしその自動車の下で死体を発見したのだった。

〔奥様〕

私は、津波がうずを巻いて押し寄せて自動車を飲み込んだのを見た。津波が押し寄せる音は全く聞こえなかった。突然門の前まで水が入ってきた。玄関を出るともう胸まで水が来ていた。子供たちの遊具があったので、それにつかまった。すると横を自動車が流れ過ぎるのが見えた。

〔村松さん〕

自分たちが住んでいる家までは津波が来ないと思った。それでここに家を建てた。園児たちを避難させた後、見ると、家にはもう水が一杯入っていて、戻ることができない状況だった。

地域住民達は津波に対する不安と恐怖を持っていたが、盛岡から来た先生たちは、殆どこの地域の津波の危険性を知らなかった。村の後の山に、津波の時の避難道があるということさえ知らずにいた。子供たちも、津波の避難道の事はよく知らなかった。普段から避難訓練をすることが重要だと思う。

工業高等学校にある津波模型について。水を注げば津波がどこまで到達するのか知ることもできるように作った模型。津波が来る前にすでに作られていて色々な被害状況を予測することができた。災害の後にも模型を作って状況を予測したりもした。

津波以後、電気製品はほとんど使用できなかったし、コンセントも全部使用不能。ボイラーまで使えない状況。誤って電気をつけると、スパークして火災が起きる可能性が高かった。1か月の間は全く電気を使えない状況だった。

孫は水産高等学校に通っていた。寒さが我慢できず、カーテンをはずして体に巻いて寒さを凌いだという。

1日経って子供たちは家に帰ってきたが、水産高等学校に通っている孫が帰って来ないので非常に心配した。途中の家が無くなって子供たちは自分の家を探せない状況だった。

道は完全にわからなくなっていて電柱が倒れている様な状況。自衛隊がきて基本的な処理が開始された。

食用の水は山の上から汲んで来た。水道が入る前に、山の上の湧水で生活していた記憶があった。その記憶を生き返らせて、食用の水を得ることができた。山の上の水があったために皆が助かった。水道ができてからも、村の人達は共同でこれを管理して使っていた。組合員が年会費300円を出して維持していた。組合から脱退する人もいたが、村の人の約半分が残っていた。

避難所のトイレは、学校のプールの水を使った。高校生が朝からプールの水を汲み、トイレの掃除もし、食事の仕度も助けた。からだの具合の良くない老人たちもお互いに助けあった。学校が中心となって地域民が一致団結することができた。先生も1週間は家に帰らないで学校で生活した。道がほとんど切れていたので家へ帰れない状況でもあった。皆が協力したということが、今となっては美しい記憶である。亡くなった人たちもいたが、仮設住宅も学校の運動場に作って、やっと再出発の体制を作ることができた。1週間の後に発電機を手に入れて、学校で電気を使うことができるようになった。

ガソリンも1人当り一度に5リットルしか買えなかった。いつも長い列ができていた。薬が必要な人達も多かったが、薬を手に入れることができる人は僅かだった。1週間ほど後に、どの病院でも薬を処方するシステムができた。

赤前は鮭の孵化場の始まりの場所である。孵化場の元の場所がまだ残っている。

津波がくる前の3月3日、たまたま避難時の役割分担を行なったが、これが、実際に津波が来た時いろいろ役に立った。

被害地域の家具やカバンが全部空っぽになっていることが多かった。子供を連れてきて、物を盗んでゆく若い女性達もいた。ズボンの後ろポケットにドライバーを入れて歩きまわっている若いカップルもあった。防災会の会長の自分は、監視役もしなければならなかった。常習犯と見える人がいて、注意を与えたりもした。周囲の人々も皆その人

を警戒していた。

【宇都宮拓治さん（昭和5年生）の話
〈平成25年2月18日午後、赤前小学校仮設住宅の宇都宮さんのお部屋にて〉**】**

「町づくり委員会」を平成23年の9月中に設立した。役場が、地域ごとの委員会の結成を誘導した。３２０世帯のうち、１５０世帯が被害を受けていた。会議が行われ、20人程のメンバーで、意見を取り纏める委員会を設置した。私は会長を頼まれた。

９月中に委員会が設立されて、月1回集まって、４回程、町作りについて会議した。委員たちも被害を受けていたので、安全、安心して暮らせる場所を確保することが何より重要だという意見に一致した。子供たちのためにもそれが一番重要だと考えた。

12月には全地域の総会が開かれ、専門のコルサルタントの意見を聞いて、住民たちが願う高台その他の候補地域を決めて、意見を市長に提出した。町作りが現在進行中である。

早く仮設住宅から出て次の段階に進みたいとか、自分たちは戻ることができなくても子供たちには安全な場所を確保したいとかいう意見があった。

山の上の高台の設計図を作って、再び交渉することに決定した。人によって資金面で色々状況が違うので条件が複雑である。80才以上の人々は、賃貸住宅は難しいと言う。たとえば市営アパートのような方式を希望している。宮古市と地域の方針が一致しなければ、先に進まない。もとの場所に戻りたい気持ちはあるが、実際には危険な場所に、安心して住むことができないので、戻る事を主張する人はいない。地域住民の中には浸水被害がなかった人達もいるが、その人達も、一緒に移転できる方法があれば移転したいと言っている。

地震があった日、私は軽トラックに乗って千徳に買物に行った。駐車場で地震が来て、大きな津波が来ると直感的に認識した。急いで後の山道を通って妻を連れに戻った。津波訓練のとおりに行動しようと思った。

家に着いて位牌を持って外に出た。家からは海が見えない。トラックに物を積んで浜を見たら、20㍍以上の津波が白く見え始めた。「津波だ」「逃げろ」という大きな声を聞いて、人々も避難を始めた。妻と2人で歩いて赤前小学校に避難した。子供たちは市内に住んでいた。津軽石小学校に通っていた孫も無事だと、後で聞いて安心した。

避難所（小学校）は、いろいろな人達でごった返していた。消防団員たちが水門を閉じに行って、水に濡れて戻って来ていた。

その日の夜、４００個程おにぎりを作って配った。しかし、人々が増え始めて、おにぎりが段々小さくなった。以前私は、消防団の分団長だった。次の日、家に帰ったが、家はほとんど形が無い状態だった。家の近くで行方不明者3人が発見された。家が流されて無くなっていたので、自分の家のためにする仕事は無かった。死んだ人も多かったので消防団員達が、コミュニティセンターで葬式をしてあげるということもあった。

死亡者は警察の管轄だったが、いろいろなことを自衛隊と消防団で一緒に行なった。一番大変な事をしたのは自衛隊だった。1週間後に自衛隊が来て、いろいろ助けてくれた。ゴミを片づけたり、途切れた道を繋げたりという仕事。自衛隊は災害に関する様々な設備を持っていたので最も大きな助けとなった。

学校には防災に関連した物が準備されていた。学校の中に水、食べ物、毛布などが準備されていた。1週間ほど後に東北電力でも車両を出して電気を供給した。やっとテレビが見られる状況になった。

避難時に、大変お世話になったのは学校の関係者であった。校長と先生達には大変お世話になった。先生の中には自分の家が流された人もいたが、本当に熱心に被災者達を助けてくれた。皆が大変感謝している。

今まで何回も津波が来たが、今度のものは、本当に大きい津波だった。最初3㍍の津波警報が出た後は、無線の問題なのかわからないが全く情報がなかった。市役所のサイレンも鳴らなかった。無線であっても、

電源が全部切れたら完全に不通になることはわかるが、この様な問題は早く解決されなければならない。

チリ津波の時、人々は半鐘の音を聞いて避難した。今でも昔のように避難のための半鐘があれば良かったのではないかと思う。今はむしろ防波堤が高いので、人々は津波の状況がわからない。

高台移転について、今年3月頃測量が開始され、宅地ができるのは平成28年頃ではないかと思う。

高齢になると銀行でも融資をしてくれない。この問題をどのように解決するのかが問題だ。

津波によって工場や会社が無くなった。職場が無くなったために東京や埼玉に出て行った人が多い。若い人達は家族を連れて宮古を離れ、他の地域に住むことも多い。ここが故郷でない人達は、また帰って来ようという考えはないが、ここが故郷の人達はまたもう一度帰って来ようという意識が強い。しかし結局は、津波以前の人口よりはかなり減ってしまうのではないかと心配だ。

地震が来たら、先ずドアを開けるように幼い時から教わっていた。家に帰り中に入ったあと、私は一旦外に出たが、余震が続いて家の中に入ることができずどうしていいかわからなかった。その時津波が押し寄せて来るのが見えた。津波が非常に高かったので家からでも十分に見えた。驚いて我を忘れて逃げる状況だった。後から津波が追いかけて来た。逃げる途中に見ると、自動車に乗った人達が、道が混んで動けずにそのまま流されていった。地震が来てから津波が来るまで25分くらいかかったようだ。12年前に避難道路を作った。その道路の重要性が改めてわかった。

仮設住宅の人達は全てを失っているので、誰が良く誰が悪い状況だということはない。それで内部では特別問題が起こらない。しかし、余りに狭い仮設住宅で受けるストレスは確かにある。

【佐々木平一郎さん（昭和20年生）の話
〈平成25年2月19日午後、赤前小学校仮設住宅の集会所にて〉**】**

地震が発生して10分後、避難しようとした時、車椅子に乗った人を見付けた。その人を車に乗せて赤前小学校まで運んだ。

有線放送で津波3㍍という情報があった。直感的に湾には多分6㍍以上の津波が来るだろうと思った。

小学校の避難所から、津波が押し寄せて来るのが見えた。津波の後、避難所にいた人々は４５０人くらいになった。一段落した後、今日食べるご飯がないという声が聞こえた。米を少しずつ集め始めた。

私は消防団の人と一緒に、津波に流された人々を救うために海岸に降りて行った。船が全くなかったので浮きものを臨時に作って海岸に救助に向かった。溺れていた2人の人を助けて、浮きものに乗せて引っ張って来て車に乗せて小学校に運んだ。

村人の中に死亡者も出たので、その人達を確認する作業が同時に進められた。

避難所には小さな発電機があり、それにもう1台発電機を借りてきて、やっと電灯がともった。小学校には昔の給食設備が残っていたので、その釜でおにぎりを作った。４５０人分作った。工業高校にいる避難民１５０人分くらいのおにぎりも準備した。米は被害が無かった家からもらって来ることができた。沢の水もあったので、ある程度食べ物を準備することができた。

小学校の運動場で津波が来るところを見た。2回程津波が来るのを見た。そのうちの1つは巨大な水柱を作ったが、これは2つの潮流がぶつかったものと思われる。1つは津軽石の水門にぶつかって戻ってきたもの。もう1つの潮流は海から直接来たものではないか。高い所の家がかえって沢山流され、低い所の家が助かっている例もある。これも潮流の問題で、なかなか複雑である。

地震直後の話にもどるが、家に行ってみると、家の中はめちゃめちゃだった。運転免許証の入った小さなカバンだけを持って出て、車椅子の人を車に乗せた。妻は仕事で外に出ており、子供たちは職場の関係で宮古を離れていた。津波の後、家はどうなったかと聞かれても、全部流されて何も無かった。唯、ゴミの山だけ。臭いはと聞かれても、

どんな臭いがしていたか全く記憶が無い。家族との連絡は全く取れなかった。携帯電話が繋がらない状態だった。妻との連絡が取れず大変心配した。午後になってやっと、妻は山の上の実家の父が心配で、その家に行っていたということがわかった。子供が妻の安否を知らせるために避難所に来たのでそのことがわかった。ガソリンが無かったので時間がかかったようだ。ガソリンは1回に20ﾘｯﾄﾙ、あるいは2千円程度しか入れられなかった。

津波の次の日の夕方には、地元の人達の安否を確認する作業をした。父母、兄弟、子供たちの安否をお互いに確認した。市役所の人達もその次の日に来て状況の把握を始めた。しかし3分の1程度は安否が確認できない状況だった。

担当地域は72世帯、およそ210名程であった。被害が全くない家は3世帯ほどで、そのほかは被害が深刻だった。

その次の日から消防団と自衛隊、警察が入ってきて、死体の確認も行なった。自分達で顔を見て確認したのは当日だけだった。避難所には近所の工場で働いていた人達も来ていた。その人達も家へ帰りたかったが、帰る手段がなかった。

3日間、おにぎりとみそ汁を作って食べた。3日程経つと米が無くなったという話が出た。もちろん米は残っていたが、精米をしてなかったので、焚いて食べる事ができない状況だった。自衛隊が食べ物を分けてくれた。しかし自衛隊の食糧は余りにも脂が多くカロリーが高いので、材料だけ受け取ってそれを作り直して食べた記憶がある。

小学校の校長先生にとても感謝している。津波の直後から、学校にある物は何でも使っていいと言ってくれた。校長の家も被害を受けた。地震の時、小学校は授業中だった。もしかして危険なのかも知れないと考え、女の先生は子供たちを連れて更に高い所に移動した。先生たちは12名程いらしたように思う。先生たちは全員で食べ物を作る手伝いをしてくれた。

赤前の下組は72世帯だ。下の道は殆ど使用できなかったため、山道を主に使用した。復旧計画としては、県道41号線を高い所を通して活用する事が考えられる。また今の山道を再整備する事も必要だ。

赤前のこれからについて。高台に移転する人たちと公営災害住宅に住む人たちと、またいくらかは他に行くと思う。現に今よそに家を建てている人たちもいる。赤前地区には新しく引っ越してきた人たちも多い。その増えた部分は全部津波に持って行かれた。

計画では、宅地造成は、平成26年の秋頃になると聞いている。災害公営住宅は、土地の買収が終わり、3月中には遺跡調査を始め、調査が終われば工事が始まるものと見ている。

実際、復興計画はこれまでいろいろ集まって話をしたが、それは本当に形だけだ。全部県の指示で、市長も頭をぐっと抑えられて、なんともならなくなっているのではないか。閉伊川河口の水門についても、初めは住民たちの意見を聞いて、水門を作らないことになったが、突然また作る事に決定されて、説明会を開く事になった。

水門については昔からいわくがあったようだ。水門ができることによって、閉伊川をよじ登って行った水が今度は、こちらの奥の方に押し寄せて来るわけだ。それを心配して反対したのだが。水門ができればそれから上は大丈夫だということだが、市役所が移転するという話が出ている。これは矛盾だと思う。

今後、家をどう建てるかの問題だが、60才以上の人は、ローンを組むのが難しい。家を流された人達の宅地部分は市で買い上げるという話もある。そのようなお金を少しでも足しにするとかして、皆さん家を建てると思うが、これにも金銭上、いろいろ難しい問題がある。若い人たちがする仕事がほとんどなく、パートタイムくらいしか無い。外に出ている子供たちはローンを組むのが難しい。

郵便物は昔の住所に送れば、郵便局から仮設住宅に届けてくれる。今、住所を変更すると、すべての書類を変えなければならないので不便だ。

仮設住宅には高齢者が多い。1日中何もすることがないと気が滅入る。そこで学校の中に花壇や農地などがあり、野菜畑を作って栽培した。また学校の下に使っていない畑があった。農機具は流されて何も無かっ

たが、無料で提供してくれる人たちがいた。色々な機具を10個くらいもらった。その畑は80坪くらいだった。それを8等分して、10人ずつで何かを植えていく計画だ。お茶会なども3、4日に1度くらいやっている。

仮設住宅は、平成23年5月に入居した。5月にすぐ自治会を立ち上げた。支援物資は自治会を通して分配した。すべての物資が人員を計算して来るのではないので、これを配分する作業も大変だった。配分法を自治会で決めて配った。いまだかつて分配に関する不平を言われたことはない。仮設住宅に入っていない人たちには、最初は全く支援物資が届かなかった。家を流されて、親戚の家にいたり、アパートを借りて住んでいたりしていた人たちのことである。誰がどこに住んでいるのか把握できない状況だったからだ。プライバシーの問題があるので、市役所では知っていても、支援団体にそれを知らせることが難しかった。最近では、社会福祉協議会の方でも名簿をもらって、みなし仮設の人たちの所を歩いているという話を聞いている。避難所にいた時、被害にあっていない人たちが助けてくれたが、それは一時的なことであって、そのような関係がずっと続いていたわけではない。

仮設住宅には、電化製品や、必要な家庭用品が揃っていたが、みなし仮設の人たちは、それらをみんな買わなければならなかったので、大変だったと思う。

平成23年5月17日に仮設住宅に入ることができた。学校で仮設住宅用の土地を提供してくれたので早く入ることができた。最初は50世帯ほど。駐車場の問題があるのでその数だったが、その後駐車場を作って78世帯になった。

自治会をあらかじめ作っておいたので住民自身で住宅を管理できた。よそでは市役所で集会所の鍵を管理しているので、毎回使用許可を受けなければならない所もある。集会所が作られたが、小規模仮設住宅では談話室となる。談話室は、部屋を2つ繋いだ程度の小さな空間だ。

意見を集約することができず、自治会を作るのが遅れる地域も多い。ここの仮設住宅は85％が地元の人たちが入っている。外から来ている人達が多い仮設では、なかなか意見が纏まらないようだ。ここは、学校長が自治会を作らなければだめだと言って、早く作った。校長は去年の4月から水沢に転勤になった。あと3年くらいで定年だというから、56、7歳だろう。今でも時々お出でになる。お名前は及川総逸郎先生という。

仮設から早く出たいというのが皆の本音だろう。そのために早く復興を進めてほしい。特に年をとっている人は、自分の家で死にたいと言っている。

津軽石中学校で子供たちが自分達で「鹿子頭」を作って、文化祭で「鹿子踊り」をした。津軽石の元町では、「津軽石さんさ踊り」をやった。「さんさ」は津軽石小学校では、低学年からやっていた。

3　復興状況と3年前の体験（大震災から3年）

大震災から3年が経過した平成26年3月10日と11日に、復興状況や3年前の体験等を中心に赤前の方々からお話を伺った。

11日は、震災の日に合わせた宮古市全域の防災訓練の日であった。赤前上（かみ）組でも11日に、赤前上組会館とその前の道を少し登った脇に設置された防災備蓄倉庫の前で防災訓練を行うこととなり、10日はその準備の日であった。

3月10日は、赤前上組会館で、上組の防災会会長の村松岩蔵さんに、復興の状況や震災の前と後の集落の変化、津波直後の集落の様子などのお話を伺った。

3月11日は、防災訓練が終わった後、防災備蓄倉庫付近の路上と、津波が到達した境界地点で、赤前上在住の堀内光得さんと山根ひでゆきさんに、津波当日の人命救助のお話を伺った。

【村松岩蔵さんの話

〈平成26年3月10日午後、赤前上組会館にて〉**】**

明日の避難訓練は地区ごとに行われる。市の管理課（危機管理課）から即席五目飯を戴いたので、明日炊き出しの訓練として使うことに

した。赤前上自主防災会は、結成してから10年経つ。大きな火事や津波に備えて、これまでも避難訓練をやってきた。避難訓練は、地区ごとに、自主的にやるのが本当だ。地区ごとに避難のやり方が違うからである。

津波の時は、赤前は小学校に避難することになっている。3・11のとき、私ども赤前上の町内は120棟あったが、そのうち半分の家屋が流された。その方々は今仮設に入っておられる。

赤前地区の会館のうち、残ったのはここだけだ。他の会館はすべて流された。明日は、発電機等、設備を披露する。昨年の12月に準備した。資材倉庫は会館前の道を少し上に行ったところにある。

津波の前、赤前には10社ほどの会社があった。運動公園の方にもあった。3・11の時は会社の人たちも小学校に避難してきた。会社はほとんど流されて、今は町の方に出て行ってしまった。なかなか戻って来ないと思う。本当は戻って来ていただきたい。そうすれば若い人たちも戻って来やすい。若者の何人かは、盛岡の方へ行って同じ電機の関係の仕事をしている。

津波のとき、この町内の人で、筏を組んで水が浸かっているところにいる人を助けに行った。筏は2人で作ったという。1人は、漁協に勤めて退職した人だ。工業高校の方にも、人が波に流されて行って、たどり着いたのを見て、先生方が3人くらい助けた。小学校に運んで来たので、体を暖めたりして看護をした。

また、流されたお母さんを消防団が助けた。その際ロープを持って行って引っ張ってきた。この間、NHKの放送でその助けられた話が取り上げられた。水の中では、冷たいだけでなく、色々な物が絡まって大変だということだ。水を1回飲むと、泥のために凄く具合が悪くなる。水が下から湧き上がって来るのでどうしても飲んでしまうという。

赤前は堤防があるから大丈夫だと思っていたが、大波が堤防を越えて野球場に入った。野球場の管理人が1人、地震の後、津波だから逃げろと皆を誘導して避難させたあと、1人だけ残ってそのまま波に浚(さら)われた。2回目の大波だった。波はそのあと3、4回来た。

震源が宮城沖だったから、波は南の方から宮古の町にぶつかって湾に入って、かなり時間が経ってからこちらに来た。堤防を挟んで、10～15メートルの波が、倍になった姿で流れ込んだ。湾の一番奥だから余計大変だ。十勝沖地震（昭和27年）の時は防波堤が無かった。今回は、堤防はあったが、今まで流されなかった所まですべて流された。

前の時は、震災後しばらくして米を作る事ができたが、今回は瓦礫が土の中にたくさん入っていて田んぼに戻すのはなかなか大変だ。

復興をどのようにするか、集まって話し合いをしている。大手企業に来てもらって、赤前の田んぼを借りてソーラーをやろうかという案がある。宮古市にも、事業者に頼んで野球場の近くの土地で、実験的にソーラーをやってもらうという計画がある。それらがうまく軌道に乗ってくれればよいと思う。

田んぼは、耕すのが大変だ。家のあった地盤は固いから大丈夫だが、田んぼは、土の中まで深く鉄くずが入っていて使いものにならない。トラクターも入るのが嫌だと言う。また、昔の山からの排水路も壊れていて、用水も排水も一緒になって田んぼの中にすべて入り込んでいる。衛生上良くないから何とか水路を分離してくれないかと市にも頼んでいるが、なかなか埒があかない。排水路の話を第一に進めてほしい。

【堀内光得さん（昭和12年生）と**山根ひでゆきさん**（昭和25年生）の話〈平成26年3月11日午後、防災備蓄倉庫付近の路上（A地点）と、津波が到達した境界地点（B地点）にて〉**】**

〈A地点にて〉

〔山根さん〕

津波が来て直ぐのことだ。水に浸かった場所の屋根の上に、助けてくれと言った人がいた。その人を堀内さんと助けた。助かった人は赤前下組の人だ。コンクリのアパートが津波でひっくり返って、そこで助けを求めていた。20メートルくらい離れていた。

牡蠣の養殖に使う丸い浮きがそこにあった。板は流れて来たものを

使ったが、浮きがあってよかった。板に釘を打って筏を作って、浮きを四隅にロープで結んで、乗っても大丈夫なようにした。また、ロープが無かったら助ける事ができなかった。堀内さんが漕いで行って助けた。

その人が助けを求めていたのは津波が来て直ぐだった。

〔堀内さん〕

漕いで行ったが、途中、大きな瓦礫がたくさんあり、釘も出ていて大変だった。しかし、行く前に判断をして、きちんとゴム手袋をはめて、服もたくさん着込んで行ったので対応できた。

津波は、私はチリ地震（昭和35年）も十勝沖地震も体験している。十勝の時はああ大丈夫だと思った後に、大きなのが来てしまった。その後は来なかった。だから、1回大きなのが来れば、後は来ない、来ても堤防を超えるようなのは来ないと判断した。その時の状況を知っているので、経験上、後は来ないことがわかっていた。そこに残っていた山根さんと筏を作って、山根さんが筏の端に縛り付けたロープを持って、私が物干し竿で漕いで助けに行った。既に暗くなっていた。行って、その人にしっかりするようにバンバン気合をかけた。前に船に乗っていたときの経験から、救助を求めている人は、人が近づくと安心してカクッとして力が抜けてしまうので、大声で気合を掛けながら近付いた。その人はパンツだけしかはいておらず、屋根の上で力が抜けて全然動けなかった。私は屋根が動くと判断して、屋根ごとロープで引っ張った。

〔山根さん〕

最初その人を見つけた時、岸辺に20人程いたが、誰もどうしようもなかった。光得さんが来てくれて、こうしろと言われてはじめて冷静な判断ができた。あんな時は普通、冷静な判断は無理だ。警察だって消防だって人間だから、飛び込めといっても飛び込めるものではない。私も救命胴衣を2つ持って、それで引っ張ってこようと思ったが、水が胸のところまで来て引き返した。

〔堀内さん〕

自分は、津波を宮古の町で見て、ここに来るコースを決めた。他のコースでは2回目の波にぶつかるから、山を廻って豊間根まで行って、それからこちらに来た。来たら人がいっぱい集まって騒いでいた。

〔山根さん〕

また、部落の入り口の旭日屋旅館さんの前の電柱が倒れて道路が塞がれ、完全に消防車も救急車も通れない状況であった。その道路を村の人がバックホー（掘削機）で叩いて通れるようにしてくれた。それで救急車も入ることができて、筏で助けた人も病院まで行くことが出来た。災害の時は、今何をすればいいかを冷静沈着に判断する人と、それに協力する人が必要だと思った。

〈筏を作った場所（B地点）で、救助した現場を見ながら再度お話を伺う。直径40センチくらいの丸い浮きが、30個くらいまとめて置いてある。〉

〔山根さん〕

この浮きを使った。流れて来た木を4本使ってベニヤ板を釘で打ちつけて、四隅に浮きを付けた。

〔堀内さん〕

その上に乗って、洗濯竿が流れて来たのがあったので、それで漕いで行った。

〔山根さん〕

この一帯は全部湖だった。

〔堀内さん〕

チリ津波の時は、工業高校はまだ建っていなかったが、あの地面の高さまで水が行っている。あそこにうちの田んぼがあったからわかっている。ここまで来ているのだと前から人に教えていた。

〔山根さん〕

今度の津波は、最初3メートルと言ったから、今の堤防からすればたいしたことはないと私も安易な判断をしてしまった。ところがその3倍も来た。

〔堀内さん〕

ここは全部田んぼだった。チリの時もすごかった。

4　大震災から4年半の時間を振り返って

大震災から4年半近くが経過した平成27年8月に、以前にもお話を聞いた赤前在住の村松岩蔵さんと村松さんの奥様、ならびに宇都宮拓治さんにお話を伺った。震災後、宮古市では、復興をどのように進めてゆくかについて各地域で話し合い、要望を纏めるための「町づくり検討会」が作られた。宇都宮拓治さんはその委員会の会長を、村松さんは副会長を務めておられる。

【村松岩蔵さんと奥様の話

〈平成27年8月28日午後、村松さん宅にて〉】

〔岩松さん〕

今年の4月1日から、新しい公民館の中に津軽石支所が入った。津軽石支所の管轄は津軽石と赤前である。赤前は上・中（甲・乙）・下・堀内に分かれている。小堀内と堀内が一緒になって堀内地区となっている。

そのうちで、家が多く流されたのは上・中・下だ。堀内のほうは4軒、5軒ぐらいか。中でも赤前下が、一番被害が大きかった。浜の方の、中学校の下に市営アパートがあったが流された。たくさんの世帯が入っていた。

赤前上（かみ）の戸数は、当時は120戸くらいだったが、半分以上は津波で流された。

赤前中（なか）は、山沿いの道路から上が10何軒か流された。そして道路から下の、公園の方、野球場の前まですべて流された。そこは新開地だった。新開地に作った宅地に新しく家を建てた人たちが大勢いた。千5、6百万かけて入って、1週間も経たないうちに流された人もいる。立派な家が流されてしまった。

中組の場合は、建ててから10年以内の家が10軒ほどあった。私の知り合いの家は、2階建ての大きい家だったが、建てて6か月くらいで流された。いくら大きな家でも波には勝てず、いっきに流された。中組のアパートは、山寄りの道沿いにあったから流されなかった。

下組の管轄の運動公園の近くの市営アパートは、市役所でも、なんであんなにひっくり返ったのかと言っている。コンクリートに鉄骨が入っているものが、波の力でもろにひっくり返ったのだから凄いものだ。もちろんあそこは、地盤が弱かったのだ。地盤が弱くて、波に押されてひっくり返ったのではないかと思う。

赤前は、古い家というのはいくらもなかった。この道路から上の方は古くて、下の方はほとんど新しい家ばかりだった。古くても10、20年たらずの家がほとんどであった。

昔の人に聞くと、明治29年、昭和8年の津波では、家は流されなかったと言う。新開地のところには家が建っていなかったからだ。

〔奥様〕

でも、波もこんなには来なかったという話だ。

〔村松さん〕

来なかった。だから建てた。過去の経験があるから。

〔奥様〕

私達の町内も、下の方まで家が建った。

〔村松さん〕

明治29年と昭和8年の津波のときは、今ある堤防もなかった。そして松林が津波よけということだった。松林が二重になっていた。下の道路より海に近い、今の運動公園が松林だった。そしてその南側には田んぼがあった。ずっと田んぼだった。松林が、堤防の代りというか代行役で守ってくれた。

昭和8年の津波の時、ちょうど浜の方に行っていた人が、地震で津波が来るというのでそこの松の木に上って津波を逃れた。そういう英雄みたいな人がいた。松の木にしがみついて尻を波で洗われたという。松の木が転べばそのまま流されたのだが、松の木はそのまま流されずに残った。その場所で私達もその人から話を聞いた。「ほら、村松くん、この松さ登ってな。昭和津波の時には、けつさらわれたんだぞ、洗っ

てもらったんだぞ」と。大久保さんという方だ。
昔はずっと松林があった。野球場を作るために、あの辺の松はなくなった。

〔奥様〕

ここの松林の方が、陸前高田のより綺麗だった。その向こうはずうっと砂浜だった。和歌山の白浜のようにきれいな砂で、私達も幼い頃は、そこで寒い時に体を暖めるのに砂をかけたりして遊んだ。

〔村松さん〕

昭和45年に岩手国体があり、競技場を作ることになって松を伐採した。運動公園と陸上競技場、野球場を作って、そこで国体をやった。
二重に松林があったから、水を通しても波の力をずっと弱めることができる。やっぱり昔の人は、考えていたわけだ。津波の一番強いところというか、波が高いところが松林だった。松林を植えたのは、明治よりもっと昔かも知れない。明治の人たちがそれを引き継いで守ってきたのかも知れない。
今回の津波で1本も松は残っていない。津波前は、松が一部残っていた。私も、会社を定年退職してから7年間野球場の管理をやったが、その時も、防潮堤の裏に松の木がずっとあった。野球場から池の所まで、松がずっと続いていた。それが今回流された。野球場を作るために松林はほとんど無くなったが、一部残っていた。防風林として残したものだ。陸上競技場の向こうの方にずっとあった。それが津波で残らず流された。
松林は水を通すから、波が弱まって来る。だから、10㍍で来たものが、二重の松林を通って10㍍の高さのまま工業高校の方まで行くというのは考えられない。今度の津波でも、水は通しても波の力を弱めるから、かえって松林のほうがよかったとも言える。今回は堤防が高くても、波が堤防の裏を堀内の方に走って行った。堀内の堤防の裏側の2階建ての家が全部、跡形も無く流された。普通に考えれば、堤防があるからなにか残るはずだが、全く跡形もない。基礎まで流された。すごい勢いがついていたわけだ。波の力というのは恐ろしい。堤防もやっぱり考えて作らないといけない。実際、今度はそう感じた。

〔奥様〕

私が感じたのは、家の中の水の勢いだ。地震の時ちょうど家にいた。玄関から入って来た水が、他の戸を閉めてあるから行き場を失い、階段を駆け上がって、上から2段目のところまで行った。すごい力だと思った。引き波の時は戸を外してみんな持って行ってしまった。その引き波も一瞬のことだ。一つの水たまりもなく、きれいに水がなくなって、そのかわりに泥やヘドロや浜の茅のようなものが沢山残っていた。洗面所には野球場にあったポリバケツが残されていた。

〔村松さん〕

野球場で山火事用として液体を入れたポリバケツが千個以上あったのだ。それにヘリコプター用の燃料が8本ぐらいあった。
恐いのはガスボンベだった。宮古市全体のガスを供給する大きいガス会社が、赤前に2軒あったから。

〔奥様〕

火事にならなくてよかった。山田町はそのボンベで火事になった。赤前はそれが本当に恵まれていた。

〔村松さん〕

本当に恵まれたと思った。大きなボンベがバーンとぶつかって、よく火が点かなかったと思う。1本火が点いたら終りだ。それで山田の方は大火になったのだ。
ほかでは、海が一面燃えているところもいっぱいあった。ここが火の海になっていたら大変だったが、ガス屋の対応がよかったのだと思う。また、シューシュー音がしているボンベを、消防の人が元栓を閉めて回った。低地はすべて湖状態だからなかなか行けないが、消防の人たちがなんとか行って止めてくださった。家から流れたボンベは栓が開いているからそのままガスを噴いている。各家庭に最低でも1本あるから大変な数にのぼる。あれは本当に不幸中の幸いだったなと思っている。まあ、何かに恵まれたのだ。
赤前では、26人が亡くなった。すべて身元は確認できた。堤防があっ

たから、外海には行かないで多くは工業高校の方に流れていた。
私の家の庭先にも1人が流されていたが、しばらく気が付かないでいた。この人は赤前の人だが、なかなか見つからなかった。身内の人たちは、夕方になると遺体置場を転々と見て歩いたが見付からなかった。その人がここで見つかった。

〔奥様〕

娘の旦那さんと家の庭の片付けをしていたら、何か赤いものが見えて、ちょっと引っ張ったらひょっと手が出てきた。すぐに人を呼んだ。見つけてから2分も経たないうちにお巡りさんが来た。ここに死体がありますと言っているうちに、今度は消防の人がすぐに来てくれた。それが3月27日か28日だったと思う。

〔村松さん〕

家の庭で見つかったのが、赤前の行方不明者の最後だった。その前に1歳4か月になる子供が見つかった。「大変なことだ、お母さんは見つかったが、その子はどこに行ったか」と話していたが、ようやく見つかった。お母さんは工業高校のほうで、その赤ちゃんは一番端の中学校のほうで見つかった。一番大きい波でそこまで持って行かれたようだ。瓦礫を片付けようと思ってブルで畑の方へ入って行った人が、土が乾いたところで赤ちゃんを見つけたという。
最後の発見は、さっき妻が言ったその人。その人の上に、向こうの電柱が倒れてきていた。瓦礫が積み重なった下にいたという。すぐに身元が判明した。
それから家の近くの川に、乗用車が2台はまり込んでいた。車の中に人がいるのではないかと思って消防署の人達を呼んで見てもらった。人はいなかったが、消防の人が車を引っ張り出そうとしてもなかなか出なかった。屋根が潰れるくらいに押されて、2台がぴたっと揃って川に入っていた。ボンネットを壊して、なんとかワイヤーをかけてようやく出した。津波の力は恐ろしいものだと思った。
昔は、赤前下（しも）から上（かみ）まで、ほとんど全部田んぼだった。工業高校の方まで。その昔は海だったのではないかと思う。何年か前の状況は、運動公園のほうに少し家があり、その上の方は山際の道路の近くまでずっと田んぼだった。
最近になって、定年退職をした人たちが、野球場の近くがいいと引っ越して来た。環境もいいし夏場も涼しくて寝やすく、気候も穏やかで広々としたところだと評判がよかった。朝晩は、歩け歩けの人たちが、大勢宮古の方からも来ていた。

〔奥様〕

立派な豪華な家を建てて、10年足らずで津波が来た。津波が来たとしても、もっと若い時に来ていればなんとかなるが、高齢になっているとたいへんだ。子や孫がいっしょにいる人はまだいいが、子供達が就職して遠くに行っていると、跡取りでも帰って来るかどうかわからないから。

〔村松さん〕

仮設にいる人達が高台に家を建てているが、いま家内が言ったとおり、子どもたちが帰って来るか来ないかわからない。退職金で家を建てて、将来は子どもたちが帰って来ることを期待している人もいる。
赤前の高台には20軒くらい家が建つ。本当はもっと建てなくてはならないはずだ。あとは、津軽石の方の集合住宅は、50軒入れるようになっている。赤前からそこに入る予定の人も多い。
20軒の高台の一戸建ては、ほとんど赤前の人だ。将来を考えたとき、借金してまで建てることはないという人は、仮設を出て、宮古の市営アパート、県営アパートに入っている。
昨日、仮設住宅の会長といろいろ話をした。78世帯分建てたが、仮設はもう半分以上出て行った。住宅の規模を縮小して、校庭を生徒に使わせたほうがいいということも話した。それは校長先生の希望でもある。平成28年度から、住宅を縮小して子どもたちにグラウンドを提供したらどうか。そうでないと、6年間、校庭を使わないで卒業する児童が出る。今の4年生5年生はそうだ。6年生は1年使った。校長先生が言うには、「校庭を使わせないで、田んぼを埋めた所で運動会をやって、それで卒業させている」と。

体育の授業も学校の下の田んぼを埋めた所でやる。やっぱり行き来の時間があるから大変だ。6年間校庭でなく田んぼを埋めた所で運動会をやり、体育もちゃんとできないで卒業して行くのはかわいそうだ。前の校長の及川総一朗先生は、3年間貸してくれと言われて、そう約束してここに仮設を建てた経過があると言っていた。私はそれを聞いていると昨日も話した。その校長先生はもう退職している。今の校長先生は、来春は自分も退職だという。3年間だったらなんとかなるだろうというような見込みで、学校側には一生懸命やっていただいたわけだ。

〔奥様〕

ほんとにいい先生方ばかりだった。

〔村松さん〕

避難所でずっと、校長先生も寝起きを一緒にしてくださった。先生方もみんな食事を作るのを手伝って下さったりして、それぞれ家に、1週間くらいは帰らなかったと思う。先生だから、子どもたちを上手に使えるのだ。トイレが使えなかったが、たまたまプールの水があり、それをトイレに使えばと、バケツを全部出して、その水を運ぶのが子どもの仕事で。小学校から中学校の生徒が、トイレの水は全部準備した。その後、校長の及川先生は水沢だったが、家から米を持って来てくださった。

〔奥様〕

ご両親が作られた米を2キロ入りの袋に詰めて持って来て、70何世帯だかの仮設に入っている人たち、次に主に活躍している町内の人たちの所に配ってくれた。私の所にも奥様と2人でずっと来てくださって、何か変ったことがあるかなど、いろいろ聞いてくれたりした。本当にいい環境だった。

〔村松さん〕

本当に。先生方もみんなそうして協力してくださった。津波のときも生徒に事故がなかった。

地震のとき、保育園の園児は2か所に分れていた。津波のとき建て替えた新しい保育園にいたのは、卒業を間近に控えている園児だった。そちらは安泰だから、こちらの漁村地域センターにいた園児の避難をまず考えた。

新築の保育園は、耐震式で建てたばかりだった。それを建てるために漁村地域センターを間借りしていた。まだ完成後の受け渡しは終っていない時だった。新築のほうで年長組が卒園式の練習をやっているところに地震が来た。だから、保育園の主な先生方はそちらにいた。年下の保育園児は、漁村地域センターのバスと職員たちの自動車で小学校に避難させた。年長組はそのまま保育園に残った。学校に避難した子どもたちも最終的には保育園へ行った。

新築の保育園にも水は行ったが、中まで入らなかったから大丈夫だった。道路に上がって来ただけだ。道路は水が上がってくるものだ。道路は水の道路なのだ。山にぶつかった水は遅いが、道路は舗装してあるから水が勢いよく走る。

赤前の災害公営住宅は、14世帯は入れる。ほとんど赤前の人が入っている。最初、満員になったが、他所から来て入っていた若い女の人が、通勤の便が悪いからと途中で出て行ったので、そこが1軒空いている。

野球場の近くに太陽光のソーラーの施設ができた。まず、一旦あそこを作って、次に赤前の宅地があった場所にも作る予定だった。ここの田んぼの方にもどうだろうかと思っていた。また津軽石の、栄通りの辺りにもいま作っている。宮古市は、6万都市の電力はこれでまかなって、余ったものは東北電力に売るのだという。

設置はだいたい終ったと思う。7月いっぱいということだったが、受け渡しがされたかどうか、そこは私もわからない。完成はした。先日人が来て、配電盤もみんな繋いでいったから。その施設は、行ってみると結構広い。あの重茂線から向こうが、堤防までソーラーだから。

重茂線のこっちにも作る予定だが、今のところ、折衝する会社が決っていない。1社だけでなくという考えが宮古市にあるようだ。田老のほうにもソーラーを設置する予定と聞く。

田んぼで米を作っていた農家は、赤前の上と中で何軒もない。トラ

クターも流されたから、震災後は誰も作っていない。田んぼを回復するのは無理ではないか。田んぼの持ち主が草刈りをやるのだが、鉄くずやらいろいろなものが土の中に入っているという。土の入れ替えをしなくては田んぼにならない。

津波で流されて、そのまま広大な場所が残っているのは、田老と赤前だ。だからその跡地をどのように復興するかということは、田老の問題でもあるし、赤前の問題でもある。市としてもなかなか方針は出せないのだろう。

個人の田んぼだし、個人の権限があるから難しい。田を耕している人たちのことは、農協が主体になっている。農協と農業共済組合があって、市ではなんとも言えないところがある。市の方に土地を提供するから、なんとか赤前を発展させてくれと、土地の所有者がそう言ってくれれば宮古市は受けますよということだ。そうでないと、例えば田んぼの権利を持った人たちが10世帯いるとして、9世帯はよくても、あとの1世帯が反対すると大変だ。必ずそういう人が出る。赤前の人たちは、何代も続いてきた自分の土地を手離すことだから、そこは難しい。そういうこともあるから、市でも道路の分だけしか買い上げない。

流された家は、それをどういうふうにするかが悩みの種だ。流された土地には、建てられない。流されたところは、自分の土地であって自分の土地でないようなものだ。何のために買ったのか、わからなくなってしまう。本当に大変だ。

高台の方は、土を盛って家を建てるとなったが、それまで長い仮設生活を強いられ、これも大変だった。

家を建てるのも問題だが、その外にも問題が多くある。私は建設委員に「町づくり検討会」の副会長を頼まれたが、本当に大変だった。赤前全体のことを知っていなくては大変だ。宇都宮拓治さんが会長でやっている。元赤前の分団長を何十年とやった人だから、赤前の事情をご存知な方だ。とにかく、家が建ってもその後の方向性をつけていかなければならない。

ソーラーを作るための土地は市が買い上げた。そして会社との提携を結んだ。次に私達が希望するのは、野球場と陸上競技場の復興だ。宮古市全体で見ても、競技場の場所は赤前しかないということで、ここを復活させると審議会で決定したようだ。平成30年度を目処に、野球場と陸上競技場をもう1回作りなおすことに決まったので私達は喜んだ。

8月30日は、野球場の中で、宮古市全体の防災訓練をやる。これは大掛かりなものだ。県からも応援に来て頂いて、大掛かりに訓練をやるということだ。だから、私達も赤前上防災会として取り組んでいる。赤前の各防災会が町内に設置されているから、そこの会長さんが軸になって、今、訓練に向けて取り組んでいる。

グラウンドは、ほとんど整備ができている。観覧席の椅子は直して使うことができる。田老の球場は全部解体した。別の所に作るようだ。施設を作るなら、ここは気象条件もよい。だからナイターをやってもいい。ナイターの設備は、津波でも倒れなかった。正面だから津波の圧力を受けやすいと思ったが、根がよほど深く入っていたのだ。スタンドなどは波が入って簡単に破壊された。

【宇都宮拓治さんの話

〈平成27年8月28日午後、赤前小学校仮設住宅集会所にて〉**】**

「町づくり検討会」で地区毎の復興と、その後の基本計画を纏めることになった。私が会長を頼まれて、みんなで検討した結果をとりまとめてこの7月に市長に答申した。それが議会でも受理された。その結果、赤前の地域は重茂線の県道を、今ある浜寄りでなく、もっと山寄りに作ることになった。現在は測量もされて、土地の買収も相当進んでいる。平成30年度までの完成を目指している。もう一つは、いままであった防潮堤の嵩上げをするということ。今半分ぐらいできているようだ。今度できる防潮堤と県道の間は、かつて田んぼだったから低いところだ。ここには住宅は建てられない。それで、高台に集団移転の宅地を造成してもらうことになった。

高台は、平成27年の3月に土地が完成して、申し込んだ人たちに売

られた。市が土地を買い上げて作った分譲地で、2か所合わせて26戸、これらは高台移転だ。

それに公営住宅も建った。赤前の上地区の、浜から遠い所に14戸建って、平成26年の10月に入居が始まった。ほとんど赤前に住んでいた方々だ。

野球場の前の旧県道も、そのまま残してもらいたいと要望している。それから平野の奥の工業高校がある方は、今度の区画整理事業では農地としてゆく計画がある。地権者の了解など難しい問題もあるが、宮古市の農林課が主体となって何回も総会を開いている。

野球場と陸上競技場は、最初は海が近くて危険だからもっと高い所に作ろうという話も持ち上がったが、現在あるものを復旧すれば復興予算でできるということのようだ。野球場はそのままにして、野球場と競技場を守るために防波堤だけ設計変更するという。

元々は野球場があって、その西側のほうに陸上競技場もあった。それもまだ整備が済んでいない。その反対の東側は、ヘリポートだったがみな流された。そのヘリポートがあったために、以前は津波が来ないうちは、この辺に山林火災があっても自衛隊のヘリコプターが4機も5機も来て、貯水池から水を汲んで消化した実績もある。ヘリポートは、これまでの場所は危険なので、行政のほうで適当な候補地を選んで作る。

新しい県道は、今の山沿いの道よりもっと下を通る。山の中の避難道路は新規にできる。片側一車線の広い道路だ。万が一津波が来ても避難できるようにするためだ。今度の震災では、重茂に通じる道がなくなり本当に困った。来年の3月までには完成するのではないか。

仮設住宅には、最初は78戸いた。現在は38戸ぐらいか。今年の9月になれば、津軽石の公営住宅や宮古市内の公営住宅も入居できるようになる。それを申し込んでいる方もあるようだ。

大枠でみると、昔、赤前地区に生まれ育って、嫁さんをもらっていた人たちは大半、赤前に残るようだ。また他の地域に住んでいた人たちで、赤前で今回流れた所に来て家を建てた人たちがたくさんいる。土地が安いとか、眺めが良いとか、空気がいいということで、移り住んだ人たちだが、その方々は赤前にはいられないということで、半分以上は出て行くのではないか。

高台に移るといっても資金で苦労する人もいる。家族に現役の若い人がいればローンを組めるが、高齢だとそれも難しい。公営住宅も保証人がなければ入れないし、5年間だけは減免になるが、それが過ぎれば一般の県営アパート、市営アパートに戻らなければならず、経済的に大変だ。

震災後は、建築費も跳ね上がったから大変だ。例えば震災前に坪単価35万くらいで建っていたものが、いまは60万以上だろう。工務店や建築会社にもっと安くやってくれと言っても、資材が高騰してだめだと言われる。建材も、今度はオリンピックも始まったからそっちばかりに使ってこっちにこないというような風評もある。工事の人たちも、こっちは賃金が安いからオリンピックのほうに行けば高いということで、出稼ぎに行く人もあるという状況だ。

タイミングがよくない。震災よりもオリンピックとは。被災した人たちは、みんな言っている。あんなオリンピック何のために今持ってきたのか。復興が終わってからやればいいではないかと。しかしどうにもならない。東京の人たちはいいのだろう。でも東京も反対はあるだろう。税金でやるのだから。

「町づくり検討会」は、震災後に各地区から人選して作った。会員がここでは20名くらい。その方々が一切やった。行政だの、それから東京の方から専門の人たちが来た。その人達が助言して検討した。宮古市の要請で、各地域で作った。赤前、津軽石とか。津波の後に今後こういう町を作りたいという、その地元の人達の要望を拵える会で、それをやった。役所のほうでは、それは補助の対象になるとかならないとかいろいろあるので、検討会では、多少の変更はあってもそれは任せると、大筋でやればいいということでやっている。役所でもその都度農地なら農地というふうに、関係者を集めて説明しているわけだ。そして了解を得てやっているようだ。一応ある程度の要望は叶ってい

るわけだ。それでも将来的には、話し合わなければならない、もっと細かい事柄もあるわけだ。

高台は、最初から希望をとった。100坪の宅地をほしいか、80坪かという希望をとった。それで申し込んだ。その時はもうすでに役所ではだいたい設計ができていて、何坪・何坪と決まっていたが、我々はわからないから希望をとった。希望の変更もいろいろあった。

私は4年半仮設に住んでいるが、高台を申し込んで土地が決って、今工務店さんにお願いして工事が始まるところだ。早くやってくれといっても、順序があってなかなかそうはゆかない。

最初希望をとって、むこうの高台の場合など、最初30何名とかあって、役所が区画を個人から買収した。そして1年か2年経ったら、いや俺はいらない、公営住宅に入りたいとか、息子が仙台の方にいるからそちらへ行くとか、そういう方が出てきて空き地ができた。それで役所ではそこは造成しないわけだ。

仮設住宅の生活は、すべてが大変だった。高台移転にしろ、公営住宅にしろ、そこに移るまでに年月がかかるということが大変だ。待つのが。もう4年何か月ここにいる。早く何とかやっていただきたいという意見がたくさんあった。銀行から融資を受けられない年齢が迫っているから早くしてほしいとか。最初の予想より遅れてしまっている。最初は2年ぐらいで移れるということだった。仮設にいる人が、自分はあそこの高台に行くのだなと思って見に行くと、工事はやらないで、毎日毎日遺跡ばかり堀っている。そういうことだからいらいらが出る。高台や公営住宅に行く時期が決ると、気持ちが落ち着いて、今はだいぶ和やかになった。

でもやはり津波さえなければという気持ちはある。5、6人集るとその話が出る。津波の前のことを話す。あれもあったのが流されたとか、茶碗も座布団もあったのにとか、何もかもなくなったという話ばかりしている。高台に行けばそれも買わなければならないし、銭はないしと。それでもここの仮設も来年の8月あたりで終りになる。平成28年から30年に撤去ということで、人数が少なくなってきて集約されて、市内が何か所か集約場所として残るようだ。ここは小学校の校庭だから、早く壊すことは覚悟していた。

仮設には、生れてすぐに津波に遭った子や、当時中学生とか高校生だった人もいる。堀内の人も2、3人いる。

被災者は、堤防は何も急いでやることはない、ゆっくりやれ、人が住む場所を先にしてくれと言う。今から津波は500年や1000年は来ないからと。屋敷を持っていればまず堤防と言えるが。

同じ仮設にいて、大変な目に遭って助け合ったから、仲間意識がある。私の知り合いにも公営住宅に行っている人が、仮設の方がよかったなんて言っている。今度は違う人達と一緒だからと、そう言っている。

避難所の生活は、仮設ができるまでのほぼ2か月だった。校長たちの働きかけが良くて仮設住宅が早くできた。県の計画では、敷地の半分は駐車場にするからと、住宅の面積は今の半分だった。それで校長が話して、駐車場を今あるところに借りて、住宅の面積を倍にした。「町づくり検討会」は、仮設に入ってまもなく作られたから、5月中にはできた。4年半を振り返ってみると特別なトラブルもなく、まあまあうまくやってきたと思う。

壁の写真にあるように、青山学院女子短期大学の学生さんたちが来たりした。震災の翌年辺りから3回か4回か来ている。ハンドベルなどを演じる人もいっしょに来て、この集会所で公演もしてくれた。学生達は海が見えていいところだと喜んでいた。

まとめ

赤前・堀内の集落は、宮古湾の南の突き当りという地形上の関係から、大きな津波が来た時には必ず被害を被ってきた。

明治29年の三陸沖地震の時には、死者20人、流失家屋23戸という大きな被害が出た。当時は陸地と海との境は砂地であった。陸地に打ち上げた波の高さは5メートルほどで、その波は平地を480間（870メートルほど）走って、平地東南の山際の集落にまで到り、人と家屋を飲み込んだ。当時は砂地の南の平地のほとんどは田んぼであった。また、砂地と田

んぼとの間の、それ以前の経験から波が来やすいと考えられた部分には松が植えられ、松原となっていた。宮古測候所所蔵の当時の資料には、「松原 今回津浪ニハ大ニ効奏せり 樹木無キ所 植付ハ方今ノ急務ナリ」とあり、この松原が津波の勢力を弱める効果があったことを述べ、それ故に樹木がないところには緊急に松を植えるべきことを提案している。

昭和8年の三陸沖地震の時には、行方不明者1人、流失家屋3戸という被害であった。津波の高さは5・6メートル、浸水は平地のほぼ全域に及んだが、集落が平地の東南に位置していたために、被害は比較的少なくてすんだ。

当時の農林水産局の「三陸地方津浪災害予防調査報告書」は、津浪襲来の方向とその経路について、

「北方ヨリ襲来セル浪ハ赤前部落ノ前面ヲ真直ニ砂浜及松原ヲ超ヘ襲来シ夫等ノ余波（返シ浪）ハ逆ニ磯鶏村金浜及高浜部落を襲ヒタリ」

と記し、津波前の沿岸の設備が津浪災害を防いだ状況については、

「宮古湾奥ノ沿岸ニハ防潮林が植付ケラレテアリシ為メ浪ノ侵入勢力ハ比較的少ナカリシガ防潮林ノ前方砂浜ニアリシ個人製造場及共同製造場及倉庫等ハ破壊セラレ其残骸ハ防潮林ニヨリ喰止メラレタリ従ッテ漁船モ同様ノ運命ニ遭遇セリ」

と記している。

明治29年の報告と同様、昭和8年のこの記録も、松原の防潮林としての機能を高く評価している。明治29年の津浪の後に行なった松の植林が、思わくどおり、昭和8年の津浪の被害を小さくしたという事実を、この記録によって伺うことができる。

また、同報告書は今後の災害予防について次のような提案をしている。

「本部落ハ宮古湾奥部南側ニ位スルヲ以テ津浪ノ主動向ニハ直面セズ余波ヲ蒙る位置ナレ共宅地高位ハ海面ヨリ余リ高カラザルヲ以テ本調査ニテハ栗石入混凝土造リノ防浪堤長二七〇米ヲ築設シ緩衝地区タル津軽石平野ニ津浪ヲ誘導セントス」

この報告書が述べている「津浪ヲ誘導セント」する「緩衝地区タル津軽石平野」とは、今回の津波で大きな被害を被った赤前の平坦部を含む地域であろう。この平坦部は、昭和8年の時点で、そのほとんどが耕地であった。しかしその後、より強固な防波堤の建設と、産業構造の変化とによって、この地域にも工場が作られ、また、近年では宅地化が急速に進みつつある地域となっていた。また、同報告書が高く評価した平坦部の松原は、昭和45年に岩手県で開催された国民体育大会に向けての競技場の建設を契機として、その面積が縮小・消滅していった。松原の縮小と平坦部の宅地化とが、今回の津波の赤前における被害を増大させるひとつの原因となったことは、ある程度推測されるところである。

地震直後、高台にある赤前小学校の体育館が緊急避難所となった。毛布などは、事前の備えとして準備されていた。暖房は最初、反射ストーブが2個ぐらいしか無かったが、近所に協力してくれる家があり、暖房やその他の器具などが持ち込まれた。1か月ほどは全く電気が使えない状況だった。トイレはプールの水を使った。飲み水は山の上の湧き水を使った。皆で助け合って避難生活を送った。学校関係者と近隣の協力が大きかった。

その後、小学校の校庭に仮設住宅が造られ78世帯が入居した。入居者は高齢者が多かったが、仮設住宅では、学校の農地を借りて野菜を作ったり、お茶会を催したりして、皆の気が滅入らないための工夫がなされた。震災から満5年の日が近づいている現在、仮設住宅の入居世帯は半分以下に減少している。しかし、5年の歳月を考えると、この比率は、赤前の仮設でも移住先に関する問題が、ある程度までしか解決されていないという事実を反映しているものである。

この地域の今後の復興を大局的に考えた場合、津波に侵された赤前の広大な平野の部分を、どう有効活用してゆくかが大きな課題となる。昭和8年の三陸沖地震の時も、昭和35年のチリ地震の時も、津波がこの平地を襲って耕地が駄目になったが、その都度住民の自主的な努力で土地改良を行なって耕地を復活した。今回は、津波の規模も大きく、

また土の中に流入している物質も前と違って取り出しが困難なものが多く、容易には耕地に戻せない。そもそもかつての耕地が工場や宅地となっていたところも多い。その原状復帰がどのくらい可能なものかも含めて、未だに、先が見えない状態が続いていると言える。

しかし、以上のような先の問題を多く抱えつつも、赤前・堀内の人々は、協力しあってそれぞれの生活の基盤を、自ら少しずつ取り戻してきている。それは、往年の地震と津波の際に見せた先輩たちの自主回復の精神を、現在のこの地域に住む人たちが確実に受け継いでいるからであろう。

第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第9章　宮古地域の水産業

橋村　修

はじめに

岩手県には184の漁村集落がある。そこには111の漁港があり、うち108か所が倒壊など甚大な被害を受けた。JFグループ岩手県内では、24漁協のうち14漁協が流失、浸水、3つの地区漁連、県漁連の支所も損壊、浸水するなど、事務所、関連施設が機能しない状態になった。漁船では、約1万4千隻のうち残ったのは1割にとどまり、漁具では定置網、刺し網、かご等がほぼ流失して、ワカメ、ホタテ、カキ等の養殖施設はすべて流失した。県水産技術センター、県栽培漁業協会、漁協のアワビ増殖施設等も全壊し、水産加工・冷蔵冷凍・流通関連、給油、運輸等多くの関連施設も壊滅的な被害を受けた。岩手県の農林水産業関係の総被害額は6千633億円、うち水産業関係は総被害の85％を占める5千649億円となった。震災前、岩手県の組合員数は正准あわせて1万4千248人だったが、376人の組合員が死亡、行方不明となり、家屋の全半壊が4千294戸に及んだ。（大井誠治さん談）

1　宮古市における水産関係の被害

宮古は、海産物の宝庫である三陸漁場をひかえ港町として発展を遂げてきた町であり、現在も水産業は重要な基幹産業である。宮古市には18の漁港があり、分港も含めると23港である。このうち、音部・重茂・田老の3漁港が岩手県管理（第2種：漁港の利用範囲が広いもの）であり、宮古市管理（第1種：漁港の利用範囲が地元漁業を主とするもの）の漁港は15である。

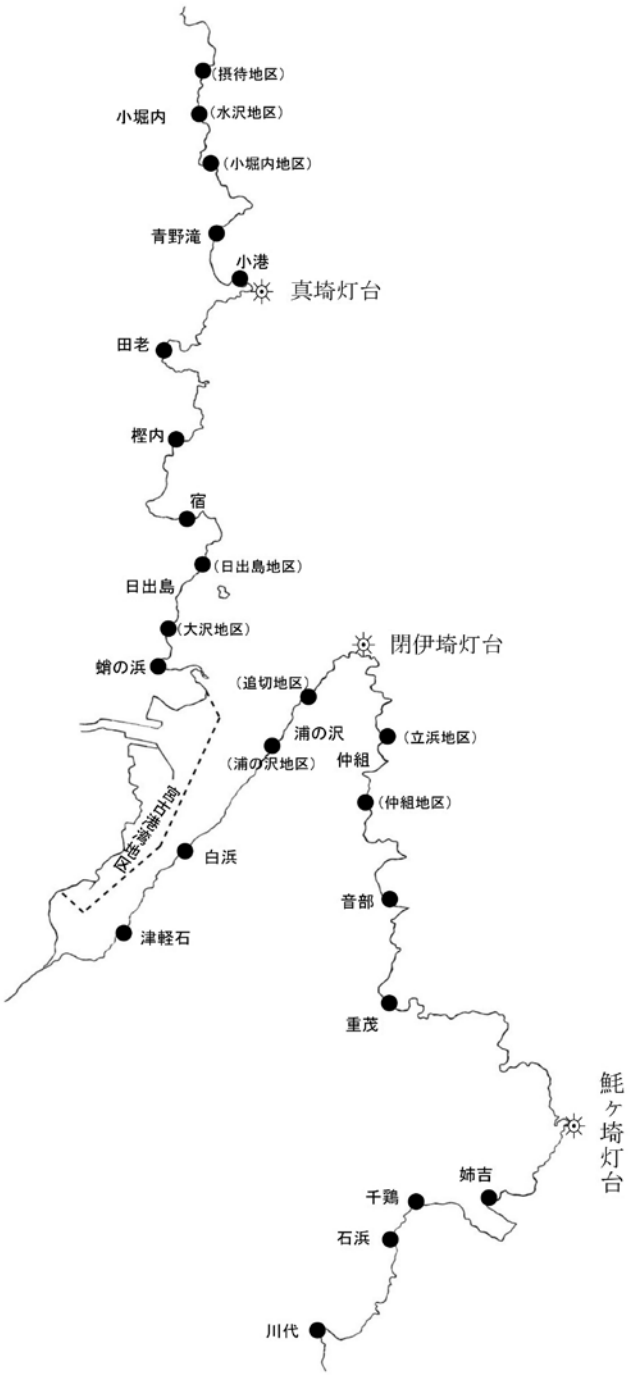


図1　宮古港・漁港位置
出典：宮古市の統計 平成27年版

漁港は漁船の碇泊や水産物の水揚げを行う場だけでなく、養殖ワカメなどの加工施設などを備えた重要な生産基盤である。すべての漁港を短期間に復旧させることは困難であり、漁船や漁場の復旧とバランスをとりながら復興を進めることが求められた。また、魚市場や水産加工業者、流通業者、飲食店など水産業に多くの事業者が関わっていることから、生産から流通加工まで一体的な復興、再生が重要となった。

表１　水産関係の被害　①水産施設

区分	共同施設		非共同施設		地方公共団体施設		小計	
	被害数（箇所）	被害額（千円）	被害数（箇所）	被害額（千円）	被害数（箇所）	被害額（千円）	被害数（箇所）	被害額（千円）
宮古市	0	0	0	0	5	436,546	5	436,546
田老町漁協	37	1,774,396	4	222,667	0	0	41	1,997,063
宮古漁協	425	3,482,069	83	367,822	0	0	508	3,849,891
重茂漁協	62	3,084,614	17	1,118,841	0	0	79	4,203,455
宮古水産加工協	7	558,964	3	10,308	0	0	10	569,272
閉伊川漁協	0	0	0	0	0	0	0	0
計	531	8,900,043	107	1,719,638	5	436,546	643	11,056,227

（宮古市調査：平成23年９月９日現在）

表２　水産関係の被害　②漁船

区分	動力船		無動力船		小計	
	被害数（隻）	被害額（千円）	被害数（隻）	被害額（千円）	被害数（隻）	被害額（千円）
宮古市	0	0	0	0	0	0
田老町漁協	855	868,931	0	0	855	868,931
宮古漁協	1,001	2,110,515	2	31,620	1,003	2,142,135
重茂漁協	756	1,438,970	0	0	756	1,438,970
宮古水産加工協	0	0	0	0	0	0
閉伊川漁協	15	4,500	0	0	15	4,500
計	2,627	4,422,916	2	31,620	2,629	4,454,536

（宮古市調査：平成23年９月９日現在）

表３　水産関係の被害　③養殖施設

区分	わかめ		こんぶ		かき		ほたてがい		ほや		その他		小計	
	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）	被害数（台）	被害額（千円）
宮古市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
田老町漁協	618	359600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	618	359600
宮古漁協	242	29332	215	29807	309	86419	254	114839	19	1900	6	600	1045	262897
重茂漁協	1310	1079497	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1310	1079497
宮古水産加工協	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
閉伊川漁協	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	2,170	1,468,429	215	29,807	309	86,419	254	114,839	19	1,900	6	600	2,973	1,701,994

（宮古市調査：平成23年９月９日現在）

表４　水産関係の被害　④水産物

区分	わかめ		こんぶ		かき		ほたてがい		ほや		その他	小計
	被害数（kg）	被害額（千円）	被害数（kg）	被害額（千円）	被害数（kg）	被害額（千円）	被害数（kg）	被害額（千円）	被害数（kg）	被害額（千円）	被害額（千円）	被害額（千円）
宮古市	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
田老町漁協	2,400,000	300,000	3,000,000	390,000	0	0	0	0	0	0	299,263	989,263
宮古漁協	185,771	24,823	293,225	67,071	115,091	112,595	242,949	76,847	14,407	4,376	790	286,502
重茂漁協	2,000,000	350,000	6,000,000	550,000	0	0	0	0	0	0	161,343	1,061,343
宮古水産加工協	0		0	0	0	0	0	0	0	0	85,000	85,000
閉伊川漁協	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	4,585,771	674,823	9,293,225	1,007,071	115,091	112,595	242,949	76,847	14,407	4,376	546,396	2,422,108

（宮古市調査：平成23年９月９日現在）

表５　共同利用漁船等復旧

単位：千円

区分	総事業費	備考
H23 共同利用漁船等復旧支援対策事業	（完成） 5,595,428	・宮古　新造船 253 隻、中古船 43 隻、定置 12 ヶ統 ・重茂　新造船 439 隻、中古船 109 隻、定置 5 ヶ統 ・田老町　新造船 584 隻、定置 8 ヶ統
H24 共同利用漁船等復旧支援対策事業	（完成） 80,334	・宮古　新造船 43 隻
H25 共同利用漁船等復旧支援対策事業	（完成） 62,014	・宮古　新造船 1 隻 ・重茂　新造船 6 隻、中古船 1 隻 ・田老町　新造船 5 隻、中古船 2 隻
H26 共同利用漁船等復旧支援対策事業	（完成） 20,161	・重茂　新造船 8 隻
	（完成） 142,500	・宮古　新造船 1 隻
計	5,900,437	

（宮古市水産課提供資料：平成27年９月１日現在）

岩手県は、地域に根ざした水産業の再生に向け、両輪である漁業と流通・加工業について、漁協と産地魚市場を核として一体的に推進するとした。宮古漁業協同組合は、運営する宮古市魚市場再開の目標を1か月後の4月11日とし、これを実現した。魚市場に伴う製氷・貯氷施設も平成23年度に復旧している。

漁船の取得（新造・中古購入）は平成25年度までに、宮古漁協が340隻、重茂漁協555隻、田老町漁協591隻となっている。養殖施設の復旧は平成25年度までに、宮古漁協763台・重茂漁協857台・田老町漁協459台が復旧整備された。本市水産業にとって重要な秋鮭漁に欠かせない稚魚のふ化場も各地で被災し稼働できない状況となった。津軽石ふ化場（宮古漁協）、さけ・ます人工ふ化場（重茂漁協）、摂待さけ・ますふ化場（田老町漁協）とも、平成24年3月中に施設が復旧し、その後も飼育池の改修など復興支援事業が進められている。

2　水産業界のリーダーとして

宮古漁協（宮古漁業協同組合）代表理事組合長の**大井誠治さん**（1935年生）は、昭和59（1984）年9月に宮古漁協の理事、平成14（2002）年6月に組合長に就任した。県漁連（岩手県漁業協同組合連合会）の代表理事会長に平成17（2005）年に就任し、以来10年宮古と岩手県の水産業界を切り盛りしている。平成27（2015）年5月1日に宮古漁業協同組合の復興への取り組みについてうかがった。

震災による被害状況と震災後の取り組み

平成23年3月11日の東日本大震災津波により多くの尊い命と漁船をはじめ水産関連施設が一瞬のうちに奪われました。気象庁の津波観測点で記録された宮古市の津波の高さは9・3メートルでしたが、別の調査によると宮古市重茂の姉吉地区では津波の遡上した高さが40・5メートルとの報告がありました。

その日、私は東京に出張中でした。新幹線が全線運転中止となって開通の目途が立たないために、全漁連の公用車を用意していただき、緊急対策車の許可を国土交通省からとり、3日目に帰ってきました。私は地域の水産業のリーダーとして、沿岸地区は電気、水道、電話がストップ、ガソリン不足、道路も瓦礫で車がやっと通行できる状況でしたが、何としても復旧・復興に取り組まなければとの強い決意を胸に行動することにしました。

3月末には岩手県下の漁協組合長を集合させ、復旧・復興の方向について協議し、その後岩手県知事、国会議員、関係省庁に東日本大震災に関する要望を行いました。また、国や県の復興委員会に委員として出席し、漁業者の代表として現場の実情を訴えました。私が常に申し上げてきたポイントが2つございます。この2点は衆議院の委員会でも被災地の参考人として、岩手県の代表として発言しました。

① ひとつ目は、漁業、流通、加工業を一体的に復旧することです。生産と加工は車の両輪であり、双方が一体として復旧・復興しなければ水産業は動きません。早期の漁港の復旧や漁船の手配と同時に、加工・流通業者も同時に支援するように、ということを申し上げてきました。

② 次に、漁業、養殖業には適期がございます。養殖関係で早期着手を実現できる遡及（そきゅう）を実現すること。今までは補助事業がはじまらなければ、補助対象にならないというのがあったが、遡及（そきゅう）を認めるよう訴えてきました。復旧・復興が遅れると漁業者も再建意欲を失ってしまいます。多くの要望を訴えてきましたが、そのためにも、この2点は速やかな復旧・復興のために重要なポイントであると思っています。

宮古漁協の復興への取り組み

ここで私の地元の宮古漁協における具体的取り組みについてお話しします。私は現状を把握して、即行動することが大切と考えました。東京から帰ってきてすぐに、助かった漁船の確認をしました。次に氷の在庫を確認しました。魚市場を機能させるためには、氷です。高台にある田老の製氷工場に（田老字古田、宮古水産加工団地内の宮古漁協冷凍冷蔵庫田老工場が浸水せず、翌年のサンマ用の氷を）800トン

貯氷してあったので、現状の利用で3か月間の供給が可能であることを確認しました。

宮古漁協の全職員に4階の大会議室に集合してもらい、宮古魚市場を震災の1か月後である4月11日に開設する、職員の皆さんには最善の努力をしてもらいたいと、職員に宣言をした。職員から「電気もないのにできるわけがない」と質問が出ました。「電気がなくても今はエンジン付きの発電機があるじゃないか」と言ってすぐ手配させたところ、早い手配だったために灯りやポンプの手配も全部できました。予定どおり魚市場を4月11日に開設し、以来水揚げは順調に進んでおります。魚市場の1か月後の再開により、地域の産業の回転に大きな効果が表れました。市場が機能することによって、漁業者も水揚げをすることができ、冷凍・加工屋さん、流通関係がみな動く状況になりました。市場の開設が復旧のものすごい原動力になったのは確かです。

それから大事な製氷工場ですが、氷がなければ市場は機能しませんので、早速800㌧につなげるようにと思い、出崎埠頭の製氷工場の復旧について建設業者と復旧工事の打ち合わせを行いました。震災5か月後の8月中旬に何とか完成できるとの確約をとり、早速工事に掛かり、着手が早かったので資材にも苦労しないでできました。8月15日には稼働に入り、現在につながっています。

次に生産と流通、加工の一体的な復旧・復興についてお話をします。これまで話したとおり、魚市場と製氷施設は復旧への道筋はつきましたが、魚を獲る方だけでなく買う方も一緒に復旧することが大事です。私は、魚市場より買い付けした魚を扱う水産加工業者の責任者および社長さん方、約60名に宮古漁協の大会議室に集合していただきました。明日からできる限りの自助努力で復旧にとりかかるよう強い声がけをしました。その時に私は大きなことを言ったのですが、復旧に係る費用の財源は、水産業界の代表者である私が国政および農林水産省財務省等へ陳情・要望して信を願うので、心配しないで作業を始めて下さい、と言いました。実のところ、これは金が出ないと大変だぞと後で思ったのですが、しかしやはりこういう力づくが再建には一番必要だなと感じました。復旧の金がないからやめるという会社が4、5社ありまして、「やめるという言葉は撤回して下さい。金は私が何とかするから、早く工事屋に頼んでください」と言いました。そうしたら何とかいい状況になり、そういった緊急の場での力づけが一番効果があると感じております。以上、3月11日の発生から現在までの取り組みを例に報告させていただきました。いずれも災害の復旧・復興には早急に方向づけを行い、即行動することが良い結果につながっております。

これまでの取り組みをふまえて、私が復旧・復興の対応のポイントとしたことを申し上げます。

まず第1点は、復旧・復興は漁協を核として行う、と主張して実行したこと。漁業協同組合は厳しい状況の中でも力を発揮できる組織です。岩手県においては「漁協を核として」をキーワードに全面的に支援がなされ、その結果、震災から1年目の平成24年にはワカメの約7割の生産ができました。その他の漁業種目においても甚大な被害に比べて比較的早く再開することができました。

2点目ですが、必ず再開するという強い意志を持ち、できることはすぐに行動することです。今日できることは、今日実行することにしております。

3点目ですが、リーダーは速やかに適確な指示を出すことが大事です。予算は私が何とかするからすぐに復旧にとりかかるようにと、できるかどうかわかりませんけれども、こういう姿勢を示すことはリーダーには必要だと感じました。それが言ったとおりにお金も出ました（予算化された）ので安堵しております。

4点目ですが、漁業と流通・加工業を一体的に復旧することです。生産から流通までの一連が水産業であり、片方だけの部門が立ち上がっても水産業は成り立ちません。

5点目ですが、漁港や漁船・漁具の早期復旧です。生産のために必要な漁船・漁具と併せて、安全に係留できる全ての漁港の早期復旧が必要です。

最後となりますが、東日本大震災津波をふまえた防災・減災に必要

な視点についてお伝えしたいと思います。まず1つ目は、防潮堤の整備や水門の遠隔化、自動化についてです。漁業者や漁協職員の多くは地域の消防団員でもあり、今回の震災においては、水門の閉鎖、避難誘導にあたり犠牲となった人たちがおります。漁村で生活する住民の安全を守る防潮堤の整備はもとより、水門等の遠隔化・自動化についても早期に進めていく必要があると考えています。

2つ目ですが、漁港施設における地震津波対策です。防潮堤や岸壁が倒壊し、漁業再開の支障となったことは事実です。これまでの波浪に対応した施設整備だけでなく、地震津波に対しても割れにくいなどの強化が必要だと考えています。

3つ目ですが、漁港からの避難も含めた避難計画の策定です。防潮堤の復旧、整備やまちづくり事業により安全の確保が図られますが、海を生業の場とする水産業従事者は常に津波の脅威と隣り合わせの状況にあります。そのため漁港からの避難という視点でのソフトやハードの取り組みが必要となります。

最後に4つ目です。地域に根ざした津波防災教育等による防災文化の醸成と継承についてです。今回の大震災津波の経験や教訓を後世に語り継ぐためには、再び津波により人が亡くなることのない、より安全で暮らしやすい地域を作り上げていくための防災意識の向上や避難行動を促す取り組みを防災文化として醸成し継承していくことが重要であると考えます。岩手県では過去に津波が幾度となく来襲している津波常襲地帯であるにも関わらず、今回の津波で多くの犠牲者を出しました。同じ悲劇を繰り返さないためにも、改めて防災文化の重要性を思いかえしたい。今後の防災・減災に対する視点として最も重要視すべき点と思っています。

最後になりますが、多くの皆さまからの数多くの励ましやご支援により本県水産業は着実に復興への歩みを進めております。これまでのご支援に感謝申し上げますと同時に、必ずや復興することをお約束いたしまして、私の話を終わらせていただきます。

水産業の振興

パネルディスカッションでコメント、質問を受けた。漁業者から見て1日も早い水産業の復興という観点から行政側に考えてほしい重要な観点について、大井さんから発言をお願いしますと言われた。

漁船、養殖施設や漁港などの生産基盤は、着実に復興していると感じていますが、まちづくりが遅れているので、防潮堤の整備とあわせて住む所を整備してやってほしい。

それから今回の津波で感じたことは、漁業を再開させるためには、まずガレキを撤去して、すぐに部分的にでも漁港を使えるようにしてやること。

市場を再開するためには、市場前の岸壁が壊れないことも大切ですが、市場前の防潮堤も倒れないようしてほしい。ここ（鍬ヶ崎）の場合は、龍神崎のくの字の防潮堤が倒れました。これがなければ低気圧・台風が来れば岸壁に水が上がりますから、市場の開設にはこれが先だなと思った。第二港湾の所長さんに直々にここ（龍神崎防潮堤）を早くやってくれと言った。普段、港湾の整備はケーソンを1年に3貫か4貫造るような予算だけど、藤原埠頭でケーソンを造りはじめた。18貫を一時間（いっときま）にそなえつけたために、1か月で魚市場を開設することができた。今はいい漁港になっています。

市場・漁港で働いている人をいかに避難させるかが大事です。市場には地元でない人も集まりますので、高台へ向かう避難施設を整備してほしいと思っています。さらに岩手県はアワビの生産量日本一を誇る地区です。水産資源の回復に向け、アワビ・ウニの被災した増殖場の機能回復や新たな施設の整備を進めてほしいと唱えてきました。

最後に我々水産業界の意向を汲み取っていただき、「漁協を核に」という方針のもとに共同利用船や漁港整備などの各事業をスムーズに実施していただくなど、国をはじめ県、市町村との連携がうまく機能して一体となったことが早期の実現につながったと感じています。

第1部　各地域における東日本大震災

C　重茂地域

岸　昌一

はじめに

平成23（２０１１）年3月11日に発生した「東日本大震災」の発生は、多くの人命と資産を失った。その受け止め方と被災の状態は地域全体としても、同じ地域であっても一人ひとり大きく異っている。

重茂地区は震災直後、橋の崩落・道の決壊によって陸の孤島となった集落の救済と被災集落との連絡、瓦礫となった港と漁業施設の調査等が緊急の課題として目の前にせまっていた。更に漁業復興に向けて立ち上がる漁協と組合員の焦りと苦悩、その果てに「奇跡の復興」として多くの地域や人々の話の端にのぼる漁協と重茂地域の人々に関心が集まった。しかし重茂地区の人々にとっては、それが奇跡と呼ばれようと、何と呼ばれようと、彼等にとっては、それは勲章でも何でもない。ただどうしても海に出て仕事がしたい、若い人を地域から失いたくない、という思いの一途さだったように思う。重茂の地域を守るために必死だったのだ。その必死さを漁協・組合員はどう共有していったのか。その上に復旧なり復興なりの成果を見ることができたと思う。本調査は、その経過を辿ってみた。

重茂地区の概況

「重茂半島」の呼称は近代になってから一般的に使用されてきたもので、通常は湾口の岬を「閉伊崎」と呼ばれることから、現在でも「閉伊崎」は半島全体を表わしている。「閉伊」の呼称は中世期に、当地方を領地した「閉伊氏」に由来するものと言われ、また古名称「閇崎（へ）」（「続日本書紀」霊亀元（７１５）年「須賀の君古麻比留等、郡家（収税倉庫）の建設を願う」にはじまる「閇村」）に由来するといわれる。この呼称は近世期まで使用された。そして、岬の形が神棚や神社に奉納する御幣に似ていることから「幣（へい）」崎とも呼ばれた。

ここでは宮古湾内に面した月山（４７９メートル）を中心にして、その周辺地域全体を表す場合「半島」の名称を使用し、月山山頂から十二神山を繋ぐ稜線の東側を「重茂地域」、西側を「宮古地域」とする。月山の東側は殆ど重茂村であるが、西側、つまり宮古湾側には、閉伊崎の近くの「浦の沢」は重茂村に属し、月山の登り口に位置する「白浜」は湾の対岸「磯鶏村」に属し、「堀内集落」は湾奥に位置する「赤前地区」に属していた。昭和30年市町村合併により漁協の名称も宮古漁業協同組合・重茂漁業協同組合に名称変更し、白浜集落・堀内集落は宮古漁業協同組合に編入された。

本稿では重茂半島の東側、旧重茂村を対象とした。

重茂地区の地勢

重茂半島の総面積は７００平方キロメートルで、その大部分は山林に覆われ、50キロメートル近い海岸線はリアス式海岸で、宮古を中心に北は隆起海岸段丘、南は沈降海岸である。重茂半島はその隆起海岸段丘の南限に位置し、岩場の連続の中にヒダのように入江が入り込み、天然の良港には恵まれないが、各入江には14の港が開かれている。地先は海藻類など磯漁業の宝庫で、現在でも大部分の住民はこの海からの収穫を元に生計を立てている。

かつては「現代以前の重茂は、産物の販路開拓も難しく、収穫した海産物と狭い農地からの収穫物で自給自足生活ではなかったか」といわれていたが、現在の水産加工技術の進歩により販路が拡大し、地域経済に大きな変革をもたらした。

半島内には平地が少なく、かつ植物の生育時期に「ヤマセ」といわれる冷たい東風が直接入り、農業での生活は困難な地域である。わずかな土地で陸稲・粟・稗を栽培し、地域面積の大部分を占める山林を利用した薪炭生産と、沿岸漁業で食糧を確保する「自給自足的生活が養殖栽培を行うまでの姿であった」と地元住民はいう。

半島に続く海岸線のほぼ中心にある舘地区に重茂漁業協同組合・市役所の重茂出張所・半島唯一の交通機関であるバス会社の営業所があ

り、舘と隣の里、音部地域を併せて重茂の中心地を形成している。村落は、半島の最北端閉伊崎から南は隣の山田町と境を接する川代地区まで、広い範囲の海岸線に点在している。

重茂地区には宮古市役所の出張所があり、ここは「死亡届」と「出生届」を出す所で、他は漁協で用が足りると言う程、漁協は地元に密着した諸相談の窓口であり、金融機関でもある。漁協の機能なくして重茂の生活は成り立たない。

明治38年2月に姉吉集落の東端、鮭ヶ崎に灯台が建設された。海洋を広く見渡せる場所故に、海洋交通を守護する場所となった。

交通状況

昭和29年11月、バス便が開通するまでは、通常の交通手段としては、閉伊川河口愛宕地区から「白浜丸」という便船があり、愛宕を出た船は閉伊川河口を横断し、重茂半島の宮古湾側の閉伊崎に近い「浦の沢集落」を経由して「白浜集落」に着いた。この「白浜丸」もバス輸送ができてから乗客が少なくなり廃止となった。

陸路は、陸中沿岸を走る国道45号線を宮古から南下し、津軽石川に架かる稲荷橋を東に折れると「県道41号線」のバス路線に入る。宮古駅からの所要時間は、

宮古駅から重茂里まで1時間強

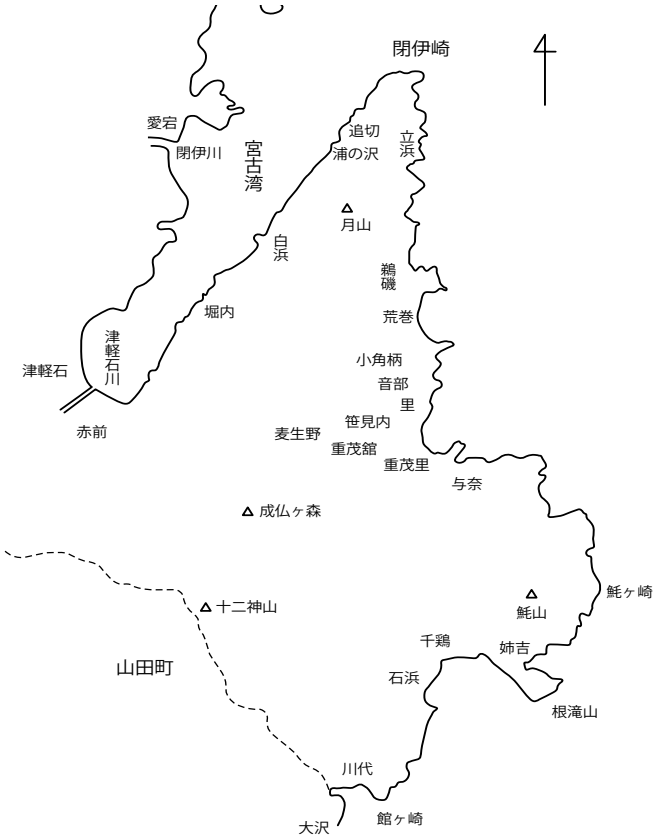
同　姉吉迄　1時間15分弱

同　千鶏迄　1時間20分弱

同　石浜迄　1時間25分　の山道道路となる。

今回の「3・11東日本大震災」で、重茂里の重茂川に架かる橋が落ち、川代から山田町大沢に至る山道が決壊したことにより、バス運行も不能となり、重茂里から南の地域が完全に孤立化した。そのことが情報伝達や作業上また人命救助に関わる障害となった。それ故、重茂の人々の願いは、安全に交通出来る道路建設である。それ故に現在交通の安全と交通時間短縮のためトンネルで連絡できる道路建設が進んでいる。

図１　重茂半島



第1章　重茂地区の概要

村勢と地域の構成

明治期の重茂村の村勢はつぎのようになっている。

岩手県管轄地誌　明治一三年調査（盛岡市蔵）

陸中国閉伊郡**重茂村**

本村は古より本郡に属し、元禄二年津軽石村の飛地乙部村（音部村）を合して一村となり、文政年中分って両村（重茂村・音部村）となる

（中略）

字地　西大舘　舘　大浜　上ノ沢　長洞　里　袰鞍口　大平　姉石（姉吉）千鶏上野　上野　殿畑　千鶏川向　神祠　石浜　天狗鼻　石鼻川向　南大野　石浜日影　川代　川代赤坂　向ケ沢　荒巻　小平　鵜磯　堺神　千速（千束）　戸野崎　追切

（中略）

戸数　本籍一七一戸　社三戸　総計一七四戸

人数　男　四四九人　女　四九九人　総計　九四八人
牛馬　牛二九三頭　馬一九頭
舟　漁船五八艘
（中略）
物産　馬　牛　鮑　赤魚　鯣　米　大豆　大麦　小麦　粟　稗　蕎麦
麻糸　藍

陸中国閉伊郡**音部村**

本村は古より本郡に属し津軽石村の飛地にして、小浜口と称し、又乙部と改む、元禄二年重茂村に属し、文政年中分って両村となり本称の字を用う
（中略）
字地　谷地頭　赤根浜　追磯　シカ長根　砂森　上田　坂ノ上　坂後釜　沢ノ上　横道
（中略）
戸数　本籍　四九戸　社一戸　総計五〇戸
人数　男　一四七人　女　一四二人　総計　二八九人
牛馬　牛三二頭　馬一五頭
舟　漁船九艘
（中略）
物産　馬　牛　赤魚　乾鮑　乾鯣　大麦　小麦　大豆　粟　稗
蕎麦　布海苔　塩　麻糸

岩手県漁民戸口取調表　明治一三年一〇月調（岩手県資料）

東閉伊郡**重茂村**
専業戸数　二五戸　人員　一六一人　男　七八人　女八三人
兼業戸数一五〇戸　人員　八四七人　男四〇四人　女四四三人

東閉伊郡**音部村**
専業戸数　一六戸　人員　一二〇人　男　五七人　女六三人
兼業戸数　三三戸　人員　一八七人　男　一〇一人　女八六人

明治一七年漁船数調（岩手県資料）

重茂　小漁船　六四艘
音部　網船　二艘　小漁船　二三艘

明治一七年沿岸漁民戸口数（岩手県資料）

重茂村　一五二戸　人数　一五五人　男　一四二人　女　一三人
乙部（音部）村　四〇戸　四九人　四二人　七人

重茂は行政上では、重茂と音部の2つで「重茂」に属している字は、北から追切、仲組、鵜磯、荒巻、小角柄、音部里、笹見内、麦生野、舘里、姉吉、千鶏、石浜、川代の14の集落である。大字音部は、音部里、笹見内、小角柄の3つの集落で、それ以外は大字重茂に属する。

『角川　日本地名大辞典－岩手県－』によれば、音部村は元々重茂の枝村であったが、文政10（1827）年重茂村から分村して成立した。明治22年に一旦は重茂村と音部村は合併し重茂村（戸数223戸、1千344人の人口）となる。昭和30年4月に重茂村は崎山・津軽石・花輪と共に宮古市に合併し、平成の合併によって田老町・新里村・川井村を合併し現在の宮古市を形作っている。

重茂の各集落は、大字重茂、音部の2つだが、重茂漁業協同組合では、4地区に区分している。

荒巻地区から北の**「北地区」**。大字音部の**「音部地区」**。**「重茂地区」**舘・里、中心地は元村である。姉吉から南の山田町界まで**「南地区」**である。この区分は慣習的なものであると同時に、重茂漁業協同組合（以下漁協という）の理事や役員の選出及び組織運営の基礎となる外、小学校の学区編成や、地区単位のスポーツ大会やその他行事の単位として機能している。今回の東日本大震災の復興に当たってはこの4集落の「漁協総代会」と「総代議長」の活躍があり、「事件は現場で起きている」といわれる程素早い現場対応で復興の成果を挙げることができた。

第2章　重茂地区の災害

三陸沿岸地方は津波の常襲地域であり。本州最東端として太平洋に面する重茂半島は直接被害を被る地域である。

記録に残る貞観11（８６９）年の大津波以来、数々の津波被害がこの地を襲った。記憶に新しいものに「明治29年三陸大津波」と「昭和８年大津波」があげられる。「明治29年三陸大津波」はわが国歴史上最大の津波の惨事と言われ、気仙郡から青森県の九戸郡に至る沿岸一帯は死者２万２千５６５人、負傷者６千７７９人、流出家屋６千１５６戸という記録的な大惨事となった。重茂村は、村の人口の約半数に当たる７５０人が死亡、負傷者33人、戸数の約４割が流出した。「昭和８年三陸大津波」の津波では、流失家屋56戸、死者・行方不明者１７５人であった（重茂・千鶏区観音像建立実行委員会編集部会編『大海嘯史』より）。

この２回の大津波のため重茂半島の各地区は大きな人的、経済的被害を受けた。姉吉地区は、２回とも集落の全戸流失、生存者は集落以外にいた2、3名だけで、集落全体が壊滅状態となった。

これらの災害は村落の構成にも影響を及ぼし、海から離れた場所や高台に家屋が作られるようになった。音部の笹見内地区は海岸から離れた高台にあるが、ここは津波以降の音部の人々が移住してできた集落であり、また重茂の舘も、以前は旧家の数戸の戸数があるだけの地区だったが、津波以降高台に家を移転する人々が多く出て、現在の姿になったと言われる。津波以外に地震を原因としない海洋災害もある。例年２月から３月にかけて襲来する通称「台湾坊主」と言われる太平洋低気圧による高浪である。記憶に新しいところでは、養殖昆布・ワカメの処理施設ができた昭和44年、46年、54年、特に55年にはその年３月に完成した音部漁港は壊滅的被害を受け、漁業施設にも大きな損害を受けた。さらに58年８月には台風15号により漁港や養殖施設に多大な被害を受けた。

このように、地震・津波ばかりではなく、気象天候と大きく係わる海の異変は、漁民にとっては生命の危機と経済的被害を伴う災害であった。

明治29年の大津波と昭和８年の津波の様子を資料から見てゆこう。

1　明治29年6月15日　午後8時　三陸地震津波

岩手県管内海嘯被害表

岩手県内

死者１万８千１５８　傷者２千９４３　行方不明不詳

流失家屋４千８０１　倒壊　７２６　浸水１千１７５

船舶流失４千４５３

重茂村

総人口１千４９３　死亡７００　負傷33　総戸数２３６

流失家屋１５９　半壊家屋未詳

重茂村の総人口の約50％に及ぶ人々が亡くなった。

「風俗画報」によると

「字重茂は六〇余の民家を全滅し、二百余名の村民の命を奪い、僅か二〇名の生存にすぎない。又音部は四十二戸の内高台にあった一戸を残すのみ。流亡者二百三人、他村よりの来客四人、生存者僅かに二十三名。その他各部落も又災害を受けない所はなく、一村二百三十二戸の内百六十戸を流失破壊、千五百六人の村民哀れなり。その七百三十三人は津波の犠牲となり、五十一人は重傷を負う。」

であった。

県の被害報告との齟齬はあるが、壊滅的被害であったことは疑いのないところである。

2　昭和8年3月3日　三陸津浪被害（岩手県）

人口統計書による重茂村世帯数と人口は

	世帯数	男	女	計
昭和五年	三三九	一、二五九	一、〇五二	一、三一一名
昭和一〇年	三三四	一、二三一	一、〇七三	二、三〇四名

そして、地震津波による被害は下閉伊郡重茂村被災状況

計	死者37	行方不明者137	負傷者10	計184名
	流失家屋50	全壊6	床上浸水7	計63戸
里	死者16	行方不明31	負傷者8	計55名
	流失家屋27	全壊1	床上浸水4	計32戸
音部	死者6	行方不明7		計13名
	流失家屋2	全壊4	床上浸水1	計7戸
姉吉	死者13	行方不明76	負傷者1	計90名
	流失家屋15			計15戸
千鶏	行方不明者10			計10名
	流失家屋2			計2戸
石浜	行方不明7	負傷者1		計8名
	流失家屋1	全壊1	床上浸水1	計3戸
川代	死者2	行方不明者2		計4名
	流失家屋1			計1戸
荒巻	被災なし			計2戸
鵜磯	流失家屋2			計2名
仲組	行方不明者2			計2名
追切	行方不明者2			計2名
	床上浸水1			計1戸

となり、この年も壊滅的な被害であった。

第3章　「東日本大震災」平成23年3月11日　午後2時46分

突然襲った地震、そして津波の来襲により、沿岸地方はライフラインが遮断され、情報が一時一切途絶えた。

以下では重茂漁業協同組合がたどった東日本大震災とそこからの復旧、復興への道のりを、主に組合の資料を元にたどってゆくことにしたい。

重茂漁業協同組合と「東日本大震災」

「東日本大震災」後、復興に向けて立ち上がった重茂漁協の活動は他の漁業関係者から「奇跡の復興」と言われる程の早い復興と漁業再開であった。どのようにして逸早い復興の緒に着くことができたのか、組合・組合員の意識と動きに何があったのか。その経過を辿ると、一つの決められた流れに沿ったものではなく、漁協と組合員の血のにじむような努力と苦労のなせるワザがあった。

災害の発生時、平成23年3月11日は、平成22年度末、当該年度の収束を見込んでの事業の取りまとめ等を意識しなければならない時期であった。震災発生による被害の取りまとめと、災害からの復旧復興の計画案を策定し、全組合員に復興の指針を示さなければ、若い人達は不安を募らせる。また震災による生活不安を解消する方法を考えなければならない。そうした中で、震災復興の指針と重茂地区の未来を見すえ平成23年4月9日　震災からの復興に向けて「組合員全員協議会」が開催された。

1　組合員全員協議会

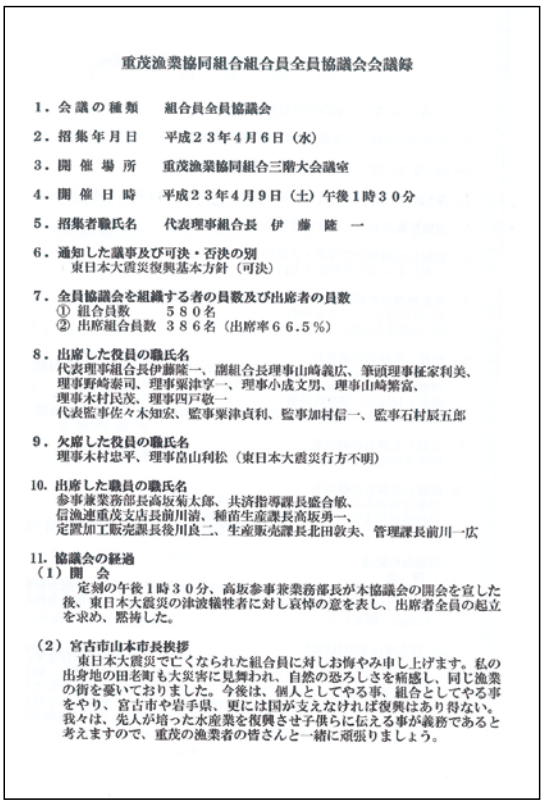
(1)　**重茂漁業協同組合組合員全員協議会会議録**

1　会議の種類　組合員全員協議会
2　招集年月日　平成23年4月6日
3　開催場所　重茂漁業協同組合三階大会議室
4　開催日時　平成23年4月9日（土）午後1時30分
　〈500人位集まった　組合員以外も集まった〉
5　招集者氏名　代表理事組合長　伊藤隆一
6　通知した議事及び可決・否決の別
　東日本大震災復興基本方針（可決）
7　全員協議会を組織する員数及び出席者の員数
　①組合員数　580名
　②出席組合員数　386名（出席率66・5％）
8　出席した役員

9　組合長以下　理事監事12名
　欠席役員
　　理事2名（東日本大震災により行方不明）
10　出席職員
　　7名
11　協議会の経過
(1)　開会
　定刻の午後1時30分、参事の開会宣言後、東日本大震災の津波犠牲者に対し哀悼の意を表し、出席者全員で黙祷した。
(2)　宮古市長挨拶
「ここで頑張らなければ宮古の水産業はダメになる。先人が培ったものを未来の子供達に繋いで行かなければならない。そのために皆さんの協力を得てこの難局を乗り越えてゆきたい。」
(3)　組合長挨拶
「誰もが経験したことがない津波によるこの被害をみんなでどうするのか、ここで漁業をあきらめるのか、重茂の地をあきらめて去るのか。そうでなく、もう一度みんなで協力して重茂の地を取り戻し漁業を再開しようという気持ちになるのか。」

　組合長の話は参加した組合員に対する問いかけから始まり、参加者の確認を得た上で震災の報告、そして復興への具体的提案へと進む。
　この中で、漁協職員の減員に触れ、今後諸書類の作成や関係機関との折衝等、専門的知識と事務処理が要求されることから現員維持、給料半減とした。また、加工部門の作業員さんについては、原料がなく仕事がなくなったことから、休業とする。また建網漁業の漁師さんについては、契約の変更をする旨の報告がなされた。

図２　全員協議会会議録



重茂漁業協同組合組合員全員協議会会議録

1．会議の種類　組合員全員協議会
2．招集年月日　平成２３年４月６日（水）
3．開催場所　重茂漁業協同組合三階大会議室
4．開催日時　平成２３年４月９日（土）午後１時３０分
5．招集者職氏名　代表理事組合長　伊　藤　隆　一
6．通知した議事及び可決・否決の別
　東日本大震災復興基本方針（可決）
7．全員協議会を組織する者の員数及び出席者の員数
　① 組合員数　５８０名
　② 出席組合員数　３８６名（出席率６６.５％）
8．出席した役員の職氏名
代表理事組合長伊藤隆一、副組合長理事山崎義広、筆頭理事椹家利美、
理事野崎泰司、理事栗津享一、理事小成文男、理事山崎繁富、
理事木村民茂、理事四戸敬一
代表監事佐々木知宏、監事栗津貞利、監事加村信一、監事石村辰五郎
9．欠席した役員の職氏名
理事木村忠平、理事畠山利松（東日本大震災行方不明）
10．出席した職員の職氏名
参事兼業務部長高坂菊太郎、共済指導課長盛合敏、
信漁連重茂支店長前川清、種苗生産課長高坂勇一、
定置加工販売課長後川良二、生産販売課長北田敦夫、管理課長前川一広
11．協議会の経過
（1）開　会
　定刻の午後１時３０分、高坂参事兼業務部長が本協議会の開会を宣した後、東日本大震災の津波犠牲者に対し哀悼の意を表し、出席者全員の起立を求め、黙祷した。
（2）宮古市山本市長挨拶
　東日本大震災で亡くなられた組合員に対しお悔やみ申し上げます。私の出身地の田老町も大災害に見舞われ、自然の恐ろしさを痛感し、同じ漁業の街を愛いておりました。今後は、個人としてやる事、組合としてやる事をやり、宮古市や岩手県、更には国が支えなければ復興はあり得ない。我々は、先人が培った水産業を復興させ子供らに伝える事が義務であると考えますので、重茂の漁業者の皆さんと一緒に頑張りましょう。

震災被害

　浜にあった倉庫は上屋からアワビの採苗場・ワカメの苗場等々全滅、残ったのは冷蔵庫だけだった。組合所有の資産財産は大体１５０億の被害となった。
　民家百戸の消失。船は全滅、養殖施設は全滅、少なく見積もっても約１５０億、２００億円に達する。重茂地区で合計約３００億から３５０億円の被害金額になる。

(2)　**組合員全員協議会**

　組合長の説明で会議は進行した。

平成23年3月11日発生・東日本大震災復興基本方針

　重茂漁協存亡の今、この時、組合員一人一人の生活の維持と福祉、更に組織防衛のため、次のことを合い言葉に一致団結しましょう。

記

１　仲間意識

１　相互扶助

　このスローガンは岩手県漁業組合連合会提唱の

1　互譲の精神
1　互恵の精神
1　自らの努力

組合の理念である。これは組合の印刷物には必ず表紙に掲載される。

・組合員の漁業経営のための施策について
①漁船（船外機）の共同利用施設
②養殖施設（桁ロープを含む）の共同利用施設
③漁業権漁業の共同経営

この3項目について重点的に説明・解説が行われた。その計画策定の基本は、被災した組合員の生活費をどう支援することができるかにあった。重要なことは漁船や養殖施設の保険金から組合員の手元にどれだけ生活費として残してやれるか、その算段だった。

・漁協事業について
①自営定置4ヶ統の建込み
②昆布採苗場の取得
③ボイル施設の取得（仮設）

1　サッパ船の共同利用施設（船外機船）

（船の大きさ、金額は違っても考え方は同じ）
①希望者全員に1隻行きわたるまで
・新規取得　100万円（18尺、30馬力）
・請取漁船保険　40万円（18尺、30馬力）
・差引手出金　60万円
・共同施設利用料の計算
受取漁船保険金40万円の25％（10万円）を漁協へ入金する。手に残る現金は30万円となる。新規取得費100万円から、受取漁船保険金の25％相当の10万円を差引くと残金90万円となる。
今後、水揚代金の10％相当額ずつ90万円になるまで漁協へ支払う。
以上、当面は、100万円の船が10万円で手に入り、漁船保険金40万円の内、手元に30万円残ることになる。
②水揚げ代金から天引き開始を平成25年度から予定とする。
③サッパ船取得の為、借金する必要がない。

「概略、以上の様な計画でどうか、御審議願いたい。」という。こういう説明に「概略という言葉」が不似合いな程具体的にして細密な説明であった。

2　養殖施設の共同利用施設

(1)　2千㍍を基準として
①受取共済金
15億円÷42万㍍×2千㍍＝約700万円
②新規施設費（桁ロープまで）
12億円÷42万㍍×2千㍍＝約570万円
③利用料として共済金700万円－140万円＝560万円を手元へ現金
④利用料は、570万円－140万円＝430万円を支払いすることになる。
年間のわかめ、こんぶの水揚げが600万円とすると、これの10％の60万円を利用料として7年間の払い見込みとなる。
⑤自分で買うのは、浮子やこんぶ用のロープ等少額で済む。
⑥水揚代金からの天引き開始を平成25年度産わかめから予定する。
※上記の受取共済金や新規施設費は、試算である。

3　共同漁業権行使

(1)　共同漁業権行使は、関係組合との協議を要するが、
①わかめ、こんぶについては、当組合の判断で口開けすることに努める。

②うにについては、油の匂い等を確認し乍ら関係組合と協議する。
③１０９号（専属）漁業は、全種目単独口開けの方針で、宮古漁協と調整を図る。
④出漁（操業）は１世帯１名（正、准共）とし、１隻に数世帯の乗組みとする。（共同操業）
⑦売上の配分は、陸廻り従事者や諸経費等もあることから、地区毎に協議決定することとする。
⑥**共販以外に販売した場合、全ての漁業に出漁（操業）禁止する。**
⑧**自家用とする場合は、その地区の総意によること。**
（この番号と順序は原文のままである）

この２項は「共同漁業である」を原則とした以上、その出荷を一つにしないと全体の規制が崩れてしまい、共同漁業それ自体が崩れてしまう。いつまで続くか判らない共同漁業の危うさを露呈してしまい、制度そのものが破綻する。それを危惧したものだろうし、規制は「組合員の誓い」５箇条の原則にマッチする。

(2)　その他
①タコカゴ、磯刺網、磯建網については、その地区毎の希望者の複数組合世帯の共同経営とする。（既に徴収の行使料は、返戻する。）
②あわび漁業については、後日、定める。

全員協議会で了解を得て、組合執行部は、震災後対策本部や地区総代会で話し合った流失漁船の捜索と中古船の購入に専念した。「海があっても漁船がなかったらどうにもならん、漁師は船に乗らねば元気が出ネー」という如く、日本海から北海道まで元気の素である漁船を求めて飛び回った。中古船買い取りに当たっては、漁協青年部と老練な組合幹部の協力関係が成功の源となった。

この立ち上がりの早さと、老若組合員の協力関係が、重茂漁協復活の大きなポイントになった。

そして、平成23年6月29日「平成23年度通常総会」が開催された。

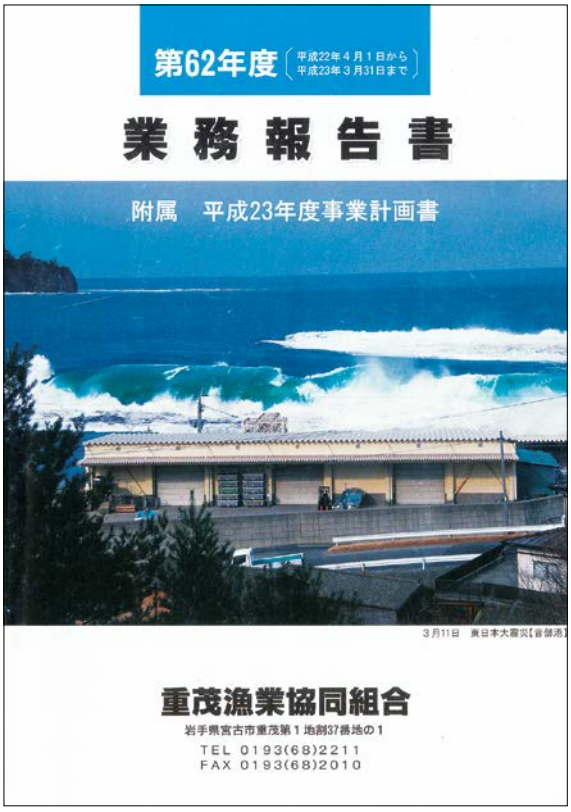


写真１　平成 23 年６月 29 日（震災後３か月後）
平成 23 年度通常総会資料

２　平成23年度重茂漁業協同組合通常総会
積小為大（標語）

この標語は、初代重茂漁業協同組合長　西舘善平氏の提唱したもので、重茂漁協の出版物には必ず掲載され、漁協の基本理念となっている。その説明に「大事をなそうとすれば　小さなことを怠らず勤めなければならない　小積もりて大となるからである　例え百万石の米といえども米粒が大きい訳ではない　万町の田も一鍬が元である」。と解説が付いている。これは二宮尊徳の人生訓である。

(1)　**平成22年度事業報告**
以下は総会における事業概況の説明である。

第１　事業概況書
Ⅰ　組合事業活動の概況に関する事項
１　一般的概況

平成22年度における事業概況は、各事業とも順調に推移し、好成績で年度末を迎えようとした矢先の3月11日、午後2時46分に歴史に残る大地震が起こり、およそ30分後に想像を絶する津波が三陸沿岸を襲いました。その被害は死者、行方不明2万3千を越えております。当重茂地区においても、死者、行方不明者が50人にも達する他、生活基盤である家屋や職場を失い、また、漁業関係においては、収穫の始まったばかりの養殖わかめや養殖こんぶの流失と天然資源に甚大な被害を被った他、漁港や漁船、漁具、養殖施設、種苗生産施設、加工工場などあらゆる全ての財産が、壊滅的な被害を受ける大惨事となり、明日への希望を持つことができない状況となりました。

第1回の全体協議会を開催し、当面の対応策について、組合員に示しております。しかし、国の具体的な支援策が示されない中での開催となりましたが、水産物の安定供給という面で、重茂のはたすべき役割は大きいとの認識に立ち、今後、自助努力で出来ることは、しっかりとやりながら、国に対し全面支援を求める他、再生の道筋を見出すため、組合員は勿論、役職員一丸となって復興に向け、取り組んで参りました。

主な事業活動の成果

販売事業　養殖わかめは、大津波で施設が全壊したことで水揚げがなく、数量が計画比49・3％、金額比で48・5％の実績、**養殖こんぶは期間中海水温が低く推移し生産量は増産となり、8千947トンで過去最高となり、金額も計画比114・2％となった。採貝藻漁業のあわびは、数量が計画比71・1％となったが、価格が高騰し金額では計画比106・9％の実績となり、焼きうには、数量が計画比94・5％、金額で計画比98・3％の実績となった。**

天然わかめは、病気が発生し収穫が短期間で終了し、数量、金額とも計画を大きく下回った。天然こんぶは、繁茂状況が良かったことから、数量、金額共に大きく上回った。

事業全体では、総取扱高が計画比88・5％となり19億4千683万円の実績となった。

定置加工販売事業（海藻）　養殖わかめ、養殖こんぶ、天然わかめを買い取り計画を上回る実績で推移したが、「東日本大震災」による被害で大幅な資産の損失を生じた。

定置加工販売事業（魚類）県下全域で秋鮭の水揚げが少なかったことから、大幅な取扱が少なくなり下方修正せざるを得なかった。しかし、冷食工場自体が被害を免れたことから、今回の損失は加工等の包装資材のみとなった。

利用事業

昆布・若布種苗生産を行い、組合員へ供給した。

定置加工販売事業（定置）主要魚種である秋鮭の来遊が極端に少なかったが、価格が高騰し計画を上回った。当該事業の津波被害については、定置船（20隻）の内11隻が修理すれば使用可能で、残る9隻については、4隻が使用できず廃船となり、5隻は今だ発見できず捜索中で、漁網関係については、各漁場とも1替り分が流失被害となった。

さけの特別採捕事業　本年度の親さけ捕獲尾数は1万4千056尾であり、2千029万粒の採卵を行った。稚魚は1千760万尾を飼育し、海中飼育500万尾を含め放流した。

未利用資源海域より、あわび、うに、ホヤを潜水採捕し、販売した。

鮑種苗生産事業本年度の鮑稚貝100万個（30ミリメートル）は計画通り放流した。

事業経過報告

平成22年度、「東日本大震災」発生の前年を中心にした事業の報告である。例年通りの漁業暦に従って運営されて来ていた、年度全体の流れが、年度の最終に懸かる23年3月11日震災により一転して時間の流れが大きく変わってしまう。

6月11日の姉吉平和観音の例祭は明治29年・昭和8年両度に亘る壊滅的被害を受けた姉吉地区に建立された観音様の祭礼で、この観音様は「東日本大震災」により流失破壊されたが、姉吉地区の人家には被

害がなかった。22年6月13日の重茂地区の守り神であり、地域の漁業神である黒崎神社の祭礼も例年通り執行された。

8月1日第5回　漁協製造の物産を提供する物産展が開催されてから5回目となる「重茂味まつり」も各種イベントを加え盛大に開催された。年が替わり、平成23年3月3日姉吉地区の平和観音の台座を修理し、全てが万事喜びに溢れる年度が終わろうとしていた矢先の3月11日、**「東日本大震災」の発生による津波被害甚大、死者・行方不明者50名、全壊家屋88棟、流失漁船760隻**

今迄の世界観がひっくり返る様な事態となる。

3月14日　災害対策本部を設置、支部を4地区に設置

災害復旧の事業が開始されることになる。

(2)　平成23年度事業計画

天恵戒驕

このスローガンは、先の「積小為大」と共に漁協刊行物に標記される標語で、前出と同じ初代組合長　西館善平氏の提唱したもので、当時漁協の悲願だった根滝建網漁場の直営のため根滝漁舎新築記念品に記したものである。つぎように解説が付いている。

「天の恵みに感謝し、驕ることを戒め不慮に備えよ」

岩手県漁連を中心とした漁業団体は、今般の大災害からの再生はゼロからのスタートではなく、マイナスからのスタートと位置づけ、自助努力では到底復興できない状況から、1日も早く本県水産業の円滑な復興が図られるよう国に対し強く要望いたしております。

要望の内容は、以下の通りとなっております。

①復興院（省）の設置等我が国の総力を挙げた復興への取組み。

②漁船・漁具（定置網含む）取得、造船所の復旧への全面支援。

③生産（養殖施設、サケ増殖施設、種苗生産施設等）、魚市場・流通加工・冷蔵施設等の復興に向けた全面支援。

④漁港施設の復興。

写真2　表紙は2011年5月21日、漁船共同利用による震災後初の天然わかめ漁68隻の共同作業

⑤流失した船舶、漁具、ゴミ等（陸・海・増殖河川）の処理、海底調査・清掃等公的費用負担による処理（漁港区域内外対象に）。

⑥金融、保証制度への緊急支援。

⑦漁協事務所（電算システムの構築、サーバーの復旧費等を含む）及び給油等関連施設復旧への全面支援。

⑧漁業者の住宅・倉庫等建設費用の全面支援及び生活、雇用対策等8項目について求めております。

震災直後の年度、大災害を受けて漁協の資産の公表は、全体としてマイナスではなく、やや回復の基調にあり、黒字決算で終了できたことは、手応えも感じたであろうし、予期した不安の解消になったことと思われる。しかし、それを支えたのは、水上げ量の回復がやや見られながら、品薄を見越した売上金の高騰によるものであった。

震災被害状況

①震災被害状況（2012年4月1日現在　重茂の人口1千603人）

人的被害　死者・行方不明者50人（内組合員17人）
　　負傷者　15人
　　合計　65人
住家被害　全壊　88棟
　　半壊　1棟
　　床上浸水　2棟
倉庫　全壊　355棟
　　半壊　6棟
　　床上浸水　10棟

②水産被害状況
水産施設
あわびセンター・加工場・孵化場他約50施設　42億円
漁港施設　県管理2港　市管理8港　全壊
漁船　署属船　814隻　798隻
養殖施設　1千310台（41万メートル）　全壊
水産物等　わかめ・こんぶ・うに・あわび等　約20億円
漁業用資材　漁具・漁網・漁撈設備等　約10億円
（以上は重茂漁協総会資料から）

このように**壊滅状態**にあったのだ。

「東日本大震災」は組合決算では22年度末の決算をして6月の組合総会で報告すべき決算のまとめに入る時期であった。

しかし、わずか20日足らずの間に、総体の決算や事業計画の再検討・事業計画の見直しなど、23年度の総会資料を作成し、23年6月29日「23年度通常総会」を開催している。

その総会資料「業務報告書」事業概況

（表紙は音部漁港に寄せる津波の様子）

1　組合の事業活動の概況に関する事項

1　一般的概況の中　冒頭で

我々といたしましては、国民に対する水産物の安定供給という面で、重茂の果たすべき役割は非常に大きいとの認識に立ち、今後自助努力で出来ることは、しっかりとやりながら、国に対して全面支援を求める他、あらゆる手段を講じ再生の道筋を見出すため、この間、組合員は勿論のこと役職員が一丸となって復興に向け、取り組んで参りました。

そして22年度決算においては、5億8千万円の当期損失金の計上を余儀なくされました。

組合員と職員の復活に向けた熱意と、その情報と司令を総括できる高台に無傷で残った組合事務所。そのいずれが欠けても重茂漁協の奇跡の復興は起こらなかったのである。

3　平成24年度重茂漁業協同組合通常総会

(1)　平成23年度事業報告

第1　事業報告

Ⅰ　組合の事業活動の概況

1　一般的概況

3月11日の「東日本大震災・福島第一原発」によって、東北太平洋沿岸の漁業は、未曽有の被害を被りました。

当漁協管内におきましても、50名もの尊い人命を失う他、被災家屋90世帯、漁船は総数814隻の内16隻を残して798隻が被災、貯蔵施設、作業施設、定置網施設もほぼ全壊、わかめ・こんぶ等の養殖施設は全て流失し、残されたものは、ただ破壊された港と瓦礫だけであり、ゼロどころかマイナスからの出発でありました。

当漁協ではこのような状況のなか、逸早く全員協議会を開催し、当面の復興計画を示し5月には、天然わかめ漁を皮切りに漁業再開に漕ぎ着けることが出来ました。

国や自治体の支援政策が決まらない中、組合員の皆さんが、各方面から集めた漁船50隻の共同利用方式は、多くの組合員が無収入になる危機的状況を乗り切る為の施策でありましたが、相互扶助の基に、協

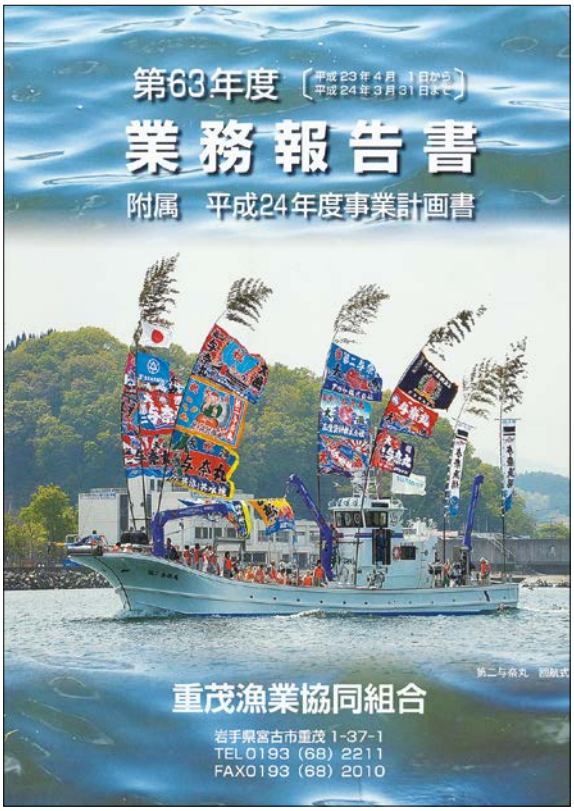


写真３　表紙は新造なった第二与奈丸の回航式
平成24年度の総会資料

同の力を結集出来ましたことは、今後の漁協運営にとって大きな成果を残したものと確信いたしております。

又、漁協の財政基盤に重要な役割を果たして参りました定置漁業の再開は、黒字決算に大きく貢献いたしました。さらに、当漁協の基幹産業である、わかめ、こんぶの養殖も23年度に計画された20万3千800㍍の施設整備が完了し、春いちばんわかめ、そして、3月からは本格的な加工体制も整った他、販売面においても、品薄であったことから価格が高騰しており、収入面では、大きな成果となっております。

今回の大震災では、県下24漁協のうち多くが債務超過に陥る中、当漁協は県下でも最も多い特別損失7億9千万円を計上いたしておりますが、その全額を処分したとしても10億円を上回る純資産額が残ります。未曾有の大震災を被っても、揺るぎない財政基盤を築き上げてきた先人、そして皆さんの努力が実った成果であり、改めて敬意を表する次第であります。

又、23年度の決算につきましても、厳しい漁業情勢の中ではありましたが、事業利益を計上した他、懸案であった繰延税金資産を処理すると共に繰越損失金についても一部解消することが出来ましたことを報告申し上げます。

主な事業活動の成果については、下記のとおりです。

①共済事業

「一時養老共済」等については計画比で114・3％、外共済制度についても計画比を越える％を記録しています。

②購買事業

一般資材、生活資材類の取扱高は計画を大きく上回り、総体で計画高に対し128・6％となりました。

③販売事業

養殖漁業は、東日本大震災の大津波で養殖施設が全壊流失したことで、養殖わかめは数量で計画比57・5％、金額比では84・3％の実績となりました。

採介藻漁業では、あわびについては個数制限を掛けて5回の口開けを行いましたが、数量で計画比104・9％、金額では、計画比169・2％の実績、うに漁については、1回の開口で終了いたしております。天然わかめは、数量で82・8％、金額では計画比80・3％の実績、天然こんぶは、凪日和に恵まれず繁茂状況も悪かったことで数量で計画比36・2％、金額で45・7％の実績となりました。

事業全体では総取扱高計画比114・3％の実績となりました。

④定置加工販売事業（海藻）

計画比86・1％

⑤定置加工販売事業（魚類）

魚類加工施設自体は大震災による加工原料被害は無かったものの、養殖施設が全壊流失したことで、生めかぶと塩蔵こんぶが仕入れ出来なくなった事から、計画比で52・7％の実績となりました。

⑦定置加工販売事業（定置）

夏網の操業については、2か月遅れたものの、思い掛けない銀鮭やサバの大漁で、夏漁としては近年に無い好成績となりましたが、

主要魚種である秋鮭の水揚げについては、昨年に引続き大不漁となりました。ただ辛うじて浜値が高値で推移したことから、総水揚計画比で106・8％の実績となりました。

⑧さけの特別採捕事業

親サケ捕獲尾数は5千441尾であり、98万6千粒の採卵を行いました。

又、稚魚75万尾を飼育中の他、海中飼育200万尾（津軽石ふ化場より、稚魚移入）は、4月中の放流予定です。

⑨鮑、うに畜養事業

宮古水産振興センターと連携し、専属漁場内あわび・うに等生息状況調査を実施致しました。

⑴ あわび

9月調査時より1月漁期後の調査時採集個体数が多くみられ、漁獲対象貝の生息漁も増加しておりましたが、1～2齢貝の出現数が少ない事から、2、3年後の漁獲量の減少が危惧されます。

⑵ うに

9月調査時より1月調査時が漁獲対象個数の減少が見られ、1月調査時の漁獲対象個数は増加している事から、次年度、うに漁獲量については、各漁場によってバラツキが考えられます。

⑩鮑種苗生産事業

あわび種苗生産施設は、補助事業を導入して平成24年度、25年度の2か年で整備の予定となっております。

4　その他組合の事業活動の概況に関する重要な事項

東日本大震災で被災した組合員339名を対象に宮古市共同漁業再生強化委託業務として5月25日から9月24日まで4か月間事業活動しました。

（被災漁民の雇用対策として、国・県・宮古市の助成により、約1年間程瓦礫撤去・施設整備として業務に従事した。）

Ⅱ　組合の運営組織の状況に関する事項

1　総会及び総代会

⑴ 総会

協議会　平成23年4月9日

開催日現在の出席正組合員数	524名
出席正組合員	386名
重要な議事及び議決事項	東日本大震災復興基本方針

通常総会　平成23年6月29日

開催日現在の正組合員数	522名
出席正組合員数	240名
書面	202名
合計	442名
出席准組合員数	5名

と、被災現場からの復興の狼煙（のろし）のように、周辺の人々に明るいニュースとなった。しかし、この結果は組合員・組合職員の苦労の上にあったのだ。

⑵ **震災後の1年**

「東日本大震災」直後の組合の業務日誌というべき22年度業務報告（総会資料）の「事業経過報告」から震災直後の状況から、翌23年度業務報告「事業経過報告」と連続して概略的に見てみたい。

平成22年度

平成23年3月3日　姉吉浜　平和観音追悼慰霊祭実行委員会観音像台座修理（津波により全て流失）

3月11日　東日本大震災による津波被害甚大　死者・行方不明者50名、全壊家屋88棟、流失漁船760隻

3月14日　災害対策本部を設置、地区内4地区に支部を設置

3月21日　田老総合事務所へ重茂漁協から米20キロ100袋の提供あり（田老総合事務所鳥居課長の記録より）

配布先は　グリーンピア　40袋

ふれあい荘　30袋
樫内　10袋
摂待　10袋
和野　10袋

田老地区は瓦礫の処理や、行方不明者の捜索など、自衛隊・警察・消防団員等の活動が続き、避難者に供する米の不足があった。重茂地区は各戸で米の備蓄や救援物資があり、食料には困らなかったという。

3月22日　震災と同寺に設置された災害対策本部と4地区支部の解散

平成23年度

平成23年**4月9日**　**組合員全員協議会**
5月16日　根滝漁場取付
6月12日　黒崎神社参拝（例年この日は「黒崎神社」祭典日で、漁協主催となるが、参拝で終わった）
6月23日　根滝漁場初起し
6月29日　**平成23年度通常総会**
7月18日　重茂「東日本大震災」合同葬儀・慰霊祭
8月22日　重茂地域の高台移転に関する事前説明会
8月23日　与奈漁場初起し
9月9日　平磯漁場初起し
9月19日　舘ヶ崎漁場初起し

平成24年1月5日　重茂漁協新年交賀会
2月1日　漁協青年部通常総会
2月5日　漁協女性部通常総会
2月8日　魚霊祭（元は川代に根滝漁場の番屋があり、そこに鮭慰霊碑があったもので、定置網役員で行っている）、切場勘定
2月14日　志和古稲荷神社定置漁業大漁祈願

3月11日　宮古市「東日本大震災」1周年追悼式

とし、仕事の内容と復旧事業の順調な推進が見られる。災害復旧の事業と平行しながら、漁協の通常業務の進捗と、祭り等を通し、日常への転換を図る目配りも感じられる。

(3)　漁業協同組合の災害に対しての初動体制（伊藤組合長）

地震の時は組合事務所で仕事をしていた。家のことも心配になり、車で海の様子を見る途中家によって家族の安否を確認し、海の見える所に行ってみた。その時津波が見えていた。直ぐ組合事務所に帰り各施設の情報を収集した。幸い高台にある漁協事務所は無傷だったし、職員全員の無事を確認した。職員は各集落から来ているので、電話が通じなくても職員の情報で大変な事態になっていることは確認できた。その時、頭にあったのは、漁業再開だった。そのためには何をしなければならないのか。直ぐしなければならないのは、人命救助と被災者の救済だった。

3月14日に災害対策本部を設置し、重茂地区を4つに分割し総代会を組織しており、総代議長を中心に地域の意見を取りまとめるようにしているが、その4集落に災害対策本部の支部を置いて、現場の意見と対処の方法を考えられるようにした。意見を聞くことも大事なので、それに従って4集落で具体的対応を地域の中でできるようにした。まず急がなければならないのは漁業をすることで、そのために緊急の課題は、漁船の取りまとめだった。瓦礫の処理や行方不明者の捜索作業をしながら、使えそうな漁船や漁具を捜し修理できる物を確保した。修理は自分たちでできるし、材料は市内の資材屋で売っている、その費用は組合から支出することにし、取り敢えず漁船はいくらでも必要なものだから、真剣だった。

今後どうするか、どうすれば海に出ることができ、漁海藻を収穫できるか。そうしなければ若い人達がドンドン漁業から離れ、重茂から出て行ってしまい、重茂がなくなってしまう。その対応が問題だった。取り敢えず手を付け進めなければ何も始まらない。私も漁師だから、

浜の現場で皆に会うことが多く、そのたびに色々と話した。話しながら出漁することが漁師にとって最高の薬だと感じた。

津波によって漁船が殆ど失われたという情報を聞いた時からの考えで、漁船が欲しい。そのことが頭にあり、4地区の総代会に漁船を捜せ、中古でもいい、修理できるものであってもいい、至急捜せと尻を叩いて日本海方面を捜させた。修理できる物は自分たちで修理した。このことが復興の大きな力になった。組合では造船所に新造船を発注し、必要な資材も発注した。（組合長は自分たちで新造船を作ろうとしたのか、造船の材料となる樹脂の大量発注もした。果たして自力で新造船製作ができるかどうか判らないが、熱くなっていることは判った（組合参事談））。

造船所では各被災地からの注文に応じきれず、窓口を一つにして欲しいという要望で、岩手県漁業協同組合連合会がまとめの窓口になった。漁業資材も同じようになった。こうして漁船が集まりだし、5月の天然若布の収穫に間に合った。

被災者は集会所や親戚の家に収容されていたが、集会所の避難者は地域の人がお世話した。被災者といえば、重茂地区の全員が被災者みたいなもので、全員でこの大変な時を乗り切らなければ、組合の本来の姿に戻ることができない、組合員全員の力がなければこの難局を乗り切れない。そのためには全組合員の力が必要だ。だから、被災者・支援者という枠をはずそう、ということで、4月9日の全員協議会の前の3月22日に「災害対策本部」を解散した。解散後は組合で対応できるし、被災した人達が自分たちのことは自分たちで立ち上がる方法をとってほしい。そのための支援は組合で全面的に援助するということにした。とにかく皆で一緒になってやろう、という事であって、切り捨てることでは決してなかった。この発想は組合の基本理念である、自助（自分でまず頑張る）、共助（困った人が居たら皆で支援する）、公助（自分でも出来ない、皆の力でも足りない、その時は組合・市・県・国の援助を要望する）という理念に則（のっと）っている。

重茂漁協の職員は、皆が漁業権を持つ組合員である。組合長はいつでも、漁協職員はサラリーマンになってはいけない。組合員である漁民と同じ目線で仕事をするために、組合員より早く出勤し、組合員より遅く帰れ、と言っていた。それが組合員である漁民を理解することだし、何を考え、何が必要かを知る最短の情報源だ。ある意味では厳しい事なのだが、何のため、誰のためにある機関なのかを考えれば職業人としての最低限の哲学なのかも知れない。

こうした、漁民・組合員との交流の中から、震災後の人口流失を防ぐには、震災後の漁民・組合員には何が必要なのか、彼の結論から生活費の確保、漁船の購入、漁船の共同使用の発想が生まれた。

この発想は3月19日から20日頃にかけて、浜で瓦礫撤去や清掃に励んでいる組合員の方々と話し、その反応を聞きながら、復興の案が作られていったのだ。この提案は全員協議会の前の理事会でも賛意を得、4月9日の全員協議会で全員の賛意を得決定された。

本当は、アワビ・ウニにしても、技術の優れた人と、そうでない人の差が常に出る。その差は直接収入に係わることだから、優れた人にとっては割に合わないことなのだろうが、全員了解してくれた。組合長は「これこそが、重茂の人の結束だし、幾多の災害を乗り切った漁師の力だ。先祖もこれ以上の難題を乗り越えてきたのだから、おれたちにできないことはない」という。この言葉が現実味を帯びて聞こえる程、14か所ある重茂地区内の漁港、養殖施設は見るも無残な海岸の瓦礫として積み上がっており、まさに難問山積の「船出」だった。

5月の天然若布の収穫時までに、60隻の漁船が手に入った。希望者を募りその人数で案分し各港に配分した。1隻当たり3～4世帯になった。幸い好漁で、入札値段もよく、その売上げは全員公平に配分した。不満は出なかった。船がないこと、これから海で仕事ができるだろうか、という不安があったと思うが、これで漁業の先行きに光が見えたのは事実だった。

震災後の情報が集まるにしたがって、その被害が予想以上であることが判明した。災害の発生が年度末であったためか、国の復旧計画が出て来ない。復旧対策の予算は新年度からだという話もあり、当時の

与党幹事長の説明も具体的政策が出て来なかった。その説明会に参加した組合長は、その会場から出て来て、メディアに説明会の様子を問われ「だんくずれにくずれた。漁師をやめろというんならそれでもいい。そこがハッキリしない」といった。重茂地域でよく使う「だんくずれにくずれた」とは、「話にもなにもなんねえことさ」と言った。現場が困っていて、今すぐにも現場に対応した答えを求めているのに、現場の人間にこのような言葉を言わせる。怒りにまかせた言葉だった。これをテレビで見た重茂の組合員は、普段穏健な組合長にあそこまで言わせる。もう自分たちでしなければ、という気持ちになった、という。その後の決断が中古船でもいい、取り敢えず船を集める。でなければ自分たちで造る、という切実な気持ちと反発が、ＦＲＰの漁船の原材料となる樹脂の発注にまでなったのではないか。自由になる資金は組合員の出資金を含め20億円位ある、「もし資金が切れたら」という記者連中の質問に「無くなったら銀行から借りればいい」と言った。政府の対応に対する怒りは逆に組合員を結束させ、おとなしい組合長をあそこまで怒らせた。組合長に「男気」を感じたと、漁民・組合員の復旧に対する気持ちの大きな起爆剤になった。海の暦では、今しなければ、来年収穫の目途が立たないという事情がある。養殖わかめ・こんぶは、特定の時期に種付けしないと、翌年の収穫が得られない。鮭の稚魚・あわびの稚貝も、放流の時期があり、数年後の収穫に大きな漁・不漁となってかえってくる。漁業は働く人たちの都合を待ってはくれない。そうした、漁民のさしせまった時間の焦りがあったのだ。

今にして思えば、重茂の「奇跡の復興」は、政府の現場に対応のできない説明が、かえってその後の組合の反発と発奮になったことは疑いのないところである。

震災から1か月足らずで漁船60隻を集め、震災年5月の天然わかめの収穫にこぎつけ、収穫したわかめは、品薄も影響し高値で取引された。この収穫物は全て組合が買い取り、乗船を希望した人達に均等に配分された。収穫物の脇売り（組合を通さない販売）は厳に禁止され、破った者は以後の漁業権を取り上げ、船に乗ることはできない、という厳しいもので、これも全員協議会で決定された事項だった。共同で生産に携わる以上、それに伴うリスクがなかったら、共同の意味がなくなってしまうのだ。

瓦礫の撤去分別・浜の清掃と働きながら、浜近くにあり被災した旧墓所の墓石の整理、被災して影も形も見えなくなった漁業神の祠の建て替えなど、復興・復旧とはほど遠いような作業も行われた。漁業者にとって浜に安置されている神々の祠は、神様が居る、お祀りする祠がある。それは漁業と深く関わる地域共同体としての意識の集中する場所であり、復興のよりどころであったのかもしれない。墓の整理や建て直しは、お盆に御詣りする場所でしかないかも知れないが、家の継続の象徴でもある。震災後、瓦礫に埋まった浜周辺で、いち早く再建されたのは漁業神の祠と古い墓地だった。

漁協では各集落へ年間の事業補助金が漁協から援助されている。それを積み立てていた中から、今回の「東日本大震災」の津波記念碑を建立した。「地震があったら津波が来る高台に避難して海に近づくな」の標語が中心だ。

彼等にとっては、津波は海の荒れの一つで、海の災害の全てではない。台風・高波、そして遭難など、海と係わる災害は何でもありなのだ。単に地域に限定された災害だけではなく、「東日本大震災」で被災した福島県の原子力発電所では、放射能の漏洩があり、その風評被害は海・山全てに及んだ。また振り返ってみれば、昭和30年代に重茂沖を航行するタンカーが座礁しオイル漏れで苦労したこともあった。海とは水産資源によって地域を潤す場所であると同時に、仕切りのない連続する空間であるだけに、それを汚染する被害は全地球規模におよぶ。

災害は海から来るものばかりではない。山火事の災害もある。

今回の東日本大震災の時、奥さん方は電気釜にスイッチを入れたという。どんな災害であっても、飯を炊くことが反射的にインプットされているのだ。

災害に対処する地域消防団の活動も活発で、高校卒業すると、消防団に入る。ある人は、消防団員として活動してきたが、高齢のため引

退した。しかし港の防波堤の側に家があったので、水門を閉める係として再度団員になって、津波の時には水門は閉めたが、自分の家は流されたという。

支援物資は早い時期に各所から届けられたが、取引のあった企業・団体からのものが多く、重茂だけでは消化しきれず、周辺の漁協に支援として贈った。ガソリン類も普段取引のあった会社がいち早くタンクローリーを廻してくれた。おかげで地域内は不自由することなく、重機や自動車を利用でき、普段の取引の大事さを痛感したという。

組合長は、音部漁港の背後地は住宅建設禁止区域に設定した。津波によって全戸流失という被害があった地域である。非住家地域として今後どのような利用が考えられるか、という問に対し、漁港の中に漁船が多くなり、防波堤の裏側になることから、船泊にしたらいいんではないか、と提案した。これが取り上げられ、県主導で計画決定し、計画看板が防波堤に掲げられた。

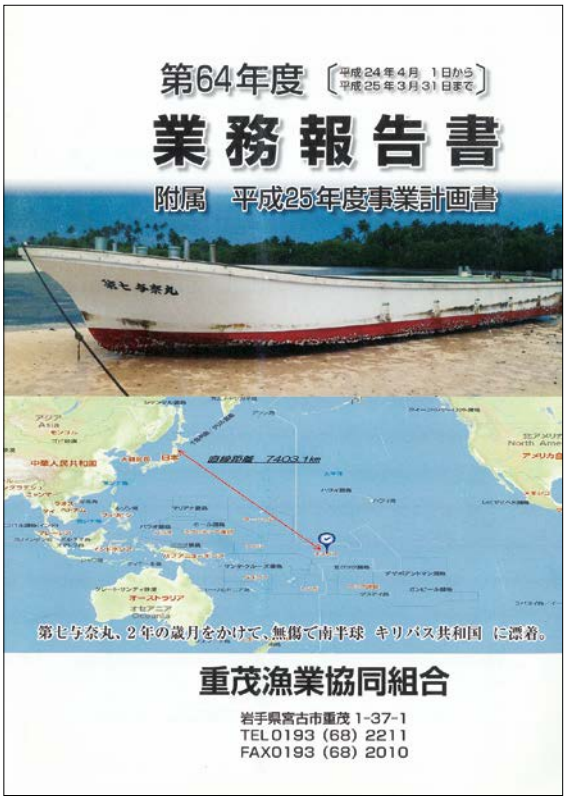


写真４　第七与奈丸キリバス共和国へ漂着
平成25年度総会資料

図３　音部漁港の船泊まり計画図

(4) 主な漁協主催行事

24年6月　＊黒崎神社祭典（第2日曜日）
8月　＊重茂味まつり（第1日曜日）
9月　平和観音追悼慰霊祭
津波犠牲者追悼慰霊祭
12月　ふれあい加工物産フェア（正月を控え重茂地区内の人々相手に正月用食品として組合冷蔵庫等に保管している海産物を安価に提供するもので、外に開かれたイベントではない）
＊いわて鮭まつり
25年1月　魚霊祭、定置切揚勘定

＊　6月　黒崎神社祭典（第2日曜日）

震災の年、黒崎神社の祭典日は、瓦礫の整理やら中古船等の修理等で大変な時期であったが、組合員等が集まり参詣だけで終わった。例年の祭典は大程京一別当立ち会いのもと、漁協主催で宵宮神事、御神楽奉納・直会と賑やかに執行される。翌日の祭典執行は、神社での神事の後、御神輿は黒崎神社の氏子地域である宿漁港から大型漁船に移され、満艦飾の漁船多数に守られ、音部漁港・重茂漁港へと廻り、地域の人々の参拝を受け、漁港の上屋に幕を張り、神楽の「恵比寿舞」が舞われ、その後地域の人々と交流の宴が張られる。その中で地域のこと等が語られ、老若男女語らいの場となる。

＊　8月　重茂味まつり（第1日曜日）

復興キャンペーン謝恩祭「重茂味まつり」

「重茂味まつり」は、重茂漁業組合が外に向かってアピールする数少ない機会である。震災年には6回目を数えるまでになり、重茂漁港で開催されてきた。しかし震災年には重茂漁港が破壊され、行事どころではなかった。その6回目を開催しようと計画され、組合員全員が準備に参加し、例年駐車場に苦労するまでになり、行事として定着した。「味まつり」の開催は、地域以外の人達とふれあう貴重な機会であり、震災時の非日常から、日常へと転化する節目の行事である。

また、今回は漁協としては震災からの復興を公開披露する場となった。翌年は7回目を開催し、4年目の平成27（２０１５）年には9回目を盛会裏に終わっている。

＊　9月　平和観音追悼慰霊祭

重茂舘地区の高台に平和公園があり、戦没者供養碑と津波記念碑がある。重茂地区の国家的あるいは自然災害による異常な死に方をされた方々の慰霊のための公園である。慰霊碑の中央には重茂地区出身者である吉川保正氏作の観音像が安置されている。

＊　12月　いわて鮭まつり

12月第2土日、盛岡市の「もりおか歴史文化館」広場で行われる岩手県漁業協同組合連合会主催の海産物産展で、重茂漁協も参加する。表に向かってアピールできる機会となるが、販売する製品の余裕があってはじめて参加可能となる。

(5) 平成24年度事業計画

第1　基本方針

国際・国内経済と東日本大震災や欧州財政危機の影響、円高の進行による輸出の伸び悩み、等々、災害復旧思考から脱却したような展望のもと、目を遠くに見据えた国際経済推移の分析が見られる。

一方漁業においては、被災した水産関連のインフラ整備が急務となっており、とりわけ生産拠点である漁港・漁場施設や漁船の確保が当面の復興のカギとなります。ＴＰＰ問題をはじめ原油価格の上昇、原発事故による放射能汚染と生活不安や国産の農林水産物に対する風評被害による、消費の落込みと輸出水産物の低迷が復興の足枷となるおそれもあります。漁業においても、主力の秋鮭の回帰率が年々低迷を続けており、平成23年度は過去30年で最も低調となり今後の漁協運営に

与える影響が心配されている処でございます。
　このような問題に対して、未曽有の災害にたいし組合員は、懸命に再起へ歩みを進めており、漁協といたしましても、漁業生産活動に必要な施設の復旧や漁船、漁具、資材等の調達についても全力で取り組み、次代につなぐ道筋を切り拓いていく重要な年であることを認識し、震災後の「新たな潮流」の中で重茂の持つ優位性や潜在力と底力を発揮して参ります。
　ここでは経営上の不安材料を提示しつつも、復興への継続的な歩みを宣言し、水産物の安全な製品の供給を目指すことが基本方針として示された。

第2　事業推進への取組み

　東日本大震災によって、多くの水産資源が壊滅的被害を被っており、この難局を打開することを真剣に考え、復興の一翼を担って行くことが重要であり、重茂漁協の礎を担うことになります。

1　漁業生産復興策

ア　採介藻漁業

①あわび、うに、ナマコ漁については、岩手県や関係機関の協力を得て漁場調査を実施、被害状況と資源量把握し、漁獲調整を図りながら開口します。
　特に、あわび漁については、被災により資源量が減少したこと、当面稚貝の放流もできないことから、漁獲制限と行使の方法を今漁期までに方針を定めて参ります。
　又、うに漁についても、資源量に見合う開口を実施することとし、船も1組合員世帯1隻まで揃っていないことから、共同で乗り組んでの漁とし、1組合員世帯1カゴに制限する。
②あわび種苗生産施設については、早期再建と施設規模の拡大を図り、１５０万個生産体制として平成25年度完成を目指して参ります。又、当面、他県からの稚貝購入も検討します。
③あわび、うに未利用資源の特別採捕を行います。
④うにの移植を積極的に行うとともに、餌の確保と供給を充分に行います。
⑤組織的な密漁取締りには、広域監視と取締機関との協調が不可欠なことから、関係者との協力関係を密にする他、組合員全員が共同で密漁撲滅に努めます。

イ　ナマコ資源増繁殖対策

　ナマコの増繁殖に積極的に取組む為、以下のことを実施、検討します。
①産卵期である夏場を禁漁とします。
②採捕サイズを60㌘以上に規制するとともに、検査体制を整備します。
③県水産振興課及び水産技術センターが行う、増殖技術開発試験に協力します。
・試験の為の禁漁区の設定
・生息調査等の協力

ウ　養殖漁業の復旧対策

①施設復旧については、23年度に補助事業を導入して20万３千８００㌧の整備を行いました。本年度においては、約９万㌧を整備して参ります。
②こんぶの種苗センターについては、８月完成を目指して、本年度より、種苗生産を実施します。

エ　さけ資源増殖事業

　被災した施設復旧に努め23年度事業では管理棟、採卵室、ふ化室、飼育池52面（1千３００万尾）海中飼育施設４基を完成させるとともに、24年度には、飼育池10面（２５０万尾）を完成し、２回転する池を含め1千７００万尾体制の施設を整備して参ります。

オ　小型漁船漁業の振興

①被災漁船の建造に当たっては、補助事業を導入して、漁業者負

担の軽減を図ります。

カ　漁船の確保

漁業の復興には、漁船の確保が喫緊の課題となります。現在、県漁連を窓口に、メーカーや各造船場に新造船を発注しており、早期に整えるよう取り組みます。

2　販売・流通加工対策

ア　販売事業

共同販売体制の堅持と品質の均一化を図り「安全・安心で良品質」の製品作りに努め産地ブランド化を推進します。

①養殖わかめについては、自家加工を奨励して、所得の向上を図ります。

②消費者からの信頼確保の為、全ての取扱製品の放射能検査を奨励して参ります。

＊③当面、受入手数料の減少は避けられないことから、安定した収入源の確保が復興には欠かすことができない重要な課題となることから、共販手数料1％アップの協力を願い、被災漁場の復旧と財政安定を図ります。

④当面生産量の減産が避けられないことから、付加価値の向上に努めます。

⑤湯通しわかめ・こんぶの扱いを推進し、所得の安定を図ります。

＊⑥漁協の共販以外に販売した場合、養殖漁業を含む全ての漁業に出漁禁止とします。

又、違反した場合の制裁については、理事会で決するものとします。

（3～6省略）

7　経営基盤の強化

①生産者（共同販売）全量集荷体制の堅持に努めます。

（②～⑥省略）

⑦復興キャンペーン謝恩祭「重茂味まつり」を企画します。

＊⑧漁業担い手支援事業を活用し、漁業の担い手を育成します。

8　海難及び労働災害の防止

＊①宮古市の防災無線と連動した津波防災体制づくりを進めます。

（②～④省略）

9　漁港及び道路の整備等

①漁港整備計画について

イ　重茂漁港

・護岸工事（物揚場）7月完了予定

・船揚場及び周辺の護岸、臨港道路等の工事については年度内完了予定。

・沖側防波堤工事が予定されています。

ロ　音部漁港

・護岸工事（海側部分の物揚場）6月完了予定。沖側防波堤工事年度内完了予定。

・長期計画では、陸側に掘込みにより新港の建設が予定されています。

ハ　浦の沢漁港

・平成25年度　防波堤、船揚場

・平成26年度　防波堤、臨港道路

・平成27年度　物揚場、用地

ニ　仲組漁港（宿浜）

・23年度　船揚場　平成24年1月12日着工、7月9日完了予定

・24年度　防波堤、船揚場、導流堤　平成24年4月上旬契約予定。

臨港道路については、県と協議中（沈下が進行したため）

ホ　仲組漁港（立浜）

・平成23年度　船揚場　平成23年7月2日着工、10月23日完了。

・平成24年度　防波堤、物揚場、沖防波堤　平成24年6月契約予定。

ヘ　姉吉漁港

・平成24年度　防波堤、物揚場、臨港道路　平成24年9月契約予定。

ト　千鶏漁港
・平成23年度　物揚場　平成23年12月29日着工、平成24年6月22日完了予定。
・平成24年度　一括発注し、平成24年6月で複数年契約の予定。
（防波堤、物揚場、岸壁、道路）
チ　石浜漁港
・平成23年度　物揚場　平成23年12月17日着工、平成24年5月27日完了予定。
・平成24年度　防波堤　4月上旬契約予定。
リ　川代漁港
・平成24年度　防波堤、物揚場　平成24年6月契約予定。

②道路整備計画
イ　主要地方道路重茂半島線の堀内から白浜間2・4キロメートルの内、堀内から900メートルは災害復旧事業で本年度工事予定、残る1・5キロメートルについても内800メートルについては、用地買収が終わっており、本年度中に工事発注予定であるが、白浜寄りの700メートルが魚付保安林の為、現時点では未解決となっている。その他、被災箇所については、年度内を目途に復旧工事を進める予定となっています。
ロ　市道については、災害復旧工事（道路16か所、河川6か所）の他、上ノ沢線道路改良工事が予定となっています。

施設の復旧・復興スケジュール
共同利用小型漁船　動力船426隻　24年度内完了予定
共同利用漁船（新造漁船・中古船修繕分）
動力漁船　5隻（総トン数87・1トン）
中古修繕　109隻（総トン数67・4トン）24年度中完了予定

この平成24年度事業計画を見ると、以下のように例年の内容と若干異なる内容がいくつかあった。

＊当面、受入手数料の減少は避けられないことから、安定した収入源の確保が復興には欠かすことが出来ない重要な課題となることから、共販手数料1％アップの協力を願い、被災漁場の復旧と財政安定を図ります。

これは全員協議会でも、提示されなかった内容なのだが、震災直後の天然ワカメの収穫を始め、建網の建て込み等、諸々が順調に推移する中で、製品の製造にある程度見込みができた事により組合保留金の欠損を補う余裕ありと認めたことによるものだろうか。また漁船共同使用の解除があったためだろうか。復旧後の健全財政への布石ともとれる内容である。

＊違反した場合の制裁については、理事会で決するものとします。

この件は、漁船の共同使用による収穫金の平等分配と平行し決定した、脇売り・闇売りの罰則規定であるが、当初は組合で行うべき当然の制裁規程を理事会に委譲した形になる。必ずしも緩和したことにはならないが、個人の事情等を勘案してということなのだろうか。漁船共同使用解除による販売体制の弛みを是正するためのものだろうか。また、収穫物の総量確保の目途が付いたことによるものか。

＊漁業担い手支援事業を活用し、漁業の担い手を育成します。

今回の震災によって、組合長が一番心配したのが後継者離れだった。若い人がいなくなれば重茂の漁業は成り立たなくなる。この思いは復興の早期解決の眼目だった。後継者離れを防ぐために、重茂漁協の「奇跡の復興」があったといっても過言ではないし、多くの漁協も同じ決意であったはずなのだ。しかし、重茂は特殊事情を抱えていた。他の漁協は、交通的にも有利な条件がある。しかし、重茂は兼業の業種が少なく、交通も不便である。だから、専業漁家が多い。一度重茂を離れると「若い者は帰ってこない」という焦りが組合長にはあった。そのため

の機械化による省力化でもあったし、個々組合員の年収の増加を計る組合の目標でもあった。そのための支援事業を行うというもので、組合の下部組織である青年部・女性部との共同参画事業の展開ということになるのだろう。実を結んでほしい事業であるし、高齢者を巻き込んだ事業であってほしい。

＊宮古市の防災無線と連動した津波防災体制づくりを進めます。

震災と同時に電源が切れ、防災広報システムが機能しなかった、という話を市内の随所で聞かされた。市街地から数少ないアクセス道路しかもたない重茂地区は、更に悲惨だった。赤前からの宮古湾を迂回する道は遮断され、重茂里の重茂川に架かる橋が落ち、山田側から迂回する道路も決壊し、重茂の南側の、川代・石浜・千鶏・姉吉の集落が孤立した。震災時集落の消防団員は、「連絡が全く取れず、死なせなくてよい人を殺してしまった」と歎き、悲痛な面持ちで語ってくれた人もいた。そして「こうなることは地元民はわかっており、何度もその対応をお願いしてきたが、それができなかった」と言葉を繋ぐ。いつ来るかわからない災害だからこそ、普段の検証が必要なのだ。そうした意見に対して、組合独自の運動として進めるということであり、緊急を要する課題なのだ。

4　復興へのみちのり

震災から2年後の平成25年度、復興への道筋が見えたことなのか、漁業再開への目処が立った故か、組合員全員に『復興へのみちのり』と題する冊子が配られた。「東日本大震災」以前の重茂地域の概況と、震災被害状況、そして細部の報告がなされた。それらは淡々と客観的なデータとして、写真と共に37頁を埋めている。

組合員の苦労、組合職員の苦労を現場で見てきた者にとって、その報告書は輝いて見えた。

第七与奈丸、2年の歳月をかけて、無傷で南半球、キリバス共和国に漂着

表紙にハワイ諸島南キリバス共和国に漂流した、重茂漁業組合所有建網船「第七　与奈丸」（重茂漁業組合所有与奈漁業配属の建網船）の漂着の写真と、キリバス諸島の地図が掲載された。因に、この「第七　与奈丸」の始末は、外務省から連絡が入り、漁船の所有権を放棄したという。組合長曰く「どの程度破損しているか、廻向にいくら費用が懸かるか考えると、放棄した方が安いと判断した。手続きは外務省でやったんではないか」ということだった。

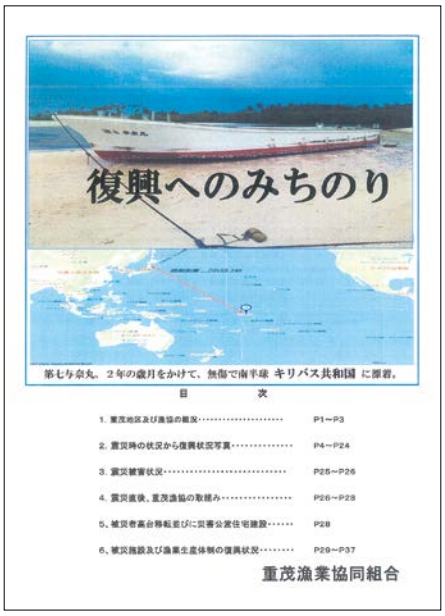


写真５　冊子「復興へのみちのり」
重茂漁業協同組合発行

(1)　重茂地区及び漁協の概況

重茂地区の概況

重茂は東経１４２度04分本州最東端である。

重茂地区の総面積約７千ヘクタールの内、田畑を含む平坦地は10分の１程度である。ここに14の集落と４５１戸の世帯（内漁家３９７戸）が点在している。地区内の人口は１千６０３人で（内訳は下表のとおり）人口が一番多かった時代は１９６０年代で約３千人であった。

主な漁業はワカメ、コンブの養殖業、天然のワカメ、コンブ、アワビ、ウニそれに秋サケを中心とした定置網漁及び漁船漁業等である。過去

においては全国一を誇った天然のワカメ、アワビ漁業は資源の減少が著しく、又、一時隆盛を極めたイカ釣り漁業も衰退し、経営上不安定な漁業となったが、後にワカメ、コンブの養殖漁業を手掛けることによって、現在は安定した生産が行われており、天然アワビと共に養殖ワカメの生産量は、日本一となっている。

重茂地区の人口動態

年度	男	女	合計	推移率
1965(昭和40)	1,511	1,456	2,967	100.0%
1970(昭和45)	1,300	1,258	2,558	86.2%
1975(昭和50)	1,185	1,158	2,343	79.0%
1980(昭和55)	1,095	1,064	2,145	72.6%
1985(昭和60)	1,031	1,062	2,095	70.6%
1990(平成2)	992	1,030	2,022	68.1%
1998(平成10)	909	983	1,892	63.8%
2003(平成15)	901	972	1,873	63.1%
2008(平成20)	838	928	1,766	59.5%
2012(平成24)	**768**	**835**	**1,603**	**54.0%**
2013(平成25)	**750**	**808**	**1,558**	**52.5%**

震災前後の組合員の年齢構成

	震災前平成22年3月31日現在	震災後平成25年3月31日現在
19才以下	3人（0.5%）	0人
20~29才	44人（7.6%）	39人（7.1%）
30~39才	61人（10.5%）	59人（10.7%）
40~49才	111人（19.1%）	86人（15.6%）
50~59才	120人（20.7%）	122人（22.3%）
60~69才	120人（20.7%）	110人（20.0%）
70~79才	95人（16.3%）	91人（16.5%）
80才以上	27人（4.6%）	43人（7.8%）
	平均年齢 55.1才	平均年齢 56.3才

（重茂漁協でも組合員の高齢化が進んでいる。しかしこの平均年令は県内24漁協の中では10歳位若い方だという）

漁協の概況

重茂漁協は1949（昭和24）年7月24日設立された。

設立当初から20年間位の間は1世帯1組合員を原則としてきたが、第一種共同漁業権漁場への出漁問題や担い手育成等もあり、現在では定款で定める資格を有する漁民は1世帯2名を限度に正組合員として認めている。

2012年3月末現在の組合員世帯数は397戸、正組合員514名、准組合員数45名、合計559名となっている。

役員は理事12名(内常勤組合長1名)監事4名、それに総代会制をとっており、全地区から100名の総代が選ばれている。

下部組織としては、婦人部（289名）と青年部（87名）がある。

又、漁協事業全般について職員の他に現場での業務を補佐し、組合員とのパイプ役も務める業務補助員が各地に18名いる。この設置は昭和29年より始まり今日に至っている。

職員は、参事1名、部課長、事務、技術職合わせて30名の陣容である。

写真6　震災前と震災直後、震災復興状況
「復興のみちのり」写真4頁から24頁

資産状況は次の通りである

	震災前（平成21年）	震災後（平成24年）
資本金	16億366万3千円	12億232万円
（内訳）		
出資金	6億9千362万7千円	6億7千133万1千円
資本準備金	55万2千円	55万2千円
再評価積立金	47万9千円	47万9千円
その他	9億3千600万4千円	5億2千995万8千円
定置水揚高	6億4千149万8千円	4億6千342万1千円
販売取扱高	21億4千95万4千円	13億3千594万1千円
海藻加工販売高	8億1千867万9千円	4億945万9千円
魚類加工販売高	3億1千422万8千円	8千788万5千円
さけ稚魚放流数	1千810万尾	650万尾
あわび稚貝放流数	100万個	0
こんぶ種苗	11万㌧	6万4千990㌧
漁船数	814隻	630隻
（内訳）		
1㌧未満	524〃	468〃
1～5㌧	270〃	147〃
5～10㌧	10〃	7〃
10～19㌧	10〃	8〃

(2) 震災被害状況

①震災被害状況（2012年4月1日現在　重茂の人口1千603人）

人的被害	死者・行方不明者	50人（内組合員17人）	
	負傷者	15人	
	合計	65人	
住家被害	全壊	88棟	
	半壊	1棟	
	床上浸水	2棟	
倉庫	全壊	355棟	
	半壊	6棟	
	床上浸水	10棟	

組合員数の推移

平成23年3月11日	正524	准50	計574　世帯403
平成25年3月31日	正501	准49	計550　世帯391
増減	正減23	准減1	計減24　世帯減12

②水産被害状況

水産施設	あわびセンター・加工場・ふ化場他約50施設	42億円
漁港施設	県管理2港　市管理8港	全壊
漁船	所属船　814隻	798隻（残16隻）
養殖施設	1千310台（41万㍍）	全壊
水産物等	わかめ・こんぶ・うに・あわび等	約20億円
漁業用資材	漁具・漁網・漁撈設備等	約10億円

(3) 震災直後重茂漁協の取組み

平成23年3月11日発生・東日本大震災復興基本方針
4月6日開催の全員復興協議会の議案と同じ

（漁船の共同利用・養殖施設の共同利用・共同漁業権行使）

(4) **高台移転**

住宅用地の予定戸数など（宮古市）

追切・浦の沢	2戸	平成25年度
音部	3戸	平成25年度
里	16戸	平成25年度
千鶏	3戸	平成25年度
石浜	2戸	平成25年度

（施設の復旧・復興スケジュールを工程表で表示。）

「復興への道のり」で重茂地区および重茂漁協の現状を開示することによって、今後どのように復興の道筋、はては今後漁協の方向性と課題を考えるデーターを提供したといえる。

宮古市水産課資料によると

平成23年度共同利用漁船等復旧支援対策事業として、
重茂　新造船４３９隻　中古船１０９隻　定置５ヶ統
平成25年度共同利用漁船等復旧支援対策事業
重茂　新造船６隻　中古船１隻
平成26年度共同利用漁船等復旧支援対策事業
重茂　新造船８隻の完成を見ている。

その結果

漁船の共同使用による漁業は、震災の翌年平成24年11月のアワビ漁を契機に終了し、個別の漁業体制となった。養殖漁業の漁船共同利用は、翌年の25年春から解除となり、通常の漁業体制に戻った。
メデタシ　メデタシ。そして「ゴクロウサマ」でした。

5　復興事業についての語り

重茂漁協　伊藤隆一組合長はじめ、漁協職員の方々に漁業復興について伺った。

重茂漁協組合長　伊藤隆一さん（昭和12年生）

取材日：平成26年６月14日

○　災害対策本部が開設後２週間ぐらいで解散したことについて

「災害と言えば助けてもらえるという甘えや油断があり、そうした心の弛みと地域内の被災者・救援者の意識の確執が怖かった。被災者も皆と一緒にがんばってほしかった。災害対策の道筋も一応見えてきたし、あとは組合事務所の中の一般事務処理として運用する方向も見えてきた、それで解散という決断をした。被災者の支援は組合が先頭に立っておこなうことにし、被災者救援としてではなく普通の生活に戻るという方法で考えたものだ。」

○　ハワイ　キリバス沖の重茂漁協所有漁船の始末について

「所有権を放棄し、修理して使用出来るなら使って貰うように外務省に任せた。」

震災後、組合長のもとに多くのメディアの取材が殺到した。本人曰く「テープにとって聞かせてやりたかったが、そうもいかなくて、同じ事ばっかり言ってるような気がした」という。その中から次の取材記事を転載させていただく。

震災後の２０１１年７月24日　「岩手日報」政治に言いたい②

「被災地からの訴え」として重茂漁協組合長へのインタビューが掲載された。

「７８０隻あった漁船のほとんどが被害を受けたほか、養殖施設や種苗生産施設、ワカメ・コンブの加工施設なども流失した。漁船は６００隻は必要だが、確保出来たのは１５０隻。全てがそろうのは来年になってしまいそうだ」と現状の認識を示し、漁港の復旧に対して「瓦礫撤去の段階で、修復がいつになるのか見通しが立たない。

船があっても置くところもないし、ワカメの水揚げをする岸壁もない。ちょっとした波でも危険で作業が出来ない状況で早期の復旧をお願いしたい」と現状を訴えた。そして被災現場と行政のギャップを次のように指摘し、早期復興の要望をした。「予算措置されてはいるが具体的な内容は出ていない。やむを得ず自己資金で整備し、種付け（ワカメ・コンブ養殖のためロープに種を付ける）を終えて仮置きしている。方針が決まらないから開始の号令が出せない。予算が足りなければ削る部分もあるかもしれないが、それも分らない」漁業生産の現場と行政のスピードの違いにイライラしながら行政の対応を待つ漁民の焦りをにじませる。生産と加工は一連の作業工程の中にあり一連の事業の流れを焦燥感を持って待つ漁民の姿があった。加工施設について「要望しているが国の補助を待ってはいられず、漁協独自で準備に入っている。来年2月迄に完成させないとワカメの収穫時期に間に合わない。本当はアワビの種苗生産施設を真っ先に建てたいのだが10億はかかる。国の3次補正を当てにしているが、これもどうなるかのか分からない。」国の補助を当てにしているが、生産時期は予算を待ってはいない。組合長としての焦りがあった。」

そして国の震災対応に苦言を呈している。

「スピードがあまりにも遅すぎる。1次補正に盛り込まれた漁船の補助も5月2日に成立したのに、県から具体的な内容が示されたのは7月になってからだった。その間にマス漁は終わった。漁期が終わってから説明されても遅いどころの話じゃない。1年遅れになる。2次補正だって9月に入らないと内容がわからないのではないか。県は要望を受けて一生懸命やっているが、国の方針がころころ変わり対応しきれないように映る。」

このように、現場の漁業暦に対する行政の頓着しない対応に歎きしか出ない心の焦りを見る事ができる。復興予算をお願いする側とすれば、非難がましいことは要望側としては言いにくいところだろうが、それでも言わねばならぬ組合長の苦渋を感ずる。

そして重茂漁協内の震災後の漁業経営の状況を語る。

「重茂漁協では４００の養殖漁家が３５０まで減り、生産は25％減となる見通しだ。取りあえず施設などを復旧させ津波前の生産力に戻すのが目標。それには3～5年はかかり、そこから復興が始まる。生産者は意欲を失っておらず、何でもいいから早く物事を決めて前に進めてほしい。」と。

組合長自身漁家であり、組合の職員として活動した時代、養殖ワカメ・コンブの事業に参画していたことから、知り尽くした者の切実な要望である。

重茂漁協組合長　伊藤隆一さん

取材日：平成27年10月27日

明治29年の津波後に音部浜の人々は高台の笹見内に移動した。以前の笹見内地区は民家が1、2軒ある程度だった。そこに音部里の被害者が移り住んだ。その後昭和8年になって又被災し、小角柄や笹見内へ移動した。今回の津波で音部里にはもう住宅が建てられないことになった。昭和12年生まれの自分が3、4年生の頃まで里の浜近くに作業小屋があって、3食そこで食べながら作業していたようだった。寝るのは笹見内だった。里の浜にはわかめ・こんぶの干し場があって、海藻の作業はそこで進めたが、当時スルメが大漁で、それは自宅に持って行って捌いて干しスルメにするので、自宅に持って行かなければならなかった、当時笹見内に上がる道路は、今もキツイが舗装してあるから歩いてもそれほどではないが、その前は、現在の道を上がってすぐのところに大きな木がある。その傍らに山の神だったか、地蔵様だったかあって、そこから左手の山に入る。今はケモノミチのようになっているが、草や木にふさがれながらも細い道になっている。その坂道をカゴにイカを入れて家まで持って行く。辛い仕事だった。坂道ばかりの道だった。今は車で一気に上ってしまう。浜にいてそこで生活することは楽であることは判っているが、津波の恐怖はそんなものではないと感じたのだろう。

昭和40年頃にはＦＲＰ船はあったが、重茂の浜に合った船形ではなく、利用されなかった。価格は現在でもサッパで１５０万円に付属品を加えると３００万円位になる。震災後ＦＲＰ製作は大手の製造会社に集約されてきた。昨年5月現在で要求に全て対応し６７６隻、現在は７００隻を一寸欠ける程度になった。

准組合員は議決権ナシ。あわび・うにの山田入合は参加できない。宮古との入会は出漁可だ。

組合員の高齢化が問題になっているが、二三男対策ができていないのではなく、少子高齢化という時代の趨勢によるものだ。

「重茂味まつり」は震災の年には休んだが、今年で9回目となる。震災の時、取引のあるクラブ生協やその他からの支援物資が大量に入って来た。被災したのは重茂ばかりではないので、周辺の漁協にも配った。その中に米も入っていて、その一部を近隣の漁協（田老・山田・大槌）に配分した。

震災の年の5月、天然わかめの時期に漁船60隻を集めることができて、実施希望者を募り、人数案分で各港に配分した。

震災後の復興試案の「漁船共同使用」は3月19日から20日頃、瓦礫撤去作業などをしている人に色々話をして、また聞いて歩いた、そうした中での具体案だった。

震災後、漁船・養殖用のロープを業者に注文したが、あまりに注文が込み入り、業者からの提案で県漁連を窓口にすることになった。

地盤沈下がひどく、海岸道路の工事ができない所があった、50から60センチというが、場所によって違いがある。

今一番の関心事はあわびの増殖だ、重茂はあわびで有名だったから、殖えて欲しい。

震災復興に対して現在の感慨

震災から4年を過ぎ、あと数か月で5年になろうとしている現在、重茂漁業協同組合の復興の早さは、周辺の漁協から驚異の目で見られている。なにをもって復興というのか、という問題もある。港やその他設備を考えると、港は県なり市なりが管理するものであるが、４地区の拠点漁港を要望した。４港の内２港が県、２港が宮古市の管理に係るものだ。そこを集中的に復旧してもらった。船は瓦礫撤去しながら使えるもの、修理可能なものは集めて、自分たちで修理する。材料は資材屋で売っているし、費用は組合で対応する。その他に日本海側から買ってくる。そうして取り敢えず操業に向けての準備はできた。これをもって復興というならば、復興はできたのかも知れない。しかし、復興したかって言われると、素直に「そうですね」といえないのだ。道路も確かに便利に作ってもらっている、でも、今まで失ったものを考えると、組合員一人ひとりの気持ちを考えると、素直にそうだと言えない。人それぞれに災害に対しての思いと、深さが異なることから、押し並べて感想を言うことができない。

今回の被災に対して復旧はある程度施設面では一応の成果は見ているが、今回の復旧で良かったことは、道路ができたことだ。今迄要望しても計画に乗せてもらえなかったが、津軽石の赤前からトンネルで重茂に繋がることになり、来年（平成28年）１月に起工式が行われることになった。

重茂漁協　参事　高坂菊太郎さん

取材日：平成27年10月27日

○重茂漁協復興の早さについて

中古漁船の取得のため日本海を巡った。クレーンの着いたトラックを持っている組合員がいたので早かったと思う。

そうした動きの速さは、震災から2か月後の5月、天然わかめ漁に出漁できる体制を作ったこと、施設整備に対しては組合主導の決断の早さだ。組合経営については、定置漁業の再開が早かった事が大きい。漁協の経済的基盤をなす建網の再開は、そのこと自体、復興のシンボルであったし、まして漁期に豊漁であったことは重茂地区の明るい話題となった。

養殖資材の不足を補うため、資材の予約注文をした。かなり早かっ

たと思うのだが、注文が集中したことで県内一括集約と言うことになってしまった。組合長は、ＦＲＰ船用の樹脂を先駆けて注文したが、県漁連が漁船等の集約窓口になったと言うので取り止めた。組合長の指示で注文したのだが、修理のためだったのか、自前で漁船を作ろうとしたのか定かでないが、そう思ってもいい程船が欲しかった。

漁船の共同使用は、漁業者が組合の提案を認めてくれた、だから共同漁業などがスムーズに行えた。共同使用は組合長の提案だった（組合長は誰だったか忘れた、「参事ではなかったかな」とも言っていた。それに対して参事は「おれではない」と話した）。

復興したという意識は、船が揃って、養殖施設が整った時、組合としては欠損金の解消をしようと思っているが、その時に震災後の復旧はできた、と考えて良いのではないかと考える（さすが、女房役）。

重茂漁協　業務部長　種苗生産課統括　高坂勇一さん（昭和32年生）

取材日：平成26年11月11日

地震時、宮古市役所で川鵜対策会議（鮭の稚魚の天敵である海鵜除け対策会議）のため駐車場に着いた時に地震に遭遇した。激しい地震のため会議の会場である４階に急いであがり、会議の中止を宣告した。電話しようにも一切通じず、重茂に戻った。赤前運動公園で消防団員に止められ、山手を回って重茂に帰った。組合に立ち寄り、家に帰ろうとしたら里地区の家はなくなった、と消防団員にいわれた。港の入口の墓地まで帰ったが目茶々々の状態だった。当然自宅は浸水していた。アワビの畜養施設は全部ガラス張りなので、地震が来たら全職員屋外に出て家に帰るよう毎日話していたこともあり、職員には怪我人等はいないだろうと確信していた。

被災の状況を確認した。自分自身消防団員でもあるので、里に下り被災者を避難所に誘導した。

アワビ畜養施設は鉄骨が６本だけ残り、15㍍の高さのポンプ塔の屋根も破壊されていたが、辛うじて本体は残っていた。

鮭孵化場は瓦礫で埋まっていたので撤去した。配管は破壊、水質の調査等もしなければならなかった。

自宅は２００～３００㍍流され、屋根だけ残っていた。２階の品物は残っていて、箪笥に入っていた洋服等は濡れずに残っていた。

特にするべき仕事はなかった。ただ残ったもので少しでも使えるものを探して歩いた。南側の山の方まで捜して歩いた、その中に木の枝や木の葉に貼り付いたアワビの稚貝がいた。あと2、3か月で放流できたはずなのに、大変残念だった。

15㍍の高さのポンプ塔の上を船が飛んでいったという。またポンプ塔の中にウニ・ナマコが数個見つかった。

施設の復旧は、1サケ養殖施設、2昆布採苗施設、3アワビ畜養施設の順で復旧した。

被災前のアワビ畜養施設

平成15年1月完成　3㌢　１００万個畜養

復興施設

平成26年12月完成　3㌢　１５０万個畜養

１年畜養し　5月～6月に放流

今年度２０１５年は5月中に専属漁業区域内に１００万個、共同漁業区域内（宮古・山田）に25万個ずつ放流の予定だ。

サケ孵化場　主任技師　梅沢健治さん（昭和41年生）

取材日：平成26年11月11日

震災前の3月初旬に１００万尾の放流は終わっていたが、１千７００万尾は残っていた。その１千７００万尾が津波の被害を受けた。うまく波にのってくれればよいがと思っていたが、津波の溜まり水や下水に泳いでいるものもいた。

津波の翌年から採卵をはじめ、不足分は北海道からも譲って貰い、4月に１千７００万尾を放流した。津軽石川からも２００万尾譲って貰い、海中飼育して放流した。

孵化場施設は平成25年に完成した。

第4章　重茂各地域の方々の聞き取り

1　北地区

重茂地区の北端に位置し、宮古湾口の重茂半島突端に黒崎神社があり重茂地区の人々に限らず、宮古湾内建網漁業経営者の信仰を集める。震災当時、春のワカメ採捕の時期で、それぞれ明日からの作業の準備に忙しく、作業に先立って飲食物・燃料類、その他準備の品物が揃っており、その点で被災時は困ることはなかった。当時、漁協青年部の部長は小成文博で、彼は自宅にクレーンの付いた大型トラックを所持しており、漁船の調達に大活躍した。

追切　小成文男さん（正組合員　理事）（昭和29年生）
長男　文博　談　震災当時漁協青年部長、
取材日：平成26年10月14日

「地震の時海上にいて作業していた。船上で船縁がピタピタと音がして、地震を感じた。すぐ港に戻り避難した。」

地震を感じ浜に行って船を上げようとした。波は静かであったが、その後浜の前にいつも見えている島が波で見えなくなったので、急いで自動車で逃げた。

浦の沢の老夫婦を探しに行ったが流されてしまっていた。騒いでも声が聞こえなかったのかも知れない。そうした中「助けてくれ」という声がして、捜して助かった人もいる。

公民館を避難所とし、被災者は生徒を含め20人くらいになった。ここには　炊き出しの施設や風呂もあり、家の風呂も自家発電で沸かし入ってもらった。

漁協の参事が米を捜してきたが、当方もあまりなかったため、参事は盛岡まで米を買いに行った。ガソリンは当初1軒当たり10リットルに制限されたが、直ぐ解除になった。

組合の冷蔵庫から魚介類が救援物資として供出され、うまかった。

1週間後に東北電力が発電機（6千ボルト）を始動し供給した。

1週間以内に災害対策本部が設置され、地区単位で「災害対策本部地区支部」（仮称）を作り、地区ごとに動き始めた。経費は組合負担とした。

数日後理事が集められ「船がなければどうにもならん、自分たちで動いて船を捜せ」と指令が出た。若い連中を中心に中古・多少の破損のある船を捜して秋田・青森まで廻った。こうして船外機や資材を調達して廻った。こうした動きは、政府の説明で、「4月以前に支払った経費は補助対象にならない」という話しがあったという。しかし「漁師に船がなければ生活できない」という、組合長が組合経費で購入するという判断をしたからだ。

漁船は共同使用、収量均等割とし、5月の天然若布の収穫は相応にあり、値段もよく、皆一安心した。ウニ・ワカメの収穫は1回目は組合買い取りとし、災害で世話になった人達への御礼となった。採取量が以前に戻ったのは1年目からであった。

津波が去って海は残ったが、海で生きる漁師達にとって、海と漁船は同じ意味を持っている。どんなに立派な船があっても海の存在なくしては海は意味をなさない。またどんな豊かな海があっても、船がなければ宝の持ちくされだ。まして天然・養殖の昆布・ワカメの収穫期が迫っていれば、はやる心は抑えきれない。なんとか海に出るための船がほしい。そこで漁師達は漁船獲得のために動き出したのだ。

その動きの一端を次の記事に見る事が出来る。

平成23（2011）年10月9日　岩手日報に『舫い　浜に生きる』75　と題して、**「小成文男氏と重茂北区仲組の漁師の方々が漁船の獲得と修理に奔走した。」**の記事が掲載された。

「巨大な消波ブロックが転がる小さな港に、小型漁船が所狭しと並ぶ。どの船も至る所に修覆した痕がある中古船だ。

宮古市・重茂半島の仲組漁港。普段は15世帯ほどしか使わないが、地元では「宿浜」と呼ばれる半島北部地区の中心的な港だ。3月11日の津波後、同地区の漁業者は一丸となり船を集め修理してきた。

同月下旬、漁業者の集まりで、重茂漁協理事で同地区在住の小成

文男さん（66）が声を上げた。「漁師は船ねば駄目だ。集めっぺし」沖に浮かぶ壊れた養殖施設も見に行けず、天然ワカメ漁の口開けも迫っていた。「新造船を待ってばかりいられない。」漁協が早急な中古船確保の方針を出したこともあり、浜の男たちは「そうだ、そうだ」「よし、やっぺし」と応えた。

秋田、青森両県の港町を回り中古船を探し、宮古地方で破損した中古船を譲り受けた。加村信一さん（60）は「船底にたくさん穴が開いたり、サイドが何か所も壊れていたり、通常なら修理不可能な使用放棄状態の船を譲ってもらった。まずは船だ」と船集め奔走にかけた思いを語る。

船を探す人、直す人と役割を決め、仲間から「大工」と呼ばれる修理担当の漁師、木村正さん（65）と大程哲男さん（54）は、「廃船にするようなものばかり。みんな必死だった」と思い起こす。漁船約50世帯の同地区で被害を免れた船は1隻だけというが、5月の天然ワカメ漁には3人1隻の割合で、14、15隻を共同利用できた。11月のアワビ漁は2人1隻で操業できる見通しだ。

小成さんは「若者からベテランまでみんなの協力で、ここまでできた。早く元通りの状況にしたい」と意欲を見せる。

重茂立浜　泉沢敏郎さん（昭和27年生）
漁協理事　夫婦と子息　3人、
取材日：平成27年7月2日

地震時は病院に行く途中だった。家には祖母（その後病死）だけ遺していたので、病院に入る前に地震津波が来ると思って、そのまま車で帰宅した。海岸は危ないことと、時間的に早いルートとして花輪から金浜に向かう高規格道路を走り金浜に着き、金浜から稲荷橋を渡り赤前を通り堀内に入った。息子は宮古魚市場に魚を卸し、伝票を貰った所で地震に遭い、直ぐ車で小山田橋を通り父と前後して帰った。途中津波警報の広報は小山田橋附近で聞いた。旧街道を通り北区に入った。津波の確認は、荒巻の人が青い顔をして「津波が来た」と言いながら避難していたので、車を置いて歩いて帰宅した。祖母は元気で庭に出ていた。

当時組合の北区総代議長を勤めていたので、消防団員と組合員と一緒になって行方不明者の捜索に当たった。行方不明者を含む死亡者6人、そして公民館に避難所の設置などを行った。被災状況の調査をしようにもなかなか進まず忙しかった。避難所に来た人は20人位だった。その外被災した人は親戚などに避難していた。

対策本部設置後、被災した人、捜索に参加した人や消防団への給食の準備をしたが、予想しなかったことが多く、「ガンバレ」とのかけ声だけでなんともやりきれない思いだった。そう思いながらでも「ガンバレ」と言ってしまい悲しかった。

そうした中、千鶏の中村卓郎氏との連絡が取れた。中村氏は地域全体が孤立していたため、外部との連絡が取れない状況であったが、どうしたわけか自分の携帯とはつながった。そのため役所への要望や、簡易トイレの要望等を代わって連絡してあげた。

重茂は捜索する場合も浜が離れており、車で移動するにしても距離が長く、当初自前で運転する予定だったが、ガソリン代がかさんでしまう。その点を組合に要望などした。

対策本部解散後、漁船の捜索と中古船の買い付けに走り廻った。まず若い人に先遣してもらい、目処が付いてから組合役員と総代議長が中心となり売買交渉に入り、現金で買い付けした。そうした中で中古船ブローカーが暗躍していた。そのことを知らないでまとめ買いをし、代金支払い、領収書を貰おうとしたら、なかなか出してくれなかった。しかし頑張って貰ったら、案の定、後日警察の取調に掛かり、領収書を見せたら何も云わず帰って行った。中古船は20隻位買ったが、直ぐ使えるものばかりではなく、中にはひどいものもあった。修理できるものも最大限確保し、修理に1か月位掛かった。宮古湾内から引き取り手がないものも引取り、修理した。

地区内に建設屋さんの残した重機類があり、業者に連絡して使わせて貰った。大変助かった。

新旧の漁船10艘ほど集めて置いていたら、国の補助が決まらないうちにと、批判もあった。しかし震災後直ぐ、国から災害対策について説明があった時、組合長が説明会場から出て来て、報道関係者の前で「相談が崩れた」といった。その上で自力でできる事は早くする、でないと若い人が離れてしまう、と言う発言があった。その発言に賛同して自力で動き廻った結果であり、最後は自分で背負っても良いと言う覚悟と、組合長の話に賛同した心意気だった。その結果、漁船の準備ができた所から市の管理港として復旧が一番早かったと思っている。

夏に新造船のお披露目が音部港であったが、その前の4月23日に新造船を取りに行った折り、新旧船の代金を組合に精算して貰った。

仕事をしている時は国・県・組合に相談しないで自力でやると云う事で仕事を進めた。補助金あるなしに関係なく、自分たちの事は自分たちでやるという考えで、地域としてまとめた。

今考えると、あれもこれも反省や後悔もある。当時のことを考えると、眠られない時もあるし、涙も流れる。しかし重茂の復興にかける組合長の前向きな発言に感動し、当地域の復興に動いた結果であり、心残りはない。

荒巻　山本正法さん（昭和25年生）

漁協組合員　二十七消防分団員（当時）（仲組）、

取材日：平成26年10月27日

地震の時は養殖施設で作業中だった、船がゆれ、海岸の岩の崩落がひどかった。急いで音部漁港に入港し、音部の消防分団員に手伝ってもらい船を上げ、トラックで家へ帰った。

重茂には二十六分団の音部港の水門と元村の2か所のみ水門があり、音部港の水門は既に閉じていた。

津波が来たので、山手の小角柄を通って家へ帰り、消防団に出動した。

最初は5㍍の津波襲来までは公報で聞いたが、その後は山の中にいたので公報は聞こえなかった。自宅は庭まで津波が来たが、下の家は床上浸水した。防災無線と同時に団員は働いていた。屯所の無線は交信できなかった。夕方屯所に団員・自主防災の人々が集まり、被害の状態を把握した。

荒巻2人行方不明、音部地区と連絡する浜通の道が崩落し寸断、山廻りの道しか残っていなかった。宮古道は小角柄～熊の平～堀内～山際の避難道路～赤前と道路は確保できていた。

避難所は各親戚の家（3軒）へお願いした。公民館は遠いこともあり行かなかった。食事は各家の持合いで食べた。発電機は各家で持っていたのでそれを利用し助かった。水道は簡易水道だが、荒巻の入口で水道管が破裂し、北側には通じなかった。

家族は皆無事で、小学校は地震後すぐ生徒を迎え家に帰ってきた。電話は不通となり、開通まで1週間ぐらいかかったと思う。

現在、消防団員も安全な場所に避難するよう指示されている。昨年（２０１４年）7月に消防団を退団した。

チリ地震・十勝沖地震のときは津波は来ていない。今回の津波は明治29年、昭和8年よりはかなり高かったと言われている。

1週間程して自衛隊の救助が入ってきた。救援物資として野菜も入って来た。燃料はそれぞれ作業用に普段から確保していたので足りていた。重茂漁協にも米がなくなり、職員が盛岡まで買い出しに行った。

漁船の被害　　漁船4隻　　9・1㌧　　漁船

サッパ　　2隻

1・5㌧　　養殖用　　全滅

現在（２０１４）全部充足している。

2　音部地区

音部地区の漁港は重茂里と同じ規模の港である。津波は防波堤を越え、港の施設を破壊し、港に注ぐ沢川を遡り、里地域の民家・倉庫等をなぎ倒した。津波の様子を見ていた人は、津波の波が来る前に暴風で家が倒壊し、波がきて瓦礫になった。また漁船が飛んだという。波の破壊力もそうなのだが、津波の怖さは波の来る前の暴風にあった。このことは他の地区でも聞いた。

重茂小角柄　伊藤良治さん（昭和5年生）
60代から組合役員（現在は引退）　地区総代21年　理事5年、
取材日：平成27年7月2日

地震の時は宮古にいて、すぐ車で堀内を廻り帰ったが、堀内地区も渋滞していた。

明治29年の津波の時は音部里にいたと聞いていたが、祖母1人が生き残り、明治36年にこの地区に家を建てた。

昔は音部浜から小角柄への交通は現在の道路はなく、荒巻の手前から山道を通る以外なく、浜への行き来は大変だった。浜で仕事をするより小角柄に通うには何十倍も体力が必要で、昭和8年頃は3軒しか家がなかった。当時笹見内は畑だけだった。

昭和40年から41年頃、漁船は木造船からプラスチックへと代わり、養殖ワカメ・昆布は木造船で始まり、プラスチックに代わっていった。

重茂地域の特徴は、共同・協力心が大きいことと思う。今でこそ奇跡の復興だとか、すごい組合だとか言われているが、必ずしも明るい部分だけではなく、語る事のできない暗い部分もあった、そのことを穿鑿する事ではなく、組合の本質である「自助・共助・公助」を堅持し、組合員のために運営するのが組合の本質である事を明示し、今後の運営に勤めてほしいと思っている。

笹見内　伊藤政光さん（昭和30年生）
漁協組合員　二十六分団分団長　2011年2月に分団長になったばかりだった。取材日：平成26年10月27日

地震の時は船に乗ってワカメ取りの準備をしていた。地震のため船がゆれて、降りられなかった。津波の第1波は、水位が上がっただけだった。その後汐が引きはじめ、第2波の津波が来た。この2波の風で港の屋根が飛ばされ、船が飛んだという。船は傷も少なく山へ飛ばされていた。

音部漁港には水門が4か所ある。北1、第4水門は残ったが、他の2か所のうち第1門扉は飛ばされた。北側の水門は電動にしてもらったが、それが流れてしまった。分団員は全員無事だった。

音部漁港の後ろの漁村センターは流失した。音部里地区（笹見内・小角柄・里）19軒の民家が流失した。波のかからない立木も倒れていた。津波の警報は3メートル、6メートル、10メートルと3回あった（テレビ）。無線はポンプ車に付いていたが、聞こえにくかった。

全国規模で消防団員は20分間警戒ということであったが、大津波警報があったら、直ぐに逃げろというように改正になった、水門を閉めたら直ぐに逃げろということだ。波が渦を巻き、車や船が廻りながら流されていった。

漁港の防波堤は、最新式といわれ、工事屋の話ではこれならよいといっていたが、波が簡単に越えてしまった。船が飛ぶ。それも1トンクラスの船が、そんな話があった。爆風によるものだろうと思う。

所有漁船3隻、すべて破損したが、現在は全て充足している。

団員10人の住宅が流され、その人達には気の毒で声もかけられなかったし、声も出なかった。流失した人々の悲鳴、木の倒れる音、電柱の倒れる音が、すごかった。消防団本部への報告が忙しかった。

安否の確認をしたが、100名くらいの人と連絡が取れなかった。村の見廻りは車だと瓦礫によるパンクの危険性もあり、ほとんど徒歩で行った。遺体の安置所が決まらず、宮古の千徳体育館・勤労青少年ホームまで遺体を搬送した。棺桶の不足、サイズの違い等、混乱した。警察が遺体の洗浄を行っていた。警察・自衛隊・役所の役割が判然とせず混乱した。

音部地区は4人死亡、1人行方不明だった。音部では船で沖に避難する人はいなかった。災害時の命令系統が混雑し不安があり大変だった。

引き汐の時漁港の底が現れ、周囲の島が見えたり隠れたりして、珍しい光景だった。

音部里　山崎義広さん（昭和22年生）
漁協副組合長　消防団を辞めていたが、浜の堤防に水門ができて、

勤務のガソリンスタンドに近いこともあり、再び水門閉鎖要員として消防団員になった。取材日：平成26年10月27日

地震の時は音部漁港の西１００㍍位後方の、漁協のガソリンスタンドにいた。消防団員として水門閉鎖の担当となっていた。水門を閉め、漁港脇の漁村センターの脇で海を見ていた。波がひどくなり、漁村センターから坂道を上がり、坂の途中にある大木の脇の山の神まで逃げた。1波の後引き汐があり、荒巻の港の底が見えた。

妻は自宅前から山道を登り、自宅の流れるのを見ていた。子供達は職場にいた。孫は学校にいた。

災害公報は津波来襲３㍍という情報まで聞いた。下隣のじいさんは胸まで波につかり杉の木に掴まって助かった。水を飲んだそうだが、水はキレイだったと言っていた。おばあさんと娘さんは流された。氏神様（大神宮様）は避難所になっていたが、避難してくる人はいなかった。

船は飛ばされたが、別の家の下になって助かった。主のいない船が養殖の桁にひっかかり助けられ、無傷だった。

笹見内会館には避難者80人がいて、満員だった。3か月して仮設住宅に入った。仮設住宅は部落単位にまとまって良かったと思っているが、当初は1か所にということだったがバラバラになってしまい不便になった。

前の家は戻り波で流された。ガソリンスタンドも被災し廃棄にした。

住宅の新築は12月に前あった家の裏山に宅地造成し完成した。

音部　伊藤智恵子さん（昭和33年生）

漁協婦人部員（漁協組合員の家族の女性は全員入ることになっている）建網漁場の炊事員、取材日：平成26年6月19日

地震の時、当日海に出る予定だったが海が荒れていたので家にいた。津波が来るというので、直ぐにつば釜（竈にかける釜）5升焚きで御飯を炊いた。笹見内会館に里の人が避難してきた。会館には寄附による毛布が備蓄してあった。その外、毛布や衣類は皆が寄附した。3日くらい伊藤家でも炊き出しを行った。米は自家の物を出した。3日後消防団で各家から米の寄付を募った。

電気は発電機があったし、水は海藻水洗い用の大きなタンクに確保していたので困ることはなかった。4日後くらいに父が薪ストーブを買ってきてくれた。

自宅に避難者家族を中心に9人引き受けた。3日後から女性部の支援が動き出した。音部地区は食に困る事はなかった。冷蔵庫や冷凍庫は発電機で動かした。無理して発電機で冷凍冷蔵庫を動かしたのは、いつまでこうした不便な生活が続くのか判らないという父（85歳）の判断だった。年寄りの話は貴重だと思った。

死者　笹見内　1人　船を見に行って流された

里　　3人

被災した養殖施設の回収を行った。ワカメ（天然）は5月に共同収穫し、値段もよかったので皆安心したようだった。

流失した船の捜索と中古船の購入等は、重茂が一番早かったと思う。

笹見内　伊藤寛治さん（昭和6年生）

伊藤智恵子の父、取材日：平成26年8月15日

地震の時、漁協前のガソリンスタンドで給油をしていた。すぐ家に帰り家から海を見た。津波が来る前に津波の爆風なのだろうか、家が倒壊するのが見えた。津波が来たときには家はなくなっていた。引き波で倒壊した家の部材が流れてしまった。普通の海波は膝までであれば何ともないが、津波の波は膝位でもう動きがとれない。地震から津波まで20分～30分位あったと思う。漁船6艘全て流失。現在5艘確保。諸経費は保険で賄った。

笹見内　坂本惠子さん（昭和22年生）

宮古市保健福祉部地域医療保健推進監、取材日：平成26年11月12日

地震の時、市役所のそばの保健センターで1歳6か月児の検診を行っていた。保健センターを出て、市役所の北側の山手にある中央公民館

に避難した。途中町の人に会ったが、逃げようと言う声が出なかった。逃げる時は声が出なかったと、昭和8年の津波経験者に聞いた事があった。中央公民館の振動が大きく中に入れなかった。そのうち市役所の後ろを大型船やトラックが流れてゆくのが見えた。公民館の後山に登った時に津波が見えた。「逃げろ」という声が響いていた。宮古第二中学校(日ノ出町)まで逃げた。生徒が70人くらいいて整頓を助けてくれた。

佐原の保育園で炊き出しを行い、夕方オニギリを配った。2時間毎に避難者の確認をして教室に分宿させた。常備薬を忘れた人もいて脈を見ていると安心するようだった。

翌日職員を市役所に集めるよう市長からの命令があったが、友達1人に翌日重茂に行く事を許可され、山道を回り堀内に着いた。音部里の自宅は流失していたので、小角柄の親戚の家に避難した。

14日に静岡災害医療チームが入ってきてくれた。田老には「国境なき医師団」が入ってきた。薬は医師団が持ってきてくれた。14日午後には山田から川代・千鶏に入った。既に自衛隊が入っていた。薬のメニューを作成するため、自衛隊の情報をコピーさせて貰った。これをみて重茂地区の安全宣言をした。

赤前地区に診療所を開設する事を要求し、了承して貰った。ここで赤前・津軽石の医療を一括して行うようにし、静岡医療班が担当してくれた。精神医療チームも入ってきてくれた。

3　重茂地区

港に注ぐ重茂川は鮭の遡上する場所だ。港の脇に鮭の孵化場とアワビの畜養施設があり、重茂養殖事業の拠点だ。津波によって川に架かる橋が落ち、南地区への通路が途絶し、山田町に行く道も破壊され、南地区は完全に孤立した。養殖施設から倉庫など全て瓦礫と化した。

重茂舘　木村善一さん（昭和5年生）

取材日：平成27年4月28日

地震の時、山の手入れに行っていた。津波が30分後に来るというので見ていたら、予報通り30分後に津波が来た。自宅は重茂漁協の北側県道の山手にあり、地盤もよく、海からかなり離れており、高台であるので津波の心配はなかった。娘2人が宮古におり心配していた。上の娘は市役所に勤務していて6階に避難し、更に向かい側の山手の愛宕小学校に避難したという。下の娘は築地の銀行に勤務しており、やはり山手を通って愛宕小学校に避難したという。

海辺の避難者は市役所重茂支所の隣の地域交流センターに避難してきた。炊き出しなど手伝おうとしたら、高齢者だからだろうか、周辺を見ていてくれと言われた。海に行ってみようとしたら、途中で避難して来る人に出会い、海の方には行かないように注意された。妻は避難所で炊き出しを手伝っていた。避難所には布団や毛布・米などを提供した。

重茂里地区では24戸世帯が流失した。漁船は1艘保有していたが流された。主にウニ・鮑漁に使用する船だ。

明治29年、昭和8年には里の高台である笹見内には家はなかった。小角柄にも家が1軒だけだった。2度の津波後、里から両地区に移転して来た。しかしその後また海岸に家が建ち、今回は里地区だけで24戸流失という被害になった。

重茂舘　盛合敏子さん（昭和28年生）

重茂漁協女性部長

夫　敏（サトシ）　組合員　長男　善行　准組合員、

取材日：平成26年6月19日

地震の時、検診のために宮古病院に行って、職場の県合同庁舎（保健　福祉相談室）の事務所にいた時地震に遭った。職場の人が騒ぐので机の下に隠れるよう指導した。地震が大きく津波警報が出たので、合同庁舎の北側の山に避難した。「沿岸広域振興局宮古支庁」の局長が、合同庁舎を避難場所にすると決めたので、地下の食堂に行って炊き出しのおにぎり作りを手伝った。４００人の避難者を引き受けた、中には具合の悪い人もおり、保健所の人が見てくれた。そうしながらも家

族のことが心配だった。親戚には死んだのではないかと言われた。息子（浄土ヶ浜パークホテル勤務）には2日目に会った。心配して探したそうで、夫が2日目に合同庁舎に軽トラックで迎えに来てくれた。2日目の夕方息子と合流し、津軽石の駒形橋を通り一緒に帰ってきた。重茂交流センターで降り、避難所に寄り炊き出しを手伝った。

実際に動いたのは3日目からだった。被害写真を撮ろうと海に行ったら大島紬が流れてきた。それを見て涙が流れた。また海に行った時「何を面白がっているんだ」と言われた。皆絶望と悲しみの中にあり気が立っているようだった。舘の人に重茂地区の避難所を手伝ってもらった。

4日から1週間後に、自衛隊の人が入ってきてくれ、架設橋が流失したので再度作ってくれた。4日目にヘリが来て、救援と災害状況の取りまとめを行っていた。

1週間程して静岡県から医療チームが入ってきて、漁協の3階に寝泊まりして、1週間から10日位医療活動をしていた。

被災地の女性部長ということで、いろんな場所で講演させられたが、いろんな人の心を見せられたような気がした。苦しい時もあったし楽しい時もあった。救援物資を配る時も皆が楽しめるようにゲームなどして心を配ったが、つらい時もあった。

1週間ぐらいすると避難した人々も心やすくなってきたが、手伝った人達の間で不満もあったようだった。

自家発電でテレビを見れるようになったが、2週間ぐらいしてから避難者の心の弛みからか相互に我が侭が出てきた。「自分でできることは自分でやって下さい」とお願いした。被災者の方々も気がついたようだった。3週間ぐらいしてから「自分たちでやってみて」と話した。3月末まで調理支援を中止し、被災者が自分たちでするようにした。漁協の災害対策本部はその後解散した。

4月9日に漁協組合員の全員協議会が開催された。漁船確保のため若い人達を各地に派遣し、全員に漁船が渡るまで漁船の共同利用の話や、漁船購入の方法などの話があり、皆安心したようだった。中古船購入に走り廻ったのは30~40代の人達だった。

重茂舘　横田有平さん（昭和15年生）

重茂元村（舘・里）自治会長（自主防災会会長　防犯協会　漁協年金受給者会会長）　市議会議員、取材日：平成27年5月4日

震災当時は市会議員で3月本会議で議会中だった。議案は総て終わり解散前に議員発議があり、審議終了時、地震が来た。もしその発議がなかったら、全員議場を出て帰宅するべく駐車場に向かい、乗車し、或いは発車した者もいたかも知れない、そうすると駐車場を襲った津波に襲われ大変な事になってしまったと思う。発議した議員には感謝しなければならない。皆市役所6階に閉じ込められた状態になった。職員の避難、町内からの避難、役所に用事があって来ていた人達も一緒に6階に閉じ込められたわけだ。人数は２００~３００人位いただろうか。ストーブが設置されたが石油が少なく、最小限で使用するようにといわれ、ともしび程度で使用した。翌朝までヤクルト1本の提供を受けた。翌日は駐車場の水も引いていたので、自由行動となり、歩いて西町まで行き、いとこの車を借用し、花輪橋を渡り津軽石の稲荷橋を越え、赤前を通り堀内まで山道を通り帰宅した。

自宅は高台にあり地盤も良いことから心配はしていなかったが、地域の事が心配だった。

漁協の災害対策本部の立ち上げに参加した。その中では対策の計画が役所・自治会・消防・漁協等に分担が決められず困った。

2、3日後に最初は岩手県から、後に宮古市から、瓦礫の集積場所の選定の依頼があり、5か所の選定を行い、山林伐採など行った（重茂里・袰クラ・熊の平）。我々はその場所に瓦礫を集積したが、市では瓦礫集積を赤前運動公園に指定したから、集積作業が二重手間になるからと、赤前運動公園に持ってくるように言われた。

支援物資は被災者対象であったが、テレビでの放送で一気に品物の数量・品物の種類も増えた。その配分については自治会に任された（舘１６０世帯）、その中に肉の大きな塊があったが、その分配には肉を切

らねばならず、苦労した。米は自分たちで供出した。被災者数は20世帯程だったが、外に瓦礫撤去や災害の後始末に働いている消防団の人達に対し、合わせて1日100人分くらいの給食を仕度した。消防団との賄いの共有は無理だと判断し、分離した。

宮城県沖地震発生の時は、いずれ東北規模の地震津波の警告があり、自治会で毎年そのための積立をしていて300万円くらいになっていた。それを提供して、皆に必要な長靴・カッパ等を組合から購入して配分した。そのほかに自治会会員160世帯に米を配分した。

被災後、毎朝6時頃から集会所で役員の集会を行い、その日の予定や連絡事項を確認して、その日の作業に当たった。この連絡会は2か月程続いた。

仮設住宅建設用地の確保を市から依頼されてなんとか確保した。その中で小学校用地の交渉も依頼され、教育委員会とも交渉した。水道・電気の工事も工事屋さんを手配する所から始まった。発電機が必要だった。

今回の被災に対して、多大の協力を戴いたクラブ生協とは、昭和50年代からの付き合いで、私が漁協の職員時代に始まった取引相手だった。価格は生産者原価にある割合を加算して購入するという事だった。それ以来の付き合いで。六ヶ所村の原子力廃棄物反対運動に重茂漁協が立ち上がったとき、クラブ生協も一緒にやった。

私も磯漁をする漁業組合員で、船を1艘保有していたが流失し、現在1艘確保している。

4　南地区

重茂里の重茂川の橋が落ち、重茂地区への道が閉鎖され、南は山田道が崩落し、重茂半島から孤立した。その中で津波による怪我人が出る。電話も消防無線も携帯電話も通じず、孤立無援の状態となった。翌日には海上自衛隊の艦船が川代に入ってきた。そこからの救援物資や医療支援などがあった。孤立化した地域内で、消防団長である中村卓郎氏等の活躍と、それを支えた地域の人々の努力はめざましいものがあった。中村氏は「失わなくてよい命を失った」と悔やむ。津波来襲に際し海に避難した漁船11隻があった。彼等11人がさびしかろうと、陸から火を焚き慰めた地域の人たちの一生懸命なやさしさがあった。

姉吉　木村民茂さん（昭和21年生）

千鶏の中村卓郎本部長をサポートした人、

取材日：平成26年8月20日

千鶏地区は避難所を2か所設け、仲間同士でうまくいったと思うし、救援物資の配分も楽にできた。姉吉は人家に被害はなく、避難所は設けなかった、ライフラインが壊滅状態だったので、5日くらいは乾燥場を使って食事は提供した。漁協組合役員の指導で「南地区対策本部」の看板も作った。怪我人の搬送、流亡者の捜索は分団長の指揮の下で、自衛隊と一緒に行った。

被害状況　漁船30艘　倉庫13棟

妻が宮古に行こうとしていたので、それを留めようと家に戻ったので助かったと思う。津波は画一的な物ではなく、いろいろな態様があることを知ってほしい。

震災の翌日、海上自衛隊の艦船「しらね」が舞鶴から川代に入ってきた。自衛艦艦載のヘリコプターが救援には大きな力となった。津波避難は多くの機関と連動性を持って行うよう認識してほしい。地震と津波の関係をもっと理解するよう指導するべきだろう。避難が必要ない地域に生活の基盤を設けるよう指導すべきだ。漁港整備はまだできていない。

津波の話として「津波碑」が話題になり見学者が多かった、その結果「これより下に家を建てるな」の碑の作者が色々推論された。

津波時のワカメの収穫準備は順調だった。

姉吉浜にある「観音様慰霊祭」の時、誰だったか忘れたが30～40年後には津波が来ると挨拶された人がいたので、津波は来るものだと思われていた。また、今まで津波は夜だったので、昼に来る津波は現実的に理解していなかったのではないか。

姉吉地区には重茂半島の東端に位置する鮎ヶ崎に灯台があり、この灯台の入口が姉吉浜である。明治39年・昭和8年の大震災によって壊滅的被害を受け、「津波の到達点より下に家を建てるな」という教訓が子々孫々伝えられ、姉吉浜に下りる道の途中に「これより下に家を建てるな」と刻んだ石碑がある。今回の震災には人家・人命とも被害はなかった。これについて同氏は平成23（２０１１）年9月18日付け「岩手日報」の**「舫い　浜に生きる」**の中で、次のような感想を述べている。

（前略）

「津波を免れ、変わらず航路を照らし続ける灯台だが、港の姿は一変した。波が斜面を駆け上がる遡上高は県内最高レベルで、漁船約35隻は木っ端みじんになった。倉庫や漁具も流失し、キャンプ場も土砂に埋まってしまった。

石碑に刻まれた「此処より下に家を建てるな」との教訓を守る同集落だが、当時地区を離れていた４人が行方不明になり、住民の悲しみは深い。「家が残っても　人がいなくなっては」と無念がにじむ木村さん。」（以下省略）

また、タウン誌『月刊　みやこわが町』２０１５年４月号　ＮＯ－４３６　に寄稿した記事があり掲載する。

70年間騙されたという感じ　木村民茂さん　重茂姉吉

11日は、大安日で養殖ワカメがちょうど始まった日だった。午前10時頃で終わり、昼食後に姉吉海岸で明日の準備をしていた。岸壁で船に乗ろうとした時に揺れを感じた。そこには同じように地区の数人がいた。漁場は隣の千鶏にあるので、船で千鶏漁港へ向かっていた人は、途中の崖から岩が崩れるのではないかと心配で動くにも動けず立っていた。

警報は「3㍍の津波」と聞こえた。弟は、揺れが収まるとすぐに津波を見るために千鶏に車で向かった。姉吉では、地形的に上から津波を見ることができない。

私は、トラックで荷物やフォークリフト、大事な物を少し高い所に移動するため、15分ぐらい行ったり来たりしていた。揺れが収まってから5分もしないうちに海が動いていた。水が沢山引くわけではないが、ザワザワとしていて潮が速いなと感じて、津波を見るかと近くの山にある観音様に登った。この高さで大丈夫かなと不安だったが「これで津波は終わったんじゃないですか」と下を歩いている人もいて数人が片付ける作業をしていた。

私が家を出る時、妻は宮古に行くと言っていたのを思い出し「大変だ、呼び戻さなければ」と電話したが通じない。それで自宅の電話から掛けてみようと戻った所で、間もなく何か音がしてびっくりした。津波が来たんだなと思い、少し下に下がった所に津波の痕跡があった。それで、これはすごい津波だと思い、怖くてそれ以上降りられないので、千鶏がどうなっているかと向かった。行って見ると大きな被害で、怪我人などを運んでいた。捜索もしたが、暗くなってきたので一旦自宅に戻った。

弟は、高台に居たので無事で、妻は重茂で給油して何も考えずに里を通り戻って来た。途中で妻の車を追い越した千鶏の人は津波に遭って流されたという。運なのか、紙一重で助かったり、亡くなったり色々ある。

沖から姉吉に戻った人は、他の漁師と車で千鶏に向かい、海岸に行こうとしたら津波が来て戻ったので助かった。その時の映像を見ると下の方に沢山人がいた。今回亡くなった姉吉の母子４人が、小学校から歩いて車まで戻る様子も映っていた。多分、海岸に人がいるので、自分達はそこより高いし、関係ない所にいるという気持ちで歩いていたのだろう。学校にバイバイと手を振りながらゆっくりと歩いていた。

私は千鶏に行かなくて良かった。私自身、津波を見た事がないので、見たいと思って山に登っている。もし、妻を呼び戻そうとしなければ、真っ先に千鶏に向かったと思う。弟は県道から見ていたが、私だったらそこではなく、やはり間近で見たいと思って小学校の校庭に行く。だから恐ろしい。もし、校長先生方から、「大丈夫ですかね、校

庭にいれば」と聞かれる。そう聞かれれば「此処に来る津波はねえ」と私は絶対言うだろう。もしそうしていたら、どうなっていたかと思うと、本当に本当に行かなくて良かったと思う。

姉吉地区は、明治29年の津波で71名、昭和8年では111名が亡くなっている。家は11軒だが、昔はこの辺がイカの漁場に一番近いので、千葉、富山、房州、越中さんなどが、季節になれば小屋を建ててイカを乾かして送っていた。そこで亡くなった60名を含めて、111名も亡くなっている。でも、千鶏では、昭和8年の死者が0名だったので、私たちが知る限り、津波と言えば姉吉が怖い所だとなった。おそらく千鶏の人達もそう思っていただろう。だが、資料を見ると千鶏でも明治の津波で家が17軒流出し、70名も亡くなっている。昭和8年が0名だったので、明治の被害を考えなかったのだろうか。

だから今回、石浜、千鶏にもここまで津波が来たという碑を建てた。今では明治の津波がこの辺まで来たと言う話を聞いても、はっきり何処なのかわからなかった。石碑があれば皆がその上に逃げると思う。

重茂の南地区自治会では、昭和8年から50年後の供養で漁港近くの山に観音様を建てた。毎年6月11日の供養法会には、遠方からも遺族が来て70名ぐらい集まっていた。毎年各地区の会長から挨拶があり、30年以内に90数%の確率で津波が来ると言われているので、3度あんな悲惨な目に遭わないようにしようと言っていた。それを話した人達も今回皆流されてしまった。

今回の津波で観音様もなくなったので、少し残っていた維持費と各地区から出し合ったお金で、4か所に到達地点の石碑を建てた。津波といえば姉吉で、他はあまり関係ないという意識があったかもしれない。津波が住宅地域まで上がるのがわかり、明治の津波で70名も亡くなっているから、それまでの住宅地域より高い所まで上がっていたのではないかと思っている

千鶏の映像を見ると、あの行為はなんだったんだろうかと考えさせられる。海岸に何十人もいて、船を引っ張ったりしている異様な光景だ。避難意識が全くないようで、もう津波は第1波で終わりだろうという感じ。

言葉は悪いが、これまで70数年騙されてきたという思いがある。チリ津波でも、十勝沖地震でもこの辺は殆ど波の動きがなかった。3月9日の地震で今度こそ津波だと思っても来ない。70年間、騙されているから、あれで心は変わっていくのだなと思う。

津波が来ると思っていたかもしれないが、浜辺に片付けに行っていた。自分達の判断で此処までは来ないと思った所にいたのだろう。私もそうだが津波を見た事がないので、山に近いし海からこの距離なら津波を見てからでも逃げられるものだと思っていたかもしれない。ところが、映像を見ると一瞬でプールのようになる。宮古市街とも違い、逃げる事はできないものだと感じた。今回初めて昼間の津波の映像が残っているので貴重だと思う。

地震が大きいから津波だと思う方は多かっただろうが、またかと思う人もいただろう。明治の地震は、揺れが長くても小さかったというから、地震の大きさだけで判断しても駄目だ。どんな時でも逃げなければならないのだろうが、長年の繰り返しだと心が変わってくる。だから、せめて住宅は過去に津波が届かなかった所に建てて置かなければならないのかなと思う。堤防では防ぎきれないものがある。

姉吉では明治と昭和の津波で11軒流されて、すぐ11軒が再建された。昔は、1軒の家に子どもが多くても仕事がなかった。木は高く売れ、山は値打ちがあったし、少し畑があれば自給自足できる。先祖の墓を守るということも大事だったので、すぐ千鶏と石浜から、親戚がお前とお前が一緒になって、この家を起ちあげなさいと11軒が再建された。ここに来れば、すぐ家長になれるから案外簡単に復興できた。ほとんど千鶏、石浜の親戚が来ている。山に値打ちがあった事、ご先祖様を守るという事が大切にされてきたので、簡単に再建できたが、今は難しいだろう。もし流されたら誰もいなくなる

かもしれない。今回津波に会わなくても2軒も減っている。津波のショックもあるだろう。年寄りが娘の所に移るなど、津波が来なくてもやはり影響がある。

今はクレーンで船を出すが、この地区ではまだ使えない。港が復旧しないと漁業をやる人がいなくなるのではないかと心配だ。マツモやフノリを取る時期でも、指をくわえて見ているような状態だ。港が復旧するまで時間がかかりそうだし、その間にまた家がなくならないようにと心配している。漁業で生活しているので、海に出ない事にはどうにもならない。

姉吉にある石碑は、昭和8年の津波後に建った。朝日新聞社に集まった義援金を、各地区に分けて、残った金で建てたと書いてある。重茂地区に全部残っているが、「ここより下に建てるな」という文があるのは姉吉だけで、他はチリ津波記念碑となっている。2度も全滅したから、昭和8年で波が上がった所に観音様を建てた。その時助かったおばさんは、東京の孤児院に行き、後に戻って重茂で嫁になった。現在90歳を過ぎたおばさんは、当時お産で実家に戻り助かったが、夫や子どもと両親が亡くなった。その時は、以前キャンプ場だった所に家があった。明治には、更に海に近い灯台の登り口に家があったそうだ。

現在、石碑の下に建つ家は無いが、姉吉の石の浜も沈下でなくなり、ワカメや昆布を乾かす事もなくなった。

千鶏　中村卓郎さん（昭和30年生）

二十五分団分団長　姉吉・川代・千鶏・石浜を所管　災害前団員29名　災害後26名

自衛隊出動時の重茂北部対策本部長となる。自衛隊本部は老木を宿所とした。取材日：平成26年1月19日

自宅で地震に遭う。すぐ車で分団に行って分団屯所に車を預けた。団員2人は消防車に乗って避難の広報活動中被災して死亡した。1人は宮古に行く途中地震に遭い、自宅に戻り半纏を着てそのまま行方不明となった。4地区の団員は現地に留まり人々を誘導しろと言うことにした。本来は分団に全員集合の指示をすることにしていたが、地区中心に考えた。

千鶏の人々は海岸（学校の下）で津波を見学していたので、その避難と誘導をしたが、人が増えるだけで避難してくれなかった。県道は津波を見に行く人で渋滞していた。昭和8年以後の津波が小さかった事もあったのか、危険という認識がなかったのかも知れない。

千鶏地区で死亡者（千鶏地区死亡者22人から23人）が多いのは、岸壁に津波見学者が多いのが原因だった。岸壁に津波が来ても誰も動かなかった。今までは引き汐があっても津波は少なかった。今までの津波来襲とは変わっていた。今回の引き汐はそれほどでもなかったが、いきなり津波が来て湾内は渦を巻いている状況だった。

川代発のバスは番屋の前に止まっていて、バスには避難した人々が多くいた。デイサービスの人も乗っていたので助かった。

消防無線・電話も通じなかった。怪我人が7～9人おり、民家や養殖の作業場で暖を取れる場所に収容した。

県北バス会社の業務無線で、市役所や消防署に連絡して防災ヘリを要求したが、現場で対応してくれと言われた。宮古もパニックになっていることを知ったが、現場で対応といっても、南北の道路が不通となり対応の方法もなかった。

3月11日の夜、怪我人が苦しがって大変だった。月山に無線中継基地があるが、月山が見える所まで行かないと通じなかったので、通信手段は県北バス会社の業務無線が何とか通じるだけだった。宮古には通じてもパニックで対応できなかった。

12日に自衛隊艦船「しらね」5千トンが舞鶴からヘリ2機を積んで川代に入って来た。医療担当官が入り、地区民の健康状態や常備薬等の情報を収集し対処してくれた。

里の橋が落ちていたので、怪我人を8人で支えて川越えし、送り送りで、対岸に待機していた救急車に乗せることができた。

中学校の校庭にヘリが入り透析患者と怪我人を宮古へ空輸した。

自衛隊幹部がヘリで重茂地区を視察したとき、高校生が手を振ったら、救援要求かと思ったのか、近くの田に着陸した。そこで病人等の輸送をお願いした。自衛隊ヘリで輸送された物資は各地区の代表者にお願いして、集約してもらい各戸に配分した。

地区内の指揮は分団長が指揮すべきと自衛隊に言われ、捜索の指揮をとった。警察も保安庁も同じ事を言っていた。要望と指揮系統を明確にしたいと言う配慮だったようだ。

通院している人が多く、自衛隊にお願いしたらドクターが入ってきて、病院のデータを調べて調剤してくれた。被災地は怪我人が多いのだが、重茂地区は通院者が多く良かったと思った。怪我人は既に病院にそれぞれ搬送していた。千鶏地区の炊き出しは2か所で行った。

災害による復興の中味を考えてほしいと言っているが、復興が復旧に変化してしまい、改善を要求しているがわかってくれない。行政は自衛隊が来るまで機能しなかった。

3日後に北海道からボランテアが入ってきた。その後1週間程して行政が入ってきた。山田町に繋がる大沢の道路は開通していた。

物資の配分や炊き出しは地区代表の方々にお願いした。

自宅は全壊した、約1メートル50センチ以上浸水だった。家屋は津波前の風で倒壊した。車が風で飛ばされるのを見た。その後津波が来た。爆風のようだった。津波3波前に湾内の底が全部見えた。船が庭の前に流れてきていたが、引き波に流され柵に引っかかり助かった。

平場を走った人は被災した。谷側や川沿いを逃げるのは危険だ。少し高台に登って助かった人があり、平地を走ることは危険だ。

夜にも津波は来ていたらしく、翌朝瓦礫が動いていた、普代ではこれにより被害があったと聞く。

二十五分団管内には水門はない。団員には地震があったら高台に逃げて戻ってくるなと言っている。

団員には屯所に集って指示を待つことなく、直ちに避難するよう指示している。

震災直後の平成23（２０１１）年3月23日の「岩手日報」に千鶏地区の様子を伝える記事があり、掲載する。

5日間の孤立　互助で耐える　燃料や食材分け合い　（千鶏地区の瓦礫から行方不明者を捜索する消防団員　写真）

「自分たちでやるしかない―。本州最東端に位置する宮古市の重茂半島。5日間孤立状態が続いた千鶏地区では、限られた燃料を住民で分け合い、食事も各家庭から持ち寄った材料で作る。地域が築いてきた互助の輪は、大津波でも引き裂かれていない。

11日大津波で、同市中心部と山田町とを結ぶ県道重茂半島線が寸断。重茂半島南東部は孤立した。市消防団第二十五分団長の中村卓郎さん（55）を本部長に「災害対策本部」をつくった。「前線基地」でもある本部は、取り残された路線バス。被災直後は消防無線が機能せず、唯一残された通信手段はバスの無線だった。けが人がいた。救急車を要請した。しかし、頼みの市役所も大打撃を受けている。断たれた陸路。負傷者を救急搬送できず、数人が命を落とした。「死なせなくてもいい人を死なせてしまった」。中村さんは悔やむ。「命をつなぐ道」が断たれた代償は、あまりにも大きかった。15日夕方には山田町方面の県道が復旧。孤立状態は、やっと解消された。限られたガソリンは災害救助用の車へ優先的に供給する。「住民同士の協力で成り立っている」と中村さんは語った。避難所では、女性や子どもたちが持ち寄った食材で温かいご飯やみそ汁を提供。仲野弘子さん（65）は「団体生活で協力し合ってやっている」と、地域の絆で危機に立ち向かっている。」

同年5月4日の同「岩手日報」第一部防災対策④「再興への道いわて東日本大震災検証と提言」の記事に千鶏地区の被災の様子と、中村分団長の記事があるので、全文掲載する。**「写真　母子4人が流された現場近くから瓦礫の散乱する集落にたつ中村分団長」**

一晩中叫び続けたSOSは、最後まで届かなかった。宮古市重茂の千鶏地区は津波が30メートルを超える高さに駆け上がり、海沿を走る県

道を寸断。電話も不通となり、約３００人が完全に孤立した。避難所の千鶏小学校や消防屯所が浸水し、住民はさらに高台の作業小屋に避難。電気も食糧も無い中、けが人が10人以上おり、2人は危篤だった。消防無線は市内全域から殺到した交信でパンク状態で、全く通じない。同地区消防団の中村卓郎分団長（56）は、同地区走行中に津波で立ち往生した路線バスの無線機に最後の望みを掛けた。「けが人がいる。早くしないと死んでしまう」「ヘリはないのか。自衛隊は来られないのか。とにかく何でもいいから助けてくれ」「何とかしてください」と、家族が泣いて背中にすがる。雑音だらけの無線機に夜明けまで叫び続けたが、結局なにもできぬまま2人は亡くなった。バス無線は隣の重茂地区までは通じていたが、そこから先の連絡がうまく取れなかったという。数日後ＮＴＴが衛星携帯電話を貸してくれた。「海沿いの県道1本の集落が、津波で孤立するのはわかっていたはず。どうして事前に配備しなかったんだ。」中村分団長はやりきれない。同地区にはもう一つ無念がある。千鶏小から避難しようとした母子４人が、千鶏漁港近くで車ごと津波にのまれ、全員が死亡または行方不明となった。同校は高台にあるが、集落に通じる道は低い漁港前を通る。住民は長年「危険な場所を通らず避難できるように」と、同校と高台の県道を直接つなぐ道路の整備を求めていた。だが同市は千鶏地区のような孤立の可能性がある集落に衛星携帯電話を1台も配備していなかった。道路整備も、集落が孤立しないような幹線の整備を含めて、長年地域から要望されていたが、厳しい財政事情などを理由に延び延びにしていた。漁業畠山正勝さん（50）は「結局、住民が死ぬまでなしのつぶてだった」と唇をかむ。今後の対策について、同市の飯岡健志危機管理課長は「防災計画の見直しの中で検討することになるだろう」と述べるにとどめる。中村分団長は「選挙のたびに政治家は調子のいいことを言ったが、結局『予算がない』と何もしなかった。確かに千鶏は小さな集落だが、そこに住む人の命を何だと思っているんだ」と憤る。

津波による孤立集落

リアス式海岸が続く三陸沿岸は海岸線沿をぐるりと回るように道路や配線、電話線が延びている所が多く、津波の被害を受けやすい。それらを放射状に配した場合に比べ、被害箇所が多く延長も長くなるため復旧にも時間を要し、長時間孤立状態となる集落が発生した。東北電力は主な集落に電源車を派遣したほか、ＮＴＴ東日本も４月25日正午現在、県内１２７箇所に特設公衆電話３０８台を設置し対応した。

千鶏　佐藤　盛さん（昭和35年生）

漁協南区総代議長　千鶏養殖組合長、取材日：平成26年９月３日

ワカメ収穫後出荷の準備をしている時期に地震に遭った。

家に帰る途中、道の登り口の神社で津波を見ていた。その後学校裏で見ていると、小学校生徒が避難していて、一部は2階に避難していた。波が引いてから帰ったようだった。

怪我人や死亡者がいて避難させた。県北バスが留まっていて、デイサービスセンターの職員が乗っていた。消防団員は屯所の前で消防車が転覆し1人は山に逃げ、1人は屯所に逃げたが被災死亡した。暗くなるまで捜索していた。

バスの業務無線は重茂営業所にしか通じず、怪我人は里の橋の決壊したところから鮭を入れる大きなプレートに乗せ川を渡り、里の墓所のところで待機していた救急車に引き渡した。

自衛艦は川代に入りそこからヘリで物資が運ばれた。

1週間程して漁協役員・総代議長が組合に招集され、「災害対策本部」「災害対策本部南地区」を立ち上げ、衛星電話が設置された。

組合指示で本部を立ち上げた。1か月後、漁船の捜索の話があった。青森（大間）で3～4隻、秋田で4隻、中古船を買い入れた。

千鶏の対策本部は6月頃まであった。自衛隊（海上自衛隊）は6月頃撤収した。

陸上自衛隊は物資を運んでくれた。里の橋を作ったが一時破損した。現在の橋は自衛隊が作ったものかどうかわからない。重茂の迂回路は

十二神山から続く藤畑道は雪のため断念し、1週間ぐらいして現在の橋ができた。風呂が不自由だった。避難場所は自宅を当てたが、もう1軒は乾燥場を当てた。自治会長が亡くなり、そのため総代議長が代行せざるを得なかった。5月頃避難所を解散した。当所には避難者が50人位いたが、食事は各家の冷凍ストッカーや食料品を提出して貰った。避難所になってからソフトバンクから携帯電話が設置された。自衛隊からは支援物資が来たが、備蓄して姉吉・千鶏・石浜・川代に配布した。

養殖施設の復旧は早くて良かった。漁船2艘流失、現在2艘増して4隻となった。ワカメの塩蔵施設は海岸にあったので、全部流失した。養殖施設も補助対象になり、90％の補助で購入した。早くわかれば養殖をやめない人もいたかも知れない。

千鶏　上野敏子さん（昭和17年生）

商店経営、取材日：平成26年9月3日

お店でテレビを見ていたら地震のテロップが流れた。

津波は家の隣の山手の村社千鶏神社に上がって見ていた。家の脇の川に津波の波が流れてきていた。自宅に津波は入らなかった。

余震の度に出たり入ったりしていた。消防の人にはなぜ逃げないのかと言われた。親戚の被災者4家族7人を受け入れた。

当初防災無線で津波は3㍍と言っていたので、安心していた人が多かった。明治29年・昭和8年にも津波が来なかったから大丈夫という認識があった。千鶏は被災しないという認識だった。

昼の被災だったからこの程度で済んだが、夜だったらひどいことになったと思う。外国の地震や津波を見て大変だと思っていたが、我が身に現実のものとなった。避難所に怪我人が3～4人入ってきた。可哀想だった。近隣の人々の声、学校生徒の声が聞こえなくなり、悲しいし寂しい思いがする。姉が家と共に流れてしまった。千鶏地区では9人の行方不明者がある。津波で流された人の数を数えるのは悲しい。

瓦礫排除で冬まで働いた、死体捜索員と地域の人との心のずれがあるように感じた。自衛隊の援助はありがたかった。仮設救援所に4月まで入っていた。

お店は、津波の日に全ての商品がなくなり、お店はやめてしまった。仏様に点していた蝋燭も出してやった。

息子は、千鶏は全滅と聞き、漁協に行ったら死亡者の中に名前がなく、安心したと言っていた。私も息子は被災したものと思い諦めていたが、会って涙の対面となった。

衛星電話が入って生存を確認された。余震が続き避難所に居ても長靴を履いて寝ていた。

千鶏　馬場栄一さん（昭和9年生）

漁協組合員　妻　長男　娘（千鶏小学校用務員）、

取材日：平成26年9月4日

地震時、自宅前の養殖作業小屋で塩蔵ワカメの処理をしながらラジオで津波来襲を聞いた。浜に下りて千鶏神社の前で海を見ていた。

長男は船で沖に逃げようとしたが、大きい波が来るから逃げろと言われ、オートバイで逃げて助かった。

千鶏小学校の用務員の娘は、学校の生徒は全部帰し、遠くの生徒だけが残った。

教員住宅が学校裏にあり、男の先生はそこに泊まった。夕方女の先生4人、男の先生、川代・石浜の生徒3～4人が当家に避難してきた。千鶏から石浜までは津波後行けなかった。先生方は2～3日後に里の橋の壊れた川を背負われて送られて帰って行った。食事は避難所で食べた。津波後4日目に大沢地区の人の助力によって、道の瓦礫を撤去し通れるようになった。船2艘破損、養殖施設も破損。長男がワカメボイルの釜に使用するガスの処理点検を手伝いに行った。

チリ地震津波の時山田にいて、漁船の避難を手伝ったので、その時の津波の経験があった。前の地震津波の時はこれほどの津波にならなかった。今回の引き潮はガラス眼鏡（アワビやウニを捕るときに海底を見る箱眼鏡）で見るような波の引きがあった。

飲用水はわき水がありそれを利用した。薪ストーブがあったので炊き出しに供給をした。ガソリンがないという噂があったので動けなかったが、灯油等は船にタンクで積んでいたのでそれを持ってきて使った。

千鶏　上野秋男（ときお）さん（昭和10年生）

漁協組合員　本人　妻　息子夫婦、

取材日：平成26年9月4日

地震時はワカメ処理のため船着き場の作業場にいた。沖を見たら根滝山の斜面が崩れるのを見ている間に、沖が白くなってきた。行政無線では3メートル位という事だったが、そんなもんではないと判断し、バーナー等を引き上げようとしたが、家が心配だったので急いで家に帰った。息子は学校に孫を迎えに行き、津波をやっと逃れたようだった。

船は2艘の内1艘は学校に上がっていたが、1艘は調査に使用したが廃棄した。

腰痛により2か月程休んだ。浜から帰る途中2人程に声を掛けて車で送って貰ったが、また浜に帰ろうとするので怒って無理に家に帰した。

防災無線は聞こえなかったが、海を見てきたから判ったので逃げられた。地震後、自分は家にいたが、家族は親戚の上屋敷にあずけ、外の親戚6人を受け入れた。分家になったのは昭和8年だったと思う。

養殖はやめた。南地区の養殖数は半分以下になった。川代は誰もしなくなった。その一方で養殖施設を増やしている人もいる。学校行事と地域行事の連携を図ろうという声が出ている。

千鶏　上須賀為信さん（昭和20年生）

漁協組合員　民生委員　農業委員　本人　息子2人、

取材日：平成26年9月4日

地震時は自宅にいた。津波の時、浜に出て道具をとってきた。船に乗って沖に出ようとしたが、一番干潮時で、船は動かなかった。直ぐ波が来て湾内が渦を巻いている（2波か）中、全速力で沖に出た。馬力が大きかったから沖に出られたと思う。その後10分以内に津波が来た。その後大きな3波が来た。海底が深いから波が被さるようなことはなく、盛り上がるだけだった。漁師仲間でも、津波が来たら沖に逃げろという話はあったので、港から2キロメートル位離れた。養殖事業者だから船は助けたいと思った。

今まで見たことのないような景色が見えた。引き波に押されて沖に流された。津波の波の動きは船に乗っていると上下している感じだった。飲料水は船に積んでいた。大きい石崎忠彦氏の船に係留したが、漂流物が多く（蛎棚・流れ物）、途中で係留を切って（係留していると連鎖反応で被災するということか）、時を見て係留した。石崎氏の船（皆が乗った母船）にはテレビがあり、見ていた。雪の降る中11人が母船で暖を取った。11隻の船が残って、後日の瓦礫の漂流物の処理はうまくいった。

翌日1隻の漁船に全員乗り、残りの船は養殖の錨に係留して皆で石浜の港に帰った。湾内は瓦礫が溢れ死体が漂流しており、30分しない内にそれぞれの船に戻り、山田町大沢港に係留した。大沢からは一時石浜に入った時にトラックを手配していたのでそれに乗って全員千鶏に帰った。

翌日の湾内は家は流れる、瓦礫は浮遊するで、何もかもひどいものだった。重茂漁協の船も流れていたが後日撤収した。数日後被害の大きさを知り大変なことだと思った。

発電機は船から持ってきたし、バーナーは燃料があったし、問題はなかった。トイレは簡易式のものを作った。調理用のガスは大きなボンベもあったし、自衛隊も持ってきてくれた。発電機は大小2つあり助かった。自衛隊からの支援物資があり、不自由はなかった。その他の支援物資は大沢道ができたので、大沢側から入ってきた。息子は鍬ヶ崎に行っていたが3日目に帰ってきた。衛星通信電話がソフトバンクから2台入ってきた。

漁船は4艘あったが、3艘は流れ、1艘しか残らなかった。1艘は山田の人が山においてあった物を提供してくれた。災害復興で新造船

が入って来てから、買ってきた中古船は使用しなくなった。
当初働くこともできず、将来が見えず大変苦しかった。
重茂の仮設住宅は集落毎に入っていて、被災状況の調査は楽だった。
瓦礫を撤去し、養殖施設を準備できるようになって仕事の目処がつき、初めて安心できた。塩蔵施設は残っていたので共同利用して収穫できた。ワタリガニが大漁の年は海の収穫は良くないと言われていたが、今年は大漁だという。今年は鮭も大漁だが、ワタリガニも大漁ということで心配している。津波前もワタリガニが大漁だったという。養殖事業は家族構成とやる気で、それが所得の差だ。今年は特に天然ワカメ・昆布は良い。ただビッチリ密植しているため成長が悪い。
加工場は若い人が少なくなっている。重茂は家族で養殖していない人が多くなっている。

千鶏　高屋敷民夫さん（昭和25年生）
現自治会会長　本人　息子　2人組合員、
取材日：平成26年9月4日
地震の時は家の前の作業場でワカメの処理作業をしていた。津波が来ると思い、浜に行って家族全員引き上げさせ、千鶏小学校に迎えに行った。最初ドンという音がした（津波の風圧か）。その後ガーガーという音がした（瓦礫の流れる音か）。瓦礫の下になっている人がいたので、チェンソーで瓦礫を切って助けたところ、打撲だった。車の下になっている人もいた（打撲）ので、家に入れて着替えさせ休ませた。　川端の倉庫に50人位避難させストーブで暖を取った。息子は浜にいて車で学校まで逃げ、脇の坂を上がって助かった。
津波後養殖施設も破壊され、今後の生活が不安になったが、津波後のワカメ・ウニ・アワビの漁が良かったので助かった。漁船3隻全部流失、山に置いた船と買った船2艘を使うことができた。
山田町大沢在住の姉と、2番目の息子と孫3人が死亡した。
大沢で船大工に船を見つけてもらい、修理してもらった。
玄米60㌔を持って精米しに松山まで行った。その後配給があったが、一晩に4升炊きの釜で焚き出しを行った。水はわき水があった。
メデイアの取材には困った。道路は破壊され、車のパンクが頻発して困った。お風呂は発電機で4時間位かかって沸かし順番に入った。避難者は4月末頃までいた。
家族や家を失った人は寂しくてイヤだと言って避難者全員で泊まっていた。余震にかなり敏感になっていた。
多くの家で重機を持っていたので、道路の瓦礫撤収は早かった。
養殖施設が10月頃にできて安心した。重茂漁協の集まり（全員協議会）が早く開催してくれてよかった。
自治会の幹部3人が死亡して、指示する人がなく大変だった。

石浜　石崎賢一さん（昭和15年生）
専業漁業、取材日：平成28年6月20日
ワカメ・昆布の養殖開始の昭和39年代までは　田8反歩、畑4反歩の耕作と山林経営をしていた。重茂地区内では耕作面積は多い方だったと思う。養殖開始後、農地はワカメ・昆布の乾燥場となった。
年間の漁業サイクル
春　雑海藻・ウニ・昆布・ワカメ
夏　ウニ
秋　昆布
冬　薪炭生産
地震の当日は、ワカメ収穫後3日目に当たり、宮古から昼過ぎに自宅に戻り、午後からのワカメの芯抜きの準備をしていた。妻と同居の長男は孫の卒業式のため秋田に行っていた。
芯取りをしていて間もなく地震があった。家は地盤が良いので大きな揺れとは感じなかった。隣家に行って海を見ていた。皆は神社の下で海を見ていた。第1波で船が流れた。それで津波は終わったと思って下の浜の方に行ってみた。漁船を助けようとしていた10人くらいが船を沖に出して逃げようとした。逃げた人は大きな船に舫い、一晩明かして翌日帰ってきた。

道路は北の重茂里に繋がる川の橋が落ち、南は山田と繋がる道が破損し、まさに陸の孤島となった。

冷蔵庫や冷凍庫が流れてきたり、被災した家や被災しなかった家でも、大きな冷蔵庫や冷凍庫があったが、電気が止まってしまったので、処分のためもあり皆で食べた。そのほかにも自衛隊の非常食の配給もあり、食には困らなかった。自衛隊以外に役所や、重茂漁協と取引のある「クラブ生協」の支援もあった。震災の翌日川代に自衛隊の戦艦「しらね」が入り、ヘリで隊員が来てくれ、医師の派遣もあり薬剤の頒布をしてくれた。

津波は自宅の前の沢を登り、帰り波が家の西側と1階部分に入り、かなりの部分が破壊された。家の前に周辺の瓦礫が集積し整理するのに大変困った。石浜地区の世帯数は32戸で、人口は30～40人だ。

自宅前にも瓦礫が積まっていたが、地域中心という事で自宅前には手が付かなかった、隣家の流された上須賀良敏氏にお願いして重機で排除してもらった。当時は寒く電気もなかったので、部落総出の瓦礫撤去は3時頃には終わっていたので、その余った時間で上須賀さんにお願いしてやってもらった。上須賀家の冷凍ストッカーには冷凍品が沢山詰まっており分けてもらった。

12日に自衛隊が重茂南区全体をヘリコプターで調査し、着陸場所を選定し、12日に川代に艦船が入って来て、翌13日から支援物資が入ってきた。個人の倉庫に物資を集約し、瓦礫撤去作業終了後に配分した。救援物資は自衛隊の缶詰が先に入ってきた。救援物資は根滝漁場の番屋の広場にヘリの着陸地を定め輸送してきた。

定期バスは千鶏の高台に暫く止まっていて、中にデイサービスセンターの職員が乗っており、色々アドバイスして貰い、被災者の避難と支援の場所になった。

石浜地区の流家は6軒で親戚の家に仮住まいし、炊き出しは地域としては行わなかった。

津波の被害を避けるため、沖に避難した漁船が11隻あり、母船となる5～6トンの漁船を中心にしてロープで舫い夜を明かし、陸から船の明かりが見えていた。船の人達が寂しいだろうと、陸からも焚き火をして励ました。船の避難者は全て無事だった。その他の船は40隻全て流失した。船を買いに行ったのは重茂の人が早く6月頃だと思う。沖に流れた船を捜索し、壊れても使える船は材料を買い現場で修理したものが7～8艘あった。共同利用船は足りたが、エンジンがなく組合で購入していた物を使用した。

私自身と息子2人が正組合員なので、田畑は少しあったが専業漁業であり船がなければ仕事にならず、至急手配しなければならなかった。組合の定置漁業が若い人達の働き場所となっている。

根滝漁場・舘が崎には50人、平磯・与奈には50～60人、其の他に賄い人が雇われている。

石浜にはほぼ全戸に田畑がある。資金導入があり、昭和35～40年頃開田が行われ、その後に田畑所有者が増えた。しかしヤマセの影響で収量が少なく、花輪（閉伊川筋の村）で米が10俵とれる時でも、石浜は4俵くらいしか収穫できなかった。

養殖の昆布・ワカメが始まる前は、重茂地区で漁業をしても半年位しか生活できず、静岡・千葉・下北・北海道に出稼ぎしていた。昭和40年代になって養殖昆布・ワカメの栽培が始まり、生活が一変した。養殖栽培は若い人がいないとできない。少子高齢化のなか養殖栽培生産者も減少している。

昭和8年の津波後に高台に住居を構えて以降、下に住まいを移す人が多くなった。その原因は川の水を利用するためであった。簡易水道は昭和40年頃布設された。

石浜・千鶏の自治会長が被災死亡し、指揮する人がいなかった。漁協役員が対策本部支部を設置したが、何をしたらいいのかわからない状態だった。しかし自衛隊の要望によって、千鶏消防団長が本部長となり、自衛隊との関係がよくなり仕事がスムーズに行われた。

隣にあった氏神（石浜神社）も境内が浸水し、境内下の鳥居が破壊された。震災の年に修理等がおわり、翌年祭礼を行った。

石浜　畠山武文さん（昭和3年生）

取材日：平成26年8月19日

地震の時は自宅にいたので、すぐ裏山に逃げた。昭和8年の津波は今回より小さかったが、今回は大きかった。石浜地区の流失家屋は5軒だった。浜はワカメ収穫の時期であり、多くの人が浜にいて、県道の前の道路に並んで見ていた。船1艘が流失した。津波は家の前の沢川にも上がってきて、養殖の棚が流れていた。

津波前まで仕事をしていたが、今は手伝い程度でほとんど海と関わりを持っていない。

漁船が沖に避難することについては、昭和8年の前の津波の頃は手動だったから無理だと思うが、今は動力船で馬力も大きいから津波に対抗できたと思う。重茂沿岸は海が深いから漁船が海に避難もできたと思うが、海が浅かったら波に転覆させられたと思う。

津波で困ったのは水道・電気が止まったこと、電話が通じなくなったこと、自動車が瓦礫で動けなかったことなどだ。

ガソリン・灯油は組合のガソリンスタンドで10リットル・50リットルと給油できたので、不自由はなかった。また油類は冬場のことでもあり各家でも備蓄していた。

家が流失した人は親戚が面倒を見てくれた。

南の道は山田大沢の道が破壊され、北は里の重茂川の橋が破壊され、重茂半島の中で石浜は孤立してしまった。大沢・里の道路が復旧したので安心した。

自衛隊の艦船が川代に入ってきてくれて、色々活躍してくれた。

病人のことや薬は自衛隊が手配してくれた。里の橋が破壊され旧道を廻らねばならず困ったが、自衛隊が仮設の橋を造ってくれた。

救急自衛隊のヘリは、要請しても花巻空港までで、花巻に着いてからの対応はしてもらえず、お金も持っていかず大変困った。

食事には困らなかった。震災後2日目から自衛隊が入ってきてくれて、救援物資を届けてくれた。自衛隊と消防団の連携がよかったが、その苦労は大変だったと思う。

救援物資の食品は、自衛隊・宮古市・クラブ生協から供給され、飲料水もあり困ることはなかった。

漁協の車で新里村の「ゆったり館」に連れて行ってもらい、手足を伸ばしゆっくり風呂に入れたのは大変うれしい事の一つだった。

昭和8年後に高台移転したが、昭和20年頃から1戸また1戸と連動するように海近くに移動した。

石浜　石崎忠彦さん（昭和27年生）

取材日：平成26年8月20日

地震時は石浜の石崎賢一氏の4軒西側の自宅にいた。

津波が来ると弟の奥さんに「何も持たないでいいから早く高台に逃げろ」と言って、港に向かった。漁船（4・5トン）を沖に避難させるためだ。津波が来るときは沖に船を避難させる事は常識である。同じように11人（1トン未満）も沖に避難させた。鮭ヶ埼灯台の見える位置から2キロ位沖に出た。様子を見て石浜の見える位置に回航して待機した。地震で揺れた波が船を叩くので地震が来ていることを知った。

一緒に逃げた11人は、流れてきた養殖用のロープを拾い、それで各船を繋ぎ自分の船を母船として繋いだ。翌日小さい船1艘で漁港に入ったが、瓦礫が流れ込んでいて入港できないと判断し、山田に向かった。山田の港に夕刻入ったが、瓦礫が流れていたり、途中家が流れてきていたり、漁具や漁船が流れてくるなど大変だった。

山田の大沢港には翌日入り、大沢からは道路の破壊された所を歩き、連絡してあった迎えの自動車に乗って皆帰った。

帰ったら家が流されていたが、家族の被害はなかった。母はデイサービスに行っていたので助かった。石崎賢一氏宅に避難して3か月いた。3か月後に仮設住宅ができたので移転した。

船で港を出る時、港の中は干上がっていたので、そのままでは発進できないので、波が来る時を狙って全速力で港を出た。少し遅れると港に入って来る津波の渦に巻き込まれるのでタイミングが大事だった。沖に出た11人と一緒に自分の船に移り、船のエンジンかけ、暖房もラ

イトも点けて夜を明かした。陸では淋しいだろうと焚き火をしてくれた。その火は船から見えていた。

最初の津波では養殖施設は大丈夫と思っていたが、2波で施設が見えなくなった。

船にはジュースしかなく皆で飲んだ。夜は寒く、船内にある物を捜して着たが、足りない人もあり、可哀想だった。

漁協の監視船も沖に逃げていたので、互いに連絡し合いながら夜を明かした。監視船は沖から港に入ってこられなかったのではないか。普段は里漁港に繋いでいたが、津波後は宮古に繋いでいた。山田からの漂流物や漁船・モーターボートが流れてきていて、繋いでおいて返した物も2艘ばかりある。山田からも避難船が集まっていた。

船を沖に出す時は死ぬなんて考えていなかった。漁船の燃料はワカメの養殖時期であり十分あった。船で必死に沖に逃げるのはもうたくさんだ、今後は陸の高台に逃げる。

石浜　畠山玲子さん（昭和26年生）

取材日：平成26年9月3日

地震の時、家の前の作業場でワカメの芯抜きをしていた。息子は消防団で屯所に詰めていた。自分は孫を背負って自宅の上にある県道に逃げた。旦那は津軽石から堀内へ、そして熊の平に抜けたが、その後里に津波が入り危なかったが助かった。

千鶏小学校の孫は学校に車で迎え帰った。最初の子供達は学校に留めておかれたと言う。その後津波は家の前の作業場に入り、フォークリフトの電源がショートしてエンジンがかかったのか煙を出していた。

前の家も流され、作業場の窓から津波が入っていた。本屋は大規模半壊、1階が被災したので2階に泊まった。高台の近所の家に泊めてもらっていたが、2日程して盗難があるという話があり、2階に泊まることにした。小学4年の子が、高台からおばあさんと子供が流される様子を見ていたらしく、今でも脳裏から離れないようだ。

波の引きが早く、岸壁がドンドン上がってゆくのが見え、波が引いて岸壁がむきだしになっていったので、大きい津波だと思った。石崎賢一宅は海抜20㍍というので、自宅も同じ海抜だと思う。普段はそんな高低差なんて感じなかったが、高さの違いなんて一寸見では判断できない。

茶箪笥の引き出しがそっくり流されたが、海が奇麗だったのか、塩水につかっただけで奇麗だった。泥は上がらず、殆ど砂だった。箪笥の着物類も泥が入っておらず奇麗だった。

家族　畠山光八　玲子　長男光久（消防）嫁シオリ
ナギサ（中一　当時小4）　澪迅（7歳）音波（6歳）
祖母　（山田町カロ岳養護施設で被災死）

食事は分家で戴いた。支援を待つことなく保存米を食べようと思ったが、ガラスの破片が入っていた。冷凍ストッカーや冷蔵庫も倒れたが、中味は大丈夫だったし、ワカメの収穫時期でもあったので保存している食料はあった。冷凍庫には魚やアワビ・ウニもあり、支援に来た娘には被災者が食べるようなものではないと笑われた。3日目から自衛隊の保存食の支援があり安心した。

余震が続き怖かった。今後の生活が不安だった。養殖施設の流失や、漁船の流失で海の仕事ができないのではないか不安だった。

ラジオの放送で自分の地域が一番悪いと思っていたが、新聞・ラジオで他の地方のことを知ったら、自分の地域はやや良い方だとわかった。

家の畳が新しく入った頃、祖母の遺骸が見つかったと知らせがあり、火葬して葬式も済ます事ができた。

宮古から来た人が、イモだけ食べているというので、にぎりめしと缶詰を持たせてやった。

被災者の自立支援をサポートするＮＰＯ法人が来たが、当家は自立していますねと言われ、電気釜1つ貰った。

支援物資について他所から来た人や、婚家先から帰った人などに対し支援物資の配分に苦言を呈する人もいたが、現在いる人には認めるべきだと思った、支援物資は被災した人のための物であり、その範囲

での公平化が大事だと思う。漁協ガソリンスタンドの供給は一時制限があったが、すぐ解除となった。

災害復興支援によって翌年から養殖ワカメを収穫できるようになり安心した。

漁船2艘が流失し、1隻は長男が沖に避難させた。沖から我が家を見た時2階が見えたので大丈夫だと思ったが不安だったという。翌12日午前8時頃帰ってきて安心した。12日朝にサッパ1隻に皆で乗り、石浜港の状況を確認し山田町大沢へ回航したのだという。

被災しても多くの支援で生活に困ることはなかったが、逆にその事が不安だった。支援は長く続くはずはないし、いつまで待てば普段の生活に戻れるのか、目処が立たなかったからだ。

瓦礫の片付け等は自力で行ったが、全部流失した人、流されない人は何もすることがない様子で、災害の不公平感を感じた。

津波が来る前はすごい凪だった。何か変わったことがなければ良いなと話している最中だった。

避難場所は前の山だが、地震時には石が崩れてくるので、崩れが落ち着いてから避難するように話していた。現在の住宅地は崖地危険地域になっている。避難する場所がないので、避難場所の確定を考慮すべきだろう。

第1部　各地域における東日本大震災
D　それぞれの震災

久保田滋子

1　スイスで想う「ふるさと宮古」
チャールズ　レンネル Charles Renner

元小百合幼稚園園長、カトリック司祭、1931年生
現在スイス・インメンゼー・ベトレヘム宣教会在住

レンネル神父は昭和6（1931）年アルプス山脈北側の美しい湖水地帯にあるウーリ州ビュルグレン（Kanton Uri Buerglen）で育った。当時、このあたりの少年は、夏休みの3か月間放牧を手伝い、ヤギと犬を連れてアルプスの牧場で1日過ごした。喉が渇くとヤギの乳を飲んだ。助産婦の母の荷物持ちをすることもあった。10人以上子供がいる家庭もめずらしくない時代で、ある家では17人目の子供が生まれ、どこに寝かせるのだろうと思ったら、出産したばかりの母親が「テーブルの下がまだ空いているわ」と台所に赤ん坊のベッドを置いたのを見たこともある。小学校を終えると、地元から推薦されて、ベトレヘム宣教会の神学校に進学した。アフリカ宣教を夢見ていたが、突然日本行を命じられ、昭和35（1960）年、チリ津波のあった年の11月5日にはじめて日本の土を踏んだ。盛岡の四ツ谷教会を経て、昭和45（1970）年宮古教会に着任し、以来平成12（2000）年に帰国するまで宮古で30年を過ごした。日本語は難しかったが、今思えば日本へ行かれたことは大変な幸運だった。アルプスの牧場から海の町宮古へやってきて、すべてが新鮮だった。はじめの頃は、外国人を見たこともないような町で一人、孤独を感じたこともあったが、素直な子供達と暖かい人々、美しい海に魅了された。小百合幼稚園を作り上げ、子供を抱きしめることを日課とした。日本語は子供達が先生だった。神父は修道院で共同生活をするため、私物はほとんど持たないが、小百合幼稚園の卒業アルバムは宝物で、今もスイスの修道院の自室に大切にしまってある。今でも宮古を心から愛している。

写真1　スイス、ベトレヘム会本部
2014/08/16　撮影：久保田滋子

2011年3月11日、ベトレヘム宣教会のテレビで、津波が堤防を乗り越える映像を見たときは言葉を失った。宮古がどうなったのか、情報を必死で集めた。小百合幼稚園在任中に親交のあった方が津波で亡くなったことを聞いたときはあまりのショックで眠れなかった。故郷の人々は神父が日本で宣教をしていたことを知っているので、津波の映像を見て多くの人が支援を申し出た。助産婦だったお母さんに取り上げられた人も「宮古のために」と寄付を申し出てくれた。地域の教会でも募金活動があった。日本に関心を持っている人がベトレヘム会にお金を持ってやってきたこともある。地元の少年合唱団もチャリティコンサートを開いてくれた。田舎の人々の中には、お金の流れがわからないという理由で、赤十字のような大きな団体に寄付をすることに抵抗を感じている人もいる。できれば直接被災者に届けたいというのが皆の気持ちだ。スイスと混乱の被災地はあまりに遠かったが、のちにこれらの善意は無事に宮古に届き、それがスイスの地元紙に掲載されたという話を聞いた。

今も心は宮古にあり、ときどきアルバムを出しては子供たちとの楽しかった日々を懐かしむ。小百合幼稚園で抱きしめた子供たちが、宮古の復興の原動力になってくれれば、こんなにうれしいことはない。

（取材日：2014年8月16日
スイス、インメンゼーのベトレヘム会本部にて）

2　鳥もと災害バスターズ

小幡勉　磯鶏の「カリー亭」、大通2丁目「鳥もと」マスター
㈲とりもと代表取締役

東京都目黒区出身の小幡さんは、田舎住まいに憧れて38年前に宮古に移住し、大通に「焼鳥居酒屋鳥もと」を開いた。21年前に知的障がい者就労の場として「カリー亭」を開設、現在、大通の「鳥もと」、磯鶏の「カリー亭」そして平成26年に建設した大通のレトルト食品工場は彼らの活躍の場になっている。鳥もと、カリー亭の被災時はカリー亭復活まで「鳥もと災害バスターズ」と名乗り、津波で浸水した家々の泥出し掃除などの作業をボランティアで行った。災害復旧の作業だけが目的ではなく、仕事の場を失った障がいをもつ従業員の生活リズムを維持することも目的の一つだった。

震災当日、妻は東京出張から14時45分宮古駅前着のバスで戻ってきた。14時46分、到着とほぼ同時に宮古駅で地震に遭遇、小幡さんは大通の「鳥もと」で仕込み作業中だった。ちょうど公務員の転勤の時期で、3月11日は送別会の予約でいっぱいだったため、知的障がい者の従業員は全員出勤していた。大津波警報を聞いて全員を寮に帰し、小幡さんは車で磯鶏の「カリー亭」の様子を見に行った。厨房に入ると、従業員はたまねぎの皮をむいていたので、ここでも全員を帰して、車で高台へ向かった。しかし、防波堤があるので全く海は見えない。高台に上る途中で一瞬海が見えたとき、港が波に洗われ始めているのを見て、はじめて津波の到来を知った。防波堤は海が見えないので、ある意味危険ではないかと思う。何も知らないうちに、一気にあふれた水にのまれた人と車は多かった。

「カリー亭」は、海側に小山があるので津波の直撃はうけなかった。防波堤を超えて流れ込んだ津波もほとんど隣のパチンコ屋の駐車場に流れて、周辺を見渡す限り被災した建築物等のガレキが広がる中、浸水もせず奇跡的に無傷だった。また、プロパンガスだったので、しばらくはガスにも不自由しなかった。近所の缶詰工場からたくさん缶詰が流れ出し、近所の人たちはみなそれを食べて数日をしのいだ。むしろ大通の「鳥もと」のほうが被害が大きく、水につかり、壁が崩れ、大規模損壊と判定され、大々的な改修工事が必要だった。

水道、電気などのライフラインが復活した3月28日、カリー亭内のレトルト食品設備で、首都圏のデパートなどで販売するために製造しストックしておいたレトルトカレーと支援物資で届いた米を炊いてカレーひと皿350円で提供した。外部からは独自のルートでさまざまな支援があった。神戸のカレー屋からは、「被災地のカレー屋支援」という名目で義援金が届いた。このカレー屋は、遠く神戸から宮古までカレーを携えてきて、仮設住宅でカレーを振る舞った。また、栃木県のみそ屋からは無添加のフリーズドライの味噌汁が大量に届いた。「公共機関に寄付するとどこに行ってしまうかわからない、小幡さんが必要と思うところに届けて欲しい」と書き添えてあった。そこで旧知の陸前高田の醤油屋へ届けた。妻がソムリエの資格を持っているので、日本ソムリエ協会の田崎真也さんが炊き出しをしてくれた。それぞれの善意は無駄にすることなく、確実に被災者に届けることができた。支援はしたいが、市や社協へ送ることをためらう人もいると思う。「このようなことに役立ててほしい」ということが実現できる支援先はなかなか見つからない。実際、市へ送られた支援物資は体育館に山積みにされ、処理しきれていなかった。

仕事がないと肉体的にも精神的にも良くないので、障がいのある従業員にはとにかく何か仕事をしてもらうようにした。災害時の特別措置として被災し事業再開できない事業所の従業員は失業保険が下りた。またこれも特別措置として、事業所再開目的で、1日6時間以内という条件のもと、作業に従事した。鳥もと再開の平成24（2012）年11月まで、一部の従業員はこの制度を利用した。被災した「鳥もと」は改修工事を機に障がい者用に完全バリアフリーを施し、これからは町の障がい者の憩いの場にしてもらえればと思っている。

（取材日：2013年9月18日）

3　変わりゆく宮古

写真２　全国一のサンマ基地宮古港に 480 隻が集結
昭和 34（1959）年９月　撮影：北村嘉男

北村嘉男　㈲北村造船所出身、元小中学校教諭

昭和７（１９３２）年生

北村家の居間の鴨居には、昭和34（１９５９）年に嘉男さんが撮影し新聞に掲載された、宮古港の大きな写真が掛けられている。港を埋めるサンマ船は往時の賑わいを彷彿させる。宮古はかつて全国一を誇ったサンマ船の集結基地であり、写真２はそのピークをとらえものだ。あれから宮古は大きな変化を経験してきた。震災のずっと前、すでに２００海里問題のころから下り坂ではあったが、津波はそれに追い打ちをかけることになるかもしれない。津波が産業を潰すのではなく、もうだめになりつつあるものを、津波がきれいに流していくと番号を付して言った方がいいかもしれないと北村さんは語る。

昭和30年代はサンマ船だけではなく、リン鉱石や大豆を運ぶ外国船も多く入港し、鍬ヶ崎は大いに栄えていた。船主は船名に第一、第二、第三と番号を付して何隻も船を持ち、船員も何回か航海すれば家が建つほどだった。若い人はすぐに船に乗れた。中学３年生が卒業式を待てずに船に乗って、卒業証書は帰ってからもらうということも多かった。志のある子は水産高校に進んだ。宮古水産高校は焼津、安房とならび、日本でも歴史ある水産高校で、総理大臣になった鈴木善幸氏の出身校でもある。昭和50年くらいまで、中学を卒業すると進学より就職が多かった時代に、船乗りに憧れる男子が競って入った学校だった。しかし、漁業が低迷すると男子の進学は少なくなり、今は野球部も作れるかどうかという「女学校」になってしまった。海洋技術科でさえ女の子ばかりだ。

木造船が鉄鋼船やプラスチック船になったことで造船業も下火になった。船大工の佐々木聖さん親子は木造サッパ船を作っていたが、木造での需要が少なくなり北村造船で仕事をするようになった。しかし、造船会社でつくる大型の木造船も需要がなくなり、職人の多くは昭和34年ごろから全国へ出稼ぎに出るようになった。北村造船は津波前、甥と弟と３人でやっていたが、船を流された後、再興のめどはたたない。お金をかけて再興しても漁業を辞める人が多くなれば造船業はやっていかれない。船を持つ人もいなくなり、今はタラ漁のトロール船が20隻あるかどうかだ。トロール船は津波の被害を受けていないが、高い油を買って船を出すくらいなら、魚を買って食べるよという人が多くなった。

かつては市役所の周辺にきれいな湧水があり、（水産）加工屋がたくさんあった。今は加工屋も少なくなった。海に活気があれば陸も活気が出る。それが昭和30年代、40年代だった。産業や学校ばかりでなく、お祭りなどの行事も盛んだった。七夕も熊野神社の祭礼も、今よりもっと賑やかだった。津波が残りのすべてをさらっていったということにならないように、漁業はこれを機に衰退から脱する道を考えるべきだ。

（取材日：２０１２年10月４日）

４　震災直後の食料品スーパー

関川和子　㈲総合食品セキカワ取締役

昭和17（１９４２）年生　栄町

セキカワは宮古で一番はじめにスーパーマーケット型の店舗を開業したが、近所に大型店が出て、今ではすっかりお客さんをとられてしまった。宮古にはセキカワのあとに、マルフジ、マルシンという2軒のスーパーができたが、現在残っているのはセキカワだけである。その理由は、セキカワが保育園、福祉施設、デイサービスの給食用に食材を仕入れるようになったためで、現在商売の中心はそちらに移っている。

地震の瞬間は宮古大橋の上にいた。車で藤原の友人を訪ねる途中だった。今思えば橋の上の揺れは地面の上とは全く違ったと思うが、何かとてつもない天変地異に見舞われた感じがした。地震という言葉は浮かんでこなかった。自分がいる世界が突然、上も下も、足元も天も空気もごちゃまぜになって回転しているような感じだった。どのように揺れが終わったのか、どのように車を発進させたのか、全く記憶にない。とにかく長く感じた。その間に宮古市役所から人がどんどん出てくるのをぼーっと眺めていた。対向車が隣に止まっていたが、重機を積んだトラックで、それが自分の車に倒れこんでくるように思われた。少なくとも車1台分離れたいと思ったがどうにもできず、ちょっと落ち着いたとき、自然に車の位置がズレて「ああ、助かった」と思った。揺れがおさまって車が動きだしたので藤原の友人宅にたどりついたが、そこで津波が来ると聞いてすぐに戻った。なぜかまた大橋に来てしまったが、今度は橋の上には車はなかった。大通りから駅前に向かったが、人がまったくいなかった。大通りの、ガラスが壊れた家の前に1人か2人いただけだった。パチンコ屋からはまだ人が出てきていた。町は静かだった。駅前から1本裏道に入ると人がたくさんいた。そこで我にかえって「津波はどこまでくるのだろう」と思い、まず高齢の母と、デイサービスに行っている主人の妹を避難させなければならないと考えた。

キャトルの隣にある店舗では、震災の直後からお客さんが店内に列を作り食品を買い求めた。キャトルのスーパーなど大きなところは停電でレジが機能しなくなり店を閉めたと聞いたが、セキカワは家族経営なので、大雑把に計算してどんどん売った。お客さんもだいたいの金額を計算し、少し大目に払った人も多かった。みな大量に買ったのでカゴごと持っていってくださいと声をかけた。とにかく長蛇の列で、余震がきて避難するように放送が入っても、「ここまで並んだのだから列を離れられない」と言って避難しない人もたくさんいた。お菓子類もガムやアイスクリームまですべて売れた。普段はあまり売れないタバコも全部売れた。1日か2日で店内のものはすべてなくなった。停電になって、冷凍庫のものは建物の外に出したが、冬だったので問題はなかった。国道106号が無事だったので、震災前に発注したものは全部届いたうえに、新しく発注したものも滞りなく届いた。ものが途切れることなく来たので商売に影響はなく、店も続けたし、人が集まっているところにも出向いた。仮設住宅への移動販売をした店もあったがセキカワではやらなかった。移動販売は宮古の業者だけではなく、他地域からも入り込んでいた。

福祉施設は震災後でも休みがなかったので、給食食材の搬入は続けなければならなかった。商品は入手できたが、一番困ったのは配送車のガソリンだった。あちこちのガソリンスタンドに並んで何とか確保したが、それにかける時間が非常に大きかった。後に市役所は食材を配送する車にガソリン優先券を配っていたらしいという話を聞いた。そのほかに困ったことは、停電でシャッターが下ろせなかったことだ。これはどこの店でも同じだったと思う。商店にとって、シャッターとレジが動かなくなると商売に多大な影響がでる。日ごろから商店は、災害時の停電については考えておかなくてはならない。

琴を趣味としているが、震災後2年間は稽古ができなかった。2015年12月、市民会館のオープニングで、全流派が一緒になって「六段」を演奏した。古典芸能になじみのない人も多かったと思うが幕が上がったとき、客席からオーというどよめきが起こった。少しずつ暮らしが元に戻りつつあることを実感し胸が一杯になった。

第2部　各分野での震災後の取り組み

写真　（航空写真）金浜地区から津軽石・赤前地区　2011/03/28　撮影：宮古市

第2部　各分野での震災後の取り組み
第1章　医療の現場から　命を見つめて
―東日本大震災・三陸大津波と医療従事者たちの戦い―

中嶋奈津子

はじめに

地震とそれに伴う大津波により、東北地方の沿岸部は大きな被害を受けた。宮古市の一部は、それまで多くの人々が暮らしていた痕跡を留めず、全てが無となる状況からの再出発であった。医療の現場もまた同様である。

寒さと疲労、衛生面の問題、薬剤や物資の不足という状況下、治療を必要とする大勢の人々がいるだけでなく、感染症、精神面での不安、アルコール依存などの問題が山積されていた。患者や住民を守らなければならない。3・11以降、医療従事者たちは悩み、考え、あれから5年経った今も活動を続けている。

当時、明確な方法論が無い状況から生まれた決断、不安の中でそれを実行する勇気、住民の命と健康を守るために最善を尽くして活動した医療従事者達の姿を紹介する。

1　宮古市における被害状況

宮古市の被災状況について、当時の岩手県宮古保健所長柳原博樹氏が「災害医療コーディネーター：行政の視点」[注(1)]として報告されているので、以下に転載する。

(1)　宮古市の被災状況

・被災の状況

大震災により家屋の約18パーセント（対世帯）が全壊となり、最大18.000人を超えた避難者数は管内人口の約19パーセントに達し、避難所数は103ヵ所となっていた。死者・行方不明者数は管内人口の約1・5パーセントに相当し、もっとも死者・行方不明者が多かった山田町では約4・0パーセントに達した。同様に、宮古市では約1パーセント、田野畑村では約0・6パーセント、岩泉町では約0・06パーセントとなっていた。（2011年6月29日現在）

・医療資源の状況

岩手県の人口10万人対の診療医師数は178・3人（2008年）で全国40位であり、その中で保健所管内の人口10万人対の診療医師数は111・6人ともっとも低い水準であった。こうした状況の中で、大震災により被災した医科医療機関は宮古市では31機関中14機関、山田町では5機関中4機関となっていた。

・保健所の被災状況

保健所が設置されている宮古地区合同庁舎は宮古市の指定する避難所ではなかったが、発災直後から約2週間、近隣住民の避難所となり、ピーク時約500人が避難していた。合同庁舎自体も停電、断水し、復旧は発災2日後であった。また、出張等で不在の職員や住居が被災した職員が数人おり、職員体制が整ったのは週明け3月14日以降であった。[注(2)]柳原博樹　2012年　910～

表1　被災状況

	岩手県	管　内	宮古市	山田町	岩泉町	田野畑村
死者	4,671人	1,045	420	604	7	
行方不明者	12,749人	265	97	153	0	
負傷者	200人	41	33	不明	0	
家屋倒壊数	24,877棟	8,312	4,675	3,167	200	270

＊『震災こころのケアのかけはし』平成25年　独立行政法人国立病院機構　1頁参照

表2　東日本大震災（津波）による医療機関被災状況

	全　壊	大規模半壊	半　　壊
山　田　町	1	1	2
宮　古　市	4	3	4
岩　泉　町			1

＊提供資料より作成

911頁）

もともとの医師不足に加え、およそ半数の医療機関が被災しており、医療の現場でも危機的状況が起こっていた。全国の医療機関や海外の医療支援団が三陸沿岸地域にやってくる。宮古市にも多くの医療の支援団体が訪れた。

(2)　医療関係者支援チームについて

◎医療支援チーム
〈派遣元〉北海道、青森県、山形県、静岡県、長野県、新潟県、滋賀県、沖縄県、陸上自衛隊、国境なき医師団、岩手県医師会、宮古医師会、個人
〈派遣規模〉延べ人数：2千377人（1日最大10チーム）
〈活動内容〉避難所応急救護活動等
〈構成員〉医師、歯科医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士、レントゲン技師、調整員等

◎こころのケア支援チーム
〈派遣元〉静岡県、国立病院機構琉球病院、菊池病院、花巻病院、肥前精神医療センター、秋田県、佐賀県、宮古山口病院
〈派遣規模〉延べ人数：1千561人（1日最大4チーム、8月から2チームによるスポット支援）
〈活動内容〉避難所支援、遺族訪問、要支援者訪問、集団幼児検診へのサポート、支援者面接など、保健所震災こころの相談室
〈構成員〉精神科医、臨床心理士、精神保健福祉士、保健師、看護師、作業療法士等

◎保健師チーム
〈派遣元〉下関市、東京都、函館市、宮崎市、大分市、藤沢市、横須賀市、多良間市、岩手県立大学、対がん協会、雫石町、二戸市、岩手町
〈派遣規模〉延べ人数：4千388人（1日最大8チーム）
〈活動内容〉避難所支援、仮設住宅全戸訪問、健康相談室
〈構成員〉保健師のほか栄養士、歯科衛生士、食品衛生監視員等

◎薬剤師支援チーム
〈派遣元〉日本薬剤師会（北海道薬剤師会）、岩手県薬剤師会、宮古薬剤師会
〈派遣規模〉延べ人数：163名
〈活動内容〉避難所薬剤管理、服薬指導、田老診療所調剤支援等〈構成員〉薬剤師

表３　宮古市の派遣チーム派遣団体状況（23年５月時点）

医療救護チーム派遣団体	こころのケアチーム派遣団体	保健師チーム派遣団体
沖縄県	国立機構琉球・菊池・花巻病院	岩手県
鳥取県	佐賀県	対ガン協会
青森県	秋田県	函館市
静岡県	静岡県	多良間村
北海道	北海道	藤沢市
山形県	山形県	宮崎県
新潟県	沖縄県	大分市
済生会病院	青森県	横須賀市
長野県ＪＭＡＴ		下関市
国境なき医師団		大阪広域連合
宮古医師会		日赤看護師
陸上自衛隊		
長野県ＪＭＡＴ		
ＤＭＡＴ		
もりおか往診クリニック		

＊保健センター提供資料参照

◎歯科支援チーム
〈派遣元〉函館歯科医師会、八戸市保険医協会、岩手県歯科医師会、宮古歯科医師会
〈派遣規模〉延べ人数：84名
〈活動内容〉避難所巡回診療、歯科衛生材料支援等
〈構成員〉歯科医師
＊県派遣医療救護班（市提供資料）

2　岩手県宮古保健所の決断と行動
司令塔となった所長　―柳原博樹医師―

昭和36（1961）年生　岩手県中部保健所長　当時、岩手県宮古保健所長

東日本大震災津波当時、岩手県宮古保健所長であった柳原博樹医師（現在、岩手県中部保健所長）は医療活動における司令塔の役割を一手に担い、各方面に指示を与えていた。現地や外部から来た多くの医師や保健師が、「彼の冷静かつ的確な指示があったから、乗り越えられた」「あの状況下でも、いつもと変わらず淡々と指示を出してくれたから安心できた。少しでも平常心でいられた」と言う。被害対応に追われた当時、柳原医師が重要視していたのは全体把握、情報交換、方針の周知徹底であった。

東日本大震災津波当時の宮古市の医療の状況について、柳原医師は多くの報告書を提出されている。その中から、「備え」「対応方針」「保健所による医療救護活動の調整過程」「活動調整の過程の中で」「全体観と協調」「医療ニーズと安全・安心のバランス」について転載させていただく。

(1)　備えはどうであったか

大震災への対応を振り返ると、平成18年に岩手宮城内陸地震を経験した被災県の職員であったにもかかわらず、災害への全体的な備えとしての体制、技術、姿勢の全ての面で準備ができていなかったと改めて感じている。こころのケアにおいても同様である。災害対応の当初からこころのケアをどのように進めていくべきか、保健所としてというより、私自身として明確な目標と具体的な対応を意識し、計画的に対応できなかったのである。正直に言えば「しまった」という言葉が当時の心境を端的に表していると思う。このような準備不足の状況で、何とか被災地におけるこころのケア活動の一端を担うことができたのは、現地で活動するこころのケアチームの自立的な活動があったからである。その情報や助言を得て、その時点で何に取り組むかを選択しつつ、その後の状況変化により取り組みの大枠を軌道修正しながら何とか対応してきた。(注3) 柳原博樹　2012年　96頁）

(2)　対応方針はどうであったか

・まず何から取り組むか

発災直後被災地の心のケアをどのように進めていくべきか、保健所として明確な目標と具体的な対応を意識して計画的に対応できたものではない。被災の状況や現地で活動する心のケアチームの情報や助言を得ながら、その時点時点で何に取り組むかを判断しつつ、その後の状況変化により取り組みの軌道修正をしながら対応してきた。

・4つのステップ

震災後の対応を振り返ると、次の4つのステップを踏んできた。第1ステップとして被災者への接触が早期になされるよう、多くの心のケアチームの派遣要請と受け入れ、第2ステップでは心のケアチーム間の活動に共通理解・認識を図る一定の活動方針の取りまとめ、第3ステップでは身体系の医療支援チーム、保健活動支援チームから市町村、地元医療機関へと連携を拡げ、第4ステップとして地元主体の精神保健医療活動への移行を進めた。なお、これらのステップは順次取り組まれ、内容によっては同時並行的に進められた。(注4) 柳原博樹　2012年　90頁）

(3)　保健所による医療救護活動の調整過程

支援チームによる医療救護活動は、次の3段階で展開され、宮古市は5

月末まで、山田町は7月上旬まで継続された。被災状況、とくに医療機関の稼働状況が大きく異なったため、調整は異なる経過をとった。

1、体制の構築（～3月下旬）

支援チームの増員に取り組むとともに、その活動を調整するミーティングを宮古市および山田町に設置し運営に取り組んだ。

2、縮小・撤収を想定した体制の見直し（～4月中旬）

宮古市では医療支援を継続する必要性を検討するため、支援チームからの活動日報の報告内容を修正してモニタリングを継続した。

山田町では、一部救護所の機能・役割を見直し、診療を再開した地元医療機関が当面担うことが困難な救急や休日・夜間診療を担う体制（新体制）に移行した。

3、体制の縮小・撤収（5月上旬～）

宮古市の医療救護体制は、4月中旬以降のモニタリングの結果や支援チームの派遣計画等をふまえ、段階的に縮小し5月末で撤収した。山田町の医療救護体制は、5月上旬に実施した新体制の運営評価をふまえ、被災した県立病院が仮設診療所を開設する7月上旬まで継続された。また、避難所への巡回診療は受診者の動向や支援チームの派遣計画をふまえ段階的に縮小し、6月末で撤収した。（注(5)）柳原博樹　2012年　911頁）

(4)　活動調整の過程の中で

1. 被災者への早期接触

医療救護体制の構築で念頭に置いたことは、できるだけ多くの被災者に早期に接触できるよう、医療支援チームを増員することであった。県に対し支援チームの増員要請を続けた。全国からの迅速な支援により支援チーム数は3月の下旬～4月上旬にピークの22チームとなった。同様に、早期の増員派遣を要請した保健活動チームおよびこころのケアチームとの重層的な活動は、被災者のストレスを軽減するファーストエイドとして効果があったと考えている。

2. 情報管理における簡素と反復

（略）今回の対応では、宮古市および山田町での支援チームの活動調整に対応できる職員体制の問題もあったが、管理の対象とした基本情報は、各支援チームの活動日報による受診者数および通信機能が使えない状況下、職員が足で稼いだ管内医療機関の稼働状況であり、これらの情報のとりまとめと提供を反復した。多くの関係者から「医療機関の稼働状況」の情報がきわめて有用であったとの評価を得ている。（注(6)）柳原博樹　2012年　913頁）

(5)　全体観と協調

支援チームの情報等から判断しようと意識したことは、全体の状況がよい方向に向かっているのか、わるい方向に向かっているのかという「全体観」であった。そのうえで、各支援チームからのさまざまな意見・提案をふまえて基本的な対応方針を調整し、その徹底に努めた。また、取り組む事項の選択に努め、可能な限り単純なオペレーションになるよう考えた。一方では決定された方針をふまえた現場の対応では、各支援チームの判断に委ねた部分が大きかった。このような対応はさまざまな意見・考えをもつ支援チームの活動を協調的なものにする意味で必要な選択であったと考えている。

(6)　医療ニーズと安全・安心のバランス

避難生活が長期化すると被災者の医療ニーズは変化する。4月中旬以降、稼働医療機関も増加し、医療支援チームの活動日報の内容も医療ニーズの減少を示すものであった。この視点から判断すれば、支援チームの撤収をより早期に行う選択肢もあったかもしれない。しかし、現地で体感したことは、医療支援チームの毎日の活動が避難者の安全・安心感につながっているということであり、このことをふまえ、医療支援チームの長期にわたる支援を要請した。（注(7)）柳原博樹　2012年　912頁）

次に、柳原氏へのインタビューから、「優先課題」「発生以前の体制で不十分であったこと」「外部からの医療支援チームについて」「震災

中感じていたこと」について語っていただいたことを、ここで改めて掲載したい。

【当時の優先課題】

・全体の把握

まず優先したのは「全体状況の把握」であった。そのため、最優先されるべき、受診者数や避難者数などは必ず情報化・共有することにした。保健師チームには、避難所の巡回時に「ライフラインの情報」「実施したサービス内容」「感染予防対応などの実施」のチェックなどを担当してもらい、状況が「良い場合は○、要注意の場合は×」などとする「星取表」による一覧表を作った。医療支援チームには受診した患者数を報告してもらい、疾患ごとの集計ではなく「どこにどの程度の患者がいたか」の傾向を掴むこととした。それを総合分析して全体を把握し、方針決定につなげた。方針に基づく現場での個別対応の判断は各チームに委ねた。現場の人が判断するのが正しいと考えたことによる。

保健所として個に対応することは十分でないところもあったと思うが、全体として良い方に向かっているのか、そうでないのかの把握に努めた。全体観を大切にしたことは良かったと思っている。

・情報交換・方針の周知と徹底

医療チームと心のケアチームのミーティングは毎日行っていた。情報交換という基本的ルールを徹底し、重要な方針は何度も繰り返し現場に伝達し、徹底した。医師会の対策会議は、当初週に1度開催され、情報共有をお願いした。保健チームは毎朝ミーティングをしていた。医療支援チームの会議は、宮古と山田の2か所をかけ持ちで実施した。

・感染対策

医療従事者の確保などが難しい中、犠牲者をどれだけ少なくするかが問題で、とりわけ感染症対策は重要事項であった。隔離策は家族と離れ離れになるため避難所では批判的な見方もあったが、感染症対策が優先かつ必須であった。

【発生以前の体制で不十分であったこと】

今思えば、事前にどれだけのことを決めておくかが、災害対策に必須であった。ところが従来の防災計画には「何をするか」はあるが、「どのようにするか」が無かった。何についての情報を把握して判断するかという単純なことを事前に決めておき、非常時には決めた方針を徹底することが大切であった。

【外部からの医療支援チームについて】

宮古には、北海道・静岡県・沖縄県等各地の医療チーム、静岡県・秋田県・国立病院機構のこころのケアチームが支援に来ていた。早い時期から宮古に入っていた医療チームもあり、静岡県の医療チームは重茂に、沖縄県からのこころのケアチーム（国立病院機構）は田老の支援をしていただいた。彼らは支援者の立場に徹してくれてありがたかった。「私達はこれをするから」という提案をいただき、その動きは素晴らしかった。多くの医療支援を得たが、中には、対話が難しかったチームもあった。外部からの支援団体には長期にいていただくわけにはいかないし、サポートに徹していただくことがありがたかった。不足の部分は、最終的には地元のチームでやっていくしかないと考えた。そのためにも、全体の把握と方針は重要であった。

【震災中感じていたこと】

事前準備をもっとやっておけばよかった、これは覚悟しなくてはならない、腹を括ろうと思った。それからはひたすら全体の把握に努めて選択肢を決め、災害対策を実行した。振り返ると、当時はできることしかできなかったが、余計なことや無駄なことをあえてしなかったことが良かったと思う。

全体観、情報の共有、共通の認識のもとに検討された基本方針の徹底。そうした単純なこと、当たり前のことの反復と継続が極めて大切であった。それを保健師達は一生懸命にやってくれた。当たり前のことを徹底しようという認識が持てるかどうかである。さらに、諦め→割り切

りも、選択や決断に結び付くことがある。

当時を乗り越えられたのは「運」もあるかもしれないが、常に取り組みの良い面を意識し、できない行動よりもできたことを評価しようと考えた。

対応や取り組みを選択したことが後で問題にならないかと不安に思うこともあったし、ある程度は覚悟もした。ひたすら実践したのは、全体の状況把握、被害を最小限に留めること、医療スタッフの許容範囲を超えないようにすることであった。長期戦になっても耐えうる医療・保健活動のために、その時最も必要な事項を的確に選択して対応することに腐心した。

柳原氏は東日本大震災を経験し、「次に備えて」として前掲の報告書の中で次のように述べている。

【次に備えて】

1．事前訓練の大切さ

宮古では、2007年から地域災害拠点病院を中心に消防機関やボランティアの参加も得て小規模ながら災害医療訓練が実施されてきた。一方で急性期以降の避難所避難者への医療救護を想定した訓練には取り組んでこなかった。これは災害医療訓練も含め、市町村の防災訓練との連携が実現していなかったことなどの問題でもある。また、今回の災害対応では、自衛隊、消防等との連携調整も課題の一つであった。関係機関が相互に何がどこまでできるのかを事前に把握・理解することが十分でなかったと思っている。災害医療の内容も市町村の防災訓練に組み込み、関係機関が机上・図上も含め災害時の具体的な対応を想定した訓練を繰り返すことが重要と考える。

2．対応能力向上への支援

今回の災害対応では支援チームには幅広い機能・役割が要請された。急性期の傷病者対応、亜急性期以降の慢性疾患管理やストレス対応、避難所の感染管理や血圧管理などの予防活動、生活不活発病による生活機能低下の予防などである。また、避難者等に接する際のサイコロジカルファーストエイド（心理的応急処置）の視点からの取り組みも必要であったと思われる。DMATには担うべき機能を想定した養成研修・訓練が実施されている。支援チームにも災害ステージに応じて担うべき標準的機能の設定や養成研修が必要だと考えている。その際には、保健活動やこころのケアを担うチームとの役割分担と連携のあり方についても検討が求められる。

3．仕組み、機能、姿勢

災害対応で改めて認識したことは、各支援チームを派遣・受け入れする仕組みや現地活動で支援チームが発揮する機能・技術とともに、現地活動における姿勢（マインド）が重要である。体制・仕組みや技術は平常時の訓練において確認でき、災害対応においても相当程度再現することが可能と思われる。一方で、支援の姿勢を振り返ると、災害支援が現地でうまく機能した鍵は、支援に対する組織や個人の姿勢だった。姿勢の違いは現地活動をめぐる必ずしも必要とは思われない衝突を生じさせる。支援をする側も受ける側もどのような姿勢で取り組むのかを改めて整理する必要がある。（注8）柳原博樹　2012年　914頁）

インタビューの際にも、氏は当時の状況を冷静かつ淡々と語った。誰もが経験したことのない大災害の中、市民の命と健康を守るために司令塔となった氏の強い精神力と、支えた内外医療スタッフの力に感服する。

3　保健師の実践

保健師達も各所との連携を図り活動を始めていた。混乱の中にも関わらず外部支援団体を受け入れ、システムを作り、共に活動し学んだ。後に医師たちが高く評価したその実践と当時の心情について、3人の保健師に語っていただいた。

◎松舘喜久子保健師

昭和33（１９５８）年生　宮古市千徳町在住　元宮古市保健福祉部健康課課長　当時、成人保健担当長

【3月11日当日】

当時は宮古市保健センター勤務で、震災発生時は1歳6か月児の健康診査をしていた。

４組の親子がまだ館内に残っていた。揺れがひどかったので、救護に必要な物を持ち、高台にある指定の避難所に誘導した。海側を回避して、若干遠回りではあったが山側を行った。

避難所への移動中、周囲では時間が普通に流れていた。バス停でバスを待っている人達もいたほどで、本当に誘導しても良いのかと思った。中央公民館に行ったが、揺れがひどかったので中には入らなかった。そこには高齢者、車椅子の方も避難していた。ふと見下ろすと、黒い水が迫っているのが見えたので、皆で手伝いながらさらに裏山まで上がった。

その日は市議会最終日で、市役所の建物に議会の人達がいるのが高台から見えた。車が流れて行くのも見えた。車のクラクションがしきりに鳴っていた。宮古でこんなことが起こっているという実感が無かった。

避難していたところに、市の水道事業所職員が車でパトロールに来た。状況を話して、高齢者を車でピストン移送してもらった。他は徒歩で避難所の第二中学校まで行った。

すぐに中学校の調理室に行って鍋釜を全て出し、水を確保した。布団代わりになる物も探した。続いて、近くの山手にあるスーパーで米を確保した。第二中学校にも多くの人が避難してきた。

避難所では、眠れない・不安・恐怖・体調不良などの訴えが多かった。

【3月12日以降】

透析が必要な患者は市内の後藤医院近くの避難所（宮古小学校）へ、糖尿病でインシュリンが必要な患者は、宮古病院近くの避難所（第二中学校）へ、精神科の患者は宮古市内の避難所（山口小学校）へ、それぞれ移動させた。この4か所の避難所の医療救護活動は24時間対応とし、それ以外は日中対応とした。

【保健師たちが活動できるまでの経過】

宮古市の保健福祉部は、福祉課・介護保険課・健康課で構成されている。このうち、福祉課と介護保険課は本庁にあり、健康課だけは外部の保健センターにあった。保健センターは全壊して戻ることができなかった（以降、中央公民館を一時的な事務所としていたが、平成25年4月より小山田に仮設のセンターを開設し、健康課の事業を行っている。）が、本庁の2課は残っていた。また、別館にあった健康課も含めて保健福祉部の職員は全て無事だった。この3課の職員が、震災・津波の翌日の3月12日から合流し活動を開始した。

市役所にとって幸運だったのは、職員の人的被害が無かったためにすぐに動けたことである。加えて、本庁は1階のみが被災した状況だった。翌朝水が引くと保健福祉部としての活動が始まった。状況がわからないので、まずは職員が3名1組に分かれて状況確認に出向いた。

3月13日に川井・新里の保健センター職員と合流。田老は市長の指示で職員が山越えをして状況確認を行った。田老診療所が被災しており、北高校が救護所となっていた。

【役割分担】

他地域から支援に来てくれた支援保健師には、避難所にいる被災者の健康・衛生面の管理をお願いした。地元の保健師は市内を巡回するよう役割分担した。

地域住民は徐々に仮設や市内のアパートなどに移って行った。妊婦や赤ちゃんは、津波直後は避難所にいたが、それ以降姿はなかった。

【外部ボランティアの受け入れ】

県を窓口とした。岩手県⬇宮古保健所⬇宮古市健康課（保健師へ）の流れをつくった。

当時いろいろな団体や個人ボランティアが入ったが、混乱を避けるために、窓口を保健所とした。

【1日の業務の流れ】

朝にミーティングを行い情報交換。その後巡回。夕方、さらにミーティングを行う。

宮古の介護保険課課長（保健師）がリーダーとなり上層部との連携を図り、災害対策本部の情報をミーティングで取り上げる。サブリーダーをその下に置き、現場対応と指示を行った。巡回から戻った職員は、サブリーダーに必ず内容を引き継ぐことにしていた。そうすることで、若い職員が問題を1人で抱えたまま自宅に帰らないようにした。

巡回については、震災・津波直後は、避難所やお寺など人の集まっているところを廻った。当時は保健福祉部職員が89名、そのうち専門職が45名おり、4名1組となって活動していた。

【宮古市内の医療機関の被災状況、および震災・津波直後の患者・要介護者への対応】

宮古病院は被災しなかったが、周辺道路が瓦礫などで不通状態だったため、早急に道路を確保してもらった。一番困ったのは、移動のためのガソリンが無かったことだった。

寝たきりの人は、被災を免れた介護事業所へ移した。要支援者や避難所生活に困難のある人は、病院や介護施設、ホテル等環境の良い避難所に早い段階で移動した。

支援に来た保健師には、名簿作りと健康チェックをお願いした。

【3月11日以降の医療団の介入】

3月13日：DMATが宮古市に入る。
同日　：内陸方面の保健師たちが宮古市に入る。
3月15日：医師を中心とした医療チームが宮古市に入る。
3月23日：こころのケアチームが宮古に入る。
（琉球病院医療チーム・静岡県医療チームを中心とする）

【その後の医療活動】

宮古市はもともと医師数が少なかったが、震災以降、支援の医師を含めればある程度の医師数が確保できていた。避難時に、保険証・健康手帳・お薬手帳を持って逃げた人が多かったので、お薬手帳を活用し、薬の記録を医師が確認して投薬するシステムをとった。このため、薬があふれることは無かった。

1週間後、宮古保健所で毎晩ミーティングを行った。それぞれの状況、特にインフルエンザ感染の有無などの確認をした。医療救護チームは巡回型にした。自宅の片づけなどで日中は不在の住民が多いため、夜間にも巡回して、感染症やインフルエンザ予防の対応を早期から行った。これによって感染の蔓延を防ぐことができた。

津軽石・赤前・重茂の被害は大きかった。静岡県の医療チームの医師が24時間体制で診療所に詰めていた。診療所は最初は2か所で行い、後に1か所に統合した。

こころのケアチームは、琉球病院の医療チームが中心となって支援してくれた。

課題となっていたのは、被災者のメンタルに対してどのような支援をしたら良いのかであった。そこまでのスキルを保健師達は持ち合わせておらず困っていた。宮古市内で精神科を有する病院は、宮古山口病院と三陸精神病院の2か所しかなく、保健師がそのケアを担わなければならない状況があった。

村上優医師（琉球病院院長）はアフガニスタンの支援活動の経験から、「支援者支援」のスタンスをとり、どのような被災者支援をしたら良いのかを、2週間滞在して教えてくれた。特に「こころのケア」と「被災者と向き合うスタンス」については勉強会を開いてくれた。

支援に来た複数の精神科医師や臨床心理士、ケースワーカー、精神科看護師などと同行訪問するようになった。受診が必要な人と、心のケアチームで対応できる人の見立てをしていただき、受診が必要と判

断された人を病院に繋げられるようになった。ケースカンファレンスは毎日開かれ、対応についての振り返りができた。宮古市の保健師達のスキルは上がっていった。

心のケア支援の医療チームは徐々に増えてきて、九州の医療チームなども加わるようになった。チームによって視点が異なることもあり、支援チームの連携が必要となった。

その統一調整を図ったのが村上院長を中心とした琉球病院チームで、各医療チームに指示を出してくれた。その内容は「地元の医療スタッフの要望には全て答えてあげてください」「決して否定せずに受け入れてください」「あれこれむやみに指示を出さないでください」というものであった。また、地元の関係機関との調整を行ってくれたり、保健師の遺族訪問についても支援してくれた。

こころのケアチームの記録は県に提出することになっていたが、地元の支援者に記録が残らないのはおかしいと県に訴え、保健師に活動の情報を流すシステムをつくってくれた。今後アルコール依存症のケースが増えることが予測されていた。震災・津波から1年が経過した頃、琉球病院が宮古市の支援を継続したいと申し出てくださったので、幾つかのスキルをいただきたいと相談した。具体的には、保健師達がアルコール依存症に介入でき、また一般の地域住民に指導できるスキルである。これについては、琉球病院の若手医師が年3回、宮古まで来て指導にあたってくださった。

時間の経過とともに医療機関が復旧してきたため、医療チームは5月に撤退することになった。

保健師チームは仮設住宅や避難所の被災者の健康管理を行うため、8月初旬まで手伝ってもらい、それ以降は地元の岩手県看護協会に支援を要請し対応した。平成23年から25年には、仮設全戸訪問を実施して健康調査を行い、支援が必要なケースでは継続支援を行った。4月中旬、要望していた岩手県立大学の看護学部からの支援もいただいた。訪問するための車の確保が困難だったため、県立大学の教員が1人1台車に乗って来られた。1日に4名ほど、延べ56名の教職員が支援に来てくださった。

こころのケアチームは8月より、隔週でケアをしてもらった。

最終的には、医療チームは10チームとなり、それぞれ医師・歯科医師・看護師・理学療法士・作業療法士などから構成されていた。北海道から沖縄まで県単位で参加していただいた。また、こころのケアチームは岩手（花巻）・静岡・秋田の各県から支援を受けた。宮古山口病院の及川院長も、「できることは協力する」と巡回や講演会をしてくださった。

栄養士の活動も行われていた。6月より全戸訪問をして、電化製品の使い方、低栄養、夏の食中毒、インフルエンザ予防などについて指導してまわった。

仮設住宅移行開始直後の全戸訪問における課題は、仕事で不在になる人が多く面接ができなくなることであった。また仮設には、宗教関係者や営業訪問をする人も増えてきたので、用心して開けてくれなくなる住民も多かった。

また、仮設住宅については、宮古市の場合、近隣の住民が同じ仮設住宅に入るように配慮し、お互いに顔が見える環境を崩さないように努めた。社会福祉協議会の生活支援員も訪問を開始した。今後仮設住宅は無くなる状況下、高齢者の一人暮らしも多い。孤独感を招かぬよう、社会福祉協議会が今後どのように対策していくのかが重要である。現在は、社会福祉協議会・関係機関・ボランティアでの会議が定期的に行われている。社会福祉協議会がボランティアの窓口となり、仮設住宅の管理なども行う。

平成26年にはほとんどの外部支援が終了し、以降は地元の資源を活用している。

【職員への配慮】

市職員の中にも被災者はいた。被災していながら皆が働きづめで、疲れていた。職員のメンタル管理が必要となり、5月半ばから、休暇をとるように勧めた。週2回の休暇を入れて、体を休ませるようにした。

心のケアチームによる職員面接も実施した。

【これからの課題】

これまでは「被災者支援」であったが、今後は従来の「訪問」という形で地域に入り、住民の健康管理を行っていく。「被災者」対策というよりも「地域住民」全体への対策として、また医療・保険活動を全体の事業として捉えることが重要である。具体的には以下のようなことである。

・健康な生活が普通に行えるよう支援する。
・長期的なこころのケアの支援体制。
・関係機関・地区組織との情報共有と連携強化。
・将来を担う子ども達への支援。

今後はこうしたことを踏まえて、被災した方々へ支援をしていかなくてはならない。

何とか頑張ることが出来たのは、同じ思いを持つ仲間達がいたこと、そして琉球病院をはじめ多くの方々から支援を受け、支えていただいたからである。今後、被災者支援は、中長期的な活動が必要であり、マンパワー不足の中でどう展開していくかが課題である。

◎坂本恵子保健師

昭和22（1947）年生　宮古市音部在住　元宮古市保健福祉部地域医療保健推進監

【故郷への思い】

高校卒業後宮古を離れ、盛岡の学校に入る。県立衛生学院の1期生となり、保健師助産師科・保健師・助産師・看護師の免許を取得した。宮古が大好きで、卒業後は宮古に帰って働くつもりであった。バージャー病の父に仕送りをしてもらっていて、恩返しがしたかった。

【昭和8年の教訓・そして現在】

これまでも、地震が来るとサイレンが鳴り、市役所前にいた住民はみな高台に逃げ、揺れが落ち着くと降りて来た。チリ地震の時には閉伊川の水が無くなっていたのを覚えている。当時中学2年生だった。母が「昭和8年の津波の時に川の向岸の屋根に人が乗って『助けてけろー』と叫んで流されて行った。その時の声が忘れられない」と話していた。今回の津波でも消防士達が「津波が来るから逃げろ！逃げろ！」と叫んでいたのを聞いて「これが、母が言っていたことなんだ」と思った。拡声器も使っていないのに、山に響いて聞こえていた。

津波の後すぐに、住民が自分の家から流れた物を探しているのを見て立ち直りが早く前向きだと驚いた。やはり宮古は海の町だと思った。

【3月3日の避難訓練】

例年宮古市全体で実施しており、一部の地域では組織を作って炊き出しや避難訓練を行ってきた。津波への意識は常にあったが、今回初めは「数10㌢の高さ」との放送だったので、後になって数㍍と聞いて慌てた。

【当時の状況】

3月9日の予震時の状況

12月末に循環器の先生が東京から来て下さった。奥様にも宮古に慣れていただきたくて市内を案内していた時、地震が発生した。ものすごい揺れだった。水産科学館長が避難指示をしており、防波堤の水門を閉鎖していた。

3月11日当日

当時は保健センターに勤務していた。重茂診療所の定期診療所の様子を見に行き、宮古の保健センターに戻って来た時に地震が発生した。1階には赤ちゃん検診に来ていた親子が何組かいた。

外の鉄塔が大きく揺れているのを見て、中にいるのは危険と判断し、バックや膝掛け、上着を持ち、避難先の中央公民館まで歩いて避難した。3月の定例市議会が行われている時期だった。市役所の3階で閉

じ込められている議員や職員が窓から津波を見ているのが高台から見えた。市役所の後ろの方で船が流されているのを見て、ものすごい津波が来ることがわかり、さらに逃げた。避難先の中央公民館の駐車場には、避難して来た人達がいた。その中には、車椅子のおばあさんを連れて逃げて来たおじいさんもいたので、パトロールに来た市職員に頼んで第二中学校まで移送してもらった。第二中学校がその後の避難先となり、大勢の避難者がいた。食糧や水の確保のため、高台のマーケットへ行って米を買った。高台の住民は停電で情報が無かったためか、何が起きたのかわからない様子だった。

避難所の様子

大勢の住民が車や徒歩で逃げて来ていた。市職員が2時間おきに住所と氏名を調査し、黒板に張り出した。初めは１７０人だったが、後に２００数名を数えた。この時、持病があるかどうか等を含めて聞き取りをした。

食事は保育所でご飯を炊いてもらった。自治組織も動いてくれて、各家庭から茶碗に1杯ずつの米を集めて運んで来てくれた。

体育館は寒いので教室に移動した。体調が悪い人達がいて、話を聞き脈をとった。夜中にトイレに行きたいと言われて、連れて行くこともした。

3月12日

翌朝は、リーダーとなった水道課長のみ避難所に残り、他の職員は幾つかのグループに分かれて皆で町に降りた。この時は保健師・看護師・栄養士・歯科職員など医療関係者が10名以上はいた。

途中出会った知人に、「あなたの家のあった地域はもう無いですよ」と言われた。ラジオ放送では壊滅地域の名前が流れていて、自分の家の地域名も挙げられていた。多くの「行方不明者」の中に、自分の家族がいるかもしれないと不安に思った。

震災当日の朝に、たまたま給油と洗車のためにガソリンスタンドに車を置いていたので、車を流されずに済んだ。その車で翌日夕方、自宅に帰ってみた。道路が寸断されていたので花輪地区を回って行った。自分の家が無くなっているのが山手から確認できた。

夫と息子は無事だった。妹の嫁ぎ先が山手にあったため、以前から、何かあったらそこに集まることにしていた。その時の状況を聞くと、当時夫は1階にいて、津波が来る前に飼い犬を連れて山手の方に逃げていた。息子は家の中にいたが、波が迫って来て2階から3階へ上がり、さらに波が上がったのでベランダを壊して屋根まで上がり、その屋根に乗ったまま流された。「自分はこのまま海に行くんだ」と思ったそうだ。運よく瓦礫に引っ掛かり、息子は助かることができた。「友人が自分を見つけて、必死になって名前を呼んでくれて我に返った」と話していた。兄弟の家は皆流されたが、幸い身内で亡くなった人はいなかった。

【医療・保健活動】

12日夕方に市役所3階保健福祉部本部に職員が合流。被災していない新里地区と川井地区の職員も来て合流した。それから、宮古市全体として「生命と安全の確保」の支援活動が始まった。

3月14日

14日に重茂地区に静岡県医療チームの東岡医師他8名が入る。その後31の医療機関の支援を受けられることになり、5月29日まで応援してくれた。県職員も様子を見に来てくれた。診療所で手伝ったことから縁ができ、東岡医師とはその後長期にわたり、共に支援活動を進めていくことになる。津軽石地区にも、県の医師達が来てくれた。田老には国境なき医師団など、これ以降各地にさまざまな医療支援団が入り始める。

津軽石地区にあった診療所は、水が入り機能しなくなっていた。赤前小学校には避難者が２００人ほどいた。その状況から赤前地区にも診療所が必要ということになった。小学校の協力を得て、赤前小学校・重茂漁協・津軽石小学校に診療所を立ち上げ、そこに静岡県医療チー

ムが診療に入ってくれた。組織作りをしてくれて「心配ないですよ。機械も持って来たし、灯りも点けておくから夜中でも診療ができる。無理な時には車で宮古病院に送ってあげるから大丈夫ですよ」と言ってくれた。その言葉がどんなにありがたかったかわからない。医療チームは薬をも携えて、3泊4日ずつ交代で来てくれた。初日は紹介から始まり、診療。4日目は整理をした。1班ごとに地元の保健師が付き、役所・宮古市・保健センターとのやりとりをした。夜間にチームリーダー（保健師）と静岡県医療チームの各医師とで会議をした。最終的には3つの診療所を赤前に集約して、静岡のチームが診てくれた。大変だったが、医師・看護師・薬剤師・理学療法士・作業療法士・レントゲン技師など、多くの専門家が外部から来てくれた。専門職の方々が全ての技術と力を発揮できるようにしなければならない、と考えて自分たちも努力した。毎晩会議は12時近くまでかかり、帰りは遅かったが情報の共有ができた。帰宅といっても民宿に帰るようなもので、食事をして眠って、朝7時には起きてまた仕事に出かける日々が続いた。

夜の避難所の巡回は、宮古医師会の先生方が担ってくださるようになった。

患者の訴えと症状で多かったのは、①薬を流された（高血圧症）②糖尿病　③咳が出る　④眠れない、などであり、しばらくして腰痛を訴える患者も増えてきた。

4月までは静岡の医療チーム、以降は琉球病院のこころのケアチームが7月までいてくれた。岩手県外の保健師や看護師、また社会福祉協議会の協力も得られた。

当時の活動を通して「胸の内を吐き出せる」「話を聞いてあげられる」「互いに寄り添える」「その人の心に同調する」「明日に目を向けられる」そんな環境が必要だと感じた。

また、心の問題を扱う時には、きちんと知識のある専門家がその対応にあたることが必要と感じた。

いつか必ず、霞は晴れる…

平成28年春、坂本恵子氏は病気療養ののち他界された。療養中も、ご自身のことより、ご家族や周囲の方々のこと、今後の宮古市の保健活動について気にされておられた。インタビューの際、坂本氏は「霞は必ずいつか晴れるのだと私は信じているの。だから辛抱して頑張らなくちゃね」と笑顔で語っておられた。療養中にも、「せっかく生かされたのだから、精一杯、生きてゆかなくては」とおっしゃっていた。常に前向きであって、周囲に気を配りながら暖かく励まして下さるかたであった。心よりの感謝とともに、ご冥福を祈る。

◎島香聖子保健師

昭和35（1960）年生　岩手県宮古保健所保健課保健課長

当時、上席保健師

島香氏は3・11の当日、出張で東京に出向いていた。東京で地震に遭遇、岩手県の三陸沿岸地域が壊滅的な被害を受けたことを知る。その後、出張で一緒にいた岩泉町の保健師と宮古に戻る。その経験を以下に記す。

【当時の状況（当日からの数日間）】

3月11日

当日、宮古保健所保健課に従事していたものは保健師1人と看護師1人の2名のみであった。

東京にいて地震に遭遇。電車も動かず、その日は研修会会場に宿泊。会場には帰れなくなった受講者が約10名程いて、廊下に泊まっていた。

電話も通じず、夫とも子供とも連絡がとれなかった。仙台在住の娘（当時大学1年生）から「私は生きています」とメールに書いてあった。それで「大きな地震があったんだ」と改めて思った。

宮古の「なあど」に津波が押し寄せてくるのを携帯のテレビで見て驚いた。

11日の夜に長野にいる弟から電話がかかってきた。弟は私が宮古にいると思って心配して電話をかけてきた。弟にも宮古の家族と連絡がとれないことを確認して、何かあったら連絡しようと言って、その日

は電話を切った。

3月12日

ＪＲも長距離バスもいつ動くのかわからない状況で、東京駅の近くのホテルをとった。都内のＪＲは間引き運転していた。長野県の弟宅に行こうかとも考えたが、あちらでも大きな地震があったので行くのをとりやめた。東京にいて宮古に帰る方法を検討しようと考えた。

3月13日

午前中厚生労働省まで出向いたが門前払いを受け、その後ホテルに戻りテレビで全国ボランティア協会の連絡先を知り電話をした。そちらから厚生労働省の直接の連絡先を教えてもらった。

厚生労働省の中に被災地への保健師派遣の調整をする機関（保健指導室）があって、そこに電話をして事情を話すと「あなたはすぐに（宮古へ）行かなければならない」「明日（14日）、宮古保健所に埼玉の保健師が行くことになっている」と教えてくれた。「できれば岩泉町の保健師と2人一緒に乗せていっていただけないか。2人とも同じ管内なのだが、職場と連絡がとれないでいる」と伝え、返事を待つことになった。夕方、埼玉の派遣団に同行する許可をいただく。

13日の夜には、夫からもメールが届き、無事がわかった。「宮古も大変な状況です」と記述されていた。11日から12日に発信されたメールが一斉に13日に届いていた。

3月14日

朝4時に夫から電話が入り「どこにいるんだ」と言われた。震災後初めて夫の声を聞いた。家族は無事。夫の実家は海に近いため被災したが、義母は助かっていた。状況を話して「今日帰るから」と伝えた。

さいたま市の保健センター（さいたま市役所内）を出発。1台にはさいたま市の保健師2名と運転手を兼ねた事務職員1名が乗り、もう1台には自分と岩泉の保健師、事務職員1名が乗り、2台の車で出発した。東北自動車道が所々ひび割れていて、多くのコーンが置かわれていた。国道106号線に入る所に警察官がいて、車を止められた。この頃はまだ、警察、自衛隊、消防、救急物資車でなければ通行できない時期であった。車両確認を済ませ、宮古へと向かう。この日の夕方6時頃、12時間かかってようやく宮古保健所に到着した。

現場では、皆がそれぞれ精一杯に取り組んでいた。「私の入る場所が無い」と感じた。それで「まず、私ができることをしよう」と考え、ホワイトボードに記載されている被災状況を確認することから始めた。合同庁舎は本来避難所ではなかったが、灯りがついていて、450名の被災者が集まっていた。栄養室では炊き出しをしていた。

【現場の状況】（事務所で業務に当たった方から聞き取ったことも含む）

3月12日

避難者の状況などの引継ぎのために、避難所ごとに名簿を作成する必要があることから、台帳作成の準備を始めた。宮古市保健センターは壊滅状況で事務用品もない状況であることから、必要な物品は保健所で準備するように努めた。

県内の保健師支援チームも宮古保健所に到着し始め、被害状況の大きい山田町への派遣を試みたが、地震が頻発し津波警報が解除されないことから、宮古市内の大きな避難所での健康管理をお願いした。

3月11日以来、庁舎内には多くの避難者が避難していたことから、保健所保健師は、避難者の健康観察を継続した。

3月13日以降

電話等が通じない状況下、管内市町村の被災状況把握のために保健師と事務が避難所確認のために出向いて状況を確認し始めた。

14日には、岩手県庁健康国保課が調整して県外保健師の支援チームが到着。その後、次々に保健師等の支援チームが保健所に到着するが、

どの避難所で活動していただくかは、市町村に確認することもできない状況であったので、保健所で決定し、保健所でその市町の避難所へ案内し、市町の保健師に繋いだ。

多くの保健師支援チームが管内に入って来ると同時に、保健所では毎朝、保健師支援チームと避難所への情報の周知徹底や、保健指導の詳細についてミーティングを実施、夕方には1日の活動報告会を保健所で開催することで、保健指導の統一化を図り、避難所での住民の状況を確認することができた。

避難所の状況は、最初は「爪きりがない」「タオルが欲しい」という物品が不足だったという状況から、「風邪症状の方が増えている」などという健康面のことに変化していった。うがい・手洗い等の保健指導の継続とともに医療チームとも連絡を取り合い、医療チームを派遣して治療を開始し、蔓延防止等に努めた。（医療チームは当所の管理課が調整）

こころのケアに関しては、市内の精神科クリニックの医師から、診療時間終了後に、避難所を巡回してくださるという申し出をいただいた。宮古市内を16日から18日の3日間、山田町を19日から21日の3日間巡回していただいた。3月24日からは、岩手県精神保健福祉センターが調整してこころのケアチームが派遣されてきた。避難所への派遣については、保健師チームと同様に保健所において決定し、市町の保健師に繋いだ。

こころのケアチームは、7月中旬まで毎日活動が実施され、保健師チームにおいては、8月上旬で活動が終了した。

宮古保健所で実施した保健師チームのミーティングには、宮古市健康課の小野寺保健師さんと松舘保健師さんが毎日参加してくださった。6月以降は、宮古保健センターでの実施が可能となり当所からお邪魔してのミーティングとなった。仮設住宅入居後は、当所保健師も健康調査等で宮古市内の仮設住宅を訪問させていただいた。

こころのケアチーム（琉球病院、静岡県）が7月以降、定期的に宮古地区を訪問してくださり、平成24年3月下旬に開設された「宮古地域こころのケアセンター」へ業務等を引き継いだ。

【今思うこと】

災害については、「対岸の火事」としか思っていなかった状況で、マニュアル等の準備もない中、皆で考えながら実施してきた。庁舎は無事だったことから、自分たちの業務は何とか遂行することができたが、被災市町村にとって当所の支援はこれでよかったのだろうかと自問自答している。

災害は、いつでもどこでも起こりうる今日この頃、日頃の自分のとるべきことを確認しておく必要性があることを痛感した。

全国各地から被災地のために多くの医療チーム・こころのケアチーム・保健活動チーム等長期間に渡る支援をいただき、住民の健康管理を継続できたことに深く感謝するばかりである。

4　医師会の選択

住民の健康と命を守るという使命　―佐藤雅夫医師―

昭和23（1948）年生　宮古市保久田在住　宮古医師会会長・佐藤雅夫クリニック院長

秋田県出身の佐藤医師は、岩手医科大学講師を経て、県立宮古病院に勤務していた。それが縁で宮古市に自身の病院を開業して十数年、開業医として地域に根差した医療活動を行ってきた。現在、宮古医師会会長である佐藤氏に、東日本大震災大津波直後の宮古医師会の状況をお話いただいた。

【3月11日当日の状況】

その日もいつものように外来で患者さんを診ていた。突然、地響きのような音がして立っていられないような大きな揺れが来て、停電した。すぐに患者と職員を帰した。すぐそこまで津波が来ていて急ぎ避難した。

波が引いて自宅兼病院に戻ると、周囲はヘドロと瓦礫に溢れ、病院

は約1メートル余浸水し、電気関係の物は全て水に浸かってしまっていた。翌日車内でテレビを見た時、甚大な被害と状況に驚いた。

避難所の小学校に行ってみたが、その時体育館にいたのは20人にも満たなかった。徐々に人が増えてくるのだが、毛布も水も無い。トイレの水を流すために、プールの水のバケツリレーに加わった。

携帯電話も固定電話も使えなかった。繋がるようになっても途中ですぐに切れてしまうので、どこにも連絡できなかった。

「困っている患者を助けなければ。」と強く感じ、その窓口を広げることが急務であった。しかし、被災した医療機関が多く連絡網は使えず、自分の足で情報を得るしかなかった。

【医師達の動き】

医師会員同士の連絡がとれないことが一番困った。今やるべきことを考え、まずは診療できる所を開こうということになった。

比較的早く診療が開始できたのは、川原田医師、佐藤医師、豊島医師、松井医師、岩間医師、伊東医師であった。その他、被災した医院も徐々に診察を再開した。保健所の柳原医師が病院のリストを作成し、それぞれの診療状況を更新しながら配布していた。県立宮古病院は救急対応。被害の大きかった田老診療所は黒田仁医師が1人で何とかやっていたので、国境なき医師団に入ってもらった。

西町にある医師会館に毎晩医師たちが集まっていた。1週間ほどの間に少しずつ医師間での連絡がとれるようになったが、残念なことに犠牲になった医師がおられることがわかった。薬剤は徐々に業者が運んでくれるようになった。通常の診療ができるようになったのは、2週間程経って電気が復旧してからである。

【診療開始】

2~3日して職員が戻って来てくれた。院内の掃除をし、電動のドアは手で開けた。

さっそく15日に診療を開始した。小さい机を待合室に持って行き、患者を待った。もともとの疾病以外に、不眠や腰痛などを訴える患者が多かった。薬が無いことと、患者自身が何の薬を飲んでいるのかを知らないことが最も困ったことである。お薬手帳も失った方が多かった。薬局に記録が残っている可能性があるので、それぞれ薬局で聞いて来ていただいた。薬も不足していたので、3日分の処方とした。処方した薬の記録を残し始めたのは、診療から3日ほど経ってからであった。2週間ほど過ぎると花巻空港に薬剤が届くようになり、通常通り配れるようになった。病院によっては、糖尿病の患者が多くて大変な所もあった。

【巡回診療が始まる】

避難所を巡回して診療した。生き延びた避難者の健康を何としても守らねばならない。2人1組になって出かけた。

昼に行っても皆、日中は情報を集めに出かけたり、自宅を片付けに行ったりしているため、夕食後の時間帯に巡回した。かかりつけ医の巡診で、全国から応援に来られた医師たちとは違い、安心される被災者も多く、意義を感じた。

【患者の動向】

3~4か月経てようやく通常に戻ったが、患者は震災津波前より減っている。1割5分~2割減程度であろうか。病院にかかりたくても移住先が病院まで遠かったり、交通の便が悪かったりした。亡くなった患者もいる。震災直後に検案の話が来た。医師達が3~4人でチームを組み対応した。以前診療していた患者が亡くなられているのも見た。花巻や盛岡、北上など内陸に住む家族を頼って転出していく方や、立ち退きを余儀なくされて移動する方もいて、紹介状を書いて見送った。それでもやはり宮古に戻る方が多く、独居老人も多い。

【所感―人々の精神的強さ・そして今後必要なこと】

津波以降強く感じることは、いつまでも引きずらない住民達の精神

的強さである。外来患者から話を聞くと、人が波に流されて行くところを見たり、手を伸ばして助けたり、大変な思いをしたのに、今はなぜか明るい。その強さと逞しさ、開き直り、精神力の強さに驚く。勿論中には泣き出す人、精神を病んでしまう人もいる。これは患者に限らない。医療従事者も同じ被災者であり、そのメンタルケアが必要であった。本人が大丈夫と言っていても、5年経ってまだ表面化してこないこともある。今回の地震と津波の被害は、それほどショックが大きい事態であったのだ。

今回の災害で医師会が大切にしていたことは、「何かあったら医師会館に集まること」と「個人のネットワーク」であった。これだけ大きい災害だと、決まったことをやるだけに留まらず、個人の経験を持ち寄って対応することが必要だった。この経験は次に生かさなければならない。それぞれの置かれた立場で何をすればベストかを、常に意識することが大切だと感じている。被害を最小限に留める方策を、粛々と平生から考えておくべきであろう。

5　暗闇にともり続けた希望の灯り―後藤康文医師―

昭和12（1937）年生　宮古市大通　後藤泌尿器科・皮膚科医院院長

宮古市大通の後藤泌尿器科皮膚科医院（以下、後藤医院）は海から300㍍程の場所にある。院長の後藤康文氏（以下、後藤院長）は宮古市で開業した父の跡を継ぎ、40年にわたりこの地の医療を支え、地域住民の健康を守ってきた。沿岸地域では人工透析ができる数少ない病院の一つである。だからこそ震災前から、透析患者にとって不可欠な透析システムの維持に関して、後藤院長は強い信念を持っていた。阪神淡路大震災に学び、震度7の地震や20㍍の津波に耐え、さらに透析に必要な電気を確保し（自家発電装置）、水・重油のタンクを屋上に設置できるほど強固な構築の病院を建てていた。後藤院長は震災に関して多くを学ぶ中で、いずれは三陸にも大規模な地震と津波が必ず来ると確信していた。

3月11日

東日本大震災当時、後藤院長はいつものように1階で診療をしていた。院内1階には多くの外来患者がいて、さらに2階の透析室51ベッドは満床状態。医師4名、看護師、補助看護師48名は透析中の患者を見守っていた。突然、立っていられないくらいの大きな揺れがやってきた。

「地震の際停電した以外は特に問題はなく、自家発電にて再稼働して透析を施行していた。約15分程度で通常勤務配置に復帰した。外来も再開した。当院の災害マニュアルでは、震度5以上の際には従業員は診療所に連絡もしくは、駆けつけるよう指示していたため、夜勤明けの2名も車で駆けつけてくれた。」（注(9)）後藤康文 2011年 410頁）

外に出ようとした患者がいて止めた。後藤院長は日頃から「かなり高い津波がいつか絶対くるぞ」「ここが一番安心。ここがだめだったら、宮古のどこも危ない。病院は3階までは津波が来ても大丈夫。その時は逃げて来なさい」と近隣住民や患者、周囲の人々に口癖のように話していた。避難所は宮古小学校だが、そこまでは距離があって場合によっては間に合わないこともある。ゆえに3月11日に、後藤医院に駆け込んだ住民は多い。いつか必ず大きな津波が来ると確信していた後藤院長は「その時」のために、震度7に耐えられると認可を得た建物を建て、人工透析が1週間は継続できる準備をしていた。

津波が来ていたことは知らなかった。サイレンが鳴ったのかどうか、何も聞こえなかった。実はこの時防災無線は流れていたのだが、パニック状態の中ではそれを認識できた人はほとんどいなかった。地震後の停電から10分程度で自家発電が動き出し、1階待合室と2階でテレビを見ることができた。それを見ていた外来患者が、宮古埠頭に津波が来ていることを知り驚いて伝えてきた。この時は大船渡で10㍍、宮古でも4㍍以上との報道であった。屋外では「津波が来る」と言って逃げて行く人も、また後藤医院に避難して来る近隣住民も、それぞれ大勢いた。黒いコールタールのような波が近づいてきた。「院長、津波が

来ます」「ここにいなさい。一番安心だから」、後藤院長は患者を前に、改めて説明した。2階透析室の危険を察すると透析室に向かい、血液回路の回収作業に入ったが、透析終了時には道路や院内の1階まで津波は到達していた。「透析はもうやめろ!」「あとは3階、4階に避難しろ!」と看護師に指示した。この判断は正しかった。津波はすぐに押し寄せて、病院2階まで迫る勢いであった。外来患者も透析を受けていた患者も皆、上階へ避難できた。後藤院長はあたりを見回して、最後に上階へ上がった。

患者、避難してきた近隣住民、職員、およそ200名が3階、4階に避難した。3階は病室（19床）・談話室・食堂・機能訓練室で、4階は事務室・会議室・休憩室・院長自宅であった。4階の会議室・休憩室は広くしてあったので、そこで皆が寄り添い夜を迎えた。電気もテレビもあり情報を得ることができた。暖房もあった。停電のため日が落ちると町は暗闇であったが、後藤医院だけに煌々と灯りが点いていた。

写真1　避難所となった4階の様子

「日も落ちてきて、津波も大分引けた。電話・インターネット等の通信は途絶え道路も寸断、まったく孤立状態となった。自家発電でテレビの情報や携帯ラジオで各地の被災情報は少しずつ把握することができたが、こちらからの通信は不可能であった。」

困ったことは、およそ200名分の近隣避難者等の食糧調達である。

「午後8時頃に友人の中村正行氏が宮古駅方向の道路からブルドーザーで駆けつけ、道路のガレキ・屋根等を取り除き来院した。一部道路の確保で人の通行可能の目途がついて、200人分の食料の確保のため、再三、宮古振興局に実状を話しお願いして、振興局職員の人が200名分のカップヌードルと水を確保し、差し入れをしてくれた。行政の人にも感謝しながら、夜10時30分には全員が腹ごしらえをした。同夜、盛岡の娘にも、一時的であるも通信可能であった携帯で、早朝のうちに200人分の食料の確保を願い、安堵した。」（注(10)）後藤康文　2011年411頁）

この食糧確保は簡単ではなかった。中村氏が最初に市役所に行って頼むが「避難者のための食べ物なので」と断られた。合同庁舎や消防などにも調達に行ったが、やはり断られた。再び合同庁舎に行って事情を話し頼んだところ、上述のカップラーメンをようやくいただけた次第である。病院ではそれをさらに紙コップに移して皆で分けた。リンゴや煎餅などのお菓子も、皆で少しずつ分け合って腹に入れた。

夜になると皆身を寄せ合って休んだ。そこには電気やテレビがあったし、何より灯りがあるだけで人々は安心することができた。

後藤医院は1階天井近くまで水に浸かっていた。既に1、2階からパソコンや電子機器を移動させていたので、重要なデーターの消失は免れていた。ただし、X線透視装置やCTなど移動できない物は水に浸かり故障していた。再設置までには数か月かかり、多額なコストも必要となる。それでも後藤院長はすぐに用意してほしいと、業者に迷うことなく依頼した。担当者の努力もあり、わずか数週間でそれらの機器は元の場所に設置され、4月には利用可能となっていた。

3月12日

水が引いて屋外に出ると、町中ヘドロと共に瓦礫が流れて来ていた。とにかく何から手を付けていいかわからない状態であった。ご遺体も病院の周辺に数名流されていた。遺体は泥を被りひどい状況であったが、消防団に水で流してもらって検案できた。

「当院の1階は2メートル30センチの津波にてヘドロ海水で汚染された外来診察室・X線室・待合室・給食・薬局・点滴処置室・内視鏡検査・自動血

圧計・薬剤・カルテ・薬局入力薬剤情報等々すべて水没した。事務コンピューター9台は使用不能となるもサーバーが4階にあり、データーは保存されていた。カルテ等はすべて使用不能となり、レントゲン装置・X線透視装置・CTは使用不能となった。レントゲンのサーバーはレントゲン技師が津波のさい一緒に持ち出し、難をまぬがれデーターは保存できた。サーバーは今後2階以上に置くよう考えることとした。」

「道路と交通網が壊滅状態であり、朝7時に宮古市対策本部の市役所に出向き、給水のお願いをした。しかし無線も無い状態であったため、さらに岩手県の対策本部の広域行政組合災害対策本部にも願い、朝8時頃、消防・自衛隊・警察等の人々に診療所の状況を説明のうえ、再度給水のお願いをし快諾を得た。その日の朝に道路網を確保してもらい、診療所周辺の車や瓦礫の除去をしてもらった。あちこちに遺体が泥にまみれている状況であった」

「屋上の自家発電はA重油の室内タンク貯蔵庫に1週間の備蓄があり使用可能であった。給水用タンクは屋上・地下・屋外の3か所に設置し、水中ポンプを使用していたため使用可能であった。宮古市の水道局と宮古消防署より1日4～5回の給水を受けることができて、透析が可能となった。なお、電気等の点検で漏電等の危険、設備配管からの水漏れ等の無い事を確認した。薬剤・ダイアライザー等は約10日間の備蓄があり、充分透析は自力でもって可能だった。透析関連の情報伝達は職員や患者等の伝達しかできなかった。透析患者は2割の人が連絡不可能であったが、被災の次の日から透析を開始し、連日の透析を始めた」（注(1)後藤康文　2011年　411～412頁）

人工透析患者にとって週2～3回の透析は欠かせないが、震災の翌朝（12日）から透析が継続された。重油は6千300リットル備蓄していた。約1週間分である。屋上に設置された自家発電装置は200キロワットの発電が可能である。漏電の有無を確認した後、診療を再開した。

山田町には院長の弟の医院（後藤医院　山田町長崎　以下、山田後藤医院）があるが、連絡がつかなかった。山田町では津波に続いて大規模な火災が起こっていた。500棟が焼失し陸の孤島となっていて、当時一切の情報が入らなかった。山田後藤医院の建物は無事であったものの、被災後の断水・停電で開業は不可能となり、院長や看護師、事務職員は避難先の山田小学校で被災者の救済に当たっていた。宮古後藤医院から山田後藤医院にようやく連絡がつき、12日より透析患者30名を宮古後藤医院で受け入れることになった。消防署や自衛隊には連絡がとれず、宮古市内で民間バス（リアス観光）をチャーターして山田から宮古へ移送した。通常なら45号線で30分程の距離だが、瓦礫などがあって国道は通行できず、山沿いの別ルートで1時間半かけて往復送迎した。通信網が無い中、診療所間の連絡を担ったのは、薬剤会社や透析関連会社の担当者達であった。

写真2　翌日の透析室の様子

写真3　消防団による給水

3月13以降の状況

3月19日には電気が復旧、水道は3月17日に仮復旧するも、宮古市の水量が足りず消防の給水車を併用し、3月25日に完全復旧した。4月8日は東北六県全戸の停電のため、宮古市水道も断水の恐れがあり、自衛隊より25トンの給水を受けた。電話は4月18日に、FAXとインターネットは4月21日に復旧した。それまでは午前・午後の透析だ

けで夜間透析はできなかったが、5月9日より完全復旧。夜間透析（月・水・金）、昼透析（月~土）が通常業務となった。7月末当時、163名中、158名の人が透析を受けている。

どんな状況でも人工透析患者に継続的治療を提供するには、非常用自家発電装置と、重油、水タンクの屋上設置が不可欠である。ところがこれを実現するには、後藤医院のように構築上十分に検討された頑丈かつ広い設置場所や、莫大なコストの確保が必要となるため、踏み切れる病院は少ない。

後藤院長が踏み切った理由を尋ねると、「患者にとってここが一番安全な場所にしたかった。よそに送るのではなく、自分達のところで面倒をみることが大切だ」との返事だった。水害の多い地域だからこそ、患者が増えれば増えるほど、万が一の場合の恐怖が常にあった。「何か起きてからでは遅いのだ」と後藤院長は言う。

行政の諸機関や関係各所に対して物資や支援の要請を後藤院長自ら積極的に働きかけたことは、病院の迅速な復旧へとつながった。記録ファイルには、地震発生当時からの状況や復旧の詳細が克明に記されており、今後に役立てようとの意志が感じられる。

「想定外」を「想定内」と見定める強い防災意識「その先」を読む力、過去の経験から学び生かす力、実行できる信念と決断力、それらが今回の震災・大津波から多くの透析患者と住民の命を救った。そして多くの人々の心を動かした。あの暗闇の中にともし続けた灯りは、後藤院長の信念であり、生き抜いて行こうとする人々の命の灯りであった。

6　隣接山田町の医療状況と、宮古後藤医院との連携―後藤尚医師―

昭和22（1947）年生　山田町長崎　後藤医院院長

宮古市に隣接する山田町は、町全体に津波と火災による甚大なる被害を受けた。町内の開業医院として唯一透析を行っていた後藤医院は、被災直後に多くの医療機関が診療できなくなる中、患者の透析を継続する必要に迫られ、宮古市の後藤泌尿器科・皮膚科医院の協力のもとにそれを継続した。当時の状況と連携を、後藤尚院長から話していただいた。

【当時の状況】

3月11日

3月11日の地震発生時、外来には3~4名、2階透析室に5~6名の患者がいた。揺れがひどく、機械を抑えた。長い揺れがおさまった後に停電し、予備電源を使っていたが、状況をみて透析を切り上げた。患者3名が自宅に戻って行ったが、津波を見て戻って来た患者以外の2名は亡くなったことを後で知った。

最初は津波が上がってくるのもわからなかったが、波とともにゆっくり瓦礫が上がって来るのが見えたので、職員（医師1名・看護師7名・事務員5名）と患者（4名）で100メートル先の山田南小学校に避難した。患者1名は車椅子に乗せて避難した。

その後一度病院に戻り、使えそうな機材を小学校に運んできて、小学校の保健室を使って救援活動をした。夕方以降、波に流された人や低体温の人、軽い怪我人も含めて100名以上の患者が保健室にやって来た。濡れている人は児童の体操着に着替えさせ、5リットル生食水を直接沸かしたもので温めた。ストーブが1つしか無かったので、沸騰まで時間がかかった。複数の毛布やリネンが必要だったが全く無く、病院の20枚ほどの毛布を運んで使った。

重症度の高い患者は空いている教室に運んだ。しばらくして発熱や高血圧の患者もやって来た。全身打撲・裂傷・切断（指）などの患者も来た。多くは高齢者であった。夕方に土建屋さんが来て、自家発電機を持って来て、保健室に灯りを点けてくれた。食物は全く無く、院長の自宅にあった食べ物を持って来たが、1日で底をついた。翌日配られたおにぎりは1人に1個もいきわたらず、13日になって初めて食事らしい食事ができるようになった。

3月12日以降

2日目以降は血圧の薬を求める患者が増えたが、薬が不足していた。

徘徊する人もあり、精神科の薬が必要だった。夕方には溺死の方1名（40代後半）が運ばれて来た。蘇生したが意識が戻らず亡くなった。山田中学校が死体安置所となっていた。

12日には、同町に開業されている近藤医師が応援に来てくださった。当時、近藤医院は被災しており、近藤医師はその後も2か月ほど診療を継続してくださった。後に町内に病院を再建し、診療を再開された。そして複数の薬剤師も応援に駆けつけてくれた。また、救急車による宮古病院への患者搬送がこの日から始まった。豊間根～花輪～宮古への、山越えの道路が生きていた。通常ならば30分ほどの道のりを、雪のために2時間ほどかけて搬送した。風邪や合併症が悪化した患者を、毎日数名運んだ。

透析を継続する必要に迫られていた。宮古の後藤泌尿器科・皮膚科医院との連絡がつき、12日より透析患者30名を受け入れていただくことになった。バスで山田から宮古への往復を山沿いのルートを1時間半かけて送迎して透析を継続した。後藤泌尿器科・皮膚科医院からは、透析患者受け入れや物資調達などの支援をいただいた。

14日に町内の薬局の方が、「濡れているけれど」と言いながら大きな袋2つの薬を持って来てくれた。

15日には不足している医療品と薬品の確認をして、プロパーがそれを運んで来てくれた。また町内の薬局から薬を掘り出し、1包ずつ泥を洗って整理した。パッケージされたものはきれいで有効に使えた。手袋・マスクやエプロン・消毒剤などは不足のため、煮沸して再使用していたが、1週間ほど経過した頃から手に入り易くなった。

看護師は診療の介助や避難者の健康管理のみならず、家族と離れ離れになった高齢者のおむつ交換も毎晩行った。夜中でも呼ばれ、ほとんど眠れなかった。こうした状況が1週間は続いたのだが、数日すると何曜日なのかもわからなくなったので、日付を黒板に書くようにした。1週間程して岩手日報が入手できるようになると、ようやく外の情報が入り、小学校の壁に貼った。

1週間で電気が通って、10日目には水道が回復した。3月23日に病院に戻り、翌24日から診療と透析を再開した。皮膚科や泌尿器科の患者は来ていたが、この時期には患者が押し寄せるということは無くなっていた。

【今、思う事】

避難所に指定されていた小学校に、リネン・食糧の備蓄はなく、今後に向け一定量を確保してもらえたら対応がより良くできたと思う。

7　支援者支援の立場から　―村上優医師―

昭和24（1949）年生　国立病院機構榊原病院院長　当時、国立病院機構琉球病院院長

東日本大震災の際、各被災地には外部から多くの医療支援団体もしくは支援者が集まった。宮古市も同様に多くの協力のもと、医療支援を受けた。

その中でも、震災直後に沖縄から宮古に駆けつけ、長期にわたり医療支援を続けた医師と、その医療支援チームがあった。当時、独立行政法人国立病院機構琉球病院院長であった村上優医師である。村上医師はあくまでも地元の医療従事者を尊重し、支援者を支援する「支援者支援」の立場を一貫してとり続けた[注(12)]。外部からの医療支援者に対し「地元の従事者の望むことをしてあげてください」と告げて、医療支援の秩序が保たれるよう努力した。このことは円滑な医療支援を行う上で大きな意味を成した。それだけではない。地元の医療従事者の悩みに静かに耳を傾け、プロの視点からそのメンタル支援を継続した。「我々にできることは、ただ耳を傾けるのみである」と村上氏は語る。この章では村上優医師へのインタビューと報告書『震災こころのケアのかけはし』[注(13)]から、当時の宮古市における医療と支援活動の状況を記載する。

『震災こころのケアのかけはし』の巻頭で、村上医師は次のように述べている。

派遣期間は一年間継続しました。初動から派遣チームは二週間交代で他のチームより長めとし、派遣メンバーを可能な限り固定して馴染みの関係を模索し、他職種チームで構成しました。目覚ましい働きはなく、地元の支援者の後方支援を旨としました。「こころ」を相手にする支援は緊急医療と違ったことが必要だろうという体験からです。その体験はパキスタン北西辺境州やアフガニスタン東部で三〇年近く地元支援活動をしている中村哲医師（ペシャワール会）を後方で見守り、学んだことが中心にありました。地元が望むこと、望むものをすることの大切さです。

村上医師は、ペシャワール会[注(14)]の会長として現地で活動する中村哲代表の後方支援を長年担っている。海外における医療支援のプロフェッショナルである。氏は宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を引用しながら、支援者としてのあるべき姿を次のように述べている。

私たちは岩手県の宮古市を支援の場所と命じられ、その地で地元の医療機関、保健福祉機関の人々と交流させていただきました。出会いは偶然ですが、今では必然だったように感じます。その当初より岩手花巻出身の宮沢賢治が亡くなる二年前に手帳に記した「雨ニモマケズ」の詩を羅針盤としました。その詩を掲載させていただいて、想いを共有いただければと思います。そこで大切にしたのは詩の最後段で「デクノボー」に最も共鳴していたことを付記します。

幼児よりお年寄りまで生き延びた人々が神々しく感じられた。生き延びられたことを敬うこと、これが支援の最初の基本となった。言葉を変えて現地主義とよんで、沿岸で被災された現地を中心に考え行動することを私たちの合言葉にした。（注(15)村上優　2013年　7頁）

村上医師と琉球病院の医療チームがどのような経緯をたどって宮古に入ったのか、そしてその後の支援活動について、氏の報告書から時系列で追ってみたい。

①　経過

初動態勢

三月一二日

国立病院機構施設である花巻病院院長の吉住昭先生と連絡がとれた。

吉住院長のもと、病院は一日二回の幹部ミーティングで、そのつど対応を決定して困難を越えていると聞き、何か手伝うことがあるかと問うと、病院保守のための医師派遣であった。一〇名程いた医師のうち花巻にいるのは四名程度という。投薬も供給が途絶え、外来でも数日の処方でつないでいるとのことだった。

三月一五日

国立病院機構本部より国の派遣要請があるとの連絡に、沖縄より完全自立の派遣は想像しにくく、熊本にある菊池病院に連絡して合同チームができないかを打診した。（中略）菊池病院の高松院長も単独では派遣が難しいので、合同チームの提案に合意をしていただき、国立機構本部に完全自立チームで参加できる旨の返事をだした。国立病院機構本部でとりまとめて厚生労働省に報告するとのことで、行き先の指示を待ちながら体制準備に入った。車に関することは菊池病院、薬品や食料を含む完全自立の装備に関しては琉球病院が担当し、派遣メンバーは全体で六名として他職種で構成することを打ち合わせた。（中略）装備、準備する薬品、それにどのような原則で行くのか原案を作成し、各部門の責任者を集め、また同時に病院全体で希望者を募りリストを作成した。

村上医師は、参加スタッフの適性や最終的なメンバー決定について、次のように振り返る。

短期間に最低限の基本的態度と知識を得ることが大切であるが、それ以上に現実の精神科臨床能力や柔軟さを備えていることが第一で、また本人が参加を希望していること、志願していることが第二に重要なことであった。

最終的なメンバーの確認をした時に、トイレなどを含めた自然環境の厳しさより、男性だけのチームを勝手に想像していたのだが、心理士の野村れいかさんが志願した時には、あからさまに「あなたが行くの」と聞き直

し、「私ではだめですか」と猛然と反論された。後で考えると、その子どもや災害支援の基礎知識の確かさもあるが、女性スタッフが現地の人々にどれほど受け入れられやすいかを感じ、不明を恥じるのみである。（注(16)　村上優　2013年　7～9頁）

後に、野村氏は女性スタッフとして被災地で大活躍をすることになる。野村氏はコミュニケーションが上手で、子供と遊ぶのを得意とした。子供を担当し遊びの中で問題のある子どもを見つけることが、彼女の大切な役割となった。

三月一七日

岩手県精神保健福祉センターより連絡が入り田老地区を担当するように指示があった。この時まで「田老」を知っていたわけではない。その実、インターネット地図で「太郎」と打ち込むありさまで、検索ができずにいたほどで、今更ながら私にとって未知のところに行くのだと気を引き締めた。

三月一八日

沖縄で揃えることができる備品（薬品と診療器具、食糧関係、リュックサックにナップザック、懐中電灯や通信器具）もあるが、沖縄ゆえに厳しい寒さに耐えうる寝具、様々のレベルの防寒具は手に入らず、リストアップして福岡で調達することになった。すでに自炊用具やコンロのガスボンベなどは全国的に品薄で入手できるかは不明であった。

三月二一日

三月一九日に福岡の登山用品店二店舗でようやく冬物の防寒具を六人分揃えて装備を整えた琉球病院一行は、三月二一日に沖縄を発ち、陸路熊本より来た菊池病院一行と福岡で合流。午後八時に岩手へ向けて出発した。医師一名、心理士一名、看護師三名、精神保健福祉士一名の構成で、メンバーは三〇歳代の中堅であった。福岡を経ってから二四時間後の二三日夕方に、盛岡に入る。この時の説明では「田老」でなく「山田」に入るように指示を受け、共通記録や注意事項の説明を受けて、取りあえず沿岸での現地本部のある宮古市合同庁舎にある保健所に出向くように指示があった。

宮古に入る峠はまだ積雪があり、交通規制があり緊急車両以外の交通は制限されていた。二三日は岩手での後方基地にした花巻病院に戻り、院長始め病院関係者の配慮で病院内施設に宿泊した。

写真４　宮古市支援の様子①

写真５　宮古市支援の様子②（食事風景）

三月二四日

早朝に宮古へ向けて出発した。宮古市について保健所を訪ねると活動の場所は宮古市の金浜地区をはじめとする沿岸地域と指示をされて活動が始まった。（注(17)　村上優　2013年　9～10頁）

②　現地での支援活動

村上医師は当時の支援活動を振り返り、「現地の状況を見て、これでは1か月では終わらない。3か月でも無理と判断した。医師4名が2週間ずつ行くことにした。チームは6人1チームで、途中から5人1チームとした。そのうち3名は琉球病院の医師であった」と述べる。

以下、支援活動について転載する。

・チーム構成と派遣期間

最初の一班より四班までは六人構成で基本的には医師一名、臨床

心理士一名、作業療法士か精神保健福祉士一名、看護師三名の構成が主だった。医師は琉球病院より四名を固定して、このメンバーが繰り返し行くことで地元と顔見知りの関係を構築することを目的とした。同様の目的で心理士もほぼ琉球病院の四名と菊池の二名に固定した。（中略）

二週間の派遣を終えて日曜日に沖縄に戻ると、その翌日の月曜日からは普段の仕事に戻っていた。本来は代休をとるべきだが、肩代わりをしてもらっているとはいえ、本来業務が山積しているからである。初めの二か月は日本全体がこの雰囲気のなかで、自分のことを置いて東北の被災地に思いを馳せていた人が多く、自分のことを勘定に入れずに働くことができた時期でもある。（注(18)村上優　２０１３年　10～11頁）

・チームが大切にしたこと

一方で、「こころのケアチーム」で大切にしたことは、「無力に徹すること」である。「無力」という言葉はアルコール医療を専門とするものにとって特別な響きがある。あの被災と被災者をまえに、私たちは頭を垂れてただひたすら、人々の話に聞き入るだけである。その体験に返す言葉がないし、上滑りな言葉に話す人々の共感は得られない。この体験は回復しつつあるアルコール依存や薬物依存の話に耳を傾けるのに似ている。回復していくのは被災者その人であり、私たちは側にいて醸し出される言葉、その人そのものに共感するだけである。司法精神医学、アルコール・薬物依存医療、家族療法、児童思春期医療、認知症医療、精神科救急医療など専門領域を有する専門家として有能な援助職の活動でなく、共感する心だけを羅針盤とすることに徹した。精神医学や心理学が少し役に立つ、いわば明確な診断がつくときにだけ専門家としての活動を行った。例えば、服薬していた薬を流出して服薬が中断し、また危機的な状況で不眠が続いて精神症状が急激に悪化した精神障害を有する人へ投薬を行ったり、津波を直接は受けなかったので再開をした病院へつなぐための算段をしただけである。

宮古市での始めの活動は、指定された地域の避難所を回り、そこで依頼を受けたことを行い、得られた情報や実施したことを報告する毎日で、活動地域はニーズに沿ってひろがっていた。宮古市の保健師や全国より来た応援の保健師より相談を受ければ、同伴訪問を行い、ともに検討を行うが、当初はどの地域にどの頻度で訪問するのかは各々のチームに任されているので毎日顔を出すことを基本にすることにした。

毎日夕方には保健所で地元関係機関と医療チームやこころのケアチームがミーティングを行い、状況報告を行っていたので共通認識が得られるし、自然に依頼を受けることができた。支援側から行動提案することはせずに、あくまでも保健所の指示を受けて動くが、活動地域に関してだんだんと意見を求められることが増えてきたので、できる範囲は最大限応じることを旨としていた。随分後になって地元の保健師さんたちより、いつもにこにこして肩に力を入れずに振舞っていたのが安心だったと評価を受けた時には、私たちの意図を理解いただいていると胸が熱くなった。デクノボーとなることが私たちの目的としたことに誤りはないと確信した瞬間である。（注(19)村上優　２０１３年　11～12頁）

・田老診療所

琉球・菊池チームが沖縄を出る時に指示されていたのは田老地区であったが、その後、宮古市に変更となった。（中略）三月二九日に支援要請のあった岩泉町を訪問する道すがら、田老にある宮古北高の避難所に寄り、すでに診療所がグリーンピアに一本化されていたので、診療所長の黒田医師を訪ねてグリーンピアに伺った。黒田医師からは、住民は自らの診療所チームが守るので、支援や救護活動にまわらなければならない人をフォローしてほしいとの要請だった。「ミイラ取りをミイラにしない作戦」と黒田医師が命名した支援者支援が始まった。おそらく組織だった支援者の支援は沿岸地域で始めてではなかったかと思う。（中略）三月三〇日より消防団、消防署の職員の面接が開始された。震災以降、これらの団員や職員は不眠不休で自らの被災を顧みることなく活動している。客観的には疲れて、打ちひしがれているはずの人々であるが、自ら一人として弱気を見せることができない人々である。（中略）その後は学校の先生、保育士、老人施設職員、ケアマネージャー、診療所の看護師、総合事務所の職員などと援助に携わ

る人々に対して計画的に全員面接を実施したが、これらも全て診療所が方針を立て、声をかけて実施された。あの緊急時の人のつながりの強さは震災前からの診療所への信頼に裏打ちされている。（中略）被災者の表現は様々で、傾聴に徹したのみである。しかし、面接の意味は理解をされており、面接が多少予定より延長することはあっても、自ら立ち直っていく姿にただ手を合わせるだけだった記憶がある。

最も過酷な立場や状況にあるメンバーを医師たる私が傾聴したが、聴くだけでも存在が揺らぐ体験だった。当事者は桁の違うストレスにあると理解せざるを得ない。一時間ほどの面接時間が設定され五人を終えて、その夜に経験したことのない不整脈に襲われ、胸痛がして心筋梗塞の不安がよぎり、気仙沼支援に入った息子から「支援にいって倒れたら迷惑をかけシャレにならない」と言われたことが頭をよぎった。不整脈は三〇分ほどで治まり、支援九日目の疲労に加えて、傾聴した話のあまりの重さに、何とか取り繕っても、弱い、ありのままの自分がそこにいることを理解した。弱さを知り、休息の大切さを知ったのは、私にとって幸せの体験だったのかもしれない。支援者も弱い存在であることに気付き、それを受け入れることが出発点だと心の底から感じた。

田老では診療所を訪れる患者さんや、仮設住宅ができてからは宮古市保健福祉センターの依頼で訪問に同行することもあったが、基本的にはこのように支援者支援が中心であった。診療所があってこそ援助職全員面接というプランが立ったが、全員ということが面接の抵抗をなくし、相談することの敷居を低くさせる効果があった。（注⑳村上優　2013年　53～54頁）

村上医師は当時の宮古市保健所長、柳原医師の迅速かつ的確な指示、および保健師・看護師の意欲と働きを高く評価している。現場でミーティングやカンファレンスの機会を持ち、多くのコメントを出し合うことが、情報を掬い上げる上でいかに大切かを強調する。また支援については、特別なことをするよりも「そこにいること」、あくまでも「寄り添う」姿勢を貫いたと言う。被災地の今後の課題としては、「アルコール問題」と「早期の介入」を挙げている。

氏は現在、三重県津市の国立機構榊原病院に勤務している。数年間院長不在であったこの病院に、定年退職の期限を延長して単身赴任した。「誰もが押し寄せる所なら誰かが行く。誰も行かない所でこそ、我々は必要とされる」「人が行かないところに行く」という信念に基づいてのことである。氏は「琉球病院には大規模災害による医療支援の礎ができ上がった」と語る。そしてさらに笑顔で語ったのは、医師や職員が不足していた榊原病院に最近若い医師や職員が増えてきた事である。それも氏の人柄や信念に惹かれてのことではないだろうか。「どんな状況下でも、我々にできることは人の声にただ耳を傾けるだけ」と静かに語る村上医師に、崇高な精神性と医療への熱い思いが感じられた。

8　臨床心理士として―藤澤美穂臨床心理士―

昭和50（1975）年生　岩手県臨床心理士会　宮古市支援コーディネーター　臨床心理士

東日本大震災においては、各分野でのプロフェッショナルが宮古に入った。臨床心理士の藤澤美穂氏もその一人である。藤澤氏が所属する岩手県臨床心理士会は、現在も被災者のメンタルのケアに取り組んでいる。その経過および支援活動の状況について記載する。

【支援に至るまで】

臨床心理士会では、2008年7月24日発生の岩手県県北地震の時から災害時の対策を検討しプランを立てていた。東日本大震災が発生すると、臨床心理士会副会長を中心とする緊急支援対策チームが立ち上げられた。

宮古に関しては、日本赤十字社岩手県支部（以下、日赤とする）が日本臨床心理士会にアプローチして、岩手県臨床心理士会へ依頼するという流れでつながった。このため、支援開始当初は日赤のボランティアとして活動し、4月11日から8月6日まで宮古地域の支援に入った。

最初は医療支援を行う日赤岩手県支部の医師や看護師達と一緒に動いた。この頃はまだ臨床心理士会独自で地域に入るシステムがなく、

支援の調整は日赤が行っていた。

4月16日、宮古市と山田町の避難所となった山口小学校と山田高校に入った。巡回して声掛けとリラクセーションを行う。6月以降は宮古市内の避難所がシーアリーナに集約された。徐々に仮設住宅に支援に入る必要性が出てきた。日赤では急性期支援の経験があったが、長期にわたる支援は経験がなかったとのことで、協議の上、協力してやっていくことになった。

【活動の内容と状況】

活動内容の中心は、仮設住宅で住民が集う機会を作って話を聞くこととし、地域の中でできることを第一に活動することにした。また日赤と一緒に宮古市の社会福祉協議会に行き、どこにどのような仮設住宅があり、どのような入り方が良いのかを確認・検討した。その結果、5~6月開設の仮設住宅で、早い時期から入居が始まったものの、まだ自治会が発足に至っていなかった仮設から、コミュニケーション作りをしていくことになった。

活動仮設住宅の一つである中里団地（愛宕公園仮設）には2011年9月から入った。主に鍬ヶ崎の住民が入居していると住民から教えていただいた。自主組織を作り防災活動なども行っていた。初日の9月10日は集会所に伺ったが人数は少なく、血圧を測りに来たり、物資を受け取りに来たりという具合であった。お茶も用意していたが滞在時間は短い。週1回10時から15時まで行くことにして、そのつど「お茶を用意して待っています」「血圧を測定できます」そして「次回は○日です」などと書いたチラシを各戸に配ることにした。しばらく経つと徐々に訪れる住民が増えた。

毎回来てくれる人も少しずつ増えてきたが、初めての人でも入り易くするにはどうしたらよいかをスタッフで相談し、皆が楽しめるイベントを企画した。子供達がお菓子を配るハロウィンや、芋煮会、クリスマス会などを開催し、甘酒など皆で楽しめるものを用意した。

1年目の冬、集会所に訪れる方々は、慣れない環境で冬を過ごす不安や、将来を考えつつも年を越してしまった不安などを持っていた。アプローチとしては、トラウマについて不用意に話し過ぎないよう、その方の許容範囲でとどめるよう心掛けた。

初めの頃は震災について進んで話してくださる方は少なく、1年ほど経過してようやく「あの時はこうして逃げた」など話してくれるようになった。それでも集会所に来られる方々の多くは心身共に比較的健康で、話を聞いて寄り添う、繋がりを作る、孤立感を持たせない、コミュニティを意識した関わりを大切にした。

様子が心配な方は、社協にお知らせするようにした。職業団体の限定的な活動で関われる部分を越えた対応では、地元の専門家に繋げるよう、自分達の持ち分を超えないよう注意していた。支援活動を進めるにあたり、臨床心理士会からの支援協力者は、多い時では25名を超えた。初期は週1度の支援に入り、2012年8月までこれを

表4　宮古市の派遣チーム派遣団体状況（平成23年5月時点）

発災～期間	4/11	5/11	6/11	7/11	8/11	9/11	10/11	11/11	12/11
実相談件数	237	222	211	107	30	22	25	28	36
延相談件数	322	612	426	230	66	47	52	54	57
主な活動場所	避難所等	→	避難所・仮設住宅等	→	→	仮設住宅・震災こころの相談室	→	→	→

発災～期間	1/11	2/11	3/11	3/31	計
実相談件数	7	21	32	24	1,002
延相談件数	16	47	54	58	2,041
主な活動場所	→	→	→	→	

＊『震災こころのケアのかけはし』3頁より

継続した（途中までは日赤とともに活動）。それ以降から現在は2週に1度の支援で、中里（2011年9月～）・高浜（2012年7月～、2012年3月までは日赤と共に活動）・グリーンピア三陸みやこ（2011年10月～）の3つの仮設住宅に出向いている。盛岡市内・雫石町・宮古市周辺に勤務する20名の臨床心理士が、3人1組となって車に乗り合わせ、宮古に向かう。午前は中里地区・午後は高浜地区に行く行程と、グリーンピアのテニスコート仮設住宅に行く行程がある。

宮古地域のリーダー藤澤氏は、皆の共通理解を得ることが大切と考え、2週間に1度の引継ぎの際は、荷物の引継ぎも兼ねて集まっている。また宮古の社協が3か月に1度開催する、関係機関の連絡協議会に参加し情報を得ている。社協から研修の講師依頼を受けることもあった。

支援については、仮設住宅暮らしでも安心感が大切と考え、体をリラックスさせることから始めた。呼吸法を取り入れたリラクゼーションやアファメーション（自分自身を励ます）は特に大切であった。

【利用者の変化】

次第に、住民の方々が朝に集会所を温めておいてくれたり、湯を沸かしておいてくれたり、その日に合わせて顔を見せてくれる人が出てきたりするようにもなった。自分達でできることで喜んでもらいたい、自分の生活を何とかしたいという思いが徐々に見えてきた。藤澤氏は、「相手の方が話せる範囲で共有することによって、繋がりを持つことができたと思う」と語る。

また宮古地区では3つの仮設住宅での活動の他に、遺族に対するグリーフケア（悲嘆のケア）としての「こころのケアセミナー」を開催している。遺族に対するグリーフケアは、宮古市では2012年1月から開始している。家族が行方不明のままであること、急な別れ、同じ所に住んではいるが今までと景色が変わってしまったことなど、「曖昧な喪失」感に悩まされている方が多い。

こうしたケースでは、起こったことに対して正しい認識と理解の仕方をしてもらうよう、心理教育が必要である。自助グループの育成も目指したいが、なかなか参加者が集まらず難しい。トラウマティックストレス（心的外傷）はさまざまなサポートが必要となる。専門支援でのグリーフケア（悲嘆のケア）が必要である。

地元の職能団体として社会に貢献できること、地域の方々に受け入れていただいていることをとてもありがたいと感じている。撤退する団体が多い中、地元での繋がりを大切に細く長く、災害支援というだけではなく、当たり前の支援を継続していきたいと考えている。ただし長期に支援を継続するためには、事務的な問題や資金面も課題となってくる。それでも、被災者の力にならなければならないと強く感じている。10年単位で向きあい、協力・支援していきたい。

【資料】藤澤　美穂「宮古地域仮設住宅支援」『東日本大震災に関する支援活動報告書（平成24年4月～平成25年3月）』　2013年　8頁

宮古地域仮設住宅支援

1. 経過

岩手県臨床心理士会では、東日本大震災以降、日本赤十字社岩手県支部と連携し、日赤ボランティアとしての役割も兼ねたこころのケア活動を展開してきた。これまで、各関係機関の地域保健活動方針に沿う形で、2011年4月から8月までは宮古・山田地域の避難所への支援、2011年9月から2012年度末現在まで、宮古市内3か所での仮設住宅支援をおこなってきている。支援目的は、仮設住宅に入居した住民同士の交流を促進し、コミュニティの活性化をはかること、そして住民のみなさんが心身ともに健康な生活をおくれるようリラクセーションの実施を通しストレスマネジメントを促通することである。

2. 仮設住宅支援のおおよその時間の流れ

前日まで：引継ぎ、支援計画、物品の準備、チラシ印刷

7時00分　集合、日赤岩手県支部手配車両あるいは会員の車両に

表５　岩手県臨床心理士会 2011 年度支援活動一覧

	（支援内容）	
岩手県精神保健福祉センター 電話相談	電話相談	4月5日～9月11日　15名 毎日→土日→日曜
日赤との協働 避難所でのこころのケア活動	避難所アウトリーチ	4月16日～8月6日　16名　土日
グラクソ･スミソクライン社等共同主催 心の絆プロジェクト	仮設住宅での健康セミナー等	7月30日～9月4日　14名　土日
岩手県保健福祉部児童家庭課主催 子どもの心のケア研修	研修講師	4月18日～6月3日　10名　平日 10月中旬～2月14日　6名　平日
日本助産師会岩手県支部 ぽかぽかママサロン	研修講師 見守り等	４月28日～5月3日　6名　祝日（連休）
岩手県警本部 惨事ストレス対策事業	面接 スクリーニング	5月11日～5月20日　2名　平日
岩手県教育委員会 岩手県内版学校支援カウンセラー	スクールカウンセリング	6月21日～7月28日　19名　平日
岩手県教育委員会 ふれあい電話相談	電話相談	5月16日～3月末　7名　月曜
ＮＰＯグットネーバーズ こころのケアプロジェクト	幼稚園保育園への支援	5月25日～2013年3月末予定　8名　平日
岩手県医療局 県立病院職員メンタルケア	心理教育 面接	6月11日～3月末　14名　平日
日赤岩手県支部との合同チーム 宮古市内仮設住宅支援	仮設住宅での コミュニティ支援	9月10日～　19名　土曜
釜石市、東日本大震災心理支援センター 釜石市への支援	仮設住宅での コミュニティ支援	9月28日～　7名　毎週
沿岸南部教育事務所 おとなのためのリラクゼーションセミナー	心理教育	11月19日～2月29日　平日
母と子の虹の架け橋（虹の会） ママハウス事業	見守 コミュニティ支援	11月26日～2012年3月31日　4名 隔週土曜日
岩手県学童保育連絡協議会 学童指導員へのメンタルケア	面接	12月中旬～3月末　2名　平日
岩手県士会事業 遺族ケア	心理教育 わかちあいグループ	10月28日～　4名 盛岡：平日、沿岸：土日
岩手県士会事業 宮古市田老地区仮設住宅支援	仮設住宅でのコミュニティ支援	10月16日～　13名 隔週日曜

＊『東日本大震災に関する支援活動報告書　平成 23 年 3 月～ 24 年 3 月』平成 24 年　岩手県臨床心理士会　参照

て現地へ
＊冬期間はジャンボタクシーを利用し移動
9時10分　宮古市社協での手続き
9時40分　仮設住宅集会所到着　スタッフミーティング、集会所管理人と情報交換
10時00分　チラシ配布、声がけ、様子確認、
10時30分　サロン活動：お茶会等を通した関わり、イベント等
12時00分　お昼休憩（情報交換）
13時00分　午後のサロン活動
14時00分　リラクセーション、リラクセーション後のお茶会
15時00分　後片付け、移動、車中での振り返り
15時30分　宮古市社協への報告、情報交換
18時00分　盛岡市内到着

3. 支援対象仮設住宅
・中里団地（愛宕公園）仮設
支援開始　2011年9月～　日赤岩手県支部との合同チーム
2012年9月～　当会単独支援、継続中
世帯数：88世帯（支援開始時）
・グリーンピア三陸みやこテニスコート仮設
支援開始　2011年10月～　当会単独支援、継続中
世帯数：126世帯（支援開始時）
・高浜仮設
支援開始　2012年7月～　日赤岩手県支部との合同チーム（2013年4月～当会単独支援）
世帯数：46世帯（支援開始時）

4. 当会における支援チーム体制（2012年度）
コーディネーター　藤澤美穂（中里団地・高浜世話人兼務）
グリーンピア世話人　高橋真梨子
チーム会計　熊谷律子
世話人補佐　青山正紀、山田幸恵
（以下、著者書き加え）
支援スタッフ　22名

9　医療従事者と私人との狭間で―山本ヒデ看護師―

昭和41（1966）年生　宮古市在住　元田老診療所看護師長

ここでは一人の女性看護師を取り上げ、被災地医療の概要と、家族との絆について記す。

山本ヒデ看護師は、一男一女の母である。夫と舅、子供と共に、生まれ育った田老で看護師として勤務していた。

山本看護師は震災時以降、多くの被災者の命を救うために看護師として奔走するが、自身も被災していて自宅を失い、今回の津波で夫と舅を亡くしている。職業人としての使命感と私人としての狭間に立つぎりぎりの精神状態の中、職務を全うし家族を支えた。

【震災・大津波当日の状況】

1年前に大津波警報が出たことがあったので、重大な警報発令時は消防団に連絡をし、公民館に避難しなければならないと思っていた。3月11日、午後の診療が始まる前、地震が発生した。診療所内には入院患者5名と外来患者が1家族いた。医師と看護師のうち1名は、訪問診療のため留守であった。14名の職員で患者を引率して屋外に出、消防に連絡した。その後所長が戻り、ストレッチャー、車椅子対応のワゴン車、ベッドのままの搬送などの手段で、患者を300メートル先の公民館に避難させた。

警報解除になるのを待つまでのとりあえずの必要物品として、薬、酸素ボンベ、救急薬、毛布、おむつ、ポータブルトイレなど必要な物を職員が分担して公民館に運んだ。3回目に戻ろうとした時、津波が堤防を越えるのが見えたので戻るのをやめた。ポータブルトイレを取りに戻った職員は、車を降りて高台に急いで駆け上り助かった。鍵をかけ忘れて戻った老人を医師が見つけ、背負って逃げた。公民館には大勢の住民が避難して来たが、皆でさらに高台まで上がった。要介護度4や5の人も家族に助けられて避難して来たのを見て安心した。

夕方、波が少し引くのを待って公民館に戻ってみた。パーキンソン患者もリヤカーに乗せられ無事であったが、ずぶ濡れだった。市職員に協力要請をして戸板に乗せ、ひと山越した総合事務所に連れて行った。自家発電装置があったので、在宅酸素もストーブも使えた。一晩そこで様子をみた。総合事務所には脳卒中で倒れた方や、在宅介護の方々も来ていた。次の日が卒業式だった中学生をはじめ、他の住民も避難していた。

夕方遅くに、山沿いの住民が炊き出しをしてくれて、おにぎりが届いた。晩には消防団が戻って来た。怪我人や病人の把握が急務で、小学校からもらった折り紙を使ってトリアージした（例えば、骨折や意識の無い人は赤）。体調不良者の中には、水に浸かった、骨折や要透析の患者などがいて、小学校教諭・養護教諭・退職看護師などに手伝ってもらい、重症度の高い人から救急の手配をした。総合事務所には無線と衛星テレビがあったので連絡してもらって日時を決め、消防団員に頼んで線路上を担架に乗せて患者を運んだ。ロープをつないで、2～3日の間に何人も降ろした。行き先の多くは宮古病院か、盛岡方面の医療機関もしくは川井診療所であった。それ以外の入院患者は3キロほど先のふれあい荘に移動した。

25日には救護班はグリーンピアへ移動した。3～4日後に「国境なき医師団」の支援が来てくれた。患者の症状は、不眠・便秘・風邪症状が多かった。3日目に診療所に戻り薬を持って来た。薬は濡れてはいたが、包装されていたので中身は大丈夫であった。当日の晩から薬を求めて訪れる人が増えた。カルテも無いので医師の指示で薬を出した。車が宮古に入れるようになってからは、薬メーカーが持って来てくれるようになった。

4月からは保険診療が始められるようになり、25日にグリーンピアへ移動。12月には「国境なき医師団」が仮設診療所を開設してくれた。患者を守ると共に診療所を復興し、さらに職員の生活も整えなければならない。課題が多くて毎日が目まぐるしく過ぎていく。避難所の中にいると、自身も被災者でありながら他の被災者のために働かなければならず、精一杯で辛かった。

精神的に助けてくれたのは「何もできない自分でも、誰かのために働いている」という意識であった。朝、辛くて病院を休みたい、家族のことを優先したいという思いはあったが、誰かのために働くことで自分の存在を確認でき、救われた。

【家族の安否】

家族は、自営業である夫、自分、義父、当時高校2年生であった娘と小学校6年生だった息子の5人だった。娘と息子は避難所に逃げていて無事であったが、義父は遺体で見つかり、夫はいまだ遺体も見つからないまま行方不明である。

震災当日は患者を守ることと避難所での対応に追われ、子供の様子を見に行くこともできなかった。夜、避難所になった小学校体育館に怪我人がいると聞いて医師と往診に向かうと、そこに息子がいた。

すぐそばまで瓦礫が来ていたのだが、息子は町の中は見ていなかった。他の子供達も同様で外の状況を知らないため、いつもと違った雰囲気に少しはしゃいでいるようにも見えた。

娘は高校に避難していることがわかった。生きてさえいればいつかは会える、と思って仕事を続けていた。娘には翌日になってようやく会えた。

消防団の人から、義父も夫も波に飲まれたのではないかと聞かされた。「直前まで一緒にいたが、逃げる際中後ろを見たらもういなくなっていた」とのことだった。夫は消防団員なので危険な所にも行かなければならなかった。義父も夫もだめだったんだなと思った。2人のことを娘と息子に伝えると、息子は受け入れられず「なんでお母さんは悪い方に考えるの？　オトウはきっと生きているよ」と言う。その気持ちを大切にしようと「そうだね。一緒に待っていよう」と返した。

【子供達との新しい生活】

自宅は倒壊して住めない。消防団が瓦礫を撤去してくれて辛うじて

2階部分に上がることはできたが、精神的にも精一杯だった。早めにリセットするため瓦礫の見えない場所に行こうと、田老から出ることにした。4月初旬から住み始めた宮古市内のアパートは古く、何かの理由でお湯が出ず毎日銭湯に通った。生活に必要な電化製品なども買わなければならないが、電気屋にも行列ができていた。

高校2年生の娘は理解していろいろ手伝ってくれ、常に共同作業であった。小6の息子はアパートに帰るのを嫌がった。大好きな田老に居たかった、友達から離れてしまった、と泣いてしまう。それで少しの間、親しいおばさんの家に預けて4月末から一緒に住んだ。

生前、夫は仕事が終わると毎日息子を野球のスポーツクラブへ連れて行った。明るく優しい夫は周囲の方々からも信頼を受けていた。そんな夫は息子にとって自慢の父親であったらしく、田老での息子の生活は「お父さんと野球と自分」の毎日だった。震災・津波後、グローブも野球場も無くなって「もう野球はできないね」と言っていたが、それでも少しずつ支援を受け、バットやグローブも揃い、野球ができるようになっていく。

携帯を買って息子に持たせた。自分も携帯を流されたので購入した。「何かあったら連絡してね」など友達からの励ましメールがあり、息子はそればかり見ている。だんだん話さなくなっていったので心配になり、ある日息子の携帯を覗いてみた。すると、息子は父親にメールを送っていた。「オトウ、今どこにいる」「オレらは元気だ。連絡ほしい」夫の乗ったトラックは見つかったが、ポシェットの中に携帯だけが無かった。息子は「きっとオトウは携帯を持って逃げたのだ」と信じていた。

【決断―家族の死を受け入れなければならない状況】

家を建てて数年。ローンが20年残っていて心配だった。そのうち、行方不明者が3か月経っても見つからない場合は死亡届を提出して良い、ということになった。そうなるとローンに対する控除が受けられる。決断を迫られていたが、それでも死亡届を出すふんぎりがつかなかった。子供達に相談すると「ええ？　もう？」という反応。娘は仕方がないと言ってくれたが、息子はとにかく反抗した。息子は複雑な思いを胸に、野球に打ち込むしかない状況だった。

夫を探して死体安置所を廻っていた。たくさんのご遺体が収容されていた。それぞれのご遺体のスナップ写真があり、気になるご遺体の番号を知らせて確認するシステムになっていた。変わり果てたご遺体は、他人のものであっても子供達には見せたくない、子供や自分の記憶にある父親の元気な時の姿を壊したくない、と思った。そして、前を向くしかないと思った。その時から夫を探すことはやめた。自分なりに決断して、7月末に夫の死亡届を提出した。

【子供たちの旅立ち】

紹介された土地に家を建て、平成25年12月に引っ越す。娘は看護師になる志を持ち、家を出て大学に進学。息子との二人暮らしが始まる。中学3年生の頃から息子も大きな反抗はしなくなり、次第に「今日はこういうことがあったよ」と話してくれるようになった。修学旅行に行く時、息子は「オカアは1人で大丈夫か」と言ってくれた。母親を気遣えるようになったんだ、と感じた。息子は高校生になった。

うちでは娘が10歳の頃から、誕生日におもちゃのプレゼントをやめて、家族がそれぞれに宛てたメッセージカードを贈ることにしていた。震災後も子供達は私の誕生日にカードを贈ってくれていた。息子は2年続けて「仕事が大変だろうけど、頑張ってください」という同じメッセージだった。しかし昨年のカードは、「オカンが頑張っているのは、娘も息子もよく分かっているよ。これからは自分の時間を楽しく過ごしてください」と書き、マグカップを添えて贈ってくれた。本当に嬉しかった。子供達が今の自分を支えてくれている、自分を必要としてくれている、そう感じることができた。子供達のために頑張ろうと思った。

【いのちを見つめて―生きるってなに？　母としてできること　そして自身の旅立ち―】

震災・津波以降、仕事に行くのが辛くてしんどくて「きょうこそ職場に行ったら、少しの間休ませてほしいとお願いして来よう」と思うことが何度もあった。夫を捜索に行くこともできず、見つかってもいないのに死亡届を提出したことについても、自分を責めていた。

3年過ぎた頃から自分の生活を振り返り始める。ある日突然に無くなってしまった幸せ。生きるって何？　と自分に問うようになった。お父さん（夫）の人生って？　自分の人生って？　今自分がしたら良いことって何だろう？

住民のために働きたい気持ちがあったから必死だった。しかし、自分自身も被災者でありながら他の被災者の支援をしなければならない状況が辛かった。支援のあり方として、「支援者支援」が大切になってくると思う。

世界中にお世話になった方々がいるので、これからは間接的にできることは何でもやりたい。桜が見られるのもせいぜいあと20回。もっと違う世界を見てみたい、そう思うようになった。2度と子供達を悲しませない、辛い思いをさせない。これから先は2人の子供達が喜ぶような生活をしたいと思っている。

【支援者支援・女性が担う社会の重み】

家族の死を受け入れなければならない悲しみとさまざまな葛藤の中、子供達と自身のために前を向いて歩き出すことを決断し、母親としても医療従事者としても、強く生きて道を開こうとした山本看護師。その姿から、震災当時の医療と医療従事者の状況、そして、日常というものや支援について考えさせられる。

看護師や介護士の世界も、男性の職業として近年少しずつ注目され始めてはいるが、現状はまだまだ女性が担っている部分が多い。一方、家事・子育て・介護などもいまだ女性が担っている部分が多く、家庭内での女性の役割は大きい。このような社会状況で大規模災害が発生すると、女性にかかる心的・身体的負担は計り知れない。スキル指導や心理的フォローなどのアプローチが重要である。

終わりに

「東日本大震災宮古市の記録」事業を通して、多くの医療従事者の方々にインタビューをお願いし、当時の医療現場の状況などについてそれぞれのお立場からお話を伺うことができた。

いずれも貴重な体験をされていて、迷いと絶望・苦悩・決断・その中から見出だされる希望が伝わってきた。ひと言ひと言に重みがあり、後世に残したい、残さなければならないと強く感じさせられた。ひと言も逃すまいと書きとめ、話者の言葉をできるだけそのまま掲載するように心掛けたつもりではあるが、拙い筆力のため大切なことを的確にお伝えできているのかと不安でもある。

それぞれ立場の違いはあっても、1人でも多くの人を助けたい、住民の命を守りたい、健康を維持させてあげたいという同じ信念のもと、医療従事者達は休むことなく活動されていた。今回は残念ながら限られた方々に対する聞き取り調査に留まったが、医療に携わる全ての方々が、同じ信念のもとに震災発生からの数年をそれぞれの立場と専門性をもって職務に従事されていたはずである。御自身も被災者でありながら、使命感に突き動かされて活動を継続してきた方々も少なくないであろう。それほどまでに人の命を守るという行為が尊いことを、このインタビューによって改めて思い知らされた。

どんな状況下でも諦めず、希望を持ち続けて人の命を守る。その信念を持ち続けた方々に敬意を表したい。まさに医療現場で強く生きて、道を開く姿である。その姿に、同じく医療従事者である筆者が勇気づけられたことは言うまでもない。道を模索し続けること、勇気ある決断を持って前に進まねばならない時があること、生きる上で大切なこと、深い愛情、心の平和や明るさを保つ中でこそ希望を見出だせること、など多くのことを学ばせていただいた。

医療の世界はデリケートな部分を多く持つために、語りにくい場面もあったかもしれない。それにも関わらず、どの方々も快くご協力いただいた。今回貴重な経験を語ってくださった諸氏に、改めて心より篤く感謝を申し上げたい。

我々はこの震災・津波による被害と経過を振り返るに留まることなく、それを乗り越えてきた人々の経験に学び、これから先をしっかりと見据えていかなければならない。被災者・被害者支援は、医療のみならず全ての場面において重要事項の一つとなることを、再認識する必要がある。被災者が被災者支援をする現状において必要なのは、単なる物資や技術提供の支援ではない。まずは、どういう人達によって地域が支えられているのかを把握すること。その上で、その人達に対する支援の在り方を検討し直さなければならない。そうすることで被災地の自立を促し、継続的な被災者支援へと結びつけることができるであろう。さらには「被災者が被災者を支援する状況」をメディアで積極的に取り上げ、社会の目を向けてもらうことも必要ではないか。

東北人の心は強い。泥の中から再び立ち上がる心の強さと力を持っていると筆者は信じている。

【注】

（1）柳原博樹「災害医療コーディネーター：行政の視点から」２０１２年　臨床雑誌『内科』第１１０巻　第６号

（2）注（1）に同

（3）注（1）に同

（4）柳原博樹「これまでの震災対応を省みる～今後の活動にむけて～」２０１２年『日本アルコール関連問題学会雑誌』14巻(5)第1号

（5）注（1）に同

（6）注（1）に同

（7）注（1）に同

（8）注（1）に同

（9）後藤康文「東日本大震災における沿岸透析施設の状況」２０１１年『日本透析医会雑誌Ｖｏｌ26ＮＯ．３』

（10）注（9）に同

（11）注（9）に同

（12）「支援者支援」とは、被災地では被災者を支援する人もまた被災者であるという現状から、それらの支援者を支え、支援をするという考え方。

（13）村上優『震災こころのケアのかけはし』２０１３年　独立行政法人国立病院機構発行。岩手県宮古地区における国立病院機構４施設（琉球病院・菊池病院・花巻病院・肥前精神医療センター）の活動記録

（14）ペシャワール会ＰＭＳ（平和医療団・日本）は、１９８３年９月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成され、現在はアフガニスタンでの、医療活動、灌漑水利事業等、総合的農村復興事業を支援している。

（15）注（13）に同

（16）注（13）に同

（17）注（13）に同

（18）注（13）に同

（19）注（13）に同

【参考・引用文献】

◎参考文献

岩手県臨床心理士会『東日本大震災に関する支援活動報告書（２０１１年４月～２０１２年３月）』２０１２年

後藤康文「東日本大震災における沿岸透析施設の状況」『日本透析医会雑誌』Ｖｏｌ．26ＮＯ．３　２０１１年

柳原博樹「災害医療コーディネーター：行政の視点から」臨床雑誌『内科』第１１０巻　第６号　２０１２年　南江堂

藤澤美穂・山口浩「東日本大震災のアウトリーチ支援におけるリラクゼーションの実践」『現代行動科学会誌』第28号　２０１２年

藤澤美穂　山田幸恵　「岩手県の臨床心理士における東日本大震災後半年間のこころのケア活動」『岩手県立大学社会福祉学部紀要14巻』

２０１２年
藤澤美穂「岩手県沿岸部の仮設住宅コミュニティ支援と支援チームというグループ」『集団精神療法』第29巻1号　２０１２年
柳原博樹「これまでの震災対応を省みる～今後の活動にむけて～」『日本アルコール関連問題学会雑誌』14巻第1号　２０１２年
岩手県臨床心理士会『東日本大震災に関する支援活動報告書（２０１２年4月～２０１３年3月）』　２０１３年
独立行政法人国立病院機構琉球病院・菊池病院・花巻病院・肥前精神医療センター『震災こころのケアのかけはし』　２０１３年
藤澤美穂　他「被災地での臨床心理学的地域援助を実践する支援者の心理的変化に関する質的検討」『岩手医科大学共通教育研究年俸第48号』　２０１３年
岩手県臨床心理士会『東日本大震災に関する支援活動報告書（２０１３年4月～２０１４年3月）』　２０１４年
黒田仁「岩手県宮古市田老地区での東日本大震災と医療・保健活動」『日本クリニカルパス学会誌』　２０１４年
岩手県臨床心理士会『東日本大震災に関する支援活動報告書（２０１４年4月～２０１５年3月）』　２０１５年
柳原博樹「東日本大震災における医療救護活動への宮古保健所の対応」『第63巻　日本公衛誌　第2号　日本公衆衛生雑誌』２０１６年

◎引用文献

柳原博樹「災害医療コーディネーター：行政の視点から」臨床雑誌『内科』第１１０巻　第6号　２０１２年
柳原博樹　「これまでの震災対応を省みる～今後の活動にむけて～」『日本アルコール関連問題学会雑誌』14巻第1号　２０１２年
村上優「こころのケアチームの理念　事前準備と初動態勢」「田老診療所」『震災こころのケアのかけはし』独立行政法人国立病院機構琉球病院・菊池病院・花巻病院・肥前精神医療センター　２０１３年

【資料】

「災害医療の基本態勢について（報告書）」
２０１４年　宮古地域災害医療課題検討協議会
・東日本大震災（津波）による医療機関被災状況
・4月5日透析患者数・転院状況
・行政との連携について
・被災体験聞き取り把握のシート（3月11日～31日）
取り組みの内容・気づいたこと・課題・教訓・今後にむけて
・救援物資提供について・東日本大震災における巡回診療の実施
・検視検案状況
・東日本大震災被災地訪問概要　神戸
・東日本大震災における沿岸透析施設の状況
・東日本大震災における宮古医師会の対応等
・第59回日本透析医学会学術集会・総会
・東日本大震災による医療機関被災状況
・東日本大震災における被災状況
・東日本大震災後経過報告・写真資料
・災害復興公営住宅の整備状況
・応急仮設
・東日本大震災の「記録」～岩手県宮古市～２０１１・３・１１～２０１３・３・10
・岩手県災害時透析マニュアル　他
以上、後藤泌尿器科皮膚科医院　後藤康文氏より提供
・宮古地域医療チーム派遣計画等資料

第2部　各分野での震災後の取り組み

第2章　宮古医療圏におけるDMATの活動報告

岩手医科大学医学部災害医学講座教授　眞瀬智彦

岩手県でDMAT（正式名称はDisaster Medical Assistance Team, 日本語名称は災害派遣医療チーム）が活動するにあたり、県内の活動調整を行う県庁DMAT調整本部を設置し、沿岸の災害拠点病院と連携・調整しながらDMATの活動を行った。岩手県庁調整本部と宮古医療圏でのDMAT活動について報告する。

1　岩手県庁DMAT調整本部

東日本大震災発災直後に本部が立ち上げられた。活動期間は、平成23年3月11日から3月19日までの9日間で、本部設置場所は岩手県庁4階特別会議室に設置された岩手県災害対策本部支援室内医療班内である。本部員として岩手医科大学、岩手県立中部病院、国立病院機構災害医療センター、長野相澤病院、島根大学、兵庫県災害医療センターである。ちなみに岩手県ではDMAT調整本部と日本赤十字社岩手県支部、岩手県保健福祉部、岩手県医療局によって医療班として県内全般の医療調整を行った。主な活動内容として、情報収集（県内の被災状況、県内の医療機関の状況、傷病者の発生状況、県内の道路・天候状況等）、県内で活動するDMATの活動の管理（国に対して派遣要請、被災地内への派遣調整等）、広域搬送の国への要請、SCU（正式名称はStaging Care Unit, 日本語名称は航空搬送拠点臨時医療施設）の設置・管理、被災地からの傷病者転院先病院の選定と調整、その搬送手段の確保（他機関の救急車・ヘリコプター等）、医薬品の不足状況の把握・調達、従来のDMATの活動期間は3日程度とされていたため、発災3～4日目に撤収するチームがあり、被災地内の医療継続のためDMATの追加派遣を3月16日、国に対して要請した。

県庁災害対策本部医療班を主に運営していたのは、DMAT調整本部であり、DMAT撤収の準備として次の調整機能である「岩手災害医療支援ネットワーク」を立ち上げた。岩手災害医療支援ネットワークに業務を引継ぎ、3月19日県庁DMAT調整本部を撤収した。

2　岩手県立宮古病院被災状況

宮古医療圏の災害拠点病院である県立宮古病院の被災状況は発災直後以下の様であった。ライフライン　電気：停電、自家発電使用、ガス：被害なし、水道：断水、給水車で対応、医療ガス：被害なし　通信　固定電話：不通、携帯電話：不通、衛星電話：数台　その後停電は改善されたが、給水車による水の確保がDMAT活動中は継続された。通信については当初、衛星電話と県の防災無線のみで可能であったが、移動基地局の設置で細々ではあるが携帯電話の通話が可能となった。

3　DMAT宮古医療圏での活動

宮古医療圏においても活動期間は平成23年3月11日から3月19日までの9日間である。

活動の拠点を県立宮古病院において活動した。宮古地区を支援したDMATは以下のチームである（それぞれのチームの活動期間を表1に示す）。八戸市立市民病院、青森県立中央病院、岩手県立中央病院、岩手県立二戸病院、秋田県厚生農業協同組合連合会仙北組合総合病院、秋田県厚生農業協同組合連合会由利組合総合病院、茨城西南医療センター病院、自治医科大学附属さいたま医療センター、埼玉医科大学国際医療センター、千葉大学医学部附属病院、藤沢市民病院、北里大学病院、横浜労災病院、新潟県厚生農業協同組合連合会村上総合病院、新潟大学医歯学総合病院、済生会新潟第二病院、信州大学医学部附属病院、長野相澤病院、国立病院機構信州上田医療センター、国立病院機構静岡医療センター　以上21医療機関であった。

活動内容は病院支援と医療搬送支援が主なものであった。病院支援としては宮古病院にできたDMAT活動拠点本部の支援活動、院内の医師・看護師等の業務軽減と休息の確保のため夜勤帯等の救急外来診

表1　宮古地区を支援したDMATチームの活動期間

	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日
八戸市立市民病院					■	■	■		
青森県立中央病院	■	■	■	■	■				
岩手県立中央病院		■	■	■	■	■			
岩手県立二戸病院			■	■	■	■			
秋田県厚生農業協同組合連合会仙北組合総合病院	■	■	■	■	■				
秋田県厚生農業協同組合連合会由利組合総合病院	■	■	■						
茨城西南医療センター病院				■	■	■	■		
自治医科大学附属さいたま医療センター					■	■	■		
埼玉医科大学国際医療センター	■	■	■	■					
千葉大学医学部附属病院				■	■	■	■		
藤沢市民病院					■	■	■		
北里大学病院				■	■	■	■		
横浜労災病院					■	■	■		
新潟県厚生農業協同組合連合会村上総合病院						■	■	■	■
新潟大学医歯学総合病院				■	■	■	■		
済生会新潟第二病院	■	■	■	■					
信州大学医学部附属病院	■	■	■	■					
長野相澤病院	■	■	■						
国立病院機構信州上田医療センター	■	■	■	■					
国立病院機構静岡医療センター	■	■	■	■					

察、トリアージ実施等である。搬送支援として、DMATの自病院救急車、自衛隊救急車、ヘリコプター同乗による、内陸医療機関への傷病者の搬送支援（医療搬送）。これは主には宮古病院から内陸医療機関への搬送と、病院避難が必要となった県立山田病院の入院患者の転院搬送を含む。宮古市災害対策本部医療本部での情報収集と活動調整。救護所の情報収集と医療支援。現場活動（津波がれき現場で生存者情報があり、消防の要請で現場出動した）。

DMATは通信状態の悪い中、災害拠点病院の機能を支え、従来のDMATの活動とされていなかった活動も行いながら、次の支援チームに引継ぎ活動を終えた。

第2部　各分野での震災後の取り組み
第3章　障がい者・高齢者をめぐる取り組み

池田しのぶ

はじめに

この章では、東日本大震災のその時、高齢者や障がい者といった要援護者やその家族、そして福祉サービス事業所の職員たちがどのように行動したかについて聞き取った事柄をまとめる。調査はまず、3・11当時グリーンピア三陸みやこの専務だった、赤沼正清さんに「福祉」をキーワードに田老地区で被害にあった住民の方々を紹介していただき実施した。その後田老地区の福祉サービス事業所の職員、宮古市の福祉サービス事業所の職員、というように調査対象の範囲を広げた。2012年9月から2014年9月までの3年間で伺った話を中心に紹介していく。

1　宮古市における福祉の概況

(1)　高齢者および障がい者の概況

宮古市の高齢化率（人口に占める65歳以上人口の割合）は平成26年10月1日現在で33・2％となっている。総人口は年々減少しており、この減少傾向は今後も継続していくと思われる。また高齢化率も高齢者世帯数も増加しており、65歳以上の高齢者がいる世帯のうち、高齢者世帯、独居高齢者世帯の割合が増加している。そして、平成26年9月末現在の要介護（要支援）認定者数は3千769人で前年度比89人増とこれも年々増加傾向にある。（いきいきシルバープラン5頁、8頁）

また、宮古市障がい者福祉計画（第4期）によると、平成26年4月1日現在、身体障害者手帳所持者は2千409人（人口比4・22％）、療育手帳所持者は531人（人口比0・9％）、精神保健福祉手帳所持者は495人（人口比0・8％）である。震災前後で所持者数に変動はみられないが、等級別でみると1級の手帳所持者が増加しており、障がいの原因として視覚障がい、聴覚障がい、肢体不自由が減少し、内部障がい（心臓機能障がい、腎臓機能障がい、消化器機能障がいなど、身体障害者手帳の対象となる7つの障がいのことを言う）が増加している。

次に平成26年度版の岩手県の社会福祉施設名簿をみると、まず、高齢者を対象とした施設では宮古市内にある養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、グループホーム、ケアハウスといった入所型の事業所は17、通所または小規模多機能型などの在宅福祉サービスを提供する事業所は19、地域包括支援センター、在宅介護支援センターや居宅介護支援事業所は12か所となっている。次に障がい者の施設では、施設入所支援を行う入所型の事業所は2か所、共同生活介護、共同生活援助を提供するいわゆるグループホームは7か所、日中の生活介護や就労支援を行う通所型の事業所は10か所となっている。

(2)　被害の概況

内閣府の平成23年版防災白書によると、東日本大震災による死亡者（岩手県、宮城県、福島）のうち60歳以上の占める割合は65％を超えており、高齢被害者が多いことがわかる。また同様に内閣府の報告「震災と障害者」〈4〉東日本大震災における障害者の死亡率には、「死者1万5千858名、行方不明者3千057名、負傷者6千077名（いずれも、平成24年5月1日緊急災害対策本部による）という甚大な人的被害があった東日本大震災だが、障害者の死亡者率が被災地全体の死亡率に比して高いと言われている」という記述があり、あわせて宮古市から提供されたというデータには、次のような数値が記載されている。

宮古市の全人口　5万9千636人
うち障害者の人口　3千371人（障害者手帳所持者数）
宮古市の全死亡者数（対宮古市全人口比）　525人（0・9％）
うち障害者の死亡者数（対宮古市障害者人口比）36人（1・1％）
※内訳：身体障害28人、知的障害2人、精神障害7人、身体知

的重複障害1人

2　要介護者、障がい者、家族の避難と避難生活

前述したように、高齢者、障がい者の被害が多数報告される中で、この調査では、逃げ延びることができた方々が、地震が起きたその時にどう行動したかを知ることができる。大きな地震のあとは津波が来るからすぐに高台に逃げる、という判断や日常的な備えがあったかどうか、そしていくつもの偶然が重なり幸運にも逃げ伸びることができたのだと、多くの方が語っている。次に、ひとりひとりの語りを聞いていくことにする。

(1)　高齢者世帯

田老のグリーンピア仮設に住んでいる**千葉昭子さん**（昭和17年生、元は田老野原住）に、2012年9月11日、お話しを伺った。

昭子さんは山田町出身で、26歳で田老町に嫁いできた。昭子さんの夫（昭和15年生）は54歳の時に、当時勤務していたタンカー船の航海中に事故に遭い、頸椎損傷の大けがを負った。一時寝たきりの状態となったが、その後リハビリにより徐々に快復し、現在は要介護度2、屋内はつたい歩き、屋外は車いすでの移動が可能である。

3・11の地震のとき、昭子さんは日課の散歩中だった。大きな地震が起きたので驚いてすぐに家に帰ると、71歳（当時）の隣人Nさん（認知症がある）が、夫を玄関に出して、逃げられるように靴を履かせていてくれていた。家から非常持ち出し袋と車いすを準備して山の方に逃げようとしたが、車いすの前タイヤに空気が入っていないために重くて動かなかった。Nさんともう1人の知人に引っ張ってもらい、昭子さんが後ろを押して、苦労して坂道をあがり、避難場所まで行こうとした。そのうちに夫が転んで「あっ」と振り返った途端に津波がきて、夫の腰から下がぬれてしまった。

車いすを捨てて、道のないところ、斜面をあがっていった。近くで火の手があがり、火事になった。近所から逃げてきた若い人たちは道の駅の方に向かって歩いていったが、自分たちは歩けないので3人で、山の頂上に近いところまで上がって休んでいた。雪が降っていて、とても寒かった。夫はぬれたままだった。物音や声は聞こえず寂しかったが、ただ明るくなるのを待っていた。

風が吹き、自分たちをめがけて火が向かってきて、木の葉が燃え始めた。火の回りはとても早かった。このまま死ぬかもと思った。夫が、土俵のように丸く木の葉をよけろと言ったのでNさんと2人でその通りにした。すると、何か冷たい空気が来た、と思ったら、ふわっと私たちの反対側に火がよけていった。とても不思議だった。そのときは、誰か、神さまか仏さまが助けてくれたと思った。

火の粉が飛んできたのでその後は寒くなかった。火がくすぶった木を集めて暖をとった。多分、その日の夜中、1時か2時頃だと思う。上空をヘリコプターがまわっているのがわかった。懐中電灯で知らせようとしたがわからなかったようだった。しばらくすると、火の気がなくなって寒くなった。

非常持ち出し袋に入れてあったお湯を3人で飲んだ。この非常持ち出し袋は、いつも玄関に用意してあるもので、お湯は毎晩寝る前に沸かして水筒にいれて枕元においておく。朝起きたら水筒を玄関の非常持ち出し袋に入れる、ということを習慣としていた。昭子さんは山田町出身なので、子どもの頃からそういった防災意識をもっている。

そのうちに明るくなってきたので、夫をずるずると引っ張って坂道をおろして行くと、消防団の人たちに出会った。夫を担架に乗せてローソンの近くにあった車屋さんのところまで行った。それからグリーンピアにたどり着いた後で服をみたら、火の粉が飛んだあとが穴になっていて、火がそこまで近くにきていたかと思い、ぞっとした。

Nさんはぴんぴんしていて元気で力もある。認知症なので、山の中で待っている間、同じことを何度も何度も繰り返して言うため参ってしまった。「おうちに帰りたいわ、この火は何なの?孫が帰ってくるから食事の支度をしなきゃならないの」「アキちゃん、私は何もできない

から、指図してね、言うとおりに動くからね」とくり返した。頼もしいと思えることもあったが、やはり辛かった。12日、朝食の時間にグリーンピアに到着したが、朝食の列に並んでいる間に私の具合が悪くなってしまった。Nさんの家族は宮古にいて、仕事があるからと1週間ほどグリーンピアに預けて行った。Nさんは1人でいろいろなところに歩き回る。一緒に避難している人たちが、それに気づくとすぐにNさんを私のところに連れてきてしまった。

夫はグリーンピアの車いすを借りて使っていたが、トイレに行くのが大変だった。失禁を心配して1日に何十回もトイレに行きたがり、その度に連れていかなければならなかったからだ。

グリーンピアの部屋割りなどをするために、避難者は一旦アリーナに移ることになった。その時、数日間カラオケボックスに移動して夫と2人きりになったときがとても怖かった。窓もなく、防音がきいていたので静か過ぎたから。そこで過ごした3日間も辛かった。トイレへの移動が大変だった私たちは、7階のトイレとベッドがある部屋を割り当てられた。

グリーンピアに着いてからの3日間は、夜になり、布団に横になるとぽろぽろ涙が出た。でも、それがあったからなんとか乗り切れたのだと思う。

子どもたちについてだが、長男は家が釜石、職場も鵜住居だが、被害はなかった。地震後1週間してからようやく連絡がとれた。北海道にいる三男は携帯が通じるようになってすぐに連絡がきた。グリーンピアにいる時に、ドコモの無料電話で呼び出しがあった。盛岡の次男の家の近くでガソリンを入れてきた。

今の仮設住宅での暮らしは、夫が動けなくなるのではないかと心配だ。ほとんど家から出ないので、このまま動けなくなりそうだ。

千葉さん夫妻は2015年12月末現在、宮古市崎山に新築した自宅で暮らしている。仮設住宅から出て1軒の家に住むことができるようになってよかった、と安心した表情である。しかし、今でも、サイレンの音が聞こえたり、津波注意報やトラックが大きな音をたてて通る音が聞こえたりすると当時のことを思い出し、とても嫌な気持ちになるという。

牧野正博さん（昭和10年生）と**吉枝さん**（昭和13年生）夫婦に2012年9月12日にお話を伺った。お2人はグリーンピアの仮設住宅で猫を飼っている。震災前は田老町館が森に住んでいた。地震が起きてすぐに行動したので、車に猫を乗せて逃げることができたという。吉枝さんは、他の人たちもすぐに逃げれば十分間に合ったのに、と語った。

地震のときは、揺れが大きく立っていられないくらいだった。3日前の地震でも猫を連れて道の駅まで避難したので、そのときの荷物が車に乗せたままになっていた。吉枝さんは、「脚で逃げるなら赤沼山。車で逃げるなら何も持たずに逃げるしかない、渋滞したら終わりだから。赤沼山へは車で逃げられない。どうする？車で逃げる？車ならすぐに出ないと」と言ったそうだ。正博さんの判断も早かった。位牌1つ持たずに、大急ぎで5分以内で逃げたので、もっと荷物を持って逃げればよかったと後で思った。逃げる途中で、お巡りさんが右往左往しているのを見たという。45号線の道の駅の手前のところで20分ほど海の様子をみていた牧野さんご夫婦は、波がひくのを見ていて、そのとき、海の底が見えたという。その後、山を越えて避難してきた正博さんの妹の陽子さんと合流してグリーンピアに行った。

地震の大きさは、家のきしみ方の違いでわかった。防波堤があってよかった面はある。地震から津波まで時間があったので、逃げる時間はあった。あれほど大きな津波が来るとわかっていたら、100％逃げられたと思う。ラジオで3メートル、と言われたのがみんなを油断させたと思う。

孫は田老第一中学校の校庭に集められたらしい。校庭に出たときには波が見えていたと聞いた。先生に各自逃げろと言われて、総合事務所の裏側の山にあがった。その後、内陸の神田の集会所から北高に移動して、そこで親たちと合流したようだ。津波直後に、長男から携帯で連絡がきて、無事を確認していたが、私たちは家族がどこにいるのかはわからず心配していた。4日後にようやく連絡がついた。

正博さんは旧田老町役場で、長く総務課長をつとめていた方である。地域防災は総務課の担当だったため、地震や大雨など、災害が起きそうな時にはすぐに役場に集まるのが常だった。当時は、いつ何が起きるかわからない、という責任感でゆっくり風呂に入ることがなかった。当時の役場の職員は全員がそういう考えをしていたし、そのように行動していた。田老町は、合併により宮古市となってから防災意識が変わってしまったのかもしれない。市町村の規模が大きくなるとそれによる弊害もある、と語った。

牧野さん夫妻は2015年12月末現在、長男家族や一緒に避難生活を送った飼い猫のモモとともに神田地区の新しい家で生活している。

(2) 家族が同居しているケース

グリーンピア仮設に住んでいる**下西辰雄さん**（昭和3年生、元は荒谷住）に、2012年9月12日に話しを伺った。

辰雄さんは、リウマチで透析治療をしている妻（昭和7年生、要介護度5）と、息子家族と同居している。妻はふれあい荘のデイサービスに通い、ヘルパーも利用してグリーンピアの仮設住宅で暮らしている。辰雄さんは津波から逃げるときに手を怪我してしまい、その後手の動きが悪くなった。小さな字は書けなくなって、たまに箸を落としてしまう。怪我をしたときは切断するかもと言われたが何とか治った。震災が起きたときの住所は荒谷であった。

震災以前は、毎日14時に散歩に出て、八幡神社まで行くのが日課だった。3・11当日は散歩中に大きな地震がきたので家に帰ったが、家の中の物は倒れていなかった。停電していたのでテレビは消えていた。孫が車のラジオを聞いていた。息子は浜の方へ行ったようだった。どうすればいいかなと言いながら、近所の人が診療所の駐車場に集まっていた。嫁は沖が白くなっていると言った。それを聞いて、津波だと思い、すぐに逃げた。波は速かった。

妻はその日ふれあい荘に行っていたから、自分は1人で逃げることができて助かったのだと思う。津波がきて、波に押された。家を出てすぐ裏にあったフェンスにつかまっていたら、瓦礫と波はフェンスの上側をガリガリといって流れていった。フェンスの真ん中につかまっていたので助かったのだと思う。フェンスの上につかまっていたら駄目だったと思う。その後も何度か波がきたらしいが、私は2度目の波が来る前に熊野神社の方へあがっていった。

あねさま（嫁）たちは山へ逃げた。車いすの人や年寄りは階段だと逃げられないので、避難所にあったじゅうたんやシート、座布団に乗せて担いで、消防団の人たちとも協力しながら逃げた。嫁は、ばあさま（妻）の着替えを持って逃げたので、それを着ていた。皆で逃げ遅れた人のことを話していた。

階段のところに逃げていた人は、家と一緒に人が流れていくところを見ていたらしい。家と家がぶつかったところで波が静かになって、そこで助かった人もいる。まもなく熊野神社の向こう側に火の手があがった。消防団がはしごを持ってきたのでそれで上に上がった。しばらくしたら息子がやってきて、そのうちに暗くなってきた。三鉄のトンネルをくぐって総合事務所に向かい、その晩は総合事務所に泊まった。

総合事務所で一番困ったのは水がなかったことだった。職員がハンマーで自動販売機を壊して、中の飲み物を配っていた。

翌日、診療所の先生が私の手を治療しようとしたが、薬がなかった。自衛隊の人に支えられて線路まで歩いたあと、救急車で宮古病院へ連れて行かれた。自衛隊が道路を片付けていたらしいが、大変だったと思う。病院に着いてもけが人が大勢いて、長い時間待たされた。首か

ら色のついた紙を提げられた（トリアージ・タッグのことか。色は覚えていないという）。

治療が終わってからが大変だった。手はびりびり痛んだ。夜泊まるところもないし、どうすればいいかわからなかったが、嫁が妻を透析に連れてきたところで偶然出会い、妻を一緒に抱いて軽自動車に乗せ、一緒にふれあい荘に行くことができた。家族は全員無事だった。45号線から宮古へ向かう道は、12、3人の人がロープで引っ張るなどして片付けていた。ふれあい荘に人が大勢来るようになってから北高に移った。10日間ほどいたと思う。その後、親戚の家に世話になって、仮設住宅に入ったのは6月だった。

下西さんは、昭和8年の津波も経験している。その時のことも聞かせてくれた。

昭和8年の津波のときは5歳だった。朝の津波だった。その日のことは詳しく覚えていないが、津波のあと、家族がむしろで風よけをつくって、2、3日過ごした。それから母親の実家に行った。当時は瓦礫を集めてきて、それぞれに釘を打ったり結んだりして家をつくった。誰の土地、ということもなく、よさそうな場所に家を建てるのだった。昭和10年の秋に、高台に家を建てた。それなのに、徐々に低い場所に移って来てしまった。

昔の人は、国から援助を受けたかどうかわからないが、自分たちで山を削って平らな土地をつくり、そこに家を建てた。今は国を頼りにしている、その分税金を払っているのかもしれないけれど。今の若い人たちは、国、国という。自分たちでやればいいと思う。ありがたいが、もらうものはもらうというのは違うのではないかと思う。いつかは返さなければならないと思う。国が何かをしてくれるのを待つのではなく、早く、なんとか家だけでも建てたい。

野原地区は、高台から下りてきた人ばかりだ。高台に住んだ方がいいと思うが、若い人がどう考えるかだ。私たちは昭和8年以降、2回や3回家を建てている。そのたびに平地に下りてきた。

妻はグリーンピアにいたときは要介護度3だった。みんなが眠っているところを、車いすに乗せてトイレに連れて行った。それが大変だった。ふれあい荘にいるときに脳梗塞になり（宮古病院に50日入院した）リハビリに通ったがほとんどよくならず、要介護5となった。寝たきりになったらどうしようかと先生に尋ねたら、病院に入院させることはできないと言われた。今は、妻がいない時に、集会所をのぞいてみて、何かやっていれば来て、気晴らしをしている。

奥さんは2015年6月5日に亡くなった。下西さん家族は12月末現在も仮設住宅に住んでいるが、2016年中に三王団地に住宅を建設して移転する予定である。

藤田いく子さん（昭和23年生、元は荒谷住）は、母親（大正15年生）と同じ軟骨が弱い病気で、左の股関節を人工にする手術をした。「徐々にいろいろなところが弱くなってきている」という。2012年3月に新しく建てた家におじゃましてお話を伺ったのは、同じ年の9月12日のことである。

私は16年間母を介護してきたが、震災を契機に母は機能低下で食事がうまくできなくなってきた。私自身も膝の痛みが強くなり、母親の面倒をみるのが困難になってきている。もともと母は左股関節を人工にしていたので杖をついての生活だった。若い人たちの生活についていくのは大変になってきたということで、家の前の物置を改造したところに住んでいたが、平成8年7月に脳梗塞となり、退院後は再び家族と一緒に家で過ごしていた。母はデイサービスセンターに行きたがらなかったので、訪問入浴のサービスを使っていた。3・11当日の金曜日は、15時が訪問入浴の時間だった。私たちが助かったポイントは3つあると考えているが、この15時に母の訪問入浴が予定されていたことが、私たちが助かった一つめのポイントだった。

地震のときは、私と夫と三男が母と一緒にいた。母を入浴できるよ

うに準備を終えたのが14時半頃で、係の人が来るのを待っていた。地震後の15時ごろ、係の人が到着したが、停電しているので入浴は無理と判断して、母に服を着せてくれて帰って行った。この、服を着せてもらったことが2つめのポイントだった。私が服を着せていたら時間がかかって結果はまったく違っていたと思う。津波は3㍍という放送があったので高くても5㍍だと考え、大丈夫だろうと思いながらも、その後の地震の状況から、夫と一緒に、母を外に連れだそう、ということになった。

家の前の駐車場で待機していた。隣のお母さんが逃げて行ったのをみた。近所の人が、「津波がきたぞ」と大きな声で叫んだ。この声をきいたことが、私たちが助かった3つめのポイントだった。この叫び声を聞かなかったら津波が来るまで気づかず駐車場にいたと思う。大平地区をみると白っぽい煙のようなモクモクしたものが見えた、これが押し寄せる波のしぶきだったのだと思う。何だろうと思ったが、津波だという感じはなかった。しかし夫は海の方を見て津波で木がなぎ倒されるのを見たようで「すぐ逃げろ」と叫んだ。後ろを見ずにひたすら前だけを向いて近くの一時避難所へ上がっていった。私の歩き方では見かねたのだろう、既に避難していた近所のお母さんが手を引きに来てくれた。後で聞いたら、波に追いつかれそうだったという。

すぐに家に戻れるという気持ちがあった。だから玄関の戸が開いていたが無視した。靴下をはくのも大変なのでいつも素足で過ごしていたからそのまま逃げた。靴下や杖をとりに行ったり、何かを持とうとしたりしていたら波にさらわれたと思う。これも後で聞いたことだが、津波は、堤防を越えて来たあとに診療所方面から来たらしい。五天王避難所へ逃げたのは、私たちが最後だと思う。みんな顔見知りなので、あの人がいない、あの人はどうした、と言い合って心配していた。隣のMさんは家を出たのにもう一度家に戻ったらしい。家の中で亡くなっていたそうだ。大丈夫だろうと油断した人はいたと思う。床下浸水で済んだ家の人も亡くなったのは、外出先でのことだった。高台に上りきって後を振り返ったとき、堤防を越えた波と一緒に板のようなものが流れてきた。その真ん中にオレンジ色のチカチカしたものが見えた。これが岸にたどり着いた途端一瞬にして炎が燃え上がった。火のまわりは速かった。ほんとうに、あっという間のことだった。この避難所は自然の袋小路のようになっていて、三方が崖のような山に囲まれ、他に逃げ場のない場所だった。火は山に移って広がった。脚の丈夫な人たちは火の移っていない山を越えて逃げた。母の車いすに棒を通して女性4人で持ちあげ坂を上り始めてくれたが、私は降ろしてくれと何度か叫んだ。1人で上るのもやっとのような崖では到底上ることはできないと思ったからだ。4人は母を元の所へ戻してくれた。そのときの4人の気持ちには心から感謝と敬意を表する。

夫はそのとき、最悪の事態を考えたと思う。私に三男と一緒に山を登れと言った。私は母がいるからと言ってためらった。夫はここには自分が残ると言って、三男に私を連れて山を登れと指示を出した。私は昭和36年5月の三陸フェーン大火の被災者から聴いた話を思い出した。火に囲まれた時、掛け布団を水で濡らし、それで身体を覆って畑の真ん中で火の粉を避けて助かったという話だった。近所の人から使っていない布団を貸してもらい、水をかけて濡らそうと思ったが水が出なかったので、充分ではなかったが残っていた雪で濡らした。山を越えられない母のために私ができることはそれくらいだった。

この避難所の山間には無人の家も含めて10戸ほどの家があった。かなり古い木造家屋もあったが、幸いにして庭の木や小屋が燃えるだけで家に火が燃え移らなかった。残った人たちはここで一夜を過ごしたそうだ。強い風もなく風向きも幸いしたのだと思う。これらのことは奇跡のようなものだと思った。そこには消防団ＯＢの人がいて、防火の指導もしたという。協力して防火に努めたということだった。

私たちのほうは熊野神社に行くつもりで山を登ったが、診療所の方に出てしまった。崖でつかまる草も少なく、サンダルも脱げてしまい大変だった。そこで五天王避難所へ行く道を探していた消防団員3名

に出会い助けてもらい、熊野神社へ出ることができた。今考えれば、山を登れたのは3月にしては珍しく山に雪がなかったからだと思う。しかし雪があれば火災の状況も変わっていたと思う。この避難所からの動線の重要性を痛感した。熊野神社を通って田老一中の体育館の裏に出た。ここで近所の人たちと出会った。着いたのは明るいうちだった。

体育館には10人くらいいただろうか、そこに家にいるとき閉じこめられ偶然そこを通った人に助けられた、という人が避難してきた。その人は奥さんを助けることができなかったという。

20時ころに、延焼する恐れがあるとのことで常運寺に移動するように言われて線路をつたって避難した。崖でサンダルを落とし素足だった私に消防の人が中学生の運動靴を持ってきてくれた。三男や近所の人たちに助けられながらライトを頼りにトンネルを抜けた。常運寺の裏手の線路から下りるとき、知らない人に背負ってもらった。常運寺ではご住職にお願いしてセーターや靴下などを出してもらい、寒さを凌いだ。

すぐに山を登った後遺症が現れた。翌日から細い角材を杖代わりにして支えてもらいながら歩いた。床に寝られないので背もたれのあるイスを2つ並べ、座布団を敷いてベッド代わりにした。寝るときも起きるときも人の手を借りなければならなかった。

次の日、夫が私と三男を捜している間に、母は消防団に助けられ、グリーンピアに行ったが、心細かったと思う。母は1人だったので、近所の知人にひとかたならぬ世話になった。もし私が一緒にグリーンピアに行っても母の介護はできなかったのも確かだった。自宅での介護はいろいろなものが揃っているからできたことだった。知人は自分の母親をはじめ近所の老人も世話をしていたので、自分自身も体調を崩したと後で聞いた。私は母のことが気がかりだった。どこかの老人ホームに預かってもらえないかと何日ぶりかで顔を出した長男に頼もうと思った矢先、田老の町の中を通っている国道45号線が開通し、母はふれあい荘に移されたと聞き、ほっとした。

常運寺では、グリーンピアに移るようになる4月1日頃まで50人以上が避難していた。常運寺では夫と私、次男と三男がお世話になった。長男は田野畑村の知人の家に、仮設に入るまで下宿させてもらった。

母のことが心配で、診療所の黒田先生に母の様子を尋ねたら、先生は携帯で私たちの写真をとって行き、その日のうちに母の写真をとってきてくれた。母は、そのときは元気そうだった。

私たちは津波のせいで車を3台なくしてしまい、ガソリンもなかったので母の所へ行けなかった。もちろん町も、私が歩いて行ける状況ではなかった。途中、一度だけ三男に母への手紙を託し、ふれあい荘まで歩いて行ってもらった。母は4月末頃から食事がとれなくなり入院した。検査しても十二指腸潰瘍が少しみられると言われる程度であったが、回復しなかった。そしてその後一切食事がとれなくなった。微熱があったが検査しても他の原因はわからなかった。入院先で胃ろうにしたらどうかと言われて悩んだ。黒田先生に相談すると、原因がはっきりしないので、胃ろうにするのではなく少し様子を見たらどうかと言われて、時期を見て一度ふれあい荘に戻そうということになった。

ふれあい荘では、食べられるものを何でも、一口でも二口でも口から食べさせたい、ということでお願いした。黒田先生が、ボランティアで来る精神科の先生に診てもらってはどうかと言ってくれて、何度か診てもらうことができた。そうこうしている間に、少しずつ良くなっていった。いつ何があってもおかしくないという状況だったのだが、こんなに回復するとは思わなかった。相撲が好きなのでその時期にあわせて部屋にテレビをいれたら、それを見るようになった。徐々に家にいた時のような会話もできるようになってきた。食事もそれなりにとれるようになってきたが、下肢の機能は回復が無理だった。

津波に負けるのは悔しい。母と一緒に、何年も穏やかに暮らしてきたのに、この震災のせいで具合が悪くなってしまうのは母がかわいそうだし悔しいという思いだった。車が1台手に入ったので入院中は殆ど毎日病院に通い、退院してからも大丈夫と思うまで、少しの時間しかいられなくても、毎日ふれあい荘に通った。

この震災のせいで母は心も体も疲れ切ったのだと思う。いくら新しい家に誘っても、ふれあい荘から動こうとしなかった。

母の訪問入浴があの日、あの時間でなかったら、夫は出かけていたと思う。夫が家にいなければ、どうにもならなかった。振り返ってみれば、歩けない老人を介護している私たちが家族全員無事だったのは、奇跡のような気がする。一つ一つの偶然がよい方向に導いてくれたからだった。私たち家族はあのとき、自分たちの人生のよい運を全て使い果たしたのではないかと思ったくらいだった。

グリーンピアのアリーナにはあまり長くいなかった。1週間もいただろうか、定かではない。身体の状態を考えてくれたのだと思う。ホテルの7階のシャワーのある部屋に割り当ててもらった。私は自衛隊のお風呂に入るのは困難だった。

6月12日に仮設に移った。今の家には、平成24年3月24日の大雪の日に引っ越した。

仮設住宅は、夏が暑くて大変だった。若い人は閉めて寝たい、私は開けて寝たい。冬は部屋が小さく大人が多いせいか暖かかった。ありがたいと思った。快適に過ごしたいとは思うが、ここまで支援してもらって、特に要望はなかった。むしろ、自分たちも我慢しなければという思いだった。今思えば、たくさんの人にお世話になった。心から感謝したい。

被災した家の2階は濡れずに物は無事だったが、1階は無惨だった。母のベッドの下の床は抜け落ち、あれほど重かったベッドは影も形もなかった。

自衛隊の人が通帳や印鑑の入った袋を見つけてくれた。その袋を受け取りに警察に行ったとき「袋の中に身体障害者手帳が入っていたので、この方はどうしたのだろう、助かったのだろうか、と心配していました」と言われてありがたかった。私たちの家があった場所は荒谷地区のはずれの方で、海から離れている場所だったこと、家の周囲の状況からも水の勢いが小さくなったことで水の流れる方向もあいまって、大切なものが流されず残ったため、後に面倒な手続きをせずに済んだ。

(3) 一人暮らし

グリーンピア仮設に住んでいる**赤沼秀章さん**（昭和17年生、元は荒谷住）は、48歳のときにくも膜下出血で倒れ、5年間意識不明の状態だったが意識を回復した。歩行が少し不自由で、ゆっくり時間をかけて自力で移動することができる。地震がおきたとき、荒谷地区にあった浜納屋（船の作業小屋）でカラオケをしていた。終わって家に帰るときに、大きな地震がおきた。このお話を伺ったのは２０１２年９月11日である。

秀章さんは家に着いて窓をあけようと思ったが開かなかった。隣のお巡りさんに、すぐに逃げろと言われ、公民館に向かって行った。公民館からみると、大きな番屋が堤防の上を越えてくるのが見えた。避難経路を逃げたとき、友人であり床屋さんの箱石さんが私を引っ張り、梶山さんが押し上げてくれた。その時に、中学校の校庭を車が流されて行くのを見た。家が流され、木の葉が流されるようにぐるぐると回っていた。自分の家も流され、すぐに見失ってしまった。プロパンガスのボンベがものすごい音を上げて燃えているのを見た。

その後、常運寺に行ってひと晩泊まった。山の上から火が来て、お寺も公民館も総合事務所も危ないというので、自衛隊の人に連れられて、15人ほどで線路を伝って歩いた。12日の夕方、暗くなっていた時だった。1人に1人自衛隊の人が付き添ってくれた。田老駅からロープで下り、ふれあい荘のバスが田老駅に駐まっていたのでそれに乗って行き、また1泊した。

ふれあい荘ではいろいろな情報が伝わってこないと感じたので箱石さんと一緒にグリーンピアに行かなければならないと思ったが、車でまず宮古に向かった。魚彩市場の近くの銭湯に入り、マグロの刺身で

ビールを飲んだ。箱石さんの家が宮古にもあったので、そこで1泊してからグリーンピアに行った。グリーンピアの中で、よさそうな場所を探し、陣取って過ごした。4月3日以降はホテルの畳の部屋で過ごした。市の方針が出たらすぐにでも家を建てるつもりだ。海の近くに建てたい。

赤沼さんは2015年12月末現在もグリーンピアの仮設住宅で一人暮らしをしている。弟の手を借りながら、三王団地に住宅を建設する予定である。

3　福祉施設における震災当日の状況と経過

ここでは、要援護者を多数受け入れサービスを提供している事業所の対応を、高齢者、障がい者の順に紹介する。職員たちがどう考え行動したかについて知ることができる。

(1)　高齢者の事業所

ふれあい荘

田老和心会理事長である**赤沼弘さん**は、3・11当日は特別養護老人ホームふれあい荘に勤務していた。2013年9月11日にお話を伺った。ふれあい荘は宮古市田老養呂地という海から約3キロメートル山側にある。田老川の上流域ではあるが、少し高い場所にあるので津波で被害を受けることはなかった。

赤沼さんは、震災前に新潟県長岡市の福祉施設園長である小山剛さんから、社会福祉法人には社会に対して果たさなければならない責務がある、ということについて話しを聞いていたこともあり、大きな災害が起きたと知るとすぐに「被災した住民が避難して来たら全て受け入れる」という方針を施設長とともに打ち出した。職員は戸惑っていたが、赤沼さんに迷いはなかった。ただ、外部から病気が持ち込まれることが心配だったという。

避難中の食事づくりは入居者、避難者、職員で協力して行った。食料は神田の自治会と役場から蕎麦をもってきてなんとかなったのだが、市から届くべき食料が他所に回された時に少し混乱した。情報が少なくて不安を感じている人が多いだろうと考え、入居者、避難者に向けた情報「ふれあい荘ニュース（NO．1：3月15日～NO．6）」を作成して発行した。

介護福祉士会や岩手県社会福祉協議会などからスタッフを派遣するという打診はあったが、うまく機能しなかったし、働きやすい体制をつくれなかった。おむつ、薬がなくなることもなく、入居者のことについては心配がいらなかった。

3月17日に酒田からフロをもってきてくれたし、グリーンピアのお風呂にも同日に入れるようになった。八幡平にある松尾の温泉旅館（現八幡平市）の人がお湯をもってきてくれてとてもありがたかった。

3・11の日に勤務していなかった職員は道路も封鎖されていたしガソリンもなかったのでその後しばらく出勤できなかった。3月末までに地域住民がグリーンピアに移動したため、4月1日にはふれあい荘には入居者のみとなった。

避難者への対応については、家が無事な人を家に帰す、ということは難しかった。帰っても電気、水道、食料がなかったからだ。避難してきた人たちは高齢者ばかりで、職員の立場で言えば、入居者は利用料をもらっているため優先すべき、という思いはあった。

北高の体育館に避難していた人は寒かったと思う。ふれあい荘は床暖房があり暖かく居心地がよかったはずだ。しかし、元気な人はこっち、弱い人はこっち、というような振り分けは難しかった。デイサービス、ショートステイの利用者は、自宅に帰らずふれあい荘にいた。そのまま入居になった人もいた。しばらくの間は定員より多い人数を受け入れていた。備蓄品、食料や毛布などについて今後は、どこに何があるかを明示して情報共有していかねばならないと考えている。

次に、同じく特別養護老人ホームふれあい荘の主任介護福祉士兼ケ

アマネジャーである**上山ヤス子さん**（昭和29年生）に、２０１３年９月12日に話しをきいた。上山さんは利用者や職員の様子について、当時のメモを見ながら話してくれた。

地震が起きた直後、ふれあい荘は海から離れているし、揺れないので避難するというより待っているという感じだった。テレビもつかなかった。防災無線もすぐに機能しなくなった。大変なことになった、とわかったのは暗くなってきて、職員が帰ろうとしはじめてからだった。夕方頃から、外から避難してくる人が徐々に増えてきて、夜勤帯勤務の（15時30分頃）の職員も来られない、勤務明けの人は家に帰れない、という感じだったので、日勤帯勤務の人が業務をカバーしていた。入居者は廊下に机を並べて、何かあったらすぐに逃げられるような体制にしておき、ホールは避難者に開放した。避難してくる人はどんどん受け入れた。デイサービスの利用者もそのまま20日ほど居続け、家が流された人は入居となった。

私は震災後ずっと家に帰らなかった。寝る場所もなかったので「そこら」に寝る、という状況だった。電気は2、3日後に復旧したのでよかった。被災後に山側の集落からおにぎりが届き、とても助かった。支援物資がありがたかった。職員の家からの差し入れも届き、卵焼きが美味しかったことをよく覚えている。

家族の安否確認のために職員は交替で家に帰した。いろいろなところを辿って安否確認をして、職員は全員無事だということがわかった。

他機関からの援助についてだが、八戸の施設や大学、介護福祉士会の方を一度受け入れたが、職員だけでなんとかできたので、陸前高田市など、もっと大変な処へ行ってください、と頼んだ。家族を亡くした職員もいたが、お互いに助け合ってやってきた。

私は、家はなくしてしまったが、身近な人が亡くなっていないのでよい方だと思っている。高台に移転することに決めている。

認知症の方との関わりでは辛い思いをする。よく家に帰りたいと言うし、流れてしまった家のあった場所を見に行ってもすぐに忘れてしまい、また帰りたいと言う。津波から逃げてきた人も、本人は認知症があると忘れてしまっていて、話しをするたびに私はそのことを思い出さされてしまい辛くなる。

地震のあと、私は3・11の日には休みをもらって、堤防にあがり弔いをしている。強い気持ちでいないといけないと思っている。「仮設で死にたくない」と言う人がいる。老人は強いと思う。人の尊厳という言葉を重く受け止めている。

清寿荘

岩間正一さんが院長を務める養護老人ホーム清寿荘は、もとは公設公営の施設だったが、平成16年に宮古市から指定管理者の指定を受けて宮古市社会福祉協議会が運営することになった。岩間さんは介護保険制度が始まった年の翌年（平成13年）から院長として勤務している。清寿荘は山田線津軽石駅と豊間根駅のちょうど中間の山側にある。津軽石川から離れて高台にあるので津波の被害には遭わなかった。２０１４年９月９日に伺ったお話である。

地震の直後、入所者48名とデイサービス利用者21名、ショートステイ利用者2名の合計71名を点呼して全員に怪我がないのを確認した。トイレに水がなく困ったが、お風呂のお湯をその日は抜いていなかったので、バケツで汲んでトイレに使った。男女別にお風呂の水が残っていたから、水道が復旧するまでそれで間に合った。自宅で井戸水を使っている職員が近くに住んでいたので、その人から水をわけてもらって、ガスボンベをもってきてもらい、煮沸して飲み水にする、という生活だった。

3・11の日、16時に、施設内の災害対策会議のメンバーでその後のことを検討し、段取りを決めてすすめた。その日たまたま通院のため外出していた入所者が戻ってきていなかった。夜になって職員が裏道を通って確認に行ったがその医院は被災していて誰もいなかった。あとできくと、その医院の院長の判断で避難させて全員無事だったらしい。医院の判断のおかげで助かった。その方については、12日の午後2時に近くの別の介護施設の方がここに送り届けてくれた。

12日は一般の避難者が訪れた。要援護者7名（介護度が出ている人）を受け入れ、元気な方はお寺に避難してもらった。非常食として、入所の方の人数×3食×3日分はあったが、デイサービス利用者やショートステイ利用者、職員の分はなかった。災害対策会議で話をして、栄養士が機転をきかせて1人分の食事の量を減らすことにした。利用者には不満をきつく言われてたいへん辛い思いをした。職員は残り少ない食料を食べるわけにはいかなかった。近所からパンをもってきてくれる人がいたので、それを少しずつ食べて凌いだ。

15日にようやく電気が復旧し、宮古市から食料が届いた。15日に食料は少しだけ残っていた状況だった。入居者にはガマンできない方もいて、厳しくいろいろと言われてしまい、本当に苦しかった。食料については全員が要求したわけではないが、元気な男性の方がかなり強く要求してきた。18日に再び水道が止まった。

一般の方は静養室で休んでいた。夜通し騒いでいるような不穏な状態の方2名は院長室で休ませた。その方たちに付き添った職員はその間一睡もできなかった。

不穏状態にあった2名は、当日のサービス利用者ではなかったが、自宅が被災したせいでここに避難してきた方だった。3・11の日を境に、認知症が進んだ人は多い。元気な方は動きたいのに動けない、出かけたいのにどこにも行けない、ということに大きなストレスを感じたと思う。養護老人ホームには、普段はバスやタクシーを使って町に出る方もいる。ここにはいないが、お酒を飲みに出る人もいるようなところなのだ。いつもならできていたことができなくなったストレスが大きかったのだと思う。

11日から14日は殆どの職員が泊まり込んだ。通常は夜間に支援員がいる体制なのだが、この期間は職員で24時間体制をとった。職員のローテーションを通常に戻すことができたのは23日だった。女性の職員は入浴もできず大変だったと思う。帰りたくとも帰れない。食料を毎日のように他所の人にもらう、ということも耐え難かったと思う。電気の復旧は3月15日、水道は19日、お風呂は23日から復旧した。26日に一般の要援護者が避難所の家族のもとに移動していった。

備蓄食糧については、震災後に災害対策会議で検討して、今は備蓄食糧入居者50、デイ利用者20、ショートステイ利用者2、一般10×5日分を準備することにしている。このことは県内の養護老人ホームの施設長会議でも情報を共有している。民設民営と異なり、指定管理者制度の中では職員の分を確保するのが難しく、そのことは課題として残されたままである。

震災当時の食料は、15日に宮古市の職員が来て、その後3月21日に自衛隊が宮古市からひきついで運んでくれた。大槌の特養施設ではとんでもない人数（200人くらい）の方が入って食料が足りず、かなり厳しかったと聞いている。大槌はヘリコプターで食料が届いたらしいが、それを考えれば宮古市はよかったと思う。

震災の話は、職員同士の会話にあまり出てこない。話題も少ない。私自身も妻ともあまり話はしない。思い出したくない、という気持ちもある。私は以前、土日、朝夕には浜に行っていたし、海水浴やウォーキングにも行っていたが、震災後は、2年目に一度だけ海藻を採りに行っただけで、今はもう行く気持ちになれない。行きたくないということもないが、行こうという気持ちにならない。妻はあの日、津波を見ているし。

清寿荘のすぐ隣にある仮設住宅について、情報は入ってこないので、どんな人が住んでいるか、というのはまったくわからない。ホームの入居者と仮設の入居者に交流はほとんどない。入居者の中には、仮設住宅はなくなって欲しいと言っている人も複数いる。以前は畑を作ったり散策したりできていたのに、自由がなくなったからだと思う。

震災後にホームに入居した人は5名ほどいる。独居で自宅を流された人、経済的には裕福だが独居という人、息子が津波で死亡したという人などだ。

岩間さんは2015年4月に定年を迎え退職されている。

田老福祉センター

宮古市社会福祉協議会の田老福祉センターは田老川の河口から1キロメートル程度しか離れていない。福祉センターには、地域支援係と居宅介護支援事業所とデイサービスセンターがある。ケアマネジャーとして田老地区や鍬ヶ崎などの宮古市北部を担当している**鈴木美喜子さん**（昭和32年生）からお話を伺った。

鈴木さんは、思いだそうと思っても思い出せないことがある、思い出したくないことなのかもしれない、と言いながら話してくれた。地震が起きたときは福祉センターにいたそうだ。

携帯電話の警報が鳴った。大きな地震だったので、テレビをつけ、ラジオをつけた。30センチ程度の津波が確認されている、後から3メートルの津波が予測されると聞こえた。大丈夫だろうとは思ったが逃げることにして、バスなどを準備していた。

人数は定かではないが、お年寄りはみんなトイレに寄っていくというので待っていて、外をみるともう、近くに津波が来ていた。地震から30分ほどたっていた。ゴォォという音が聞こえて、他の職員に何の音かと聞いたら「津波の音です」と言われた。先に逃げた職員が津波を見て、あわてて戻ってきた。

マイクロバスに乗って逃げようと思ったが、45号線は瓦礫でふさがれていた。センター長と一緒に見に行ったら、10メートル先に水が来ていて、あるはずの田老の町並みがなくなっていた。実際の津波は見ていないが、後日映像を見たときに、とても怖かった。

津波が来るとは考えていなかったので、行動するまでに無駄な時間を過ごしてしまったと思う。第1の津波が来たとわかったあと、第2、第3波が来るのがわかっていたので、農協の奥の椎茸センターまで逃げようとした。利用者を逃がし、毛布、薬品を持った。途中で、津波で流された人がいたので救助にまわった。消防の人と一緒に、担架がなかったので長い木を2本組んで簡易の担架をつくったのだが、それに時間がかかってしまった。そのうちに田老診療所の方から火の手があがり火事になり、どこに逃げようかと話していた。奥に逃げると火から逃げられなくなるので、45号線にあがる急な坂道にあがろうとしたが大変だった。車いすの利用者と歩ける人を連れ、私ともう1人の職員が先に移動した。その最中に、除雪車が道をあけてくれたという情報が入ったため、坂を登るのをやめてもとの場所に戻った。途中で1人の歩ける利用者が行方不明になってしまったので、探して一緒にバスに乗り込んで道の駅に上がっていった。道の駅でグリーンピアに移動したほうがいいと言われ、そこからはずっとグリーンピアで過ごした。

グリーンピアに行き利用者の様子を見ながら、福祉センターに火の手がまわって名簿、緊急連絡先、薬が焼失してしまうかもしれないと心配になり、暗くなってから書類を取りに戻った。17時か18時だったと思う。グリーンピアから福祉センターまで7キロある。45号線の平内運送まで来たが、警察や消防に止められた。福祉センターに戻れたのはおそらく翌日だったと思うが、記憶があいまいだ。

福祉センターに水は入らなかったし、火は川の向こうまでで止まってくれた。グリーンピアでは食事の準備や片付けを手伝い、利用者のお世話をして、夜は眠らなかった。

利用者も職員も、みな、家族の安否がわからなかった。携帯がつながる時があり、会話はできなくても、つながったということは生きていることか、と思うような状況だった。グリーンピアには、ずぶぬれの人や、骨折した人たちが運び込まれてきた。骨折した人は応急処置をして翌日まで待っていた。デイサービスセンターの看護師が、それらの処置を手伝っていた。秋田の消防署が地震の翌日かけつけてくれたことが心強かった。緊急搬送先は岩泉の済生会病院だった。患者の中には妊婦さんもいた。

情報はラジオから得るしかなかったので、一晩中ラジオをつけていた。グリーンピアには自家発電があり、真っ暗にならなかったのがよかった。利用者は「みんな家が流れたが、おんなじだが」が合い言葉だった。感情の高ぶりは感じられない、呆然としている感じだった。翌日になってから、「○○がいない」と言う声が聞こえ始めた。すぐに利用者の家族が迎えにくるということはなかった。同じグリーンピアに来

ていても、お互いに来ていることを知らないから探さないので会わなかった。立ち話で情報が出たらわかるという程度だった。

グリーンピアに来てから、ケアマネとして利用者の状況を確認しなければ、と考え12日に線路伝いに歩いて常運寺と総合事務所に行き、情報収集して戻ってきた。途中で地震があり、津波警報にあいながら、グリーンピアに戻った。そこで、家族の元に帰せる利用者を帰すことにした。北高の避難所に行き、職員と手分けをして家族を捜した。家族をみつけた、と思っても、避難所を移動している場合があり、避難所での家族捜しを何度か繰り返すこともあった。グリーンピアでそのまま面倒をみてもらいたいという家族もいた。

鈴木さんは、家族に死んだと思われていたという。2日目の夜、宮古市内の利用者を連れて行くときに、職員に家に立ち寄ってもらった。そのとき家族は鈴木さんが生きていることがわかったそうだ。3日目の夜中に自宅に戻っただけで、3月いっぱいはグリーンピアに泊まり込んで支援するための職員体制を組んで、避難生活に臨んだとのことだった。

宮古市総合福祉センター

宮古市社会福祉協議会のデイサービスセンター（高齢者・障がい者）の管理者である**伊藤直子さん**（昭和43年生）も、地震のときのことは忘れたくて、記憶があいまいなところがあると言った。記録に基づいて、思い出しながら話してくれた。宮古市総合福祉センターは宮古市小山田にある。閉伊川流域ではあるが浸水被害はなかった。

3・11当日、私は山口病院に行っていた。その後市役所に行ったときに緊急地震速報が鳴り、なんだろうと思っていたら駐車場の地面が波を打つように揺れ、ラサの煙突もぐらぐら揺れていたし、電信柱も揺れてたいへんな状況だった。車を簡単に降りられない状態だったがなんとか降りた。周りを見ると、市役所のお客さんたちが腰を抜かして歩けないような状況だった。市役所の人たちがイスをもってその人たちを座らせていた。これは津波が来ると思って、職場に帰ろうということになり、藤原小学校で運営している学童保育所の様子を見に行くことにした。

市役所から藤原小学校に着いたが、川沿いを来てしまったことについては危険だったと反省している。センターに戻ってくると防災無線が鳴り響いていた。高齢者はバスで避難するところだった。どこに行くのか職員にきいたら、高いところ、ゴミ処理場に逃げます、と言っていた。ゴミ処理場はバスも入れるところだった。15時20分ころに移動を始めたと思う。

障がいのある人たちは「逃げない」と言っていたが、職員が半ば強引に車いすの方を降ろしたりおんぶしたりしながらバスに乗せて移動した。職員17名と利用者48名、マイクロバス4台とワゴン車2台を使った。

高台に着いたあとも何度も余震があり、防災無線も鳴っていた。最初はすぐに戻れると思っていた。そのときの情報はラジオでしか聞くことができず、まさかこんな津波だとは誰も想像できなかった。津波が第1波、第2波と来ることは聞いていたが、私自身も、利用者も津波の怖さを知らなかった。いつ戻れるの?と聞かれながらだったが、1時間くらいは待っていられた。避難した時刻がちょうどおやつ前で、おやつを持って行っていたし、水も持っていったのでそれはよかったが、1時間もたつと高齢者はトイレに行きたくなってしまって、ゴミ処理場の和式のトイレに悪戦苦闘しながら介助をした。

そうしているうちに、職員が徐々に減っていった。デイサービスセンターに勤務している職員は利用者の支援があり帰らずにいたが、18時で暗くなり雪も降ってきたので不安になってきていた。センターの玄関にゴミ処理場にいると書いた貼り紙を貼ってあったので、迎えに来た家族もいた。すると残された人たちもどんどん不安になっていった。バスの暖房をつけ暖をとっていたが、センターとゴミ処理場を行ったりきたりしていた職員が、ゴミ処理場に帰ってこなくなり、やがてデイの職員だけになってしまった。

満潮が過ぎてから、センターに戻るべきではないかという意見が出て、利用者には落ち着いていただけるように必死で話して、ラジオで満潮を迎えた後も潮位の変化もない、ということを確認してからセンターに戻った。戻ってきたらホールにタタミが敷かれていたので、利用者45名と職員で、ロウソクと懐中電灯を頼りにラジオを聞きながら宿泊した。

ベッドでなければ寝られない人、トイレが1時間おきの人もいたので、職員はほとんど眠らず仕事をした。障がい者も残った。バスに残った人は48人だったので、3人は自宅に帰ったということだ。津波は、川のスレスレであふれずこちらにこなかったのだと思う。

ゴミ処理場に逃げたのは私たちだけで、情報がなかったので不安だった。夕食はとらなかったような気がする。20時だったので寝てしまったような記憶がある。次の日は、たまたまデイサービスの利用者用のお米があったので、灯油のストーブでご飯を炊いた。その日の朝はカレーにした。レトルトではなくカレーを作った気がする。それは夜だったかな、朝はおにぎりだったかもしれない。次の週に利用者に出す予定になっていた食料があった。備蓄はなかったが、翌週のものが若干あって凌ぐことができた。

翌日は、安全な場所や家族のいる利用者については、車両でこちらから送ったり、迎えに来た方もいたりした。町中の人は送らなかった気がする。送っていったときに助けを求められたので、その人と一緒に戻ってきたこともある。町中の人と、磯鶏方面、内陸の人は翌日家に帰った。一人暮らしの人はここに残った。家族はみんな自宅で心配しながら待っていてくれた。帰らずにここに残ったのは障がい者3人、独居高齢者が2人だった。

職員同士で話し合って、被害がありそうな地域の職員は帰した。職員は自分たちがなんとかしなければ、という思いしかなかったし、食べ物がなんとかなったので孤立感はなかった。センターには3月22日（火）2人の宿泊があった。それまで徐々に少なくはなっていきながらも数名の利用者がいた。認知症の高齢者もいたし、介護度の高い方もいた。宿泊した方は車いす自走の方々だったので、介助にはそれほど手がかからなかった。喘息の既往をもっている人はずっと咳をしていた。薬がなかったので一度職員が家に薬をとりにいった。幸いにも家が流され薬もない、という利用者はいなかった。

12日に訪問地区を決めて、職員が2人ひと組で歩いて回って利用者の安否確認をした時に、亡くなった方の情報を聞いた。63歳の脳性まひの利用者で、姉と母親と同居している方で、母親は高齢だった。11日は、ヘルパーが入っているときに地震がおきたが、親子はすぐに逃げろと言ってヘルパーを帰した。高齢のお母さんと60歳を過ぎたお姉さんは脳性まひの兄弟を残して2階に逃げざるを得なかった。一緒に2階にあがりさえすれば助かったと思うが、自分たちが逃げるだけで精一杯だったと思う。亡くなった方の死に顔は笑顔だったという。その後、高齢の母親は、なぜ助けなかったのか、と同じデイサービスセンターの利用者に言われたことで認知症が進み、そのうち被害妄想も出てしまい、別のデイサービスセンターに通うことになった。

仮設住宅に住んでいる人はちょっとしたことでイライラしてしまう。被災していない人もいるが、被災した人がいると空気が重くなる。同じ話しを繰り返すなど認知症がすすんでしまったと思う。遺体を見た人も多い。被災者の話を何度も何度も聞くのは、利用者だけでなく職員にとっても辛いことだった。避難所での生活、仮設住宅での生活が難しい人で、宮古市内で受け入れられない人の中には青森に行った人もいる。ある人は在宅に戻ってきて仮設住宅暮らしをしたが、結局仮設住宅で亡くなった。体力が落ち、介護度も高くなってデイサービスセンターに通えなくなった人もいる。

他にも、3・11の日は重茂半島の千鶏地区でサテライト型のデイサービスを行っていて、利用者5人、職員3人が津波にあっている。その時のことは思い出したくないということであまり聞けなかったが、いろいろな話が少しずつ出てきている。

その日は、海がとてもきれいで穏やかすぎて気持ち悪いね、と言っ

ていたところに、大きな地震がきた。利用者に津波が来ると言われて2時50分に利用者を自宅に送るために動き出したとのことだった。海の近くの利用者もいたのだが、家族に引き渡して帰ってきてしまった。家族が逃げようと言ったのに、自分は逃げないと言ったらしく、その方は亡くなったという。重茂地区は津波がくると孤立する場所だと聞いている。

12日の16時半に、私たちが外に出ているときに千鶏のサテライトに行っていた3人が歩いて帰ってくるところだった。どうやって夜を凌いだのかときいたら、県北バスが走っていたので、地域の人たちと一緒にバスに泊まった。重茂地区ではすごくて、おにぎりが配給されたとのことだった。瓦礫を撤去して通行可能にして「里」まで車両で移動したようだ。そのあと「里」の人が送ってくれた。県北バスの人がセンターのある小山田まで送ってくれたらしい。そのときの3人が歩いて来る様子を覚えている。

利用者を家に帰した、ということについては、自宅に帰せば家族がいると判断したのだと思う。判断が速かった分だけ家に帰すことにしてしまったのではないかと思う。自宅に帰したことについて、それがよかったのか、悪かったのか、という話しは未だにできていない。未だに暗い雲をみるだけで精神的に落ち込むと言われている。その3人は重茂に行かせていない。それがよかったのか悪かったのかというところ、職員も自分たちの身を守らなければならないというところでもあったので、とにかく自分と利用者を守るために、大きな地震が起きたら山に逃げようという話しをしている。施設は津波で流されてしまったので、今後はそこに建てる予定もない。

震災後一番困ったことはトイレだった。お風呂のお湯を抜いていなかったので、それをバケツで汲んで流した。2つの浴槽にお湯が残っていたので、水が戻ってくるまでなんとか足りた。また、デイサービスセンターの職員は宿泊の介助をしたことがなかったので、ノウハウがなく、シフトを組むことから困ってしまった。職員も家族のことがあるので、とても困った。

避難生活をはじめたあとしばらくして、市役所からセンターが福祉避難所になった、という連絡が入り、援助が必要な方たちの受け入れを依頼された。福祉避難所にはなったが、食料が送られてこなかったので市役所に苦情を言ったら、2度も食料が届いてまた届かなくなるなど、食料の混乱はあった。職員が家にあるものを持ち寄った。水もポリタンクで持ってきてくれる人がいた。

私の実家は赤前で、子どもが当時2歳だったので母と父に預けて仕事にきていた。3・11当日は利用者のことで頭がいっぱいだった。ほかの人に言われて、ああそうだよな、と思った。その年に避難訓練があったので、多分、子どもを連れて逃げてくれているだろうと思っていた。上司から翌日家に帰るようにいわれたが、ここの人を残して帰れないと思っていた。2日後、山越えをして赤前に帰った。木が倒れたり、誘導したりする人がいて、道に迷ってしまった。どこの人に聞いても、赤前の避難所がどこかわからない、という人ばかり。たまたま犬を連れている人が教えてくれた。自宅は無惨な状況だったので、どきどきしながら避難所に行ったら、入口に自分の子どもの靴があり、安心して中をみたら、子どもが地域の人たちの中で踊りを踊っていた。無事を確認したので仕事に戻らなければならないと思って、子どもを騙すようにおいてセンターに戻ってしまった。それは、母親として間違っていたのではないかと自分を責めてしまうこともある。

夫は消防署に勤務している。山田町の消防署だったので1週間後まで消息がわからなかった。子どもは大人しい子なのだけれど、津波を見たようだ。おもちゃを出すと、おもちゃをぐちゃぐちゃに混ぜて「波にぜんぶ食べられたんだよ」と言った。その後、描く絵はすべて真っ黒だった。親として、今も葛藤が続いている。職員の家族がどんどん無事を確認しあう姿をみるのは辛かった。夫と、震災のときの話しを聞いたこと、したことは未だにない。私は管理者として、他の職員を帰さなければ、という思いが強かった。ほかの職員に、家族が無事でした、と聞くと、よかったね、よかったね、と伝えながら、自分は辛かっ

た。上司は帰れと言ってくれたが。実際に帰ってみたのは2日後だった。親とも、その時の話はしていない。改めて聞くことができないので、今後も話さないと思う。

利用者がどう変化したか、というと、足腰が弱くなってしまった人がいる。仮設にいてあまり動かなくなったり、転んで骨折したりしている。認知症も進んでいるかもしれない。普段の生活には支障がないが、ここに来ると津波の話しや、同じ話しを何度もする。そこが認知症なのか、というのははっきりしないが、精神的なショックは受けていると思う。

津波から3年半たって、思い出したくない、というのはあるが、逆に、いま私たちの中では地震が起きたら津波が来る、という恐怖があるので、再び同じことがおきたときに動けるかどうかは不安だ。職員とは、こういうときはこうしよう、という話しはしているが。あのときは皆てきぱきと動けたが、今度はどうなるか。訓練なら動けているのだが、恐怖があるので。この次に津波がきたらどうする、という話しを、職員としている。送迎時が怖い。海の近くに住んでいる利用者も多いので、そのときはセンターに戻ってくるように、という風に決めている。

私たちが利用者を守っているときに欲しかったのは「情報」だった。どこかとつながっていて、今の状況がわかっていれば、どうすればよいかがわかったはずだと考えている。情報が一番大事だ。例えば、小山田地区を限定した情報があればよかった。お年寄りがずっとバスのイスに座っているというのは辛かったと思うので、地域限定の無線などの情報があれば一番よかったと思う。

仮設や復興支援センターができたことで、何か困ったことがあれば社会福祉協議会に相談すればいい、という雰囲気はあるが、それは仮設の人たちにとってだけで、社会福祉協議会の役割はそれほど浸透していないと思う。被災していない地域の人たちの中にはハッキリとものを言う人たちがいて、社会福祉協議会は何をしているんだ、と、まだ言われている。

介護保険制度が変わっていく中で地域とのつながりをもっと持っていかなければならない。社会福祉協議会はもっとがんばっていかなければならないと思っている。

私たちが地域を回っていると、他から「なぜ社協がまわっているんだ」と文句を言われることが多かった。私たちは私たちなりに役割があって動いているし、いろいろなものを見て、聞いていた。避難所を回って、お風呂に入れない、と聞けば送迎バスを出してお風呂に連れてきて、一般の方の介助もしていた。市役所から電話もきて、苦情を言われたこともある。私たちは局長から、いまできることをひとり一人がやれ、という指示を受けていた。お風呂に回っていったら、大きなお風呂に入れないとか、何日も入っていないとか、心臓に持病をもっているとかいう人がいた。ここには看護師もいるのでいろいろな避難所を回って、ここに連れてきて、新聞を読んで帰ってもらう、ということもしていた。

個人情報の保護ということで、できないこともあるのだろうが、行政とは信頼し合って情報共有をしていれば、いろいろな人が何度も同じことを聞かなくて済んだと思う（2014年9月9日）。

鍬ヶ崎の自宅

宮古市地域包括支援センター職員のAさんにお話しを伺ったのは2014年9月10日である。Aさんは、3・11の日は休みで鍬ヶ崎の自宅にいた。地震が収まって家の中に入ったときにはテレビなどが落ちていてひどい状況だった。そのときには1人で高台に避難した。そこから津波で家がつぶれるのを見た。パニック状態で泣いている人に声をかけたりなだめたりしていた。しばらく様子を見て、波が引いたのを確認してから避難所である小学校に降りて行った。消防団の人から小学校の方に避難してくださいと指示されて、一緒に行った。いくつかの教室に分かれて入った。教員たちがお茶の準備をしてくれた。

携帯はつながらない状態だった。磯鶏地区にいる息子夫婦や夫に電話したがつながらなかった。会社員の夫は高浜小学校の近くの堤防を走っているときに前方から波がきたのでUターンして小学校に逃げ込

んだと聞いている。車は途中で乗り捨てて小学校に駆け上がって助かったという。自家用車は会社に駐めていたので、歩いて会社に戻ってから山側を通って避難所に来て家族に会えた。

小学校に避難していたときは教師が温かいお茶を出してくれて、夜遅くになってから冷たいおにぎりが届いた。そのときは自分たちのことで精一杯だったので、仕事のことは考えていなかったが、翌日になって職場に来ようとしたが来られなかった。12日は血圧計を預かって避難所の人たちに声をかけながら血圧をチェックして、翌朝5時に西中学校に避難していた息子夫婦の顔をみて、豊間根の実家も確認して、着替えなどをもらって、それから役所に寄って、仕事を始めた。

職員は、福祉課、健康課、地域包括支援センターが一緒になり、役割分担をして避難所にいる人たちの健康状態の確認に行った。これがない、あれがない、大変だ、という訴えを役所の人間として要望を聞き、当課に戻ってそれを伝える、という状況だった。食事を配ることも手伝った。避難所で中心となって支援にあたっていた職員たちは、もっとたくさん、いろいろな要望を聞いていたはずなので大変だったと思う。あとで考えるとその人たちに対する支援が必要だったと思って反省している。

私たち家族も避難所で生活していたが、避難所の食事が出る前に出勤しなければならなかった。市役所に来てから他の職員から食べるものをもらって食べていた。あとで聞くと、鍬ヶ崎地区は人に知られていない地域なので貧しい食事だったようだ。仕事に来て、別の避難所でいろいろな人に「大丈夫ですか」「辛くないですか」と声をかけていたので、自分自身が被災者だという気持ちはあまりなかった。

自分たちがいつ仮設住宅に入れるかはわからなかったのだが、2週間くらい後に夫の知り合いの家を借りられることになり、住所変更をして引っ越しをした。友人から郵便が届くようになったり、電話で友人と話せるようになったりしたら、急にほっとして、涙があふれて止まらなくなった。夫も2週間ほどは仕事に行かず避難所で生活をしていた。私自身も被災したはずなのに、その実感をあまりもてなかったのだが、少し落ち着いてくると辛さを感じるようになった。他人の体調を気遣う、という仕事だったこともあるが、同僚が静かに見守ってくれていたから働きやすかったのだと思う。それぞれがとても苦しい思いをしていた。話をきいてもらうだけで楽になった。仕事があったから乗り越えてこられたという所はある。被災者の中には仕事をなくした方もいるのだから。その当時の大変さは自分の中では薄れてきているが、いまも仮設に住んでいる方のことを考えると、その方たちへの支援はまだ必要だと感じている。

避難所では、同じ地域にいる人たちの中で、被災した人、していない人、という区別が起きてしまったと聞いている。後で、家が残っている人がずっと避難所で生活しているという情報が入ったときにもそういうことがあった。被災した人たちの結束が強かった。これから一緒にがんばろう、これから別々になったとしても声をかけあって行こうという雰囲気だった。両者の間に、なにかしらしこりは残ると思う。

高齢者にとって1年、2年という期間は長いと思う。若い人にとってはすぐに過ぎると思うが。私たち自身もできれば以前と同じところ、地元に住みたかったが、待てなかった。土地がなかったし、安全な場所に家を建てたいという思いがあった。夫は代々鍬ヶ崎地区に住んできた人で、私自身も海が好きだったので海が近いのもよかったのだが。

(2) 障がい者の事業所

みやこワークステーション

2013年12月25日に、障がい者が日中通いながら作業を行う施設である就労継続支援B型事業所、みやこワークステーションで、職員の**及川耕一さん**（昭和46年生）から伺った。みやこワークステーションの住所は宮古市田老西向山、海に近いがとても高い場所にあり津波被害は受けなかった。

地震が起きたとき、26名の利用者が作業中だった。私は宮古市の会議に出席していたのだが、慌ててここに戻ってきた。私自身は宮古から戻ってくるのに10分ほどしかかからなかった。地震が起きてからずっ

と胸騒ぎがしていた。海を見たら波がひいていたので、これは津波が来ると思った。木が砕ける音、建物が壊れる音が聞こえた。田老を見たら煙が上がっていた。行ってみようかと思ったが通行止めだった。

事業所に戻ったとき、電気も電話も使えなかったのだが、利用者を家に帰そうと思い、送迎車で出発した。裏道を通った車は帰れたが、通行止めで帰れなかった利用者（９名）は戻ってきた。わたしも大槌町出身だったが家に帰れない状態だった。食事は都市ガスがついたので雑炊をつくり、トイレは園庭にある噴水の水をくんで使った。授産品のキャンドルが1千個あったのでそれを灯りにした。この事業所は福祉避難所にもなっていなかったので、一般の避難者は誰も来なかった。水はありませんか、と聞きに来た人が1人くらいいた程度だった。

取り残されるような不安はあった。利用者は夜の分の薬は自宅においてあり持っていないので、興奮したり、落ち着かなかったりしていた。それをなんとか落ち着かせて寝かせた。職員は6人勤務していた。送迎に出て、その日戻ってこなかった者が2名いたが、翌日になって戻ってきた。利用者を家に送り届けたとき、親御さんは喜んでいたと聞いている。家が浸水している方は避難所に送り届けた。家に帰れない利用者と過ごしている間、夜の薬がないということが不安になったが、重大なことにはならずに済んだ。利用者が服用しているような薬の予備は病院が出さない。震災後に、自分自身で考えて夜の分を備えとして持ち歩いている人はいると思う。非常食は日頃用意しておかなければならないと思っている。水も重要だ。

４月1日に利用者の受け入れを再開した。事業所では食事提供もしているのだが、当時食料が手に入らなかったしガソリンや電気がなかったので、再開が遅くなってしまった。固定電話がつながったのは5月になってからだ。サービス再開までは、職員は避難所にいたり、瓦礫の中から人や物を探したりしていたらしい。私も親戚が釜石にいるので、その片づけに追われていた。利用者の中に一人暮らしの人は何人かいたが、その人は被災していない。

レインボーネット

ＮＰＯ法人レインボーネットの相談支援専門員である**加藤伸二さん**から２０１４年9月10日に、在宅の障がい者についてお話を伺った。レインボーネットは、宮古市緑ヶ丘にある。海からも川からも離れているので津波の直接的な被害は受けていない。

相談支援事業所は中立公正でなければならないので、平成20年４月1日にＮＰＯ法人化された。私は、社会福祉法人若竹会の職員として従事している。この事業所は4市町村から委託料を得て運営している。社会福祉協議会等からも出向して来ている人がいる。社会福祉士国家資格を持っている人を出してもらっている。この運営方式は、厚労省のＨＰにも掲載されて注目された。精神障がい者の方は担当者が変わると不安定になるので、在籍期間はなるべく長くしてもらっている。

３・11の日は年度末だったので自立支援協議会の親会（全体会）の準備を事務局でしていた。地震のとき、1階で就労・支援センターの所長と話をしていた。携帯の緊急地震速報が鳴って大きな揺れが来た。相談支援事業所には通ってくる利用者はいないが、多機能型の施設には利用者がいたので、目の前の公園に避難させようということになった。正直、たいしたことはないだろうと思っていた。しかし、なかなか揺れが収まらず、それに電線が切れるのではないかと思うような揺れだったので、段々不安になっていった。たいしたことはない、と思いたい心理が働いてすぐに対応を考えられなかった。

人が大勢逃げてきたことや、消防団からの避難指示が聞こえたのでとりあえず避難しなければと思い、宮古消防署の裏に職員駐車場があるので、そこに行こうということになった。どうしようか、と考えながら行ったり来たりしていた。

側溝から黒い水が吹きあがって、それが浸水しはじめた。寒くて震えたのか、怖くて震えたのかわからないが身体が震えた。事業所に水は上がらなかったが、宮古地域振興局に避難した。そこには５００人くらいの方が避難してきて受け入れたときいている。自閉症の利用者がいたので、なんとかならないか、と言ったら小部屋を用意してくれた。

そうしている間に、宮古市内が津波で大きな被害を受けている、という情報が入った。

利用者を守らなければならないという心理や、ここは被害が大きいところではない、と考えたい心理があった。自分の家に帰りたいとは思ったが、利用者を確実に家族に帰さなければならないということを優先した。何日かかけて利用者を家に送り届け、職員が家に帰れたのは3日後くらいだ。それから自分たちに何ができるか、と考えたときに、グループホームで世話人が出勤できなかったのをサポートしようということになった。

次に、自転車を使って避難所をまわりながら通常関わりのある利用者の安否確認をしていった。関わっている方の中で亡くなった方は少なかった。安否確認にあたった職員は4人程度だった。事業所がそれぞれ自分たちの利用者の安否確認に動いたので、そこから情報を得ることができた。

地震のときは、利用者は帰宅前で事業所にいたため無事だったのだと思う。この事業所は後で福祉避難所に指定されて受け入れに当たって費用が支払われるようになった。

新聞等で、自閉症の方が排除されているのではないかとの報道があったが、予測したほどでもなかった。当事者の家族も周辺の人が優しくしてくれた、と答えている。

3・11当日、ある事業所から帰された利用者を私たちが駅の近くで発見して避難所に連れて行った。大槌町の施設で発災後すぐに利用者を自宅に帰したため、利用者が多数亡くなってしまった事例があった。

私自身は、利用者を自宅に帰すことなどまったく考えなかった。

私の長男は蛸の浜で釣りをしていたと、あとで聞いた。次男は中学校で一夜を過ごした。家族が揃ったのは3日目か4日目だったと思う。自分がどうやって自宅に帰ったのかは覚えていない。

職場が通常の業務に戻ったのは6日目くらいで、その後にはどんどん相談が入ってきて、忙しくなった。1か月後に内陸の相談支援専門員が県から派遣されてきて安否確認をすることになった。それはこちらでは全て終わっていたが、再度同じことが行われた。

他の地域の事業所は相談支援員が1人、というところもあるので、そういう人たちは助かったと思う。私たちは複数の相談員がチームとなっていたからそれほど大変ではなかった。いろいろなところを回ったが、支援につながったケースは予想に反し1件だけだった。

緊急時だったので、事情をよく知っている人が長く派遣チームとして関わってくれたらよかったとは考えている。平時から何かあったら助け合う体制があるとよかった。この後、宮古の社会福祉士会は盛岡の社会福祉士会がサポートする、という体制をとることになった。他機関から派遣されて来る人については、どんな人が来るかと思って気を遣った。こちらも普通の状態ではないし、慣れた頃に交代になるから。感謝だけはするが、正直なところ頼るのは自分の職場の人、という感じだった。被災地の人間は冷静であらねば、と思いながら、なかなかそうなれない。派遣チームが来ると別の気を遣ってしまう。

最初にきた相談はよく覚えている。通所の職員が疲労困憊した顔でやってきた。大便を口に入れるというような最重度の対象者をなんとかできないか、というものだった。家族は施設に入れたくない、という思いで在宅生活を続けていた。40代半ばの対象者で施設に入ることができたのだが、しばらくして亡くなってしまった。在宅の障がい者は、結果としては福祉避難所扱いになった施設が対応した。他者へ危害を加えるような重度の障がいのあるような人への対応は難しかっただろうが、多くの事業所では一生懸命受け入れてくれたと思う。

障がい者の中には親が亡

写真1　被災した施設　山田町船越
2011/04/05　撮影：加藤伸二

くなったことを辛いと思うことができない方がいる。そのことは、とても悲しく、複雑な心境で支援したのを覚えている。お母さんが亡くなった当事者の中で、お母さんが亡くなったことを悲しまずに、私が大切にしていた人形を持ってきてほしい、という人がいた。自閉症の当事者の中にも、お母さんが亡くなったことを悲しまなかった人がいた。

事業所は浸水しなかったのでパソコンも無事で電気が戻って仕事ができた。JDF（日本障害フォーラム Japan Disability Forum）、JDDネット（日本発達障害ネットワーク Japan Developmental Disorders）など、有名なところも無名なところも、ありとあらゆる団体がどんどん入ってきた。それらに対応することも私たちの責務だと思った。いろいろな支援をいただき感謝している。

震災後大きく変わったことは、以前は災害のニュースを他人事のようにみていたが、それらの見方が変わったことだ。

わかたけ学園

障がい者支援施設　わかたけ学園職員の**藤澤順子さん**（昭和34年生）に、施設の応接室で2014年9月11日にお話を伺った。藤澤さんは、宮古市で生まれ育った。鍬ヶ崎の出身で、実家は流された。実家の両親は近くの高台（熊野神社）に避難して無事だった。

わかたけ学園は宮古市の崎山にある。利用者の多くは知的障がいのある方たちだ。海から離れ、高台にあるので津波から避難する必要はなかった。藤澤さんも、手元の記録を確認しながら話してくれた。

3・11の日は利用者を引率して磯鶏地区にある「ホテル近江屋」に大衆演劇の観劇に行っていた（12、13名の利用者を4、5名の職員で引率）。昼食後、14時に全て終了してホテルを出発したのが14時半ごろで、佐原地区をマイクロバスで学園に向かって走っているときに地震があった。携帯の緊急地震速報が鳴っていたのでとても驚いた。15時前には施設に到着した。学園の利用者たちが職員と一緒に小グランドに待避しているところへ合流した。停電しているという事実がわかったのもその時だった。電話もテレビもつかなかった。落ち着いてからワンセグでテレビがみられたのだと気づいたが、そのときは思いつかなかった。頻繁に流れる災害放送のみで、とにかく情報がなく、宮古市内がどうなっているかわからなかった。

暗くなってきて、雪も降ってきた。小グランドで待避している利用者が寒さで震えていたが、余震が続く状態で耐震基準を満たしていない当時の大食堂には長時間、利用者を入れることができず、公用車や職員個人の車のエンジンをかけ、利用者もその車の中で暖をとらせ、利用者がパニック状態にならないように配慮した。

職員は自家用車の発電機を準備する一方、100名余りの利用者をまとめて避難できる場所として隣接する恵風支援学校の体育館を借りることにした。職員は100名分の布団を全て運んで体育館に敷く作業をした。厨房では夕食が途中までできていた状態だったので、17時過ぎの暗くなる前に副食とおにぎり、味噌汁を食べさせた。居室棟のトイレはくみ取り式で使用で

写真２　小グラウンドに退避している様子
2011/03/11

写真３　たき火で温かいスープをつくった
2011/03/12

きたので、食後、暗くなる前にトイレ誘導をした。

恵風支援学校に移動する準備が整った頃は、辺りは暗がりで路面が白くなるほど雪が降っていたので、マイクロバスで一般棟100名の利用者をピストン輸送した。重度の利用者30名は環境が変わることで理解できず混乱することが予測できたので、重度棟のホールに残ってもらい、まとまって就寝させた。懐中電灯や電池の在庫をかき集め、反射式のストーブも体育館に運び、私たち支援員は利用者が不安がらないように見守っていた。普段は多動だったりトラブルを起こしたりする利用者が、緊急事態だということを察知したかのように意外と落ち着いて私たちの指示に従ってくれた。在宅や地域のグループホームに入居していて、学園に宿泊した経験のない利用者も数名いたが、泣いたり興奮したりすることなく落ち着いて休んでくれた。支援学校のトイレは水洗だったので、トイレ誘導の度に利用者に付き添い、節約のためにペットボトルの水を大便の時だけ流すように援助した。

写真4　恵風支援学校体育館、100組の布団を敷いている

わかたけ学園から市内のB型事業所に通所している利用者が数名おり、20時頃事業所の職員が送って来てくれた。その際、その方たちから市内の様子を少しだけ聞くことができた。夜が更けてからワンセグのニュースで津波の映像を見て、鍬ヶ崎地区が全滅か?私の親もダメか?と口では言いながらも、心のどこかで現実味がなかった。なんとなく、家族は大丈夫…と自分に言い聞かせないと仕事に向かえなかった。3・11の日の夜は余震が続き、職員は一睡もできなかった。

翌日からの食事は在庫の材料や缶詰を使用し、厨房でつくったおにぎりや温かいスープ、みそ汁を提供した。支援物資のおにぎりは13日14時15分に届いたという記録がある。震災後2日間は学園にあるもので乗り越えた。

自衛隊が市役所の方と一緒に来たのが2日目の夕方で、水と食事が不安であることを伝えたところ、4日目に給水車が来たと記録がある。当初は硬くて冷たいおにぎりとパンが届き、しばらくすると温めることができるレトルト食品も届くようになった。幸い、厨房でガスを使用できたので温かいおかずをつくることができた。

私たち職員は当日勤務予定だった交代職員が来ることができない状態なので、必然的に帰ることができなかった。職員の中で小さいお子さんがいる方を中心に、山を回って安全に帰れそうな人は当日に帰宅したが、普段から宿直勤務を行う職員はほとんどが帰らず支援にあたった。交代で休むためにその中でシフトを作って対応した。

停電と断水が続く中、懐中電灯の電池が1晩でなくなるので、最低限の電力で利用者が安全に生活できるよう工夫し、廊下やトイレなど、場所を決めて懐中電灯を設置し、手洗いはバケツを利用して行った。

3・11当日は入浴時間中だったので、3か所の浴室の浴槽にお湯が残っていた。それを利用して洗濯をした。普段下洗いをしてから洗濯機で洗っている汚れた下着を、冷たい水で手洗いし、手で一つ一つ絞って干さなければならなかった。震災3日後には風呂の残り湯を利用し、中庭で薪を焚いて湯を沸かして利用者の清拭を行った。歯磨きは給水車が来るようになってから再開した。当初は暖をとる、栄養をとることを優先して対応した。ガソリンが不足していたので、マイクロバスを巡回させて職員が通勤できるようにした。

4日目に取引のある給油店が学園のマイクロバスを含む公用車には優先的に給油してくれた。5日目に、市内に自宅があって被災していない保護者の方が普段週末に帰宅している利用者を迎えに来てくれた。

6日目（16日）に、ラジオの安否情報に全員無事だという放送を入れてもらうよう依頼した。郵便物が届く頃、夜、職員が手書きで利用者の自宅に向けて無事だという内容のハガキを送った。家族に近況を

伝えるだけでなく、もしハガキが戻ってきたらご家族の方にも何かあったのか確認できると思ってのことだった。

7日目（17日）薪でお湯を沸かして毎日清拭を行うことにした。その時の利用者は121名だった。自宅全壊の職員は9名いること、自衛隊から25枚の毛布が支給されたこと、アメリカの報道局から取材を受けたことが記録してある。

8日目（18日）は宮古市から灯油3缶が届いている。大阪市と書いた給水車が来るようになった。この頃から、携帯電話の電波が入る場所が市内にできている。

10日目（20日）は職員の送迎バスの時間を変更し、勤務時間を変更した。日勤者をバスで帰さなければならないので、夜勤帯にできるだけ仕事を残さないように配慮した。

また、宮古市崎山にある同法人の「サンホームみやこ」で入浴できることになり、この日、震災後初めて20名の利用者がマイクロバスで移動して入浴することができた。

電気が復旧したのは11日目(3月21日)、水道は13日目(3月23日)だった。それまでは、毎日、朝夕給水車で水や食料を届けてもらい、支援物資も定期的に届けていただいた。

12日目（22日）夕食で支援物資のパンを食べているとき、男性利用者がのどにパンを詰まらせてチアノーゼになってしまい、救急車で搬送するという事故が起きた。命に別状はなかったがパンは怖いと、そのときに感じた。利用者は、牛乳や味のついたものは喜ぶのだが、水はなかなか飲んでくれない。支援物資の食料は固いおにぎりやパンが多く、ぱさぱさしていて利用者に食べさせるのがとても怖かった。安全に食べさせることに気を遣っていたが、被災生活に慣れてきていた頃だったし、利用者も職員も疲れが出てきた頃だったのだと、後で思った。

地域の方の受け入れ状況については、ある知的障がいの女性の自宅が被災して、1晩か2晩は小学校に避難していたが、歩行に障がいがあることで急きょ預かったケースがある。その後家族は市営住宅に入居したが、階段がある建物なので本人は家に戻れないことになり、そのまま施設に入所している。

法人が運営している17か所のグループホームのうち4か所が被災していたが、幸い利用者は被害にあわなかった。ホームの利用者は当初、無事なホームにまとまって生活していたが、わかたけ学園には「希望の家」という家族のための宿泊施設があるので、震災後3日目には使えるように片づけてホームの利用者10名に使用させた。

重度のグループホームの利用者5名は学園の重度棟に、また建物は被災していなくても食事の提供ができない、震災の影響で世話人がいないホームの利用者5名がわかたけ学園本体に宿泊していた。

利用者を家に帰すケースもあったが、帰せるのか帰せないかはその都度状況判断をして行っていた。環境が変化すると興奮状態になる利用者を家に帰そうとは考えなかった。普段から家族が面会にきていて、週末にごとに帰っているとか、家庭状況がわかっているケースだけ帰宅を実施した。

3・11の日は通常15時に学園を出発する送迎バスが学園を出る前だったので、学園のバスは被災せずに済んだ。私が同行していた大衆演劇の鑑賞でも、磯鶏地区のホテルを出発する時間が早かったので、津波に巻き込まれずに済んだ。あの時に何かしらのアクシデントがあってホテルからの出発が遅れていたらどうなっていたかわからない。

実家が津波で被災したので、両親の安否がわかったのは3日目か4日目だった。夫が山伝いに様子を見に来てくれた時に頼んで調べてもらった。私は津波に流される瞬間や水が入った様子を見ていない。今、鍬ヶ崎地区を通っても、自分が育った場所ではないように思う。津波を目の当たりにした両親は、高台の神社から家が飲み込まれるのを見ていたので、被害から立ち直ることを現実的に考えることができたよ

うだ。私は未だに現実を認められないのに。

まとめ

3・11をめぐるさまざまな体験を語る中で、話者は人生を振り返り、総括していった。中でも家族として、嫁として、妻としての語りの中には、役割として与えられた介護者としての人生を、諦めつつ受け入れ、前向きになろうとしてもがき、苦しみながら生きてきたさまがうかがえるものがあった。子どもが巣立ち、孫ができてもなお、介護者として生き続けてきて、3・11その日たまたま舅が、姑が、夫が妻が不在だったから逃げ延びることができた、家に一緒にいたら逃げる判断はできなかったと思う、と語る方々がいるということはつまり、家に一緒にいたために逃げられず命を落としたひとがいた、ということを表しているのである。

また、ここでは紹介しきれなかったが、介護を職務としていて、たった一人で高齢者を高台へ逃がし、避難させ、避難所に連れて行ったという人の話をきいた。まだ若いその女性は、私は自分が命を落としても、この方たちを救わなければならないのか、そういう仕事を選んでしまったのかと考え、その責任の重さがとても恐ろしかったと語った。

生きた人々の語りを記録することによって、亡くなってしまった人々の生き方や人生を想像しながら、守れる命を守ることを、私たちは考え続けなければならない。

第2部　各分野での震災後の取り組み
第4章　子どもを守る取り組み

猿渡土貴

はじめに

本章では、あの日、子どもたちの命を守るために奔走した大人たちのことを記す。

「てんでんこ」という言葉の示す通り、自分の命を守ることさえ難しい大災害の渦中で、どうやって幼い子どもたちの命を守ることができたのか。その個々のプロセスを、多くの子どもの成育にかかわる人々に伝えたいと思い、取材を始めた。

子どもの命を預かる施設の先生たちが、どのような思いで子どもたちを守り抜いたか。そこにはどのような覚悟があり、判断と行動があったのか。また、小さな子どもを抱えた母親たちのどのような行動が、生死を分けたのか。さらに、防災教育の在り方などにもふれながら、被災後の子どもたちの生活や心をどのようにして守っているか、を報告する。

幸い、公私を問わず市内の保育所、幼稚園、児童館、小学校、そして学童の家保育の先生たちや、小さな子どもを持つお母さんたちの協力を得ることができた。辛い体験を、言葉を絞り出すようにして、話してくれた人も少なくない。その言葉には、力がある。それゆえ、なるべく語りを活かして記述しようと思う（＊以降、ゴシック体は話者の語り）[注(1)]。

A　その時、どうやって子どもを守ったか（保育所・幼稚園編）

本節では、3月11日当日の地震発生前後の様子を、被害の大きかった地域や施設を中心に報告する。

想像を絶する危険の渦中で、個々人の瞬間瞬間の判断が生死を分けた。その時、どのような問題に直面し、いかなる選択をして、いかに行動をしたのだろうか。

まずは、震災後の防災対策に大きな影響を与えた千鶏保育所の事例から話をはじめよう。

1　千鶏保育所では

千鶏保育所は、海から少し上がった場所にある小さな僻地保育所だった。「だった」と過去形なのは、保育所は津波で基礎ごと流され、閉鎖されてしまったからである。

話は、震災の2日前から始まっていた。

3月9日のこと

伊藤るみ子先生（昭和32年生　取材日：２０１４年3月20日）によると、3月9日は、お別れ会をしており、津軽石保育所から所長（坂本静枝先生）も来ていた。千鶏保育所は僻地保育所だったため、津軽石保育所長が所長を兼任していたのだ。

ちょうど、お昼のお弁当を広げようとしている頃、かなり大きめの地震が起きた。子どもたちは直ちに机の下に潜った。日ごろの練習の賜物である。

その日は、被害はなかったものの、園から海の方を見ると潮が引くのが見えたので、念のため保護者に迎えに来てもらった。先生たちは、近くもっと大きな地震が来るのではないかと危惧していた。海沿いの道を通勤する途中に、もし、大きな地震があったら車を捨てて山に逃げようと職員間で話していた、という。

写真１　在りし日の千鶏保育所　園庭にて
撮影：宮古市

3月11日　地震発生時

3月11日、保育所では保育士の伊藤るみ子先生と臨時職員の2名で、13人の子どもたちをみていた。

そして、14時46分。今までに経験したことのないほどの大きな揺れが来た。お昼寝の時間だったので、子どもたちはまだパジャマ姿であった。2日前の地震が予行演習のようになり、携帯の地震警報が鳴るとすぐにお母さんたちが迎えに来て、我が子を急ぎ連れ帰った。最初に迎えに来たお母さんが、「津波が来る。大きな地震だから」と言って、子どもたちの着替えを手伝ってくれた。伊藤先生は、そのお母さんの言葉と行動に、他の子どもたちを守ってもらったと思っている。

地域に根差した小さな保育所なので、何かあれば地域の方々が来てくれるんじゃないかと思っていました。「助けて」といえば、誰かきっと来てくれるんじゃないかという、ちょっと甘えがあったかと思う。その時に危機を感じたお母さんたちが来てくれて、子どもたちのほとんどを帰しました。

その後、すぐに情報が途絶えた。

地震発生後15分以内には、保育所にいた園児13名中12名を保護者に引き渡すことができた。すぐさま1人残された園児を連れて避難を開始した。

避難の様子

川の反対側にある千鶏小学校が地域の指定避難所だったので[注(2)]、どちらに逃げるべきか一瞬迷いましたが、マニュアル通り、保育所と地続きにある消防の屯所（＊コミュニティセンター）に行くことにしました。小学校と屯所の標高は同じくらい。マニュアルでは、民家の脇を通って丘を上がり、上の道路を通って屯所に避難することになっていました。屯所は2階建てで屋根やトイレもある。そこに避難することは保護者にも伝えていたし、屯所への引き取り訓練もしていました。

そこへは車に乗って逃げることにしました。一旦、下に降りて車のところに行くと、もう波が来ていたので急いで駆け上がりました。外海のため、市内よりも波が早く来ました。避難に車を使ってはいけないというけれど、車を使った。もし、歩いていたら、間に合わなかったでしょう。

間一髪、屯所に着くと、根滝山にぶつかった波が跳ね返って山のようにに覆いかぶさってきて、高台にある屯所が水をかぶりました。波は1度目はじわじわと来て、2回目は大きかった。迫りくる波から逃れて、屯所の裏手の1メートルほど高くなったところに、水をかぶりながら、必死にお尻を支えて子どもを押し上げました。子どもは泣きもしませんでした。

同じく屯所に避難しながら、そこからさらに逃げずに様子を見ていたおじいさんが、目の前で波にさらわれました。

バスの中で夜を明かす

その後は、岩手県北バスに乗せてもらって暖を取りました。このバスは石浜方面に向かったけれど、津波で先に進めずに引き返し、高台の屯所の近くに停車していました。そこには、下校したものの石浜地区に入れず引き返してきた小学生10名ほどと、石浜神社前のデイサービスに来ていた足の不自由なおばあさんと職員2名が乗っていました。運転手が無線で営業所に掛け合って、エンジンをかけて暖を取らせてくれていたのです。

しばらくして、目の前で波にさらわれたおじいさんがバスに運ばれて来ました。やがて、「胸が痛い」と言いながら息を引き取りました。助けてと言われても、どうしようもなかったのです。

持ちだした荷物にあった飴を皆で分け合って食べました。夜になってから小学生たちと1人残った園児の迎えが来て、ようやく無

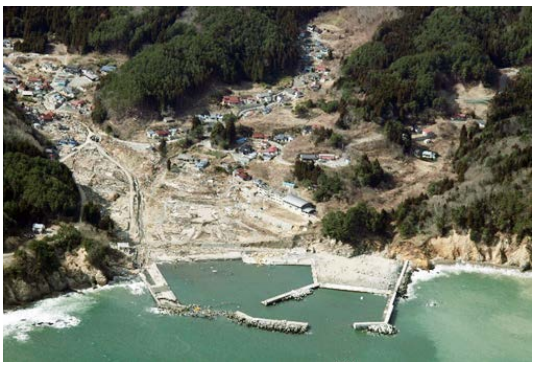


写真2　津波後の千鶏

撮影：宮古市

事に引き渡すことができました。園児を迎えに来たおじいさんは石浜から歩いて来ました。家は流されたと聞きました。

消防の分団長が後から来てくれました。津波で消防団の車も流されたと聞きました。山側の助手席に座っていた人は山に逃げて助かったけれど、海側の運転手は流されたそうです。重茂での死亡者は1人でしたが、千鶏では建設会社の人や地元の人が多く亡くなりました。わかめの時期だったので、作業で皆、下の方にいたためです。屯所には怪我人や遺体が運ばれてきました。遺体は27、8名だったと記憶しています。

翌朝、消防団の人の手配で小学校の先生と一緒に帰途に就こうとしましたが、道路が瓦礫で寸断され、里集落の橋も落ちたため、災害対策本部があった重茂漁協支所にとどまり、待機しつつ孤立した千鶏の状況を伝えました。千鶏には食べ物はほとんどなかったのですが、重茂の方には食べ物があり、避難所によってこんなにも状況が違うのかと思い知りました。

そして、14日になってようやく家族のもとに戻ることができました。家族は皆無事だったのですが、高浜地区にあった自宅も実家も津波に流されていました。家族に再会して休憩すると、すぐに役所に報告に行きました。支所に来た市の職員に、自分の名前と保育所が流されたことを伝えましたが、役所には伝わっていなかったようで、一時、行方不明者リストに自分の名前がありました。

しばらく休んでよいと言われたのですが、千鶏のことが心配で居ても立っても居られませんでした。道路が復旧して、何とか再び千鶏に園児の安否確認のために入れたのは、17日になってからでした。

安否確認に歩く

安否確認に回る中、伊藤先生は保護者に引き渡した園児のうち1組の親子が、流されて死亡したことを知る。あの最初に迎えに来て、子どもたちの着替えを手伝ってくれた母子だった。

宮古の人はチリ地震など大きな津波を経験しているので、大きな地震があれば30分以内に津波が来ることを小さい時から教えられて知っています。亡くなったお母さんは日ごろからリーダーシップのある方で、保育所で他の子の着替えを手伝い、小学校に上の子を引き取りに行き、学校から降りてきたところで津波にさらわれたようでした。かなり上の方で車が発見されましたが、車の中に保育園バッグが残っていたと聞きました。

もう1人、石浜地区には4月から保育所に入る予定の子がいて、前日に入所説明をしたばかりでした。私のことを「おばちゃん」と呼ぶので、「保育所に入ったら先生と呼ぶんだよ」と話しました。その子は、ひいおばあさんと家にいて、逃げられないひいおばあさんと一緒に流されたそうです。

また、園児の中に九死に一生を得た子もいました。その子の家は小学校のすぐ側にあったのですが、家に着いた直後に水が入り、お父さんお母さん、妹とともに流されました。しかし、保育園バッグをまだかけたままだったので、バックの紐が何かにひっかかり、その子だけが生き残りました。たまたま外出していたおばあさんと2人きりになってしまいました。

どこの施設でも、非常時には子どもを保護者に引き渡すマニュアルになっており、そのための引き取り訓練なども実施していた。それでも、伊藤先生は、地震「直後」に保護者に園児を引き渡して帰してしまったことを、今もひどく後悔している。「そのまま一緒に避難すればよかったのですが、あのように大きな地震の時にそれは言えなかった」という。

保育再開を望む声

その後、千鶏では山の奥の共同作業所が家を失った方々の避難所になりました。卒園式をしたかったけれどもできないので、安否確認に回る際に卒園証書を渡すだけになりました。

家を回っているとき、「保育所はいつからやんのえ?」と保育所再開

を望む声が多く寄せられました。私が見ていれば、お母さんお父さんたちの手伝いができると思いました。保育道具はすべて失ってしまいましたが、先輩保育士の松崎裕子先生（＊取材当時　磯鶏保育所長）に「30年の保育経験が身についているから体一つで大丈夫。保育できる」と勇気づけられました。

そこで、紙芝居や折り紙などをかき集め、娘と手書きの保育再開のお知らせを配って歩きました。4月13日から通算8回、「千鶏あおぞら保育」を行ないました。はじめは、まさに「あおぞら保育」だったのですが、間もなく園児の家の作業場を借りての保育となりました。

その後、園舎を消失した千鶏保育所の閉鎖が正式に決まり、以降の千鶏地区における保育事業は5月より重茂児童館が引きうけることになった。地元の保育所を望む声は多かったが、それは叶わなかった。伊藤先生ご自身は、津軽石保育園に籍を置きながら重茂児童館に通い、移籍した園児たちの様子を見守って、6月1日付けで移動となった。

2　津軽石保育所では

(1)　津軽石保育所の状況

津軽石保育所も園舎が全壊するほどの甚大な被害を受けた。前述のとおり、千鶏保育所は津軽石保育所所長が兼任していた。震災当時の両保育所の所長・**坂本静枝先生**（昭和26年生）と現所長（＊取材当時）**盛合淳子先生**（昭和30年生）に話を聴いた（取材日：２０１４年3月19日）。

午睡時のパジャマ着替えをやめる

先に示した通り、9日に大きめの地震があり、その日、坂本先生は千鶏保育所で行われたお別れ会に出席していた。通常は午睡の時にパジャマに着替えさせていたが、坂本先生は、翌日の10日から念のため、上着と靴下だけを脱がして寝かせるようにしたという。このことが3月11日の避難の際に功を奏することとなる。

地震発生直後の様子

3月11日、午睡からそろそろ目を覚ます頃に大きな地震が発生した。保育所が市に提出した震災時対応の報告書には、発生当時のより具体的な記述がある[注(3)]。

「発生と同時に布団をかぶる等の身を守るよう指示し、安心感を与えるよう配慮しながら、身支度を整えるよう援助した。未満児組は[注(4)]、目をさましていない子もいたので、介助しながら園庭に集合後、背負ったり手をつないで高台に避難する」。（＊注は筆者による）

その際、非常持ち出しと緊急連絡簿を持って出た。その日は、欠席の2名を除いた園児53名が登所しており、7名の職員が勤務していた。坂本先生は、避難の様子を次のように振り返る。

子どもたちが服を着て寝ていたのが、避難時間の短縮になりました。園庭に待機している時点ですでに携帯は繋がらなくなっていました。防災無線が「大津波警報」と言ったのが聞こえました。避難しようとしていた矢先に「おしっこをしたい」と言い出す子がいて、トイレに連れて行ったところ、中が水浸しになっていました。水道管が破裂して、すでに水が上がってきていたのです。

園庭に戻ると、近くの人がフェンス越しに、「俺は前の津波を経験したが、あれよりすごかった。先生、すぐ逃げろ」と言ってくれました。このことがよかった。何人かお迎えに来ており、他の子たちをその間、園庭で待たせていたのです。それで、「すぐに行きましょう」となりました。

避難開始

園の避難マニュアルでは、公園（２０１４年当時の仮園舎があった場所）に一旦避難して、状況をみて小学校と一緒に行動することになっていた。そのように訓練してもいた。だが実際は、公園に一時避難するような余裕はない。近所の人が「学校はもう上に避難しているから上に行け！」と声をかけてくれたので、園庭からそのまま学校の裏の

高台（マエモリヤマ）に避難した。それでも、地震発生直後に避難したので、20分後には高台に行っていた。

マニュアルには、学校より上に避難するという想定はなかったので、それはとっさの判断でした。もともとお散歩の時に声をかけてくれたりしていましたが、あらためて近所の人の声掛けはとても大事だと思いました。津軽石の出身ではないので、地域の人たちの助言がなかったら判断できなかったでしょう。避難している間も子どもたちは誰も泣いたり、「おうちに帰りたい」と言ったりすることはありませんでした。

一時避難そして移動

高台に着いたら、近所の人がビニールシートを出して子どもたちを座らせてくれました。そうこうする間にも地域の皆さんが次々に避難してきました。上から見ると波が押し寄せて来るのが見えました。

その頃、ちょうど山の方で工事をしていて、そのための作業小屋が設置されていました。狭いけれど簡易トイレもあり、「そっちだったら寒さを凌げるから」と教えてくれる方がいて、作業小屋まで移動することにしました。学校の方々は作業小屋よりもっと上に避難していました。

小学校へ移動し夜を明かす

4時半過ぎに学校の皆さんが教室に戻ることになり、「保育所さんもどうぞ」と言ってくれたので、一緒に降りてきました。校庭の半分まで水が来ていました。そこで人数確認をもう一度して、開放してもらった畳やおもちゃのある2階の支援教室で、随時保護者の迎えを待ちました。教室に一緒に避難したのは、職員7名、迎えの保護者14名、園児47名でした。

余震がずっと続いたので不安でした。小学校にいる間、ここからさらに避難しなくてはならない時はどこに行くかと考えました。停電の中、ろうそくを立てて、子どもたちに寄り添い、おやつをあげるなどして、できるだけ子どもを不安にさせないようにしました。

学校の先生方には本当によくしていただきました。近所の人がバッテリーを出してくれて、保育所だけにストーブも焚いてくれました。非常用毛布も出してもらったのですが、それはあまり温かくなかった。運良く、たまたま職員の1人が近所に住んでいたので、毛布を持ってきてくれました。学校からも乾パンと水を少しいただきました。

7時過ぎには、炊き出しのおにぎりをいただきました。温かいおにぎりで、みんな喜びました。一番小さな子は疲れたのか、ごはんが出てくる前に寝てしまい朝までぐっすりと眠りました。

保護者のお迎えは本当に随時でした。10時くらいに山を歩いて来た方もいました。とにかく、子どもたちが不安にならないように、一緒にいるようにしました。1人の女の子が夜になって熱を出しました。その子のお母さんは仕事で不在だったため、おじいさんおばあさんが迎えに来たのですが、不安だったのでしょう。祖父母の車にあったもので額を冷やしたりしていましたが、夜中にお母さんが帰って来て一緒に寝てくれたら朝には元気になりました。

次の日の夕方、最後の子どものお迎えが来たので、職員も家に帰りました。

避難所生活

避難当初は、畳やおもちゃのある2階の支援教室を避難所として使わせてもらったのですが、翌日には下が見える方がいいだろうと、1階の教室を借りることができました。昇降口近くのお湯の出る洗面所もトイレも近いところで、その一角すべてを保育所だけで使わせてもらえました。特別待遇でした。被災毛布も水もすぐに届きました。また、下に敷く銀のマットが敷き詰める分欲しいとお願いして、23日までには役所が届けてくれました。

被害に遭ったお母さん

震災後1、2週間は、園児の安否確認に費やしました。津軽石保育所

では、お母さんとおばあさんが亡くなった兄弟がいました。お父さんに、「私たちがずっと子どもたちを預かっているので、お母さんを探してきてください」と引き受けました。次の日の5時、6時までその子たちと一緒にいました。

お父さんが迎えに来て、子どもたちが「ママは?」と聞いた時の光景が忘れられません。お母さんは、迎えに来る途中で何かを忘れて家に戻って亡くなったそうです。おばあさんも、足が悪いのでお家で流されたと聞きました。

学校を間借りして通常の保育を再開したのは、3月の最後の週になってからでした。

保育所の被害状況

保育所はもう、茫然とするような有様でした。高さ2㍍前後の波が押し寄せたため、建物は残っていましたが中身はひどかった。文集を積み上げ、飾りつけを済ませて卒園式を迎えるばかりだったのに、それらに泥が付いてぐちゃぐちゃになっているのを見ました。その時の気持ちは、ショックよりも不安の方が強かった。そして、保育道具の泥洗いや消毒には夏までかかりました。

震災以降にあらためたこと

あの日、小学校に避難している間、学校からさらなる避難が必要になったらどうするか、不安にかられた坂本先生は、後日、主任ともう一度近辺を見て回ったという。高い場所はあるにはある。だが今回は、たまたま明るいうちだったので高台への避難が可能だったが、日が暮れてからでは行くことはできなかったと推測している。

このほか、津軽石保育所では、震災時の反省を受けていくつか方針を変えた。例えば、

① **保護者への避難経路の周知を徹底すること。**

震災前、津軽石保育所では避難訓練は月に1度していた。この日にこういう設定で避難すると事前に告知する型の訓練である。津波の時は、一時的に（2014年現在仮園舎がある）公園に行って、さらなる避難が必要な時は小学校に行くという訓練をしていた。だが、現実はそうした訓練では意味がなかったという。

実際は、高台からさらに作業小屋に逃げたので、そのことを保護者に伝達することが難しかった。パターンを示したより具体的な避難マニュアルの周知を徹底しておけばよかったと反省しています。

② **無理をして迎えに来ず、保育所を信用してほしい。**

また、「すぐに迎えに来られないときも、必ず子どもは保育所の方で預かっている、という安心感を持ってもらうことが重要でした。それを、もっときちんと話しておけばよかったと思います。子どもを迎えに来て、亡くなった保護者の方がいたことをずっと心に抱えています。「その点は今後に活かさなければならない」と、坂本先生は語る。

③ **避難の迅速化**

さらに、午睡時に着替えで脱いだ服やズックを、震災以降は、さっと持って逃げられるように、保護者に大きめの布の袋を用意してもらい、それに入れるようにしたという。

(2) 孫を迎えに

次には、津軽石保育園に孫を通わせていた人の体験を記す。話をしてくれたのは、津軽石の**中島要一さん**（昭和7年生）と**ムツ子さん**（昭和23年生）である（取材日：2015年6月27日）。震災当時、中島家には保育所に通う2歳になる孫がいた。

11日の様子

3月11日、要一さんは日課の散歩をいつもより早めに済ませた。

（＊要一さんが）散歩の途中で堤防を見て、自宅に戻って何分もしないうちに、大きな揺れが来ました。（＊ムツ子さんは）、テレビで津波警報が出たことを知り、ガスを止めて「お父さん（＊要一さん）どこ?」と叫びました。寒かったのですぐにコートを着て、リュックを背負って長靴を履いたら、（＊要一さんが）「何も持たずに逃げろ」と言ったので、仏様もお位牌も持って出ることができませんでした。「仲良くし

ててね」と仏壇に手を合わせて表に出て、近所の人に声をかけました。でも、近所の人の中には逃げない人もありました。

孫を連れて逃げようと思い、まずは保育所に向かいました。孫はまだ昼寝から目覚めていなかったので、園バックを受け取り、起こして学校に連れて逃げました。それでも、まだ危ないので、さらに裏山に登ってお墓の右側まで避難したのです。

その時は、もう小学校の子どもたちがそこに来ていました。保育所の子たちは後から遅れてきました。保育所の他の親御さんはまだ来ていなかったです。学校の裏山の一番上に保育所の子たちを避難させ、その下に小学校の低学年、その下に高学年、その下に地域の大人たちが避難しました。なるべく高いところに小さな子どもたちを逃がしたのです。

波が来るのは見なかったです。地震が起きたのが、まだ昼間でよかった。

孫のおむつを取りに帰ってやりたかったのですが、近所の人が近くの家の人からもらってくれました。保育所の子どもたちは寒くてかわいそうだったので、近所のおばあさんが、後からリヤカーで布団や毛布を積んで持ってきました。

避難の夜

避難した高台から降りて来てからは、小学校でおにぎりを食べた後、孫を連れて親戚の家に泊めてもらった。震災の日の夜は、孫の母親は仕事で帰ってこられなかったが、両親が共働きなので孫は、いつも家にいるムツ子さんがいれば平気なのだそうである。

その翌日、父親が孫を迎えに来て、以降、西ヶ丘にある母親の実家のお世話になり、要一さんたち3人は、親戚や避難所で生活することになった。

3　愛宕保育所では

保育所には被害はなかったものの、愛宕地区は甚大な被害を受けた。震災当時、愛宕保育所に務めていた**舩越昌子先生**（昭和30年生）に話を聞いた（取材日：2015年9月17日）。

震災時は愛宕保育所にいました。今、振り返って問題だったと思うのは、園児を引き取った後の保護者の行先を確認することでした。愛宕保育所でも、あの日、おじいさんが迎えに来て、海辺の祖父宅で待機していた園児が1人亡くなってしまいました。安全な地域に帰す事が大事だというのが反省点でした。

保育所の隣が小学校だったので、情報を入手するため、まずは学校の校庭に避難しました。そこには地域の方や消防団の方もいました。

そこで、「危ないからもっと高台に行きなさい」という指示があったので、地域の方々と一緒にすぐ裏の高台に避難しました。子どもたちが「寒い寒い」というので、落ち着いた時に毛布を持って来たりもしました。

その後は、小学校の体育館に避難しました。保育所から茣蓙、布団、おやつなどを持って来て、少量ずつ分け合って子どもたちに食べさせました。雪が降ってひどく寒い夜でした。体育館に石油ストーブは3台くらいあり、灯りがあることは、子どもたちにとって何より安心できたことだと思います。

保育所に被害はなかったのですが、数軒先は家屋が倒壊、道路の中央に家が流されているなど、周辺はかなりひどい状態でした。保護者の中にも、家を失った方がありました。

迎えに来られた保護者の中には、波に追いかけられて怖い思いをした方もありました。暗い中、お子さんを連れて帰ると言うお母さんがいたのですが、被災している地域だったので、引き止めて、朝方帰宅されました。また、遠い地域からおばあさんが迎えに来られました。朝になってからの方がいいと引き止めたのですが、「連れて帰らなければダメだ」と言って帰られました。

結局、残った子どもは10人くらいでした。学校が避難所になっていたこともあり、市の職員・消防団員の方々にご協力いただきながら、一晩過ごしました。

次の日は、校長先生が教室を開放してくれました。少人数に分かれて各教室にシートを敷き、保育所から持ってきた布団を、地域の方にも提供しました。そうした状態で、夜間も余震があるたびにストーブの火を消しながら、朝を迎えたのです。結局、3日目の午前中まで、子どもを預かりました。

4日目からは、子どもたちの住んでいる地域の避難所を見回り、状況確認をしました。また、保育所で炊き出しもしました。幸いガスは使えたのです。水は、被災しない地域に住む所長が持って来てくれました。職員は小学校に出向いて、食事配布の手伝いもしました。

その後、被災した2世帯が体育館で避難生活をすることになったので、保護者が活動しやすいように、保育を再開しました。園児の食事は、おにぎりを提供しました。

4　小山田保育所では

(1)　地震発生当時の様子

小山田保育所が市に提出した当時の記録には、つぎのようにある[注(5)]。

「0歳児11名、1歳児23名、2歳児14名、3歳児28名、4歳児18名、5歳児13名、計107名

11日昼寝中、所長の指示で一旦保育室中央へ避難。揺れが収まった時点で着衣開始。大津波警報で公民館へ避難誘導。

職員の対応：寒さが厳しく毛布や職員の車を利用し園児の暖をとる。携帯ラジオで情報収集。保育所門扉に公民館に避難していることを掲示。迎えが来た時点で保護者へ引き渡す【名簿チェック】炊き出しの手伝いと児童引き渡しと保育　臨時職員帰宅（午後7時30分）正職員公民館へ泊り残った児童の保育と安全確保。指定の職員2名駆けつける。

12日開所するが利用なし　4名利用（避難所にいて帰れなかった?）給食⬇避難所のおにぎり&即席みそ汁　保護者引き渡し、児童の安全確保、保育所点検、正職員9名午後4時帰宅

栄養士、臨時保育士2名、通勤道路の安全確認取れず避難所泊　状況把握のため、正職員1名宿泊

避難所で親子2組（児童4名）職員3名宿泊　公民館灯油不足にて保育所から持ち出し

13日2組親子へ保育所開放歯磨き、シャワー、昼寝など　避難所より昼食を運ぶ、給食⬇避難所のおにぎり&即席みそ汁　午後4時過ぎ小山田公民館から磯鶏小学校避難所へ移動

14日　通常保育開始　利用15名　給食献立変更して提供　食材購入状況把握のため徒歩にて業者回り実施」

当時、小山田保育所の職員であった**上山純子先生**（昭和35年生）は、次のように話している（取材日：2015年9月17日）。

私がいた2階の部屋の揺れはひどくて、ホールを部屋として使っていたのですが、ホールの真ん中までテーブルが動いて、机の引き出しがすっかりあいてしまっていました。もし、引き出しに重いものが入っていたら、テーブルもひっくり返っていただろうと思いました。

揺れの中を上から子どもたちと一緒に降りてきたのですが、子どもたちが異様に静かで、指示が1回で通ることを異常に感じました。

その後、防災無線で津波が何メートルと言うのが聞こえてきました。すぐにいち早く迎えに来た保護者の方があったのですが、その時にはどこに帰るかを聞くことはなく帰してしまいました。後から聞くと、津波に追いかけられた経験をされた方もいました。

近くの公民館にみんなで避難しましたが、海側に住む保護者が多くおり、その日は公民館に泊まりました。

夜中になって、ずぶ濡れでお父さんお母さんが迎えに来られたり、自宅の屋上に避難していて水が引くまで迎えに来られなかった方がいらしたりしました。次の日のお昼になってようやく最後の方が迎えに来られました。

幸いショッピングセンターや薬王堂（ドラッグストア）が保育所のすぐ近くにあったので、すぐに食べ物を持って来てくださり、カセットコンロやカップラーメンなどもいただきました。

狭い公民館の中にすごい数の人が避難しているので、トイレが大変でした。

次の日に保育所に戻ってみると、園庭に隆起して段差ができていたり、側溝の蓋がはね上がってはまらなくなったりしていました。

涌田朋子先生（昭和32年生　取材日：２０１５年9月17日）は、十勝沖の地震の時に津波を見ているので、津波がどういう風に来るかという記憶がある。そのため、閉伊川伝いに津波が上がって来るだろうことを知っていたので、保育所がある場所も危険だと、とっさに思ったという。洪水が起これば、浸水する危険がある地域でもあったからだ。

付近で高台といえるのは公民館で、そこに１０７名の子どもたちが避難しました。50名近くもの未満児もいたので、小さい子どもたちの安全を確保するために、本当は戻ることはよくないと知りつつ、急いで園に戻り毛布をかき集めて来ました。また、雪がちらついていたので、職員の車を高台に上げ暖をとれるようにしました。すぐには公民館のカギは開かなかったのです。

近くの病院の先生も協力してくれました。また、少しでも口に入れるものを手に入れることができたのは、地域の方々のおかげでした。

小山田橋を渡って迎えに来る保護者もいたので、どちらに戻るか確認をして、「そこが大丈夫だという警報解除の知らせが来るまでは一緒にいましょう」と足止めをしました。結果的にはそれがよかったと思います。

下の子の検診の日で保健センターにいた保護者は、津波に追いかけられるように逃げたそうです。上の子は園にいたので保育所のみんなと一緒に逃げました。

携帯のワンセグを持っている人に少しは見せてもらったのですが、ラジオもなく情報が入って来ないということがすごく不安でした。また、見たら見たで怖いのでしょうが、目の前には体育館やドラの建物があり、自分達の目で川の状態が見えないことも不安でした。

とりわけ、明かりもなく見えないというのはすごく不安でした。明かりの強いライトを地域の人が持って来てくれて、それで公民館をぽわーっと照らしました。でも、十分な数の懐中電灯を園で準備しておかなかったことを反省しました。暗いということは、子どもたちに不安を与えるからです。

子どもたちに暖を取らせるのに必死だったのですが、車を上げたことも、良かったのかどうかわかりません。

後日、もっと高い避難先を探して、小山田神社という市内を見下ろせるところへ避難訓練をしました。その際、どのくらいの速さで行けるかを計りました。参道のような急なところに誘導車[注(6)]を上げるのは非常に困難でした。また、急な階段をおんぶして上がるのは、危険だということもわかりました。

震災後に、防災グッズとして、保育士1人で3人の子どもを負ぶえる負ぶい紐が売り出されましたが、「どうしてこういうものを作ったのかな」と感じました。保育士さん方からの要望に応えてということですが、1人で前と後ろに子どもを負ぶってどうやって逃げるのだろう？子どもを助けたいという思いで、必死になればできるかもしれないけれど、園の立地条件もあるだろうし、なにか違う方法はないのかと思いました。

インタビューの際、震災時をふりかえり、涌田先生は保育士という仕事について次のような心情をもらしている。

すごく重いなと感じます。保育士一人ひとりにのしかかる責任、命をあずかることの重さというのが。そこまで私たちは期待されているのかと考えた時に、保育とは、大変な仕事だなあと思いました。

(2)　その時、母親は　小山田保育所に迎えに行く

ここで、小山田保育所へ市街地から子どもを迎えに行った母親たちの行動について記しておく。

日立浜の**村木めぐみさん**（昭和48年生　取材日：２０１５年3月7日）は、あの日は、藤原にある自社の水産加工工場で働いていた。

地震発生

地盤は砂地なので大きく横揺れしました。2月から余震が続いていました。揺れが来ると刃物を使う作業をやめて待機、おさまったらまた作業を続行していたのですが、3度目の揺れの時は気持ちが悪くなるほどだったため、工場の外に出たら、車も揺れていました。

父が2階の事務所から外を見て、「川の底が見えるから貴重品をもって避難所に逃げろ」と指示しました。従業員たちはもう走っていました。すぐに車で保育所に迎えに行きましたが、信号が落ちてひどい渋滞となり45号線が渡れませんでした。

急ぎ小山田保育所へ

下の子の迎えに早く行かないと交通規制がかかると思い、急ぎました。小山田保育所では先生が避難所の公民館に誘導してくれました。

坂の上の公民館の駐車場に、子どもたちが固まって待機していました。山方面の人は帰れたのですが、海方面の人はそこで待機することになりました。保護者の1人が交通規制にひっかかり戻ってきました。

近所の人もだんだん集まってきました。車のエンジンをかけて中に園児を入れて暖をとりながら公民館が開くのを待ちました。

子どもたちは、保育所から持ち出したおやつのバナナを食べたりして落ち着いていましたが、暗くなってくると「お母さん」と泣き出す子もありました。

避難先の公民館で

ようやく公民館が開放され、2階には若い人や子どもが入り、1階のトイレの近くにはお年寄りが入りました。お湯を沸かしてカップラーメンやおにぎりなど温かい食べものを提供してもらいました。

夜になると、避難してくる人が増えました。ドラや薬王堂が提供してくれたペットボトルの水が下の階にたくさん持ち込まれていました。石油ストーブもありました。困ったのはトイレでした。水洗が使えないのが一番困りました。また、暗いのを子どもたちが嫌がるので、集団でトイレに行きました。

頻発する余震のたびに石油ストーブの火を消しました。大変なので3人が順番で消しました。毛布が足りず、ストーブだけでは寒かったです。

だんだん親たちが迎えに来ました。もう、車では来られません。あるお母さんは、夜中に藤原から小山田まで歩いて迎えに来ました。「子どもいませんか?」、「孫いませんか?」、「お母さんいませんか?」と、公民館に尋ねてくる人が多くなって来ました。

鍬ヶ崎が全滅だという情報を耳にしました。日立浜もダメだろうと思いましたが、いやな予感はしなかったので、息子は心配ない。学校の先生が守っていてくれると信じていました。

明るくなってから行動しようと思っていました。小山田トンネルは交通規制がかかり車では通れませんでした。お昼まで様子をみて、車を流された同級生の妹親子と、もう1人の友達と一緒に車で鍬ヶ崎に向かうことにしました。朝食は出入り口にパンやおにぎりや水があり、食べ物には困りませんでした。

5　赤前保育園では

赤前地区にある赤前保育園では、あの日、2月末に完成したばかりの新園舎で年長組10名と園長、理事1名、事務職員2名、保育士2名の計6名が卒園式の練習をしていた。0歳から年中の子どもたち49名は、仮園舎として使っていた赤前小学校のすぐ上にある漁村センターでお昼寝の最中だった。仮園舎には職員が8名いた。

園長の**小関憲一先生**（昭和29年生）と、主任保育士の**佐々木未緒先生**（昭和61年生）に当事の様子を聞いた（取材日:2015年7月24日）。

まず、お昼寝中の仮園舎の方は、揺れが大きかったので、布団を被せて身を守り、揺れが収まってから避難準備を始めた。園では、ずっと以前からお昼寝時にはスモックと靴下を脱ぐだけで、パジャマに着替えさせていない。非常時を考え、迅速に行動するために必要なことだと考えているからだ。

全員が園バスに乗り込み、近くの赤前小学校に避難した。その後、職員が交代で仮園舎に戻り、お菓子や飲料、子どもたちの上着などを運んだ。仮園舎は、老朽化していたため、屋根の一部が落下し、2階の天井が落ちたが、幸い園児にも先生たちにもケガはなかった。

赤前保育園の園舎は、赤前地区の避難場所に指定されている久保田山の麓に建設されている。その地は、そもそも津波経験者を含む建設委員会のメンバーが、津波を想定して他に複数候補地がある中から選定された場所である。そのため、震災前は、津波の危険よりも火事の危険の方がより現実味があったという。

しかし、今回の地震はあまりにも大きかったため、念のため新園舎にいた子どもたちを久保田山へ、園の前の道を通って避難させることにした。園の隣の工場の人たちもそこへ避難していた。卒園式の練習のために一時的に新園舎に来ていたので、上着を着ていない園児もおり、工場の人が上着を貸してくれた。

「現実味があまりなくて、時間的な感覚もなく、どれくらいそこにいたか時間はわからない」と佐々木先生は話されているが、暗くなる前までは山にいたという。子どもたちは、いつもより大人しかったが、落ち着いていて、1か所に集まって話をしたりしていた。眼前の状況を見て涙を流す工場の人を見て、不思議そうにしていた子もいたという。

連絡がとれず、防災無線もよく聞こえないので、仮園舎の方の様子はわからなかった。そのため、園長が仮園舎に向かい、最終的に無事に全員が合流することができた。

中には、津波が来る前にお迎えが来た子もあり、その都度対応して引き渡していたが、その時にはまだ、津波の危険性を考慮していなかったという。幸い、皆無事であったが、園からは海添いの道路を通らなければならず、保護者も一緒に逃げるべきだったと、園長たちは振り返る。

そのため震災後は、一緒に避難するように避難マニュアルを改めた。加えて、保護者に向けて災害時の連絡マニュアルを作成配布し、災害用の掲示板を設けて一斉にメールを送信する体制も整えた。

また、震災後、園庭からそのまま山に逃げる避難路を作った。現在は、そこに誘導灯やロープを取り付け、年に2度、草刈りなどの整備を行っている。子どもたちは、普段、遊んでいる慣れた道を通って避難することになる。

さらに、震災時、隣接する工場ばかりでなく、近くの工業高校の生徒たちも園前の道を通って避難することがわかり、こちらとも避難の際に園児の引率に協力してもらえるような関係を築いているそうだ。

「震災の記憶を風化させないために、何より伝えていくことが大切です」、と園長は言う。「園児にも大きな地震が来たら山に行きなさい」と常々伝えており、県外からの視察も積極的に受け入れ、所属する保育団体などでも話をしている。

6　宮古保育園では

市内中心街にある宮古保育園は、園舎に水が入り、半壊だった。**鈴木哲夫園長**（昭和10年生）は、避難訓練に力を入れている（取材日：2015年7月25日）。

あの日の午前10時に地震発生を想定した避難訓練していた。そのため、子どもたちは怖がらずに避難できた。「あらためて訓練の大切さが身に染みた」という。

震災時の行動

宮古保育園は、常安寺保育園と姉妹園で、いずれも理事長は常安寺住職である。第1避難所は常安寺保育園で、第2避難所は宮古小学校になっている。常安寺保育園には備蓄品の準備がある。

地震発生時は、子どもたちはまだお昼寝中でした。電気が落ちたため、避難指示の放送ができない。揺れでまっすぐに歩けない。（＊園長は）大声を出して子どもたちを起こして、寝間着のまま園庭に出すように指示しました。建物が崩れそうなくらいの揺れでした。

すぐさま宮古小学校に避難を開始しました。寒いので履物と上着を中にとりに行かせたかったのですが、このあたりでは「地震で外に避

難したら戻らない」というのが鉄則です。今回の地震では、そうした教訓が忘れられたゆえの被害が多かったのです。

「あれほどの揺れであれば、津波は来る。」園長にそう確信させたのは、仙台の科学博物館の地震体験だった。それで津波警報が出る前に避難を始めることができた。

小さい子はベビーカーに乗せました[注(7)]。道路の真ん中に(＊園長が)立って車を止めて、子どもたちを渡らせ、「とにかく高いところに行こう!」と言いました。最終的に常安寺保育園に行くというのが頭にありましたが、「高いところ高いところ」と言ったのです。道の選択もそれが基準となりました。

学校では、電気も暖房もなく、子どもたちは寝間着のままだったので、学童の家で毛布を借り、落ち着いてから常安寺保育園に向かいました。

避難の際、「引き渡し緊急連絡簿」だけは保育士が持って出ました。宮古小学校に迎えに来た保護者に何人か引き渡しました。最終的に子どもをすべて帰し終えたのは夜の8時でした。

ただ、園長が今でも反省しているのは、職員を現地解散としたことだと言う。車は皆流されていたし、道路が分断され結局自宅までたどり着けない職員が複数いた。中には家を流された職員もあった。

被害の大きさを知ったのは、翌朝になってからでした。保育園に来てみたら、ヘドロが園庭を埋め尽くしていました。園舎は1メートル30センチ水に浸かりました。壁とドアの桟やガラスはそのままあったのですが、排水溝から水が入り、中はぐちゃぐちゃでした。

地震が起きて3日目に「半壊」の判定を受けました。また、全国の私立保育園連合からの支援で、園庭のヘドロの除去をして、放射性物質や、ヘドロによる破傷風の心配もあったので、30センチ掘ってオスバン(＊消毒液)を撒き、花輪の砂を持ってきて土の入れ替えをしました。6月の園再開を目指していましたが、5月の連休明けになぜか銀バエが大量に発生しました。床を乾燥させて、11月7日に、園での保育をようやく再開できました。

それまでは、常安寺保育園で一緒に保育をさせてもらいました。運動会も合同で行いました。ありがたかったのは、保護者から苦情がでなかったことで、ずっと、宮古保育園での保育再開を待っていてくれました。

7　そけい幼稚園では

磯鶏地区の中でも海寄りにある、そけい幼稚園では、園庭に水が入り、園舎の一部が床上浸水の被害を受けた。**晴山洌理事長**(昭和9年生)と、**晴山正子園長**(昭和16年生)のお二人に避難の様子と園の被害状況について話を聴いた(取材日：2014年3月20日)。

3・11の様子

地震発生当時、預かり保育の子どもが33人いました。中には、下の子が病気で、上の子を預けて宮古病院に行き、被災してそのまま3日帰れなかったお母さんもありました。安否確認ができずにいて、とても不安だったと言っていました。

揺れが収まってすぐに、磯鶏小学校への避難を開始しました。すぐに子どもたちを外に出して、先生たちが防寒着を抱えて逃げたのが、準備時間の短縮になってよかったです。それは、避難訓練でも行っていました。小走りで大人なら8、9分、子連れでも12、3分という距離です。小学校の手前の磯鶏修道場まで逃げれば、安全だと判断しました。小学校に通じる「わむら公園」の脇の道は、急ですがすぐに高台に出られます。逃げる最中に、一緒になった近所の人たちが、そちらの道を勧めてくれたのですが、先頭を走る園長がそちらを見ると、雪があり、子どもたちを連れては滑って容易には歩けないと思ったので、修道場の前の道を行くことにしました。とっさのことでしたが、長く磯鶏に住んでいるので、どの道を行くべきかすぐに判断できました。

ただ、前を向いて走ったし、避難しながらも、津波が来るとは半分は信じていなかったのですが、職員も全員助かりました。子どもの安全だけを考えていました。何があっても決して津波の来る方向に戻っ

てはならないと思っていました。

日頃、保護者には、避難が必要な時に幼稚園に来ないでほしい、とお願いしていた。だが、幼稚園まで車で子どもたちの避難先を聞きに来た方もあった。理事長は誘導するため園の前に1人残った。

園と市民会館前の間の路上で待機して、保護者を磯鶏小学校へと誘導していました。最後のお母さんを見送った時に、津波が迫ってきました。津波は市民会館の建物の中を通って、西側入口ドアを突き破り、大きな音とともに吹き出し、幼稚園を挟むかたちで道路を回り込んで来たのです。

私は、園庭を突っ切って走って逃げて、線路近くで最後の避難者が運転する軽トラックに乗せてもらい、間一髪、生き延びることができました。

避難先で

小学校まで避難したものの、余震が激しく続く間は、危険なので校庭にいました。すごく寒かった。しばらくして余震が少しおちついてから体育館に入りました。地域の人たちも、たくさん避難して来ていました。地震直前まで体育の授業で椅子を使っていたようで、体育館の中には椅子が散乱していました。園児たちは、余震が来るたびに椅子の下にもぐって頭を守りました。常日頃、この訓練をしていたからです。無事に避難できたのは訓練の賜物でした。

理事長も園長も、「子どもたちには、言葉で理屈を説明するよりも、身体で覚えさせるのが何より大事だ」と、口を揃える。そけい幼稚園では、毎月火災か地震かを交互で訓練をしている。また、季節によっても訓練の内容を変えている。夏は「中ズック」だけでも平気だが、冬は体温低下を防ぐために防寒着や靴がいる。防寒着を抱えて逃げるので、時間もかかる。

11日の夕方までにほとんどの子が保護者に引きとられました。夜になっても残っていたのは7、8人でした。毛布を近所の人が貸してくれたりもしましたが、寒いし、このまま体育館で夜を過ごすことはできないと判断しました。幸い、学校の近くに親戚の家があり、そこの温かい部屋で夕食を出してもらいました。一番遅くまで残っていた1人は、次の日の朝9時頃にようやく迎えが来ました。

また、父親と連絡がずっと取れず、不安で落ち込む母親を3、4歳の子が気丈にも「お父さんは強いから絶対に帰ってくる」と励ましていたと、後になってから聞きました。

災害対策は万全に

そけい幼稚園で話を聴いた中で印象的だったのは、災害に対する準備を徹底している点である。園長は、阪神大震災の2年くらい前に、もし大きな地震が来たら子どもたちはどうするだろうと思って以来力を入れてきたという。

迎えは警報解除のあとで

震災後、園の方針として大きく変えたのは、引き取りの方法である。津波常襲地域では、避難前に保護者に引き渡しをすることは命取りだとわかった。

そけい幼稚園でも震災後は、「まずは保護者が自分の安全を確保し、警報が解除されてから直接避難所に迎えに来てほしい。その間は、園が子どもの命を必ず守るので、信頼してほしい」と、周知を徹底している。

8　商業施設「キャトル」内「つどいの広場すくすくランド」では

街の商業施設に子どもと来ていて地震に遭った人もいる。

駅前にある商業施設「キャトル」の5階（最上階）には、社会福祉協議会が運営する「つどいの広場すくすくランド」がある。ここには、おもちゃや絵本などが用意されており、多くの親子が遊びに来

る。地震発生時の様子を元職員の方（昭和35年生）に聞いた（取材日：2014年7月17日）。

3・11の様子

通常、すくすくランドでは、平日の午前中はたくさんの利用がありますが、午後は、それほど利用者は多くありません。地震発生の直前に、4歳と2歳の子を連れた母親が来館しました。父親の転勤で宮古に来ている家族で、頻繁に施設を利用していました。

地震が発生した時、職員3人と親子3人は全員かたまって、すぐに廊下に出ました。長い揺れでした。キャトルの職員も合流しました。コインロッカーが倒れて崩れて、大きな音がしました。恐怖のあまり子どもが泣き出すと、母親も泣きだしました。地震の揺れが収まるまで皆で丸くなって、「大丈夫」とお互いに声を掛けあい、励ましあいました。

その後、階段で1階まで下り、キャトルの隣にある駐車場に出ました。店長の誘導でスーパーの買い物客たちも集まっていました。

津波が来るという放送があったので、先ほどの親子を車まで送りました。親子ははじめ、市役所の方面に逃げようとしていたので、海や川から離れて盛岡方面に向かうよう誘導しました。

自分たちは、「いっせきさま」（館合近隣公園）に避難しました。キャトルから一番近くにある高台です。高台から閉伊川に津波が上がるのを見ました。街の方も交差点まで水が来ていました。警察がゴムボートを出していました。しばらくして、寒そうにしている人がいたので、「すくすくランド」に毛布を取りに戻り、提供しました。

運営再開まで

キャトルが営業を再開したのは、4月半ばだったので、すくすくランドの職員は、各地の避難場所を回って、絵本の読み聞かせや遊びをしました。

震災後、施設がオープンした当初は、利用者の多くが被災していない人でした。当時、被災した人には、施設まで子どもを遊ばせに来るような余裕がなかったのではないかと思います。

多くの店が津波に流された中、キャトルは早めに営業を開始しました。そのため、土日になると大船渡や大槌方面からもお客が来て、すくすくランドを利用しました。市外から訪れた母親たちは、「まだ宮古は遊べるところがあっていいね」と言っていました。

9　田老地区の状況

(1)　田老保育所では

以下は、田老保育所が役所に提出した報告書からの抜粋である[注(8)]。

「3月11日

年長組卒園に向けての製作中。年中、年少、未満児組午睡中。子どもの安全確認。午睡から目覚めさせる。泣きださないように声がけしながら着衣の介助。防寒着着用し、児童玄関に集合点呼。迎えが来た子は確認をし引き渡す。園舎回りの安全確認。第3避難所（田老公民館）へ誘導。誘導途中、迎えあり返す。田老一中校庭で一息つき、点呼。ゴーゴーと大きな音、〝つなみ〟の叫びに山の斜面に向かって走るよう声がけしながら誘導。山の斜面を押し上げ、中学生の協力を得ながら高台へ。お寺の墓地に避難させる。中学生、一般の方々と様子を見守る。子どもたちには声をかけながら、シート毛布で暖を取るようにし待機させる。日没と同時にお寺の一室を保育所用にと提供していただき、子どもたちに休息をとらせる。座布団、毛布、ストーブで暖をとり一夜を明かす。夜中、明け方と保護者も一部合流。27名　保護者4名。周辺の様子情報の確保に努める。保育所全流出。保育所への迎え引き渡し50名。避難途中、中学校校庭30名。」

「3月12日

夜明けとともに保護者の迎えが来る。個々の状況を聞き次どうするのかを聞いて引き渡す　朝食2人で1個のおにぎり。地震と津波警報発令にて外へ。前日の墓地へ避難する。裏山の火災で消火の準備になり本部長の指示のもと、線路を歩いて北高校へ避難。夕方に最後の子の迎えあり。北高校職員の炊き出しの手伝いをする。今後について話

をし。2泊目。北校へ移動時4名3世帯。」

短いながらも緊迫した田老保育所の避難の様子がわかる資料である。また、当時、田老保育所に勤務していた保育士の**外舘恵子先生**（昭和32年生）の証言も得ることができた（取材日：2015年9月17日）。

田老保育所は、被災して跡形もなくなってしまいました。まさか、あんなに大きな津波が来るとは思っていませんでした。

田老は、津波に敏感な地域なので、通常の避難訓練のほかに毎月1回「安全の日」を設け津波から走って逃げる訓練をしていました。私は、その年に赴任したばかりで、正直、なんでこんなに走るの？　という気持ちがありました。しかし、4月は年長児で5分近くかかっていたのが、3月には1分ちょっと、未満児でも3分くらいで高屋敷避難所に着くようになっていたので、震災時に「安全の日」の効果が出て助かったと思っています。

以前の避難場所は、それ程高台ではない民家のある場所だった。トイレ等を貸してくださいと協力はお願いしていたものの、毎月の反省で「なぜ、避難所がこの場所なのか?」と、疑問の声が出ていたと言う。そこは、「園舎が川沿いにあるので、津波は川を上って来るから、すぐ前の橋を渡るのは危ない。とりあえず山際の方に行って、そこから別の場所に行く」という指導があって選定した場所だった。

先生も「なぜ、海の方に向かうのかな?」という思いが常にあったそうである。その避難場所は山際にあったのだが一旦海側に向かう道路に出なければならなかったからだ。

そうした中、田老保育所では3月の避難訓練の設定を担当者が考えることになった。

当時、主査の私が担当でした。震災のちょうど2日前の9日の朝に、「公民館（田老一中隣）まで逃げたことがないので、行きたいと思っている」と所長に話したところ、その昼に注意報が出たので、いつもと違う場所（公民館）に避難してみようということになりました。

実際に避難してみると、そこは屋根もあり、広くて、人もいて、安心できる場所でした。また、時間的にも15分くらいでそれ程遠いと感じませんでした。途中の国道の手押し信号は、4列でも6列でもいいから1回の青信号で渡るようにしようなどと、職員間で話しました。そのため、大震災の時も「公民館だよね」と、迷わずそちらへ逃げました。

そして、公民館隣の中学校の校庭入り口で一息ついていたら、「津波だ!」と声が上がりました。振り返ったら、もう津波が来ていたので、あわてて校庭を走って山際まで行き、避難誘導車から子どもたちを下して、山を駆け上がりました。途中で中学生の助けを借りながら、子どもたちの手を引いて、道のない山を登ったのですが、そこは初めての所だったので「この山の上はどうなっているのだろう?崖ではないかな?」などと、不安でした。そのため、「転勤したら早い時期に公共の建物だけではなく、地図上でも山の位置など知っておかなければ」と、反省しました。

防災用品の備蓄については、以前から、大きな登山用リュックに毛布やブルーシートなど色々なものを入れて避難訓練などの際に、給食担当者や保育士が背負って逃げる練習をしており、役割分担をしていたので、震災の時も、指示を待たずともそれぞれ背負って避難しました。当日は寒かったので毛布があることで助かりました。震災後は、持ち物を見直して、その時足りなかったもの（懐中電灯やロープ、軍手など）を入れています。

(2)　その時、母親は

千鶏・津軽石地区でも問題になったことであるが、次には、町全体が避難する中、園児を引き取った後の母親たちが、その後どのような行動をしたのかを田老の事例から2例紹介する。

①　赤沼山に避難

田老で育ち子育てをしている**花輪香代子さん**（昭和48年生　取材日：2014年7月16日）は、4人の子どもの母親である。

3月11日、上の子2人は小学校に、その下の子は児童館に、花輪さんは末の子と2人、館が森の自宅にいた。末の子がお昼寝をしている時に大きな揺れが来た。「物が落ちるし、コーヒーも溢れるし、テレビもすごい揺れだったので、おかしいこれはヤバイ。絶対津波が来る」と思ったという。

児童館に引き取りに行く

その後、児童館にいたママ友から引き取り要請の連絡を受け、すぐさまオムツを替え、子どもと貴重品を入れたリュックだけを車に乗せて児童館に向かいました。自宅から小学校までは、1・2キロ、児童館までは2キロないくらいの距離です。貴重品の入ったリュックは、2日前の地震の際に、なんとなく嫌な予感がしてまとめておきました。

途中、親戚のおじさんが「どこ行くんだ?」と声をかけて来ました。「じゃあ、もう迎えに行ったならそのまま北高に行って帰って来るなよ、津波来っから」と言われました。

なぜか戻ってきてしまった

でも、そのまま北高の方に逃げればいいのに、なぜかなんとなく家に戻って来てしまいました。貴重品の入った荷物も持って来ているから、家に戻ることはなかったのに。今思えば、少しでも小学校にいる子どもたちの近くにいたかったのだろうと思います。

車から降りたら、先ほどのおじさんがまだそこにいて、「なんで戻って来た!家に入らないでそのまま、赤沼山に上がれ!」と言われました。すぐさま末っ子を抱いて、上の子の手を引いて山を登りました。おんぶ紐を持っていなかったので、ずっと抱いていなければならず、大変難儀しました。

高台に避難する

高台に着いて、5分もしないうちに、サカベ山の方の波がどんどん減って行くのが見えました。しかし、子どもたちは薄着だったので、寒がっていました。服を取りに戻ろうかと一瞬思ったのですが、「津波の時は戻るな」と言われるので迷いました。

そのうちに、波が堤防を越えて襲って来ました。津波に呑まれて自宅が流れていくのを見ました。気が付くと上の子が、ママ友たちについて奥のお墓の方に走って行ってしまいました。怖かったので、少しでも高いところに行きたかったのだと思います。何も持ってないのに。子どもの物のことばかり考えていました。しばらくして、諦めて、上の子のいる方に向かいました。

うす暗くなってから、赤沼山からさらに役場に避難して、一晩過ごしました。小学生の子どもたちは、先ほどのおじさんが自分の孫と一緒に引き取って連れて来てくれました。津波で自宅も車も失いましたが、おかげでその日のうちに家族全員が無事に合流することができました。その晩は、家が無事だった人から差し入れてもらったおにぎりやおむつなどを、役場に避難してきたママ友たちと分け合いました。

その後、北高が避難所になったので、役場から移動することにしました。線路を歩いて行きました。子どもにおにぎりを2人に1つもらったのですが、子どもは食事をとりませんでした。ペットボトルの水を、キャップに1杯ずつ分け合って飲みました。1歳の子は、まだ母乳を飲んでいたので、本当にありがたかったです。ぐずり始めたときにも含ませておけばいいので。

支援物資は、4日目くらいから少しずつもらいました。また、避難所にいたときは、ママ友たちの間で情報交換をしていました。

育ての親の遺体確認

堤防の内側に住んでいた育ての親（おばさん）とその娘さん夫婦が津波に流されてしまいました。脚が悪いので、車に乗って避難しようとしたところに波が来たらしいです。おばさんのもう1人の娘さんと一緒に遺体の確認をしました。おばさんの娘さん夫婦のご遺体は川の向こうで見つかったのですが、おばさんはまだ見つかっていません。

② 中学校裏山に避難

田老の**前田恵美さん**（昭和44年生）は、震災当時16歳だった子どもを筆頭に6人の子どもの母親である。あの日は、子どもの1人を田老児童館に預けていた。児童館へ引き取りに行った後の行動を聞いた（取材日：２０１４年7月16日）。

3月11日の避難の様子

3月9日の地震の時は、注意報だったので逃げなくてもいいと思ったのですが、11日の時は違いました。地震直後に下の子どもたち（当時3歳と1歳）を連れて、その上の子を引き取りに児童館に車で行き、すぐに小学生の子たちを迎えに学校に向かいました。

ちょうど、下校時間だったので、小学生たちは校庭に待機していました。同じく小学生の甥と姪たちも引き取り、自宅のあった館が森に近い出羽神社に避難しようと思ったのですが、国道は混んでいるだろうと考え、山側の道路を第一中学校まで向かいました。堤防の方を見たら、もう波が水煙を立てていました。

すぐに、中学校の校門前に車を乗り捨てて、小さい子どもを抱いて上の子たちを走らせて、間一髪、中学校の裏山に逃げることができました。中学生たちも既にそこに避難していました。避難する際、腕に抱いた子どもが重くて、持ち出したバッグを1つ捨てました。途中で出くわした田老病院の看護師さんに下の子をお願いして、なんとか上まで上がることができたのです。

その後、「もっと後ろに下がれ」と言われたので、お墓の方まで行きました。

避難先での夜

前田さんたちはお寺に行ったものの、既に人でいっぱいだったので、役場に移動することにした。

宮古商業高校に通う一番上の子は、高校が大丈夫だと聞いたので、いずれ会えるだろうと思っていました。

役場の事務所の3階で、花輪香代子さんたちと隣どうしになりました。その晩もらったおにぎりを半分ずつにして食べました。いろんな人が子どもたちに気を使ってくれて、飴やお菓子をくれました。

家を出るとき、おむつを片手でつかめるくらい持って出たので、花輪さんにも数枚分けました。事務所に保存していたナプキンをもらって、おむつにはさみ、おしっこをする都度それを替えました。おむつを1日1枚と決めて大事に使いました。

津波を振り返って、前田さんは次のように話す。

まず、津波は来るものだと思って、すぐに逃げるようにしないといけない。特に、子どもが海に近い低いところで遊ぶ時などは気を付けなくてはなりません。もしもの時のことを、家族で話し合いをしておくことが重要だったと思います。

小さい子どもがいるお母さんは、抱っこ紐はすぐ使えるようにしておいた方がいいです。走って逃げる時に抱っこ紐がなくて困ったからです。

さらに、学校では、たまに裏山に逃げる訓練をしていたものの、津波への対策はこれといってしていなかったように思います。また、注意報の時の対策について、家に帰すか帰さないかの判断基準がありませんでした。中学校の先生は帰さないと判断して、いち早く子どもたちを避難させました。中学生の子どもは、あの日、学校があったから命が助かったと思っています。高校生の子どもも家にいたら、たぶん逃げなかっただろうと思います。

10　避難の必要がなかった施設では

では、地理的に津波の影響のなかった保育所では、あの日、どのような状況で、どのような対応がなされていただろうか。

(1)　佐原保育所では

震災時、佐原保育所に勤務していた**涌田広重先生**（昭和33年生）は、3月11日を振り返り、次のように話している（取材日：２０１５年9月17日）。

保育所は、地形的にはまったく津波などの心配のない場所ではあり

ました。でも、他所もそうですが、園舎がかなり古く、2日前と11日と大きな地震が続いたので、当時の所長は、園舎が壊れたらどうしようかと、心配したと話していました。

また、その時は、もう必死だったので、子どもを引き渡す時に、どこに帰るか確認をとったかどうか、記憶があいまいになっています。

その日の最後の方のお迎えで、「自宅の2階まで水が入った」と言って来られた保護者がいて、その時点でようやく、今までにないような津波が来ているんだな、という状況がわかりました。

同じく、A先生（50歳代）も、「3月11日の地震の後、いつものマニュアル通りに地震時の対応をしました。地震後に2世帯が迎えに来られました。1人は鍬ヶ崎からでした。でも、その時は、まだ津波という意識がなかったので、どこに行くかという確認はしていませんでした。

そうこうしているうちに、被害を受けて、家が流されたなどの情報を持ちながら、保護者が迎えに来られるようになりました。それで、避難所に行くということでした。布団がないので、午睡用に保育所に置いている布団を受け取りに来たという、ご家庭も何軒かありました」と話している。

結局、すべての園児を保護者の元に帰すことができたのは、次の日の朝、8時過ぎだった。

(2) ひかり幼稚園では

森分和基園長（昭和51年生）によると、岩手キリスト教学園ひかり幼稚園（取材日：2015年9月18日）では、3月11日は、午前保育だったので、11時30分に降園になった。震災時、幼稚園にいたのは、預かり保育で残っていた10名以下だったが、直ちに園児それぞれのロッカーの中や、テーブルの下に身を隠すよう指示した。

そして、16時から17時までには、無事に保護者への引き渡しが終わったそうである。共働きの家では、祖父母が迎えに来たが、孫がいるから避難したという人が少なくなかったようだ。

園児も家族も職員も全員無事であったが、家の流出や離職を被った家庭はあった。また、園の方では、壁が破損し、当時浸水域にあった教会においていた園バスが水没した。

地震後、すぐに停電となった。テレビもラジオもつかなかったので、園長は、携帯のワンセグで情報を得ていた。そのため、地震直後に、責任を感じたバスの運転手が園まで来て、バスを取りに行ってもいいかと申し出た時に、津波が来ているからと止めることができた。

また、いつ電気が復旧するかわからないと考えた園長は、自分の携帯だけをつけて、他の職員の携帯の電源を切らせた。混乱の中、電池を温存させて、連絡手段を確保しておくためだった。

園には津波注意報／警報時の簡単なマニュアルはあるが、震災前も今も、マニュアルにこだわって被害が出ることのないように、臨機応変に対応していく方針だという。

園長は、「身の安全を確保する行動をとることと、子どもの命を預かっている園を信用してもらう、という基本的な考え方を共有していれば、あとは状況に合わせて臨機応変に行動するのが重要だ」と話す。

(3) いずみ保育園では

井川典久事務長（40歳代）によると（取材日：2015年9月17日）、千徳駅付近にあるいずみ保育園では、地震の揺れが来たとき、子どもたちが昼寝から覚めるころで、職員は3時のおやつの準備をしていた。当時、保育園にいたのは、0歳から3歳の園児で、職員は17名いたという。

避難訓練は月1回。火災、水害（閉伊川の氾濫）、地震などを想定して行なっており、地震の時はむやみに外に出ない、慌てない訓練をしていました。だが、今回の揺れは長く大きい。身をかがめて子どもたちを部屋に集めました。

地震が収まってから、まもなく防災放送で大津波警報発令のアナウンスを聞きました。ただの津波ではないという緊張感が伝わってきました。津波が襲ってくる。閉伊川の底が見えるくらい水が引いていま

した。だが、水は堤防を越えて保育園までは来ない。

余震が何度もある中、床暖房が全面切れて、寒くなってきました。保育活動はできないが、おやつを食べさせて、おとなしく保護者の迎えを待ちました。

親御さんたちはすぐに職場から車で迎えに来ました。地震発生後、まもなくほぼ全員引き渡すことができました。海側に職場がある方からは詳しい情報を得ました。宮古駅付近まで津波が来たと聞きました。

でも、1人だけ園児のお迎えが来ませんでした。保護者は職場を離れられず連絡も取れない。ずっと待っていたのですが夜になっても来ない。保育園の職員を返して、家の近い私が預かり、お迎えに来たらわかるように、園の前に園バスを停めて、寒いので中で暖を取りながら、6時、7時まで待ちました。結局、園長の自宅で園児を預かり、ごはんを食べさせて布団に寝かせ、私は門のところに停めた車の中で朝まで迎えを待ちました。

次の日の朝9時過ぎになって、井川さんは、保護者の職場まで様子を見に行ってみた。

どうしようもないくらい街がぐちゃぐちゃだった。折れた電柱。毛布が掛けられた死体。道がない。行ける場所を探して通って海側にある保護者の職場まで行ってみました。市役所付近は、道という道がない。瓦礫の山だ。職場ですぐに園児のお父さんに会えたのですが、結局、2日目の夕方になって迎えに来られました。

園舎に被害はなかったけれど、オール電化なので停電で給食が提供できず、しばらくお弁当を持参してもらっていました。また、通園する人数も少なかった。給食を含む通常保育に戻れるまで、しばらくかかりました。

いずみ保育園では、お昼寝のときパジャマに着替えさせている。マニュアルでは、いざという時、着替えはしないで避難する。火事のときも命優先で靴を持って逃げることになっている。また、筆者の取材時には、震災を受けて津波を含む水害に対するマニュアルを再検討しているとのことだった。

また、入園時、非常ダイアル伝言171への登録を保護者の人に徹底してもらっている。大きい災害時の連絡は、確実に言葉で伝わるように基本、電話連絡網で行っている。

さらに、園では、2011年以降、警察や消防に迅速につながる非常警報装置ボタンを設置した。水38リットル、乾パン60名分、電気が使えなくても点くストーブ（灯油）、防災リュック、灯油、災害時用のパン、オムツなどを備蓄している。防災リュックも、もともと各部屋に1つずつ、計7つ設置してあるそうだ。

B　その時、どうやって子どもを守ったか（小学校編）

1　鍬ヶ崎の状況

(1)　鍬ヶ崎小学校では

鍬ヶ崎の**川部淳一さん**（昭和32年生）は、震災当時、鍬ヶ崎小学校6年生の子どもがおり、父母の会会長をしていた。川部淳一さん、恭子さんご夫妻に話を聴いた（取材日：2015年3月6日）。

持ち出したもの

地震発生直後、避難リュックとカメラを持って避難しました。カメラを持って行ったのは、卒業式が間近だったので、卒業式の祝辞で言及できるかと思っての事でした。まさか、こんな大変なことになるとは思ってもみませんでした。避難リュックの中には、10円玉・親戚の連絡先を書いた住所録、ティッシュ、サランラップ、新聞、ラジオ、懐中電灯、ナイフ、紙皿などを入れていました。

避難経路はもともと決まっていました。鍬ヶ崎では、ずっと毎年3月3日の昭和の津波の日に、サイレンが鳴ると、神社か小学校に避難する訓練をしていたからです。周りに声をかけながら坂を上り小学校に向かいました。学校では、子どもたちが校庭に避難待機していましたが、消防の七分団の団長が来て、「ここでは危ない」と言うので、クラスごとに整列して、さらに熊野神社に避難しました。子どもたちは

泣いていませんでした。小学校に避難していた人も皆、神社に向かいました。

津波の襲来とともにものすごい音がして、あたりに石油の匂いが立ち込めました。防潮堤のないところにあったタンクが流されましたが、幸い火はつきませんでした。津波は物を壊して、何もかも無くしてしまう。学校に持って来ていたもの以外は何もない状態になりました。子どもにしたら、とんでもないことです。避難先では、消防団（七分団）の団長と校長先生だけが消防無線で情報を得ていましたが、他の人にはわざと情報を知らせませんでした。

この時、鍬ヶ崎小学校では、心理面への配慮から子どもたちに津波を見せないよう、小屋に対面させて座らせていたと聞いた。まずは見せないことが、重要だとする校長の判断であった。

子どもの引き取り

それから後、多くの保護者が避難先の熊野神社に子どもを引き取りに来た。その状況について川部さんは、次のように話している。

児童は、保護者に神社で引き渡されました。笹川校長をはじめ当時の先生たちはとても信頼できる方々で、子どもたちには誰もケガがなかった。鍬ヶ崎小学校の児童のうち3分の2は、上の方の佐原地区から来ていましたが、その子たちは親に引き渡して自宅に戻りました。残りの3分の1は、下の方に近いので被災している子が多く、その後も避難所にいました。引き取りに来られない子は、家庭科室で先生が世話をしました。

一方、当時の校長である**笹川正先生**（昭和30年生）は、その日学校に戻った後の状況を以下のように話している（取材日：２０１５年7月24日）。

震災の日、5時過ぎに熊野神社から学校に戻ることにしました。その時分にもまだ迎えを待つ子が30人くらい残っていました。3階の西側の一番奥（海から一番遠い）に家庭科室があって、そこに子どもたちを避難させて、毛布でくるんだり段ボールを敷いたりして暖をとらせました。食事は、その昼にたまたま6年生の感謝会があり、先生たちにサンドイッチが配られていたのですが、まだ誰も食べていなかったので、それを子どもたちに持って行って食べさせました。そのため、不幸中の幸いにも、子どもたちはそれほどお腹をすかせることはなかったのです。また、次の日のお昼過ぎか夕方に、リンゴを1箱学校に持って来てくださった方があり、それを4分の1個ずつくらい食べて、急場をしのぎました。

その後、子どもたちは1人を除いて全員引き取られました。残った1人はお母さんを津波で亡くしました。一緒に流されたものの、辛うじて助かったお姉さんと2人、おばあさんの家に届けて、一応学校の役割は果たせたかと思います。

鍬ヶ崎小学校の避難所で

川部さんの証言に戻ろう。

最初は地域の人は皆、小学校の避難所へ行きました。備蓄毛布は4、5人に1枚しかない。食べ物もストーブも電気も何もありませんでした。でも、山の中にある貯水タンクに2日分の水が入っていたので、水道は出ました。自分の店のアイスクリームストッカーが学校のプール前で発見されました。津波に流されて坂を上がって来たのです。寒いけれど食べ物がないので、みんなで中のアイスを食べました。

津波被害

近所の人の家が流されて、小学校の方まで上がりました。家が2つに割れていました。水が来たとき、その家の娘さんは階段の方にいたので屋根に上がって助かったのですが、お母さんは1階の奥にいて亡くなりました。ほんの数㍍の違いが生死を分ける。自分もあの時死んだと思いました。

津波の日以来、長い余震が続いていました。長い地震です。余震が

続く間、ずっと洋服のまま眠りました。

地震の翌日、ひとりで被災した自宅へ行ってみました。その次の日に、今度は、家族を連れて物を取りに行きました。1階と2階の物は何もなかった。3階に置いてあった息子の新しい学生服と、卒業式に着るつもりで用意していた妻のフォーマル服だけは無事でした。地震で倒壊した家はありません。すべて津波にやられたのです。

店を再開

父母会の会長としては何もしていません。それどころではない。生きているのが精いっぱいでした。避難所にいればいいのでしょうが、黙っていられない。何かしなくちゃ。何かやりたい。その思いで軽トラックを手に入れ、震災の翌月、4月26日に店を再開しました。軽トラックは縁をたどって東京の運送屋さんに提供してもらいました。

震災後、最初の2年で復旧の予定でした。災害があることを前提に、もっと早くから復興計画をきちんと立てておけばよかったのに、結局、瓦礫も片付かないまま3年を無駄にしました。土地をもらえるのも何時になるか、何処になるのかわからないから、店舗再開の計画が立てられない。

住民個々の避難を把握するシステムを

地域では非常物資の備蓄はしていませんでした。今は、プレハブの備蓄倉庫が小学校のプールの脇に建っていますが、中に何が入っているかは知りません。年に一度でも住民がどこに避難するかを個々に調べて、避難所ごとに住民台帳に記載していれば、必要な分、食料を確保できるし、食料を受け取りに来なければ、亡くなっているとわかるのではないかと考えています。

(2) 避難マニュアルの見直し

元教育長の佐々木敏夫先生によれば、岩手県教育委員会では、火災・地震・津波・不審者対策を含む『教育委員会管理マニュアル』（平成13年12月）を作成している。宮古市の教育委員会では、それを元に宮古市の状況に合わせたひな型を作り、各学校の個々の状況に沿ったマニュアルを作成するように指示を出した。津波の危険がない地域もあるし、学校によって状況が異なるためである。

各学校では、独自の危機管理マニュアルに応じた避難訓練を、それぞれできれば年に一度、通算5、6回行っていた。

ちなみに**笹川先生**によると、学校教育課長時代に宮古市版のひな型を作成したが、その際、津波への対応に関しては、大船渡の学校からもらったマニュアルをベースに、それを宮古バージョンにアレンジして作った、という。岩手県の中でも大船渡の被害は昔からひどかったので、そういう意味では先進的に取り組んでいたからである。

自宅待機ではだめだ！

鍬ヶ崎小学校でも先述の通り学校独自の危機管理マニュアルを作っていた。だが、震災以前の避難マニュアルでは、実際には通用しない部分があった、と笹川先生は言う。それは、学校に子どもたちがいない時に地震や津波が来たらどうするかという問題で、学校側ではその場合の対応を「自宅待機」としていたのである。この点について、笹川先生は、次のように語っている。

以前のマニュアルでは、「自宅待機」を勧めていたのですが、地震後ぞっとしました。鍬ヶ崎で自宅待機だったら、みんな大変なことになっていました。自宅待機にさせていたらだめだ。今回の地震がもし、登校前だったら大変でした。

「ありゃあ、これは失敗した！」。自分で出した通知でしたが、現場に行ってそのまずさを実感しました。たまたま、今回は子どもたちが学校にいたので無事でしたが、自宅にいたらアウトでした。それで、自宅にいても安全なところに逃げるように指導を変えました。マニュアルから「自宅待機」という言葉をなくして、安全なところに避難しなくちゃならないというのを、再度問いかけながら、情報を集めたという経緯があるのです。

学校側では、震災後、防災意識を子どもたちに浸透させるために、家庭で話し合いをしてもらう材料として、「自宅待機」という言葉を使わない新しい防災マニュアルを配布した。これにより、改めて登下校途中に津波が来たらどこに避難するかを話し合ってもらい、個々の家庭で決めた避難場所の情報を学校に集約して確認できるようにしたのである。

学校からの避難コースを変える

また、児童が学校にいる時に、どう避難するかも再検討する必要があった。鍬ヶ崎小学校では、震災を受けてその手順やコースを見直した。

震災以前の避難マニュアルでは、まず1次避難として校庭に避難する、そして、もっと深刻な場合には、2次避難として熊野神社に逃げるというコースが決められており、それをもとにした避難訓練を年に2度行っていた。

これを変更する経緯と、どのように変更したかを、笹川先生は次のように話している。

（＊避難経路を決めるのは）それは学校の取り組みでした。それも後で後悔しているのです。というのは、普通に街並みがあるときには熊野神社に行くというのは最適なコースだと思っていました。でも、震災後、全部家がなくなってみたら、学校から海に向かって避難するコースだったのです。

それは、あり得ないことでした。海から遠くに逃げるならわかるが、いくら斜めに逃げるとはいえ、海に向かって避難するコースだったと後から気がつきました。短い距離ですから、早く非難することを優先すれば、それはそれで理由づけにはなるけれども、説明がつきません。七軒町（シチケンチョウ）という学校の裏側に沢があるのですが、その沢伝いに避難する。そうすれば昔の旧県道に当たる。旧県道まで上がれば、なんとかなる、ということで、避難コースを変えることにしました。

避難コースを変更する旨の了解を得ようとしていたら、90％の保護者は「いい」と言う返事でしたが、残りの人が「だめ」と言う返事でした。理由は、昔、そこで崖崩れがあったじゃないか、そのようなところを避難道にするとは何事だと言うことでした。それでは逃げ場所がない。消去法でいったのです。ハザードマップを見て調べて、コースを設定していく中で。

また、「日陰の坂」という道があり、鍬小の前の道、あそこを通せばいいじゃないかと言う人もいました。でも、あの道路の歩道の下は空洞になっているのです。地震がもっとひどければ、あれは崩れ落ちる。それから、あの時もそうでしたが、あの道は車の通りが多く、子どもがうかうか歩けるような状態ではなかったのです。そんなことを考えたときには、「日陰の坂」は捨てるしかないコースでした。

七軒町のコースは、がけ崩れがあれば止まればいいので、事前に調べればいいことだ、ということで選んだコースだったのですが、否定されました。

安全を確保するためには100％でなければならない、ということで考え直しました。その時に、市会議員の工藤小百合さん（当時父母の会の副会長）が学校のすぐ裏に菱屋さんの別荘があって、そこまで行けば県道までそれほど遠くない。そのコースを使ったらどうですか、ということでした。それで、そのコースを教育委員会にお願いしました。その後私は転勤になったのですが、そのコースを教育委員会も受け入れて、今はそれが地震時の避難コースになりました。

それに、校舎は校庭に並行して建っているのですが、このコースであれば、校舎の1階の山側の出入り口から出たところに集まって、そのまま菱屋さんの方に上がることができる。そのため、校舎の入り口も作り直してもらって、安全を確保するようにしました。

とにかく、子どもの安全を100％確保できることを目指してそこまでやったのが、23年度。就任2年目のことでした。

鍬ヶ崎小学校に併設されている鍬ヶ崎学童の家に勤めていた**田畑輝彦先生**（昭和9年生）によると、学校にいるときは学校の避難計画があるが、学童の家にも独自のものがあるという（取材日：2015年

3月7日)。

学童の家では、避難場所は上のお風呂屋さん「不動園」に避難することになっています。そこなら休めるし、津波も来ない、人家も近いところです。鍬ヶ崎学童の家の初めからかかわったので、私が不動園に頼みに行きました。学童の家に来ているのは、小学校3年生までの30名足らずですから。小6まで事情があればあずかりますが、4年生以上は1人か2人です。避難計画は、学童の家ごとに避難場所や経路、方法、指揮系統などを決めています。

2 高浜・金浜地区の状況

(1) 高浜小学校では

震災当時、高浜小学校校長だった**大洞晴洋先生**(昭和26年生)を訪ねた(取材日:2015年9月16日)。

1メートル以上の津波が襲う

高浜小学校は、国道45号線を挟んで宮古湾に面しているが、国道から3メートルほど高い位置にあり、8メートルを超える防潮堤に守られていた。高浜小学校は避難所に指定されており、想定では津波は来ないことになっていた。チリ地震の時に高浜地区は大きな被害を受けたが、地区の中央にあった小学校を、より安全な現在の場所に移転した経緯があったからである。

震災後、地域の人も「波がここまで来たのか」と驚いていたという。想定では、45号線の壁で止まるのではないかと考えられていたが、実際は、それを乗り越えるほどの高さの波が襲ってきた。そして、1メートル以上の高さで校庭に入った波は、道路と校庭の間のフェンスをなぎ倒した。

学校裏山に避難する

地震発生。長い揺れの後に続く余震の合間を縫って、校庭に子どもたちを集めた。「大津波警報」の放送が流れる。すでに校庭には迎えの車が十数台入ってきていた。数名の保護者に「連れて帰ってもいいですか」と聞かれた職員から判断を求められた。

大洞先生は、その時の心のうちを手記で、次のように書いている。

「許可しようという気持ちもないではなかったが、メガホンを持って話した。『警報がでているので、もう少し様子を見ましょう。』その時は正直熟慮する余裕はなかった。頭の中は、2日前の注意報時の対応や本校の防災マニュアルが駆け巡っていた。だが、これがとてつもなく大きな判断となった。」

筆者のインタビューでも、「本当は学校に強引に止める権限はないのだが、親御さんの方からも特に反対意見が出なかった。もし、どうぞと帰していたら、道路の方が低いのでどうなっていたか」と、振り返る。

避難所になっていたため、校庭にはたくさん人が集まってきました。消防団の人たちも来ており、フェンス越しに海を見張っていた団員の小笠原さんが「だめだー。早く逃げろ!こっちだ!」と大声で叫んだのです。

大洞先生たちも海の方を見てはいたが、逃げるかどうかの判断が難しかったという。

消防の人たちはフェンスのすぐそばで海を見ていたので、その一言で助かりました。その声を機に、児童89名を含む全員が、校舎裏の高台に急な斜面を走って登って避難しました。その声がなかったらどうなっていたか。

高浜小学校までは津波が来ないという想定だったので、避難所になっていたのです。そのため、そこからより高いところへの避難は想定していませんでした。避難する場所も決まっていない。とっさの判断で避難したことになります。津波が学校に到達したのは、3時30分。小笠原さんの指示からわずか10分後のことでした。上の方から振り返ると、校庭に乗り入れていた十数台の車は波に浮いていました。

後ろ向きで山をどんどん上がる感じだったので、子どもたちはほとんど津波を見ていなかったと思います。途中で担任などが中心になって、子どもたちを上にあげるように指導しました。校長として担任の

先生には、人数を把握することと、ケガのないようにと伝えました。

裏山から金浜老人福祉センターへ

余震が続く中、だんだん暗くなってきました。寒くなってきて、いつまでも屋外の高台にはいられない。そろそろ下に降りようということになりました。今思えば、校舎にもどってもよかったのですが、校庭にあれほど水が入ったところには入れない。校舎に入ろうなどとは誰も考えなかった。地元に詳しいＰＴＡ会長や地域の人みんなで次にどこに行くべきかを相談し、夕方5時くらいになって山を下り、学校の隣の高台にある金浜老人福祉センターに行くことにしました。その後、センターには徐々にたくさん人が集まって来て、本当に混乱した状態でした。

子どもたちの半分以上は、センターで先生たちと一緒にいました。被害の少なかった保護者は夜までに迎えに来ることができました。職員もどこへも行けないので、そこにいるしかありませんでした。食事は、その日の夜は飲まず食わずでした。子どもたちはよく我慢したと思います。また、余震が何度もあり、怖くて寝れないほどでした。

次の日、飲み物やパンがちょっとだけ来ました。みんなに回るほどの量ではなかったので、子どもや弱い人を優先に分け合いました。近くの被害を受けない高いところに住んでいる人が、毛布やストーブを持って来てくれました。ストーブは灯油のストーブが何台かあり、学校からもある物は持ってきました。十分ではなかったですが、そうやって一晩過ごしました。翌日になって、親御さんが子どもたちを迎えに来ました。

学校に詰める

子どもたちを帰したあと、職員は様子を見に行けそうな人からどんどん自宅に戻りました。帰れる人も、帰れなかった人もいました。赤前や鍬ヶ崎の人は帰れませんでした。子どもが心配だからと崎山まで歩いて帰った人もいました。

校長だった大洞先生自身は、3日後の日曜日になってようやく着替えと入浴のために一旦家に戻ったという。その後の数週間は、職員は何人か交代で学校に寝泊まりした。大洞先生もほとんど学校に詰めていたという。そうした情況は、4月に教育委員会から通達が来るまで続いた。

震災後しばらくは、学校に行けば何か情報があるのではないかと思って訪ねてくる人、トイレを借りに来る人が多くいたので、夜でも学校を開けておいた方がよかったのです。自衛隊の人もトイレを借りに来ました。でも、水が出ないので、校舎の裏の池からバケツで水を持って来て汚物を流しましたが、そこも限界になりました。電気も来ない。電気の復旧も高浜付近は遅かったのです。

震災の次の日の夜明け、明るくなって金浜の惨状が見えてきたときにはショックで声が出ませんでした。忘れてはならないけれど、思い出すのは辛い。今思うと、本当に危なかったです。

地域との連携と信頼関係

日頃から保護者をはじめ、地域の人とのつながりを大切にしてきたことが、あの日、学校にいた全員のいのちを救った。消防団や地区の人々、金浜老人福祉センターとの交流があったからこそ、お互いに知恵を出し合うことができたし、迎えに来た保護者を帰さないという校長の判断に従ってもらえたのも、そうした繋がりがあったからだと言えるだろう。

大洞先生の手記は、こう括られている。「震災後、本校を訪れた文科省の方から、大震災を経験され、今後の学校防災で一番大事なことは？と質問を受けた。私は答えた。それは、地域との連携と信頼関係。」（『宮古　今歩き始める』42頁）

震災後の変化

高浜小学校が震災後大きく方針を変えたのは、次の2点である。

① 有事の保護者による児童の引き取りについて

震災前は、警報が出たら保護者は学校に児童を迎えに来ることになっていたが、今は引き取りに来ても帰さない。警報が解除されて、安全が確保されてから学校ではなく避難先に迎えに来ることになった。市内では保護者が児童を引き渡した後に亡くなった例があるので、震災後はどこもそうなっている。そして、学校では、このことを4月のPTA総会の時の資料につけて周知しているそうである。

② 学校が避難所であったが、有事には金浜老人福祉センター（障害者センター）に避難することになった。

これは地域との連携とも関連するが、避難先について、現校長の**中村登志江先生**（昭和32年生）は次のように話している（取材日：2015年9月17日）。

避難の際は、学校から金浜老人福祉センターまでの最短ルートを行きます。1分1秒を争うので、学級ごとに教師が誘導しながら、早く外に出た順に逃げることにしています。高台の福祉センターまでは1分くらいで着きます。津波や震災に関してはかなりお世話になるので、福祉センターとの連携はいつもとっています。七夕集会ではデイサービスに来た方を学校に招いて交流したり、冬場に子どもたちがセンターへ肩たたきに行ったり、3、4年生が上の花壇でお花づくりをしたり。福祉活動交流を福祉センターに絞ってやっています。

実際、最近、地震があり、津波注意報が出たことがあったそうであり、その時の事を中村先生はこう話されている。

避難しに行ったら、福祉センターの方では、警報が解除されるまで子どもたちが座って待てるように、畳の部屋を用意してくれていました。鍬小にいた時に経験があるのですが、屋外に避難した時に、そこが雨風の防げる場所だと安心して待てるのです。ここはとても良い。ストーブやトイレもあるし、子どもたちは、温かい場所でお茶まで用意してもらいました。なかなか警報が解除されないので、結局1時間以上お世話いただきました。（＊付き合いの）何もないところだと、そうもいかないでしょうが、普段から交流を大事にしています。

(2) 高浜児童館では

高浜児童館は高浜・金浜地区限定で、満3歳から6歳の幼児保育と、小学校4年生（＊現在は6年生）までの学童保育を担っている施設である。震災では、床上浸水の被害を受けた。あの日のことを、**松浦隆太朗館長**（昭和23年生）と**加藤美季先生**（昭和40年生）に取材した（取材日：2015年9月17日）。

高台の津波シェルターへ避難する

震災時、児童館には年長8名、年中6名、年少3名と、4名の職員がいた。館長は役所からの帰りで、まだ市立図書館のあたりを車で走っている時に地震が来た。

児童館では、年少年中の子どもたちがお昼寝から目覚める頃でした。子どもたちの半分はまだ布団にいて、半分がトイレに行っていました。布団にいる子は、布団に潜り込ませ、トイレにいる子は、引率した先生の指導でトイレにしゃがみこみ、部屋に戻った後はまた布団に潜らせて、揺れがおさまるのを待ちました。年長6名はお昼寝をしないで、和室でクッキーづくりをしていました。まだ火は使っていませんでした。揺れが来た時、いつも避難訓練で指導しているように、和室にいた年長児は、おそらくテーブルの下に潜っていただろうと思います。

警報が出たと放送があり、すぐさま避難しようということになりました。マニュアル通り、近くの津波シェルターに避難す

写真3　津波が侵入した教室　高浜児童館にて
撮影：松浦隆太朗館長

ることにしました。寒いのでパジャマ姿の子どもたちには服を着させて、荷物を持たせました。震災前から水500ミリリットル2本、乾パンが入った緊急避難リュックと引き渡し簿（バックアップ）が入った救急バックが用意されており、職員はこれらとラジカセを持って出ました。

最寄りの津波シェルターは、コープケミカルの社宅の裏の高台にあります。児童館の前の家の脇を通って高台に上る道に出られます。普段からこのコースを通って避難する訓練をしています。

あの日、児童のうち2名は、シェルターに着く前に迎えに来られたので引き渡しましたが、ほとんどの保護者は津波シェルターの方に迎えに来ました。

そのシェルターには、古い備品倉庫があり、中にはストーブや毛布、水などが備えてありました。車で乗り入れることもでき、備品倉庫の脇にはトイレもあります。海の方の民家の人たちもたくさん避難して来ていました。

おやつを取りにいく

市街地にいた館長も、そのまま車で津波シェルターに向かった。

津波襲来直後、館長は、シェルターのある高台から児童館の裏の斜面を降りてきた。下からは上ることができないほどの急な斜面である。子どもたちのおやつを取りに行くためだった。

今思えば、とても危険でした。子どもたちがいるので、食料を確保しなければならないと思い、おやつを取りに山を降りたのです。でも、第2波、第3波が来たら危なかった。震災後になって、情報が出てくれば、あれは危険な行動だったなとわかる。でも、その時は、とにかく子どもたちに食べるものをという思いでした。

津波シェルターで夜を明かす

その日の夜は、皆が津波シェルターで過ごしました。備品倉庫内の4・5畳くらいの狭い空間に、子どもやお母さんたちと一緒にストーブを焚いて夜を過ごしました。毛布を出した棚に子どもたちを寝かせました。毛布があったのでずいぶん助かりました。

外では、山の木を切って焚き火をしました。コープケミカルの社宅の人がお米と鍋を持ち寄って、焚き火でおにぎりの炊き出しをしてくれました。水は誰かが持って来てくれたようでした。シェルターの左奥の方から下りる道があり、その先は水を被っていない地域でした。その地域の方が何人か差し入れに来られました。

次の日のお昼まで、2組の児童の迎えが来ませんでした。消防団の無線で連絡をとり、ようやく保護者の居場所がわかったので、職員も自宅に戻ることになりました。残されたもう1人の子は、お母さんが亡くなっていました。お母さんを探していたのでしょう。お父さんとはなかなか連絡がつきませんでした。おばあさんが金浜地区に住んでいるので、おばあさんに引き渡すために、職員が、山の方の道を通って送って行きました。

津波の被害

最終的に子どもは全員無事だったが、今回館長が一番心配したのは、地震直後に帰した2名のことだった。

しばらく連絡がつかずにいましたが、2、3日後、無事を確認しました。電話が通じないので、帰りに津波に巻き込まれたのではないかと大変心配しました。すぐに迎えに来たおばあさんに聞くと、本当に波に追いかけられるように逃げたということでした。その家のおじいさんが流されて亡くなりました。だから今は、迎えに来ても絶対に帰してはいけない、と考えているのです。

児童館の建物は、床上10センチ浸水の被害を受けた。今も玄関に痕が残っている。

床は全部張り替えが必要でしたし、ストーブもクーラーもトイレも全部やられていました。復旧作業はすぐに取りかかってもらったのですが、園庭に積もった土をはがして取り除き、裏に持って行く作業にずいぶんと時間がかかりました。働いているお母さんたちが困るから、

早く保育を再開しなければならなかったので、高浜小学校の体育館を借りて学童の業務を再開しました。幼児の方は、4月25日が入園式でした。

警報時の引き渡しはしない

避難に関して高浜児童館が震災後、一番変えたことは、警報時の保護者への引き渡しをやめたことである。引き渡し訓練も、今は、「警報が出たのでシェルターに避難しています。警報が解除になってから迎えに来てください」という訓練に変えた。また、児童館では震災後毎年、年度初めに、避難についてとシェルターの場所に関する手紙を出している。

館長は、「震災で重茂や田老地域で、引き渡したために流されたという話をきいて、うちも一歩間違えばそうなっていたので、それは徹底しないといけない。警報時に帰さない、迎えにも来ないというのは大事だ」と話している。

（＊児童館へは）海岸線を通ってくるので、（＊警報発令時は）休みの職員も出て来ない。無理はしない。いる者で対応するということになりました。今回は、津波到達まで時間があったので良かったですが、（＊館長ご自身）一番被害のひどかった地域を通って戻ったので、もし、時間がずれていれば危なかった。堤防があるので、海が見えないのです。それで流された人がいっぱいいます。今は、児童館から海岸線の道を通る車が見えますが、震災前は家がいっぱいあったので、道路は見えませんでした。

3　学校再開に向けた取り組み　―教育長の軌跡―

佐々木敏夫先生（昭和22年生）は、震災当時の教育長である。あのような大きな災害を今まで誰も経験したことがない中で、宮古市の公立学校を束ねる立場にある教育長が、学校再開に向け震災直後からどのような判断を下し、どのように行動したかを聞いた（取材日：2015年7月5日）。

(1)　市庁舎で地震に遭う

津波の日は、議会の最終日だったので、本庁舎の6階にいて、ちょうど閉会の時に地震が来ました。教育委員会には議会が終わってすぐに総務課長だけを帰し、部長と私は対策会議があるので、そのまま庁舎に残りました。会議が開かれると思い、4階にいたときに津波を目の当たりにしたのです。

津波が堤防を越えた瞬間に、ここでも危ないかもしれないと、みんなで6階に上がりました。その夜は、もうどこにも出られませんでした。会議を何回もやりました。でも情報が入って来ないし、こちらからも情報の発信のしようがありませんでした。わかっている情報を、何回も繰り返しやっているような会議でした。被害もはっきりわからない。その夜は4階の椅子で休みました。連絡はずっと入って来ませんでした。

次の朝も7時頃、会議があり、随時会議を開くというので、庁舎からなかなか抜けられませんでした。着替えもオーバーもなく、暖房もありませんでした。昼近くになって一旦家に帰りました。道路にはヘドロや水がまだ残っていましたが、普通の靴でずっと歩いて行きました。

帰宅途中に、宮古小学校と山口小学校の避難所の様子を見に行きました。山口小に被害はありませんでした。宮古小学校には体育館近くまで水が入りました。宮古小学校の避難所を見て、校長さんと話して、すごく大変な、何が何だかわからない状況だと思いました。

「子どもたちは無事です、家に帰しました」と聞いて胸をなでおろしました。ただ、避難所に来た人がすごく多くて、その対応が大変だと聞きました。宮古小学校の校長からもらった記録には、「宮古小学校ではその日、11人迎えに来られなかった」と書いてあります。食事は、学区内にある中村せんべい店が「せんべいを千枚持ってきてくれて配布した」とあります。

(2)　安否確認を優先に

自宅に津波の被害はありませんでした。昼食をとって、着替えをもって、長靴に履き替えて、会議が開かれるので、また庁舎にもどりました。最後の会議が夜の7時だったと思います。庁舎に停めた車は流されましたが、家内の車は無事だったので、新里の教育委員会に行って、子どもたちと先生たちの被災の状況を確認すること、安否確認を優先するように指示を出しました。

そのころは、まだ電話がつながっていなかったので、安否確認には職員に足で行ってもらいました。学校を8名、2人組でまわりました。分庁舎の方は車が無事だったので、車も使いましたが、海岸端から先に安否確認にまわりました。だが、3日目でも車で目的地まで行けない所が多かったと思います。私も鍬ヶ崎まで歩いて行きましたが、道路は歩けなかったので、山をまわって行ったし、愛宕も車では行けませんでした。

愛宕は本庁舎の近くですが、船や車が上がっていない道路の裏道を知っているので、そういうところを歩いて行きました。車も人も通れない状況でした。裏道を通って行くしかないのです。人の家の庭を通るとか。二中、鍬ヶ崎も愛宕から山を越えていくしかありませんでした。

3、4日は、浸水区域は歩ける状態ではありませんでした。会議があるので市役所を起点に歩ける範囲で藤原、河南、磯鶏そして、鍬ヶ崎、二中、愛宕、山口、宮古小学校を訪ねました。市役所で会議が終われば家まで歩いて、夜は新里につめて。でも、いろんな見方があると思いますが、教育委員会が新里にあってよかったと思っています。教育委員会では職員がフルに動けました。インフラも別だし。自分たちの仕事のほかに、いろんな便利屋をしました。

愛宕小は高台なので津波は来ませんでしたが、ここでは危険だということで裏の民家まで逃げたようです。山の上の中里団地の集会所まで避難して、児童7名ほどが先生たちと泊まったそうです。小学校では自分の学校が危ない時は、普通は上の道路などに避難することになっていると思いますが、あんなに大きな津波までは想定していませんでした。

ほとんどの学校が避難所になっているので、震災以降、はっきりと2次3次の避難所を設定しました。それまでは何となくこの辺まで逃げれば、という現場の判断だと思います。高浜も千鶏もそうでした。千鶏もあんなところまで津波が来るとは思いませんでした。

2日目あたりに、教育委員会と本庁とがつながる衛星電話が1つ来ました。それから、教育委員会の総務課に、電波がつながる機種の携帯を持った職員がいたので、それを利用したりしました。

児童・生徒・職員の安否確認には1週間以上かかりました。結局、その日学校に来ていた子どもたちの安否はわかったのですが、その日休んだり早退したりした子どもたちの事がわからなかったし、職員の中でも勤務日でなかった人の居所もわからない状態でした。

(3) 4月開校に向けて

初めてのことなので

まず、初めに子どもと職員の、そして子どもたちの家族の（＊教育環境）安否確認をする。正常な学校運営をするためにどうするか、早くそれを取り戻したい、というのがありました。そのために職員を配置するとか、正常な運営をするためには何をどうすればそれが早くできるか、ということを考え、それをクリアすれば軌道に乗るだろう。あとは、学校が始まってしまえば、各学校の校長の裁量だから、そこまでを委員会でどうにかしなければならないと考えていました。

卒業式をどうするか問題

また、12日に卒業式を予定していた学校もあったので、どの学校もこの震災で卒業式をどうしたらいいか教育委員会に尋ねてきました。そのため、3月14日に手分けして歩いて、3月に卒業式ができない学校もあるかもしれないから、学校ごとに日程を決めてやってほしい。来賓は呼ぶ必要はない。体育館などを考える必要はないので、各学校で対応するように、と伝達しました。

実際、3月に卒業式ができない学校もありました。千鶏・鵜磯の校

舎が壊れた学校では、教育委員会と連名で保護者向けに卒業式が当分できない旨のお便りを出しました。結局、4月になってから卒業証書を手渡しました。

校長会議をひらく

後は、当面のこともあったし、学校をやっていない間の子どもたちの暮らしをどうしたらいいか、校長たちが迷っていると思ったので、できるだけ早く、3月23日には校長会議を開きました。

通常、校長会議は30数校を1か所に集めてやるのですが、車が流失したりガソリンが手に入らなかったり、先生たちが新里の教育委員会まで来るのは難しかった。それで、2か所に分けて会議をおこないました。旧市内と田老は市立図書館を、新里・川井は教育委員会を会場にしました。

校長会議では、最初に子どもたちを守ってくれた事への感謝を伝えました。学校にいた子は全員無事だったので、よく守ってくれたとお礼を言いました。そして被災した子どもたちもいっぱいいるので、その春休みの生活をどうしたらいいか、被災した学校については大変だろうけれども、子どもたちのケアをお願いしたい、という話をしました。

市内一斉に4月25日開校を決定した理由

被災した学校は、最終的に4月25日まで学校を開かないことにしたので、宮古市の全小中学校は、4月25日を一斉始業日とすると、校長会議で決定しました。被災していない学校から「うちは、もとの計画通り4月5日に始めたい」という意見も出たが、「だめだ」と言いました。この1年だけは、教育に地域的な凹凸がないように、みんな一緒にやってもらいたいと、校長たちにお願いしました。

授業日数というのは、200日から203日確保しないといけません。授業開始日がぎりぎりいつなら200日とれるかを計算してもらったら、「5月のはじめでもいいですよ」というのが指導主事の答えだったので、「よし、わかった。4月25日でいこう」ということになったのです。

4月25日と決めた理由は、①まず授業日数を200日とれるかということ。②それから、被災した家ではお昼を持ってくることも難しいので、給食をいつからやれるかということ。これが一番心配でした。③田老、重茂、高浜もそうでしたが、仮設に入ってしまったので、とにかく車がないと学校までの足がない。それで、スクールバスを手配することになりました。それも全市一斉にでなければならない。そのような手配を、今までやったことがなかったので大変でしたが、それも4月25日だったらできるということでした。④あと一つ大きいのは、教科書会社が被災して、新学期の教科書が流されたので、教科書が揃うのはいつなのかということもありました。それらをすべてトータルしてどれもクリアできるのが4月25日だったのです。

休校期間中の子どものケア

ある学校の先生たちは、今まで習った事の学年のおさらいプリントを作って家庭訪問をしました。また、来られる子どもたちを集めて、午前中だけ補習授業をした学校もあるし、方法はその学校に任せました。中学校については、できるところは部活をしていたので、特に新1年生に部活を見においでと声掛けをしました。

千鶏・鵜磯では、そうしたプリントは渡せませんでした。しばらく学校を閉じます、家庭でお願いします、というチラシを、4月のはじめまで家庭訪問をして配って歩いたと記憶しています。

4月に重茂3校（重茂小学校、千鶏小学校、鵜磯小学校）の校長を重茂小学校に一度集めて会議をしました。新年度どうするかという話です。2校は校舎が被災し使えない状況なので、私は3校を一緒に勉強させるしかないと考えていました。

それらの学校は、震災前から統合したいという話があったのですが、あまり地区の方々はそれに賛成ではありませんでした。それでも、学校が被災して、もう勉強する場所がないし、重茂小学校に通えるようにスクールバスをきちんと用意するので、ぜひ重茂小学校で一緒に勉

強させて欲しいとお願いしました。

幸い重茂小学校は建って1年も経っていない学校でした。教室に余裕があったし、体育館のところにも教室があって、3校だと本当にギリギリだけれども、なんとか勉強できるようにしてもらいました。

とにかく、千鶏、鵜磯、それから校舎の使えなかった田老一中については、4月5日より前に、教育長である私が千鶏小学校に、教育部長が鵜磯小学校に、田老一中には学校教育課長が行って保護者向けに、校舎がなくなって勉強できないということを話して、なんとか保護者からの了承を得ました。

そして、4月5日に市内全学校で保護者を集めて、新年度準備の説明会をしてもらうことにしました。説明会では、入学式、始業式の日程、準備物、そして給食もスクールバスも大丈夫だということ、春休みの過ごし方などを伝えました。

児童の心のケア

春休み中は、被災した学校の子どもたちをケアするために、県、県教委、他県からの臨床心理士やスクールカウンセラーなどの心のケアの専門家に来てもらいました。「心のケア相談員」と言いましたが、被災した学校を中心に各学校、学区によっては仮設を回って、子どもたちの様子を見てもらいました。春休み中に情報を集めておいて、そういうところに行ってもらいました。

親が亡くなった子どもを特に心して診てもらいました。様子が普段通りでない子を回ってもらったのですが、震災で親を亡くした子は高校まで入れて47人だったと記憶しています。継続して様子を見たのは心配な子だけで、そうでないときは何かあったときや、学級で様子がおかしいというような時に担任から情報が上がって来て、相談するということになっていました。

県教委からのボランティア派遣

宮古市でも努力しましたが、県教委に大変助けられました。内陸の学校には大きな被害がなかったので、県教委で内陸の教職員を避難所運営の手助けに派遣してくれました。宮古市でも、被災していない学校の先生に呼び掛けて、避難所の手伝い、泊まって手伝いができる方を募集して、手を挙げてくれた方を配置しました。延べで100名を超えていました。その前に県の方から各避難所に3、4人ずつくらい来てもらったので、教職員ボランティアはかなりの数いたと思います。3、40人を1回のクールで来てもらったので、延べでいったら何百人にもなったでしょう。

県央部から来てくれた人の中には、かつて宮古に勤務した人も多かったです。「どうしても助けに来たかった、手伝いたい」と言ってくれました。市町村立学校の先生たちは、全県交流人事をしているので、宮古にいた人もいるのです。人事権の最終決定権は県教委が持っているため、宮古のことを知らない先生が赴任してくることも多いです。

震災は、人事異動の時期だったので、内示がすでに終わっていました。しかし、人事異動をすると、子どもたちに大きな負担がかかってしまうので、県教委の方針で被災地は人事異動が1年凍結になりました。異動予定の先生たちには気の毒でしたが、私たち行政にとってはありがたかったです。

先生たちが変わらなかったから、生徒たちは1年同じ状況で学校に来られました。もし人事異動があれば、学校が閉まっているうちに先生たちがいなくなっているという状況になったわけです。それは、子どもたちにしてみれば大変不幸なことになることでした。

(4) 学校が避難所になるということ

学校が避難所になっている場合は、部屋の割り振りや支援物資の配布などは、学校長と市から来た職員で管理をしました。最終的に避難所対応は、運営は市でというのが建前でしたが、手伝いなどは学校職員でした。地震直後は先生たちだけだったのですが、市の職員がシフトを組んでいけるようになってから、3月20日くらいからは、市の職員が管理するようになりました。

年度末・年度始めのいろんな処理をしなければならないのに、なかなか先生たちは自分の仕事に手をつける事ができませんでした。避難所の用務が先生たちの手を離れたのは、4月に入ってからでした。鍬小や二中では、市の職員で仕事の関係や被災したなどの理由で、たまたま避難していた人がそこに張り付いて管理することになるなど、学校によって状況は様々でした。

校舎を避難所に使う場合、どこを使うかはまずは校長の判断です。でも、子どもたちの活動が優先なので、授業に支障がないところは貸すけれども、そうでないところは断る。3月の最初の時は、寒かったし、暖房もないので、体育館では寒くて気の毒だということで、もっと暖が取れる教室を開放した学校もありました。でも、4月に入ってだんだん新年度の準備をしなければならないので、「すみません。こういうわけで教室を開けて体育館に移ってください」と言って、不承不承でも体育館の方に移ってもらいました。

そういう風にして、避難した方と校舎管理をしている学校長が話し合いをして、貸す場所というか住む場所を決めていました。住民もまず地区の方々がほとんどですし、子どもたちがその学校に世話になったという人がほとんどだから、無理なことは言わないはずです。

(5) 学校を利用した仮設住宅について

学校への仮設住宅建設は、大変難しかったです。しかし、愛宕小は仕方がありませんでした。次の年に統合・閉校が決まっていたので「校長先生ごめん、こんなに地区も被災したから校庭を」、ということで、お願いしました。愛宕に子どもたちがいるのはあと1年しかないので気の毒でした。

仮設住宅のための場所がほしいという話は、二中にも来ました。中学校は部活もあるし大変難しい。二中はどうにかならないかと話して、バスで5分のところに仮設のグラウンドを先に作ってもらって、そこに授業で行くためのバスも手配して、それからバス要員の先生も1人宮古市で雇って、それから二中に仮設を建ててもらいました。

鍬小は、校庭の3分の2は子どもが使うようにするのでということで、地区のためだから、と校長先生も認めました。その状況で運動会もできました。

重茂は、いくら探しても土地が重茂小学校にしかないのです。それで重茂小学校の校長に、重茂地区全体のために貸してくれとお願いしました。2年経ってから、土地の所有者にお願いして、学校の近くに仮設の外遊び場を作りました。

田老三小は、プールの脇なら全く授業に差しさわりがないということで、6棟仮設を建てました。

赤前小は、校長先生が最初に、震災から1週間くらいで、仮設の設営をOKしてくれました。被災した地区なので、子どもたちも大切だが、「地区のために許可します」と言っていました。「大丈夫か」と聞いたら、「体育もそれなりにできますから」ということで、全面に仮設を建てました。でも、1年経ってから、近隣に結構広い仮設のグラウンドを建てました。

一番大変だったのは、赤前小だったけれども、それも1年を経て、運動会ができるくらいの広さの仮設のグラウンドを作ったので、不便はかけるが、他の市町村に比べればいいのかなあと思います。私が教育長をやめてからも市長さんは、学校から先に仮設を撤去する方針だったので、それはいいことだなと思いました。(＊仮設住宅用地提供の)話は、校長と教育長の間で相談しました。本庁側からすれば、早く仮設を建てたかったのです。

退職して無職になって街を歩いてみて、子どもたちに公園がないのは気の毒だと思いました。子どものある親御さんは、公園で子どもを遊ばせたいだろうな、小学生には思いっきり遊べる校庭・公園が欲しいよなと思いました。

佐々木先生は、教育長を平成22年4月1日から平成25年8月まで勤めた。当時の事を振り返り、インタビューの最後をこう締めくくった。「辞めてしまったら、あの時の記憶が全て飛んでしまったような気がす

る。よそ見をする暇もなかったのかな」、と。

C　子どもの生活を取り戻すために

次は、避難所生活には、どのような問題があり、それをどのように解決していったのか、その過程を母親たちからの聞き書きから明らかにする。

1　避難所を出て転々とする

A9で紹介した田老の**花輪さん**は、翌日になって線路を歩いて北高校にできた避難所に行った。ここではその後の生活について記しておく。

北高校から樫内、そして街中へ

その後、樫内にいる親戚の家で1週間ほどお世話になりました。薪ストーブのある大きな家で、布団もろうそくもありましたが、停電でまだお風呂に入ることはできませんでした。

その頃になると、宮古市街地の方では電気が復旧しました。叔母が「電気が通いお風呂にも入れるから」と誘ってくれたので、それから1か月ほど滞在しました。1週間ぶりにお風呂に入ることができました。でも、親戚とはいえ気兼ねもありました。また、避難生活を続けるうちに、子どもたちが次々に風邪をひき始めました。車も流されてしまったので、病院に連れて行くのにも困りました。

別の街に住む母がお金を持って来てくれたので、そのお金を持って薬王堂に子どもたちの物を買いに行きました。長蛇の列ができていました。どこから来たのかと聞かれたので、「田老から来た」と言ったら、前の方に並べるように店員さんを説得してくれました。

その後、3週間ほど夫の実家に行きました。まだ電気も水道も復旧していませんでした。そうこうしているうちに、仮設住宅ができて移ることができました。一番上の子がまだ幼稚園の時は、夫の仕事の関係で盛岡の幼稚園に通っていたのですが、その頃の友達が物資をたくさん送ってくれました。

少ないもので暮らす

仮設住宅は収納力が低く、片付かないことが一時情報番組などで盛んに取りざたされていたが、花輪さんのご自宅（仮設住宅）は、大家族にもかかわらず、驚くほど物が少なくすっきりとしていた。

「田老の人は近所付き合いが密なんです。何かもらったら必ずおすそ分けをするし、もらったらあげる。物をもらってもらいっぱなしの人はいない。たくさんいろんな方にいただいたし、いただいた物を分け合ったりしたので、物はなくても何とかなりました。家族の命さえあれば、あまり困ることはなかった。物はなるべく増やさないようにしています。家族がいれば大丈夫」と話していた。

2　グリーンピアでの避難所生活

同じく、**前田恵美さん**の事例から、グリーンピアでの避難所生活についても記しておこう。

グリーンピアの避難所での生活

夫は漁協に勤めているのですが、直後の3、4日は、消防団として捜索作業に出ていました。内陸にいる弟が探しに来てくれたので、消防団の活動で残る夫と、役場に残って水汲みのボランティアをするという中学生の子を残して、5人の子を連れて実家に避難しました。途中、下の子たちを連れて宮古商業高校に避難していた長男を迎えに行きました。実家には、2週間ほど滞在しました。しかし、夫たちとの連絡が取りづらいため、グリーンピアの避難所に移動しました。

最初の3、4日はグリーンピアのホテルの廊下で過ごしました。布団を人数分借りて、廊下に並べて生活したのです。赤沼正清さんがリーダーになって、掃除係などを割り振りました。私はトイレ掃除をしました。朝のラジオ体操のほか、時間割りも決まっていました。避難所の消灯時間は9時でした。食事は配給でしたが、最初の2日くらいは食べられませんでした。

その後アリーナに移って3、4日経った頃、小さな子どもがいる人やお年寄りが、優先的にグリーンピアのホテルの部屋を借りられること

になったので、2か月ほど仮設住宅ができるまでそこに滞在しました。

アリーナ4日目くらいから女性のリーダーが提言して、女性が着替えたり洗濯物を干す場所ができました。汚れた衣服は、最初は手で洗濯して、池の周りの木に干したり、木で物干し台を作ったりしましたが、そのうちプールに洗濯機が5、6台置かれました。使用時間が決まっていたため、朝の4時くらいから洗濯の順番待ちをしました。

子どもの様子

アリーナにいる頃から子どもたちの生活が荒れてきました。阪神淡路の時も学校が荒れたと聞きました。ひどい災害が起こって、良いも悪いもなくなってしまったのではないかと思います。

グリーンピアにはボランティアもたくさん来てくれました。AKBや渡辺謙さんも来てくれて、子どもたちは楽しんでいました。

プールの脇に自衛隊が来て、グリーンピアではごはんを炊いてくれました。交流はあまりなかったのですが、長男が自衛隊に入ったのは、震災の時自衛隊に助けてもらったことがきっかけでした。中学生の子は、津波を見ていました。子どもたちの作文を読むと、大人より田老の役に立ちたいと真剣に考えていることがわかります。

学校は、4月の下旬になって再開しました。中学校は被災したので、小学校の3階に夏まで間借りしての再開でした。田老の給食センターは残ったので、割合と早く給食が再開しました。高校の方は、学校か県でしばらくは昼食を用意してくれました。

3　浄土ヶ浜パークホテルで

A4で紹介した、日立浜の村木めぐみさんの一家は、その後、どうしたのだろうか。**村木さん**の話に戻ろう。

浄土ヶ浜パークホテルに行く

浄土ヶ浜パークホテルは、町内の人以外の人でごった返していました。客室にはお客さんが泊まっているので、ロビーのじゅうたんの上に畳を敷いて1人ずつに布団をくれました。自家発電機で自販機やテレビも動いていました。そこには田老の人も、水産業の仕事で来ていた中国人も10人は避難していました。（＊パークホテルでは）みんなを受け入れていたのですが、避難所に指定されていないので、食料や水や重油をどうするかということになりました。母は、日立浜で民生委員をしていたので、ホテルの支配人と相談して、行政連絡委員の方と2人で、市役所にお願いに行くことになりました。

食事・トイレ・お風呂・洗濯・ガソリンが手に入らない

次の日、自衛隊が水と重油などを持って来てくれ、宮古市からは、おにぎりが届けられました。でも、硬くて食べられませんでした。パークホテルの方で、避難している女性や子どもたち、そして従業員の方々が流れ作業でおにぎりを作ってくれました。また、バンケットルームを開放して、そこを食堂にして、スープなども出してくれました。不公平が出たり、食事の時に混乱したりしないように、ホテルの方で、ナンバープレートを渡して、番号と名前のリストをつくり、チェックするようになりました。

食器はみんなで洗いました。水は出ていました。トイレの水が流れなくなったので、男の人たちがお風呂の水をバケツリレーで運んで流しました。

お風呂は大変でした。ライフラインが復旧するまでは、車がある人は銭湯に行きました。何かを買いに行くにも長蛇の列でした。市外から商品が来ないからみんな困りました。とりわけ、ガソリンを手に入れるのが大変でした。長時間並んでいても、「今日はここで終わり」と断られることもあったんです。ライフラインが復旧しても3月中はガソリンが手に入らず、動きがとれませんでした。

なんで私たちだけが？

パークホテルでは、子どもたちにアトピーやぜんそくの症状が出ました。薬はあったのですがもっと強い薬でないと症状が治まらない。夫の親戚が太田にいて、「お風呂や洗濯においで」と言ってもらったの

で、その日から2、3日おきに借りに行きました。

被災地とそうでないところの差は大きいです。被災していない人は普通の生活をしていました。大人でも「なんで私たちだけが?」という思いがありました。それでも、お風呂や洗濯をすると人間らしい気持ちになりました。

でも、パークホテルに戻る際には、「今から現実に戻るぞ!」と自分に言い聞かせました。正直、子どもたちの方が強い。子どもたちは不便な避難所生活も楽しんでいました。

いろいろな団体がボランティアで活動してくれました。お医者が来てくれたのが一番助かりました。子どもたちに薬をもらえました。

避難所で困ったことは、ホテルの支配人と民生委員である母との2人が中心となって解決していました。一人ひとりが置かれている状況は様々です。家が無事でもライフラインがないので避難所にいる人もいました。

協力して子守り

避難所では、子どもを持った親同士で、子どもの世話をしあいました。被災後、(＊私に)何もする気が起きない時期があって、下の子がわがままになりました。小学生のお姉さんたちに下の子を見てもらったり、ひとりのお母さんが、「休んでて、みんなで預かるから」と一人になる時間を作ってくれたりしました。

その仲間とは、今でもつながっています。避難所生活で仲良くなったのです。数か月の赤ちゃんを持つ人から高校生のお母さんまでいましたが、同じ小学校の人を中心につながりました。いろんな状況の人がいて親同士、子ども同士協力し合ったのです。

シーアリーナ(宮古市民総合体育館)の避難所へ移動する

1か月したら、市の方から、パークホテルが工事関係者を受け入れるので、出て欲しいと言われました。市長が説明に来て、市内の避難所を小山田のシーアリーナに統合したいということでした。ちょうど仮設住宅の申し込みがはじまった頃のことです。

小山田に移る頃、子どもの体調が思わしくなかったので、大田にある親戚の空き家を借りて、毎日のように避難所に通うことにしました。4月から上の子はバスケのチームに誘われて行くことになりました。

勉強スペースを作ってもらう

アリーナにはいろんな人たちがいました。京都から来ている警察の人は、子どもたちを毎朝送りだしてくれて、毎夕迎えてくれました。また、子どもたちが勉強するところがなかったので、警察の人が廊下にテーブルを置いて勉強場を作ってくれました。壁に「めざせ!警官!勉強しないとなれないぞ」という手書きのポスターが貼られていましたが、遅くまで気にせずに勉強ができたし、勉強も楽しくできました。京都の警察の人たちはコミュニケーション能力が高い方々でした。また、夜勤に出なければならない人の子は、みんなで見守りました。困ったことがあると、母に伝えて、母が解決に動きました。

仕事再開

仕事は6月から再開しました。水産加工会社の中では早い方でした。仕事が忙しくなってきたのですが、アリーナで何かイベントや炊き出しがあると教えてくれました。美容師さんが来て、子どもの髪をカットしてもらいました。それから、盛岡の仕出し屋のしもやさんのお食事が届くようになりました。ドラの組合員は、店にリクエストすることができるので、「ドラさんの方がいい」と言う人もありました。

避難所で息子は、ごはんを食べさせてもらうなど、面倒をみてもらっていました。子どもたちと自分は、いつもアリーナに寄って家に帰りました。

ミニバスケとユニフォーム

小学校のミニバスケは5月末に再開しました。宮古小学校を拠点にやっていたチームだったのですが、震災で一時的に田代に移ったので、

送り迎えが大変でした。コーチは学校の先生でした。だんだん普通に内陸への遠征も始まりました。被災した子は、避難所に帰るので、その違いはあるだろうなという思いがありました。

ミニバスケのユニフォームは津波の水に浸かってしまいました。最初、ユニセフに電話をしてユニフォームを支援してもらえないかと話したら、前例がないと言われたのですが、ケアジャパンを紹介してくれました。審査が通り、新しいユニフォームができました。

学校にもたくさん支援物資やサービスが来ました。ジャージや制服も支援してもらいました。海外からの支援はカラフルで喜んでいました。支援は最初は被災者だけでしたが、最終的には被災していない子にも、全校生徒にわたりました。支援をしてもらうということを体験できたのは良かったです。

外練習ができない

宮古への支援の多くは田老へ行きました。数年たって話題になった時、「鍬ヶ崎は忘れられているようで寂しい」と母が言っていました。上の子の学年は2クラスでしたが、以降は全学年が1クラスになりました。昔は学校が地域の中心でしたが、今は地域の人も少なくなり、地域の人みんなが子どもをみてくれるということはなくなりました。通学路は工事の人も水をまいたりしているのですが、土埃で咳き込むのでマスクをするようになりました。

中学生は部活でも危険なので走れません。走らないようにと要請がありました。部活の外練ができないんです。震災以降、行動が制限されることが多くなって、体を使うことが少なくなりました。でも、子どもにはいろいろとチャレンジさせたいのですが、規制する親たちが増えてきました。私と友人は、夕方、45号線沿いを浄土ヶ浜から佐原3丁目まで、息子たちを共に走らせました。内陸の子と体力の差がつかないように気を付けていました。

瓦礫の街を見せる

上の子には、被災後、瓦礫を片づける前に現状を見せておきたかった。子どもにはみせたくないという人もいましたが、生まれ育った町で何が起きてどうなったかを見ておいてほしいと思いました。日立浜の実家や住んでいたアパート、鍬ヶ崎の町を見せました。「この景色を覚えていて、あなたの子どもに話して聞かせてね」と話しました。息子は「わかった」と言いました。

4　スクールバス問題を巡って

子どもの生活を取り戻そうと奮闘する村木めぐみさんの話の中で、特に力が込められていたのが、スクールバス問題である。震災の1か月後、市からパークホテルにできた避難所からアリーナへ移動を要請された際に、移動を受け入れた決め手となったのが鍬ヶ崎小学校までスクールバスを市の方で手配してくれるということだった。だが、それを実現してもらうには、かなりの努力と様々な人の力添えが必要だった。

市では、子どもたちの学校までバスを出してくれるということだったのですが、バスはフィッシングセンターまでしか行きませんでした。そこから学校までのかなりの距離を、小学生に、全く片付いてない瓦礫の中を歩いて行けということでした。それは、危険だし、話が違う。また、アリーナには、小学生に加え、中学生が3人いましたが、アリーナから二中までもバスが出ないということでした。

避難所生活の中、毎日親が送り迎えすることは困難であった。ましてや、転校させることは子どもへの負担が大きすぎる。何度もアリーナを訪れていた市長にこうした状況を直談判することも叶わず、途方に暮れる親子たちに、やがて救いの手が差し伸べられた。子どもたちの窮状を看過できない大人たちが現れたのだ。

みんなで通学の足についての対応を考えました。知り合いにいわて生協の理事がいて、その人がドラの店長に相談してくれました。

こうして店長が2人交代で、小中学生のスケジュールに合わせて、

送迎をしてくれることになりました。車は7、8人乗りのワンボックスカーを無料で貸してくれる人がいました。

鍬小に通う小学生は5人、中学生は3人いましたが、店長たちはそれぞれ別に送り迎えしてくれて、中学生の部活の朝練にも対応してくれました。毎日朝晩2往復。風邪をひいて乗らない場合は連絡をしました。

そのうち、これは教育委員会に言うべきだということになりました。でも、私たちのようなおばさんが行っても相手にしてくれないと思われました。そこで、市会議員さんに頼むことになりました。

結局、議員さん2名と、いわて生協の理事さんとユニセフ担当の人、ドラの店長、親3名の総勢8名で教育委員会に行きました。教育委員会の方は、4月だったので、子ども一人一人の事情はわからないようでした。その様子を見て議員さんが、「何をやっている！被災地に行け！」と怒っていました。

後日、ジャンボタクシーで小中学生の時間を合わせてアリーナまで送迎をしてくれることになりました。これまで送り迎えをしてくださったお礼に行くと、ドラの店長さんは、「困っている人がいれば、当然のことだ」と言われました。

元ドラ店長・**菅原紀夫さん**（昭和36年生）は、次のように話している（取材日：２０１５年６月29日）。

アリーナの避難所には、震災直後から鍬ヶ崎から来ている人が結構いました。鍬ヶ崎小学校にも愛宕の避難所にも入れなかった人たちでした。その中に第二中学校に通う中学生が3人、鍬ヶ崎小学生が4、5人いました。

ドラの北側は6㍍も冠水しましたが、店に被害はなかったので、震災の翌日から店頭で販売を始めました。3日目には電気がつき、営業を本格的に開始したら、2千人を超える数のお客さんが開店前から並びました。

そんな中、個人的にお母さんたちにスクールバスの事を相談されました。震災で子どもの命は助けた。今、アリーナの避難所にいるが、元の学校に通わせたい。だが、アリーナは小山田学区なので学区を越えて登校させるのは無理だと言われたということでした。

いわて生協に期待したのですが、責任問題になるということでした。でも、子どもは前と同じ学校に通いたいのだ。「自分でやればいいんだろ。自分で責任とればいい」という気持ちになりました。

そこで、葬祭会館のマネージャーを誘って2人で、朝晩、子どもたちの送り迎えをすることにしたのです。

中学生は中総体前だったので、5月中旬まで、朝は7時半までに行かねばなりませんでした。それでは小学生には早すぎる。帰りは小学校3時、中学校5時半に時間を決めて行くことになりました。校門のところに警備の人が立っていたので、私たちが来ることを、お母さんたちが学校の先生に伝えてくれていたので、助かりました。

子どもたちは当初、車内で何もしゃべらなかったのですが、送り迎えが終わる頃には明るくなっていました。子どもたちの立ち直りは早かった。

その間、お母さんたちに頼まれて市教委へも交渉に行くことになりました。私たちが送迎をするようにしたら、1週間くらいで教育委員会だか市だかが動いたので、もう必要がなくなった、とお母さんたちがお礼に来てくれました。

5　瓦礫の中の自宅で暮らす

鍬ヶ崎に住むBさん（昭和46年生）には、震災当時小学生と幼稚園児の子どもがいた。被災後、盛岡に転居する話も出たが、子どもたちが転校を嫌がったため、被災後の瓦礫の町と化した鍬ヶ崎の自宅にとどまり、学校に通わせたという。当時の鍬ヶ崎地区の状況を聞いた（取材日：２０１５年３月７日）。

両親に留守番を頼んで、車で家族旅行に出かけており、ちょうど宮古に帰る日に震災が起きました。夜に、両親が津波で行方不明になり、捜索中であることを、宮古在住の叔母から電話で聞きました。翌日の

夜には、遺体で見つかったと聞いたのですが、高速も一般道も封鎖されていたため身動きが取れず、なんとか14日の夜になって盛岡に入り、ようやく宮古に戻ることができました。

鍬小の先生たちが私たちと連絡が取れずに心配していたので、宮古に戻ってから小学校に行きました。鍬ヶ崎の町には入れなかったので、上の道を通って小学校まで行きました。学校で通信簿や学校の連絡先などが入った封筒をもらいました。学校はしばらくお休みになりました。宮古ではまだ水道が出なかったので、盛岡に単身赴任している夫のところに持てるものを持って行くことになりました。盛岡にはライフラインが生きていたのです。

ガソリンが入れられるようになってから、何度か家の片付けに来ました。鍬ヶ崎の自宅は、震災の5年前に新築したばかりでした。道ができて家を直せるならと思い、子どもたちを兄の家に預けて家を見に来ました。家は見えたのですが、周りが瓦礫で中に入れず車から見ました。2階まで水が入り天井は落ちていました。後に、羽織るものと貴重品を最優先で回収しました。子どものランドセルは津波のあとも2階の机の上にありました。

瓦礫が端に寄せられてから、子どもたちを連れて来ました。みんな静かで、何も言えないようでした。事実は知らなければならない。映像を見ていても理解はできない。でも、大人でも難しい。両親の火葬に立ち会わせたことも良かったのか自問しました。

4月末まで盛岡に暮らして、日帰りで鍬ヶ崎に来ていました。家を建てた岩泉の工務店に直す方向で家を見てもらい、材料を何とか手に入れて2階の1部屋を何とか住めるようにリフォームしました。毎週、金曜日に盛岡に帰り、月曜日の朝早くにこちらに来ました。

学校がある日は鍬ヶ崎で過ごしたのですが、玄関がないし怖かったです。当時、留守宅を狙って泥棒が来ていました。物騒なので、カギをかけてもらいました。隣の家の人も、震災で亡くなったのですが、被災した家に残された箪笥の引き出しが全部開いていました。泥棒の仕業です。背筋が凍りました。電気はまだつかないので、夜はランタンの明かりで過ごしました。震災直後は真っ暗で物騒で不安でした。そんな中、大阪から来た警察の方が夜2回見回りに来てくれました。

途中で電気をつないでくれたので、盛岡でレンジを買って持って来ました。宮古に買い物に行っても物がないんです。お惣菜なんてない。ずっとカップラーメンばかり食べていました。しばらくして、本当に結構経ってから、届け出をすれば、お弁当を配ってくれることを知りました。平日の夕方、避難所のある小学校に行くと、夕飯と朝食をもらえました。2週間くらいそうやって食事をいただきました。

家を直して、6月には下の階に和室もでき、仏さまも安置できました。7月になって、ようやく最小限住めるようにはなりました。

子どもは、周りが暗くて怖かったのではないかと思います。上の子はしっかりしている風でした。下の子は、まだ理解できない年頃だったので、夜部屋で「おじいちゃんおばあちゃんもう来ないの？」と聞いていました。宮古では先生が子どものケアをしてくれました。下の子は幼稚園に通っていました。園は千徳駅の方なので無事でした。小学校より先に保育を再開していましたが、学校にあわせて登園することにして、車で送迎しました。

月日が経って一層悲しみが募ります。下の子が小1の時に胸が痛いと保健室に行きました。おばあちゃん子だったので、気持ち的なことだろうかということでした。雰囲気が似た人を見ると先生に「僕のおじいちゃんおばあちゃん亡くなったの」と話したと聞きました。先生たちがケアしてくれました。今は言わなくなりました。先生の中にも家を流された人がいるのに、学校でみんなのケアをしてくれたのです。

防災用品については、震災前は、懐中電灯くらいは用意していました。震災後は、水、乾パン、アルファ米などを買っています。この間津波注意報が出たので、1日分の着替えや乾パンは車に乗せたままにしています。避難する時は、車で上がって中里に住む兄のところに行きます。揺れたらすぐに逃げることにしています。

6　津軽石での避難所生活

先に紹介した保育所の所長の証言の中に「7時過ぎには、炊き出しのおにぎりをいただいた。温かいおにぎりで、みんな喜んだ。」（A2）とあったように、津軽石ではすぐに炊き出しが行われた。

相当な被害を受けたのになぜ、津軽石では当日の夜に炊き出しができていたのか、その仕組みについて明らかにしておこう。

温かいおにぎりの炊き出し

津軽石小学校に避難した保育所の先生たちは次のように話していた。

津軽石では「婦人防災委員」の人が、昔の学校の給食室を使って炊き出しを行っており、温かいおにぎりなどをいただきました。

最初は地域の人がわかめやお米を持ち寄ったようです。お米を出した人は自分たちが食べるものがなくなって困ったと聞きました。

炊き出しの訓練ができていた

津軽石の**中島ムツ子さん**は、兄と共に甥の子どもを保育園に迎えに行き、地域の人とともに小学校の裏山に避難していた。そのあとの炊き出しの様子を、以下のように語っている。

裏山から小学校に降りてくると、女の人たちはすぐに津波に遭わなかった家を回ってお米をもらって歩き、集めたお米でおにぎりを作りました。津軽石では、毎年の避難訓練の時に訓練をしているし、震災前は小学校の運動会の時もおにぎりの炊き出しをしていたので、常に訓練ができていたのです。炊き出しをすることは、口伝えで情報が回ってきます。それは昔からのことで、そうした体制ができているのですぐに食材が調達されます。

震災の時は、小学校の給食室を使いました。ずっと使われていなかったのですが、設備を残しておいたのです。今回は、自衛隊を定年した盛合さんがリーダー役を引き受けてくれて、地区のお母さんたちが手伝いました。盛合さんは最後の日までいて、1日中食事を作ってくれました。キノコを調達して来てくれたこともありました。サラダも1人分ずつトレイに乗せてくれて、ごはんと味噌汁とおかずを作って、いつも温かい食事を出してくれました。仕事に行く人には、お弁当のおにぎりまで持たせてくれたのです。

だから、何も持って逃げなくても、物資がなくて困ることもありませんでした。農家の人が出した大きな米袋が並ぶほどで、体育館のステージはすぐに支援物資であふれました。店が商品を全部持ってきて寄付してくれたり、赤前の冷蔵庫の魚をもらったりもしました。

2日目、一番先に来たのはJRからの支援でした。家を失った人から順に受け取りました。大きい避難所にはすぐに支援物資が届いたんです。グラウンドではドラム缶で火を焚いてあったし、人がいるところには看護師も医師も介護士もいました。しばらくすると、いろんな大学の巡回医療が来て助かりました。

7　震災が子どもに与えた影響と心のケアについて

(1)　津波ごっこ　体育館に入れない　津波映像でパニック

伊藤直子さん（昭和43年生）は、あの日、2歳のお子さんを赤前の実家に預けて仕事に出ていた。職場から様子を見に行った時のことを話してくれた（取材日：2015年3月6日）。

自宅は藤の川なので被害はありませんでした。震災時2歳の子どもは赤前の父母が、毛布をもって車で高台に連れて逃げてくれました。子どもは黙ってよく言うことを聞いたそうです。携帯がつながらず実家と連絡が取れませんでした。職場（社会福祉協議会）にいて、2晩仕事で帰れなかったのですが、課長が「とにかく帰りなさい」と言ってくれました。

長沢から津軽石の方を通って行きましたが、道がなく、山道で迷ってしまいました。ようやくたどり着いた赤前の町は、変わってしまってどこがどこだかわかりませんでした。

なんとかたどり着いた赤前小学校の体育館の扉を開けたら、お年寄りの真ん中で小さな息子が踊っていました。無事を確認して、すぐにまた仕事に戻りました。

宿泊当番の時は、子どもを仕事場に連れてきて一緒に泊まりました。3月いっぱいは職場と避難所を行ったり来たりしました。水は近くの

人が持って来てくれました。食事は、1つの即席ラーメンを子どもと2人で食べました。電気がないので、7時くらいに「眠る時間」と言ったら、素直に寝てくれました。

避難所ではオムツを替えるのが一番困りました。大便はトイレの隅っこで替えました。1週間後、水が復旧してようやくお風呂に入ることができました。ガスは震災後も使えました。

震災前には、自宅には何も災害の準備はありませんでした。赤前の母は、防災セットの入ったリュックと、毛布とオムツ1袋を準備して持って逃げてくれました。だから、震災後はそれらと水やお米も必ずストックするようにしています。

震災後、子どもの遊びが変わりました。組み立てはなぎ倒し、ブロックで津波を再現するようになったのです。ホワイトボードにおにぎりや車の絵をかいては絵をワーッと消す。「海に食べられた」と言っていました。また、テレビで津波のシーンを見るとパニックになりました。その後も体育館のような場所に入れませんでした。避難所を思い出すからです。地震発生後3、4日してようやく避難所に迎えに行くことができましたが、母親としてどうだったのか。仕事を優先してしまったことを、つい考えてしまいます。

(2) 抱っこの必要性について

震災時、鍬ヶ崎学童の家に務めていた**田畑輝彦先生**は、千徳学童の家に移動となり館長をされている。震災後、子どもたちに見受けられた様子について、次のように話してくれた。

津波の後は、学童の家にあったおやつ1週間分やおもちゃを持って避難所に行き、遊びをしました。避難所には勉強する場所がなかったので、学童の家の子以外にも開放しました。畳の部屋はお年寄りに使ってもらいました。被害にあわなかった子たちは避難所には来ませんでした。

宮古の学童の家は、シルバー人材センターでやっています。津波のあとは、働く人が増えたし、1人でいたくない子どもも多くなったため、利用が増えました。

子どもたちを安心させるためには、声掛けが大事だと思います。「元気？」とか「そのリボンかわいいね」とか。抱っこしたり、孫をかわいがるようなものです。

海辺の地区で津波を見たり、肉親を亡くしたりした1年生の子が引っ越して来て、4月から千徳学童の家に来るようになりました。おじいちゃんと犬を津波で亡くしたそうです。表情もなく、ご飯も食べられない状態で、お絵かきをさせてもミミズのような絵でした。

その子を1週間、ずっと抱っこして過ごしました。そのうちに、ちろっと友達と遊んで、また抱っこに来るようになりました。まさに学童の家の孫です。チョコレートを上げたりもしました。

仮設住宅ができて、千徳学童の家にも子どもが増えましたが、あんなに心が傷ついた子はいない。津波の危険は認識していましたが、始めて津波の怖さを自覚しました。

千徳に行ったばかりの頃は、子どもたちの間で積み木を組み立ててザーと倒す遊びや、サイレンの音のモノマネ、「宮古市は必ず復興します！」という市長さんの真似が流行っていました。

震災後3か月くらいは、サイレンを聞くと震災を思い出し、大人でもドキッとしました。

(3) 津波ごっこ・地震ごっこ

震災後、子どもたちの津波ごっこは、一時テレビなどでも話題になった。こうした子どもの遊びの変化については、保育園の先生方からも聞いている。

赤前保育園の鈴木先生によると、震災後の子どもの様子がどことなく乱暴になったという。また、津波ごっこ、地震ごっこ、無線や津波警報の放送の真似などの遊びをするようになった。

それを見た保育士たちは、「不安になって、やめさせようとしましたが、ユニセフの方から、そうやって子どもたちは、震災によるストレスを発散しているのだとアドバイスを受け、構えずに見られるように

なりました。大人が不安な時、子どもたちは落ち着いていたので、その反動が後から来るということでした」と、話している。

⑷　大切な時期に遊べていない

石崎公子先生（昭和27年生　取材日：２０１５年）は、育児相談、家族支援などを歴任し、40年保育所に勤務した経歴を持つ保育の専門家である。震災後、千徳保育所に赴任した。

「3・11を経験した子どもたちが、今、学校で落ち着きがないという評価を得ています。それは当然のことです。大事な時に遊べていないのだから。この年代の子ども全体をとらえて長期的な教育をしないといけない」と、石崎先生は言う。

子どもの心と身体の成長にとって、思いっきり体を動かして遊ぶことは重要である。先生は震災で十分に遊ぶことができなかったことの及ぼす影響を懸念した。

こうしたこともあり、千徳保育所では、被災した津軽石保育所の園児や先生たちに保育の場を開放した。遊び場の提供が必要だと感じたからだ。石崎先生は、次のように話している。

1日だけ、短時間であっても、津軽石保育所の子どもたちに通常の保育を経験させてあげたかった。

マニュアル通りにしていては対応できなかったんです。千徳保育所までは距離があるので、役所のマイクロバスで職員と子どもたちを集め、職員にはマスクを外して保育をするように指示しました。子どもたちはのびのびと走り回っていました。

また、震災から必死に子どもたちを守った保育士の先生たちに対する心のケアの必要性についても次のように指摘している。

保育士たちの慰安でバス旅行をした時、合唱を聞きに行ったのですが、涙が出ました。心のケアがどれだけ必要かがわかりました。被災後、楽しいこと、イベントの必要を感じました。

⑸　スクールカウンセラーによるケア

現在の学校における心のケアに関しては、現・高浜小学校校長の**中村登志江先生**は次のように話している。

普段カウンセリングしたり、常に状況に気を付けて、それに基づいた声かけをしています。児童全員が対象です。月2回はスクールカウンセラーが学校に来て、学年ごとに全員カウンセリングしたり、気になる子をみてもらったりしています。また、担任も学期に1回、個人面談を受けています。

それとは別に、宮古市全体で、お母さんを亡くした子もいるので、巡回のスクールカウンセラーに来ていただいて、教育センター、県の心のサポート事業で年1回アンケートをしています。心配な子にはケアカウンセラーが悩みを聞いてくれます。このアンケートからは、専門家が見れば反応が出ているのがわかるのです。

さらに、今、心のケアの授業をしています。子どもから話を聞いて、「それはこういうことなんだよ」と返してあげるような授業を定期的にやっています。

D　避難体制の確立と防災教育の大切さ

1　小さな子に向けて

⑴　しつけとしての防災教育（家庭において）

宮古の人々の間には、過去の記憶が個々の家庭で語られ、しつけとして伝承されている。それが実際の避難につながり、多くのいのちを救っている。ここでは、その具体的な事例を2例紹介する。

①　津軽石で

津軽石の中島要一さん・ムツ子さんご兄妹は、薬や電池、アメや水、使い捨てカイロなどが入った非常持ち出しリュックを、いつでも身近に置いている。また、孫の母親には、つねに毛布と水とおむつを車に入れておくように言っている。

お二人は、子どもの頃にチリ津波を経験したので、地震があったらすぐに何も持たずに小学校の上にある畑に逃げることにしている。「時間がかかっても必ず迎えにいくから」と、小さい時から教えられてい

たからだ。お二人の父親は消防団員で、明治の津波で田老が甚大な被害を受けた時に、津軽石から復興の手伝いに通った経験があった。そのため、家ではどんな小さな地震でもすぐに逃げることにしていたという。

そして、今度は幼い孫にも、「いつも、何かあったら家から出て叫びなさい。お向かいのおばさんに、『○○ちゃんです。一緒に連れて逃げてください』と言って、まずは学校に逃げなさいと、折に触れて話して、時々練習させています。また、絶対に1人で行動してはいけないとも言いつけています」とのことであった。

② 田老で

田老の**花輪香代子さん**は、以下のように話す。

震災前には特に災害への備えはしていませんでした。「大きな地震が来れば、赤沼山に逃げろ、身一つで逃げろ、避難する時には車も使っちゃダメだ」、と小さい時から親に言われていたので、非常持ち出しについては考えていなかったです。

赤沼山は、自宅のすぐ目の前にあるし、何かあったら身一つですぐ山に逃げればいいという感覚でした。小学生の子どもたちにも「もしもの時は赤沼山だよ」と言い聞かせてあったので、そのことをよくわかっていました。

(2) 園児や生徒に実際の経験を伝える

一方、実際にチリ地震の際の津波を体験しており、それを園児や生徒に伝えている先生たちも少なくない。

震災時に高浜小学校長だった大洞晴洋先生は、昭和35年のチリ地震津波の時に小学生で、津波を見に宮古橋まで行ったという。

また、宮古保育園では、毎月の避難訓練とその後の「津波のお話し」に力を入れているが、園長自身の体験が、防災教育のベースにあると言う。

チリ地震の際の津波を覚えています。海岸近くにいたら、5時頃にパトカーが津波が来ると放送していました。家に戻って父母に伝えると、「地震がないのに津波が来るわけない」とえらく怒られましたが、山に逃げたんです。

上から見ていると、川から水が来て、逃げる人を飲み込む様子は、獲物を取るようでした。また、子どもの頃、おばあさんたちから昭和8年の津波の経験を聞きました。アイオン、キャサリン台風時の市内の被害も覚えています。今、保育園では、子どもたちに「お父さんお母さんに逃げるように言いなさい」、と伝えています。

(3) 避難訓練

防災教育の要は、避難訓練である。実際、地震発生と同時に、多くの幼い子どもたちが瞬時に退避姿勢を取っている。無事に避難できたのは、訓練の賜物であった。そけい幼稚園の理事長と園長が言うように、「子どもたちには、言葉で理屈を説明するよりも、身体で覚えさせるのが何より大事」なのである。

具体的にどのような訓練が行われているのだろうか。

避難訓練と津波のおはなし「津波が来たらどうするの?」

宮古保育園では、毎月1回避難訓練をしている。地震・津波、火災、洪水など、月ごとの訓練である。**鈴木哲夫園長**には、訓練の様子を説明してもらった。

まず非常ベルを鳴らし、〝訓練　○○発生だ〟とアナウンスします。地震の訓練は、津波が来ることを想定しているので、ベルと同時にドアも揺らします。子どもたちはすぐに先生のところに集まる。ベルが鳴ったら先生の所へ集まるように、入園してすぐに指導しているからです。室内でも外でも同様です。続いて、事務室から〝先生たちは防災頭巾をかぶせてください。〟〝子どもの持ち物や上着を持たせてください〟とアナウンスし、次に避難を指示します。

天気を見ながら行いますが、園庭の遊具に集まる時には、中ズックのまま外に出ます。津波の訓練の時には、高台にある宮小に行きます。職員は、クラスの点呼をして人数を報告します。訓練の想定によって、

避難所に行くか、部屋に入って紙芝居や園長のお話しで津波の恐ろしさ、波はすごく早いということを教えます。

今の子たちは、プールで遊ぶので、砂浜で泳いだ時に感じる波の引く力がわからないのです。そのため、園長が〝津波が来たらどうするの？〟と聞き、〝高いところに逃げます〟と子どもたちに答えさせる訓練をしています。同様に、「てんでんこ」や「物を取りにいかない」ということも伝えています。物より命が何よりも大切ですから。

(4) 注意報・警報発令時の対応について

これまでの報告の中で、度々、子育て施設における警報発令時の保護者による引き取りについて触れてきた。非常時の引き取りは、全国的に見ても極めて一般的なことであり、各施設では、引き取り訓練も行っている。だが、その際、通常意識されるのは、迎えに来た者が保護者か保護者の委託を受けた者かどうかの確認についてであり、引き取りのタイミングや引き取り後の行き先については、ほとんど顧みられることはない。

他方、迎えに来る最中や、引き取った後に津波による犠牲者を出した宮古市では、震災後引き取りのタイミングを重要視するようになった。特に、浸水地域を通って来ることが懸念される場合は、警報が解除されるまで迎えに来ない。警報発令以前にすでに迎えに来ている場合は、一緒に安全な場所に避難するようになっている。

筆者は、取材を通して出逢ったすべての先生たちに、このことが強く意識されている印象を受けた。先生方は、犠牲を出した経験を教訓として共有し、それを自分にも起こりうることとして捉えているようだ。

ここには命を預かる先生たちの並々ならぬ覚悟がある。危険が迫る警報発令時、責任を持って子どもたちの命を守るので、信用して欲しいと言うのだから。

市から警報・注意報発令時対応に関する基本方針が示された

こうした現場の意識が高まりを見せる中、２０１５年になって、まだ実験段階ではあるものの、ようやく市の方から市立保育所に向けて、津波注意報、警報発令時の行動に関する基本方針が示された。（取材日：２０１５年10月）

宮古市は大変広い。想定される危険はそれぞれの施設で異なっているため、一般化された行動指針を作るのは難しい。それゆえ、これまでは個々の施設の判断に任され対応がまちまちの部分があった。それで、現場の先生たちからの要望があり、市としての基本方針が検討されたのである。

今回出されたのは、警報と注意報とに分けたフローチャートで、それぞれ、いつ、どこで発令されたか、そこが浸水域か否かで、取るべき行動が示されている。また、併せて職員の対応についても基本的姿勢が出された。

さらに、「※児童登所後について、原則として、警報が解除されるまで、児童の引き渡しは行わないこととします。但し、浸水区域を通らずに帰宅できる等、安全が確認できる場合には帰宅可とします。この場合でも、引き渡した児童の確認を確実に行います。また、児童を引き渡す際の相手は、当該児童の保護者のみに限ることとします」と明記されてもいる。

基本方針が示されたことによって、各施設では、これをもとに個別の対応が考えられる。また、市の方針を示すことで、保護者の理解も得やすいという利点があると、保育士の間でも一定の評価を得ている。

だが、問題も残されている。例えば、こうした図式からはみ出す事案や事情がある時に、誰の責任でどうするかは、未だ明確になってはいないようである。また、児童を引き渡す際の相手が保護者のみに限定されたので、非常時に児童引き渡しが完了するまでの時間が長期化することが懸念される。

問題は注意報の時

警報の場合は、登所前であれば、自宅待機。保育所にいる場合は、

解除されるまで引き渡さないと、その対応が明確であるが、問題は注意報の時である。

注意報の段階では、現時点では、基本的に通常通り開所することになっている。だが、注意報を危険視するかどうかは、個々人の認識によって異なる。注意報で仕事を休む人は少ないので、自然、保育所の性格上、受け入れ態勢がとられる。つまり、児童が来る前に開所できるよう、保育士自身は、多少の無理をしても出勤せざるを得ない。

だが、宮古市では、市町村合併で市域が拡大した分、自宅からかなりの距離を通勤しなければならなくなっている場合も多く、保育士の居住地域によっては、注意報が発表される中、浸水地域をいくつも通って出勤することもありうるのだ。こうした面に配慮した人員の配置が望ましいが、現状では難しい事情があるようだ。

また、児童が保育所にいる時に危険を感じたとしても、注意報では、勤務中の保護者に迎えの要請を出しづらいという問題もある。それぞれの施設が個々に情報を集めて決断するわけだが、判断に慎重にならざるを得ない。さらに、近年一般化しつつあるメールの導入が遅れているため、勤務中の保護者に電話連絡するのには、未だかなりの手間と時間を要するという。

警報・注意報時の対応に関する基本方針が示されたことは、一歩前進ではある。しかし、こうした問題の解決に向けての歩みが、今後さらに加速されることが期待される。

2　小学校における防災教育

(1)　平成17年度前後の改革

平成17年前後、宮古市における防災教育は大きく変化した。改革を中心となって進めたのが、平成9年から震災の前年度まで教育長を務めた**中屋定基先生**（昭和14年生）であった。宮古市の学校では、この以前から、3月3日前後に各学校で避難訓練が行われており、危機管理は各学校に任されている状態だったという（取材日：2016年5月13日）。

改革のきっかけとなったのは、ある新聞記事だった。平成17年11月15日の朝、ちょうど登校時に津波注意報が発令された。その時子どもたちが海岸付近を通って通学していた。その記事では、このことを問題視されたのだ。また、その頃、宮古市には海に面した学校が22校あったが、注意報時の対応が学校によりまちまちであったことも指摘されていた。

これを機に、教育委員会へは抗議の声が多く寄せられた。50㌢以下の津波の場合は、注意報なので、必ずしも避難が必要ではない。だが、記事が出て、児童生徒教職員の命を守るためにどうすべきか、市教委で協議することとなった。

資料によると、教育委員会の対応は迅速だったようだ。記事が出た平成17年11月には、『津波発生時の児童生徒の避難体制確立趣旨』が出されている。この文書の「現状」の項には、「学区の実態によるが、児童生徒が休日等に海及び河口付近にいることも予想されることから、児童生徒に津波（注意報・警報）発生時に主体的な避難行動がとれるように、市内全児童生徒に指導する必要がある。また、宮古市で指定している「避難場所」は無人箇所が多く、児童生徒だけが避難した場合、安全を確保することが難しいばかりでなく、二次被害が発生する恐れもある」とある。

そして、そのための「今後の対応」として、3つの方針を挙げている。

「1．自分の命は自分で守るという避難の原点に立った指導を行うことにより、児童生徒が主体的避難行動がとれるようにする」。そのための具体案として、「これまでの指導に加え、各校における『危機管理マニュアル』等を参考にし、指導の充実を図るとともに、平成18年3月の配布予定の『津波教育DVD』等を活用しながら各校の実態に応じた指導を行う。」

「2．児童生徒の主体的な避難行動を支える『津波シェルター』を設置することにより、低学年の児童においても確実に自らの命を守ることができるようにする」。そのため、「設置にあたっては、保護者を中心にPTAや地区子ども会、自治会などと協議し、決定する。決定後は、

学校で集約し、各家庭に連絡する。各家庭においては、津波（注意報・警報）発生時に児童生徒が素早く避難できるように『津波シェルター』の位置の確認をする。」

「3.『津波発生時の児童生徒の避難体制確立』の指導及び『津波シェルター』の設置を通して、保護者及び地域の災害からの避難意識の向上を図るとともに、学校と保護者及び地域の連携を深めた児童生徒の安全確保に努める。」そのための具体策として「『津波発生時の児童生徒の避難体制確立』のすべての活動を通して、保護者の児童生徒の安全確保意識を高めるよう配慮する」というものであった。

平成17年に宮古の防災教育が大きく変わる直接の引き金となったのは、先に紹介した新聞記事であったが、実は17年度前後に多くの人の防災意識を高めるような様々な動きが相次いで起こっていた。

それは、まず、30年以内に70％以上の確率で宮古市を大津波が襲うとする予測がたびたび報道されたこと。また、前年に起きたスマトラ沖の地震。防災意識の高い田老町との合併。さらに、岩手大学を中心としたＩＮＳ（岩手ネットワークシステム）による津波防災学習教材の開発に宮古市が協力することとなりワーキンググループが立ち上がったことなどである。

そうした機運の高まりの中で、教育委員会主導の避難体制確立に向けての動きが始まった。

活動の柱となるのが、①津波シェルターの設置と②「津波教育ＤＶＤ」であった。

①　津波シェルターについて

中屋先生は以下のように話している。

新聞報道をきっかけに、「津波シェルター」を考えました。このネーミングには大変腐心したんです。

津波の時には避難しなさいと言っても、低学年の子にはなかなか判断が難しい。高台に上ったはいいが、津波警報が解除されるまでにはかなり時間がかかる。それまでの時間の身辺の安全をどう保つかが課題でした。それで、人がいるところで相談できる場所を一次避難場所にして、一緒に逃げてもらうことにしたのです。とにかく人がいるところ、町中に、シェルター設置のお願いに行きました。津波シェルターは市内全域に一斉に設置をお願いしました。設置場所は、各学校に任されました。その看板は、当事、西中学校に勤務していた美術の佐瀬良聡先生がデザインして、２００枚作って配布しました。津波シェルターの看板は市の方で予算を出してくれました。

写真４　津波シェルターの看板

宮古市役所

②　津波ＤＶＤの作成と活用

平成16年頃、岩手県の方からＩＮＳに教材づくりを委託して、沿岸にある宮古市にその開発協力の依頼が来た。ＩＮＳは首藤伸夫先生（岩手県立大学）や堺茂樹先生（岩手大学）などによって作られた組織である。

検討委員会でワーキンググループを立ち上げ、どんなものを作るか話し合い、メンバーとともに教材づくりをしました。教育長は顧問となりました。実際に、資料を作って授業をして、ブラッシュアップしていきました。平成16年に開発をはじめて、平成17年から本格的に教材を使い始めました。高浜小学校の岩間三輝校長（当事）が一生懸命になってやってくれました。実際に授業をしたのは、佐藤紀夫先生です。そうやってＤＶＤを作りました。そもそも、現場の先生から防災教育のための教材がほしいという要望があったんです。できたＤＶＤは、県内各地に配布されました。

では、こうした教育委員会の動きを受けて、個々の学校の現場ではどのように取り組んでいったのだろうか。

(2) 鍬ヶ崎小学校の取り組み

平成17年当時、鍬ヶ崎小学校長であった**佐々木敏夫先生**は、次のように振り返る。

防災教育の取り組みは、私が鍬小の校長だったときに、平成15、6年頃、岩手大学の堺茂樹さんが作ったＤＶＤの津波教材で防災授業をやったのがはじまりです。中屋教育長（当時）が「鍬小は津波が来るところだから、あなたのところで先にやってくれ」と言うので実施しました。その時の防災授業は、坂下正義先生が最初にやりました。「防災かるた」も彼の学年で作った。それは、毎日新聞の「防災大賞」を受賞しました。

宮古市学校防災の特徴は、震災前から津波シェルターを設けていたことです。これは、土日放課後、地震が来たとき、注意報が出たとき、学校以外にいるときに逃げる場所です。これを作ったのも、当時の鍬小が最初でした。学校にいないときの子どもたちをどうしたらいいのかと、津波シェルターを考えた。それで、と私のところに話が来たのです。

津波シェルターには、高台にある家もあったし、学校によっては通学路に津波が来る場所もあるので、そこにも設置しました。鍬ヶ崎小学校はそうだった。通学路にあって、人がいるところにシェルターを設置して、そこが津波が来るところだったら、一緒に逃げてもらおうという思いがあった。だから、教育委員会の通知としては、津波シェルターはできるだけ人がいるところが望ましいということでした。

それで、津波シェルターになる家には、「子どもが津波シェルターに来たら、一緒に逃げてください」とお願いして、看板を出してもらったのです。

子ども１１０番と津波シェルターは兼ねていません。「子ども１１０番」は、ガソリンスタンドとか床屋さんなどです。シェルターの場合は、ＰＴＡに関係した家などに頼みました。

全部で5か所、私が頼んで歩きました。鍬小では、今回の震災で2か所くらい津波シェルターだった家が流されてしまいました。

鍬ヶ崎小学校では、年2回の避難訓練や、平成16年に始まる津波教材ＤＶＤによる授業や平成17年からの津波シェルターに加えて、「津波かるた」の作成と活用、「シミュレーション模型の見学」、「津波避難マップ」の作製など、震災以前から津波に備えた独自の教育がなされていた。こうした防災教育と、震災後の取り組みについて、震災時鍬ヶ崎小学校の校長であった**笹川正先生**は、次のように話している。

① 津波かるた

平成17年には、「津波かるた」を総合学習の時に実施しました。明治期に測候所（中里団地の梅翁寺付近にあった）で働いていた人が、これまでの津波の教訓を七五調の言葉で残していたのです。それを、子どもたちに広めるために考えたのが「津波かるた」でした。それを現代風になおし、絵を子どもたちが描きました。この取り組みを中屋定基前教育長が依頼して、鍬小と田老一小の６年生に行ってもらいました。

また、これを知った久慈の建設会社の社長が、これを評価して、印刷業者に頼んでマス刷りをして、久慈の学校も含めて広めたそうです。

鍬ヶ崎小学校では5、6年生が昼休みに1、2年生とかるたで遊ぶことで、知らないうちに低学年にも防災知識が染み渡らせるような取り組みもなされた。

写真５　津波かるた

② 津波シミュレーション模型の見学

宮古工業高校では、震災以前から津波が来た時に、どれくらいの地域が侵食されるかというシミュレーション模型を作って実演していた。平成16、7年頃、産業まつりで初めて模型が披露され、その後、各学校への出前デモンストレーションが行われた。これを鍬ヶ崎小学校は一番にとりいれて、毎年、3、4年生がそれを使って勉強する時間を設

けてきた。笹川先生は、次のように話している。

もう、工業高校さまさまです。これくらいの高さの津波であれば、ここまで水が来るという、工業高校の模型の通りに津波が来ました。「あー、俺ん家も大変だ」なんて言って笑いながら見ていた子もいたわけですが、実際にそうなってしまった。それほど、正確な模型だったのです。そういうのを見ながら子どもたちは、津波の大変さを目で体験することができました。

シミュレーション模型の実演は、かなり効果がありました。テレビやDVDで観る映像に比べると、模型の方がかなりリアルに感じられました。実際、「ここ俺ん家」とわかる。そしてずっと見ていると、ぐちゃーと波が来て「やばい」というのが感じられる。それで、避難の必要を、子どもたちは考えられるようになるのです。工業高校さんには感謝しています。

③ 地域の人の力をかりた6年生（平成22年度）の「避難マップ」の制作

昔から鍬ヶ崎だけ堤防がないんです。（＊笹川先生が）平成22年に赴任したとき、いろんな情報があって、堤防の是非をめぐって町が分かれていたので、これは意識して避難させていかなければならない、と考えていました。そんな時に、海上保安庁か国土交通省の巡視船に乗って湾内を回りながら、堤防が作られている様子を海から見る機会を得ました。「ここは5㍍」、「ここは8㍍の高さにしている」という説明を受けましたが、子どもたちも鍬ヶ崎には何もないのを見て、これは逃げるしかないな、と感じたようです。

それを出発点に、「では、どうやって逃げる?」ということで、地域の人たちの力を借りて、鍬ヶ崎8つの町内一つ一つに避難ルートを作ることになりました。そうして、平成22年度の6年生が聞き取りをしながら、町内の方々と作り上げたのが『避難マップ』です。

それを印刷して町内の全家庭に配ろうと思い、教頭先生が原版を持って印刷業者に行こうと車に乗ったら、グラグラと地震が来たのです。3月11日のことでした。結局、配布できずに幻の避難マップになってしまいました。

④ 街の人へのインタビュー　6年生（平成23年度）の取り組み

平成22年度の5年生は、キャリア教育の一環で、海の恵みを生業としている魚屋さんや漁業者さん、お店の人など、鍬ヶ崎の街の人へのインタビューを行いました。「なんでこの仕事についたんですか?」とか、「やりがいは何ですか?」などの一般的な質問をしていたのですけど、3月11日の津波で、その店々が全部被災してしまった。

だが、しばらくすると、寿司屋さんを皮切りに1人また1人と連鎖的に立ち上げる雰囲気が感じられるようになったんです。それで、震災後の23年度、5年生は6年生になっていましたが、前年に取り残した店に出かけ、もう一度インタビューさせました。「いま、どんな気持ちでいるか」、「もう1度やるつもりでいるか」を聞きながら、自分たちは、今、何をすればよいか考えて来いと言って送り出しました。そしたら、お店の方々から、「もう1回やるよ」という返事をいただき、元気になったようでした。

ボート屋さんは、「やめようと思ったが、先代のお父さんが作ったボート屋という看板が残っていた。それを見たら、またやれということかな、ということで再開することにした」と話されました。このような素敵な話を彼らは聞いてきたのです。

報告を聞きながら、このままで終わらせるのはもったいない。シナリオを書かせて劇を作って上演を目指そうと思い、プロの脚本家や音楽家やカメラマンに入ってもらって、いろんな段階を踏みながら「輝こう鍬ヶ崎」を作り上げ、11月の文化祭の時に発表することにしました。当然、在りし日の鍬ヶ崎の様子も映像で写しました。観ている人たちは泣いていました。保護者や地元の人たちで体育館が満杯になった。おそらく4、500人は来ていたのではないでしょうか。ものすごい数だったけれども、これが一つの気持ちを切り替える場面になるなら、それも子どもたちの役割かなと思ってやらせました。それが、そ

の次の年の6年生の取り組みでした。

⑤ 立ち上がる大人、23人の姿を子どもたちに見せる　5年生（平成23年度）の取り組み

震災前の22年度の4年生たちから、ホタテの養殖体験を始めました。漁業者養成ということで振興局の方から、やりませんかという話があったので、面白いと思い、話に乗りました。田中さんという漁業者さんも、「では、面倒見るか」と言ってくれました。

本当は、ホタテの養殖は種からとらなければならないのですが、それは割愛して、①1・5㌢くらいになった稚貝を分別する作業、②4、5㌢になった貝を釣り上げる「耳釣り」、③出荷する前に置いていたものをお借りして、出荷するためにゴミをそぎ落とす成貝の掃除作業など、4回ほど作業体験をさせてもらいました。1、2月には食改（＊食生活改善推進員）の女性たちに教えてもらって料理を作り、お世話になった方々をお招きして感謝の会を開きました。これまでが前年度の4年生の取り組みでした。

お世話くださった漁業者の田中さんは、津波で養殖も施設もご自宅もすべてを流されて一切をなくして、しばらく熊野神社に避難されていました。

3月13日、震災からわずか2日後の朝早くの事です。田中さんが、学校にサンダル履きに、着の身着のままで来られて、「また、やらせっからよ。ちょっと待ってろ」と話して、何もなかったかのように帰って行かれました。

最初、何をおっしゃっているのか、わかりませんでした。「またやらせる」って養殖のことだよな、そんなことを考えている状況じゃないだろう、と思ったのですが、それだけ子どもらの事を考えてくれる人だということがわかり、改めて感動したというか、言葉にならないものを感じました。

このように、震災をものともせずにまた立ち上がろうとしている人たちもいるので、そういう事も記録に残そうと思いました。そこで養殖体験をした4年生が5年生になった時、町内会長さんや民生委員さん、そしてもちろん漁業者さんなど、地域の23人の方々に集まっていただいて、「あの時どう避難した、これからどうする」ということを質問し、自分たちが生きていくための知恵とするための聞き取りを、2回ほどやりました。

そして、それを子どもたち自身で編集して、そこから得たものを5つの提言（「グラッと来たら逃げるべし」など）にまとめ、3月11日の震災の「いのちの集会」の時に、発表させました。

私は、学校というのは知識を教える場所だが、知識だけで生きていけるわけではないから、知恵をしっかり子どもたちに身につけさせないと、自分の命は守れないと思っています。そのために、やれるだけのことはやったという事です。

（＊立ち上がる大人の姿をあえて見せることによって、子どもの気持ちも）変わったんじゃないかな。そこはわからないですけど、でも、配慮はしました。4、5年生が聞き取に取り組むときには、町内会の方々に、「子どもたちにこういう事を調査させるのはどうなんだろう」、と相談したら、「今だからこそできるし、やらなきゃだめなんじゃないか」と強い後押しをしていただいたんです。「やめろ」という人はなかった。そこで、「よし、じゃあやるか」という気持ちになった。

その後の事ですが、実は、震災の年の4年生も養殖体験をやらせてもらったんです。8月に1回、しかも海から1㍍か2㍍のところで、災天下だったのでテントを張りながら、1・5㌢くらいの稚貝の選別を子どもたちにさせてもらいました。

その時には、事前にご家庭全部に確認の文書を出したんですが、誰も「やめろ」という返事はなかった。これを「やってもいい」ということと、今、私たちがやっていることは、地域も含めて親御さんたちも理解してくださっているのだと解しました。心強かったです。

⑥ 冊子『歩みだそう未来への一歩～命を守った知恵をもとに～』

この冊子は、あの当時の子どもたちには全員配りました。担任と一

緒に地域の方23人に聞き取ったことをまとめたもの。子どもたちがどういう人生を歩むか決意を書いたもの。防災マップは模造紙を縮小して、町内に住んでいる人ならわかるような図式にしたもの。そして、6年生たちが作った劇「輝こう鍬ヶ崎」のシナリオも、エピソードを加えて編纂しました。

そして、それらを防災甲子園に応募して、発表して、優秀賞を取りました。次の年はグランプリを取ったみたいです。すごいですよね。

表紙の写真は、NPOの人たちの中にカメラが趣味だという若者がいて、重なりがないように顔と名前を一致させながら当時の5年生全員分の顔写真を撮ってくれました。

本当に皆さんにお力添えいただきながら作り上げたので、これは宝物。こんなのを短期間に作り上げたのは、すごかったんだなと、今、改めて思います。

(3) 登下校時の避難訓練（高浜小学校）

次に校庭まで津波が入りながらも、1人もケガをしなかった高浜小学校の避難訓練についてみてみよう。

現校長・中村登志江先生によると、高浜小学校では、年間に避難訓練を5、6回行っている。校舎からの出火を想定した火災、地震、津波に対する訓練では、校庭に集合して、隣接する金浜老人福祉センターに避難する事になっている。以前は、学校が避難所に指定されていたが、津波が学校まで来たので、震災以降はセンターが避難所になった。こうした訓練は3月3日の津波の日を中心に行っており、津波に関する話や訓練をしている。

また、高浜小学校では、通常の各種避難訓練に加えて、他に先駆けて登下校時の避難訓練も行っている。

平成19年から震災の前年度まで校長であった**宮城貞子先生**（昭和24年生）によると、高浜小学校の登下校時の避難訓練は、その前任の校長が津波シェルターの設置を受けて始めたという（取材日：2016年5月13日）。津波シェルター設置以前は、校内での訓練だけだった。

前述の通り、学区の中でどこに津波シェルターを設置するかの判断は、各学校にゆだねられている。海に面した高浜地区と金浜地区を校区とする高浜小学校では、津波シェルターは高台で、近くに常に連絡がとれる家がある場所に設置した。設置場所は、地域の地形を熟知し自治会の役員などをしている方と相談しながら選定されたという。

現在、高浜小学校では、①登校前、②登校途中、③下校時の3つの訓練を、3年ごとにローテーションを組んで行っている。小学校の6年間にそれぞれ2回ずつ体験すれば、児童にも有事にどのように行動すれば良いかがイメージできるのではないかとの考えだ。2015年は登校途中、2014年は下校時の訓練を実施した。

① 登校前の訓練は、まだ自宅にいる時間に、警報発令のため自宅待機、および少し時間をおいた後、解除されたので登校する旨を、それぞれ学校から登校班の班長宅に電話連絡し、班長が連絡網をつかって各家庭に伝達する訓練である。その際、教員も要所に配置される。

② 登校途中の訓練は、生徒は登校班で学校に来るので、通学途中で注意報や警報が出た時に、どういう行動をとるかの訓練である。歩いている時に警報や注意報が出たら、登校班のリーダーが判断して、一番近い津波シェルターまで班の子を連れて逃げる。

③ 下校時の訓練は、下校時に警報などが出た時に、どの津波シェルターを通ってどう逃げるか、どういう行動をとるかの訓練である。

宮城先生は、登下校時の避難訓練をするようになった背景を次のように話している。

当時、地震があれば70％以上の確率で津波があると予測されていたので、いつかその日が来るだろうと危機感を持っていました。海辺の町であるし、チリ地震で学校が被害に遭い、その後現在地に移転した経緯もあり、危機に対する備えが必要だったのです。災害はいつ来るかわからないですから。高浜小学校の子どもたちは、海辺を通って通学して来ます。子どもの集団登下校時にいろんな場面を想定して備えておく必要があるのです。多様な訓練が必要ですが、まずは登下校訓

練からはじめました。

高浜小学校では、登校班による集団登下校を実施している。現校長の中村登志江先生によると、登校時は6年生がリーダーだが、帰りは登校班の中で一番上の学年の子がリーダーとなって先頭で班を引率する。登校班は地区でここまでが何班と決まっている。高浜小学校の児童数は現在55名なので、6年生は誰でもリーダーになる状況にあるという。

学校では、低学年なら「生活科」、あるいは「学区探検」などの授業を通じて、金浜、高浜地区の津波シェルターの場所を確かめている。6年生になると、先生よりも地元のことをよく知っている。また、子どもたちは毎日一緒に来ているので、メンバーそれぞれの歩く速度などもわかっており、どのシェルターに行けば良いかも判断がつくようになる。宮城先生も「代々の班長をきちんと教育しておけば、あとはついてくる。班長会議などの際に指導をして班長の意識を高めたりした」と話す。

登校班は、平成21年の時点で、高浜に3班、金浜に3班あった。訓練の記録資料によると、津波シェルターは、高浜1区には2か所、高浜2区には1か所、高浜3区には2か所、金浜1区には2か所、金浜2、3区には3か所ある。教職員は、訓練に備えて、普段から登下校の様子を観察し、いつ頃どの班がどのあたりを通るか、情報を集めている。

登下校時の訓練では、「津波警報発令」を合図に、リーダーの判断でその時一番近い津波シェルターへ避難行動をとれるかをみるのである。

宮城先生によると、訓練の初回時は、消防団の防災無線を使って「津波警報発令」と放送したという。しかし、消防団の無線は、高浜にあり、金浜までは聞こえないので、途中途中に配置された職員が拡声器で伝達した。

避難訓練をすることは、事前に地域の人にも周知しているが、あまり、音が大きすぎると、無関係の地域にまで聞こえて迷惑をかけてしまう恐れもある。本来、防災無線はいざという時のためのものなので、混乱を来たさないようにしなければならない。地域的に消防団の人も学校に協力的な地域だが、住民への配慮が必要だ。

また、放送時に子どもたちが津波シェルターを通り過ぎていては意味がない。そのため、出発を管理する先生を学校に配置して、ちょうどシェルター付近で放送が聞こえるように、班ごとに出発時間をずらして送りだした。どのような方法でするのがよいか、どうすればスムーズにできるか、試行錯誤したそうである。

ただ、このような避難訓練をするには、教員の数が足りないことが問題だった。スタッフが少ないと十分に子どもたちを観察することができない。人員の確保が課題だった。そのため、地域の人たちにも助けてもらうことにした。普段、登校時の安全を見守ってくれているスクールガードの方々には、シェルターで待機してもらい、子どもたちが着いた時点で、報告してもらう。また、シェルターの担当を依頼している家の人にも訓練に参加してもらい、どこのシェルターに、今、何人子どもが来ていると、学校への連絡をお願いしている。シェルター担当の家は、訓練の時以外にも、何かあるときにはきちんと対応してくれるそうである。

一方、学校から送り出す側の先生方は日ごろの観察から、訓練開始の時刻から判断して、どの班がどこのシェルターに行くだろうという予測を立てている。その様な中、中村先生によると、２０１４年の訓練では、高浜方面のある班が、教員の予測よりも先に進んでいたので、6年生のリーダーが「ここならこちらの方が近い」と、自分でしっかりと状況を判断して、先生方の予測とは別のシェルターに行ったそうだ。

このように、学校では、子どもたちが6年間かけて地域の津波シェルターの場所を覚えて、自分で判断して避難できるようになるのが一番良いと考えている。常に集団で歩いているわけではなく、1人で歩いている時もある。こうした訓練を通して、自分でしっかり判断して行動できる、1人でいても命を守れるようになることが目的なのである。

⑷　宮古小学校の取り組み

２０１６年３月11日に宮古小学校で行われた津波避難訓練には、早朝６時にもかかわらず、２００名もの参加が見られた。前年の参加者が10名足らずだったというから、驚くべき数字だと言える。実は、これには子どもたちが主体的にかかわっていた。

宮古小学校では、平成24年度岩手県教育委員会の「復興教育推進校モデル校」に指定されたことを機に、「ふるさとの復興を担う『人づくり』の展開～『自分から』かかわり、学びを深める児童の育成～」と題して、「自分から」かかわることを通して、学びを深める指導の在り方の研究を積み重ねてきた。それは、岩手の復興プログラムに示されている三つの教育的価値である「いきる」「かかわる」「そなえる」を具現化するものでもある。

「ふるさとを愛する子　心やさしくたくましく生きる子　主体的に学ぶ子　自分の命は自分で守る子」を目標とする人材の育成を目指して、「伝え合う」、「かかわり合う」、「助け合う」、「つなぎ合う」をキーワードに、各学年で国語・社会・体育・特別活動などの教科を通しての取り組みがなされている。

今回の津波防災訓練にかかわったのは、２０１５年度の４年生たち50名と、担任の**石澤綾子先生**、**坂下大輔先生**（昭和59年生）である。坂下先生に話を聞いた（取材日：２０１６年５月11日）。

復興教育に結び付けやすい単元は、地域に出ていくことが多い「総合学習」や「社会」という科目である。こうした科目を通して、子どもたちは少しずつ学習を深めていく。「総合学習」は、３年生から始まる。まず、２０１４年度の３年生は、水門など宮古市の防災施設を見学に行った。

４年生の「総合学習」では、「いろんな人とふれあおう」をテーマに、１学期には老人クラブに行って高齢者の方々と共に活動し、２学期には、障害のある方々と交流した。こうしてお年寄りや体の不自由な方など、さまざまな環境にある人が共に生きるということを学んだ。

平行して、６月の「社会」で「安全なくらしとまちづくり～火事を防ぎ、地震にそなえる」をテーマに、消防士や消防団員等など防災の役割を担う人たちについて調べ、社会に参画していくことの大切さを学習した。

10月の「特別活動」では、被災して避難所生活をしていた人に、避難所で困ったことを聞き取ったり、震災時に避難所で子守り役を買って出ていた小学生をとりあげたニュース映像などを見たりした。

そして、これまでの学習を踏まえて、３学期の「総合学習」と「社会」では、３月11日に行われる津波防災訓練での「避難所シミュレーション」に向けて、自分たちにできることは何かを考えた。

例年、津波避難訓練への参加者はあまり多くない。参加者を増やし、地域の防災意識を高めてもらうために、家族や近隣の人々などへ向けたポスターやチラシを作成し、参加への呼びかけも行った。

また、自宅から避難場所までの所要時間を計算したり、「避難所開設シミュレーション」での作業リストを考えたりして、本番に臨んだ。当日は非常米で作ったおにぎりの炊き出しを行って参加者にふるまうことにした。

かくして、50名の４年生と、その家族や近隣の人、１学期に交流した老人クラブの方々など、２００名を超える人々が子どもたちの声掛けに応えて集まった。

坂下先生は、「こうした取り組みは、次の４年生にも引き継がれていくことになっていますが、子どもたちを中心とした学校発信の取り組みから、地域の活動へとつながっていくことを目指しています」という。

実は、今回の宮古小学校の「避難所シミュレーション」も先に紹介した震災直後の鍬ヶ崎小学校における取り組みも、いずれも笹川校長のもとに行われた。宮古では、「ふるさとの復興を担う人づくり」を超える、復興の先の未来に向けた取り組みが、すでに進められているのである。

E　地域とのつながりを防災に役立てる

1　地元の人の声掛けが命を救った

小学校や、市立保育所などの先生方には転勤があり、地域の地理や事情に不案内のことも少なくない。今回の震災は、たまたま年度末に起こったので、地域の事を知り、地域の人たちとの関係を築く時間があったが、それが年度初めだったら、適切な行動に結びついていない可能性もなくはなかった。

実際、地元の人の声かけや情報が、避難の際の決め手となっている。津軽石保育所では、近くの人が、「俺は前の津波を経験したが、あれよりすごかった。先生、すぐ逃げろ」と言ってくれたり、「学校はもう上に避難しているから上に行け！」と声をかけてくれ、そのことが安全な場所へと導いていた。子どもの命を守るために、地域との連携は必要不可欠だ。

以下には、地域とのつながりを強化する具体的な取り組みをみてみよう。

2　地域と学校とのつながり

崎山では

崎山保育所は小中学校のそばにある。涌田朋子先生によると、2年ほど前から、中学校と協力して避難訓練を行っている。中学校の方からの申し出で合同訓練が始まったという。

避難が必要な時、誘導車を押したり、物を詰めたり、けがをした子どもを複数で抱えて逃げるなど、保育士たちだけの力では難しい部分を、中学生に手助けしてもらえたら助かるという。

一方、保育所の方でも、中学校の保育体験の受け入れをしたり、運動会の時に生徒にボランティアで手伝いに来てもらうなどしている。こうした日常の活動における交流が、災害時の助け合いにつながっていく。崎山保育所では、中学校との新たに始まった協力関係をずっと続けていきたいと考えている。

花輪では

また、伊藤るみ子先生によると、花輪でも、保育所と地域の学校とのつながりが深まっている。花輪では、川の氾濫や土砂崩れが危険視されているが、小学校の校長先生から災害時は「小学校において」と声をかけてもらった。そして、小学校が保護者向けに流すメールを、保育所にも配信してくれることになったので、小学校と同じような流れで避難できるようになったそうである。

3　地域の方々との日ごろの交流があってこそ

①　愛宕保育所では

一方、**小向聖子先生**（昭和32年生）によると、現在、愛宕保育所は、隣にあった小学校が閉校したので、体育館は避難所としてあるものの、学校の力を借りて一緒に逃げることはできなくなったという（取材日：2015年9月17日）。

自分たちでとにかく逃げるということです。地域に仮設住宅はあるが、昼間は若い世代はいらっしゃらない。残っているのは、お年寄りの方が多い。

そのため、地域の消防団の方々や町内会長さんなど、そういうつながりをもう一回見直したいと思っています。つながりは前からあったのですが、なくさないように、たびたび案内を出したりしています。

震災の時に、愛宕の体育館の後ろの坂道を上がったという話は前任者から聞いていましたが、揺れのある時に小さい子を背負ったり手を引いていたり、子どもの足で上るには、整備されていない細い急坂なので、あぶない。それで、避難場所になっている反対側のお寺の方の道路も逃げてみようと思っています。散歩に行った時に声をかけて、お寺とのつながりを大切にしたいと考えています。

②　ひかり幼稚園では

ひかり幼稚園は、2015年11月から認定こども園になった。認定こども園になれば、より広範な地域のセンターとしての役割を担うことになると考えているためだと思われるが、そこでは耐震対策はもちろん、非常食料の備蓄を含めて、より万全な対策を講じる計画がある

ようだ。

だが、取材した時点（２０１５年９月）では、**森分園長**は、「現時点のひかり幼稚園では、非常時の備蓄を意図的に持たないことにしている」と話していた。それは、（＊当事の）自治会をはじめ、地域とのさまざまな協力関係ができているからだという。

自治会の役員の多くは、卒園児の家族です。何十年か前の園長は、そうした繋がりを重要視せずに付き合いをしていなかったのですが、その後は地元との繋がりを大切にしてきました。

園でイベントがあれば、自治会に声を掛け園に来てもらうし、こちらも地域のイベントがあれば参加します。お酒の付き合いもなるべく断らない。園のクリスマス会では、例年、自治会の方にサンタさん役をお願いしています。

３・11の時、園児の保護者の方々もたくさんいるので、地区の集会所に行ってみたら、農家の人が発電機を持ち込んで煌煌と灯りが照らされ、ストーブが焚かれて、暖かすぎるくらいでした。こんなことをしていては、超長期的に持たせることはできないと提言しました。また、物資を回してもらうために指定避難所に行くように提案しました。

こうした、意見がしっかり言えて、それが受け入れられるような関係性を日ごろから大切にしているのである。

「幼稚園ではセキュリティは入れていないが、近所の人が守ってくれる。たとえ、うっかり夜電気をつけっぱなしで帰ったとしても、すぐに近所の人が知らせてくれる」という。

非常時に地域の人に助けてもらおうとしても、普段やってないことはできない。普段お付き合いがないのに、困ったときだけ助けてもらおうなどと、そんなに世の中は甘くない。普段から地域と密に繋がりがあるから非常時に助け合えるのだと考えています。

西町３丁目に引っ越しをするが、引き続き山口地区の自治会との付き合いは継続したいという。そして、さらにより広範に地域の人々との付き合いを広げて、こども園を地域づくりの一環でとらえてもらいたいと思っているそうだ。

４　「おらほの学童の家」と思ってもらえるように

有事に、助けてもらうために、日頃の関係づくりが大切なのは、学校や幼稚園保育所ばかりではない。元鍬ヶ崎小学校学童の家の創設にかかわった**田畑先生**は、次のように話している。

学童の家を開く時、心を砕いたのは、鍬ヶ崎の町の人に「おらほの学童の家」と思ってもらえるようにすることでした。地域との交流を大切にしていました。「なあど」でミズキ団子を作るイベントの時には、学童の家の子を招いてもらいました。土曜日には鍬ヶ崎の町を子どもたちと散歩しました。籠っていては何かあったときに対処できないので、地域の人たちに子どもたちのことを知ってもらうために、顔見世興行のような宣伝のつもりだったのです。

このように、まず自分たちの存在を知ってもらい、散歩などの際に声をかけたりして地域の方々と交流をもつ。あるいは、常日頃から子どもたちの活動に地元の方々の協力を得る。こうしたことが、もしもの時に、子どもたちの命を救うかもしれない。こうした意識を持つことは、学校や保育所等の施設ばかりでなく、親や祖父母など子どもにかかわるすべての大人に必要なことではないだろうか。

高浜小学校の中村校長が「金浜・高浜地区では、包み込むように子どもたちを守ってもらっている」と話されているが、このような関係は、金浜・高浜地区のみならず、鍬ヶ崎にも津軽石にも見られた。

震災の話を聞くために筆者が市中を回っていて何よりも印象的だったのは、地域の人々の間のこうした協力関係である。あれだけの経験をしてなお、「命だけ助かれば、物は何とかなる」と思えるのは、こうした密な人間関係があるからである。こうした密な人間関係は、宮古市の大切にしたい防災における強みである。

5　消防団の力を借りる

地域とのつながりの中で、消防団の存在は非常に大きい。震災時、各地で地域の消防団の方々によって多くの命が救われたが、宮古市の各学校でも同様であった。高浜小学校の元校長・**大洞晴洋先生**は、地域との連携について以下のように語っている。

日頃から地域のつながりをもっとも大事にしました。消防団の集まり、行事、敬老会、スポーツ大会などに招待を受けたりしますが、それはほとんど休みの日なので、休みたいという気持ちがありながらも、やっぱり出た方がいい。2年しか高浜にはいませんでしたが、1年目の3月に震災が来ました。

同じ日に高浜地区と金浜地区のお祭りがあったりするので、午前中金浜神社に行って、午後、高浜神社に行くとか工夫しながら、赴任した年にはほとんどの行事に出ることにしていました。消防の集まりなどにも行って一緒に呑むなどして、つながりがいろいろとできました。津波の時に来てくれたのも知っている人だったから、消防の人も避難指示を出しやすかったようです。こういう時のためにちゃんとしておいてよかったと思いました。

現校長の**中村登志江先生**は、避難に迷っている時に消防団が誘導に来てくれた時の様子をこのように話していた。

少し前、そこまで大きい地震ではなかったのですが、警報が出てサイレンが鳴っていて、どうしようと思っているところに、消防車が校庭に来ました。警報が出ているのですぐに避難するように指示がありました。震災の時に、高浜小学校でも消防団の方が助けてくれましたし、鍬ヶ崎小学校も消防団の人のおかげで助かりました。消防団の方はそういう時は、「大丈夫か」と来てくださる。

赴任した時には挨拶に行くし、学校行事の時は、来賓として来ていただく。消防団の方との関係を大切にしています。

いざという時、避難誘導のために、学校などの施設に来てくれる消防団の方々は、転勤ではじめてその地域に赴任する先生たちにとっても、最も頼りにできる存在と言えるだろう。

おわりに

津波で大きな犠牲を払った宮古市では、「警報が解除されるまで迎えに来ない、すでに警報以前に迎えに来ている場合は、安全が確保されるまで一緒に避難する」ということが、震災後、子育てを支える施設のスタンダードとなった。

何度も言うが、これは「預かっている子どもの命は私たちが絶対守る」という保育者たちの強い覚悟と信念があってこそ言えることである。その言葉を保護者が心から信じることができて初めて実践される。保育者・保護者の双方がこのことを忘れてはならない。

また、個々の施設や個人の体験談から明らかになったのは、地域の人との連携が命を守る上でどれほど大切なものなのかということである。多くの物を失ってもなお、「命さえあれば、物はなんとかなる。実際、分け合ってなんとかなった」と語れるのは、そうした地域の人間関係に対する強い信頼の表れであり、それが宮古の防災における強みである。

震災から5年。瓦礫はすっかり片付き、具体的な津波からの避難の在り方や避難場所の選定など、津波に対する仕組みがかなり固まってきている。今後は、震災の記憶の風化をどう防ぐかが問題である。筆者が行ったインタビューの中でも、いくつかそうした声が上がっている。

震災の記憶もだんだんと風化していくものです。昭和の津波で磯鶏地区は大きな犠牲を出して、石碑も立っていますが、80年も経つとすぐそばにあるのに誰も見ていない。記憶が風化するのが怖い。ずっと呼びかけていかねば、行政の力でやらなくては、代が代わるとわからなくなって来ます。しかも、磯鶏地区は転勤族が多く、幼、小、中、高といずれの学校も転勤者の子弟が多いんです。教育委員会などが主導して津波の恐ろしさや逃げる場所、避難路などを、毎年教えるよう

にした方がいい。（そけい幼稚園・**晴山洌理事長**）

いざという時いつでも動けるようにしておくことです。まだ4年半（＊取材時）だからいいですが、20年30年たってどれだけ伝わっているか。今は避難をどうするかとか、どう動くかは固まってきましたが、それをどう継承していくかが問題です。（**大洞晴洋先生**）

宮古で育つ子どもたちに、保育施設で、学校で、家庭で、常日頃から「宮古は津波が来るところなのだ」ということを意識させ、もしもの時に適切な行動ができるように、具体的に教えること。転勤などで宮古に転居して来た人たち、特に子どもを持つ世帯に防災情報を伝えたり、防災意識を高めるような仕組みを作り、それを継続・継承すること。これが、子どもたちを守る取り組みにおける今後の大きな課題である。

【注】

（1）ただし、文体等には多少手を加えてある。

（2）今回、震災当時の千鶏小学校の関係者から話を聞くことはできなかった。こちらの様子については、『二〇一一・三・一一　東日本大震災の記録　未来を信じて　いま歩き始める』（2012）に記事があるので、参照されたい。

震災以前に千鶏小学校の校長をしていた大洞晴洋先生によると、「千鶏小学校に2年いたので、ここはまずいぞと思っていました。千鶏にいる時に津波はすごく心配した。千鶏小学校では災害時に山に登る訓練をしていました。マニュアルで決まっているコースでした。学校の校舎の裏の住宅を通って道路に行くコースです。あそこはすぐ外海だが、訓練は高浜ほどではなかった。学校だけの訓練でした。高浜の方は、そういう面では訓練が進んでいました」と話していた。

（3）宮古市保健福祉部福祉課子育て支援室提供「東日本大震災における保育所等の対応状況」

（4）3歳未満。

（5）前掲資料

（6）小さな園児を一度に複数運べる大きめのワゴンのようなもの。

（7）注6と同じ

（8）前掲資料

【参考（引用）文献】

宮古市保健福祉部（平成24年6月29日15時現在）「社会福祉施設・社会教育施設・文化施設・体育施設　被害報告」

宮古市保健福祉部福祉課子育て支援室提供「東日本大震災における保育所等の対応状況」

岩手県小学校長会発行『二〇一一・三・一一　東日本大震災の記録　未来を信じて　いま歩き始める』2012年

岩手県私立保育園連盟　編集・発行『東日本大震災　岩手県　私立保育園の記録　2011・3・11～2014・3・31』2014年

『「津波発生時の児童生徒の避難体制確立」趣旨』2005年11月、宮古市教育委員会

【資料】

協力者への聞き取りデータ及び、参考（引用）文献で上げた資料。

第2部　各分野での震災後の取り組み
第5章　女性の活躍

神田より子

はじめに

東日本大震災直後から地域の中でリーダーシップを発揮し、住民を動員して、被災者の方々のために力を尽くしてきた女性達に焦点を当ててみてゆきたい。ここでは婦人防火クラブ、婦人消防協力隊、女性消防団員、保健師の方々を対象にする。彼女たちも被災者であり、震災という未知の領域の災難に出会いながら、これまでの経験を生かしながら活動してきた女性達だ。

写真１　「宮古市婦人防火クラブ」の訓練風景

こうした女性の活躍について記録した資料として『いわて消防物語―纏に生きる人たち―』(財)岩手県消防協会監修「いわて消防物語」刊行委員会　昭和61年）がある。これは女性に特化した内容ではないが、岩手県内各地の婦人消防協力隊や婦人防火クラブ、及びその前身の組織について述べられている数少ない資料である。以下では本報告書の主旨に関連する地域に焦点を当てて、現在活躍している方々の成り立ちを描いてゆく。

田老町（現宮古市田老）では度重なる災害に見舞われ、そのため田老町消防団は戦時中から婦人消防協力隊の前身である婦人補助隊を設けた。はじめは30代から40代の主婦30人で組織され、火災の際に炊き出しやバケツリレーによる初期消火に活躍した。その後、女子青年会のメンバーを中心に若返りをはかり、計90人の田老町消防団婦人補助隊を結成、そろいの半纏を着用して活動を展開した。新里村（現宮古市新里）では婦人消防協力隊が第1から第6協力隊まで組織され、隊員は１６０名、出初め式や春秋の消防演習に参加して消火訓練を積んでいる。川井村（現宮古市川井）では、昭和54年に川内地区に婦人消防協力隊が設けられ、当初は１４４人だったが、現在は20人ほどが活躍している。重茂村（現宮古市重茂）では大正末に重茂、音部、鵜磯、千鶏、の各地区に全戸加入の自警団が設けられた。また昭和初期、宮古地方でただ1か所婦人火防組合が組織されている。婦人消防については岩手県が昭和2年に婦人火防組合の準則を示し、宮古地方では重茂村婦人火防組合が存在した。この流れを受けて、重茂漁協婦人部の中に元村、南区、音部、北区の各婦人防火クラブが組織され、婦人部の消防に寄せる関心は強い。昭和61年には八木沢団地婦人防火クラブ、長沢防火クラブなど36クラブ（６千３２０人）が組織され、県下でも有数の防火クラブだった。

白鳥定良宮古消防署長（昭和32年生）に２０１５年9月2日に伺った話によれば、婦人消防協力隊は消防団への協力団体で、分団活動のバックアップをする組織であり、○○分団婦人協力隊という形になっているという。一方、婦人防火クラブは町内会の組織で、家や町内から火事を出さないようにという目的でできた組織なので、設立時からの主旨が異なっている。女性消防団員の状況については、女性消防団員も居住地域の分団に入る。消防団員の着るユニフォームの種類は男女共に甲種制服という表彰式などの儀礼服と、乙種は半纏が制服で、その他にも活動服があり、火災時には防火衣を着るという。

1　婦人防火クラブ

①　重茂婦人防火クラブ

写真２　宮古市婦人防火クラブ連合会会長として訓練に参加している盛合敏子さん

盛合敏子さん（１９５３年生、宮古市重茂）２０１５年８月23日に話を伺った。

盛合さんは現在、宮古市婦人防火クラブ連合会会長であり、重茂漁協婦人部元村防火クラブ会長、重茂漁協婦人部長、岩手県漁協女性部連絡協議会会長、全国漁協女性部連絡協議会副会長の職にあるため忙しい。

重茂の婦人防火クラブ

重茂の婦人防火クラブは重茂漁協婦人部が中心でできた。当時の消防団長の北村さんが盛岡で防火クラブができたので、宮古でも誕生をという話になり、先ず地域的にもまとまった活動をしている重茂の漁協婦人部に話があった。重茂地区は漁業が生業であり、夫などが海に出ているときに女性達が地域を守っていると言うことだったようだが、後日、重茂は女性も口開けの日などには出漁するとわかったとのこと。

しかし、女性も火災等から地域を守らなければとの意識で結成されたことを当時の婦人部長さんからお聞きした。

婦人防火クラブとしての活動は宮古市婦人防火クラブ連合会の活動に準じており、「家庭から火を出さないように」を基本とし、春期・秋期の防火広報、防火パレード、宮古市消防団大演習への参加（応急救護訓練）、宮古市消防訓練への参加（炊き出し）、火災警報器や消火器の設置促進、消火訓練、視察研修など多岐にわたる活動になっている。

平成23年3月11日

震災当時、私は県・沿岸広域振興局宮古センターの非常勤職員でした。その日は市内の県立病院での健康診断の日でした。午後に事務所に戻り、間もなくした頃、午後２時20分に地震があり、いつもと違う地震だと感じました。

そして、午後２時46分にさらに大きな地震があり、津波が発生するとの防災無線が繰り返し放送されました。職場は３階建てで海岸より離れていましたが、山手の方に避難するようにとの指示がありました。津波は市の中心部まで到達していました。重茂にいる家族が心配で携帯電話を何度も手にしましたが通じませんでした。公衆電話も通じませんでした。後で聞いた話では、重茂の自宅には家族や親戚が集まり「敏子はもしかしたら…津波に…」との話が出たとのことでした。

私は家に帰ることもできず、家族などの心配もあり心穏やかではありませんでした。宮古センターは当時の局長の指導により避難所となり４００人を超える人々が避難して来ていました。局長の指示により避難した皆さんに炊き出しをすることになりました。これまで私は有事に備えての炊き出しの訓練や地域での活動の中で経験をしていたので、緊急時のおにぎりの作り方を指導しました。また食料品も限られた数になることから、人数相当に分けることなども指導しました。

非常時や緊急時には経験や訓練を理解した人が指示をしないと収集がつかないと思われます。11日は眠ることができないままセンターで夜を明かしました。

3月12日

昼過ぎに浄土ヶ浜パークホテルで働いている息子が私を探しにセンターに来ました。職場からの国道は通行不能のため、田代からの山道を来たとのことでした。お互いの無事に安堵。息子は私の無事を確認し、「職場に戻るが、また来るから動かないように」と職場に戻りました。

一方、夫は軽トラックで重茂から山道を通り赤前に抜け、また山道を走りセンターに来てくれました。生きているかどうかと心中不安の中を来た夫は、私が炊き出しの采配をしているのを見て、腰が砕けたとのことでした。息子の職場まで行ってくると出て行くと間もなく、

入れ替わりに息子が来たので、私は息子の車で市内から花輪を抜け、津軽石、赤前、堀内とやっと通れるほどの山道を抜けて、薄暗くなる頃に重茂につきました。

自宅に帰る途中に重茂の避難所となっていた交流センターがありましたので、車から降ろしてもらいました。私を見た自治会役員のMさんは「よく帰ってきてくれた。待っていた」と声をかけてくれました。Mさんは「里地区は大きな被害が出た。昨日と今日と地区内の人たちが何とか炊き出しをしたが限界にきている」とのことでした。「私はそのために帰ってきました」とMさんに話しました。

家族や親戚も私や息子の無事な姿を見て安堵。私と息子も孫（子）や嫁（妻）、私の親戚の無事な姿を見て安堵。早速女性部員や地域の人たちに炊き出しの手伝いの声かけをしました。70人の方が集まり、6班のグループに分け、1日交替で避難所の炊き出しなどを行うことにしました。

3月13日から

私は毎日、朝5時に避難所に行き、御飯のスイッチを入れ、地域の皆さんの支援等の材料で献立を考えました。避難所には発電機もあり電気も点き、プロパンガスもあり、水道も出ました。そして食材も送られてくるようになりました。また衣料品などの支援物資も送られてくるようになり、その配布等も行いました.

支援物資の配布は避難者がそろったところで行うこと。順番は公平に番号札を作り「くじ」と決めました。時には「じゃんけん」の時もありましたし、「自由に」の時もありました。

避難所では日が過ぎてゆくごとにいろいろなことがあります。

ある日、「プライバシーが保たれないので、パーテーションがほしい」と私に申し出た方がいました。私は「それは皆さんで決めて、皆さんの意見として市に申し出てください」と話しました。避難所はあくまで避難している人たちが話し合いなどをして運営してゆくのがよいと思います。

後日パーテーション（仕切り）は設置されましたが、それにより距離感が出たと寂しそうにお話しする人もいました。

2週間くらいたった頃になると炊き出しの手伝いをする側にも、避難をしている方にも自由と言った様子が多々見受けられます。

そこで3月27日で女性部や地域の皆さんの炊き出しは終了とし、その後は避難所の皆さんに任せることにしました。

その後は重茂小学校の体育館をお借りし、全国の皆さんから送られてきたので支援物資の仕分けと配布を5月8日まで行いました。

重茂漁協婦人部

現在、女性部員は289名で、平均年齢は57歳です。20代、30代の部員もいて、女性団体としては若い方だとおもいます。

当女性部を運営する本部役員10名、支部役員25名の合計35名が活動の中心となり、数多くの活動に取り組んでいます。

とくに大切な海を守る「石けん使用運動」は40年にもわたる実績活動として全国的にも高く評価されており、平成28年3月1日に開催された全漁連主催の「平成27年度　青年、女性漁業者交流大会」において水産庁長官賞を受賞しました。

現在、漁業者は就業者の高齢化や担い手不足などの問題を抱えていますが、「元気な浜には元気な女がいる」を心に留め、活動に励みたいと思います。

②　津軽石婦人防火クラブ

中島光子さん（昭和18年生）に鍬ヶ崎の学童（保育）施設で2015年9月4日に話を伺った。

津波とその後

田老の公民館で学童をやっていたときに津波に遭った。津波は川を伝ってくるが、山の向こう側から津波が見えた。口を開いてやって来た。田老の総合事務所で1晩待機し、翌日田老では三鉄の線路を歩き、宮古からは45号線を歩いて津軽石まで帰った。途中で自衛隊が来たので、

その車に向かって手を合わせて「頼む」と言った。津軽石小学校に家族が避難していて、そこでほっとして涙が出た。

その翌日から炊き出しに出た。災害時は緊張をして笑顔が出ないので、これではだめだと思い、一緒にやる人たちに絶対にめそめそせず、笑え、緊張するなと言った。こうして食べ物を調理する人たちがゆったりしていたので、他の人たちから助かったと言われた。

津軽石では全世帯が防火クラブ員なので、食事、掃除もすべて会員たちでできたので、文句は出なかった。老人が多く、3日に1回は救急車が来たため、命の大切さは感じた。

こうして10日間炊き出しをした。その後自衛隊が来て交代した。津軽石では山の手の人たちは流されず、炊き出しができた。山の手の人たちが米、野菜などを持ち寄ってくれた。津軽石より上の根井沢やその奥は被害がなかった。3月12日からは商店から冷蔵庫が使えなくなったと言って、魚、野菜、のりなどが届いた。元自衛隊の盛合さんが指示を出したり、すべて指導をしてくれた。炊き出しは防火クラブ員が中心に行った。給食センターができてからは津軽石小学校の給食室を使っていなかったので、そこにあった大きな鍋や釜もそのまま使うことができた。魚汁や煮付けなども出せたので、津軽石の人たちはほっとする部分があったと思う。きんぴらなども作ってもらえて幸せだった。避難所は体育館だったので、大変だったが、お腹は幸せだった。

3日後からボランティアが入ってきて話を聞いていた。しかし当事者はまだしゃべりたくない人もいるので、「来るな」と言いたかった。自衛隊や看護師は何でも聞いてくれるし、個別に話を聞いてくれた。そしてビタミン剤などをくれて、これで元気になると言ってくれたので、本当に落ち着いた。ボランティアは皆が落ち着いてから来てほしかった。

炊き出しの期間中、自分の家の片付けが始まった。1階はすべてだめになったので、家族はそちらにかかったが、クラブの仕事をするようにと理解してもらえて、炊き出しを続けることができた。

大震災後は「公助、共助、互助」ではなく「共助」という事を実感した。隣同士のつながりが大事だということに関心を持つことができた。つながりを大事にすることに実感が持てた。公助は助けてくれなかった。市役所より人が来ないのでだめだと思う。お互いの助け合いが大切だと、皆が実感したことがよかったことだと思える。

防火クラブ

防火クラブは地域ごとにある。本来は会員制で、年会費を払うのだが、津軽石では年に6万円の助成が毎年津軽石消防団から出るので、会費は取らない。全世帯が会員なので気を遣うことなく、皆でできた。防火クラブは消防団より全国的に誕生しているという話があり、各地でできている。宮古市婦人防火クラブ連合会では、津波前に40周年記念のイベントが行われた。クラブの本質は自分の家から火を出さないということ。津軽石の防火クラブは消防団と結びつきが強く、何かあると呼ばれる。災害や大火の時などは、団員が出払っているとまず炊き出しをやる。各地区で年に1回訓練をやる。津軽石では防火講習会、救急訓練をやっている。

宮古全体では防火クラブの活動は盛んではない。休会や休部が6か所くらいある。消火訓練をしたいと消防署に相談をした。消火器を提供するのでどうぞと言ってくれる業者もいるが、きちんとやっているところは少ない。

公式行事には防火クラブの半纏を着て帽子を被って行進をする。訓練にも半纏で出る。半纏を着ることは誇りに思う。普通の会員の半纏は消防団に備品としておいてあるが、会長と副会長の半纏は何かあった時にはいつでも出られるように家においてある。県の連合会にも半纏で出る。何か行事があると、各地区に地区委員がいるので彼女たちが出る。30地区ほどあるので、30人が出席する。

当クラブでは、年間計画は防災、救急、消火訓練などの講習会が3回、役員会が3回、総会が1回ある。

新里は消防協力隊で、火を消すことが目的なので、元々防火クラブとは違う。消防団と消防協力隊は同じ系列だが、防火クラブは別のもの。

津軽石白鳥少年少女消防クラブ

津軽石には「白鳥少年少女消防クラブ」があり、子供用の半纏もあり、初午などには消防訓練やお手伝いもやる。小学校4～6年生が対象で、現在30人いるが、今の子どもたちは野球などで忙しく参加が難しい。子供たちも何回か表彰を受けている。成立は婦人防火クラブと同じ頃になる。子供たちには11月頃になると防火ポスターを描かせて、家の近くに貼ってもらう。こうした活動に子供会では現金を渡すところもあるが、私たちは図書カードを渡している。また消防署にポスターの展示をお願いしている。2年に1回くらい子供たちを連れて県の消防学校へ行き、ホースを持つ等の訓練と視察を実施している。

学童について

生まれは田老の川向で、津軽石に嫁いだ。公立保育所で38年間努め、退職後は社協や児童相談所で働き、その後はシルバーの会員として田老の学童に努めていたときに津波に遭った。今は鍬ヶ崎の学童に来て5年目になる。学童にはきちんとした人材が必要だと思う。学童の管轄は文部科学省ではなく、厚生労働省になっている。安全保障という点では予算が付いていない。午後の4時間だけなのでボランティアで良いという考えでは危険だと思う。子供の安全を守るためにはきちんとした予算を確保する必要がある。学童が新たにできると委託先を募集するが、安いところに決まるから、シルバーになってしまう。こういう所に来るのは校長経験者などで、金はいらないと言うため、予算が付かない。このままでは子供の安全が確保できない。

私自身は保育園で働いたことが力になっている。若い先生は遊び方も知らない。短大卒で来るが、何もできないので、彼女らの指導が力になる。またお母さんたちとしゃべったりできてよかった。保育園に勤めていた頃はすべて子供たちのためだ、殺されても死なないでがんばれと言った。子供たちには自ら死を選ばないように運動をさせた。体力が付くと気力も付けられる。山へ行ったりして、鳥の声、山の実などを知れば生きる力になる。私自身は貧乏だったからよかったが、心が貧しくなることがある。しかしこうやって生きてきた。

2　婦人消防協力隊

佐々木則子さん（昭和27年生、盛岡市出身）　2013年8月8日に話を伺った。

昭和63年3月から川内に住んでおり、震災後婦人消防協力隊の隊長をしている。この組織は昭和42年頃からあると80歳代の人たちに聞いた。昔は人数も多かったらしく、いろいろと活動していたという。宮古に合併後は向こうの行事に合わせている。

火事があると1時間以内に4、5升のおにぎりができる。「まずはスイッチ」というのが姑さんたちの行動のパターンになっている。川内に住んでいるが、ここに来てから火事が3件あったが、すぐに炊き出しに出た。これが大震災の時の行動の前の地盤にあった。

震災当日から

最も早く動いたのは川井地区の道の駅のビーフビレッジともうもう亭で、その日の夜から動き始めていた。我々は翌日の朝からだった。メンバーは自治会と婦人会と婦人消防協力隊も一緒だった。電話は通じず、知らせは徒歩だった。公民館と集会所に3升釜が2つある。水道はこの2か所のみ。水は豊富に使えたので、給食センターが動き出す4日目の朝まで炊き出しを続けた。自治会の活動は休眠状態だったが、後で自治会が払うからと、お店から米を持ってきた。川井地域の名前の入った段ボール箱入りのおにぎりが多かった。ガスはファーストフード店のものしか使えなかったという。おにぎりはパックに入れて運んだが、ゴミになると言われ、ラップに包んだが、なくなってしまい、アルミに代えたが、臭いがすると言われ、またラップに代えた。毎回段ボール2箱くらい持って行った。

ここの地域には石清水があり、薪ストーブもあるので、自分たちの食事は問題なかった。炊き出しにはガス釜で炊いた。携帯も使えないので、隣に用があっても歩いた。「火事の時の炊き出し」という下地があったから、すぐにできた。公民館も職員がすぐに鍵を開けてくれた。

火事があると、米とあるものを持って屯所に集まる。何も言わずとも誰が何をやっても助ける。停電でも車のライトを照らして炊き出しをしたこともある。震災当時は皆夢中でやらなければだめだったと言っていた。隊長が声をかけなくても、いざという時には来てくれる。5日目に支援米が来て、新里の給食センターも動きだし、炊き出しはもう良いと言われた。おにぎりができてもガソリンがないため、川井総合事務所から取りに来てもらった。4日目の朝までお店のものをすべて使い切り、いよいよ何も無くなって、盛岡まで白米を買いに行ったが、10キロきり買えなかった。

支援米がトラックで新里の体育館に着いた。最初は支援物資としては水が最もほしいと言われた。支援物資が届くまでは水や飲み物がほしいと言われ、ペットボトルに入れて持って行った。

3日休んで郷土食を売りに出したら、盛岡方面から被災地に持ってゆきたいと、ものすごく売れた。米があってもガス、電気が通じないので、すぐに食べられるものを買いに来た。震災のおかげで儲かったようでもうしわけない感じだったが、「助かった」と言われて、楽になった。今年の春あたりからだいぶ元に戻った。

タイマグラのキャンプ場にはバス3台分くらいの人が入っていたので、専門のコックさんだけでは足りず、近所の奥さんたちも助けに行った。朝食を作り、昼食を工事現場まで運び、夕食も作るので大変だったという。ここに泊まっていたのは関西の業者で工事関係の人たちだった。仮設住宅の工事だったらしく、大槌まで通っていた。被災者の何人かは仮設ができるまでは送り迎え付きで横沢冷泉まで行き、入浴と昼食の提供を受けていた。

消防協力隊は昔は全戸参加だった。今は個人で入っているが、火事になると皆出てくる。今はあまり活動をやっていないが、隊員としての自覚はある。防火には気をつける。訓練は村の演習で平成3、4年頃まで小隊訓練をやった。20人くらいで並んで小さいポンプの「軽可搬ポンプ」を動かす訓練をやったこともある。消防車を動かすことはない。

3　女性消防団員

2015年8月25日に**高田由美さん**（昭和37年生）から話を伺った。宮古市南町にて喫茶店アムールを経営されており、住所は中里団地だ。

震災当日

震災当日はアムールにいて、地震が大きくて自宅が気になり、山を越えて戻った。高校生の息子が釣りに行くと言っていたので心配したが、その日は行く気にならなかったと言って家にいたので、家族も自宅も無事とわかり、一安心して、自分の活動ができた。女だとそれが一番気にかかる。愛宕小学校の子供たちが集会所にいたので、その面倒を見てから消防署に行った。

町の中では水がしんしんと出ていたが、それが津波とは思わず、水道管の破裂かと思った。逃げてきた人たちを誘導していたとき、近くの病院の人が車いすを貸してくれて、早く移動できたので助かった。突然の出来事で動けなくなる人も結構いた。女だと声をかけやすく、おばあちゃんに声をかけると、「手を貸して」と言ってくれた。経験してはじめてわかることがある。消防の半纏を着ていると安心してもらえる。男たちの声だとちょっと恐い感じもあるので、女が居ても良いなと思った。女がいっぱいいたら、もっと連携してできると思った。いざとなっても女は肝がすわって強いし、女の方が器用だと思う。手を貸してあげるのも、女なら男女共にやってもらいやすい。

震災と女性消防団

震災前に女は私だけで、出しゃばってはいけない、男の世界だからと、火災が起きても行かなかった。消防団に入ったときは直接団本部付きになり、分団の経験がなかったので、受付をやったりして、現場の経験がなかった。

震災の時は炊き出しをやらせてもらった。料理が多少できるので、これをやろうと思った。一般の人ではなく、消防署員や分団の人が食べずに働いていて、気持ちが参ってしまうと思った。彼らを食べさせる立場にいたので、署長、団長も好きにやらせてくれた。応援の人もカップ

写真３　訓練中の女性消防団員　高田由美さん

ラーメンで済ませるつもりらしかったが、温かい御飯と味噌汁くらいだったが、気持ちの上ではずいぶん違ったようだった。自分でも現場の人たちと一緒になって、前に立って人を助ける場にいられたと思えた。今思えばもっとうまくできたのではないかと思うこともあるが、当時は精一杯だった。また、自分の消防人生の中で大きな出来事だった。消防団に入っていたからこそ、直接消防署に行ってできたことだし、消防署員の人たちとのつながりも持てた。

震災後、火災や災害が起きても、何かやれるかもしれないと思えるようになったし、行ってみれば何でもできるし、声をかけることもできるようになった。これ以降、誰かを助けようと手を出したとき、「大丈夫です」とさしのべた手を断られると、恥ずかしいという思いではなく、それはよかったと思えるようになった。明日ではなく、今やらないと後悔すると思えるようになった。

１か月間、朝５時から多いときで１日１００食作っていた。魚菜市場の婦人会の人たちが手伝うからと言ってくれて、野菜も流されたと思えば何でもないと、どんどん出してくれた。それがなかったら、物がないので大変だった。消防署の食堂に行くと「切なかった」と涙が出る。署員が疲れてドロドロになって帰ってくるが、食べてお腹がいっぱいになると笑顔が出て、「じゃまた行ってくるか」と出て行く。体力的には眠れないし、１か月で８㌔やせた。自分が食べることを忘れて、食べさせなきゃという思いが強かった。働いている人は家もあるのに、誰かがやらねばと言う気持ちでやっている彼らを見るのはしんどかった。署員の人たちがつらい思いをしているのを見るのは大変だったが、食べて、笑顔が少しでも見えて、「がんばっぺ」と思えた。震災直後は皆が声を掛け合って優しいなと思えたが、１か月経つと違ってきた。でも皆やさしかった。優しい人がほとんどだった。

震災を経験して

人生観が変わった。昔より今の方が自分を好きだと思えるし、人のことも好きになれる。昔は人のあらを探したり、そうはいっても自分の方がつらいんだよと思っていた。今は自分が元気だし、あなたと会えて元気になったと言ってもらえるのが好き。考えていることはあるのに、表現をすることが下手で、でもとりあえずこういうことがやりたいとか言えるようになった。

火事場でも「手伝います」と言える。見物人の中には子供も女の人もいるので、彼らのそばに行って声をかけられる。黙っていられなくなったが、活動することで自分が元気になれる。自分の中のはつらつさは自分で盛り立てないとだめになる。奮い立たせる何かがある。消防団員は皆の一歩前で役に立てる立場にあるので、それをやれるし、「半纏を着ているのだから、私を頼りにして」と言える。

消防団に顔を出すようになり、団員として認めてくれるようになった。やっと仲間にしてもらえたと思える。実際に女の人を増やせと言われるが、家を放ってはおけないのでむずかしい。女の仕事は一生限りないので難しい。女性団員の仕事をどこでやれば良いのか、次の世代の人たちのためにどうしたら良いのかがわからない。しかし女がいた方が良いということはやってみてわかったことなので、どのように興味を持ってもらえるかが今後の課題だ。

消防団に入団

平成13年に入団して15年目になる。ボランティアには興味があった。今の団長が母の同級生で、声をかけてくれた。「女だっていいべ、これ

からの時代だから、女がやってもいいんだ」と言ってもらえた。火事を消そうとまでは考えなかったが、女ができることがあるかもしれないと思えた。「何かやりたいけど、何をやっていいかわからない」という人には消防団があるよと言いたい。家の人に言われてやめた人もいるし、だからこそ入ったという人もいる。火事、震災、警報、大雨でも出ないといけないので、思ったより大変だが、自分たちで守っているという感覚になれる。私は絶対に入ってよかった。何かやりたいけどできなくて、親戚の家で手伝うくらいきりできなかった。大変だが、やっていなかったらもっと後悔する。人のために手助けができると実感できるし、力になる。話すことでまた一からという気持ちになれる。自分を活性化する力になった。

入った当時は、演習の受付、懇親会の世話係ばかりで、当然そうなると思っていた。演習の時はこうなるんだと勉強した。火事現場ではこうなるとわかる。震災後2年目に消防学校の2日間の研修に行くと決まったとき、最初はとてもいやだった。時間に追われて一日中勉強するという事が不安だったが、勉強してよかったと思えた。自分で覚えたいと思うと覚えられる。火災にも行けるようになっていたので、煙が出た際などの研修もあって勉強になった。現場に行って見ているので、もっと勉強したい。周りを見て聞く、話すという当たり前のことが当たり前でなくなったのが震災だった。目の前に出てくる食事が当たり前ではないという事は、震災がなければ感じることはできなかったので、感謝されるより、感謝できる自分がいいし、ありがたい。自分が元気でないと人にやさしくできない。震災で亡くなった人たちのパワーを頂いて、私は元気でいられる。私があこがれられる人間になってゆきたい。

疲れ切っていたときも家族はやめろとは言わなかった。いい加減にしたらとか、誰かに変わってもらったら、と言われると思ったが、そうした言葉は一言もなく、がんばれと言ってもらえた。家族の協力がなくてはできないので感謝している。家族も仕方がないとあきらめなくてはいけない。「行かねばねんだあ」という団員の気持ちを理解できているのは家族だと思う。

消防団の大切さは震災で一段と理解された。普段は飲んでばかりだと言われていたが、震災を経てやるときはやるんだ、かっこよいと言われるようになった。私もかっこよくなりたい。不眠不休で過酷だったと思う。でもそういう場で人を助けることができて、今も声をかけてもらえて、つきあいも続いている。4、5日で交代するが、その間のことが濃い。市長も泊まり込みで出ていたが、「あの震災で太ったと言われるのはお前のせいだ」と今も笑ってくれる。胃袋をつかむのは強い。女の強さであり、特権だと思う。震災時はとくにそうだった。人を助けるためには、食べて体力をつけないと！と感じた。

ユニフォームは黒地に赤の入った半纏で、これは乙種制服になる。団としての出動の際に着る。甲種制服はがっちりとした警察官のような服で、スカートにパンプスを履く。この服装で女性大会にも出る。毎年全国女性活性化大会があり、4年前には秋田大会で震災の経験談を発表した。

妹さんの発言

震災の時にはやれることはやってもらいたかった。他の人もやっていたし、自分たちも自分の立場でやっていたし、やれる場がある人はそこでやればいい。何か手伝いたい人はいっぱいいた。

4　保健師

湯澤睦子さん（昭和31年生、保健師、生まれは川井、嫁ぎ先は小国、宮古市川井保健センター所長）２０１３年８月22日に話を伺った。

震災当日から

当日は区界を超えて戻ったとき、職員は恐れで皆外に出ていた。声をかけると皆さんすぐに動いてくれた。保健センターで炊き出しを行った。小国や川内には何かあるときに炊き出しを行う習慣があった。何かあると川内の婦人会、消防協力隊が行う。センターにある水、食糧と、近くのコンビニのパン、カップラーメンの買い出しを職員が行った。

自主的に後方支援を考えた。栄養士、事務職員が行った。炊き出しの準備にはセンターの用具を使った。市からの要請がある前に、自分たちが集会所や公民館の釜や自分の家の釜を持ち寄り、ここで炊き出しを始めた。給食センターがあったが、そこまで考えが及ばず、ここで始めた。

最初は持ち寄りでおにぎりには海苔を巻いたり梅干しを入れていたが、そのうち何もなくなって塩のみになった。各家では精米をしていない籾米は持っていたが、停電のため、自家発電のある家まで持ち込み、精米してもらった。これらは寄附として扱われた。

応援要請は市の本部長から来た。8千個の要請だった。そのため暗くなってから公社でも炊き出しを始めたが間に合わず、ここで終わってから公社に女子職員を連れて行ってやったが、それでも間に合わず、センターでもやったが、まだ間に合わない。

そのため川井の婦人消防協力隊に依頼し、一緒にやった。終わったのは2時頃だった。その頃、職員が何も食べていなかったといって、コンビニを開けられないかと車で来たので、ある分だけ炊いて持たせた。

シミュレーションはなかったが、男たちは外へ出てしまうので、私たちは食糧、水の確保が必要だった。ここにはかつて日赤があり、水用のタンクがあったので、そこに水を確保した。

これまでの経験では、山火事があったとき、女子職員はおにぎりを握らされた。小国ではどの家でおにぎりを握るということが決まっていた。何かあったらこの家に行くようにと言われていた。

今回は次の日の要請もあり、8千個と言われていた。ここだけでは無理だったので、朝一番に地域の人に声をかけようということになり、栄養士と2人で廻ってもらった。婦人会、ボランティアの会の代表など、地域のリーダーになれる人に依頼して廻った。協力者1人に声をかけると、皆さんすぐに動いてくれた。その人からまた声かけが広がり、皆が協力してくれた。婦人会は解散していたが、昔の名簿を見て、元の会長宅を廻った。地区の人たちも情報が無く、何をして良いかわからなかったという。ここには6行政区、40小集落あるが、それぞれの集会所単位でおにぎりを握ってもらった。1日に午前と午後の2回、総合事務所にすべてを集め、宮古市長町にある水道事業所に持って行った。

新里では婦人消防協力隊の隊長が声かけをしたという。ここには食生活改善推進協議会（通称食改）という組織があり、彼らと震災について後になって話し合ったところ、炊き出しをした地域としなかった地域があったという。地区のリーダーとなる人が必要だと言い合った。

川井ではどこで孤立するかわからない。電気がなければ薪でご飯が炊けるし、暖もとれる。米も干物もあるので、飢えない。家では年寄りを置いて出てきていたが、優雅にご飯を炊いて食べていた。卵がないから買いに行ったらなかったと言っていた。水は今はほとんど水道なので、落差がないところでは長く停電が続くと水が出なくなると触れて廻った。門馬では水がなくなりそうになり、運んだというが、その他は問題がなかった。ラジオがない家もあり、情報が全くないところもあった。

3日目くらいでここの役目は終わり、その後は新里の給食センターで引き継いだ。その後、ここの職員は包括支援センターなどで活動をした。栄養士は炊き出しの支援に、保健福祉関係者は市役所の保健福祉部に集合し、避難所の巡回に廻った。

私は田老第一小学校、永田さんは田老の常運寺に詰めた。毛布、歯ブラシなどの在庫はすべて出した。車いすなども持って行った。血圧計などは持参したが、薬までは頭が回らなかった。川井には薬屋が1軒あったが、後で薬を持ってこいと役所に言われてから気がついた。薬は流れたものを洗って使った。血糖値を測る器具もなかった。

田老第一小学校では体育館に集まっていた。田老の人たちが炊き出しをしていた。初日は2人で1個、2日目からは1人1個食べられた。食事はおにぎりとペットが出た。高齢者はおにぎりを食べられないので、栄養士が鍋を借りてきて柔らかくして出した。トイレは水洗ではないので良かったが、何日もたつとたまってしまい、これ以降どうす

るかという事になり、校庭に穴を掘るしかないと校長が言った。しかし小学校ではそこまではしないで済んだ。水洗の所では溜めてから流すようにした。トイレが最も問題だった。女性はナプキンがなくて大変だった。2日目に公民館にいた人に聞かれ、戻って取ってきた。

診療所の黒田先生の指示で、トリアージといって、色別のテープを詰めた。薬手帳もなく、聞き取りをしながら薬リストを作った。透析患者は消防団や中学生が線路の上を担いで行き、道路まで出て救急車に運んだ。

田老では避難所にいて、2泊3日の行程を3月末までやった。その後は巡回で各避難所を廻った。ここは看護師、栄養士など本来は4人が常駐していたが、4月になってからは所長のみが常駐となり、4月末に全員がここに戻ってきた。

川井に避難している方もいた。実家とか、娘の家など、親戚を頼ってきたという。大概1年以内に戻った。山田、釜石からの人もいて、介護サービスも利用していた。田老診療所に入院していた人が、特養の心生園に家族と一緒にバスで来ていた人が12人いた。診療所にも3人入院し、家族も付き添ってきていた。こちらに来た12人は黒田先生がトリアージで決めた。彼らの食糧は行政支援があった。

私の資格は保健師なので、住民の健康管理などの危機管理について主に担当をした。停電したときの在宅老人や、携帯用酸素ボンベは最大8時間までなので、大雪の際はギリギリで診療所に入院させた。こちらで被害があれば対応できない。

ここには社協のヘルパーがおり、どこにどういった高齢者がいるか把握している。関わりのある人の優先順位を決めておく。医療品の管理リストは必要だと実感した。医師は3日分しか出せないと言っていた。統合失調症の人がいて、かかりつけ医が岩手医大だったので、1日1回きり薬が出ず、ギリギリのところでバスが通じたので、盛岡まで行けた。

川井には医療機関は1か所のみだ。これまであった大きな災害はアイオン台風だったが、被害の大きさは伝承されていない。「災害時対応の保健活動」というマニュアルがあり、その中に「精神の対応」という項目があって、個人の記録の取り方などが書かれているので、それら思いついたものを鞄の中に入れたが、役に立たなかった。

田老第一小学校の養護教員は女の先生で、記録を取っていた。災害対策本部には、日々の診療記録をメモとして提出した。保健師関連の記録は健康課にあるのではないか。

3日目には誰がどこの避難所へ行くようにとの指示が出たが、田老の情報が無かった。保健師が2人いたので、避難所を廻ってほしいと言われたらしいが、2人とも常運寺の避難所で手一杯だった。診療所には医療の必要な人がいっぱいいた。田老には避難所が6か所くらいあったので、そこを廻った。田老を見て泊まり込むことにした。被災者と同じように毛布1枚で寝た。石油ストーブもあった。寺では太いろうそくを廊下に点けていた。

公用車に油を入れて保健センターに持ってこいと指示され、川井のすべての車を持って行った。

おわりに

岩手県では古くから(1)婦人防火クラブ、(2)婦人消防協力隊があり、比較的新たに立ち上がった(3)女性消防団員などがあり、震災時にはそれぞれの場所で活動を続けてきた。それぞれの立場と地域で活躍した女性たちを見てゆくと、婦人消防協力隊は消防団への協力団体で、消防団の分団活動のバックアップをする組織で、○○分団婦人協力隊という形になっている。一方婦人防火クラブは町内会の組織で、家や町内から火事を出さないようにという目的でできた組織でそれぞれ設立時からの主旨が異なっている。女性消防団員も居住地域の分団に入る。

自分が被災者であるにもかかわらず、連日現場に出て炊き出しをしていたのがここに述べた女性たちだった。その組織力と行動力には頭が下がる思いだが、現状では後方支援という男たちの活動を背後で支える組織ということが共通項のように思える。今後地域社会の過疎化が進み、後方支援とは言っていられない状況になりつつある今、彼女

たちの行動にどんな変化が見られるのか、注目してゆきたい。

【引用文献】

㈶岩手県消防協会監修「いわて消防物語－纏に生きる人たち－」「いわて消防物語」刊行委員会　１９８６年

第2部　各分野での震災後の取り組み
第6章　公的な支援体制

神田より子

1　消防団

はじめに

東日本大震災では、消防団の方々は自分たちが被災者であるにもかかわらず、地域の皆様のために命がけで救助、捜索、消火、避難誘導、自衛隊や広域消防隊の道案内などを行ってきた。その活躍には頭が下がる思いであるが、なぜそこまでできるのか、という疑問が頭から離れない。筆者がそのことを理解するためにも消防団員の方々の体験を伺いたかった。

(1)　消防団員の3・11

宮古地区管内の消防団の活動状況は宮古消防署によると、3月11日の出動人員は710人、12日が797人、13日が730人で、3月20日までは400人体制で活動をしていた。21日以降は300人台で、24日以降になると200人台となり、27日以降は100人台と減少し、4月1日以降になってようやく100人未満となった。

震災直後の活動内容は水門閉鎖、警戒活動、避難誘導活動、消火活動、捜索活動であった。12日以降は水門閉鎖に代わってがれき撤去の活動が加わる。消火活動は16日までとなっている。

宮古市消防対策課が作成した宮古市消防団員用の「地震災害活動マニュアル」には、1初動措置、2参集準備・手段・経路における情報収集、3参集場所、4情報収集・伝達、5住民への広報、6部隊編成・出動準備、7消火活動、8水ひ門閉鎖活動、9救出・避難活動、10無線通信等が掲載されている。

このうち第8の水ひ門閉鎖活動の中で、平成24年度から以下のようにアンダーラインを引いたうえで改正施行が追加されている。

1活動原則　すべての活動団員は、救命胴衣を必ず着用する。

2活動要領　出動隊は、津波予想到達時刻等の情報把握に努め、津波予想到達時刻10分前には予め分団で定めた避難場所に、必ず避難が完了していること。

今回の震災に関する消防団の動向について、2015年8月29日に宮古市消防団本部宛にいくつかの質問をさせていただき、9月2日に**白鳥定良宮古消防署長**（昭和32年生）から直接お答えを頂いた。以下はその内容である。

①消防団の規約が3・11以前と以後でどのように変わったのかについて伺った。

3・11以前は明確なものはなく、津波到達時刻の前までには避難し終わっている、というものだった。しかし3・11以後は、大事なことは津波が来る前に自分の命を守れ、率先して避難者たれという事で、3・11以降のすべての消防団員に周知し、「消防団地震災害活動マニュアル」を定め、活動内容を徹底した。

②宮古市管轄消防団員の被災状況（死亡者、負傷者、家（家族）、職場など）を伺った。

死者・行方不明者あわせて16名の殉職者と6名の負傷者という。約1千300人分の家族や家の状況は把握していないとのことだった。

③次は被災した消防団員への補償について伺った。

補償は全国一律で、特別賞じゅつ金が国、県、市からでる。その他弔慰金、遺族援護金として日本消防協会から福祉共済金がでる。また遺族補償年金が出て、一時金か分割金かを選ぶことができる。

消防団員の出動手当と、3・11の出動への手当だが、出動手当は1回当たり2千円で、災害法適用や8時間を超えると倍額を出す。

④3・11以前と以後で消防団員の数に変化があったのかを伺った。

団員の数の変化は以下の通りだった。平成22年10月1日現在では1千315人、23年は1千300人、24年は1千286人、25年は1千258人、26年は1千244人となっている。微減という感じだが、人口比を考えると減少はしていないという。

こうしたことを踏まえ、以下では各地の消防団員の3・11を追ってゆくことにしたい。

(2) 各地区での消防団員の活躍

田老での活動①

畠山昌彦さん（昭和42年生、館が森、田老漁協指導課長、消防団第三十分団員）に2013年3月28日に話を伺った。

3月11日

震災当日は漁協2階にある事務所にいた。地震直後、事務所に残っていた職員で手分けして防潮堤の外にある施設に人が残っていないか確認を行った。事務所に残っていた女性職員には車で高台にある道の駅まで避難するよう話し、沖の船には無線で連絡しようとしたがすぐに停電になり、連絡をすることができなかった。

停電で全く情報が入ってこなくなったため、1階の購買店舗にあったラジカセに乾電池を入れてラジオをつけると津波の予想は3㍍ということで、防潮堤の内側は問題ないと考えた。しかし、その後予想が6㍍となり、やがて「釜石には大きな津波が押し寄せています」という絶叫が聞こえた。それから英語やら中国語やら意味不明の外国語になって状況が解らなくなった。

3階に上がって漁港を見ると港内の海水が渦を巻いて引いていき、大型の漁船が次々と転覆していくのが見えた。一緒に事務所に残った参事から周囲の状況を写真におさめておくよう指示があったので、カメラを持って漁協のすぐ前にある防潮堤の上に登ると田老港の沖にある防波堤の遙か上に水しぶきが見えた。それは南岸低気圧の影響で10㍍の大シケになったときよりも遙かに高い位置で、津波が6㍍どころではないと直感し、すぐに防潮堤を駆け下りた。防潮堤で水門を監視していた三十分団の団員も私とほぼ同じタイミングで走り出した。

防潮堤を駆け下りている途中、事務所の前に金融部門の職員がいるのが見えたが、防潮堤が目隠しになって津波が来ていることが解らないらしく、避難するそぶりもなかったので「逃げろ！」と怒鳴ったら、状況を察したらしく、すぐに西の方へ逃げ出した。

逃げ出した三十分団の分団員は西の方に逃げた団員と北の方に逃げた団員がいた。西の方が山に近いが、北の方が海からの距離が遠くなる。各人が一瞬の判断で逃げる方向を決めたものと思われる。

津波は内側の防潮堤に一旦阻まれ、波が南北に分かれて山にぶつかり、南北から波が流入してきたため、波が来るのは中央部が最も遅かったことから、北に逃げた団員は亡くなり、西に逃げた団員は助かった。

私は金融部門の職員の後を追って西の方に走ったが、走っている途中で事務所にまだ参事がいることを思い出して立ち止まった。どうしようかと躊躇しているうちに時間は経過していき、山に走っても間に合わないような気がした。以前テレビで見た津波の映像が思い出された。鉄筋コンクリートの建物は津波でも倒れなかったはずだ。時間がたってしまったので、山に向かうより鉄筋コンクリート製の漁協事務所の方が安全だと判断した。3階に上がると津波は今にも内側の防潮堤を越えそうな高さまで迫っていた。このまま持ちこたえてくれるかと思ったが、沖から更に高い波が押し寄せてあっという間に防潮堤を越えて津波が侵入してきた。このとき手にカメラを持ったままだったことに気づいて写真を撮った。

窓は南の方向を向いており、防潮堤沿いに土煙が高々と舞い上がるのが見えた。防潮堤の外側にあった2階建ての大きな建物が防潮堤の上に持ち上げられるのが見え、たくさんのガレキと共に黒い波が防潮堤の内側になだれ込んできた。

北からも南からも家が次々とドミノ倒しのように倒れて中央部に集まり、事務所の周囲はあっという間に真っ黒な水に被われた。たくさんのプロパンガスのボンベが浮いてきた。シューシューとガスを吹き出すものもあった。

周囲の山々から黒煙が立ち上ってきたと思ったら、火が見えた。流された家から山の木に火が点き、次々と延焼し始めたが、何の対処もできなかった。

家は流失したが幸いにも家族は全員無事だったので、両親に子供を

預けて消防団の活動へ参加した。周囲の山の火災で避難場所の一つとなっていた中学校も危険と思われたため、中学校にいたけが人を総合事務所まで担架で運んだ。けが人のおばあさんは動かすと痛がり、このまま置いていってくれと言ったが、無視して運んだ。優しい言葉の一つでもかけてやれば良かったと今では思うが、火がすぐそばまで迫っていて、言葉をかける余裕すら無かった。

その後、公民館へ行ってヤカン・ヨガマット、小学校の裏にある緊急時の備蓄品倉庫から、毛布・断熱シート・懐中電灯などを持ち出して被災者へ配った。避難所の床は堅くて冷たかったのでヨガマットは重宝がられた。

被災地は真っ暗で歩ける状態では無かったため、明るくなるまで被災者の捜索はできなかった。

3月中の活動

翌日から避難者の捜索に入ったが、被災場所はありとあらゆる場所からクギとかガラス片が飛び出しており、長靴と軍手しかない消防団員はあっという間に手足がキズだらけになり、破傷風に気をつけろと言われた。一緒に捜索した自衛隊の人達の靴はクギを踏んでも平気そうだったし、クギやガラスに触ってもキズがつかないようだった。水筒や行動食も持っていて羨ましかった。

不明者の捜索と山火事の消火。どちらもやらなくてはならないのだが、人が少なくどちらも中途半端になってしまい、捜索中に「今頃探したって生きてる訳がない。今まで何をやってたんだ」と罵声を浴びせられた。家を失って心細いはずの家族をほったらかしにして、食うや食わずで火事場と被災地を這いつくばってきたのに、なぜこんなことを言われなければならないのかと情けなくなった。このことが一番辛かった。私たちはどうすれば良かったというのだろうか。今でも解らない。

仲間の分団員は両親の消息が知れないのに、ずっと消防団活動を続けていて「ご両親を探しに行け」と言っても聞かなかった。彼には両親が亡くなっているかも知れないという予感めいたものがあって、何も考えられなくなるぐらい動き続けることで不安を払拭していたのだと思う。

田老での活動②

館　昭一さん（昭和33年生、保険代理店経営、田老消防団二十八分団長）に2013年12月23日に話を伺った。

家は田老の川向だった。高校は釜石で、その後東京の関東化学に就職し、昭和58年に結婚し、実家を継ぐために昭和59年に帰郷した。こちらで就職し、今は保険代理店をやっている。実家は漁師で、今もやっている。

3月11日は営業のため、田老にいて、契約活動をしていた。地震の時は宮古消防署田老分署にいた。この当時は分団の部長で、地震が収まってから屯所に行った。警報が出て現地集合とし、長靴、無線機、刺し子半纏を着て、ヘルメットをかぶり、屯所から100㍍ばかり離れた防波堤の上に行き、水門を閉めに走った分団員の確認に声かけをし、帰ってきた声で誰が来ているか判断した。3時に水門閉鎖が終了した。そのとき私は防波堤の上にいた。

無線で3時20分に津波到達という情報が入った。このときの海の様子が変だった。老人たちからは田老は津波が大きくなるので、他より2倍・3倍になると言われていた。3時10分頃に避難した。

亡くなった祖母が「斜面の道路は津波が跳ね上がる」と言っていたが、観光ホテルの裏の道でそれを実感した。「足下に水を感じたら真上に上がれ」と言われていた。赤沼山に逃げたときは、水位が3㍍くらいに上がっていた様に思う。サッパ船が渦の中で廻っていた。その後定置網の鮭漁に使うダンベ船が流れ出した。昔の人が「ヨダ」と言っていたものだと思った。ダンベが流れるには4・5㍍の水深に達している必要があるので、見ているとこれが津波だと思った。

元分団長が「佐賀部」を見ろと言った。これは田老湾の南側の岩が並ぶ岬で、そこに波が丸くなるように押し寄せていた。一方、北側の

三王岩方向でも同じように波が高くなり、両方の波が一つになって盛り上がり目線が水平線より上になり、一端止まった。すると跳ね上がった様に見えた波頭がコバルトブルーになり、そのまま蛇がうねるようにガーッと吹き上がって来た。これは大変だと思い、山に避難していた皆に墓地に移動するように大声を出した。

その後山の中を走り、墓地につながる道まで出て、中学校まで波が来ているのを見た。校庭内に救急車があり、回転灯が消えて水に浸かっていた。街中の家々が潰れ、ほこりと水しぶきでよく見えなかった。

中学校までは津波が上がらないと思っていたが、校庭まで家が流されて飛んできた。学校の前の家が校庭にそのまま打ち上げられていた。

このあたりの家は観光ホテル側から回って来た波に呑まれた。球場側の家は波に打たれたように崩壊していった。津波は防潮林を根元から倒して、波が家に当たった瞬間になぎ倒してゆく。波の力が強すぎて全壊になった。旧防波堤の内側の家は2階が残っていた。

自分の家は水圧で2階の洋服ダンスが瓦礫の上にポンと乗っていた。家族6人は全員無事だった。何かあったら、山のてっぺんの墓地に集まれと言っていた。落ち着いてそちらに行こうとしたら、中学生と老人が山の中腹に見えた。中学生に男は老人たちを引き上げ、女は物を運べと声をかけ避難させて、彼らを上の方に連れて行った。その後墓地に行ったら、家族が皆集まっていた。

二十八分団の24人は全員無事だった。津波直後に活動できたのは20人だった。町内で職場にいた者はその近くの水門などで活躍していた。分団員で家が残ったのは3人だけだった。他は家がなくなり、総合事務所に全員が集まり合宿状態だった。3階の2部屋を占領し、皆で泊まった。食べ物もなかったが、空腹感はなく、そのまま疲れて寝て、朝5時頃から活動をした。生き残った人たちを脱出させることが先決だった。朝の内に7人くらい助けた。声かけをして、生きている人をここへ連れてきた。

その日の昼頃、神田地区からおにぎりが来た。北高の厨房で作ったという。三十三分団の人たちが「出せ出せ」と言って米を供出してくれた。最初は塩がほしい、次はのり、梅干し、漬け物とどんどん贅沢を言いたくなった。この食事は自衛隊が来るまで続いた。

翌日には自衛隊の調査部隊が入ってきて、13日には活動していた。田中分団長は盛岡に行っていたが、夜には帰り、皆の活動の記録をつけていた。

11日の夜に山火事が発生して、12日の午後から13日にかけて消火活動をした。鹿角の消防隊が入って来てくれた。山田や大槌の火事や被害がひどかったので、こちらにはヘリコプターは来てくれなかった。山火事は4日間続き、種火が残っているところを消して歩いた。小学校からポンプで水を引き、ホースをつないで消火した。小型ポンプも使った。ジェットシューターという消化器を背中に背負い、手でポンプを押して消した。この器具は本来残火処理用のものだが、他に何も道具がなく、これを使った。火事があったところに黙って立っていると足下が熱くなり、消えたと思ってもまたボッと火が点いた。山火事は飛び火で中学校あたりまで来た。一昼夜以上燃え続けていた。津波で車ごと運ばれ、水死していた人が、その後の山火事でさらに焼かれた人がいた。

二十八分団の管轄管内は館が森から川向までの防波堤の内側になる。道路と川で区切った区域がその範囲で、カマド町といい、分家に出た人たちが集まって住んでいた地区だった。軒数は３００軒くらいで、同級生は１００人くらいいた。

緊急作業は3月末までで、4月からグリーンピアに移り、二十八分団として昼は田老まで降りて活動をした。この活動は5月連休後頃まで続いた。4月、5月は見回って瓦礫の処分、行方不明者の人探し、撤去する家の手伝いなどをした。誰の家かわからないものもあって、なかなか進まない。合宿状態だったので、仕事はしやすかった。分団は屯所から歩いて来られる範囲なので、日頃からよく一緒に飲んでいて、お互いに気心がわかっている。

私は4月末から仕事に復帰した。佐原に親戚がいて、電気が通ったらすぐにここの避難所からそこに移った。父母はそこにいて、家族は

宮古二中の仮設にいた。自宅は平成25年9月にローソンの裏に新築した。土地は父が買っておいた場所になる。隣の人に聞くと水は入らなかったというので、土地を道路から50㌢高くして、基礎も50㌢上げて建てた。親戚の山を崩して建てようかと思ったが、造成に金がかかりすぎるので、苦渋の決断をした。

息子は宮古消防署の消防士をしている。当時は岩泉に勤めていた。自宅にいたので45号を通って勤務先に向かおうとしたが、小本で止められた。これから消防署に行くと言って通してもらったという。山道を回って岩泉に行く道を知らなかったのだ。彼は今年結婚してアパートにいる。

津波の時は、分団員の活動は10分以内に終えて、15分以内に避難すると決めていた。この15分というのは昔からの言い伝えにあった。地震があって、津波が来るまでに三陸沖まで15分はかかると計算していたのだ。堤防があるために大丈夫だと考えていた人がいたが、分団では津波シミュレーションを見て、防波堤を越えることは想定していた。しかしこの大きさの津波は想定していなかった。

今思うととんでもないものが来たと思う。一人住まいの老人をチェックすると言っても、そんな余裕はない。逃げない人を連れ出す強制力はもたない。

最初の情報が3㍍だったので、それが足かせになっていた。堤防の上にいて、波を見に行った人がいたが、分団員を避難させるためにかまっていれなかった。「津波てんでんこ」ということは頭にあった。分団員がそばにいるという安心感はあった。震災前は「消防団は飲んでバリいる」と言われていたが、その後は言われなくなった。

反省点

今後のことと反省点として、まず始めに水門を閉める。無線が切れたときの啓蒙活動ができなかったこと。広報をどうするか、やるべきだがどうすれば良いのかなどを上げることができる。我々には交通をストップさせる根拠がない。この先は危ないと言っても権限がない。

山田町では止めて助かった人がいたと聞いた。津波が来ているのに車がどんどん走っていて、頭がおかしくなりそうだった。見ていてパニックになる。個々の意識を高める必要がある。津波の際に誰が車を止めるのか、と言う話は前からあった。啓蒙はするが、個々の人がそれに従うという意識がない。危ないから行くなと言っているのに、それに従わない。震災後、国道事務所や警察署で話し合いをして、ここで止めるという話はできている。

水門は遠隔操作で動けばよいがうまく作動しない。新しい水門は4か所できる予定だ。元は18か所あり、これらはすべて使えないし、1回では閉めきれない。14・7㍍の防波堤が新しくできるが、この高さでも今回の津波は防げない。

崎山地区での活動①

崎山では消防団第十六分団長の**山下啓一さん**（1952年生、崎鍬ヶ崎在住）から2015年4月25日に米屋陽一が話を伺った。

地震後すぐに水門を閉めに行き、防潮堤に上がって様子を見ていた。すると副分団長の山崎安人君（1962年生）が「無線で高台に上がれという指示があった」という。そこで高台に上がってすぐに波が来て、危機一髪で助かった。分団員のK君は車に乗ったまま流されたが、車が途中で引っかかって助かった。

副分団長の山崎安人さんの話によると、啓一さんの娘さんとその友だち、おかあさんの3人が家ごと流されたという。安人さんは大沢に最初に行き、水ひ門を閉鎖後、各海岸を廻った。

その後、屯所が無事だったから、先ず屯所に皆集まり、今後のことを話し合った。十六分団は管轄区域に6か所の海岸があり、分団員が分かれて避難誘導をした。2日目も3日目も行方不明者の捜索に参加した。啓一さんは自分の身内にも不明者がいたが、そちらは我慢をして、他の地区を優先した。

家族を亡くしても部落のことはしなければならないという頭があった。息子には無線連絡して「悪かったな」って言った。息子からは「消

防、全うしたらいい」と言われた。家族に悪かったなあと思う。
1年過ぎてあきらめはついたが、もしかしてどこかに生きていてくれればなあという気持ちがある。

崎山地区での活動②

消防団第十六分団**佐々木重勝さん**（１９４８年生、崎山在住、箱石自治会長、宮古市議）から２０１５年3月13日に米屋陽一が話を伺った。
私もいろいろな立場がありましたが、私自身も消防団を優先して、自治会の対応は嫁さんが背負い駕籠をしょって、避難所に食べ物とか毛布とか届けた。十六分団は団長の指揮のもとに田老とか津軽石とか各地の分団の必要なものを聞きながらやった。
田老の方面隊からは全く情報が得られず、通信手段もなく、連絡もやれなかった。身内もいることで気になり、行きました。トンネルを抜けて見えた田老の光景はすごかった。地区全体が瓦礫の山で、唯一歩ける防潮堤に沿って歩いたが、それも途中で破壊されていた。四つん這いになって進んだが、そこは建物の基礎だけが残されていた。近くの小高い山の上の神社から人の声が聞こえ、行くと怪我人がいて、治療が必要だった。そのため瓦礫の中を総合事務所に向かったが、たどり着けず、線路沿いに歩き、自衛隊本部にたどり着き、お願いすることができた。
被災当初は停電しているため、暗い家に帰り、翌日も暗い中を出かけるという状態だった。
捜索当初は、生存者確認が優先され、その後に行方不明者の捜索活動を行った。当初消防団には発見の段階で「手を付けず、警察に連絡をしてください」ということだったが、捜索が進むにつれて、搬送まで依頼された。消防団員の負担も大きかったものと思う。

宮古地区での活動

２０１４年11月20日に第八分団の**太田憲一郎さん**（１９４６年生）、**和山悟さん**（１９７１年生、分団班長）、**黒渕祐司さん**（１９８０年生、分団員）から杉本栄子が伺った。第八分団の管轄区域は末広町、大通3丁目と4丁目、南町である。

水門監視から津波到達後まで

太田さんによると、地震の後、第八分団が8人で水門を監視していたとき、3番目の真っ黒い波がバッーと来た。そこで号令をかけて土手にいた団員たちが下に避難した。太田さんが数分後、線路に上がってみたら、鉄橋がなくなっていた。
黒渕さんたちは分団長の「逃げろ」の声で2、3人がポンプ車に乗って、管内を廻った。土手沿いの距離を走っている間に、サッパ船が土手に上がったのが見えたのを横に見ながら、波を被りながら走った。和山さんは土手沿いに走り最初の角を曲がるまでが生きるか死ぬかという異常な緊張だったが、角を抜けてから冷静になった。南町まで波が来たということは大通全部に波がきていると思った。橋も渋滞で通れなかったが、避けて、避けて、警察官に「南町の堤防も水が上がっているから避難させてくれ」とマイクでしゃべり、末広町に下ったが、末広町にはまだ水がきていなかった。
黒渕さんによると、まだ人がいた。店の心配もあるから、何人か外にいた。
和山さんは、必死で「堤防を越えた、逃げろ！」ってマイクで言った。太田さんの奥さんも絶叫型の「逃げろ！逃げろ！」というのを聞いている。みんな「えっ！」っていう顔をしてこっちを見て「なにをいっているんだ、お前たちは」みたいな。必死だったのでその人たちが避難したかどうかは覚えていない。すごい勢いで避難して行ったのは、南町を走っていた間だった。オートバックスに突き当たる辺りで、そこの整備士さんたちが全速力でダッシュしているから、そこら辺にいた人たちがみんなそれにつられて八幡さまに向かって走って行った。後日宮司さんに聞いたら結構な人数が八幡さまに避難してきたという。「堤防越えた、逃げろ！」って言ったら、みんな本気で逃げだした。
駅前のロータリーのカリヤビルと三上酒屋の前に、腰を抜かして立てなくなっているお年寄りが何人かいた。その人たちをポンプ車に乗

せて消防署まで行った。ところが、消防署が状況をまったく把握していなくて…。

黒渕さんによると、多分津波がきたときに、もう無線が切れていたと思う。

和山さんのポンプ車を見た瞬間、消防署員がふっ飛んできて、「状況がわからないので、2階に来て教えてくれ」と言われた。第八分団が来たということは、なにかが起こって、見てきたっていうのがあったのだ。

その後、ポンプに乗せた人たちを避難所の宮古小学校に連れて行った。「ここまでくれば大丈夫、避難所ですから」って降ろそうとしたが、そこに津波が来ていた。校庭まで水が上がってきているのに、「ここまでくれば安心だ、よかったね」と、のろのろ歩いている人がいっぱいいて、祐司君が「だめだ、走れ」って、マイクでしゃべった。

和山さんはその後、向かい側の県の合同庁舎に行き、「腰の抜けて立てないお年寄りがいるから中に収容してくれないか、宮古小学校にも津波が来ているから」と言って、会議室を開放してもらった。そこで岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれた。我々は人を降ろしてから第一病院の角に行った。

その後、魚菜市場駐車場の角で完全に道をふさぐようにポンプ車を止めて、アナウンスを続けた。水が来ていてこの先は行けないからと、車を止めて「ここから先は波が来ているから」と引き返すように伝えた。その後、駅前通りに戻った。かつてここは防災計画を聞いた時に、市内で駅前通りが一番高い土地だと記憶していた。ここなら大丈夫だろう、もしここが被ったら市内は全滅だろうという判断だった。だから、駅前通りから声が聞こえてくれば、付近にいた人はここに寄ってくるだろうという頭があった。それで、「この通りを通って避難しろ」と、案内を続けた。

水が引き始めてから

2人はとりあえず安定したのと水が引き始めるのを見て、再び駅前に戻り、ポンプ車は駅に止めて、第八分団の屯所まで歩いて行った。

太田さんは屯所に戻ろうとしたら、べにやの3階から「あそこさ、人がいる！」っていうので団員が助けに行って、その晩は屯所の2階に泊めました。

和山さんによると、夜水が引くまでの間、結構な人数が自宅に帰ろうとしていた。田老、向町、藤原の人たちはいつもの習慣で市役所の前を行こうとしていた。あまりにも人数が多いので、花の木通り、末広館のあたりに分団員が交代で1人立って、「ここから先は朝になってから行ってくれ」という説得を繰り返した。結構な数の人が血相変えて「田老まで行けますか」「藤原まで行きたいんです」「金浜が全滅って聞いたんですけど」って、聞いてくる。市内ではなくて遠くに自宅のある人が、ここから帰ろうとしていた。

その時点ではどこが詰まってどこが空いているのか、当然わからないし、すでに夜ですから、「頼むから避難所で一晩耐えてくれ」としか言いようがなかった。

黒渕さんによると、水が引くのに合わせてだいぶ遅くなってから、動ける者が歩いて見て回った。

和山さんによると、水が引いてからポンプ車も出したが、セントラルホテル熊安の前に、白い大きな漁船が止まっていたので、その先は車が入れない、そこまでが限界だった。その漁船がポンプ車で末広町に入った時に見た船だった。

太田さんによると、アパートに住んでいるお年寄が、ベッドに寝ていてワッーと水を被り、水が引くのを待っていた。若い人に助けられて、衣類が濡れたので裸でおぶさって出て来た。もう1人階段から降ろした人と2人をポンプ車で宮古病院まで運んだ。

黒渕さんは、ポンプ車が生きていたお蔭で、その後の火事にも役に立ててよかったという。太田さんも、おじいちゃんがお一人亡くなられたが、管内を守ることができてほっとしているという。

高浜地区①

消防団十一分団長の**佐々木好栄さん**に、平成26年8月12日に宮坂清が分団屯所で話を伺った。

3月11日の地震発生時には高浜小学校に全学年児童がまだ在校しており、全員が校庭に避難した。小学校は地域の避難所に指定されており、多くの乗用車が入っていた。「連れて帰っても良いですか」との保護者の声に、「警報が出ているのでもう少し様子を見ましょう」と、大洞晴弘校長が止めた。そのうち校庭にも津波が押し寄せて来て、消防団員の「だめだあ、みんなあ、逃げろ、こっちだ、早く、早く」の一声で、全員が校庭裏の高台に逃げて、全員無事だった。

この日、消防団十一分団長の佐々木好栄氏は、避難場所に指定されていた高浜のコープケミカル社宅の裏にある高台に避難した。ここには67、8人が避難しており、自主防災の倉庫や集会所もあったが、鍵がなく、社宅の集会所の1部屋を借りて、お年寄り19人に入ってもらった。また倉庫に6人、資材置き場に17人が入り、屋外にあふれた26人はたき火をして過ごした。社宅の人から食糧を運んでもらい、自宅も近かったので米を持ち寄り、皆で食べた。中に津波の水を被って低体温症になった子どもがおり、母親と団員が3人で往復5時間かけて河南中学まで運び、救急車を呼んで助かった。

12日からコープケミカル社宅上の避難所にいた消防団員4、5人で水門を開け、また完全に孤立していた高浜への道を確保するため、重機で道路の瓦礫を取り除いた。13日には国道45号線が開通し、14日から自衛隊が来てくれて、行方不明者の捜索を行った。捜索などで家を壊さなくてはならない際には、家の持ち主への了解の取り付けも依頼されたが、抵抗のある人もおり、辛かった。

分団長として毎日出なければならなかったが、消防団の半纏を見ると安心するという人もいて頑張った。

高浜地区②

高浜の**安倍主税さん**（昭和30年生、当時宮古市消防団第二分団副分団長、「異人館」マスター）から宮坂清が2014年8月12日に話を伺った。

地震があったときは宮古の街にいて、すぐに閉伊川の水門を閉めに行った。着いたときはすでに他の団員が閉めていたが、大きな津波が来るという感じではなかった。それから閉伊川の水が引いて底が見え、それから黒い水が来た。分団長を先に防潮堤から降ろし、自分も飛び降りた。そうしたら水が頭からざーっと降ってきて、発泡スチロールの箱につかまって流されていった。300㍍くらい沈むことなく流されて、瓦礫の上に這い上がった。岸まで100㍍くらいあり、立っている体力が残っていなかった。その後無線で連絡が付き、消防署のアルミのボートが来て、助けられた。山口小学校に行ったが、濡れたままだったので、近くの姉の家に行き、一晩過ごした。

翌日自分の家のある「異人館」を見て、十一分団のある金浜、高浜の行方不明者の捜索活動に加わった。

津軽石での活動①

中野規男さん（津軽石本町、宮古市消防団第二十分団分団長）から宮坂清が話を伺った。

地震発生時、家にいた私はすぐに車で屯所に向かい、すでに待機していた分団員2人と津軽石川水門を閉鎖するため遠隔制御所へ向かった。他の団員は3か所ある他の水門の閉鎖に向かわせた。しかし停電のため作動せず、水門の建屋へいって操作するしかないとポンプ車に乗って水門閉鎖に向かった。操作方法がわからなかったが、どうにかすべてを閉鎖することができた。しかしすでに高浜付近で水飛沫（しぶき）が上がるのを見て、高台への避難は間に合わないと判断し、建屋に避難した。水門の高さは8・5㍍だが、さらにその上2・5㍍くらいまで水が入った。

津波が収まった15時50分頃、水門を開放してたまった水を排出させようと試みた。しかし巻き上げ機が作動しない。1号建屋に動力用発電機を見つけ、これを作動させることができた。我々消防団は発電機が動力用であることも巻き上げ機があることも聞かされていなかった。

他の分団員に津軽石地区や学校の避難所の状況確認と安全確認に行かせた。

翌12日からは生存者救出のための活動をした。避難所から捜索に向かい、また避難所に帰る日々で、避難所と自衛隊をつなぐ役割も果たした。

津軽石での活動②

佐々木睦雄さん（津軽石新町、宮古市消防団第二十一分団分団長）から宮坂清が話を伺った。

水門閉鎖の後、避難誘導と救助を行った。栄通りでは津波の翌日まで自宅に閉じ込められていた人が多数おり、ゴムボートで13人を救助した。

分団員の館下光利さんは、当日は避難誘導をしたり、ボートで救助活動を行い、夜は車両火災のために出動した。翌日からは遺体捜索を行ったが、その光景は今でも思い出してつらい。屯所でずっと寝泊まりしていたので、うまく眠れなかった。

津軽石での活動③

長澤光彦さん（津軽石祓川、宮古市消防団第二十三分団副分団長）から宮坂清が話を伺った。

二十三分団はあまり被害がなかったので、分団員の旬さんたちに屯所でおにぎりを作ってもらい、避難している人たちに届けた。

翌日以降は赤前で自衛隊員と遺体捜索を行った。泥棒が出没していたが、夜警をすることができなかった。

(3) 消防団員としての動きのまとめ

以下ではこれまで見てきた消防団員の皆様の震災の最中での活動状況をまとめてみたい。

田老の畠山昌彦さんは地震直後から動きだし、防潮堤の外に人が残っていないか確認した。こうした災害後すぐに行動に移せるのは、漁協指導課長という立場と共に、消防団員としての役目が身についていたからであろう。停電後も購買店舗のラジカセですぐに情報収集をし、当初3㍍の予想が6㍍となった事態を把握している。

その後港内の海水が渦を巻いて引いていき、大型の漁船が次々と転覆していく様子、また田老港の沖にある防波堤の遙か上に水しぶきを見て、南岸低気圧の影響で10㍍の大シケになったときよりも遙かに高い位置で、異常事態を直感し、防潮堤にいた人々に「逃げろ！」と怒鳴って避難を促した。

津波が落ち着くと、家族の無事を確認し、消防団の活動へ参加した。周囲の山の火災で避難場所となっていた中学校にいたけが人を総合事務所まで担架で運んだ。小学校裏の緊急時の備蓄品倉庫から、毛布・断熱シート・懐中電灯などを持ち出して被災者へ配った。

翌日から不明者の捜索と山火事の消火をおこなった。しかし捜索中に「今頃探したって生きてる訳がない。今まで何をやってたんだ」と罵声を浴びせられた。また仲間の分団員は両親の消息が知れないのに、ずっと消防団活動を続けていた。

田老の館昭一さんは地震の時は宮古消防署田老分署にいた。すぐに屯所から出動し、地震が収まると分団員の確認をし、3時に水門閉鎖が終了した。そのとき防波堤の上にいて、無線で3時20分に津波到達という情報が入った。このときの海の様子が変だった。田老湾内ではサッパ船が渦の中で廻り、定置網の鮭漁に使うダンベ舟が流れ出した。田老湾の南側と北側の岩を超えた両方の波が1つになり、うねるように吹き上がって来た。これは大変だと山に避難していた人々に墓地に移動するように大声を出した。途中中学生と老人が山の中腹に見えたので、老人たちを引き上げ、物を運べと声をかけ、上に連れて行った。

二十八分団の24人は全員無事で、津波直後に活動できたのは20人だった。彼らは近くの水門などで活躍していた。3人を残してみな家がなくなり、総合事務所に皆で泊まった。

翌日は朝5時頃から活動をした。生き残った人たちを脱出させることが先決だった。朝の内に7人くらい助けた。その日の昼頃、神田地

区からおにぎりが来た。三十三分団の人たちが「出せ出せ」と言って米を供出してくれたのだ。

11日の夜に山火事が発生して、翌日から消火活動をした。山火事は一昼夜以上燃え続けていた。

緊急作業は3月末までで、4月からグリーンピアに移り、二十八分団として昼は田老まで降りて5月連休後頃まで続いた。4月、5月は瓦礫の処分、行方不明者の人探し、撤去する家の手伝いなどをして、4月末から仕事に復帰した。

津波の時は、分団員の活動は10分以内に終えて、15分以内に避難すると決めていた。分団では津波シミュレーションをしていて、防波堤を越えることは想定していたが、この大きさの津波は想定していなかった。

一人住まいの老人をチェックする余裕はない。逃げない人を連れ出す強制力はもたない。最初の情報が3㍍だったので、それが足かせになっていた。

反省点として、まず始めに水門を閉める。無線が切れたときの啓蒙活動ができなかったこと。我々には交通をストップさせる根拠がない。この先は危ないと言っても権限がない。震災後、国道事務所や警察署で話し合いをして、ここで止めるという話はできている。

水門は遠隔操作で動けばよいがうまく作動しない。新しい水門は4か所できる予定だ。元は18か所あり、これらはすべて使えないし、1回では閉めきれない。14・7㍍の防波堤が新しくできるが、この高さでも今回の津波は防げない。

崎山の山下啓一さんは、地震後すぐに水門を閉めに行き、防潮堤で様子を見ていた。「無線で高台に上がれと指示があった」ので、高台に上がるとすぐに波が来て、危機一髪で助かった。分団員のK君は車のまま流されたが、車が途中で引っかかって助かった。

啓一さんは親族の方など3人を亡くされたが、行方不明者の捜索を優先した。息子からは「消防、全うしたら良い」と言われた。

山崎安人さんは水門を閉鎖後、各海岸を廻った後、屯所に皆集まった。十六分団の管轄区域ある6か所の海岸で分団員が分かれて避難誘導をした。2日目も3日目も行方不明者の捜索に参加した。

崎山の佐々木重勝さんは地区の自治会長も兼ねていたが、消防団を優先し、自治会の対応は奥様が担った。十六分団は田老や津軽石などの分団に必要なものを届けた。田老方面隊の情報が得られず、自分で確かめに行った。山の上の神社には治療が必要なけが人がいて、瓦礫の中を線路沿いに歩き、自衛隊本部にお願いできた。

被災当初は生存者確認が優先され、その後に行方不明者の捜索活動を行った。当初消防団には発見の段階で「手を付けず、警察に連絡を」ということだったが、結局搬送まで依頼され、消防団員の負担も大きかった。

宮古市内の太田憲一郎さん、和田悟さん、黒渕祐司さんたちの体験もすさまじかった。太田さんによると、地震後、水門監視の最中に真っ黒い波が来たため、土手にいた団員たちが避難した後、線路に上がると鉄橋がなくなっていた。

黒渕さんたちは分団長の「逃げろ」の声を合図にポンプ車で管内を廻った。サッパ船を横に見ながら、波を被って走った。和山さんは、必死で「堤防を越えた、逃げろ！」と叫んだ。駅前では腰を抜かしたお年寄りたちをポンプ車に乗せた。消防署が状況を把握しておらず「教えてくれ」と言われた。その後、ポンプで老人達を避難所に降ろそうとしたが、そこにも津波が来ていた。その際ものろのろ歩いている人がいっぱいいて、祐司君が「だめだ、走れ」とマイクで叫んだ。県の合同庁舎に行き、老人の保護を依頼すると、岩手県にも状況が伝わって、空会議室を全部開放してくれた。その後、魚菜市場の角や駅前通で避難や案内を続けた。また、商店に人がいるのを発見し、団員が助けに行って、その晩は屯所に泊めた。

和山さんによると、夜になって多くの人が自宅に帰ろうとしていたため、花の木通り、末広館付近に分団員が交代で立って、朝まで止まるように説得を繰り返した。

太田さんや黒渕さんは、ポンプ車が残っていたので多くの人々を守

ることができてほっとしているという。

高浜では地震発生時には高浜小学校に全学年児童が校庭に避難した。そのうち校庭にも津波が来て、消防団員の「だめだあ、みんなあ、逃げろ、こっちだ、早く、早く」の一声で、全員が校庭裏の高台に逃げて、全員無事だった。

この日、佐々木好栄氏は、高浜のコープケミカル社宅裏の高台に避難した。67、8人の避難者を落ち着かせ、食糧を手配し、津波で低体温症になった子どもを母親と団員が3人で5時間かけて運び、救急車を呼んで助かった。12日から消防団員4、5人で水門を開け、孤立していた高浜への道を確保するため、重機で道路の瓦礫を取り除いた。13日には国道45号線が開通し、14日から自衛隊と共に行方不明者の捜索を行った。捜索で家を壊す際には、家主への了解の取り付けも依頼された。分団長として毎日出たが、消防団の半纏を見ると安心するという人もいて頑張った。

高浜の安倍主税さんは地震のときは宮古にいて、閉伊川の水門を閉めに行ったが、300㍍くらい流された後、ボートに助けられた。濡れたままだったので、姉の家で一晩過ごし、翌日は十一分団のある金浜、高浜の行方不明者の捜索活動に加わった。

津軽石の中野規男さんは地震発生後、すぐに待機していた分団員5人と地域の水門閉鎖に向かったが、停電で作動せず水門の建屋でどうにかすべてを閉鎖したが、すでに高浜付近で水飛沫が上がり、建屋に避難した。水門の高さは8・5㍍だが、その上2・5㍍まで水が入った。津波が収まった頃、水門を開放しようと試みたが作動せず、動力用発電機を見つけて作動。消防団は発電機が動力用であることも巻き上げ機があることも聞かされていなかった。他の分団員に津軽石地区や学校の避難所の状況確認と安全確認に行かせた。翌日からは毎日生存者救出活動と捜索を行い、また避難所と自衛隊をつなぐ役割も果たした。

津軽石の佐々木睦雄さんは水門閉鎖の後、避難誘導と救助を行った。栄通りでは翌日まで閉じ込められていた人が多数おり、ゴムボートで13人を救助した。

分団員の館下光利さんは、当日は避難誘導やボートで救助活動を行い、夜は車両火災のために出動した。翌日からは遺体捜索を行ったが、その光景は今でも思い出すとつらいという。

津軽石の長澤光彦さんは、二十三分団はあまり被害がなかったので、屯所でおにぎりを作ってもらい、避難所に届けた。翌日以降は赤前で自衛隊員と遺体捜索を行った。泥棒が出没していたが、夜警をすることができなかった。

⑷ 消防団員の行動を考えてみる

身体化された行動

これまで見てきたことから、消防団員は、異変があるとすぐに行動ができる。災害があったときにはすぐに現場に駆けつける。地震があると直後に津波を想定して、水門を閉めに行くことができる。言われなくとも危険地帯を巡回して回る。何をおいても災害弱者を救出しようと試みる。仲間たちとの連係プレイが徹底している。

宮古は太平洋に面していることから、海辺や川の安全対策として水門が多く建造されており、緊急時には水門の閉鎖と監視、その後の水門の開放は消防団員の重要な任務と位置づけられているようだ。地震後に津波が想定されると、各地の消防団員が判で押したように誰もがすぐに近くの水門の閉鎖に飛んで行ったのも、訓練のたまものなのだろう。

何人かの消防団員になぜここまでがんばれるのか伺ったところ、「義勇の心」と表現してくれた方がいた。また地域社会の中で皆が顔見知りだから、困っていれば見捨ててはおけない、とも語ってくれた。社会の中での人間関係、そして隣近所との結びつきが色濃く残っているからこそ、こうした行動をとることが可能となるのだろう。

また消防団員が身につけている消防団の半纏に関する言及も多く聞いた。半纏を着ることは、そのまま団員としての誇りをまとっているようにも見えた。また半纏姿の団員を見て安心したという声を住民の方々からよく伺ったし、そうした声を聞いて団員もまた頑張ろうと思

えたという。

自分の家族よりも災害現場での活動を優先する。家族の無事を確認すると、そのまま活動に参加していたのは畠山さんだ。その仲間の団員は両親が行方不明なのに捜索活動を継続していた。考えることを止めて活動に没頭していたのだろうと仲間の1人は推測していた。親族の方など3名を亡くしたのに消防団の活動を優先したのは山下さんだ。息子さんは「消防を全うしたらいい」と言ったという。このときの息子さんの心境はいかばかりだったのか…。また妻に自治会の活動を任せて消防団活動を優先した佐々木さんもいた。さらに自分は津波で流された被災者なのに、翌日から行方不明者の捜索活動に加わったのは安倍さんだった。安倍さんの詳細な話は宮坂が伺っているので、ぜひその話に目を通していただきたい。

一方、地域の方々の次のような厳しい語りがあった。「今頃探しに来たって生きているわけがない。今まで何をやっていたのか」という罵声を浴びたことだ。このことが一番辛かったと語られたが、どうすればよかったのか、今でも解らないという。

今後の問題と危機管理

このような大きな震災を体験して、身も心も疲弊しながら、それでも活動を続けてきたのが消防団員だが、その体験に基づいて次のような反省点が語られた。それは啓蒙活動の大切さと、危険とわかっているのに交通をストップさせる権限がないことへの危機感だ。確かに津波が押し寄せてくる事実には、全く気づかずにどんどん流れてゆく車の群れや、津波を見に行っていた人の姿があった。その姿に声をかけられなかったり、止める権限を持たなかったり、そして遠くから見ていた人たちや、後で映像を見た人にとっては、大変に歯がゆい事態だったに違いない。

津波多発地帯が現場のため、消防団員だけに任せておくのではなく、地域住民も巻き込んでのシミュレーション、情報収集等、震災における危機管理について改めて再認識しておく必要があるのだろう。とくに地域全体に関する危機管理体制の見直しと、それに関する情報の共有は早急に進めるべきだろう。この記録を作成しながら、津軽石の水門の管理体制について目を疑った。最も早く水門閉鎖に向かうことになっている消防団員が、その水門の緊急時の操作方法はおろか、動力用発電機の存在も、巻き上げ機があることも知らされていなかったというのだ。

消防団員は「次も必ず津波は来る」という。このいつか来る「次」に供えて、万全の体制を取ってもらうことを願うのみである。

【参考資料】

宮古市消防対策課作成　宮古市消防団員用「地震災害活動マニュアル」平成24年度改正版

2　消防署

はじめに

ここでは宮古消防署、田老分署、新里分署、川井分署の消防署員からの聞き取りの他、盛岡市、秋田県、名古屋市からの緊急消防援助隊の活動状況も掲載した。地震に続く、津波、そして山林火災など、うち続く災害に対処した消防職員の活動を記録した。加えて消防団、自衛隊との協力関係も語ってもらえた。

(1)　緊急消防援助隊等活動状況

２０１５年３月10日に、宮古市の消防本部から「参考　本部緊急援助要請経過等」という資料を頂いた。これには東日本大震災に際して、時間の経過と共に盛岡消防本部をはじめ横浜市消防局及び秋田県内の各消防本部から応援に駆けつけた緊急消防援助隊等の活動状況や活動人員が記されている。以下では宮古に関係する内容を記載してみたい。さらにこの日は消防本部総務課の**外館義博課長**より、この資料に基づき、詳細な説明も頂いた。以下はその内容である。

1　指揮支援部隊名古屋市消防局（岩手県庁調整本部）
指揮支援隊横浜市消防局　3月12日から3月22日（5名延べ50人）

2　緊急消防援助隊
主な活動場所（宮古市、宮古市田老地区、山田町）
応援隊　秋田県隊　3月12日から4月4日
（発災の翌日の朝5時に隊長が来宮、すぐに対応会議）
1指揮隊　3月12日隊数2、人数7、隊数合計35、隊員数１２９、
2消火部隊（ポンプ）3月12日隊数13、人数62、隊数合計１１４、
人数５５８
3救助部隊（救助工作車）3月12日隊数5、人数25、隊数合計75、人数３７５、
4救急部隊　3月12日7（16日隊数14）、人数21（16日人数42）
隊数合計２４０、人数７２０
5後方支援（食事、寝る場所など）3月12日隊数15、隊数合計２８３、
3月12日人数36人数合計６０４
1次隊、2次隊は3月12日から、3次隊は3月16日から、4次隊は3月20日から、
5次隊は3月24日から、6次隊は3月28日から、7次隊は4月1日（水）から。
地元では各隊に誘導員として道案内のために1名職員を付けて、現場に向かわせた。

3　消防相互応援協定に基づく応援隊（県内の相互応援協定による）
（主な活動場所　宮古市内）
県内応援　盛岡消防本部（3月11日から4月9日まで）
1指揮隊　3月11日隊数1、人数4、隊数合計20、隊員数68、
2救助部隊（救助工作車）3月11日隊数1、人数5、隊数合計20、
人数１００、
3救急部隊　3月11日隊数1、人数3、隊数合計30、人数90
（県内の相互応援協定による）
4後方支援（食事、寝る場所など）3月11日隊数1、人数5、隊数合計30、人数合計１１８
指揮隊、救助部隊は3月30日で撤収し、救助部隊、後方支援隊が4月9日まで活動。
1次隊は3月11日からで、2次隊は3月13日から、3次隊は3月16日から、
4次隊は3月19日から、5次隊は3月22日から、6次隊は3月25日から、
7次隊は3月28日から、8次隊は3月31日から、9次隊は4月3日から、
10次隊は4月6日から。

以下は外舘課長から伺った話である。

震災当日の夕方になっても田老分署をはじめ田老地区との連絡が全く取れないため、状況偵察のためポンプ車で職員2名を田老地区に派遣したが、そこで田老地区の林野火災を確認し、そのまま消火活動に当たった。田老分署は津波で全壊したうえ、車両は3台とも被災したため頼みの綱である消防無線を使うことができなかったものである。

県内応援隊1次隊（盛岡消防本部）は、3月11日、発災当日の夜8時頃に到着した。応援隊は、翌朝から活動を始めたが、地元の地理がわかる宮古出身の隊員を選んでくれていた。沿岸部のすべてが被災したので、櫛の歯作戦で活動を展開した。

発災後、間もなくして、電話回線全てが不通となったため、情報収集に困難をきたした。これについては、110番回線は被害を受けなかったことから、消防本部に詰めた警察官からの情報入手及び市内各地で活動にあたった自衛隊から逐次入る情報等によりできる限り対応した。

また消防本部に集結した消防、自衛隊、警察、岩手県及び宮古市などの関係者は、朝の5時半と夕方の6時半に全体会議を開き、共通認識を持った上で活動方針を決定した。このように関係する機関が一同に会し、情報を共有できたことが全ての活動に功を奏したと思う。活動に当たっては人命救助を最優先とし、隊員の安全管理にも留意した。

傷病者の救急搬送は困難を極めた。主要道路である45号線が通行不能となり、山間部を迂回しなければならず、また積雪もあり、普段の2～3倍の時間をかけての搬送となった。

傷病者は、主に宮古病院へ搬送したが、専門的な治療が必要な患者は防災ヘリコプターや応援隊による救急車で内陸部の病院へも搬送した。

(2) 宮古消防署員の活動

小林一彦さん（昭和30年生、岩泉消防署長、当時宮古消防署長、山田町出身）に2013年8月8日に話を伺った。

今回の災害は体験したことがなかった。最初は津波被害の初期対応を行った。大地震により家屋倒壊による怪我が考えられ、「とりあえず119番トリアージ」を考慮に入れて、救急係長に通信指令室に入ってもらう。負傷の大小に関係なく救急車を出すと、救急車が不足するので、緊急出動の優先順位を決める。これは救命士の係長に任せる。生命の危険に関わるものが第一で、応急処置で済むものは自分でやってもらう。しかし入ってくると想定した119番は数件でぴたりと止まった。通信網の途絶だったが、そのときには気がつかなかった。

消防団の対応について

水門閉鎖、避難誘導の指示などを出した。これまでにない状況であろうと想定し、消防団に対して、無線でさらに高いところに逃げるように指示をした。後で聞くと団ではこういう指示は今までなかったという。さらに住民を高いところに逃がすための指示をして多くの命が助かった。

指揮本部と自衛隊

日々自衛隊との調整を行った。毎夕自衛隊は翌日の活動の調整を行っていた。自衛隊はその日の活動の報告を受け、翌日の計画を立ててから、私の所に来る。自衛隊の要請で地元の消防団がいた方が動きやすいとのことだった。自衛隊は北海道旭川第二師団4～500名がいた。第二師団は宮古、岩泉、田野畑、久慈に配置され、休む班、活動する班など3班に分けていた。

第二師団とは対面式をやった。隊長は老木に戻り、隊員に指示をした。自衛隊は部隊を5～6の班に編制し、各地域に派遣した。自衛隊の隊長の車は無線機だらけだった。活動地域と時間を決めて、地元の各消防分団と一緒の活動をするように指示をした。最初の仕事は道路の啓開だった。自衛隊は道具、重機も自前で持ってきていた。彼らは臨機応変に対応していた。幕僚長は県の振興局に行って作戦本部を立ち上げた。岩手県の危機管理監は自衛隊の出身だ。調整は消防本部の朝の

会議で行われた。最優先するのは人命優先で活動するということだった。

自衛隊は自己完結型だった。山田には自衛隊の基地がある。彼らの活動は今までに出会ったことのないものだった。指揮命令系統がしっかりしていたので、違和感はなかった。「命を守るのだ」という意識が一致していたのだ。そのために一緒に行動できた。

津波後はボートが足りなかった。津波災害用の機材不足があった。ボートに関しては、広域消防の規定では、水害と河川のみだった。津波は広範囲の活動となるので、もっと用意すべきだったと考える。活動できたボートは24時間フル活動できる1隻のみだった。津波では船外機は使えない。手で水の中を引いて助け出す。ホーバークラフト状のボートは消防にはなかった。8方面隊ある消防団にボートを調達できたのは補助金を使った平成24年度だった。津波が来るであろうとは考えていたが、このような被害は想定外だった。訓練していないものは出せなかった。

緊急消防援助隊

緊急消防援助隊は全国から被災3県に入った。消防長が最高責任者となった。秋田県など3地域からの援助隊だったので活動はしやすかった。盛岡消防本部も県内応援の形で入ってきた。秋田県隊は宮古市内、盛岡隊は盛岡への搬送を受け持ってくれた。秋田県隊では指揮、救助の外に消火は湯沢、救急は秋田などが中心となり、混合チームで動いていた。県外隊の車には地元の者が乗って道案内をした。うまく機能したのは全国の消防職員の持っている使命感だと思う。これがあるので、全国どこへ行っても同僚として動ける。緊急援助隊は阪神大震災がきっかけでできた。5月30日で緊急消防援助隊は引き上げた。

被災当日以降

現場に出たのは数日後だった。道路を啓開をして廻って歩いたのは1週間後くらいだったと思う。「えっ、あっ」ばかりで言葉が出なかった。道も建物もなくなって現場感がなく、道を間違えたりした。

自宅は山田町織笠の奥なので被害はなかった。震災から3日後に娘が消防署に来て「あ、お父さん生きてた」が開口一番だった。30日間くらいは消防署に寝泊まりしていた。食事はいつも泊まっている者たちなので、お手の物だった。支援物資でおにぎり、パンなどが来た。食べられるだけでありがたかった。消防署の事務をやっている伊藤千明さんと消防団の高田由美さんが朝昼晩と食事を作ってくれた。

女性消防士は平成25年にはじめて採用した。採用試験を受けて4月1日に消防職員となり、6か月間消防学校に通い、その後配属になる。今年(2013年)は女性を含めて6名採用した。採用倍率は6~10倍。近頃は公務員になるための専門学校経由で消防に来る人が多い。自分たちの頃は安定志向で入った。消防は地元にいるのでこれが良いと思った。山田町の試験で消防団として入り、広域から辞令が出た。今とは仕事の中身が違う。

昔の救急車は言ってみれば運び屋だった。今は消防学校の救急過程を経て医療や手当の知識を身につけているので、救命率は上がっている。メディカルコントロール体制の構築が顔の見える関係になっている。大震災の時は病院の透析用の水は消防車を使って運んだ。DMATは消防本部に来ることになっていたが、宮古病院に廻ってもらった。医療関連では県の振興局からの担当者と、保健所からも詰めていた。

反省点としては殉職者を出したこと。この事実に対して、どうすれば良かったのか、世間の救急要請を断れるのかという葛藤がある。津波に飲まれながらも何人も帰ってきてくれたことはうれしかった。隊長が帰ってこないと聞かされ、信じていれば帰ってくると自分に言い聞かせたが、帰ってきてくれて男同士抱き合って泣いた。

私は平成23年度に早期退職の予定だった。定年は60歳。3・11が起こり、消防長から依頼され残った。

忘れられないこととして、自衛隊の幕僚長と毎晩夢物語を語り合ったことだ。困難を乗り越えることなどを語り合い、癒やされたのかもしれない。

伊藤伸さん（昭和57年生、当時は宮古消防署勤務、宮古出身）に2013年8月8日に話を伺った。

当日は消火隊だったが、担当している係が通信係だったため、震災直後は通信勤務のため、指令室に残った。大きな揺れの後、防災行政無線を使用しての地震広報、情報収集、消防団の出動指令及び水門閉鎖情報の管理、消防車による津波警戒出動指令などを行った。地震の影響による救急要請もあり、救急指令を出した。地震後は管内が停電となり、情報の入手は無線のみだった。自家発電が作動し、指令室の機器の電源は確保できていたが、テレビは映らずテレビによる情報収集はできなかった。地震後すぐの情報としては崖崩れの発生、交通障害の連絡が無線を通して入ってきた。大津波警報情報はJアラートと気象庁からのファックスのみで、津波広報はファックスの情報を元に市の危機管理課と協議しながら防災行政無線で放送をした。津波が来襲し、無線が入ってきた際に「壊滅」という言葉が入ってきたが理解できなかったことを覚えている。その後「金浜地区が全滅」「人が取り残されている」「負傷者が多数いる」などの情報が入った。これは未曾有の災害で、津波による被害であることは認識したが、すぐには理解できていなかった。津波が防波堤や陸地を乗り越え被害を出していることがイメージできず、正直なところ「なにをしゃべっているのだろう」と不思議に思っていた。その辺りでラジオによる情報収集も始めたと思うが、市内の被害や対応などの処理に追われてよく覚えていない。他の地域がどうなっているのかとか、気にする余裕は全くなかった。通信員は市内の被害状況、活動状況、負傷者の情報が多数入り、その指示や情報管理に追われていた。

他には広域消防としての状況確認などをしていたと思うが、断片的にしか思い出せない。田老分署が津波による被害や火災で連絡がとれない事は把握できていたが、宮古消防署の救急車が被災したことは、他の通信員は把握できていたと思うが、私は把握できていなかった。知ったのは職員が集まって後の会議の席だった。指令室で通信勤務をしていたのに把握できていなかった。その情報を知ったときは悲壮感と共に無力感を覚えたことは記憶にある。

司令室に入っている通信員は4人くらいで、2、3日は司令室に籠もり、通信を離れなかった。宮古広域消防は宮古市全域、山田町、岩泉町、田野畑村まで管轄しており、各地域の被害状況を確認したり、職員の安否確認をした。当時のことは忙しすぎて何をしたのかは断片的にしか思い出せない。仮眠を取った記憶もなく、はじめて睡眠を取ったのもいつだったか覚えていない。

数日後に通信員の交代があり、救急隊になり、出動ではじめて外に出て現場を見た。そのときにはじめて瓦礫の山を見て津波の脅威や被害の実感がでた。見慣れた町並みや風景はなく、とても現実のものとは思えなかった。

火災の発生も続き、宮古消防署全職員が何日間か署に詰めて対応した。一時帰宅となったのは3月下旬頃だったと思う。一時帰宅の際は、親から親戚の安否確認や避難状況を聞き、日常の生活品や食糧の買い物、自家用車の給油をして、布団で睡眠を取った。津波で被害を受けた親戚の家の片付けには参加することはできず、兄がしていた。その後は3つの中隊で各2日勤務をするというサイクルで勤務していた。

緊急消防隊として盛岡市、秋田県、そして横浜からも次々と来た。盛岡市はその日の夕方には到着しており、応援で活動していただいた。市役所が被災し、宮古消防署には市の危機管理課職員、警察、自衛隊が集まり、震災対応をしていた。

また3階の体育室は避難所となり、住民の方が集まっていた。いろいろな方の応援や協力を得て、災害対応を行うことができたが、災害のことを思い出すと無力感しか思い出せない。

(3) 田老分署

佐々木勝彦さん（昭和32年生、岩泉在住）に2013年3月28日に話を伺った。

田老分署に来て4月で5年目になり、消防第二係長をしている。

田老分署について

署員を三班に分けて、隔日勤務で1当番約4人で勤務している。

3月11日は非番で自宅に帰る日だった。8時30分に勤務交代したが、この日は金曜日で当番者と日勤者が勤務する勤務人員の多い日だった。用事があったので久慈市にいた。新築のコンクリート製の建物の中にいたときに地震が来た。建物の中の女性はその場でしゃがみこむ人もいたので、安全な場所に移動したが、揺れは長く、経験したことのない大きな揺れだった。

津波が来ると確信したので、田老分署に行こうとしたが、海岸沿いの道路は危険だと思い、山側の岩泉町安家経由を選択した。車で移動し始めたが信号機が赤で停止していると、また地震が来て建物の中から人が避難してきた。ラジオでは大津波警報3メートルと繰り返していた。岩泉駅前の自宅に戻り、身支度をして岩泉町小本経由で田老分署に向かった。三陸鉄道小本駅の道路まで津波が押し寄せ、瓦礫で通行不能だった。そこで広域消防なので地元の岩泉消防署に引き返した。

17時頃、消防本部の偵察隊から田老は壊滅状態、数か所で火災発生との消防無線が入った。私は火災原因調査の担当責任者なのでどうしても行かなければならないと思い、再度岩泉町有芸経由の山越えで田老に向かった。県立宮古北高校を通り三陸鉄道陸橋付近の道路に19時30分頃着いたが、瓦礫と20センくらいの泥が堆積していて歩行不能だった。火災は田老の町全体が燃えているように見えた。連絡手段もないので宮古消防署に向けて再度林道を走り始めてすぐに宮古消防署のポンプ隊に出会った。これから田老の火災防御に向かうので、宮古ではなく、岩泉消防署に行き、ポンプ車の燃料を持参してほしいと言われ、岩泉消防署に引き返した。

岩泉消防署について間もなく、岩泉町消防団に田老火災への応援要請が来たので、再度消防団と一緒に田老に向かった。21時頃、田老北側の火災現場に、岩泉町消防団のポンプ車隊2隊と現場に到着して、火災防御を開始したが、激しい火勢でポンプ車隊2隊では手の打ちようがない状態だった。火災現場からは時々ボーン、ボーンという爆発音が鳴り響く中、恐怖におびえながら消防団と建物の延焼阻止にあたったが、火勢が強く山にも延焼したので、我々の消防力では手の打ちようがなかった。

消防力を増強しないと効果がないと思い、3時頃消防無線で「一時撤退して、夜が明けてから再度消火を実施したい」と無線を入れたが、「継続せよ」との指示だった。爆発音におびえながら消火活動を継続し、5時頃「一時、田老道の駅に撤退し、6時に宮古市田老総合事務所集合」との無線指示があり、火災延焼中の瓦礫と泥の中を徒歩で田老総合事務所に向かった。

田老分署の庁舎は全壊、速消車に乗車していた同僚は行方不明、指導車も摂待地区で被災、救急車は田老一中のグランドで被災、分署勤務の職員が津波で右肩負傷との状況だった。

その日から消火活動と人命検索を並行して行い、田老消防団の機材と団員と共に田老総合事務所のフロアーに段ボールを敷いて座布団と毛布を並べて宿泊し、田老の山側に位置する末前、養呂地地区の炊き出しのおにぎりを毎食1個食べながら消火活動を続けた。

道路が寸断されていたので、自衛隊が来たのは3日目だった。人命検索と瓦礫撤去を行ってくれた。消防緊急救援隊のヘリコプター、秋田県隊の消火隊が来てくれたが、宮古の災害対策本部の指示で消火活動をするので、我々と一緒の活動はなかった。

車両を全て失ったので、3月25日に宮古消防署の古いポンプ車1台が配置され、4月12日には北上消防署から寄贈された速消車が配置された。5月6日から拠点を新田公民館に移した。鉛筆1本、電話、カメラもない中で、火災原因調査のできることを行った。2か月後にグリーンピア三陸みやこで、沖縄の精神科医による問診を全員受診した。

今回の教訓として、消防分署は高台の浸水区域外に置くことがベストだと感じた。助ける職員が被災したのでは住民の救助はできない。同僚3名をなくしてしまったことが残念でならない。同僚の中には自宅を流され、母も行方不明でありながら消火活動に従事せざるを得なかった者もいた。消防団も自宅流失、家族、親戚の安否も確認できない状態のまま、消火活動を行っていた。頭が下がる思いである。

現場活動1週間後に夕方の会議で、「消防団を休ませてあげたい」との提案があった。これに対して消防団幹部からは、「それは一番危険なことだ。消防団活動があるから気が紛れている。自宅もない、家族の行方もわからない団員を休みにすると、何をするかわからないから危険だ」との意見が出た。これにより消防活動は休みなしで続行との判断が出た。人の命を守るためには適切な状況判断が必要であることを痛感した。

小林徳光さん（田老分署、田老在住）２０１３年8月10日、12月24日に話を伺った。

平成25年度「防災啓発研修講習会」で1時間の発表をした。

日時　平成25年7月4、5日

場所　消防総合科学センター（虎ノ門日本消防会館）

主催　総務省消防庁

避難に関する具体的な行動

今は「来るかもしれないから気をつけろ、海のそばは危険だ」としか言えない。緊急地震速報が出ても、8月8日のように何もなかったという事がある。こうしてそのまま80年がたった。堤防があるから安心だという気持ちがある。

三王閣のあった高台から見ていれば「とんでもない津波が海から来ている」と言うことがわかるシステムがあるとよい。こうした海の映像が見えるような状態にあれば、へそ曲がりも逃げられる。海の波と並行となる位置で、対象となる岩が常に見える位置にカメラを置く。水平の位置で対象となる岩をカメラで監視し、いざとなったら市民もこの映像を見られるシステムを作りたい。

3月11日とそれ以降

当日は脱臼したが、家屋の下敷きにならず助かった。動かさなければ大丈夫だったので、翌日盛岡の岩手医大で治療を受けた。波の来ない、水の寄らない場所を通って盛岡まで行けた。ガソリンが足りるか問題だったが、知人から融通してもらった。電気がないためにガソリンスタンドで手回しの人力で入れていた。

田老分署では5日目まで誰も家に帰れなかった。私は14日に家に戻り、15日から署に戻って仕事をした。田老出身者が分署に3人いたので、顔見知りの者がいた方が、他所から来た人に対して地元対応ができた。夜に人が入ってきたり、真っ暗な中で人が歩いていたりして、防犯上、人を見ても誰だかわかる者が必要だった。

5日目に山田町に家のある職員が「上がる」と言い出した。5日間戻れずにいたので、交代で家に戻れるように分署長から「交代命令」を出してもらった。寝たきりの母を家に残していた署員は、盛岡にいて母を助けられず、何もできない状態だった。

携帯が通じたのは6日目。山田町から来ている職員にはその日「家に帰ってみろ」と命じられて、バイクで帰ることができた。15日の朝自宅に帰ると「幽霊が来た」と言われたという。自宅が罹災した職員は4人いた。前年まで田老にいた職員が2人来てくれた。公休を利用して来てくれたのだ。

大災害は体験してみないとわからないことが多い。訓練と実際ではタイムラグがある。訓練では1秒単位で行動しているが、実際には1秒が1分かかる。宮古から消火に来るにも、岩泉経由なので、1時間30分以上かかる。いろんな事があったと思うが、考えていない時間がものすごくあったと思う。

三鉄の駅の向こう側まで救急車が来られるので、そこまでけが人を運んで待機し、そこから病院まで運ぶため、三鉄の線路上を運んだ。本社には許可をもらったが、久慈から来た保線区員には「何で使う」と怒られた。患者は布のタンカに乗せて体育館からみんなで線路に引っ張り上げた。５００メートル線路上を運び、救急車に乗せた。骨折した若い人、歩けないおばあさん、透析患者などを運んだ。2日目以降は道路脇の瓦礫をどかして国道が通れるようになり、線路を歩く距離が縮まった。3月15日には国道がまっすぐ通れるようになった。

解体業者のSさんの母と息子は、保育園に迎えに行って行方がわか

らなくなった。大おばあさんも家にいて、行方がわからなかったため、翌日には重機を入れて、家族を探す作業を始めた。そしてそのまま小学校から国道へ、そして北の方面へ重機で国道を開削した。Sさんは許可も得ず、自分の息子を探すと言って重機を動かした。人捜しのため国や国道事務所に頼むようにともめたようだが、作業が始まり発見できた。

前の本部次長だった金沢さんは、たろう観光ホテルの裏にあった自宅に戻り、家の裏山に逃げた。そこへ水が防潮堤を超えてきて、水に飲まれながら流されてきた人たちもいた。家の裏山付近が出火場所で、煙が発生していたが3人を引き上げて助けたと聞いた。そしてまずは逃げようと尾根伝いに逃げたが、1人はだめだったという。

堤防の上を2人が走っていたようだったが、1人はだめだったという。漁協ビルの北側の第一堤防を波が越えた所では、1人は助かり、3人はだめだったと聞かされた。副分団長は水の中に浸かって「このまま死ぬんだなあ」と思ったという。彼は「2回死ぬと思った」と言っていた。甥っ子が分団員だったが、亡くなった。

始めに波が届いたのは小林地区で、そこから波が左右に分かれた。水門の遠隔操作が効かず、職員が閉めにいったが、その人はきわどく助かった。逃げて助かったと言うより、運が良かったと話していた。一歩後退した人は助かった。寝たままの人が家にいたかどうかが分かれ道で、そういう人をそうした場所に置いておかざるをえないことが問題だった。しかし助けに行っても「堤防があるから津波が来るわけがない」という思い込みが前提にあったと思う。

田老に来た波は、1波が堤防を満水にして、2波がそれを超えて、さらに3波が山の方まで迫った状況だった。1波と2波の間が100キロメートルあった。盛り上がった高さは10メートルだが、次の波間での海水の流入があり、2波は100キロメートル分の水量を運んでくる。

佐々木誠さん（昭和30年生、岩泉消防署副長、岩泉町出身）2013年12月24日に話を伺った。田老分署に4年間勤務しており、災害当時は副分署長だった。

3月11日

当日は分署長と、私と、部下の3名でグリーンピア近くの国道を指導車で走行中だった。強い揺れで、まっすぐに走れないくらい横に揺られた。周囲の車も一度止まっていた。津波が来るだろうと考え、分署へ戻った。10分くらいで戻れた。当日は日勤で、8時30分から5時までの勤務だった。昼夜勤務者は5人、日勤が5人、分署長という体制だった。

情報収集と避難の誘導を考え、出動隊を編成した。宮古広域は金曜日には日勤がいて、人数が多い日だった。田老地域の水ひ門閉鎖の確認、災害弱者の誘導、ポンプ車の出動などを想定した。分署に残った6人は、停電になったので自家発電を作動させ、情報収集に当たった。後の活動のため、1人は津波浸水想定区域外に救急車を避難させた。田老第一中学校は津波浸水想定区域外のため、避難指定地域となっていた。

私ともう1名は摂待地区に出動し、消防屯所に行ったが、誰もいなく、水門モニター監視をしていたが、水門が自動で降りず、手動操作をするために降ろしに行った。その際にラジオのニュースで、宮古で救急車が津波にのまれたと放送していた。水門まで行ったところ、消防ポンプ車に乗った団員が「津波が水門を突破した。逃げろ」と叫び、2台目も同じ事を叫んだ。正面を見ると茶色の煙が見えた。津波とは思わなかったが、すごい勢いで迫ってきて、はじめて津波だと気づいた。大急ぎで車をバックしたが、間に合わず、乗っていた指導車を放棄して、2人で山を駆け上がった。5、6秒位たってからすごい風圧を感じ、バリバリと音がして、津波が来たなと思った。振り返らず山を駆け上がってから下を見たら、真っ黒い水がどんどん山を上がってきた。頂上を目指して峰まで上がってから下を見ると、水が引き出していた。峰をずっと歩いて2時間くらいで摂待のトンネルまで来た。国道に降りると、摂待の人たちが国道で呆然としていた。屯所には数人いたが情報が無く、住民の安否、犠牲者の数などは全くわからなかった。

地震後27分で摂待に着き、30分で津波に遭った。すれ違った消防団

の人はのまれたなあと思ったが、近くのガソリンスタンドで、この2台も無事だとわかった。被災状態を確認しないと次の手が打てない。消防団に人命救助と被災状況の把握を依頼して、消防団のOBの奥さんに田老まで送ってもらった。摂待駅近くの橋に山の木や、摂待の護岸の石などが張り付いていた。水沢地区まで来ると、田老方面に異常な黒煙が見えた。田老の町に入る途中で車が渋滞していて、そこから見ると町がなくなっていた。家が流され、燃えていて、東側の山も燃え、観光ホテルの裏山も燃え、診療所近くの住宅も燃え、その裏山も燃えて信じられない光景だった。

分署に行って、全員の無事を確認したかったが、倒壊家屋等で分署の位置がわからない。坂を下りて行くと遺体も見えた。動ける人には声をかけたが、ほとんど人影はなかった。水に浸かっている人は引き上げながら進んだ。ガソリンスタンドの支柱が見えた。泥が膝から腰くらいまであった。当時の分署は熊野神社のすぐ下にあったが壊滅状態で、署員は見えなかった。

そこで救急車を待機させて中学校を目指した。倒壊家屋の中を人を助けたりしながら、着くまで30分くらいかかった。救急車の回転灯が見えたが、潰れていた。中の医療器具を持って、避難所だった体育館に行くと、隊員1人と15、6人の避難者が濡れたままでそこにいた。寒さをしのぐため、赤白幕を配り、そこにあるストーブを集め、けが人のそばに隊員をはり付け、救急車にいた隊員と夜を明かそうとしたが、体調不良者が出てきた。三鉄の線路を歩いて、総合事務所から職員が来た。避難者は総合事務所、町民会館、体育館にいたが、この間は壊れた車や瓦礫で通れない。一晩分の燃料も足りず、救援を依頼した。10人くらいで担架や毛布を運んでくれたが、全員で避難しようと、一中と町民会館にいた全員を総合事務所に避難させた。真夜中だったので線路を辿って避難させた。この間余震は感じず、目の前の人を避難させることでいっぱいだった。

総合事務所には多くの避難者がいて、3階まで解放して、応急手当をしていたが、署員の安否確認はできなかった。

分署に残った人たちは、海の方向に大波を見て、津波が堤防を越えたのを見て、分署を放棄して、通信機を持って山の方向に避難した。途中歩けない老人を連れて、神社の階段下のところで診療所方面から来た波に流された。廻りで見ていた人たちがロープを使って、署員は助かったが、靱帯と筋がやられ、歩けるまで2年かかり、また右手も負傷して1年以上字が書けなかった。助けたおばあさんは波のため、手から離れていった。

72時間以内の救出

総合事務所では、田老は壊滅状態で、食糧もない、負傷者1名、不明職員3名と本部に無線で連絡した。駆けつけた署員を含め11名だった。装備は全て流され、裸同然の隊だった。夜明けを待っても3名は戻らなかった。多くの被災者、救助を待っている人を考えると、72時間以内の救助が必要だ。同僚の捜索に隊は出せない。同僚は必ず帰ってくると信じ、活動方針を、今助かる人を助けながら、被災状況把握をすることと決め、夜明けから活動した。4日目に3人の乗った車が見つかり、2名は車内で見つかり、9日目に1名は車の近くから見つかった。

翌日秋田隊が来たので、状況ごとに来た部隊の振り分けをした。進入路はグリーンピア方面からのみだった。秋田隊の隊長は3人が行方不明だということを知っていた。地元隊は住民優先で救助するように、仲間のことは我々に任せろと言ってもらえた。この3人は自分が指示して出動させたのでつらかった。秋田隊は捜索活動が終わると敬礼をしてくれて、涙が出た。緊急援助隊が2日目、3日目と駆けつけて来てくれて、全国の仲間に折れそうな心を救われた。

自宅へ帰ったのは3月17日。それまでは総合事務所のロビーに毛布を敷いて寝ていた。職員は顔も洗わず活動していた。目の前に自分の家が流されてきて、母親も家にいたことがわかっていたが、それでも探しに行かなかった。職員の1名は、自分の家がローソンの上まで流れ着いていたが見に行けない。暗くなってから見に行ったが、母親は

いなかったとぽつり一言言った。涙が止まらなかった。

17日になると身体が動かない。他から来た人が田老の署員は何をやっているのか、という声が聞こえた。精神的、肉体的なピークを越えていた。被災者に気遣いし、午後から一時帰宅をするように伝え、交代で家に戻した。

4月以降のこと

4月1日に高台にある新田公民館で業務を開始した。何もなくとも通常業務をやるように指示をした。今ある田老分署に移ったのは5月連休頃のことだった。パソコンはなく、無線のみで、ポンプ車は北上消防署からの支援で、救急車は廃車になる予定のものを延長使用した。

データ管理は各分署ごとにやることになっていたので、紙データで残ったものを集め、水で洗った。公表できない記録もあり、外に出しては困るものもあり、必死で集めた。しかしパソコンも紙もなく、すべて手で集めた。40年分を再生するには1年かかったが、10分の1位しかできていない。すべてのデータを広域本部が管理しているわけではなかった。震災後の検討会では、データ管理について話し合った。広域では集中管理をするようになったが、それを遠隔地で管理するところまではいっていない。今後はデータをどうするかは課題として残っている。広域ではパソコンは管理職に1台、各係に1台配備された。

反省点は、データ管理の問題と、殉職者を出したこと。危機管理が足りなかったとの思いはある。あの規模とあの大きさの津波が来るという認識はなかった。大堤防があるための安心感と、油断はあったのではないかと思う。津波が見えたら、もっと多くの人が助かったのではないかという声が多い。

大津波の映像がすぐに流されていれば、また違ったのではないか。田老の町は60年に一度、津波が来て、2回家を建てたが、3回目はもう住みたくないという人がいる。

震災以降に津波到達予想時間の10分前までに避難を完了することが決まった。田老の消防団は震災前に決めていた。宮古では震災後にこれを決めた。岩泉町でも震災後に決めた。田老の消防団では9、10人の被害が出た。宮古全域では15、6人。未だに不明の者は4、5人いる。

18歳で広域消防に入った。40年分の記憶が一瞬真っ白になった。津波の泥はひどく、くさいので、後始末が大変だ。今も整理は続いている。

家では両親がいて、父は入院し、病院では私が死んだという噂が立ち、1週間戻らなかったので、心配された。妻は被災した方々のお世話で、夜遅い帰宅が続き、高齢の母はほぼ1人の状態となっていた。会ったときに泣いて大変だったが、家族の力を実感した。明日へ向かう勇気となった。

(4) 川井分署

永田勘一さん（昭和29年生、川井分署、川井出身）に2013年8月8日に話を伺った。

3・11当日は休みで家にいた。揺れが強かったので、言われていた宮城沖地震がいよいよ来たのかと思い、すぐに出勤した。停電のため、自家発電に切り替えて、情報収集をした。宮古に応援隊として出動し、無線でのやりとりなどをした。沿岸の隊員たちは被災してここまで来られなかったので、8名で活動をした。ポンプ車が車検のため宮古にあったので、機材はそろっていた。指導車隊と、救助機材もある速消車隊とで出動した。普段は1隊4、5名で、通信は川井に残る。川井には16名いて、5人が1組で3隊、分署長は日勤となる。発災時は1隊が川井に残り、2隊が応援に駆けつけた。2~3日は寝ないで活動をした。本部からの指示により津軽石で活動した。駒形橋を通って中学校方面へ行った。状況は津軽石川を水が乗り越えて住宅の1階部分が冠水していた。夜間作業だったが、停電のため暗闇の中で活動をした。屋根の上に女性が1人いた。瓦礫でそこまで行けず、助けるため三連はしごを持ってきてもらい、全長15メートルまで伸ばすと届いた。一度は屋根まで渡ったが、「だだだー」という音で、津波が来たと思い、引き返した。恐怖心が先にあった。真っ暗なところを波が逆流してくる。行った頃は1階部分が水をかぶっている状態だった。バスケット担架にそ

の女性を乗せ、引っ張って助け、けががないか確認した。うなっていたが、意識は清明で名前を言える状態だった。指導車で宮古病院に搬送した。それ以降は人を見つけられなかったが、冠水している家々を見て回った。懐中電灯で灯りの点いている家があり、大丈夫か確認して、待機してもらった。夜の活動ではそのとき助けられる状況ではなかった。名前、住所、年齢などを聞けるだけ聞いて本部に情報として知らせた。5、6軒くらいは2階に避難している家があった。

2日目は藤原方面へ行くよう指示が出て、自衛隊と共同で人命捜索を行った。これは1班から3班までが行った。自衛隊数人と消防署員1、2名で組んで人命捜索を行い、遺体1名を発見した。藤原は古い家は流されたが、丈夫な家は建っていた。声かけをしても家の中にいる気配はなかった。

3日目以降は指導車に7、8人乗って田野畑に行った。一緒だったのは川井と新里の人だったと思う。各分署から5名ずつ詰めるように指示があり、応援隊の道案内をした。

1日の作業が終わると分署に戻る。比較的早く戻れた日は家に着替えを取りに行ったりできた。1週間くらいは分署に泊まった。

外部の応援隊は本部の3階に泊まっていた。当初3階にいた避難者は指定避難所に移り、その後応援隊がそこに入った。

山田では人命捜索は4月いっぱいまでやった。打ち切りは各消防署の判断になる。被災の状況が地域によりそれぞれ違うので、これは各地域によって異なる。川井分署では4月5日から通常勤務が入り、指示があればその都度山田や田野畑方面に行ったり、庁舎の片付けなどを行った。

消防活動以外では炊き出しもやった。婦人消防協力隊や地域の防火クラブの人たちがやっていた。ここの隣にある給食センターや公民館でおにぎりを作り、宮古まで運んだ。この地域では火災などがあれば協力して炊き出しをやる風習が以前からあった。

自家発電は軽油さえあれば問題ない。車両に積んであったり保管庫にもある。宮古消防署のガソリンタンクがある。中継局にもバッテリーがある。無線はバッテリーを充電しておけば1週間は持つ。週1回の定期充電で間に合う。無線は通話のみなので、アナログ機の方がこういう場合には便利だが、そのためのバッテリーの製造が中止になった。消防や救急用の無線はデジタル化している。3・11の頃にはデジタル化はまだ途中で、このあたりはまだだった。平成28年5月末が使用のタイムリミットなので、復旧補助金で今年度中にデジタル化が完了する。震災の時は停電が1週間くらい続いたが、アナログだったので問題はなかった。

震災ストレスは皆抱えていた。職員4人が殉職したので、ショックを受けながら活動していた。使命を持っていたので弱音は吐きたくなかった。メンタルヘルスケアの先生を招いて、講演を行い、個人の相談を受け付けると言われた。反省として検証はしている。危険を伴う仕事なので、2次災害を考える。「逃げる勇気を持て」という言葉が新しく出てきた。「助けられなかった、くやしい、何のための消防だ」という思いが強い。現場の指揮隊の判断が重要視される。危険を顧みず一番先に行くと思う。助けられないと自己嫌悪に陥る。安全管理も想定外だった。我々も怖じ気づいた。太刀打ちできない状況だった。その後、勇気と希望が持てる言葉があった。「消防職員が自らの命を守ることが、その後の消防活動において、多くの命を救う基本である」というものだった。「撤退」「退避」する勇気と、それを見極める判断力が職員を護り、その後の消防活動に備えることができる。

消防団の安全管理マニュアルを新しく作っているが、住民の理解が不可欠だと思う。避難リーダーの問題は、率先して避難するべきだと考えるが、「先に逃げた」と言われる。避難行動を率先して見せることもこれからの役割だと思う。1人も殺さず皆を生かす「無殺多生」が本来の使命だ。安全管理の研修と、どうあるべきかを教えてもらう。大規模災害では線を引けるものはない。

逃げるのではなく「避難」。職場では「退避」。「津波災害退避計画書」を消防団用にも作成した。これができて楽になったという。根拠ができて、見切りを付けて退避し、次の準備に入れる。

(5) 新里分署

澤口義知さん（昭和46年生、新里分署、川井出身）に２０１３年８月８日に話を伺った。

３・11は非番で朝家に帰り、長い大きな揺れがあった。すぐに準備し分署に向かった。ＩＢＣラジオの情報で津波は20㌢位だと言っていた。分署に着いて管内の警戒に廻っていたが、暫くして無線が騒がしくなってきたが、山間部なので断続的にしか聞き取れなかった。

何かあったのではないかと一緒に警戒に廻っていた職員と話していた。分署に戻ると停電になっていた。17時頃宮古が大変なことになっていると不確実な情報が入っていた。情報がないとどうしようもないので、発電機でテレビをつけて見ると、田老の映像が映り、皆黙ってしまった。

19時頃、宮古からの無線で3人の派遣依頼があった。また本部から消防分団派遣要請があり、翌日6時集合とのことで、電話が不通だったので分団長宅まで行き、口頭で伝えた。

1日目、2日目は新里で待機し、管内での異常確認を行っていた。

3日目の夜に本部から田野畑管内の捜索に行くよう要請があり、翌日6名で出動した。その翌日は宮古本部詰めで、山田の支援に秋田援助隊の道案内に出た。

5日目くらいまでは覚えているが、それ以降は今日が何曜日で何日なのか記憶がない。本部に集まって援助隊の道案内が主な業務だった。5、6日目にやっと45号も通行できるようになった。それ以前は警報等があれば山の方を迂回していた。

「今日は援助隊の何々隊」と割り振られ、秋田援助隊と共に行動した。「今日は男鹿消防署です」「今日は角館です」と言われて山田に向かった。

秋田県の人は観光等でこちらに来たことがある人達が多く、逆にたくさんの気遣いを頂いた。大館から来た人は山田にも行ったことがあり、現場を見て大泣きしていた。宮古や山田のことを思ってくれていると思うと、うれしくもあり、悲しくもあった。寝ていないのを知っているようで、後ろで休んで良いよと言われたが「だいじょうぶ、がんばりますよ」と言った。すごく気を遣ってもらってありがたかった。被災した方々はもっと辛いしきついと思った。それに比べればきついとは思わなかった。

救急業務が主で、山田の患者のいる家まで道案内をする。山田病院が被災していたため、患者はすべて宮古病院に搬送した。１件だけ千徳の三陸病院に搬送した。ドクターの判断で盛岡での治療が必要な場合は、盛岡隊が搬送していたと思う。国道１０６号は通行できた。救急車が４台あり、フルに出動していたが、山田の出動体制が整うに従い、順に減っていった。夕方、搬送が終わると本部に報告し、新里に戻って泊まるか、家が近い人は帰る。1週間位分署に泊まっていた。家に帰っても時間が遅く、家族は寝ていた。自宅から新里分署まで25分位かかる。次の日も朝6時出発なので間に合うように家を出るが、いつもよりすいている。朝晩は物資輸送のトラックでいっぱいだったが、昼間はそうでもなかった。

前の晩に次の日の集合時間が知らされ、署員に伝える。明日は5人とか、10人とか呼ばれると、当番者を残し宮古へ向かう。10日位たった辺りから休みが取れるようになった。

山田に始めて支援に行ったとき、水門が店に真横に刺さっていたのがショックであり、信じられない気持ちで一杯だった。一瞬夢を見ているような感じがしたが、それはまぎれもない現実だった。自分を保とうとするのがやっとだった。2週間位禁煙していたが、また始めてしまった。

山田勤務の経験があったので、避難所でその頃知り合ったおじいさんや、おばあさんと会えた事が少しうれしかった。一人暮らしのおばあさんが何度も津波に遭っていて、石垣を高くしたから大丈夫だと言っていたが、ちゃんと逃げてくれて、会ったときは抱き合って喜んだ。本当にうれしかった。

４月に入ってから、休みも増えて、自分にできることをしようと、地域の人たちに声かけをして集めた絵本や米等を、山田の保育園と避難所に届けた。

たまに亡くなった後輩のことを思い出してしまう。同じ地区出身なので、彼の父とはたまに飲んだりする間柄なので、お盆は昔話等をする。山田、田老などで知り合いが亡くなったりしていた。

家の被害はなかったので、現場を見ている自分と、家族にどうだったかと聞かれて説明できなかったことがきつかった。着替えを取りに帰ったとき、中学2年の長男に「後を頼むぞ」と言って出てきたが、長男がとても大変そうだったと聞かされた。妻や母も大変だったと思う。自分は仕事だからしょうがない。

山田で患者宅に行くとき、その場所の目印が何も無くなっていて、見つけるのが大変だった。援助隊に「ちょっと待って」と言えなくて厳しかった。

消防に入る前、建設設備の仕事をしていて結構きつかったが、どの仕事も楽なものはないというのが本音だと思う。

おわりに

誰もが必死だった大震災への対処だったが、消防署員は最前線で活躍していた。震災直後から消防署に詰めていた署長は、1週間後に町に出て、はじめて津波後の光景に接した。その衝撃が忘れられない。自分の記憶との落差に「えっ、あっ」ばかりで言葉が無くなってしまったと語った。さらに自分の生存さえ家族に知らせる術も無く、震災から3日たって再会した娘からは「お父さん生きてた」と言う声が返ってきた。

指令室に缶詰になっていた署員は無線で入ってきた「全滅」とか「負傷者多数」という件や、「津波が堤防を乗り越えた」という情報をイメージできなかったと語っていた。

また秋田隊の道案内をしていた署員は、かつて勤務していた土地でさえ、津波で全ての家屋がさらわれた跡では、自分がどこを走っているのか理解できず困ったという。この違和感は津波後に町を歩いた者ならば誰でも経験したことだ。家も電柱もなく、瓦礫の山と化した土地や、更地になってしまった地域に立って、今自分がどこにいるのか、ここはどこなのか、不安に駆られたことが何度もあるはずだ。そうした中での救助活動だったのだ。

3　警察署

はじめに

『東日本大震災と警察　平成23年　回顧と展望』（２０１１　警察庁）によると、被災地における警察の活動は、避難誘導、救出救助・捜索、交通対策、検視・身元確認、原子力災害への対応、安全・安心の確保がある。また被災地での警察を取り巻く状況については、警察官の被害、警察施設の被害、過酷な勤務環境などが見られる。そうした警察活動の支えとしては、全国警察からの特別派遣、警察の情報通信、関係機関との連携、医師・歯科医師等との協働、ボランティアや民間事業者との連携、海外からの支援部隊、そして被災者との交流・激励が挙げられる。

ここでは宮古市内で活動された方々の記録を、岩手県警宮古警察署勤務の方々からの聞き書きと、岩手県警察本部監修『使命　証言・岩手県警察の３・11』（岩手日報社　２０１３）に掲載された記録から振り返ってみてみたい。

(1)　宮古市の場合

『岩手県　東日本大震災津波の記録』（岩手県　２０１３）によると、田老地区中心部の被害は、宮古市全体の建物被害における全壊棟数２千６７７棟の約27％に当たる７２６棟（平成24年６月29日現在）がこの地域に集中している。また死者・行方不明者数も１８１人と市内で最も多い状況となっている。一方宮古市中心市街地は、宮古駅を中心に末広町商店街や中央通り商店街が広がる区域に被害が広範囲にわたっている。

宮古警察署は東日本大震災において警察署１階部分が水没し、また２名の警察官が職務中に津波に巻き込まれ、被災した。

このあたりのことを２０１３年５月２日に当時の宮古警察署　副署長小野寺啓泰さんから伺った。警察署の１階は水につかった。警察法に基づき、県公安委員会から警察庁を通じ、応援依頼をした。これには２段階ある。第１は被災直後で、手続きは後でも良い。警察庁からの要請となる。県警本部（盛岡）から全署に指示が出る。各市町村の警察は要請を出せる。２０１２年２月１日より全国から特別出向者をつのり、岩手県警の職員として勤務している。１年間の勤務で、２０１３年の３月31日までで、第２回第２陣は４月１日から始まる。

県警本部警備課には災害対策室があり、宮古警察署にも対策本部がある。県の対策室が中心となり、被災地の対策本部へ出る。例えば陸前高田では朝晩会議をして各部の情報を共有する。県警本部に合わせて解散時期も決定する。宮古では警察署の４階が本部だった。

次に２０１３年８月21日に宮古警察署地域課長の**山田良春さん**と**中屋昌富さん**（昭和26年生）に伺った。中屋さんは釜石生まれで宮古には３回勤務したという。震災の前の年に宮古勤務だった。今は千徳に自宅があり、宮古駅前交番の相談員をされている。

県外からの応援警察官について

県警本部警備課には記録があると聞く。38県から応援に来た。今は青森、三重、香川、高知、大分、沖縄県からの22人が活動している。昨年は40人いた。震災直後は京都府警、山梨県警の広域緊急援助隊が来た。昨年(平成24年２月６日)からは特別出向の形で来てくれている。昨年まではグリーンピアに住んでいたが、今年から新里の仮設住宅に住んでいる。各県から派遣されている職員もこの仮設にいる。岩手県警採用の形式をとり、宮古警察署管内で勤務を執行している。出向組には警視庁、神奈川県警を退職して本県警察官に採用された３人が含まれている。

震災当初は全国から来た警官はグリーンピア、国民休暇村、パークホテルには被災者の避難場所で宿泊できず、県立宮古短大やシーアリーナに宿泊したり、盛岡市や花巻市あたりから通っていた。

震災後の活動状況

駅前交番では所在不明者の受付をやっていた。拾得物受理もやった。

携帯も一般加入電話も使えない状態で、連絡が取れないという人が多く来て、それらを受理した。震災当日は団体のデモ行進の予定があり、配置についていたが、直前に地震が発生、大津波警報が発令されたことでデモは中止になった。即時、海岸方面に進行する車両の交通整理と、海岸方面から避難してくる車両の交通整理に当たったが、停電により信号機が滅灯（信号機が作動しないこと）したことと、警察官人員が少ないため、一時、主要交差点が渋滞した。

予想された津波の高さでは、堤防を越えることはないだろうとの思いがあった。「とんでもない大津波だからまず逃げる」という人と、「とりあえず逃げる」という人の温度差があった。防災無線で「避難してください」と呼びかけても、言葉だけでは非難しない。「すぐそこまで津波が来ている。逃げろ」と言われて逃げ出す人が多かったが、老人は逃げられない。

末広町通りを市役所方面から宮古駅前交差点に向かって、オートバイに乗った消防団員が、「津波はこちらに入ってきた」と大声で叫んでいた。その直後、中央通りから末広町通りに波が車両を押し流して来るのが見えた。駅前交差点で津波の高さは30㌢くらいだった。

津波が引いた後、信号がストップしていたので交番勤務員が交代で交通整理をした。水が引いてから地元住民が避難場所から戻ってきた。停電が回復するまで3日間くらいかかった。沿岸部では長い間、電気も携帯もつながらなかった。数日後に宮古郵便局の屋上からはつながった。警察電話は震災直後はつながっていたが、数日後には通話できなくなった。停電中は水道もストップしてしまった。

自宅にいつ戻ったのか正確に記憶していない。災害対策本部がある宮古警察署にも行けない状況であったが、2日後の夕方に本署に通じる道路の一部が回復したとの連絡があった。

パトカーが被災して使用できず、マイカーで活動するよう指示があった。ガソリンは理由を話して給油し、代金の請求書は宮古警察署宛とした。

震災後体力がついて行かずに困った。寒い時期なので足がつったりした。

駅前交番には、夕方に食事を提供してくれた業者がいたが、数日後、「米がなくなりました。これが最後です。」と話し、米を1升くらい置いていった。

対策本部には、毎朝パネルトラックで秋田県からおにぎりが搬送された。そのおにぎりは堅く、冷たくて食べられなかったが、各部隊に分配した。

対策本部に入れない状態が数日間続いたので、駅前交番に避難者の所在確認のため多くの人が来たが、情報を把握していないので、提供はできなかった。市役所に避難所と避難者の名前を掲示していると思うので、そちらで確認してくださいと教えた。通行止めで行きたいところに行けないと怒り出す人もいた。

震災当初は外部不審者が多く入っているという連絡が多数あったが、取り締まれる状況ではなかった。2週間後頃から、夜間に自衛隊のMPと表示した車両が赤色回転灯を点灯しながら巡回していた。道路の瓦礫を撤去して、通行できるようになった頃、市街地でテレビを盗まれたという被害があった。ヘドロ状の泥が堆積しているところへよく行ったなと思う。捜査できる状態ではなかった。

被災家屋は施錠できないため、窃盗事件が多発したので、機動捜査部隊も活動した。2~3週間経過して、少し落ち着いた頃、避難場所の巡回を始めた。岩手県警察の名の入ったパトカーを見て「ほっとする」と言った方もいたという。

緊急援助隊の活動

12日午後、内陸部の警察署からの緊急応援部隊が来た。13日の午後には広域緊急援助隊（京都府警と山梨県警）」が来て、休む間もなく主要交差点で交通整理を開始した。

普段訓練しているのは広域緊急援助隊の警察官たちだけだ。他県からの応援は2週間交代で、警備部隊、刑事部隊、交通部隊、地域部隊だった。警備部隊は行方不明者の捜索、ご遺体の収容活動を行った。刑事

部隊はご遺体の検視をして、身元を確認し、ご遺族に引き渡した。千徳の体育館、勤労青少年体育館、田老の県立宮古北高の体育館がご遺体の収容所になった。交通部隊は信号機の停電や、制御板の故障で作動しない主要交差点で交通整理を実施した。地域部隊は街頭のパトロールや避難所を訪問して、被災者支援の活動をした。

発災から半年が過ぎた頃、愛知県から来た機動隊員が「発災時に宮城県気仙沼市に行け、と命じられて、出動したが、被災の状況が全くわからないし、必要な資機材は何なのかわからず、途中のコンビニ店などで弁当の食糧を買いながら来ました」と話していた。

大阪府警の警察官は人気があったと聞く。ドラ周辺に立っていると、女子中高生が話しかけてきたという。

宮崎県や大分県に集中豪雨があったとき、大分県警の機動隊はこちらで活動していた。

平成24年2月6日から特別出向していた三重、高知、香川、大分県からの警察官は、今後発生が予想される南海トラフでの地震・津波対策の研修を兼ねていたようだ。高知県から出向の警察官は、「四国は海岸部が都市で人口が集中しているため、津波が発生したら避難はできないだろう」と話していた。

特別出向者は機動捜査班、交通安全対策班、自動車警邏班、地域安全班の4班で活動した。機動捜査班は車を使用した捜査で、刑事部門とペアで活動した。交通安全対策班は交通の指導取締を行った。自動車警邏班は犯罪抑止のため、パトロールを行った。地域安全班は仮設住宅を主とした巡回を行った。地域に溶け込むため、勤務後にサークル活動も行っていた。ある出向警察官はカッター大会に一緒に出場した。地元出身の警察官も来た。自分の所属地「埼玉県警」のロゴが付いた装備品を着装して、活動していた。

関西方面の方々も来ていたが、来ている理由がわかれば、受け入れる地域住民も「いい人が来てくれた」と喜んでいた。しかし言葉の問題があった。この辺りの人が敬語を使って話すと理解できないことがあったようだ。

海岸部の停電が解消され、信号機が正常に作動し、落ち着いた頃、心理ケアのためのアンケート調査があり、項目に該当する者は、資格のある人が来て、面接を行い、メンタルケアを実施した。

今後に備えて

自分が何をするのか、普段からよく考えておくべきだった。それを考えておかないとうまく行動できない。

大津波警報が発令されたら、海岸部に通じる道路を封鎖するべきだと思う。但し海岸部から避難する車両の通行は確保しなければならない。防災無線でどの地域はどこの高台へ避難すべきか指示するべきだと思う。ラジオや無線を聞いていない人もいる。

前年には田野畑村にいたが、チリ地震津波警報が発令されても、やはり逃げなかった人がいた。「またか」という思いが強い。

大船渡市三陸町出身の警官（後述の菅原一弘巡査長）は、母親から「地震が発生しても30分は大丈夫だから、その間に逃げるなり対策をするように」と言われていた。だから震災の時には災害救助などの活動ができるように服装を着替えた。同僚にも「災害活動ができる服に着替え、落ち着いて行動するように」と言ったという。本署にはパトカー等数台が置いてあったが、これらは全部使用できなくなった。

平成23年8月「一致団結　宮古署　贈　特別出向者一同」と書かれた大漁旗が宮古警察に飾ってある。

以下は寄せ書きの一部で、これは全国からの出向者の方々が寄贈したものという。

「自分たちが日本史上未曾有の

写真　「一致団結　宮古署　贈　特別出向者一同」と書かれた大漁旗

震災発生に伴う出向で」

「震災そのものを風化させてはならない」

「被災地の安心安全をと言う志を一つに、出会い、一致団結して奮闘した仲間がこの宮古署にいた事」

(2) 宮古警察署管内警察官の方々の手記

ここからは岩手県警察本部監修による『使命　証言・岩手県警察の3・11』（岩手日報社　2013）からの引用である。主に宮古警察署管内で東日本大震災を経験された警察官の方々の手記を選んだ。当方で適宜省略した形で掲載しているので、文責は筆者にある。

菅原一弘さん（宮古警察署、巡査長）の手記

困難極めた被災状況の把握

「あの日、私は人事異動対象で送別会を終えた後、事務引き継ぎを行いながら本署と宿舎を往復して引っ越し準備を行っていた。突然地鳴りとともに天井の蛍光灯が揺れ出し、激しい横揺れに積み重ねた段ボールが崩れ落ちた。強烈な揺れの中で、「大きな津波が来るな」と両親らの話を思い出しながら、いよいよ現実のものとして襲ってくるという緊張に胸が押しつぶされそうだった。

宿舎前の国道45号は、停電で信号が滅灯して大渋滞が生じていた。その中を縫うように事故処理車両などの緊急車両がけたたましくサイレンを鳴らし、津軽石方面に向かって行った。

宮古湾は潮の干満が始まっており、次第にその激しさを増し、海底が見え始め、大型ヨットが底を着けて傾いた。

至急報を告げるチャイムは鳴り止まない。刻一刻と迫ってくる津波に署員は不安と緊張のため顔を強ばらせていた。

重茂半島北端の閉伊崎付近の海水が異常に盛り上がり、「黒い壁」となって宮古湾の奥へと迫ってくるのが目視できた瞬間、県内系無線では大船渡署員の「津波の襲来を確認」という第1報が流れた。第1波はひたひたと水かさを増して、ほんの数秒の内に署前の防潮堤を静かに満たした。そして引くまもなく、第2波が上から覆いかぶさるように襲ってきた。流れ込んだ濁流は庁舎1階を完全に水没させ、漂流するガスボンベからはガスが吹き出した。

そんな中、避難誘導に出動した数名の署員がなかなか戻らなかった。自分の子どもと同じ年の2人の男の子がおり、そのかわいらしい顔を思い浮かべながら、「頼む、生きていてくれ」「死ぬんじゃねえぞ」と祈った。

翌日は雪景色だった。余震と津波警戒に対する防災無線の中、管内の被災状況の情報収集へ出動した。夕方になって田老地区へ向かい、田老トンネルを抜けて愕然とした。街が無くなっていた。「万里の長城」と称して地元住民の自慢であった巨大な防潮堤の一部だけが残り、津波は町の全てをのみ込み、消滅させていた。

情報が錯綜し、陸路からの被災状況が瓦礫によって遅々と進まない中、上空からのヘリによる情報収集は非常に助かった。その中で大きな問題が生まれつつあった。頼みの綱である連絡手段が県内系と共通系の2波の警察無線のみでは思うように伝達ができず、把握がきわめて難しくなってきた。「無線に出ろオ」「呼んでんだってエ」と、皆がワラにもすがる思いで必死だった。

このような状況下から署の運用再編成がなされ、上司から統括班の役割を任されたとき、「この席に座ったら、覚悟しろよ」と話された。各署員が動いている状況をもれなく把握しなければならない。統括班のメンバーと四六時中、無線、衛星電話機、メモ紙、ホワイトボードとのにらみ合いが始まった。

現場でヘドロの混じった砂埃の中を必死になって駆け回ったり、かけがえのない家族を失った無念さを察しながら、黙々と検視業務を進めたり、遺族とともに涙を流すなど、活動を展開している署員や応援に駆けつけている各隊員のためにも、片時も報告を聞き漏らさず、少しでもスムーズに運用させるという一念だった。

被災地に入った応援部隊は、氷点下の夜間を普通車で車中泊を繰り返しながら検視業務を続けた。窓ガラスの壊れた体育館で外套だけを

身にまとい、寒さを耐えしのぎながら、連日の捜索作業に従事してくれた部隊もいた。まさに想像を超える過酷な状況の中での勤務であった。

犠牲となった市民の方々、そして職員のためにも「絶対に負けられない」という気概を持ち続け、この震災を風化させてはいけないと思う。」

鳥畑拓真さん（宮古警察署、巡査）の手記

忘れられない初任地での経験

私が東日本大震災を経験したのは、初任科課程を修了し、初任地の宮古警察署港町交番へ配属され、職場実習が始まって1か月が経過したときだった。

震災当日、小さな揺れが次第に強くなり、部屋から飛び出した。同じ港町交番勤務の先輩から「本署へ行くぞ」と言われ、参集の準備をした。

徒歩でもこれ以上本署に近づくことは困難と思い、駅前交番まで引き返そうとしたとき、地域の人が水没した住宅街の方を指さしているのが見え、その先を見ると漂流していた木材の上に何かが乗っているのが見えた。見ると流された木材に50歳くらいの男性がぐったりしてつかまっており、大声で呼びかけても反応は無かった。腰まで水に浸かりながら助けに向かったが、男性は意識がもうろうとして会話をすることはできなかった。私はそのまま背負って避難所の宮古市立河南小学校まで運び、応急手当をしてなんとか助けることができた。

その後渋滞が発生している交差点で交通整理を行い、深夜になって宮古署へ戻った。署の4階会議室が対策本部になっていて、そこで初めて港町交番の中村所長と村上巡査長の2人と連絡が取れていないこと、自分も行方不明者として扱われていたことを知った。

翌日から始まった遺体の搬送は足場がとても悪く、車両が進入できないところがほとんどだったため、毛布を使った人力での作業となり、ご遺体は何倍もの重さに感じられた。

毎晩遅くまでの勤務が続き、誰しもが疲労のピークを感じていた中でもがんばることができたのは、終礼時に署長を始めとする幹部職員の方々に「今が一番つらい時期だが、それでも私たちは警察官なのだから弱音を吐くことはできない」と檄を飛ばされ、明日もがんばろうと思えたからだ。

電気がまだ復旧していなかった頃、明かり一つなく真っ暗な街を本署の4階から眺めていると、サイレンと共に県外部隊の車両が車列を組んで赤灯を付けながら走ってくる姿が見えた。食料も少なく、増え続ける仕事に疲労を感じていた私たちにとって、その明かりは決して1人ではないという安心感と、そして警察という大きな組織のつながりを実感した。

【引用文献】
『東日本大震災と警察　平成23年　回顧と展望』警察庁　2011年
岩手県警察本部監修『使命　証言・岩手県警察の3・11』岩手日報社　2013年
『岩手県　東日本大震災津波の記録』岩手県　2013年

4　自衛隊

はじめに

今回の東日本大震災における被災地での自衛隊の活動は目を見張るものがあった。被災者の皆様からお一人お一人の記憶をたどって伺ってゆく中で、救い主としての自衛隊の方々の活躍する姿が記憶に焼き付いていると、実感することができる。この項では自衛隊の側に焦点を置き、彼らの初動体制から、被災地での活躍の軌跡等を時系列に従って記録してゆくこととしたい。その際引用したのは、平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）、『ありがとう　自衛隊　勇士たち　陸上自衛隊岩手駐屯地　東日本大震災「災害派遣」記録集（保存版）』盛岡タイムス　2011（引用には『記録集』と略）、そして「自衛隊北部方面隊ＨＰ　東日本大震災　災害派遣活動状況　北部方面隊―すべては被災者のために―」（引用には「北部方面隊ＨＰ」と略）である。引用文献はこちらで適宜省略して使う。

また2014年8月25日には陸上自衛隊中部方面隊伊丹駐屯地に所属されている中部総監部防衛部長で一等陸佐の滝澤博文さん（昭和38年生、長野出身）をお訪ねして、当時の状況を話して頂いた。滝澤さんは震災当時北部方面隊の第2師団司令部幕僚長というお立場で、宮古市方面の災害派遣の指揮を執られた方だ。

ここでは滝澤さんの話を中心に、時系列に沿って引用文献で詳細を補ってゆくことにしたい。

写真１　第２師団司令部幕僚長（当事）滝澤博文さん

(1)　東日本大震災への自衛隊の対応

はじめに東日本大震災直後、防衛省・自衛隊の取った対応について、平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）より引用したい。すべての自衛隊員の活動が、ここから出発しているからである。

「特集　東日本大震災への対応

1　防衛省・自衛隊の活動態勢

11（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする最大震度7の大地震（国内観測史上最大のマグニチュード9.0）が発生した。岩手県・宮城県・福島県では沿岸沿いの集落が地震により発生した大津波によって広範囲にわたり水没したほか、東京電力福島第一原子力発電所では原子炉などの損傷によって放射性物質が漏出する事故も複合して起こるなど、広域にわたり大規模かつ激甚な被害をもたらした未曾有の大震災となった。

防衛省・自衛隊は、地震発生直後の14時50分に防衛省災害対策本部を設置するとともに、航空機などによる情報収集を行った。15時30分には第1回防衛省災害対策本部会議を開催、18時00分には、大規模震災災害派遣を、19時30分には原子力災害派遣をそれぞれ防衛大臣から自衛隊の部隊に命じた。これを受けて、自衛隊は、地震発生当日から約8千400人の態勢を動員し活動を行うなど、陸自多賀城駐屯地や空自松島基地などが被災し、航空機や車両が水没する被害を受ける中でも、可能な限りの人員・装備を投入して、被災者の人命救助のため、大規模かつ迅速な初動体制を行った。」

(2)　宮古地域での自衛隊の対応

『記録集』には資料として「岩手県内における各時期の自衛隊部隊展開図」があり、いつどの部隊が派遣されたのかがわかる。発災当初に宮古に派遣されたのは、第9特科連隊本部のある岩手駐屯地からの第9特科連隊第3大隊だった。23年3月12日以降も同じく第9特科連隊第3大隊が活躍した。3月16日以降になると、宮古市及びそれ以北の沿岸地方に第26普通科連隊、第2特科連隊、第2戦車連隊、第25普通

科連隊、第3普通科連隊、第11旅団等の活躍が始まる。そして5月18日以降には再び部隊交代をして第9特科連隊が活動している。

では次に**滝澤博文さん**（昭和38年生、当時陸上自衛隊北部方面隊第2師団幕僚長）のお話から記してゆこう。なお、滝澤さんのお立場上、始めに当方から質問項目を提出し、その内容に沿って回答を頂いた。

質問1「第2師団司令部幕僚長が指揮する自衛隊員の組織と人数」

答　「第2師団の隷下部隊が中心となり、道北地区の各駐屯地警備及び各駐屯地維持に必要な最小限の隊員を残して、約3千700名の隊員が派遣されました。名寄の第3普通科連隊及び第2偵察隊、遠軽の第25普通科連隊、留萌の第26普通科連隊、旭川の第2特科連隊及び上富良野の第2戦車連隊が、災害派遣の中心的な活動部隊となる。災害派遣に必要な機械力（グラップル、ドーザー、ダンプ等）を一元的に管理運用して活動部隊を最前線で支援するのが旭川の第2施設大隊、ヘリコプターを有して空中偵察及び空中機動を支援する旭川の第2飛行隊、日本一のデジタル化師団としてコンピューター約200台を持参してシステム連接を担任するのが旭川の第2通信大隊、そしてこれらの部隊の衣食住を支援するのが旭川の第2後方支援大隊であります。また、第2師団固有の部隊に加えて、第11旅団から被災者の生活を支援する部隊として第11後方支援隊が配属されました。」

もちろん震災現場では、北海道にいた北部方面隊よりも岩手駐屯地にいた部隊の活動が早く始まっている。『記録集』では以下のような記述から始まっている。

「3月11日（金）
14時50分　大津波警報発令、東北自動車道全面通行止め（八戸道含む）、岩手駐屯地各部隊「災害派遣準備」、14時52分　岩手県知事が第9師団長に災害派遣要請、15時03分　岩手県庁へ連絡要員派遣、15時13分　岩手駐屯地偵察班出発、16時40分　第9師団は人員約6千600名で、人命救助を優先して災害派遣活動を実施。
岩手駐屯地から派遣の部隊　宮古市、宮古市田老地区　第9特科連隊第3大隊　青森・弘前・秋田駐屯地から岩手県被災地へ向け移動、宮古市、田野畑村　第9特科連隊第3大隊（岩手）、19時54分宮古市各地区完全浸水（鍬ヶ崎、津軽石、高浜、金浜、重茂）。
3月12日（土）
00時00分現在、宮古市、国道45号線所々寸断、田老、山田町沿岸部延焼中、01時15分　国道106号線全線通行可能、05時36分　宮古市田老地区で人命救助活動開始（第3大隊）、航空科部隊　DMAT（緊急医療チーム）6チームを空輸（大船渡病院、陸前高田病院へ2コチームずつ、宮古、釜石各地域に1コチーム）、山田町、宮古市　人命救助活動（第9特科連隊）。」

質問2「師団長に指示が届き、その後に災害現場に向かうまでのプロセス（準備する人と物まで含めて）」

答　「3月11日14時45分の発災に伴い、部隊には一斉に非常招集がかかった。第2師団は部隊は当日中に概ね派遣体制が完了したが、本州へ移動する船の調整ができず、12日19時30分第1波が小樽港を出港することになった。出港する港及び移動経路は、津波の影響から当初の間は日本海側に限定されており、本州への上陸は、秋田港と新潟港を使用することとなった。通常、部隊を派遣する際には、先遣隊を出し、派遣先の現地の偵察と主力の受け入れを実施する。今回の派遣に際しては、先遣隊は航空機により移動することとなった。
私は、活動部隊の先遣隊と共に13日9時旭川空港から航空自衛隊の輸送機で、ジープとともに花巻空港に先行した。花巻空港からは、災害派遣に向かう自衛隊車両として通行止めの東北自動車道を盛岡まで利用させていただき、岩手駐屯地の第9特科連隊指揮所及び岩手県庁に指揮所を構えていた第9師団指令部に挨拶に立ち寄った。その後、3台あったジープのうち1台が赤色灯を装備していたことから、渋滞していた国道106号線を通行する際には、赤色灯を点けて「自衛隊さんどうぞ！」と言って我々に協力してくれる方々の支援を得て、13

日16時30分、無事明るいうちに宮古消防署に到着することができた。宮古消防署到着後は、消防及び市役所の職員の協力を得て、主力部隊を受け入れるための公園、グラウンド、空き地などの選定と前進経路の選定を実施して、携帯電話のメールにより第2師団の各隷下部隊長に前進目標、移動経路などの連絡をして、部隊を派遣地域に展開させることとしました。

発災当日の3月11日は、旭川では「バーサーロペット・ジャパン」というクロスカントリー大会の前日であり、スエーデン大使を招いての大きなイベントを実施していた。第2師団は大会を支援していたことから、スエーデン大使が第2師団司令部に14時30分まで表敬訪問されており、その夜は、師団長以下、レセプションに参加の予定であった。

一方この日の午前中、偶然にも東北沖大規模地震発生時の北部方面隊災害派遣計画（案）に係わる意見提出のため、師団長に対し、災害派遣における第2師団の行動を機能別に説明しており、発災時には、師団長以下すべての幕僚長の認識が統一されていた状況になっていました。

この間の事情について「北部方面隊ＨＰ」では以下のように記している。

「北部方面隊は、11日16時15分に非常勤務態勢に移行、ヘリ映伝による上空偵察、東北方面総監部へ連絡幹部を派遣し災害派遣準備をした。

翌12日、方面航空隊のヘリを東北地方に前進させ、第26普通科連隊を第一陣として派遣、22時現在、第2師団及び第5旅団を主力とする人員1万名以上、車両約3千両が岩手山演習場と八戸駐屯地に前進し、14日朝から救助活動等を実施した。

3月12日第25普通科連隊　遠軽駐屯地出発、車両乗船（小樽港フェリーターミナル）

13日第11後方支援隊　真駒内駐屯地出発、車両乗船（真駒内西港フェリーターミナル）、米海軍揚陸艦による部隊移動」

質問3　「担当する災害援助の地理的な範囲と、その範囲内での部隊数と人数の振り分け。」

答　「災害派遣命令では、計画どおり第2師団は、岩手県北部を担任することとなった。洋野、久慈、野田、田野畑、普代、岩泉及び宮古と逐次到着した部隊を北から展開させる予定だった。しかし現地の被害状況、特に被害は北南の地域が大きいことを踏まえて、部隊展開の要領を再検討することとなった。結論として、第1派で派遣された第26普通科連隊が岩手県北部に向かい前進中であったことから、計画通り北から展開させる一方で、第2波以降については、激甚地域である宮古を重視して、南から展開させることとした。当初の段階では第26普通科連隊が洋野、久慈及び野田、第25普通科連隊が宮古市鍬ヶ崎方面、第3普通科連隊が宮古市南部、第2戦車連隊が宮古市田老地区、第2特科連隊が田野畑、普代及び岩泉、そして、重茂半島が陸の孤島として車両の立ち入りが限定されていたことから、オートバイを保有する第2偵察隊を展開させることとした。

3月12日～14日の間に第2師団の担任地域全域に部隊を展開させた。各部隊長の報告を聞くと、全ての報告は「大変だ！」というものであった。そこで、現地を視察してみると、宮古市田老地区以南が極端に被害が大きいことが判明した。一方で発災後72時間が人命救助の勝負である。被害の程度の差はあれど当面は部隊を動かせない。それぞれの地で救える命がある。発災後1週間が勝負と思い寝ずに仕事をさせた。活動拠点まで戻ると時間のロスが出るので3月17日までは当初の態勢のまま、車に寝泊まりもさせた。

3月17日以降、人命救助の可能性がきわめて低くなった段階で部隊展開の態勢を変更して宮古市に部隊を集中することとした。隊員には「17日まで頑張れ！」と激励して、18日以降逐次、ご褒美として滝沢村の温泉で休養させながら、態勢を田老、鍬ヶ崎、藤原等の南の地域に部隊を集中していった。狙いは、担任地域全域における被害状況に応じた復旧態勢を確立すること及び、被害者に対する生活支援態勢を確立することであった。

人命救助の段階の次は、応急復旧の段階である。応急復旧の焦点は、瓦礫の下に埋もれているご遺体を収容することであった。津波被害の場合は、一番下に重い鉄筋、次にご遺体、上部は木材が一般的な状況であった。隊員には、1日でも早くご遺体を収容すべく叱咤激励した。「4月11日まで1か月間頑張れ！」と号令をかけ、全ての担任地域において瓦礫を全て片付けるように命じた。途中から、山田地区への増援の要望があり、第3普通科連隊の一部を山田町にも展開させた。今回のご褒美は「3日間、北海道に返す！」と約束した。3月は卒業の時期、4月は入学の時期であり、それぞれの家庭においては通常は繁忙期である。北海道では雪解けの時期でもあることから車の手入れも重要な事項であった。隊員は目の色を変えて活動を継続した。その成果として、4月19日に実施された田老地区における防衛大臣視察には、大臣から宮古地区は応急復旧のモデル地区であるとのお褒めの言葉も頂くことができた。

4月中旬以降は、岩手県の宮古以北の地域は生活支援が中心となり活動を継続した。第2師団は、4月12日以降、気仙沼、女川、石巻などに部隊を展開させ、また5月1日からは、釜石、大槌、東松島、そして福島の原発地域にも部隊を派遣させることとなった。」

『記録集』の記述

3月13日（日）

山田町、宮古市　人命救助活動（350名救助）、（第9特科連隊）

道路啓開　野田村、普代村、宮古市、山田町

第2師団（北海道旭川駐屯地）などから陸上自衛官約3千700名が小樽港及び苫小牧港から秋田港を経て岩手県の被災地へ急行。到着するや災害派遣活動を開始。

第2師団司令部（旭川駐屯地）岩手駐屯地及び宮古市にて活動、

第3普通科連隊（名寄駐屯地）宮古市田老、山田町にて活動（3月15日～）、

第25普通科連隊（遠軽駐屯地）宮古市南部一帯において活動（3月15日～）

第26普通科連隊（留萌、旭川駐屯地）久慈市、野田村、普代村及び宮古市田老において活動（3月15日～）

第2戦車連隊（上富良野駐屯地）宮古市田老、岩泉町にて活動

第2後方支援連隊（旭川駐屯地）宮古市田老及び山田町、野田村において生活支援、医療支援

第2施設大隊（旭川駐屯地）岩手県沿岸全域において活動

第2通信大隊（旭川駐屯地）岩手駐屯地を拠点とし活動全地域を通信支援

第2飛行隊（旭川駐屯地）岩手駐屯地を拠点とし岩手県全地域で活動

第2偵察隊（旭川駐屯地）宮古市重茂半島、岩泉町、田野畑村（岩手県北部地域）において活動、第11旅団（真駒内駐屯地）宮古市及び山田町において生活支援第2師団に配属

北部方面通信群（札幌駐屯地）岩手駐屯地を拠点に活動全地域を通信支援

3月17日（木）

宮古市～洋野町　人命救助活動、道路啓開、炊き出し支援、給水、物資輸送（第2師団）

3月19日（土）

支援物資輸送　花巻空港に米軍、空自の航空機より輸送し、かつ釜石港に入港した海自艦艇「ちくま」から陸自車両を持って灯油ドラム缶80本等を宮古市その他に輸送

給食、給水（継続中）、診療支援　山田町南小学校、釜石高校、ケアプラザ大槌及び宮古市重茂地区において計160名の患者を診療

3月21日（月）

入浴支援（継続中）宮古市津軽石小学校その他（第11後方支援連隊）、

診療支援　宮古市老木公園（第2師団）を医療支援の拠点として、診療支援を実施

質問４「援助内容（滞在中の援助内容の変化も含めて）」

答　「災害派遣で最も重要なことは、人命救助である。津波被害においては、生きている方は自力で山に登ることができる。希に、沈まなかった家屋や社内において溺死や圧迫死を逃れて挟まれて動けない方を救助することが人命救助の焦点となる。応急復旧段階においては、瓦礫の下に埋もれているご遺体の収容を如何に早急に実施できるかが焦点であると思慮する。」

「北部方面隊ＨＰ」より

「活動状況

北部方面隊が担任する被災地域は、がれきが逐次集積・運搬されるとともに海岸沿いの道路も徐々に通行可能となって来てはいるものの、復旧には未だほど遠い状況である。各部隊、隊員は引き続き被災者の立場に立ったきめの細かい活動を実施。この間、第５旅団が３月21日から石巻地域における救援活動を第６師団から引き継ぐとともに、第１特科団が22日から仙台・岩手における輸送支援等を、第１高射特科団が27日から第１戦車群、第１電子隊、方面対舟艇対戦車隊等の配属を受け石巻地域の多目的支援をそれぞれ開始した。

３月27日現在、避難民等空輸約４８０名、物資空輸約12㌧、給食約16万食、入浴支援約１万２千名、処置患者約２千２００名の活動を実施した。

＊生活支援開始（第１特科団）
＊被災地への灯油給油（北部方面航空隊）
＊捜索救助活動（第１高射特科団）
＊道路啓開・がれきの除去（第７施設大隊）

行方不明者大規模集中捜索

北部方面隊から派遣された各部隊は、平成23年４月１日～３日の間、集中的に実施された大規模な行方不明者の捜索に参加した。捜索は、陸・海・空自衛隊及び米軍が参加し、被災地域を地上、海上・水（海）中及び空中から一斉に捜索した。

＊胸まで水に浸かりながらの懸命な捜索（第１高射特科団多目的支援隊：第１戦車群、方面対船艇対戦車隊）、行方不明者捜索（第２戦車連隊）
＊行方不明者捜索（第25普通科連隊、第２地対艦ミサイル連隊）

即応予備自衛官活動開始

平成23年４月３日から９日の間、北部方面隊から派遣した即応予備自衛官約１８０名が生活支援として救援物資の整理、輸送業務及び入浴支援を実施した。一方で、発災当初から派遣され生活支援等に従事していた第５音楽隊（帯広）が、避難所周辺のがれき除去作業を実施しつつ、４月２日北部方面隊として最初の慰問演奏を自治体の要求に応じて石巻市内の避難所で実施し、被災者等が抱える避難生活のストレス軽減に貢献した。

＊救援物資の仕分け作業をする即応予備自衛官
＊入浴支援施設の準備をする女性即応予備自衛官
＊救援物資を満載し被災地へ向かう車列（第２後方支援連隊輸送隊）、避難所における慰問演奏（第５音楽隊）

２度目の行方不明者大規模集中捜索

４月11日。発災から１か月が過ぎた。派遣された北部方面隊の各部隊は、多くの国民の期待に応えるべく、懸命な行方不明者捜索及び生活支援を継続実施。この間、自治体では逐次インフラを復旧し仮設住宅の建設等、被災者支援の充実を図っており、これに伴って自衛隊の支援に対する要請も変化した。

行方不明者は依然多く、北部方面隊の派遣部隊は、４月10日から12日の３日間に陸上・海上・航空自衛隊、米軍、海上保安庁、警察及び消防が実施した２度目の集中捜索に参加した。

派遣部隊は、現在担任している地域の捜索活動の進展に伴い、更に地域を気仙沼地区へと拡充して捜索活動を継続した。

行方不明者捜索・生活支援～被災者の気持ちになって～

未曾有の大地震により甚大な被害を被った被災地域も新学期を迎える時期となり、4月19日から学童・学生の登校が始まった。

隊員たちは、朝夕の通学時の学童・学生からの挨拶や元気な笑顔に励まされ、あらためて被災者の方々の気持ちになって、行方不明者捜索や生活支援に邁進していた。

北部方面隊の各派遣部隊では、各地域に区画を設けて、区画ごとに行方不明者捜索を実施するなど、丁寧かつ緻密な捜索を実施するとともに、4月25日及び26日に実施された第3回集中捜索にも全力をもって参加した。

3度目の行方不明者大規模集中捜索を敢行

東北地方のみならず、我が国全体に未曾有の大被害を及ぼした東北地方太平洋沖地震が発災して、早くも2か月が経過した。

この間、北部方面隊の派遣部隊は、4月25日及び26日に3回目の集中捜索が実施され、各部隊も参加した。

＊捜索活動　田老地区（第25普通科連隊）
＊がれき除去　岩手県宮古市（第25普通科連隊・第2施設大隊）
＊入浴施設への給水　岩手県宮古市（第11高射直接支援大隊）」

質問5「地元市町村、警察、消防署、消防団との協力体制と調整の方法」

答　「地元との調整は、初期には消防署と実施した。次の段階で、市役所及び県の振興局と実施した。自衛隊は意思決定を伴う実行組織であり、指揮幕僚活動を通じて大規模な組織を動かすことのできる行動組織である。山本市長から支援の依頼を受けた際には、宮古市の災害対処計画を読ませて頂き、自衛隊が実施できる業務は、先ず自衛隊が引き受けて市役所の担当職員に申し送ることを実施した。市役所の機能が回復すると市の行政が動き出す。市の行政が動くと市は復興していくと信じて、山本市長に仕えました。」

質問6「立場上気をつけたこと、心配だったこと」

答　「災害派遣の原則は、「要請」に基づく活動である。地元からの要請に基づき我々は行動しているという原則を隊員はもとより、市、消防の方々にも理解を頂いた。瓦礫の処理をどこから実施するかというニーズは、市、消防の方々に決めて頂くという原則を理解してもらった。我々はニーズに基づき、最良の部隊運用を決定して部隊を動かすことを部隊長にも言い聞かせた。」

質問7「隊員の心身のケアについて」

答　「機材で瓦礫を掴むと、ガキガキといった音や手応えではなく、グニャッとした感触があった。ご遺体を発見したときの感触である。それを体験した隊員はその夜は眠れない。こうした話を聞いて、その後本格的に心のケアを考えた。メンタルヘルスサポートである。4人～6人一組で、テントの中で話し合いをさせた。自分が特異に思っていることが、誰もが経験していることと思えると安心する。当日起きたことを共有させる。現場で起こったことは現場で解決しなければならない。そうしないと、もう二度と現場には戻れなくなる。徹底して現場での解決と現場への再進出を追求した。成果もあり、第2師団では誰も精神的に駄目になった者は存在しなかった。メンタルヘルス教育は、師団に1名いる心理幹部を中心に教育を実施させて、メンタルヘルスを実施できる核となる隊員を逐次増やしていった。」

質問8「現場で気にかかったこと」

答　「我々は北海道から派遣されていたことから、約3千700名の部隊を支援する物資は全て北海道から直納により岩手駐屯地に運び込まれた。部隊及び隊員が活動するための衣食住の必需品はほぼ潤沢に手に入れることができた。一方で、活動に必要な最小限な物を除いて、それを被災地で使用することは極力避けなければならない。隊員は被災現場でボロボロになるまで活動している。夜は、被災者の目の届かないところで、メンタルヘルスケアーを含めてゆっくりと休ませてあ

げないと長期間に渡る支援は実施できない。現場での活動と後方での休息、現地ではできる限り痩せ我慢をさせて、後方ではできる限り本音を語らせてのんびりさせる。我々も人間であり、限界もあることを理解しないと大きな組織を束ねることはできないと痛感した。」

質問9「東日本大震災の現場で考えたこと」

答　「被災者の方から、「自衛隊さん、ありがとうございます。」と頭を下げられるたびに心が痛んだ。我々は帰る家もあり、待っていてくれる家族も居る。長くても3か月活動すれば、北海道に帰り元の生活に戻れる。被災された方々は、半年、数年、いや一生、元の生活に戻れない方々である。今できることを最大限やりたい。最大限支援をしたい。焦る気持ちと励ましの言葉、本当に我々に声をかけて頂いた方々に対して、心より感謝を申し上げたい気持ちで一杯でありました。」

質問10「将来に向けて」

答　「災害派遣の目的は、人命救助です。現在、中部方面総監部で勤務しておりますが、この地域における喫緊の課題は、「南海トラフ地震対処」であります。東日本大震災の5倍から10倍の被害が予想されていることを踏まえると、今回の東日本大震災において活動した派遣経験を活かして、もし災害が発生したならば、1人でも多くの人命を救える活動をできる組織を育成していかなければならないと、痛切に思い努力を続けてゆきたいと思います。」

「北部方面隊HP」より

「災害派遣部隊態勢移行～断固として貫く使命感　すべては被災者のために～

東日本大震災が発災して以来、自衛隊10万人態勢の中で、北部方面隊は約1万2千人の隊員を派遣して、『被災者のために』を合言葉に、黙々と、かつ愚直に、行方不明捜索、生活支援、さらには原子力災害対処任務に邁進してきたが、5月9日に示された『態勢移行に関する統合任務部隊行動命令』により、逐次、生活支援を主とする態勢に移行した。

引き続き生活支援にあたる隊員たちは、「態勢は移行するが、被災者の笑顔のために全力で支援することに何ら変わりはない。」と、高い使命感を堅持して任務に邁進した。

被災者の方々からも、「自衛隊さんに水やご飯をもらって、ありがたかった。」「自衛隊の風呂に入って生き返った。」「自衛隊さんの姿を見かけるとほっとする。」などの言葉を頂いており、支援に励む隊員たちの支えとなっている。

真心の生活支援を継続実施

東日本大震災に伴い災害派遣中であった各部隊は、5月9日に発令された第1次態勢移行命令及び6月1日に発令された第2次態勢移行命令により、逐次、原所属部隊に復帰した。

6月20日現在、約2千500名の隊員が現地での生活支援を継続実施。各駐屯地等に帰隊した派遣部隊・隊員は、明日にでも起こるかもしれない、次の「その日」に備えるべく、即応態勢を整えた。

＊防疫活動　岩手県宮古市（第11後方支援隊）」

東日本大震災　災害派遣部隊態勢移行

東日本大震災に伴う災害派遣で、最大約1万3千名を派遣していた北部方面隊は、態勢移行命令により惜しまれつつも現地を離れ新たなる態勢に移行した。

第2師団生活支援隊は7月7日に、第11旅団生活支援隊は7月12日に現地における活動を終了し、14日までに両隊ともそれぞれの駐屯地に帰隊した。

＊「ありがとう！」の言葉とともに見送られる派遣部隊　岩手県宮古市（第11旅団生活支援隊）

大規模震災災害派遣終結へ～任務完遂！復興を信じ、被災地を後に～

「平成23年（２０１１年）東北地方太平洋沖地震に対する大規模震災災害派遣の終結及び災害派遣の実施に関する自衛隊行動命令」により、３月11日の震災発災より約１２０日間にわたり続けられてきた、大規模震災災害派遣は終結した。

方面隊は、発災翌日の12日、整斉と小樽港から出発した第26普通科連隊（留萌駐屯地）を第一陣として、最大約１万３千名、延べ約83万人の隊員が現地における災害派遣活動にあたってきたが、石巻市において入浴支援任務にあたっていた第５後方支援隊（帯広駐屯地）基幹の23名が７月29日に、モニタリング等の任務にあたっていた第５旅団司令部付隊化学防護隊（帯広駐屯地）の32名が８月１日に、被災地を後にして北海道に向かったことにより、方面隊としての災害派遣部隊の任務を終了した。

災害派遣の間、「やるべきことをやる。」を全員が肝に銘じ、腰まで汚水に浸かりながらの行方不明者捜索や入浴支援等、体力の限界を超え、疲労しきった体を気力で奮い立たせ、任務に邁進する姿は、まさに災害派遣北方隊員の心得である、「被災者の立場になれ。」「東北方面総監のためにやれ。」「いかなる任務にもにっこり『了解』とのみ言え。」を行動で表していた。

活動実績（累計）

給水	**約６千６００トン**
給食	**約14万７千食**
入浴支援	**約23万４千人**
患者後送	**16人**
患者処置	**約５千人**
避難民等空輸	**約４８０人**
物資空輸	**約16トン**

(3) 自衛隊員の方々の手記

以下では『記録集』に収録された自衛隊員の体験記より宮古市に関連する内容を抄訳して掲載したい。

① 隊災害派遣活動に従事して感じたこと

第９後方支援連隊　戦車直接支援隊　３等陸曹　南館泰斗

「私は、このたびの東日本大震災に伴う災害派遣活動を通じ、主として戦車直接支援隊装輪車整備陸曹として、のべ50日ほど大槌地区において活動した。人員捜索、民生支援、物資輸送・整備支援など、多様な活動に従事し被災地の復興に協力できた。

私は岩手県宮古市が出生地であり、震災当初は連絡もとれず安否も不明である中、派遣活動に従事した。

今回の震災において、自衛隊の活動は各地域に多大な貢献をしたと感じている。それは、被害者一人一人に対して些細な事項にも対応し、それぞれの地域の人々のことを思い、故郷のためを思い復興に尽力したからであると思う。しかし、それらは自衛官の使命であり、当然のことであると私は思っている。

今回の活動により全国の方々や被災地域の方々が作成してくれた手紙や横断幕などの激励や感謝の気持ちは大変うれしく、励みにもなり、ときには目頭の熱くなるものであった。私は自衛官であることを誇りに思い、今後の自衛隊生活を邁進してゆく所存である。」

② 災害派遣を体験して

第３８７施設中隊　３等陸曹　今野雄也

「地震発生から16時間後、我が隊３８７施設中隊は、重機材等を積載し田老町へと災害派遣のため出発しました。田老町へ近づくにつれ、津波等による想像以上の被害状況に思わず目を覆いたくなりました。そのような状況下で、私たちに与えられた任務はライフラインの復旧作業でした。我々は油圧ショベルやドーザ等の重機材を使用し、道路上のがれきや倒壊家屋の除去により道路啓開作業を行いました。

作業中、現場からは御遺体などが発見され、がれきの下などには、

写真２　2014 年 3 月 11 日　田老防潮堤にて慰霊の祈りを捧げる自衛隊員

まだ生存者がいるのではないか、重機材で踏みつぶしたりしないかなどの不安が正直ありました。2次災害の防止及び被災者のことを第一に考えて作業を実施し、1件の事故もなく無事に終えることができました。

約3か月間、災害派遣に参加して現地の方々の生きていくための力強さ、精神力の強さを強く感じました。日本人の「絆」は世界一だと思いました。これからも地域復興のために皆で力を合わせて頑張っていきましょう。」

おわりに

こうした自衛隊の活動に対して、宮古市長の山本正徳氏は「不屈の使命感、不断の努力に敬意を表す」として以下のような感謝の言葉を述べている。

「特に発災から毎朝5時30分と午後6時30分からの1日2回の援助・救援対策会議を経て、昼夜を問わず極限の世界に飛び出す隊員の方々には、頭が下がる思いでした。

過酷な状況下での勇敢な活動とこれまでの御労苦に改めて感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。」（以上は『記録集』より抄訳）

震災当時の宮古消防署長だった小林一彦さんは「忘れられないこととして、自衛隊の幕僚長と毎晩夢物語を語り合ったことだ。困難を乗り越えることなどを語り合い、癒やされたのかもしれない」と語っておられた。

【引用文献】
平成23年版『日本の防衛　防衛白書』（防衛省・自衛隊）
『ありがとう　自衛隊　勇士たち　陸上自衛隊岩手駐屯地　東日本大震災「災害派遣」記録集（保存版）』盛岡タイムス　２０１１年

【引用ＨＰ】
「自衛隊北部方面隊ＨＰ　東日本大震災　災害派遣活動状況　北部方面隊―すべては被災者のために―」

5　海上保安庁

假屋雄一郎

はじめに

国土交通省の外局である海上保安庁は、日本の海域を11の管区に分け、東北地方の太平洋沿岸は宮城県塩釜の第二管区海上保安本部が管轄している。その下に釜石海上保安部が設置され、北は野田湾から南は広田湾に至る岩手県沖合を担任している。このうち、山田湾北部以北の距離約10海里までの海域が、宮古海上保安署の警備関係指定水域である。東日本大震災当時は、藤原埠頭の宮古港湾合同庁舎に宮古海上保安署が入っていた。釜石海上保安部の業務は、海上の治安維持、海難救助、海上交通安全の確保、海洋環境の保全、海上災害対策、航路標識の保守管理など多岐にわたっている（釜石海上保安部ホームページ）。

地震発生直後は、日本列島沿岸のほぼ全域に津波警報や津波注意報が発表されたため、全管区で巡視船艇352隻、航空機46機を発動して警戒にあたった。また、全国から大型巡視船を含む巡視船艇54隻と航空機19機を東北地方太平洋側に集結させ、捜索救助や急患輸送、火災消火、行方不明者の捜索などに従事した（海上保安庁　2012年）。

宮古港では、地震発生から9分後に宮古海上保安署の巡視艇「はつかぜ」が緊急出港し、宮古湾内の漁船に避難指示および誘導し、津波後も行方不明者の捜索に従事した。宮古海上保安署のある宮古港湾合同庁舎は2階まで浸水し、職員は屋上に避難した。その後、ライフラインも復旧せず基地機能不全に落ち入りながらも庁舎に泊まり込んで業務を続けた。

(1)　宮古湾における海上保安庁の主な対応

3月11日　みやこ海上保安署の巡視船「はつかぜ」が緊急出港し、宮古湾内の船舶に避難指示・誘導し、3日間洋上で行方不明者の捜索などに従事。

3月14日　巡視船の現場派遣にあわせ、神奈川県から岩手県へ食料等の救援物資（780キロ）を搬送。釜石、宮古へ救援物資（毛布100枚等）を搬送。

3月15日　宮古、釜石、仙台塩釜港（仙台区）において、測量船3隻による港内の水路測量等を実施。

3月16日　八戸、宮古、仙台塩釜港（仙台区）において、測量船4隻による港内水路測量等を実施。

3月17日　宮古港一部供用開始。

4月4日　八戸漁港、蛸の浜漁港、気仙沼漁港、石巻漁港において、漁網等航路障害物の調査及び関係機関に情報提供を実施。

4月15～16日　宮古港において測量船「昭洋」により障害物調査を実施。

4月18日　宮古海上保安署を鍬ヶ崎の盛岡気象台特別地域気象観測所（旧宮古測候所）内へ仮庁舎として移転。

6月17～21日　宮古湾において海上保安庁航空機による海底地形測量を実施（国土交通省河川局との連携）。

9月5日～17日　宮古港において測量船「天洋」による港内水路測量を実施。

11月9～11日　釜石市・宮古市沿岸部において、岩手県警察と連携し行方不明者の合同一斉捜索を実施。

（海上保安庁ホームページ、東日本大震災への対応、広報文2011より作成）

(2)　宮古海上保安署職員の方々の手記

津波襲来時の宮古港（藤原埠頭）の状況及び宮古湾内での船舶の避難誘導などについて、財団法人海上保安協会編著『東日本大震災そのとき海上保安官は』（2012年　誠山堂書店）に掲載された職員の手記によって見てみたい。なお、当方で補足を加えるなど修正を施しており、文責は筆者にある。

①　心の準備はできていた

海上保安署巡視艇「はつかぜ」船長　鈴木伴典

大震災発生時、私は官用車を路肩に止めたものの尋常ではない揺れ方から「すぐに津波が来る」と確信、宮古保安署に向かった。3階の保安署まで駆け上がって「船を出す」と告げ、船に向かった。

船は、神山章敏機関長が、エンジンをかけ出港準備を整えていた。周辺の海面にはすでに緩やかな渦が生じていたものの、出港は可能と判断した。出港時の乗組員は、神山機関長とS航海士補、それと私とともに外回りに出ていたO機関士補だった。

緊急出港から3日間、通信手段も燃料、糧食なども乏しい中、本船は洋上で過ごすことになった。途中、他管区から救援に駆けつけた巡視船から水、おにぎりを分けてもらった。私はボロボロと涙を流した。この時、救助される側の気持ちがわかった。

船を出すか出さないかについては、さまざまな意見があるが、今回は最終的に私の判断で船を出し結果としてことなきを得た。しかし次も同じ行動をとり、うまくいくとは思っていない。ただ、津波が予想される場合、船の乗組員は本能的に船に集まろうとするので、「命てんでんこ」を教訓としている。

私は、約50年前のチリ地震津波の年代に生まれ、一昨年のチリ地震津波では、塩釜港口で悪戦苦闘の末、遊漁船などの救助作業を行っている。あれから、また津波と戦う日がくるとは思ってもいなかった。ただ、震災2日前の地震から動物的勘が働き、機関長には毎朝、船の暖機運転を指示するなど、心の準備はできていたようにも思う。

あの日から時はたっても、いろいろ考えさせられ、人間の無力さ、無能力さを痛感している。今は、次々送り込まれる若者たちに囲まれ、心にムチを入れ何とか立っている。

②　早く逃げろ、死にたいのか！

宮古保安署巡視艇「はつかぜ」機関長　神山章敏

大震災発生時には、宮古保安署で事務処理中だった。S航海士補と船に急ぎ、エンジンをスタンバイし、定係地の海面状況を監視していたところ、かなりのスピードで潮が引いていく。

「これは間違いなく津波が来る」と思った。

間もなく鈴木伴典船長とO機関士補が帰船し、急いで出港した。潮が引いて行くスピードはさらに増しており、あと少し遅ければ確実に着底して出港できない状況だった。

鈴木船長は、津波避難のためまっすぐ沖合に向かうことなく、閉伊川河口に着岸して、出港をためらっている漁船にマイクで避難を指示し、その後、サイレンを鳴らしつつ岩手県・宮古港に全速力で向かった。そこには大きな起重機台船がおり、多数の作業員が津波に備えて船固めしているところだった。船長のマイクを使っての避難指示は通常の広報の仕方ではなく、「大津波が来るぞ、早く逃げろ」というものであり、自分も船首甲板上に出てハンドマイクで「バカヤローッ早く逃げろ、死にたいのか！」

と2人で大声で怒鳴った。本船が全速で接近し大声で怒鳴り付けたことから、作業員も「これはいつもと違う、ただごとではない大事だ」と察知したのか、即座に警戒船や作業船に分乗して沖合に向けて全速力で避難した。

その後、本船も沖合に向け全速で航行を開始。鈴木船長の「もう出港してくる船はいないか」との指示で確認したところ、高浜方面から出港してくる4㌧～5㌧の漁船が1隻いた。私が「船長、高浜方面から漁船が1隻出てきている。戻ってください」と話すと、船長は躊躇することなく直ちに漁船へ向け本船を反転させた。

この時、船長は保安官としての純粋な気持ちだったのかもしれなかったが、自分が「戻ってください」と言ったのは正義感というより、正直なところ、宮古の漁民は必ず本船の行動を見ている――「取り締まりの時は偉そうにしているくせに、いざとなれば漁船を置き去りにして自分だけ逃げた」と、後で言われかねず、それは海上保安官として最大の屈辱であり、死んでもいやだという気持ちから全力を尽くそうと思ったからだ。

宮古港藤原防波堤灯台付近を航行中、津波の第1波が襲来し藤原埠頭入口は大きな渦が巻いていた。この渦を見たとき、「漁船も本船もこの渦に巻き込まれたら出られない」と思い、流されて渦に入らないことを祈りつつ、漁船と併走しながら沖合に向かった。

その後、第2波が襲来したためか藤原防波堤灯台が見る見るうちに水没、灯台に電力を供給する電線を乗り越えた津波がさながら花火のナイアガラのように流れ落ちた。その後、海面がさらに盛り上がったせいか視野にあった藤原埠頭の県営上屋(貨物を短期間留め置く倉庫)、保安署の建物が視界から消えてしまっていた。

幸い、本船と一緒に沖合に避難した漁船はすべて無事で、乗組員一同ほっとした。震災後の話になるが、本船に来て、

「あの時、『はつかぜ』さんに怒られたけど、お陰さんで船は助かった。ありがとう」

と言う人や、行方不明者捜索から帰港の際、宮古港出崎埠頭で本船に向かって手をふりつつ、何回もお辞儀する人がいた。

以前、釜石沖を航行中のフェリー内で産気づいた妊婦を深夜に緊急出港して搬送したことがあり、人命救助がいかに感謝され、すばらしい仕事であるのか、再認識させられた。

一方で、今回の震災が自分にもたらした惨事ストレスの影響が大きいことがらもある。官舎に帰り、1人で震災報道をテレビで見ていて、その地域の壊滅的な場面が映し出されるたびに、以前その場所で検挙した漁民が初動捜査を終え、帰ろうとする官用車のドアにしがみつき「今回だけどうか見逃してください」と頼む姿や、罰金が来る可能性が高いことを告げると「来月以降でなければ年金ももらえないので払えないな」などと漏らした漁民たちの顔が浮かんでくる。

誤ったことはしていないと頭では十分理解しているつもりだが、身体がついていかない。こんな大惨事になるなら、なぜあの時、一言「許してやる」と言えなかったのかと悔やみつつ、あの人たちが何とか無事でいてくれと願う毎日である。

宮古市内の家屋にペンキで「解体OK」と書かれた場所に、「海のバカ野郎、海なんか嫌いだ」と同じくペンキで書いた住人の気持ちは痛いほどわかる。

自分の古里は釜石市だが、幼い時から慣れ親しんだ町並みを、ほんの一瞬でズタズタにした海が本当に憎くて仕方ない。しかし同時に海が自分の職場であり、その恩恵を受けていることも事実である。

③　津波の襲来を予感

宮古保安署

国内観測史上最大の巨大地震の横揺れが30秒以上続いたことから津波の襲来を予感。巡視艇「はつかぜ」は、地震から9分後には緊急出港し、陸上職員は庁舎（藤原埠頭の宮古港湾合同庁舎）3階の事務所で情報収集を開始した。海面を確認するが顕著な引き波は認められず、除々に海面が上昇して岸壁上が海水に浸った程度と思ったところ、対岸の建物が急に白波に飲み込まれ、直後に真っ黒な波の塊が事務所前面の防波堤を乗り越えて庁舎を襲来した。

大量の海水が一気に庁舎2階まで浸入し、行き場のなくなった空気が甲高い声を上げながら庁舎全体に鳴り響く。屋上へ避難して周囲を見渡したところ、津波が防潮堤を越えて市街地に達しており、一面が海と化していた。悲惨な状況を目の当たりにしたが、現実離れした光景のせいか恐怖心や絶望感といった感情は沸かず、津波の状況を確認しながら落ち着いて事務所内などの必需品を確保した。

海底が露出するほどの強い引き波と、岸壁上を超える強い押し波が一晩中繰り返し発生し、濁流の轟音が鳴り響き、風雪・氷点下・真っ暗闇の夜が明けると庁舎屋上から見た周囲の様子は一変していた。

防潮堤を越えた津波から猛ダッシュで逃げ延びた職員も含め、ライフラインが断たれた事務所で1か月以上寝泊まりして業務を行っていた。

また津波は引き波があり、白波を立てて襲来する感覚だったが、宮古を襲った津波は押し波から始まり、うねりのような波の塊により急激に水位が上昇するもので、「想定外」の津波だったといえる。

その後、幼い子どもを連れながら行方不明になった家族を探している女性の姿が見られた。女性は毎日漁港を訪れていた。遺族の気持ちが落ち着くことは簡単なことではないが、海に流された行方不明者を1人でも多く発見して遺族の元へ帰すこと、または、遺族が納得するような捜索を行うことが求められていることを改めて感じた。

【参考文献】

「平成23年（２０１１年）東北太平洋沖地震への対応等について」海上保安庁（海上保安庁ホームページより）

「東日本大震災への対応の記録」２０１２年1月　海上保安庁（海上保安庁ホームページより）

㈶海上保安協会編著「東日本大震災そのとき海上保安官は」２０１２年3月　誠山堂書店

海上保安庁「海上保安レポート２０１２」２０１２年5月　日経印刷株式会社

第2部　各分野での震災後の取り組み
第7章　災害廃棄物の処理

阿南　透

はじめに

東日本大震災では、大量の瓦礫等の災害廃棄物が発生した。

今回発生した災害廃棄物の量は、宮古市だけで57万4千900トンとされる（処理計画における推計値。『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』11頁）。これは1年間に排出される家庭ごみの30年分に相当するという。これだけの廃棄物を、平成26年3月までの短期間でどのように処理したか、本章はこの未曾有の出来事を記録する。

一般廃棄物の処理

通常のごみ収集を担当するのは宮古市環境課である。しかし震災後に、環境課が担当した仕事は、

(1) 清掃及び防疫に関すること
(2) し尿及び一般廃棄物に関すること
(3) 行方不明者の捜索、遺体収容等に係る関係機関との連絡及び遺体の処理に関すること
(4) 衛生施設等の被害調査に関すること

この4点であった（宮古市地域防災計画）。なかでも遺体収容に関する業務と、津波震災地域の消毒（消石灰の散布）が急を要したため、一般廃棄物の収集は一時中断した。民間委託している可燃ごみの収集が再開したのは3月21日からで（週1回）、直営で収集する資源物は4月30日まで中止になった。このためペットボトルや空き缶が家庭にたまってしまったという。

瓦礫の撤去

瓦礫の撤去や道路の復旧に関わったのは主として建設業者である。作業は震災当日から部分的に始まっていたが、それが組織化され、大きな動きになり、復旧に至るまでの過程は、岩手県建設業協会『復興への道―東日本大震災からの復旧記録』（岩手県建設業協会　2012年）の宮古支部の項にまとめられている。

同書によると、震災翌日の12日には、対応を県・宮古土木センターと打合せて、建設業協会宮古支部災害対策本部を、宮古市宮町にある大坂建設に設置した（岩手県建設業協会：28頁）。市役所も、携帯電話で建設業者と個別に連絡を取り、対応できる建設業者を確認した。13日には自衛隊の後方支援として、田老、鍬ヶ崎、金浜、赤前地区での道路復旧と瓦礫撤去作業が始まった。

14日には、宮古市都市整備部長から建設業協会宮古支部に、自衛隊後方支援並びに河川以外の瓦礫撤去要請があった。そして16日、行政機関と市内業界団体による「宮古地区災害復旧対策連絡協議会」が設置され、本部となった大坂建設で最初の対策会議が開催された。会議に参集したのは、建設業協会宮古支部、宮古建設協会、宮古電業協会、宮古市水道工事業協同組合、管工業協会宮古支部、宮古市指定下水道工事店、宮古建築組合、岩手県沿岸広域振興局、宮古市役所、宮古商工会議所の代表であり（岩手県建設業協会：28頁）、行政と業界の総力を挙げた取り組みとなった。協議会立ち上げに当たり、会長に就任した大坂文人氏は次のようなスピーチで皆を奮い立たせたという。

「ここにお集まりの方々は各団体の幹部の方々で在り、この宮古で生まれ宮古で死ぬ方々だと思う。お互い今、業者の社長・各会社が存続できているということは自分の努力は勿論だが、今回被災した宮古市民の方々に何等かのかたちでお世話になり、生かされて来たから、こうして生きているし、建設業を張っていられる。今回の大災害では我々も被災者だ。機械も人までやられて苦しい。だが、今まで何らかのかたちで我々に力を与えてくれた方々が、家も家族も全てを無くして、プライバシーもなくストーブも電気も食い物すら、思うようにできず避難所でもがき苦しんでいる。我々が頑張っても避難所生活はまだまだ続く。1日も早く瓦礫を除去し仮設住宅に入ってもらうよう最善を尽くそう。今、地元業者の我々が行動を起こせば、復旧工事も復興に

向けての動きも早くなります。1日も早い復旧・復興に向け地元の我々が動かないで、誰が動くんですか。この考え方に乗れない方は今この場所から立ち去って下さい!ここに参加してくれた皆は他人でなく、身内・兄弟と同じでしょう。困っている人の為に1日も休む事なく働き続けます。良いですね!」

こうして情報共有と翌日の作業分担を決める会議が毎日午後4時から開催され、瓦礫撤去だけでなく、電気、水道、ライフラインの処理などの作業が組織的に始まった。毎日の打合せで作業の効率化を図ったこともあり、宮古は非常に早く瓦礫の撤去が進んだという。

瓦礫については、市から3月17日に、田老~津軽石間について、業者の班を編成して撤去する方針が示された。最初は自衛隊の遺体捜索を優先し、派遣要請に応じて業者を派遣した。捜索が済むと、道路の通行を確保する道路啓開（開設）に取りかかった。14日には国道が開通、16日には県道重茂半島線が開通するなど、幹線道路は1週間ほどで通れるようになった。23日には公道上の車両撤去が完了した。しかし、道路の瓦礫を撤去して奇麗にしても、すぐに奇麗になった場所にごみを出す人がいるため、完全な撤去には時間がかかったともいう。

4月7日には、公道の瓦礫撤去にほぼ目安がついた。4月27日には、自衛隊の捜索終了に伴い、瓦礫搬出地区割り編成会議を行い、5月11日から民有地の本格的な撤去作業を開始した（岩手県建設業協会：29頁）。電化製品は搬出せず、瓦礫と車輌のみ搬出することを申し合わせた。瓦礫の仮置き場はまず藤原埠頭、満杯になれば赤前の運動公園とした。

7月31日の時点で瓦礫搬出率93％、家屋解体50％の進捗。8月22日時点で瓦礫搬出率97％、家屋解体60％の進捗。9月1日時点で瓦礫搬出率99％、家屋解体60％であった。そして12月8日に、宮古地区災害復旧対策連絡委員会が解散した（岩手県建設業協会：29頁）。

撤去にあたっては、建設業者以外の協力もあった。材木の撤去にはグラップルという、つかむことのできる機械が有効であり、機械を持っている林業業者の協力があった。車両の撤去にはＪＡＦの業者の協力があった。船舶の撤去には油を抜く必要があり、専門業者の協力があった。また、旧川井村との合併で宮古市の所有になった除雪用ローダーで作業したことも効果的であったという。

仮置き場の設置

瓦礫処理の過程で、まずは仮置き場が必要となった。宮古市では、出崎埠頭、藤原埠頭、宮古運動公園に大規模な仮置き場が設けられた。このほか田老野球場、摂待、長内川運動公園にも設置された。

出崎埠頭では、被災直後に、まず鍬ヶ崎地区の道路確保のため、道路上の倒壊家屋などを県有地に搬入した。その後、5月上旬まで、自衛隊の遺体捜索のため撤去した瓦礫や解体した家屋が搬入された。しかし4月11日の魚市場再開により、市場周辺に瓦礫置き場があるのは好ましくないことから、6月から7月にかけて、瓦礫約1万8千立方㍍を県が岩泉町小本地区に搬出した。

藤原埠頭の県有地には市中心部の瓦礫が搬入された。ここはのちに、災害廃棄物処理を行う場となった。藤原埠頭だけでは仮置き場が不足することから、3月末から、赤前にある宮古市営の宮古運動公園にも瓦礫を搬入した。

災害廃棄物の処理

こうして集められた瓦礫は、災害廃棄物として処理した。岩手県におけるその過程は、『東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録』（岩手県　２０１５年）にまとめられている。

災害廃棄物は、岩手県が市町村からの事務の委託を受けて処理することになった。平成23年6月に「岩手県災害廃棄物処理実行計画」を策定、8月には「岩手県災害廃棄物処理詳細計画」を策定し、処理の方針が定まった。宮古市の推計量は表1のとおりであった。基本方針として、災害廃棄物を2段階に分けて選別した。被災家屋などをひとまず集めた上記の仮置き場を「一次仮置場」とし、ここでおおまかな選別を行った。そして廃棄物を破砕・選別する施設を「二次仮置場」

表１　災害廃棄物の推計量（一時仮置場搬入時）

柱材・角材	可燃系混合物	不燃系混合物	コンクリートがら	金属くず	畳	その他	合　計
99,500	186,600	155,400	41,500	87,300	1,600	3,000	574,900
17.3%	32.6%	27.0%	7.2%	15.2%	0.3%	0.4%	100.0%

＊『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』p.29　単位：ﾄﾝ

に設け、ここで処理して、一般廃棄物の焼却施設や最終処分場といった処分先に搬出することにした。

一次仮置場では重機と手作業により、「柱材・角材」「可燃系混合物」「不燃系混合物」「コンクリートがら」「津波堆積物」「金属くず」「畳」「その他（漁具等）」に分別した。また、津波により付着した土砂を機械（トロンメル）によりふるい分けた。

二次仮置場は藤原埠頭と宮古運動公園に設けられた。ここは一次仮置場を兼ねていたが、平成23年12月から26年6月までの工期で、業者に委託して処理プラントが設置された。宮古市だけでなく、岩泉町、田野畑村を含む「宮古地区」の一次仮置場から搬入された廃棄物を破砕・選別の処理をした。具体的には次のような処理であった。

- 柱材・角材は、大型金属類（ボルト、カスガイ等）を取り除き、洗浄して固着土を除去した。
- 可燃系混合物、不燃系混合物は、破砕機で処理に適した大きさにし、ふるい、風力選別、磁気選別、手選別によって、「可燃物」「不燃系廃棄物」「ふるい下くず、その他」に選別した。
- コンクリートがらは、小割し、鉄筋を切断した後、破砕して再生砕石相当品に仕上げた。
- 津波堆積土は、ふるい分け、復興資材として利用可能な状態にした。
- 金属くずはリサイクル業者へ売却した。
- その他のうち、漁具・漁網は、切断して特注のフレコンバッグに詰めて搬出した。発泡スチロールは比重が軽くかさばるため、専用の減容機を設置して搬出した。

このように、藤原埠頭と宮古運動公園に設けられた処理プラントは、宮古市、岩泉町、田野畑村の宮古地区の災害廃棄物88万1千032ﾄﾝを処理した。搬出先と処理方法は表2のとおりである。

- 燃料化は、柱材・角材などを加工してパーティクルボード原料、バイオマスボイラー燃料などに加工した。
- 建築資材化は、まず復興公共工事の資材として、分別した津波堆積土、コンクリートがらの再生砕石などを使った。このほか田野畑リサイクルでコンクリートがら、梨子建設で自然石、ＮＩＰＰＯ宮古でアスファルトを再生砕石に処理した。
- セメント資源化は、可燃物などをセメントの原料や燃料とするものである。太平洋セメント大船渡工場、三菱マテリアル岩手工場（一関市）で処理を行った。
- リサイクルは、金属くずと廃家電についてはフジメタルリサイクル（北上市）、産業振興（釜石市）が処理した。消火器をヤマトプロテック（大阪府）、廃タイヤを東部環境（宮城県）、廃材等を宮古地区広域行政組合最終処分場で処理した。
- サーマルリサイクルとは、焼却により発電・売電をしている施設での処理である。盛岡市のほか、群馬県、大阪府、東京都で処理を行った。
- 焼却は可燃物の焼却である。表の6か所で焼却を行った。このうち宮古地区内仮設焼却炉は、小山田地区の宮古地区広域行政組合敷地内に設置され、平成24年3月から26年3月まで焼却処理を行った。
- 埋立処分は、安定型、管理型ともに、不燃物を埋め立て処理した。なお、漁網については、焼却する場合には編み込まれている鉛を除去する必要があるため処理が進まず、山形県米沢市と石川県金沢市の民間業者に処理を委託した。

こうした処理の過程で、岩手県内だけでは処理しきれない災害廃棄

表２　宮古地区　災害廃棄物の処理先

処理項目	処理先	数量(トン)	小計(トン)	割合
燃料化	北星(株)	9,926	9,926	1.1%
建設資材化	復興公共工事	504,064	525,525	59.6%
	田野畑リサイクル	18,041		
	梨子建設(株)	986		
	NIPPO宮古	2,434		
セメント資源化	太平洋セメント(株) 大船渡工場	130,676	144,653	16.4%
	三菱マテリアル(株) 岩手工場	13,977		
リサイクル	フジメタルリサイクル(株)・産業振興(株)	15,067	16,127	1.8%
	大阪府　ヤマトプロテック(株)	5		
	宮城県　(株)東部環境	1,048		
	宮古地区広域行政組合最終処分場	7		
サーマルリサイクル	盛岡市クリーンセンター	3,651	40,393	4.6%
	群馬県　桐生市清掃センター	5,134		
	群馬県　前橋市六供清掃工場	1,785		
	大阪府　大阪市舞州工場	15,527		
	東京都	14,296		
焼却	いわて第２クリーンセンター	4,281	54,042	6.1%
	雫石・滝沢環境組合清掃センター	2,221		
	宮古市清掃センター	3,577		
	宮古地区内仮設焼却炉	39,200		
	いわてクリーンセンター	1,324		
	秋田県　大仙美郷クリーンセンター	2,678		
	群馬県　吾妻東部衛生センター	754		
	石川県　輪島クリーンセンター	7		
安定型埋立処分	(有)クリーンもりおか	501	35,666	4.0%
	樋下建設(株)	30,843		
	(株)岩手環境保全	4,322		
管理型埋立処分	葛巻町最終処分場	98	54,699	6.2%
	盛岡市リサイクルセンター	2,405		
	宮古地区広域行政組合最終処分場	45,755		
	山形県　(株)エコス米沢	3,016		
	石川県　金沢市戸室新保埋立場	1,949		
	神奈川県　エコマックス(株)	1,476		
	合　計		881,031	100.0%

＊鹿島建設他『宮古地区災害廃棄物破砕・選別等業務委託実績報告書』1-7

物を広域処理することとなった。東京都が平成23年6月に受け入れを表明したことから、宮古市の可燃物を搬出した。放射性物質に対する懸念から、受け入れ側の地域住民の理解を得るために時間を要したが、測定の結果問題のないレベルであることを広報し、11月に搬出を開始した。最終的には岩手県から1都1府13県、39自治体の協力を得ることができた。宮古市から発生した災害廃棄物については、6万7千465トンを広域処理した（『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』131頁）。

家電製品については、市が処理を担当した。災害による廃家電の量は、ブラウン管テレビ1万3千台、液晶プラズマテレビ3千台、冷蔵庫7千700台、冷凍庫300台、洗濯機4千900台、衣類乾燥機100台、エアコン500台、合計2万9千500台であった。これらは市が分別回収・保管し、異物等を除去した上で、家電リサイクル法が定める指定取引業者に引き渡した。

被災自動車については、市が2千860台を処理した。これについては、自動車は個人の財産ではあるが、所有者に連絡が取れない、または車台番号が判別不能の場合、一定期間を経過したものは処理する方針が県により示された。

このようにして、平成26年3月にひとまず災害廃棄物の処理は終了した。

水産廃棄物の処理

漁港の冷蔵庫が被災したため、中に入っていた魚が腐った。この水産廃棄物4千158トンの処理は、海洋投棄が認められなかったため、保健所と話し合って、「一時保管」の名目で、3月30日に樫内地区の市有地に埋めた。現在も年に1回水質調査をしているが、問題は起きていない。

【参考文献】

岩手県『岩手県災害廃棄物処理詳細計画』岩手県、2011年
岩手県『東日本大震災津波により発生した災害廃棄物の岩手県における処理の記録』岩手県、2015年
岩手県建設業協会『復興への道―東日本大震災からの復旧記録』岩手県建設業協会、2012年
鹿島建設㈱・三井住友建設㈱・㈱鴻池組・西武建設㈱・三好建設㈱・斎藤工業㈱特定業務共同企業体『宮古地区災害廃棄物破砕・選別等業務委託実績報告書』2014年

第2部　各分野での震災後の取り組み
第8章　ボランティア活動とその課題

久保田滋子

はじめに

大きな災害が起きると、今では多くのボランティアが駆けつけるという光景が当たり前になったが、一般の人々が延べ１００万人以上も災害現場に駆けつけて被災者を助けるようになったのは、平成７（１９９５）年に起きた阪神・淡路大震災が最初であり、東日本大震災は、大規模災害としては２度目の経験となった。被災地では、遠方からやってくるボランティアの受け入れ経験がないことに加え、津波による災害が激甚であったため、ほとんどの市町村では行政もすぐには機能せず、ボランティアへの対応もまちまちだった。宮古市では社会福祉協議会が津波の被害を受けなかったために、被災後すぐにボランティアセンターを立ち上げ、早くから初動体制を整えることができた。しかし市民の日常生活もままならない被害の大きな現場に、いつから誰をどのように受け入れるのかという問題は、走りながら考えるという状況であった。この章では、ボランティアを受け入れた社会福祉協議会がどのようにこの状況に取り組み、ボランティアに入った側がどのような経験をしたのか、長期支援に取り組んだカリタスを例に取り、主にインタビューの記録を通して明らかにしていく。

1　社会福祉協議会の取り組み

(1)　ボランティアセンターの立ち上げ

宮古市の防災計画では、市からの要請を受けて災害ボランティアセンターを立ち上げることになっているが、宮古市役所が被災により２日間連絡が取れなかったため、社会福祉協議会では事務局長と次長、地域福祉課の職員が話し合い、市からの要請を待つことなく3月13日に独自に災害ボランティアセンターを開設し、市へは後日報告を行った。その後、3月21日からは北海道社協、3月24日からは静岡県社協の支援を受け、また㈱プロミスや㈱ＧＳＫ（グラクソ・スミス・クライン）、陸中宮古青年会議所などの協力もあって徐々に体制を整え、３月中には本格的に活動を開始した。市内で立ち上げられたボランティア組織である宮古災害復興支援活動チームＭ．Ａ．Ｄ（Miyako Action Debelopment）も協働した。組織は、会計と物資受け入れを担当する総務班、ボランティア活動班、地域ニーズ調査班、マッチング班、仮設住宅・避難所支援班、イベント企画班、生活資金相談班に分かれ、ボランティア活動班はさらに、受付係、炊き出し等イベント班、オリエンテーション係、資材準備運搬・送り出し係、宿泊所運営班に分かれて活動した。センターを立ち上げたその日に、市内からボランティア希望第1号の申し出があり、その後市内在住の大学生、高校生を中心に日を追って登録者が増え、３月末日で延べ４０９人が登録し、稼働人数は延べ７３１人に達した（「災害ボランティア登録・稼働人数等」：宮古市社会福祉協議会作成資料）。団体の第一号は、3月15日に登録した新潟県の企業で、避難所への風呂提供の申し出があった（宮古市社会福祉協議会作成資料）。これは自衛隊の風呂設置より早かった。現場への人員の派遣は3月16日からで、この日は食料配達に1人、訪問入浴に1人が出向いた。新潟中越地震のときに、宮古市社協へ訪問入浴車と職員派遣の要請があり、その経験を生かして3月18日からは入浴車で避難所を回り、高齢者への足湯や新生児の沐浴を行った。当初はまだボランティアも少なかったので、社協職員も課を超えて協力し合い、できることは何でも行おうという意気込みで臨んだ。子育て支援係は子供のいる世帯へ声をかけて回り、地域福祉課は避難所と学校を回り調整を図った。

震災後すぐに県外から市役所へ炊き出しをしたい等の申し出もあって、個人的に避難所に行ったケースもあったようだ。しかし、ボランティアは被災者のニーズに合わせて行うべきで、個人が勝手に動くと収集がつかなくなる。ボランティアの受け入れで最も重要なことは、被災者が何を求めているのかというニーズを把握して、ボランティア希望者とのマッチングを図ることである。担当者が避難所や仮設住宅へ電

話をかけたり訪ねたりして、ボランティア登録者の希望を伝え、困っていることや必要なものの情報を集めて回ったが、社協職員によれば、最初のころは「本当にお願いしてもいいのか」という反応だったという。ボランティアという支援のあり方に不慣れであったことに加え、外部の人が入ってくることへの不安感や違和感もあったと思われる。個人、特に市外から来る人は被災地の土地勘もなく、被災状況も把握できないため、勝手に歩くことはその人にとっても危険がある上に、被災者にも不安感を抱かせることもある。そこでボランティアセンターでは、3月中は混乱を避けるため、県外の団体や個人の申し出を受けず、県内の団体と市内の学生のみを受け入れた。活動の中心になったのは連合岩手で、連合ではその後も引き続き9月10日まで全国から1週間ずつ交代でやってきて、がれきの撤去や泥出しを行った。4月中旬から県外の団体も登録をするようになり、関西の大学や東京の企業、役所の有志によるグループが物資仕分けなどに参加するようになった（「炊き出しイベント等ボランティア台帳」：宮古市社会福祉協議会作成資料）。4月16日からは県外の団体も正式に受け入れるようになり、カリタス札幌など独立性の高いＮＰＯが長期の活動を開始した。カリタスは多くのボランティアが引き上げたあとも宮古に残り、仮設住宅から公営住宅への移転が完了するまで傾聴活動を続けた。ＹＭＣＡは独自にボランティアセンターを立ち上げ、社協と協力しながら仮設住宅引き上げまで長期にわたって活動した。ゴールデンウィークに入る4月末には県外個人のボランティア登録も開始したが、条件としてテントや車中泊を禁止した。宿泊に関しては6月から小山田の地区センターを借りて、1日20人くらいの受け入れができるようになった。ここは敷地内禁煙にしたがタバコを吸う人も多く道路で吸って苦情がきたこともあった。仕事のあとの一服のための場所までは考えられていなかった。

ボランティアに割り振られた仕事は、3月と4月には物資仕分けと配給、災害ボランティアセンター運営の手伝い、避難所運営の手伝い、被災家屋の泥出し、がれき撤去が中心だった。物資は最初水道事業所に集められたが、手狭であったため市が新里のトレーニングセンターに場所を移した。ボランティアは、送られてくる支援物資をここで開封して用途別に仕分けして各避難所に配送した。役に立った支援物資は子供用・介護用おむつ、飲料水、ミルクで、衣類や下着は使用済みのものが多くて大変困った。ボランティアセンターの運営では、スコップなどの資材調達やボランティア希望者の受付業務、オリエンテーションなどを行った。スコップは品薄だったので買わなくてはならず、秋田からも取り寄せた。個人ボランティアの中には理容や美容などの特技を生かしたり、音楽の演奏などを希望する人もいるが、10人いれば10通りのマッチングをしなければならず大変だった。理容、美容、マッサージは一番望まれるものであったが、最初の数か月は被災者がボランティアに頼むことを遠慮したため、なかなかニーズとしてセンターに届かなかった。炊き出しのニーズはあったが、なるべく規模の大きいところに行きたいというボランティアが多かったので、小さなところへ行くようにセンターでマッチングを行った。また訪問入浴車の巡回も行った。

ゴールデンウィーク以降は、被災家屋や個人商店での家財道具出し、側溝の泥出しに加え、仮設住宅への引っ越し作業やイベントが数を増した。市内では5月くらいからさまざまな復興イベントが催されるようになり、また社協もボランティア団体と協働で「子供まつり」などを開いたので、その補助にも人手が必要だった。また、炊き出しやマッサージなどのボランティア側の希望をセンターがイベント化することもあった。ボランティアが提供するイベントは、被災直後の3月18日から盛岡ＹＭＣＡや盛岡青年会議所、整骨院、鍼灸あんま指圧師協会、理容師組合、保育園、飲食店などの団体が来て行ったが、ゴールデンウィーク中は全国から20を超える団体が入って、炊き出しをはじめさまざまな催しが行われた。そのほかには、写真の洗浄や整理も多くの人が取り組んだ。写真は、最初は市が保管していた。震災の年のお盆の時期に返却しようという計画だったが、まだ泥のままだったので、ボランティアが洗浄することになった。しかし個人情報という問

題にぶつかり、お盆には間に合わず、洗浄の話はボランティアセンターに回されて、盛岡社協が引き受けることになった。きれいになった写真は２０１２年春から仮設ごとに返却され、２０１２年秋ごろからは、イベントとして返却会を行った。２０１２年から２０１３年にかけて、写真返却センターが設置されたが、洗浄した全写真のおよそ半分は引き取り手が現れなかった。

７月、８月になると、がれき撤去や泥出しなどの仕事が少なくなり、同時に避難所から仮設住宅への引っ越しが本格化したため、それに合わせてボランティアの仕事内容も変わってきた。７月６日には盛岡市社会福祉協議会が川井にある高校の廃校舎を利用して、宮古、山田、大槌などを長期的に支援するために、宿泊無料送迎バスつきのボランティア基地「かわいキャンプ」を立ち上げた。ここでは支援先の災害ボランティアセンターと連絡をとり、マッチングを行ったうえでボランティアを派遣したので、人が増えても混乱はなかったが、仮設住宅での住民交流やサロン活動に携わる仕事が増えたために、肉体労働よりも向き不向きがあった点が難しかったようだ。

(2) 宮古市生活復興支援センター

夏休みが終わり９月に入ると県外ボランティアの数は減少し、また被災者も仮設住宅で新しい生活が始まったため、支援のあり方も災害支援から地域支援へ変えていく必要があった。社会福祉協議会では、仮設住宅での生活上の問題に対処していくため、９月13日に宮古市生活復興支援センターを立ち上げ、生活支援相談員や生活支援員を置いて、新たな問題やニーズに対処していった。

被災直後に立ち上げた災害ボランティアセンターの仕事は、この部署に引き継がれた。センターの運営には、市内外の有志で結成した宮古災害復興支援活動チームＭ．Ａ．Ｄも携わった。宮古市の場合、なるべく元のコミュニティを維持したまま仮設住宅への入居ができたが、それでも同じエリアにどのような人が住んでいるのか、新しく隣人になった人との人間関係など、悩みや不安が大きかった。復興支援センターは独自に交流会を開き、住民間のコミュニケーションを促したが、ボランティアもさまざまなイベントを企画して住民の交流を助けた。料理教室、体操教室、将棋、囲碁、手芸教室などを開催する一方で、お茶と菓子を用意して被災者とともに時間を過ごす「サロン」活動も行った。イベントの種類によっては、ボランティアが来ないときでもサークル活動のように長続きするものもあったが、反対にあまり関心が持たれないものもあった。センターでは、仮設の住民のニーズに合わない、ボランティアのためのボランティアが行われないよう注意を払った。体操など健康管理につながるものは人気があった。カリタス札幌は趣味と実益を兼ねた「さおり織」の機械を提供して、講師による織り方の指導も行った。「サロン」活動は特に何かのイベントを行うわけではなく、被災者の言葉に耳を傾けることを目的とした。市内の傾聴ボランティアグループ「支え愛」が仮設住宅の集会所で、「えがお」は主に個人宅で活動した。「支え愛」ではメンバーが傾聴の講習を受けており、震災前から市内の高齢者施設や病院を回った経験を生かして活動を立ち上げた。カリタス札幌でも、出発する前には傾聴の講習会があった。人の話に耳を傾けるのは簡単なようで難しい。はじめから傾聴を主な目的としている場合と違い、かわいキャンプからあまり経験がないまま派遣されてきた人や、20歳に満たない市内の学生ボランティアには荷が重かったケースもある。それでも、高齢者の多い仮設住宅では、若い人が訪ねてくると喜ばれることが多かった。

(3) ボランティア受け入れの問題点

社会福祉協議会は、ボランティア受け入れに際して以下のような問題点があったと指摘している。

- 被災後早い時期にやってきた個人ボランティアが避難所や公民館に勝手に寝泊まりしたり、外でたき火をすることがあった。また、壊れそうな家に入るなど事故につながる危険もあった。土地の事情に疎い市外の個人ボランティアの登録には慎重を期したが、社会福祉協議会を通さず、勝手に入ってくる人々には手の打ちようがなかっ

た。

- 車中泊のボランティアに対し苦情の電話が多く来たが、それに対応する職員が疲弊した。
- 支援物資がとめどもなくやってきて仕分けに大変な時間がかかった。手作り品や千羽鶴はありがたいが迷惑した。
- 被災者支援が被災者の自立を妨げるという問題がある。無料で物品を配ったり、あまりに手厚い支援を行うとそれに慣れてしまって自立できなくなる。またボランティアと被災者が共依存関係になり、距離を取ることが難しいケースも出てきた。
- 支援の不平等があった。自宅の被害が少なく仮設住宅に入っていない人に支援が回りにくかった。
- 経験豊富なボランティアは、他所での事例で動こうとするが、地域性や災害の種類も違うのでうまくいかないこともあった。
- 被災者がボランティアという支援のあり方に不慣れで、どのように対応してよいかわからないケースもあった。見ず知らずの他人に仕事を頼んで良いのか遠慮したり、空き巣や犯罪などに対する不安もあった。

以上のような問題に加え、社会福祉協議会の受け入れ態勢にもいくつかの問題が指摘できる。ボランティアと一口にいっても、個人から専門性の高い自己完結型のNGOやNPOまでさまざまであるが、宮古市の場合は市内あるいは県内という内輪と外部を線引きして、専門性の高いNPOの受け入れを躊躇した。いち早く自己完結型のボランティア組織を受け入れたところも多い中で、資金的にも支援ノウハウという点でも、これらの組織とつながりを持たなかったことは惜しい面もあったのではないか。言い換えれば、支援を受ける力「受援力」が足りなかった。今まで市内だけで事足りていたところへ、突然市外・県外・国外の諸団体と関係を持たなくてはならない状況になったことは、確かに過酷であったと言える。災害時に、外部といかに関係を取り結ぶか、何を受け入れ何を断るのか、個人ボランティアをどのようにコントロールするのか、市民NPOの力をどのように生かすのか、今回の経験を通して「受援力」を高めることは、今後の大きな課題であると思われる。

(4) ボランティアに参加して

田中宣廣さん　岩手県立宮古短期大学教授　学生赤十字奉仕団顧問

被災後のボランティア活動

宮古短大の学生赤十字奉仕団は2008年に小さな同好会としてスタートした。2009年に学内サークルとして認可を受け、震災後の2012年に赤十字奉仕団として日本赤十字に正式に登録した。最初は高校のときにJRC(青年赤十字奉仕団)をやっていた学生が集まり、2学年で10人くらいの規模だったが、2011年の震災を機に55人に増えて、学生の奉仕団では東北最大の規模になった。秋田にある看護学生赤十字奉仕団は100人以上の参加者がいるがこれは例外で、宮古短大は総人数も在学生に対する参加の割合も全国レベルで大きい方だと言える。

震災が起きたときは学年末で部員は1年生4~5人だけだった。宮古出身の3代目サークル長と一関出身の副サークル長が顧問と話し合い、さっそく4月から新里トレーニングセンターで物資の仕分けボランティアを開始した。新1年生の入寮と入学式は5月に行われ、それと同時に新しい部員の募集を開始。多くの協力者を得るために例年より強力に募集活動を行った。その結果、6月には延べ56人もの新メンバーが泥出しと個人宅の片づけボランティアに参加した。はじめは泥の清掃などが中心だったが、被災者が避難所から仮設住宅に移ったあとは、住民の親睦をはかるため、集会所で鍋の会などを行った。

2年目からは、できるだけ震災前の状況に戻そうと思い、地元のボランティア団体という特性を生かし、子供の学習教室を行った。子供を対象にした活動は、他所から来たボランティアになかなかまかせられない。日常的に同じ空間で生活している人でないと子供の相手はできないし、地元の学生という信頼感も大きい。外部からやってくるN

ＰＯは信頼できないものも多く、行政も規制していない。怪しいＮＰＯが岩手県庁の審査をすり抜けて県立大学に来たこともあり、ＮＰＯだからと一概に信用してよいわけではない。資金がオープンになっていなかったり、実名が出ていないものは信用できない。その点、赤十字奉仕団は日本赤十字社の組織であり、しかもメンバー全員が短大の学生で宮古に住んでいる。子供の学習支援には最適なので、社協が御膳立てをして仮設住宅にいる子供たちを公民館に集めた。２年目はこれが活動の中心となった。社協からは感謝状が贈られたが、それも赤十字と地元学生という信頼関係あってのことだ。赤十字奉仕団として誇れる業績だと思う。

そのほかにはいくつかの復興関連イベントにも参加した。被災後わずか３か月で開催された「あきんど復興市」や震災前から行われている「みやこわくわくまつり」の運営補助にも携わった。補助だけでは面白くないので、実行委員会の一部としてカレーの店を出したところ60食が30分で売り切れる盛況だった。カレーは、山田町の「アマチュア無線ネット赤十字奉仕団」が行った小学校での炊き出し会に参加したことがきっかけになって、宮古短大のチームのレパートリーに加わった。初回は何度も試行錯誤をして、保健所にも届け万全を期した。その後も復興市やわくわくまつり、大学の学園祭などに出店しているが、これは万が一のときの食事作りの訓練も兼ねている。ただ出店するのではなく、手順や材料の記録をしっかりとって、人が変わってもすぐにできるようにしている。

今年度の２本の柱

震災後の緊急の支援が一段落したら、復興への手助けに加え、花植え、赤い羽根、献血などのもとの活動も行っていきたい。今年度の活動目標には２つの柱がある。１つ目は、被災地の現状発信を行うことである。外部の人々とやり取りをしていて一番気になることは、被災地に対する理解度の低さで、もはや話が通じないレベルだ。マスコミも発信しているが、理解力に欠けている。本当に現地を見ているのだろうか。被災者の心情に関しても、理解度が低いというよりは、理解しようという努力が感じられない。

津波から１年半が経って、マスコミも相当多くの被災地報道をしたので、現地のことはある程度伝わっていると思われるが、肝心なことはほとんど伝わっていない。仮設住宅の人の住民票は元の住所から仮設住宅に移していない人もいる。大槌町では特に多い。それは元の家に戻りたいという被災者の強い思いの反映だ。それが明らかになったのは衆議院選挙のときで、投票券が５００以上もあて先不明で戻ってきた。田老でも住民票を移していない人がいると聞く。内陸から調査にやってくる人々は、このようなことは行政が把握しているだろうと思って質問もしないが、行政ですら把握していない。震災から１年目までは、そのような人はもっとたくさんいて、地元では知られているのに、盛岡では誰も知らないという状況だった。そのような被災地の現状を、学生の立場からどんどん発信していきたい。これは誰もが思っていることだと思う。

２つ目は、被災者の精神的なバックアップである。特に、家も家族も失っていない人へのバックアップを重視したい。財産の被害を受けていない人は行政上被災者ではないため、今まで精神的なバックアップはされてこなかった。申し合わせたわけではないが、社協もこの問題に注目している。彼らは何かを失ったわけではないが、自分の町が被災し、友人や知り合いを亡くしている人も多い。そのような状況にいくら心を痛めていても、「あなたのところは残ったからいいじゃない」と言われ感情を抑圧している。家を失った人は、大っぴらに泣いたり悲しんだりできるが、何も失っていない人が同じように泣くわけにはいかないという雰囲気がある。短大の学生でも、一度感情を素直に出させると、この子も笑うのかというほど変わってくる。今、80代の人は昭和の三陸津波を経験しているが、その人たちが「あの気まずさ」という話をすることがある。それは、家が残った人たちと失った人たちの間の「気まずさ」、津波から逃れた人と家族を亡くした人との間の「気まずさ」である。家が残れば幸いだったというのは間違いで、その

地区全体が同じように被災したと考えなければならない。このことについては、赤十字への寄付者向けの報告書に、「知られていない被災者」というコラムを書いた。

防災に必要なこと

田老の堤防にはボコボコした突起があって、数えてみると736個ある。これは単なるデザインかと思っていたが、昭和三陸大津波の死者数だと書いた文献が出てきた。壊れない構造物に刻みつけたのだろうが、文献があっても時が経てば忘れられていく。これは、その形の意味を忘れたのではなく、防災の意識がなくなったということだ。50代の人に話を聞くと、小学生のときには、すぐに逃げられるように枕元に洋服を置き、靴は外向きに置いて寝ていたが、中学生になるとそういうことをしなくなったという。また、田老の防潮用堤防と津波用堤防の間には家を建ててはいけないことになっていたが、いつの頃からか家が建ちはじめ、最初の頃は問題になっていたようだが、それもなし崩し的に容認されるようになってきた。田老だけで公開されている津波の映像を見たが、本当に一瞬ですべて終わっている。たろう観光ホテルの周囲はがれきすらなかった。

氷倉庫には、明治と昭和の大津波、東日本大震災の津波が到達した高さに、ペンキで印をつけている。ペンキではしばらくすると剥げて書き直さないといけないが、実はそれが重要なことだ。書き直すたびに高さを実感して、防災への意識を再確認していく。石碑に刻んだり構造物を作ることは、確実に記録を残すが、忘れ去られるということでもある。しかし、伝承ということを考えると、ダメージの大きいものを目に見える形で後世に残していくことは必要だ。たろう観光ホテルや大槌の役場を残すには費用がかかる。一部だけ保存してもインパクトは薄い、原爆ドームのように見てわかる形で残すことが重要だ。それは歴史を伝えるだけではなく、次の災害への心の準備でもある。津波は人的な被害をなくせる唯一の大災害なので伝承は重要である。モノ、文字と二重三重の記録が必要だ。実際に津波を経験した人から話を聞く機会も設けなければならない。田老では東キヌさんが語り部として学生たちに被災体験を話してくれたが、非常に印象深く貴重な体験となった。また、被災地には津波の時間で止まったままの時計がいくつかある。場所によって被災した時間が異なり、止まった時計は被災の瞬間を教えてくれる。「学ぶ防災」の表紙も時間の止まった時計だが、時計は被災のシンボルでもある。被災地の時間は動き始めているのだろうか。山田町長が「われわれはまだ津波の中にいる」と語ったことは印象的だった。

津波があったとき、被災地にいてよかったと思う。いなければわからないことがたくさんあり、これからも刻々変わる状況を被災地の住人として発信していきたい。

今後の課題

今後は公営住宅に移った人たちの心のケアをしていきたい。宮古では仮設住宅入居時に、山田町と違って元のコミュニティを崩さないような配慮があった。公園がたくさんあり、それを使って、元の家から近いところに入居できた。そのため自治会を作ったが、あまり必要がない状況だった。しかし公営住宅では元のコミュニティがばらばらになる。都会のマンションと違い人の入れ替わりがほとんどなく、しかも隣同士との距離感がない。家賃が高いので、この辺では同じ金額で一軒家が借りられるため、若い世帯は公営住宅ではなく一軒家を探すか、家を新築するケースが多い。そのため公営住宅は高齢者が増える。この状況をフォローしていかないといけない。社協が地区ごとに担当者を決めて、それぞれの地区の町内会と話し合い、交流会などの企画を立てているが、赤十字奉仕団もそれに参加して、サンドイッチやかき氷、鍋の会などを企画している。参加費は食材費として300円いただいているが、これでは賄えないので、赤十字の持ち出しになっている。赤十字奉仕団は今後の被災者支援のパイロットケースになるだろう。震災以来、状況はどんどん変化している。その記録を取ることも重要なことだ。最初のころに写真を撮っていなかったことが悔やま

れる。

（2015年11月3日　宮古短大応接室にて取材）

鈴木里海さん　平成4（1992）年生

元県立宮古短期大学赤十字奉仕団委員長（2012年度）

2011年3月11日、鈴木里海さんは実家のある大船渡で被災した。実家の畳屋は津波で流され、4月に入学する予定の宮古短期大学の入学手続き書類一式も失った。大学にやっと連絡が取れたのは震災の日から3～4週間あとで、書類がないことを伝えると再発行の手続きをとってくれた。宮古に来たのは4月下旬である。

入学式はなく、授業は5月になってから始まった。同時にサークルの募集も始まった。震災直後ということもあって、「JRC（青年赤十字奉仕団）ボランティアサークル」に人が集まっていた。高校でもJRCという部活があり、高校生の間では、JRCといえばボランティアを意味していた。短大のJRCもこのときはまだ正式な赤十字の組織ではなく、単なるボランティアサークルという意味でつけられていた名称だったのかもしれない。積極的な勧誘もあり、新入生の多くはJRCに入ったが、上級生は5～6人しかいなかった。鈴木さんは入学前、大船渡の避難所で、支援物資の服をサイズごとにわけたり、トイレ掃除をしたり、300人分の食事を作る給食センターを手伝って、ひたすら卵を割り玉ねぎの皮をむくというボランティアをしていたので、迷うことなくJRCに入部した。

5月の段階で、新入生が20～30人くらい入部した。しかし、入るときには活動内容の説明がなかったので、ボランティアといっても何をやるのかわからなかった。その後、社協から仕事が割りふられ、夏の終わりころまでは、泥出しや独居老人の家の片づけなどを行った。秋になってからは、社協から、仮設の集会室で行うサロン（傾聴活動）に、短大生も入ってほしいという依頼があり参加するようになった。しかし、いきなり傾聴といわれても最初はただ座っているだけで、常駐している社協の人が、仮設の住人との間を取り持ってくれるという状態だった。

2012年の2月になって、みやっこベースというNPOを主催している人を通して、仮設に住む中学生が勉強に集中できないので、学習支援をしてほしいという話がきた。特に受験を控えた子供が狭い仮設で困っているとのことだった。そこで最初は週一回土曜日に崎山公民館に集まってもらい、勉強をみてあげることになった。しかし、実際にはおしゃべりの相手をすることも多く、中学生のストレス発散につきあうような感じであった。それと並行して、小学生の面倒も見てほしいという依頼があり、日曜日は清寿荘と近内の仮設に、隔週交代で行くようになった。そのほかにも、商店街主催の復興イベントの手伝いなど、要請があればどこにでも出向いていた。子供が苦手な人は主にイベントの手伝いに回った。

2012年1月に次年度のJRC委員長に推薦され引き受けることになった。この年の6月、JRCは正式な「赤十字奉仕団」に登録された。いきなり「Donabe Net のリーダーをやってください」と言われて引き受けたが、これが委員長になってくれということだった。Donabe Net は震災前から岩手県立大学ではじまったボランティア活動で、地域交流を目的としている。宮古短大では先輩の代に、老人介護施設などで2か月に一度くらい行っていた。この年は実田仮設と河南仮設を交互に訪問する予定だったが、学習支援と小学生の相手が毎週あって時間がとれず、なかなか実行できなかった。学習支援と小学生の世話は絶対に休むわけにはいかなかった。サークルの人の多くは子供の相手が苦手ということで、交代してくれる人がいなかった。そのうえ、社協から依頼があっても、アルバイトや個人的な事情で誰も手を上げてくれない仕事が多く、それも委員長の責任上こなしていかなければならなかったので、だんだん勉強どころではなくなっていった。

一度、山田社協から洗浄した写真をスキャンしてパソコンに取り込む仕事を依頼されたことがあった。洗浄だけでは傷むので、早くパソコンに取り込む必要があるということだった。大学にスキャナーがあったので（顧問の先生が）引き受けたのだと思う。6～7箱の段ボール

にぎっしり詰まった写真は1千枚以上あった。それを6枚くらい並べてスキャンしていくのだが、果てしない単純作業で本当に苦痛だった。自分の代では終わらず、山田社協に謝りに行った。

単発のイベント「PIKAPIKA PROJECT」の手伝いなどもした。ペンライトで空中に文字を描き、それを連写して文字を浮き上がらせ動画に撮る企画で、その撮影のときには午前3時に浄土ヶ浜に行った。宮古の支援グループと大阪電機大学の人たちが中心になって行ったが、このような単発プロジェクトを企画して実行するのは楽しいだろうと思う。他所の大学生が短期間来て行うイベントは地元でも喜ばれるうえに、やっている人も楽しそうで「いいなあ」とうらやましかった。それに比べると、自分たちのボランティアは日常の一部になっていて地味な仕事だった。

赤十字奉仕団として独自の単発のイベントを企てたこともある。仮設住宅に住む人をガイド役にして、ハイキングや散歩をし、そのあと参加者全員で食事をするという案だった。しかし、その話し合いをしたくても人が集まらず、企画をたてることさえできなかった。赤十字奉仕団というサークルに限定せず、もっと広く声をかけて、その日だけの単発のイベントを行う方向で考えればよかった。

委員長の仕事は苦労の連続だった。ボランティアは社協から依頼を受けて動くのだが、社協は「いつ、何人必要」とだけ言ってきて、人員集めは委員長の仕事だった。「赤十字奉仕団」に登録している人は60～70人いたが、ほとんどは名前だけで、実際活動してくれる人は10人くらいしかいなかった。社協から言われて学内で募集しても誰も応じてくれないことも多く、副サークル長と2人で回していたというのが現実だった。岩手県立大学の場合は、赤十字奉仕団というサークルはなく、大学のボランティアセンターがニーズを把握して、ボランティアが必要になったらメルマガ形式で情報を流していたので、人集めに関して誰かが負担を背負うということはなかった。

宮古短大では、社協から赤十字奉仕団にメールでボランティアの要請があり、人集めはこちらの仕事だった。誰がそれをやるのか。結局、委員長である自分が責任を負い、応募してくれる人がいなければ一人一人に都合を聞き、それでもだめなら自分が出るしかなかった。社協は、学生は自由な時間がとれるという軽い気持ちだったのかもしれないが、実際に出てきてくれる人は数人で、本当に人集めに苦労した。登録者が多いのは、赤十字奉仕団として被災地で「活動」したということが就職に有利になるという気持ちがあったからかではないか。サークルの勧誘のとき、そのような話があった。

2年生の秋くらいから、このままでいいのだろうかという気持ちを持ち始めた。静岡県までリーダー研修に行かされたことがあるが、そこに集まった人たちの活動は、献血推進活動や老人ホームの訪問など赤十字本来の社会奉仕が中心で、震災後の被災者支援だけを少人数で行っているのは例外だと思った。たしかに仮設住宅に住む中学生の学習支援は必要だろう。しかし、これに縛られていると、自分たち独自の活動ができなくなる。人数が集まれば両方できるのだろうが、活動する人が少ないうえに、その人たちさえアルバイトなどで来られないこともある。たくさんの登録者がいながら、数人だけが社協に言われたことをこなすために、大学の授業をぎりぎりまで休んで対応しなければならないというのはおかしい。

受験を控えた中学生の学習支援はニーズがあり、崎山公民館には多くの子供達が来ていたので、何とか続けたいという気持ちもあった。学習支援や子供の相手を、赤十字奉仕団ではなくても、商業高校のJRCと交代でできないか社協に相談したが実現しなかった。社協に通うのがだんだん苦痛になってきた。津波で家を流されて生活基盤を失いながらも、大学に快く送り出してくれた親を思うと、しっかり勉強もできず申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

就職活動をしなければならない季節になってもあまり集中できなかった。学習支援は夕方5時からなので帰宅は夜になるが、毎日履歴書を眺めて寝てしまう生活だった。同学年100人のうち宮古に残ったのは5～6人だけだった。彼らは岩手銀行、信用金庫、商工会議所、商店に決まった。自分はどうしたいのか考えると、ボランティアに明

け暮れてあっという間の2年間を過ごし、考えてみれば宮古のことをあまり知らない。週4～5回社協に通い、自宅と短大と社協を自転車で回るだけの生活だったように思う。せっかく宮古に来たのに、宮古の美しいところを何も知らないで去るのかと思うと残念で、何年間か宮古で働きたいという気持ちになった。人と接する仕事をしたいと思い休暇村（休暇村陸中宮古）に応募した。

休暇村では、老人クラブや地域の集まりなど、だんだん地元の人の宴会の利用も増えて活気を取り戻しつつある。就職して宮古のことも知った今では、そろそろ大船渡に帰ろうという思いが募る。実家の畳屋は機械ごと流されて畳を作れなくなったので、今は内装の仕事をしている。祖母は家の仕事を手伝っていたが、それができなくなって体調も良くない。毎月8万円借りていた有利子奨学金の返済もある。宮古では大変なことも多かったが、色々な人と出会えて本当によかった。学習支援では、子供たちと親しくなっていく過程も楽しかった。あのとき高校受験だった子供が今は大学受験の年齢で、今もまだ公民館で勉強しているのだという。コンビニなどで出会うと声をかけてくれるのがうれしい。

（2015年11月3日　市立図書館会議室にて取材）

早川　輝（あきら）さん　昭和62（1987）年生
NPO法人　みやっこベース　理事・事務局長

2011年3月1日、ワーキングホリデーで1年間過ごしたオーストラリアから日本へ帰国し、震災の日は東京にいた。その後、実家のある福岡に帰りボランティア活動に入る機会をうかがっていた。受け入れ可能な場所を探したところ、宮古の災害ボランティアセンターが宿泊場所を用意しているという情報をインターネットで得て宮古行きを決めた。6月15日バスで宮古駅へ到着。第一印象は、意外と震災の影響を受けていないということだった。宿泊場所である小山田の地区センターまで歩いていったが、これが本当に被災地なのかと思ったほど平穏な風景だった。翌日、車で津波被害の大きかった現場に行くと、テレビや写真で見た光景が広がっていて、はじめて被害の大きさを目の当たりにした。最初は2週間くらい宮古にいて、沿岸の南の方に移動し、2か月くらいボランティアを行うつもりでいたが、2週間滞在するとさまざまな人間関係ができて、ここでずっと続けていきたいと思うようになった。小山田の地区センターには10月いっぱいくらいまでいたが、夏休みをはさんだのでたくさんの人が寝泊まりしていた。

ボランティアの仕事をはじめた最初のころは、午前中は築地の個人宅で、午後からは鍬ヶ崎の菱屋酒造で泥出しをしていた。20～30代の地元ボランティアが社会福祉協議会と連携してリーダー役になって、個人で登録したボランティアのチームを引っ張っていた。地元の商業高校と短期大学のJRC（青年赤十字奉仕団）も一緒に泥出しやがれき撤去を行っていた。2011年の7月に地元のボランティアグループに入れてもらって、そこで子供の遊び場づくりなどを行った。9月になって、社協が災害ボランティアセンターを生活復興支援センターに移行する際に、所属していたボランティアグループが社協と協働することになった。それを機にボランティアコーディネーターを引き受けるようになった。それから1年後の2012年9月、ボランティアグループが解散し、メンバーはそれぞれ独立した活動をするようになった。

新しい活動を開始するにあたり次の目標として、若者が宮古の復興支援へ参加できるように助ける仕事をしていこうと考えた。復興には若い力が必要である。三陸沿岸は震災前から人口の流出が続いており、復興のためにはこの流れを食い止め、一人でも多くの若者に残ってもらわなくてはならない。何か動きを起こすなら、今がチャンスであると思い、2013年2月、社会地域活動や町づくりにかかわる意欲のある高校生を支援するために「みやっこベース」を立ち上げ、2015年9月にNPO法人として認可された。宮古でボランティア活動をはじめた当初から若者支援には関心を持っていた。「一般社団法人子供のエンパワメント岩手」が公民館で行った中学生の学習支援活動の仕事をしたこともある。宮古商業高校の生徒とは被災の次の年か

ら仮設住宅で子供の遊び場づくりを行って、宮古の将来のために何ができるのか話し合ってきた。そのような経験から、高校生サミットを開催して、高校生同士の意見交換の機会を作った。そこで宮古の活性化をテーマにプレゼン大会を開き、良いアイディアがあれば実現できるように各方面に働きかけた。たとえば商店街のマップ作りや、現在の宮古を見てもらうために独自のコースを考案し、内陸の高校生と大学生を対象にツアーガイドを行った。ツアーには盛岡から25人ほどの参加者があり、田老の防潮堤を見て三陸鉄道で戻り、フラットピア宮古で郷土料理を作って若者同士で意見交換を行った。これは赤い羽根の助成が受けられたため、個人負担は1千円ほどで済んだ。なによりも、この企画を成功させたときの高校生の達成感は大きく、若者支援をさらに前進させるはずみになった。そのほかには、高校生が集まる場所の運営、広報誌「MIYAKKO NEWS」（みやっこニュース）の発行も行っている。

２０１５年のシルバーウィークには、宮古の高校を卒業した若者と現役高校生による「地元修学旅行」を行った。合計20人の参加があり、1泊2日の行程で10人ずつ「海コース」と「山コース」に分かれて、地元再発見の旅を体験した。「海コース」は浄土ヶ浜で観光船に乗り、新卒のガイドの体験談を聞いた。またボートに乗り釣りをしたり、ジオパークのガイドツアーを体験した。「山コース」は川井で林業に従事している人に現場を案内してもらい仕事の話を聞いた。両コースとも休暇村に泊まり、2日目は全員で歩いて鮭ヶ崎まで行き、サッパ船を持っている人の協力で、サッパ船クルーズを行った。第一回目は、信用金庫が復興支援の一環で、若者の地元定住促進や企業体験のために設けた「東日本大震災しんきんの絆プロジェクト」の助成を得た。普段良く知っている地元でも、あらためて「修学旅行」を通して見直してみると、さまざまな魅力が見えてくる。1人でも多くの若者が地元にとどまってくれるよう、この企画を続けていきたい。２０１５年になってやっと給料が出るようになった。現在はパートを1人置いて、ほかに無給のボランティア数人で運営している。また、最近は気仙沼と大槌で高校生支援活動をしている人たちとのつながりができた。本格的な支援はこれからだと思っている。

（２０１５年11月4日　みやっこベースにて取材）

金野　侑さん　昭和59（１９８４）年生

ＮＰＯ法人　みやこラボ　代表理事

震災の前までは「ピアノ弾き」だった。震災後10日くらいたって、3月20何日かに社協にはじめて行ったところ、「ボランティア募集」の貼り紙を見つけた。すぐに応募して、泥かき、もの運び、茶碗洗い、海水のしみ込んだ畳を運び出すなどの作業を行った。初期のころは、このような現場作業のほかに、支援物資の仕分け、苦情の受付など避難所運営の仕事が主だった。夏になると、現場の作業も一段落し、社協の事務を引き受けるようになった。きれいに磨いた被災家屋が最終的に取り壊しになったり、ボランティアの名のもとに商店の手伝いなどをさせられたり、無駄なことやボランティアの域を超えたことなど気になることもあったので、ボランティアの仕事内容を調べていた社協に協力し、新たに入る人のためにニーズ調査も平行して行った。

２０１１年の夏からはM.A.D（Miyako Action Development）というボランティア団体を立ち上げ12月頃から事務局長をやることになった。震災後の混乱の中で組織を支えることは容易ではなく、運営上の苦労は大きかった。赤い羽根共同募金や仙台の地域創造基金「みやぎ」（現在は「さぶりな」）から助成金を得たり、また寄付をもらったりしたが、最初は誰がどのように動けばよいのかよくわからない状態だった。本来は行政がサポートしてくれるはずだが、この時点でまだ行政は十分に機能していなかった。協働がどのようなものかわからないまま、とりあえず社協と一緒に活動することになった。その後はさまざまな研修会に出てＮＰＯの組織運営を学び、２０１２年には日本ＮＰＯセンターで研修を受けるために盛岡や仙台に出向いた。そこには、震災でＮＰＯを立ち上げたが運営方法で困っている人たちが多く集まっていた。およそ1年がかりで、東北3県のＮＰＯ代表や局長

クラスの人たちと一緒に、組織基盤強化について研修を受けた。震災前の宮古では20くらいのＮＰＯ法人があったが、事実上動いているものは10くらいであった。震災後に「がんばろう田老」、「みやっこベース」、「みやこラボ」、「三陸情報局」、「Ｍジョイ」の５つが新しくできて、現在は全部で20近くある。ＮＰＯは県や市町村、民間の助成を受けていて、お金があるときは元気がよい。しかしこれから資金援助は激減すると思われる。いかに今の状態を続けていくか、お金をどのように得ていくかが大きな課題となる。資金が枯渇したらやめなければならないのだろうか。その場合、ＮＰＯが独自のノウハウを持つことが重要で、行政がそれを真似て受け継ぐくらいにしていかないといけない。

Ｍ．Ａ．Ｄは被災者が仮設住宅に移ってから、社協が開設した生活復興支援センターで協働してきたが、次第に方向性について意見が合わなくなり、それぞれの方向に別れることになった。Ｍ．Ａ．Ｄ設立時に集まった７人は自分たちでこの街を新たに作っていこうという意欲に燃えていた。志半ばで組織は解散になったが、その意思を継続するために、「みやこラボ」のほかにも新たなＮＰＯを立ち上げた人もいた。社会福祉士の資格を持つ人は社協に引き抜かれた。震災のあと、社協には臨時の職員がたくさん入った。しかし、一段落すると臨時の職員は切られていく。「みやこラボ」ではそのような人達も積極的に支援していきたい。

復興支援の緊急的な課題が徐々に減少していき、資金の調達も難しくなる中で、このまま息の長い支援につなげていくのか、ＮＰＯは当初の目的を果たせば延命を図るべきではないのか、葛藤に直面してきた。どうするべきか手探りの中で、現在は株式会社と共同でやっている。単純に企業から資金を得るだけではなく、志を同じくする者同士が一緒にやっていくというやり方だ。当面の課題は地域支援の担い手を作ること。震災４年目になり、地元の復興のために立ち上がった人々が次の目標を見失っている。それぞれが孤立していては前に進めない。まず復興の思いを持った人々が話し合う場を設けなくてはならない。同時に今後も活動を続けていくＮＰＯを支援する「中間支援」のＮＰＯを立ち上げたい。そのために「宮古ＮＰＯサポートルーム」準備事業を行っている。「中間支援」とは、ＮＰＯを支援する活動のことだが、子育てや環境問題のように理解しやすいものではないので、お金がつきにくい。しかし、この震災を機に立ち上がったＮＰＯを育てていきたいという気持ちは大きい。そのほかには、町を盛り上げるために「みやこほっこり映画祭」などのイベントを企画している。宮古は三陸で唯一映画館のある町なので、世界中から心温まる映画を集めて上映したり、上映作品の監督のトークショーを行ったり、また参加者同士のおしゃべりの場を設けるなど、参加型のプログラムも作っている。

町の活性化のためには、イベント的なもの・趣味的なものだけではなく、たとえば福祉と復興の両方をリンクさせていくような、幅広い市民活動も必要だと考える。市民文化会館を活用していくことも重要だが、それには企画力のあるコーディネーター的な人が必要だ。現在、市は盛岡のＮＰＯに市民会館の企画部門を委託する方向で動いているようだが、宮古のＮＰＯには声がかかっていない。これからは、長期的視点で復興を支えるために、地元の力を育てていく活動を行っていくつもりだ。

（２０１５年11月４日　みやこラボにて取材）

２　カリタスの取り組み

(1)　カリタスジャパン

国際カリタスはバチカンに本部を置くカトリックの社会福祉機構で１９５１年に創設された。現在では国際赤十字とほぼ同じくらいの規模をもつ世界最大級のＮＧＯであり、２０１５年現在、１６５か国の１８４団体が各国カリタスとして活動している。災害の被災者や難民支援など緊急的なもののほかに、各国の事情に即して、貧困や紛争解決、ジェンダーなどの問題解決に取り組んでいる。

カリタスジャパンは国際カリタスに先立って、戦後すぐの１９４６年、海外からカトリック教会に宛てた支援物資受け入れのために構想され、１９４８年に設立された。現在は国際カリタスの一員として

活動している。日本ではカトリック中央協議会に属する宗教法人であり、国内での福祉活動、災害支援をはじめとして外国の貧困、飢餓、災害などへの支援活動も行っている。国際カリタスは、震災発生の3月11日から9月までの6か月間にジャパンカリタスを通じて1億3千500万円の支援金を送り、2015年現在でも4月から9月までの6か月間に2億1千500万円の支援を行っている（『カリタスジャパン東日本大震災活動報告書』カトリック中央協議会・2013年3月11日）。カリタスジャパンは、この国際カリタス経由の資金と、ジャパンカリタスに直接送られる義援金で支援活動を行っている。

国際カリタスとは別に、スイスやアメリカなど大きな資金力をもつカリタスが、津波で流された釜石の鵜住居保育園の再建や、大槌の学校建設などを支援した。外国のカリタスのピンポイントの支援は、釜石や大槌に開設されたカリタスベースがつなぎの役を果たした。両方とも市や社協の信頼を得て、積極的に協働し提言を行える立場にあった。宮古の場合は、なるべく内部で行なおうという姿勢があり、外部の大きな支援団体を積極的に受け入れてこなかった。

カリタスジャパンは阪神大震災のときに長期の支援を行っており、大きな災害時の支援ノウハウを持っている。地震発生翌日には募金の受付を開始し、3月16日に被災地全体の中心となる仙台教区サポートセンターを設立、3月21日に塩釜ベースを設立しボランティア第一陣を派遣、3月24日には石巻、4月2日には釜石と次々にボランティアベースを設立していった（『東日本大震災支援活動 カトリック教会の歩み よりそいながら明日へ』仙台教区サポートセンター 2014年3月）。修道女も活動に参加することになり、4月9日から被災地に修道女を交代で派遣するシスターズリレーもはじまった（『福音宣教』オリエンス宗教研究所 2012・1）。

宮古は県外のボランティアの受け入れが遅れたため、4月22日になってやっとベースの設立にこぎつけた。カリタスジャパンの支援内容は大きく5つに分けられる。生活必需品などの物資支援、環境整備支援、傾聴などの心理的支援、農業や漁業再開のための経済的支援、そして被災児童への学費援助や家庭や放課後の学習補助などの教育支援である。宮古では、初期には物資支援と泥出しやがれき撤去などの環境支援が主であったが、仮設住宅ができてからは、社協の依頼により傾聴活動が中心になった。カリタスジャパンではそのほかに、地域住民主体の復興プロジェクトを立ち上げ、経済的な支援も行っている。塩釜市桂島では牡蠣の幼生を付着させるためのホタテ貝の人工殻を、韓国カリタスを通して取り寄せて寄贈し、気仙沼では商店街の復興支援としてミニコンサートホールや中高生の自習室づくりと学習支援を行い、南三陸町ではわかめ養殖再開に必要な資材を提供し、デイサービスセンターの再建を行った。カトリック教会のネットワークを駆使して、全国から人的、物的支援を得られるうえ、海外とのつながりも生かして、息の長い支援を行えるのがカリタスジャパンの特徴でもある。

(2) 宮古における札幌カリタスの活動

カトリック教会は全国を16の教区に分けており、宮古は仙台教区に所属しているが、北海道全域をカバーする札幌教区の菊地司教が宮古出身だという縁があって、宮古ベースは札幌教区が担当することになった。そのためボランティアも夜行の船と電車を乗り継いで、主に北海道から駆け付けている。札幌教区はサポートセンターを設けて寄付集めや人員の手配などの後方支援を行っている。「札幌カリタス」の名前は、東日本大震災の支援のためにつけられた、北海道のカトリック信者によるボランティア団体

写真1　カリタス札幌の世話人とボランティア
宮古わくわくまつり
2014/04/07　撮影：久保田滋子

の名称で、カリタスジャパンと目的を同じくするが、その下部組織というわけではない。岩手県には宮古のほかに、大船渡、釜石、大槌にカリタスベースがあり、どこも札幌カリタスのように独自の募金活動でまかなっている。宮古以外の3か所はそれぞれ責任者が常駐する形をとっている。

宮古だけは世話人が北海道から通っている。ボランティアベースを立ち上げてから2年間は1人が担当したが、2013年4月からは5人の世話人が2週間交代で北海道から宮古にやってくる形式をとった。最初はカトリック宮古教会を借りて世話人とボランティアが寝泊まりしていたが、教会聖堂も支援物資で手狭になり、また教会活動にも支障が出るので、社協から松山仮設に部屋を借りて2011年12月から世話人と男性ボランティアが住むことになった。2012年5月には女性ボランティア用の部屋も確保できた。松山仮設にはほかにも長期滞在するボランティアが住んでいたが、2013年になって社協から出るように言われ、また世話人も5人が交代で来るようになったので、佐原に2階建ての一軒家を購入した。世話人は主に定年退職後の男性で、ボランティアは70歳前後の女性が多く、長期の休みには札幌市内のカトリック系の藤女子大学や看護学科のある天使大学の女子大生も参加する。

写真2　移動カフェでボランティアが作成したキーホルダーを配る（さくら公園仮設住宅集会所）
2014/09/08　撮影：久保田滋子

2011年夏までの主な仕事内容は他のボランティアと同じように、側溝の泥出し、がれきの片づけ、個人住宅清掃などの肉体労働だった。7月になって仮設住宅を巡回する「移動カフェ」を開始。備品がなかったので、イス・テーブル・やかん・什器などをもって訪問した。その後、社協もサロン活動という名のお茶会を始め、集会所を巡回して傾聴活動を行った。部屋に閉じこもり孤独に陥りがちな人々が気軽に集える場所を提供し、被災者の話に耳を傾ける。サロンが始まった当初は、ボランティア活動が肉体労働だと思って来たら傾聴という慣れないことをしなければならず戸惑った人もいたので、後に出発前の研修を行うようになった。肉体労働が主だったころは70歳までという年齢制限があったが、傾聴活動に入ってからは制限がなくなり、80歳を超える人も参加するようになった。社協は、住民の自立を妨げるという理由で2012年10月にサロン活動を中止したが、住民の強い要望があって、それ以降はカリタス札幌独自の移動カフェを続けた。車につけている赤いカリタスのマークが「米」の字に似ているので、お米屋さんと勘違いされたり、コーヒー機器メーカーのボランティアだと思われたりしたが、2011年の夏から途切れることなく仮設住宅を巡回したことで、「カリタスさん」として親しまれ、高齢のボランティアも仮設住宅のお年寄りの良い話し相手になった。

カトリック教会主催の、物資を無料配布する「分かち合いマーケット」も手伝った。4月下旬に第1回、6月上旬に第2回を開催し、洋服、下着、生活用品、寝具、手入れをした中古の家電製品を配った。大好評だったが、無料配布は被災者の自立を妨げることもあり、また地元経済に影響を及ぼすということも考慮し、2回目からは家電製品など一部を100円から1千円くらいの廉価で販売するようになった。食料品はなるべく宮古の商店で買って出品した。お盆を控えて喪服フェアも行い、礼装のスーツやワンピースからワイシャツ、ブラウス、靴下、ストッキング、革靴、フォーマルバックまで、すべてそろえられるようにした。喪服は200着ほど集まり、あっという間に完売した。9月には手入れをして磨き上げた中古自転車37台を札幌から運んでマーケットに並べ、12月に行われた宮古市の物資配布会には、札幌教区サポートセンターが毛布500枚134万円相当を送って支援した。2011年は5回のマーケットを開催したほか、そこまで来られない高齢者などのために、仮設でのカフェのおりにミニマーケットを開き、衣料や日用

品の配布を行った。２０１３年４月には第８回目のマーケットが開かれたが、この頃になると物資も行き届き、主催者によると、本来の目的よりもむしろ「いつまでも忘れない」「寄り添っていく」というカリタスの心を示すものになってきた。

仮設住宅の住人が手仕事で収入を得られるような支援も行った。２０１１年の９月、高浜仮設を訪れたボランティアの女性が、入居者の方から押し花の手作り葉書をもらったことをきっかけに、押し花絵葉書の作成を依頼し、10月中旬から札幌教区サポートセンターが１枚２００円で買い上げ、教会を通して販売をはじめた。２０１１年度は１千９５０枚の売り上げ実績があった。札幌教区が支援しているフィリピンの児童養護施設に持参するアクリルたわしも製作してもらい、サポートセンターが買い上げた。２０１２年３月には、長く続く本格的な手仕事を導入できないかという視点から、さおり織の体験会を開き、住民の賛同を得て、卓上織機と糸を取り寄せ、浄土ヶ浜仮設に札幌から指導者を派遣した。この企画は「みやこ若者サポートセンター」の協力を得られることになった。最初は練習のために織ることを楽しんでもらい、技術が向上したら販売ルートに乗せることにした。２０１５年現在では、宮古のゆるキャラのみやこちゃんとサーモン君ストラップなどを道の駅や教会バザーなどで販売している。そのほかには、人形作り、裂き布での草履づくりなど、お年寄りも楽しめる手作業の機会を設け、手芸が盛んな仮設にはミシンとアイロンを寄贈した。

震災の年の夏休みが過ぎると、どこでもボランティアの数は急減した。宮古でも２０１３年３月で他県、市町村からの団体はほとんど撤退したが、カリタスは数少ない団体の一つとして活動を継続した。社協からも表彰を受け、「カリタスさんに馴染んでいる人も多いので、このまま続けてほしい」と依頼された。２０１５年３月末現在で、まだ３年ほど活動できる資金を残しており、仮設が撤去されたあとも、災害復興公営住宅でのコミュニティづくりなどを継続したい意思はあるが、その件については社協から声がかかっていない。

(3) ボランティアに参加して

伊藤純子さん　カトリック宮古教会、教会運営委員長　昭和23（１９４８）年生

津波後の教会について

震災当日、主任司祭は休暇でメキシコに一時帰国中だった。震災後１週間から10日くらいは電気も水道も通っていなかったが、宮町の教会周辺は比較的早く復旧したので、炊飯器を運びこんで炊き出しを行った。３月下旬になって、北海道から上杉神父、盛岡から佐藤神父、東京からダビデ神父が様子を見に来て、震災の３週間後にはじめてミサをあげることができた。ダビデ神父滞在中に大阪と神戸からボランティアをしたいという大学生が訪ねて来た。泊まるところを決めてこなかったが、ダビデ神父が受け入れを決め、聖堂と神父の住まいである司祭館を開放し、女性は司祭館に、男性は聖堂に寝泊まりするようになった。北海道の上杉神父が宮古を管轄する仙台司教区に許可を得て、３月下旬に正式にボランティアセンターを開設する運びとなった。内陸部の遠野はさまざまなボランティア活動の拠点になっていたが、遠野カトリック教会も釜石など近隣の教会のボランティア拠点になっていた。岩手県の多くのカトリック教会を設立したスイスからのボランティアや、マザーテレサゆかりの修道女など、外国からの支援の申し出も多かったと聞く。そのような人たちが宮古へも視察に来て教会を訪れたが、応対が非常に大変だった。初期のころはボランティアの対応も、受け入れのノウハウがないため、かえって混乱した。震災１か月後から北海道のカリタスの支援が入ることになり、聖堂を全部カリタスの基地として提供した。

カトリック教徒は聖堂で祈ることをとても重視している。しかしこの大きな災害の中では、祈りよりまず行動しなければならないこともある。聖堂の中での祈りだけが祈りではなく、行動の中での祈りもある。聖堂をボランティアに明け渡したのも、緊急の助けを必要とする人を優先するためである。チリ地震津波のとき、宮古教会では神父を中心に翌日から支援活動をはじめた。しかし今回は主任司祭（神父）が不

在で、すぐにリーダーシップをとる人がいなかった。でも何か活動を始めないといけない。教会に神父の車があったのでそれを使って救援活動を行った。動ける人が動ける間に生活できない人をたすけなければいけない。明らかに被災した人には支援の手が差し伸べられる。しかし高台の人にはなかなか助けが回ってこない。市に頼れないで親戚頼みの人も多い。寒い中湯たんぽひとつでしのいでいる人もいる。このような人に手をさしのべていくことが大切だと感じた。

（２０１３年９月15日　カトリック宮古教会司祭館にて取材）

シスター五十嵐悦さん　藤沢みこころの姉妹会修道女　岩手県のカリタスベースを巡回

シスター五十嵐は震災後すぐに活動を開始し、塩釜から南三陸、米川を経て、２０１１年11月から約２か月間宮古に滞在した。

宮古での活動で一番印象的だったのは、行政ベースの支援活動の遅れだった。２０１１年11月、南三陸ではすでに物資の支援は終了し、生活を維持し自立を促す支援に入っていたが、宮古ではまだ衣類に事欠く人が多く冬物衣料を配って歩いた。宮古市役所が衣類を放出していなかった。仮設住宅へ衣料を配ると「身内びいき」などの問題が起きるのでなかなかできないという話もきいたが、実際にどのような事情で遅れたのかはわからない。12月に入ってからやっと冬物衣類の放出をしたが長蛇の列で、お年寄りなど寒空の中大変だったようだ。体育館で行った衣類、米、生活物資の配布の手伝いもしたが、他の市に比べるとあまり要領がよいとは言えなかった。車で来て、1人で段ボール2箱くらい持って行く人もいたので市役所の人にその旨を告げたら、フリーマーケットで売る人もいると聞いているが、いちいちそれを区別していられないとのことで、寄付してくれた人のことを思うと残念な気がした。しかし現金収入が少ないので、それも仕方がないのかという思いもあった。宮古教会では、早くから幼稚園のプールを衣類置き場にして被災者に配った。信者総出で衣類の仕分けをしたが大変な作業だった。

（２０１３年６月23日　ＮＰＯ法人カリタス釜石集会室にて取材）

戸澤恭子さん　盛岡四ツ家教会、教会委員長　昭和14（１９３９）年生

２０１１年３月26日から宮古支援に携わる。現在では毎月第２と第４火曜日に釜石、第３月曜に宮古へ出向きボランティア活動をしている。４月に四ツ家教会のボランティアの１人がはじめて鍬ヶ崎小学校を訪れたとき、昼間なのにほとんどの人がぐったりと横になっていた。それもビニールの敷物の上に枕なしで寝ていたことに驚き、４月から９月まで宮古を中心に寝具を届ける活動を続けた。枕は秋田の大館からそば殻を仕入れ、信者有志が総計２千個を作り、田野畑、宮古、釜石、陸前高田、大船渡にまで届けた。枕を作っているうちに炊き出しや物資の配布も始めた。80代の信者も駆け付けてきて、この年になっても人の役に立てたと喜んだ。宮古では教会主催の「わかちあいマーケット」が開催され、毎回３００人以上も集まった。

現在は仮設住宅へ昼食を届けている。この活動は、ともに食卓を囲むことの大切さを説いたキリストの教えの実践でもある。いつも５～８人が車２台に分乗して出かける。先日はちらし寿司を作った。かんぴょう、シイタケ、卵などの材料を持って行って集会所の台所で作る。八幡平から漬物を持ってきてくれる人、財布などの小物を作って持ってくる人もいる。盛岡在住の信者でそば打ちができる人、ボーイスカウトのリーダーをやっていて包丁を砥げる人などが同行し、現地でそれぞれの特技を生かしている。盛岡の３つのカトリック教会の信徒に協力を依頼しているので、さまざまな技術を持った人が参加してくれる。料理もバリエーションがあり喜ばれている。

ともに食卓を囲む主な目的は傾聴で、一緒に食事をするのは心の垣根を取り払うためだ。宮古のお雑煮は盛岡とは違う。浜では餅を甘いくるみにつけて食べる。そのような話をしながら交流を深め、実際にお雑煮を一緒に食べて親しくなる。お互いに知りあうようになると、苦しい心の内を話してくれる。

盛岡では独居老人の孤独死が問題になっているが、被災地でも同居の若い人が津波で亡くなり、残されたお年寄りは孤独感を募らせている。老後の面倒を見てくれる人がいなくなり「あのとき一緒に死んでしまえばよかった」という思いから自殺願望を話す人もいた。昨日も被災地で6年前に建てたばかりの家を流された65歳の人の話を聞いた。

キリスト教の信仰のある人でも、これが神の望みとは思えない。人間はそんなに簡単にあきらめがつくものではない。遺体のあがらない家族がいる人は、毎月11日に海に花を投げると話していた。日本人は遺骨が戻らないとあきらめきれない。すべて流されたあと、最初にできた店が食べ物屋ではなく仏具店だった町があると聞いたときはショックを受けた。生き残った人に何ができるのか。この傾聴のボランティアを通して深く考えるようになった。

信者は信仰を深めるために動くことが大事だ。しかしそれが人への押し付けになってはいけない。カトリックは宗教の話が何もないと被災者から聞いた。カリタスは特に宗教色を出さないように気を配っている。阪神大震災のときに、カトリックという名前を出したことで「布教お断り」と言われた苦い経験がある。カトリックはカリタスという名前で活動しているが、一般の人はカリタスが何であるか知らないし、あえて知らせることはしない。釜石ではカリタスの活動をNPO法人にしてカトリックから距離を置いた。修道院からボランティアに参加しているシスターもいるが、違和感なく溶け込んでいた。彼女たちはどんな環境でも音を上げず、狭い台所で黙々と働き、地元の人から農業の指導を受けて畑を作った。そのような姿は好感を持たれたと思う。

神父は外国人も多いので考え方もさまざまだ。震災の時、宮古教会のメキシコ人神父は休暇中で被災地にいなかったが、すぐに戻って来ることはなかった。あの津波の被害を見ても、人には誰も悩み苦しみがあると言ってあまり被災者のことを考えていないように見えたし、被災者がひもじい思いをしていても、肉を食べたいと言って我慢しない。しかし、緻密ではないが太っ腹で、帰ってきてからは、自分の部屋をすぐにボランティアに明け渡した。スイス人の神父は被災者一人一人に心を寄せて励まして歩いた。どこの世界もそうだが、多様な人間がいてはじめてさまざまな活動ができる。ボランティア活動は臨機応変に動かなければならないので、いろいろな人がいたほうがいい。

今回の支援は阪神のときの経験が生きた。何が必要か、何をどのように調達すべきか、資金はどうするか、カトリックのネットワークが即座に動いた。ガソリン不足が深刻なころも、教会の車はガソリンに事欠かなかった。全国の修道女が交代で支援にあたったのも大きかった。教会での献金、教会バザー、神父の講演料などがすぐに集まり資金は潤沢にあった。

（2013年6月26日　盛岡四ツ家教会にて取材）

佐久間　力さん　神学生　41歳（2014年3月10日現在）

神学生になる前はJICE（一般社団法人日本国際協力センター）にいて、農業土木部門を担当していた。JICEは、JICA（国際協力機構）が実施している海外援助の現場と日本の援助機関を結ぶ役目をもち、JICAが海外で効率よく支援活動を行えるよう、情報収集や派遣される人の国内研修なども行っている。震災の前の年、司祭になる道を選び、震災当時神学生になるために待機中だった。宮古はカトリック札幌教区が担当することになったため、当時札幌在住だった佐久間さんは、長期ボランティアとして被災地に派遣された。2011年3月22日に仙台に入り、3月23日から石巻に、その後、塩釜、釜石でボランティアを行ったあと、5月9日からボランティアベースの運営のため宮古に常駐するようになった。

前職での経験もあり、被災地での支援には支援者と被支援者の間をつなぐパイプ役が必要だということを実感した。その点宮古ではあまり対策がなく、臨機応変な対応もなかった。カトリック教会では早くから札幌教区が宮古支援に名乗りをあげていたが、宮古社協ははじめのうち外部のボランティアを受け入れていなかった。4月末ごろから徐々に受け入れが進んだが、当初外部の民間団体は入りにくかった。石巻では3月中に石巻専修大学に、社協、商工会、NPOなどの民間

団体が集まって、誰が何をどのように担当するのか、何が必要なのかを話し合う場が設けられ、お互いに補い合いながら、初期援助をスムーズに進める方法を模索していた。どこでどれだけの支援を必要としているのか、市や社協で情報をつかむとＮＰＯがすぐに動いた。自己完結型のＮＰＯは食料を自給しながら、迅速に行動を起こせる。これを使わない手はない。被災者支援では、まず被災者のニーズをすくい上げることが重要なのは当然だが、そのような仕事は社協ひとりが抱え込まないで、自己完結型で実績のあるＮＰＯなども取り込んで進めるほうが効率的だ。宮古は「外部」を警戒して、何でも内部で済まそうとするムラ意識が強いと感じた。ボランティアにもさまざまな特技を持つ人たちがいるので、そのような人たちをいかに有効に使えるか、この「振り分け」もポイントだと痛感した。

子供のために使ってほしいなど「意向」のついた支援金も多く寄せられる。目的をつけると支援金は集まりやすいが使い方が難しい。30万円でパンツを買ってくださいと言われたら、下着会社にそのお金を振り込んで送ってもらうわけだが、振込手数料は市が持たないといけない。石巻では被災者にお湯を提供してくれという支援金が来たが、この場合はガス代やコーヒー代も含まれると考えていい。意向通りに使わないといけない決まりはないが、モラルの問題としてほかのものに使うことはできない。これをどのように実現させるのか、いかに透明性を確保して使うか、被災者のニーズといかにマッチさせるかという「つなぎ」は、その専門の担当者を置かないとなかなかスムーズに行えない。宮古にはこれがなかった。社協の職員は災害や外部支援受け入れにおいては素人の集団だ。また、石巻のようなラウンドテーブルもなかった。支援金が何に使われているのか知りたい人もたくさんいる。このような情報提供も必要だ。

支援金の扱いは「つなぎ」と「透明性」がポイントで、「送りたい人」と被災者に「送り届ける人」をスムーズにつなぎ、情報開示していくことが求められる。非常時には、市役所にこのようなことができるロジスティックの専門家を置くといいと思う。海外支援専門のＮＧＯなどに呼びかければ、必ずそのような人はいるはずだ。常勤ではなくとも、非常時にすぐ声をかけられるようにしておくことが重要だ。釜石や大槌では、カリタスと上手に連携して、資金力のある海外カリタスや銀行の支援を得ることができた。

支援物資の無料配布にしても、いわゆる業者のような人が段ボール箱で物資を持って行くことに気づいていた。しかし、そのような情報を伝えたが、市が行った衣類の配布では、段ボール箱に何箱も詰めて持ち帰る人がいた。必要な人に物資が回らないなど、民間団体の情報が生かされなかった。カリタスの無料配布でも、最初はほしいものを欲しいだけもっていくという方式をとった。しかし、商店の人や被災者ではない人もやってきて、大量に持って行くケースが目立ったので、個数制限をしたり、45リットルの袋を渡し、入るだけ持って行くなどの方策をたてた。

衣料品の仕分けが最も困難だった。ボランティアのエネルギーの多くがそれに費やされてしまう。洗濯していないものなどが多く、古着と新品に分けて送ってくれるようにするなど対策が必要だ。衣類の中でも最も不足したのは下着で、特に２Ｌ、３Ｌは手に入らない。ワコールが協力を申し出たが、特定のところで社長が贈呈式をやるなど派手な演出があって、社長が来られないところには回ってこなかった。市では災害時に備え、食料品などと並んで下着をストックするといいと思う。

宮古で活動している札幌カリタスは主に仮設の集会所にカフェを開き傾聴活動を行っている。最初は１００円ショップでマグカップを買ったが味気ないので、札幌の教会の人に呼び掛けてティーカップを募ったら、ロイヤルドルトンなどイギリスの高級品が集まり、カフェの雰囲気が変わった。ただコーヒーを淹れるだけではなく、おもてなしをしたい気持ちをかたちにできた。カリタスジャパンでは全部の仮設住宅談話室に、津波で店を流された電気屋を通してテレビを購入し寄贈した。また、高浜の小学校にサッカーゴールを寄贈した。新盆支援をしたらどうかという話も出た。お盆は非常に大切な行事で、特に津波

で亡くなった方の新盆供養が十分にできないのは辛いことだと思う。被災者の心を支えるために、さまざまな支援を考えている。長期支援になることを想定して、札幌カリタスでは佐原に一軒家を購入しボランティアの基地も作った。ボランティア活動も苦労は多いが、司祭を目指す身としては、聖書の言葉にあるように「必要なものは与えられる」と実感している。

（2014年3月10日　二中仮設の集会所にて取材）

石崎瓔子さん　シスター　70歳（2014年3月10日現在）

フランシスコ修道会のシスター。札幌の藤女子大学の学生を連れてたびたび宮古を訪れている。今回で6回目の訪問になる。宮古の他にもボランティア訪問をしている。

最初に宮古に来たのは2011年6月で、そのときは教会に寝泊まりし、教会のハウスキーパーを行っていた。震災の直後から来たかったが、宮古市は4月下旬くらいまで外部のボランティアを受け入れなかった。2回目は同年12月で、仮設を回り被災者の話し相手になった。最初は修道服姿なので敬遠されることも多く、宗教の勧誘と間違われて通報されることもあった。しかし、だんだんに打ち解けて、シスターと話したいという人が増えていった。仮設は狭い社会であり、内輪では話せないことが多い。被災体験も人によって程度の差があり話しづらく、人間関係に行き詰っている人も多かった。外部の話し相手は重要で、それも「普通の人」よりさらに非日常的な修道女は、本音を話すには最適な相手だったのかもしれない。カリタスでは宗教色は一切出さないようにと言われていた。そのため、修道女も最初は平服で活動したが、修道服のほうが傾聴に向いていると感じ、途中から平服はやめた。

女性にくらべ男性は問題を抱えている人が多かった。行き詰っているという相談が多かったが解決策はない。ただ傾聴するしかなかった。精神的に病んでいるのではないかと思う人も何人かいた。体の医療はあっても精神医療は手薄だと感じた。ボランティアで傾聴できる人も少ない。学生は高齢者や中高年男性の話し相手に適しているが、年代が高くなると、相手の話をひたすら聞くのは難しい場合もある。2012年からは札幌の藤女子大学の学生ボランティアを引率してくるようになったが、彼女たちは話を聞くのが上手だった。仮設の住人にとっても若い女子大生の明るい華やか雰囲気は喜ばれたと思う。

（2014年3月10日　崎山仮設集会所にて取材）

佐藤彰洋さん　神学生　29歳（2014年3月11日現在）

カトリック仙台教区から震災直後に各地のボランティアに派遣された。塩釜、米川、南三陸町、宮古で活動した。宮古へは2011年の7月にはじめてやってきた。他の地区では漁業支援として漁船の洗浄などをしたが、宮古では主にカフェを行った。「カフェをやりますから集まってください」と声をかけても最初抵抗があった。「放っておいてくれ」という空気があった。それでも女性は集まってきたが、男性はほとんど来なかった。男性は人間関係が難しいと感じた。男性のボランティアが傾聴のために被災者の中に入っていくのは時間がかかると感じた。

社協は最初、カリタスというキリスト教系のボランティアに慎重だったが、次第に活動の幅を広げることに寛容になった。クリスマスに関して、震災の年は、社協の催しの一部に参加させてもらってクリスマスの歌を歌っただけだった。2012年には外国人神父がサンタクロースになって、子供のいる家庭を回った。2013年は社協の許可を得て、宮古教会の人達が仮設を回り、クッキー、キャンディ、カードを配った。札幌の教会の人達が1千400セット作成してくれた。カリタスの活動が認知されてきたとはいえ、今でも宗教色は全く出していない。

ボランティアの終了時はいつなのか。宮古教会では「わかちあいマーケット」を行っているが、様々な問題に直面している。開催すれば多くの人が来るが、被災者が今でも本当にこのマーケットを必要としているのか。一般の人々の関心の低下も感じる。ボランティアも激減している。震災直後の緊急援助的な支援と長期支援とでは問題が異なる。

ボランティアも量ではなく質が問題になってくる。仙台教区では、あと3年は支援を続けると言っているが、どうなるのか。難しい問題だ。

（2014年3月11日　カトリック宮古教会司祭館にて取材）

今野　忍さん　カリタス札幌世話人　昭和24（1949）年生

今野さんは定年になった2013年5月からボランティアに参加し、宮古ベースの世話人になった。

カリタスの宮古ベースは2011年4月22日に立ち上げられた。これはカリタスが入った被災地では最も遅い方だった。宮古市が外部ボランティアをなかなか受け入なかったためだが、札幌教区の信徒は宮古に入る準備を整えていた。宮古社協が外部のボランティアを受け入れる前に宮古へ着いたので、最初は山田町でがれき撤去などをしていた。

2013年4月から、カリタス札幌の世話人は5人になった。全員定年後の男性である。この5人が約2週間交代で宮古に来て、人はかわっても途切れなく「カリタス札幌」の活動ができるようになっている。現在は1万円の交通費補助が出て、あとは自己負担だ。ほとんどの人は札幌を夜9時に出るバスに乗って、苫小牧からフェリーで八戸に来て、宮古へ午後1時に着くルートで来る。70代の人も多いので大変だと思う。札幌のサポートセンターには宮古の専属が10人いて、人員や資金、仕事内容の調整を行っている。活動は、仮設を回る「移動カフェ」が中心だが、ボランティアは仮設の住人と直接コンタクトを取らないので、実施場所はすべて社協まかせだ。月末に行き先を言われ、札幌のサポートセンターで人員などの予定を組む。仮設住宅には人間関係が複雑なところが多く、集会室も一部の人たちだけが出入りしているところもある。出てこられない人は部屋に引きこもっている。しかし、個別訪問が禁じられていたので、集会室に足を運ばない人まではフォローできなかった。現在は個別訪問もできるが、高齢男性や精神的に不安定な人への支援は福祉の範疇で、ボランティアでは力が及ばない。また、仮設の住民と直接コミュニケーションをとっているのは社協だが、要望を出してもなかなか市に伝わらないようだ。仮設の住民の社協への不満も感じるし、実際に福祉的な面の対策は遅れているように思う。仮設の自治会長も、住民のクレームの処理が大変なので、新たななり手がないところが多いようだ。しかし、家を建てて出て行ったあとも自治会長を続けている人もいる。

移動カフェを行うようになって、多くの人と親しくなった。「だんだんボランティアの人が来なくなった」「忘れないでくださいね」「見捨てないでくださいね」という言葉を聞くと、続けることに意義があると感じる。

（2014年4月28日取材）

写真3　移動カフェ　清寿荘仮設住宅集会所
左側がボランティア
2014/04/28　撮影：久保田滋子

塩谷ケリーさん

足湯（専用の容器にお湯を入れ、足を温めながら手のひらを揉み、対面して傾聴を行う）をしながら、被災地各地を回っている。2011年4月に日本財団が福島で足湯を行い、希望者に講習を行って、個人が各地で行うようになった。塩谷さんは釜石のカリタスで足湯を知り、日本財団の講習を受けた。し

写真4　実田仮設住宅集会所で行われたカリタス札幌の移動カフェ
2014/04/29　撮影：久保田滋子

かし、希望者が殺到していて、1年くらい待たなくてはならなかった。宮古へは2012年8月にはじめて来た。以降、カリタスと活動をともにして、仮設を巡っている。足湯に対する反応が各地で異なる。南相馬、陸前高田などは人々がたくさん来るが、宮古では呼びかけてもあまり出てきてくれない。仮設住宅の集会室に来る人が固定されていて、いつも同じメンバーばかりだからと思う。集会室に来づらい人が多いのではないかと感じる。仮設によってはオープンなところもあるが、暗いと感じるところもある。

（2014年4月29日　実田仮設住宅にて取材）

毎原結衣さん　平成8（1996）年生　カリタスボランティア　天使大学1年

天使大学では「震災掲示板」があり、そこにカリタスのポスターが貼ってあった。大学生になったら一度は被災地でボランティアをやってみたいと思い、カトリック教会に電話をしてカリタスの担当者に意向を伝えた。行くことが決まり、宮古までの経路と到着時間を伝え、宮古駅でカリタスの世話人の出迎えを受けた。学校で被災地への募金を行っているが、宮古へ行くことが決まると、その募金を集める係だったこともあり、集まったお金を直接届けたらどうかということになった。

写真5　和見仮設住宅集会所で行われたカリタス札幌の移動カフェ
2015/03/09　撮影：久保田滋子

札幌カリタスが宮古支援をしているので、北海道のカトリック系の大学の人は宮古へ行く場合が多いが、藤女子大は交通費と食費を全額前払いで出してくれるらしく、多くの学生が参加していると聞いた。天使大学は2万円だけ出してくれる。一番安い経路で来ても2万円をオーバーするし、食費は自己負担のうえ、帰って報告書を出してからでないと支払ってもらえないので経済的には少々厳しい。今年は天使大学から6人参加した。昨年は14～15人参加したようなので、だんだん減ってきているのかもしれない。

カリタスへは朝食と昼食に150円ずつ、夕食に300円の合計600円を払う。しかし、実際にはこれより高い食事をしていると思う。佐原にカリタスのボランティアが宿泊するための家がありここで自炊する。活動は9時半から3時までで、昼食はおにぎりだけ。毎日違う仮設に行き、お茶とお菓子を出して被災者の話し相手をする。滞在期間中に「ふれあい祭り」があったので、9月6日はその準備、7日はジンギスカンの屋台を出した。

来る前、被災者はもっと落ち込んで暗いのかと思っていたが、みな明るいので驚いた。長くいるボランティアの人から、自分が行った西ヶ丘の仮設はとても明るい雰囲気だと聞いた。西ヶ丘ではあと1年は全員が仮設に残るということで、「みんなでがんばろう」という雰囲気があると仮設の人たちも言っていた。お茶のときの話題は、方言のこととか、来週の八幡様のお祭りのこと、宮古の神楽のことなど、自分たち学生に宮古のことをいろいろ教えてあげようというような内容だった。

大学で今回のボランティア体験を発表するのでもっと多くの学生が来るように勧めたい。自分は看護師になるが、できれば被災地などで精神医療の手助けをしたいと思うようになった。

（2014年9月9日　山田線盛岡行車中にて取材）

芳沢昌裕さん、武田五郎さん　カリタス札幌世話人
さおり織

集会所に集まってただお茶を飲むだけではなく、前向きに生きていくために、何か目標を持ってもらおうと、さおり織の機械と糸を寄付して指導者を送った。浄土ヶ浜、西ヶ丘、二中の仮設で行っている。

写真６　移動カフェ　愛宕小学校仮設
窓際の２人がボランティア
2015/05/02　撮影：久保田滋子

最初はイカのストラップを作っていたが、マフラーや布地を織れるようになってきた。さおり織は本部があって機械の特許を持っている。ここで、さおり織のイメージを損なわない程度の技術があると認められれば、「さおり織」として販売することができる。昨年10月、宮古市のゆるきゃらの「みやこちゃん」「サーモン君」を作り見てもらったところ、これならいいだろうということで販売することになった。

布と違って糸は高い。自分たちで資本投下していく方針で、売り上げから糸代を捻出しているが、商品がさばけないと次の糸が買えず行き詰る。そのようなときには、一時的な対応として、札幌カリタスが買ったこともある。カリタスではさおり織の製作に関して一切口をはさまない。あくまで陰で支援するだけで、製品の買い取りも「買い取って助ける」のではなく「作っていただいている」という立場で行っている。

荷竹仮設や清寿荘仮設ではメーカーから生地が持ち込まれてティッシュボックスのカバーやおはじきなどの布製品を作っている。そのような作品を秋冬の教会バザーで売ることもある。

世話人とボランティア

現在は世話人６人体制で65歳から73歳までの男性が行っている。ベース担当は和田真一さん。女性も募集しているが、大きな車に人を乗せ、細い路地を運転するので難しい。２０１５年３月まで、世話人は２週間交代だったが、４月からは１週間から10日交代にした。仮設で行う移動カフェは世話人のほかに１人か２人で行っている。人数が多きときはやりくりして世話人プラス３～４人で動く。札幌での後方支援は10人くらいが交代で行っている。ボランティアは大学の掲示板と教会のホームページで募集する。はじめての人にはオリエンテーションを行い、仮設の実情や持ち物、男性の場合飲酒を自粛するなど一般的注意事項などを話す。交通費はフェリーを使う最安ルートでカリタスから支給される。ボランティアに行きたいけれど行かれない人は献金や寄付で協力してくれる。

今のような移動カフェは２０１１年８月に仮設ができたときからはじまった。それまではガレキ撤去作業などをやっていたが、８月には大型ごみだけになり、仮設もできたので、社協から傾聴活動としてカフェを行ってほしいと依頼があった。最初は２チームで動いた。女性は若い人が多かった。芳沢さんはおせんべい屋さんが印象に残っている。家庭のゴミ出しを手伝っていたが、ご主人は口もきいてくれなかった。しかし、使い物にならなくなっていたせんべいを焼く機械を磨き、自転車の修理をしたら、「よく来てくれた」と笑顔になった。大変うれしかった。移動カフェでは、ただひたすら聞き役に回る。仮設住宅にはここを出たくても出られない人がいる。たぶん、10年たっても出られないかもしれない。最後の１人までつきあう覚悟でいる。また、災害公営住宅に移った後も談話室で地元の人たちとの交流を支援したい。現在、釜石など他所のカリタスとはイベントなどを通して交流している。また、年に３回「宮古ボランティアニューズレター」（カトリック札幌教区サポートセンター）を発行している。仙台教区に２００部送って各所に配布してもらっている。

（２０１５年５月２日　カトリック宮古教会聖堂にて取材）

和田真一さん　カリタス札幌世話人　昭和22（１９４７）年生

２０１１年９月からベース担当になり宮古に常駐していた。最初は教会の聖堂に寝泊まりしていたが、のちに松山仮設に住むようになった。２０１４年になって、県からの応援職員や工事関係者に貸すので出てほしいと言われ、引っ越し先を探しはじめた。社協のサロンやカ

リタスの移動カフェで仮設住宅を回っていたので顔なじみが多く、「カリタスさんにはずっと続けてほしい」と言われていた。松山仮設を出なければならなくなったとき、ある仮設住宅の人たちが「カリタスを追い出すとは何事だ」と怒り、市役所に直談判をしてくれた。このとき、本当に受け入れられているのだなと感じた。

カフェは住民が集まるチャンスを作っている。集まる人は決まっているが、カフェがなければその人たちも滅多に集まらないかもしれない。年度が変わるころになると「終わってしまうのか」と聞かれることが多い。しかし、一度かかわった限りは最後の1人が仮設を出るまで続けるつもりだ。カフェは傾聴を行うが、同じ仮設の人が何人かいるとあまり話さない。人がいなくなると急に話しだす人が多い。ほかにも傾聴ボランティアをする人たちがいるようだが、カリタスには特別親しみを持ってくれているように思う。最初のころは辛かったことなどをずいぶん話した。家を失った人、家族が亡くなった人、人が流されて行くのを見た人など、1人が話しだすといっせいに話しだした。しかし最近はあまり話さなくなった。震災後2年たったころから震災の話はほとんど聞かなくなった。

現在、災害公営住宅への移転が進んでいる。公営住宅に移って新しいコミュニティづくりをするときまた支援をしていきたい。

（2015年8月8日　カトリック宮古教会にて取材）

佐竹保子さん　カリタス札幌ボランティア　昭和18（1943）年生

宮古は外部ボランティアの受け入れが遅かったので、震災直後の3月から4月にかけては多賀城にいた。多賀城にはインド人やアメリカ人、イギリス人など外国人のボランティアも入っていた。避難所にいる人がまんじゅう一つを分け合っているところを見て、その外国人ボランティアが感動して泣いていたのが印象的だった。2011年6月15日、カリタス札幌のボランティア第10陣としてはじめて宮古に来た。札幌の北一条教会に集まってお祈りをして神父の話を聞き、車に薬や米などを積み込みフェリーで本州に渡った。青森から宮古へ車で向かったとき、自衛隊のトラックがずいぶん走っていた。カリタスのボランティアは60代が多かった。宮古では水が入った蔵の掃除や側溝の泥かきをした。ハエの季節なので急がなくてはならなかった。土嚢をいっぱいにすると持てないので、半分だけ入れて運んだ。1時間作業をして30分の休憩を繰り返した。「男山」の工場の側溝の掃除もした。酒の匂いが充満していて気分が悪くなる人もいた。ここでは山から引いている水を水がめにためているのだが、それがとてもおいしくて、もらいに来ている人も多く見かけた。

2011年は6月、7月、9月、10月、11月に宮古へ来た。仮設住宅への入居が決まった人に「引っ越しを手伝います」と言ったら、「運ぶ荷物などない」と言われた。また喪服がなくて困るという相談を受け、札幌のサポートセンターに相談した。それが喪服フェアにつながった。2年たったときには、孫の成人式に振袖がないという話を聞いた。「振袖なんて贅沢だよね」と言っていたが、これもすぐに相談した。日用品はたくさん来るが、喪服や振袖、自転車は社協も気づかなかった。カリタス札幌の宿舎として松山仮設を貸してもらうようになったが、最初に行ったとき、みな同じ食器を使っていたので、めずらしい食器を持っていって配った。最初は喜ばれたが、そのうち断られるようになった。2年くらいたつと物が多くなってきて狭い仮設に置き場所がなくなる。日用品以外、だんだん物は必要なくなっていった。

カリタス札幌独自の支援として「わかちあいマーケット」があった。寄付されたものや支援金で買ったものなどを配り好評だった。最初は全部無料で食料や洋服、日用品、家電などを配っていたが、住民の方から「すべて無料はよくない」と言われた。それから、タオルケット300円、バスタオル100円と廉価で販売するようになった。北海道で集めた自転車は500円で売った。

冬季に北海道からボランティアに行くのはいろいろ大変なことがある。冬はボランティアが減るが、雪かきなど、ボランティアのためのボランティアがいないとなかなか出てこられない。宮古から帰ったら家に入る通路が雪で埋まっていたということもあった。それでも札幌

カリタスの支援が続く限り来たいと思っている。ただ、災害住宅に移転すると出番がなくなるかもしれない。

（2015年8月10日取材）

第2部　各分野での震災後の取り組み

第9章　自治体の相互交流と援助体制
―宮古市と品川区の交流から災害時相互援助協定へ―

杉本栄子

はじめに

岩手県宮古市と東京都品川区は、「目黒のさんま祭り」が縁となり、平成14（２００２）年に災害時相互援助協定が締結された。この協定は、民間のイベントから始まった交流が行政の目に留まり、協力関係が築かれた。震災後はその協力関係が一層深まっている。

そのきっかけとなった「目黒のさんま祭り」は、品川区目黒駅前商店街振興組合が主催、品川区の後援により毎年９月第１日曜日にＪＲ・地下鉄目黒駅東口の目黒通りで行われている。

目黒界隈は江戸時代に松平讃岐守・森伊豆守などの上屋敷があったところで、落語に登場する殿様（松平出羽守）の早駆けの場所とされている。その地が舞台となって「さんまは目黒にかぎる」のオチでおなじみの落語が生まれた。そのよく知られた庶民の古典落語を基にして、平成８（１９９６）年よりバブルの土地高騰でビルだらけのまちになってしまった商店街の活性化のために、さんまを振る舞うイベントが行われた。

「さんま祭り」には平成11（１９９９）年の４回目から岩手県宮古市のさんま、平成10（１９９８）年から徳島県神山町の芳醇すだち、平成13（２０００）年から栃木県「高林雷の会」の大根おろし、和歌山みなべ町の備長炭、東京のべったら漬けの提供を受け、平成27（２０１５）年には新岩手農業協同組合の白米も加わった。年々物産展、ワゴンサービスなども盛んになり、開始時間の何時間も前から、長蛇の列ができるほどの盛況ぶりである。目黒通り沿いの誕生八幡神社では、落語の寄席も合わせて開催される。「目黒の良さ」と「さんまの良さ」の両方をお客さんに楽しんでもらおうという趣向である。

県立宮古水産高等学校の生徒さんの実習授業で作るさんまやさけの缶詰類、塩プリンも人気を呼んでいる。平成27（２０１５）年９月には20回目を数え、毎年ニュースにも大きく取り上げられるなどますます関心が高まっている。

因みに９月第３日曜日は、駅の反対側の目黒区田道広場で、目黒区民まつりの一環としての「さんま祭り」が行われている。そこでは宮城県気仙沼のさんまが使われている。

震災後、品川区では「目黒のさんま祭り」に加えて、新たな活動、交流が始まった。宮古市役所に派遣された品川区職員が職場で仲間を誘って、また、小学校のＰＴＡ連合会から生まれたグループなどによる支援の輪が広がっている。海産物の販売や小学生の交流など地道な活動から人と人の繋がりがより深くなっている。

１　「目黒のさんま祭り」と宮古のさんま

中崎政和さんの話　昭和23（１９４８）年生
「目黒のさんま祭り」実行委員長、目黒駅前商店街振興組合理事長上大崎目黒駅前町会長

平成26（２０１４）年４月１日、品川区誕生八幡神社で伺う。

「目黒のさんま祭り」は平成８年に、誕生八幡神社周辺で始めました。基本的に９月の第１週の日曜日にやるようにしています。

商店街が主催して、商店街の発展のためにやっています。商店街と言っても、真ん中に目黒通りがあり、みんなビルになって、貸しビルのオーナーばかりになってしまった。アーケードがある商店街の形ではないので、活気がなくなってしまいました。そこで、跡継ぎの方たちが20人くらい集まって、日頃商店街を利用してくださる方々にさんまを焼いて、無料でふるまったのが始まりです。最初は小さなバーベキュー用のやつで千匹焼いて、食べていただきました。小さな商店街ですから、それ以外のことはなにもしていませんでした。

例年本州で一番初めにさんまが揚がるのは宮古の漁港と聞いています。宮古は本州の一番北の漁港なんですね。ですからわれわれも時期的に９月の第１週に入荷する宮古のさんまを築地の仲買さんから調達

していました。第1回目のさんま祭りが新聞に掲載される際に、「このさんまはどこのさんまですか」と聞かれました。さんまが入っていた白い箱に宮古漁港と書かれていましたので、「宮古のさんまです」とお答えしました。それを目にしてくださった宮古市の方から、「来年のさんま祭りには宮古市がさんまを提供します」という申し入れの電話をいただきました。それで、平成10（１９９８）年第４回目から毎年提供していただいています。

災害時相互援助協定の締結

さんまを提供していただいた第４回目に、当時の熊坂義裕市長さんはじめ水産課や市の方々がこちらに来てくださった。品川区からもいろいろ協力を得ていますので、品川区長さんはじめ区会議員の方々がお見えになり、そこで接点ができました。しばらくしたら、その縁で品川区と宮古市の間で防災協定を結ぶことになりました。

平成23（２０１１）年東日本大震災のときは、品川区と宮古市が災害時相互援助協定を結んでいますから、品川区が宮古市に支援物資を送ることになり、「目黒のさんま祭り」の縁もあって、商店街にも声をかけてくれました。そこで、何がいいだろうかという話になり、紙おむつなどが不足していると聞きましたので、この辺りも売り切れになっていましたが、商店街の人間がいろんなところを探してある程度集めて、震災５日後、品川区から出るトラックに義援金50万円と一緒に届けてもらいました。僕らも荷物の積み込みを手伝いました。物資が宮古市に届いた直後に、山本正徳市長さんから感謝のお電話をいただきました。

その直後から商店街で宮古を支援する募金活動を初めて、６百万円くらい溜まったので、５月に山本市長さんにお届けに行きました。その時に市長さんから、「こういう状態ですが、宮古市民の復興に対する気持ちを示すためにも、今年もさんま祭りをやりましょう」と言っていただきました。

震災後も引き継がれるさんま祭り

平成23（２０１１）年９月のさんま祭りは、さんまがなくても、協賛をいただいている徳島県の神山町（すだち）、和歌山県のみなべ町（備長炭）、栃木県那須塩原市（大根）などのみなさんと一緒に、宮古市を支援するさんま祭りを開催しようと思っていました。そこに、市長さんが「今年もやりましょう」とおっしゃってくださったので、例年通りのさんま祭りを開催することができました。

平成23（２０１１）年第15回目には、宮古の状況を見てもらうコーナーを設けて、写真のパネルを20枚くらい展示しました。その後のさんま祭りでは、震災時の写真と現状の写真を展示し、復興の様子を伝えています。また、義援金箱を設置し、集まった義援金を宮古市に届けています。

年々さんまの南下が遅くなって、「目黒のさんま祭り」の開催が９月初旬であることから、さんまの提供に際しては大変なご苦労をしてくださっていると聞いています。「なにがなんでも、さんまは宮古で用意しますよ。安心してください」というお話をいただき、われわれも震災前からですけど、「宮古のさんまはおいしいですよ」と宮古市を全面に押し出しています。

商店街周辺はもともと広い場所がないところで、目黒通りの交通を半分止めて、宮古市が提供してくださる７千５００匹のさんまを焼いて、みなさんに食べていただいている。僕らは６時から用意することになってい

写真　震災後も引き継がれるさんま祭り

るけど、その前にもうお客さんが１００人くらい並んでいらっしゃる。だいたい2、3万人はお見えになる。山本市長さんも並んでいる方々に、「ありがとうございます」と、声をかけています。

さんまを焼く台は12台あります。宮古市、商店街、小学校のおやじの会、東京宮古同郷会、地域と関わりのある銀行などの大手企業、みゃっこ隊（本章3）など１５０名以上のボランティアのみなさんが協力してくれています。

東京で暮らす宮古出身者で組織されている「東京宮古同郷会」のメンバー40～50人が、毎年さんまを焼きに来ます。同郷会が僕ら実行委員会のひとりひとりの「宮古頑張ってください」という一言を撮影して、宮古の避難所の何か所かでお見せになって、またそれを見ていただいている方の映像をこっちに見せてもらったりしました。

普段日曜日は休んでいる飲食店も最近は開けています。何時間も並ぶのは大変なので、近くの飲食店でさんまを食べて、「目黒のさんま祭り」を楽しんでくださる方もたくさんいらっしゃいます。

最近は品川区ばかりではなく、他でもさんま祭りの開催が増えているようです。その際には僕らに運営の仕方などの問い合わせがきます。

私たちは、組合員が１１０店舗の小さな商店街ですが、これからも宮古市の復興のためにできることをしていきたいと思っています。

2　品川区の取り組み

佐藤和彦さんの話　昭和40（１９６５）年生
子ども育成課庶務係長（震災発生時は広報広聴課。２０１１年4月～２０１３年3月　防災課）

品川区職員ボランティア団体「みゃっこ隊」設立

協力

大森直人さん　昭和50（１９７５）年生　防災課地域連携係長

佐藤史隆さん　昭和59（１９８４）年生　土木管理課（震災時は防災課）

平成27（２０１５）年10月21日、品川区役所防災課で伺う。

宮古市と災害時相互援助協定を結んだのは、平成14（２００２）年、前区長のときですね。

支援物資の第一便が行ったのは16日。11日に発災して、そのあとすぐ準備をして、本当になにが必要かわからなかったので、取りあえず「行こう」と詰め込んで…。

―佐藤史隆さん：やっと連絡が取れて、あまり不要な物を持って行ってもしょうがない、なにが必要かということをある程度お聞きして、発電機とかガソリンとかをトラックに積んで、第一便が行った。―

佐藤（史隆）は地震のときに防災課にいたんですが、私は地震後に防災課に異動してきた係長でして、地震が発生した3月は広報広聴課にいたんです。で、防災課の職員としてではなく、広報広聴課の職員として映像の関係で携わっていたので、ある程度はずっと付きっ切りで見ているんですけど。実は、私は広報広聴課の更に前は防災課にいたので出戻りなんです。

あのときはどこまで行けるかということはかなり調べていました。どこでガソリンを入れられるかなど確認して、準備をして行った形です。実際高速道路はあまり問題なく進んだようで、高速を下りて盛岡からの国道が大変だったと思います。東北道は段差ができていたようですけど、津波の被害とかはなかったようです。通常のように飛ばすことはできないけど、ガソリンさえ確保できれば行ける感じだったんです。

１年後の平成24（２０１２）年度の4月から宮古市に職員5名を派遣しています。平成25（２０１３）年度には女性も含めて事務3名、技術4名ぐらいだと思いますけど、職員の計7名が派遣されています。宮古市のゆるキャラ「みやこちゃん」と「サーモンくん」の着ぐるみのデザインに携わった職員もいます。

（平成26（２０１４）年度、27（２０１５）年度は共に7名を派遣）。

品川区から宮古への支援：発災5日後の3月16日に第1陣がトラック

5台に区職員2名が同行して、備蓄物資（食料、飲料水、生活用品など）を積んで役所の前から宮古市に向けて出発した。
第2陣＝3月23日トラック7台に区職員3名同行。区民及びタイ王国からの支援物資（毛布、飲料水）
第3陣＝4月6日トラック4台に区職員3名同行。区民及びタイ王国からの支援物資（生活用品など）
第4陣＝6月22日トラック1台に区職員4名同行。リサイクル自転車60台
第5陣＝8月11日トラック1台に区職員4名同行。区内事業所からの支援物資（生活用品など）
その他義援金など平成27年4月までに14回持参する。
（品川区資料・災害援助協定を結ぶ自治体支援より）

再び防災課に異動

私と大森は地震発生直後の4月1日に、防災課に異動になったんです。ここにいる3人は、私が係長で、同じ係にいまして、その年の8月に佐藤（史）と品川区の幹部職員と一緒に、それまで集まった義援金を持って宮古市を訪問しました。車で明け方に出て、翌日の夜中に帰って来るという夜討ち朝駆けです。その当時はまだまだ津波の被害も残っていた。帰り道はずっと海岸線を行けるところまで走って、山田町を通り、南三陸を通り、陸前高田まで見て一関に戻って、帰ってきたんです。約6か月後に現状を視察することができました。

その後、被災地支援を含め、防災計画も見直せという指令が出てきまして、あるいは支援の手がいろいろなところからきて、義援金が集まってくるんです。その受け取り、確保、宮古市にお渡しするまでの処理など膨大な業務がありました。

ひとつ大きいものは、大森に掛りっきりでやってもらったんですけど、品川区の地域防災計画の見直しに2年がかりで取り組んだことです。当然品川区の町会、自治会も防災に対する意識が高まってくるんです。自分たちの知識や訓練を得たいということで、地震の前とは意識ががらっと変わった。当時は職員が交代で泊まり込む宿日直もあり、大変な忙しさでした。

防災課を離れて支援活動

私は2年間防災課の係長をやらせてもらって、現職に異動になったんですけど、防災課の忙しさから比べて、環境が大きく変わりました。防災課のときは立場がありますので、個人的な支援というのがなかなかできなかった。

当時は若い職員が、プライベートでボランティアとして、瓦礫処理やいろいろな形で支援に行ったという報告は聞いているんですけど、そのとき受け入れ先は彼らを行政の人間とは見ないんですね。行政からしっかり派遣できるのであれば、もうちょっと違うレベルのお手伝いができるのではないかなと感じながら、2年間防災課の係長として考えていました。で、防災課の職員を一歩外れて、携わってきた2年間に感じたことや余裕がでてきた部分もありまして、なにかできないかなあと考えていた時に、嫁から「結婚記念日なのにどこへも行かないの」と催促されたので、「だったら、ドライブしよう」って、プライベートで宮古を訪れました（2013年6月）。日帰りのドライブで、また同じ経路を通り、仕事で行った時（2011年8月）と同じところで写真を撮りました。けど、なにも変わっていなかった、草が生えているだけでした。

漁港でおばあちゃんとすれ違って、「どちらから来たんですか」なんて声をかけられて話をしました。そのときはもう品川区から職員を派遣していたのですが、品川のことが全然知られていないんだなという思いと、同じ場所を見て、被災地はまだなにも変わっていない、終わっていないんだという思いで帰ってきたんです。

ちょうどその頃、1年目の派遣から戻った若い職員がいまして、1年間宮古でやったことを持って帰ってきたのかな？　なにも表していないなと思って、「なにかやらないか」と声がけしたら、「やりたいです」というので、「じゃあ、寄付を集めることはできないけど、これを風化

させちゃあいけない。まだこういう状況だよと伝えよう」と、少しでも復興の支援ができるのであればということで、若い人たちに声かけしてもらって、平成25（２０１３）年７月に「みゃっこ隊」を立ち上げたんです。

被災地では最初に水産業が戻ったので、「イカやワカメを取り寄せてＰＲしよう、原価で販売しよう、パネル展示をして状況を伝えよう」と、８月４日に大崎第一地区の区民まつりでイカ焼きや海産物の販売とパネル展示をしました。それが最初で、それから「できることをやっていこう」と品川区内のお祭りなどで繋がりのあるところにお願いして、人員が集まれば参加させてもらい、海産物のＰＲ・販売やパネル展示をしています。うちの職員も無理をしない範囲で活動しています。

最初の年は海産物を買ったり、写真を見てくださった方にメッセージを書いていただいたんです。いろいろなところで活動してメッセージが溜まった。派遣で行っている職員が、現地で苦労してくれて、パネルに貼りつけて市役所のロビーに飾ってくれました。あまり苦労をかけてもいけないので、それは１年でやめました。

宮古に派遣されている「みゃっこ隊」のメンバーの従兄弟が人気の高いシェフなんです。彼からお願いして、シェフにイカ焼きソースのレシピを作ってもらったんです。佐藤（史）、隊長の鈴木君、私がそれぞれの自宅の台所で、そのレシピを基にソースを仕込んでいます。

活動の定番になっているのは、福祉施設の五月祭りと紅葉まつり、大崎第一地区の区民まつり、西大井広場公園の納涼祭、荏原第四地区の区民まつりなど。また、消費生活展や目黒のさんま祭りで出店者のお手伝いをしています。その他、こぢんまりしたお祭りや青少年委員会のイベントからも声をかけていただいて、活動の場がだんだん広がっています。今は「品川役立ち隊」という中学生から大学生が活動しているグループがあるんですが、「みゃっこ隊」と「品川役立ち隊」のコラボという形でブースを手伝ってもらっています。

３　「みゃっこ隊」を組織する

鈴木達朗さんの話　昭和60（１９８５）年生

荏原第四地域センター。

平成24（２０１２）年４月から平成25（２０１３）年３月宮古市役所に派遣

品川区職員ボランティア団体「みゃっこ隊」隊長

平成26（２０１４）年５月25日、五月祭り（社会福祉法人品川総合福祉センター）で伺う。

平成24（２０１２）年から25（２０１３）年３月までの１年間宮古市役所に行っていました。業務は津波で被災された方の住宅を再建するために、新しく山の中を切り開いて住宅地を造るための土地の買収をしていました。田老と港町の鍬ヶ崎を担当していました。品川区役所では全然関係のない事務関係の仕事をしていたんです。

「みゃっこ隊」を作ったのは、東京に戻った平成25（２０１３）年の８月です。まずは宮古市の被災の現状を東京の皆さんに知ってほしい、それにまだ復興の途中なんだという思いを共有したいということ。そのためにパネルの展示をしました。そして、宮古の海産物を皆さんに食べてもらいたいと思い、品川区内の祭りや商店街のイベントなどに参加してイカ焼きやワカメを紹介したり、販売しています。

メンバーは区役所の若手職員20～30代が30名（２０１６年は40名）くらい。自分の繋がりのある職員たちに「ボランティア活動やりませんか」と声かけをした。地方出身の職員も多くて、興味を持ってくれました。

イベントでボランティア活動

主な活動は品川区で開催されるイベントで海産物の販売をするんですが、「みゃっこ隊」が独自に宮古の漁協などから仕入れ販売する場合と、産直販売のブースを開くところにお手伝いにいく場合とがあります。特に限定しないでできる範囲で参加しています。

「目黒のさんま祭り」は実行委員会があって、「東京宮古同郷会」という団体で、東京に宮古出身者が集まっている会があるんです。みゃっ

こ隊がメインでやるのではなく、前からその会のお手伝いをやらせてもらっています。当日は朝から大変ですが、去年は小雨が降っていたので、まだ匂いがそんなに飛ばなかったんですけど、2年前は匂いがフワッとなるんで、結構きつかったですね。

今日の「五月祭り」は宮古の漁協さんから海産物を仕入れて、「みゃっこ隊」で独自にやらせてもらっています。試食の真崎焼きは、田老の漁協の方が今まで捨てていた茎ワカメを、少しでも商品拡大したいということで開発したものです。タコ焼きのタコのかわりに茎ワカメを入れてあります。食感を楽しんで、茎ワカメの美味しさを味わっていただきたい。水産業者さんから仕入れたイカも会場で焼いて販売しています。

宮古の職員さんも「さんま祭り」や物産展でいらっしゃる方とは交流しています。（「とごしぎんざまつり」、「しながわ夢さん橋」、品川区商連「大商業まつり」などのイベント）

「みゃっこ隊」のメンバーは宮古に行ったことがないので、一般職員同士の交流は難しいですね。田老で開催する「さけあわび祭り」などは東京の祭りとは雰囲気も売っている品物も全く違うので、そういう祭りに「みゃっこ隊」が行って、お手伝いができればいいなと思っています。

4　小学校ＰＴＡの支援活動

原　健治さん　昭和41（１９６６）年生
大原小学校ＰＴＡ会長
平成25（２０１３）年度／26（２０１４）年度品川区立小学校ＰＴＡ連合会会長

平成28（２０１６）年3月29日、大原小学校で伺う。

震災が起こった時に、私が品川区立大原小学校のＰＴＡ会長に就任しまして、被災地になにか支援をしようということで、大原小学校の中で募金活動をしました。1回目と2回目で集まった募金は義援金として、3月と4月に赤十字に送りました。それから、学期ごとにやろうという話があって、その時に赤十字に送るんだったら、「送り先を小学校にしたい」という話が出たんです。

被災地と言っても、青森から茨城、千葉まであって、どこに支援をしたらいいのだろうか、範囲が広すぎる。で、私どもは品川区立の小学校なので、「品川区とゆかりのあるのはどこだろう」って調べたら、福島県の富岡町と岩手県の宮古市でした。富岡町は原発で誰も住んでいないので、支援のしようがない。「じゃあ、岩手の宮古にしよう」という話になりましたが、情報が全然ない状態だったんです。

そこで、品川区の小学校のＰＴＡ会長37人と校長37人で構成している小Ｐ連（品川区立小学校ＰＴＡ連合会）というのがあるんですが、そこに情報を求めたんです。すると、当時の連合会長が「大原小学校1校でやるのではなく、小Ｐ連全体でやろう」と言われて、各校に呼びかけて賛同した小学校の義援金を小Ｐ連でまとめることにしました。

大原小学校ＰＴＡはその後も募金活動や行事ごとに物産展を開き販売活動をしています。２０１６年7月に集まった義援金51万円を鍬ヶ崎小学校に届けました。

「つなこし」の結成

小Ｐ連の有志が集まって活動する中で、「つながるようになればいいね」ということから、「つながる・みやこ と しながわ」という意味で、「つなこし」と名付けて、実際に動く実行部隊を6月に発足させました。

平成23（２０１１）年8月1日に私とメンバー3人の４人で初めて宮古を訪問して、宮古市ＰＴＡ連合会（小・中学校が連合している）の事務局長である宮古西中学校の副校長に会って、いろいろと話をしました。そこで驚いたんですが、宮古市と品川区が災害時相互援助協定を結んでいることを、宮古市の人はほとんど知らない、品川区の人も知らないんですね。

最初、われわれは小学生たちに、「早く立ち直ってください」という気持ちから文房具や運動用具を贈りたかった。そういう話をすると、宮古の先生から「子どもたちがもらい物ばっかりして、お金が動かない。

地元の商店がつぶれてしまう。物は復興になるかどうか」と言われて、その話を品川に持ち帰って、「物資よりお金を集めよう。どういう形でもいいから使ってくださいということにしよう」となったんです。そして、12月までに集まった2百万円余を12月25日にクリスマスプレゼントという名目で宮古のＰＴＡ連合会に直接送りました。

その後、宮古から購入品の一覧表や写真が届き、それから交流が始まりました。

「森・川・海体験交流」に招待される

宮古市は震災前から予算を組んで、観光ツアーというのをやっていました。

平成25（２０１３）年に宮古市の姉妹都市である青森の黒石市と八幡平市の小学生、そして災害時相互援助協定で支援してきた品川区が、「森・川・海体験交流」にご招待を受けた。教育委員会経由で品川区の小学校に学校単位での募集があったんですが、手を挙げたのが大原小学校だけだったんです。５年生が臨海学校と重なったので、４年生と６年生の24人が参加させていただき、何人かの保護者と私も宮古市の方から誘われて参加しました。

毎年やるということだったので、そこで「復興を意識するなら親も呼んだ方がいいんじゃないですか。親子で連れてきますよ。是非募集をかけてください。大原小学校だけではなく、われわれ「つなこし」が小Ｐ連に呼びかけましょう」という話をすると、宮古市も喜んでくれました。

平成26（２０１４）年の2回目（8月8日～10日）は、親子20組の募集がありました。そこで、「つなこし」のメンバーが「1人8千円で体験ツアーに参加できます！」というチラシを作成し、品川区の各校に配り、1回目の参加者が体験を話すなど宣伝に努めました。14校から親子20組の参加があり、保護者や品川区の職員もボランティアスタッフとして参加しました。

平成27（２０１５）年の3回目には人数を増やして行きました。

子どもたちは東京にいてテレビを見ても、何もわからない。被災地をじかに見ればいろんな思いがわいてくる。他人事じゃなく、自分たちも共助の精神を持てたと思います。また、都会では体験することのない自然にも触れることができました。ただ、夏休みに入っていたために、学校単位で子どもたち同士の交流ができなかったことが残念です。保護者たちは夜の懇親会で大いに交流をしました。

宮古市の招待事業は平成27（２０１５）年で打ち切りなので、今後も続けて参加できるように、小Ｐ連で資金源などを考えているところです。

森・川・海体験交流：宮古市が平成22（２０１０）年から小学生を対象とし開催している事業。その目的は「市民憲章に謳われている「森・川・海と人とが調和するやすらぎのまちを観光面でもＰＲするため、森の栄養が川を伝い海に運ばれ、宮古市の基幹産業である水産業の海の恵みをもたらしていることについて、森、川、海でのそれぞれの体験を通じ、楽しみながら学習できる教育旅行を造成し、モニターツアーを検証する」とある。（産業振興部の資料より）

おわりに

平成28（２０１６）年2月16日宮古市主催の「ありがとうinみやこ東日本大震災復興事業情報発信フォーラム～東京フォーラム～」が、品川区立総合区民会館・きゅりあんで開催された。宮古市の山本正徳市長の「美しい森、清らかな川、豊かな海を資源とし、安らぎのある『まち』を目指していきます」という開会宣言に始まり、宮古市職員の復興事業の状況報告、1年間宮古市に派遣されていた品川区職員の報告、東京工業大学大学院屋井鉄雄教授の講演「復興のためのハードとソフト～新たなまちづくりへの提言～」、実際に震災を体験した3人と宮古市に派遣された区職員4人をパネリストとしたディスカッションなどが行われた。

まちづくりには「人」が重要であることを確認し、最後に次の「品川・宮古ＩＳＭ宣言」を守り通すことを宣言し、閉会した。

いつまでも　住み続けたいと思える　まちに向けて

「品川・宮古ＩＳＭ宣言」
品川区と宮古市は協力して

1　【活力】いつも、さんま祭を、盛り上げます
2　【安全】いかなるときも、双方の住民を、迎え入れます
3　【環境】いつまでも、住み続けたいまちを、目指します
4　【生活】いまから、賛同する人を見つけ、広げます

品川区民と宮古市民はお互いのまちに

5　【生活】いつかは、素敵な仲間と一緒に、まいります。

以上、５つのＩＳＭ（イズム）を守りとおすことを宣言します。

参加した品川区在住の50代女性によると、防災や復興に関係している人の発表する復興計画の話が印象に残ったという。

「目黒のさんま祭り」から災害時相互援助協定へと発展した宮古市と品川区は、民間と行政の両面からまた人的・物的のあらゆる機会をとらえ、お互いの関係を深めている。この「５つのＩＳＭ」を守ることで、今後より一層の交流が生まれ、それぞれの町の発展に繋がっていくことだろう。

第2部　各分野での震災後の取り組み
第10章　観光の被災と復興

藤野陽平

はじめに　―宮古の観光の被災状況―

岩手県沿岸の様々な産業に大打撃を与えた東日本大震災であるが、その中でも最も打撃の大きかった産業の一つに観光業があげられるだろう。それは震災直後、特に東北三県への観光客が激減したというだけではなく、宮古の観光地は浄土ヶ浜、三王岩、魚ヶ崎等と沿岸部に集中しているため、実際に多くの施設が被災し、直接的な被害も大きかったことも含まれる。

一方で、宮古市にとって観光業は復興に向けてとくに取り組むべき産業の柱の一つに位置づけられてもいる。例えば、『広報みやこ』（以下、『広報』）141号には宮古市震災復興基本方針の概要が掲載されているが、観光に関しては損壊した国立公園施設や主要な観光施設などのがれきの撤去作業と、観光施設などの早期復旧を行うとしている。また、151号には「被災した観光施設などの早期復旧を図り、本市の特徴である豊かな地域資源が総合的に結びついた魅力ある観光の復興・再生を図ります」、「観光施設などの復旧、受入体制の再構築・支援、地域観光資源の再生、復興情報の発信・誘客促進」と積極的に観光の復旧に注力することが明記され、161号に掲載された復興計画の推進計画の産業・経済復興の項目に、「観光の復興・再生」として「観光客誘客促進事業など」、26事業が採用された[注(1)]。このように観光の復興は官民あげての事業であると認識され、多くの関係者が取り組んでいる。

具体的に宮古の観光客数を見てみると2009年に169万8千6

表1　イベントと参加者数

月日	イベント	参加人数
2月17日	毛ガニまつり	15,000
4月28～29日、5月3～6日	浄土ヶ浜まつり	25,365
8月31日～9月1日	閉井川遊イング	1,700
9月7～8日	やまびこフェスタ	7,500
10月5～6日	宮古市産業まつり	11,255
10月20日	新里まつり	7,000
11月24日	鮭・あわびまつり	8,000

（H.25年度、宮古市統計より）

94人、2010年に124万2千425人だった訪宮客は東日本大震災以降、2011年には33万6千464人、2012年73万9千580人、2013年110万6千606人と徐々に以前の賑わいを取り戻しつつあるが、今なお震災以前より少ないという状況である。なお、2013年度の宮古市の主要なイベントと参加者数は表1の通りである。

観光地の被災状況は、被害推計が136億40万円で自然公園が16か所（園地施設10か所、野営場2か所、浄土ヶ浜レストハウス1か所、シャワー棟等3か所）と観光施設が36か所（シートピアなあど、たろう潮里ステーション、ビーフビレッジ区界、民宿等33か所）被災した（宮古市総務企画部復興推進室2012年：143頁）。なお、震災以降に宮古市で行われた主要なイベントは文末の一覧表（表3）にまとめてあるので、参照いただきたい。

浄土ヶ浜の被災と復興

本論に入る前に宮古のシンボルであり、主要な観光地である浄土ヶ浜について述べておく。浄土ヶ浜は今回の津波で被災し、落石や地盤沈下のため遊歩道が使用できなくなり、観光地として大きな打撃をこうむった（みやこわが町、以下「わが町」413号：26～27頁）。2011年には海水浴場を開けない状況で、浄土ヶ浜海水浴場の他も女遊戸海水浴場、真崎海岸海水浴場、藤の川海水浴場、蛸の浜海水浴

注(1)　紙幅の関係上これ以上は延べないが、より細かくは宮古市の『東日本大震災復興計画』に記されているので、併せてご覧いただきたい【宮古市総務企画部復興推進室2012】。

写真１　休館中のシートピアなあど
2012/09/13　撮影：藤野陽平

場、大須賀海水浴場が開設を中止した（広報１４３号：16頁）。浄土ヶ浜海水浴場が再開されたのは翌２０１２年の夏になって７月21日から８月19日の期間だった。なお、同年７月25日から８月19日には藤の川海水浴場も再開している。また、２０１２年１月24日には砂丘、砂嘴、海浜、島嶼の指定基準により、国の名勝にも指定された（広報１９１号：23頁）。２０１３年７月20日には浄土ヶ浜にスロープの歩道が完成し、観光客にとっての利便性を取り戻しつつある（広報１９３号：18頁）。

こうした中、多くのボランティアが浄土ヶ浜を訪れ、がれきの撤去などに協力したほか、「浄土ヶ浜をきれいにする会」（会長：澤田克司さん）が継続的に活動を行った。この会は浄土ヶ浜の自然を美しく保持することを目的に、浄土ヶ浜周辺の観光施設や市内事業者など32団体によって１９６８年に結成された。本会はゴールデンウイーク前の浄土ヶ浜一斉清掃を毎年行い、７月から８月に宮古市主催で行われる自然公園クリーン作戦にも参加している（広報１６７号：３頁）。２０１４年５月17日（５月16日が岩手観光の日一万人大掃除会）にも本会の主催で浄土ヶ浜大清掃を行い、市民約40人が参加している（わが町４２６号：12頁）。こうした地道な活動が評価されてか、２０１１年５月には本会と陸中海岸国立公園宮古地区集団施設地区運営協議会が、公益財団法人におい・かおり環境協会の「におい・かおり環境賞」を受賞した。授賞理由は「会は浄土ヶ浜を地域一体となり安全かつ安心に利用することができるよう維持管理活動を行っており、東日本大震災後には官民一体で復旧作業を行い、磯の香りを取り戻し、良好なにおい・かおり環境の創出・保全・向上に貢献」したことだという（わが町４０３号：10～11頁）。

２０１２年７月７日午後６時30分から８時30分に浄土ヶ浜「鎮魂の祈り」として供養の活動も行われた。震災で亡くなられた方々の鎮魂と、被災された方々の一日も早い心身の回復と長寿を願い平泉・毛越寺の「延年の舞」と「黒森神楽」が共演した（広報１６５号：17頁）。

道の駅・みなとオアシス　シートピアなあど（写真１）

２００５年に開業し、海を表す「シー」とユートピアを掛け合わせたシートピアという愛称で知られる道の駅・みなとオアシス「なあど」（なあどは宮古方言で「いかがですか」の意味）であるが、海沿いにあるために建物の２階半分の高さまで浸水し、深刻な被害を受けた。なあどより提供された資料によれば、隣接したタラソテラピーの施設は解体され、施設周辺は50㌢地盤沈下した。

地震発生時には揺れが落ち着くのを待ち、来場者の誘導をし、防災無線等で情報を収集、来場者が全員避難したことを確認し、従業員は近辺の高台にある宮古漁協ビルへ避難した。最大波が到達してからは漁協ビル裏の大杉神社へと移動し、地元住民に誘導されて避難所へ移動した。

その後の取り組みとして、２０１１年６月16日、仮設住宅への移動販売をスタートさせ、同年８月には市場食堂の営業再開、翌２０１２年３月24日には仮設店舗にて営業を再開させた。２０１３年７月６日には２年４か月ぶりにリニューアルオープンを迎え、シートピアなあどオープニングセレモニーが開かれた。山本市長は「観光都市のシンボルとして全国にアピールしていく」とあいさつし、セレモニーには関係者１３０人が参列した。イベントでは野外広場のステージで山口太鼓の演奏、民謡、屋台でｓｅａ級グルメグランプリを受賞した浄土ヶ浜旅館の「あんかけウニ飯」などが販売された（わが町４１６号：15頁、広報１８９号：12頁、１９１号：24頁）。

写真２　マリンハウス内部　壁一面に当時の応援メッセージが残されている
2015/05/06　撮影：藤野陽平

２０１３年11月２～４日にはなあど創業10周年祭がおこなわれ、オープンセレモニー、サンマ焼きお振る舞い、「みやごのひっつみ」お振る舞い（２日）、産直収穫祭（３日）、小田代直子ショー（４日）、海のソフトクリームの特別価格での販売、屋台出店、せんべい焼き体験、抽選会（２～４日）、みやごのひっつみ販売（３～４日）といったイベントが行われた。

浄土ヶ浜マリンハウス

被災し一時営業できなかったが、２０１１年６月には仮設売店と青の洞窟探検の営業を再開した。窓に打ち付けられたコンパネは応援メッセージ（写真２）で埋めつくされた（わが町３９４号：４～５頁）。また、ミュージシャンのＲＹＯＳＵＫＥさんが、仲間のロックバンド14組に呼びかけ、合同で出したＣＤ『ｈｏｐｅ』の売り上げでスワンボート２隻が寄贈された。このスワンボートは「希望のスワン」と名付けられた。マリンハウスには震災前15隻のスワンボートがあったのだが、そのうち13隻が被災した。無事残った２隻、震災後補助金で購入した４隻と合わせてこれで８隻となった（広報１８９号：26頁）。

みやこ浄土ヶ浜遊覧船

県北グループが運営するみやこ浄土ヶ浜遊覧船であるが、震災後しばらく運航ができない状態が続いていたものの、２０１１年７月16日に運航を再開させた。同日、青の洞窟さっぱ船遊覧、浄土ヶ浜を周回するボンネットバス「浄土ヶ浜号」の運航も開始した。遊覧船は震災のため２隻が廃船となったが、残った１隻での再開となった（広報１４３号：20頁）。この１隻の船が残ったのには船長の坂本繁行さんがとった行動が大きい。坂本さんは３月11日、団体客の予約が入っていて、20人ほどを乗せた運航を終え事務所に戻ろうとしたときに地震にあう。大きな揺れのため津波が来ると確信した坂本さんは機関長と甲板員の３人で引き波が起きているなか、船を閉伊崎の沖から北へと沖に向けて出した。船を出して30分ほどで大きな津波がきたが、その後無線で会社と連絡を取りながら海上で３日過ごし、津波注意報が解除された13日午後に港に戻った（広報１４５号：３頁）。

1　宮古観光文化交流協会

宮古にはイベントなど誘客活動を行っている一般社団法人宮古観光文化交流協会（以下、観光協会）があり、観光関連の業務を行っている[注(2)]。２０１５年２月19日宮古駅前総合観光案内所にて「全国のみなさんに来ていただいて、気にかけていただいて、何とか進められている。早く元に戻りたいと思っています」と述べる事務局長の**山口惣一さん**からお話を伺った。観光協会は主にイベント誘客事業を行っていて、会員は２００ほどの市内観光関係の業者である。年１回の総会、年２～３回の理事会を行う。イベントの運営とＰＲ、浄土ヶ浜レストハウス、観光案内所、学ぶ防災の運営も担っている。

山口さんの説明では宮古の観光は浄土ヶ浜を売りにして、その周りの景観も見せるという形をとっており、観光として売りやすいスタイルだという。震災以降ではＮＨＫの朝の連続テレビ小説「あまちゃん」人気や復興関係で人は来ている。残念なこととして宮古の観光の売りでもある海鮮を中心とした美食であるが、一番おいしい時期である１月から３月には来客が少ないことを挙げている。

注(2)　広報１５９号：３頁に観光協会の特集がある。併せて参照いただきたい。

写真３　浄土ヶ浜まつり
2015/05/04　撮影：藤野陽平

被災してから、半年ほどは観光どころではなかった。浄土ヶ浜のレストハウスも被災して営業できず、海水浴もできない。「何をしていいのかわからない状態だった」と山口さん。そのため、観光協会としては誘客よりも市からの委託でキャラバン隊を組んで、首都圏をめぐった。被災した企業が立ち直っていけるように市外に販売する仕事だった。岩手県内、首都圏、関西へと商店から商品を預かって持っていった。少しずつでもしっかり進まなくてはいけないというアピールも兼ねていた。この仕事は2年目くらいまで行った。その他にも宮古や岩手県のＰＲ活動に同行することもあった。

被災した後、できることから取り組もうと4月の浄土ヶ浜まつりから再開した。物品は流されたので、郷土芸能の上演や鍋を作ったりした。しかし、まだがれきがつみあがっている頃で、お客はほとんど来なかった。

(1)　イベントの一例として　浄土ヶ浜まつり

観光協会はいくつかのイベントを主催している。ゴールデンウイーク中の浄土ヶ浜まつり（写真3）、夏の浄土ヶ浜サマーフェスタ（ビーチサンダル飛ばし、浴衣コンテスト、シーカヤック、スイカ割り等）、秋の浄土ヶ浜さんままつり（別名さんまフェスタ、千人に炭火で焼いたさんまをふるまう）と浄土ヶ浜サーモンフェスタ（以前は津軽石川でつかみ取りをしていたが、震災後川の環境が戻っていないので、別の場所で行うようになった。２０１５年からは「元祖」宮古鮭まつりと題して津軽石川河川敷で行われるようになった）、２月の毛ガニまつり（写真４）といった具合である。ここではそのイベントとして２０１５年４月29日と５月３～６日におこなわれた浄土ヶ浜まつりを紹介したい。

写真４　毛ガニまつり
2014/02/22　撮影：藤野陽平

初日である４月29日９時30分から「賽の河原の地蔵尊と観光客の安全祈願祭」として慰霊と安全祈願が執り行われた。参加したのは50人強の参加者とスタッフ、参加者は関係者で、ゴールデンウイークに入っているものの、とても寒い日であったため観光客は散見される程度であった。その他メディア関係としてＩＢＣ岩手、岩手日報、広報みやこ等だった。

全員が常安寺の住職を合掌で迎え祈願祭が始められる。その後７名の蘭煎会の会員による献茶の後、海難者、東日本大震災没故者のための読経、献花、焼香が行われた。

10時30分からは浄土ヶ浜ウォーキング（写真５）が行われた。参加者は30名とスタッフで、スタッフには「もてなし隊」の25名も加わっていた。受付、点呼、スタッフの紹介、ラジオ体操の後、出発し、コースは以下の通りである。

ビジターセンター前出発→急な階段→臼木山→宮古港海戦記念碑→トイレ→県立水産科学館→道路を渡って→森林浴の道→水神社→砥石浜→レストハウス前

このとき、配布資料として「浄土ヶ浜フィールドガイド」という地図が渡され、その中の「お花めぐりコース」を歩いて散策した。この浄土ヶ浜ウォーキングは浄土ヶ浜をうたっているが、浜が見えるのは最後だけで基本

的に山道を歩くコースになっている。これについてスタッフの1人は「宮古は海だけではないことも知ってもらいたい」という点を挙げていた。

目的地であるレストハウスまで全員がたどり着いたのちに、おにぎり2個と豚汁がふるまわれ、レストハウスの食堂、うみねこ亭で談笑しながら舌鼓をうつ。このとき話をした参加者のお一人は「このウォーキングには何回か参加したことがある。浄土ヶ浜にはこの時にだけくる。1年ぶりだ」とのことであった。

写真5　浄土ヶ浜ウォーキング
2015/04/29　撮影：藤野陽平

4月30日、5月1~2日を挟んでゴールデンウイーク本番を迎える5月3日からは、浄土ヶ浜まつりも盛り上がりを見せる。この日は友愛の会のステージ、シーカヤック体験、宮古蘭煎会による緑茶のふるまい、ラーメン早食い大会などが行われた。「友愛の会」（代表、金澤みちこさん、友愛の店主で、翌日ステージをする金澤未咲さんの母にあたる）は大通りの「友愛」という店舗の常連さんたちの会で、浄土ヶ浜まつりには何十年も出演している。全員で30人ほどいるが、今年は20人ほどが出演した。日々お店のカラオケで常に練習していて、画面を見ないでも歌えるように厳しい指導を受けている。

シーカヤック体験は参加料が保険代として1人500円、1回につき8人が体験できる。1人乗りと2人乗りの2種類あり、1人乗りは小学校高学年以上、それ以下の子供は2人乗りで保護者の同乗が必要である。10分間ほど説明をうける。まずは、ライフジャケットのつけ方で、ライフジャケットはフリーサイズなので、ベルトを止める。次にパドルの持ち方。向きは文字が読めるようにもち、肘は直角になるようにする。漕ぎ方は手でまわさず、肩を使い、バックの時はその逆の動きをする。曲がる時には曲がる方向のパドルを水につける。反対のパドルはできるだけ外側を漕ぐ。乗り方は重心を低くして片足ごとに乗り込んで、指導員に引いてもらい海へ漕ぎ出す。その後は各自自由にシーカヤックを楽しむ。参加者の中には遠くは長野、名古屋、東京、青森からの人もいるが、宮古の人は少数であった。

宮古蘭煎会は本家が仙台にあり、その下の釜石支部に属している。宮古では磯鶏公民館で、隔週で稽古をしている。浄土ヶ浜まつりには20年ほど前から出ていたが、震災後は今回がはじめてで、当日は13人が参加したが、普段のお稽古は20人ほどが来ている。

ラーメン早食い大会はステージ上でウニを練りこんだウニラーメンと、ウニの炊き込みご飯で作ったおにぎり「うにぎり」を食べきる早さを競うものである。先着順に申し込むもので予選等があるわけでもなく、テレビ番組に登場するような大食い、早食いの猛者達がしのぎを削るものではなく、一般の人が急いで食事をしているのを見学するような、のどかな雰囲気であった。日本人だけではなく、台湾の台北からの参加者もいた。夫婦で来宮したとのことで、21日に来日し、26日には青森に行き、車で沿岸を見ながら南下、5日に成田から帰国するという。宮古にはホテルに2泊する。本当は日本の雰囲気がする民宿を探したのだが、空室がなかった。震災後4回目の来日だが、宮古ははじめてだという。

翌5月4日には芸能まつり（第1部10時30分~12時00分　第2部13時00分~14時00分）と小田代直子さん、金澤未咲さんによるステージショーが行われる。芸能まつりは1963年に設立された宮古市芸能団体連合会によるもので、民謡、三味線、太鼓、踊り、新舞踊などの9団体（民謡越田会、民謡保存会、紘友会、葵の会、民謡うみねこ会、新舞陸中会、民謡愛好会、かすみ会、扇翔会）の約90人が参加した。これらの団体は別々に練習しているが、合同で発表することが多く、浄土ヶ浜まつりにはレストハウスが再オープンして以来参加しているそうだ。

写真6　金澤未咲さんのステージショー、観客との触れ合いが大切にされる

2015/05/04　撮影：藤野陽平

第Ⅰ部は1、そんでこ節　越田会。2、チャグチャグ馬コ　保存会。3、鍬ケ崎浜唄　紘友会。4、大器晩成　葵の会。5、秋田大黒舞　うみねこ会。6、峠越え　新舞陸中会。7、人生音頭　愛好会。8、男　かすみ会。9、佃の渡し　扇翔会。10、酒屋もとすり唄　保存会。11、南部俵積唄　保存会。12、ドンパン節　弦友会。13、川の流れのように　葵の会。14、鍬ケ崎浜唄　うみねこ会。15、秋月の人　新舞陸中会。16、まりと殿さますみ会。18、高尾山　扇翔会。

第Ⅱ部は19、帆柱起こし音頭　うみねこ会。20、海ぶし　葵の会。21、酒造り祝い唄　紘友会。22、大漁唄い込み　保存会。23、南部よしゃれ節　越田会。24、山　かすみ会。25、白浜音頭　愛好会。26、男橋　扇翔会。27、土佐のかつお船　新舞陸中会。

第Ⅰ部と第Ⅱ部の間に小田代直子さん（12時00分～12時30分）と金澤未咲さん（12時30分～13時00分）のコンサートが行われた。お二人とも宮古出身の歌手で宮古市の観光大使も務めている。地元、三陸の情景を歌い上げるが、その卓越した歌声とは裏腹に、地元の人との触れ合いが大切にされ、和やかなムードのステージとなる（写真6）。

3日は歌謡ショー、4日は芸能と対象年齢層が高めの浄土ヶ浜まつりであったが、5月5日はこどもの日で、趣向を変えて妖怪ウォッチ体操コンテスト、ＭＤＳとＭＯＰＳによるダンスといった子供から若者を対象としたプログラムが組まれる。妖怪ウォッチ体操コンテストは人気アニメの主題歌「ようかい体操第一」のダンスのコンテストで、主たる対象は小学生。表情、リズム、衣装を5段階で2名の審査員による審査が行われ、賞品はおやつの詰め合わせ、参加賞はうみねこ亭のソフトクリームである。主に市内の23名（盛岡、仙台からも2名ずつ）が参加した。

ＭＤＳのダンスステージであるが、ＭＤＳとはメッカ・ダンス・スクールのことで、代表の中野猛さんが市内で経営していたメッカという店の名前が由来となっている。この店は被災したために、現在移転しバベルという名前に代わっている。ここでダンススクールも行われているのだが、生徒は小学校1年生から30代まで60人ほど、多くは宮古の生徒で、当日は50人ほどが参加した。

また、ＭＯＰＳ（モップス）とは事務局で宮古小学校の教員の石澤綾子さんによれば「みんなでおどっぺす」のことだという。宮古市内の小学校の児童を対象としたダンスサークルで、踊りたければ中学生も受け入れていて、また、弟、妹も来ているので、幼稚園児、保育園児も参加している。昨年度は60～100人くらいが参加しており、2015年度は募集中だという。練習日は不定期だが宮古小学校で練習している。スタッフのほどんどが小学校の教諭で震災後に活動をはじめて5年目になるという。地元のお祭りではお年寄りの手踊りがあるが、子供ができるものが無いというのが、始めるきっかけになった。浄土ヶ浜まつりには震災後の再開以来、参加していて、当日は27人が来た。

(2)　学ぶ防災

次に震災後観光協会が取り組んだ注目すべき動きとして、学ぶ防災（写真7）を紹介したい。2012年4月1日から始まったこの活動は、パンフレットによれば「私達は災禍の記録や後世への教訓を伝え、防災意識を高めていただく事を目的として、御案内致します。」という目的のもと、田老地区の「実際の津波の状況、避難の大切さ、過去の津波の歴史、まちづくりの進展状況などを、現地で説明するほか、津波が4階まで押し寄せ大きく被災したたろう観光ホテルを案内し、そこ

写真７　学ぶ防災　田老防潮堤にて
2014/10/31　撮影：藤野陽平

から撮影された津波来襲のＤＶＤを上映する」。

　コースは主に２種類あり、防潮堤とＤＶＤ鑑賞（所要時間30～60分）と防災エコツアー体験コース（１２０分）で、受付時間は４月から10月が９時から16時30分、11月から３月は９時から15時30分となっている。参加費は防潮堤とＤＶＤ鑑賞で一組１時間で４千円。エコツアーは１万円。復興支援金として受け取り、観光ホテルの維持にあてている。当初のＤＶＤ鑑賞はたろう観光ホテル（写真８）[注(3)]の社長が当時観光ホテルの上から撮影した動画で、マスコミには出ていないオリジナルのものを撮影した場所で見学するようにしていた。その後はたろう観光ホテルが津波遺産保存整備事業の１つとして保存されることになり、立ち入りが制限され宮古市田老総合事務所近くの会場で放映するようになった（わが町４１２号：26頁）。

　この学ぶ防災は、利用者が２０１２年４月以来、２０１６年８月現在で11万１千１２１人（２０１２年度　１万８千９２８人、２０１３年度　３万１千３９２人、２０１４年度　２万８千０６７人、２０１５年度１万９千６０８人、２０１６年度〈８月まで〉１万３千１２６人）と目を見張るものがある。冒頭に紹介したように宮古を訪れた観光客数が、33万６千４６４人（２０１１年）、73万９千５８０人（２０１２年）、１１０万６千６０６人（２０１３年）程度だったことを考えると、小さい数字ではないことがわかる。「団体から少人数、教育旅行の学生など多くの予約がほぼ毎日入り、利用者は九州、関東、北海道などと全国各地や、海外からも訪れている（わが町４２１号：30～31頁）。各団体の視察などにも利用され、例えば２０１３年６月17日には「３・11震災孤児遺児文化・スポーツ支援機構」が学ぶ防災に参加した（わが町４１５号：14頁）。ただし、宮古の児童生徒は来ていない。実際に被災した子がいるので、リアルすぎ、まだ早すぎるという反応だという。

　これほど多くの人に利用されている学ぶ防災であるが、２０１４年10月時点でスタッフは６人（うち１名は研修中で、実質５人）だった[注(4)]。１人１万から２万人程度の担当をしてきたことになる。同時に多くの参加者があることもあり、その場合には３班に分けてＤＶＤスタート班、防潮堤スタート班、駅スタート班としてまわしている。担当しているのはもともとガイドの経験のない人たちで、苦労が絶えない。以前は観光ホテルでＤＶＤを見せていたので、１日に何度となく上り下りをしなくてはならず、腰を痛めてしまうこともあった。こうした経験について当初からガイドとして関わってきた**佐々木純子さん**から２０１４年10月31日の午前10時から学ぶ防災の会場にて話を伺った。

　佐々木さんは元リース会社の社員だった。当時は２５０件を担当

写真８　たろう観光ホテル
2012/09/14　撮影：藤野陽平

注(3)　１９６８年開業、６階建て延べ床面積２千３９１平方メートル、４階まで被災した。

注(4)　学ぶ防災のスタッフは観光協会に単年度契約で臨時雇用という形で雇用されている。

するほどだったのが、震災で解雇となる。彼女が学ぶ防災に関わるようになった経緯は以下の通りである。このイベントは当初、ＮＰＯ法人「立ち上がるぞ宮古田老」が行っていたが、規模が大きくなり賄いきれず、上述の山口惣一観光協会事務局長と相談し、２０１２年４月から観光協会の事業として「学ぶ防災」が始まった。佐々木さんはこのころから関わることとなった。しかし、だれも経験したことのない災害のガイドである。当然、原稿やマニュアルはなく、試行錯誤しながら作り上げていった。当初は研究者や特に関心のある人達が参加していたのだが、どんどん広がってこういう形になってきた。

最初は防潮堤の案内だけをしていたが、観光ホテルの社長の好意でＤＶＤを借りることができ、これをコースの中にとりいれた。参加者数は減ってきているが、件数は増えている。ツアーでの参加は減っているが、一度ツアーで参加した人がリピーターとしてもう一度来ている。そして、そのリピーターがさらに新しい人を連れてくるという動きがでている。最初は災害を観光化することへの反発もあったが、復興に向かって頑張っている姿を見たいというお客さんがたくさんやってきているので、感じ方が変わってきているのを感じている。

このように充実している学ぶ防災の活動であるが、佐々木さんはいくつかの葛藤を抱えてもいる。それは第1に自分がこの仕事にふさわしいのだろうか。未熟者の私がやることなのだろうかという点、第2に被災した人たちは「学ぶ防災」についてどう思っているのだろうかという点、第3にガイド中に感情がおさえきれなくなることがある点であるという。3番目の件はＤＶＤを見ると1年くらいまでは涙が止まらず動悸もしていた。観光客を連れてきたある添乗員さんに「泣いていると話が止まってしまうからよくない」と批判され、「ガーンときた」とショックだったと振り返る。別の人には「話が長い、お客が飽きる。どうしてこんなに長い事立たせておくのだ」と言われたこともあった。また、徐々に慣れてきて笑って話せる自分にも微妙な感情を持つことがある。こうした葛藤は佐々木さん1人が抱えているのではなく、先に紹介した観光協会の事務局長山口さんも学ぶ防災に対して以下のように語っている。

「これは観光なのだろうか。被災した地域である。被災した場所を見てもらうという売り方でいいのだろうかという葛藤があった。正直すごく迷ったのが実状だった。実際にかなりの人が被害を受けた。しかし、だからこそそれを語り継がなくてはいけないという思いが勝ってこの形になった。3年間続けてきたが、なんとかやって来られたという思いだ。観光客が増えることよりも防災意識が高まればというのが願いだ。」

一方でやっていてよかったということもある。それは人との出会いだ。これで続けていこうと思うことができる。また問題点として田老は場所が遠い点を挙げている。宮古にも泊まるところが増えてきているので、修学旅行で使ってもらうことが増えているが、当初は花巻や盛岡に泊まって、田老まで来て参加するのは難しかった。

佐々木さんは「ここまで来たのだから、頑張りたい。思い入れがあるので、学ぶ防災が今後どうなるのか見届けたい。将来的には田老で海藻を食べたり、買ったり、採ったりもできる複合的な施設としたい。難しいと思うが観光の町になってほしいと思っている」と述べてくれた。

(3) 浄土ヶ浜レストハウス

観光協会が運営する特筆すべき事業として浄土ヶ浜レストハウス（以下、レストハウス、写真9）がある。レストハウスは２０１０年のゴールデンウイークの4月29日に開業した。つまり新装オープンしたばかりで被災したことになる。実に不運だったが、２０１１年の6月には営業を再開させ、7月までには重機で浄土ヶ浜を復旧させ、ダイバーが海底のがれきの撤去を行った。7月21日にはオープニングセレモニー（10時00分～11時00分）があり、テープカットや黒森神楽の公演が行われた。同日山本市長は「浄土ヶ浜地区の観光拠点の復活だけではなく、

写真9　浄土ヶ浜レストハウス、2階の屋根近くまで浸水した

2015/02/16　撮影：藤野陽平

観光都市としての本市の復興を全国にアピールしていきたい」とあいさつし、併せて同日、浄土ヶ浜感謝祭（11時00分～15時00分）として、太鼓や歌謡ショー、餅つき、海鮮丼格安販売などもあった（わが町394号：30～31頁、広報166号：6頁、169号：24頁）。

その後も宮古市のサーモンくん、みやこちゃん、浄土ヶ浜のウミネコをデザインしたウミネコちゃんと写真が撮れる2013年6月にアクリル製1・8×1・8㍍の「顔出し看板」を設置したり（わが町416号：18頁）、食堂の名称を2014年7月19日から8月31日に公募し（応募総数288点）、「浜処うみねこ亭」とし[注(5)]、12月6日にお披露目会が行われるなど活発にイベントなどを行っている（広報225号：13頁）。

震災当日と被災状況

レストハウスの被災状況や復興に向けた動きを営業部次長の**島崎準**さんから2015年2月23日にレストハウスにてお話を伺った。

島崎さんは震災当日もレストハウスで勤務していた。今までに感じたことのない揺れだったが、地震での被害はなく、皿1枚落ちなかった。被害は津波の引き波によるもので、台所や机などが流されて何も残らなかったことだった。島崎さんが後日、自転車で見回っていたら、藤の川あたりにレストハウスの椅子が1つ流れ着いているのを見つけたこともあり、「こんなところまで流されたのか」と感じた。当時は被害よりも避難が優先された。揺れが大きかったので津波の有無を確認する以前に全員第3駐車場へ移動してもらい、職員も必要最小限のものをもって避難した。その時に海を見たところ、波が引いていたので、これは津波が来ると警報が出る以前にわかった。その時は感じたことのない異様な静けさだったといい、何の音もせず、ウミネコの声すらしなかったが、その後突然、木をなぎ倒す音がしてそれと共に津波が来た。

3月の浄土ヶ浜は閑散期なので、客の誘導から避難まで20分で終えることができスムーズに行えた。レストハウスの時計は3時21分で止まっていたので、津波が来たのは地震の後35分後のことで、避難してから15分しか残っていなかった。引き波を見たので、逃げなければいけないことは明白だった。鍬ヶ崎の方では家が波に引っ張られ、大橋の上からは完全に水が引いていたのを目にした。

当時の副支配人が降りて様子を見に行こうとしたが、カーブを曲がったところで浄土ヶ浜が見え、岩の3分の2ほどが水に沈んでいたので、あきらめて引き返してきた。レストハウスも1階くらいの被害で収まってくれたらいいと思っていたが、翌日になって職員3人（支配人、副支配人、島崎さん）で見に来てみると、現実にはすべて呑み込まれていた。

1週間ほど経って片づけをはじめた。その時の心境を「復旧するかどうか、今後どうなるか、そういうことはわからない中、片付けだけははじめた。どうなるのか誰もわからなかった。」と振り返る。ただし、片付けも浄土ヶ浜は海がきれいでヘドロもなかったため、大木を撤去する程度ですんだ。レストハウスのためにボランティアが千人ほど来てくれたが、あまりすることがなかった。浄土ヶ浜の景観は引き波で何かがぶつかって傷が付いた程度で大きくは変わっていない。

注(5)この店名公募にはインターネットは使用せず、来店した人に応募してもらったという。これには実際に来てくれた人に考えてほしいという意図があったという。

営業再開から復興へ

レストハウスはすぐに営業再開することが決定された。しかし、建物が被災したために改修が終わるまではプレハブでの運営となった。その間はお手洗い、土産物の販売、休憩所の提供のみで、食事はできなかった。浄土ヶ浜まつりも２０１１年は間に合わず、翌２０１２年からプレハブのレストハウスで再開させた。２０１１年はレストハウスとして何もできなかった。夏には海水浴場もオープンしていないので、テントを出して軽食を出したが、何か事故があっても自己責任でという形をとらざるを得なかった。

しかし、営業再開後のレストハウスの動きは活発だった。浄土ヶ浜カレー（写真10）や季節のラーメンなど、地域の食材をもちいた特色のあるメニューを並べ、うみねこ亭の食事には力を入れている。全国各地にある観光地に附設した施設は食事をしても安くなくて、しかもおいしいものが出てこないというイメージが強い。しかし、「安くて美味しいものが出ると思ってほしい」と島崎さんが言うように、浄土ヶ浜のレストハウスはそういったイメージを打ち崩すことを目指している。しかも、被災後メニューのレパートリーを増やしており、単に元に戻す復旧ではなく、さらに先に進む復興を体現している。島崎さんはこのように語る。

写真 10　浄土ヶ浜を模した浄土ヶ浜カレー
2015/05/04　撮影：藤野陽平

「はじめは元に戻すのだと復旧するための努力だった。しかし、その後は被災地を観光してもらっているようではだめだと思った。徐々に被災地が観光地になっていくのだろうが、そうではなくて忘れないようにしなくてはいけない。それでいて先に進む。被災ということをふまえて自分達も甘えないように。もうずいぶん時間がたったので、被災のことを言わなくていいというようなことを言われることもある。しかし、それを踏まえて自分達でやっていく。自分達がやったのだという自信がないとなあなあになってしまう。いつまでも被災したところという看板に甘えてはいられない。『なんだ、あの頃とかわってないではないか』とはいわれたくないのだ。」

食事だけではなく、お土産品にも力を入れている。代表的な存在が「たつっと浜だれ」シリーズ（写真11）であろう。被災後1年ほどたった時に新しいお土産を作ろうと生まれた商品である。お菓子などの加工品は味が決まっていて独自性が出せないが、調味料なら消費者がアレンジできるので独自の味が表現でき、宮古の独自性も出せるというアイディアだ。また、調味料なので、おせんべいの味付けに使うなど、いろいろなものとコラボレーションができるのも魅力だという。

写真 11　たつっとシリーズ
2015/02/24　撮影：藤野陽平

売れ行きも好調で、レストハウスだけで２０１４年度１万5千本販売した。商品名に使っている「たつっと」とは雨やしずくが「たつたつっ」と落ちる音の宮古方言からとっている。濃縮15倍は普通の調味料からすれば濃いが、お土産物なので少量でかさばらず、重くないものがよいと考え、こうなった。「宮古の人にも食べてもらって、『宮古の味だべ』と思ってもらい、宮古市民と一緒に全国に売っていきたい。レストハウス監修の「たつっと浜だれ」を

認めてもらえれば、それはレストハウスの食事を認めてもらったことと同じこと。宮古の人達にも好評で、お土産に持っていったらまた買ってきてと言われたという声をきく。これこそパートナーになるということだろう。宮古の外から来た人はもちろん、宮古の人ともパートナーになる。ソトから広がるのと、ウチから広がるのでは意味が違う。ウチの人には基礎がある。ウチの人に受け入れてもらえれば閑散期もなくなる」という。

「あまちゃん」ブームや三陸鉄道の全線開通等に加えて、こうした努力の結果だろうか、インタビュー時の2014年度のレストハウスの来客数は、それまでで一番客入りが良かったという。冒頭で紹介したように来宮観光客数は震災後、激減しているが、レストハウスに関しては震災前よりも増えている。団体客が多く、2014年度はツアー客だけで5万5千人が訪問し、これに一般客が加わる。

「被災したからこそメディアによく取り上げてもらい、広く知ってもらうことができた。実際に被災した人には言いづらいが、何にでもいい面と悪い面がある。多くの人に来てもらってそれをリピーターになってもらうためには今が勝負時だ。いい意味で観光施設っぽくない観光施設にしたい。こういう場所は高くて美味しくない、他の選択肢がないからしょうがなく利用するというイメージが強いが、そういうものを打破したい。だから、食にこだわる。美味しいものを食べてもらい、そのうえに浄土ヶ浜があるというイメージ。楽しさの提供をしたい。」

「津波はいずれまた来る。これまでも来ていた。そうした時でも前の住民たちが全力でやったから早く再開できたと思われたい。ここは大切な場所なんだと思ってもらいたい。そういう風に思ってもらえるように頑張っていきたい。」

2　三陸鉄道

観光の復興という意味で、交通機関の取り組みを紹介しないわけにはいかないだろう。特に宮古市の場合には三陸鉄道（写真12）が象徴的な存在であり、広く取り上げられている。すでに吉本浩二（2012年）の漫画『さんてつ』を皮切りに中井精也（2014年）、源明輝（2014年）、国松俊英著、間瀬なおかたイラスト（2014年）、品川雅彦（2014年）、冨手淳（2014年）といった書籍が刊行されている。いずれも当時の緊迫した空気を伝える好著である。紙幅の関係上、より詳しくはこれらの書籍に譲り、ここでは概略を述べるにとどめる。

2015年2月20日に『線路はつながった　―三陸鉄道復興の始発駅』の著者でもあり、漫画『さんてつ』にも登場する三陸鉄道旅客サービス部部長の**冨手淳さん**（1961年生）に、三陸鉄道事務所にてお話を伺った。ご著書の内容と共に振り返ってみたい。

(1)　被災から全線復旧

地震の直後、大きな揺れから津波が来ることを確信した冨手さんは駅員に「津波が来るから避難！」と叫んだ。その後、社長から一般社員と乗客は指定されている宮古小学校へ避難するという指示が出る。幹部社員は本社に残っていたが、15時45分ごろ宮古駅すぐの跨線橋「出会い橋」へと避難した。日が暮れてきたが停電で電気が使えない。そこで、駅に停車中だった車両のエンジンをかけ、本社のホワイトボードを持ち込み、急きょ「災害対策本部」とした（冨手2014年：8～21頁）。すぐに社員の安否確認が行われ、15日までに全社員の無事が確認された（冨手2014年：25頁）。

津波警報が津波注意報へと

写真12　三陸鉄道宮古駅
2015/12/06　撮影：藤野陽平

変わった13日、冨手さんは三鉄の社長望月正彦さんとともに現場の視察へむかう。沿岸部の道は通行止めであったが、山菜取りが趣味の社長は林道を熟知しており、迂回しながら各駅を確認していった。そこで2人の目の前に現れたのは変わり果てた沿岸の姿であった。田老では線路を道路代わりに歩く人々を目の当たりにし、また田野畑では三鉄はいつ動くのだという声をかけられた。このことから、望月さんは「とにかく列車を走らせよう。一刻も早く走らせよう」と冨手さんに語った（冨手２０１４年：28～39頁）。

本社に戻った望月社長は社員に対して、16日までに列車を動かすこと、そして1週間は運賃を無料とすることを指示する。実際、5日後の16日には久慈から陸中野田まで運転再開し[注(6)]、9日後の20日には宮古～田老間で、29日には田老～小本間の運行を再開させた。運賃は3月中は無料、4月以降は原則１００円単位の臨時割引運賃（被災証明書持参者は無料）、陸中野田～小本間は県北バスの臨時路線が設定され、平日のみ4往復した（冨手２０１４年：54～57頁、わが町４２６号：21～28頁）。全１０７キロ中、線路の被害は5・6キロ。北リアス線が70か所被災、南リアス線は２４７か所で、営業再開は難しいとみられていた。しかし震災から1か月ほどたった4月18日に、望月社長は3年以内での全線復旧計画案を沿線の市町村長に提示し、復旧させるかどうかの判断を委ねた（冨手２０１４年：62頁）。その結果、全線復旧させるという合意が形成された。

震災後授業の再開にともない、通学で三鉄を利用する乗客が増えてきた。しかし、宮古～小本間には一両しか車両がなく、輸送力が不足してきた。そこで、5月26日から28日に久慈の車両基地から宮古へ2両をトレーラーで陸送した。27日から28日に順次宮古に到着しレールに降ろされた。これで1両だけでは増結ができない他、定期検査時や故障時に営業できなくなってしまう等の問題を解決できた（わが町３９３号：24～25頁、冨手２０１４年：58～59頁）。

その後、２０１３年4月には北リアス線の陸中野田～田野畑間が復旧、２０１２年4月には1日7往復で南リアス線の盛～吉浜間が復旧した。安全確認のため所要時間41～50分の運行で、新型車両36-７００形の運行も始まり、記念乗車券千枚（1枚６８０円）も販売した。

２０１４年4月6日には小本～田野畑間が開通し、全線の運行再開となった。当日は北三陸満喫号が久慈11時15分発、宮古13時15分着で運行、事前申し込みをした48人が乗車した。「あまちゃん」の「大吉駅長」と「吉田副駅長」が参加して、観光協会と共同で実施し、各駅での歓迎の振る舞い等のイベントも行われ、昼食は「うに丼」だった。当日11時25分から宮古駅前で運行再開セレモニーが行われ、望月社長が「ここに運行の再開を宣言する」とあいさつをした。続いて復旧を祝うハローキティの「HUGしてぎゅ」、物産販売、歌謡ショー等のイベントがあった。さらにクウェート国の支援で8両の新車両が整備されたこともあり、記念式典にはクウェート大使も参加した。女優の藤原紀香さんも参加し、くす玉割りを行った。当日は１９８４年の開通以来の人手となった（わが町４１２号：53頁、４２４号：52頁、４２５号：50頁、４２６号：21～28頁、広報２０７号：18頁、２０９号：1～2、24頁）[注(7)]。

(2) 復興に向けた取り組み

三鉄は震災後、通常の運行の他に様々な試みを行ってきた。ここではそのうちのいくつかを紹介したい。

フロントライン研修（http://www.sanrikutetsudou.com/?p=263）

２０１１年5月からフロントライン研修として、被災地を視察するツアーのコーディネートに取り組んだ。フロントラインには被災地の最前線という意味が込められている。被災地で物見遊山はできないの

注(6) 31日までに宮古駅で定期乗車券と回数券の払い戻しも行われた（広報特別号5：6頁）。

注(7) 全国初の第3セクタでの鉄道として１９８４年4月1日に開業した当時の様子は『みやこわが町』誌の４１３号にも特集が組まれている。

で、ツアーではなく、あくまで研修であり、団体の視察、支援のためのものと位置付けられている。県庁のコーディネーターから、「視察したいけれど、どうしたらそれができるかわからない、という人も多いのだから、ツアー業務を商売としてやるべきだ」と、三陸鉄道に打診があり実施することになった。あまり好意的に思っていない人もいるようだが、観光という意味では宮古に人を呼ばなくてはいけないという思いと、当時、会社の一部しか動いていない状態で、社員をどう使うかを考えていた。仕事を作らなくては社員が路頭に迷ってしまう。社長が3年で復旧するという計画を出している以上、それまで社員を解雇するわけにはいかない。なんとか雇い続ける意味合いもあった。そのために価格も割高に設定している。そのかわり社員が全行程に同行して、配布される資料も多い。旅程もオーダーメードなので、利用客の希望に合わせることができる。この点で通常の商品とは異なっている。全線がつながるまでは全行程をバスで回っていた。現在は、希望があれば列車をコースに加えている。2012年度までに300団体、6千600名以上が参加した。コースの一例（10名以上で1人2万8千円から、20名以上で1人2万5千円から、いずれも昼食2回、朝食、宿泊付き）が冨手さんのご著書（2014年：69頁）に掲載されている（冨手2014年：67頁）。

1日目　東北新幹線一ノ関駅出発→陸前高田市、奇跡の一本松など→大船渡市、復興商店街屋台村など→釜石市、唐丹町白浜地区→大槌町、旧大槌役場庁舎など→山田町（視察）→宮古市、宿泊

2日目　宮古市街地（視察）→田老地区、防潮堤など→島越駅前（視察）→盛岡駅着

震災学習列車（http://www.sanrikutetsudou.com/?p=239）

フロントライン研修の他に、修学旅行を対象とした震災学習列車というツアーを、宮古と田野畑がつながった2012年6月より提供し始めた。こちらは比較的安価で1車両5万5千円で利用できる。久慈から田野畑のコースをゆっくり走って説明を聞けるようにしている。教育旅行を想定していたので、中高生が修学旅行で来ている。こちらも社員がガイドを務めている。残念ながら宮古はトンネルが多いので向かない。昨年度は5千人ほどだったのが、今年度は1万人を超えた。修学旅行客がほとんどなので、バスで久慈まで来て、田野畑まで鉄道で移動し、田野畑からバスで帰る（冨手2014年：95頁）。

企画列車（お座敷列車、レトロ列車など）

三鉄にはお座敷列車「さんりくしおかぜ」（2002年より運行）、レトロ列車「さんりくしおさい」（2005年より運行、それ以前は1990年に導入された「くろしお号」と「おやしお号」が活躍していた）という車両がある。冬場にはお座敷列車にこたつを設えた「こたつ列車」（2004年より運行）も登場する。お座敷列車は冬の観光客が減る時期は、利用が少ないことからこたつにしてみたらヒットした。問い合わせが多く、満席が続き、2週間前には予約で埋まってしまうほど好評だ。震災以前は北と南にレトロ列車は一両ずつ配置されていたが、いずれも定期検査で久慈にあったために被災を免れた。

このこたつ列車は震災後2012年12月15日から2013年3月31日まで2年ぶりの復活を果たした。土日祝日に北リアス線の田野畑～久慈間を久慈12時30分、田野畑13時35分発の一日一往復で運行している。全席指定の予約制で、弁当の販売や「なもみ」のイベントもおこなわれた（わが町408号：52頁）。

2014年12月6日から2015年3月29日までの土曜休日と1月1～12日は毎日運転し、料金は久慈～宮古間で片道1千850円、指定席310円であった。久慈発12時15分、宮古着13時54分。宮古発15時05分、久慈着16時45分の一日一往復である。こたつ列車乗車証明書、こたつ列車南部せんべいの記念品もセットされ、前年までと同様に途中、「なもみ」も登場し、海鮮弁当（うにあわび弁当、ほたて弁当、うに丼）も予約販売された（わが町432号）。

お座敷列車とレトロ列車は夏から秋の運行を行っている。2014年

のお座敷列車は4月26日から29日と5月3日から6日の毎日、5月10日から6月29日の土曜休日、7月26日から8月7日の毎日、8月23日から10月13日までの土曜休日に運行され、久慈発12時15分、宮古着13時54分。宮古発15時05分、久慈着16時45分の一往復である。指定料金は３１０円で、一般車両は自由席となる。うに丼、うにあわび弁当、ほたて弁当の予約販売や記念乗車証明書の発行、グッズ販売、海女スタイルのアテンダントの車窓案内も行われる。レトロ列車は4月26日から29日と5月3日から6日の毎日、5月10日から6月29日の土曜休日、7月26日から8月7日までの毎日、8月23日から11月30日までの土曜休日で、久慈発10時30分、宮古着12時10分。宮古発13時15分、久慈着14時49分の全席自由席となる（わが町４２７号：53頁、冨手２０１４年：１１９、１３３頁）。

このお座敷列車「さんりくしおかぜ」は、車両が古くなりリニューアル改造を考えていた頃に震災が起きた。その時にクウェートから原油を日本政府に送り、換金して支援に使うようにとの申し出があった。換金してできた資金を赤十字が、被災三県に配分、岩手県は三陸鉄道車両の更新分にその一部を配分。８両が新製され、そのうちの1両は新お座敷列車「さんりくはまかぜ」となった。こうした車両はイベントにも使用されている。２０１３年の1月1日には初日の出号としてレトロ列車が走った。6時10分に久慈駅を出発し、野田玉川駅で初日の出を遥拝、普代駅で下車し、バスで鵜鳥神社へ初詣にいき、9時36分に普代駅にて再び乗車、10時06分に久慈駅に帰着するというコースだった。会費は大人が5千３００円、子供が2千５４０円、定員45名の予約制で、記念乗車証明書、福袋、お神酒、折詰、御札のプレゼントも行われた（わが町４０９号：52頁）。２０１４年4月24日には震災後初の花見カキ列車に新お座敷列車が使われた。宮古駅ホームで炭火焼されたカキを2つうけとり、新お座敷列車「さんりくはまかぜ」に乗り込み車内で食べるという企画だった（広報２１０号：６頁）。

(3) 寄せられた支援

震災後5日で運行を再開した三鉄は宮古市だけにとどまらず、東北全体の復興のシンボル的存在ともなっていく。それは大ヒットしたＮＨＫの連続テレビ小説「あまちゃん」に登場する「北鉄」のモデルとなったことにも象徴的に表れている。冨手さんも「あまちゃん効果」について「はんぱじゃなかった」と振り返る（冨手２０１４年：１６２頁）[注(8)]。このように注目を集めた三陸鉄道には多くの支援が寄せられた。「支援してくれた企業は数限りない」と冨手さんがいうように、その全てを紹介することはできないが、代表的なものを紹介しておきたい。

ヘッドマークオーナー募集

三陸鉄道復旧支援のため、1年間広告料30万で60×60^{センチメートル}のヘッドマークに自由にデザインをすることができるもの。このオーナーの第一号は芸能人の杉良太郎さんだった。これは２０１１年6月29日に行われた「がんばろう！三鉄の集い」に、一日駅長として参加した杉さんから何か支援ができないかとの申し出があり、三陸鉄道側から提案し、杉さんが快諾した（わが町３９３号：48頁、冨手２０１４年：72～74頁）。

乗車券を購入してくれる人

こうした支援は企業だけではなく、個人によるものも数多く寄せられた。顕著なものとして明治学院大学教授の原武史氏が宮古～小本間の乗車券千枚、60枚分の購入もあった（冨手２０１４年：66頁）。

復興祈願レール

復興祈願レールとして２０１１年8月に島の越～田野畑間、宮古起点34^{キロ}７４０^{メートル}付近の流されたレールを切り分けて、10^{センチ}のものを5万円、5^{センチ}のものを3万円（ともに限定１００個、木製の台座、シ

注(8) ただし、当時は北リアス線全線開通の前であったため、久慈から田野畑間の乗車であり、宮古まで足を延ばす人はそれほど多くはなかったようだ。もし、当時繋がっていたら、宮古にはもっと多くの人が訪れていただろう。

リアルナンバー月のメモリアルプレート付き）で販売したところ、新聞各社などに取り上げられ、注文が殺到し即日完売した。好評だったので10月には南リアス線盛～陸前赤崎間のレールで４００個限定販売し、これも完売した（冨手２０１４年：75～77頁）。

てをつな号

２０１２年４月１日から「てをつな号」という、世界的な人気キャラクターが手をつないで並んでいるラッピングを施した車両が、宮古～小本間、久慈～田野畑間で１両ずつ運行を始めた。これはＮＨＫのキャラクター「どーもくん」の作家合田経郎さんが呼びかけ、版権者らが無償での使用に賛同し実現した（冨手２０１４年：98～１０１頁）。

ネスレ日本

チョコレート菓子「キットカット」を販売するネスレ日本は、２０１２年以降「キット、ずっとプロジェクト」として、三鉄を支援している。ラッピング車両「キット、ずっと号」（写真13）のほか、「三陸鉄道キットDreams」という宮古市を本拠地とするアマチュア野球チームも設立している。田老野球場再建にあわせたクォリティ・オブ・ライフ向上に向けた支援の一環である。２０１４年11月６日には球団設立記者会見があり、翌７日に本球団のＧＭ（ゼネラルマネジャー）をつとめるシアトルマリナーズの岩隈久志投手が、被災した田老野球場などを視察した（わが町４３２号：20～21頁、広報２２３号：23頁、冨手２０１４年：１０１～１０３頁）。

写真 13　ネスレ日本のラッピング車両
2015/12/06　撮影：藤野陽平

3　岩手県北バス、岩手県北観光

鉄道と並び宮古市の公共交通を支えるのがバスであろう。岩手県北バスの宮古営業所所長**佐々木隆文さん**（１９６５年生）から２０１５年４月30日にお話を伺った。佐々木さんは開口一番「おかれている立場を認識して、住民の方に不便をかけないという公共交通の役割を必死に果たしてきた。それに尽きる」と明言した。

(1)　地震直後

地震の時には通常業務中で営業所にいたという佐々木さん。現在は防災無線が全車に付いているが、当時は１０６急行以外にはついていなかったので、駅前に行き、これから出発するバスは戻るように指示を出した。３日間ほどはとてもバスを走らせられる状況ではなく、営業できなかった。最初は道路の被害がなかった内陸での運行ということで１０６急行を動かし、その後は随時走れるところから復旧していった。震災前の路線が復旧できたのは１か月ほどたってからで、本数を減らしての運行となった。

当時は全員の従業員が出社できたわけではなかった。最初は歩きや自転車で来られて、家が被災していない人を中心に出社してもらった。ガソリンは自家スタンドがあるのでバスを動かすガソリンは20キロリットルほどあり問題なかった。通常なら３日でなくなってしまう量だが、本数を減らしていたので十分だった。なお、県北バスで宮古営業所は人的物的の被害はなかったが、山田営業所の運転手が殉職した。

再開した運行は車を無くした人たちに歓迎された。これは仮設住宅ができるまで毎日つづけていた。観光の路線よりも最低限の生活路線の維持を優先した。また、ボランティア団体が段取りをして、そこから依頼を受けて運行したボランティアバス、自衛隊が津軽石小学校などの校庭に浴場を開設していたので、避難所から入浴施設までの送迎、ドラへの買い物のため避難所からの送迎をする買い物バスといった取

写真14　浄土ヶ浜を周遊する電気バス
2015/12/06　撮影：藤野陽平

り組みも行った。

仮設住宅が完成してからは全ての仮設住宅から500㍍以内にバス停があるようにと新しい路線も作った。仮設住宅ができていくにしたがって、徐々に路線ができていき、これは今でも続いている。（例、樫内仮設住宅行、愛宕公園仮設行等）国の特定被災地域公共交通調査事業（http：//www.tb.mlit.go.jp/tohoku/ks/new%20page/ks-001hisaichi.pdf）の補助金がでた。今後の課題としては、補助金が打ち切られてしまうと収支が合わず継続できないということである。これでは仮設に入っている人達が困ってしまうので、国には継続を依頼している。

震災以降運休中のJR山田線の代替運行として、宮古～船越間を、最初は9往復、現在は22往復を運行している。JRの定期券や回数券で乗車でき、乗客も多いが、JRとバスの差額分はJRが補てんしている。その他、グリーンエネルギーとのタイアップの電気自動車の事業として、環境省の補助でバスやカーシェアリングを行っている。2012年12月26日には県内初の導入となる電気バスの出発式も行われた（広報179号：6頁）。このバスはゴールデンウイーク中に浄土ヶ浜の無料巡回バス（写真14）としても活躍している。

(2)　岩手県北観光の復興ツーリズム

岩手県北バスの子会社に岩手県北観光がある。この会社は復興ツーリズムを積極的にとりいれているので、この動きを紹介したい。また、復興ツーリズム推進協議会（会長中村慶久岩手県立大学元学長）という組織があり、2013年9月26日に設立総会がシートピアなあどで行われた。「三陸沿岸の復興に向けて付加価値の高い地域資源を発掘したコンテンツによって、震災・防災を学ぶ研修、教育旅行のツーリズム化を図ることを目的とする」とされ、岩手県北バス、三陸鉄道、宮古観光協会など18団体が参加、交流人口の拡大や雇用創出も目指すという（わが町419号：13頁）。こうした動きについて「自分の町を好きじゃないと観光業はできない」と語る県北観光で復興ツーリズムを担当している**今井仁さん**（1973年生）から2015年5月1日に会社の取り組みについて話を伺った。

研修の受け入れについて

県北観光社の復興ツーリズムは、個人単位で参加するものだけではなく、企業や団体レベルで参加する研修を用意している。ここではInput output workshopを踏まえた研修ということが謳われ、関連する行政や企業の話を聞き、仮設住宅をめぐり、聞いたことを通じて自分達の企業で何ができるのかを研修してもらう。自分達が学んだことを話して、聞いてもらうだけではなく、ストーリーを作っていくようにするのだという。こうしたプログラムは人材育成会社と協力して作っているとのことで、被災した時にリーダーになっていった人がいる。通常、学歴や経歴といった条件があってリーダーは選ばれるだろうが、被災した状態では別の条件で急にリーダーになっていく。それはどういうことなのか話を聞き、自分達で分析し、ワークショップをするものである。過去には名だたる大企業も参加していて、仮設住宅の建設に携わった企業は、自分達が関わった仮設住宅について実際に暮らしている人に話を聞いた。

こうした研修を沿岸部で行う理由を、今井さんは以下のように語る。

「ここは東京から見れば非日常的な環境だからだ。東京の会議室で話し合うのとは異なる答えになる。それは岩手を感じ自分が「地元人」になることにより判断や決断、生き方を本気で考えられる。宿泊も民宿のような宿で共同生活をすることにより、協調性も改めて感じてもらえる。主眼は研修であり、岩手だからこそ学べるものがここにはあ

るのだ。」

ボランティアの受け入れについて

今井さんは震災までは浄土ヶ浜レストハウスで働いていたのだが、被災したためにやむなく解雇された。その間ボランティア活動を行っていたが、その経験を買われて県北観光社の復興ツーリズム担当として声をかけられたという。震災当日の話は上述の島崎さんと同内容なので、省略するが、解雇となってもアイデンティティは浄土ヶ浜にあったという。「浄土ヶ浜を片付けないと気がおかしくなりそうだった」と振り返る今井さんは、浄土ヶ浜の片づけをしている時、ある老夫婦から手伝わせてほしいと声をかけられた。その理由を聞いたところ「昔、浄土ヶ浜に来たことがあり、その時の景色が忘れられなくてここに来た」という。津波は人や物や沢山の想い出を流しただけではなく、生きている人の気持ちも奪ってしまった。津波に遭った自分の街（浄土ヶ浜）を好きでいてくれる人がいると気づき、忘れていた「人の想い出になる仕事をしたい！」という信念で、自らもボランティアに取り組むことになっていく。

「みなさんが宮古にボランティアに来てくれたので、私は地元に残ることができた。縁もゆかりもない人達が、震災をきっかけに岩手に来てくれたことに対して、今の仕事は恩返しだと思っている。」

この経験をこのように語る今井さんであるが、実際に現場にいた彼の印象として、1年ごとにボランティアに携わる人々の感覚が変化しているという。２０１１年当初はボランティアをしに東北へ行こうという意識があった。こうしたニーズに対しては県北観光ではボランティアバスを運行させ、3年間で2万数千人が利用した。２０１２年になってニーズがボランティアから街づくりに変わっていく。２０１３年は農業や漁業などの再生、２０１４年になり、ボランティアは少なくなり、ふるさととしての岩手に着目する人が増えてきた。そしてこれまでボランティアで岩手に来た人達が、再び来るようになってきている。2年目からリピーターが増えているといい、「ふるさとのない人が、ここにふるさとを見つけたのだといえるだろう」と今井さんは考えている。

さらに２０１５年にはボランティアから観光という風に意識がシフトしている。しかし、観光といっても従来の景色や食を楽しむだけではなく、ボランティアなどで一度会った人にもう一度会いに来るというスタイルになりつつあるという。そこで県北観光としても観光だけではなく、何度も帰ってこられるような仕組みをつくるようにしている。花畑を手伝うボランティアをして種をまけば、花が咲いたころにまた来るキッカケができるようなツアーも企画している。

「私は外の人だから…。そんな言葉を耳にするが、風に吹かれて外から新しい種が運ばれる。そして、その種も土が無いと花が咲かない。街も同じで新しい風と土が合わさり「風土」という歴史が生まれる。浄土ヶ浜や龍泉洞を見に行くだけの観光だけではなく、人に会いに来る観光、それが新しい（復興）ツーリズムの一つだと思っている。」

こうした新しい形のツーリズムは、リピーター同士の人間関係も構築していく。今井さんによれば、ＳＮＳなどを使って個人旅行で岩手に来る人も増えているという。参加者こそが主役であるから、そうしてできた輪が広がっていくことで、今まで岩手に縁もゆかりもない人達も、継続した交流人口の増加に繋がっている。岩手が「第２のふるさとになって、今まで関わってきた人が帰ってこられるような場所にし、人と人を結び合わせるようなもの」なのだという。現在ではこうしたボランティアを通じて各地にネットワークができ、情報交流会や、東北のイベントにも参加しているようだ。社会人になると新しい仲間と出会う事が少ないが、こうした場で人生の仲間を作ることができるというのも魅力のようだ。

注(9) 岩手県北観光のブログにそのリアルタイムの情報が掲載されている（http://www.kenpokukanko.co.jp/knp/?p=103）

そこで県北観光は、「けっぱれ東北」という一連の商品をたちあげている[注(9)]。現在30～40人の参加者があるそうだが、うち半数はリピーターだという。全国からの参加の中でも関東周辺からが一番多い。ツアーの一例をみてみよう。2泊3日で沿岸地をめぐるツアーは、初日の8時30分に盛岡を出発、陸前高田市で奇跡の一本松・市内視察ののち「フラワーガーデン再生のチョイボラ」[注(10)]をし、民宿に宿泊する。翌日は大槌町で復興の菜の花畑鑑賞、遠野で名物バケツジンギスカンを食し、内陸の大沢温泉で自炊をして交流会。最終日は小岩井農場散策やいちご狩りをして盛岡へ戻る。こうしたツアーにボランティア体験をいれるのは、共同作業を通じて他の参加者と仲間になり、つながりが生まれ、自然と岩手が好きになり、新たなリピーターが増えていくと考えているからだという。

4　三陸復興国立公園と三陸ジオパーク

三陸復興国立公園

2013年5月24日「三陸復興国立公園」が誕生した。これは東日本大震災により被災した三陸地域の復興に貢献するために指定されたもので、陸中海岸国立公園に青森県種差海岸階上岳県立公園が編入され南北約220キロとなった。その後も宮城の南三陸金華山国定公園と3つの県立自然公園も順次編入が検討されている。あわせて、「みちのく潮騒トレイル」という青森県八戸市蕪島から、福島県相馬市松川浦までの全長700キロほどを歩いて旅ができるコースを順次整備する（広報185号：26～27、わが町415号：15頁）。環境省の自然保護官の櫻庭佑輔さんによれば「浄土ヶ浜を始めとして、市街地のすぐそばに自然がある環境はなかなか無い。地元の人の生活に関係のある国立公園として、より身近に感じてもらえるように情報発信をしていきたい（広報187号：3頁）」という。

2013年5月25～26日には、三陸復興国立公園指定記念イベントが行われた。25日には10時から記念植樹が行われ、両日9時から17時に「浄土ヶ浜満喫キャンペーン」として、浄土ヶ浜の対象施設を利用するともらえるシールを集めて抽選で記念品がもらえるというものである。その対象施設は浄土ヶ浜ビジターセンター、県立水産科学館、浄土ヶ浜パークホテル、宮古浄土ヶ浜遊覧船、浄土ヶ浜マリンハウス、浄土ヶ浜レストハウス、休暇村陸中宮古、宮古自然保護官事務所である。ビジターセンターとレストハウスでも催しが行われ、ビジターセンターは25日10～13時に八戸クラフト体験、26日11～14時イカせんべい焼き体験で、レストハウスでは26日までの毎日8時30分から17時に菊池和弘水彩スケッチ展、26日14時から復興支援コンサートを行った（広報186号：3頁）。

この三陸復興国立公園の中で宮古市内に位置するものは三王岩、姉ヶ崎、潮吹穴、浄土ヶ浜、重茂半島である。関連するイベントとして、2014年5月24日に姉ヶ崎に位置する中の浜震災メモリアルパークの開園式が行われた。同施設は三陸復興国立公園の施設として、環境省が2億4千100万円をかけて中の浜キャンプ場を整備したものである。震災で被害を受けたトイレ棟、炊事場、周辺の山に津波の遡上高を示した看板、津波の高さの目線に立つことができる津波堆積土や、コンクリート片を使用した高さ13メートルの「展望の丘」等が津波のすさまじさを伝えている（わが町427号：4～5、48頁、広報213号：22頁）。

2014年8月17日には三王園地のオープニングセレモニーが行われた。約1万562平方メートルの敷地に三王岩や太平洋の景観が一望でき、3か所の展望台、説明板、東屋、トイレなどもある施設である。震災前から進められていた事業で、東日本大震災で中断していたが、この日開園となった（広報183号：36頁）。

三陸ジオパーク　（広報223号：4～11頁に特集）

これは三陸地方の美しい自然や豊かな文化などの地域資源を活用し、

---

(10)「ちょっとしたボランティア」のことで、簡単なボランティアのこと。

産業人口や交流人口の拡大を図ることを目的にしている。２０１３年４月22日、三陸ジオパーク推進協議会が、八戸から気仙沼までの南北３００㌔の地域を三陸ジオパークとして、日本ジオパーク認定を受けるための申請書を提出した。申請のテーマは「悠久の大地と海と共に生きる～震災の記憶を後世に伝え学ぶ地域へ～」とされる。「三陸の海が生み出した美しい自然景観とともに、繰り返される災害に立ち向かい共に生きていく人々、地域の姿を伝え、災害の記憶を風化させることなく、世界へ発信していくことを目指」すという（わが町４１３号：52頁、広報１８７号：26～27頁、１９６号：16頁）。宮古市内にどういったジオサイト、ジオポイントがあるかは表2の一覧をご覧いただきたい。

浄土ヶ浜ビジターセンター

ジオパークと関連する施設として、浄土ヶ浜の第一駐車場に接する浄土ヶ浜ビジターセンター（以下、ビジターセンター）があげられる。震災後職員となった**佐々木洋介さん**（１９８３年生）から、２０１５年2月20日にお話を伺った。ビジターセンターは２０１０年4月完成した4階建ての建物で、主体は環境省で、運営を宮古市の商業観光課に委託している。国立公園の自然の良さを紹介することを目的としている。年間来場者は30万人ほどで、近年の宮古全体の観光客数70万人のうち、半数弱が立ち寄っている。特に4～10月は浄土ヶ浜まで車で降りられないので、第一駐車場に車を停めて浄土ヶ浜へ降りていく人が多いために多くなる。

冬には月1回、夏場は月に2～3回は磯の観察や、シーカヤックの体験などのイベントを実施していている。冬は参加者が少ないが、徐々に増えてきている。

２０１１年5月に再開したが、1階の腰の高さ位まで浸水したため、1階と地下1階は使えず、最初は2～3階での再開だった。当初、観光客はほとんどいなかったために、国内外から宮古に来たボランティアで立ち寄った人が中心だった。

２０１４年頃から観光客が増えてきたという。これにはＮＨＫの連続テレビ小説「あまちゃん」の効果が絶大だったと佐々木さんは語る。あまちゃんで盛り上がっているのを、現場にいて肌身で感じたのだそうだ。ボランティアから観光客へと変化したのは、靴を見れば一目で見分けがついた。

佐々木さんはこのところ国立公園を訪問する人が増えているというが、三陸復興国立公園は交通の問題がある。みちのく潮風トレイルは八戸から南相馬まで７００㌔あり、これは健脚者で50日かかる距離だ。南北に長すぎて誰にでも共通するおすすめコースは作りにくい。問い合わせがあれば交通手段、日程、体力、人数、年齢などを聞きながら個別に提案するようにしている。案内で多いのは1時間程度のもの、15分くらい歩いて、残りの時間を説明に充てるとこのくらいになるのだそうだ。

ジオパークの中の浄土ヶ浜の部分はビジターセンターが担当しているため、その関係者もビジターセンターを訪問するという。ジオパークと国立公園とでコラボレーションして、エコツーリズムなどの講習会のようなプログラムの提供も月1度ほどおこなっている。

表２　宮古市内のジオサイトとジオポイント

	ジオサイト	ジオポイント
23	浄土ヶ浜	浄土ヶ浜、潮吹穴、日出島、ローソク岩
24	重茂半島（鮭ヶ崎）	鮭ヶ崎
25	田老の防潮堤	田老の防潮堤、たろう観光ホテル跡、中の浜キャンプ場施設の一部、津波到達点、津波記念碑
26	早池峰山	薬師川渓流の古生界、早池峰山
27	三王岩	三王岩
その他		腹帯の混在岩、崎山貝塚、黒森神社

おわりに

以上、宮古市における観光の被災と復興に向けた取り組みを確認し

てきた。現場の人びとの間に共通するのは、破壊されたわが町を被災地として観光の呼び水にして見世物にすることは不本意であるという感情がある。同時に復興のためには産業としての観光を起こさなくてはいけないという実利の問題との間で揺れる姿であった。さらに、自然の大きさと、人の小ささを知ることで、防災に役立てるという後世への教育という必要性も付け加わっている。こうした複数の基準の間で苦悩する姿が印象的であった。しかし、現場の人びとは、いつまでも被災地観光ではなく、新しい宮古の観光を構築しようと前向きである。

当然のことながらこの度の被災経験は突発的なもので、準備期間があったわけではない。先例がなく、経験、人材、資金、物資といったありとあらゆるものが不足する中、手探りの状態の中での取り組みであった。そこに見たのは新しい人との出会いを通じたおもてなしであり、揺れながらも、復興、風化の防止のために、という強い意志や使命感で取り組む人々の姿だった。

【参考（引用）文献】

吉本浩二『さんてつ　日本鉄道旅行地図帳 三陸鉄道 大震災の記録』２０１２年　新潮社
中井精也『夢と希望の三陸鉄道　開業30周年＆全線運行再開記念』２０１４年　徳間書店
源明輝『さんてつに乗ろう！』２０１４年　オークラ出版
国松俊英著、間瀬なおかたイラスト『はしれ さんてつ、きぼうをのせて』２０１４年　ＷＡＶＥ出版
品川雅彦『三陸鉄道　情熱復活物語』２０１４年　三省堂
冨手淳２０１４『線路はつながった　三陸鉄道 復興の始発駅』２０１４年　新潮社

【資料】

宮古市総務企画部復興推進室編２０１２『宮古市東日本大震災復興計画』岩手県宮古市
『広報みやこ』
『月刊　みやこわが町』
岩手県北観光 http://www.kenpokukanko.co.jp/
リアス観光　株式会社 http://riasu.server-shared.com/
宮古旅手帳　みやこへおでんせ http://kankou385.jp/

表3　2011年3月から2014年4月に行われたイベント一覧

年	月	日	イベント名	場所	主催	内容／備考	出典
2011	8	11	Light up Nippon 追悼花火大会	田老庁舎周辺		同時に「追悼 2011.8.11 田老防浪堤夢灯り」が常雲寺境内にて行われ、震災から5か月の追悼と復興を祈る。花火に先立って黙とう。	広報み 145
2011	8	14	第44回宮古夏まつり	出崎ふ頭沖	宮古夏祭協賛会	海上花火大会／この年は花火大会のみ	広報み 143
2011	9	11	浄土ヶ浜さんまフェスタ	レストハウス前広場	宮古観光協会	先着 250 人、参加料 1 人 500 円（生さんま 1 本、イカ一夜干し、すり身汁、おにぎり）、抽選でサンマのつかみ取り	広報み 145 広報み 147
2011	9	17 −18	第27回みやこ秋まつり	宮古地区合同庁舎駐車場	みやこ秋まつり実行委員会	市内パレード、手踊りパレード、船山車、（ゲスト：青森ねぶた、黒石もつけ太鼓、サンバなど）、おまつり広場ステージイベント。コース：五月町合同庁舎⇒あいさつ通り⇒宮古駅前	わが町 393 広報み 144 広報み 145
2011	10	1 −2	復興祈念　第17回宮古市産業まつり	市民総合体育館	宮古市産業まつり実行委員会	オープニングセレモニー、もちまき、お振舞い、お楽しみ抽選会、特産品、地場産品販売、姉妹都市物産展、企業紹介、学習成果発表、キッズマーケット、郷土芸能によるオープニングセレモニー、小学生ものづくり体験教室、音楽演奏、ダンスパフォーマンス、郷土芸能のステージなど。／津波で被害を受けた宮古市の産業の早期回復のため、地元物産や企業製品を集める。100 店舗以上のブースが出店。来場者 1 万 5 千人ほど。	わが町 393 わが町 395 広報み 143 広報み 146 広報み 149
2011	10	9	第11回　三陸シーカヤックマラソンin宮古		三陸シーカヤックマラソン大会実行委員会	レースは行わず、湾内のツーリング、神林漁港から出艇後湾内をツーリング。／テーマ「ともに復興」、震災後初の宮古湾でのイベント、参加者 155 名（過去最高）。藤原ふ頭のがれき置き場前でホーンを合図に黙とう。	わが町 395 広報み 146 広報み 149
2011	10	15	みやこ夢レールフェスタ	宮古駅前広場	みやこ夢レール創造事業実行委員会	JR のキャラクターショー、ミニ SL 乗車会、地域物産の販売、ステージコンサート、三陸鉄道宮古、小本間体験乗車。／ 5 回目。鉄道の魅力を多くの人に知ってもらいながらイベントを通して情報を発信する支援事業。	わが町 395 広報み 147 広報み 149
2011	11	5 −6	第12回　全国新撰組サミットin宮古	JR宮古駅前広場など		5 日 13:00 開会式（JR 宮古駅前広場）、「新撰組 revo」よさこい踊り（新選組の故郷日野のよさこい連）、「ミスターブ　リュネ　コンテスト」表彰式、「土方歳三写真コンテスト in 宮古」表彰式。13:30-14:30 末吉町商店街　宮古新撰組パレード。13:20-17:20 宮古復興記念イベント（鍬ケ崎小学校）、ひっつみ振る舞い、宮古大漁祝唄、土方歳三の子孫土方愛氏によるトークショー、祇園囃子、記念講演会。18:20-20:30 新撰組ファンの集い（浄土ヶ浜パークホテル）、6 日　9:00-　宮古湾海戦バスツアー、遊覧船と貸し切りバス、魚菜市場での買い物支援。	わが町 395 わが町 396 広報み 148 広報み 151
2011	11	13	がんばろう宮古サーモンハーフマラソン	宮古消防署前広場	宮古サーモン・ハーフマラソン実行委員会	10 キロの部、5 キロの部、ペアマラソン（約 2 キロ）／例年はハーフ種目もあったが、コースが被災しこの年は行っていない。参加者 2,571 人。参加資格　小学生以上で健康に自信のある人。参加料一般 3,000 円、中高生 1,200 円、ペアマラソン 3,500 円。	わが町 393 わが町 396 広報み 145 広報み 149 広報み 151
2012	1	8	宮古サーモンフェスタ	宮古駅前広場	宮古観光協会	サケ切り身プレゼント（先着 100 名）、餅まき、鮭のつかみ捕り、チャンチャン焼きおふるまい、サケ汁おふるまい（先着 300 名）、サケのおもちゃ釣り大会、恵比寿まき、山口太鼓演奏、歌謡ショー。／例年は津軽石川で行っていたが、震災の影響で場所を変更	広報み 153 広報み 155
2012	1	8	商店街レッドカーペット 2012			スポーツで好成績を残した生徒、成人式直後の新成人が長さ 150 メートルほどの赤いカーペットの上を行進。／初開催。震災からの復興・再生を目指し末広町商店街振興組合がすすめる宮古の三気（元気・活気・人気）UP 事業の一環。	広報み 155
2012	2	19	毛がにまつり		宮古観光協会	一本釣り、輪投げ、体験セリ市、300 名に毛ガニ汁ふるまい、もちつき、恵比寿まき、暴れ太鼓、ちゃぶ台返し世界大会 in 宮古予選、マグロ解体ショーなど。／来場者約 1 万 6 千人、宮古駅前からのシャトルバスあり。	わが町 400 広報み 156 広報み 157
2012	5	3 −6	浄土ヶ浜まつり		宮古観光協会	3 日：10 時、13 時シーカヤック体験試乗会、10-15 時　お楽しみ抽選会、11-14 時　炭火焼コーナー、12 時　毛ガニ汁お振る舞い　先着 100 名、10 時 30 分　友愛歌謡ショー、12 時 30 分　金澤未咲、小田代直子ジョイントコンサート。4 日：10 時、13 時シーカヤック体験試乗会、10-15 時　お楽しみ抽選会、11-14 時　炭火焼コーナー、12 時　毛ガニ汁お振る舞い　先着 100 名、11-14 時　芸能まつり。5 日 10-15 時　お楽しみ抽選会、11-14 時　炭火焼コーナー、12 時　毛ガニ汁お振る舞い　先着 100 名、10-12 時　琴演奏会、MDS ダンススクールステージ。6 日：10-15 時　お楽しみ抽選会、11-14 時　炭火焼コーナー、12 時　毛ガニ汁お振る舞い　先着 100 名、11 時　フィッシングゲーム	わが町 401 広報み 160
2012	5	12 −13	アンパンマントロッコ列車	JR山田線　宮古茂市間		アンパンマンマーチの合唱、クイズ、じゃんけん大会など。／ JR 四国が所有する車両で、JR が被災各県で運行している。	わが町 402 広報み 163
2012	5	12	みやこ夢レールフェスタ	宮古駅前広場		宮古産の食材を用いた弁当の販売、ミニ SL の体験乗車、ステージイベント、三陸鉄道宮古小本間無料体験乗車。／鉄道の魅力を多くの人に楽しんでもらう	わが町 402
2012	6	9 −10	第2回　宮古あきんど復興市2012	末広町商店街、中央通り商店街		キャラクターショー、町なか潮干狩り大会、全国の物産を集めた「全国かけはし市」雫石の「軽トラ市」	広報み 165
2012	7	28 −29	宮古夏祭り	市内商店街		郷土芸能、民謡コンサート、よさこいソーラン、市民手踊りパレード、青森産ホタテの無料試食会（先着 1000 人、29 日）。／ 2011 年は津波で花火大会だけの開催だったが、2012 年に再開。	わが町 405 広報 166・169
2012	8	5	浄土ヶ浜サマーフェスタ	浄土ヶ浜レストハウス前	宮古観光協会	子ども浴衣コンテスト、ビーチサンダル飛ばし大会、爆笑ジャンボ竹さおスイカ割り大会、浮輪投げ、シーカヤック体験試乗会、歌謡ショーなど。	広報み 167
2012	8	5	第21回　宮古港ボート天国	神林木材港仮設施設	宮古港ボート天国推進協議会	全国から支援を受けたボート約 10 艇、水上バイク、シーカヤック、ヨットなど。陸上には子供用プール。／ 2 年ぶりの開催。	わが町 405 広報み 167
2012	8	5	重茂味まつり	重茂漁港	重茂漁業協同組合	海藻小袋まき（中に引換券が入っていて、海産物と交換できる）、アワビとり、焼きウニ造り体験、活きウニ、活きアワビなどの販売、食事、出店コーナー、本州最東端クルーズ。	広報み 167
2012	8	14	宮古夏まつり花火大会	出崎ふ頭沖合		当日はみやこ（たろう）災害エフエムでメッセージ花火の内容の放送も。三陸鉄道が臨時列車。	わが町 404 広報み 166
2012	9	15 −16	第28回　みやこ秋まつり（第1回宮古市復興祈願祭）	市内末広町、大通り	みやこ秋まつり実行委員会	10 基の船山車、市民手踊りなど約 30 団体 2,000 人のパレード、山口太鼓、ミス復興むすめ、新撰組の衣装、宮古あばれ太鼓、浅草サンバ、宮古海戦の会等。	わが町 405 わが町 406 広報み 169 広報み 172

年	月	日	イベント名	場所	主催	内容／備考	出典
2012	9	22 −23	さんまフェスタ	浄土ヶ浜レストハウス前広場		11 時　秋刀魚づくしセット販売開始（生さんま、丸干しさんま、ウニごはん、ホタテ、甘露煮、秋刀魚刺身、えび、すりみ汁、1000 円、先着 250）、秋刀魚のつかみ取り抽選、歌謡ショー（23 日）、シーカヤック体験試乗会（23 日）。11 時 30 分　ひきめ里っこ鍋お振る舞い（23 日、先着 50 名）。12 時　秋刀魚のつかみ取り（両日、各 10 名）。12 時 30 分　マグロ解体ショー（23 日）。13 時　秋刀魚詰め放題（参加料 500 円、両日、各 40 名）。13 時 30 分　マグロブロック争奪選抜クイズ（23 日）	ちらし、 広報み 170 広報み 172
2012	9	29 −30	宮古市産業まつり	市民総合体育館		初日、餅まき、郷土芸能披露	わが町 407
2012	10	6 −7	2012三陸シーカヤックマラソンレースin宮古	宮古湾内	2012三陸シーカヤックマラソンレースin宮古実行委員会	参加者県内外からの愛好者約 80 人、被災地復興の願いを込めて。施設が被災したため昨年度は湾内ツーリングだけであったが、今年は 10 キロの部でタイムを競う。	わが町 407 広報み 169 広報み 174
2012	10	13 −14	宮古あきんど復興市	市内の商店街（末広町、大通り、中央通り）	地元商店街、福祉団体、高校など	初日：マグロ解体ショー（刺身が先着 200 名にふるまわれる）、産直まつり（軽トラで新鮮な野菜を販売）、サンマを七輪で自分で焼くコーナー、屋台等、福祉施設による漫画家吉田戦車さん、伊藤理佐さん夫婦の似顔絵サイン会、音楽コンサート、人間空気椅子コンテスト、ポニー乗車会。／来場者 1 万 5 千人。	わが町 407 広報み 174
2012	11	11	第26回　宮古サーモンハーフマラソン		宮古サーモン・ハーフマラソン大会実行委員会	8:15: 開会式（宮古消防署前広場）、9:00：5 キロの部（合同庁舎前⇔藤原地区）9:40：ハーフマラソンの部（合同庁舎前⇔金浜地区、新コース震災後初、599 人参加）、10:10:10 キロの部（合同庁舎前⇔八木沢団地）、10:20：ペアマラソンの部（合同庁舎前⇔末広町）。サンマの塩焼き、サケ汁、サケご飯のふるまい。／参加者 2773 人。北は北海道旭川、南は熊本から参加。交通規制は 12 時に解除。昨年は開催できなかったハーフ部門も海沿いのコースを市街地を往復するコースに変え復活。	わが町 407 わが町 408 広報み 169 広報み 173 広報み 175
2012	11	24	鮭・あわびまつり	田老第一中学校校庭	田老観光イベント実行委員会	サケ汁の無料おふるまい、各種海産物の販売、各種農作物の販売、姉妹都市八幡平市の特産品コーナー、たろう太鼓の公演、歌謡ショー、ステージイベント、餅まきなど。／昨年は震災の影響で中止していたが、会場変更、日程も 1 日として開催。	広報み 173 広報み 176
2012	12	1	JR宮古駅リニューアル完成記念式典	JR宮古駅前	JR宮古駅	宮商太鼓の演奏、餅まきなど	広報み 174
2012	12	1	みやこ夢レールフェスタ	宮古駅前広場	みやこ夢レール創造事業実行委員会	開会セレモニー、ミニ SL 体験乗車、ステージイベント、模擬店、三陸鉄道体験乗車（小本まで）、閉会セレモニー	広報み 174 広報み 176
2012	12	2	宮古復興祈願	宮古魚市場	宮古岩手ライオンズクラブ、田老ライオンズクラブ、陸中宮古ライオンズクラブ、東京日本橋ライオンズクラブ	かっこめ贈呈（先着 100 名）、宮古水産高校和太鼓演奏、大熊手御開帳、復興祈願法話、おしるこ振舞、小田代直子歌謡ショー、お楽しみ抽選会	わが町 408
2013	1	1	第10回元旦マラソン＆ウォーク		みやこサーモンランナーズ	宮古駅前⇒横山八幡宮⇒花輪橋の往復	わが町 409
2013	1	13	第41回、宮古サーモンフェスタ	宮古駅前広場		鮭のつかみ取り、ステージショー（宮古水産高校の宮古太鼓、久保田雅さん、小田代直子さん、金澤未咲さんの歌謡ショー）、鮭の切り身のプレゼント、チャンチャン焼き、サケ汁の振る舞い、えびすまき。／つかみ取りには 100 名参加。	わが町 410 広報み 177 広報み 179
2013	1	13	商店街レッドカーペット 2013			商店街を歩行者天国にして、スポーツや文化活動で活躍した市民や新成人 1600 人ほどが、250 メートルのレッドカーペットの上を歩く。／昨年に続き 2 度目。昨年慶祝事があった人や復興関係者の労をねぎらい、地域の絆を深めるため。	わが町 410 広報み 177
2013	2	17	第11回　宮古毛ガニまつり	宮古魚市場特設会場	宮古観光協会	11:30：体験せり市、毛ガニ汁のふるまい（先着 300 名）。9:30、10:30、12:30、13:30：宮古産毛ガニの一本釣り大会（参加費 1500 円、先着 200 名、開場と同時に予約券が完売）。10:00：MDS ダンスステージ。10:30：山口太鼓。11:00　えびすまき。12:00：ちゃぶ台返し全国大会予選。13:00：久保田雅ショー。13:30：金澤未咲ショー。お楽しみ抽選会、毛ガニ海産物等の販売。／来場者：1 万 5 千人。宮古駅前から無料シャトルバスの運行。	わが町 410 わが町 411
2013	3	24	たろちゃんハウス祭り		たろちゃん協同組合	各仮設店舗の露店販売、特設ステージ（餅まき、小田代直子さんや宮古民謡保存会のコンサート、神風宮古流星海や田老民謡愛好会の演舞など）、田中菓子舗の「田老かりんとう」の販売再開	広報み 185
2013	4	2	豪華客船「にっぽん丸」寄港	藤原埠頭		大勢の市民や宮古小学校ブラスバンド部の演奏による歓迎、記念の大漁旗の贈呈／船長の久葉さんは震災直後被災者に食事や入浴の支援を行った「ふじ丸」の当時の船長でもある。3 年ぶりの寄港。	広報み 185
2013	4 5	28 3 −6	浄土ヶ浜まつり			シーカヤック体験試乗会　5 月 3，4 日　参加費 500 円。毛ガニ汁おふるまい　5 月 3-6 日　先着 100 名。歌謡ショー（友愛の会、金澤未咲、立花英樹）5 月 3 日。浄土ヶ浜芸能まつり、阿波踊り 5 月 4 日。琴演奏会、MOPS ダンス、M.D.S ダンススクール　5 月 5 日。フィッシングゲーム　5 月 6 日	広報み 185 広報み 187
2013	5	12	田老大漁まつり	田老総合事務所付近の公園	田老大漁まつり実行委員会	餅まき、たろう太鼓、よさこいソーラン、歌謡ショー	広報み 188
2013	5	25	みやこ田老鎮魂の祈り	グリーンピア三陸みやこ多目的アリーナ	鎮魂の祈り実行委員会	中尊寺の僧侶による三回忌法要、田老太鼓、宮古北高校応援団によるエール、海嘯鎮魂の詩（田畑ヨシさん作）、臼澤みさき復興応援ミニライブ、夢灯り、青山学院女子短大によるハンドベル演奏	広報み 185

年	月	日	イベント名	場所	主催	内容／備考	出典
2013	6	1	宮古市Sea級グルメコンテスト	フラットピアみやこ		市内の６事業者が海産物など地元の食材を生かした料理 13 品を出品。／友丸しまかの「鮭のめんちかつ」、浄土ヶ浜旅館の「あんかけウニ飯」がグランプリに。	広報み 189
2013	6	8 −9	宮古街なか復興市	末広町､中央通り商店街	宮古街なか復興市実行委員会	市民てづくり市、街かど音楽祭･芸能祭、街なか潮干狩り大会（仮設の砂場を作成し、アサリなどを掘る）、地物市、花の市、街なかドックショー、トランポリン、フリーマーケット。宮古街なかまるごと 100 円商店街　６月８日 10 時から。／５回目。100 店舗余りが参加歩行者天国に。「被災地商店街から元気を発信する」	わが町 414 わが町 415 広報み 187 広報み 191
2013	6	9	パワーストックin宮古2013	魚市場の隣接地につくられた特設会場			広報み 189
2013	7	14	第21回海の日記念宮古港カッターレース	宮古魚市場前	宮古市体育協会	18 チームの参加、長さ９メートルのカッターに 14 人が乗り込み往復 600 メートルのコースで競う。／震災後３年ぶりに復活。	わが町 416 広報み 188
2013	7 8	27 −28 14	みやこ夏祭り			７月 27 日　郷土芸能の披露（宮古駅前広場）､末広町神輿巡行、市民手踊り、太鼓団体の競演（末広町から中央通り）。７月 28 日曳船まつり（宮古市魚市場内）、郷土芸能の披露（宮古駅前広場、末広町から中央通り）。８月 14 日花火大会　20 時　出崎埠頭	わが町 416 広報み 193
2013	8	4	第7回重茂味まつり		重茂漁業協同組合	ウニやアワビなどの海産物や加工品の販売、ステージショー、本州最東端クルーズ。	広報み 193
2013	8	4	浄土ヶ浜サマーフェスティバル	浄土ヶ浜レストハウス前	宮古観光協会	ビーチサンダル飛ばし大会、ジャンボ竹ざおスイカ割り大会、子ども浴衣コンテスト。／子ども浴衣コンテストには 42 人が参加。	広報み 194
2013	8	11	宮古ボート天国	神林木材港とその付近	宮古湾ボート天国推進協議会	プレジャーボート、クルーザー、ヨット、水上オートバイ、シーカヤックなどの体験航海、試乗会、ミニプールなど。	わが町 416 わが町 417 広報み 194
2013	8	24	ポケモントレイン宮古号			人気アニメポケットモンスターがデザインされた JR 東日本の「ポケモントレイン宮古号」が山田線で運行開始。出発前に市民ら約 120 人が列車を見学した。	広報み 194
2013	8	25	2013復活！JAZZin浄土ヶ浜	浄土ヶ浜	JAZZin浄土ヶ浜実行委員会	出演者：綾戸智恵、あんみつ（T-SQUARE)、ちだ原人 NUTS, 市民有志による演奏、いずみしん他。／ 20 年ぶりの開催。	わが町 416 広報み 192 広報み 195
2013	9	14 −15	第29回みやこ秋まつり､第2回宮古市復興祭	宮古駅前広場	みやこ秋まつり実行委員会	手踊りパレード､船山車運行､お祭り広場､ゲスト出演､サンバチーム仲見世バルバロス、10 台を超える船山車、市民手踊りパレード（30 団体 2000 人）、人気アニメ、ポケットモンスターのイベント、その他ステージイベント。	わが町 417 わが町 418 広報み 193 広報み 195
2013	9	14 −15	浄土ヶ浜さんまフェスタ	浄土ヶ浜レストハウス前		サンマづくしセット販売、サンマのつかみ取り（14,15 日)、大衆演劇人気座長４人によるユニット「LINK」ステージイベント､シーカヤック無料体験試乗会、餅まき、マグロの解体ショー、マグロブロック争奪選抜クイズ（15 日)。	広報み 193 広報み 195
2013	9	21	みやこ夢レールフェスタ			オープニングセレモニー　10:00-10:15、物産販売　10:00-15:00、駅前広場コンサート 10:20-15:00、ミニ SL 乗車会 11:00-14:00、三陸鉄道映画列車 10:50-12:00、ポケモントレイン宮古号車両見学会 11:40-13:10 受付、12:40-13:20 見学、宮古産食材を使ったお弁当の販売 12:00 から、三陸鉄道無料体験乗車 13:20-14:50、閉会セレモニー・餅まき 15:05 から。三陸鉄道写真展　９月 12-25 日。	広報み 194
2013	9	28 −29	いわて三陸鎮魂復興祭	奥浄土ヶ浜	幸せ出ずる国いわて実行委員会	黒森神楽などの郷土芸能の競演、京都醍醐寺、島谷ひとみさん、錦織健さん、中村勘九郎さん、中村七之助さんの公演。	広報み 197
2013	10	5 −6	第19回宮古市産業まつり	市民総合体育館	宮古市産業まつり実行委員会	特産品・地場産品販売、姉妹都市・友好都市等物産展、企業紹介・学習成果発表、Sea 級グルメ販売、ステージイベントほか。Sea 級グルメコンテスト､「三鉄縦断小学生クイズ大会。宮古予選」／復興加速年と位置づけられ多くの来場者でにぎわった。104 店舗が出店、１万１千人が訪れる。	わが町 417 わが町 419 広報み 197
2013	10	12 −13	2013三陸シーカヤックマラソンレースin宮古	宮古湾内	三陸シーカヤックマラソンレースin宮古実行委員会	レース後、さんま、つみれ汁の振る舞い。／県内外から 101 人が参加 「被災地復興の願いを込めて力強くパドルをこいだ」。	わが町 419 広報み 193
2013	10	13 −14	宮古街なか復興市2013秋	末広町商店街､中央通商店街	宮古街なか復興市実行委員会	宮古の秋はうまいぞ！大会、街かど音楽祭・芸能祭、元気な宮古っ子全員集合！、宮商デパート、はあとふるフェスタ、フリーマーケット、宮古街なかまるごと 100 円商店街（13 日)、第１回三陸利き魚選手権大会 (14 日)	広報み 195 広報み 198
2013	11	10	第27回宮古サーモン・ハーフマラソン	宮古市内のコース（宮古地区合同庁舎を発着点とし､ハーフ､10キロ､5キロ､ペア(約2キロ)）		全国各地から 3321 人がエントリー。室伏広治選手、市川華菜選手もゲスト参加。	わが町 420 広報み 193 広報み 197 広報み 199
2014	1	1	第11回元旦マラソン＆ウォーク		宮古市役所サンデーランナーズ	宮古駅前、横山八幡宮（初詣)、花輪橋方面の往復	わが町 421
2014	1	12	商店街レッドカーペット2014		末広町商店街振興組合	様々な分野で活躍した市民や新成人が 250 メートルのレッドカーペットを歩く。／３回目。新成人としての抱負をマイクで語ったあと､レッドカーペットの上を歩く。見守る市民はクラッカーなどで祝福。	わが町 422
2014	1	12	第42回宮古鮭まつり･宮古サーモンフェスタ	宮古駅前広場		鮭のつかみ捕り（２つの特設プール、100 人参加)、餅まき、各種ステージ、鮭の切り身プレゼント、宮古水産高校の太鼓、金澤未咲さん、久保田雅さんの歌謡ショー、MDS のダンスステージ	わが町 422 広報み 201

年	月	日	イベント名	場所	主催	内容／備考	出典
2014	2	16	宮古毛ガニまつり		宮古観光協会	毛ガニ一本釣り、毛ガニの販売、矢巾町のタケルンジャー、恵比寿撒き、毛ガニ汁の振る舞い、毛ガニの輪投げ、体験競り市、ステージショー（金澤未咲さん、久保田雅さん、キャラクターショー）／あいにくの大雪。	わが町 423 広報み 203 広報み 205
2014	4 5	29 3 −6	第35回浄土ヶ浜まつり		宮古観光協会	毛ガニ汁お振る舞い（期間中 12 時、先着 100 名）。4 月 29 日霊境祭 9:30、浄土ヶ浜ウォーキング 10:30-12:00。5 月 3 日友愛の会歌謡ショー 10:00、激辛冷麺早食い大会 12:00、金澤未咲歌謡ショー 12:40、小田代直子歌謡ショー 13:40．4 日浄土ヶ浜芸能まつり第一部 11:00、久保田雅歌謡ショー 13:30、浄土ヶ浜芸能まつり第二部 14:00。5 日琴演奏会 10:00､宮小吹奏楽 11:30､MOPS ダンスステージ 13:00、MDS ダンスステージ 13:30。6 日フィッシングゲーム	広報み 208 広報み 211
2014	5	14	客船「ぱしふぃっくびーなす」宮古港入港			宮古小学校のブラスバンド、宮古市長の歓迎のあいさつ、乗船客らは浄土ヶ浜、さんてつを利用し、北山崎、龍泉洞などのオプショナルツアーに参加、花見かき、山菜の天ぷらに舌鼓。／日本クルーズ客船、H18 年以来 8 年ぶり 4 度目。「春の日本一周クルーズ」の最終寄港地とする。（横浜発、九州、日本海をめぐり宮古へ）。351 人の乗客。	わが町 426
2014	6	1	パワーストック in宮古	なあど隣接地の特設会場			広報み 213
2014	7 8	26 −27 14	宮古夏まつり	宮古駅前広場､末広町､中央通り商店街		神輿の運行、市民手踊り、太鼓、郷土芸能（26, 27 日）。海上花火大会（8 月 14 日）	広報み 217
2014	8	2	潜水艦「うずしお」藤原ふ頭に入港			自衛隊の車両展示、資料配布、グッズ販売も。／海上自衛隊の潜水艦「うずしお」が宮古港に入港、藤原ふ頭で一般公開。宮古港入港は H16 年以来 10 年ぶり、歓迎セレモニーも開かれ、多くの来場客でにぎわう。広報活動、被災地支援、乗組員の休養を兼ねる。	わが町 429
2014	8	3	重茂味まつり	重茂漁港	重茂漁業協同組合	海藻小袋まき､アワビ捕り､焼きウニ造り体験､活ウニ･活アワビなどの海産物販売､本州最北端クルーズ､小田代直子民謡ショー､みやさと奏歌謡ショー､トド埼太鼓	わが町 428
2014	8	3	浄土ヶ浜サマーフェスティバル			子ども浴衣コンテスト　10:00-。シーカヤック体験試乗会　10:00-12:00、13:00-15:00。浄土ヶ浜ミニ縁日　10:00-14:00。ビーチサンダル飛ばし大会　11:15。爆笑ジャンボ竹竿スイカ割り大会　12:15-。久保田雅ショー　13:00-。小田代直子ショー　14:00-	広報み 215 広報み 217
2014	8	10	宮古港ボート天国	リアスハーバー宮古	宮古港ボート天国推進協議会	プレジャーボート、ヨット、シーカヤック、水上バイク体験航海、クラフト、ミニプール体験他。	わが町 428 わが町 429 広報み 215
2014	8	23	いわて三陸鎮魂復興祭	浄土ヶ浜の特設ステージ	幸せ出ずる国いわて実行委員会	市川猿之助さんのステージ、醍醐寺の声明や郷土芸能（宮古市「花輪小鹿踊り」､陸前高田「うごく七夕松原組」､大船渡「浜崎念仏剣舞」､普代村「鵜鳥神楽」､山田町「愛宕青年八木節」､大槌町「陸中弁天虎舞」､釜石「南部藩壽松院年行司支配太神楽」）など。／昨年に続き 2 度目。約 300 人の観客。大震災からの鎮魂と復興に向けて。	わが町 429 広報み 215
2014	8	24	第14回宮古湾横断遠泳大会	リアスハーバー宮古(磯鶏神林沖)	NPOいわてマリンフィールド	宮古湾内 1.4 キロを横断、貝殻を使ったクラフト製作体験も。／定員 70 人（市内、県内からの 15 人、25 歳から 72 歳が参加、全員が完泳)。参加費用 2000 円。	わが町 428 わが町 429 広報み 215
2014	9	13 −14	第3回　宮古市復興祭､みやこ秋まつり	宮古市市街地､駅前イベント広場	みやこ秋まつり実行委員会	手踊りパレード、船山車運行、ステージイベント、まつり広場	広報み 210 広報み 217
2014	9	20 −21	浄土ヶ浜さんまフェスタ	浄土ヶ浜レストハウス前	宮古観光協会	さんま一人一匹プレゼント、サンマすり身汁お振る舞い、サンマつかみどり（両日)。第 2 回宮古市 Sea 級グルメグランプリ「みやごのひっつみ」お振る舞い、マグロ解体ショー、マグロブロック争奪選抜クイズ（21 日）	広報み 218
2014	10	4 −5	第20回宮古市大産業まつり			オープニングセレモニー　4 日　09:30 宮古若潮太鼓、餅まき、ステージイベント。第 20 回記念大抽選会、歌謡ショー、山口太鼓ほか市内各団体によるステージ、青森県黒石市の「つゆやきそば」の販売、第 3 回宮古市 Sea 級グルメコンテスト。／1 万 5740 人が訪問。	広報み 218 広報み 221
2014	10	12	三陸シーカヤックマラソンin宮古2014			震災後初めて震災前のレースコース（リアスハーバー宮古から浄土ヶ浜）で開催。78 人が参加。	広報み 221
2014	10	22 −23	宮古街なか Ultra復興祭	市中心街	宮古街なか復興市実行委ほか	旬の果物野菜海産物や工芸品の販売、サンマのしちりん焼き、つみれ汁、盛岡さんさ踊り、仙台スズメ踊り、下閉伊地域の郷土芸能、市内の音楽芸能団体の公演など。／訪問客約 1 万 9 千人。	広報み 221
2014	10	19	本州最東端「鮭ヶ埼灯台」一般公開		市商業観光課もてなし観光担当	参加者約 170 人	広報み 221 広報み 222
2014	11	1	JR宮古駅開業80周年記念セレモニー	宮古駅前広場	JR宮古駅	宮古水産高校の生徒による太鼓の演奏、餅まき、記念品の配布	広報み 220 広報み 223
2014	11	1	みやこ夢レールフェスタ		みやこ夢レール創造事業実行委	物産販売、オープニングセレモニー、コンサート、ミニ SL 乗車会、宮古産食材の駅弁販売、閉会式、餅まき	広報み 220 広報み 223
2014	11	19	第28回宮古サーモン･ハーフマラソン		宮古サーモン･ハーフマラソン大会実行委員会	ハーフ、10 キロ、5 キロ、ペア（約 2 キロ、小学生以上で小学生を含むこと）の 4 部門。／ゲストランナー青山学院大学陸上競技部。レース後はサンマやサケ汁の振る舞いも。青山学院の陸上部参加。参加者 3293 人 (過去 3 位の多さ)。	わが町 432 広報み 217 広報み 223
2014	11	23	鮭･あわびまつり	田老第一中学校校庭	田老観光イベント実行委員会	サケのつかみ取り体験、サケ・アワビなどの海産物の販売、各種農産物の販売、姉妹都市八幡平市の特産品コーナー、サケ汁のお振る舞い、郷土芸能や歌謡ショー、お笑いライブ、サケ釣りゲームコーナー、餅まき。	広報み 221 広報み 225
2014	12	21	第 43 回宮古鮭まつり　みやこサーモンフェスタ	宮古駅前広場		鮭のつかみどり、ステージショー、餅まき、はらこそば早食い大会、小学生のサケの絵画の展示など。／以前は新春に津軽石川河川敷で行われていたが、震災後変更になった。	わが町 432 広報み 223 広報み 227

『広報みやこ』（表中は広報み)、『みやこわが町』（同、わが町）を参照して作成した。数が膨大であり、イベントでも市民を対象とし誘客につながっていないもの、内陸で行われているもの等は割愛した。

第2部　各分野での震災後の取り組み
第11章　被災し／支援し／復興する宗教

藤野陽平

はじめに

沿岸のありとあらゆるものを呑み込んだ今回の津波では東北の被災3県でも多くの宗教施設が被災した。稲場圭信（大阪大学）と黒崎浩行（國學院大學）を中心に作成された宗教者災害救援マップ（https://sites.google.com/site/fbnerjmap/）には、東日本大震災で被災した宗教施設が地図上にまとめられており、その範囲と規模の大きさに改めて驚きを感じさせられる。また、民俗芸能や祭礼が地域の復興のシンボルとしてみなされることがあるが（高倉、滝澤編2014年等）、宮古では黒森神楽が1～3月に宿を取りながら県内沿岸をめぐる「巡行」が震災以降はとりやめになった（河北新報2011年4月4日付）[注(1)]。

また、被災直後から被災地へ多くの支援が寄せられたが、国内外からの宗教団体が陰に陽に関わっていたことも広く知られている（藤野・平野2012年）。宗教を基盤とした利他心に押し出された行動（稲場2011年）である。

震災から6年が経ち、これからは物的復興に加えて心的復興の必要性が強まってくる。阪神・淡路大震災では20年以上が経過したが、このところになってやっと当時のことを語れるようになった人がいたという。心の復興には根気強い長期間のケアが必要となる。もう6年ではなく、まだ6年である。医療従事者だけではなく、宗教関係者の果たすべき役割は小さくない。

残念なことに宗教関連の情報はテレビや新聞といったメディアで取り上げられる割合は小さい。後述する台湾の仏教系財団法人・仏教慈済基金会（慈済会）は、東北3県で50億円もの義援金を被災者に直接配布しているという（宮古では2億円程度）。これを伝えているのは『岩手日報』の8月31日付だけである（金子2011年）。こうした団体の多くが慈善活動を人に知らせることは好まず、隠しておく方を選ぶのであろうが、それにしても取り上げられ方が小さいと言わざるを得ない。そこで本章では、宮古市内の宗教の被災経験、支援活動、そして、どのように復興に向かっているのかを取り上げる。

1　宗教の被災状況と支援活動

A　エホバの証人

河南に位置するエホバの証人からは、ものみの塔聖書冊子協会広報室の**松永一樹さん**よりEメールを通じて情報を寄せていただいた。宮古のエホバの証人は宗教施設の被害はなかったものの、信者のうち津波による死者が1名、家屋の全壊が1棟、大規模半壊が1棟、軽微な被害が1棟であった。エホバの証人の災害救援に関する指針は以下の通りである。メールの内容をそのまま転記したい。

「エホバの証人は世界中の135以上の国や地域で生活する仲間の信者の為、必要に応じ災害時の救援活動を展開して参りました。それには金銭的な援助は勿論ですが、物的な支援や復興に関する支援の活動が含まれております。これらの救援活動の根幹にある指針として3つの点を上げる事ができます。まず1番目の点として、救援活動が私共の宗教信条を実践する機会とみなしている事です。このような機会が、私どもの学ぶ神の教えを飾るものとなり、学んでいる事を実践するものとなると確信しております。それで、仲間の信者については勿論のことですが、必要に応じ近隣の住民の皆さんにも支援の手を差し伸べております。2番目の点として、仲間の信者の必要を満たすことをクリスチャンとしての務めと理解しておりますので、どのような災害の場合についても、迅速な救援活動を展開しております。実際に、この震災の救援活動に際しては国内だけでなく、海外からも仲間の信者が

注(1)　なお、震災後初めての公演は2011年6月25日、避難所と仮設住宅団地になっているグリーンピア三陸みやこでのものである（広報：143号：10頁）。

救援の為に駆けつけ、宮城県を含む広い範囲で活動いたしました。米国では、この救援に関する働き手を募ったところ、自費で援助に出向く事を申し出た者が６００人近くおりました。３番目の点として、仲間の信者が通常の生活に戻る事を助ける為、具体的な救援活動が展開されて参りました。今回の震災に関連して、信者の中には生活必需品の全てを津波で流され、着のみ着のまま助かった方も大勢おりました。これらの皆さんが、１日も早く通常の生活に戻りクリスチャンとしての活動に預かれるよう、具体的な支援が検討され細かな分野に至るまでの援助がなされました。」

以上の指針を受けて宮古における活動の概要は以下の通りである。震災直後から盛岡市に救援に関する「キーステーション」を設置し、岩手県内の被災状況の調査と支援活動を実施した。３日後には代表者と地域の担当者が被災地入りし、安否確認と物資の配布を始めた。その後、岩手・救援委員会が盛岡市に組織され、安否確認、援助活動を行った。宮古市のエホバの証人信者の58世帯に対して、車３台も含む全国から２千品目以上の支援物資が配られ、３回の簡易な家屋の修繕も行われた。その他行政のサービスに関する情報の伝達、引っ越しや清掃の手伝い、癒しを目的とした理容・美容のサービス、内陸の温泉へ招待しマッサージ等の提供も行った。

B　創価学会

創価学会のみなさんには２０１３年10月29日に、創価学会宮古平和会館（宮古市松山）にて座談会方式でインタビューを行った。参加者は創価学会第三岩手総県総県長のＹさん、聖教新聞配達員のＴさん、Ｈ１さん、Ｈ２さん、Ｓさん、Ｋ１さん、Ｋ２さん、Ｏ１さん、Ｏ２さん、Ｍさん、Ｂさんの11名で、創価学会広報室の方にも同席いただいた。なお、Ｈ１さんとの関係は親子、Ｋ１さんとの関係はＫ２さん、Ｏ１さんとＯ２さんは夫婦である。

・宮古平和会館の概要

２００６年２月に落成した宮古平和会館は宮古太陽県（田野畑、岩泉、宮古、山田）の中心会館となっている。宮古太陽県は約９００世帯、人数では１千８００人程の学会員がいる。それまでは磯鶏に今の３分の１程度の小さい会館（宮古会館）があったが、手狭になり宮古平和会館が建てられた。宮古会館は１９８５年に落成した。それ以前には個人宅などに集まっていた。

・震災直後の状況

震災直後には数人の会員が平和会館に避難してきた。教団からは14日に支援物資が平和会館へ届き始めた。様々なルートがあったが、北海道からのものが多かった。創価学会には全国に「方面」という単位があり、それに基づき岩手には北海道から、宮城、福島には関西からといった支援ルートを本部が決めた。さらに岩手県内では岩手文化会館に設置された「災害対策本部」が、状況に合わせてどの地域に何を持っていくかを調整していた。北海道はこれまで様々な災害を経験したノウハウがあり、13日には北海道を出発して、14日に盛岡、宮古には15日に到着した。毎週７トントラックと２トントラックの２台で主に食料品等の物資が運び込まれた。

宮古に到着した物資はＨ２さんを中心に避難所や家にいた人に毎日のように配布された。車もガソリンも不足していたので、少人数で行った。北海道からは物資だけではなく応援職員も来てくれたのだが、ガソリンの入手が難しく、当初は身動きがとりづらかった。

北海道からの応援職員には平和会館を宿泊所として使用してもらい、物資の分配や会員の安否確認などを担当してもらった。つねに５人ほどは県外から応援に来てくれた。北海道が最も多いがそれ以外にも関東など各地から人が駆けつけた。

・被災状況

平和会館の被害は停電と断水のみで、電気の復旧は１週間以内、水

はもう少しかかった。会員は太陽県全体で死亡、行方不明者が若干名(非公開)、全壊１２０世帯、半壊30世帯、車は30台以上流された。

・聖教新聞

震災後しばらく聖教新聞が配れなかった。新聞自体は毎日来ていたのだが、田老などまで配布できるようになるには時間がかかった。３月16日に池田大作名誉会長からメッセージ[注(2)]があり会員は大いに励まされた。この日の新聞は８日後には田老に届けられた。

配達員のＴさんによれば、道路は使えないので三陸鉄道の線路を使って田老まで移動したという。前日まであった家が無くなっていて普通

[注(2)] 参考「きょう３・16　池田大作名誉会長がメッセージ　勇気を持て希望を持て」
Seikyo online より　（２０１４年3月19日確認）
http://www.seikyoonline.jp/news/headline/2011/03/11950 39_2463.html

いかなる苦難も「心の財」は壊せない断じて負けるな勇気を持て希望を持て

このたびの東日本大震災に際し、被災なされた皆様方に、重ねて心よりお見舞いを申し上げます。

大地震・大津波より６日目。安否を確認できない方々も多数おられます。

皆様方の疲労も、さぞかし深いことでしょう。体調を崩されぬよう、そして十方の仏菩薩から守りに護られますように、私も妻も、全国の同志も、世界の同志も、一心不乱に題目を送っております。

わが身をなげうって救援・支援に尽力くださっている役員の方々、さらに地域の依怙依託の皆様、誠に誠にありがとうございます。

「一国の王とならむよりも、一人の人を救済するは大なる事業なり」(『啄木全集　第7巻』筑摩書房)とは、東北が生んだ青年詩人・石川啄木の叫びでありました。

私は最大の敬意と感謝を表します。

御書には、災害に遭っても「心を壊る能わず（＝心は壊せない）」（65頁）と厳然と示されています。

「心の財」だけは絶対に壊されません。

いかなる苦難も、永遠に幸福になるための試練であります。すべてを断固と「変毒為薬」できるのが、この仏法であり、信心であります。

また、逝去なされたご親族やご友人の追善回向を懇ろに行わせていただいております。本当に残念でなりませんが、生命は永遠であり、生死を超えて題目で結ばれています。

妙法に連なる故人は必ず諸天に擁護されて成仏され、すぐに近くに還ってこられます。これが仏法の方程式であります。

日蓮大聖人の御在世にも「前代未聞」と言われる正嘉の大地震がありました。人々の悲嘆に胸を痛められ、大難の連続の中、「立正安国」という正義と平和の旗を厳として打ち立ててくださったのであります。

大聖人は、「大悪をこ(起)れば大善きたる」(御書１３００頁)と御断言になられました。

きょう「３・16」は、恩師・戸田城聖先生が、この世から一切の不幸と悲惨を無くすために、「広宣流布」を後継の青年に託された日であります。一段と強く広宣流布を誓願し、共々に励まし合い、支え合いながら、この大災難を乗り越え、勝ち越えてまいりたい。

断じて負けるな！　勇気を持て！　希望を持て！　と祈り叫んで、私のメッセージとさせていただきます。

の心理状態ではなかった。しかし待っている人がいると思い、使命感を持って配達したという。Tさんは自宅が聖教新聞の販売店で、半壊した。そこで震災当初、平和会館を使って配達したという。

・心のケア

会員には激励、励ましを行うが、ケースバイケースの対応をしている。

・慰霊

毎年3月11日に平和会館で追善勤行会を行う。身近な肉親や親戚を亡くした方を中心に、多くの会員が参加している。また、個別に告別式も行った。

・個別の体験

以下、座談会形式でみなさんの体験を語ってもらった。

Mさん

普段は聞かないのだが、震災当日はたまたまNHKのラジオを聞いていた。携帯電話よりも先にラジオが津波を知らせてくれた。3時には大津波と聞いて私が田老出身だからだろうか、これは大変だと思った。小さいころから津波の恐ろしさを叩き込まれていて、大きな津波がやってくることはわかっていた。行ってはいけないとわかっていたが、会社に行ってみんなで一緒に逃げることにした。

1週間ほど親戚の家にいて、その後は避難所に、今は仮設住宅に暮らしている。田老の407世帯がグリーンピアに、8割は入っている。そのうち6から7割は他の地域に移っていった。私も仕事をしているので、生活は元に戻りつつあるが、仮設の人と話をするとまだまだ乗り越えられない部分があると感じている。田老は何度も津波にあっているが、それに負けないことが大切だ。津波にあったおかげで、生活の面でも信仰の面でも、人間にとって大切なものが何なのかわかったような気がする。信仰のおかげで人を励ますことができ、自分も励まされる。学会員でなければショックで自己の内面に閉じこもっているような生活を送っていたに違いない。

Sさん

地震が来たときは仕事中だった。電気が消え、情報が無かった。カーナビのテレビを点けたところ、魚市場の映像が流れてきた。会社は宮町にあり、土手に上がって津波を見ていた。家は金浜にあるので、会社を早退した。家には帰れなかったので、山の方にある実家に帰宅した。実家では停電していたので情報が無く、のんびりしている様子に見えた。

おばあさんが独りでいたので、助けてあげたのだが、そのすぐ後に、H2さん、K2さんに会うことができた。そこで、K1、K2さんのお宅に泊めてもらった。K2さんは内陸の出身なので津波の知識はあったものの、体験していなかったのでよくわかっていなかった。

おばあさんと一緒に逃げた。海を見ていたら、津波が堤防を超えてきて、家が流されるのを見た。H2さんに出会ったら、また涙が出てきた。花輪の伝承館に避難したのだが、ここにきていたのはほとんど金浜の人だった。

花輪の人にはお世話になった。伝承館には畳もあったので年寄りにはとてもよかった。座布団を並べてそこで寝ることができた。ストーブもつけてくれた。体育館に比べれば恵まれていた方だろう。

最初は必死だったので、気が紛れていたが、時が経つにつれてだんだんつらくなってくる。今は津波の映像を見たくもない。

H2さん

地震の後、父の家に行ってみたが、出会えなかった。そこで、避難所へ行ったら父と会えたので、平和会館へ移動した。その時には15人くらい、会員もそうでない人も避難しに来ていた。

14日から物資の配布をした。このころには道路が通れるようになっていて、重茂までいくことができた。重茂まで行ってみると創価学会の男子部員が亡くなったと聞いた。一般の避難所に物資の配布をしていると「創価学会のものはいらない」と断られることもあった。そのうち、電池のリクエストなどを受けるようになり、応えていると「創

価学会はすごい」と褒められるようになり、徐々に「学会さん、ありがとう」という声が聞こえてきた。

O1さん

高校で事務長をしているのだが、当時学校の外にいたので、すぐに学校に戻った。もともと大事なものは校舎の4階にあげていたので無事だった。津波が堤防を超えたら危なかったのだが、直前で止まってくれた。その様子を屋上で見ていた。

生徒は470から480人ほどで、近所の人も200人ほど避難してきた。最初は保護者が迎えに来ても生徒を帰さないという方針をとり、安全が確認できてから保護者が来れば帰すことにした。しかし、帰れない生徒もいたので職員も一緒に宿泊した。O1さんも5日間学校に泊まったという。宮古市内は12日には電気が復旧、ガスと水道は最初から使うことができたので、女性職員が自宅から食料を持ってきて、自分たちで自炊した。

被災している人が激励されるべきなのに、むしろ他の被災者を激励していると感じることがあった。

K1さん

当日埼玉に出張していて、数日間家族と連絡が取れず安否がわかるまでとてもつらかった。すぐに戻りたかったが、ガソリンもないし、新幹線も動いていない。3日後に連絡がついたときには、歩いて帰ろうかとすら思った。復旧するまで待ちきれず、新潟、秋田を経由して妹の軽トラックを借りて戻ってきた。

戻る前から家がダメだと聞いてはいた。それでも実際に目の当たりにするまでは淡い期待をしていた。家族の命が一番の願いだった。無事とわかった時には、目の前が開けたような気分だった。流されてしまった家を見た時にはもちろんがっかりしたのだが、家族がいるだけで今は幸せだと思っている。家族の全員が無事だったということは、本当に希望に繋がっている。

O2さん

戦争は経験していないが、こういうことなのかなと感じた。つらかったのだが、きちんと知っておかないといけないと思い、目に焼き付けるようにした。当日は、キャトルにいた。すごい揺れで、これは津波が来ると直感した。45号は通れなくなっていたので、バイパスで移動し、平和会館の前まで来たので、会館に入った。3時に交代の人が来る予定だったが、来られないならば無理をしなくてよいと伝えた。

家は津軽石駅の近く。家に帰ることはできなかったので、娘の務めている老人ホームへ行き、そこで宿泊した。余震が何度も襲ってきた。翌日、家に帰ることができた。家はあったが、ひどい状態で、4日間ほど会員さんのお宅に泊めてもらった。自分にとって一番安心できるところは会員さんのお宅だった。5日後には親戚の家へ。そこで2日間、担当している地域の会員の安否確認をした。なるべく早く安否確認をということだった。歩いていかなくてはたどり着けないところも多く、たくさんはできなかった。

H1さん

学会員、とくにリーダーになっているような人は責任感が強いと感じる。

Yさん

震災の有無にかかわらず、普段から会員の訪問などをしたり、会合で顔を合わせたりしている。普段からこうした交流をしているので、災害時に責任感がでる。こういうことが自然にできることが、「目の前の一人を大切にする」という池田先生の教えの実践である。被災者なので支援を待っていればいいのだが、あの人はどうしているだろうかと、他人のことを思いめぐらすことが自然にできていた。

O2さん

座談会は5月に再開された。震災後、初めて再会した時には「みんな学会員でよかったね」というのが、共通した感想だった。みんなが守られていたのだ。いざというときにこういう感想をもつことができた。みなさんの一言一言がすごい座談会だった。「学会員ってすごいな、すばらしいな」と思った。この時のことは聖教新聞にも掲載された。だから自分は被災者だとは思っていない。もっとひどい目にあった人

たちのために何ができるかを考えている。

Yさん

みなさん忙しい中毎日いろいろな活動をしている。それを続けるのは大変なこと。盆暮れ正月だけではない活動だからこそ自発的に一人一人が動けた。これは創価学会の強みである。

H1さん

家庭訪問で訪れた会員の家に会員ではない人が遊びに来ていた。会員以外との交流も行っていた。特に婦人部の活躍は目覚ましいものがあった。

Bさん

津波が田老の堤防を超えてくるとは思っていなかった。公明党の市会議員（二戸）が震災翌日に来てくれて、やるじゃないかと感じた。津波のおかげで仲良くなれたということもある。田老の皆さんは比較的冷静だ。人に会うと元気付けられる。座談会に来ると笑顔になる。震災前には誘われたら行くという受け身の姿勢だったが、震災後はみんなに会いたい、笑顔が見たいという気持ちで参加している。みんな元気でやる気十分。田老近くの会員さんが場所を貸してくれて週に1回座談会を行っている。今でも愛媛の学会員からいろいろな支援をもらっている。

Mさん

宮古平和会館が創価学会の本部になったような感じがした。会長や婦人部長、普段なら東京に行っても身近ではなかなか会うことができないような人たちが来てくれた。たくさんの人に来てもらってとてもうれしかった。心のつながりが一番うれしい。

C　長根寺

市内長根の長根寺は真言宗智山派の寺院で、檀家は380軒。真言宗智山派岩手教区青年会（以下、岩手智青）の会長を務める住職の**武田秀山さん**（1963年生）に、2014年10月30日にお話を伺った。岩手には真言宗の寺院は少なく、智山派38か寺と豊山派数か寺のみで、両派をあわせても50か寺ほどしかない。

今回の震災津波では、田老地区の15人はじめ20人もの檀家の方が亡くなっている。発災直後は、避難所として近所の人たち20人ほどが避難して来ていた。長根地区は津波の被害はないので、余震が落ち着けば帰宅できた。水道は少し時間がかかったが、ガスはプロパンで問題なく、電気は翌日に復旧した。1～2日で市内に正式な避難所ができたので、被災した市民たちはそれぞれ最寄の避難所に入った。

武田さんは、今後の檀家のケアについてはやるべきことがたくさんあると感じているが、今のところは被災者の話を聴くことに専念しているという。1年目のお盆では、棚経をやってほしいという家と、お坊さんを見たくないという家の2つに分かれた。そこで、その年は来てほしいというところだけに行くことにした。

「特別なことは何もしていない。何かを用意してどうするというわけでもない。こういう時の務めは、癒せるのならば色々な言葉をもちいることだろう。しかし、それですぐに元に戻るということはない。時間がかかる。田老に、私と同じ年の人が亡くなったお宅がある。そこのお宅の両親は立ち直れていない。本人たちも体がわるいので、できるだけ顔を見せて様子を確かめるようにしているが、そんなことしかできない。『頑張れ』とは言わない。『頑張るな』と言っている」という。

こうした長根寺だが、いくつか注目される取組みや行事を行っている。

・真言宗派の活動への参画

第1に、京都の醍醐寺が行った桜の植樹と柴燈護摩供養への協力である。京都の醍醐寺の人々が毎年宮古へ来ているが、長根寺はその活動に対して全面的に協力している。

震災一周忌の時（2012年3月）には、醍醐派の僧侶により田老で鎮魂の法会が行われた。当日は水分の多い雪交じりの冷たい雨の中だった。岩手智青と共同で、宮古の河川敷（宮古高校のグラウンド）でも護摩供養が行われた。この時には醍醐派だけではなくタイの僧侶も来

てくれていた。タイの僧侶は自国の法衣のままで、懸命に祈ってくれた。3・11の日はとても寒かったが、この日もそれを思わせる寒さだった。タイの僧侶が肌を出しながら寒さをものともせずに一心に拝んでいる姿を見て、武田さんは身が引き締まる思いがしたという。

2012年5月27日にも、「命への感謝・未来への夢」と題して、醍醐寺の人々が植樹と柴燈護摩を行った。仲田順和座主以下30余名の京都からの僧侶らが、午前中にはグリーンピア三陸みやこの敷地内、市の田老総合事務所前、浄土ヶ浜の臼木山の3か所に8本の「醍醐の桜」を植樹し、犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈った。この醍醐の桜は、1596年に発生した慶長伏見地震の2年後に、豊臣秀吉によって催された、歴史に名高い「醍醐の花見」の桜の子孫（「太閤しだれ桜」と称される）である。午後には浄土ヶ浜で、震災犠牲者の鎮魂と被災地の復興を祈念し、柴燈護摩が行われた。（『みやこわが町』403号：18～19頁、宮古市広報163号：13頁）

2014年3月9日には醍醐寺の桜を植樹する「京の杜プロジェクト　桜がつなぐ架け橋」が崎山小学校で行われ、仲田順和座主や京都の醍醐小学校の児童も参加した。醍醐小学校は、2013年3月に醍醐寺から寄贈された2本の桜の苗木を大切に育てて1・6メートルまで成長させ、この双子桜の1本を崎山小学校に贈ったのである。（『みやこわが町』424号：19頁、宮古市広報207号：1～2頁）

・超宗派の慰霊

第2に、超宗派の動きを紹介したい。仏教の宗派を超えた慰霊の供養も、長根寺の武田さんが音頭を取って行われた。2013年3月11日には全国日蓮宗青年会による「東日本大震災三回忌慰霊唱題行脚」が、午後1時から田老の巨大防潮堤で行われた。

また、岩手智青による「東日本大震災復興祈願柴燈大護摩供法要」が、田老港みなと公園で午後2時から行われ、地区民など300名ほどが参加した。

真言宗智山派の大本山である高尾山薬王院と、田老の曹洞宗常運寺との共催で行われたもので、佐藤秀仁大先達が薬王院貫主大山隆玄大僧正の名代で来宮した。山伏50名ほどがたろう観光ホテル前で犠牲者の精霊の祓い清めをした後、みなと公園で柴燈護摩供養を行った。この時に用いられた火は、阪神淡路大震災復興の火を、前年2012年に真言宗の全国青年会が神戸市から福島県いわき市まで、この年に岩手智青がさらに田老まで、ともに徒歩によって運ばれたものである。代表を務めた武田さんは、「多くの人に集まっていただき盛大な供養ができた。また、被災地を応援するために、全国の仲間が集まってくれたことに感謝し、1日も早いふるさとの復興を願いたい」と語った（『みやこわが町』412号：18～29頁）。その後常運寺から、仮設店舗のコンビニエンスストア、たろう観光ホテルを経て、みなと公園へ、「行道」という練り歩きも行われた。この日もとても寒くて風の強い日だったが、僧侶たちだけではなく檀家やそれ以外の市民も数多く集まっていた。

2014年の3年目には、有志で宮古港出崎埠頭の魚市場で、夕方6時から「夢あかり」と供養を行った。岩手智青と宮古の人達との協力で行ったもので、20人ほどの参加があった。

2014年の夏には鎮魂の供養をしている10人ほどの日蓮宗の僧侶たちが、徒歩で宮古へやってきたので、長根寺に泊まってもらったという。「ゆっくり話はしなかったので細かいことはわからないが、1泊していった。身なりも食も質素で、お粥みたいなものを食べるか食べないかという感じで、頭が下がるほど真剣に被災地に向き合ってくれていた」と武田さんは振り返る。

武田さんはこうした活動に対して、「超宗派という心構えでやるようにしていた。一周忌の時には、そのために曹洞宗とも協力したし、他の宗派の人達も来ていただいた。私は真言宗のスタイルで旗振りの役をしていたものの、超宗派の活動だったと思っている」と語る。

・オテライブ

第3に、従来の寺と仏教のありかたにとらわれず、寺院を開放する動きを紹介したい。長根寺では、震災前から「オテライブ」と銘打って、

送り盆のときに本堂を一般開放し、音楽や芸能で施餓鬼供養をするイベントを行っている（主催はオテライブ実行委員会）。武田さんは『みやこわが町』の取材に対して、「本来、寺は文化を発信する場所。葬儀や供養だけでなく、寺の機能をもっと広げていきたい」と答え、本来寺院がもっていた機能を掘り起こして拡げていきたいと語っている。このイベントは、震災以降も続けられている。

２０１２年９月２日の第４回オテライブでは、アコースティックグループの「リサトキヨフミ」、宮古の創作舞踊家中川太治さんと、琴の大澤信子さんによる創作舞踊、宮古弁フォークの「うにまる」のステージが行われた。入場無料で、来場者の芳志は宮古市社会福祉協議会へ寄付された（『みやこわが町』４０６号：42頁）。

２０１３年の９月１日の第５回オテライブでは、震災犠牲者の黙祷の後、団塊世代のテケテケバンド「爺ートルズ」、津軽三味線の「みやこ三絃会」、宮古弁バンドの「うにまる」が８時過ぎまで白熱の演奏を繰り広げた（『みやこわが町』４１８号：40～41頁）[注(3)]。

２０１４年の８月31日の第６回オテライブでは、手品ショーを交えた「フナダバンド」（山田町）、津軽三味線の「みやこ三絃会」、宮古弁パフォーマンスの「うにまる」の３組が、「夢あかり」が照らす境内で、和やかなショーと迫力ある演奏を繰り広げた（『みやこわが町』４３０号：40～41頁）。

D　天理教

天理教の教会は宮古市内に11か所あるが、ここでは愛宕の宮古分教会と山口の花宮古分教会の状況を報告する。天理教の組織は親子関係の直属系統、教区支部の地域系統にわかれるが、それぞれ別のものではなく、縦糸横糸のような組織形態になっている。岩手教区や、宮古支部の地域ネットワーク以外にも直属系統のネットワークにより縦と横の関係を駆使し、連動させた支援が行われた。

D－1、宮古分教会

７代目の教会長、**高橋邦之さん**（47歳）から２０１３年９月19日にお話を伺った。教会建物への被害はなかったが、信者数名が亡くなり、多くの信者宅が被災した。愛宕に位置する宮古分教会の近所は当初道路が寸断され、多くのがれきが押し寄せた。

高橋さんが消防団員として終日活動する中、家族が中心となり、教会としてまず震災翌日より避難所と近隣住民におにぎり等の食料支援を行い、次いで信者の安否確認を行った。通信手段がなかったので、実際に一軒一軒歩いて確認し、３日目になって全員の確認ができた。それぞれ状況が違ったので、食べ物に困っていればおにぎりを届けるなど、必要に応じて支援を行った。

また、直属や教区から届いた支援物資の配布、複数回に渡る炊き出しや和太鼓、弦楽演奏の慰問演奏会などの地域支援活動も多岐に渡った。

更に、町内会長さん達から宗教団体としての活動の許可を得て、県内外から集まった者達が、愛宕地区と築地地区で行った側溝のがれきと土砂の撤去掃除は、土嚢袋で２千枚を超える作業となった。なお、同年６月には愛宕小学校において、光岸地地区の善林寺と共同で炊き出しや物資配布等の被災者支援も行った。天理教には災害救援ひのきしん隊という社会貢献を担う組織もあるが、上記のように、それとは別の宮古分教会主体の活動となった。

・心のケア

震災後特別なことはしていないが、天理教の教えが書かれたチラシ

注(3) 長根寺以外にも似たようなイベントとして「お坊さんコンサート&みに炊き出しin善林寺」が善林寺の主催で２０１４年６月15日に行われた。全国の寺院で活動中の僧侶コンビによる、カントリー・ポップス・ロックと笑いを融合させたコンサートと、震災当初から活動中の炊き出しグループによる炊き出しが行われた（『みやこわが町』４２６号）。

を定期的に地域に配布したり、事ある毎に教えに則った活動や行動、またお話をすることで、被災者の心のケアに努めている。

・慰霊

震災後最初の4月の月次祭（月次祭は毎月3日）以来、かかさず祭文の文中に、1日も早い地域の復興と人々の救済に関する文言を入れて、月々祈願している。また、宮古市内で犠牲になられた方々全員の名前を書いたものを祖霊様に供え、犠牲になられた方々のみたまを日々慰霊し、現在も続けている。

D-2、花宮古分教会

2013年9月20日に4代目の教会長で天理教の宮古地区の支部長でもある**小野寺信一さん**（63歳）よりお話を伺った。花宮古分教会は信徒約120名で、親教会は花巻教会、その親教会は三重島ヶ原大教会となる。山口に位置する花宮古分教会はかなりゆれたが、地盤が固いので被害はなかったものの、信徒の5～6名が亡くなっている。ただし、教会に来ていない人や宮古を離れた人もいるので、まだ、全員の安否確認ができているわけではない。

被災していない花宮古教会は、支援活動に来た小団体を受け入れて宿泊施設とした。そのほか花宮古分教会でも個別に活動した。20～60代の男女の信者がヘドロかきや、押し入れのものを出して、洗って、しまうなどの活動をした。ただし、当時は忙しく何をしたかという記録は残していない。後片付けは終わったが、これからは人が集まることが大切だと思っている。東京のとある分教会は数回車でやってきて、野菜を持ってきてくれた。それを被災した教会に持って行って一般の人にも配るようにした。水や米もたくさん届いた。

・心のケア

小野寺さんはこれからが大切だと思っているのだが、どうやって元気づけるかが問題だと語る。90歳くらいの信徒が、もう死にたいから早く死なせてくださいと祈ってほしいという人もいたという。何度も繰り返し、津波の映像をみていると、そういう気持ちになってしまう人もいる。お年寄りはトラウマになる。「死にたい」という人に対してどうしていいかわからない。小野寺さんはこうも語る。

「何もかける言葉がないことがある。私などが言っても慰めの言葉にならない。最近になってようやく当時のことを話せるようになってきた人も少なくない。こちらが話すのではなく、聞いてあげる。否定したりするのではなく、『そうだねー』とだまって聞いている方がいい。90歳の人に60代の私にはかける言葉がない、どんなにいい言葉でもしかたがない。『あなたの気持ちわかります』なんて言われたくない。宮古分教会の人が花宮古分教会へ避難してきたことがある。花宮古分教会は被災していないので、その人は避難所の方がみんな被災したので差がなくてよいと言っていた。同じ天理教の中でも被災しているかいないかで壁ができてしまった。わかったような振りをして慰めの言葉をかけるのはよくない。聞いてあげることの方が大切。言葉をかけるのではなく、会いに行ってあげる。聞いてあげることのもつ、励ましがある。天理教全体でそういった話がでていた。寄り添うことの大切さ。大変な経験をされた人の話を黙って聞いてあげる。返すのは『大変だったねー』の一言だけ。」

また、話を聞くことで相手の心に傷を負わせてしまう可能性がある事も危惧している。被災した人から無理に話を聞くことは心の傷をえぐることがあり、相手がどんな人かよく考えて、言葉を選んで話をしている。悪いことを言ったつもりはなくても相手の心に傷をつけてしまうことがあるという。

「手助けはいいのだが、接し方はもっと気を付けるべき。人によって受け取り方は異なる。話してもらいたくないことも多い。励ましているつもりでも逆効果のことも多い。被災していない人は被災した人の気持ちはわからない。ボランティアに来たりして直接被災した人と接した人は、こうしたことを感じ取った人もいるようだが、テレビを見ただけで話だけ知っている人には、こうしたことを理解するのは難し

いだろう。」

・心境の変化

心境の変化について、小野寺さんはいい面もあったという風に捉えているようだ。例えば、今まで父が母を虐待しているような家庭が、震災を通してまとまったというようなことや、子供たちが今までは当たり前の普通の生活がどんなに貴重かわからなかったが、これに気付いたというようなことである。一方で酒におぼれてしまったという人もいるので、さまざまであるという。

・心霊体験

海から声が聞こえるという信者さんがいた。真っ暗な海から「おーい」「むかえにきてくれー」と聞こえたという。こうしたことに対しても、聞いてあげるというスタンスで、「そうなんですか」という方法しかない。素直に受け入れてあげて、反発してはいけない。そういう姿勢しかない。こういう声が聞こえるのは心が揺れているということ。それに対して宗教的な説明もしない。ああしなさい、こうしなさいと指示すると、相手を翻弄してしまう。かえって心を乱してしまいかねない。だんだん落ち着いてきてからでいいだろう。

夜中に思い出して大騒ぎする子供やお年寄りがいる。それに対して叱ったりするのではなく、抱きしめてあげることの方がいい。言葉ではない。

・慰霊

支部として2012年3月9日に釜石の旅館、宝来館で慰霊祭を行った。宝来館のトイレをかりて、袴に着替えた。岩手教区主催で、教区長が執り行った。寒い日だったが、300人ほどの参加者があった。多くは天理教徒だが、宝来館関係者、地元の人の参加もあった。小野寺さんの親の時代の1933年（昭和8年）の津波の時に、天理教の青年会は死体の回収をし、並べて調べる仕事を請け負った。田老の布教所の跡にアンパン34個を供えて、その後それをみんなに配ったことがあるが、これに倣って行った。

神様に向かって輪廻に相当する「でなおし」された方たちを守ってくれるように、1日も早く生まれ変わって、家族を助けてくれるように、生まれ変わってまた縁を結んで「ようきぐらし」、たがいに助けあえるように祈っているという。

E　宮古コミュニティ・チャーチ

舘合町の宮古コミュニティ・チャーチ（以下、コミュニティ・チャーチ）は、大きな教団に属さない単立教会だが、キリスト教界のネットワークを通じ、国内のみならず世界規模でボランティアを受け入れ、現在も活発に活動している。福島県いわき市出身で、宮古に赴任して26年になる牧師の**岩塚和男さん**（1958年生）から、2015年5月4日に話を伺った。

コミュニティ・チャーチは、38年前にノルウェーの東洋福音宣教会が設立した教会で、プロテスタントの福音派に位置づけられる。信徒は25名ほどで、礼拝は毎週日曜日10時30分から行い、以前は宮古市内、山田町の5か所で家庭集会も行っていた。震災前には木曜日に祈祷会をしていたのだが、震災後は平日にボランティアを受け入れており、不定期になり、日曜日の礼拝後になった。徐々に落ち着いてきたので今後は元に戻していきたいという。

・震災当初

当日、岩塚さんは教会にいたのだが、避難警告が出たので牧師夫人と2人で向かいの山に避難した。そのために津波は見ていないが、教会から50メートル先の側溝から遡上した津波が噴き出すのを目にしたという。教会の建物は壁に小さなひびが入った程度で大きな被害はなかった。ライフラインの復旧も、市内では早い地域であった。震災の中でも礼拝は一度も休むことなく続けられたという。震災直後の日曜礼拝は教会でしたが、燃料が乏しく寒いので、その後の2回は薪ストーブのある近くの教会員宅で礼拝を行った。3月13日の礼拝後、教会員の安否

確認をして市内を回った。信徒の被災状況は家庭集会に参加する80代後半の女性宅が床下浸水し、客員で公務員の人の官舎が流されたが本人は無事だった。

ボランティアが来るようになると、共に礼拝に参加するようになり、礼拝堂が満員になることもあり、海外から来られる人も多かったので各国語に通訳されていた。

・支援活動の開始とボランティアの受け入れ

会員にも教会の建物にも大きな被害はなかったので、すぐに支援活動に取り掛かる事ができ、1週間後には避難所訪問をはじめた。教会員にカイロプラティックができる人がいて、その人と一緒に市内の避難所をまわり、岩塚さんは受付と傾聴を担当した。

間もなく世界中のプロテスタント教会からボランティアが派遣されて来るようになる。「3・11いわて教会ネットワーク（以下NW）」が、震災2週間後の3月24日に立ち上げられた。派遣される人や送られてくる物資の窓口となり、振り分けなどをおこなったので、沿岸の教会は振り回されることなくスムーズに活動ができた。その他、クラッシュジャパンの遠野ベースを経由して来る人達など、直接宮古コミュニティ・チャーチに来る人達もいた。ホクミン（北海道クリスチャン宣教ネットワーク　http://www.hocmin.net/）は、NWを通じて宮古を中心に1年半ほど、ほぼ毎週のように65回チームを派遣し続けた。元々北海道内の災害に対応するという目的で設立されたネットワークなのだが、東日本大震災の被災地への派遣を即断した。各地から次々と来るボランティアの拠点および宿泊のために、黒森町の一軒家（ホクミンハウス）を借り、現地に常駐するスタッフも派遣してくれた。

日本国内の宣教師たち（特にアメリカ人）は、車に物資を積めるだけ積んでいち早く駆けつけ、必要なものは取ってくださいという形で配布していた。震災直後の機動力という点では、こうした宣教師たち、また前述のホクミンの対応が迅速だったという。ユナイテッド・プロジェクト（UP）という千葉のNPO法人も、震災直後から支援に着手し、2011年夏からは現地スタッフを派遣し、2015年6月まで支援を続けた。日本キリスト合同教会（7教会ほどの教団 http://www.godo.or.jp/）は、2011年9月から毎月チームを派遣している。また毎月2週間滞在する現地スタッフも派遣してくれている。シンガポールのEPJM（長老派の10教会）は、2013年3月から毎月ボランティアを送っている。毎月10日程度活動するが、最初の頃は2週間ほど活動していた。他にも、札幌のグレースコミュニティ、聖契教団（特にIBF、長岡教会）、長野の戸倉キリスト教会、同盟教団の信州チーム、大阪のチャペルこひつじ、岡山の聖約教団などが年に数回支援チームを派遣し続けている。

このように、EPJMからは毎月2週間、合同教会は毎月1週間ほどチームが派遣され、その他の団体からも来るので、コミュニティ・チャーチには、ほぼ毎週途切れることなくボランティアが来ていることになる。そうした国内外のからのボランティアがいたので、支援活動を現在まで続けることができた。

・宮古の現地体制

現在、牧師1人、イギリス人宣教師（ハープ奏者）1人、教会員2人、合同教会から毎月2週間派遣の1人の計5人のスタッフで、国内外から絶えず訪れるボランティアを受け入れている。宿舎はホクミンが借りていたところをUPが引き継ぎ、資金を出して借り続けてくれている。6畳が3部屋、8畳が1部屋、台所の間取りで、車も4、5台はとめられる。ここを拠点に北は田老から南は山田まで出かけていく。

・支援活動の内容

震災直後は、集まったボランティアを、がれきの撤去と学童の子供たちのケアに派遣した。また炊き出しも各地で行った。当時のボランティアについて岩塚さんはこう振り返る。

「がれきの撤去に行った人達は、肉体の疲労はあってもがれきを取り除いた達成感を抱いて帰ってくる。一方、学童に行った人達は、子供

達の内に秘めたストレスを直接ぶつけられて、精神的にも肉体的にも疲労した顔をして帰ってくる。ともすると大人は子供たちがおとなしくしているので、大丈夫と思っている人もいるようだが、そうではなく、早めにケアをすることが大切だと思わされた。ボランティアが真剣に関わり続けることにより、徐々に子供達の顔が明るくなってきた。

4年が過ぎ、災害復興公営住宅に引っ越す人達が増えていて、再び周囲が動きはじめたことにより、一部の方々が不安やパニックを引き起こし始めている。昨年あたりから自殺願望を口にする人が増えている。特に他の人との交流が無い人が危ない。復興住宅に移ると、仮設住宅に比べて人間関係が希薄になり、引きこもるようになる人も増えることが懸念される。ますますスピリチュアルなケアも必要になっている。そういう意味で期限を切っての活動ではなく、地域のコミュニティに根ざした末永いケアが今後も必要とされる。」

活動理念は、震災直後から一貫して「被災した方々の隣人として寄り添い続ける」ということである。そこで、心のケアを大切にし、傾聴と訪問に力を入れているという。岩塚さんは、震災から半年間で千人以上の傾聴をしたという。

6月ごろには仮設住宅ができてきたので、避難所から仮設住宅での活動に切り替えていった。絶えず国内外から支援物資が届いた。米軍の三沢基地内のキリスト教会からは、野菜や仮設住宅で生活を始めるための日用品セットが大量にとどいて、会堂一杯となることがあった。時にはトラック1台の物資が届いた。それを仮設住宅や自宅で避難中の方々に配布した。

宮古市には当初62か所の約2千世帯の仮設住宅が建設された。ピーク時にはその90％ほどをカバーする活動となった。青森の宣教師が釜石市、大槌町でモバイルカフェをやっていた。仮設住宅ができてからすぐに、それを取り入れてみた。最初は赤前仮設住宅だったが、今は被災地全域に広がっている。当初は外にテントを張ってやっていたが、徐々に仮設住宅の集会所、談話室でカフェ（あるいはサロン）形式で行われるようになっていった。

震災直後からしばらくは、活動範囲を宮古市だけに限定していなかったので、野田村、宮城県の亘理町、山元町や福島県会津若松の仮設住宅へも行ったこともある。

仮設住宅での活動は、プログラムも多岐にわたっている。傾聴を中心にして、クラフト、音楽、生け花、落語、講談、なども行っている。ボランティアのほとんどがキリスト教徒だが、そういった能力・「タラント」[注(4)]のある人が多い。その他には合同教会の牧師で花屋だった人がいるので、フラワーアレンジメントをしたり、調理師が来れば一緒にデザートを作ったり、ギターで懐メロ、マッサージ、包丁研ぎ等できることがあれば何でもしてきた。小坂忠さんをはじめ多くのクリスチャンミュージシャンが来てコンサートを開いた。

ただし、活動の内容は状況に応じて変わるという。特に今は転換期をむかえていて、仮設住宅にいた人たちも3～4割はそこを出ている。復興住宅に移って孤立しないように、新しい生活をはじめた人達の生活が軌道に乗るまで支援を続けていくそうだ。

・被災地のコミュニティ再生とキリスト教会

震災直後に痛感したことは、それまでのキリスト教会のあり方が、地域のコミュニティと遊離した存在であったということである。震災後の支援活動を続ける中で、キリスト教会も地域のコミュニティを共に担う存在として、共に復興していくという姿勢でかかわり続けさせていただきたいと願っているという。

注(4) 元々は古代ギリシャ、ローマ等地中海地域で使われた質量や貨幣の単位。キリスト教界では新約聖書「マタイによる福音書」25章14～30節にイエスがタラントをもちいたたとえ話をしたという記述がある事から、「神から与えられた能力」という意味でつかわれる。現代語の「タレント」の語源とされる。

F　末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）（宮古市南町）

2013年9月20日に末日聖徒イエス・キリスト教会（以下、モルモン教）の宮古ワード[注(5)]の長老**松重光治さん**と実際に支援活動にあたられた**高橋浩之さん**（1974年生）からお話を伺った。モルモン教宮古ワードは30年ほどの歴史があり、これまで4回の移転の後、現在の場所となった。会員は60名ほどで、30～50代が多く、多くは宮古市民である。普段は日曜日、10時から12時に礼拝（参加者20～30名ほど）と、水曜日午後7～8時に英会話教室（参加者14～15名ほど）を行っている。

・被災状況

会員の死者はなかったが、家族を亡くした人はいる。また自宅の全壊が10名、避難所への避難が12名いた。3月13日の日曜日は礼拝を休み、その後も5月になると通常とは異なる形で集会し、聖餐式のみ行った。5月には日曜日に2㌧トラックに積まれてきた布団、食料などの支援物資を配布する活動を行った。日曜日に集まってきた会員に届いた物資を渡して、必要のありそうなところに配ってもらった。

3月19日に金沢ワードから4㌧トラックで食糧、衣料がとどいたので、一般の人に配布した。藤原神社のように正式な避難所として登録されていないため、行政の手が届いていない避難所へ直接配布した。道路の状況が悪い中での支援活動だった。軽油はほほえみの里[注(6)]、社協、サンホームみやこ[注(7)]、ニチイケアセンター宮古[注(8)]、あお空[注(9)]などの福祉施設に配布した。

3月28日に6名のボランティア隊が到着した。彼らの他、八戸、東京、兵庫、仙台などから来てくれたモルモン教の会員によって実施した。岩泉・田老、宮古市内、山田・大槌、釜石の会員を一軒ずつまわって安否確認をした。藤原での泥かき、支援物資の配布、スコップなどの道具は自前で用意した。宮古ワードをボランティアの宿泊所としても利用した。

モルモン教を通じて、東京から毎週バスでのボランティアツアーがやってきたが、それは仙台へ行っていた。宮古には仙台地域の宣教師がボランティアセンターを通じてこちらへ派遣されていた。社協のボランティアセンターが立ち上がってからは、それを通じてボランティアに参加した。

モルモン教では、震災の前から3か月分の備蓄をするように指導していた。そのために被災していない地域では被災地にすぐに備蓄をまわすことができる。また、モルモン教会は岩手県に義援金を送っている。

・会員の心境の変化

モルモン教の教えでは、生きていれば必ず試練があるが、そのことによって強くなれるというものがあり、この震災は必要なものだったのだと教えている。決して嘆いているばかりではなく、精神的に強くなることができた。被災していなくても多くの支援があり、そうした人とのつながりを大切にするという気持ちが強くなっている。

・慰霊など

普段の祈りや説教の中で組み込んでいるが、個別の死者への祈りは行っていない。

・心のケア

傾聴ボランティアを行っている。社協を通じて派遣されているので、

注(5) モルモン教におけるワードとは支部に該当する。

注(6) 鍬ヶ崎第9地割39番地27
http://www.jinsenkai.com/network/network_detail.php?cd=20130738

注(7) 崎鍬ヶ崎第4地割1番地20　http://www.wakatakekai.or.jp/

注(8) 岩手県宮古市太田1丁目2番3号　http://www.nichiigakkan.co.jp/

注(9) 岩手県宮古市向町2－34

胸にモルモン教を示す名札はつけていくが、宗教の布教はしない。

・もし、心霊現象があったら?

教会としては心霊現象を認めも否定もしない。それをうけとめてあげて聞いてあげ、それを癒してあげる。震災とは関係なく儀式を行いその中で癒しを行うことがある。ただし、この癒しの儀式は教団本部が認めているものではなく、個人的な考えで行っているものである。個人だけではなく、場所を癒すということもある。その場所がその人にとっていい場所になるようにという意味である。

G　立正佼成会宮古支部（宮古市板屋）

釜石教会[注(10)]の支部にあたる宮古支部は211世帯の信者を抱えている。1960年ごろ釜石教会から柏田のぶえ氏が布教をはじめた（宮古市教育委員会編1994年：745頁）。2013年9月20日に宮古支部支部長の**福士和男さん**からお話を伺った。

地震直後は3、4人の信者が避難してきたという。その後安否確認をはじめた。近い人は名簿を見ながら歩いて行ったのだが、全体を把握するまでは1年以上かかった。把握できている被害状況は、死亡8名、床上浸水6戸、床下浸水4戸、全壊23戸、半壊23戸、仮設へ入居13世帯である。ただし仮設へ入居した人には市が提供したアパートに入った人など仮設以外に避難した人は含まれていないので、実数はこれより多くなる。

支援活動は釜石を中心に実施した。全国で239教会の信者が、岩手の釜石教会を通じて各支部に派遣され、生活必需品、衣類、食品、マスク、豆、味噌、醤油、毛布といった物資や義援金を配布した。全国から多種多様な物資が届けられたが、何がどのくらい届いたかは正確な記録を残していないのでわからない。届いた物資は信者に配布し、一般の人には配布していない。対外的な支援よりも信者さんへの対応で精一杯だったと、当時を振り返る。支援物資はインタビュー当時も全国の信者から届けられるので、信者に配布している。また、教団からは宮古市へ義援金を出し、亡くなった信者には教団から弔慰金を出している。全国からボランティアも駆け付けた。多い時には1週間に1～2回来ていたので、宮古教会を宿泊所として提供した。

板屋の仮設住宅で盆踊りをしたいという希望があったので、8月15～16日に駐車場を提供した。2012年と13年は行った。今後も要望があれば提供したい。立正佼成会は宗教団体なので、一般の方への支援は相手を当惑させてしまうといけないので、要望があれば応えるという形にしている。

・慰霊活動

教会では一周忌、三回忌を全体で行った。その他、毎朝、釜石教会の支部では震災で亡くなった方の供養を行っている。最初の1年は全国の教会で毎朝供養し、翌年からは月命日の11日に供養を行っている。

・心のケア

信者に対して以前より頻繁に訪問し、おしゃべりをするようにしている。傾聴が中心で、宗教の話は求められないかぎりしないようにしている。信者さんは多くの問題を抱えている。それを熱心に聞くことが大切である。これは震災前後で変わるようなものではない。

当初、遺族たちは落ち込んでいたのだが、信仰のために立ち直った人が多い。母親を亡くした青年は引きこもりがちになっていたが、今は教会に来て明るさを取り戻している。だれもが佼成会の中にいるので何かしらの係りがある。人のためにと働いているので、自分のことを考える時間が無くなってしまうのがいいのかもしれない。また、立正佼成会は先祖供養が自分でできるので、自分で立ち直ることができるという。落ち込んでいた人も、立正佼成会の信仰で立ち直るきっかけとなった人も多い。

注(10) 釜石教会の支部は山田1か所、大槌1か所、大船渡1か所、釜石2か所、遠野1か所と宮古1か所の計7か所。

2　宗教系団体の支援

前節にみたように宗教系団体による被災地支援は広く行われた。一方、宣教など宗教行為は行わないが、宗教的な由来をもつNGO、NPOの活動も目を見張るものがあった。ここではキリスト教に由来する盛岡YMCA宮古ボランティアセンター、CCMN、台湾仏教慈済基金会といった団体の動きを取り上げたい[注(11)]。

A　YMCA宮古ボランティアセンター（以下、宮古VC）

震災当初から市内のプロテスタント教会と協力しながらボランティアセンターを立ち上げ、全国のYMCAを中心に多くのボランティアを受け入れたYMCA宮古VCの動きを紹介したい。

YMCA宮古VCの2014年度までのボランティアの受け入れ数は以下の通りである。

2011年度　1万1千202人（2011年3月11日から2012年3月まで）
2012年度　7千867人
2013年度　7千871人
2014年度　3千633人（10月まで）

少ないスタッフと、それほど広いとは言えない施設の中で、これだけの人を受けいれたことは記録に残しておくべきであろう。

盛岡YMCAの初動体制と宮古VCの立ち上げに関して、2015年5月6日に盛岡YMCA主事の**濱塚有史さん**（1961年生）からお話を伺った。また、日本基督教団内丸教会の牧師、中原眞澄さんも当時の状況を詳しく記している（中原2013年）ので、あわせて参考とした。

震災当日盛岡YMCAにはスタッフが4名いた。当日は前潟センター開設の準備や、サッカー教室、学童の送迎をしており、濱塚さんはオフィスにいた。まずは学童の安否確認を行い、6時ごろには全員の無事を確認した。サッカー教室はスタッフが現地で待機し、来た子供には今日は行わないことを伝えつつ、安否確認を行った。

翌日、午前11時に集合したが、当然ながら学童の子供達は誰も来なかった。月曜日には学童の受け入れをすると決定し、連絡をした。日曜日は休みをとり、翌月曜日の14日、11時に集合した。また、沿岸の教会をベースとしてアクションを起こすことも決定した。濱塚さんはスタッフにはただでさえ薄給なのにいいのかと確認したら、「助けを必要とする人たちが大勢いるこの時に動いてこそYMCAではないか」という声もあり、実施することにした。ただし、盛岡はスタッフも少ない小さなYMCAで力不足ではないかと悩んでいた。そこで、元YMCA同盟主事をつとめていた日本基督教団内丸教会の牧師、中原眞澄さんに相談したところ、阪神淡路大震災の経験から、活動をはじめさえすれば、全国の支援が続くから、力不足と限界づける必要はないと後押しをされ、決心した。

16日、被災地に赴いていた奥羽教区の議長で、牧師の邑原宗男さんに連絡し、YMCAが被災地の教会と協力して、救援活動を行うことを提案し、了承され、宮古教会が推薦された。17日には日本基督教団宮古教会の牧師森分和基さんと連絡が取れ、18日に濱塚さんはじめ3人のスタッフが森分さんに面会し、活動を開始する。19日には本格的に活動が始まり、宮古教会内に「盛岡YMCA宮古ボラン

写真1　YMCAのボランティアによる交通安全見守り
2015/12/07　撮影：藤野陽平

注(11)　なお、カトリック系のカリタスの動向は、本書第2部第8章を参照のこと。

ティアセンター」が設立された[注(12)]。

設立当初にもかかわらず、23日には横浜ＹＭＣＡと盛岡ＹＭＣＡから応援が到着し、25日には全国からの派遣スタッフによる体制となる。4月22日には「山の会」のメンバーらが派遣されて、大量の物資と3人の専門家ボランティアとして活動を行った。山の会はその後も長期にわたって活動を続けている。5月には池田勝一さんが大阪から派遣され、初代所長に着任し、人的体制が整っていく。

初代所長の池田勝一さん（任期２０１１年5月から２０１２年3月）は、1年目の活動目標に以下の4つをあげている。

①地元の方々が1日も早く元の生活に戻れるように奉仕すること。

②仮設住宅に入居されている方々が孤立・孤独にならないようコミュニティー作りをすること。

③地元での積極的な買い物、飲食、観光案内を通して地元を盛り上げ元気にすること。

④ボランティアとして活動してくれた仲間達に、地元で知り合った方々と友人となり手紙の交換をしたり、再びボランティアとして地元に訪問してもらえるよう働きかけること。

写真２　ＹＭＣＡのサッカー教室
2015/02/19　撮影：藤野陽平

この頃の活動は、電気、ガス、水道などのライフラインが寸断される中、近隣の家のがれきの撤去、荷物の運搬、天井・壁・床はがし、道路、側溝のヘドロ除去などを行った。また、ニーズの調査も同時に行った。最初期の活動は、社会福祉協議会からの推薦や個人的なつてで見つけていた。

6月から10月には避難所となっていた小学校や仮設住宅、地域商店街でのイベントで、タコヤキや焼きそばなどの炊き出しなどをし、11月から3月は仮設住宅の寒さ対策の断熱マットしき、炊き出しなどを行った。

特筆すべきは宮古小学校の通学路での交通安全見守りである。これは津波で故障した信号機のかわりに安全確保のためにはじめたそうだが、地道であるが地元に挨拶が広がる大切な働きである（池田２０１３年）。

この交通安全見守りは宮古のＶＣに専従のスタッフがいなくなった２０１５年4月以降もボランティアの手によって継続されている（写真1）。復興に携わる仕事で宮古にやってきた三浦英博さんは、毎朝7時から8時30分頃まで、宮古小学校にほど近い交差点にＹＭＣＡのゼッケンをつけて、交通整理を行っている。本人談によれば、２０１５年は4月から12月までの間に一度だけ休んでしまったが、それ以外の学校がある日には、雨の日も雪の日も路上に立ち続けている。

寡黙で自己主張をしない性格の三浦さんだが、挨拶をし、ハイタッチで小学生がやってくるのを迎えている。また、小学生だけではなく、通りがかりの人全員に挨拶をし、さらに行きかう車やオートバイ1台ずつに会釈をする。三浦さんは毎日この見守りを終えてから仕事へ向かう。繰り替えすが、三浦さんはＹＭＣＡのボランティアであり、この活動は義務ではない。毎朝出勤前の時間をこうした地道な活動に使っている。このことを小学校から評価され、２０１５年11月25日に宮古小学校の児童会から感謝状も贈られている。

２０１２年に入り、ボランティア活動もがれきの撤去といった内容から、子供達を対象とした野外活動のようなプログラムを行なうよう

注(12) ボランティアセンター立ち上げ直後の様子は『岩手日報』２０１１年4月5日付にも紹介されている。

になる。２０１２年の後半には宮古小学校のグラウンドでサッカー教室をはじめた（写真２）。３代目の所長の木田泰之さんによれば「震災後狭い仮設住宅での生活に加え、公園やグラウンドに仮設住宅が建ち、いつもの遊び場が無くなってしまいました。子供達の心と体に大きな影響（ストレスを感じたり、肥満の増加）を与えています。またそれを心配する保護者の大きな心の負担も想像に難くありません。少しでも子どもの心を開放し、思いっきりエネルギーを発散させ、子どもたちの笑顔を取り戻すプログラム」が必要であった。そのために、月１回の野外活動（アドベンチャークラブ）、夏・冬・春のキャンプ、サッカー教室、水泳教室などを行うようになった（木田２０１３年）。

小学生だけではなく、中高生に対してもプログラムを用意している。これはリーダーシップ育成を主眼に置いたもので、宮古を支える若い力を増やし、将来の担い手とすることを目指している。例えば、２０１５年２月21日に「なんだりくうべ」というプログラムが行われた（写真３）。これは盛岡の大学生と宮古の高校生が交流することを目的としたもので、企業から支援を受けている大学生が中心となり、企画運営された。内容は３班に分かれて宮古で買い物をして、料理をするというもので、朝９時30分に集合し14～15人が参加した。和気あいあいとした雰囲気の中進められ、16時に解散した。

写真３　なんだりくうべの一幕
2015/02/21　撮影：藤野陽平

当初、ボランティアは教会に寝泊まりしていたが、活動拠点として２０１２年７月８日に、宮古教会の横にプレハブ２階建てのボランティアハウス（写真４、５）が完成した。もともとあった店舗が、被災し宮古教会の横がさら地になったので、そこに建設した。宮古教会と協力しながらの活動であるので、すぐ近くにある方が便利であった。

２０１４年10月30日に４代目センター長の**斎藤勉さん**（49歳）にお話を伺った。現在の業務内容は事務作業が多いが、巡ることのできる仮設（５か所）と個人宅に出向き、傾聴ボランティアをしているという。ボランティアが来れば、何か活動はするのだが、減っているので従来とは活動の内容が変わってきている。炊き出しのような活動は今のところしていない。個人的に依頼を受けたり、社協からの依頼があったりすれば、活動もするが、子どもの野外活動の方が中心となってきている。第３土曜日に行う野外活動の参加者は15人くらい、サッカーは20人くらいの参加がある。２０１３年度までは無料だったが、２０１４年からは一部負担してもらっている。実行委員会から声がかかるので、町のイベント、復興市、魚菜市場のイベント等で焼きそばとたこ焼きを出している。日程が決まると各地のＹＭＣＡに声をかけてボランティアに来てもらっている。

写真４　ＹＭＣＡのボランティアハウス内部
2015/12/07　撮影：藤野陽平

ボランティアの受け入れは、あまり大人数のものだとイベントの手伝いならば可能だが、仮設の訪問ができないので、難しくなってきている。ボランティアには鍬ヶ崎、田老辺りを巡検してもらうようにしている。宮古の街中だけみて復興したと思われたくない。中ではなく、外を見てもらうようにしている。

ボランティアに来た人達に言うのは、現場を見て思ったことを地元

写真５　ＹＭＣＡのボランティアハウス外観
2014/10/30　撮影：藤野陽平

に帰ってから伝えてほしいということ。まだまだ、復興していないということ。そして、来てみたいという人がいればその人を連れてきてほしいということ。仮設の人達は忘れ去られることを嫌がっている。思い出したくもないことなのだが、忘れられるのはもっと嫌なのだ。

今後は心のケアの重要性が増してくる。斎藤さんはキリスト教徒ではないが、キリスト教の精神を引き継いで行っているという。最初は「ＹＭＣＡって何？」という反応をされることが多いので、その説明からはじめる。他の団体は時間と共に帰っていくが、ＹＭＣＡさんもそうなんでしょとよく言われる。この言葉は「とてもつらい」という。斎藤さんも２０１５年３月には仙台に戻るが、その後も続けて通いたいと思っている。

・今後に向けて

２０１５年の４月に宮古ＶＣの専従スタッフは宮古から撤退した。しかし、宮古ＶＣの母体が盛岡ＹＭＣＡなので、盛岡から定期的に人を派遣して、宮古での活動は続けている。同時にボランティアハウスも田の神へと移転した。今後はサッカー教室、野外活動等を継続する。野外活動は向こう10年間２０２４年までは月１回ほど活動することが決まっている。当初こうした活動に集まる子供たちは少なかったが、徐々に集まるようになってきている。地元の高校生にも声をかけて、今後のボランティアリーダーとなるように育成している。そのことを視野に入れて、今年度からは将来に向けて、ボランティア自身が自分達で活動の内容を考えて企画するようにさせている。

濱塚さんによれば、ＹＭＣＡはキリスト教系の団体だが、宣教はしないのだという。もし必要ならば、盛岡ＹＭＣＡの「きみでいいんだよ」というキャッチフレーズを伝える。それこそ彼の考える復興なのだという。

Ｂ　キリスト教のＣＣＭＮからＮＰＯ法人「with you global　あなたとともに」へ

ＣＣＭＮという香港に本部を置き、台湾、アメリカ、カナダ、ブラジル等でも活動するキリスト教のネットワーク団体がある。香港、台湾から月に１チームほどのボランティアが、このＣＣＭＮの派遣で来ている。この団体から宮古、大船渡、陸前高田への３チームが派遣され、支援活動を行っている。この団体に参加し、２０１１年11月１日に香港から夫婦で活動している**タン・ヒロシさん**（本名、譚浩洋さん１９７８年生）[注13]と、**ナオミさん**（周燕芬さん１９７８年生）のご夫婦からお話しを伺った。お２人は山田町に暮らしながら、宮古のオーシャンズ宮古国際交流倶楽部の日本語教室に通っている。

２０１０年４月にクラッシュジャパンを通じて、遠野をベースとして２週間のボランティアを行った。２０１１年11月より住み込みの活動を始めた。２０１１年４～５月の最初のベースは遠野に置いて、そこから通っていたのだが、大変なので６つのベース、３チーム（総勢17名アメリカ人１人、日本人９人、香港人７人）を設置した。宮古は香港人３人、日本人３人の６人のチームだった。宮城県で活動する団体は多いが、岩手は少なかったので岩手にした。最近は漁の手伝いもするようになった。漁師は高齢者が多く、若い人の力が必要とされているという。仮設住宅を訪問し、心のケア、復興住宅のプレゼント、イベントも行っている。

注(13)　彼については（櫻井２０１４年）でも紹介されている。

同じチームの日本人たちはこちらで電気、土木関係や、生活相談員（仮設に行って話を聞く仕事）といった復興に関わる仕事を見つけて、空いた時間に活動に加わっている。

２０１４年からＮＰＯ法人「with you global　あなたとともに」を設立し、30～40代の人が集まる場所を提供することを目的に、大船渡ではコンテナハウスを使ってカフェをやっている。そこにはビリヤード台を置いている。アメリカのYouth for Christという団体から、コンテナと場所を提供してもらった。

ＮＰＯ法人としたのは、それまでのＣＣＭＮの活動は宗教が主体だったが、ＮＰＯにして宗教性をなくすためだった。ＮＰＯ化以前は宗教の狭い枠組みの中での活動だったが、それを取りはずすことができる。とはいえ、ＣＣＭＮと関係がないわけではなく、資金、ボランティアの人手などの支援は受けている。

宮古チームはお年寄りの支援を目的に、仮設での手作り品を作るイベントをしている。1か所の仮設に8～10人の参加があるが、ほとんどが女性の参加者である。避難所時代から付き合いのある山田、大槌の10か所を回っている。仮設住宅にはもともと知り合い同士ではない人達が暮らしているので、イベントではみんなが楽しく集まって、交流し、知り合いになれるようにする。手作り品は販売してみなさんの収入にもなる。

日曜日には山田町の教会に通っている。宮古ではコミュニティ・チャーチや、日本基督教団宮古教会に行ったことがある。キリスト教のバックグラウンドがあるので、沿岸部の教会からの協力が得られている。牧師たちとも関係を持って活動している。ＮＰＯ法人化で宗教以外の活動もしているが、宗教も大切にしている。宗教性を薄めつつあるが、精神はキリスト教で、スタッフの全員がＣＣＭＮのネットワークの人たちである。

・どうして日本なのか

２００４年に夫婦で初めて日本に来たのだが、その時に出会った牧師から日本人の心の必要性を教えられた。日本はお金があって、オシャレかもしれないが、友達が少なく、心に傷がある人が多い。それを何とかしたいというヴィジョンを持ったという。途上国ではなくて日本にしたのは、途上国の問題はお金とか開発といった目に見えるものが多い。しかし、日本の問題は目に見えない。だからより深刻で大切だと思った。それでいつかは日本に行ってキリスト教の活動をしたいと夫婦で話していた。それがいつのことなのかはわからなかったが、東日本大震災のことを知って、それがその時なのだと感じたという。

ヒロシさんは香港で9年間警察官を務めていたが、それをやめて来日した。香港では10年間働くと退職金が３００万円ほど出る。しかし、9年目に大震災があったのですぐ来てしまい、もらえなかったという。4月に1度来て、壊滅的な状況を目の当たりにし、来日を決心した。その後数回訪問して11月に長期のビザが取れた。山田に残って活動している団体はほとんどなくなったが、ビザの問題だけクリアできれば、今後も継続して活動することを望んでいる。ただし、言語の問題は深刻で、自分が言いたいことを充分に伝えられないし、間違ってしまうこともあるという。また、文化の問題も難しく、何をすると失礼なのかよくわからないことも多いという。

来日当初は日本語検定5級程度の語学力だったが、２０１５年に2級を取得し、２０１６年には1級に挑戦するという。それで、今も傾聴ボランティアをしているが、50％くらいしか話がわからない。細かいニュアンスはわからないから聞いているだけだという。確かに方言もあり、なかなか大変であろう。

将来は地元の人とつながりを強めて、別の場所で何か災害があった時に、ここの人とその場所に行って、支援活動を一緒に行いたいと思っている。そのためにカウンセリングなどのトレーニングを行っている。これは宗教ではなくＮＰＯ法人として行う。ここの人たちは今回地震や津波を経験した。他の場所で災害があった場合、こういう経験をした人が行くことはとてもいいことだと考えている。その時には宮古や山田の人達と一緒にボランティアに行きたいと思っている。具体的に

は、チャンスさえあれば２０１６年に地元の日本人と、ヨルダンやシリアに行って、難民の仮設住宅で支援活動をするということを模索している。

C　台湾仏教慈済基金会（慈済会）

東日本大震災では日本国外の宗教団体からも多くの支援が寄せられた。こうした動きは当然宮古市でもみられ、その中で傑出したものとして台湾仏教慈済基金会（以下、慈済会）の見舞金配布について紹介したい。台湾の慈済会は会員数５００万人を超える世界最大の仏教系ＮＧＯで社会貢献活動を非常に重視している（金子２００５年）。

慈済会の東日本大震災における支援活動については金子昭がまとめているので（２０１１年）、ここでは宮古市での活動を紹介する。慈済会の日本支部は１９９１年に設立され、普段から慰問活動、バザー、老人ホーム訪問、ホームレス支援、国際救援活動、募金活動、ケア活動などの社会貢献に力を入れている団体である。会員には登録し定期的に一定の額（金額は不問）を寄付すればなれるが、その大部分は在日華僑で、女性が多い。大部分は東京在住で東京に2千人、全国で約5千人の会員がいる（『日本慈済世界』２０１２年3月15日特別号：12～14頁）

慈済会は２０１１年6月9日から12月4日にかけて岩手、宮城、福島の被災者、9万6千４６１世帯に49億８９８３万円の大型見舞金と救援物資を配布した。この活動に参加したボランティアはのべ４千２８３人であった。この活動の一環として9月23～25日、対象地域を宮古市、洋野町、久慈町、野田村、田野畑村、岩泉町として５千１４０世帯に第6回住宅被害見舞金配布が行われた。宮古市では被災した3千９７７世帯に対し、1億９８８５万円の見舞金が配布され、この時に参加したボランティアは２０７人だった（『日本慈済世界』２０１２年3月15日特別号）。

より具体的なタイムスケジュールをみてみよう。9月22日午後4時、宮古市民総合体育館、多目的体育館に集合した。翌23日と24日の両日、午前8時、宮古市民総合体育館、多目的体育館に集合した慈済会は9時から18時（24日は17時まで）の間に2千２３１人（23日）と1千１９７人(24日)に見舞金を手渡した。25日には場所を変えてグリーンピア三陸みやこ多目的アリーナに午前8時に集合し9時から12時までの間に５２８人に見舞金を手渡した。

この活動は事前に趣旨を説明したうえで宮古市側も協力する形で進められ、例えば以下の罹災世帯、人数の情報の提供が宮古市からなされた。世帯人数によって見舞金の額が違うので、事前にこうした情報がなければ見舞金が実際にいくらほど必要か判断できない。

見舞金の支給対象となるのは3月11日時点で宮古市に在住し、かつ、住んでいた住宅が全壊、大規模半壊、半壊となった世帯で、支給額は単身世帯3万円、2～3人世帯5万円、４人以上世帯7万円、申請に必要なものは提出用罹災証明書、身分を証明するもの、印鑑であった。この内容は『広報みやこ』9月15日号の折り込みチラシとしてアナウンスされた。

見舞金に関してその支給する理由を「私達は被災者の方々を家族の一員と考えています。家族が苦しんでいるとき、もっとも直接的な助けとなるのは見舞金」と述べている。活動中、被災者に対して90度のお辞儀をするのだが、これは「三輪体空」といい、布施を施される人も、施す人も、施される物も違いがなく、施すことと、受けることが同じであるので、相手が苦しみの中にいることで施す機会を与えてくれることに対して、90度のお辞儀をして感謝の念を示しているのだそうだ。活動中は全員が制服を身につけるが、それは「正しく行動するために制服を正しく身に着ける。身だしなみをきちんとすることで自然と気品や人格がにじみ出てくる。これが慈済の謳うヒューマニズムである」という。さらにどんなに共感しても相手を傷つけてしまうかもしれないので、慰問時に涙を流さないことも決められている。

見舞金は「39の国で慈済人が行った募金によって集められ」たものであり、ボランティアは自費で交通費食費宿泊費を賄い、募金で集め

たお金がここに使われることはない（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号：10～11頁）。

ボランティアは常日頃から訓練されており、今回は以下の役割分担がされていた。協調係（会場のスタッフのまとめ役、会場の窓口、市町村の担当者との渉外）、総務係（必要な物資の調達）、財務係（見舞金の準備、配布世帯数金額の集計管理）、交通係（ボランティアの移動手段であるバス、備品を運ぶトラックの手配、スケジュール管理）、香積係（炊事）、引導（案内係）（見舞金配布の際に、来場者を案内。一次受付の「查詢」：身分確認、該当条件、罹災証明書の確認後来場者を二次受付へ案内する。二次受付の「核章」：二重受領がないようにチェックし、来場者に見舞金を手渡し、受領印をもらう）。

宮古での見舞金配布時の様子を参加したボランティアが文章にしている（『日本慈済世界』２０１２年３月15日特別号：38～39頁）。大型バス１台、トラック１台、ワゴン車３台で来宮した慈済会のボランティアの多くは女性であった。重たい物資（１千８１３箱のインスタントライス、総重量10トン）の運搬もあり、大変であったが、トレーニングを受けているので、問題なかったという。このインスタントライスを１世帯２キロ、６千世帯に配布した。第１日目には朝７時前から受け取りにきた人たちの長蛇の列ができており、中には見舞金のおかげで祖先の供養ができるようになった女性がいたと紹介されている。翌日は２組に分かれての活動であったという。第１組は宮古市の約４千３００世帯の被災者への見舞金配布と慰問をし、第２組は宮古市北部約１千３００世帯の被災者への見舞金配布と、以前見舞金を配布した世帯への慰問を行ったという。その際にインスタントライスは日本でなじみがないので、その食べ方を細かく説明することもあったという。

表１　慈済会による見舞金、世帯数、総額

（『日本慈済世界』2012年３月15日特別号による）

県	市町村	世帯	総額(単位､万円)
岩手	洋野町	27	135
岩手	久慈市	261	1,353
岩手	野田村	458	2,406
岩手	岩泉町	187	919
岩手	田野畑村	230	1,204
岩手	宮古市	3,977	19,885
岩手	山田町	2,761	14,045
岩手	大槌町	3,591	17,885
岩手	釜石市	3,678	18,254
岩手	大船渡市	3,355	17,253
岩手	陸前高田市	3,568	18,690
宮城	気仙沼市	8,065	41,465
宮城	南三陸町	2,893	15,953
宮城	石巻市	29,529	149,325
宮城	女川町	2,554	12,848
宮城	東松島市	10,208	54,742
宮城	松島町	1,310	7,100
宮城	塩釜市	3,268	16,516
宮城	利府町	748	4,062
宮城	七ヶ浜町	1,110	6,218
宮城	多賀城市	4,274	21,614
宮城	名取市	3,241	17,503
宮城	亘理町	2,735	15,487
宮城	山元町	2,843	15,261
福島	相馬市	1,590	8,860
	合計	96,461	498,983

表２　宮古市の罹災世帯数、人数

１人世帯	1,134世帯	1,134人
２人世帯	1,302世帯	2,604人
３人世帯	811世帯	2,433人
４人世帯	502世帯	2,008人
５人世帯	269世帯	1,345人
６人世帯	188世帯	1,128人
７人世帯	60世帯	420人
８人世帯	18世帯	144人
９人世帯	8世帯	72人
10人世帯	3世帯	30人
11人世帯	1世帯	11人
計	4,296世帯	11,329人

3　被災から復興へむかう日本基督教団宮古教会　伝統と被災との先に

大通一丁目に1軒のキリスト教プロテスタントの教会があった。日本基督教団宮古教会だ。１９０９年設立の古い教会で、すでに１００年以上の歴史がある。それはつまり今回の津波で3回目の浸水だったということを意味する。山口にある、ひかり幼稚園（１９６９年開園）は岩手県キリスト教学園が母体だが、宮古教会との関係は強く、現園長は牧師の森分さんが務めている。また、すでに１９９８年に閉園したが、１９２９年12月1日から宮古教会内に宮古幼稚園も併設しており、伝統的に子供との関わりの強い教会である。この宮古教会とひかり幼稚園がこの度の津波を契機として、西町へ移転することとなった。本節では本教会の被災状況と移転に至るまでの動向を報告する。なお、被災から移転までの出来事は年表にまとめたので、参照いただきたい。

宮古教会の建て替え前の会堂（写真6、7）は１９３８年に建築されたもので、当時の牧師の羽生義三郎さんの設計による。羽生牧師は東北学院大学神学部を出ているが、その前には秋田工業を経て、東京高専に通った経歴を持つ。一級建築士の資格を持っており、各地の教会の設計をてがけた。日本基督教団の一関教会も彼の設計で、国指定の文化財となっている（一関市HPより　http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/index.cfm/18,8319,132,159,html）。宮古教会も当時の建築を思い起こさせる雰囲気のある建築物である。

現在の会員は10名で高齢者が大半を占めている。教会員の人的被害はなかったが、被災状況は教会が2㍍の浸水をした。津波は玄関を破って、会堂に入り込んだ。押戸なので、後ろの部屋へ、そして事務室、台所へと流れ込んだ。会堂内のものは後ろにむけて流された。会員宅も1軒浸水し、求道者（洗礼を受けていないが教会に通っている人）宅の全壊が2軒あった。

２０１４年11月1日、宮古教会の牧師、**森分和基さん**（１９７６年生）にお話を伺った。愛媛県、八幡浜出身の森分さんは4代続く牧師の家系で、祖父のおばが第1代目の牧師で婦人伝道師だった。関西学院大学の神学校、修士課程を修了し、２００２年に最初の赴任地として来宮した。

震災当時ひかり幼稚園にいた森分さんは、幼稚園で物資を集めて、山口の自治会と相談し、自治会長がその物資を茂市の支援物資基地へ持っていった。山口地区は自治会の力が強いところで、米をまとめ買いし、建築関係の業者から発電機を借りて避難所とした。電気、ガス、米が確保できていた。教会は被災し、避難所にはならなかったが、初動段階では幼稚園が十分にその機能を果たした。

ＹＭＣＡと協力しながら行ったボランティアの受け入れについてはすでに述べているので、ここでは宗教者としての彼の話を紹介したい。

「今後の宗教として大切なのは、自己肯定感だ。震災を体験すると自分の力が小さく見えてしまう。しかし、そこで大切なのは生きる力と愛される経験で、どこまでも愛してくれる神がいるということを理解することだ。だから親にも子を大切にすることを教えているし、教会としては安心できる場所を提供する。

他人や自分がダメだと思っても、神はその人をいいやつだと言ってくれる。このことが生きる力となる。多くの人が震災後「生き残ってしまった」という否定的な思いが入っている。そういう意味で宗教のもつ意味は大きいだろう。

どうして震災が起きたのか？その答えはないと思っている。自分達が理解できないようなものである。人が理解できるように説明をつけられ

写真６　日本基督教団旧宮古教会
2014/11/15　撮影：藤野陽平

るかもしれないが、それが本当のことかはわからない。死んでから天国に行って直接神様に聞いてみたいと思っている。その時までの楽しみにしている。」

表３　宮古教会の被災から建築終了までの動き（宮古教会の『移転・建築』経過報告による）

年	月	日	
2011	3	18	盛岡YMCAと連携しボランティアセンター設立。
2011	3	20	礼拝再開。
2011	5	18	震災特別会計口座開設
2011	8	30	震災復興委員会を組織。2013年3月までに30回の会合を行う。
2012	4	10	教会堂の応急修理着手　9月初旬完成。
2013	2	10	後期定期協会総会にて教会の移転を進めることを決議し、幼稚園の認定こども園化を進めることを承認する。
2013	3	27	震災復興委員会から移転・建築委員会へと発展的に変更、2014年4月までに18回開催。
2013	9	29	臨時協会総会にて、用地取得、教会・牧師館新築、資金計画を決議、認定こども園新築を承認。
2014	2	23	後期定期協会総会。設計者並びに設計概要を決議。
2014	10		施工業者決定。
2014	11	15	起工式。
2015	3		YMCAボランティアセンター、スタッフの常駐終了、4月に事務所移転。
2015	9	27	旧会堂での最後の礼拝。
2015	10	4	新会堂での礼拝開始。
2015	10	31	旧会堂・牧師館解体、用地の整地終了、認定こども園宮古ひかり開園式。
2015	11	2	認定こども園宮古ひかり認可、開園。
2015	11	21	認定こども園宮古ひかり第１回入園式。2015年12月現在75人が通う。

牧師であり、園長でもある森分さんは、教会付属の幼稚園という点から、子供達へのケアについてもこう述べる。

「それまで私の顔をみるとまとわりついてくるのに、震災の後表情を失ってしまった子がいた。母親の後ろに隠れてしまう。これは恐ろしいことだと思った。ただ、子供にカウンセリングはできないので、こうした子どもの問題は教会付属の幼稚園の使命だと思った。年長の子たちが積み木で津波を閉じ込めるという遊びをしていた。こういう時には暴力的になってチャンバラ遊びとかをさせる。そういう感情を吐き出させてあげる。安心して幼稚園にこられるようにすることが、情操教育的に意味がある。

心のケアをしてあげようという大それたことではなくて、普通の世間話をすることが大切。数を多くこなすことはできないが、一人一人の状況を聞きながら、打てる手を打っていきたい。心の面でも生活の面でもできることがあれば、したいと思っている。」

・震災後の様子

キリスト教会にとって何よりも大切なのは日曜日の礼拝である。３月11日は金曜日だったので13日が日曜日となるが、この日はまだがれきとヘドロが教会を覆っており、礼拝には誰も来なかったという。翌週の20日には教会員７、８人とＹＭＣＡの２人が集り、パイプいすを並べて祈り、情報交換をしたという。この時まで礼拝ができなかったと否定的に捉える見方もあるが、会友の山根さん（１９４７年生）は不自由な中で丸くなって礼拝を行ったときに、キリスト教の最初の教会とはこういうものだろうかという感覚を覚えたという。

３度目の日曜日である27日に、椅子も座布団も流されている中、20~30分と短いものであったが、教会員とボラ

ンティアで礼拝を行なった。その後、1時間かけて自己紹介し、教会員で話せる人は震災の経験などを話してもらった。これにはグループカウンセリングのようなことを考えていた。ただし、まだ話すことができない人もいるので、自己紹介ということにした。ボランティアで来ている人にもどこで何をしに来たのか話してもらい、情報を共有した。話を聞いてもらうこと自体に意味があったと森分さんは考えており、この形式を1か月続けた。

写真7　日本基督教団旧宮古教会内部
2015/02/22　撮影：藤野陽平

・YMCAを通じたボランティアの受け入れ

上述のYMCA宮古ボランティアセンターの受け入れをしたのが、この宮古教会である。教会側の対応について報告する。YMCAのメンバーには当初、教会が泊まれるような状況ではないので、幼稚園を宿泊施設とした。教会としてもボランティアに参加したいが、教会員は高齢者が多く、ヘドロの除去、がれきの撤去を手伝うことは現実的ではないので、YMCAを通じて教会に来るボランティアにまかせて、皿洗いや、清掃、炊き出しといったできることを担当した。またある教会員は水没した教会の書類を一枚一枚丁寧に水拭きしたという。

二戸の日本基督教団奥中山教会の人たちを皮切りに、たくさんのボランティアが押し寄せ、その数、年間1万人ほどになっていたという。4月27日ごろ電気が通ったので、その後は幼稚園を出て、教会に寝泊まりした。当時の様子を森分さんはこう振り返る。

「年間1万人というのは平均して毎日35人ほどになる。寝るときは牧師館に戻らせてもらっていたが、それ以外はずっと一緒にいる。正直しんどかった。緊張状態も続いていて、がれき運びは、体がもって1週間だろう。筋肉が固くなってきて、10日後くらいから立ち上がるのもつらかった。九州にいる両親に会いに行った時にマッサージを受けたが、その時にマッサージ師にあまりの体の堅さに驚かれたこともあった。」

特に準備をして受け入れたわけでもないので、当時の教会は相当混乱していたようだ。牧師もパニック状態であったと、自他ともに認めている。また、多くのボランティアを受け入れたいということと、教会を元の祈りの場に戻したいということの相反する感情が入り混じっている。教会には物資やボランティアのものが大量に置かれるようになり、それまでの静かな宮古教会の環境は変貌する。伝統的に社会事業に力を入れてきた宮古教会は、極力ボランティアに協力したいという思いが強かったし、それを教会も受けいれていた。一方で環境が変わった時だからこそ、変わらないものがあるということを大切にしたいという思いも一部の教会員の中にはあったようだ。また、ボランティアは教会で寝泊まりしているので、教会員よりもボランティアの方が教会にいる時間が長くなり、教会員が教会にいくと、まるでボランティアの人達の場所のようになっていて、逆に教会員がボランティアから「何か用ですか」といわれるようなこともあったという。役員の北村嘉勝さん（1952年生）は「誰もが譲れないシビアな体験だった。でも、それでもみんなが集まる場であり続けた」と当時を振り返り、様々な思惑が錯綜していた。それでも教会はそれらを包み込み受け止め、集まる場となっていたという。

・教会員の被災体験

教会員の一人で教会の目の前に住み、自宅が浸水した役員の**大森桂子さん**（1934年生）に2014年11月2日にお話を伺った[注(14)]。

花巻出身の大森さんは岩手県更生保護女性連盟副会長、宮古地区更

生保護女性の会会長、宮古市赤十字奉仕団委員長などを務めている。花巻教会にて、1955年ころ社会人になった時にキリスト教の洗礼を受ける。夫婦ともに中学校の教員だった。しかし、就職後、土日は部活動の顧問の仕事があり、教会に通うことができなかった。真面目に教会に通うようになったのは退職後のことだという。

大森さんは自宅に介護が必要な夫と2人でいる際に被災した。防災無線はこだましてしまっていて、何を言っているのかよくわからなかったが、津波が来るまでは電気が付いていたので、家でテレビを見ていたという。津波が来るというので、障子をあけて外を見ていると道路沿いに真黒な龍のように津波ががれきを押しながら進んで来た。夫は自分で歩くこともできたが、ベッドでの生活だった。そこに水が入ってきた。水深はどんどん上がってくる。「お父さん2階へ行こう」と言ったのだが、立てなくなってしまう。そうこうしているうちに、窓ガラスを3枚破ってあっという間に水が入ってきた。介護用のベッドはパイプでできているので、片側が浮いて傾いた。立ち上がれなかった夫も水に入ったために浮力で立ち上がれたので、2人で立ち上がり耐えた。

3時25分から4時5分までの40分ほど胸の上、肩の下位まで水が来た。これ以上来たらだめだと思った。それでも「こんなところで死んでいられないよね」と夫を励ましつつ、神様に「もしこれからもこの世で私の力が必要でしたら助けてください」と心のなかで祈っていたという。

水が下がってきたら、部屋は引き戸なので開けることができたので、夫を引っ張って2階へ移動できた。「本当に命拾いをした。九死に一生を得た」という気持ちだったという。夫が病気で逃げられなくて本当につらいことも多かったが、神は耐えられない試練にはあわせないという聖書の言葉を信じて耐え抜いたという。

翌日外をみたら、左側から来た津波と右側から来た車が重なり合って7台ほどつみあがり、家から出られなくなってしまった。目の前の教会に行くこともできなければ、家の階段がヘドロだらけになり、玄関の入り口、下駄箱も倒れて戸が開かない。あらゆるものが倒れて出るに出られなくなっていた。それで困っていたところに森分さんが来て、大森さん夫婦を負ぶって階段を降ろし、車で宮古小学校の避難所まで連れて行ってくれたという。「森分先生には本当に助けられた」と語る。その後も森分さんは避難所を毎日見舞ったという。

続けて、教会員にも助けられた。夜になると必要な物資を持ってきてくれた。食事は11日の昼食を取ったきりで、12日の夜まで飲まず食わずの状態だった。その時には小さいおにぎりとペットボトルを夫と2人で分けた。そんなところに「さむいでしょ」と言って教会員が服や食料などを持ってきてくれた。大森さんは「超助けられました」という。

12日と13日の2晩、避難所に宿泊したが、保健担当の人が夫の健康状態をみて、暖かいところに移らないかと言ってくれた。介護が必要な夫はトイレに行くたびにその人に手伝ってもらっていたので、わかってくれた。そこで、14日には千徳のデイサービスセンターへ移れることになったが、移動手段がなかった。丁度別の民生委員が来ていて、自分も民生委員をしていたので顔見知りであり、車で連れて行ってくれることになった。

震災後1週間、そこでお世話になっていた。教会員の車を森分さんが借りてきてくれて、家に帰った。ここから大森さん宅の復興が始まる。もちろんそれまでも家が気になって仕方なかったが、移動ができないのでどうしようもなかった。この頃には教会と連携をはじめていたYMCAのボランティアセンターが、森分さんの紹介で片付けに来る。水やヘドロを被った冷蔵庫、食器洗い機、洗濯機といったものを全外に運び出して、床板をはがす。それまで使っていた大事なものを全

注(14) 彼女の被災経験は日本キリスト教団出版局の『その時、教会は―3・11後を生きる』にも掲載されている。あわせて参照いただきたい。

部なくすつらい経験だったという。耐震措置をしていたので、戸棚だけは流れなかった。その中に印鑑や銀行の通帳があって取り出すことができた。

その後、知り合いの工務店の社長にリフォームをしてもらい、6月初めから住むことができるようになった。最初は建て替えようかと思ったが、柱、壁、玄関がしっかりしていたので、改築で済ませることにした。その時有り合わせの応急手当のような材料でやったので、あまりいい材料でないのがやや不満だが、あれから3か月で住めるようになったのだからありがたいという。

・移転への思い

宮古教会は今回の津波を契機として、浸水しなかった西町へ移転することを決意した。それも、ひかり幼稚園と合同で同じ敷地に入り、ひかり幼稚園は認定こども園として新しい歩みをはじめる。宗教と教育の場が一体となって、単に元あった形に戻すのではない復興の姿を見せている。

この移転について森分さんはこう語る。

「この教会はこれまでの歴史を考えると100年に3、4回は浸水する場所に建っている。100周年を超えた教会なので、今後100年を見据えて、幼稚園もあるので子供達が安心できる教会にしなくてはいけないということを思い、教会員に移転の提案をした。

教会員はよく決断してくれたと思う。20~30年に一度浸水するとしても、宮古教会は高齢者の多い教会で、多くの会員にとって次の浸水は関係ないかもしれない。それでも移転を受け入れてくれたのは、自分のことだけではなくて次世代のことを考えてくれたということだ。」

宮古教会は以前から福祉や幼児教育に力を入れてきた。その伝統を踏まえこう続ける。

「子供や福祉に終始携わってきた教会であり、今の宮古教会の使命としては子供達を受け入れる。それと同時にお年寄りに優しい教会であるべき。今来ているお年寄りたちも教会に来ることを喜んでいる。移転しても彼らが同じ気持ちで来られるようにしたい。ゆりかごから墓場までのように、生まれてから死ぬまで安心して来られる場所で、その中心に教会があるといい。」

教会員はどのように考えているのだろうか。役員のお2人にお話しを伺った。大森さんはこう述べる。

「残念な気持ちは確かにあるのだが、終戦後まもなく大きな台風で大洪水が起きた。1階の屋根の下まで浸水した。過去にそうしたことが2回あった。そして、今回の津波がきた。その度にあとが大変。それを考えれば仕方ないかと思う。移転がベストな選択だと思う。今、復興で資材が値上がりして残念だが、今やらなければいけないと思っている。」

北村さんはこう述べる。

「幼稚園を続けていても、地方の私立では成り立たなくなるのはわかっていたのに、認定こども園にする踏ん切りがつかないでいた。また教会と幼稚園が離れていて、教会立の幼稚園であるということが失われていた。移転で信仰と社会的な役割が一致した姿を取り戻すことができる。それが教育としての復興なのだと理解している。これを津波が後押ししてくれたと思う。後ろ向きになれば古いものにしがみつくことになる。宮古の幼児教育は宮古教会が先駆けとなった。その姿を取り戻す。」

こうした意見があるなか、教会員でこの移転に最も感情を動かされたのは**小成道子さん**（1932年生）であろう。小成さんは現在の宮古教会の建物を設計した羽生義三郎牧師の娘で、生まれて間もない1933年に猪苗代から宮古に家族で移住している。

幼少のころ、宮古教会の敷地にある牧師館で生活してきた彼女の人生は、まさにこの教会の苦難の歴史と共に歩んできたようなもので、

生き証人である。戦時中はキリスト教への風当たりが厳しく、羽生牧師一家以外は礼拝に来ないという状況におちいった。また、１９４７年９月にはキャサリン台風、１９４８年９月にはアイオン台風で浸水したりといったことを、昨日の出来事のように覚えている。

小成さんの話を要約すると、キャサリン台風は床上2、3センチメートル位で、大きな被害はなかったが、アイオン台風の時にはピアノやオルガンにも被害がでた。当時は教会の敷地で幼稚園もしていたが、台風なので子供達は来ていなかったので、人的被害はなかった。

特にアイオン台風の時は被害が大きく、室内の1メートル以上浸水し、椅子も町の中に流れ出したという。羽生牧師は小成さんの弟に聖書を守ってくれといい、弟は泳いで取りに行った。聖書を濡らしてはいけないので、ちょうど浮いていた茶箪笥を船のようにして教会の2階に避難した。当時、この辺りで2階建の建物は少なく、近所の人達も教会に避難しに来ていた。

父の設計した教会を取り壊し、移転することについて小成さんはこう語る。

「悲しい。1歳からここで育っているので、愛着があります。音響もいいです。しかし、移転は仕方がないと思っています。壁の中にもヘドロが入っていると言われていて、変な愛着は捨てなくてはいけないでしょうね。でも、本心では永遠にこの教会を残してほしいと思っているのです。

この教会は私の故郷みたいなものです。今住んでいる家で祈ることと、この教会で祈ることは別のことのようで、教会で祈るととてもこころが安らぎます。ただ、教会であればどこでもいいというものでもなくて、この教会で祈るから安らぐのです。私にとってこの場所はとても特別なものです。よその教会で祈るときにはなんとなく緊張するのですが、ここでは安らぐ感じがするのです。」

小成さんにとって、宮古教会は苦楽を共にしてきた人生の相棒ともいえるような、愛おしい教会である。それでも、彼女は移転に賛成し、反対することはなかった。教会を津波の来ない安全なところに移転すること。幼稚園を認定こども園にすること。そうすることで森分さんのいう、生まれてから死ぬまで安心して来られる場所で、その中心が教会だというその思いを、教会員も共有し、そして強い思いとなっていることがみてとれる。心と教育の復興に向けて、この教会と幼稚園がしようとしていることを記録にとどめておきたい。

おわりに

近年、宗教社会学では宗教の社会貢献についての研究が進められている。（櫻井２０１２年等）。本章で見てきたように、今回の震災の際に、宗教は社会の中での資本としての役割を果たし、他の団体では果たせない社会貢献を行ってきたと評価できる。

宗教的な意味では慰霊、復興支援という意味ではボランティアや支援物資の組織的派遣、ケアという意味では傾聴活動といったものは、各教団に共通したものであった。

特筆すべきは、内外のネットワークの仲介をしたという点である。宮古の宗教施設は、ここで見てきたように相当数のボランティアを受け入れ、その宿泊場所として機能した。受け入れ人数を示してくれたＹＭＣＡやコミュニティ・チャーチはそれぞれ数万単位の人を受け入れている。それ以外の教団もこれに近い人数の受け入れをしていたとみてもいいだろう。元々宗教施設は大人数が集まるようにできていることが多く、多くの人が宿泊できる広い土地と施設、大量の料理を作れる炊事場など、ボランティアセンターとして必要なものを兼ね備えている。『朝日新聞』２０１１年４月４日付によれば、岩手県は県外からのボランティア受け入れに際して、宮城県に比べ受け入れ態勢が整っていないことが指摘されている。その原因に宮城県は中心都市仙台が沿岸にあるのに比べて、岩手は盛岡が内陸にあり、沿岸部には交通、宿泊の面で限界があったということである。そのためか岩手県のボランティアの受け入れは、２０１１年３月末までに宮城県の６割ほどで

写真８　日本基督教団宮古教会の新会堂（手前）と認定こども園宮古ひかり（奥）
2015/12/06　撮影：藤野陽平

写真９　日本基督教団宮古教会の新会堂内部、聖卓、椅子、オルガンといったものから、聖壇横の柱まで旧会堂から持ち込まれた。　2015/12/06　撮影：藤野陽平

あった。記事によれば、受入がままならず、ボランティアを断った市町村も少なくないそうだ。このように見てみると、一つの施設で数万人のボランティアを受け入れた、宮古の宗教施設の重要性がより際だってくる。宗教の場の開放がなければ、宮古で活動した県外からのボランティアの数はさらに少なくなっていただろう。

　また、被災、支援だけではなく、日本基督教団宮古教会のように、次の時代を見据えた宗教による復興の姿もみることができた。新しい教会ができて間もなくの２０１５年12月６日に、訪問した際に何人かの方に話を伺った（写真８、９）。小成さんのように「まだ慣れていないのでよくわからないが、すべてが一回りずつ小さくなった。なんだかさみしい」という素直な感情を吐露された方もいた。大森さんは「落ち着いた。前の会堂の部品も新しい会堂に利用しているので、

写真 10　日本基督教団宮古教会の新会堂に持ち込まれた旧会堂の記念品
2015/12/06　撮影：藤野陽平

写真 11　起工式の際にヘドロを被った古い石の上に新しい石を１人１つずつ積んでいく。
2014/11/15　撮影：藤野陽平

引き続いている感じがする」という。確かに聖卓や椅子、オルガンといったものの他にも看板や表札、定礎など旧会堂から持ってきたものがある。これらを新会堂内に目に見える形で配置してある（写真10）。最たるものとしては、聖壇横の柱は旧会堂で使っていたものをそのまま持ってきたものだ。そのように考えると、２０１４年11月15日に行われた起工式の際に、旧会堂付近のヘドロを被った石を新会堂建設予定地に運び、その古い石の上に、新しいレンガを全員で載せていくというイベントが行われたことが思い出される（写真11）。まさに伝統・被災の先の復興を思わせる象徴的なセレモニーであった。

　２０１５年12月24日にはクリスマスイブ礼拝が行われた。ここでは聖卓を取り囲むような形に丸く椅子を配置しての礼拝であった。これは聖卓が前、会衆は後ろという聖俗が切り分けら

れる形ではなく、一体であるという神学的発想がベースになって、役員会から提案されたものだそうだ。会員の中には、震災直後に礼拝が行える状況ではない際に、椅子を丸く並べて祈ったときのことを連想した人もいたようである。牧師の森分さんはそういった理解も排除せず、両方の考えを意識しながら考えたという。まさに100年を超える教会のもつ伝統の上に、被災という経験があり、その先に新会堂と認定こども園という新しいチャレンジが位置づけられている。ここに復興というものの一つのあるべき姿が現れているのではないだろうか。伝統やこれまで行ってきた慣習といったものを無視して、単に新しくすればいいというものではない。震災の前と後とで時間が区切れているのではなく、両者は連続している。元に戻すのでもなく、新しくするのでもない、震災経験を起点とした将来の復興の姿を模索していくべきであろう。

【参考（引用）文献】

高倉浩樹、滝澤克彦編『無形民俗文化財が被災するということ　―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』2014年　新泉社
藤野陽平、平野直子「大変動の中の国際宗教　―中東政変と東日本大震災を軸として」国際宗教研究所編『現代宗教2012』2012年　秋山書店
宮古市教育委員会編『宮古市史（民俗編）上巻』1994年　宮古市
稲場圭信『利他主義と宗教』2011年　弘文堂
金子昭『驚異の仏教ボランティア―台湾の社会参画仏教「慈済会」』2005年　白馬社
「東日本大震災における台湾・仏教慈済基金会の救援活動：釜石市での義援金配布の取材と意見交換から」『宗教と社会貢献』1／2　2011年
櫻井義秀「まえがき　―社会に貢献する宗教の比較社会・文化学」櫻井義秀、浜田陽編『アジアの宗教とソーシャルキャピタル』（叢書宗教とソーシャルキャピタル1）2012年　明石書店
「震災と原発の被災者に宗教者がこれからできること」『月間住職』23　2014年

【資料（聞き取り）】

池田勝一「3・11大地震と盛岡YMCA宮古ボランティアセンター　―二〇一一年五月～二〇一二年三月」『自立と共生を目指して　―盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
大谷昭雄「宮古ボランティアセンター2012年度の活動　2012年4月～2013年3月」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
大森桂子「夫と共に九死に一生を得て」『信徒の友』編集部編『その時、教会は　―3・11後を生きる　証言2011年3月11日とそれに続く日々』2012年　日本キリスト教団出版局
『日本慈済世界』2012年3月15日特別号（東日本大震災見舞金配布特別号下巻）
木田泰之「若い力で宮古の未来を拓く　2013年」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
森分和基「心からの笑顔を取り戻すまで」『信徒の友』編集部編『その時、教会は　―3・11後を生きる　証言2011年3月11日とそれに続く日々』2012年　日本キリスト教団出版局
中原眞澄「東日本大震災と宮古ボランティアセンター　―設立経緯とその意味」『自立と共生を目指して　盛岡YMCA三十年の歩み』2013年　盛岡YMCA
日本基督教団宮古教会『日本基督教団宮古教会百周年記念誌　1909年～2009年』2009年　日本基督教団宮古教会
URL
盛岡YMCA　http://www.ymcajapan.org/morioka/

第2部　各分野での震災後の取り組み
第12章　外国人の被災経験

藤野陽平

はじめに

地縁血縁があり、文化も言語も共有している日本人であっても多くの困難を伴った東日本大震災の経験であるが、外国から移住し、文化的に異なる習慣を持っている外国人ともなれば、その困難さは格段に上昇することは想像に難くない。

特に言語上の問題は、時に生死を分ける重大な情報にアクセスできるかどうかの鍵となる。後述するが、宮古に暮らす外国人の多くが、津波警報の放送を理解できなかった。当時日本人でもあの放送はよく聞こえなかった、何と言っているのか聞き取れなかったという声を耳にする。しかし、日本人の場合には単に音として聞こえないという問題で、外国人の場合鮮明に聞こえたとしても理解できないこととは次元が違う。そもそも、どれほど日本語について学習しても、大地震が来た時のこと、津波が来た時のことを想定してトレーニングしている人は当時はごく少数だったであろう。日常生活の中で聞きなれない単語が飛び交い、大きな揺れ、津波、停電、断水といった初めての事柄とあいまって、その経験は想像を絶するものだったと考えるべきである。

言語に加えて文化的差異も少なくない。個人差はあるとはいえ、非日常の空間に放り出された時の反応は、往々にして文化によって左右される。真偽はともかくとして、「日本人は泣かない」、「災害時にも列を作って待っている」、「東北人は我慢強い」等のフレーズを当時耳にされた方が多いのではないだろうか。外国人にはそれと逆のことが起きていたのである。文化的差異のある少数者の場合、1人だけ周りの人と違う行動をしてしまいかねない。それはあまりいい結果を生むものではないだろう。

グローバル化や国の観光立国の政策の中で、訪日する外国人の数は今後も増大することが見込まれる。それは宮古も例外ではない。国籍や出自を超えた交流がすすむ中、ここでは宮古に暮らす外国人の被災体験を振り返ることで、大災害や日常における外国人との関わり方について考える情報を提供したい。

1　宮古に住む外国人

東日本大震災が発生する直前の２０１０年12月31日の時点で、宮古には１６０人の外国人が暮らしていた（平成23年度版『宮古市の統計』宮古市総務企画部総務課統計担当、17頁より）。総人口６万０３２８人の０・26％ほどなので、全国平均の1・67％と比較しても少ないのだが、外国人も宮古に暮らしていたことに変わりはない。

被災状況に関して、岩手県国際交流協会が把握している限りでは、外国人の死者は岩手全体で5名、宮古市内は1名だった。国際結婚した中国人とのことで、一旦避難所に行ったようなのだが、日本人たちが貴重品などを取りに帰るのをみて、自分も戻ってしまい、被害に遭ったという。

盛岡の岩手県国際交流協会主査の川村央隆さんによれば、外国人の被災経験のなかでいくつか問題になったことがあるという。第1にパスポートの問題である。その人が日本に帰化している場合には問題ないのだが、そうでなければ津波や火災でパスポートを紛失してしまうと出国できなくなる。国によっては再発行に膨大な手間と時間がかかる。第2に日本籍を持つ配偶者が被災して亡くなった場合である。この場合、基本的に在留資格が失われる。川村さんは外国人をめぐる制度が通常時のみの設計になっており、災害時のことが想定されていないと指摘する。

また、オーシャンズ宮古国際交流倶楽部事務局長の**佐々木匡人さん**（１９６２年生）によれば、中国人で放射能が怖くて盛岡まで歩いて逃げようとして途中で警察に保護される人がいたり、放射能が恐くて1人で一時帰国したルーマニア人が、そのためにその後家族との関係に問題が生じてしまうということがあったという。また中国人を中心に

震災後の離婚も多発した。文化的な差によるすれ違いが発生したり、避難先の家族との折り合いがつかなかったりした。

岩手県国際交流協会としては、当初から盛岡以外の場所にも行って情報収集をしたかったが、ガソリンがなくどうしようもなかった。1週間ほどでバスが動いたので、宮古へ職員を派遣し、水産加工のために来ている中国人研修生などに会うことができた。避難所のリストをみて外国人の名前があると会いに行ったが、雇い主の企業は研修生を外部の人に会わせたがらず、困難もあった。また、宮古は札幌領事館が管轄なので、彼らに連絡先を教えるなどの行動をとった。

2　外国人の被災経験

ここでは実際に宮古に暮らす外国人の被災経験を紹介したい。なお、岩手県在住外国人の被災経験については、公益財団法人岩手県国際交流協会も小冊子を発行している（公益財団法人岩手県国際交流協会2013年）。あわせて参考としてほしい。

・タイ出身で千徳在住、来宮20年の**中井カンジャナーさん**（1971年生。みなさんからメイオさんと呼ばれているので、ここでもメイオさんとさせていただく）とは、後述するオーシャンズ宮古国際交流倶楽部の世話人の1人高橋洋子さん（1956年生）に同席いただいて、2015年2月20日にマクドナルドにてインタビューを行った。

彼女のメイオという名だが、タイ語の語感では猫の鳴き声のようで、日本語では「ニャー」とか「ミャオ」にあたる。小さい時からそう呼ばれているので、本人も本名よりもこの名前の方がしっくりくるという。ダンサーとして来日し、広島、山口と半年ずつ店を回り、ビザが下りて、来宮した。どこへ行くかは仲介の会社が決めるので、メイオさんが自分で宮古を選んだわけではない。その後宮古で日本人と結婚し、現在6人家族（義父、義母、夫、高校生の息子、中学1年の娘）で暮らしている。

メイオさんにとって宮古の第一印象はあまりよくなかったようだ。彼女はタイの首都バンコク生まれ、にぎやかな首都からやってきて、宮古はさみしい場所とうつったようだ。「いっぱい泣いた。言葉がわからないのが、一番つらかった。」と当時を回想する。タイではバンコクの会社で働いていたのだが、日本のテレビドラマで着物を着ている人をみて、それに憧れて来日を決意したという。

しかし、彼女の日本イメージは、20年前のテレビで見知っただけの偏ったものだった。日本の空港に着いて、日本人がタイの人達と同じように洋服を着て、だれも和服を着ていないことや、忍者もいないことにショックを受ける。それほど彼女は日本のことを知らなかったし、日本語もできなかった。

日本語は宮古に来てから昼間は働いて、その中で話し言葉を覚えた。去年の6月から読み書きの勉強をはじめた。その前もオーシャンズで少し学んだことがあるのだが、子供がいるので夜の時間の参加は難しいという。

このインタビューの内容全てを日本語で説明できるほどの日本語会話能力で、うまいといえる。実際、頭のなかで考えている言葉も日本語だという。ただし、書き言葉は苦手で、ひらがなは覚えたが、カタカナはまだ覚えていない。そのため、役所の書類などを、1人で処理することはできないし、英語版があってもタイ人である彼女は英語も得意ではない。

彼女の震災体験に話を移そう。津波の時には1人で駅前のキャトルにいた。まず揺れて、地震はとても怖かった。周りの人達が宮古まで津波が来るといっていること、防災無線で「津波が来るから逃げてください。海から離れてください」と理解でき、海の近くではないので大丈夫だと思ったという。

当然、津波を見たことがなくとても怖かったので、そのまま車で帰宅した。水道も電気も止まっていた。家にいてはテレビが見られないので、車のカーナビのテレビを見た。手足が震えて、頭がぼーっとしてくる感じがして、気分が悪くなった。全てが初めての経験だった。1週間くらい体調が悪く、食欲もなかった。その後、テレビでなあど

が波にのまれるのをみて、さらに恐怖心に襲われた。それまでも怖かったが、映像で見てからの怖さは格段に強いものだった。そのため津波の後、半年はずっと家に引きこもっていた。

被災後の生活については自宅が千徳なので、大きな問題はなかった。自宅には普段から麺や米を大量に買っていたため、備蓄があった。備蓄がない人もいるので、急ぐ必要のない自分は商店で並んでまで買わず、ドラで必要な人のために服を集めていた時には、もっている服や靴を全部提供した。ただし、全て提供してしまったので、今度は自分の着るものが足りなくなったと苦笑する。

家族にもすぐに会うことができた。義母は家にいたし、義父はオートバイで帰ってきた。夫は駅にいたが、地震が大きかったので津波が放送より大きいものが来ると直感して、すぐに仕事をやめて自宅に戻ってきた。子供達は学校にいた。ガソリンは義父がオートバイを持っているので、買いに行ってもらった。1人千円までというので、缶に入れてもらってきた。水は畑仕事用のボトルに入っていたのでそれを使った。電気や水は2日ほどで復旧した。

メイオさんの被災経験のなかで独特なのは、心霊経験をしたことである。自宅の近くに遺体の安置所があり、最初はわからなかったが、そのことを知るに至り、幽霊をみるようになる。日本に来てからは少なくなっていたが、元々、霊感が強い方で、タイではよく何か不思議なモノを感じることがしばしばあった。タイの僧侶から聞いていたのは、死人は自分が死んだことに気が付かないので、霊が徘徊するのだという。それで、近所に安置所があると知ってから、人がペタペタと裸足であるく音が聞こえるようになった。特に夜に、窓側で寝ているとペタペタと歩く音がしばしばした。また、お盆には肉が腐った臭いとヘドロが混ざったような臭いも感じている。津波で流され亡くなった人の体から出る臭いということであろう。こういう時にはタイ語と日本語でお祈りするとその霊はいなくなったという。また、弟がタイでお守りを2つ買ってきてくれたので1つを窓に付け、もう1つは夫の車につけている。これで日本人の夫も体調がいいという。それまで夫は寝ていると苦しそうな息をしていた。

被災地で、いわゆる心霊現象が広く報告されている（高橋２０１３年）。こうした問題には時に宗教的なケアが必要となるが、外国人となるとその人の文化的、宗教的背景の理解も必要となってくる。それでいて、心霊体験のケアは長く続く心的復興には必要なことである。ここでは問題提起にとどまるが、大きな問題を孕んでいる。

最後に自分の着るものがなくなってしまうほど衣服の提供をした彼女の行動をみると、支援されるばかりではない外国人の姿が浮かび上がってくる。次節に登場するポールさんたちもボランティア活動を行っているし、世界中から支援の輪が広がったことは周知のことである（藤野・平野２０１２年）。被災地に暮らす外国人は困難が大きかったのは間違いない。しかし、外国人＝弱者＝お荷物ということではないことをここに記しておく。多様な人が協力し合って困難に対処していくシステム作りが待たれる。

3　身を寄せ合った外国人たち

宮古には外国人同士が身を寄せながら震災後の数日を乗り切った人達がいる。ここではそうした人たちの経験を述べておきたい。まず登場人物の紹介をしよう。

・ポールさん（Paul Dixon さん　イギリス人、28歳、２０１３年11月1日、マクドナルドにて英語でのインタビュー）

マンチェスターの東方、車で2時間ほどのスカンソープ出身で、２０１０年4月に来日した。最初は山田町にいたが、6か月後に宮古に移住した。愛宕に住んでいて、震災後に八木沢に移った。来日の動機として、日本文化を体験したかった。外国に住んで、新しい体験をし、英語を教えてみたかったことをあげる。アジアに興味があり、いい仕事といい学校を見つけられたと感じている。宮古に来た理由は仲介の会社が岩手を選んだからだ。来宮して5年になるが、２０１５年3月には横浜へ行くことになっている。

今は月曜から金曜日まで宮古商業高校、宮古水産高校で英語を教え

ているが、来日当初は山田高校、宮古工業高校で教えていた。「生徒たちはみんな元気でハッピーだ」というポールさん。残念なのは津波の後、山田で教えられなくなったことだという。地震当日は部屋の引っ越しのため田野畑にいるビクターさんのところに2週間ほど身を寄せる予定だった。

・ファトマさん（インドネシア人、２０１２年９月21日ご自宅にてインタビュー）

ジャカルタ出身で、来日25年になる。インドネシアで日本人の夫に出会い、結婚のため来日し、横浜で生活していたが、夫が仕事を辞めて独立するために来宮した。本当は東京に居たかったが、夫の夢を応援するためにやってきた。仕事は夫の手伝いで営業を担当している。

「日本に住むのだから日本のことを好きにならないといけない。外国人が永く日本と付き合っていくためには、日本に合わせないといけない」と考え、生け花を習い、小笠原流の師範の資格を取っている。現在の家には2つの建物があり、1つを外国人たちが集まる場所として使っている。震災で、友人を5人亡くし、親戚には家が被災した人もいる。「津波のことは死ぬまで忘れられない。まるで戦争の様だった」と当時をふりかえる。

・エミーさん（フィリピン人、１９７０年生、２０１５年2月19日、マクドナルドにてインタビュー）

マニラの西方ラグナ出身のエミー・ナカジマさんは、北上で出会った男性と結婚するために宮古へ移住し15年となった。その前は北上に10年住んでいた。もはやフィリピンより日本での生活の方が長くなった。夫と2人の子供の4人家族で暮らしている。エミーさんは今回の津波で4人の知人を亡くしている。しばらく見つからなかった人や、今も見つからない人もいるので、カトリックの教会で祈ったという。災害時に教会で自分の言葉タガログ語で祈ったりすることは「気持ちがいい。心から感激する」と語っている。

・アニータさん（ナミビア人、１９７０年生、２０１５年2月23日、マクドナルドにてインタビュー）

首都ウインドフック出身の佐々木アニータさんは来日17年。船員の夫と故郷のウインドフックで知り合った。夫は船に乗っていると3、4か月帰ってこないので、家にはアニータさんと子供だけのことが多い。子供は中学3年生の息子、中学1年生の娘、8歳の息子の3人だ。日本語、英語、アフリカーンス語ができる。ナミビアは１９９０年に南アフリカとともに独立し英語が公用語となった。今は日本語が一番得意で、アフリカーンス語は使わないから忘れていく。崎山の古里在住。となりに義父母が住んでいる。

地震発生時

3月11日午前中、オーシャンズの仲間たち5人で、その日の夜に宮古を離れる予定のオーストラリア人英語教師ミッシェルさんの部屋の片づけを手伝っていた。地震が来たのはその後に市内のレストラン、トマト&オニオン 宮古店（通称「トマオニ」、写真1）にて送別会を行っていた時だった。参加者はエミーさんの記憶では7、8人だったという。会計の時（ファトマさんによれば食事が済んでおしゃべりをしている際）に揺れ出して、揺れがおさまるまで慌てて外に出て、みんなで手をつないでいた。地震のないフィリピンから来たエミーさんは、あまりの怖さに泣き出してしまう。また、小学生の子どものことが気になり、頭のなかはそのことで一杯になり、建物が壊れてないだろうかなどと心配し、ショックで歩けなくなってしまった。

この中で最も日本語が不得意なポールさんは、防災無線が日本語なので「ツナミ」しかわからなかった。「ＢＡＲＡＢＡＲＡＢＡＲＡ、ツナミ、ＢＡＲＡＢＡＲＡＢＡＲＡ」という感じに聞こえたという。ポールさんは当時を振り返って言語が一番の問題であったと語る。

「日本語がわからないこと。これが最大の問題だった。多くの人が心配してくれたが、何を言っているのかわからないからどうしようもなかった。

写真１　送別会が行われていた「トマト＆オニオン」
2014/12/07　撮影：藤野陽平

津波の警報も日本語の後に簡単な英語のメッセージをつけてほしい。〝TSUNAMI!（津波）Becareful!（注意）Earthquake!（地震）Evacuate!（避難）〟といった単語だけでもつけてくれればいい。どのくらいの大きさとかはあればいいけど、なくても構わない。簡単なメッセージだけでも状況が把握できる。英語の教員の中には僕より日本語ができない人がたくさんいる。もし、もう一度津波が来た時に、彼らが1人でいたら何もできないだろう。」

ただし、日本に長く滞在し、すでに日本語が上達している人でも、これほどの大きな地震や津波の経験はないので、事態を正確に把握できるということでもない。例えば日本語の上手いエミーさんでも、津波が来ることをすぐに理解できたわけではない。防災無線もなっていたし、ラジオも聴いていたが、理解できなかった。英語でも「津波」は〝tsunami〟なので、単語は知っていたが、それがどの程度深刻なのかは知らなかった。ファトマさんも津波警報はただ「避難！避難！」以外、何を言っているのかわからなかったという。

なお、エミーさんは毎週金曜日の10～14時に釜石で英会話のレッスンをしていて、本来ならば、津波の時に海沿いの道を走っているところだった。しかし、この送別会のために休みにしていた。エミーさんは「ミッシェルさんに助けられたようなもので、感謝しています。運転をしていると地震の揺れはわかりにくいので、何もわからないまま急に津波にのまれていてもおかしくありません」と振り返っている。

崎山小学校へ

なんとか日本語の上手い人達が、災害放送やラジオで津波の情報を得て、ビクターさんとケビンさんの2台の車に分乗して、高台にある崎山小学校へ移動した。エミーさんも車で来ていたが、ガソリンがあまり入っていなかったのと、ショックで歩けなくなってしまったので、彼女の車は駐車場においたままにした（その後、1週間ほど置きっぱなしだった）。津波のことは聞いていたので駅の裏の道は通らずに、橋を渡りキャトルを右に曲がり駅前を左に曲がり、山の中の道を移動した。ポールさんは「日本語のわかる友人といたのはとてもラッキーだった。1人でいたらアナウンスは日本語だけで意味がわからず、愛宕の自宅に帰っていただろう」という。（ポールさんの部屋は2階で無事だったが駐車場に停めていた車は流されてしまった。）

エミーさんの子供は当時崎山小学校4年生の女の子と、2年生の男の子で、そこで会うことができた。アニータさんの子どもも同じ学校で、そこで「トマオニ」にはいなかったアニータさんと会うことになる。小学校では泣いている子供達も見かけた。

アニータさんは「トマオニ」でのパーティには親戚の三十三回忌があり参加していなかった。エミーさんからは「終わったら来て」とさそわれていたが、断っていた。法事はおじちゃんの親戚の家で行われたが、昼までには帰宅し、地震の時には自宅にいた。そして、津波でそのおじちゃんが流されてしまった。法事に参加したのはアニータ、義母、義祖母、おじちゃんの4人だった。おじちゃんはまだ見つかっていない。まさか午前中に会ったばかりの人だったので、信じられなかった。おじちゃんは漁師だったので、船をあげようと浜におりてしまった。同じ場所で漁師12人が流され、助かったのは3人だけだった。

地震の時には自宅にいて、下の子どもを保育園に迎えに行く準備をしたり、パソコンをしていた。揺れ始めて、電気が消えて物が落ちてきたので、外に出た。となりのおばあちゃんのところに行ったら、津波が来ることをラジオで聞いた。おばあちゃんの家も物が落ちて壊れていたので、それを片付けながらラジオを聞いていた。防災無線も鳴っ

ていてとても恐かった。

崎山は保育園、小学校、中学校が同じ場所なので、地震の後10分くらいして車で迎えに行った。当時、長男は小学校6年生、一番下の子は保育所にいた。そこでみなさんに会うことになった。

アニータさんのお宅へ

ここでトマオニにいたグループが自宅を避難所として提供するアニータさんと出会う。アニータさんは一旦子供を連れて家族だけで自宅に戻った。そこに元々アニータさんと仲良しだったエミーさんが、避難してきた。エミーさんの自宅は佐原にあり、アニータさんの家から5キロほど離れている。エミーさんは犬を2匹飼っていて心配になり、夜9時ごろビクターさんに送ってもらって自宅に戻った。しかし、夫が帰宅していないので不安になり、再びアニータさんの家に戻る。当日は寒い日で自宅は電気もつかずとにかく寒かったという。

当時のアニータさんは子育てのためオーシャンズにはあまり参加しておらず、エミーさん以外の人とそれほど仲が良かったわけではなかったが、この時に他の人達とも仲良くなった。この時に来たのは、ポールさん、ミッシェルさん、ビクターさん、ケビンさん、ファトマさん、エミーさん、アレックスさんで、ポールさんとミッシェルさんは愛宕、ビクターさんは田野畑、ケビンさんは市内在住のため、この4人が帰れなくなってしまった。

当日、ファトマさんが津軽石の自宅と家族を心配し、パニック状態になってしまったので、ビクターさんとポールさんとで車をつかい家まで送りにいった。彼女の家までは普段は海沿いの道で行くが、通れないので290号を通って山の中を走った。おかげでファトマさんは無事帰宅できた。彼女の夫もとても心配していたという。ファトマさんを家まで送ったあと、ポールさんは同じく山中の道を使ってパスポートなどの重要な書類を取りに自分のアパートに戻り、アニータさんの家に戻った。アニータさんの夫はタンカーの船員で茨城におり不在だった。大きいタンカーだったので問題はなかったが、3日ほど連絡が取れず心配だったという。

エミーさんの夫は山田町の大沢で水道関係の自営業をしていた。震災後会えたのは2日後の12日夜11時で、もうダメかもしれないと覚悟を決めていた。話を聞くと車が壊れて帰ってこられなかったのだという。夫と再会したエミーさんは子供達と自宅へ帰っていった。

アニータさんは普段は土曜日に買い物をするのだが、金曜日に地震が来たので食品の備蓄がなかったところに、急に人が増えてしまった。そのうえアニータさんの家族はみんな魚が好きだが、外国人はあまり好きではない人も多く、せっかく出したのに食べない人もいた。それでも、なんとかやりくりしたという。帰宅したエミーさんが自宅から食べ物を持ってきてくれたこともある。

水道と電気もなかった。発電機はあったが、ガソリンがなくなるといけないので夜だけ使った。水は2日目に給水車が来たが、水と電気が復旧したのは1週間ほどかかった。飲み水はタンクがあったので良かったが、洗濯や食器洗いは山に水を汲みに行って使った。この間、ボランティアで道路の清掃などをしたり、徒歩で買い物に行ったりして過ごしていた。ポールさんは一度自宅に戻り部屋の掃除もした。

この時のエミーさんは、電気は2週間ほどつかなかったのだが、夫が水道関係の仕事なので発電機があり、それで暖も取れたし、食事も作れた。また、水は隣に住んでいる義父母の家の裏に井戸があり、発電機でポンプを動かしてつかった。ただし、節約のためお風呂は2日に1回にした。

大変だったのは食料だった。普段は家にある事が多いのだが、「トマオニ」のパーティが終わった後に買い物に行くつもりだったので、備蓄があまりなかった。助かったのは義父の家には畑があり、野菜がたくさんあったことで、じゃがいもと白菜でしのぐことができた。米もいつもは30キロくらいあるのだが、この時は5キロくらいしかなかったので、義父の家にあった素麺やパスタ、ラーメンを食べたという。肉や魚は2週間食べられなかった。自分の家にあった食料はたくさんの人が泊まっていたアニータの家にも持っていった。そうはいっても、携

帯電話も通じなければ、ガソリンもないので毎日行き来できるわけではない。夫は車を2台持っていて、1台は家にあった。自分の車は「トマオニ」に泊めてあり、パーティの後給油しようと思っていたので、ガソリンが入っていなかった。

ポールさんは友人のａｕの携帯電話を使用して家族に無事の連絡をした。その時はａｕだけが使用できた。ポールさんの記憶とは、ずれがあるが、エミーさんが使用しているａｕの携帯電話は通じるまで1週間くらいかかった。固定電話はしばらく使えなかった。フィリピンの家族と連絡ができたのは10日後にインターネットが復旧してからだという。アニータさんも電気・水・食べ物の問題よりも、最も困ったことは外国の家族や夫と連絡が取れなくなってしまったことだった。

日本人の安否確認もなかなか難しい状況であったあの当時、宮古に暮らす外国人の母国の家族や友人たちはどういう気持ちでいたのだろうか。災害時の海外への連絡手段は彼らに共通の問題であった。

その後

途中で帰宅したファトマさん、エミーさん以外の人達は5日間アニータさんのお宅に滞在したが、ずっとそこにいるわけにもいかず、5人で岩泉に移動することを決心した。エミーさんの夫の友人が中古車を扱っており、その人がガソリン1缶を分けてくれた。エミーさんは半分を自分でとり、半分はビクターさんにわけてあげた。これでとりあえずのガソリンができた。それまではガソリンがなく、車は緊急用としてほとんど使わないでいたが、移動することを決意して車を使用した。沿岸の道は通れないので、山中の道を移動した。岩泉にはガソリンがあるという噂があったからなのだが、行ってみたところが単なる噂で、ガソリンはなかった。

その後5人のうち3人は花巻空港の近くまで移動した。ポールさんと岩泉の友人は岩泉に残ることにした。しかし、その友人は両親と連絡を取ったところ福島の原発の事故のため、すぐ日本を離れろと言われ、先に花巻空港の近くへ移動したグループの元に行ってしまった。

ポールさんは一時、独りになってしまったが、ビクターさん達が戻ってきてくれた。しかし、ガソリンはほとんど空で移動ができなくなってしまう。幸い、2日後に岩泉にガソリンが届いたとの知らせをうけ、ガソリンスタンドへ行こうとしたが、途中でついにガス欠になり、手でおして行って給油したという。その後、数日間、避難所で料理の手伝いのボランティアをし、ガソリンが手に入ってポールさんの会社が取ってくれた盛岡のホテルへ移動し、3人で暮らした。数日後ケビンさんとビクターさんは自分のアパートに戻っていった。

4　背景としてのオーシャンズ宮古国際交流倶楽部

オーシャンズ宮古国際交流倶楽部（以下、オーシャンズ）は、ボランティアで運営されている、宮古市内唯一の日本人と外国人が集い交流する場である。国際化が進むなか、多くの地方公共団体には国際交流に関する部署が役所に用意されているが、宮古市にはこういったサービスを提供する部署が存在していなかった。そこで事実上、窓口になっているのがオーシャンズだった。そもそも、筆者も宮古の外国人について取材しようとした際に紹介されたのが、オーシャンズであった。事務局長の佐々木匡人さんは、オーシャンズに集まる外国人の特徴を「ゆるやかなつながり」と考えている。このゆるやかなつながりゆえに、前節の共同生活が成立したといえる。

オーシャンズは２０００年3月14日より活動をはじめている。日本語教室をはじめた理由は、佐々木さんの近所のフィリピン人が離婚して帰国してしまった。中国人でも似たようなことがあった。その理由に日本語のコミュニケーションの問題があることがわかってきた。しかし、宮古には外国人のための窓口もなく、特に対策をしてくれない。そこで、佐々木さんは日本語教師の資格を持っていたので、日本語教室を始めることにした。当時の参加者は外国人の英語教師が中心だったが、近年は様々な経緯で宮古に暮らすようになった人達が集まってきている。発足の際には「三陸海岸の中心都市　宮古にも国際交流の拠点を！」と呼びかけた。

写真２　オーシャンズのハロウィンパーティ
2014/10/31　撮影：藤野陽平

活動は毎週木曜日の午後7～9時に青少年センターで行っている。年会費は千円で、青少年センターの使用料などにあてている。その他にもクリスマス、花見、盛岡の祭りへの参加、カラオケ、ハロウィン、春節などのイベントを行っている。子育て中のメンバーも多く、木曜日に参加が難しい場合にはイベントを中心に参加する人もいる。ハロウィンの際には仮装してカラオケをしたり（写真２）、春節には各自持ち寄りの料理を食べたり（写真３）といったようなことをする。オーシャンズとしては市に外国人の対応をしてほしいと要望を出していて、実現できれば、日本語教室は市に任せて、オーシャンズはイベントだけを行いたいと考えている。

震災後、オーシャンズの日本語教室は5月上旬に活動を再開させた。揺れに強い恐怖を感じ、フラッシュバックも続いている人がいると聞いたり、話をする場所が欲しいという要望があり、すぐに再開した。

普段の活動

オーシャンズの日本語教室（写真４）ではどのような活動をしているか見てみよう。筆者が参加した２０１４年10月30日の会では、夜7時から勤労青少年ホームにて参加者は男性6名、女性3名の9名で、うち4名は日本人であった。学習の内容は、まず、佐々木さんの司会で、プリントをもちいて「ばびぶべぼ」と「ぱぴぷぺぽ」の発音の違いを練習する。日本語の母語話者にとっては何でもないが、日本人が英語のＬとＲの違いを聞き分けられないように、日本語の初学者にはこの違いはたやすいものではない。

次にプリントを用いて、買い物の練習をする。コンビニエンスストアやスーパーマーケットでは、言葉がしゃべれなくても買い物はできるが、それだけでは込み入った要求をしたり、店員に問い合わせたりすることができない。日常生活に密着しているが、難しい問題を取り扱っている。

８時頃になると各人のレベルに合わせて個別の練習を行う。日本語能力検定Ｎ２の試験を控えている人には、問題集でわからなかった問題の質問に日本人が答えている。別の人には「ひとつ、ふたつ」のように数字の数え方を教えたりしている。語学教室では基礎から上級のようにクラス分けをするほうが、教える方も、教わる方もやりやすいのであろうが、ボランティアによる運営で、それだけの人材や準備時間を確保するのは現実的ではない。

写真３　春節のパーティ中に広東語の新年のあいさつを練習する
2015/02/20　撮影：藤野陽平

参加者にとってのオーシャンズとは

参加者のみなさんにとって、オーシャンズは宮古で外国人と集まれる貴重な場であり、コミュニティを作る場になっている。エミーさんはオーシャンズにアニータさんに誘われて参加するようになったが、それまではあまり宮古で出歩かなかった。そのうえ、オーシャンズに参加する前には宮古に外国人の友達はいなかった。アニータさんには12、13年前にドラで

出会った。見た目ですぐに外国人とわかったので、声をかけたところ、すぐに友達になれた。2人は子供も同じくらいの年で「ママ友」だ。当初、英語でしゃべっていたが、今では日本語で話す。ただし、メールは英語を使っている。オーシャンズに参加するまでの外国人の友人はアニータさんくらいで、友人は少なかった。高橋洋子さんとアニータさんが友人で、オーシャンズに誘われたそうだ。このように人づてのネットワークが形成されており、細々とではあるが、しっかりとした人間関係が構築されている。

それでは彼ら・彼女らがオーシャンズについてどのように感じているのだろうか。今回のインタビューのうち、該当する部分を抜粋してみたい。

ファトマさん

「オーシャンズには4年前から通い始めました。佐々木先生はすぐ近くに住んでいて、親戚のように親しくしてもらっています。オーシャンズにも直接佐々木先生から誘われました。オーシャンズに行くまでは国に帰りたいと思っていたのですが、通い始めてからは友達も増えて宮古での生活が楽しくなりました。東京では外国人の集まりも多いですが、宮古にはここにしかありません。佐々木先生がこうした活動をしてくれていることに本当に感謝しています。

仕事や勉強が終わって夜にすることがないのは寂しいので、オーシャンズのような集まりがあると張り合いが出ます。オーシャンズがないと、宮古を離れたくなってしまうかもしれません。メンバーたちは宮古が一番いいと言っています。おかげさまで宮古は私達の故郷という感じがします。

佐々木先生は、私達オーシャンズのメンバーにメールを送るなどケアをしてくれました。震災後、オーシャンズが再開したときにはみんな参加しました。みんなに会うことはとても楽しいです。オーシャンズのような外国人も日本人も集まる場所がとても大切です。これを長く続けてほしいです。外国から来て親戚がいないところではファミリーのような関係なのです。」

写真4　オーシャンズの日本語教室
2015/05/01　撮影：藤野陽平

メイオさん

「オーシャンズには10年ほど前にアニータさんに日本語の勉強になるからと誘われて参加しはじめました。高橋洋子さんとはオーシャンズで出会いました。一時通わない時期もあったのですが、その時も高橋さんとの関係は続いていました。今でも、何か問題があるとすぐ高橋さんに相談します。アニータさんとはドラで買い物をしている時に出会って、それ以来友人になりました。

オーシャンズには今はイベントの時に参加しています。それ以外では高橋さんとは毎日メールをします。最初は事務局長の佐々木さんと知り合いだったので、飲み会の時に誘われて以来参加するようになりました。当時は英語圏の人が多かったので2時間のうち最初の1時間は日本語、次の1時間は英語を勉強していました。娘が中学校で英語が習えるからと一緒に通っていたのですが、高校に入ってからは来なくなったので私だけ残りました。

ただ、オーシャンズにはいろいろな人がいるので、恥ずかしいのです。日本語のレベルもバラバラで、私はまずはひらがなだけ勉強したいと思うのだけど、カタカナや漢字もでてきてしまいます。タイの若い子も来ていて、その子の方が早く覚えてしまい、私はよく間違ってしまいます。それも恥ずかしいんです。」

このようにオーシャンズのような集まりを必要としつつも、シャイな性格のメイオさんは、色々な人が来る場所があまり得意ではないよう

だ。しかし、日本語教室に参加しないからと言って、関係が切れてしまうというわけではないところが、オーシャンズの行き届いている点である。

「昨年6月から12月まで高橋さんのお宅で、お茶を飲みながら、ひらがなの勉強を週2回やっていました。高橋さんがスマホを買ったのを見て、うらやましくなって私も買ったのですが、それを機に日本語を覚えようと思ったのです。勉強の他にも高橋さんと毎日、日本語で練習を兼ねてメールをしています。最初は何が言いたいのかわからなかったけど、少しずつわかるようになってきました。」

シャイな性格のメイオさんだが、高橋さんとは家族のように打ち解けている。そこでオーシャンズの集まりに参加しなくても、彼女や佐々木さんらが個別にケアを行っており、関係性を維持している。

アニータさん

オーシャンズに15年前から通うアニータさんも、同じような経験をしている。

「オーシャンズは15年前から通っています。できたばかりの頃からのメンバーです。しかし、子供ができてから夜に外出できなくなり、その時は高橋洋子さん、佐々木先生、中村さんが週に1回火曜日に我が家に来て、日本語を無料で教えてくれました。このころは日本語がしゃべれなかったのです。こんなに日本語がうまくなったのはオーシャンズのみなさんのおかげです。世界一やさしい人達だと思っています。

日本語の読み書きは漢字が難しいけれど、だいたいできます。子供が大きくなったらまたオーシャンズで勉強したいと思っていますが、今はイベントの時を中心に参加しています。家で英会話教室もしているので、木曜日の夜は参加できないのです。英会話教室は3年前からはじめました。夫の収入で家計は足りていますが、家で何もしていないとストレスがたまります。楽しいことをしているとハッピーです。」

おわりに　「住めば宮古」は誰のものか？

本調査を通じて複数の宮古に暮らす外国人からお話を伺う機会を得た。全員が口をそろえて言うのが、宮古が好きということである。アニータさんはその理由に安全をあげる。

「津波の後、ナミビアの友人は帰ってきたらといいました。しかし、ナミビアは治安が悪いので宮古の方が安全です。安全な国だから日本がいい、宮古がいいのです。ここでは殺されたり、泥棒に入られたりするということはまずないですから。」

ポールさんは宮古で英語が通じないこと、退屈なことに当初は不満を持っていたようである。しかし、人間関係ができていくうちに楽しみを見出し、住みやすい場所であると考えているようだ。

「宮古にはじめて来た時にはとても嫌だった。早く離れたかった。でも、今は自分の家のようなところになった。みんなフレンドリーで助けてくれる。平和な町だと思う。ただ、近くに大きな町があればパーフェクトなんだけど…今はテニスクラブに参加していて、地元の人と接することができる。日本人の友人もたくさんいる。イベントやクラブに参加すれば友達は増えていく。オーシャンズもそういう場所の一つだ。ただ、みんな忙しいのでなかなか会うことができない。昨日のハロウィンパーティでみんなに久しぶりに会えた。だから、オーシャンズの普段の日本語教室だけではなくて、こういうイベントはとてもいい機会、いいアイディアだと思う。」

こう語るポールさんは4時に仕事から帰宅すると、月水金はテニスをし、火曜日は月に2回インターネットで英語を教え、木曜日にはマクドナルドで日本語の勉強、日曜日にはフットサルと毎日充実した生活を送っている。

グローバル化が進み、今後はますます国際結婚の数も増えていくだろう。また、少子高齢化の中で、復興の担い手を日本人だけで賄える時代ではなくなっている。日本中で同じことが起きているが、宮古で

ももっと外国人は増えていくだろう。宮古に関係した人が一度は耳にするであろう「住めば宮古」という言い回しがある。その「みやこ」とは誰のものなのだろうか。宮古を強く愛する外国出身の人達にも、その門戸を開くべきではないだろうか。

その上で、現在オーシャンズがかかえる問題を振り返ってみたい。まず、受講生の日本語のレベルが様々で、来日数十年の人から、日本に来たばかりで挨拶もままならい人までいる。その人達が一つのクラスで学習しているのだから、難しい運営にならざるを得ない。いくつかのクラスに分けられるといいのだろうが、日本人ボランティアの数、参加者数が多くない現状では難しい。そもそも、オーシャンズはボランティアのグループである。何らかの事情で継続できなくなっても何の責任もないし、続けていくことは義務ではない。あまりに負担が大きくなれば、そういうこともあり得るだろう。やはり公的機関が、こうした国際交流の基礎的な部分を担う必要があるだろう。

これはオーシャンズの問題というより、宮古に暮らし宮古を愛する外国人の抱えている問題でもある。次に起きるであろう災害の時に、今回のように、たまたま外国人が集まっていて、力をあわせて乗り越えられる保証はない。彼ら・彼女らの安全を守るためにも、地域のネットワークに受け入れることが必要である。出自や国籍に関わらず、地域のネットワークのなかで、どのようにソトから来た人々と共に生きていくのか、震災後人口流出の止まらない宮古市全体の課題ということもできるだろう。

【参考（引用）文献】

公益財団法人岩手県国際交流協会『岩手県東日本大震災津波　多言語記録集　在住外国人の3・11』２０１３年　公益財団法人岩手県国際交流協会

高橋原「臨床宗教師の可能性　―被災地における心霊現象の問題をめぐって」国際宗教研究所編『現代宗教２０１３』２０１３年　秋山書店

藤野陽平・平野直子「大変動の中の国際宗教　―中東政変と東日本大震災を軸として」『現代宗教２０１２』２０１２年　秋山書店

【資料（聞き取り）】

宮古市総務企画部総務課統計担当編『平成23年度版　宮古市の統計』２０１２年　宮古市

オーシャンズ宮古国際交流倶楽部　http://homepage3.nifty.com/bagusnya/oceans/japanesef.html

公益財団法人　岩手県国際交流協会　http://iwate-ia.or.jp/

【協力機関】

オーシャンズ宮古国際交流倶楽部

公益財団法人岩手県国際交流協会

（付記）２０１６年7月26日に宮古市国際交流協会が設立された。本稿の脱稿がそれ以前であり、この内容を記すことができなかったが、本協会を通じて宮古市における今後ますますの国際交流が進むことを祈念したい。

第2部　各分野での震災後の取り組み

第13章　被災した芸能と復活

Ⅰ　法の脇鹿子踊りの被災と復活（津軽石法の脇）

俵木　悟

はじめに

今回、筆者が主な調査対象とした宮古市津軽石法の脇地区は、深く入り込んだ宮古湾の最奥部に流れ込む津軽石川の河口の西岸にあたる。大字津軽石の最北部で、金浜地域と境を接しており、津軽石第1地割および第2地割に相当する地区である。「法の脇」の字名の通り、津軽石川の川堤に沿うように集落が形成されており、目前には17年の工期と125億円の費用をかけて平成19年に完成され、全長189メートル、高さ8・5メートル、明治三陸大津波（明治29年）クラスの津波にも対応できるとされた全国有数の規模の津波対策水門がある。チリ地震津波（昭和35年）の際にも、約30戸あったうちの7戸が流失し、ほとんどの家が浸水するという被害を受けており、歴史的に津波の襲来を受けることが多かった宮古湾沿岸地域においても、特に大きな被害を被ってきた地区の一つである。

1　法の脇地区の被災状況

法の脇地区の戸数は、震災直前の平成23年3月時点で29戸（31世帯、人口83人：住民基本台帳データ、平成23年3月時点）であった。

平成23年3月11日の地震によって発生した津波は前述の水門を越えて津軽石川を上流に遡り、津軽石・赤前の東西両岸に大きな傷跡を残したが、とくに水門の両側は、せき止められ堤防を越えてあふれ出た水が滞留することで甚大な被害をもたらした。

法の脇地区では、この津波によって亡くなった方が4人、家屋は3戸を残してすべて流失するという壊滅的被害を受けた。家を失った住民は、宮古市内各所、盛岡市などに避難したほか、20世帯ほどが払川仮設住宅（宮古市養護老人ホーム清寿荘）に、1世帯が荷竹仮設住宅にと、分散して生活することになった。

平成25年3月6日付宮古市告示第31号によって、法の脇地区の集落全体が災害危険区域（大半が住居の用に供する建築物の建築が禁止される第一種区域、一部が第三種区域）に指定され、家屋の建築が不可能になった。そのため流失を逃れた3戸も含めて、全戸が将来的に移転することを決めた。これによって、法の脇地区は実質的に解散を余儀なくされることとなった。

避難した元法の脇住民のうち11戸が集団移転を希望しているとのことだったが、移転の詳細の決定に2年以上の時間がかかったことに対し、住民からは不満の声も聞かれた。話者の1人であった澤口候則さんは、自身が大工だったこともあり、震災の年の盆の頃には被災した自宅の修繕を決意し、10月には居住できるまで修築を済ませていた。しかしその後に災害危険区域が正式に発表され、移転を余儀なくされたという。

また法の脇の住民には1人世帯、夫婦のみの高齢者の小規模世帯も多く、津波で家族を失い震災後に1人になってしまった世帯も複数あった。そうした人たちは災害公営住宅への入居を希望していたが、この公営住宅の計画がなかなかまとまらなかった。公営住宅への入居希望者は高齢者が多いため、病院への通院など日常生活の便を考えて、津軽石よりも宮古市街地の住宅に入居を希望するものが多くなるのではないかと考えられており、地区に残るかどうかも未知数であった。このように避難した住民たちの居住地がなかなか決まらなかったことが、本章の主題である法の脇鹿子踊りの復活への経緯にも大きく影響していた。

2　津軽石稲荷神社の祭礼と法の脇鹿子踊り

法の脇地区では、毎年8月16日の津軽石の稲荷神社の祭礼に奉納される鹿子踊りを伝承してきた。

森口多里は岩手県内の獅子（鹿）踊りを、舞い手が腰に太鼓を付け、背にササラなどと呼ばれる長い指し物を負って舞う太鼓踊系と、太鼓

やササラを付けず、頭に鍬形状の飾りを付け、シシ自身は太鼓を打たない幕踊系に分類しているが、これによれば法の脇の鹿子踊りは幕踊系の獅子（鹿）踊りに含まれる。さらに森口は幕踊系の獅子（鹿）踊りを、カナガラジシと紙ザイジシに分けている。カナガラジシは頭に付けるザイがカンナガラでできており、紙ザイジシはそれが白紙の束でできていると述べ、法の脇鹿子踊りは陸中海岸における紙ザイジシの北限であるという（森口　1971年）。しかし近年の法の脇鹿子踊りのザイは白いビニールひもを利用しており、さらに後述する昭和10年のフィルムにはカンナガラを使ったものが写っていた。

法の脇鹿子踊りは、江戸末期に宮古市茂市（旧新里村）から当地の盛合家に婿に来たサシロウ（佐四郎）という人が伝えたと言われている。サシロウは明治29年の津波で亡くなったという。この茂市の鹿子踊りは他にも、同じ宮古市内の小沢の鹿子踊りや、大槌町金澤の鹿子踊りのルーツと言われている。

津軽石の稲荷神社は、現在のJR津軽石駅からほど近い、馬越地区の一角の小高い山の上に鎮座する。稲荷神社の祭礼は、もとは旧4月9日が祭日で、神輿が町内を巡行していた。大正末ごろにアンバ様の日（8月16日）に神輿を出すことに変更し、津軽石一帯の各地区が様々な芸能で供奉するようになった。震災前の時点では、新町の太神楽とさんさ踊り、根井沢の剣舞、藤畑の虎舞などの奉納芸能のほか、多くの子ども神輿が出ていた。法の脇の鹿子踊りもその一つとして、長く奉納を欠かしたことはなかったという。とくに、稲荷神社の境内地に上がって祭典にも参加するのは、法の脇の鹿子踊りと根井沢の剣舞だけで、これらの踊りが演じられないと神輿が下りられないとも言われていた。法の脇の住民はこれを誇りとして、稲荷神社祭礼への参加を地区の最重要の行事としてきた。昭和40年の報告でも、「津軽石新町の大神楽とノリノワキ部落のシシ踊もお伴し、（根井ノ沢剣舞を含めて：引用者注）この三芸能を昔から三役としていた」と述べられている（岩手県教育委員会　1965年：70頁）。

法の脇の住民の主たる生業は漁業であった。かつては三陸沖や北海道方面の沿岸漁業船に乗組員として従事したり、スビ網と呼ぶマグロ定置網漁（大謀網）に従事する者が多かった。また冬期（11月～2月）には法の脇に戻ってきて津軽石川でサケ漁に従事する者もいた。高度経済成長期以降は、このような季節労働的な漁業からサービス業や工場労働などの出稼ぎが主流に変わっていったという。ほかに大工や電気工などの建設・設備工事業が多いのも特徴である。こうしたことから、壮年男性が地元で生活する期間が短いのが特徴で、漁業者や出稼ぎ者は正月と盆くらいしか法の脇に帰ってこられなかったという。

そのため、8月16日の稲荷神社の祭礼は、地区の人びとが集まる貴重な機会であった。逆にこの時期以外に人を集めて鹿子踊りを演じることは困難で、過去に何度か鮭川（津軽石川）の川開きや宮古の夏まつりなどにも出演したことがあるが、衣裳の洗濯代にもならない謝金ではメリットが感じられず、以後、祭礼以外への出演には消極的であった。近年は宮古市郷土芸能団体連絡協議会にも加盟しており、市の郷土芸能祭などへの出演依頼も少なくないが、以上の理由からすべて断ってきたという。そうしたこともあって、法の脇の人びとにとって鹿子踊りを稲荷神社祭礼に奉納することは、特別な意味をもっていたという。

鹿子踊りは、稲荷神社神輿の巡行に従って下町・本町・前田・新町・舘ヶ下・沼里など津軽石の市街地の家々を廻るが、このとき各家では花を打ってくれる。神輿を神社に納めるまでは神輿に従うが、納めた後は再度津軽石の市街に出て、「通り踊り」と称して先ほどいただいた花のお礼に道の隅から隅までくまなく踊って廻る。この伝統を残していたのは震災前では法の脇の鹿子踊りだけだったという。近年は、かつてほど夜遅くまで踊りふけることはなくなったというが、それでも20時くらいまでは踊っていた。

鹿子踊りの伝承を支えた基盤として、この花代の収入は重要であった。1度の祭礼で20～30万円ほどの花代が集められた。そこから道具や衣裳の修理代、慰労会の費用などを支出してもまだ多少の余裕があったという。イベントへの出演ではそれほどの収入は得られないので、

実質的に赤字になってしまうというのが、祭礼以外の上演に積極的になれない理由の一端でもあった。

鹿子踊りは基本的に青年が主体となって演じるものだという意識が以前はあった。『宮古市史（民俗編）』によれば、青年会が中心になって伝承してきたのは昭和45年～46年頃からで、それ以前は地域の長老が中心になっていたという（宮古市教育委員会　１９９４年：１１８頁）。しかし昭和42年にこの踊りを見た森口多里は、「シシは八頭（内一頭はメジシ）でシシも先頭に立つ二人の太鼓も、中学生か高校生程度の若者で、列のそとに立つ笛だけは年輩の人である」と報告している（岩手県教育委員会　１９７０年：91頁）。近年は地区内に青年と呼べる者はわずかしかなく、ほとんど住民総出で踊っていた。ただし往時の名残からか、前述した花代の収入は青年会の帳簿で管理し、残金を積み立てて鹿子踊りの活動資金にしていた。この積み立ての通帳は青年会長が震災直前まで保管していた。

8月16日の祭礼の奉納のために、毎年8月7日から踊りの練習を行っていた。練習は津波で流されてしまった法の脇地区公民館付近で行われていた。この公民館は、昭和35年のチリ地震津波の後に、地区の人たちの手によって作られた。住民が自らブロックを積んで公民館を作ったことを記憶しており、「行政に指示されたのでもなく、補助金ももらっていない」自分たちで作った公民館であったという。道具や衣裳類も、ふだんはすべてこの公民館に保管しており、文字通り法の脇鹿子踊りの活動拠点であった。

なおこの公民館が練習場所になる以前は、地区内のリンキチイエという屋号の家（長洞俊美宅）が踊りの宿になっており、ここに道具を保管し、その前の道路で練習をしていた。またかつては稲荷神社に上がる前に、地区内のサシロウの家の前でも鹿子踊りを踊っていたという。

踊りには鹿子踊りの踊り手8人、太鼓2人が必要で、他に笛が入るが、地元にはもう長いこと演奏者がいない。最後に地区の笛奏者がいたのは、長洞千次郎さん、長洞定次郎さん（宮古市教委員会　１９９４年：１１８頁）、山野目徳次郎さん、岩間政吉さん（高浜に婿入り）の4人で、昭和40年代までとのことである。その後は黒森神楽の胴取りとして知られた故佐伯裕則さんが高校生の頃から法の脇に来て笛を吹いていた。他にも小沢の鹿子踊りの中沢市郎さんなど、外部の人に笛を頼んでいた。

また近年は後述するように津軽石中学校で郷土芸能の学習を行っており、その生徒やＯＢを勧誘して踊ってもらうことで、住民の踊り手の不足を補っていた。そのためベニヤで作った軽い鹿子の頭が8つ、本式の頭8つとは別に揃えてあった。踊りは人数が多いほど映えるといい、最低限の8人から、10人、12人と偶数単位で最大16人まで踊ることができる。本来ははじめから16人揃うのが理想とされる。さらに以前は太刀持ちという役があったというが、ずいぶん以前に失われてしまい、いまこれを覚えている人はいないという。

3　津軽石稲荷神社の祭礼の再開

稲荷神社の祭礼は、平成23年には復興祈願祭として祭典のみが行われたが、翌平成24年8月16日の祭礼には神輿渡御と奉納芸能も一部復活した。この年参加したのは、新町の太神楽と津軽石さんさ踊り、根井沢の剣舞であった。藤畑の虎舞はこの祭礼には出演しなかったが、同月の第5回みやこ郷土芸能祭に出演している。

新町は津軽石川に沿った市街地で、津波によって溢れた泥流で床上浸水の被害を受けた家が30戸程度あったという。しかし幸い、3月は郷土芸能の活動休止中で、さんさ踊りの衣裳や道具類はすべて保存会長の自宅の蔵に保管中であったため、大きな被害は受けなかった。

また根井沢の剣舞は、津軽石川の支流に当たる根井沢川の中流域の内陸にあって、津波の被害は全く受けなかったものの、それ以前から過疎高齢化が激しく、震災時には16戸のみの小集落であった。踊り手8人と太鼓2人、道化役の新発意（しんぼち）1人（笛も入るが、戦後は地元に吹ける人がいない）を揃える必要がある剣舞の伝承は厳しく、40年ほど前から女性も踊り手に加えて続けてきたものの、震災前の10年ほどは

人手不足で祭礼に出演することができなかったという。しかし根井沢の剣舞は、法の脇の鹿子踊りと並んで神輿渡御に先立ち稲荷神社の境内で奉納演舞することが認められた数少ない芸能であった。その法の脇が壊滅的な被害を受けて当面祭礼に参加できないことがわかっていたので、震災後の平成24年、平成25年の祭礼には「自分たちがやらなければ」という思いと、法の脇の鹿子踊りの復活の願いをもって参加したという。なお平成26年の祭礼は雨天中止、平成27年も根井沢剣舞は出演予定だったが、集落内で不幸があって参加できなかった。

　このように津軽石の各地区の芸能がそれぞれ再起を果たしていく中で、最も大きな被害を被った法の脇鹿子踊りの復活はなかなか適わなかった。

4　法の脇鹿子踊りの被災

　法の脇は前述の通り、地区としては壊滅的な被害を受けたが、鹿子踊りの主要な踊り手には人的被害はなかった。しかし鹿子踊りにとって深刻な痛手となったのは、法の脇地区公民館が流され、そこに葛籠（つづら）に入れて保管してあった鹿子踊りの頭、太鼓、衣裳などがすべて失われたことであった。鹿子の頭や衣裳は、震災の2年前に修繕したばかりだった。

写真1　発見された頭と澤口さん

　これらのうち、後に頭が2つ、太鼓が1つ発見された。頭の1つは太鼓の師匠であった澤口候則さんが、津軽石川の対岸の、稲荷橋のたもとあたりの法面に引っかかっているのを、震災から10日目くらいに発見した。澤口さんはそれを引き上げて自宅に保管していた。澤口さんの職業は大工で、法の脇の鹿子の頭の修繕もこれまでに何度か手がけてきた。いずれ復活する際にはその頭を元に、新しいものを8個作って揃えればよいと思って保管していたという。

　もう1つの頭は、踊りの師匠である長洞正人さんが、津軽石第5地割の岩手県漁連北部支所付近の河原で発見し、また太鼓は同じく長洞さんが第4地割の盛合商店付近で見つけ、法の脇地区住民で祀っているオクマンサマ（熊野神社）に保管していた。そのうち太鼓にはカビが生えてきたので、長洞さんが自宅に持ち帰って管理することにした。

　公民館そのものが無くなったことも大きな痛手だった。公民館は、鹿子踊りの道具や衣裳の保管場所であり、練習場所であり、何より鹿子踊りに関連してとりあえず皆が寄り集まる場所であった。復活に向けて頭を修理・新調するにも、練習をするにも、以前はすべて公民館で集まってやっていたことだった。多くの住民が仮設住宅をはじめ方々に分散して避難している状態で、何を始めるにしても集まる場所が無いことが大きな難点だった。澤口さんは「せめて公民館でもあれば、例えばそこで道具作りから始めるとかもできるけど、今は何もないから」と語っていた。

5　「復活を焦らない」という選択

写真2　発見された太鼓と長洞さん

　復活に向けて様々な困難に直面した法の脇鹿子踊りであるが、伝承者たちの復活への意志は非常に強く感じられた。むしろ一時的な盛り上がりとしての復活ではなく、その後の持続的な継承の可能性を視野に入れている

からこそ、あえて「復活を焦る必要はない」と考えているようであった。マスメディア等で民俗芸能の復活・再生が華やかに報じられ、それがあたかも地域社会の再生の象徴であるかのように語られるなかで、そうした風潮から距離を置くことは決して易しい選択ではないはずである。では彼らがそのような道を選んだ要因はどんなところに求められるだろうか。

言うまでもないことだが、まず郷土芸能の復活より住民の生活の見通しが優先された。それは単に一人一人が自分の生活再建を優先させるだけではなく、かつての法の脇の住民全体のそれを優先するということである。今回の調査で話を聞いた法の脇の人びとは奇しくも「皆さんが落ち着くまで」という全く同じ表現でそれを語っていた。おそらくそのような合意が部落会の総会などで形成され、たびたび確認されていたのだろう。時間が経過するに従って、元住民の中からも地域を出ていく人が増えていることを危惧する声もあったが、元来、小規模かつ出入りの少ない地区で受け継いできたものだけに、誰かが先走って反発や脱落を生じるようなことは避け、皆が納得するかたちで始めなければならないということに細心の配慮が払われていた。それだけにいっそう、集団移転先や災害公営住宅の計画を気忙しく待ち暮らしていたに違いない。

また、早い段階で法の脇という地区自体が解散することがわかっていたことも、そのような選択の要因にあったと考えられる。住民は、将来的には全員が元の地区を離れ、別の地区に入って新しい生活を始めなければならない。だが一方で、それまで長く続いてきた地区の紐帯をそう簡単に解消できるものではない。新しい生活の中でも、かつての法の脇の住民というつながりを維持するための結節点の役割を、鹿子踊りが果たすものと考えられていた。鹿子踊りの復活のプロセス自体が、そのつながりを結びなおす恰好の機会として期待されていたのである。

鹿子踊りを復活させるために道具や衣裳を作ったり揃えたりすることは、実際には誰かが率先してやってしまえばそれほど難しいことではない。しかしそれでは踊りを復活させる意義が大きく損なわれてしまうのである。**長洞さん**は次のように言う。

「太鼓や衣裳などは買ってくることもできるけど、そんな風に復活したって面白くない。皆さんの手を借りてやらなければ意味が無い。法の脇という30戸足らずの集落で鹿子踊りが続いてきた理由は、そうやって何かのたびに集まって相談して食べたり呑んだり歌ったりして、そうだからこそ続いてきたのだと思う。」

つまり鹿子踊りはただ復活すれば良いのではなく、「どのように」復活するかというプロセスにこそ重要な意義が見いだされていたのである。プロセスが大事だからこそ、時間がかかろうが皆が無理なく協力できる状況を待たなければならない。復活を焦って、これからの「元法の脇住民」という関係を結びなおす機会を失ってしまうことの方が、彼らにとって大きな損失なのである。

しかし、そうはいっても時間が経てばそれだけ復活にかかる実質的なハードルは高くなってくる。ただでさえ高齢化していた踊り手はさらに年をとるし、地区を出ていく人がさらに増えるかもしれない。なにより踊りの知識や技能は形の無いものだけに、時間とともに忘れられていくかもしれない。その点、法の脇鹿子踊りにはその空隙を埋める役割を期待し得るものがあった。

6　津軽石中学校の郷土芸能

法の脇鹿子踊りの復活へのプロセスに大きな役割を果たしていたと考えられるのが、津軽石中学校における郷土芸能学習である。

津軽石中学校は、赤前、津軽石両地域の全地区、つまり旧津軽石村の全範囲が学区となっている。この津軽石中学校では、早くから課外活動として全校生徒（平成27年時点で１２８人）が地域の郷土芸能を学び、10月最後の日曜日の文化祭でそれを発表するという取り組みを行ってきた。

この活動がいつから始まったのか、現在の学校関係者も把握してい

なかったが、法の脇部落会長の山野目輝雄さんは、かつて自分も教えに行っていたといい、中学校の校舎が新築された頃からではないか（津軽石中学校の校舎改築移転は昭和54年）という。筆者の調査の範囲では、昭和55年刊の『津軽石中学校創立三十周年記念誌』に、昭和51年に「さんさ踊り全校学習会」を開催し文化祭で披露したことが記されており、平成元年の卒業アルバムには、文化祭で虎舞やさんさ踊りを演じている場面が写っていた。

近年は、課外活動に加え総合的な学習の時間も活用して、文化祭に向かって6月から準備をはじめ、道具を作ったり練習を行っているという。現在、主として取り組んでいる芸能は①法の脇鹿子踊り、②津軽石さんさ、③赤前ソーラン、④栄通り太鼓、の4種類である。稲荷神社祭礼に出る芸能としては、かつては根井沢の剣舞や藤畑の虎舞も教えていたが現在は休止中である。学校としては、地域に残る全ての郷土芸能に取り組むのが理想であるというが、地元の指導者の都合などによって難しいものもある。どの芸能を学ぶかは生徒の希望によって決めるが、出身地区に郷土芸能がある生徒はできるだけそれを学ぶよう配慮される。

それぞれの芸能は、学校での練習以外に地域の伝承者のところに出かけていって学んでいた。法の脇鹿子踊りの場合、文化祭前の約1か月間、公民館などを借りて夜7時から1時間半くらい、期間中に15回ほど練習をしていた。近年は踊り師匠の長洞さんが中心になって指導してきた。

この文化祭の郷土芸能披露は、震災があった平成23年は中断したが、平成24年10月27日の文化祭には復活した。生徒は中学校に3年間しか在籍しないため、郷土芸能に触れないまま卒業してしまう生徒が出ないようにという配慮からであった。こうして法の脇鹿子踊りも、一足先に中学校で復活した。

中学校での郷土芸能学習の復活は、失われた頭や道具類を作ることから始まった。平成24年の6月から、総合的学習の時間の中に、グループ毎にテーマ設定をして課題に取り組む「プレジャータイム」という時間を設け、そのなかで頭の製作を行った。

この頭作りへの協力が、法の脇住民が震災後に鹿子踊りに再び触れる最初の機会となった。法の脇の世話人を務めていた長洞さんにも協力の要請があり、頭の見本として法の脇鹿子踊りのルーツと言われる茂市の頭を借りてきたり、元法の脇住民にアドバイスを呼びかけるチラシを配ったりした。

学校でも、仮設住宅等で避難生活を強いられている住民も多いことから、復活した平成24年からは地域に出向いて練習をするのをやめて、経験者である3年生がまず自分たちで思い出すために練習し、次に3年生が下級生に指導をするという体制に変更した。1年のみの中止で復活できたことがこれを可能にした。法の脇の場合は、ちょうど長洞さんの息子さんが中学3年生だったので移行しやすかったという。地域の伝承者はその現場に1～2度訪問し、間違いなどがないか確認した。

こうして中学校の文化祭での郷土芸能は復活し、以後も着実に毎年継続されている。とくに法の脇の場合、この中学校の郷土芸能学習がそのまま鹿子踊りの伝承と直結している。すでに震災前から、中学生やそのOBたちを含めなければ踊り手を揃えることが難しい状況であり、中学校の活動は踊りの継承にとっての代替手段どころか、不可欠なものになりつつあった。ある意味で、中学校で先に復活していたことで、元の住民は伝承が完全に途絶えることはないという安心感を得て、「復活を焦らない」という選択が可能になっていたのだ

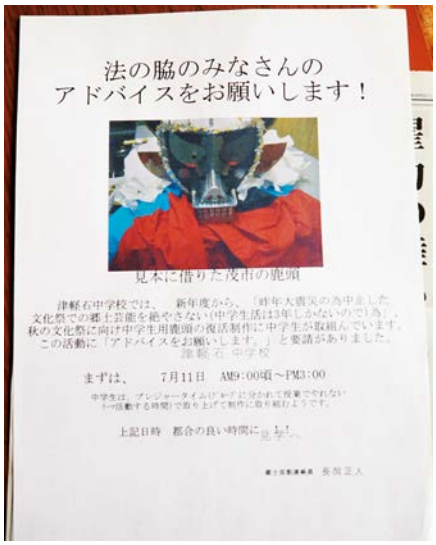


写真3　頭製作へのアドバイスを呼びかけるチラシ

と考えられよう。部落会長の山野目さんも「中学校さんで郷土芸能を文化祭にやってもらっていることで、法の脇の鹿子踊りもなくならないできているという気がしている」と語っていた。

7　復活への始動

震災から2年を過ぎた平成25年6月24日、「法之脇地区防災集団移転促進事業説明会」が開催された。これによって、元の居住地の買い上げの条件と、集団移転先（津軽石団地）の土地、区画、移転のスケジュールなどが確定した。12区画が確保されたことで、法の脇の移転希望者（11戸13世帯）は全て一緒に移転が可能になった。平成26年初めには移転が始まり、元法の脇住民の新居が建ち始めた。

また、平成25年9月30日には、県が「災害復興公営住宅の整備に関する方針について」を発表した。津軽石の復興公営住宅の計画がいつごろ具体化し、希望者に通知されたのかは確認できなかったが、平成26年3月までに設計が行われ、住宅の場所が津軽石団地の近くになることが確認されたようである。平成26年7月から施工が始まり、平成27年9月から入居が始まった。こうして最大の懸案であった「皆さんが落ち着く」場所の目処が立ってきた。

さらに、平成27年1月26日には、「津軽石地区津波復興拠点整備事業に関する説明会」が開催された。これは震災直後から何度も協議を重ねられてきた津軽石地区復興まちづくり計画において「津軽石小学校周辺地区公共施設集約事業」として検討されてきた事業の具体的計画である。その内容は、津軽石小学校周辺の津波浸水想定地の外に、津軽石支所や新設の津軽石公民館などの公共施設を集約して建設するというものである。法の脇部落会からも復興まちづくり計画の会議に代表者が参加し、鹿子踊りの道具の保管場所兼練習場所として津軽石公民館を利用させて欲しいと訴えてきたという。当初の計画からはだいぶ縮小されたとのことであるが、公民館の計画が具体化したことで、復活した際の活動拠点の目処も立ったことになる。

こうして、平成26年の終わり頃から次第に、彼らが鹿子踊りの復活に乗り出す条件としてきたことが解決していった。そして同じ頃、復活の気運を高めるもう一つの出来事があった。

平成26年の秋に、踊りの師匠であった長洞さんはテレビ局の取材を受けた。この取材は、震災で失われた地域の景観や文化を、古い映像記録を発掘することで次代に継承するというＮＰＯ法人20世紀アーカイブ仙台の活動を紹介するＮＨＫ盛岡放送局の企画の一環であり、津軽石の旧家である盛合家住宅（登録有形文化財）の蔵から発見された昭和10年のフィルムに法の脇の鹿子踊りが映っていたことから始まった。宮古で行われたフィルムの上映会に参加した津軽石の郷土史家が、法の脇鹿子踊りの姿を映像記録の中に発見し、長洞さんを自宅に招いてその映像を見せた。ＮＨＫ盛岡放送局はその後も取材を続け、鹿子踊りの被災状況と今後の見通しについて、長洞さんを中心にした小さなドキュメンタリーを構成し、２０１５年４月３日に『シリーズいわて　よみがえるふるさとの情景』の第１回として放送した。その番組の中で、**長洞さん**は次のように語っている。

「昔の人たちが１５０年もの間続けて来ていることを、ちょっと大きい津波が来たからといって、ここにはもう何回も大きな津波が来ていますので、ここでやめるわけにはいかないかなという感じがしています。」

この放送は、様々な反響を呼んだものと地元の人びとに考えられていた。ちょうど放送があった頃、市の教育委員会を通してアサヒグループホールディングス・コミュニティ助成事業補助金の申請の話が持ちかけられた。前年に申請していた中尊寺の支援事業からも、追加の援助の話があった。これらに市の民俗芸能伝承活動費の補助と合わせると、道具や衣裳をすべて揃える資金の目処が付くことから、いよいよ本格的に復活に乗り出すことになった。

補助金を申請するために、従来名ばかりの組織となっていた保存会を改めて、4月には新しく保存会組織を立ち上げた。名称は「法の脇獅子舞保存会」とし、保存会規約や会員名簿等を作成して、5月に開

催された部落会総会で元法の脇住民に説明した。会員名簿には、元法の脇住民で16歳以上の者33人が名を連ねた。目標は平成28年8月16日の稲荷神社例大祭に鹿子踊りを奉納することとした。

本格的に復活に取り組むことが確認されると、太鼓の師匠であり、新しい保存会の副会長であり、大工でもある澤口さんは、その年のはじめに集団移転地に新築した自宅の脇に作業場を設けて、6月にはさっそく頭の製作を始めた。津波の後のガレキの中から発見して救い出した頭の1つを分解して新しい頭の型にした。雨が多くなって作業がはかどらなくなると作業場に屋根をかけて製作作業に打ち込んだ。

8月2日には保存会が呼びかけて、この頭の製作の様子の見学会が行われた。元法の脇住民が10人程度参加したほか、集団移転先の自治会である本町協力会の会長らも集まった。彼らからも、法の脇の鹿子踊りをぜひ復活させて欲しい、必要なら経済的にも多少は支援できるとの申し出があったという。本町の人びとは以前から稲荷神社祭礼の巡行行列と通り踊りを通じて法の脇鹿子踊りに親しみ、花代によって支援してきた人たちである。祭りに鹿子踊りがないのを彼らも寂しく思っていたのではないかと法の脇の人たちは考えていた。NHK盛岡放送局も再度取材に訪れ、澤口さんが頭を製作している様子などが9月11日の放送で紹介された。

写真4　新しい鹿子頭と澤口さん

8　踊りを「地域のものにする」

鹿子踊りの復活が本格的に始動するにあたって、彼らが新たに意識することになったのが、踊りを伝承する組織の問題である。新しい保存会を立ち上げたのは、現実的には補助金を受けるという必要からであったが、それは同時に、今後の鹿子踊りのあり方の方向性を示すものでもあった。

これまでにも保存会はあったものの、誰が会員で、誰が何の役割かなどはほとんど問題とされていなかった。それは地区住民がほぼ総出で鹿子踊りを担ってきたからである。踊り手として中学校の生徒やそのOBを迎え入れていたとはいえ、法の脇鹿子踊りの担い手は法の脇の地区住民であるのは言うまでもない自明のことだった。役割など決めずとも、準備や手伝いなども含めて、その時々にできる人ができることをすることで、十分に踊りをやっていけた。いわば日常の関係性の延長上に鹿子踊りがあったのである。

しかし今後はその母体であった法の脇という地区が存在しない。かつての法の脇住民がそれぞれ移転先の地区に入って新しい生活を始めると、自明であった「法の脇の人」という存在はいなくなるのである。鹿子踊りについても、これからは誰がどのようにその伝承を担っていくのか、何らかの形で明確化する必要が生じる。新しい保存会はまずはその一歩である。

それと同時に、今後は元法の脇の住民だけでは踊り手が確保できないことが明白である。するとその組織には新しいメンバーを迎え入れていかなければならない。

「すでに2013年の部落会総会のとき「法の脇はなくなるので、法の脇の鹿子踊りでなくなんがね」ということを決めましたので、その点は肝に銘じて進んでいかなければいけない。」

と新しい保存会の事務局長になった**長洞さん**は言う。そこで彼らが目論んでいるのは、踊りを「地域のものにする」ということである。それはどのようなことか。

例えば集団移転先である本町地区は、津軽石では町場で人口も多い。かつては本町も稲荷神社祭礼にさんさ踊りを出していたというが、現在は奉納芸能を持っていない。そこで本町からも踊り手に加わってもらえば、法の脇では望むことが難しい若い踊り手も期待できる。ある

いは今後は新設される津軽石公民館が活動拠点となる。そこは鹿子踊りだけでなく、津軽石の他の地区の郷土芸能も利用するかもしれない公共の場である。だとすれば、その場から地域内の様々な郷土芸能の人的交流が進められるかもしれない。今はどの団体も後継者に困っている。踊り手についてももっとお互いに助け合うべきではないか。こうしたことから、津軽石地域のすべての郷土芸能を、地域全体で継承していこうという発想が起こってくる。少なくとも法の脇は地区として解散する以上、今後新しい住民が加わることは見込めないのだから、そうでもしなければ残していくことはできないのである。

新しい法の脇獅子舞保存会の会長を引き受けた部落会長の**山野目輝雄さん**は、津軽石鮭繁殖保護組合の組合長でもあり、様々な面で津軽石地域全体の福利を考えてきた立場である。彼は次のように言う。

「これまでは、これは俺たちの部落の鹿子踊りなんだと、そういう頭しかなくて、それでやりくりしてきた。これからは世帯が各地に散らばったから、部落会活動というのもその地区ごとでやるわけだから、本町の人たちの協力を仰いだり、他の人たちの協力を仰いだりしていかなければこの鹿子踊りもなくなってしまうかもしれない。震災前は、余所のものにはやらせられないという意識もあったが、それでは続けられない。同じ人で虎舞もやるし鹿子踊りもやるというのが出てくるかもしれない。笛だってさんさの笛を吹いたり、鹿子踊りの笛を吹いたり、そういうこともできるだろう。そういう組織を絶対に作るべきだし、自分が元気なうちにそれを実現したいと思っている。法の脇からそれを率先して進めていくために、まずは保存会を作って、そこから復活を目指している。」

地域全体で郷土芸能を継承するという発想は、中学校で津軽石全域から集まる生徒たちに教えるというかたちで、すでに部分的に実現されていることを拡大した考え方だと言えなくもない。新町の津軽石さんさなどは、その名称の通り、以前から津軽石地域全体の踊りとして認知されており、法の脇鹿子踊りの世話役たちもしばしばさんさ踊りの代表者と今後のあり方について相談してきたという。しかし、その中学生の参加ですら一朝一夕でできたものではない。30年以上にわたる継続した郷土芸能学習の取り組みによって作られた関係性があってはじめて可能になっているのである。これまで地区を挙げて鹿子踊りを担ってきた法の脇が、その枠を外して踊り手を揃えようとすれば、新しい関係性を意識的に構築していかなければならないのである。

その意味で、震災からの復活のプロセスは、単に元法の脇住民という関係性を結びなおすだけではなく、新たな外部との関係を取り結ぶための好機だとも考えられる。頭の修復の見学に本町の協力会長らを招いたのもそうした意図からであろう。すでに動き始めた復活へのプロセスのなかで、どれだけそうした機会を作り、新しい関係を構築できるかが、今後の鹿子踊りのあり方にも大きく関わってくるだろう。長洞さんの次の言葉は、そのことをよく表している。

「自分たちで手をかけてやれば、何回も会ってそこで交流が生まれるし、そこで団結も生まれると思う。元法の脇の人だけでなく、これから協力してもらう人にも来てもらってというのはあるんだけど。それはこれから手仕事もあるのでそこにきて参加してもらえば良いと思う。その辺をこれから相談して、少人数でやる方が楽なこともあるけど、自分は人を集めてやっていきたいと思っている。」

9 「歴史」をつなげる踊りと神社

こうして震災から5年経って、ようやく法の脇の鹿子踊りは復活に向けての一歩を踏み出した。これだけ時間がかかったのは、すでに見てきたとおり、今まで踊りの伝承の基盤であった地区が震災によって解散を余儀なくされ、新しい関係を築いて踊りを復活していく必要がある中で、その復活のプロセス自体が関係性を維持し更新するための重要な機会と考えられていたからだと言えるだろう。様々な立場の多くの人の参加を得て復活させることが重要であり、だからこそ皆が参加できる機が熟すのを慎重に待っていたのである。さらにこの機会は、以前から潜在的な問題であった地区内の踊り手の不足を、関係性を広

げることで解消する可能性を秘めた、変革の機会とも捉えられる。災害は、ときには既存の問題を解決し、未来を描くためのきっかけにもなるのである。

ただ一方で、未来を切り開くためとはいえ、これまでの生活を支えてきた様々なものを簡単に絶ちきれるはずもない。人のつながりや生み出してきた文化など、過去にはそれまでの生活を豊かにしてきた価値が埋め込まれている。

例えば法の脇の場合、その一つは「法の脇」という地名である。この不思議な響きの地名が表示していた場所は、人の生活の場としては存在しなくなってしまった。それにも関わらずその名前を伝える一つの手段が、その名の下で鹿子踊りを続けることである。**長洞さん**はそこに埋め込まれているものを「歴史」という言葉で表現していた。

「名前がないと、法の脇が何もなくなるから。残るのはこれしか残らないんで、「法の脇があったがえ」という話くらい残してもらいたいと思っていて、それが歴史かなと。漁師の部落だったから、川留めをする親方も何回も出ている。そういう法の脇と鮭川との関係があって、その法の脇にあった鹿子踊りというのがあるので、それを歴史の1コマとして残しておかなければいけないというのが私の中にある。」

同じように山野目さんも「名前を変えると、そこで歴史が途絶えてしまう」と語っていた。だから彼らは、津軽石全体で踊りを受け継ぎながらも、その名称を「法の脇鹿子踊り」として残していきたいという希望をもっている。彼らにとって、たとえこれまでと異なるやり方で受け継ぐことになるとしても、それは過去から受け継がれてきたものを将来に伝えるためであって、別のものを作り出そうというわけではない。長い歴史を持つ法の脇の鹿子踊りを、新しい組織、新しい人びとに引き継ぐことは、これまでの生活で培ってきた様々なものを、踊りに託して未来につなげる方法なのである。

もう一つ、元法の脇住民のつながりによって受け継いでいきたい大切なものがある。それは部落で祀っていた熊野神社である。この神社は、『宮古市史（民俗編）』の「神社・小祠小堂一覧」にも掲載されていない目立たない社であるが、法の脇の人たちはオクマンサマと呼び、自分たちの神社として大切に祀っている（ただし熊野神社を氏神とは言わない）。現在の社殿は平成10年に再建されたものだが、その際に棟札が見つかっている。宮古市教育委員会提供の資料によると、その1枚には、表に「奉再建熊野三所大権現宮一宇大檀君　村長久」「願主野理脇村中」、裏に「文久二壬戌年十一月十五日」の銘がある（文久2年は１８６２年）。またもう1枚は表面が解読不能であるが、裏面に「宝暦四甲戌年」の銘があるという（宝暦4年は１７５４年）。少なくとも江戸時代末期以前から、法の脇の住民が祀っていた神社であることがわかる。

熊野神社の主な祭日は正月と旧暦9月14日の祭礼である。大晦日から正月にかけては、元朝詣りの地区の人びとを迎えるために神社を開ける。地区の人たちは元日には松飾り、小正月には笹飾り、三日正月には杉飾りをそれぞれ神社に供えに来る。旧暦9月14日の祭礼（現在はそれに近い日曜日）は宮古からイタコを呼んで、託宣（口寄）をするなどして拝んでもらっていた。近年この口寄は、法の脇に縁があるというイタコが老齢のため、神職を呼んで祭典をするようになった。

この祭礼に奉仕するのは主として地区の女性たちで、宵宮の晩は女性たちが社殿でお籠りをするという。以前は祭日だけでなく、女性たちがときどき寄り集まってくつろぐ場所でもあった。女性たちが奉仕しているのは、何らかの信仰に基づくというわけではなく、この時期には男性たちの多くが出稼ぎで地区内にいなかったため、自然と女性が勤めるようになったのではないかという。地区に総代のような役職はなく、むしろ法の脇の住民が皆で管理をしていた。別当は代々、太鼓の師匠の澤口さんの本家が勤めており、かつては参拝者に料理などを提供していたこともあるという。

震災後、地区は実質的になくなったが、神社が忘れられたわけではない。今も社殿やその周辺は元法の脇の住民によって清掃や草刈りが

行われており、震災後に発見された鹿子踊りの頭を保管していたように、元の住民たちの公共的な施設として利用されている。震災の後には、大正12年に寄進された「熊野山神社」と染められた幟が発見されている。そして中断していた祭礼も、平成25年に再開された。

現在の社殿は平成10年に再建されたものだが、このとき元法の脇のほぼ全世帯をメンバーとして、熊野神社建設委員会という組織が作られており、この組織はその後も解散せずに残っているのだという。そして部落会の解散後は、この組織が熊野神社に関わる諸事を伝えていく母体になると見込まれている。というのも熊野神社は、元法の脇の住民で祀らなければ、他に世話をする者はいないからである。部落会長の山野目さんは、この熊野神社の祭礼と鹿子踊りを、部落会の解散後も元法の脇の住民が守っていくべき大きな2つの宝であるという。

おわりに

元法の脇の住民たちは、いまようやく落ち着く場所を得て、そこから生活の再生をはかろうとしている。当然ではあるが、この場合の再生とは、過去の生活を再現するということではない。新しい場所で、新しい人たちとの関係を築いて生きていくということである。ただし一人一人の中でそれ以前の暮らしと何かしらの連続性をもったものとして認識されないかぎり、その新しい生活は、拠り所のない空疎なものになってしまうだろう。とりわけ高齢者の多い法の脇の人びとにとって、今から全く新しい生活を始めるなどというのは考えも及ばないはずである。大切なのは、以前とまったく同じではないけれど、これまでの生活と「つながっている」という実感を、新しい生活のなかに見いだすことではないか。鹿子踊りと熊野神社が、元法の脇の住民たちにとって、かつての暮らしとこれからの暮らしを結びつけ、それに関わる人びとを束ねる核として、長く受け継がれていくことを願うものである。

写真5　発見された熊野神社の幟

【参考（引用）文献】
岩手県教育委員会編『岩手の民俗芸能　念仏踊篇（附・山伏神楽補遺）』（岩手県文化財調査報告第15集）　1965年　岩手県教育委員会
岩手県教育委員会編『岩手の民俗芸能　獅子（鹿）踊篇・下巻』（岩手県文化財調査報告第19集）　1970年　岩手県教育委員会
宮古市教育委員会編『宮古市史（民俗編）』上・下　1994年　宮古市
森口多里『岩手県民俗芸能誌』　1971年　錦正社

【話者（本文中に言及されている人）】
山野目輝雄さん（法の脇部落会長、法の脇獅子舞保存会長、津軽石鮭繁殖保護組合長、昭和11年生）
澤口候則さん（法の脇獅子舞保存会副会長、昭和21年生）
長洞正人さん（法の脇獅子舞保存会事務局長、昭和31年生）

第2部　各分野での震災後の取り組み
第13章　被災した芸能と復活
Ⅱ　陸中沿岸地方と芸能による地域再生

神田より子

はじめに

黒森神楽は今も黒森神社を拠点に、近世期の八戸藩、伊達藩との国境まで1年交替で北廻り、南廻りと称して村々を廻っている。そして村の中では獅子頭を携えて家々を訪れ、初春の祈祷をして歩き、夜には一軒の家を宿として一間に幕を張り神楽を演じてきた。こうした伝承の確かさが評価されて、１９９５年12月26日には「陸中沿岸地方の廻り神楽」として下閉伊郡普代村の鵜鳥神楽と共に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」（神田より子『陸中沿岸地方の廻り神楽報告書』宮古市　１９９９年）に選択された。その後、２００６年３月15日に国の「重要無形民俗文化財」に指定された。この神楽は、宮古市の黒森神社の神霊を獅子頭に遷し、これを権現様と奉じて歩くことから黒森神楽の名称で呼ばれている。黒森神社には南北朝初期の作と推定される獅子頭をはじめ、文明17（１４８５）年とそれ以降の獅子頭が残り、寛政８（１７９６）年以降の獅子頭は二頭で一対となり、今に至っている。

黒森神楽が廻って歩く陸中沿岸地方は、そのまま今回の東日本大震災の岩手県内の被災地と重なっている。神楽の宿を提供してきた地域の方々も、獅子頭を奉じて廻って歩く神楽衆も、共に被災者なのだ。ここでは神楽衆の被災状況、黒森神楽の宿の被災と復興、震災後の神楽の巡行、被災地代表としての黒森神楽、神楽が果たした地域の再生、そして今後の神楽の巡行の行方について述べてゆくことにする。とくに東日本大震災後の黒森神楽の活動状況は、震災の年の秋から数年間のみだったが、日本全国各地だけではなく海外からも、震災に負けなかった復興のシンボルのように招かれて活動することが多かったので、そのことにも言及してゆきたい。ここでは黒森神楽の宿の方々、神楽代表の松本文雄さん、ワケーモンガシラの田中大喜さん、宮古市史編さん室の假屋雄一郎さんからの聞き書きと、神楽が訪問した世界及び日本各地の公演パンフレットなど、そして神田の実見を元に描いてゆくことにする。

1　黒森神楽衆の被災状況と震災後に加入した若い神楽衆

黒森神楽衆が住んでいる地域は全域が東日本大震災の被災地であり、彼らも被災者ではあるが、神楽衆自体に人的被害はなかった。しかし以下のメンバーが自宅や職業に関わる建物や道具などの物的な被害はあった。

松本文雄さん（昭和23年生）は現在黒森神楽の代表で、震災で宮古市田老真崎にある家は残ったが、船と養殖施設が全滅した。津波の時は海岸付近で犬の散歩をしていたが、犬共々山に逃げて助かった。以前は農協に勤めていたが、依願退職して、今は漁業の仕事を続けており、わかめの養殖を中心にやっている。わかめは津波の年は収穫ゼロで、翌年は例年の６割程度の収穫だった。

畠山俊良さん（昭和23年生）は宮古市田老摂待に住む現役の漁師で、船でわかめの収穫作業中に津波に遭い、筏の上にいた兄を助けて、沖に逃げた。津波警報が解除にならないと陸に戻れないので、大きな船に助けられて、丸一日沖にいた。今は引退し、息子が後を継いでいる。重機を動かす免許があるので、田老の瓦礫を処分する分別場で働き、それが済んでから漁業に戻った。

田中大喜さん（昭和53年生）は岩手県の職員庁舎に住んでいて問題はなかったが、大槌町吉里吉里の実家が全壊し、安渡にあった実家の水産加工場も全壊した。実家に住んでいた両親と弟は仮設住まいをしている。田中さんは宮古に新居を建設して２０１３年８月に引っ越しをした。彼は今黒森神楽の若者頭（ワケーモンガシラ）という立場にいる。

平野智（とも）さん（平成元年生）は震災当時は青森大学の学生で、青森にいて停電のため蝋燭を灯して過ごしたという。この年の３月12日に予

定されていた大槌町吉里吉里への巡行にあわせて、平野宅に権現様を預けることになっていた。しかし本人が青森にいたため、宮古市田老摂待の畠山俊良さんが預かり、権現様も衣装も助かった。権現様のおかげと言っている。平野さんの実家は大槌町浪板で民宿を経営していたが、津波で流出した。その後、母は大槌の仮設で居酒屋をやりながら、浪板の浸水区域外に家を新築した。本人は盛岡の電気関係の会社に就職して、盛岡に住んでいたが、２０１４年６月に結婚し、子供が生まれた。会社の支所が浪板にあり、今は浪板で親子３人の生活をしている。

実家がある大槌町浪板で今は85歳になる祖父が鯨山神楽の胴取をしており、この祖父の指導で３歳の時に神楽を舞った記憶がある。小学校１年の時には平泉町で岩手県小学校の芸能祭があり、祖父の胴（太鼓）で舞を舞った。多分「榊葉」だったと記憶している。小学校５、６年の頃には黒森神楽の田中大喜さんから榊葉を習い、中学１年で黒森神楽のメンバーと一緒に宮古市千徳の神社の祭りで「恵比寿舞」を舞った。高校になってからは巡行にも出ていた。２０１５年12月７日の黒森神楽の舞納めでは新しい「仕組み」（演劇仕立ての活劇）の胴を取った。

若い神楽衆

ワケーモンガシラである田中大喜さんによると、震災後に黒森神楽に入った若い神楽衆が重茂に２人、田老に２人いる。

① 田川尚樹さん（２０１６年３月岩手県立宮古水産高等学校卒業、地元の漁業関連の会社に就職）田老摂待出身

彼が中学３年の頃、黒森神楽の本拠地である黒森神社の山麓にある山口公民館で、神楽道場をやることになり、参加するようになった。前から神楽をやりたかったと言う。もう１人山本君（後述）という田老の子が一緒に来たが、高校の陸上部で忙しくなり、田川君だけが残った。

中学１年の頃から摂待の民俗芸能である「七つもの」をやっていたが、同じ摂待に住む神楽衆の畠山俊良さんが、筋が良いと引き込み、中学３年の３月から教えている。高校を卒業したら漁師になることを希望している。

② 戸村和希さん（２０１６年３月岩手県立宮古水産高等学校卒業、家の漁業を継ぐ）重茂仲組出身、田川君の同級生

中学の時は重茂で剣舞をやっていた。田川君が高校１年の６月頃、重茂の祭りに行き、夜友人の家に泊まった。そこで神社の夕食の時に来たのが水産高校の戸村君で、彼もやりたいと希望した。小学校の頃から黒崎神社の祭りには祖父に連れられて神楽を見ていて、神楽を好きになった。この祖父が「ものにしてたんせ」と頼んできた。

田川君が習うと言いだして、２人で参加して２人で「榊葉」をやっている。卒業したら漁師になりたいという。

③ 石崎泰成さん（２０１６年３月岩手県立宮古商業高等学校卒業、宮古市役所勤務）重茂石浜出身　戸村君の友達

高校２年の時に戸村君が神楽をやっているのを聞いて「オレもやりたい、誰に聞けば良いんだ」と聞いてきた。重茂中学では剣舞をやっていた。実家のある石浜では神楽の南廻りの巡行を見ていた。ヨット部に所属していてなかなか来られなかった。練習を始めたのは26年の10月からで、宮古市千徳上鼻（かんばな）の羽黒神社で10月第１土曜に行われる祭礼の宵宮で「榊葉」を舞った。

④ 山本翔太さん（２０１６年３月岩手県立宮古工業高等学校卒業、地元の企業に就職）田老養呂地出身

神楽道場に来ていたが、「仙台に行くのでやめた」と言っていたが、「宮古に残って神楽をやる」と最近になって宣言をした。

練習

若い神楽衆のために黒森のふれあい館で時間をとれる者が来て、土曜日の午後などに稽古をしている。双方の都合があえば、その都度集まって練習をする。その際は宮古市田代在住の皆川栄作さんが何とか都合を合わせて出てくれる。

平成27年９月の宮古市横山八幡宮の祭りでは、イタコさんが来ないので、権現舞を長くやってほしいと宮司から依頼された。平日の祭礼

のために神楽衆がそろわず、水産高校では神楽に出るために公欠を出すということで、急遽高校生に特訓をして間に合わせた。水産高校に倣って、商業高校も公欠になるという。

2　黒森神楽の宿の被災と復興

神楽の状況

宮古市史編纂室の假屋雄一郎さんによると、2011年の震災後、6、7月になって人々が仮設に入って生活が安定してくると、「祭りを自粛する」といった声も小さくなり、雰囲気も変わり、「祭りをやらねば」と言うようになってきた。

7月に入ると飲み屋も再開したので、役所でも「自粛せず、飲みに行ってやらねば」と話すようになってきた。祭りも、当初は自粛すると言っていたが、普段通りの祭りと神楽をやった。宮古市鍬ヶ崎では、おくまんさま（熊野神社）の祭りは普段通りにやったが、長床には避難者がいたので、神楽はやらず祭りも神事のみだった。

2014年12月23日に黒森神楽の若頭の**田中大喜さん**（昭和53年生）から話を伺った。神楽の再開はもっと遅くなると思っていたが、2011年6月25日には宮古市田老のグリーンピアでやったりして、ずいぶん早く復活している。

北廻りで訪れる宮古市田老末前、畑、岸、小成は内陸だったため被害はなかった。北廻りで廻る地域は高台に集落があるところが多いので、被害は少なく、宿はできている。しかし田野畑村島の越集落は壊滅していて、集落として高台移転の予定だが、移転できれば再開したいという話はある。当地ではこれまで漁村センターで神楽をやっていたが、今は田野畑村の和野で仮設住まいをしているので、和野の北川食堂で和野の分として神楽をやった。島の越で神楽の好きな人は、平成24年の北廻りの際には、今度来たら新しい家で柱固めをやってもらうと言っていたが、26年も同じ状況だった。しかし元々門打ちの軒数が少なかった。拠点としていたところがなくなったのは、岩泉町小本温泉と田野畑村の島の越の漁村センターの2か所だ。また、宮古市田老の摂待は大きな被害を受けた地域で、平成26年は巡行の予定はあったものの、不幸があって中止となった。田野畑村明戸では仕事関連の被害はあったが、巡行の受け入れは継続しており、ここへ行くのは4年に1回なので、行くたびに盛り上がっている。

宮古市内の商店街は被災しているが、巡行での門打ちなどは休むことなくやっている。ここでは末広町だけではなく中央町商店街あたりまで門打ちの範囲が増えた。年年増えている。神楽は末広町のリアス亭というイベントスペースでやっている。末広町では年に2回復興市をやっている。町中でも神楽や門打ちをやるようになり、若い人たちが神楽に興味を持つようになった。

南廻りは門打ちが盛んに行われていた地域だったが、被害が大きかった。神楽の宿自体は被害があって住めなくなったところはない。しかし大槌町吉里吉里では門打ちはできない。吉里吉里の佐野さん宅の近辺はすべて流されてなくなったし、仕事関連の被害はあった。佐野さんは船を持っていたので宿をやってくれていたが、船が火事で燃えてしまい、仕事ができなくなり、神楽は泊めなくなった。被害者たちが組合を作れば、補助事業の対象になるので、それを提案してあげたら、「田中君のおかげで船を作れた」と喜んでくれた。

宮古市重茂は震災の翌年から門打ちをしているが、重茂の白浜の畠山さんも船、養殖施設が流され、家は床上浸水だった。山田町山ノ内の山崎さんは船と養殖施設が被害に遭った。釜石市鵜住居の根浜海岸に位置する宝来館は小高くなっているが、西側から波が来て宿泊施設が全壊となり、従業員が亡くなった。女将さんは(後述)波にのまれたが、助かった。自分の身体の上に車が来たが手で払いのけて生き延びたという。震災の直前の2月26日に宝来館で神楽をやった。「神楽のおかげで護られた」と本人は話している。平成25年には再建して、宿として神楽を再開した。27年の南廻りにも泊まった。

大槌町吉里吉里は、かつては大きな漁家が何軒かあり、神楽が行くと競うように泊めたという。昭和8年の大津波の後、畑だった土地に家を再建し、密集して住むようになった。防潮堤があり、坂になって

いて海が見えず、津波が見えなかったそうだ。今後は高台に造成しても地域が再生できないと門打ちの復活は無理だと思う。

平成27年は南廻りの年で末広町は1月10日にやった。続いて宮古市近内が1月11、12日の2日間の予定となっている。宮古市重茂の石浜は宿に泊まって全戸で門打ちをする。1月24、25日は山田町山ノ内に決まった。1月31日は未定だが多分宮古市重茂の千鶏でやる予定だ。昔は千鶏の馬場さん宅でやっていたが、しばらく休んでいた。彼が津波で亡くなったので、地域でお世話をしますと言ってくれた。釜石市の宝来館は3月1日にやる。ここは私が神楽をやるようになってから入るようになったので、宿としては新しい。平成17年か19年の頃、宝来館の女将さんがわざわざ吉里吉里の実家まで打ち合わせに来てくれた。

大槌町吉里吉里の佐野さん、宮古市重茂の畠山さん、山田町山ノ内の山崎さんは昔からの定宿で、泊まって門打ちまでやっていた。彼らは黒森神楽について「神様だから」という思いの強い人たちだ。

写真1　島の越の海岸での神楽念仏

3　震災後の神楽の巡行

平成24（2012）年

春には神楽の巡行があった。この年は北廻りに当たり、2月18日は田野畑村田野畑の公民館（アズビィホール）で神楽を行った。公民館の敷地に仮設が立っていて、見に来ていた人の多くは仮設住まいの人たちだった。田野畑村では島の越駅前の海岸に出て、海に向かって神楽念仏をあげ（写真1）、公民館ではシットギ獅子で舞い込みを行った。この日は後ほど行くことになるフランスでの公演の打ち合わせのため、プロデューサーが下見に来ていた。

3月3日（土）、4日（日）には田老のグリーンピア三陸みやこで「陸中沿岸の廻り神楽「黒森神楽・鵜鳥神楽」巡行宿」と称して、いわて、民俗観光プロジェクトの主催による神楽公演が行われた。主旨は、東日本大震災による巨大津波が三陸沿岸を襲い、巡行の中断がもたらす基層文化の衰退を考えるとその支援の重要性が浮かび上がる。そこで文化庁の「地域の文化遺産を行かした観光振興・地域活性化事業」の取り組みとして、神楽宿を引き受け、被災地での両神楽の公演を伴ったフォーラムを開催し、民俗芸能団体への支援と被災者支援を実施する、というものだった。そのためグリーンピア敷地内にある仮設住宅に住む400世帯の方々が無料招待された。3月3日（土）には摂待七つ物、田代念仏剣舞の上演の後、黒森神楽による舞い込み、夜神楽、舞い立ちがあった。3月4日（日）には参加団体などとのシンポジウムがあり、引き続き、鵜鳥神楽の舞い込み、昼神楽、舞い立ちがあった。

平成25（2013）年

南廻り巡行に当たり、1月3日（木）には黒森神社にて舞い立ちの行事があり、神降ろしに続き神事と権現舞を舞った。その後、山口公民館にてシットギ獅子による舞い込みがあり、続いて神楽を演じた。翌日の4日（金）には山口団地、田の神、西町にて門打ちに歩き、舞い立ちとなった。

1月6日（日）には末広町商店街にて門打ちと神楽を行った。

1月12日（土）、13日（日）宮古市近内の鈴木清宅が宿となり舞い込み、神楽そして門打ちを行った。

1月19日（土）は大槌町吉里吉里への巡行だったが、大槌は津波で大被害を受けた地域でもあり、神楽衆は自発的に海岸において津波犠牲者の供養のために海に向かって神楽念仏をあげた。その後、吉里吉里小学校において舞い込みを行い、昼神楽をして舞い立ちとなった。

1月26日（土）は山田町山ノ内の山崎冨美男宅が宿となり、舞い込

みの後夜神楽を演じた。そして翌27日（日）には地域内で門打ちをして舞い立ちを行った。

2月2日（土）は宮古市重茂石浜の畠山光八宅が宿となり、門打ち、舞い込みに続いて夜神楽を行った。翌3日（日）には門打ちと舞い立ちがあった。

2月9日（土）は釜石市根浜の宝来館に行った。まず海岸にて神楽念仏を行い、舞い込みに続いて夜神楽を演じた。翌10日（日）には昼神楽を演じて舞い立ちとなった。

2月11日（月）は大槌町郷土芸能祭が大槌城山体育館で行われた。これは大槌町郷土芸能連合会所属団体との共演で、恵比寿舞を演じた。

2月16日（土）は神楽衆の平野智の大槌町にある実家にて神楽念仏を行い、平野喜一宅にて柱固めが依頼された。その後大槌町浪板交流促進センターにおいて昼神楽を演じ舞い立ちとなった。翌17日（日）は大槌町吉里吉里の佐野安信宅が宿となり、舞い込みを行ってから同家にて神楽念仏の後に昼神楽を行い、舞い立ちとなった。

3月2日（土）は大槌町吉里吉里の北田恭市宅が宿となり、同家の氏神の神出しを行い、田中さんの実家のＴＲＳ食品から復旧した社屋兼水産加工場の柱固めを依頼され、北田家では舞い込みの後に、神楽念仏を依頼された。その後舞い立ちとなった。

3月3日（日）は遠野市遠野郷八幡宮にて舞い込み、昼神楽を演じ、舞い立ちとなった。

3月10日（日）には黒森神社にて舞い込みがあり、権現舞の後に神上げの儀礼を行った。

平成26（２０１４）年

北廻り巡行に当たる。1月3日（金）には宮古市横町横山八幡宮新年祭に神事に続き権現舞を奉納した。この後、宮古市山口の黒森神社にて神降ろしの行事を行った。舞い立ちに続き神事、権現舞の後に山口地区を門打ちをして廻り、山口公民館でシットギ獅子と舞い込みに続き神楽を演じた。翌4日（土）には黒森町、山口地区の門打ちを行い、オダンにて墓獅子があった。5日（日）にも山口地区を門打ちをして歩き、舞い立ちとなった。

1月11日（土）は宮古市末広町商店街の門打ちで、舞い込み、昼神楽、舞い立ちと続けて行った。

1月12日（日）は宮古市田老の畑にて舞い込み、昼神楽、舞い立ちだった。

1月13日（月）は久慈市アンバーホールにて宿入りをしてから介護施設を門打ちし、舞い込みの後に神楽を演じた。

1月18日（土）は田野畑村の机にて舞い込みと昼神楽があった。

1月19日（日）には特別に大槌町前段のかみよ稲穂館において新年会に招かれ、神楽5曲を演じて交賀会に参列した。

1月25日（土）は宮古市田老のグリーンピアにて舞い込みと夜神楽を行った。

1月26日（日）には宮古市田老の青倉で神楽衆だった故小向勝さんの墓前で墓獅子を行い、昼神楽を演じた。

2月2日（日）は田野畑村の和野で神楽を演じた。

3月9日（日）は黒森神社にて舞い込み、神事、権現舞をしてから神上げとなりこの年の巡行を終えた。

平成27（２０１５）年

黒森神楽の南廻りに当たる。1月には大槌町吉里吉里の佐野さん宅で神楽をやった。

1月31日は山田町山ノ内の山﨑冨美男さん（神楽宿）宅が宿だった。このお宅は親の代から神楽宿をやっている。震災後の２０１３年の南廻りではこの地域で門打ちをしたが、仮設には行かなかった。重茂の石浜では宿の主人が門打ちの際について回るが、山ノ内では宿の主人はついてこない。震災後、自粛ムードはなかった。震災前と同じようにできるのがうれしいと言われたし、神楽が元通りにできれば、自分たちの生活も元通りになるという話を聞いた。この日は舞い込みもやった。

2月7日、8日は宮古市重茂石浜に行き、宿は畠山光八家だった。神出しは石浜神社で行い、その後は門打ちに廻る。宿に戻るとシットギ獅子による舞込みを行った。

畠山家は床上1・5メートルの浸水だったので、2階に寝泊まりし、食事は親戚の家で食べていた。建具、障子を直し、4月初旬には日常生活が戻った。石浜では宿の畠山家より下の家々はすべて津波でやられた。しかしここでは避難所を作らず、本家分家関係の間で泊まっていた。神楽衆の若手の石崎泰成君は石浜にある商店の子で、家は流出し、今は空き家だった家を見なし仮設としてそこに住んでいる。

石浜地区では門打ちの際に宿の旦那が袋担ぎをやってくれる。家々からお盆に供えられた米は半分もらい、半分はお返しをし、御札を渡す。門打ちの際にお酒の奉納があると御祝いを歌う。今年は門打ちの間に柱固めの依頼が3件あった。これらの家は震災後新しく建てたものという。石浜では新築すると必ず柱固めを頼む。

重茂には重茂神楽、音部神楽があった。昭和55、56年頃までであり、神楽衆の山崎貴彦君は小さい頃は音部神楽でやっていた。貴彦君の父は田代出身で音部に婿に来て、音部神楽に入った。

2月11日は大槌町吉里吉里の北田恭市宅が宿だった。北田宅は高台にあり、被災していない。まず敷地内の高台にある氏神の山の神社前で権現舞を舞った。その後山の神社の権現様2頭を出して、黒森の権現様と一緒に山を下りる。

現在の家は昭和10年に北田氏のおじいさんが建てた家で、この頃から宿をやっている。家の縁側に山の神社の権現様2頭と黒森の権現様2頭の計4頭を並べる。中央に山の神の権現様を並べ、その左右に黒森の権現様を安置する。オシラ様が一緒になるときも同じように左右の端に黒森の権現様を置く。

舞い込みでは火の付いた松の根を4本地面に置き、4頭の獅子がそれぞれこの松の根を踏んで、火伏せとする。その後家の中に入り、床の間に4頭を安置して、神楽衆全員で拝礼をする。この後地域内を門打ちして歩くが、このときは黒森の権現様のみで歩く。

門打ちが終わると北田家に戻り、神楽念仏をあげる。北田家では必ず行う。1つの位牌を仏壇から出してテーブルの上に置き、その周囲で太鼓と鉦を静かにならす。ショシャ舞（権現舞の前に行う舞をいう）の舞い手は扇と錫杖を持って位牌に向かい、その後ろに獅子頭を抱えた者が並び、柔らかな拍子で念仏歌を歌い、途中錫杖を鳴らしながら、下から上へとせり上がる動作をする。その後歌いながら時計回りに位牌の周りをゆっくりと回る。廻るのは太鼓、鉦、笛、ショシャ舞の舞い手、獅子の舞い手各2人。拍子が変わり賑やかな囃子になると、少しずつ廻りながら舞う。囃子がやむと全員が位牌の前に座り、再び神楽歌の〽四の巻や……などを歌う。途中蝋燭を付け、獅子頭を持った2人が立ち上がり、自分の立っている位置でゆっくりと歯打ちをする。囃子がやむと仏壇の鈴を打ち拝礼をする。その後家の当主が線香に火をつけて、家族一同で拝礼をする。

終わると権現舞による舞立ちとなる。4人による下舞の後、黒森の権現様のみによる権現舞。台所に行き、ひしゃくとへらを交差させて火伏せの儀礼を行った後、権現様の歯打ちを行い、その後仏壇、神棚、床の間の前で歯打ちをする。その後家の主婦の妊娠中のお腹を獅子が噛んだ。終了後、御祝いを歌い、当主に酒を注ぎ、一口飲んでから皆で飲み、食事となる。この日は主婦が妊娠中で準備が大変なため、神楽はやらなかった。佐伯裕則さんが生きていた頃は仏壇の位牌を全部出して並べ、神楽念仏をやったという。

この地区は元々佐野さん宅が神楽宿で、イカ釣船を持っていた事業家だった。当時は連泊することが多く、北田さんのおじいさんが、我が家は百姓だが、よかったら泊まってくれと言ってくれて、それ以降宿になった。

震災の時には30人くらいがここに逃げてきて、1か月くらいいた。神楽宿をやる家だから広くて豊かだからという意識が地域の人の中にはあったのかもしれない。布団も全員分出して着せた。「うちはだだっ広いから」といっていた。

現在海側に住んでいた人々の家が高台移転となるため、この当たり

が造成中で、家からもその様子が見える。造成地は畑を切り崩して利用している。

祭礼における神楽

黒森神楽は地元の各神社の祭礼にも神楽を演じている。神事に伴う権現舞の後に数曲の神楽を演じたり、宮古湾での船渡御に伴う恵比寿舞の披露、そして御輿の巡幸に伴い、御旅所での舞の披露などだ。震災後の祭礼の復活も早かったことが見て取れる。

平成24（２０１２）年

7月7日（土）は宮古市藤原比古神社宵宮祭で、神事に続いて権現舞を奉納した。翌8日（日）は藤原比古神社例祭で神事、湯立ての後恵比寿舞が演じられた。

同日の7月7日（土）には宮古市青猿神社宵宮祭で神楽2～3曲を奉納し、8日（日）には青猿神社例祭で神事、神輿渡御に続き恵比寿舞を舞った。このときは週末に2件の神事が重なり、神楽衆が2組に分かれての大奮闘となった。

7月15日（日）は宮古市黒森神社例祭で神事の後は権現舞、湯立て、神楽があった。

7月21日（土）は宮古市鍬ヶ崎熊野神社宵宮祭に当たり、今回も2組に分かれての活躍である。この日は神事の後に権現舞と神楽を3曲舞った。翌22日(日)は熊野神社の例祭で　神事の後神輿渡御があった。

7月29日（日）は宮古市光岸地にある大杉神社の例祭だった。

8月6日（月）は宮古市沢田にある判官稲荷神社の宵宮祭で神事に引き続き権現舞、神楽2、3曲を演じた。翌7日（火）は判官稲荷神社の例祭で神事に引き続き権現舞と湯立てを行った。

8月19日（日）は宮古市茂市熊野神社の例祭で、神事に引き続き神輿渡御を行い、神楽を2曲演じた。

9月14日（金）は宮古市宮町横山八幡宮宵宮祭で、神事の後夜神楽を演じた。翌15日（土）は例祭で、神事の後湯立て、神子舞と託宣が行われた。そして3日目の16日(日)には神幸祭があり、神事と市内渡御、曳舟があった。横山八幡宮では女性達がゆっくりと神子による託宣が聞きたいからと神幸祭とは別の日を設定している。

9月22日（土）は北海道北広島市西の里神社宵宮祭で、この日は稽古に引き続き夜神楽があり、翌23日（日）には例祭、神事と昼神楽があった。ここの神楽は故佐伯裕則氏に教えを受けた人たちが組織しているグループで、黒森神楽の弟子筋に当たる。そのため弟子達はたびたび宮古まで練習に通い、黒森神楽衆も助っ人として北広島まで出向いている。また北広島の若い神楽衆は黒森神楽の助っ人として海外公演にも参加するなど、その交流は深く長く続いている。

平成25（２０１３）年以降はほぼ平年通りの神事に伴う権現舞と神楽が演じられた。

神楽宿の話

２０１５年5月6日に、釜石市鵜住居の宝来館の女将である**岩崎昭子さん**（昭和31年生）から、宝来館が神楽宿になったきっかけ等を伺った。

阿部要さんという方がいて、震災前に亡くなったが、彼が地元の宿で神楽が見たいと常々言っていた。老人クラブの人たちが本物の神楽が見たいと言っていたのがきっかけだった。阿部さんから宝来館で神楽宿を復活してほしいといわれていた。阿部さんが亡くなって5年くらいたって、約束を果たさなくてはとずっと思っていた。神楽衆の田中さんが久慈にいた頃で、県の振興局ＯＢの岩切順さんが釜石の芸能協会会長をし

写真２　大震災後の宝来館前の海岸

ており、岩切さんが水産局の部長をしていた頃、「田中君を紹介するから、黒森さんに直接来てもらえば良い」と言われ、神楽を見に行っていた。そこで宝来館でもできるのではないかと思った。当時黒森神楽の巡行先は大槌止まりで、宿も少なくなってきて、公民館ばかりになっていた。そこで「釜石でもできる」と言ってもらえた。そのため何かタイミングがほしいと思っていたとき、釜石の文化会館で神楽をやるときにここへ招けば良いと考えた。ゆとり教育の中で日本の文化を考えるという動きがあり、芸能大会をやった。鵜鳥神楽もこちらには来ていたので、どちらかと言うことはなく、どちらでもできればやろうと考えた。

地元の人たちは大漁祈願をしたいので、皆集まってくる。そして必ず拝んでお花をあげる。ここの東部漁協組合長の金野喜十郎さんは高齢になっても神楽を見に来てくれて、次の神楽を見るために生きていたいと言ってくれた。100歳になるまで見ていた。

私の家は元々鵜住居川上流の新田地区にあり、地元の祭りには丹内神楽が来ていた。小さい頃は祭りで神楽を見ていて、楽しくてしようがなかった。神楽は幸せの象徴のようだった。

震災直前の2011年2月28日に黒森神楽をここでやった。このときの映像は九州の人が送ってくれたが、今は埼玉の人に貸している。田中さんが久慈から移動になるまで、震災前にここで4回は神楽をやったと思う。

東日本大震災では宝来館は全半壊となった。木造の部分は全壊だった。鉄骨の建物は10年前に建てた。「神楽を舞ったけど俺たち守れなかった」と神楽衆から言われたので、「神楽を直前に舞ったから、俺たちは生き残ったよ」と言った。震災の後は2012年1月から宿を再開した。休んでいるときも仮設で食堂をやっていた。借金も多くなり、保証人に迷惑をかけられないので、再生の道以外に選ぶことはできなかった。神楽は2013年の南廻りの巡行に合わせてやった。神楽衆はお礼としてやりたいからお金はいらないと言ってくれた。福が来るようにと、「七福神」までやってもらった。お花を出したかったが、踊って皆が元気になれば良いと言ってくれた。

震災後、「ナナコマツリ」を宝来館でやった。鵜鳥の神楽宿が白浜にあった。ナナコの夫が鵜鳥神楽衆の笹山さんで、1回目の「ナナコ祭り」はナナコの家でやった。震災後2年目くらいの頃、笹山さんは造園、石屋の仕事をしていて、流れ着いたものを集めて居場所を探していた。権現獅子頭も流れ着いて、持ち主を探すことをやっていた。

鵜住居神社の祭りを復活させたいという意見も強くなっていたが、「そんな気持ちになれない」という人もいたし、自分もそうだった。それでも仮設から外に出たくないといっていた人が、祭りに出てみたら、顔つきが変わった。皆明るくなって、晴れ晴れとしていた。出るまではおっくうだったが、終わる頃には皆楽しくなった。これは秋祭りだった。この頃は自殺者がどれくらい出るのか想像していたが、これで冬を越せると思った。終わり頃には皆が顔を出すので、お互いの顔を見て元気になった。皆で共同で何かをすると元気がもらえる。マツリゴトは人を元気にすると実感した。

二戸では般若心経で神楽を踊っているのを見て、これが正しいと思った。岩手らしい神楽の元祖だと思った。目に見えないすべてのものに捧げるものが神楽だと思った。

そういう思いが神楽の形を取って、宝来館主催ではなく、地元のお母さんたちが郷土料理を振る舞うというようにしたかった。それで地元の人と旅の人を楽しませるため、宝来館と地元のお母さんたちの共同主催の神楽宿とした。

4　被災地代表としての黒森神楽

東日本大震災後の黒森神楽の活動状況には目を見張るものがあった。この年の秋から数年間に限ってだが、黒森神楽は全国各地から招かれて活動することが多くなったのだ。以下ではその様子を時間軸に沿って述べてみよう。

平成23（2011）年

震災の年の7月3日に平泉中尊寺（世界遺産登録・東日本大震災復

興祈祷）に招かれて、舞った榊葉と権現舞が、震災後黒森神楽が外部に出演した最初となった。

8月7日（日）に「第50回北上・みちのく芸能まつり」に出演した。主催は北上・みちのく芸能まつり実行委員会で、場所は北上市諏訪神社境内、神楽公演の一環として恵比寿舞を舞った。

9月25日（日）には「第27回前沢牛まつり」に出演した。主催は前沢牛まつり実行委員会事務局で、この祭りの主旨は「東日本大震災で被害に遭った中、がんばって活動を続けている沿岸地域の郷土芸能団体及び地元厄年連の皆様によるステージイベント」というもので、前沢いきいきスポーツランド特設ステージで恵比寿舞を披露した。

9月24日（土）と25日（日）には「平泉世界文化遺産登録記念&東北復興祈願「平泉福興祭」浄土の風2011」というイベントがあった。主催は世界文化遺産登録記念実行委員会で、主旨は「震災で被災された方々へ想いをよせ、東北の元気を発信・応援する」というものだ。場所は中尊寺の観自在王院跡特設ステージで、出演団体は盛岡さんさ踊り、釜石虎舞、姫神・記念楽曲「平泉賛歌」ジョイントコンサートと並び、郷土芸能という位置づけで黒森神楽が出演した。

写真３　ロシア公演黒森神楽リーフレットより

9月29日（木）から10月5日（水）まではロシア公演があった。主催は国際交流基金海外公演事業で、東日本大震災の際にロシア非常事態省が160人規模の支援チームを日本に派遣しており、義援金や支援物資などを送ってくれたことに対して、ロシア政府とロシア国民に感謝の意を表するという主旨だった。日本国大使館としても今回の事業を重視している事を表すためにこの海外公演が組まれたという。神楽を行ったのは、ロシアの首都のモスクワで、9月30日（金）には記者会見も設定された。

写真４　東アジア共生会議 2011 での「墓獅子」

10月2日（日）にはモスクワのゼレノグラード文化宮殿にて600名の観客が見守る中で、清祓、三番叟、山の神舞、恵比寿舞を披露した。

10月3日（月）にはモスクワのスタニスラフスキー記念演劇場で400名の観客が来場し、在ロシア日本大使夫妻を迎えて、権現舞、清祓、榊葉、山の神舞、恵比寿舞を披露した。このときはアンコールの拍手が止まず、急遽短い舞を披露した。終了後のレセプションにはロシア非常事態省の代表や日本支援チームが招待されていた。

12月13日（火）と14日（水）には文化芸術振興基本法制定10周年を記念して「東アジア共生会議2011」が開催された。主催は文化庁とNHKで、総合議長には元文化庁長官青木保氏が選ばれていた。この会議の主旨は「東アジア諸国の文化人、芸術家、文化に関する様々な分野の学識経験者が一堂に会し、東アジア各国が共生する未来に向けた理念を作り出すことを目的とし、東アジア諸国の文化芸術関係者同士のネットワーク強化を図り、世界全体の共生にも貢献する東アジアからのメッセージを世界に向けて発信する」というもので、場所は東京イイノホールだった。

初日の12月13日（火）には「民俗芸能公演―祈り―東アジア芸能の現在」というテーマが設定された。この会議の意図は「未曾有の災害となった東日本大震

災が発生した。『東アジア共生会議』の開催に当たり、東アジアの人々が、豊かな恵みをもたらしてくれる一方で、時には猛威を振るう自然をどのように心にとらえ、あらわしてきたのかを民俗芸能を通じて探る」というもので、以下のようなアジア各地から招かれた芸能の公演があった。

始めに黒森神楽がオープニング公演として、通り拍子で客席から登場し、舞台上では鎮魂の意味を込めて「墓獅子」を演じた。これは神楽念仏とも言い、死者の霊を慰め、供養する意味があり、次に「権現舞」を披露した。続いては中国四川省アバ州からのチベット族・チャン族の民族伝統舞踊があった。そして韓国ソウル市からは鳳山仮面劇、インドネシアバリ島の仮面劇がそれぞれ演じられた。

翌12月14日（水）には「東アジアの共生を実現させるために」というテーマでフォーラムが催された。内容はセッション1「災害と文化」、セッション2「東アジア意識の現在と共生の課題」というものだった。

写真5　黒森神楽フランス公演における「松迎」

平成24（2012）年

3月7日（水）から14日（水）まで「東北民俗芸能と鬼太鼓座＆Musicians 米仏巡回公演」があった。主催は国際交流基金で、その主旨は鎮魂の巡礼計画の一環として、東日本大震災からの復興と支援感謝の意味と、その枠組みを超え、世界各地の多くの被災者を視野に入れた世界規模での交流と連帯、地域との共生を目指すメッセージとして行い、アメリカ、フランス、中国を巡礼する鎮魂と交流のツアーを企画というものだった。黒森神楽はフランスでの2公演を担当した。まず3月10日（土）にはパリ市内のイベント会場（660席）パレ・デ・コングレで神楽公演があった。当日は並んだ観客を断るほどの盛り上がりをみせた。

翌3月11日（日）にはパリ郊外のリセ・サンジェルマン・アン・レイ・インターナショナル・スクールの300席ある食堂での公演だった。山の神舞では手拍子が起き、恵比寿舞では子供たちが積極的にステージに上がってきて盛り上がった。最後の身固めでも子供たちが集まってきて盛り上がりの中で交流ができた。

写真6　国立劇場 2012 シットギ獅子①

写真7　国立劇場 2012 シットギ獅子②

6月23日（土）には東京国立劇場小劇場で神楽を披露した。独立行政法人日本芸術文化振興会の主催による「東日本大震災復興支援　東北の芸能Ⅰ　岩手―伝承の技、つながる心―」と題した公演だった。東日本大震災復興支援という主旨で、第1部では釜石市鵜住居虎舞、大船渡市板用肩怒剣舞、遠野市青笹しし踊り、黒森神楽シットギ獅子がそれぞれ演じられた。第2

部は黒森神楽の単独公演で、打ち鳴らし、清祓、榊葉、松迎、山の神舞、恵比寿舞、節分を舞った。

7月7日（土）には浄土ヶ浜　鎮魂の祈り実行委員会主催による「浄土ヶ浜　鎮魂の祈り」と称する催しがあった。この主旨は平泉毛越寺の発案により、3・11で亡くなられた方々の鎮魂と被災された方々の一日も早い心身の回復と長寿を願い、「鎮魂の祈り」を捧げる、というもので、宮古市浄土ヶ浜の特設ステージで行われた。内容は岩手県知事や宮古市長の挨拶、山口太鼓、夢灯り点灯式に続いて、黒森神楽の恵比寿舞、毛越寺の延年の舞の老女と若女祢宜の上演があった。

7月21日（土）は宮古市浄土ヶ浜のレストハウス落成式で、恵比寿舞を舞った。

8月5日（日）は「八幡平市子供芸能フェスティバル」に招かれ、八幡平市浅沢神楽伝承館にて山の神舞を上演した。

8月5日（日）は「北上みちのく芸能まつり」に招待され、北上市諏訪神社神楽公演で恵比寿舞を演じた。

8月16日（木）は「第39回鳥海獅子祭り」に招待され、秋田県由利本荘市鳥海健康広場特設ステージにて黒森神楽が特別出演して、山の神舞と恵比寿舞を披露した。

8月26日（日）は「みやこ郷土芸能祭」で、宮古市津軽石小学校体育館にて恵比寿舞、身固めを行った。

9月9日（日）は宮古市にある思惟の会の主催による「宮古の文化財を考える―そのⅡ」という催しが山口公民館であった。小成千賀子氏による摂待壮一氏、佐伯裕則氏など「黒森神楽を支えた人びと」についてのお話と、黒森神楽が上演された。

9月12日（水）は「宮古市郷土芸能鑑賞会」で、県立宮古北高校にて神楽を3曲披露した。

10月13日（土）は宮古市赤前保育園落成祝賀会に招かれ、浄土ヶ浜パークホテルにて恵比寿舞を披露した。

同日の10月13日（土）は「三陸の宝・宮古の1000年の誇りを知るエコウオーク　海と山と人々と神をつなぐ―黒森神楽と黒森神社、山口集落を歩く―」という催しがあった。主催はNPO法人日本エコツーリズム協会と宮古エコツーリズムプロジェクトで、「地域の宝（地域資源）探しから復興へ」と称し、将来的な経済波及効果と共に、宮古をはじめ三陸沿岸のコミュニティの精神的支柱である黒森神社をツアーの題材として取り上げることで、住民と来訪者がエコツアーを介してつながる場を作ることを目的とするという主旨の元で開催された。その内容は、午前中は黒森神社の氏子の方々とツアー参加者が信仰の拠点である黒森神社まで一緒に歩くエコウオークがあった。午後は宮古市山口公民館多目的ホールにて神田より子の講演「黒森神社と黒森神楽―芸能が照らすもの―」の後、黒森神楽の上演があった。

10月25日（木）から11月6日（火）までアメリカ公演があった。これは当初、アメリカのJapan Societyによる寄付金が集まっており、そのお金で行く計画だった。しかし神楽招聘に寄付金を使うことができず、文化庁の助成金とNPOの助成金を使って行った。アメリカ公演はNPOの魁文舎が窓口になり、補助金の受け皿を作り、日米で助成金を取って渡米した。しかしハリケーンが来て、公演数が減り、ニューヨークの公演が1回なくなった。

写真8　黒森神楽アメリカ公演フィラデルフィアでの身固め

この黒森神楽アメリカ公演の主催は「黒森神楽アメリカ公演実行委員会」という名称で、文化庁文化交流使としての助成を受けたものだ。その主旨は「震災に遭った東北を代表し、困難な中にも復興にがんばっている元気な日本人の姿を、民俗芸

能を通して広くアピールすると共に、たくさんの支援を寄せて頂いたアメリカの皆さんへの感謝を込めたお礼の巡行」でもあるという。

10月27日（土）の第1回公演はニューヨークのジャパンソサエティで行われ、権現舞、打ち鳴らし、榊葉、恵比寿舞、松迎を上演し、終了後は交流会があった。翌10月28日（日）にはジャパンソサエティで、子供向けワークショップを行った。黒森神楽の説明に続き、恵比寿舞とシットギ獅子を披露し、その後舞の体験や身固めを行った。その後同地にて第2回目の公演があり、権現舞、打ち鳴らし、榊葉、恵比寿舞、松迎を演じた。10月29日（月）に予定されていたニューヨーク芸術高校でのワークショップと第3回公演はハリケーン・サンディにより中止となった。この日はニューヨーク日本大使公邸での夕食会が予定されていたが、同様に中止となった。また10月30日（火）に予定されていたニューヨーク市内観光はハリケーンによりこれも中止となった。そして10月31日（水）にはコネチカット州ミドルタウンのケイグイン中学校でワークショップを行った。シットギ獅子を演じ、神楽の説明の後に舞の体験をしてもらい恵比寿舞を披露した。11月1日（木）は同州ウエスリアン大学舞台芸術センターにおいて第3回公演があった。このときは打ち鳴らし、榊葉、恵比寿舞、山の神舞、身固めを行った。11月2日（金）はニュージャージー州フィラデルフィア美術館において第4回公演で、打ち鳴らし、榊葉、恵比寿舞、山の神舞、身固めを演じた。11月3日（土）はメリーランド州ボルティモアのタウソン大学スティーブンホールシアターにおいて第5回公演が行われ、打ち鳴らし、榊葉、恵比寿舞、山の神舞、身固めだった。

こうして12月2日（日）には宮古市山口公民館にて24年度の舞納めとなった。

平成25（2013）年

2月11日（月）は「大槌町郷土芸能祭」が大槌城山体育館で行われた。これは大槌町郷土芸能連合会所属団体との共演で、恵比寿舞を演じた。

8月11日（日）は第3回「三陸海の盆」があった。主催は第3回「三陸海の盆」実行委員会で、場所は大船渡市大船渡町特設会場だった。この会の主旨は、「東日本大震災により、犠牲になられた人々を永遠に供養し、震災地と支援地が「想い」を共有するため、また、三陸、岩手、地域が一体となって被災者によりそうために開催し、今年も大震災の悲劇が風化することを防ぎ、各地の復興を願い、大船渡市で開催する」というものだった。実施内容はだ第1部が合同大祭で、大船渡市内郷土芸能、宮古市黒森神楽、県内の芸能、お経と続いた。そして第2部が支援地祭と称して、キャンドルナイト、手つなぎ等があった。なお、この催しには2011年の大槌での開催から2015年の今回のこの大船渡での催しまで連続出演している。

8月31日（土）には東京の羽田空港江戸舞台で「いわて三陸～宮古三陸の美と恵み展」という催しがあった。羽田空港観光プロモーションが主催で、主旨は、「世界に開かれた日本のゲートウエイである羽田空港国際線ターミナルにおいて、宮古市の自然や伝統芸能を兼ね合わせながら、復興に取り組む宮古の魅力を紹介するイベントを開催し、世界に向けて日本の自然・環境・食を含めた美しい文化をアピールする」というものだった。ここではオープニングセレモニーに続き黒森神楽による恵比寿舞が披露された。

9月28日(土)、29日(日)には「いわて三陸鎮魂復興祭―三陸でむすぶ、にっぽんのこころ―」という催しがあった。主催は宮古市で、幸せいずる国いわて実行委員会が後援となり、宮古市奥浄土浜に特設会場を設けた。28日は第1部「響け、三陸の魂」で、宮古市山口太鼓、岩泉町中野七頭舞、京都醍醐寺の僧侶による声明と共に黒森神楽も舞を披露した。また、にっぽんの心を歌うコンサートとして、錦織健や島谷ひとみ等が出演した。翌29日（日）は第2部「舞え、にっぽんの心」で、三陸の祭りと芸能として、田野畑村菅窪鹿踊り、宮古市津軽石さんさ踊りなどが出演したほか、中村勘九郎と七之助による歌舞伎舞踊が演じられた。

10月11日（金）から14日（月）まで宮城県松島において「ルツエルン・フェスティバル・アーク・ノヴァ松島2013」が行われた。主催はアー

クノヴァ実行委員会ルツエルン・フェスティバル財団で、その主旨は、東日本大震災の被災地に、音楽を通して希望を届けることを目的に「ルツエルン・フェスティバル・アーク・ノヴァ　プロジェクト」を立ち上げ、その第1弾を宮城県松島町で開催するというものだった。世界的な建築家の磯崎新とインド出身のイギリス人彫刻家アニッシュ・カープーアによる500名収容の可動式コンサートホールが松島に出現し、「アーク・ノヴァ・ホール」と呼ばれるこのホールと周辺地域で様々なプログラムが開催された。内容は現代世界最高の指揮者クラウディオ・アバドとルツエルン祝祭管弦楽団の演奏。坂本龍一とグスタボ・デュダメルによる東北ユースオーケストラの演奏と東北の子供たちの演奏会。東北伝統芸能として黒森神楽の上演。上方芸能からは坂田藤十郎の歌舞伎舞踊、茂山千五郎の狂言、金剛永謹の能の共演があった。

11月2日（土）から4日（月）は「第62回式年遷宮奉祝伊勢外宮・内宮正式参拝と黒森神楽奉納・応援の旅」があり、岩手県北観光宮古支店が主催し、黒森神社が後援という形で行われた。

11月21日（木）は岩手県知的障害児者生活サポート協会主催による東北ブロック会議懇親会において恵比寿舞を披露した。場所は宮古市浄土ヶ浜パークホテルだった。

11月24日（日）には宮古市江繋地区の収穫感謝祭で、江繋小学校の震災復興ステージにての神楽共演会に招かれた。

平成26（2014）年

2月9日（日）には「十和田市伝統芸能まつり」に招待された。主催は十和田市教育委員会で、十和田市民文化センター大ホールにて山の神舞と恵比寿舞を披露した。

3月16日（日）は「そして、つながる―文化・劇場が持つチカラ―」シリーズに招待された。主催は静岡県文化財団グランシップで、この催しの主旨は「東日本大震災から3年となる今、文化芸術や劇場が、地域の中でどのような役割や機能を担うのか改めて考える」というものだった。内容は「さくら能」と題して、観世流能楽師による能「二人静」と、黒森神楽の共演だった。桜の開花に明るい希望を見いだす日本人の心模様を表現してみようという試みで、幽玄の世界を表現する能楽に鎮魂の思いを込め、また被災地で江戸時代から伝わる黒森神楽から日本の伝統芸能が担ってきた役割を改めて感じてみようという公演だった。

この静岡公演を最後に外部出演の依頼がぱったりと減った。3年という年月が一つの区切りとみられたのだろうか。

5　日常を取り戻すために

田中大喜さんによると、平成24年度は、被災地での神楽念仏を奉仕して、夜神楽はやらず、昼神楽のみで帰ってくるという予定にして巡行をやった。全部で13地域を廻った。現地では神楽の一行が行くと、神様が来たのだから、少し休んでゆくように言われ、弁当と鮭汁を出してくれた。宿を取りに行って打ち合わせの際にも、味噌汁と漬け物だけで良いからと言っても、先方は神様を迎えるのだからそうはいかないという思いがある。

震災後の巡行では柱固めを依頼されることが多い。家が流された後、ようやく安住の棲家を再建できて、祓ってほしいという思いがあるのだろう。頼まれるのはほぼ新築の家で、改築の場合は頼まれることはない。家が完成しておらず建築中であっても、神楽が来たからと依頼される。重茂の石浜では必ず柱固めがあり、27年の南廻りでは3か所あった。権現様が変わらず来てくれるのがうれしいという。津波前の日常を取り戻すことができたという実感が沸くという。そういう声があるから、休まずにやってきた。

神楽念仏は頼まれて海に向かってやるということはない。自発的にやっている。27年の巡行には重茂の千鶏で久しぶりに呼んでもらったので、挨拶代わりに流れた家の跡で神楽念仏をやった。この家は元々神楽宿を長くやっていた家で、この宿には何回か泊まったことがあった。宿の主が亡くなったので、今年は千鶏の自治会が主催して千鶏小学校でやる。神楽念仏をやることは家族の人には言わないようにとお

願いしていたが、家の人には伝わっていたようで、生花などを用意して待っていてくれた。昨年の千鶏の5月の祭りに頼まれたので戸村と田川を連れて行った。

重茂の音部では山崎義広さん宅で春の巡行の際に柱固めをやった。義広さんの亡くなった父は元重茂漁協の組合長だった人だ。音部では5月の祭りにも頼まれて行った。このときは北上のお寺でも頼まれ、日程が重なってしまったので、二手に分かれて神楽をやった。北上のお寺は国見山如意輪寺という真言宗のお寺で、住職が3月に宮古の長根寺のお祭りで神楽をやっていたのを見て、頼まれた。念仏などはやらず普通の神楽をやった。

6　神楽が期待されたもの

黒森神楽は被災地代表として3年の間、海外も含めて各地から招聘され、活動をしてきた。「被災地も頑張っている」事を伝えようと、神楽衆も「呼ばれたら断らない」という態度とスタンスでこの期間を過ごしてきた。だからこの間も黒森神楽は巡行も休まなかった。

まずは東日本大震災後3年間限定という期間の中で、多方面からの招聘を受けてきたが、これには2つの方向性がある。イベントの主催者が宮古に来て、地元の黒森神楽がそこに出演するという場合と、主催者に招聘されて宮古から出かけてゆく場合である。そこでこの2つのベクトルから見てゆこう。宮古に来てイベントを開催した主催者の主旨は以下のようなものであった。

「震災で被災された方々に想いをよせ、東北の元気を応援・発信する」というもの。

「3・11で亡くなられた方々の鎮魂と被災された方々の1日も早い心身の回復と長寿を願い、「鎮魂の祈り」を捧げる」というもの。

「地域の宝（地域資源）探しから復興へ」と称して、神楽を地域の精神的な支柱と捉えた。宮古では未開催だが、多大な被害に遭った大槌や大船渡等の沿岸地域では「三陸風の盆」と称して、「犠牲者を供養し、被災地と支援地が「想い」を共有する」というもの。

「いわて三陸鎮魂復興祭」という催しもあった。

宮城県松島でも「東日本大震災の被災地に、音楽を通して希望を届ける」という主旨でのプロジェクトもあった。

黒森神楽が招かれて公演した例としては、

ロシアへは「義援金や支援物資を送ってくれたことに、感謝の意を表する」というもの。

東アジア共生会議では「東アジアの人々が、豊かな恵みをもたらしてくれる一方で、時には猛威を振るう自然をどのように心にとらえ、あらわしてきたのかを民俗芸能を通じて探る」というもの。

フランスへは「復興と支援感謝」の意味と「鎮魂と交流のツアー」。

国立劇場では「復興支援」として。

アメリカへは「被災地代表として元気な姿をアピールし、支援に感謝」するというもの。

静岡では「震災後、文化芸術がどのような役割や機能を担うのかを再考する」というもの。

ここからは内へ向かっては「鎮魂と復興」、外に対しては「支援に感謝」と「復興している」事のアピールが中心的な主旨として挙げられよう。

被災者代表としての黒森神楽が元気な姿を見せることで、被災地が復興してきている事を外部の人も内部の人も実感できるのだろう。黒森神楽には「墓獅子」や「神楽念仏」という死者供養や慰霊の意味を表現する儀礼があり、「鎮魂」と表現されることの多いイベントでは、適材適所だったのだ。

まとめにかえて―今後の課題―

2016年3月11日には被災後5周年を迎えるが、まだまだ多くの方々が自宅に戻れずに仮設住宅で暮らしている。さらに被災地の方々が元あった土地に家を建てることを許可されない、あるいは津波のあった土地へ帰ることを望まないなどの理由で、ますます過疎化に拍車がかかるかもしれないという現状がある。そして神楽宿も世代交代などにより、宿の継承が可能かは難しい状況にある。神楽宿としての伝統

を自覚している家ではそれがまだ伝えられている場合もあるが、これはそれほど多くはない。それでは黒森神楽の今後の見通しは暗いのだろうか。

前述の釜石市鵜住居の宝来館のように、元気な女将さんがいて、南廻りの廻村を楽しみにしてくれている地域がある。また古い神楽宿の御当主が亡くなられたことをきっかけに、地域を挙げて分宿などで神楽宿を営み、地域を盛り上げてゆこうという機運もある。宮古市の中心街である末広町では町中でも神楽や門打ちをやるようになり、若い人たちが神楽に興味を持つようになった。本来の北廻り、南廻りの巡行地には入っていないが、神楽好きの人たちが神楽を招いて行うなどの新しい形体の神楽宿ができつつある。それが遠野と盛岡だ。この両地域は最近になって巡行地として加わった。さらに北上にも２０１５年にはじめて招かれ、この地も巡行地の仲間入りをしそうである。これらは個人が宿主になって神楽を招くというよりも、団体や地域全体が黒森神楽に来てほしいとの希望で実現したものだ。

それでは彼らは黒森神楽に何を期待しているのだろうか。伝統と新しい波の両方から見てみたい。

伝統的には地域の方々が抱いている権現様への態度として見て取れる。神楽の一行が行くと、「神様が来たのだから、少し休んでゆくように」とか、「神様を迎えるのだからという思い」がある。また震災後に新築した家の柱固めを依頼されることが多い。これは「ようやく終の棲家ができて、祓ってほしいという思いがある」からだ。家が完成していなくても「神楽が来たから」と依頼される。その理由として「権現様が変わらず来てくれるのがうれしい」「津波前の日常を取り戻すことができたという実感が沸く」という。「震災前と同じようにできるのがうれしい。神楽が元通りにできれば、自分たちの生活も元通りになる」との声もあった。

また神楽衆は巡行に行った先の被災地で、海に向かって、権現様を携えて神楽念仏を行ってきた。これらは頼まれてやることはなく、手弁当で自発的にやっている。27年の巡行で訪れた宮古市重茂の千鶏でも、久しぶりだったので、流れた家の跡で神楽念仏をやったところ、花を用意してくれたという。

こうした声に応えて神楽衆は巡行を休まずにやってきた。大きな混乱が生じ、とんでもない非日常の事態に襲われ、家族も家も土地も失った今回の震災に立ち向かうに当たり、望むことはただ一つだった。それは「いつも通りの生活を取り戻す」事だ。震災後に毎日大変な思いをして生活の再建に取り組んできた。そうした中で2年に1回来てくれる権現様を迎えて、お祓いをしてもらい、権現様に噛んでもらい、皆で笑っておもてなしができる。日常を取り戻したと実感できるのは、「神様」と見なしてきた権現様と共に来てくれた神楽衆を、家族も地域の人も皆がそろって受け入れることができたからだったのではないだろうか。そしてまた日常生活が戻ってきたからこそ、神楽を迎えるための準備にも時間と労力を費やすことに喜びを見いだし、そうした事柄が実感として沸いてくるのだろう。

盛岡や遠野が新たな巡行地と神楽衆が認識するに至った新しい波についても考えてみよう。この波は東日本大震災以前から現れていた。きっかけは２００６年に国の重要無形民俗文化財に指定されたことだと考えられる。マスコミからの注目度が増え、外部公演が増えた。２０１５年3月11日に放送された《ケーブルテレビ11chとおのタイム》によれば、3月7日に黒森神楽が遠野八幡宮で舞を披露したが、巡行で遠野市を訪れるのは4回目だという。国の重要無形民俗文化財指定後にこうした動きが起きている。

そして最も重要な事柄は、若い舞い手の加入である。震災時には2人だけだった若手も今では20代後半になり、中心的な役割を担っている。田中さんに代わってワケーモンガシラの立場を継いでゆくことになるのだろう。今注目を集めているのは２０１６年3月まで高校生だった4人だ。彼らは小さい頃から神楽に親しんでおり、地元の民俗芸能に係わっていた。黒森神楽衆は神楽が巡行して歩く範囲の民俗芸能には手伝いに出向いたり、その出身だったりとつながりが深い。すなわちこの地方の民俗芸能の集大成が黒森神楽とも言えるし、この地方は

黒森神楽文化圏とも言えるのだ。だから少しでも民俗芸能に係わっている者であれば、もっと上手で注目を集めている神楽に係わることを希望するし、神楽はこうした若者の受け皿にもなっている。遠方から見学に訪れる者が、その演じる姿を「キレッキレ」と表現していた。演じる機会が増えれば増えるほど、その技がさえるため、さらに注目度が上がるという好循環が、今できている。時代と共に宿のあり方も変わるであろうし、実際に変化している。そこをどのように生き延びてゆくのか、地域の宝の行方を見守ってゆきたい。

【引用文献】

神田より子『陸中沿岸地方の廻り神楽報告書』１９９９年　宮古市

第2部　各分野での震災後の取り組み
第14章　震災と暮らしの移りかわり

久保田滋子

はじめに

宮古の漁業は多くの職人によって支えられてきた。船大工、櫓大工、網大工、鍛冶屋、イカ角職人、桶職人、鋸刃職人、染色などさまざまな職種があったが、その多くは震災前に姿を消し、まだ現役で仕事をしている職人も高齢で後継者がなく、自分の代で最後という人が多い。木からプラスチックへ、櫓からスラスターへ、鋸からチェーンソーへ、手作業から大量生産へという時代の流れは、職人の手仕事を隅に追いやり、たとえ震災がなくても、それらは安価ですぐ手に入る工業製品に、いずれ置き換わる運命にあったといえるだろう。震災の日、津波でさらわれた海辺を見て、自分の仕事もこれで終わったと思った職人もいる。しかし、震災は皮肉にも彼らに再び多くの仕事をもたらした。波にさらわれた櫂を新調し、船を修理し、新造船がやってくると内装が必要になり、進水式にはフライ旗を掲げる。2年ほどの短期間であったが、職人は宮古の海の復興の一端を担った。そしてそれが最後の仕事になった人もいる。

人の歴史は町の歴史でもある。本章では、震災の日とその後のことだけではなく、職人のライフヒストリーを追う中で、宮古の移り変わりと、その町で「最後の職人」として生きてきた人々が、どのように震災と向き合ったかを記述する。

1　染物職人　加賀屋

山本　清さん　昭和11（1936）年生
山本カヨさん　昭和21（1946）年生
宮古市本町

加賀屋染店

先祖は加賀の国のお姫様が南部家にお輿入れしたときに一緒にやってきた染物師だと聞いている。加賀屋という屋号はそれに由来する。本家は盛岡にあり、明治28年に分家して宮古へやってきた。本家は間口6間の大店で、税金を間口で計算した時代もあり、通りに面した大きな店は一族の自慢だった。清さんは4代目になるが、血筋としては3代目である。本家は鈴木姓だが、宮古で土地を購入したときに、地主の山本家の養子になった。しかし屋号と家紋は盛岡の本家のものを使用している。最初の頃は着物も染めていた。反物を預かるので、火事にあっても被害を出さないように土蔵を作った。明治27年に宮古で大火があったが、そのときはまだ宮古に来ていなかったので助かった。現在住んでいる家は明治時代に建てたもので、土蔵は震災前から崩れ始めている。

清さんは11人兄弟の男の末っ子として生まれ、2人の兄と一緒に18歳から家業を手伝い始めた。父はすばらしい字を書いたが、酒が好きで気ままな生活をしたため、母が着物の紋を描いて生活を支えていた。祖父の時代は、祝い半纏や長半纏をよく作っていた。北海道から船が着くと注文が入り、出船までに染め上げる。ろうそくの光を頼りに、徹夜で仕事をしたと聞く。加賀屋では黒森神楽の神楽幕も作っていた。昔は天竺という生地を使い、染め上がりが今よりずっと渋かった。黒森神楽が国の重要無形文化財に指定されたときに作ったものが最後になった。昭和のおわりごろまでは兄弟でやっていたが、そのころから仕事が減り、注文がこないときは1か月に1つ2つだけということもあった。生活できなくなり、兄たちは仕事をやめて清さん1人で店をやることになった。サケのはえ縄でにぎわったころは、フライ旗

写真1　染物職人　山本　清さん
自宅の旧作業場　2015/10/10　撮影：久保田滋子

を寝ないで作ったほど忙しかったのに、それが終わるとばったり仕事がなくなった。

震災前はイベント関連の仕事があったので、けっこう忙しかった。客船「飛鳥」が宮古へやってきたときには、1枚3万円ほどの大きな歓迎幕を1週間がかりで作った。また、姉妹都市である沖縄の多良間村との間で「善宝丸漂着150周年記念」のイベントを行ったときの旗も作った。フライ旗は3日かかるが小さいもので1枚1万円にしかならない。いま、フライ旗は機械染色が主になったが、加賀屋ではすべて手作業だ。注文を受けてから生地を湯通しして、下絵を描いて糊付けし、それから染色して水洗いする。内陸にも染物屋はあるが、お客さんは潮の香りがしないと言う。加賀屋の技術は高いが、これでは趣味の世界で、生活するための仕事ではない。値上げも考えていたが、ちょうど震災が来て、とても言い出せなくなってしまった。

被災とその後

地震が起きたときは横断幕の染色をしていた。途中でやめると色が合わなくなるので普通は続けるが、揺れ方がただごとではないと感じ手を止めた。しかし、堤防を超えるような津波が来るとは思わず、「札束を持って逃げようか」と夫婦で冗談を言っていた。防災無線で大津波警報が流れた。中学生のときチリ津波があり、話には聞いていたが、すぐにはピンとこなかった。同級生が、「蛸の浜を越えたらしい」「鍬ヶ崎が大変なことになっている」と言っていた。夕方になって、鍬ヶ崎はだめだと聞き、人がたくさん歩いてきて、これは大変なことになったと思った。津波の被害の大きさを知ったのは、電気が通ってテレビをつけたときだった。その画面を見ながら、「お父さん、うちの仕事は終わったね」「もう大漁旗という気持ちにはなれないね」と話した。でももう年をとっているし、仕方がないという気持ちにもなった。それから数か月は、やり残した学校関係の仕事や、のれんの依頼があったほか、まったく注文がなかった。

震災の年の12月ごろ、釜石や大槌、大船渡の方から少しずつ注文が入るようになった。盛岡の人が釜石にいる兄弟に送るという旗を2枚作った。赤い鶴亀の柄だった。あるときテレビを見ていたら、釜石で行われた進水式の映像が流れ、そこに加賀屋で染めたフライ旗がはためいていた。それを見た瞬間「あ、お父さんのフライ旗だ」と思わず叫び、2人で涙を流した。翌年には、田野畑の復興支援グループが地元の新造船の進水のために、フライ旗の支援を全国に呼びかけたところ、多くの義援金が集まり、それをもとに7枚の旗を染めた。朝日、末広、鯛、鮭、宝船など定番の柄のほかに、「第十八みさご丸」という船だったので、1枚は旗の中心にみさごを描いた。それぞれの旗には、送り主として「全国友人一同」の名が入り、まさに復興のしるしとなった。その旗の写真を加賀屋の名とともにネットにアップしてくれた。

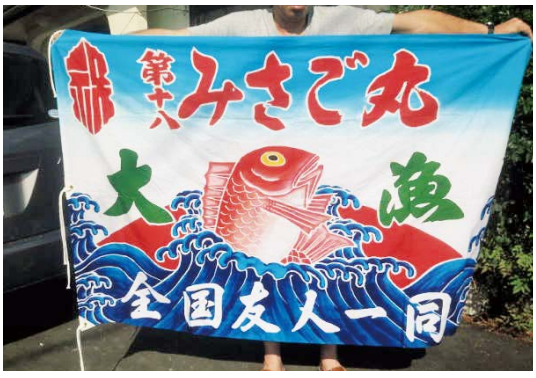


写真2　田野畑で新造された「第十八みさご丸」のフライ旗
「山と土と樹を好きな漁師　佐々木公哉のブログ」より

新造船が増えるとともに注文が殺到し、さばききれなくなってきた。大船渡に3軒あった染物屋のうち1軒が被害を受けたので、その分の仕事が宮古へ回ってきたのだろう。帳面にはあっという間に100枚くらいの予約がたまっていった。注文は北海道や千葉からも来た。1番小さいもので90×130センチメートル。生地は愛知県から、染料は東京や京都から取り寄せる。震災前には黒い染料が簡単に手に入ったが、今はあまり手に入らない。宮古の人からの注文はほかに比べて遅かった。いただいた順に仕事をするので、なかなか地元の人に順番が回ってこなかった。重茂漁協では待ちきれずに北海道の染物屋に頼んだ人もいたらしいが、北海道では機械印刷なので重厚感もなく、柄も慣れ親しんだ加賀屋のものと違い寂しいという話を聞いた。しかも値段は加賀

屋の倍もする。震災の補助金の申請期限が迫ると、さらに注文が殺到した。断った人は数知れずという状況だった。

昔のフライ旗は色無地に文字だけだったが、今はさまざまな柄が入るので手間がかかる。1番人気があるのは鯛で2番目が朝日だが、宮古の魚の鮭も好まれる。これには災難を避ける、鮭は戻ってくるという縁起もある。赤い色は必ず入れる。魔よけの色であり、祝いの色でもあるからだ。しかし、最近の若い人は昔からの柄にこだわりがなく、また赤は赤字につながるといって入れない人もいる。北海道からオジロワシのフライ旗を頼まれたこともある。フライ旗のほかには、船名旗、印旗(ダシ)も作る。日の丸の下に船名旗、その下にダシを並べ、進水式のときに掲げる。これは縁起をかついで洗わないのだそうだ。宮古では震災前に大きな船の旗を頼まれていたが、震災後に作って渡した。

写真3　神社の幟

写真4　田老やませの丘

新造船のフライ旗のほかには、2013年9月17日に宮古港に入港した日本丸歓迎の旗、本州最東端の宮古市から最西端の下関市へ贈った復興支援感謝の旗などを手掛けた。そのほかには、紅梅食堂、よしの寿司、あんばいやなど、被災した商店ののれんを作った。このときは商売のことを考えず、痛み分けをしようということで、すべて半額にした。のれんを依頼しにくるお客さんの中には、店先で1時間でも2時間でも話し込む人もいた。「津波を見に行ったあのバカが」と言いながら、亡くなった兄弟を悼むこともあった。また、学校の運動会で使う応援旗や卒業するとき父母会が学校へ贈る横断幕なども頼まれたが、忙しくてなかなか全部に手が回らなかった。津波の被害に合わなかった神社の幟も、この際新しくということで依頼があった。2014年の春、5月過ぎごろ、田老のやませの丘が加賀屋のフライ旗を展示してくれた。普通はお金を払って宣伝するものなのに、ずっと飾ってくれたので、鮭を描いたフライ旗を1枚お礼に持っていった。

震災の前から年齢による衰えを感じていた。家族から見ると、同じ旗でも今までと全く違う。力が感じられない。特に80歳が近づくと、1年に3~4歳も年をとっていくようだった。しかし、震災で急に忙しくなり、何とか仕事をこなしてきた。2013年の春ごろ、そろそろやめようかと思い始めた。お客さんががっかりする前にやめたほうがいい、そんな思いだった。2014年の夏、磯鶏の神社の祭り用の幟を頼まれ、お盆前に仕上げ9月に引き渡した。これが最後の仕事になった。引き渡したときは加賀屋創業120年、清さんが仕事をはじめて60年の節目だった。後継ぎはいない。沿岸の染物屋の多くは店を閉じた。絵が上手だった島田染物屋、書道の大家だった上林染物屋、みな年を取ってやめた。1軒残った加賀屋もついに店を閉めることになった。

閉店した加賀屋の居間には、妻のカヨさんがNHK盛岡放送局の「ひるっこ川柳」に応募して当選したときの句が飾ってある。「船出する祈りの色の大漁旗」。父が漁師だったカヨさんは、船出する漁師たちが無事に帰ってくるようにという思いをいつも持っている。加賀屋が作ってきたフライ旗には、無事の帰りを願う職人とその家族の祈りが込められている。

（取材日：2012年11月5日、2015年10月10日）

2　船大工　復幸造船所

前川幸次さん　昭和22（1947）年生　宮古市中ノ浜地区

宮古最後の船大工

前川家は箱石から女遊戸へやってきたが、台風で家を流されて中の浜に移転した。父で19代目、兄で20代目になる。子供のころ、中の浜には3軒しかなく、前川家が一番高台にあったため「かみ」という屋号で呼ばれていた。

昭和38年3月、中学を卒業するとすぐに集団就職で、東京都足立区西原町にある革靴の靴底製作専門の中野製作所へ入った。しかし、靴底だけの職人は一生の仕事ではないと思い、その年の12月には宮古に戻ってきた。父は中の浜でアワビやウニ漁をする傍ら、田畑も持つ半農半漁の漁師だった。父は次男である幸次さんに、手に職をつけさせたいと思い、船大工になることを勧めた。昭和39年3月、16歳で北村造船（宮古市日立浜町）に入社。3歳年上の先輩がいたが、幸次さんのあとに船大工として入社した人はいなかった。同世代で船大工になった人は、北村造船以外で何人かいる。見習いは、39トン、47トンのはえ縄船から始める。サッパ船を作る場合は15人工といって15人分の手間賃が基本だった。1人の職人で作れば15日で仕上げるということで、船大工組合の取り決めによって、これ以上の日数がかかっても15日分の支払いしかなかった。15日で作れるようになるまで10年はかかる。一人前になるまでは製材所から木を運ぶ手伝いなどもした。木造サッパ船を作るには、製材所で山の木を見る人、木を切り出す人、舟釘の鍛冶屋、鋸刃など様々な職人がかかわった。完成したサッパ船には「おふなだまさま」を入れないが、2～3トンのトバタ船より大きくなると、夜中の丑三つ時に発注者と棟梁が「おふなだまさま」を入れる儀式を行った。

北村造船に入社したころはサンマ船が何百隻も入ってきた。宮古は、入港して何日か滞在して出ていく中継基地だった。8月末から9月にかけて、何百隻もの船がテープをはためかせて出航する様は圧巻だった。花街の女性がテープを握って見送った。中の浜の山の上からその光景を見ていた。マス縄、はえ縄の出航もにぎわったがサンマ船ほどではなかった。当時、鍬ヶ崎の人の半分くらいは船に乗っていた。女遊戸の人も船に乗り、シーズンオフのときにウニやアワビをとっていた。昭和30年代の終わりから40年代にかけて、漁師になった同級生は、中卒のコックでもマス縄の一航海2か月で約20万円稼いだが、船大工の新入社員の給料は1か月1万2千円だった。そのころ、北洋のマグロ船に乗ると1年で300～500万円くらい稼げた。若い漁師は何年か船に乗り、その後良い会社に勤めた人もいる。昭和40年代の最盛期には47トンの木造船を1年に2隻作った。翌年3月下旬から4月上旬の出航に間に合わせるために、9月10月から20人で作りはじめ、進水してすぐにマス縄に出航していった。船を持っている人を旦那様と呼んでいた。大久保さん、高田さん、五屋、関満、移手屋（現在は船具屋でモーター修理をしている）、白浜の中村さん、それから切り通しのあたりにも旦那様がいた。彼らは造船所のお得意さんで、漁から帰ると魚を持ってきてくれた。昭和45～46年のころには、100トンの鉄船を持っている人もいた。古い船は八戸でイカ釣

写真5　船大工　前川幸次さん
日出島漁港　2014/09/06　撮影：久保田滋子

写真6　宮古に残る最後の木造船
船主宅　2014/09/06　撮影：久保田滋子

り船になった。古い船は長い沖合航海には不向きだが、イカ釣りのように夕方出航して朝には戻る漁ならば大丈夫だということで八戸に売られた。たくさんの船が岸壁に船首を突っ込んでくるのですぐに壊れた。漁期が終わるとドックに揚げて壊れた船の修理をした。いよいよ廃船にするときは特に儀式などもなく、バラバラにしてその場で燃やした。

宮古ではマス縄がなくなってから造船業が不振になった。その後は北海道でタラの刺し網をする人もいた。マス縄がなくなり、船の材質が変わったことで船大工の出番がなくなった。昭和46年に北村造船を辞め、47年にかけて約1年半、修理のため八戸に住んだ。その後、中屋造船で稼いだがまた北村造船に戻り、50歳くらいまで勤めた。その間家大工もやった。木造船としては展勝地の平田船2艘を作ったのが最後で、それ以降は修理だけになった。漁船は30年以上作っていない。宮古では、昭和22～23年生まれが船大工を志した最後の世代である。中屋造船や宮古造船で幸次さんよりあとに弟子入りした人はいないので、宮古では最後の船大工になった。

被災とその後

地震が起こったとき豊間根の「ホームワンサトー」にいた。いつもの揺れとは全く違い、これはただごとではないと思った。車で家に帰る途中、「船を見にいかなくては」と思った。宮古大橋を渡るとき、防災無線で「60センチの津波」と言っていたが、橋を渡って国道にきたときには「6メートルの津波」と聞いた。消防の車が言っていたと思う。台風の高潮でも5㍍になることがあるので、6㍍ならたいしたことはない、船を繋ぎ直すくらいは大丈夫だと思い海岸に向かった。キャンプ場まで来たときに津波が見えた。その直後、あっという間に波が50㍍くらいまで間近に迫ってきて、方向転換する余裕はないと思いバックで200㍍くらい戻った。後ろに軽トラックがいて、もう逃げられないと思った瞬間、フロントガラスが割れて泥水が一気に流れ込みそのまま流された。「こんなことで死ねない」と一瞬思ったが、木に足が挟まれて、そのまま気を失った。

どのくらい気を失っていたのかわからないが、パッと明るくなったような感じがして人の気配がしたのを覚えている。消防十六分団の人が助けてくれたと後で聞いた。軽トラックの運転手は亡くなったそうだ。意識が戻ったときは病院のベッドの上だった。体は泥だらけで、紙おむつをつけられ、薄い布団1枚かけられて裸で寝かされていた。小さな点滴が2個ぶらさがっていて、とにかく寒かった。顔も背中も傷だらけだったが、骨折のような怪我はなく、意識が戻るとすぐに退院してくれと言われた。しかし木にはさまれた膝が痛くて歩けず、病院には2日間いた。2日目にやっと味噌汁とおかゆの食事が出た。退院して車で崎山小学校の避難所へ送ってもらった。歩いて浜を見に行くと、自分で作った船が波に引きちぎられ、舳先の1㍍だけが残っていた。自分の船はすぐに見わけがつく。避難所には母と姉がいた。90歳を過ぎた母は肺炎を起こし救急車で宮古病院へ運ばれた。その後はまた介護老人保健施設のほほえみの里でお世話になっていたが、2013年10月30日に93歳で亡くなった。

避難所には1か月いたが、そのときから早く船を修理してくれと言われていた。自宅は石垣のおかげで30～40㌢㍍くらい水につかっただけで大きな被害はなかった。道具類は無事だったので、避難所から戻ってすぐに仕事を再開した。まだ国から補助が出ることが決まらないうちは修理依頼がたくさんきた。4月20日ごろ、田老漁協樫内の船を直したのが最初の仕事になった。その後何十艘かの依頼がきたが、1艘の修理個所が多いのであまり多くは引き受けられなかった。田老漁協からは、こんなときだから1割5分増しで請求してくれと言われたが、反対にこんなときだから高く請求はできないと思い、普段通りの値段で消費税もとらなかった。樫内の仕事のあと、鍬ヶ崎などの船の修理をした。5月6月のウニの季節に間に合わせるための修理依頼が多かった。漁ができるかどうかはともかく、準備だけはしておきたいということだったと思う。船に穴があくなど、どれも大きな修理だった。自分の船は先の方1㍍を残して後方は波に引きちぎられ、使える状態で

はなかった。そのほかには、中古船を見つけて修理して売ってくれという依頼が多かった。この辺ではヤマハが乗りやすいと人気なので、ヤマハの船を見つけて客に見せ、修理個所を指摘してもらい、そこを直して渡した。

その後新しい船を購入するために国から9割の補助が出るという話を聞いた。新しいＦＲＰ（ガラス繊維の船）は普通５～60万円だが、出回ったものは船外機つきで１００万円くらいした。ヤマハが被災地向けに量産したらしい。津波前は木造の船に乗っている人も何人かいたが、これを機にほとんどＦＲＰにかえてしまった。値段は木造船の方が安いくらいだ。古い船が修理で乗れるくらいの破損で済んだ場合は、修理のほうが安かったので、購入しない人もいたが、木造船が10年くらいで木が腐ったり裂けたりするのに対し、ＦＲＰはぶつけなければ40年はもつので、当然ほとんどの人はそちらに移ってしまう。サッパ船の場合、ＦＲＰより木造船のほうが操業のときに扱いやすい。風が吹いたとき、ＦＲＰは軽くてサッと流れてしまうが木造船は流されにくい。大船渡で新しく木造船を作った人がいてニュースになったが、それ以外は聞いていない。ほとんどの船はＦＲＰになったが、新規に購入した場合は、板子（船底の木の板）、かんぬき、床、櫂づり、底のすべりの5か所を付け加えなければならない。それを木で作るので、船が出回ってからはその仕事で忙しかった。ＦＲＰの修理は船外機を売った山崎マリンに持ち込む人が増えた。

木造のサッパ船は崎山にあった４艘も含め、宮古には数艘しかなかったが、それもほとんど津波で流され、現在、田老から重茂の間で残っているものは日出島の漁師（山崎直人さん）の親子が所有する「山直丸」２艘だけになった。この２艘は浜に置かずに山に上げていたので無事だった。作った船大工は佐々木實（みよし）さんと、もう1艘は、大沢の佐々木さんか、あるいは畳田栄作さんであろう。船には平成６年に作られたという記号がある。木造船の持ち主の山崎さんは出稼ぎにも行っているようだ。現在はアワビとウニの漁だけで生活できる人は少ない。

被災後丸２年は修理やＦＲＰの内装の仕事で忙しかった。しかし、政府の補助で買った新しい船が行き渡ったので、これから10年くらいは修理依頼もあまり来ないだろう。震災前は、サケのメスの卵が出ないように腹に差し込む木の栓を作っていた。定置網を上げるとサケが暴れて卵が出てしまうので、それを防ぐための栓だ。船大工の仕事ではないが、弟から作ってみたらと言われてやるようになった。もう25年も作っている。1本5・5円で何十万本も作ってきた。しかし、震災の年は津波で孵化場が流され、サケの放流ができなかったので仕事がなく、この先も影響がでるかもしれない。船の修理だけで生活するのは難しい。震災の年の秋には、田老漁協からアワビをとるシナイの注文が２５０本ほどあった。つい最近は女遊戸の人に箱めがねを依頼されて作った。櫂も作る。ＦＲＰの修理も引き受けているが、ガラス繊維を吹きつけるのでそれが手にかかり、手荒れを治すために病院に通わなければならない。

平成24年秋ごろ、作業場を「復幸造船所」と命名した。復興の願いを込めて、自分の名前幸次の一字をその中に入れた。今は仲間５～６人と老人施設へ出向き歌をうたうボランティアを行っている。慰問の日が決まると曲を決めて練習する。三橋美智也、千昌夫、渥美二郎などが喜ばれる。当日は舞台衣装に着替え熱唱する。これも「復幸」の仕事の一つだ。

中の浜は半農半漁の漁師が7世帯と勤め人が3世帯の合計10世帯があったが、今（２０１４年９月５日）では5世帯12人になってしまった。兄は父の土地を継いで田畑をやりながらアワビ漁を行っていたが、30年前に亡くなった。弟は宝来丸で刺し網とタラのはえ縄をやっている。もう1人の弟は定置網の組合員としてイサダ（養殖魚の餌の小エビ）の船に乗っている。勤め人は皆出ていった。自治会は女遊戸に入って、5月3日の貴船神社の祭礼も一緒にやっている。お神輿と幟が流されたが、加賀屋が最後の仕事のひとつとして新しい幟を作った。中ノ浜には明治29年に建てられた無縁仏の墓がある。塩の窯を作った時に出て来た人骨を葬ったのだと言われている。中ノ浜にまだ3軒しか家がなかったころは、1年に3回、お彼岸とお盆のときに皆で拝んでいた。

ここ40年くらいは1人で拝んでいる。墓の近くの杉の大木は流されたが、墓のそばにある腐った松の木は残った。震災前は師匠の北村亀吉さんの家に、お盆のときには必ず拝みに行っていたが、津波で亀吉さんの家の一部が壊れたので行かれなくなってしまった。津波の映像を見ると今でも涙が流れてしかたがない。なかなか以前の生活には戻れそうにない。

（取材日：２０１４年９月５・６日、２０１５年３月10日）

3　船大工　前山造船

前山峯雄さん　昭和18（１９４３）年生　山田町

船大工の生活

中学を終えてすぐ山田にやってきた。最初は漁師の手伝いをしていたが好きな仕事ではなかった。そのうち船大工に興味を持って西川造船（山田町）に入り、西川円一師匠から木造船の作り方を習った。当時は19㌧の木造船を５～６人で作った。そこで４年６か月修業をしたあと日本全国に出稼ぎに行った。北海道の室蘭にある楢崎造船、網走の北日本造船をはじめ、千葉の館山、新潟、石川の七尾、静岡の清水、四日市まで各地を回って歩いた。静岡の日本鋼管ではバナナの運搬船作りに携わり、また鋼船の内回り、北転船の棚作りなど、さまざまな仕事を経験した。当時は職人が不足しており、待遇のいいところの情報が流れてきて、そこへ移動するという生活だった。昭和30年代はまだほとんどが木造船だったが、次第にその数が減り、昭和42年か43年に網走で19㌧のサンマ船を２つ作ったのが、木造船造りの最後になった。

平成３年に山田で上架施設（船の保全修理施設）を引き受けて自分の仕事場を持った。上架施設は漁協の持ち物だったが、土地とその建物を買った。正式には「三陸山田漁業協同組合漁船保全修理施設」と言い、その管理者になった。出稼ぎするより良い生活で、ここで子供３人を育てた。昭和30年代にはまだ多くの職人や船大工がいて、先輩が作った「山田船匠組合」を引き継ぎ労働時間や賃金の交渉を行っていた。山田に戻ってからはその会長もやっていた。会員は船大工ばかりで50人くらいいたが、船がＦＲＰ（ガラス繊維）にかわり、職業替えする人も多く、平成７～８年ごろ自然消滅した。全員が70代後半で若い人はいない。現在、山田の上架施設は自分のところだけになった。昨年は１１０艘の上架があり、今年はそれより増えそうだ。

この辺に後継者がいないのは漁師の収入が良くないからだ。職人は漁師の収入が良くないと育たない。昭和30年代の終わりごろはマス縄や北転船、中部船などで活気があった。当時は一航海で数百万の稼ぎがあり、その船を修理していたから職人もよかった。海がよくないと陸の仕事もよくならない。他所では９㌧のイカ釣り仕様の新造船は安くても１億２～３千万円、サンマ仕様だと同じ９㌧でも１億４～５千万円くらいするが、この辺では７千万か８千万くらいだ。海の中のものに単価はなく、値段は仲買人がつけている。山田の牡蠣はあまり良い値がつかない。船の修理代金は漁師の収入に見合ったものしかとれない。漁師も工夫が必要だ。

被災とその後

震災で仕事は大きく変わった。あの日は仕事場にいた。地震が長かったので、直感的にこれはだめだと思った。窓の外では船が転ぶほど揺れていた。バイクでいったん家に戻り、車に毛布と家財道具を積んで高台に向かった。息子を乗せて、とにかく高いところを目指した。

山田北小学校の校庭は車でいっぱいだったので、さらに高速道路の裏に逃げた。そこの広場には車が５台しか来ていなかった。ここで山田の町が流されていくのが見えた。想像していたので驚かなかった。夕方、高速の裏から山道を歩いていると、プロパンガスが爆発して煙が出ているのが見えた。次の日、農協の組合長をしている母の弟の家の離れが空いているというので、そこへ着の身着のままでたどり着き、本宅脇の叔父の別荘で、それから２年６か月を過ごした。その後、豊間根に家を建てた。

平成３年に手に入れた土地１００坪と漁協から買った上架施設は津波で流されてしまった。震災後すぐ、３月中に漁師から「やらないのか、

どうだ」と頻繁に電話がかかってきた。しかし道具はすべて流され材料もない。「やめっかな」と心は定まらなかったが、たまたま札幌から材料をとっていたので、4月27日に大宮鉄工所（山田町）を借りて仕事を再開し、1年ほどそこにいた。道路の向こうに船を並べ、120か130艘くらい修理した。4～5人で毎日やった。その後そこが売却になって、沼崎製材所に移り1年いて工業団地に移った。今思えば、鉄工所を借りるのではなく買えばよかった。現在は三陸やまだ漁協で上架をやっている。津波でここ（山田の上架施設）にいた人は3人流されたが、建物は鉄骨だったので残った。上架にかかるのは主に3トンから19トンの定置網の船で、最低3日必要だ。保管料金がかかるので、3日目には出ていくのが普通だが、田野畑で遊覧船を上げたときには1週間かかった。サッパ船は上架にはかからず個人で上げる。現在、上架は予約で一杯だ。

写真7　船大工　前山峯雄さん
山田町の上架施設　2016/04/30　撮影：久保田滋子

最近では、船大工が新造船を作ることはなくなった。大船渡や釜石ではまだ少しはあるが、宮古と山田では全くない。新しい船はメーカーが作って持ってくる。この辺では函館の噴火湾にあるヤマハの船が多い。津波のあとは、修理と艤装（ぎそう）（内装）の依頼が増えた。震災後の1年間はまだ形がある船の修理で忙しかった。この頃はまだ国の補助金が決まっておらず、自己資金で行っていたが、力のある漁協は補助してくれるが、力のない漁協の場合は全部個人負担だった。艤装は主に中古船で行う。宮城仕様の船を宮古仕様に直したり、養殖など漁法の違う船にする場合は、機械の取り付け位置を直す。平成25（2013）年4月には、三陸沿岸の水産関係者20人で「漕ぎ出せ岩手水産業復興支援グループ」を作り、国からグループ補助を受けた。そこで5～600万円の資金を得て電動工具類をそろえ事務所も作って仕事を本格的に再開することになった。しかし、昨年（2014年）中頃からずいぶん暇になってきた。むしろ震災前より仕事が減った。新造船が出回って当面修理の必要がなくなったからだ。漁師の数も減った。「がんばれ事業」が5年間あるが、参加しているのは主に60代で、これが終わったらさらに減るだろう。大沢や重茂は収入があるので後継者が多い。10年後、山田湾の漁師は今の半分になるだろう。船外機屋もだんだん仕事がなくなる。この先どうなっていくのだろうか。

自分もあと5～6年しかできない。船大工がいないと船の修理をする人がいなくなる。大船渡にヤマハの工場があったが閉鎖された。職人は仕事をかえて散っていった。造船所がなくなると職人が育たない。息子は釜石工業高校造船科の最後の卒業生だったが、船大工にならず、今は住友重工に勤めている。船大工は器用でないとできない。同じ職人でも、持って生まれたものがあり、きれいにできない人もいる。船を見れば誰がやったのかわかる。船の修理は長年の経験が必要だ。船底の見極めは家大工ではできない。機械の腐食や危険な箇所の発見は経験がないとできないことだ。また、ウニやアワビの磯舟には木造船がいいと言う人も多い。船大工がいなくなったら漁師はどうなるのだろうか。

（取材日：2015年3月10日）

4　鍛冶職人　佐々禎鉄工所

佐々木博さん　昭和25（1950）年生　宮古市鍬ヶ崎下町

佐々禎鉄工所の主な仕事は、アワビ漁に使う鉤の製作とその修理である。本家は蟇目の佐々木家で、父の家はその分家筋にあたる。幕末から明治の初めの頃、先祖が今の地に出て来たのだろう。父の仕事を手伝うようになったのは25歳か26歳のころで、最初は父の仕事を見て覚えた。2、3年父と一緒に働き、父が神経痛などで働けなくなったので跡を継いだ。「へったれ鍛冶屋」という名で親しまれているが、昭和

の初めごろに仕事をしていたおじいさんの胃腸が弱かったのでこんな名前がついたと聞いた。今でもこの愛称は生きている。以前はアワビに使う鉤のほかにも、ウニ用の鉤やステンレス製のタモ、タコやホヤをとる鉤、わかめと昆布のタモ、船の碇、サケ・マス・マグロの鉤など、漁具全般、頼まれれば何でも作っていた。2本、3本、6本、8本と鉤の種類もさまざまで、注文に合わせて作っていた。宮古の漁業は昭和30年から40年代がピークで、特に北洋サケマスのころは本当に景気が良かった。中学を卒業した人が2か月で家が建つと言われたほどで、そのころは鍛冶屋も2、3軒はあった。しかし平成になってからは佐々禎鉄工所1軒になってしまった。昭和30年代までは鉄を人の手で打っていた。昔は一家でハンマーをたたいて鉤を作った。母もやっていたが、その母が盲腸になったのを境にやめてしまった。それ以降は機械のハンマーを使った。これは大きな音が出るため住宅地には不向きだった。もし使うなら山奥か工業地帯に店を構えるしかない。震災前までこの機械を使っていたが、ずいぶん苦情があったので、震災を機に製作はやめて、修理だけを行うことになった。

3月11日以降

2011年3月11日、仕事をしている最中に地震が来た。仏壇や神棚から落ちたものをひろっていると、消防団のアナウンスを聞いた人から3メートルの津波が来るから避難しろと声をかけられた。ラジオでは30分で津波が来ると言っている。時計を見るともう30分経っていた。そこで浄土ヶ浜の、今の仮設があるあたりへ行き、橋のたもとで海を見ていたら、遠くに白波が立ってこちらに向かっていた。それが田老のほうの姉ヶ崎の大岩にぶつかり、とんでもないしぶきがあがった。それを見て、これはもう全滅だと思った。翌日10時か11時ごろ海岸へ行ったら、残っている家は1軒もなかった。その後、パークホテルに1か月、小山田の体育館に3か月いたあと仮設に移った。

津波の次の日の朝、海岸を見に行った漁師が慌ててやってきた。何人もの人から「早く再開してくれ」と言われた。アワビの鉤は重く、寝かせて床におくので水の抵抗がかからず、家が流されても沈んで残っているものが多かった。震災後はその修理専門になった。津波で流された手作りの修理道具を探し歩き、少しずつ仕事をはじめ、9月3日には作業所を再建して本格的に仕事を始めた。今ある道具はすべて泥の中から見つけ出したものだ。震災前、アワビの口あけは年に5回あったが、震災の年は津波で稚貝の施設が壊れ放流できなかった。今は船1艘180個までと制限しているが、まだ元に戻る気配はない。

写真8　アワビの鉤

鍛冶屋は県内では大船渡、陸前高田、気仙沼に4軒あり、大船渡以北は宮古の佐々禎鉄工所だけになった。昭和30年代、40年代の景気の良いころには、宮古にも3軒か4軒くらいはあったが、後継者難などもあり、平成6年くらいに田老の1軒がやめてからは、佐々禎鉄工所だけになった。今、後継者がいるのは大船渡の1軒だけで、このままでは鍛冶屋は全滅だろう。その前に「鍛冶屋」という呼び名はなくなり、みな「鉄工所」と名乗るようになった。

大船渡の鍛冶屋ではアワビの鉤を大量生産している。宮古漁協にも製品を置きに来るので、今、宮古で新しいものがほしければそれを買うしかない。気仙地区の鍛冶屋も宮古まで売りに来ていた。それを気仙鉤と呼んでいた。佐々禎鉄工所ではすべてオーダーメイドで、細かい注文を聞いて、ひとつひとつ手作りしていた。震災後は機械のハンマーを使えないので新しい鉤は作れなくなった。後継者になろうという人もいないので、佐々禎鉄工所も今の代で終わりになる。しかし、修理だけは続けていきたい。だから漁師には「大船渡のものを買ってくれ、修理はうちでする。」と言っている。

写真９　鍛冶職人　佐々木博さん
港町に再建した仮設作業場
2012/11/04　撮影：久保田滋子

写真 10　佐々禎鉄工所で作ったアワビの鉤
2015/08/07　撮影：久保田滋子

大船渡の大量生産品と佐々禎鉄工所の製品の最大の違いは鉤の先端部分にある。大船渡の鉤は先が太い。佐々禎鉄工所では完全なオーダーメイドなので、漁師の注文で作る。先が細い方がアワビによくひっかかるしはずれにくいので、注文ではなるべく先を細くしてくれと頼まれる。細ければアワビにすっと刺さって、刺した後落ちない。浅いところにいるものは先が太くてもあまり影響がないが、深くなってくると難しい。しかし、細いもの、薄いものは弱く、欠けると文句が来る。「細くて丈夫なものを作ってくれ」と難しい注文をつけられた。細くするためには時間をかけて丁寧に作り、常に技術を磨かないといけない。丁寧に仕事をするということは量産できないということでもあり、とても採算が合わない。大船渡のように、先の太いものを量産すれば生き残れたのかもしれない。

震災後、作業場を再開したが、仕事は縮小しつつある。その理由をあげると、まず体調が思わしくない。今までの仕事が原因で咳が出て、このまま続けるのは辛くなってきた。２つ目は、資源の問題だ。アワビは昭和50年代はじめころまではよくとれた。震災前までは口あけの日の決められた時間内なら制限なくとってよかった。アワビはそのまま出荷できるので単価が良い。ウニは殻をとり中身を出さないと高く売れない。宮古漁協管内では、アワビとウニの単価は10対１くらいと言われている。重茂では焼きウニが多いので少し異なる。いずれにせよ、１回の口あけで相当の稼ぎがあったと思う。しかし科学館の人によると、津波のあとは６割減り、１人当たりの捕獲量に制限が設けられた。稚貝の放流をしても、もとに戻るのには10年くらいかかるのではないか。そうなれば、修理の依頼も当然少なくなる。そして３つ目はなかなか言いづらいが、価格の問題だ。鍛冶屋組合には協定価格があるが、うちは親の代からその２～３割引でやってきた。震災後は協定価格でやることにしたがそれを高くなったと言う人もいた。今では、さらに少し値上げして１千５００円にしたが、それでも持ってきてくれる人はいる。しかし仕事量は少なくなった。

鍛冶屋もなくなるが、アワビの漁師も少なくなっていく。昔の漁師はアワビの鉤のかけ方が上手だった。傷をつけると商品価値を下げるので、みなコツを会得していた。子供の頃からアワビの鉤で遊んでいたくらいだから、自然に身についていったのだろう。しかし、今は平日会社に勤めて、口あけのときだけアワビに触るという人が多い。専門の漁師はほとんどいない。だから波の悪い時は鉤を岩にひっかけてしまう。それでも丈夫に作ってあるので、なかなか修理には回ってこない。新しく家を建てるときは工務店と相談して作業場を残し、後に地域の人が使えるようにできないかと考えている。いつか誰かがまた鍛冶屋を復活してくれればという思いがある。

（取材日：２０１２年11月４日、２０１５年８月７日）

5　下駄職人　関口履物店

関口良和さん　昭和10（１９３５）年生　宮古市鍬ヶ崎仲町

宮古の内陸部は会津と並ぶ桐の産地で、昭和20年代ごろまでは各地から下駄職人が南部桐を求めて集まってきた。父の市蔵は大正末期に18歳で栃木から師匠に連れられて宮古へやってきた。そのときは20人

くらいでやってきたようだが、そのうちの3人が宮古に残り、その1人が父であった。木を見るために田野畑へ行き、そこで滞在した家の娘と結婚した。結婚を機に独立し、昭和10（1935）年、鍬ヶ崎仲町に関口履物店を開業した。良和さんも18歳で職人の修業をはじめたが、父のころと違い雑用もあまりなく、また途中で機械化されたため、2年ほどで父とおなじように稼げるようになった。

昭和38年に結婚したが、その頃は鍬ヶ崎に下駄屋が6軒もあり、妻の百子さんは安定した商売だと思ったという。そのころは盛岡一高の高下駄なども作っていたが、学生がズック靴をはくようになって、さらに昭和50年代になりほとんどの道路の舗装が進むと一気に需要が落ちて、多くは閉店を余儀なくされた。靴屋や米屋などになった人もいるが、職種を変えず下駄屋を続けたのは関口履物店だけである。鍬ヶ崎と宮古を商圏にする日用品としての下駄づくりはほとんどなくなったが、一方で大きく注文を伸ばすできごとがあった。昭和52年に岩手県の産業まつりに出品した下駄が銅賞を受賞し、それを機に全国各地の物産展を回ることになったのだ。南部桐の高級品であることと、母カノが鼻緒付けの実演販売をしたことから人気を博し、昭和の終わりごろまでは1年に30回ほど、北海道から南は沖縄の宮古島まで全国を回るようになり、各地に得意客ができた。物産展へ出す工芸品は1市3つと決まっており、宮古市からは下駄のほかに、山田のイカ徳利と竹細工が出品された。平成に入ってだんだん回数は少なくなってきたが、母は83歳まで全国を歩いた。明治41年生まれの父は平成元年に亡くなり、物産展で全国を歩いた母は平成10年に88歳で亡くなった。

写真 11　下駄職人　関口良和さん
仮住まいの自宅　2015/05/04　撮影：久保田滋子

写真12　廃業した後、一足だけ手元に残した桐下駄と仕事道具
2015/05/04　撮影：久保田滋子

震災とそれ以降

震災の年は2月末に福岡で物産展があって、3月4日に息子さんが帰ってきた。地震がきたときは家にいた。すぐにシャッターを下ろして、妹、妹の夫、近所の人と5人で鍬ヶ崎小学校に避難した。早く行動したので道はすいていた。次の日、測候所から下りて見に行くと、家もろとも、機械もなにもかも流されていた。位牌もパソコンも何もなかった。履物店の看板が流れていくのを見たと言う人がいた。唯一拾ったのは砥石で、郵便局の坂では下駄を見つけた。この下駄は盛岡の博物館で保管することになった。妻は崎山の大付から嫁に来たが、実家にプレハブの建物があり、地震のあとはそこに寝泊まりしていた。4月4日に雇用促進住宅の抽選に当たり引っ越すことができた。しかし、物資の補助がなかったので、冷蔵庫も電気もすべて自分たちで新品をそろえなければならなかった。そんなとき、物産展の仲間である遠野の味噌屋さんや、柏のデパートの人が応援に駆けつけてくれて大いに助かった。

震災直後の3月15日には東京の高島屋で行われる物産展への参加が決まっていたが、とてもそれどころではなかった。機械も流され材料も手に入らないので、もうやめるつもりでいたが、高島屋に出品する予定だった下駄が段ボール10箱分盛岡に預けてあったため、これを生かそうと5月10日から柏で開かれる物産展に参加することになった。それに加え、花巻空港や盛岡駅、

合同庁舎、岩泉の道の駅などにあった商品もすべて集めて柏へ送った。普段は1回で80万円ほどの売り上げがあるが、このときは被災地ということもあってすべて売り切れ、200万円ほどの売り上げがあった。仲間も集まってみな買ってくれた。そして、これが最後の物産展になった。母亡きあとに物産展を精力的に回った息子さんは、その後大阪でマンションの管理人になった。宮古の空気を吸いに帰ってくるのは年に1度くらいだ。平成28（2016）年1月下旬、港町の災害公営住宅への移転が決まり、5年ぶりにまた鍬ヶ崎に戻ってきた。津波のあとに見つけた砥石と、男女一足ずつの桐下駄も、仮住まいから新しい家に移った。いつも手元に置いて大切にしている。

（取材日：2015年5月4日）

6　菓子職人　小野寺餅店

小野寺悦朗さん　昭和23（1948）年生　宮古市保久田

父の周蔵は市役所に勤めていたが、33歳で子供4人を残して亡くなった。山田から嫁いできた母ユリは、よくおやつに団子やまんじゅうを手作りしてくれていたが、父亡きあとに、これを商売にして家計を支えた。これが小野寺餅店のはじまりである。

昭和30年ごろまでは、正月の餅、米まんじゅう、串団子くらいしかなかったが、長男として母の仕事を継ぐために、20歳のころから約10年間横浜で修業し、そこでいろいろな餅菓子の作り方を覚えて種類を増やした。今ではひゅうず、おはぎ、焼団子、ごま団子、赤飯、五目飯など毎日15種類を作り、市内のスーパーなどには常に10種類以上を出している。そのほかに、季節商品としてさくらもち、うぐいすもち、柏まんじゅうなどを作る。震災後は5月から店を再開したが、最初に作ったのが柏まんじゅうだった。

地震がきたときは次の日の準備の最中だった。津波が来たというので宮古小学校に避難した。そのときから約2か月間宮古小学校で避難生活を送ることになった。震災の日、店の商品は売れないので、そのまま宮古小学校に持って行き皆に配った。せんべい屋も商品を配っていた。震災があったときはちょうど春の彼岸の前で、冷蔵庫の中はいつもの10倍くらいのあんこで一杯だった。津波で1メートルくらいの水が来て冷蔵庫が倒れ、中のものは塩水につかりすべて使えなくなった。仮に冷蔵庫が無事でも電気がこないので、どちらにせよ商売にはならなかっただろう。店を再開したのは震災の2か月あとで、そのとき冷蔵庫を新しくした。砂糖、粉、もち米は手に入ったが、北海道産の小豆はなかなか手に入らなかった。お彼岸には米まんじゅうやおはぎが売れるが、震災の年の春は避難中で作れなかった。しかし秋の彼岸には通年よりも売れた。震災の年は食べ物が少なく、商売を再開できないところもあって、品薄だったせいもあったのだろう。震災後2、3年は今より売れた。

津波で亡くなった方もいるが、仏用団子の注文は増えなかった。それどころではなかったのだろう。誕生餅や建前用のまき餅も注文が来なかった。もっとも最近では、建前のときに、昔のように親戚や近所の人を呼んで餅をまくという習慣がなくなり、震災前でも1年で10件ほどしか注文がこなかったので、これは特別に減ったというわけではない。誕生餅の習慣は今でもあるが、震災の年にはほとんど注文が来なかった。1年が過ぎたころから注文がくるようになった。紅白大福も1年後の春に就職用や入学祝で注文がくるようになった。震災の次の年の新年には、おそなえ餅やのし餅がいつもと同じくらい出た。ささげを使った赤飯は震災に関係なく売れた。特別なことがなくても日常でも食べるし、お盆のときにごま餅とともに仏に供えるので需要があったのだろう。

市内には6つの餅店があり、

写真13　菓子職人　小野寺悦朗さん
小野寺餅店　2015/08/08　撮影：久保田滋子

山側にあって被災を免れた2軒を除いて、再開したのは小野寺餅店と小林餅店の2軒だけで、川崎餅店とみかわや餅店は閉店した。商品で中心になるものは赤飯、串団子、まんじゅう、大福で、これらは行事や季節に関係なく日常的に売れる。しかし小野寺餅店では、どれも賞味期限は1日限り、長くて2日なので地方発送はできない。日持ちはしないが、添加物は一切加えない。これが職人の仕事だと思っている。

（取材日：2015年8月8日）

7　鋸刃職人　満山鋸刃物店

満山宗四郎さん　大正12（1923）年生　宮古市和見町

会津若松で鋸職人をしていた父の満山利次は、大正10年に田代に来て、製材所に頼まれ鋸刃の修理をしていた。大正12年に坪井工場が火事で焼け、大正14年に宮古に来て鋸製造販売の「満山製鋸所」を開いた。利次さんは4人の男子に恵まれ、早逝した長男を除くに3人が「満山製鋸所」を支えた。次男の宗次郎は1枚の鋼（はがね）を切って焼きを入れ、打って鋸にしたので焼きが堅く、満山の評判を高めた。宗四郎さんは利次の四男として大正12年に田代で生まれ、小学校卒業後から20歳まで、父の弟子として鋸刃作りの修業をした。昭和18年に出征したが、そのとき宮古には満山製鋸所のほかに、中屋、千田、平塚、榊原の合計5軒の鋸屋があった。そのうち、中屋と満山は名（めい）を切っていた。（刀に名を入れていた）。兵隊から帰ってきたときにはまだ全部残っていたが、昭和30年代に千田が仕事をやめ、40年代には平塚が店を閉じた。その後、阿部鋸屋が来たが、現在まで続いたのは満山製鋸所だけである。

昭和30年に作業場を作り機械を入れたが、それまではすべて手作業だった。製品は山鋸が多かったが、ほかにも船大工や下駄屋の鋸を作っていた。島根県の安来鉱山に良い鋼があり、それを取り寄せた。当時作った山鋸は川井の資料館で保存されている。昭和38年か39年ごろ、「朝、カンカンカンカンという音で目が覚める。騒音公害だ」と言われるようになった。しかし郊外に出るわけにもいかず、だんだん修理と販売に仕事を移していった。カキやホタテの汚れを落とすナタや兄の宗次郎が考案し、特許をとったアワビの鉤のヘラを主に販売した。昭和40年、和見町に作業場を建て、店と住まいを兼ねたが、10年前の平成17年に都市計画で道路にかかったのを機に工場を縮小し、鋸は仕入れて、その修理と研ぎを専門にするようになった。そのとき、昔と同じような看板を作ったが、それが今かかっている鋸の形をした「満山鋸刃物店」の看板である。

最盛期は昭和40年代前半くらいまでで、それまでは徹夜の作業もあった。50年くらい前までは牛のセリがありそこでも鋸を売った。炭焼きをする人もたくさんいて、鉄道のまくら木もまだ木製だった。そのうち林業にチェーンソーが導入され、まくら木がコンクリートになり、時計のぜんまいがなくなってくると鋸屋の仕事はかなり減ってくる。船大工の鋸は主に宮古造船や北村造船から頼まれた。研ぎや修理が多かった。曲がりを直す「よれとり」、鋸の歯の部分を全部切って新たに刻みを入れる「きりかえ」、刃こぼれを直す「刃つぎ」などを行った。チェーンソーの刃の修理も多かった。鋸は新潟と福島から仕入れ、それを売って修理と研ぎを請け負っていた。

写真14　鋸刃職人　満山宗四郎さん
自宅　2015/05/05　撮影：久保田滋子

写真15　チェーンソーが普及する前に使用されていた山鋸
旧自宅兼作業場　2015/05/04　撮影：久保田滋子

写真16　満山鋸刃物店の作業場

年とともに研ぎが仕事の中心になってきた。田老と川井の給食センターの包丁や、川井の下刈り鎌などを請け負った。ほかにも鍛冶屋や研ぎ屋はあるけれど、「満山さんでないとだめだ」と言われる。川井の鎌は、「こんなに立派に研ぐ人はいない、年寄りなのにいい仕事をする」と感心された。「満山さんがいなくなったら、研ぐ人がいなくなる」と言われるとやめるわけにはいかなかった。

震災のあと、塩水をかぶった包丁がたくさん持ち込まれた。何度研いでもすぐに錆が浮かんでくるので大変だった。震災の年の8月ごろからだんだん仕事の量を少なくして、その後1～2年続けた。昭和7年に10歳で修業をはじめてから震災を越して90歳まで80年間、鋸と刃物一筋に生きて来た。

（取材日：2015年5月5日）

8　櫓大工　三浦櫓櫂店

三浦勝廣さん　昭和17（1942）年生　宮古市鍬ヶ崎上町

三浦櫓櫂店

勝廣さんの母ヨシは現在の市役所前歩道橋の近くにあった北村櫓櫂店の次女として生まれた。母の父とその兄弟、母の兄弟や従兄弟もみな櫓大工で、昭和40年ごろまで磯鶏や鍬ヶ崎に店を構えていた。磯鶏旅館はカマド（分家）にあたる。母の実家が本家で、戦後まもなく店を閉じるまでは一番大きかった。北村一族のほかには、旧館（愛宕）に伊藤さんという櫓大工がいて、そこを合わせて全部で5軒あったが、昭和40年ごろには母の実家を引き継いだ三浦櫓櫂店を除きすべて廃業した。母の祖父である北村櫓櫂店の初代北村佐平は腕の良い職人であったが、2代目佐平を継いだ父はあまり腕が立たず酒が好きだったので、早くから母の弟が3代目の佐平として家業を継いでいた。しかし3代目も、あまり職人には向いていなかった。母の実家では地元の櫓櫂を作るより、築地にある山根漁業部など、他所の定置網用櫓櫂の注文を多く受けていた。福島や日本海で使う十尺櫂なども作っていた。佐平が沖縄で戦死したため、北村櫓櫂店は3代で店を閉じた。三陸沿岸の船や櫓櫂について調べた本が家にあり、北村佐平のことが載っていたが、津波で流されてしまった。

父重蔵は明治32年に藤原で漁師の子として生まれた。一族はみな漁師だったが、ある年の12月20日に船が定置網にひっかかって転覆し、親や親族が死亡したため、重蔵は5～6歳のころ加工屋の大店「にへいや」に丁稚奉公に出された。その後はあちこち回って苦労をしたらしい。20歳のころ知人と共同で商売を始めたがうまくいかず、田中という櫓大工を兼ねた船大工のところで櫓櫂の作り方を教わり、そこから北村櫓櫂店に移った。父は商売が失敗したことを「若竹で笛にならなかった」と言っていた。重蔵はそこで2代目北村佐平の娘ヨシと結婚し、昭和15年に鍬ヶ崎の遊郭「松竹楼」の土地を買い三浦櫓櫂店として独立した。

写真17　櫓大工　三浦勝廣さん
鍬ヶ崎上町の仮作業場　2014/04/28　撮影：久保田滋子

修業時代

勝廣さんは三男四女の次男として生まれたが、長男が早逝したため、一番上の男子として育った。小学校高学年のころから父の道具に触って遊んでいた。父は「お前は後継ぎだから」と言って好きなようにさせてくれた。愛宕小学校、愛宕中学校

に通い、その後は父について修業をするため宮古高校定時制に進学。面倒見の良い教師、良き友に恵まれ楽しい学生生活だった。しかし明治の職人気質を持つ父は厳しく、家出をしようと思ったことも何度かあった。父は弟子をとったことがない。弟子をとるとのれん分けで得意先をとられると聞いたこともある。一度戦争から帰った人に教えたことがあるがものにならなかった。勝廣さんが唯一の弟子だった。

　櫓大工の修業は木を見ることから始まる。父は勝廣さんをよく山に連れて行った。17歳の冬には1か月毎日岩泉町安家の山に通った。材料を無駄にしないためには、1本の木から何枚とれるか見定めなければならない。フシが出たら使いえないので、外からフシの有無を見極める。慣れない頃は、櫓の材料のアンチャ（梓・オノレカンバ）を買って、挽いていくうちにボロボロになってしまったこともあった。松や杉の場合は、製材所が山を持っていて声がかかり、欲しい木を探して切ってもらう。冬は車が入れないので寒さが身に応える。水鏡（箱メガネ）を作るようになってから杉の見方を覚えた。これも何寸単位で買うのではなく、1本の木を買い、外からフシと曲がりを見抜いていく。昔の製材所の職人は凄かった。16尺や17尺もある長い定置網の櫓に使う木材を、木の反りにそって製材した。櫓に使うアンチャには反りがある。それに逆らわずに削っていく。その反りをまっすぐにするため、1年以上乾燥させる。アンチャもナラもクルミも杉もそれぞれに特徴があり、それを熟知しているのも櫓大工の腕のうちである。

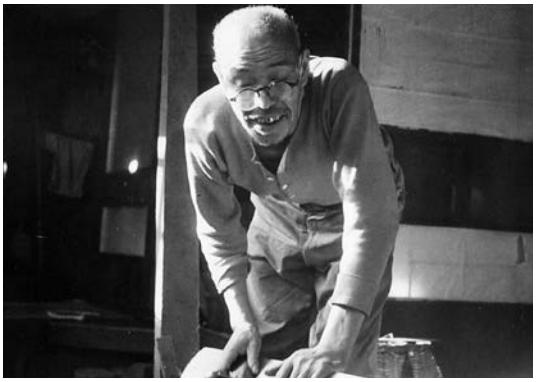


写真18　三浦重蔵さん

　道具の使い方も作り方も、父の仕事を見て覚えた。マサカリよりチョウナのほうが細かく削れる。チョウナを覚えることは木の節目を覚えることで、道具の中では使い方が一番難しい。何度も怪我をして足を切り、骨で止まったこともある。父はただ「切れ」と言うだけで、使い方を教えてくれたことは一度もない。チョウナもカンナもマサカリも、墨つぼでさえ道具を使うときの角度は人によって違う。父はカンナの引き方で将来息子が跡継ぎになるれかどうか見ていたのだそうだ。カンナ台も自分で作った。昔は堅い樫の木だったが、今はみかんやなしの木を使うようになった。櫓と腕を結ぶ麻縄も、麻を花巻から取り寄せて父がみずから編んでいた。3分の太さを一定に保って編むのも技術がいる仕事だった。しかし昭和52年か53年ごろから、化繊が麻にかわって流通するようになった。

　若いころはサッパ船の竿を作って小遣いかせぎをして、父に内緒で8ミリやオープンリールが2つあるステレオを買ったこともある。そのころは酒も煙草もやらず、稼いだ分は趣味のカメラや音楽に使おうと貯めていた。独身のころ買ったニコンの高級カメラはずっとお宝だったが、津波で流されてしまった。

鍬ヶ崎の最盛期

　鍬ヶ崎が一番盛んだったのは高校生のころだった。港が満杯で岸に係留できないサンマ船が300隻も400隻も月山のもとを埋め尽くしていた。サンマが獲れすぎて、小ぶりのものは加工屋に回して肥料になった。三浦櫓櫂店でも材料の置き場に困るほどで、作業場からあふれた木材は前の道路に積み上げてあった。小さなふんどし網と違って、大謀網（定置網の一種）は櫓と櫂の出番である。大船渡の越喜来（おきらい）や秋田の定置網で使う櫓や櫂など、地元以外の注文も多かった。何しろ一網で大きなブリが5千～6千、ときには1万本も入るくらい獲れたので、小壁（こかべ）や越喜来には三浦櫓櫂店の櫓や櫂が数多く出回り、船大工が修理をしていたという。重茂の根滝も大船渡に負けないような定置網の名場だった。釜石、山田、吉浜にも定置網があり、個人的に竿や櫂などを注文に来る人もいて、夜寝る暇もないほどだった。父は重茂で使う大きなものを作り、勝廣さんは宮古で使う短い櫂作りなどの

細かい仕事をしていた。22~23歳のころ、会瀬（茨城県）の定置網で使う櫂と17尺のトモ櫂の注文が来て、そのときトモ櫂の作り方とチョウナの使い方を覚えた。30代のはじめ、「原子力船むつ」の騒動があったころは竜飛の三厩漁協の櫓も作っていた。そのころはまだ樫やアンチャの単価が安く、良い木も豊富にあったが、今では細くて節の多いものばかりだ。櫓の材料であるアンチャは製材のときに粉が飛ぶ。そのころはよく買っていたので、製材所の人が「三浦さん、今日は（粉が飛びすぎて）喉が痛いよ」と言われることもあった。昭和36年ごろまで、海幸園の付近は、福島屋、いろは、更科、松竹楼などの遊郭が立ち並んでいた。サンマ船やサケマスはえ縄船でにぎわった昭和30~40年代は、外来船が着くと通りは人であふれ、商店街は賑わい、ときどき喧嘩もあって、町は活気に満ちていた。鍬ヶ崎の最盛期を櫓櫂職人として生きた父重蔵は、80歳まで現役で仕事をして、昭和58年に84歳で亡くなった。

埋蔵文化財の発掘とディズニーシー

重蔵の晩年の昭和50年代は200海里漁業水域が設定されるなど漁業の転換期でもあり、また船外機など便利な機械が出回り始めた時期でもあった。父亡きあとはいよいよ櫓櫂店の仕事も少なくなり、生活が厳しくなってきた。ちょうど子供の成長期と重なったのでゆるくなかった。しかし、櫓櫂専門職人は日本でも数えるほどになり、三浦櫓櫂店を頼る人がいる以上やめるわけにはいかなかった。櫂は船大工でも作ることはできる。しかし、長い櫂を短く仕立て直すことは専門の職人でないと難しい。

そんな折、ある人に誘われて埋蔵文化財の発掘の仕事をすることになった。もともと歴史が好きで城の本などをよく読んでいたので、遠い昔に思いをはせる楽しみもあって、仕事は全く苦にならなかった。週末は櫓櫂店の仕事をして、月曜から金曜まで発掘を行った。土を少しずつ丁寧に掘って行くと色が変わっていたり、何かに行きあたって、石器や土器が見つかることがある。柱の穴やかまど跡を見つけたこともあった。掘り当てることだけではなく、発掘品にも興味が深まり、報告会を聞きに盛岡まで行くこともある。発掘現場の先生が八木沢遺跡についてまとめた本を大事にしていたが津波で流されてしまった。手先の器用な仕事と勘と情熱が買われて、70歳を過ぎた今でも仕事を頼まれる。

発掘の仕事と前後して、東京ディズニーシーから大きな仕事が舞い込んできた。ある日、シーのアトラクション「ベネツィアン・ゴンドラ」の船を作っていたヤマハの大船渡支社長が三浦櫓櫂店を訪ねてきた。ゴンドラに使うオールを隅田川造船に頼んだが大きすぎたので、船に合わせて作ってくれる職人がいないか探しているとのことだった。磯鶏のリアスハーバーを訪ねてみたら、三浦櫓櫂店を知る人がいて紹介されたという。ディズニーシーオープンの3年前のことである。櫓櫂職人の仕事が行き詰っていたときなので、天の助けだと思った。ゴンドラの試験をしていた大船渡にも櫂を作れる船大工はいたはずなのに、こうして訪ねてきてくれたことも、職人冥利に尽きると感じた。オールは外材のアピトンを使い、オールを置いて支点にするフォルコラには、長沢のクルミを使い手彫りで仕上げた。クルミの製材は盛岡に頼んだ。でき上がったオールのテストは、陸前高田の、津波で残ったあの一本松の近くの川で、関係者がみなゴンドラに乗って行った。ディズニーシーには、1艘につき2丁、10艘分の合計20丁を納めた。ディズニーシーの人からは、シーの歴史に残る仕事だと言われた。このとき、フシがあるために使わなかった米松の板が一枚残り、作業場に置いてあったが津波で流された。この板はのちに発見して、結婚した娘が新築した家の上がりかまちになった。

被災

あの大きな地震が来たときは、作業場でいつものように仕事をしていた。妻は税金の申告で市役所に行っていた。最初は膝くらいの津波が来るという話だったが、電柱が見たこともないような揺れ方をしていて、これはただごとではないと思い、いそいで帰ってきた妻と一緒

にポンコツ車に飛び乗って逃げた。近所では、チリ津波のときもここまで上がってこなかったし、大丈夫じゃないかと話している人もいた。八幡様に逃げようと思い「出会い橋」の信号のところまで行ったが、川が逆流していて白波が見えたので、もうだめだと覚悟を決めた。その後宮古高校へ避難して、そこで波が市場の屋根を超えたという話を聞いた。その晩はとにかく寒くて、食料も乏しく、1枚の食パンを分け合って食べた。一息ついたのは、毛布が配られた夜10時過ぎである。娘婿は重茂にいて津波を見に行ったそうだ。大波を見て「逃げて、逃げて」と叫んだが、振り返るといとこがいない。娘は軽トラックで子供を迎えに行った。もし迎えに行かなかったら子供は助からなかったかもしれないと言っていた。それ以来恐怖症になっているようだった。震災のあとはしばらく眠れなくなった。その後は仮設にいかず、盛岡の親類の家などを頼ったが、姉のいる南町のアパートの一室がたまたま空いたので、そこに移った。

写真18　堅いアンチャで作られた櫓脚の先端は波で引きちぎられていた
鍬ヶ崎上町の仮作業場　2012/11/05　撮影：久保田滋子

写真19　ディズニーシーのスタッフがこのてぬぐいを作って激励にかけつけてくれた
鍬ヶ崎上町の仮作業場　2012/11/05　撮影：久保田滋子

津波は作業場兼自宅のすべてを押し流した。若いころに小遣いをためて買ったステレオとカメラはお宝だった。8ミリには父が久慈で製版している姿や家の建前が収められていた。玄関の絵や大事にしていた水晶の壺も流された。櫓は長いものから短いものまで10丁は流れてしまった。定置網のとき舵の代わりにつかうトモ櫂は長いので流されずにひっかかっていた。アンチャは数えきれないほどの年輪が細かく詰まっていて非常に堅い木だが、そのアンチャの櫓がまるで引きちぎられたように折れていた。見つかったものもいくつかある。姉からプレゼントされた象牙のハンコは作業場のシートの下から出て来た。15歳のときから使っていたカンナ、マサカリ、チョウナも見つかった。刃がこぼれていなかったので今もそれを使っている。13尺のアンチャの木材は白浜まで流れていった。あるとき若い人が木材を持って訪ねてきて、「これで櫂を作ってけろ」と言う。見ると自分のところから流れたアンチャだった。13尺の木が半分に切られていた。松や杉だと誰のところのものかわからないが、アンチャは少しでも自分で手を入れたものはすぐにわかる。

津波の後、ディズニーシーから8人が盛岡に宿を取り激励に来てくれた。手渡された1枚の手ぬぐいには、赤い太陽の中を行くゴンドラとともに、『絆漕　輝く海の上に銀の星があり　波は穏やかで、風は順風に吹く　来よや友よ船は待てり「熱く」「厚く」「暑く」』と染められていた。皆で酒を飲み無事を喜び合った。2014年の6月にはバス1台を仕立てて訪ねて来てくれた。アメリカ人も2人混じっていた。

仕事場の再建

津波で多くの櫓櫂が流され、漁協や個人から注文が入りだしたので早く作業場が欲しかったが、なかなか許可が下りなかった。当初、震災の年の10月にはプレハブを建てて良いかどうか決まる予定だったが、それも延期になっていた。いよいよ待てなくて再建に踏み切り、2011年12月26日に、15坪の作業場がついた3間×7間のプレハブ仮小屋が完成し、1月から仕事を再開した。小屋は、道路にかかって壊さなければならないものを、解体料を払って譲り受け、娘の家を建てた大工に組み立ててもらった。本当はもっと暖かいうちに移りたかった。市は津波被害地域での宿泊を認めなかったので、アパートから通

いの生活になった。入り口のサッシに入れた「三浦櫓櫂店」の文字は、娘がネットで昔の櫓櫂店の画像を探し出し、復元してくれたものだ。

津波で流されて荒れ地になっていた鍬ヶ崎に、はじめて再建された三浦櫓櫂店は、復興の先駆けとして注目されるようになった。2012年1月にはNHKとIBC岩手放送、2月には岩手朝日テレビのローカル放送、3月にはNHKの「ここに技あり」で取り上げられた。「ここに技あり」は震災前にも取材を受け、2回目の出演になった。最初に来たとき、ディレクターについて来た若い人が、津波のあとには一人前のディレクターになって再訪してくれた。再開した作業場の様子は、2012年10月29日に岩手朝日テレビ製作の「希望のかけはし」で放映された。朝日テレビでは相馬屋のコマーシャルにも出演した。市の観光課を通してテレビ大阪からの話もあったが、これは電話で断った。NHKの番組で、画用紙に一言書いてカメラの前に立つというのもあったが、何も書かないで逃げた。こういう演出は苦手なので出たくなかった。新聞や雑誌にも載った。2012年8月31日の毎日新聞、2014年9月5日の毎日新聞岩手版に記事が掲載された。『諸君』の取材も受けた。本当はテレビに出たり、写真に撮られたり、取材を受けたりするのは好きではない。しかし、震災後はなるべく出ようという気持ちになった。

写真20　三浦櫓櫂店外観

自分は多分日本でも最後の櫓大工の1人でもあり、後継ぎもいない。櫂は船大工でも作れるが、櫓は櫓大工だけの仕事だ。年輪の詰まった梓の木はとてつもなく堅く、設計図もない。この先、櫓櫂職人になる人は誰もいないかもしれない。櫓大工という仕事を、自分を通して知ってほしいし、何かの形で残しておきたい。そんな気持ちが震災を機にわき起こった。慣れない取材を受けるのも大変だが、NHKや民放の違いなど、面白い面も発見した。NHKは弁当持参で訪ねてきて酒も飲まないが、民放の人たちは手土産に酒を持ってきて一緒に飲んでいく。そんなときは天然の塩だけで手作りしたおふくろ秘伝の塩辛を振るまうことにしている。

震災後の仕事

仕事場を再建する前からすでに多くの注文が舞い込んでいた。津波でほとんど流されたうえ、他に作る人がいないので、仕事が集中してこなしきれないほどだった。波のある重茂ではスラスターの時代になっても櫂は必需品で、父の代から深いつながりがあった。震災の年の5月には重茂漁協から依頼があり、作業場を借りてすぐに仕事にとりかかった。津波ですべてを流されたときには、自分の仕事もここで終わったと思ったが、縁の深い重茂からの注文は再起の大きな力になった。田老漁協からも注文が入った。田老では船が小ぶりなので櫂も小さく、今までは地元の船大工が作ることも多かった。しかし津波の甚大な被害を受けて短期間に大漁の櫂を作らなければならず櫓櫂職人の出番になった。ほかにも釜石、大槌、気仙沼、石巻からも注文が来た。1人の仕事には限界があり、なかなかすべての注文に応えるのは難しかったが、できる限りのことはした。依頼のほとんどは櫂で櫓の注文はなかった。櫂は場所によって大きさが違い、宮古は6尺だが、釜石は船が大きく2人乗りなので7尺、石巻と気仙沼は宮古では2枚とれるくらいの幅の広いものを使う。困ったのは材料をすぐに調達できな

写真21　新しい作業場でチョウナを振るう
鍬ヶ崎上町の仮作業場　2012/11/05　撮影：久保田滋子

いことだった。茂市の製材所には適当なものがなく、以前盛岡の流通センターで買ったものがあったので、当面はそれを使った。櫂は船大工も作るが材料を選ばない。櫓大工はプロだからフシのない良い材料がなければ櫂1枚でもつくるわけにはいかない。これは親の教えでもある。

櫓の注文は意外なところからやってきた。気仙沼で牡蠣の養殖をしている人が所有する和船が津波で流され、木造船を再建することになった。再建の主は、NPO法人「海は森の恋人」を運営する漁師で、良い牡蠣を育てる海は、そこに流れ込む水のみなもとである森を作ることからはじまるという思いを持って植樹を続けてきた人だ。今の時代に木造船を作るのも、木と森への愛着ゆえという。そこから三浦櫓櫂店へ14尺5寸の取舵用の櫓の注文が来た。進水式は2014年3月29日で、船の名前は「あずさ丸」、あずさは櫓を作る木だ。海に出ていく船には、いくつものフライ旗に混じり、水しぶきをあげて泳ぐ鯛の絵に「三浦櫓櫂店」と書かれた旗もはためいていた。櫓櫂店が新造船にフライ旗を出すことはない。これは船主のほうで特別に用意してくれたものである。その日までフライ旗が出ることを知らなかったのでとても驚いた。カメラを忘れて撮りそこなったが、うれしい気持ちと同時に、櫓櫂と言う文字が読めるだろうかという思いもよぎった。地元でさえ櫓櫂職人はいなくなって、この字が何のことだかわからない若者も増えているくらいだから。

写真22　木造船「あずさ丸」と三浦櫓櫂店が作製した14尺5寸の櫓

震災後2年くらいは忙しい毎日だったが、だんだん仕事も減ってきて、今では新しい櫂の注文はあまり入ってこない。今は頼まれた箸や木刀、水鏡などを作っている。木刀は櫓の材料と同じ堅いアンチャで作る。ある人に頼まれて作ったら、そのツテで作ってほしいという人がでてきた。もともと歴史が好きなので、刀のかたちやデザインには興味があり、本を見て研究することもある。震災前からこのような個人的な依頼はときどきあった。木が好きだという東京葛飾区の寺の和尚から櫂や水鏡を頼まれたり、和船を漕いで体を鍛えたいので櫓を作ってほしいという神奈川県の医者がクルーザーで来たこともあった。櫂や水鏡が欲しいと、厚木のスナックのママさんが5~6人で来たこともあるし、観光客に頼まれたこともある。

今の仮の作業場はいつ移転になるかわからないから、いつも今日が最後かもしれないという気持ちを持っている。移転になればこのプレハブ小屋を解体して持っていくつもりだ。しかし、どんなところに、どのような条件で建つのかわからないので不安が大きい。この仕事は自然の光の中でないとできない。電気の光では反射があって木の様子がよくわからないので、荒どりくらいしかできないだろう。隣に大きな建物が建てば自然光は入らなくなる。木を自然乾燥させるところも必要だ。櫓にするアンチャは年単位の乾燥が必要だ。移転先でそれができるだろうか。

広島県の江田島にカッター用の櫂を作っている専門の職人がいると聞いているが、櫓櫂店の看板を出しているところは、鍬ヶ崎の三浦櫓櫂店が日本で最後の1軒になったかもしれない。産経新聞に、最後の櫓大工という記事が出たことがある。定置の大謀網やテンマ船で活躍した櫓や櫂は船外機によって隅に追いやられてしまった。早池峰のアンチャなど、材料となる良い木も少なくなった。しかし、アワビやウニ漁が復活すれば櫂の需要はまだある。頼ってくる人がいる限りやめるわけにはいかない。次女が婿をとったので、年を取って稼げなくなったら、いずれ一緒に住みたいと思っている。それまでは「三浦櫓櫂店」の看板を掲げてがんばるつもりだ。

（取材日：2014年4月26・28日、2014年9月6日、2015年3月9日、2015年11月2日）

第2部　各分野での震災後の取り組み
第15章　海外メディアの東日本大震災に対する報道

Ⅰ　海外メディアの宮古市への取材

假屋雄一郎

世界中のメディアが東日本大震災を大きく報道するなか、日本人がパニックを起さず、救援物資の奪い合いもなく苦境に耐えている姿に驚嘆と讃辞が送られた。

宮古市へも震災直後から国内外の取材が多く入り、「万里の長城」と言われた巨大防潮堤でも防げなかった津波の猛威が取上げられた。市長をはじめ危機管理課職員など、不眠不休で震災対応に追われるなか可能な限り取材にも応じた。表1に記録が残った海外メディアの取材状況を掲げるが、震災後の混乱状況と膨大な業務にあたる中で、記録されなかったものも数多くあると推測される。御容赦をお願いしたい。

表1　海外メディアの取材

年月日	放送局（国名）	内　容
2011年3月11日	BBC 放送（イギリス）	市長インタビュー、田老防潮堤
2011年4月5日	中国国営放送	市長インタビュー
2011年5月28日	オーストラリア放送協会	市長インタビュー
2011年9月1日	フランス国営放送	発災当時の様子など
2011年3月7日	財新伝媒（中国）	市長電話取材
2011年11月26日	タイ PBS	田老防潮堤・グリーンピア仮設商店街取材
2015年9月10日	フィリピンスター紙（フィリピン） 星洲日報（マレーシア） ジャワ・ポス紙（インドネシア） マティチョン紙（タイ） アイランド紙（スリランカ） ハビール・デイリー紙（モルディブ）	市長インタビュー （東南アジア主要紙６社）
2016年3月4日	法制日報・人民日報（中国） 中央通信社・中国時報（台湾） 総合ニュース・ＹＴＮ（韓国） VNA（ベトナム） チャンネルニューアジア（シンガポール） il sole 24 ore（イタリア） Sueddeutsche Zeitung（ドイツ） GAMMA PRESS（フランス） USA　TODAY（アメリカ） 中央日報（韓国）	海外メディア特派員ツアー 市長インタビュー、田老防潮堤、 高台、田老市街地視察

平成27年９月には東南アジア主要紙６社が復興状況について市長へのインタビューを行っている。震災から５年の節目となる平成28年３月には、海外メディア特派員ツアーが組まれた。

市長へのインタビューのほか、田老防潮堤や高台の整備と住宅移転がすすむ復興状況が取材された。

Ⅱ　中国メディアの東日本大震災に対する報道
―『人民日報』、『四川日報』を中心に―

何　為民

はじめに

筆者は２０１１年２月23日に、日本での留学を終え、中国広西チワン族自治区北海市にある北京航空航天大学北海学院に赴任することになった。帰国間もない２０１１年３月11日の午後、いつもの通りに授業を終え、宿舎に帰る際に親戚から電話がかかってきた。日本ではマグニチュード９・０の地震が発生したという。慌ててテレビをつけると、中国中央テレビ13チャンネル（ニュース専門チャンネル）が地震の状況を中継で途切れなく報道し続けている。筆者は日本にいる家族との連絡も取れず、夜になってようやく家族の無事を確認できた。また、筆者の指導教授である神田より子先生にも連絡をして無事と確認できたが、岸昌一先生が宮古市にいることを知り、不安でたまらなかった。その後、神田先生を通じて岸昌一先生が無事であることを確認した。これが今回の震災に関しての宮古市との最初のかかわりとなった。

１　宮古調査のはじまり

２０１４年４月１日から、筆者は敬和学園大学で１年間特任准教授として再来日することになった。神田先生は筆者が日本にいる間に、多くの調査研究に参加し、経験を積み重ねることが重要であるとすす

めてくれた。これは日本の記憶・記録の調査方法を学ぶ貴重なチャンスと思い、「宮古市東日本大震災記憶伝承事業」の調査に加わることになった。こうして本格的に宮古調査に参入することになった。

この調査は東日本大震災の記憶と記録を風化させないようにという目的で立ち上がったという。そこで外国人として自分の立場から記録し、そのプロセスをまとめることにした。したがって、2014年5月の連休、8月のお盆、12月22、23、24日の3回にわたって宮古市を訪れ調査を行った。5月3日に宮古市に到着し、翌日から調査に乗り出した。

『東日本大震災宮古市の記録』（宮古市2014）によると、宮古市の死亡者数517人、行方不明者96人、住宅全壊5千968棟、大規模半壊と半壊があわせて2千509棟である。地震による津波遡上高は37・9メートルにもなった。爆弾が爆発したように、あらゆるところに瓦礫が積み重なった悲惨な状況は、宮古市が収録した写真集やDVDからわかった。その中で最も被害が大きかった地域の一つに田老地区がある。岸先生に連れられて田老地区の防潮堤へ行ってみた。「万里の長城」ともいわれたほど堅固な防波堤であるが、大津波で完全に崩壊した。その上に昇ってみると、2014年5月当時は一部分が修復しつつ、一部分は依然として崩壊したままになっている。それを見ると、言葉も出ないほどの大惨事だったことが理解できた。写真1は東日本大震災後、宮古の人々が災害に負けず、懸命に復旧工事を行った結果、一部分「万里の長城」を修復したことである。写真2は、まだ修復されていない部分であり、震災後のまま残ったものの、復興はまだ長い道のりであると物語っている。

写真1・2　2014年5月4日に撮影した田老地区の「万里の長城」

2014年12月22日からの3回目の調査では、大震災の最中に宮古市に唯一灯りが灯り続けていた場所、後藤医院の院長後藤康文先生にインタビューすることになった。筆者の注意を引いたことは院長が中国山東省煙台市開発区病院へ腎臓人工透析機を寄付し、煙台市の栄誉市民になっていたことである。

当時日中友好協会副会長をしていた後藤先生は、中国との友好事業として何かできないかと考えたとき、人工透析機の寄付を思いついた。そして1991年に煙台市の病院へ寄付し、しかも技術者の養成にも力を注いだ。そのことがきっかけとなって、煙台市と宮古市が1993年に友好協力都市を締結させた。中国人の筆者にとって、感謝の気持ちでいっぱいである。

このように国際交流に大きく貢献している後藤先生は、宮古市で震度7以上、そして20メートルの津波にも耐え、自家発電装置も装備する病院の建設を決意した。また地震による津波が押し寄せた際にも、多くの市民を避難させることも想定した。その結果、東日本大震災の際には、人工透析を必要とする患者は問題なく治療を続けることができた。さらに大津波が襲来したときにも後藤病院は、患者を救う役割を果たしたのみならず、200人以上もの避難者も受け入れた。当時の宮古市民に元気を与えた灯りでもあった。それらを記録するために、震災後『灯り続けた街の明かり』という映画も作られ、世界36の国々に配信することになり、中国向けのDVDも作られた。2014年11月13日に

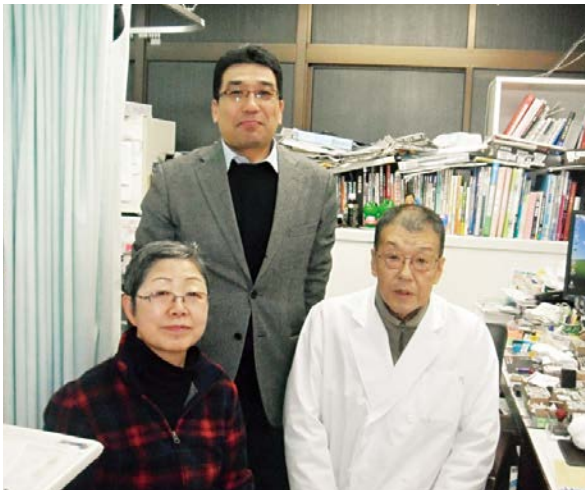


写真３　後藤先生をインタビューしたとき

来日した煙台市の医院関係者が宮古で研修し、「技術研修や震災時の対応など学ぶことは多い」と関心を寄せた[注(1)]。

今回は調べてゆくうちに中国とのかかわりも現れ、宮古から国際交流の展開も見えてきて、地方や、民間レベルでの交流の重要さを感じた。

2　『人民日報』と『四川日報』の報道内容

本稿は、中国メディアが東日本大震災を如何に報道したのかを調べ、それを分析した。

(1)　これまでの報告内容

東日本大震災については多くの海外メディアが報道している。そうした中で中国メディアの動向についての研究も少なくない。「中国メディアから見た東日本大震災」は、『人民日報』と『北京晩報』の記事を中心にした研究成果であり、主に「中国メディアはどのように伝えたか」[注(2)]について言及している。調査期間は２０１１年３月11日から４月13日の１か月間で、地震発生後の２日目から４日間を分析している。両新聞が東日本大震災をどのように報道したのかを調査したものである。『人民日報』が中国国内で最大の発行部数を誇る新聞であることを踏まえたうえで、大震災に関する強調点が低くはなく、むしろ日中友好を醸成するため、大いに取り上げたと考えられるとの結論をだした。『北京晩報』は北京市民と密接に結びついている。そのため東日本大震災に関する報道口調は、『人民日報』と比較すると、地震そのものを報道することが少ない。それでも大震災の際に、日本国民が慌てず社会秩序を守るような行動をしたと称賛している。この記事を通して中国国民に社会秩序を守る意識を喚起しようとしているとの指摘があった。また、この論文は『人民日報』の報道傾向は外向け、『北京晩報』は内向けであるとまとめられている。しかし具体的にどのような内容で、どんな視点で報道したのかについてはあまり触れられていなかった[注(3)]。

実際、『北京晩報』も中国共産党北京委員会機関紙であり、北京晩報新聞社は『北京晩報』、『北京日報』と『北京晨報』を発行し、北京から全国をカバーする新聞であると言っても過言ではない。同時に北京という首都の特殊な地方紙であり、報道内容は『人民日報』ときわめて近い。

また２０１１年の『放送研究と調査』では、東日本大震災を日中韓が如何に伝えたのかというシンポジュウムの成果をまとめて載せている。これは主にテレビの報道状況を論じたもので、中国のテレビ報道については、党の宣伝機関の立場にあるにもかかわらず、報道は客観性を持つ面があると評価した[注(4)]。

東日本大震災発生から3年目の２０１４年3月に、『ジャーナリズム&メディア』には山本賢二の「福島原発事故と中国メディア」の論文

注(1)『宮古民友』２０１４年11月15日1面「中国・煙台市の医院関係者宮古で研修・新睦交流」

注(2)文俊・宮崎恒平「中国メディアから見た東日本大震災―『人民日報』と『北京晩報』の紙面比較を通じて」『日中社会学研究』２０１２年1月66頁

注(3)前掲（２）66～87頁参照

注(4)山田賢一「『東日本大震災』は日中韓でどう伝えられたのか―国際シンポジュウムでの報告・議論から」『放送研究と調査』２０１１年12月号12～20頁参照。

が掲載され、中国共産党機関誌『求是』に載った福島原発事故に関する中国論文を検討し、中国はあの原発事故をどのように扱ったのかについて論じている。

以上、東日本大震災発生後、中国メディアが伝えた報道の研究を概観した。その結果、新聞、テレビ、通信社などの報道状況が研究されてきた。しかし特に新聞に関しては、ほぼ2011年のみ検討していたことや、メディア業界が災害の報道を如何に行ってきたのかについての研究が多かった。その後の1周年、2周年の時期には、人類史上でも大きな災難について、中国メディアがここから得られた教訓には言及していない。さらに東日本大震災後、日本の被災地の復興についての報道を検討する成果も少ないと考えられる。

そうしたことを踏まえ本稿では、中国メディアの報道内容に注目し、特に1~4周年に『人民日報』と『四川日報』がどのような報道をしてきたのかを中心に検討する。研究方法としては、2つの新聞の報道内容を考察し、さらに日中関係の変化を背景に、報道の視点の変化についてみておきたい。

(2)『人民日報』と『四川日報』を選んだ理由

『人民日報』は中国共産党制度下で、共産党国策宣伝機関と位置づけられている。常に「党の喉舌」と表現され、共産党にとって重要な宣伝機構であることを物語っている。

1948年6月15日、『人民日報』を中国共産党華北局[注(5)]機関紙として創刊され、1949年8月1日、中国共産党は北京を解放し、政権を成立する際に、『人民日報』を中国共産党機関紙とした。「人民日報」の題字は毛沢東が書いたものである。1992年、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は『人民日報』を「世界十大新聞紙」の一つと認定した。

『人民日報』は「中国の特色社会主義道路、理論システム、制度及び改革開放と社会主義近代化の業績を宣伝する」との主旨がある。これまで世界100国と地域で発行され、2013年までに年間300万部の発行部数に達している[6]。このことから、世界においてもこの新聞の宣伝効果は無視できないであろう。人民日報社の所在地は北京にあり、首都に立地にすることで中国全体の情報を国内だけではなく広く国際的に発信することになる。

『四川日報』は、『人民日報』と政治的な役割は同じだが、中国共産党四川省委員会の機関紙であり、『人民日報』と同様に、中国共産党の国策宣伝機関である一方、四川省を中心に宣伝することになる。日本の地方新聞と同じ部分があるが、四川における共産党の指導状況を伝えることになっている。『四川日報』も党の「喉舌」という言葉が表現するように、中国共産党の政策、治国理念などを宣伝し、党に反する宣伝をしないという基本的な規則がある。また、『四川日報』は四川省に立脚し、省域人民の生活に密着し、生活サービスの情報を提供する役割を果たしている。

このように『人民日報』と『四川日報』は同じ共産党の宣伝機構であるが、報道における重点が異なる。

今回『四川日報』を取り上げたのは、以下のような理由による。中国四川省汶川地域では2008年5月12日、マグニチュード8・0の大地震があり、日本からの支援には感謝の世論が極めて高かった。日本は救援隊を派遣し、負傷した人を救助したり、日本の経験を生かして積極的に救済活動を行ったことは、現地のメディアが大きく取り上げ、高く評価した。そのために、今回の大震災について、特に近い過去に大きな震災を経験した震災地の『四川日報』が如何に報道してきたのか、興味深いからである。

また『人民日報』と『四川日報』の報道内容が同じなのか異なるの

注(5) 中国共産党華北地域を管理する共産党機関で、華北は北京、天津、河北、内モンゴル西部、山東、河南の黄河の北部分の地域を指している。

注(6) http://*/www.people.com.cn/GB/50142/104580/ 『人民日報』社のホームページ参照。

かも見ておきたい。

3　2つの新聞紙の報道内容について

(1)　地震後の『人民日報』と『四川日報』

2011年3月11日、東日本大震災が発生したのは午後であった。中国の新聞は最新情報を伝えるための号外という形で発行することは極めて少ないから、記事の掲載は、次の12日になる。2011年3月12日の『人民日報』は1面に「日本発生特大地震海嘯」（日本で特大の地震と津波が発生）というタイトルで大きく取り上げた。字数はおよそ300字余り、『人民日報』東京駐在記者が報じた。3面には「特大地震海嘯襲撃日本」（大きな地震と津波が日本を襲撃）として1千800字余りの文章で地震発生後に東京で電車が止まり、成田空港が閉鎖、新幹線の運行が見合わされたなどの混乱状況、そして政府が緊急対策本部を立ち上げたことなどを報じた。同面では中国外務省報道官の談話を発表し、中国政府は援助をする用意があると述べた。

中国では毎年3月に「全国人民代表大会」（全人代）と全国政治協商会議、すなわち「両会」の開催がある。東日本大震災はこの「両会」の最中であったにもかかわらず『人民日報』が大々的に報じたのは、中国政府がこの震災を重要視していることを示していると考えられる。

『四川日報』では、新華社通信のニュース内容を1面で報じた。「日本8・8級大地震引発海嘯」（日本で8・8の大地震が津波を引き起こす）というタイトルで、約1千字弱の文章で大震災の状況を述べている。注目したいのは、8面にほぼ1面を使って震災状況を詳しく紹介するとともに、「一衣帯水、感同身受」（一衣帯水で、自分自身が災難に遭ったように感じている）というタイトルの文章が注目される。記事内容は主に日本政府と国民に対し、中国は信頼できる隣国であり、今回の地震は、中国の人々が2008年四川省汶川で起きた地震を想起させる。その当時、日本が迅速に救援隊を派遣して、オレンジ色の服を着て被災地で懸命に救援活動を行っていたこと、中国駐在日本記者は、日本の一般市民、学生、民間企業が中国の被災地の人々のために募金をしたり、ある都市では市長や市会議員も街頭で、四川省汶川被災地のために募金していることを論じた。

その上で、そのような感動させる場面は忘れられないと述べた上で、今回の東日本大震災は中国が恩を知り、恩に報いるべきであり、救援の手をさしのべなければならないと記されている[注(7)]。

3月15日の、『人民日報』と『四川日報』は、中国国家主席の胡錦濤が天皇陛下と、衆・参議院議長あてに、見舞いの電報を打ったと1面のトップ欄に載った。

また中国の救援隊は3月13日19時、岩手県花巻空港に到着し、その後日本側が用意したバスで大船渡市へ行ったことが報じられ、翌日にはさっそく救援活動に参加した。『人民日報』や『四川日報』も中国救援隊の活動をシリーズで報道し、中国の恩返しのための活動であることを伝えた。3月15日には200棟が崩壊した住宅を捜索したこと、また当時被災地では物資が極めて少なく、救援隊隊員が節約のために、洗顔や歯を磨くことさえしなかったこと、また同日には倒壊した家屋で年配者の遺体を発見した事などを報じた。

地元の人々も中国救援隊

写真4　『四川日報』が2011年3月12日8面に掲載した地震の写真

注(7)『四川日報』2011年11月12日8面参照。

に対し、中国語で感謝の言葉を述べ、救援隊員が感動していることを報道している。この時期は、災害を前に両国国民が過去を忘れ、日本の震災後の復興を期待するという気持ちが報道の主流であった。3月20日には救援隊が日本での救援活動を終え、3月21日に帰国することになった。『人民日報』と『四川日報』もこの記事を載せ、中国救援隊と地元の人との別れ、日本外務省職員による惜別の言葉を報じている。

福島原発事故が注目されたのは、2011年3月13日の記事である。福島原発事故は中国社会に大きな衝撃を与えたが、中国政府は当時「両会」の開催中であり、社会の安定を考慮して、原発事故による放射能が中国に影響することを強く否定した。しかし現状では、報道機関の内容に不信感を持つ人が多くあった。民間では塩を食べると放射能汚染を予防できるという噂が流れ、中国各地のスーパーでは塩が売り切れたというエピソードもあった。

その後、中国政府はほぼ毎日テレビや新聞などのメディアを利用し、原発事故による中国への影響について情報を公開している。『人民日報』は3月24日以降、記事の主要な注目点は、福島原発事故にあった。「日本の原発事故はわが国の環境、健康に影響がない」と中国国民を安心させようとしている。3月25日の1面の記事にも、日本の原発事故は中国近海地域に影響がないと記述されている。

『人民日報』は、2011年4月4日までに連続報道が終わり、その後は断続的に東日本大震災に関する報道を行い、2、3日に1回というペースで関連報道を載せている。4月8日に中国駐日大使館の公式発表を載せ、東日本大震災で8人の中国人の死亡を確認し、中国国民も被害を受けた事を論じた。また、2011年4月15日の『人民日報』は、在日中国留学生の現状を報じ、留学生の震災後の生活状況を紹介した。この記事は日本国内において、地震発生後、多くの中国人が慌てて帰国したことへの批判に対する反論ではないかと思わせる。

その後、『人民日報』は東日本大震災に関する報道も、最初の時期に1~3面の「要聞」コラムから、「天下」という4面のコラムへと移ったが、東日本大震災への注目は続いた。しかし大地震発生から1か月後の2011年4月11日付けの『人民日報』には大地震に関する報道はなかった。4月12日には、日本と中国雲南省地震において、60歳以上の被災者に対する40万元の精神健康調整金と、住居などを提供したと報道されている。4月16日以降、東日本大震災に関する報道は、ほとんど断片的なものとなり、内容は原発事故が中心となった。

『四川日報』は、東日本大震災について、ほぼ1か月間連続して報道したが、その趣旨は『人民日報』とほぼ変わりなく、4月12日に、地震発生後1か月後に強い余震が日本を襲うという記事が最後で、これ以降は連続した報道はなくなり、四川地震復興に関する記事が中心と

3月15日，中国国际救援队队员在日本岩手县大船渡市运送遇难者遗体。新华社记者 吕小炜摄

写真5　『人民日報』が2011年4月2日4面に掲載した新華社記者が撮影した写真で、中国救援隊が見つかった遺体を運ぶ様子

なった。

(2) 東日本大震災の周年について報道しているのか

中国では毎年3月が全人代と政治協商会議を開催する時期であるため、重要なニュースでない限り、『人民日報』に掲載されることは比較的少なく、国際ニュースも量的に減少する傾向がある。

2012年3月11日、『人民日報』4面には「日本は大地震一周年を記念」というタイトルで、東京で追悼式が開かれ、天皇陛下と野田総理（当時）が参加したことを報じた。3月12日には、『人民日報』の記者が宮城県石巻市や中国救援隊が救援活動を行った大船渡市などの地域を訪ね、被災地の現状を報じ、多くの地域で再建のめどが立っていないことを指摘している。

3月11日，在日本东京电力公司前，市民打出“还我福岛！”、“不要核电！”等标语，抗议该公司清除辐射区污染进度迟缓。
新华社记者 马平 摄

写真6　2012年3月12日『四川日報』8面に掲載された日本の原発反対のデモ

1周年の3月11日に、「日本地震一年重建纸上谈兵」（日本地震1年、再建は机上の空論）というタイトルで、2千500字程の文章で東日本大震災による原発事故のため、福島の幼児は甲状腺ガンを発する危険性が増しているという記事があった。

『四川日報』は1周年の3月11日に、「日本地震一年重建纸上谈兵」（日本地震一年、再建は机上の空論）とのタイトルで、新華社通信による2千500字の文章で東日本大震災を取り上げ、災害が発生してから1年を経ても、被災地は依然として悲惨な状況であることを述べている。3月12日には、地震1周年、2012年3月12日『四川日報』8面に掲載されたのは日本における原発反対のデモの様子である。

国民が憤怒でデモを行う事を報じ、地震災害が大きかった岩手県の再建が遅れており、国民が不満を募らせているという。さらに3月14日には、福島原発事故のため、その地域の幼児は甲状腺ガンを発する危険性が増しているという記事があった。

2012年9月尖閣諸島国有化にともない、日中関係が1972年日中国交回復以来最悪の状態に冷え込んだ。東日本大震災2周年の2013年3月、中国では習近平が国家主席に就任し、新たな国家指導部が船出する時期であった。

しかし、日中関係改善の兆しが見えてこないため、『人民日報』には2013年3月11日の前後5日間、東日本大震災2周年に関する記事はなかった。

2013年3月12日の『四川日報』には、「日本大震災後の復興は責任が重大で道は遠い」という記事があった。内容は2012年末に日本政府が公開した情報では、海岸防波堤の建設は26％しか完成しておらず、農耕地が震災前の33％しか復元していない。また、住民が最も関心を寄せている住宅建設は遅れており、多くの被災者が仮設住宅に住んでいることを報じている。

2013年12月27日、安部総理は政権発足の1年後に靖国神社を参拝した。これはもともと冷え込んでいた日中関係をさらに悪化させた。

それと直接関連するのか否か、推測不能だが、本来なら震災後、特に周年にあると、人々の中で地震が人類にもたらした悲惨な状況を風化させないため、どんなメディアでも記念すべき文章を掲載することであろう。ところが『人民日報』と『四川日報』は２０１４年3月12日に、東日本大震災に関する報道では、福島原発事故が中心で、日本政府が原発事故の解決を進められていないことを特記している。

２０１４年11月に中国で開催されたＡＰＥＣ会議で、日中首脳の会談が実現したが、大きな成果が得られないと考えられ、日中関係は確かな前進も確認できない状態の中、東日本大震災４周年にあたる２０１５年3月11日、12日には、『人民日報』と『四川日報』ともに関連する記事がなかった。

おわりに

筆者は宮古市における東日本大震災記憶伝承事業の調査に参加できたことは、極めて重要な経験であると認識している。筆者を連れて調査している岸先生は、編集委員会の委員である同時に、宮古市民で被災者の1人でもある。調査の際に、「万里の長城」から遠い海を眺めながら、「津波の時の海が異常に青かった」と言い、目の奥に地震災害に対する恐ろしさが読み取れた。また、２０１４年8月、神田先生と一緒に被災した三陸の海岸地域に沿って車で走った。なるべく海岸沿いを走ろうという目的であったが、沿岸にはあまりにも悲惨な状況が続いていたために、なかなか言葉が見つからない。大津波が襲った痕は多くの地域に依然としてその痕跡が深く残されていた。

さらに福島原発事故の周辺には、道路のそばに立派な家が数多く残っているのにもかかわらず、中には誰も住んでおらず、まるで無人の城下町のように感じ取れた。

「天災は忘れられた頃に来たる」という言葉が今でも筆者の心に響いている。今回の調査では、地震災害は人類にとって大きな課題であり、それにどのように対応していくのかも極めて重要な課題である。

今日、津波があった地点では必ず町の目立つところに、かつて津波が到達した高さにしっかりと印を刻んでいる。それは過去に起こった災害の教訓を人々に伝え、当時の記録を残すことでもある。そして、人々に万が一の際には、逃げる勇気を身につけてほしいと願っている。

地震は人類の災難であり、中国でも各国のメディアでも報道する際には、政治に利用されず、ともに災害に対応すべきであると、改めて理解できた。

協力者

東日本大震災宮古市の記録（下）の編纂にあたり御協力頂いた方

（敬称略、50音順）

青笹光一
赤坂真喜子
赤沼幸子
赤沼利彦
赤沼秀章
赤沼 弘
赤沼正清
赤松ファトマ
東 キヌ
穴澤良三
阿部勝久
安倍主税
天杉国夫
天杉美智子
荒川清孝
有村領一
五十嵐 悦
井川典久
石井 繁
石川 浩
石崎公子
石崎賢一
石崎忠彦
石崎瓔子
石澤綾子
泉沢敏郎
伊藤寛治
伊藤純子
伊藤囚一
伊藤 伸
伊藤智恵子
伊藤鐵男
伊藤直子
伊藤政光
伊藤万里利子
伊藤隆一
伊藤良治
伊藤るみ子
猪又 忠
今井 仁
今橋克寿
岩崎昭子
岩塚和男
岩間正一
岩間弘子
岩間リサ子
上野秋男
上野敏子
臼木禮子
内田満美子
宇都宮拓治
梅沢健治
榎本一枝
エミー・ナカジマ
及川耕一
近江 勇
大井敬一
大井誠治
大久保 博
大倉甲子郎
大越信行
大坂文人
大沢ヨシ
太田昭彦
太田憲一郎
大手一男
大洞晴洋
大森桂子
大森 進
大森直人
小笠原謙逸
落合ヨシ
小野寺悦朗
小野寺信一
小野寺俊雄
小幡 勉
小原久美子
加倉幸平
加倉しづ子
加持敏幸
加持 操
加藤伸二
加藤美香子
加藤美季
加藤安夫
金澤純二
金沢武治
金澤みち子
金澤みつ子
金澤洋子
金子誠二
釜場清人
上須賀為信
上屋敷正明
上山純子
上山ヤス子
川崎礼子
川戸幸男
川部恭子
川部淳一
川部正三
川村央隆
菊池誠也
北村徳行
北村嘉男
北村嘉勝
木村金雄
木村善一
木村民茂
木村英世
工藤ヒデ子
久保田 順
熊谷 毅
黒渕祐司
高坂 修
高坂菊太郎
高坂勇一
小関憲一
後藤 尚
後藤康文
琴畑喜美雄
小成勝郎
小成文男
小成道子
小林一彦
小林さつき
小林トキ
小林徳光
小林一二三
小林 学
小林義一
小向聖子
小山由美子
今野 忍
金野 侑
齋藤久美子
斎藤志知子
斉藤 勉
齊藤鉄郎
斎藤仁司
佐臼節子
坂下喜一
坂下大輔
坂本惠子
坂本静枝
坂本智子
佐久間 力
佐香英一
笹川 正
佐々木アニータ
佐々木勝彦
佐々木慶子
佐々木好栄
佐々木沙希恵
佐々木 敏
佐々木重勝
佐々木純子
佐々木隆文
佐々木拓真
佐々木敏夫
佐々木トシ
佐々木信幸
佐々木則子
佐々木春雄
佐々木ハル
佐々木秀史
佐々木博史
佐々木平一郎
佐々木 誠
佐々木匡人
佐々木正光
佐々木正之
佐々木未緒
佐々木光子
佐々木睦雄
佐々木 優
佐々木洋介
佐々木善明
佐々木喜一
佐々木嘉晴
笹原美津秀
笹原めぐみ
佐竹保子
佐藤彰洋
佐藤和彦
佐藤 盛
佐藤せつ子
佐藤チヤ
佐藤史隆
佐藤雅夫
澤口 功
澤口候則
澤口則夫
澤田三夫
澤口義知
塩谷ケリー
志賀政信
信夫安美
島香聖子
島崎 準
島崎トシ子
嶋崎トシ
清水泰子
下澤悦子
下西辰雄
下山英子
Chow Naomi
生内国子
白鳥定良
新屋正治
菅田正義
菅野富男
菅原則夫
鈴木慶一
鈴木幸子
鈴木里海
鈴木誠子
鈴木達朗
鈴木哲夫
鈴木登志美
鈴木秀隆
鈴木美喜子
鈴木睦子
関川和子
関川のり子
関口良和
堰代秀子
千崎英男
外舘恵子
外館義博
太古エイ子
大棒秀一
高岩久美子
高岩千幹
高嶋キヨ
高田由美
高橋アイ子
高橋邦之
高橋浩之
高橋文中
高橋洋子
高屋敷吉蔵
高屋敷民夫
高屋敷トシ
高屋敷ノブ子
滝澤博文
竹内政範
武田俊一
武田五郎
武田秀山
館石江理子
舘崎隆保
舘下光利
館 昭一
田中大喜
田中登世子
田中宣廣
田中ユリ
田中 竜
田中和七
田畑輝彦
田畑マン
田畑ヨシ
玉沢邦彦
Tam ひろし
千葉昭子
チャールズ・レンネル
津田重雄
鶴田幸 雄
寺井 繁
戸澤恭子
飛澤寿男
冨手 淳
鳥居建一
鳥居サヨ
鳥居 茂
鳥居千恵子
鳥居利夫
中井カンジャナー
中居達郎

中居信夫　中崎政和　長澤光彦　長島香乃子　中島光子
中嶋ムツ子　中嶋要一　永田勘一　中野　猛　中野規男
長洞利弘　長洞正人　中村克美　中村　進　中村登志江
中屋昌富　中屋定基　中屋恵久　中村卓郎　野崎昭敏
野中良一　野場多恵子　芳賀房子　箱石英夫　畠山武文
畠山俊良　畠山尚武　畠山初男　畠山昌彦　畠山玲子
花坂康太郎　花輪香代子　花輪長一　馬場栄一　濱崎　弘
濱塚有史　早川　輝　林元睦美　早野かづ子　原　健治
張間重子　晴山　洌　晴山正子　福士和男　藤井　充
藤澤キヨ　藤澤順子　藤澤美穂　藤島英世　藤島正子
藤田いく子　藤田育子　藤田正憲　藤沼久人　太長根　浩
船越恭治　船越昌子　古舘篤子　古館昌三　古舘善一
ポール・ディクソン　星野圭樹　細越章子　細越雅佐浩　堀田尚志
堀内光得　袰岩政子　本田英子　毎原結衣　前川和子
前川加奈子　前川　要　前川民子　前田恵美　前川幸次
前川　均　前川正幸　前川ミエ子　前田恵美　前川秀子
前山峯雄　牧野正博　牧野吉枝　間島幸雄　松井忠宣
松浦隆太朗　松崎和夫　松崎裕子　松崎義男　松重光治
松下信子　松田勝己　松館喜久子　松永一樹　松原　薫
松原安子　松本惠子　松本利哉　松本文雄　丸山幸子
三浦　章　三浦勝廣　三浦利勝　三浦英博　満山明美
満山宗四郎　御法川信樹　宮ヶ崎英治　宮城貞子　村上　優
村木めぐみ　村松岩蔵　元田千花子　元田利克　盛合純子
盛合淳子　盛合　勤　盛合敏子　森分和基　柳原博樹
山内敏範　山内正光　山口惣一　山崎慶一　山崎幸穂
山崎　忠　山崎時男　山崎直人　山崎　弘　山崎正幸
山崎安人　山崎義広　山下啓一　山田良春　山根幸二
山根高夫　山根蝶子　山根　登　山根秀幸　山根　学
山野目輝雄　山本嘉七　山本カヨ　山本　清　山本佳子
山本　滋　山本ツネ　山本ヒデ　山本文雄　山本正法
山本松蔵　山本　実　山本靖子　山本ヤス　山本祐子
山本れん子　湯澤睦子　横田有平　横山公司　吉川敦子
芳沢昌裕　吉田栄子　吉田順子　吉田精一　吉浜憲一
若狭　斌　涌田朋子　涌田広重　和田真一　渡部玲子
和山　悟

東日本大震災宮古市の記録（下）の編纂にあたり御協力頂いた団体・企業

（敬称略、50音順）

ＣＣＭＮ　ＹＭＣＡ　赤前保育園　愛宕保育所　いずみ保育園　岩泉消防署　（公財）岩手県国際交流協会　㈱岩手県北観光
岩手県北バス　岩手県宮古警察署　岩手県臨床心理士会　㈱岩手日報社　エホバの証人　大坂建設㈱　オーシャンズ宮古国際交流倶楽部　大通り一丁目商店街　品川区立大原小学校　小が理商店　お食事処 五右衛門　おのでら化粧品店　小野寺餅店　重茂漁業協同組合　かけあしの会　カトリック釜石教会
カトリック宮古教会　カリタス大槌ベース　カリタス釜石　川部商店　鍬ヶ崎熊野神社　グリーンピア三陸みやこ　グループホームたろう　黒森神楽保存会　鍬ヶ崎学童の家　鍬ヶ崎小学校　古須賀商店　後藤医院　後藤泌尿器科皮膚科医院　小山田保育所　金勢社　崎山保育所　佐々禎鉄工所　佐藤雅夫クリニック　札幌カリタス宮古ベース　三陸鉄道㈱　三陸北部森林管理署　道の駅・みなとオアシスシートピアなあど　品川区立小学校ＰＴＡ連合会つなこし　常安寺　常運寺　浄土ヶ浜ビジターセンター　昭和通りのおかみさんもてなしたい　末広町自治会　末広町商店街振興組合　㈲すがた　宮古市養護老人ホーム清寿荘　千徳学童の家　千徳保育所　創価学会　㈲総合食品

セキカワ　磯鶏保育所　そけい幼稚園　大成建設㈱　㈲タウン情報社　高浜児童館　高浜小学校　ＮＰＯ法人立ち上がるぞ！宮古市田老　田老仮設保育所　田老総合事務所　田老第一中学校　田老中央公民館　田老町漁業協同組合　田老保育所　たろちゃん協同組合　中央通商店街振興組合　長根寺　津軽石・赤前・白浜復興組合　津軽石鮭繁殖保護組合　津軽石中学校　津軽石保育所　津田時計写真店　集いの広場すくすくランド　電気シマザキの店　天理教　鳥もと　七滝湯　新里保育所　日本基督教団宮古教会　法の脇獅子舞保存会　花輪保育所　㈱菱屋酒造店　ビデオさわぐち　復幸造船所　ふるさと大原会　特別養護老人ホームふれあい荘　ベトレヘム会　ホテル近江屋　前山造船　末日聖徒イエス・キリスト教会　マリンコープＤＯＲＡ　三浦櫓櫂店　みずき会　宮古21防災会　宮古海上保安署　宮古観光文化交流協会　宮古漁業協同組合　宮古コミュニティ・チャーチ　宮古市・地域の文化遺産を活用した復興まちづくり検討委員会　宮古市教育研究所　宮古市社会福祉協議会　宮古市消防団（団本部、第一分団、第二分団、第三分団、第五分団、第六分団、第八分団、第十分団、第十一分団、第十六分団、第二十分団、第二十一分団、第二十三分団、第二十五分団）　宮古小学校　宮古商工会議所　宮古消防署　宮古地区広域行政組合施設課　宮古地区広域行政組合消防本部　認定こども園宮古ひかり　宮古復興工事事務所　宮古保育園　宮古街なか復興市実行委員会　宮古民友社　ＮＰＯ法人みやこラボ　（社福）翔友 みやこワーク・ステーション　品川区職員ボランティア団体「みゃっこ隊」　ＮＰＯ法人みやっこベース　㈱村木水産　目黒のさんま祭り実行委員会　山口保育所　陸上自衛隊中部方面隊伊丹駐屯地　立正佼成会　ＮＰＯ法人レインボーネット　（社福）若竹会 わかたけ学園

執筆者

【上巻　復興・防災編】

南　正昭　（岩手大学 工学部 教授）
佐藤悦子　（岩手大学 地域防災センター 特任助教）
添田文子　（岩手大学 三陸復興推進機構 プロジェクト技術補佐員）
平井　寛　（岩手大学 工学部 准教授）

【下巻　記憶伝承編】

神田より子（敬和学園大学 人文学部 教授）
阿南　透　（江戸川大学 社会学部 教授）
池田しのぶ（敬和学園大学 人文学部 助教）
伊藤　純　（早稲田大学 人間総合研究センター 招聘研究員）
伊藤好英（明治大学・國學院大學 兼任講師）
神田竜浩（独立行政法人日本芸術文化振興会 国立文楽劇場 企画制作係長）
岸　昌一（元宮古市史編さん室長）
金　鉉哲（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 講師）
久保田滋子（千葉商科大学 商経学部 非常勤講師）
猿渡土貴（江戸川大学・成城大学 非常勤講師）
山東正昭（日本民俗学会・日本口承文芸学会・日本民話の会 会員）
杉本栄子（日本民話の会 会員）
大棒秀一（特定非営利活動法人立ち上がるぞ！宮古市田老 理事長）
中嶋奈津子（佛教大学総合研究所 特別研究員）
橋村　修（東京学芸大学 教育学部 准教授）
俵木　悟（成城大学 文芸学部 准教授）
藤野陽平（北海道大学 大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授）
何　為民（広東海洋大学寸金学院 経済金融学部 教授）
眞瀬智彦（岩手医科大学 医学部 教授）
米屋陽一（日本口承文芸学会・日本民話の会 会員、國學院大學文学部 兼任講師）
宮坂　清（名古屋学院大学 国際文化学部 准教授）
谷部真吾（山口大学 人文学部 准教授）

宮古市東日本大震災記録編集委員会

【編集委員】

	氏　名	研究機関・役職
委員長	神田　より子	敬和学園大学 人文学部教授
副委員長	南　正昭	岩手大学　工学部教授
委　員	小川　直之	國學院大學　文学部教授
〃	平井　寛	岩手大学　工学部准教授
〃	岸　昌一	元宮古市史編さん室長

【事務局】

氏　名	所属・役職
坂下　昇	総務企画部長（平成24～25年度）
佐藤　廣昭	教育部長（平成24～25年度）、総務企画部長（26年度）
山崎　政典	総務企画部企画課長（平成24～26年度）、企画部長（27～28年度）
熊谷　立行	教育委員会教育部長（平成26～27年度）
上居　勝弘	教育委員会教育部長（平成28年度）
伊藤　孝雄	企画部企画課長（平成27年度）
菊地　俊二	企画部企画課長（平成28年度）
竹下　將男	教育委員会文化課長（平成24～26年度）
高橋憲太郎	教育委員会文化課長（平成27～28年度）
三河　浩	総務企画部企画課　広報担当　主査（平成24年度）
田中富士春	総務企画部企画課広報担当主査・秘書室長（平成25～27年度）
西村　泰弘	企画部企画課秘書室長（平成28年度）
川内　義昭	総務企画部企画課広報担当主査（平成24～26年度）
坂本恵理子	企画部企画課広報担当主事（平成27年度）
橋場　淳	企画部企画課広報担当主事（平成28年度）
假屋雄一郎	教育委員会文化課市史編さん室主査・室長（平成24～28年度）

東日本大震災 宮古市の記録
第2巻（下）記憶伝承編

平成二十九年（二〇一七）三月三十日　発行

編集　宮古市東日本大震災記録編集委員会
発行　宮古市
　　宮古市新川町二番一号
印刷　株式会社 文化印刷
　　宮古市松山五地割十三番地六